

日本名著全集
江戸文藝之部第十弐巻

讀本集

この巻の装幀――

背及表紙意匠　木村武山氏畫
見返し前附・後附　木村武山氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

讀本集目錄

解説

一

山口剛

「八犬傳」などとは似ても似つかぬ八文字屋本、滑稽本、または人情本が時に讀本といはれ、或は毎冊數葉の挿繪を有してゐるところから特に繪入讀本とよばれてゐたことは、敢て異とするに足りなかつた。もともと讀本の稱が、眺める繪を主とした繪草紙に對する名目であり、讀むべき文章を旨とする本といふほどのものであつたからである。しかし、讀本を内容の上から八文字屋本、滑稽本、人情本の類と峻別して、「八犬傳」「弓張月」または「曙草紙」はじめ、この「讀本集」に收載せられたやうなものに限定するのは、江戸時代に於ても、すでに正當視せられてゐた。その峻別の第一條件は、何等かの形式に於て支那の小說を摸倣することである。第二、第三の條件はおのづからこれに附隨して來る。讀本の特相はかうして顯著なものとして示される。

「英草紙」「雨月物語」は支那小說の飜譯、また飜案であり、少くともこれを骨子とするものである。從つて讀本の祖と呼んでゐるが、ともすればこれ等を奇異小說、或は怪談類の名目の下に一括して讀本から切

り離しもする。その區別は短篇と長篇との差によつてなされてゐる。「英草紙」「雨月物語」は例を支那の小說にとれば、「今古奇觀」「拍案驚奇」のやうな小話集に過ぎない。「八犬傳」の類は「水滸傳」「西遊記」の如く回を重ねて卷となし、卷を重ねてはじめて一部をなす長篇である。長篇は事件の複雜、趣向の變化によつて成立するのであるが、讀本に於ては超自然の要素が最も多くその成立を助けてゐる。すなはち超自然の興趣を主體とする「英草紙」「雨月物語」一類の群話は讀本の場合には一資料としてのみ役立つことになる。讀本作者は奇異小說を核とし、そのいくつかを或は因果の絲に繫ぎ、勸懲の緒に貫いて驚くべき大作巨篇を成すのであつた。「八犬傳」の如きは百八十回、更に附錄として數回を重ねてゐる。

長篇短篇の關係に於てわかたれる奇異小說と讀本とは、また出版の時と所を條件として、一線をひくことが出來る。「英草紙」は寛延二年、「雨月物語」は安永五年、おのおの上方に於て出版せられた。この類の多くは明和より寛政初年に亙つて上方の地に陸續として出版せられたのである。その後振はずして、寛政中から文化文政にかけて江戸に行はれた長篇物に壓倒せられた。すなはち奇異小說の名を片寄せて、これ等を通じて讀本といふとすれば、前期の讀本、上方の讀本として、おのづから、京傳馬琴の後期の讀本、江戸の讀本に對することになる。

この對立は建部綾足の「本朝水滸傳」を、一つの問題とする。それは安永二年に上方に於て出版されたためであつた。

馬琴の「近世物の本江戸作者部類」はおのれが讀本の代表作家だけに、讀本作者の部に於て、一段と傳へてくはしいものがあるが、その筆頭に綾足を据ゑるに當つて特に數言を加へてゐる。「本朝水滸傳」と竝び稱

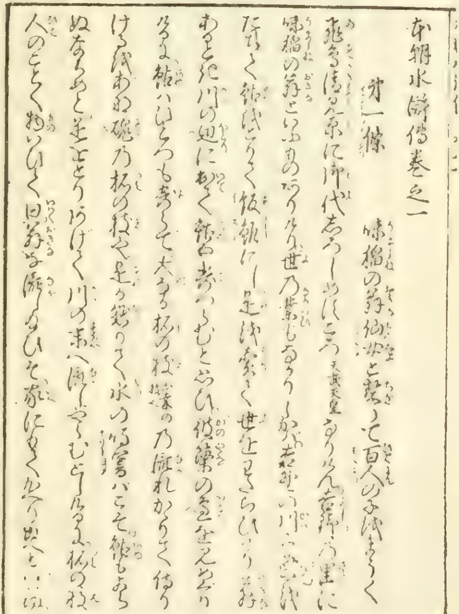
せられる彼の讀本「西山物語」と共に京師の書肆の出板であること、また奥州南部の人であることによつて、直に江戸作者とするに躊躇したのである。馬琴は「西山物語」の上方に於て作られたことは明であるとて疑をなさずして、たゞ「本朝水滸傳」に於て、斯ういふのであつた。それはいかにも京に於て出板せられた、されば迚て直にその作が京に於てなされたとは斷じ難い、よし京に於て書かれたにせよ、彼の江戸に僑居せる日は京に在つた日よりも永かつた、故に江戸の作者とするのも徒ではないと。馬琴が斯ういふ手續をしてまで、彼を江戸讀本作者中に收めようとするのは、所詮は「本朝水滸傳」が「水滸傳」から脱化してゐる故である。「水滸傳」の飜案はこれを嚆矢として、「日本水滸傳」「坂東水滸傳」「女水滸傳」などを經て、馬琴みづからの「高尾船字文」となり、京傳の「忠臣水滸傳」となり、後に「八犬傳」の大作となつたのであつた。馬琴としては「本朝水滸傳」をかへりみる所多からざるを得ない譯であつた。

綾足は「水滸傳」を飜案するに當つてまづ時代を奈良朝末期に取つた。また梁山泊を近江の伊吹山とし、宋江を惠美押勝とし、高俅を道鏡とした。原書の開手大尉洪信が石碣を開いて百八の魔君を走すくだりは吉野の栢枝の傳說を撮合した。これ「本朝水滸傳」のまたの名を「芳野物語」といふ所以である。

明和安永の頃は一代の好尚が元明淸の新しき支那情調を趁ふ時であつて、唐音の流行と共に通俗小說が最も多く讀まれてゐた。綾足の飜案はその風潮に從ふものであつた。またその頃は國學の盛行を以てわが古典が有識の徒に親しまれ出した時である。賀茂眞淵の門に遊んだ綾足が時代を奈良朝にとり、開手に栢枝傳說を齎して來るのも、不思議はなかつた。栢枝傳說は所傳をこそ失つたものゝ、その輪廓を「萬葉集」から、「懷風藻」から推知するのは、さまでの難事ではなかつた。それと共に綾足は努めて古文の體を以て文を行

り、更にまた耳うとき記紀萬葉の語を用ゐた。「西山物語」亦同じ行方であつて、これには一々出典を擧げ、且注釋をさへ加へてゐる。

讀本が小説の他の諸體と區別せられるのは、なほ綾足の如く、和漢の學を根柢として想を構へ、文をなすことである。讀本作者はこの態度によつて、洒落本、滑稽本作者等を見下してとりすましてゐた。黄表紙、洒落本の作者として常に俗衆に媚びがちの京傳が、讀本を作るのは、その考證物を編む事と相俟つて昂然と面をおこさうとする腹もあつた。綾足の衒學はまさしくそれであつた。しかし、馬琴はその態度を少からず慊らずおもつた。


本朝水滸傳巻之一

第一條

馬琴の「本朝水滸傳を讀む、並に批評」は綾足の缺點に就いて數へ立てたが、徒に雅文の體を以て古語を

用ゐることを最も重いものとした。「水滸傳」「西遊記」皆當時の俗語で書かれたのである、「源氏物語」もまたその頃の俗語で書かれたのである、綾足はこの理を知らなかつたのであるといふ。さて「綾足をして今世にあらしめば、まのあたりにこの理をしかじかと解示して蒙霧を啓せまほしく思ふかし」とまで息まいていふ。

馬琴の讀本の用語は果して、洒落本滑稽本のやうな卑言俗語で書れてゐるかといへば、決してさうでない。文中の對話までも常の言葉ではない。それを避けることによつて高雅を保ち得ると思つたからである。その高雅を保ち、しかも卑俗に墮せざる文體、一般の讀者に親しさを有つものとして「平家物語」「太平記」などの文體が選ばれた。これは馬琴の作品だけでなしに讀本の殆どすべてがさうであつた。たゞし讀本と軍記物の關係は、讀本の題材としての實錄類に於ても考ふべきであるが、なほ太平記讀み、軍書讀みの關係に就いては、發能からも考慮すべき性質である。わけて馬琴が好んで七五調を以て文を行つたのも、無意味な筆の技巧のみでないことを知らねばならない。高々と讀み上げることを前提として書いたのである。この場合に於て讀本の讀むといふことは、綺を眺めるといふその眺めるより、默々として文章を見るといふその見るに對するものであつた。畢竟讀本とは朗々として讀む本の義にも解される場合もあつた。

馬琴は「本朝水滸傳を讀む幷批評」の中に於て、斯ういうてゐる。「六樹園が都の手ぶり、吉原十二時などいふ書をおこし、源氏物語の文にならひて、今の世のありさまを綴りしを、當時めでたしとて玩ぶものもありけれど、これ等の書はたゞその景致をいにしへぶりに寫せしのみ、情をうつし、趣を盡すものにあらざれば得たる筆には綴りもしけん、されぱとて世に行はるゝにあらず、畢竟樂屋の評判のみ、賣物にはなしがたかり。」

この引用は馬琴の言葉としての賣物の一語をいはんがためにしたのである。すでに讀本は賣物である。斯う心得て、一般讀者のために讀本の文體から古雅を避けた馬琴は、また俚俗の耳目を迎へる便宜を以て、しばしば歌舞伎淨瑠璃から題材を採り用ゐた。「高尾船字文」が「水滸傳」の飜案であることはいふまでもないが、それは世に知りわたつてゐる「伽羅先代萩」を撮合するものであつた。或はこの集中に收められてゐる「南柯夢」「南柯夢後記」の如き、共に淨瑠璃と支那小說のとり合はせである。馬琴の讀本が淨瑠璃と接近する時に文體はいよいよ七五の調をとゝのへてゆく。朗讀の意に於ける讀本の義は一層とあらはになつた。

京傳の「忠臣水滸傳」を「水滸傳」の飜案といふのは今更めくが、それは趣向を「假名手本忠臣藏」の世界にうつしたのである。しかし、京傳の文體は極めて七五の調を避けて、淨瑠璃の脈を離れようとする。要なきところにも原作の語を用ゐて、頻に支那情調を漲らせようとする。和ならず漢ならぬ鵺式のやうな言葉遣ひは隨分と滑稽の感を起させる。この傾向は讀本の筆に熟した後の京傳にも著しく見られる。京傳が支那小說の體を學ぶことは實に馬琴以上であつた。けれど、京傳その人の支那小說を讀破する力も、讀破した數も、もとより馬琴と比較にはならなかつた。それなのに、讀本の作の上には反對な現象を呈してゐることからも、「讀本」の特質の一端を推測することが出來るやうに思はれる。

歌舞伎淨瑠璃の小說化は、すでに八文字屋本に於て見られた。京傳はそれを範として幾つかの讀本を作つた。支那の小說と八文字屋本との距離を京傳はいかにとり扱つたか、八文字屋本をどういふやうに讀本化したか、これが一つの問題である。元祿時代の歌舞伎、淨瑠璃は多く義理と人情とを基調とし、これを小說にうつす八文字屋本は、好色を以て彩り、更に因果を以て想の複雜をはかつた。京傳はその因果を藉りて、い

やまさに事件の葛藤を多くし、また好色に代へるに勸懲を以てした。これは京傳だけでなく、讀本作者を通じて見られる手法であつた。馬琴がまた好んで淨瑠璃歌舞伎から取材したのは、一面は實物のためでもあるが、また原作の人情を輕くし、義理を重くした改作を原作と比較させて、勸懲の寓意を明にする便利からでもあつた。

讀本の勸懲は儒學の見によつてなされ、また武士道によつてなされた。武士を社會の第一階級となし、儒學を官學とする世の反映と見られる。しかし、その武士の生活はつひに戰國の武士ではなかつた。腰に兩刀を帶びながら、いつ戰場に向ふといふあてなき軍人であつた。ある作者は江戸の火消をして、われ等こそわづかの祿をうけながら火事場に命を的とするのに、ありもせぬ戰爭を請負つて高祿を頂戴する武士は不都合千萬であるといはせた。さういはれても詮なき泰平の世の武士であつた。武士をその實務から遠ざからせた泰平の三百年は、却つて武士の形式的生活を完成させた。當代の武士がすでに脚下に現實を踏んでゐないところへ、町人の作者ばらはいやが上に空疎な武士生活をうつし出さうとする。讀本が儒學と一つになつた武士の精神を書いたとて、つまりは實戰を離れた兵學武術と同樣であらう。武士道の論議は武士らしからぬ武士の世となつて最も多く聞かれるやうに、勸懲の形をとゝのへながら、蔭に讀者の意を迎へるために殘忍、猥褻の筆を弄し、或は作者案上の道樂を紙上にまでひき伸すのが讀本であつた。お家騷動の如き、もとより當時の世界に於てありがちの事である。しかも、作者はその巷說のほんの片はしを小耳に挿むばかりで、淨瑠璃歌舞伎、さては支那小說から資料を得て、委曲を盡すのであつた。

京傳の讀本の述作は筆を洒落本に絕つてからである。寬政の改革による洒落本の禁止、その禁を犯したた

めの所謂におぢ恐れて、慌しく方向を變轉させた讀本である。昨日の享樂、けふの勸懲、今までの寫實の筆を架空の想に代へる。さすが才人京傳なればこそ、黃表紙の趣向をそつくりそのまゝ支那小說の體で行きもするものゝ、隨分、そこには破綻の跡も明なことであつた。それもその筈である。支那の小說は支那の社會生活の反映であり、特に京傳馬琴等がよつて以て範とした評詞小說は支那民衆生活を如實にうつし出してゐるものを、支那の實狀を知ること少い彼等は、たゞ文辭の上を辿つて、事件の奇と趣向の妙とをのみ求めるのであつた。その實の相を棄てゝ、その虛の影をのみ追ふのであつた。その虛をわれに移す時に、足すでに地を離れてゐる今の武士の生活を對象としながら、更に遠い過去の事としてしまふ。趣向を運ぶ上にも、勸懲を寓する上にも都合がよいためである。斯うして書かれた武士生活は、武士道と儒學とが相寄つてなれる理想、しかも作者等の至らぬ頭で、それと信ずるものであつた。こゝに讀本の紙上に二重にも三重にも空虛の影のみがはびこる。

　まして、彼等に型を示してゐる支那の小說家は、空を構へて事をうつすのが常である。眞と假と、實と虛との交錯によつて稗史傳奇の妙は成立すると考へる。翳影なき明鏡を大自然に面して捧げ持つ態度をとらないで、おのれを紙上小世界の造化翁めかした。因果の絲を勝手にあやつる作者はそれによつて勸懲の實を擧げると共に、物語の興を助けるために、事件の變化を求めて、偶然といふものを活躍させ、おのが氣儘に人物を集合させ離散させる。非現實性はその極に達する。わが讀本作者はその態度を學んだのである。讀本はいよいよ江戶の現實生活から離れざるを得なかつた。それにしても、讀本があゝまで世に持て囃されたのは何のためであらうか。要はその非現實性にある。現實の生活に倦怠を感ずるほどに、文化以降には無聊の日

のみがつゞいた。無聊から、退屈から逃れようために、くさぐさの遊戯が行はれた、茶番も、落語もその一つである。無理にも笑はさうとする滑稽本も、殺しと濡れのあくどい歌舞伎も、それであつた。中にも知識がかり、道徳がかつてゐるだけに讀本こそ、最もとりすました遊戯であつた。その遊戯の正體は、以下說くところの數篇によつて明にせられるであらう。

二

櫻姫全傳 曙草紙

作者は山東京傳、畫工は初代豐國、二十回、五卷、これを六冊にわけてゐる。文化二年の出板であつた。

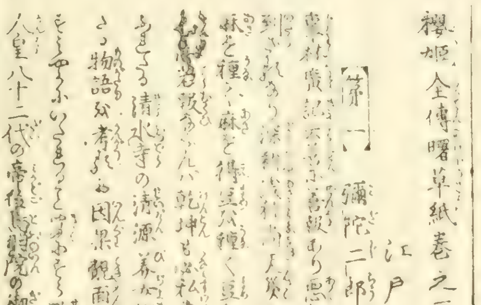
例言によれば、作者未詳の書を得て補綴したものとのこと。これは京傳の假托の言である。讀本作者はともすれば斯ういふさかしらをして、作に由緒をつけ、實は史實に違ふための擇跡にした。「曙草紙」の題名は櫻姫の傳奇であるところから、櫻の異名曙草に因んで名づけたと例言に見える。

清玄櫻姫の事蹟の歌舞伎浄瑠璃に傳へられてゐるのは、ずつと古い頃からである。類作が極めて多い中に、動かぬ場面は清水寺と庵室であつて、結句はいづれも抱合狂言の形をとつてゐる。京傳のこの作もいはば抱合狂言、書替狂言を小說の體によつて爲つたといふべきであらう。京傳はこの因果物語を構成するに當つて櫻姫と清玄とを腹がはりの兄弟とした。妹に兄の愛着に惱まねばならないのは、清玄の母が櫻姫の母に

對する怨念のためとした。時代を後鳥羽院時代とするのは、櫻姫を「源平盛衰記」などの櫻町中納言に附會するためである。作者が篇中に引きごととしたのは作意を割るとよりは、史實めかさうとする讀本作者の慣用手段であつた。

一篇の因果は丹波の桑田長者鷲尾義治の妻野分の嫉妬から起る。義治は京の白拍子祇園を寵して拉れ歸つて妾とし、名を玉琴と改めさせた。琴に堪能であつたからである。祇園の名は「平家物語」の祇王祇女のくだりに、ほんのちらりと見ゆるもの、それを逸さぬところに作者細心の工夫があつた。

　玉琴は身重となつたが、また


櫻姫全傳曙草紙巻之一
江戸　山東京傳補綴
【第一】彌陀二郎網得佛像
人皇八十二代の帝後鳥羽院の御宇にあたりて丹波國桑田郡に

野分に秘め隱してゐる義治は、之を家臣篠原八郎に預けて置いた。野分の胸は嗔恚の火に燃えながら、なほ

告口する侍女等を戒めてさりげなくもてなしゐる。しかし、家來兵藤太を遣はして人知れず奪ひ來させ、いろいろと嫌味をならべ立てたはてに、琴を彈かせる。その妙音を聞いていよいよ腹立しさに堪へず、眼の前に兵藤太をして縊殺しにさせ、死骸を大江山の谷川に沈めさせる。しかも、篠原の家には、義治を仇と狙ふ盗賊蝦蟇丸が仲間の相印としてゐる尼ヶ蝦蟇を落しておいて、その徒の仕業と見せかけ、また兵藤太を事に托して手討にして、後顧に備へた。

京傳はこの趣向を支那の小説「金翹傳」から得たのであつた。その主人公翠翹は柳巷から贖れて東守の妾となる。東守は妻宦氏の嫉みをおそれて宿に遠くに匿して置く。と知つて憤に堪へかねた宦氏は腹心の家從である宦犬に命じて翠翹を無理に拉れて來させ、侍婢として虐待する。事は東守の留守の間に行はれたのであるが、歸つて來た東守は意外なところに翠翹を見て、驚きながらも妻を憚つてものいふことが出來ず、翠翹もまた知らぬふりをしてゐなければならなかつた。宦氏は二人の胸中の苦を知つて、ひそかに快を叫んでゐた。翠翹はもとより琴に巧みであつた。宦氏は夫の興を助けるといふ美名のもとに、翠翹に琴を彈かせる。一曲また一曲、彈く人、聽く人にはたゞ涙の聲である。宦氏は、今日一席の酒、これまでの恨を報ゆるに足ると、ひそかに笑をもらした。

野分が玉琴を殺すに先だつて琴を彈かせるくだりに筋の通らぬことは、この「金翹傳」の面影を強ひてうつさうとしたためである。老獪なる作者は引用書目の中にその書を掲げなかつた。讀本作者の讀者を欺瞞することは往々この類である。しかし京傳も機微の一端をもらさないでもなかつた。「唐の代の名妓翠翹が作りたる妾薄命といふ曲を日本詞に和げいとも哀れに唱ふ」といふのがそれ。「其の聲凄風楚雨の如く」はまた原

書さながらの辭であつた。

沈められた玉琴の骸は岸に流れ着く、八月の胎兒は生れた。折から鷲尾家の舊臣であつて、今は回國修行者となつてゐる眞野彌陀二郎がこれを救ける。この子が後に清水寺の敬月阿闍梨に育てられる、すなはち清玄である。

殺された女の胎内から赤兒の生れるといふことは、はしなくも小夜中山の夜啼石の傳說をおもひ出させる。しかし、それはいはれなき事ではなかつた。京傳は馬琴の「石言遺響」に暗示を得て、この作をなしたからである。「石言遺響」は夜啼石の話と無間鐘の話とを交ぜ合せた讀本であつた。二者の類似について一々事例を擧ぐるの煩に堪へない。京傳と馬琴の初期の讀本の間には互に影響することが多



「石言遺響」業右衛門

かつた。これもその一例と見られる。

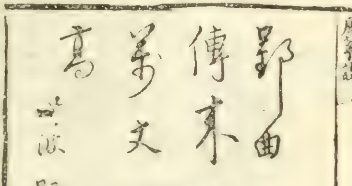
野分が一女を産だ、櫻姫である。事件の變化を主とする讀本の世界には月日が早く過ぎてゆく。十六歳となつた櫻姫の美しさはこの世の人ともおもはれない。姫は母野分の父櫻町中納言の性をうけついだか、歌を愛づることと大方ならず、父の許を得て京の名所の花を尋ねる。僧清玄は清水寺の花の下蔭に立つ姫を見る、修觀の月は執着の雲に蔽れ、つひに寺を出でてさすらふこととなつた。これは玉琴の怨念がわが子の胸間にわけ入つて凡情を起させて櫻姫を惱さうとするためである。姫の身にはさし當つての一難があつた、かねて姫に心かけてゐた丹波の信田勝岡の徒が、旅中の虚を覗うて姫を奪はうとするのである。從士田鳥造酒丞の勇力と侍女山吹の働きで難は逃れたものゝ、宇治川の舟



小石姫を殺す

に救はれたのが縁となつて、姫は佐宗雄と相思の仲となつた。その後宗雄は故あつて丹波に来つて、姫の下館の隣に住むこととなつた。たまたま飼猫の頸紐が二人の間をとりもつて、はじめてわりなき契を結ぶ。

隣りあひの二人が契を結ぶくだりは、「金翹傳」によつて書かれたのである。たゞし、それは東守と翠翹のなからひではなく、翠翹と金重の二人の仲であつた。才子金重はゆくりなう佳人翠翹を見てからは、戀しさに堪へかねてその家の隣に住ひを求め、二階座敷を書齋としてたえずその家の方を見守つてゐた。或日墻の上の碧桃の枝に金鳳の釵のあるのを見つけた。翠翹が桃の枝を折る拍子に枝にひきかけたのである。金重がそれを拾うて墻越しに渡したのが、縁のはじめであつて、いつか忍び逢ふこととなつた。京傳はその金鳳釵兒を飼猫の頸紐とした。やゝ窮したというてよい。



「風箏誤傳奇」

櫻姫と宗雄が文をとりかはすのに、いかのぼりを利用したのは、李笠翁の戯曲「十種曲」の一つ「風箏誤傳奇」から種を得たものと思はれる。その主人公、韓世勳は春のつれづれのあまり風箏に戀の詩を題して飛した、絲はきれて詹武の家の庭に落ちた。これを讀んだ娘淑娟は韻に和してまた風箏にしるした。風箏は世

勳の手にかへつて世勳の胸の惱みとなつた。世勳は再び風箏を飛したのが誤つて淑娟と腹がはりの姉妹である愛娟の手におちる。意外な絲のもつれが起つた。紛れた事件はどうであらうと、こゝには要なき事であつた。京傳はとにかく風箏の文づかひに興じたのである。さうはいふものゝ京傳は果して「風箏誤」を讀んで、それから材料を得たのであらうか。それを明示する何ものをも知らない。たゞ「本朝醉菩提」に於ける弟京山の題辭に「風求凰」が引かれてゐる。「十種曲」の一つであつた。それから推して、「十種曲」が兄弟の間に存してゐたことは考へられる。或は京傳は京山によつて「風箏誤」の筋を知つたのでなからうか。とにかくに風箏は京傳に於て得意のものであつたらう。文化八年に「曙草紙」の筋をそのまゝに合卷にうつした「櫻姫筆再咲」には、春の日永をいかのぼり見て愚むる櫻



「櫻姫筆再咲」

姫、淸玄だこに怯える櫻姫が描かれてゐる。

しばらく「風箏誤」に疑をおくにせよ、京傳がこのくだりに「醉菩提全傳」を參照したことは極めて明白である。宗雄が櫻姫に贈つた詩、

關々雙蛺蝶、時入二苑中花一、相見撫レ琴坐、西鄰是卓家。

はまさしく「醉菩提全傳」に見るものであつた。これはまたの名を「西湖全傳」といふ、明の天華藏主人の作に係る。篇中この詩を贈つた者は宜敎、贈られた者は女秀玉である。二人は幼きより相知つてはゐたが、漸く年長けてはぢらひ心に語らぬものから、戀しさはいよいよ增りゆく。宜敎がおもひに堪へかねて贈つた詩が卽ちそれ。秀玉の答への詩は斯うであつた。

日夕春風起、吹二簾外花一、相思作二花片一、片々入二君家一。

京傳はこれを和譯して櫻姫のかへしの歌とした。歌にいふ、

あかず見る梢の花し中垣のそなたに散らす風も吹かなむ。

二人の戀の經緯は殆ど金重翠翹と同じやうであつた。京傳は、こゝに二つの支那小說を合せ考へて、「曙草紙」の趣向を凝したのであつた。この二書を京傳が讀んだことは、彼の支那小說を讀む力が、どうのかうのに拘はりはない。何となれば二つながら早い頃に飜譯があつたからである。「通俗醉菩提」「通俗金翹傳」がそれである。

宗雄は急に歸國せねばならぬことになる、そのしばらくの間に鷲尾家に一大事が起る。これも亦「金翹傳」を追ふものであつた。金重が父に從つて他に行く間もなく、翠翹の父に事あつて、翠翹は操を黄金にかへね

ばならなかつた。豊尼家の一大事とは信田勝岡に奪はれ、義治は勝岡に加擔せる蝦蟇丸に殺され、野分と櫻姫は別れ別れに落ち行くことであつた。

野分は北嵯峨あたりに逃れ來たが、蝦蟇丸のために捕へられた。海賊の子である彼は水中の奇方を得て、美しい帶を囮にして、旅人を池中に引きこんで、金を奪つてゐたのである。野分またその厄にかゝつたが、美しきのためにわづかに死を免れ得たのであつた。京傳はこれを帶取の傳へにかこつけ、なほ眞面目づくらうこと、「山州名跡志の説と異同」と附記してゐる。「名跡志」には斯う見えてゐる。

「帶採池　在廣澤東三町餘路傍北、今堙依、傳曰、昔此池有リ鰐、色アル帶ニ化シ、水ニ浮デ、人ヲ惱セシ故ニ號ルナリ」—

この書はこゝばかりでなく、「曙草紙」の全體に亘つてゐるばかりでなく、京傳の作中にしばしば引用せられてゐる。彼にあつては貴重な資料であつた。

蝦蟇丸の手に落ちた野分は本來の毒婦の性を發揮して、一時のたづきとして彼に身をまかせる。そこには盲目の妻があつた、また二人の娘があつた。野分は蝦蟇丸をそゝのかして、妻を追ひ出させ、殺させ、また娘等を責めさいなむ。娘等は母の死骸を葬め得て、日毎に弔ひにゆく。日毎にかはる相のあさましさに二人は無常を觀じて、相抱いて死なうとする。折から通りかゝつた僧に救はれて尼となる。

京傳はこの二人を松蟲鈴蟲の傳へに結びつけ、また髑髏の尼に托しもした。うつりかはる死者の相は「二人比丘尼」によつて書いた。これは石平道人と號する鈴木正三の作である。夫に死別れた二人の若妻が共に住んでゐる中に、その一人がやがて病死する。心なき里人はその骸を野ざらしにする。殘る一人が七日七日

に弔ひにゆく。はじめの七日には「花の面影あともなく、古の人とも覺えず、髮はおどろの如く亂れて五體は腫れたゞれ恐しげなる有様、見るに涙もとゞまらず。」二七日には「空吹く風は四方に臭氣をおくり、形は腫れに腫れて所々の肉もきれ、腸はや破れてあたりに亂れ犬は爭ひて東西に啣る」三七日には「かたちもつづかず、肉も破れ散りて、白き蛆となり、蒼蠅は集りてあたりに充ち滿ち、蘭麝の匂は臭氣となり、人をけがし、古の面影は、いづちへかゆきけん、あさましき景色なり。」四七日には「早や臭氣も薄くなり骨に殘る肉も乾き、白き蛆もこゝかしこに這ひ散りて、蒼蠅も今はなし。亂れ髮は風に散りて、所々の草の根にまとはり、いづれの人の果とも見えわかず。」五七日には「逢がもとに殘れる骨も續きたる



所はなし、男女のさかひもなく、雨に濡れ風に曝らして、臭気も更になし、白き骨はつぶひ離れて、こゝかしこの草の根にあり。」若き彼女はこゝに道心を起して尼となり、老尼のもとに仕へて勤行を怠らなかつたといふのが、作の大概である。

京傳は、こゝに引用した文句をもそのまゝに用ゐながらなほ「二人比丘尼といふ草紙はこれにもとづきて作りたるもの歟」と腹黒くもいうてゐる。これは讀本の作者のいつもの筆癖であつた。京傳の白々しさは決してそれだけではなかつた。少くともこゝの一條は「石言遺響」に負ふところが多いのに拘はらず、つひに一言半句の及ぶものがない。萬字前か小夜中山の賊業右衛門の妻となつて、先妻の子の盲目な者をうとむこと、業右衛門が雪中に誤つてその子を



殺すこと、また月小夜が二兒をおいて家出すること、尼となること、これ等から多くの趣向を奪つた「曙草紙」であつた。

簾を遁れ出でた櫻姫は篠原八郎の子二郎に救はれたが、病んで死する。骸は鳥部野の墓守の庵室に運ばれた。墓守は清玄のなれの果である。姫は忽ち蘇生する。これも玉琴の怨念のなす業であつた。清玄櫻姫の歌舞伎の約束はこゝに果される。さて清玄はたまたま來りあはせた彌陀二郎の手にかゝつて殺される。

彌陀二郎は姫を助けて、小野里に篠原二郎等と會した。舊臣は相寄つて、これも舅のために兵を擧げた伴宗雄を仇討の將として、信田勝岡を斬つて鷲尾家を再興した。諸土はしきりに野分の行方を探し



「原茅淺景春」

てゐる。その頃野分は蝦蟇丸が夫義治を殺した當人であることを知り、機を見て仇を討たうとする。蝦蟇丸は悟つて野分を殺さうとする。その折に一つの小蛇が現はれて妨げる。舊臣來つて蝦蟇丸を射殺し、野分を館へと迎へる。小蛇は玉琴の怨念であつた。なほ生かしおいて、この世の呵責を見せようためであつた。

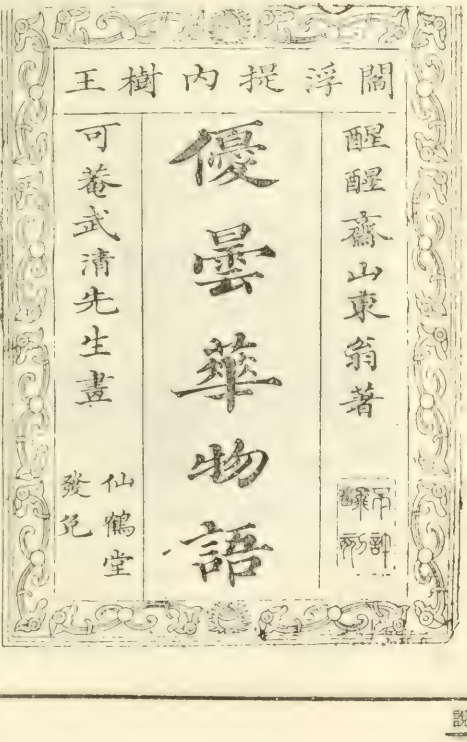
櫻姫が蘇生した後はとかくに沈み勝ちであつた、母の野分は姫にすゝめて琴を調べさせるに、あやしい事どもがある。これも玉琴がありし夜の苦惱を、姫にうつして、その母に報いるためであつた。そのはてに姫の姿は二人となつて、いづれまことの櫻姫と見分けるすべもなかつた。



怨賣

京傳はこゝに陳玄祐の「離魂記」を引いて離魂病を説き、かげのわづらひに就いてものをいうてゐる。と

の唐代の小説はしばしばわが文學にも引用せられる。謠曲の「二人靜」の如き、近松の「赤染衛門榮華物語」の如き、皆これに據つて作られたものであらう。また早く清玄の靈に托したものがあつた。常磐津物の「二人淺間」である。これから「葱賣」が出づる。清玄は法界坊となる。馬琴の「石言遺響」はまた法界坊を作中に活してゐた。それに負ふところ多い京傳のこの作は、もとより法界坊を肚裏におくべき筈であつた。しかも、わざと「離魂記」を云々するのは、例のさかしら故であつた。「葱賣」の中心はおくみそつくりの靈が現はれていづれをそれと惑はすことである。靈は法界坊でもあり、野分姫でもあるのが、これまでに見られぬ脚色ぶりである。二人の櫻姫の一人は清玄とのみ見られた、常照阿闍梨もさうおもつた。ところがおもひも寄らず玉琴の靈であつたことが、そこの興味であつた。


閻浮提内樹王

醒醒齋山東翁著

優曇華物語

可養武清先生畫

仙鶴堂發兌

阿闍梨の法力によつて、一人の櫻姫は小蛇と化して飛び去つた、玉琴が成佛したのである。一人の櫻姫は髑骨となつた、櫻姫はまことに蘇生したのでなくして、玉琴が子煩惱の野分を苦しめるために、しばらく假の姿を現はせたのであつた。やがて野分は雷死した、宗雄は剃髪して法然上人の御弟子となつた。因果と勸懲は斯うしてをはりを告ける。それにしても餘りに執ねき玉琴の怨念である。けれど「金翹傳」の翠翹が後におのれを陷れた宦氏はじめの人々に報いる殘忍に比すれば何でもない。讀本作者がいかに支那小說に摸して殘忍の筆を弄するにしても、つひにその一端を假りるに過ぎなかつた。

宗雄の假名は源宗であつた。源宗は玄宗に通ずる。作者はこゝに楊貴妃櫻の出來をとり合はせる。もとより櫻姫の櫻に因ませる作意に出づる。小町の櫻塚をも櫻姫の文塚に轉用する。これも名に因むためである。まだ說いて盡きぬ憾はあるにしても「曙草紙」の補綴のあとはまづ斯うである。何にしても清玄櫻姫の名が聞えゐるだけに、持て囃されることも並々ではなかつた。これには豐國の挿繪が與つて力があつた。

讀本は讀む文章を旨とするものではあつたが、挿繪もまたなくて叶はぬ譯である。まして初冊の卷頭の數葉に繡像を出すのは、「忠臣水滸傳」からはじまつてゐた。それも支那小說の體裁を摸倣するのであつた。されば京傳が「優曇華物語」を作つた時には、むしろ唐繪師に描かせるがよいと、文晁門人の喜多武淸に誂へた。凝つては思案にあまるのたとひ、作意は拙くはなかつたが、挿繪の唐樣なるが累をなして、世間はふり向かなかつた。文化元年の事である。京傳はそれに懲りて、今度は豐國に描かせたのが時好に投じた。つひに京傳をして淨瑠璃にたとふるに畫工は大夫の如く、作者は三味線ひきに似てゐる、合卷の草双紙はさらなり、讀本といへど畫工の筆精妙ならねば賣り難しといはせる程であつた。

三　昔話稲妻表紙

山東京傳の作、初代豐國の畫、五卷、その第五卷を上下にわかつた六册物である。文化三年の出板であつた。

五卷はまた二十回にわかたれ、内容は回毎に場面を變へ、事件を轉じてゐる。一に讀者の興を誘ふためであつた。時代を義政將軍の頃とし兩管領山理之助賢基と濱名入道の確執を背景とする大和國主佐々木家の御家騒動である。第一卷はまづ若殿桂之助の遊蕩から勘當までを叙する。若殿の遊蕩は白拍子藤波に溺れたためである。濱名入道に心を通



「優曇華」

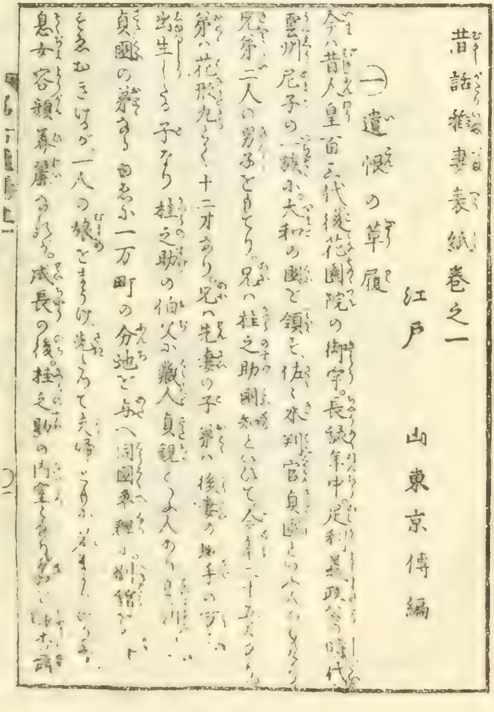
はす執權道犬の陰謀に出で、その一子作左衛門が若殿を唆したのであつた。若殿の勘當以前に藤波を中心とする二つの事件から、全篇の葛藤が生ずる。京傳の苦心はその絲の二筋をお家騒動に繋ぎながら、いかに縺れさせ、またいかに手際よく裁くかにある。一つは作左が名古屋山三郎に對する遺恨である。作左は藤波にいひ寄る、桂之助は憤つて山三郎に草履打をさせた、作左は山三を恨まざるを得なかつた。一つは藤波の佐々良三八郎に對する怨念である。忠臣三八郎はお家のためとて藤波を殺して出奔した。この一篇の半はこれより出づる因果物語であつた。三八郎の出奔の夜にたまたま二つの事件が起つた。道犬一味の者長谷部雲六が若殿預りの直筆圖を盗み去つた。これがために三八郎は嫌疑を受けて一段と苦惱



物語「插畫

を宥めなければならなくなる、また出奔の途上、藤波の兄浮世又平の妻の窮を救つた。これが後に藤波の怨を和げることになる。縺れる絲の緒はすべて第一卷に見出される。その縺れを裁く者に軍學者梅津嘉門がある。京傳はその人の姿をも卷末に見せてゐる。濱名入道は嘉門が召に應ぜぬを怒つて兵を遣はして撃つ。嘉門は火術を以て、それ等を鏖にし、老母と共に去る。行方知らずといふに作意があつた。

　第二卷にには道犬の陰謀は潜くあらはになる。桂之助の繼母蜘手方と結んで桂之助の妾子銀杏の前と月若を呪咀する。髮を喰ひ切つただけで、賴豪院の妖鼠の術は、月若の守役である山三郎の忠誠に退けられたが、道犬等は更


昔話稲妻表紙巻之一

江戸　山東京傳編

(一)遺恨の鞘當

今ハ昔人皇百三代後花園院の御宇。長禄年中足利義政公の時代、雲州尼子の一族ふ。大和の國を領し、佐々木判官貞國といふ人ありしが、兄弟二人の男子をもてり。兄ハ桂之助國知といひて今年二十五才なり。弟ハ花形丸とて十二才なり。兄ハ先妻の子、弟ハ後妻の蜘手の方の出生したる子なり。桂之助の伯父ふ、職人貞親といふ人あり。貞國の

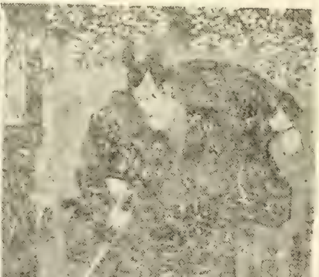
を讒を構へて銀杏前を罪に陷れようとする。急を聞いた山三郎の父三郎左衛門が館にいそぐ途上、山三郎との人違ひで作左に殺される。さきの作左の遺恨から導かれる變事件であつた。藤波の怨靈は丹波に隱れて農を營む三八郎、今の六字南無右衛門の身に迫つて來た。娘楓は片時離れず妖蛇につき纏はれ、息子粟太郎は蛇毒をうけて盲目となる。粟太郎は剃髮して文彌となり、母磯菜につれられて琵琶を習ひにゆく。蛇の妖と、剃髮とが、後の事件に對して重要なる伏線となる。これよりさき、京傳は楓と粟太郎を疱瘡にかゝらせた。それは大筋には何の關係もないことである。しかし、世俗に傳へられる疱瘡の呪、佐々良三八の宿に假托するためであつた。

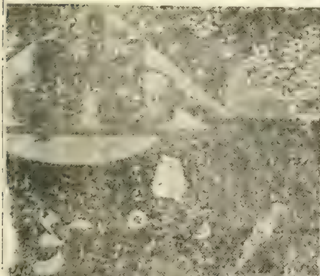
第三卷は、南無右衛門の苦患の敍述に專である。佐々木家の騷動は銀杏前と月若との亡命となる。銀杏前は山三郎の擁護の甲斐なく、敵方に奪はれたが、月若は折よく南無右衛門に救はれて丹波に隱れる、間もなく南無右衛門を繞つて兩難か起つた。月若に追手がかゝつたこと、首級圖が賣物に出でたのを買ふ金のないことである。しかし、文彌の剃髮は、髮のない月若の身替に立つにふさはしかつた。蛇娘としての楓は見世物師に身賣するに都合がよかつた。伏線はこゝに露はれて、忠義のためとはいひながら父子は死別生別の歎きに沈んだ。

第四卷、奪ひかへされた銀杏前がいよいよ毒手にかゝらうとする時、露門は人知れず救つて行く。しかも作者は露門たることを示さなかつた。一まづ讀者を迷宮に入れる手段である。石山觀音の開帳場には離散せる人々が自ら聚合する。解決の端はこゝに開かれる。楓は見世物となつてゐる。首級圖はとくに賣り拂つて落魄の淵にある長谷部雲六も謠をうたつて物貰ひをしてゐる。雲六は巡禮となつてゐる妹八重垣に邂逅す

る。虚無僧姿の桂之助が來る。追手の難を山三郎の僕鹿藏の弟猿二郎がしりぞける。桂之助は辛き目を脱して大津なる又平の家におちついた。藤波の縁によつて匿つて貰ふのであつた。又平は繪を描いて旅人にひさいでゐたが、妹の菩提のために佛像を多く描くことにした。これが大津繪である。

又平の家には南無右衛門が泊り合はせる。彼は藤波の遺族を尋ね、また桂之助の行方を尋ねるために修行者となつたのであつた。折から藤波の祥月命日、知らずして佛前に回向してゐる彼を、妹お龍が見つける。又平は妹の仇とて討たうとする、しかし妻はかねての恩人として迎へねばならなかつた。又平は仇として討つに討たれぬ義理合から南無右衛門の編笠を斬つて仇討に擬した。さて桂之助と三八郎とが久々の對面を遂げたところへ、一羽の雁が百兩の小判が入つてゐる財布を落してゆく。これによつて事件はいよいよ解決に近づいて





來る。

第五卷、小刄は八重垣の身の代であつた、妹を欺いて海中に沈めた雲六が、遂に落ちてゐた雁を拾つて、財囊を雁の足に結ぶ。雁は蘇生して飛んでゆく。そして桂之助主從の前に落ちる。雲六はあと追つてそこへ來る。さきに父平の妻を苦めたのは雲六であつた。奇瀨は雲六の罪を責めて自殺させる。小刄は楓の贖の代となり、雁の生血は父平の吃音を癒させた。その夜百蟹の圖の奇特は楓を貰れぬ蛇を消失させる。藤波が成佛したためであつた。「稲妻表紙」を貫いてゐる一條の因果のうち、一條はこゝに終局を告げた。



殘る一條の主人公山三郎は父の靈夢によつて彼の許婚の女で、今は島原の遊女となつてゐる葛城のもとに通つてゐる。父の仇伴左に邂逅する便のためである。葛城はまた伴左の異腹の妹であることを知つて、兄の身がはりとなつて山三の手にかゝる。しかし、最後に山三は伴左を討つ、たゞ廓に於て伴左の徒を多く殺したことから、山三の身のうへに禍が起らうとしたのを、嶋門がとり靜める。一條の葛藤は斯くして解決した。桂之助はゆめさら知らなかつたが、桂之助の生母は嶋門の姉である。銀杏前を助けたのも、その縁があるからであつた。桂之助は嶋門から「武道徒然草」を貰ひうけ、なほ嶋門が軍師として仕へてゐる將基の助力に

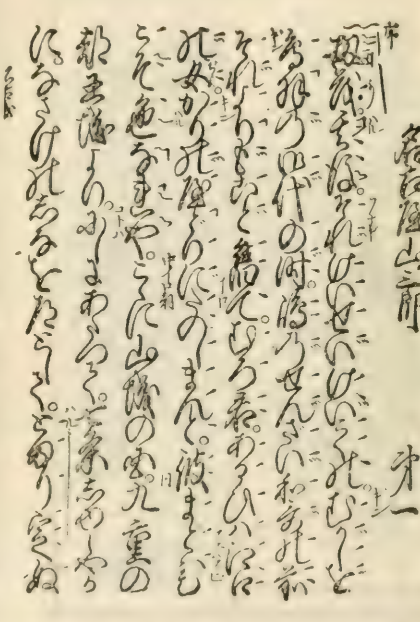
よつて義政將軍に奉つて歸參を得た。更に勝基と嘉門の計らひによつて道犬を追うて、家督を受ける。山三郎は執權となる。御家騷動は落着する。

「稻妻表紙」の布置結構のあとを斯う辿つて來て、今更におもはれるのは、あまりに歌舞伎めくといふことである。京傳の讀本はしばしば歌舞伎また淨瑠璃に轉用せられた。たとへば「曙草紙」も淨瑠璃「櫻姫花洛鑑」となり、「優曇華物語」もさながらに淨瑠璃「繪本優曇華物語」として語られもした。皆それ等の要素を多く具備してゐるためであつた。しかし、「稻妻表紙」が歌舞伎に用ゐられたのはなほ一層甚しかつた。文化五年には大坂中の芝居に「けいせい品評」角座に「けいせい輝草紙」として上演せられ、文政六年には江戸市村座に「浮世柄比翼稻妻」として上演せられた。まして歌舞伎の傳統である不破伴左の雲稻妻の衣裳摸樣に對して京傳が趣向を凝した出像の山三の濡燕の摸樣がそのまゝに舞臺姿となり、後の「鞘當」の定式となつたのである。

それは當然なことであつた。京傳がこの作は不破名古屋の狂言のかずかずを集大成したばかりでなく、更に他の歌舞伎淨瑠璃をも撮合したものであつた。さうして出來た小說が、またもとの樣式に還つて不破名古屋の狂言に新彩を加へるのも尤な經緯であつた。京傳はそれが歌舞伎に歡び迎へられた嬉しさの餘り、後篇「本朝醉菩提」の卷首に「不破名古屋傳奇考」を添へて、土佐の淨瑠璃、雍州府志、遊女論などに就いて說き、また山三の衣裝の基づくところを說いてゐる。

「稻妻表紙」の例言には、近松の「傾城返魂香」に據つて作ると見える。「返魂香」はその題名の明に示

してゐるやうに、遊女遠山の魂魄がうつゝの姿を現じて、戀人狩野四郎二郎と契ることを主題とする。京傳はその戀の執念を轉じて三八郎にからまる藤波の怨靈とした。すなはち「三熊野かげろふ姿」に倣つたのが、浮世又平の宿の神おろしのくだりである。故に南無右衞門をして「熊野詣のさかしまに歩むことなど」を語らせもして、據るところをほのめかしてゐる。「返魂香」のふしぶしがいかに多く用ゐられてゐるかは、一々例示する要もない。しかし、最も著しいのは又平の宿に、大津繪の精靈が長谷部雲谷の兵どもを追ひたてる趣向を藉りて、猿二郎の寶藥の宿に、神農の胴人形、また齊藥鍋などで桂之助の追手を退けることにしたことであつた。なほ桂之助の虚無僧姿も、四郎二郎の楫の山節うたひから脉をひいてゐる。それよりも、「稻妻表紙」が「返魂香」に準ずるといふのは、土佐掾の淨瑠璃



土佐正本

の「名古屋山三郎」を江州高嶋城主六角家のお家騒動に絡せた脚色にあつた。土佐の淨瑠璃はたゞ名古屋と不破の戀の爭ひ、また不破が名古屋の親を討つた仇讐といふにとゞまる。それをお家騒動に繋いだのには、「返魂香」以前に先蹤はある。元祿十年の元祖團十郎の「參會名護屋」が最も注意すべき一つであつた。それには後の不破名古屋の狂言になくて叶はぬ二綱目、「鞘當」と「草履打」とが、すでに存してゐる。しかし、二つは共に二人の戀の爭ひからのみ出づる。その後の狂言もいろいろと變遷はありながら、大方これにとゞまるのを、京傳は、主命によつての「草履打」とした。それほどお家騒動を中心とする「稻妻表紙」の作意であつた。京傳の讀本の傾向はこの奪胎のあとからも見られる。



「參會名護

「稻妻表紙」を讀本らしくする京傳の意圖は、また梅津嘉門の變質に於ても知られる。嘉門の名は參會名護屋にも、土佐の淨瑠璃にも見えてゐる。それは共に北野天神の祠官となつてゐた。尤も後の狂言には、家老とし、山三の家從としたのもあるが、一箇の軍學者としたものはなかつたやうに思はれる。軍學者とする京傳の趣向は「名古屋山三郞」の「浮世つれづれ草」から出づる。

「つれづれなるまゝに、筆を染め、心にうつるよしなし事、太夫の位を本として女郎の種ならぬ、それより下つかたの浮れ女の手など描からぬ御返事、下戸ならぬこそ君にはよけれ」さうして細々と戀の段を書きつゞけた好色諸分の書を「武道徒然草」とし、軍術の書とする京傳は、その嘉門とあの嘉門とを轉換せれば



屋」揷繪

ならなかつた。その時に彼は近松の「信州川中嶋合戰」の山本勘助をモデルとした。第五卷第十七回の「雪溪非熊」は、あの曲の第一段と第二段から成つてゐる。

京傳は「傾城返魂香」に倣つて、不破名古屋をお家騒動に繋がうとした。しかし、彼は直に近松の六角家騷動を藉りずに、範を他に仰いだ。「伽羅先代萩」「伊達競阿國戲場」である。「阿國戲場」の高尾はそのまに藤波であり、絹川谷藏は佐々良三八郎であつた。絹川の與右衞門はとりも直さず南無右衞門であつた。與右衞門には高尾の妹累との間に大い因緣話があるが、南無右衞門にはそれがなかつた。しかし、京傳は藤波の妹お龍を點出することによつて、原作の面影を殘してゐる。「阿國戲場」には呪咀の怪鼠がある、「稻妻表紙」にもまたそれを襲用した。怪鼠を逐ふ荒獅子男之助は山三郎となつてゐるが、呪咀の師貴藏院を「源平盛衰記」などによつて賴豪院とすることに、讀本らしくする計畫がうかゞはれる。

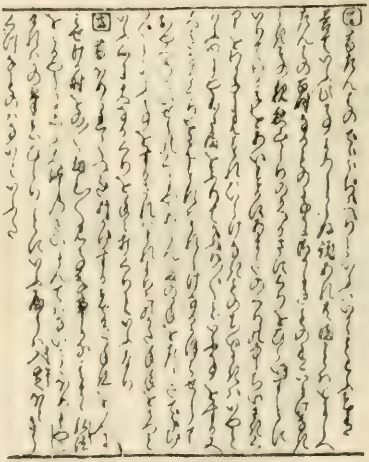
「阿國戲場」と「伽羅先代萩」とは姉妹關係を有する作品であつた。京傳は兩手に花とやうにその二つの趣向を作中に拉れ込んだ。蓋、卷三「斷絃の琵琶」は作者得意の商所であつたらうが、それは「先代萩」の第四段に倣ふものであつた。南無右衞門が栗太郎を殺して月若の身がはりにすること、栗太郎がわざと父に逆つてその志を勵す根據は、すべてこの段に於て見られる。そればかりでない、この段の趣向は、これを分つて「孤雁の禍福」に於ても流用してゐる。雁の生血が父平の吃をなほす藥となることは、辰の年月日に生れた女の血が放蕩誘惑の呪咀を破る手段となることとから出でてゐる。しかもその由緒を語る忠臣熊川源五兵衞の假の名が浮世戸平であることも、浮世又平と考へ合はすべき筋合であつた。

京傳は、一齣の身代り劇ともいふべき「斷絃の琵琶」を「阿國戲場」の輪廓に據つて書いたもの丶、なほ

内に少しでも多くを盛らうの下心から「丹州爺打栗」をも參照した。これは竹田小出雲三好松洛合作の淨瑠璃である。丹波栗が自ら毬を脱して落ちるので、出て落ち栗といふその名が、てゝうち栗と訛つたところからいろいろの話が出て來る。

「私可多咄」のてゝうち栗は、手手うち栗であつた。丹波の百姓が幼い兒に小い栗を與へると、かぶりかぶりをする、また大い栗を見せると両の手をたゝいて、てうちてうちをする、それ以來手手をうつの意で大なる栗を手手うち栗といふのであると附會する。これはたゞ滑稽を旨とすることであるが、爺打栗と解するに至つて、複雜な筋合が考へられるやうになる。「丹州爺打」の如きは、忠義のために父を殺さねばならぬ娘、その娘が死んで主君の奥方の身がはりになる一篇の悲劇を成すのであつた。その娘の名はお栗であつた。娘の祖父、息子の父の又治の歎きは斯う書かれてある。

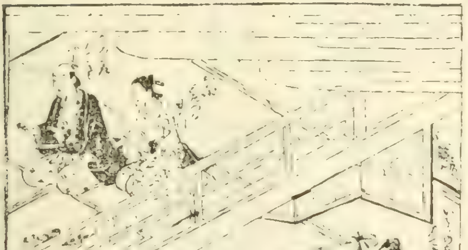
「今年は栗もいつもよりは一入見事に出來もする、孫の名もお栗といへば、栗の見事に出來たやうに仕合



「私可多咄」

も有らうかと思うたは嬉悦び、そのお栗が爺を打つて死ぬるといふ印の栗であつたかい。是も前世の因縁なら、此山に出來る栗を丹波國の爺打栗と名に立て、末の世までももて囃さば、せめて孫子の未來の爲、佛に成つてゐるとの便宜聞せてくれ。」京傳はこれを逆用して、南無右衛門に「文彌が初名を栗太郎と名づけしも丹波國の爺打栗、爺に打たるる因縁か」といはせてゐる。

栗太郎の名を、こゝに結びつける京傳の企みは、また姉楓の名に於ても見られる。（かへでは蝦手の略訓にて小蛇のたゝる前表ならん」と南無右衛門にいはせてゐるのも、はじめから蛇娵たらしむべく、また蟠滿寺の緣起を齎すべきかねての計らひであつた。）傾城返魂香」があれほどまでに又平の繪の不思議を見せてゐるのに拘はらず、「稲妻表紙」



「契情阿國

の父平にその事がなくしたのは、畢竟百鬼圖の奇特に專らならせるためであつた。

京傳が支彌の最期に琵琶をあしらつたのは、新しい趣向であつたらうも、これも亦「丹州爺打栗」とかすかに絲をひいてゐる脚色であつた。それには丸木橋を渡りゆく盲人の連がある。官を申しに京に上りゆく人々であつた。

「京へ上らば琵琶箱背負うたが重うてないやい。琵琶もめんど臭いてゝ杖につくともしよんがえ、おうてば／＼やれこりや杖につくないやい。琵琶もめんど臭いてゝ杖につくともしよんがえ、田舍法師の四五人連、官を申しに行く道は目で見てさへもあぶない橋を、杖でさぐつて／＼／＼、一ツ橋じや、合點か、合點じや」とて橋を渡つてゆく。久治はこれを見て丸木橋の渡りぶりを會得して、難なく御臺



歌舞伎「挿繪

をおのが村へお連れ申した。京傳の文彌の琵琶、また京から秘曲を得て歸郷したといふ筋はこれから暗示を得たのであらう。

斯うして例の勘當に就いて考ふべき順序となる。土佐の淨瑠璃をはじめ皆山三と伴左が葛城を中においての勘當であるのを、これは敵を見きはめる手段であること、また山三の廓通ひが父の靈の告によること、葛城が許婚であることに、わざとめかす讀本の性質があつた。また勘當のとめ女を葛城にしたことが新しい工夫であつた。伊達模樣の二人が打ち合ふ刄を隔てゝすくと立つ美しい女、この場面は葛城がお國などと名こそ變はれ、いつも變はらぬ定式物であつた。京傳の工夫は今も舞臺に活きてゐる。しかし、讀本の奇構を欲する京傳は、二人を直に山三とし、伴左とせず、之を山三に扮し、伴左に扮する者とした。こゝにも新しい工夫があつた。伴左の徒が、皆同じ打扮で、誰が誰とも別ち得ぬ筋は、すでに土佐淨瑠璃に見えてゐる。京傳は「稻妻表紙」の末の方は殆どそれに據つて奪胎を試みるのであつた。伴左が同じやうな打扮の五人と相伴なひ、深編笠に覆面し、籬々を立のぞき見物して通るのを、道順が籬の女郎空蟬が戯れざまに伴左の編笠覆面をとつて面體吟味をする。その空蟬役を山三の僕鹿藏がするのであつた。「名古屋山三郎」では葛城が山三を慕うて狂女ともなる戀が書かれてゐるのを、京傳は兄に代つて死する義烈の女としてゐる。こゝにも京傳が強うる「讀本」があつた。

京傳は、また不破名古屋の狂言を題材とした浮世草紙をも參照したやうに思はれる。たとへば又平が南無右衞門の編笠を刺して妹の仇討に擬するくだりは、享保十五年の八文字屋本「契情何國歌舞伎」の繪姿を斬つて仇討に代へる趣向「名筆の德現はるゝ面影は一念の掛繪」をとつたのであつた。又平が恩と仇との二筋

に迷ふのもその書の趣向をうけたのであつた。尤もこの「阿國歌舞伎」は狂言「女歌舞伎千代始」を小說化したものであつた。

享保十七年の「婚禮名護屋稻妻日記」は寛保二年「風流返魂香」と外題替された。ただし、序と、挿繪と、標目だけが違つてゐる。その「返魂香」の標目の一つである「火水の責より恐しい褒美責」が「稻妻表紙」の「修羅の太鼓」にいふうつゝ責となつたのであらうか。その老婆の口から出づる葛城の意外の素性をそのまゝに京傳は、作左の妹といふ奇想にうつしたのであらうか。この類なほいひ續ければはてしもない事であらう。



「風流返魂香」褒美責

「稻妻表紙」の初版の見かへしには定家の假名を集めて、「いなづまへうし」と題してゐる。また卷首には

室町頃の小歌を題し、それと隆達節の關係を附記してゐる。題名「稻妻表紙」は市川團十郎の不破の打扮の傳統によることは勿論であるが、なほ假名草紙類に稻妻形の表紙の多いことを考へ合はせて附したのであつた。そこにまで凝り性を見せた京傳は、作中の人物になほ一段と工夫を寄せてゐた。六字南無右衞門に就いては、作者自ら作中に註記し、猿二郎、鹿藏に就いては「不破名古屋傳奇考」に考證の片はしを見せてゐるが、その他文彌、露の五郎兵衞、佐渡島坊、傳助またはお龍の如き、皆おのおの考證一章を添へて然るべき人々であつた。これ等はいづれ藝道に關係ある人々であつたが、その頃の京傳は、それ等の人々の事蹟、またその人々の活きてゐた世相に一方ならず興味を覺えてゐたのである。名古屋といひ、不破といひ、實在の人としても、また劇化せられた者としても、京傳にはうれしくてならぬ人々であつた。こゝには當然それ等を說明して、作者の意圖を示すべきであるが、今は京傳の「骨董集」「近世奇跡考」その他に讓ることにする。

京傳はこの作を結ぶに、「不破名護屋の文字に、自然不レ破レ名護レ屋と云訓あるも、此稗史におきていみじき吉兆ならずや」の一句を以てした。これは殆要なき辭のやうに思はれる。しかし、「作者部類」によれば當時板元伊賀屋では主人とその養子との間に不和が起り、また主人の妻は病死したのを、京傳は「否妻病死」に通る「稻妻表紙」の名を附し、「不和な子や」に通ふ「不破名護屋」の事件を題材としたためと解して後悔してゐたとのことである。否妻のいなは不慮の災禍を世間にいな事といふそのいなに通はせて解するのであつた。して見れば、京傳の文は單なる洒落ではなかつた。その頃の作者の神經の動きをも考へ延いて讀本の性質にも觸れて來る一事であつた。

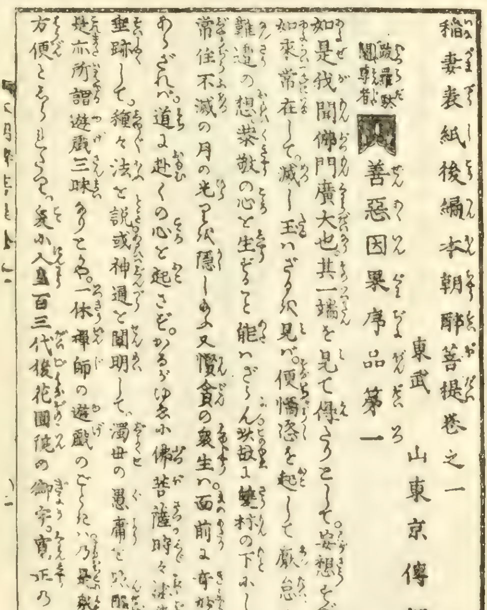
稻妻表紙後編

本朝醉菩提全傳

山東京傳の作、初代豐國の畫。上下二帙に分れてゐる。上帙六册、下帙四册、共に文化六年の出板である。「稻妻表紙」の卷末には山三郎が雲六の妹八重垣を妻として小山三を生んだことが書いてある。また後篇に小山三が出雲お國を妻として歌舞伎躍狂言を始めることを書くと豫告してある。この豫告は戲作者の癖の書くあてもない豫告であつたことは後篇の例引の上からも察せられる。しかし、京傳は前後二篇を繫ぐに、不破道犬一味の怨靈を以てしたが、それよりは京傳の心持にはもつと自然に續いて行く徑路があつた。再摺本には略されてはゐるが、前篇の出像中の藤波の舞姿の後には別色に摺り出した髑髏の舞姿があつた。さういふ作者の好みは自ら一休和尚傳を作中に齎しても來る。また前に淨瑠璃歌舞伎の由緒物に取材した後が、假名草紙の世界に一轉することも尤であつた、まして近世の風俗の考證に專念してゐる頃の作としては、當然そこにおち附くべき性質であつた。その一休物を支那小說の「醉菩提傳」と連ねるのは、京傳が有つ「讀本」の概念によることとであつた。

十册の書は卷を以てすれば八卷、回を以てすれば十六回、回每に法華經の品目に準ふ標名を附し、また十六羅漢の名を藉りて裝とした。たゞし、これは事が一休に關する、佛敎に關するが爲といふほどの趣向立て

あつた。京傳は卷五の末に參考の書四十七部を擧げてゐる。しかし、それ等がこの作と事實上どれほどの交渉があるかは、大なる疑問である。その最初に揭げられてある「明本醉菩提傳」にしても、どの程度に於て原作と見、原據と考ふべきであらうか。原據原作は却つて他に存してはゐまいか。なほ「稻妻表紙」が「傾城返魂香」によるといふよりは、漫然として淨瑠璃によるといふ方が話が早いやうなものでなからうか。すなはち、「本朝醉菩提傳」は假名草紙、わけて因果物の型を藉りて成つたといふべきである。以下十六回に分つて短い解説を試みる。


稻妻表紙後編本朝醉菩提卷之一

東武　山東京傳撰

善惡因果序品第一

如是我聞佛門廣大也。其一端を見て得うとして妄想をのべる者
如來常在して滅し玉はざるを見ず。煩惱を起して懈怠を懷き、
難遭の想、恭敬の心を生ずる事能はざらん。然故に雙林の下にして
常住不滅の月の光を取隱し、又慳貪の衆生は面前に奇妙を見
ざれば、道に赴くの心を起さず。かるが故に佛菩薩時々娑婆世界に
垂跡して、種々法を說、或神通を闡明して、濁世の愚庸を欽服しめ
是亦所謂遊戲三昧なりとかや。一休禅師の遊戲のごときは乃是般若
方便とぞ。人皇百三代後花園院の御宇。實に

善悪因果序品第一。まづ筆を「如是我聞佛門廣大なり」に起してゐる。その筆の「是れ亦所謂遊戯三昧なりとかや」に至るまでは、まさに「醉菩提傳」の原文の飜譯であつた。

作者がみづから京傳譯といふのも當然であつた。しかし、その七行の譯をとゞめて、筆はさつと飜案にうつる。飜案といふにもあまりに自由過ぎる飜案であつた。原書の中二三の章を除く外は、たゞ彼書の主人公道濟禪師の奇行と一休のそれが相似てゐる故に、しばらく道濟を藉りて飜案めかしてゐるともいふ事が出來る。飜譯を離れた京傳は、「太平記」の「宮方怨靈會六本杉事」と「結城入道墮地獄事」とによつて、道大類豪院、又蜘手方等の怨靈を鳥部野に會させ、そこに嘉門、山三郎等の因縁を明にする。この因縁が一篇の根幹をなすべきであるが、實際はたゞ背景をなすに過ぎなかつた。事件はその背景の前に個々に活躍する。趣向散漫の評ある所以である。



「醉菩提傳」出像

一篇の綱領を說いた京傳の筆は新しい事件に轉ずる。信濃望月濟士詑麻彦惣と奥女中香晒は不義をして逐はれる。二人は香晒の實父洞九郎のもとに走る。彼は大和二上獄の麓に住む惡獵師であつた。その中に二人

の伸を裂いて香晒を賣ものにしようと企む。彦惣が病んで重態に陥つた時、偶洞九郎は春日明神の鹿を殺したので死刑に處せられようとする。彦惣は更科肩衝の茶入を手放し、その金によつて洞九郎の罪を贖はうとする。馬晒が道具屋から金を持ち歸る途中を要して胸毛黒平が奪ひ去る。黒平の妻岩芝は更に香晒を欺いて身賣をさせようとする。折柄香晒は妊娠八ケ月であつた。岩芝は墮胎の薬を與へる。香晒は涙ながらに飲まうとする時、門說經が來て、金を與へる。これが一休であつた。また黒平夫婦は奸計が露顯して、出奔する。岩芝はもと道犬の妾であつた。この一條はこの枝葉によつてのみ脚本の筋と繋つてゐる。京傳は何故に一休を門說經とし、また說經節を語らせたか、これも何の風俗考證から來る自家の興味に基づいてゐる。

得失譬喩品第二。香晒の孝心によつて死を免れた洞九郎は、なほ香晒を賣らうと謀り、その手はじめに香晒が生んだ男兒を棄てる。たまたま、そこに五十兩の金を拾つた。金は主人鴨川忠知の命によつて、更級肩衝の茶入を買ひに來た穗波垣右衛門が落したのであつた。垣右は金を探しに來て、一子を拾つた。彼は金を遺した落度によつて主家を離れる。しかし因緣あるものとしてその子を養ふことにした。

忠知は白炭や燒かぬ昔の雪の枝の句を吟じて當時白炭の忠知と異名されたとある。その人は「近世奇跡考」に「滑稽太平記」を引き、其角の「雜談集」を引いて說いてある白炭忠知に當る。京傳がその江戶の人なるを鴨川の鄕士とし、一休の親友とするのは、潤色のためであつた。一篇中にこの種のものは甚多い、一々いはないことにする。さて洞九郎は五十兩を得たばかりか、胸毛の黒平を殺して七十兩を手にする。これはさきに香晒の奪はれたものであつた。京傳はこゝに一因果を語つて、なほ他の因果によつて、洞九郎をして百二十兩の金を懷にしたまゝ、熊に追はれて岩洞の中に横死させる。熊は洞九郎に殺された五疋の獵犬の怨念

の宿るものであつた。この百二十両がまた後の因果に結びつく。その因果話は「醉菩提傳」中の趣向であつた。

「醉菩提方便品第二」。こゝに醉菩提といふは一休が酒を好むかための號である。强ひて道濟禪師に附會することはいふまでもなかつた。勝基と細谷入道の合戰が起る、時の不利たるを知つた梅津嘉門は一子彦丸を一休に托して戰死する。鼠あつてその腸を食ふ、賴豪院の怨靈のなす業であつた。强賊、有漏路太郎、無漏路五郎は落人を狙つて、嘉門の妻此花を殺し、三歳の娘乙星を谷に蹴落し、七歳の娘玉蟲を奪ひ去つた。彦丸疲れ來つて母の屍を見て自殺しようとする。折から一休來つて遮りとゞめ、父の遺志を告げ「信」とした。此花が寧の津房の前に殺され、彦丸が敵と戰つて左臂を傷いてゐることは、彦丸を以て惡河に附會するための趣向であつた。引用書目四十七部中にはたゞかういふ一事の故を以てのみ擧げたのがある。京傳が讀本に求める仰々しさはこれである。たゞし、强賊を有漏路無漏路と名つけたのは、一休の狂詠「有漏路より無漏路へかへる一休み雨降らば降れ風ふかばふけ」の語を用ゐたのである。事は「一休咄」に見えてゐる。前の嘉門の詠「生れぬるその晩に死にぬれば今日の夕は秋風ぞふく」は「一休咄」に蜷川新右衛門の辭世として傳へるものから假りて來たのである。しかも、これ等の書を四十七部には數へてゐなかつた。京傳の老獪は因を追うていよいよ明になつてゆく。

「姉妹本事品第五」。品目には「制度功德品第四」を掲げながら、本文を第三の中に說いてゐる。故に話は第三より直に第五に續いてゐる。若芝は安計呂山に人商人をなして、山姥と異名されてゐる。玉蟲は有漏路無漏路兄弟につれられて來て、紅兒とよばれてゐた。そこへ乙星も賣られて來て、綠兒とよばれてゐた。二人は姉

姉であることを知らなかつた。知つた時は、病める姉は岩芝に責め殺され、妹は父の形見の大幹國師の法語を持つて逃げねばならなかつた。京傳は、この一條を謠曲「山姥」によつて作り、また紅兒綠兒の呵責、死別を説經節「三荘太夫」によつて作つた。また岩芝が、大勢の娘共に歌舞を仕込むくだりに、催馬樂、謠節、今樣、文彌節、比丘尼歌、傀儡歌などをうたはせるのも、いはゞ「骨董集」式の道樂であつた。

俠客提婆達多品第六。剃髪して是害と號する彦丸は、とかく腕立を好むとて勘當せられて浪花の千日寺の邊に弄具を賣つてゐる。野晒悟助と稱した。悟助は彼の扇屋座右衛門の娘小田井が惡男達舍利弗、幻に惱まされてゐるのを救つたことから、それ等の頭分提婆仁三郎との間に爭を釀し、つひに舍利弗、幻を殺した。二人は有漏路無漏路である。悟助は知らずして母の仇を討ち、一休によつてその因緣を知ることが出來た。一休が彼を勘當したのも、畢竟はこの仇討をさせるためであつた。扇屋座右衛門とは齋藤彦惣である。小田井はかの棄てられた予の妹で、今年はもう十五年である。第一回以來もう十七年の時は經過してゐたのであつた。

悟助が俗體となりながら、なほ上十五日は出家の振舞、下十五日は俠客の振舞、それは俗を救ふ上に違ひはないとの見解によることであつた。提婆等が上十五日に迫れば、飽くまで忍辱の苦を嘗め、下十五日には直に之を制懲する變化のおもしろさは、つひに歌舞伎「醉菩提悟道野晒」の一篇を成すに至つた。けだし、京傳は悟助を「醉菩提傳」の趣意に托し、提婆をその本説に托したのであつた。

地獄信解品第七。一休と遊女地獄の問答は知られてゐる一休俗傳中の重要事件である。京傳は地獄を乙星の後身として全體の筋に繫いでゐる。一休がそこに行くのは、乙星教化のためであつた。また地獄の臨終に

兄の悟助にひき合はせることにした。京傳は俗傳によりながら、「堺鏡」などをも舉げて地獄の事蹟の妄にあらざることを辯じ、また頻りに女達磨の由來を說いてゐる。その後、後には合巻としての「女達磨之由來文語」の作がある。その序文には「骨董集の著述の暇」とも見える。京傳の意のあるところを知るに難くない。

父母安樂行品第八。堺に近き海村の賃内は篠波垣右衛門であり、佐助はあの息子であつた。佐助は家が貧しいので土器賣をして孝養を盡してゐる。扇屋の娘小田井は同腹の兄妹と知るよしもなく、佐助に戀して飼犬を文の使とする。犬は洞九郎に殺された犬共の生れかはりである。かの怨念が



「女達磨の由來文法語」挿繪

兄妹を畜生道に墮さうとするのであつた。二人が殆ど乘ぜられようとするのを一休が救ふ。一休が左に身をゆるし合はうとする二人を、店さきの土器を盜むことによつて救ふ趣向を、京傳は「一休咄」の一休が土器賣の土器を奪つて年を越した咄から得た。しかも犬の一事は「醉菩提傳」と多少の關係を有してゐた。さて小田井は戀に病む。塡右は其内と謀つて婚をはからうとする。

　畜生勸發品第九。小田井の病を癒すとて來た修行者は提婆であつて、祈禱にかこつけて金を盜みさらうとするのである。一休は看破して之を追ひ、また小田井に宿る犬の怨靈を斥ける。



「一 休 咄」土器賣

　一休が修行者と行くらべをしたことは亦「一休咄」に見えてゐる。修行者は吠えしきる犬の怒をやめさせ、これへよび寄せるとて、祈禱すれど甲斐がない。一休は懷から燒飯を取出して、「ころころころ」といへば犬が直に尾を振つて來たとある。京傳はこれを活用した。また狗子佛性の話も「一休咄」に見えてゐる。京傳はそれをもこゝに利用するのであ

つた。

虚女授記品第十。一休は箕内と佗助、鹿右夫婦と小田井に、すべての因縁を示した。人々はたゞ親子、兄妹の不思議の邂逅に驚き、一休の神通を仰いだ。一休また鹿右の垣右が金を失ひながら、孝子を得て老後の安樂にすごすことが出來、洞九郎が金を得ながら、餓死したのは、皆善惡の應報であることを告げ知らせた。なほ一休は惜助をして取り來らせた洞九郎の百二十兩の中、五十兩をこれ茶入の質、汝の手に戻るべき因縁とて彦惣に渡し、七十兩は汝の失ひしものとて箕内の垣右に渡した。さて後、垣右はこれによつて若人を得て主家に歸參することを得た。

「本朝醉菩提全傳」の上帙はこゝで終つてゐる。盗門の三子の件と、彦惣の二子の件とは、その間に何等の關係もなくて、たゞ一休を楔としてのみ出入交錯してゐた。原本「醉菩提傳」はなほ「一休咄」などのやうに道濟に關する事件を何の系統もなく、連絡もなく集めたのに過ぎな



「一休咄」行くらべ

かつた。京傳は一休の個々の話に強ひて連絡をつけ、また「醉菩提傳」中の一二條の小話を無理に長篇化しようとした。その作が散漫に歸するも當然なことであつた。

それにしても、「本朝醉菩提全傳」と「醉菩提傳」は、いかなる點に於て關係を有するのであらうか。こゝに要を摘んで京傳の據るところを示しておく。

その一つは一度「嘯草紙」に引いたことのある「宣教秀玉雙偸レ花」の章である。臨安の才子王宣教が、隣家の女陶秀玉と心のみを通はしてゐた。宣教は趙寛に托して文を遣はした。寛は力強く、又輕捷であつた。陶家に忍び入つて文を傳へた。秀玉はもとより色よい返事をした。宣教はいよいよ忍び行くこととなつた。陶家に一猛犬がある、或は宣教を吠えて事を破りはせぬかの氣づかひから寛は犬を殺す。かうして若い二人は契をこめた。その頃府中の惡少年に李澤といふがある。因果人を苦めることを頻りであるのを、寛がこれを打つて制止した。澤は大に恨み、どうかなして仇を報じようと、十餘人の破落戸共を語らつて、西湖の石岩橋上に寛を要ふ。寛の勇力は何人かを欄干越しに湖水に投げ込む。なほも對手方が斬つてかゝるので數人を殺した。さて自殺しようとしたが、思ひかへして出奔した。この事件が累をなして二人の戀も露顯する、つひに情死を遂げる。骸は別々の寺に運ばれて火葬に附せられたが、不思議にも兩屍ともに燒けなかつた。そこへ道濟が來て過去の因緣を說く。この二人は前生の夫婦であつたが、口さがなくて人の婚を破つた爲に今のはかなきに至つたのである。しかし、二人死を同じうして、前因を償ひ得た。まさに祈つて蘇生さすべきであるとて、二人の屍を並べて置いて例のやうに酒に醉ひながら高誦する。二人は息ふきかへした。趙達は直に許して夫婦とし、道濟を仰いで活佛とした。この犬が屠屋の飼犬となり、趙寛が悟助となり、李澤が

舍利弗、幻等となり、石岩橋が天王寺の石の舞臺となり、二人の蘇生成佛が濟寄生道の救ひとなつたのであつた。

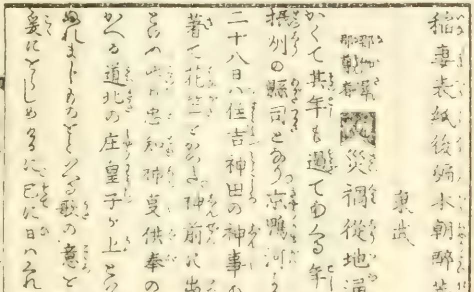
京傳の飜案した他の一つのは「濟顛裸治處女痔」の章である。張寛は道濟に由せられて東花園に來た。けれど約したその人は見えない。待つこと半日、やゝ飢えて飯店に入つて一碗の麵を食した。間もなく腹痛を覺えて側の厠に入る。そこには柱の上に一財嚢があつた。懐にして歸り、開けて見ると白銀十錠がある。その翌日道濟また來つて、東花園行を約する。張寛が約に從つて行くと、昨日財嚢の掛つてゐた柱に縊死してゐる者がある。道濟は驚き恐れる寛を抑へて、一段の因果を說いて聞かした。汝の前生は茶の行商人であつた。この縊死せる者は汝の雇つた者であつた。彼は途に汝を殺して五十貫の錢を奪つた。故に今世利を倍して汝に還したのである。われその因果によつて汝を招いて銀を收めさせたのであると。京傳は、これから洞九郎の首二十兩の因果を脚化したのであつた。

道濟が處女の痔を治すといふのは、痔疾に惱む女兒を裸にし、おのれも赤裸となつて床上に坐し、脚を合はせながら、一偈を唱へる。道濟の三昧の眞火發生して痔蟲を燒くので、蟲が飛び出す、病は忽ちに癒えたのである。京傳は之の痔蟲を轉して小田非に宿る犬の靈としたのであつた。「本朝醉菩提全傳」は「醉菩提傳」の飜案であるといはれもし、また京傳は自ら京傳譯とも署してゐる。しかし、據るところはたゞこれだけであつた。下帙の四卷、六回の如きは、何の交渉をも有してゐない。たゞ一休を本朝道濟と見る點に於てのみ、その題名の許されるに過ぎなかつた。

雙鶴貫地涌出品第十一。佐々木家には鳥羽野の會合した惡靈によつて桂之助保春前も死した。月若は多門

之助と名乗る。その妻折琴姫の美しいのを、伊勢の雉川國貫の子金藏太が懸想して奪はうとする。そして佐々木の家臣に殺される。國貫は佐々木を夜討する。多門之助は自殺し、山三郎亦難に死する。すべて惡靈等の所爲であつた。京傳はしばらく棄て置いた山三郎の筋をこゝにたぐり出した。

百螢陀羅尼品第十二。山三郎の妻八重垣と小山三は折琴姫を守護して、館を逃げ出でたが、姫と離れ、母と共に金剛山にかゝる。そこには獺々が出で、また獺々に扮する提婆が襲ふ。新



稻妻表紙後編本朝醉菩提後帙上冊

東武　醒醒齋山東京傳譯

鄰郷災禍從地涌出品第十一

な災難の間に八重垣は不破伴左の弟伴作に殺される。小山三は懐中せるかの百螢の圖の奇特によつて獺々を退治する。京傳は思ひ附いたやうに、「稻妻表紙」の後を承けたのである。

瓜茄隨喜功德品第十三。不破名古屋の筋合を離れて京傳は一休に關する一話を挿んだ。さきに白炭忠知は堺皇子がらへの化地藏を斬つた。これは古狐の所爲であつたが、斬られた狐は少女に扮して忠知の母に近づいで病氣に惱ませる。一休それを看破し、忠知をして射殺させた。また一休は忠知の亡女の新盆に手向の歌を詠んだ。「山城の瓜や茄子をそのまゝに手向にするや賀茂川の水」と。忠知は今は攝津の縣司となつてゐるが、本領は山城の鴨河ゆゑにかく詠じたものであると京傳は言を添へてゐる。

「山城の瓜」の詠は、一休が性靈祭の眞似かたもせずに、われ廣大無邊の性靈祭をしてゐると鴨の河原で、あちこちを指しながら歌つたものであると「一休咄」に見える。京傳はそれを假りて、附會し來つたのであつた。京傳はまた忠知の狐、斬り目射殺の一條をも、「一休咄」から竄したのであつた。蜷川新右衞門の臨終に、三尊二十五菩薩の來迎があつた。新右は直に



「一休咄」狢の怪

弓に矢を番へて射れば、紫雲の影もなくなつた、古猪の所爲であつたといふのがその原話であつた。

京傳はまた「繪一休噺」によつて、古狐が青蛙を遣餅とし、柳の葉を煮餅となし、その他の數々を忠知に贈物にしたことを書いてゐる。

原話にはそのあやしい贈物以外に菅原の神に扮して來て一休を誑かさうとしたこともある。京傳はそれと古猪の怪と合はせて忠知の弓勢に結んだのであつた。

生死流轉藥草喩品第十四。河内中野村の酒屋赤六が雉を撃たうとして過つて隣木枯竹齋を殺し、またその女三輪の死なうとするを助ける。三輪は親の仇と知らず、赤六は惡緣と知りながら、その情にほだされて、結婚して、一子杉太郎をさへ生む。赤六は名古屋小山三の乳母子であつた。その緣によつて小山三は、その家に滯在してゐる。ある日小蛇が杉太郎の足に纏ひつく、一疋の雉がとび來て蛇を寸斷にする。それ以來雉はその家を離れなかつた。

京傳は雉を竹齋の生れかはりとし、孫杉太郎の急を救ふものとする。蛇を作左の生れかはりとする。小山三を苦めるためにこゝに現はれたのであるとする。京傳は前篇以來しばしば蛇に對する首發圖の奇特を利用



「繪一休噺」狐の怪

した。故にこゝに蛙に對するに新に雉を以てし、更にこれに一つの因緣に繋いだのであつた。

赤繩囑累品第十五。小山三は猪々退治の折に頭を痛めたのがもとで、赤六の家に惱んでゐる。無緣の首を求めて祭れば平癒するとて、一老女から首級を買つて回向をする。京傳はこの章に於て說くのはたゞこれだけであるが、後章に於て明なる如く、老女は安計呂山を逃はれた山姥の岩芝であり、首級は自刎せる提婆のであつた。岩芝は小山三を仇と狙ふ者、首級を持參するのはそれに近づく手段とするのであつた。これ等皆不たる因緣によることとであつた。京傳はこの篇の結末を元旦にする要があつた。故に一挿話として、師走の掛乞對手の俗談義の一條をこの章に入れておいた。

傀儡化城喩品第十六。岩芝はもと京の白拍子で不破道犬の寵をうけて懷胎しながら、木精竹箭に緣づいて提婆を生んだ。すなはち提婆はお三輪の種がはりの兄であつた。しかも提婆は金剛山で赤六の父赤助を殺したのである。赤六とお三輪の惡因緣は甚しかつた。岩芝は道犬の緣によつて小山三を仇と狙ひ、それに近づくためにわが子提婆の首級と知らずして、赤六に賣つたのであるが、一切を知るに及んで自殺する。一休これに引導を與へる。

京傳は岩芝の臨終に當つて一休の助辭もて曲舞を舞はせる。謠曲「山姥」に據つての作であつた。また一休が引導の歌を「極樂をいづくのほどと思ひしに杉葉立てたる赤六が門」とした。「一休咄」の一休が大德寺門前の酒屋に醉臥して、さてもよい氣味やと亭主にとらせたる歌を轉用したのであつた。京傳は「一休咄」のうちにも有名な元日の髑髏をこゝに利用した。岩芝の死は除夜である、提婆の首級の皮肉が缺けて髑髏となつたのもその時である。一休は直にその髑髏を杖のさきに附けて、御用心御用心とよび步いたとした。

京傳はまた岩芝が死すると共に神に供へた燈盞の火か點じたとなし、それを岩芝が平岡明神の油を盗んだ罪の贖ひとした。河内に聞えた姥か火に附會するのであつた。篇中この種のもの甚多い、三本杉、雉子塚、雁卒提婆の類皆それである。一々その所傳を擧げて京傳の附會のあとを明示することを避ける。

京傳は木枯竹齋の名を用ゐた。基づくところは「冬の日」の「木枯の身は竹齋に似たるかな」であつた。句は烏丸光廣作といはれる假名草紙「竹齋」によつて成つてゐる。京傳は「骨董集」に「此竹齋物語は寛永十一、十二、十三年の比に作りたるものなるべし、考證あれどもこゝに付もらしつ」といふてゐる。假名草紙氣分を出さうとする此篇に、それか用ゐられるも當然であり、貞享四年の小説「新竹齋」によつて、杉太郎を醫者として新竹齋と名乘せようとするのも、まさにあるべき趣向であつた。



「一休咄」元旦の髑髏

この作にいろいろの好みをも寄せる京傳はまた之によつて相應な博識ぶりをも見せようとした。たとへば

片目の犬の話の如き、「諸國一休物語」にも見えてゐることであるが、京傳はさらいはずに「沙石集」を引いてゐる。この衒學も頻りにつゞけられて、全體の緊密を缺くのであつた。

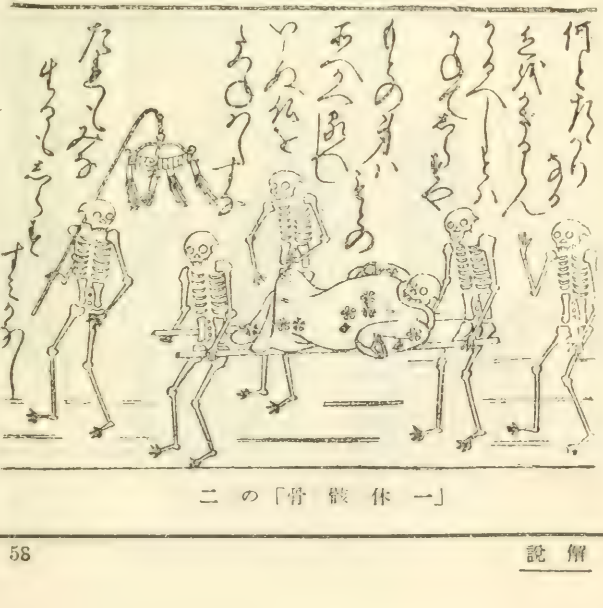
「本朝醉菩提」の内容は大方斯うであるが、その豐國の挿繪も大に注意すべきである。たゞし、京傳の考案が大に與つてゐるのは勿論である。隨分古繪畫も參考となつてゐたらう。一例を擧げる。卷三の六字南無右衛門淨瑠璃芝居圖の如き本文には用なきものをも挿んでゐた。また一例を擧げる。卷五の野邊送りする骸骨の圖は「一休骸骨」の二圖を併はせたものであつた。それにして尤も板元伊賀屋また京傳が豐國の畫筆を促すためにいかに苦心したかは、例の「作者部類」に詳かであつた。

この書には後篇があるべき筈であつた。趣向は「從禍從地涌出品」の金藤太の靈が僧宗玄に宿つ



「一休骸骨」の一

て折琴姫を憫す一條から發すべきであつた。「第十冊の末に「稲妻表紙續編出于於因果物語、折姫琴全傳、來午冬出板」といふ廣告も見え、また卷末にその腹稿の要もしるされてゐる。これはまた「稲妻表紙」の末にもしるされた豫告とも交渉を有する。しかし、果して出板せられたか、或は草稿は成つてもつひに世に出づるに至らなかつたか。實聞未だこれを詳にしない。もし稿成つて出板せられなかつたとすればこの「本朝醉菩提傳」の作に、畵に、また製本にあまりに趣向を凝した結果、板元に損失をかけたためであつたらうか。「思ふにも似ず册子の世評ならず、損する程にあらねども、初に畫工作者をもてなしたる諸雜費のいと多かりければ、竟に板元に不如意さへ打續きしかば、活業既に衰へて他町へ轉居したり」と「作者部類」に見えてゐる。



「一休骸骨」の二

五

三七全傳南柯夢

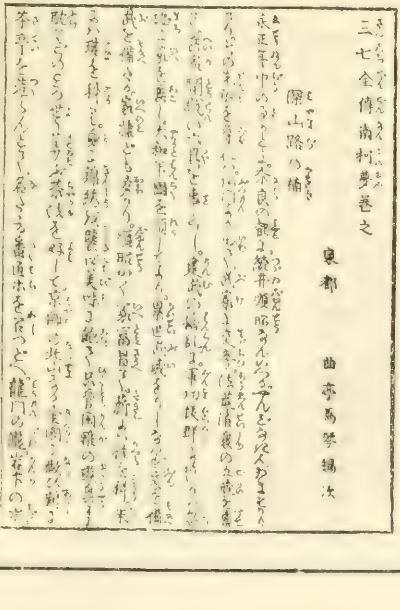
曲亭馬琴の作、葛飾北齋の畫、六卷、十九回、七册。文化五年の出板である。

この書くはしくは「三勝半七節操全傳南柯夢」といふ。三勝半七すなはち美濃屋三勝と赤根屋半七の情死は元祿八年十二月六日の夜のことであつた。早く小唄にうたはれ、祭文に語られ、歌舞伎に演ぜられ、やがて淨瑠璃に作られた。淨瑠璃は紀海音の「笠屋三勝二十五年忌」を初作とする。その後五十忌には春草堂の「女舞劍紅楓」が出來、明和九年には竹本三郎兵衛等の「艶容女舞衣」が出來た。「女舞衣」は上中下の三卷、生玉の段、島の内茶屋の段、新町橋の段、長町の段、今宮戎の段、上鹽町の段の六段から成つてゐる。中に上鹽町の段の中「酒屋の段」が最も人々に知られてゐる。馬琴が「南柯夢」の原據としたのはこの作であつた。

「女舞衣」の半七は大坂の酒屋半兵衛の子であつた。女舞の三勝と堅い契を結めてお通といふ娘さへある。されば親の指圖で迎へた女房お園を顧みもせず、三年越まだ同じ床にも臥してゐなかつた。しかし、貞淑なお園はこれをつい恨むでもなく、たゞ一途に勘當をうけた夫の身の上を氣づかつてゐた。三勝が女舞にならねばならなかつたのは、亡き父が浪人宮城十内に金を借したのが元で窮迫したためであつた。三勝の兄平左衛門は長町に傘屋稼業をしながら、頻りと負債の返却に心を焦つてゐる。それをかねて三勝に心を寄せ

てゐる今市善右衛門は貸元の手代庄九郎と喋し合はせて、平左を責め立てる。さうして三勝を手に入れようとする悪企みであつた。

その頃十内は大和五條の若殿の命によつて三勝を抱へに來た、しかも、もとの恩人の子とは知らなかつた。庄九郎の催促に平左は涙ながらに妹を賣る決心をする。三勝は兄のため、お園のために、半七と別れる覺悟をする。兄妹の素性を知つた十内は若殿の身請を破約し、以前の借金を返して去る。たゞ半七がもと五條の者なる故に、若殿に對して三勝を遠慮すべきことをいひ殘した。斯ういふ運びになつたと知らぬ半七は平左と三勝のために金の工面に心を勞してゐる。それを附目として善右は庄九郎と共謀して半七を陷れる。半七はつひに善右を殺さゞるを得なかつた。父半兵衛は半七を庇護するとて繩かけられて町預けとなる。その以前にお園を拉れ歸つた舅の宗岸は半兵衛の態度に感じて、おのれも舅としての罪を領ち、また娘には飽くまで嫁としての務をなさせようとする。お園はいよいよわが身さへなかつたら、斯ういふ事になるまいも



のと悲歎の涙にくれる。この間に半七と三勝は心中より外に途はなかつた。お通に書置を持せて赤根屋に行かせ、さて二人は心中する。十内が着右か公金を私した罪をたゞして、半七を救はうとする努力も、もう間にあはなかつた。

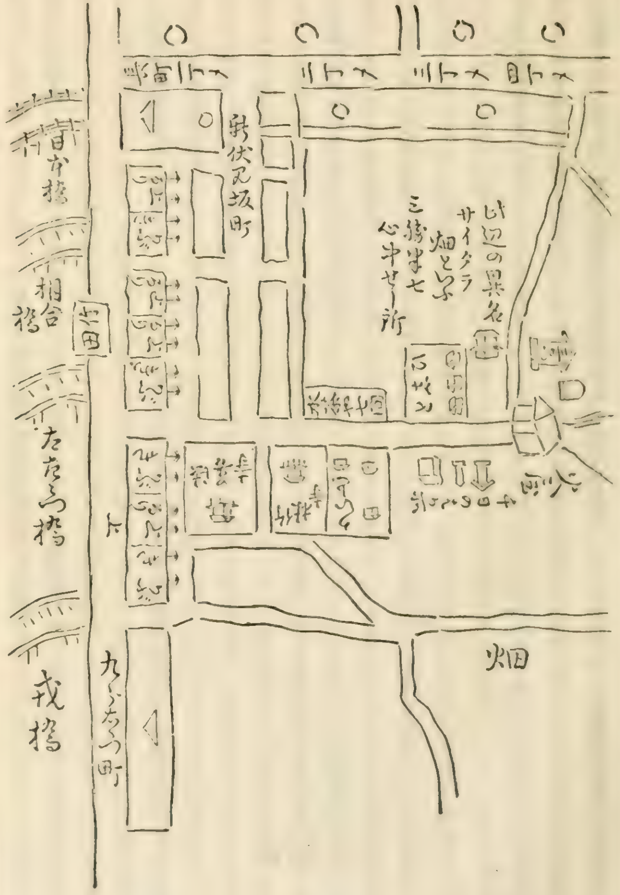
平左衞門の妹おもひ、お園の惱み、これが一篇の中に重い筋となつて動いてゐるものゝ、事實は必ずしもさうでなかつた。三勝半七の心中一件は西澤一鳳の「傳奇作書」「諸佛乗」または濱松歌國の「南水漫遊」の記載によつて、大概を知ることが出來る。それによれば半七は大和五條新町の者、三勝は大坂長町美濃屋平左衞門の養女さんであつた。さんの三勝は女舞ではない、嶋内の垢掴女であつた。三勝にはおつうといふ娘があつた。これは半七と相知る以前の出生である。三勝はその娘の養育と、養父の貪慾とに骨身を削つてゐた。



半七にはまだ定まる妻がなかつた、しばしば、商賣のために大坂に往來するうちに三勝と親しむことになつた。やがて半七は一家一門から妻帶を迫られる、妻帶せずは勘當すると責められる。つひに三勝と心中しようと決心した。しかし、三勝は直にはうけひくことが出來なかつた、おつまがある爲であつた。三勝が養父へあてゝの書置の一節に斯う見えてゐる。

「いかなる過去の因果惡緣かは、半七殿一人私大切に何とぞ當年の内にも片附申候にと存じ候へども、半七母樣成程合點に候へども、あの方の一門衆より斯うした事と知らず、是非是非急に半七殿に女房持たせ、持たずば、勘當せんと一門皆々申さる由、たとへ親の命に背きても大坂へ參り、其方樣と相談致可申と、此八月より談合にて候得共、左樣になり暮せばとて、又いかやうの事あつて御氣に背き候事、一方ならず、左樣の時ぞ、世間からあれ見よ夫にほだされ、父賓の親兄弟ある故、平左衞門樣に不孝なるはと、我身をよき事には申まじ。殊に末幼きおつま事、生れ出づるより他人の手にかけ、親とも子とも知らせず、又もや他人の手に渡し、不便の有樣見るならば、生甲斐あらじと存じ、兎角死ぬる儀ならば挨拶切つて下されと急て申候得共、半七事はとかく緣を切るならば我等男立つまじ、出家に成候、さなくば自害せんと御申被成候故、いかに私思ひのある身といひながら、左樣に切なる心底をむげになさば、後の世までに義理知らずといはれんことも恥しく、殊に一門中の命に背き男を立てさせずしては、我身世に住む甲斐あらじ、此身ある故と存じ、かやうに思ひ立ち云々」

三勝はいろいろと思ひ亂れた末に、心中に同意した。場所は千日寺の墓所の邊、俚稱サイタラ畑であつた。男は腹を切つた上に咽喉を突き、女は咽喉を突いて死んだ。心中の後七年、歌舞伎の徒の追善によつて



「南水漫録」

石碑が、そこに建てられた。碑には嵐雪月照居士、月雪妙霜信女の戒名が刻せられてゐる

垢摺女三勝を寛文の頃の女舞笠屋三勝に附會したのは海音の淨瑠璃にはじまる。それには三勝の親元は美濃屋であるが、島の内の笠屋を假宿にしてゐることが一段と附會の工夫を助けてゐた。それにしても「劍紅楓」も「女舞衣」も、海音の「三勝五十年忌」の趣向を踏襲するものであつた。半七に貞淑の女房のあること、平左衞門の義侠の念篤きこと、皆それであつた。斯くてなほ深刻に考へらるゝ三勝の心事を心中物の常套に收めてしまつたのである。

それにしても、馬琴は此心中物に據つてどのやうな讀本に改作したらうか。馬琴は心中に對して、決して淨瑠璃作者の態度をとらなかつた。彼かつて情死の起原を說いて、その文獻はじめて「吉野拾遺」にありとし、なほ言を添へていふ。「かゝれば情死は南朝微衰の頃より起る歟。淫を樂みて世の譽を思はず、情に迫りて死を路頭にいたすものはそれ痴極れり、論ずるに足らず」と。かゝる言をなす人が勸懲を旨とする讀本の筆を執るのである。「南柯夢」「女舞衣」が事を同じうして質を異にする程度がおのづから推測せられる。

「南柯夢」の三勝も半七も心中はしなかつた。といふて淨瑠璃作者が往々なすが如く、二人に同情して助命に及ぶ筋でなかつた。三勝の母と半七の父とが期せずして同所に同時に自殺する、それを世間に三勝半七が心中したことに沙汰させる。その二人の自殺に勸懲が存するといふのであつた。

馬琴は元祿を永正に溯らせた。事件を奈良の城主筒井順昭の家中に移した。順昭が茶亭の天井に楠の一枚板を用ゐるために米谷山の大楠を伐らうとする。樵夫等が斧を入れてもはねかへり、たゞ木皮の間から鮮血が濺るばかりであつた。楠家の家隷の後裔である赤根半六郎ち半七の父は、今は樵夫と零落してゐたが、た

またま楠の精と三輪杉の精と相語るを聞いて伐木の術を得た。しかし楠の精である大蟻を殺した。牛六がつひに千日寺に自殺すべき因はこゝにあつた。

牛六が伐木の術を得るのくだりをば、馬琴は昔の干寶の撰である「搜神記」に據つて作つた。「搜神記」の記事は斯らである。武王の時、雍州城南に一大神樹があつた。人々は神として祀つてゐる。武王は樹神何ぞわが百姓を損ずるとて、之を伐らうとする。神異あり、沙飛び、石走つて、より近づくすべもなかつた。傷ける一人が、倒れ臥したまゝ夜に入る。朱衣を着て馬に乘つた者が來て、樹神と物語る。樹神がいふ、武王の兵を斧らせたわが威力を見よと。赤衣の人がいふ、武王の兵の頭には生朱を塗らせちらし髮にさせ、朱衣に赤い繩の帶といふ服裝をさせて、伐らせたら、どうするものぞと。傷ける者はその問答を聞いて、翌日武王に申し上げた。その通りにしたところが、何の障もなく、木は伐られる。伐られてまさに倒れようとする時、樹一面に血が流れ出した。と見るうちに牝牛となつて奔り去つた。樹齢百年化して青牛となるといふのがこれと、馬琴は赤衣の者を三輪杉とし、傷ける者を牛六としたのであつた。

馬琴が青牛を蟻に轉用したのは、蟻を殺して禍を招いだ桓謙を以て牛六に擬するためであつた。しかし、馬琴はそれよりも大なる意圖の下に蟻に轉用した。唐代の小說「南柯記」に附會するためであつた。淳于棼の家の南に大い槐の樹があつた。ある日二人の朋友と其の蔭に酒汲みかはして醉ひつぶれた。そこへ槐安國王から使者が來て、導かれて槐の樹の穴の中に入る。穴の中には別世界があつた。彼は國王に謁して王女の婿となり、また出でゝ南柯郡の太守となつて民を治め、治績大に擧つた。五男二女を得て、福窮りなかつたが、間もなく妻は死する、權力は衰へる、つひに使者に送られて本國に歸つた。と思へば夢であつた。二客

はなほ傍にゐた。槐の下を掘つて見れば、穴の中には臺殿の形があり、多くの蟻が棲んでゐた、中に素翼朱首なのが槐安國王であつた。この小説は、後に明の湯顯祖の戯曲「南柯夢」を成さしめた。これまた淳于芬の大槐安國の榮華は一夢に過ぎざることを主題としてゐる。馬琴またこれを假りて半六の榮華になぞらうていふのであつた。

半六の榮華の端は楠を伐るにある。それと共に衰微の因も發かるべきであつた。更に大なる應報は丹波都の約を守らざることに起つた。半六が楠を伐る時、斧を落して下を通りかゝる丹波都を傷く。半六は謝罪のために、後年その女おさんを、おのが子半七に添はせることを約した。丹波都の傷は大くして、その場に死し、おさんは半六の家に養はれることとなつた。

半六が丹波都の約に背いたのは、伐木の功によつて、家老蛾塚典膳から士分にとり立てられたのをよい事にして、なほ立身を望み、半七を典膳の女園花の婿にしようと考へた爲である。半七は父の不義を憚らず思ひ、またおさんとの約を重んじて諾はなかつた。半六は藥賣笠松平三に賴んでおさんを奪ひ去らせ、主命を以て、無理に半七と園花とを婚させた。けれど半七はなほおさんに對する義によつて園花と枕席を共にしなかつた。馬琴はかやうにして、三勝に溺れたためにお園に冷であつた「女舞衣」の半七の性根を變へたのである。

藥賣平三は義人であつた。おさんを憐んでよく養ひ、後に京の舞々笠屋夏の弟子とした。笠屋三勝と名乘せた。續井家の若殿吉稚は三勝の容色を愛でゝ、之を得ようとする。佞臣今市金八郎、布施蝶九郎は頻りにそれを唆した。實は金八か三勝をおのれの手に入れ、蝶九は用金を懷に入れようための企みであつた。半七

は若殿の放埒を歎き、家老厚倉二郎太夫と謀つて、三勝を殺さうとする。その時は未だ三勝のおさんであることを知らなかつたのである。斯くして半七と三勝は自刄の下に邂逅して共に斃つた。これ皆若殿のために、醜名を厭はず、また父半六をして不義をなさしめぬためである。「女舞衣」の不孝の半七は、馬琴によつてかくも忠孝の士に改められた。

三勝と半七が夫婦となつて幾年か經つ、お通はその間に生れた、さかしく育つた。けれど三人には不幸の目のみが續く。殊に半七が信州追分の宿に重病に罹つた時には、お通に書置の歌をおぼえさせて自殺しようともした。たゞ半三に再會して事なく濟んだのである。義に厚き半三は厚倉二郎太夫から、それとなく三勝の身代として受けた金の一部を追分の宿に半七のために費したが、何とかして調へて、返さうと心がけてゐる。半三は大坂の長町に莨屋といふかもじ屋を營んでゐる。半七と三勝とは共にその業を助ける。厚倉はまた事に托してその金を惠む。しかし、金は主家を追放せられた金八郎蝶九郎によつて奪はれ、お通また彼等の兇刄にかゝらうとしたので、半七はつひに金八郎を殺した。

さてお園花の母敷浪は、園花のために緣切らせようとして三勝を訪ね來て、はしなくもわが生める娘であることを知つた。敷浪はもと丹波郡の妻であつた。夫の貧しさ故に蟻松家の乳母となつたが、後典膳の妻にあげられて園花を生んだのであつた。斯う知つた三勝は、いよいよおのがはかなき運を悲しみ、人殺しの汚名に主家を辱めじと自殺を計る半七と死を共にしようとする。さうして千日寺に行く。しかし、そこには敷浪と半六とがゆくりなくも自害してゐた。共に懺悔後悔のためであつた。わけて半六は金八郎殺しの罪を身に負うて半七の罪に代はらうとするのであつた。厚倉二郎太夫は事の終始をたゞして、義鬘を三勝の頭髻と

し、假毛を半七が髻にかへ、父と母との塚に築籠め、嵐雪信女、月照信士と法號し、赤根半七といふ商人、美濃屋三勝といふ舞々情死したと世に傳へさせることにする。それによつて半七の昔父に對する義を全うすることになつた。やがて半七の忠孝は認められて歸參し、三勝を本室とし、閑花を側室とした。平三また士分となつて、お通を養うて家を嗣がせた。

馬琴の勸懲の筆はこゝにをはりを遂げた。因果の纏綿は、過去の讐敵をして親子とならせ、姉妹とならせ夫婦とならせた。そこに一篇の趣向が存する。それにつけて、三勝の書置がまた新なる興味となつてくる。馬琴の理ぜめの因果譚と讀み合はすべきである。

「さりとは斯樣になり果候事も、其方樣母樣へ對しても不孝なる事、又幼きおつま事行末越方いかならんと思へば、よみ路の障と成候へども、孝を立つれば義理立たず、義理を立つれば道にはづれ、とやせん角と存じ參らせ候へども、よくよく思へばたとへ世にながらへ有とても、夫持つ事もなるまじく候我身永へある故に、人の恨みもあると思ひ、所詮自害なりともと思ひ候得共、とても果つべき命なら、半七殿諸共に行くべきと存じ候へば、未來の程も思はれ候へども、これ皆過去の因果と諦め、我身なき跡にてまさかの時とても賴少く、御身の上、嘸やたよりなくおぼしめし候はんと是のみ、又二つには西も東もわきまへぬおつま事も、よしなき者の胎内へ生れ來て、いかなる憂目に逢ひ申さんと、草蔭まで不便に存じ候、これ皆前の生の敵同士にてあるやらんと御諦め可被下候」

「南柯夢」の挿繪が葛飾北齋の筆であることは、また注意を要する。京傳の豐國に於ける、馬琴の北齋に於ける、文と畫の違ひこそあれ、形質おのづから通ずるものがある。たゞ北齋と馬琴とは性格を異にするも

のゝ、自家の囊に對する信念の厚きに至つては一つである。故に北齋は必ずしも馬琴の畫稿の指示に從はなかつた。いろいろの挿話の傳へられる所以である。「南柯夢」にも之れがあつた。第六卷、半七三勝夜千日寺へはしると題する挿繪に、北齋が狐數疋を添へたのを、馬琴は除けといひ、北齋はそれあつてこそ寂しさを添へると互に爭ひやまず、板元が仲に入つて調停したとの事であつた。

六

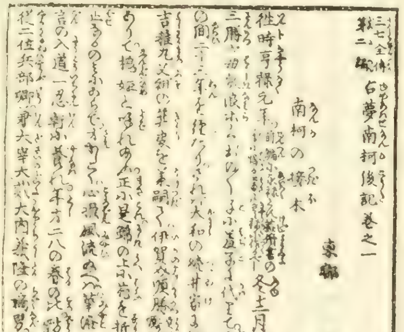
三七全傳 占夢（ゆめあはせ）南柯後記

「三七全傳南柯夢」の續篇、前後二帙、前帙第二篇、四卷、十回、これを五册にわける。後帙第三篇、三卷十一回、これを五册にわける。文化八年の梓行。挿繪は北齋の筆であつた。

「南柯夢」の刊行は文化五年の三月であつたが、時のおくれた爲か、賣出の日に僅二百部賣れただけであつた。板元榎本平吉は色を喪つたが、世評漸く高く、初秋の頃には千二百部に達した。江戸ばかりでなく、京坂にも行はれ、その年の九月には大坂の芝居に上演せられて好評を博した。これ等の景氣が、板元をして續篇の起稿を需めさせたのであつた。馬琴の意はすでに初篇に盡きてゐる。それがまた稿を嗣ぐのである。もとより無理が存する筈であつた。

「南柯夢」は淳于棼の故事を旨趣としたが、これは盧生の故事を趣向の中心とした。青雲の志はありなが

ら、農耕に勞してゐる青年盧生が邯鄲街道の宿屋に憩うて、黄粱の熟する間を假寐する。道士呂翁が枕を與へる。盧生は夢に枕中の世界に入る。美女を娶り、進士の第に登り、高位高官に達した。時に貶せられ、又徴され、また下獄して刑死せんとし、寃晴れて用ゐられた。年八十、まさに病死するに臨んで夢が覺める。黄粱は未熟するに及ばなかつた。呂翁徐に道を説き、盧生旨を體して去る。唐代の小説「枕中記」にいふところはこれであつた。馬琴は盧生を以て半之進とした。半之進は初篇の半七の改名である。三勝、園花を正側の室とし、續井家の家老たる彼は、米谷山の楠の樹精の祟を鎭めるとて、主君順昭が埋めた風流士の寶劍の事によつて貶せられまた刑せられ、はては切腹せんとする幾多の曲折を經るのであつた。


三七全伝南柯後記巻之一
東都　曲亭馬琴編次
南柯の樹木

初篇「南柯夢」は「女舞衣」に基づいて脚色を立てた。續篇また之に對して心中物に取材すべきであつた。それには近松の「長町女腹切」がふさはしかつた。何となればその主人公半七の名は正續二篇を結びあはせるに都合がよいためである。女主人公お花といふのも、園花に緣がなくもなかつた。

お花半七の心中事件の實說は詳にすることが出來ない。元祿十二年八月七日の出來事、お花は井筒屋の抱へ女、半七は道修町の刀屋、女は腹を切り咽喉を突いて死し、男は咽喉を突いて三日目に死んだといふのが唯一の傳へである。近松はそれに長町にあつた女の腹切を擬せて一篇の淨瑠璃を作つた。馬琴はそれに據り、また近松のを改作した半二の「京羽二重娘氣質」と參照した。

「女腹切」の叔母が半七に代つて切腹したのは、三代まで祟るといふ刀の災難であつた。半七の祖父が人を殺して自ら死し、父が悖死したのもそれがためであつた。すなはち馬琴は刀の祟を以て趣向を立てた。米谷山に風流士、風流女の陰陽の太刀を埋むべきを、卜の表を信じないで、風流士のみを樹梢の黄とし、風流女をば山口の大内家に贈つたことが綾井家に事端を起すとした。大内家は前篇の若殿順勝の息女槐姫の傢人さきであつた。槐姫の名の「南柯記」の槐樹に據ることは勿論である。埋められた陽の太刀を順勝が惜んで堀りかへさうとすることから、半之進も死せんとして、わづかに免れ、またその子半作は父に代つて死するなどの禍も生じた。陽の太刀は陰の太刀を追つて山口に飛び去る。半之進の子半七にお花と共に日太刀の行方を尋ねる。近松の戀の道行は、不義の名の下に、忠孝の實を贈するさすらひの旅に改められる。太刀の祟は陶晴賢の身に及んだ。彼は陰の太刀を得たので、異志を起して、主君を弑した。槐姫の御身を氣づかふ半七ゝ等、また前からの附人お通の活躍となる。

「京羽二重娘氣質」の刀屋道壽は半七の舅であつたが、質屋傳右衞門と喋し合はせて半七を追はうとする。傳右はまた主家のために正宗をとりかへさうとする新平を虐む。新平はおのが女房を身賣さへする苦心の甲斐なく、たゞ辱しめをうけるに堪へかねて傳右を殺した。馬琴はその道壽を國樹とし、傳右を谷助とし

て、半七夫婦を苦しめることとした。
お花はまた槐姫の身代となつて忠を果した。これは「女腹切」の叔母の趣向であり、「娘氣質」のお柳お花の趣向でもあつた。この種多くして一々比較すべきでない。また園花と嫁の夏山が尼となつて拈華、微笑と號したが、それが顔を火で傷けるのは、了然尼が美貌の故もて、泰雲寺の開山白翁に法を求めたがゆるされないのを歎き、火熨もて面皮を焦したといふ故事に據るのであつた。二尼の詠また了然尼の歌「いける世にすてゝやく身やうからまし終の薪とおもはざりせば」を範とするのであつた。篇中この種のものが少なからず用ゐられてゐる。一々示さるべきでなかつた。

馬琴の趣向は二つの淨瑠璃から箇々の事件を採つて、これを一條に貫くことであつた。順勝が吉稚であつた頃、今市善八郎と稱して鎌倉笠屋小夏を幸して一子を生ませる。全介がそれである。事の始終は半之進のみ知つて全介は知らず、その周圍も知らなかつた。故に全介は全八郎のために父の讎半之進を討たうとする。全介の母は刀屋同樹に再嫁したので、全介は孫に當る譯であるが、同樹が由口に



江戸名所圖會挿繪

出奔するに當つて全介を棄てる。その乳母晩稻がひきとつて養育する。晩稻は半之進の母の妹であつた。全介が零落して古鐵買をしてゐる時、厚倉三郎太夫の子作人も古鐵買となつてゐて、それとなく守護してゐる。最後に全介は半之進によつて續井家の落胤なることを知り、擁せられて陶晴賢征討の將軍となる。一篇の因緣大方これであつた。

馬琴の叙述は半六敗浪二十三回忌の法會にはじまる。養母晩稻の病をみまもる全介が貧しき故に、半之進の施米を買つた。それが話のきつかけとなつて半之進が父の讎であることを聽いて、復讎の志を懷く運びになる。馬琴はその法會のくだりに、三勝半七の碑に就いてしるしてゐる。享祿元年十二月七日、嵐雪月照信士、月雪妙霜信女、一蓮托生、俗名信州五條新町赤根半七、美濃屋三勝と彫著けられてゐるとある。これは前篇の末卷に附記した誤謬をそれとなく訂したのであつた。

馬琴は享和二年の夏京坂に遊んだ。七月下旬から八月初旬にかけて大坂に滯在した。その間に三勝半七の墳墓を尋ねた。馬琴を案内した者は、千日寺の眞の墳墓を知らないで、法善寺境内のあらぬものを教へた。馬琴はかねて知る嵐雪月照の戒名のないのを怪しみながら、二人の靈を弔つた。「羇旅漫錄」にこの事を記し、また「蓑笠雨談」にも載せ、更に「南柯夢」卷末に錄したのである。しかし、その誤謬はいち早く浪花人によつて指摘せられたのであらう。さうして馬琴は法善寺境内を寫生する氣持で、北齋をしてそこにある有名な南無三寶正三の墓をまで描かせたことを悔いたであらう。馬琴の訂正して享祿元年といつたのを元祿八年に改め、三勝の肩に大坂長町住と置かせれば、千日寺の正しいものとなるのであつた。半之進が弔ひの條に「冬枯けらし草の原、なき名若むす菜參り、覺めずや今も夢によく似たる夢かな夢の迹」とあるのは、嵐雪

の「玄峰集」のに據つたのである。その文にいふ、

あかね屋みの居と聞えたるなき名の流れ止まる所は千日寺の露ときえかへりぬ。盆の比は夜毎に群集し、逆縁弔ふ人あまた侍りけり。戒名嵐雪月照と石の塔婆に彫入たり。あるまじきことならねど、思ひかけず思ひ侍りければ、

夢によく似たる夢かな墓參　嵐雪

七

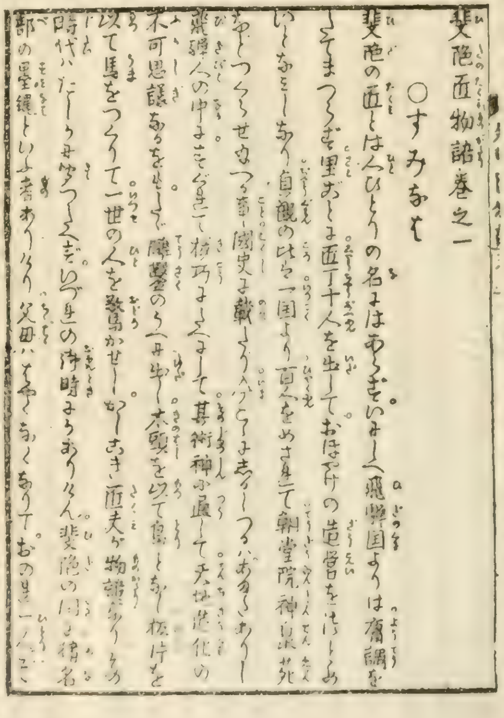
飛彈匠物語

六樹園飯盛の作、北齋の畫。六卷、十四回、六册。文化五年の刊行である。

六樹園飯盛の六樹園は、舊の六本木に宿屋を營んでゐたための號である。飯盛またそれに因む狂名であつた。故に一に宿屋飯盛といひ、一に逆旅主人とも號した。通稱を五郎兵衞といふところから、五老山人の別號をも有してゐる。畫家石川豐信の子であつて本名を雅望といつた。雅望の名によつて知られた著述に「源註餘滴」「雅言集覽」の如き國語學上のすぐれたのがある。飯盛としての狂歌集、狂文集、また逆旅主人、六樹園主人としての支那小說の飜譯、五老山人としての狂詩集など少からず存してゐる。雅望また戲作に筆を着けた。黃表紙にも名作があるが、とりわけて讀本に聞えたのがある。「近江縣物語」「飛彈匠物語」「天羽衣」

などがそれであつた。

六樹園はまた「都の手ぶり」「吉原十二時」などをあらはした。目睹する江戸の現相を寫生しながら、文辭をばわざと古代のものを以てするのであつた。とゝに彼の國學の遺語を見ることが出來、またさうするところから生れる滑稽味も掬することが出來、その他いろいろと考ふべき性質を有してゐる。「近江縣」「飛彈匠」など、いづれもその傾向を讀本に寫したものであつた。たゞ一種の讀物としては、やゝ無理であつた、馬琴の所謂眞物にあらざるものに屬する。しかし、文化の時勢はまたこの種のものを排除しなかつた。たとへば、方眞顔の「月宵鷹物語」


斐陀匠物語巻之一

○すみなは

斐陀の匠とは人ひとりの名にはあらずといふよし。飛騨国よりは庸調を
たてまつらず里ごとに匠丁十人を出して、おほやけの造営につかふ
いとなみしあり。貞観の比ほひ一国より百人をめさまして朝堂院神泉苑
をもつくらせたまふ事、国史に載せられたり。さてつくるはあやしく
飛騨人の中にもすぐれし技巧にたくみして其術神に通じて天地造化の
不可思議あるをもたして、雕鏤のうへにあらはし、木頭を以て鳥となし、板片をと
以て馬をつくりて一世の人を驚かせし。むかし匠夫が物語なり。その
時代はたしかならず。いづれの御時にか、斐陀の国に猪名
部の墨縄といふ者ありけり。父母はやくなくなりて、おのれ一人

の如きは、そのあとを追はうとしたものであつた。

「飛彈匠物語」はまた「斐陀匠物語」とも書いた。いづれにせよ、名は飛彈匠であるが、實は左甚五郎物語といふのがふさはしい程に、左甚五郎の俗傳に據つてゐる。しかも、之れを飛彈匠に擬合はせるのが、例の擬古の一手段である。「今昔物語」に「百濟川成飛彈工挑語」といふ一章がある。

「……而るに其の比飛彈の工といふ工有けり。都遷の時の工也。世に並无き者也。武樂院は其の工の起たれば微妙なるべし。而る間此の工彼の川成とたゞ各其の道を挑にける。飛彈の工川成に云く、我が家に一間四面の堂をなむ起たる、御して見給へ、亦壁に繪など畫て得させ給へとなむ思ふと互に挑み乍ら、中吉くなむ戯れければ、此く云ふ事也とて、川也飛彈の工が家に行ぬ。行て見れば實に可咲氣なる小き堂有り、四面に戸皆開たり。飛彈の工彼の堂に入て其の内見給へと云へば、川成延に上て南の戸より入らむと爲るに、其の戸はたと閉づ。驚て廻て西の戸より入る、亦其の戸はたと閉ぬ。亦南の戸は開ぬ。然れば北の戸より入るには其の戸は閉ぢ西の戸は開ぬ。亦東の門より入るに其の戸は閉て北の戸は開ぬ。如此廻々る數度入らむと爲るに閉開つゝ、入る事を不得ず。佗て延より得下ぬ。其の時に飛彈の工咲ふ事无限り」。川成妬と思て返ぬ。其の後日來を經て、川成飛彈の工が許に云ひ遣る樣、わが家に御座せ、見せ可奉物なむ有と、飛彈の工定めて我を謀らむずるなめりと思て不行かぬを、度々懃に呼へば、工川成が家に行き、此の來れる由を云ひ入れたるに、此方に入給へと令云む。云に隨て、廊の有る遣戸を引開たれば、内に大きなる人の黑み脹れたる臥せり。臭き事鼻に入る樣也、不思懸に此る物を見たれば音を放て愕て去返る。川成内に居て此の音を聞て咲ふ事无限り。飛彈工怖しと思て土に立てるに、川成其の遣戸より顏を差出し、耶己れ此く有ける

は只来れと云ければ、恐々寄つて見れば障紙の有るに早う其の死人の形を書たる也けり。常に被い謀たるが妬きに依て、此くしたる也けり云々」

六樹園はこの筋を篇中にとり入れた、なほ川成を百済人とした「此百済人を今昔物語に百済川成と記せるは、傳の異なる物なり。又飛彈の匠とのみしるして、姓名を記さゞるはいかなる故にか、いぶかし」といふのは例の史外に史傳をものする讀本者流の常であつた。その飛彈工には猪名部墨繩の名をおほせてゐたのである。

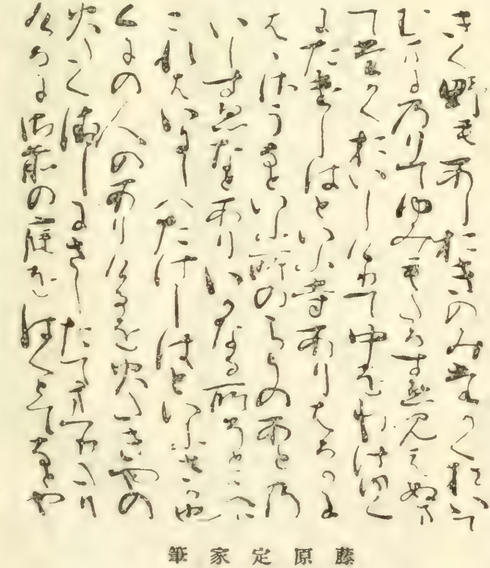
六樹園は墨繩を以て一篇人物の中の摑役とした。武藏の國の竹芝山人は、時の帝の姫宮と夫婦となるべき宿縁あるに拘はらず、障のみ多い、それを墨繩が匠の業の働きによつてやうやうにとり持つのであつた。六樹園のこの作意はすべて「更科日記」に見える竹芝寺の傳說に基づいてゐる。「更科日記」は菅原孝標女の筆に成るのであるが、その人は後一條天皇の寛仁四年に上總から京に上る途次、蘆荻のみ高く茂る中をわけ行いて竹芝寺の趾に立つた。物語の世界に限りなき憧憬を寄する當年十三歳の夢みる女性は、いかになつかしく、その由緒を聽いたのであらう。日記には詳にかいしるしてゐる。六樹園はまた據る所を明にするためにその一節を卷首に載せてゐる。さればこゝにいふほどの事もなけれど、ものゝ順序として片端をしるせば斯うであつた。

武藏の竹芝の若き男が、火たき屋の火たく衛士として大内に仕へてゐた。或時にから獨言をした。「わが國に七つ三つ作り据ゑたる酒壺にさし渡したる、ひたえの瓢の南風吹けば北に靡き、北風吹けば南に靡き、西吹けば東に靡き、東吹けば西に靡くを見て、かくてあるよ」と。帝の姫宮が聞召して、ゆかしさの餘り、

その狐を見にわれを率て行けと仰せられる。衛士は止むなく仰せに從つた。御迎へて勅使が立つたものゝ、姫は歸りなさらぬ。つひに姫の世にいますほどは、その男に武藏の國を預られることとなつた。竹芝寺とは姫の御館の趾を寺としたのである。

六樹園はその衛士を以て竹芝山人とした。館の趾を寺とする爲に他の一條の筋合をとり入れた。それは山人を戀する少女むらさきのあはれな物語である。山人の家とむらさきの家とは宿怨あつて、緣を結ぶべくもなかつた。むらさきは悲歎の極に死する、父は悔いて僧となる、斯らして竹芝寺はその父によつて建てられるのであつた。かゝる趣向はしばしば歌舞伎、淨瑠璃に於て行はるゝものであり、六樹園またそれに倣ふのであつた、また怪しむべきでない、彼にはすでに「ひらがな盛衰記」の一節を古物語に移した「梅枝物語」も存してゐる。

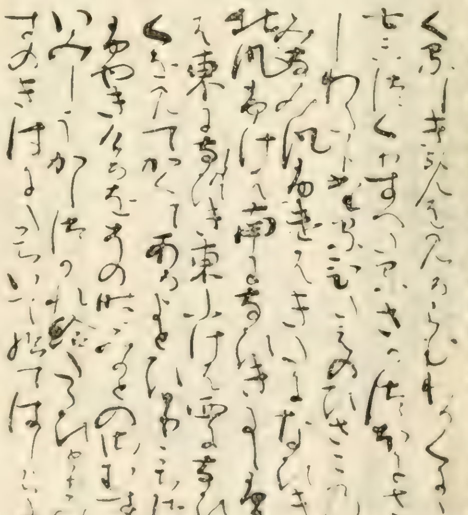
むらさきの名が、武藏のゆかりで附けられたやうに、山人と姫宮のえにしは前世に於て決してゐた、すな



藤原定家筆

はち二人は謫仙であつて、二人の契は前世の仙界で定められたものであるといふ六樹園の作意は、結局、瓢が仙人を聯想させる物であるところから起つた。姫君が瓢をゆかしがつて、武藏に往かせられる、その事すでに奇、あの物語の妙所はその突爾なる點にある。しかし、讀本はそれ等に因縁つけるのが常である。いはゞ機態めく合理化がいつも心掛けられるところである。「飛彈匠」の趣向はそこにあつた。

六樹園をしてさら計らせたのは李笠翁の「十種曲」中の「蜃中樓傳奇」が存在するためであつた。彼はまた同じ十種曲の中から「巧團圓傳奇」をとつて、「近江縣物語」を飜案した。今おなじ手法を以て更に飜案を試みたのである。たゞし、「近江縣」には原作の面影をとゞめること多く、「飛彈匠」には殆ど表に現はれない程の自由があつた。それには「更科日記」の記事が介在して大に筋を立てゝゐるからである。作者またそれをのみ脊骨に終し、また篇中に「今昔物語」をほのめかしながら、つひに一語の「蜃中樓傳奇」に及ぶものがなかつた。讀



「更科日記」

本の作者往々にして讀者を欺瞞する、これも亦一例である。

清朝の喜劇作者として最も大をなす李笠翁は唐代の小說「柳毅傳」によつて「蜃中樓傳奇」を作り成した。まだ定る妻がない柳士肩と張伯騰は、除夜の例である辻占を聽きに出かけた。ふと歌の聲を聞く。歌の意は錦鱗兒一對、風流に對して緣を結ぶべきを、一人の狼心の人に邪魔せられ、銀の鍋に煮られるやうなはめにはなるも、結句湖と海との緣を離れずといふのであつた。二人はやがてその占に從つて緣を求めるとて、士肩は海上に伯騰は湖州にゆく。

士肩は海上に蜃氣樓を見、それに架せる長橋を渡つて二人の美女に逢つて、その一人と契り、また伯騰と他の一人との仲をも計つた。そのしるしとて、鮫綃帕と晶佩とを受けて歸る。二女は東海の青龍王の女舜華と黃龍王の女瓊蓮とであつた。蜃氣樓は叔父の赤龍王が、東海の景色を眺めたいといふ二人の請を容れて、魚蝦蟹鼈に命じて作らせたもの、橋は東華上仙の仙術を以て架したのであつた。士肩と舜華、伯騰と瓊蓮の配はこゝに成つたが、これはすでに宿緣の存することとであつた。

四人は共に仙人であつたが、させる罪あつて人間世界に謫せられたのである。李笠翁は、第五齣、結蜃の場に於て、東華上仙をしてこれを說明させる。仙人の白は斯らであつた。今日しも二人の女は蜃樓から眺めてゐる。柳生は東のほとりを逍遙してはゐる。さりながら、仙凡虛實のけぢめがあるばかりか、海水滄波の隔がある、もし神仙のはからひなくば、あの者どもは語らふ術もなからう。いでいで、これからひき合はして與れうぞ。さて仙人は手にせる杖を擲つ。それが忽ち一條の長橋と變じてて、蜃中樓に架する。士肩の渡つたのはこれであつた。



「蜃中樓傳奇」出像

六樹園は「飛彈匠物語」に於て、東華上仙を參仙とした。匠の道に因ある仙人であるからである。また鮫綃帽、晶佩を瓢とした。さういふ違ひはあるものゝ、「蓬萊の山」の章は、「結髪」をさながらにうつしたのであつた。さうして、その後墨縄は東華上仙の役どころを勤めるのであつた。「蓬萊の山」にはすでに架橋の幻術を、墨縄が匠の妙技でたすことになつてゐる。

赤龍王は心剛なる者であつた。父親も喜ばず、娘舜華はもとよりうけひかぬのに拘はらず、無理から涇河龍王の息のもとに嫁かせてしまつた。舜華はやむなく涇河に行つたけれど、飽くまで士肩との約を守つてゐる。涇河龍王は怒つて涇河の地に牧羊のうき業をさせることにした。士肩は舜華に邂逅する。華が教へて不思議な術によつて、伯騰は華の手紙を持して浪間遠く洞庭の龍宮に至つた。手紙にはうさつらさの數々が書き陳ねられてあつた。青龍王は歎く、赤龍王は怒る。赤龍王は直に涇河龍王を攻め、華をとり戻して歸つた。

しかし、二對の婚姻はまだ成立されなかつた。赤龍王がなほ邪魔立をするのであつた。東華上仙は玉虚天帝に奏して、御風扇、竭海杓を得て、これを伯騰に授ける。扇と杓のあやしい力は海水を熱し、魚介を爛死させた。赤龍王は之を鬪はうとしたが、上仙の加擔に敵することが出來なかつた。つひに龍王等は二人の娘を士肩伯騰のもとに從らねばならなかつた。さうして宿縁を全うする。一に上仙の恵によるのであつた。

六樹園は士肩と伯騰を墨縄と弟子松光の關係にうつした。またその二人を一人の山人の身にも變へた。舜華と瓊蓮を、むらさきと嫄宮ともした。華と士肩との仲を割く赤龍王を、山人とむらさきの間に楯をつくむらさきの父とした。六樹園の翻案ぶりは大方斯うであつた。しかし、急所急所は逸してゐなかつた。牧羊のつらさは衛士勤の苦しさ、牧羊を訴ふる書は衛士のひとり言、洞庭の波間を歩み行くあやしき業は隅田の獨

行の舟であつた。その他一々指摘せられる。

この讀本は翌年の正月に大坂に於て操りにかけられた。外題はそのまゝ、たゞ「蓬莱山傀儡、竹芝坂書置」といふ角書を添へてゐる。また讀本にない左甚五郎役を設けてゐる。六樹園が左甚五郎を轉用したために、またもとに遡らざるを得なかつたのである。

飛騨匠が淨瑠璃の主役をなすのは、こゝにはじまつたのではない。「ひだのたくみ」と題せる六段本と五段本があつた。一は萬治板、一は元祿板である。これは飛騨匠の作の佛像の奇異を傳へるのを旨とした。六樹園の作は、それ等と別に交渉を有してゐなかつたとやうに記憶してゐる。今二本共に手もとになく、しかと斷りかねることを遺憾とする。

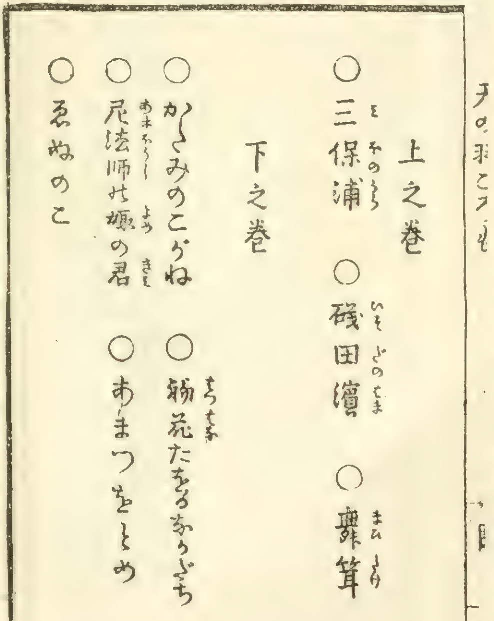
八

天羽衣

六樹園の作、江南司馬僊畫。三卷、八回。中本形の體裁である。讀本といへば大方半紙本を常とするが、まゝ此種のものが存する。文化五年の刊行である。

門弟牛を擬恒成の強ひて師に迫つて著作させたやうに恒成の跋文にも見えるのは例の假托であらう。六樹園にあつては筆に於てこそ「近江縣」「飛騨匠」に劣るものゝ、相應得意の作であつたらう。

この作が謡曲「羽衣」に據ることはいふまでもない。しかし、作者はなほ「羽衣」の據るところを參照した。故に「元々集」「袖中抄」「童蒙抄」を引用する短い考證を序文として載せてゐる。また東遊の駿河舞の歌をも卷首に錄してゐる。讀本が多くも少くも和漢の典籍を涉獵して題材を得るのがならはしであるが、文體の古雅なる點から、普通の讀本と區別せられる六樹園の作にあつては、もとよりかゝる用意のあるべき筈であつた。



「羽衣」の漁夫は伯良である。その名の基づくところは明でないが、六樹園はそれを白良として黒良に對させた。二人は同じ十月の同じ日に生れた者であつた。十月は良月、晝生れたのを白、夜生れたのを黒と分つて白良黒良の名を附し、白

良を兄分とし、黒良を弟分とした。これまた「羽衣」に「白衣黒衣の天人の數を三五に分て一月夜々の天乙女云々」とあるによる。しかも、黒白はまたその名を負ふ二人の性質の善惡の象徴でもあつた。白良の父三保の長者、黒良の父磯田の長者は共に親しかつた。黒良の妹小松を白良の妻とするやうに生れ落つる間もなく約定し、聘禮の金をも贈つた。その後三保の長者は死した、その人慈悲の行多くて漸く產を失つてゐた。磯田長者はその貧しきを厭ひ、また白良が痾瘠に罹つてもとの美しい面影もないのを憎み、三保長者の舊恩を忘れ、かねての約を棄てゝ、赤太の長者に娘を嫁かせようとする。黒良は黒良で白良が有度の濱で天女から預つた羽衣を奪ひ去る。しかし、小松のみは斷じて

天羽衣上

○みほのうら

安閑帝の御時しや傳へけるまで。其時代を知りがたし。昔駿河の國有度郡に三保の長者といふ豪民ありけり。同郡に礒田乃長者といふ者あり。相ともに常ならざる富める家にて。田畠數多もちて。召仕ふもの多くありて。網ひくせ。塩やかせなどしく其[illegible]國々へ出して商ひなす。此礒田三保の二人の長者かたみにふ親くかたらひて。うるはしき交りなりけり。常に圍碁を好みて晝夜をいとはず二人さしむかひて打楽み興じけり。かくして

父の命に從はずに、義を以て白良を思つてゐた。

信太の長者から磯田に結婚の聘物をおくる前日、姥の尾が持參した舞革のために事起つて、その儀も叶はなかつた。これは小松の侍女雲井のなす業であつた。雲井は天女の變身である。天女は白良を助けて小松との緣を結ばせようとするのであつた。尼の舞革は、作者みづからも作中にしるしてゐるやうに「今昔物語」に據つたのであつた。

京の木伐人どもが北山に行つて、道に迷つた。四五人の尼が舞ひかなでつゝ來る。怪んで聞けば、佛に奉る花を摘みに相伴うて來たが、道には迷ふ、食物はなし、そこにあつた茸を燒いて食べた、味はよかつたが、それから斯う舞ひつゞけると答へる。木伐人も物欲しかつた、餓えるよりはと尼の殘したのを食べた。木伐人もやがて舞ひ出した。皆一緒に舞ひつゞけた。これが「今昔」の「尼共入レ山食レ茸舞語」である。

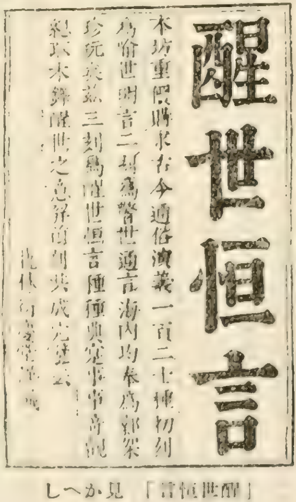
磯田の家の人々は尼諸共に舞ふ。黑良はさきに奪ひ掠めた羽衣をとり出して着て舞ふ。それが雲井の手から白良に戾つてくる。「羽衣」の約束の舞はかゝる趣向によつて果された。

羽衣を得た後の白良には幸運が重なる。案外にも父の遺した黃金を得る。また雲井の導きで、小松が來る。疱瘡のあともなくなつて世になき美男となつた。雲井は三保の陰德をあはれみて禍を轉じて福とし、醜を以て美にかへつといひきかせて、天女の姿して、羽衣を取つて天に歸る。

磯田長者は、思ひはからぬ罪に坐して獄に入り、今更に三保長者に對する背信を悔い、出獄して後出家する。今は貧しくなつた黑良は白良に保護せられることとなつた。六樹園が序に「こゝにしるせる物語は、駿河國有度の濱に住める翁の、昔よりの傳ごととて語り出たるを、さながら筆にうつせるなり。眞僞は知らざ

れど、勸懲のはしにも成なましとおもふも、例の古代なる老婆心なるべし」といふ勸懲はこゝにをはつた。勸懲は或は序にいふが如きものであらう。しかし翁の物語云々は例の假托であつた。「巧團圓傳奇」を飜案しながら、なほ近江の翁が語れる筋とて「近江縣物語」と題する六樹園であつた。更にまた題簽を萬葉集の歌、「青みつらよさみの原に人もあはぬかも石走る近江縣の物語せむ」に附會するほどの六樹園であつた。まづ彼の欺瞞を警戒すべきである。

寛政二年に六樹園は「通俗醒世恒言」を出板した。「醒世恒言」は明代の短篇小説集である。書肆が購ひ求めた通俗演義百二十種を三に分ちて「喩世明言」「警世通言」と共に刊行した四十篇を収めてゐる。六樹園はその中から四篇を抜いて飜譯した。「小水灣天狐貽書」「呉衙内鄰舟赴約」「一文錢小隙造奇寃」「施潤澤灘闕遇友」これである。彼はいふ、「醒世恒言」の本はその板多く磨滅してゐる。故にその中からほゞ讀み得るものをとり、また岡白駒がさきに「小說奇言」「小說精言」に載せたものを省いたと。


醒世恒言
本坊重價購求古今通俗演義一百二十種初刻爲喩世明言二刻爲警世通言海內均奉爲鄴架珍玩矣茲三刻爲醒世恒言種種典實事事奇觀總取木鐸醒世之意并前刻共成完璧云

「醒世恒言」見かへし

さういふ關係を有する「醒世恒言」中のものを彼は飜案し、敷衍して、しかも、その知らぬふりをしてゐるのであつた。その一篇題して「兩縣令競義婚孤女」といふ。まさに「恒言」の卷首にある。これはまた「今古奇觀」中にも存してゐる。「奇觀」は前にいふ「通言」「喩言」これに「恒言」を合はせたものゝ中から選んだ

のである。同じものが彼と此にあるも怪むべきでなかつた。

「兩縣令競義婚孤女」は江州の知縣石璧の女月香の事をしるしてゐる。月香は父の歿後、賈昌とて父の恩顧を受けた者に助けられたが、その妻によつて婢に賣られる。縣令鍾離はその素性を知り、義を以てこれが婚を計り、おのが女の婚期をも延ばした。鍾離の女を長男のために迎へようとする縣令高大尹はまた義を以て月香を次男のために迎へるといふ筋合である。原作者はこれ等の義人に對照させるとて、まづ冒頭に一話を置いた。六樹園が飜案したぬはそれであつた。話は極めて短く、原書では二丁に足らない。こゝに譯して六樹園の飜案ぶりを見るよすがとする。

「さてもお話し申す一條、この程の事、浙江衢州府に、王奉と申す者、その兄の王春といふ者があつた。兄弟は共々一人の娘を持つてゐた。王春のは瓊英、王奉のは瓊眞。その瓊英はある富豪の潘百萬の子潘華といひなづけ、瓊眞は蕭別駕の子蕭雅といひなづけの仲である。ずつと幼い時からの約束事であつた。瓊英が十歳の時に母親が亡くなり、ひきつゞいて父親も死ぬ。その王春が臨終の折から、娘瓊英の身の上を弟に頼んだ。「わしには世嗣がなく、たゞこの娘があるばかりぢや。おぬしはこれを守り立てゝ呉れまいか。さうして一人前になつたら、早く潘の家に嫁入らせて貰ひたい。娘の遣れ形見の衣所調度を殘らず持たせてやるやう、また向うから結納として寄した田畑を化粧代とするやう。よろしくお願ひ致しますぞ。」頼み終るとそのまゝ息は絶えたのである。葬儀萬端は濟む、王奉は姪の瓊英をひきとつて娘瓊眞と一緒におくこととした。

やがて年のはじめの日、年頭の挨拶に潘華と蕭雅とがうち合はせた譯でもなかつたが、王奉の家でおち合つた。一體潘華は生れつき色白で唇も眞赤、女にしても見まほしいほどの美しさ、そこで、世間では玉若（たまわか）様

と稱んでゐる。それにひきかへ、蕭雅は顔一面のあばた、くぼみ眼の、反齒、飛天夜叉そつくりといふ有樣であつた。美しいのと醜いのが、並んでゐれば、器量よしは、いやましに玉の光をまし、不器量なのはなほ更に泥の穢が目に立つ。かてゝ加へて、潘華の着物はきらびやかであつた。金持を鼻に掛けて贅を見せる家の常であつた。ところが蕭雅の家はもともとまじめ一方、服裝などはてんで構ひはしなかつた。佛は金裝、人は衣裝、さても世間の眼の低さよ、そこには皮相があるが、骨相はお存じなしぢやと目比いひつゞけてゐる家であつた。斯ういふ譯ゆゑ、王奉の家の者は皆が皆、潘安の生れかはりかと思はれる潘の若樣をもて囃すと共に、唇をかへし口を尖せて、ひそひそ飛天夜叉殿の不器量に難癖をつけてゐた。王奉もとよりよい氣持でゐなかつた。

程なく、蕭別駕は任地で亡くなつた。蕭雅は早速に父の喪にいそぎ、柩に隨つて歸つて來た。蕭の家は代々の家柄ではあつたが、家には財產とてはない。別駕が死んでからは、なほ更目ましに衰へてゆく。ところが潘百萬は成金のこととて、ずんずと繁昌する。王奉はふと良からぬ心を起した。蕭の家は貧乏のどん底、それに婿殿は不器量者、潘の家は金持ではあり、婿殿は天晴の器量よし、これや瓊英の瓊英をそつくりよりかへてやらう。さうしたとて誰知るものか。一體生みの娘を貧乏人にやつて、みぢめな思ひをさせるなどといふ事があつてたまるか、と決心した。愈々嫁入の時が來た。娘瓊眞を姪といふ事にして潘に遣はし、兄が遺した衣服も田畑も持つてゆかせた。さて姪の瓊英を娘といふことにして飛天夜叉殿の妻にした。この嫁入支度は一方ならず手薄であつた。瓊英は叔父の世話になつてゐるだけに、腹は立てど、口に出していはうとしなかつた。

ところがその後意外な事が起つた。かの潘華は家の富めるを自慢にして、學問を習はず、稼業にも精を出さず、たゞ一途に賭事に夢中である。父親はいろいろと教訓しても、甲斐のないのを氣に病んで亡くなる。それをよい事にして益々憚らず、無頼の者共と遊び三昧、十年になるかならずに、何一つ殘らぬやうにしてしまつた。舅は幾度となく、自分は見てやつたが、結局は燒石に水のたとひ、物にならなかつた。今日が日にも窮じた果に、潘華は舅の前を體よくつくらつて、女房共々、他所の家の奴婢とならうとする。王本は聞き知つて娘をひき戻し、婿を寄せつけないことにする。潘華は他郷に放浪する、その成行は誰も知るものはなかつた。

蕭雅は一心不亂に學問に努めた。やがて文官試驗にも及第した、尚書の地位を占めるた。境遇もまた一品た人に封ぜられた。詩あり、これが證をなす。

日前の貧富は必定のものならず、
久しい後の窮達は、はかり知られず、
とりかへて、一時をたばかららとも、
神は見とほし、わたくしぞなき。

さても皆様方、何故にわたくしがこの王春女を嫁がす一條の話をするかと申せば、まづ斯うである。世間の衆はとかく眼さきばかりを考へて後の事は構はず、一途に人を損ねて、自分を都合よくしようとする。それはとんだ事である、人には思はくの勘定が多いが、天はたゞ一勘定だけ。人間共がもう事はするすると運ばれる筈と胸算用はしても、どつこい天はさうは計らつては下さらぬ。まづ目比の行の高い古今句勝一御座る

まいか。

六樹園はこの原話を骨子とした。それに「羽衣」や、「今昔物語」などを配して、相應の長さをなした。また「今縣令競義婚孤女」の本話の筋をも加へた。石月香の父璧は官吏として清廉であつた。民はその治を喜んだ。官倉火はあつて官糧を焼く。清廉なるために賠償の資に事缺いで、璧は悖死せざるを得なかつたのである。しかし、璧の陰徳は賈昌を動かし、縣令鍾離を動かして、つひに月香をして良縁を得させたのである。三保の長者が慈悲の行のために家を貧に導いたといふのは、石璧から假り來つたのであつた。

君諱雅望、字子相、姓石川氏、號六樹園、又號五老齋、名輒衛、江戸人、君天質聰敏才藻優麗、學莫所不窺、尤覃思和歌、格調俊邁、詞彩榮爛、一時專門名家皆出於其下風、四方貴游乞業者、不可勝數、海内推之爲一世宗盟焉、其所著數十種、正梓布世、如源註餘滴、雅言集覽、所尤致思也、足以觀其洽聞博覽之學、筆鋒超倫之文矣、文政庚寅閏三月廿四日、罹病而卒、享年七十八、葬淺草正覺寺子院哲相院、法諡曰六樹園院臺譽五老居士、京師縉紳之家、常覽君之著書、感歎不措、授以宗匠之號、叙之法眼、沒之後、宣文始到于東都、讀者憾焉、嗣子清澄謹乞余文、勒石建之墓門、余與君相知者久矣、義不可辭也、系以銘、

銘曰、

于嗟乎死而朽者形體、不可磨滅者名、一世執文騷之柄、
千載享法眼之榮、淺草山中靜地靜、以固其學

孝子石川清澄謹建

文政十二年庚寅三月二十四日

吉田勇卿謹拜書

櫻姬全傳

曙草紙

東都　醒醒齋京傳著

仝　陽齋豐國畫

櫻姫全傳 曙草帋

（さくらひめぜんでん あけぼのさうし）

文溪堂梓

全部五巻



序

骨閲内然因果二字、包羅一切衆生、

萬状億態、不可僂指焉。姑徴諸男女之際、夫唱婦隨、琴瑟相和、終始恩愛、此是好因緣。福果必衍後昆矣。乃至夫負婦妬、嗜欲互肆終始反目。此是孽因緣。禍果或及骨肉矣。吁一念所萌、爲福爲禍、如影隨形。可不愼哉。如醒々子所著櫻姫全傳、寔是現在業鏡、照出多少可憫可悲之孽因緣。若夫繫此孽因緣者、倘執此業鏡敬省反照、勉修善根、勵除惡念、則忽出如許苦海、

而速得一場福地歟。此編其可苟且看過哉。醒々子索余題。因錄所感而復之。

文化乙丑晩秋半達道人書
於十才精舎

[redacted]

例言

○此書、何人の作なることを詳にせず。友人拜田泥牛子、市に購得たる所なり。曾て木偶に舞はしめ歌舞妓に作りて、普く兒女の耳目にふれたる美女櫻姫一期盛衰の事を記し、正史・實錄は更なり、野史、稗說といへどもいまだ載せざる奇談なり。狂簡といへども、往々實を兼ね、因果輪廻、無常轉變の理を示し、遲速はありといへども、善惡到頭つひに報ある事を錄せり。よし虛談にもあれ、兒女勸懲の一端ともなるべき所聊か見ゆれば、書肆の需に應じ、補綴して與へぬ。

○原本のかきざま俗文といへども、上代の言を以て記したれば、頗る雅なり。されど其儘に寫せば、俗耳に遠きを厭ひ、今更めて卑言を用ひ、且一向兒女の聽きを喜ばしめんと欲して、形容潤色に過ぎたる言をくはへたれば、記事の體を失ふのみか、自然雜劇本の文體を脫れず、西鶴・門左衛門自笑・其磧等が糟粕を嘗むるに似たり。殊更魯魚の謬、假名の差さへあらためざれば、讀者の譏に當らんことぞ多かるべき。

○繪をくはふるは、兒女の目を慰め、且文のかき得がたき趣を示さんとなり。これも時代の古き樣を考へて畫くべき事なれども、無下なる人は風俗に今古の差あるを辨へざれば、烏帽子著たる繪人、

袴著たる馬士などを畫かば、かへりて怪しみなん。依りてすべての物、目馴れたる様に畫かしむ。故に畫中、居室・人品より衣服・器物に至り、古なき物をおほく畫きて、時代と繪と大に差へり。これ畫者の意にあらずといへども、唯通俗を專とし、止むことを得ざるの業なり。

○目馴れたる様を畫くうちにも、梓硯は建保職人歌合の圖を摸し、常照坊の竹寃は法然上人行狀繪卷物の圖を摸せるたぐひ間ありて、古今混雜せり。繪難坊の誚を若何せむ。

○案ずるにといへるより下の文は、予が考なり。本文といへども、原本の大路を過るのみ。小徑の如きは、總て予が補文なり。此書を曙草紙と名づくるは、櫻姫の傳奇なれば、藏玉抄に櫻の異名を曙草といふに思ひよせて、しかはいふなりけり。

文化二年乙丑秋九月

醒々齋主人識

京傳

引用書目

○事林廣記
○丹波志
○大系圖
○異本源平盛衰記
○義經記
○東鑑
○山州名跡志
○長門本平家物語
○姓氏錄
○徒然草
○說文
○玉造小町
○宇治拾遺
○文德實錄
○三教指歸
○九相詩
○法然上人行狀繪詞
○蘆分船 難波名所記
○二人比丘尼 石平道人著
○明月記
○唐陳玄祐離魂記
○正燈錄
○無門關
○剪燈新話
○豔異編
○夏子益奇疾方
○萬病回春
○奈良晒
○南都名所記
○大和案內記

以上三十部

櫻姫全傳曙草紙　目録

櫻姫全傳曙草紙巻之一

江戸 山東京傳補綴

第一 彌陀二郎網して佛像を得る

事林廣記にいはく、「善に善報あり、惡に惡報あり、善惡報なきは、時節いまだ到らざるなり。深く耕し淺く種ゑ尚天災あり。己を利し人を損ず、豈果報なからんや。麻を種ゑて麻を得、豆を種ゑて豆を得る、天網恢々として疎にして漏さず、善惡若し報なくんば、乾坤も必ず私あり」といへり。此語宜なる哉。昔より兒女の耳にふれたる清水寺の清玄、美女櫻姫を執愛し、死して怨魂聲をたやましたる物語を考ふるに、因果觀面の理、彰々として毫釐もたがはず、惡報のすみやかにいたれるを聞くにすら戰慄として毛髪いよだつ一話なり。爰に人皇八十二代の帝、後鳥羽院の御宇にあたりて、丹波の國桑田郡に、鷲尾十郎左衛門平義治といへる人ありけり。志温和にして、武備の業は更なり文事の道にも暗からず、家の子郎等あまた召しつかひ、山林田庄おほく持ちて、財寶山をなし、家富み榮えければ、人皆桑田の長者とよびて欽敬せざるはなかりけり。(丹波志)さても此十郎左衛門義治は、人皇五十代桓武天皇十三代の後胤、鷲尾三郎經春の嫡子なり。(大系圖)父經春は、去んぬる壽永年中、九郎判官義經公平家追討の爲め攝州一の谷鵯越を落し給ひし時、召に應じて、山路の案内をいたし、それより後しば〳〵軍功をあらはし、つひに義經の愛臣となれり。(盛衰記・義經記)其後義經公、舍兄右大將の憤責に逢ひて彼此をさまよひ歩き、つひに奥州に下り秀衡をたのみたまふ。其節までも經春相したがひて彼所に下りけるが、文治元年四月晦日、(東鑑閏四月)義經衣川の舘にて自害ありし時、經春も討死をぞなしたりける。然るに子息十郎左衛門義治、此事を聞きて深く悲しみ、丹波よりはる〴〵陸奥にくだり、父の髑髏をたづねとりて歸國し、葬送をいとなみ、畢七宰栗山護念寺の道然に許多の名僧を請し、盛天に供養し奉りてその靈魂を祭りけるとぞ。これは扨おき爰に又、十郎左衛門義治の郎等に眞野水二郎といふ者あり。其父は江州眞野の産にて兵衛貞次といひ、義治の父鷲尾三郎に仕へて忠臣無二の武夫なりけるが、戰場に於てしば〳〵軍功をあらはし、陪臣といへども、九郎判官殿の感賞にあづかりし事おほかりける。扨此貞次一子なき事をなげき、夫婦佛神に祈りけるが、つひに一男子を誕じけり。其兒八月十五夜に生れければ、月は水陰の精なるを以て、水二郎と名づけしとかや。此水二郎成長にした

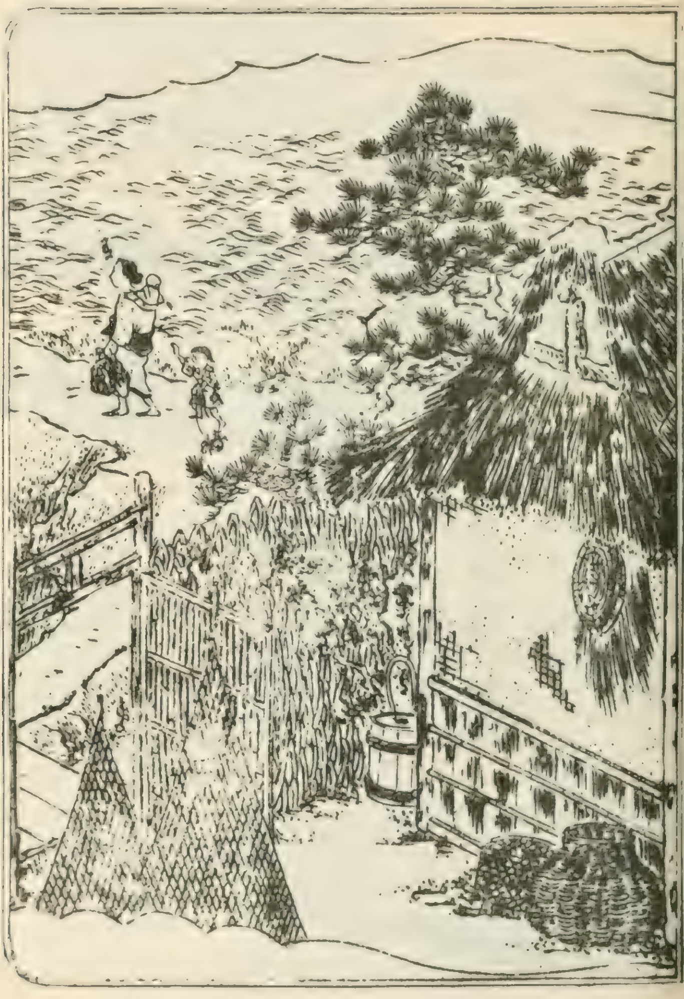

鷲尾十郎
左衛門
義治内室
野分の方
と酒宴を
催して楽
みきらむ




彌陀二郎
真野水次郎と
いひし時
丹後國切戸の
文珠ふまうで
切戸文珠




彌陀二郎頭陀乃
僧となるへ鉄鉢と
頭陀の僧ち
光明寺の釈迦佛
乃化身
なり




彌陀二郎
淀川に網を
下して
紫摩黄金乃
霊佛を
感得す



かひ、大膽強氣にして力量人に越え、邪見放逸にして更に憐の思ひなく、常に山川に奔走して狩漁を樂みとし、一向身の行惡しかりければ、人皆異名をつけて、惡二郎とぞ稱しける。父貞次これを愁ひて、度度異見を加ふるといへども用ひざれば、且つ怒り且つ悲み、夫婦唯是のみを苦にやみて明しくらしぬ。然るに鷲尾三郎奥州衣川にて討死せしと聞き、貞次愁傷の餘り、ただちに陸奥に下り、三郎討死の所にいたりて、つひに殉死をぞなしたりける、誠に是たぐひまれなる忠臣なり。これに依りて義治貞次が忠死を憐み、其子水二郎に高祿を與へ、眞野水二郎春次と名告して召仕はれけるが、水二郎とかく殺生をのみ常の業とし、しかのみならず大酒を好み大力に誇り、やゝもすれば爭論を惹出して、人を打ちそこなふ類の惡業ますく\つのりければ、これをにくむ者おほく、義治に告げて「罰し給へ」とすゝむれども、義治彼が性質を見るに「惡行をなすといへども、元來無欲にして名利を貪る心なければ、能く教誨をくはへなば、後々は其行もなほるべし」とて、心を長うし萬をしのびてぞ召しつかはれける。これ全く、貞次が生前の忠義を思ひて其子を憐むなるべし。さてありけるに水二郎、ある時丹後の國九世戸の文殊堂に參詣し、殺生禁斷の場にみづから網をくだして魚をとりければ、浦人これを見つけて制しけるを憤り、盡く打倒し、おほく疵をおほせて立去りけり。浦人ども彼は丹波の國桑田の長者の郎等なりと聞き、おひく\鷲尾の館に來りて、水二郎が狼藉の仔細をうつたへけるにぞ、義治これを聞き、一つには朝廷のきこえをはゞかり、二つには依怙の沙汰におよばん事をいとひて、せん方なく水二郎が家財を沒收し、國のさかひを追拂はれたり。水二郎俄に浪々の身となり、杖を失ひたる瞽者、網にはなれたる水母の思ひして、たのむ木蔭さへ雨もり、身をかくすべき所もなければ、山城の國淀のほとり、一口といふ所に、膝をいるるばかりの小家を造りて住み、異名を實名とし、みづから惡二郎と名告り、生業もなければ、日來好める漁を業とし、いと貧しくくらしけるが、ある時、頭陀の沙門ありて度々此村に來り、黑谷派の專修念佛を唱へ、人の門門にたゝずみて手の裏を乞ふ。二郎おもへらく「彼僧來れば必ず漁獵なく、網の裏魚を見ず、大になりはひの妨となれり。若し又來らば打擲して、再び來らざるやうに行ふべし」と思ひ居たるに、つぐる日、かの僧又來りて門に立ちければ、やがてとらへて錫杖と鉦をうばひとり、爐火の裏に鐵箸をさしいれて火となし、額に印して放歸しけるに、かの僧痛むさまも見えず、怒れる色もなく、只悠々として出去きければ、次郎大に怪み、跡を慕ひ行きて其在所を窺はんとするに、不思議なる哉、かの僧、淀川の水上を歩み、陸を行くがごとく西にむかひ

て去りぬ。二郎ます〳〵怪み、なほしたひゆくに、西山粟生野の光明寺といふ寺に入りて、忽ち見えずなりぬ。二郎其邊の人に就きて「しか〴〵の頭陀の僧、此寺中にありや」と尋ぬるに、その人答へて「當寺に頭陀の僧なし。但し本尊の釋迦佛、時々頭陀の僧に現じ給ひて、結縁し給ふよし傳說すれども、親り見たる者なし」と語る。二郎いよ〳〵いぶかり、佛殿に入りて本尊を拜するに、額に火印の痕ありて、頻に血を流しぬ。(是より已來此尊像を御印の釋迦と號せり)二郎親しく此奇特を見て、佛法の不可思議なることを會得し、深く懺悔の心を生じて、これまでの悪業をあらためんと自ら心に誓ひ、感涙を流しつゝ家に歸りけるが、かの時うばひとりたる錫杖と鉦はそが儘あり、鉦のうらを見るに常照といふ二字を鏤りつけぬ。正に是、佛の光明十方世界を常に照し給ふといふことを示し給ふならんと、ます〳〵奇異のおもひしてけり。扨其夜の夢に、容貌端麗の僧來りて告げて曰く「汝機已に熟す、感應あり、今夜網をたづさへて、淀の神の木に到るべし、必ず有縁の智識に遇ふべし」と告げ給ふと見て、忽ち醒めぬ。二郎歡喜の思ひをなし、小船に棹してかしこに到りけるに、此時已に三更のころほひなり。四方暗々たる水面に、赫奕たる光明迸りて、恰も日の出るが如くなれば、感悅かぎりなく、其光のうちに網をさと投げくだしけるに、紫磨黃金とおぼしき彌陀の尊像、網にかゝりてあがり給へり。二郎これを捧げて家に歸り、香花を供じ、念佛を唱へ、これより菩提心頻りに、厭欣の思ひ決定し、遂に殺生の作業を止めて、唯頭を剃らざる出家のごとく行ひければ、時の人これより悪二郎といはず、改めて彌陀次郎とよびにけり。かくて二郎發願すらく「一つには亡君亡父追福のため、二つには當人結縁のため、三つにはおのれ罪障消滅のため、諸國をめぐり諸人を勸化して、一座の佛堂を造營し、かの靈佛を安置し奉るべし」と頻りにおもひ立ち、一つの笈を造り、尊像をいれ奉りて、これを負ひ、かの錫杖と鉦は佛の賜物なればこれを携へ、まづ山陰山陽の國々を廻らんとこゝろざして、出立きぬ。此時はこれ、建久元年の冬の半にぞありける。誠に是、逆則是順の理にたがはず、悪につよき者は又善にもつよしといへる常言も、此彌陀二郎がたぐひなりかし。(已上、山州名跡志に記す所と大同小異あり。)

第二 鷲尾義治玉琴に惑溺す

爰に又、鷲尾十郎左衛門が妻を野分といひて、此年二十歳になりけるが、誠に絶世の美人にて、芙蓉紅顔の粧花よりも馥しく、玉容照月の姿あたりも輝くばかりなり。容貌の美麗なるのみならず、聰明伶悧人にすぐれ、女の嗜むべき諸道に通じ、武士の家

に養はるる身は、女といへども少しは武藝をも心がくべき事なりとて、歌學び、糸竹の遊びのひまノ＼には、太刀あはする業をさへ學びて、なみノ＼の男子にははるかにまされる手段あり。此婦人の出生を尋ぬるに、櫻町中納言成範卿(盛衰記、平家物語)の落胤なり。成範卿、下野の國室の八嶋に流され給ひし時、賤の女に契り給ひしが、其女の腹に宿り、卿歸洛の後出生したる女子なり。十歳の頃までは農家に育ち[illegible]これ、銀鐘に[illegible]せしが、[illegible]此女子を見て[illegible]れなれば、乞ひとりて養女とし、成人の後、子息義治にめあはしけるなりけり。されば眞こと[illegible]へる小[illegible]理なり、[illegible]理のかたらひ、偕老同穴の契あさからず、花を愛で月を弄ぶにつけても、たのしみをともにせずと云ふことなし。然りといへども、宿世の定にやあらん、いまだ世嗣をまうけず、これのみ愁の一つなれば、神に祈り佛に願ふといへども、ふつに驗なし。義治これまで一妾をもおかず打過ぎけるが、かくてはいづれの時か一子をまうくべき、のちなきは不孝の第一とす、此上は妾を召仕ふにしかじとて、頃日京都より一個の美女をよびくだして、腹心の家士篠村八郎といふ者にあづけ、かれが家のおくに新室を造り、召仕わづかにそへ、物毎かろくして据ゑおきぬ。されど義治遠慮深き氣質なれば、野分の方のおもはくを憚り、當分此事[illegible]すべからずとて、八郎が口をとゞめ、深く[illegible]ければ、家士、郎等などもこれにこれを[illegible]にもな[illegible]いひ、かの祇王、祇女、佛などにもおさノ＼おとらざれば、名を祇福といふ(祇福の名、平家物語及盛衰記に出づ)もし太政入道在世の時なりせば、さぞな寵にあづからん」など云ひて、六波羅様を好む若人等おほく戀慕ひけるが、此度義治に贖はれて、當國に下りつるなり。年は十六歳にぞなりぬ。歌舞吹彈の業をよくせるうちにも、わきて琴の妙手にて、鳥舞魚躍の術あり。かの後藤が女にも多くゆづらまじとて、祇福といふ名を更めて、玉琴とよばせけり。義治はじめのほどは、唯世嗣をまうけん爲ばかりにて、いさゝかも色をむさぼる心はなかりけるが、漸々に馴れしたしむにしたがひ、都にて前車の人になれ、世情に通じ、風流に長じたる玉琴が艶なる[illegible]心にまとひ、愛寵の情日々に深くなり、一向玉琴にのみ通ひて、日夜の酒宴、糸竹のしらべに、秋の夜も短しと月にかこち、春の日もくれたんことを惜みけるが、つひに玉琴身おもくなり、義治よろこびに堪へずといへども、未だ披露せず、唯折をうかゞひてぞ居たりぬ。かくありければ、野分の方の寝殿はおのづからうらさみしく、條の岩橋なかたえ

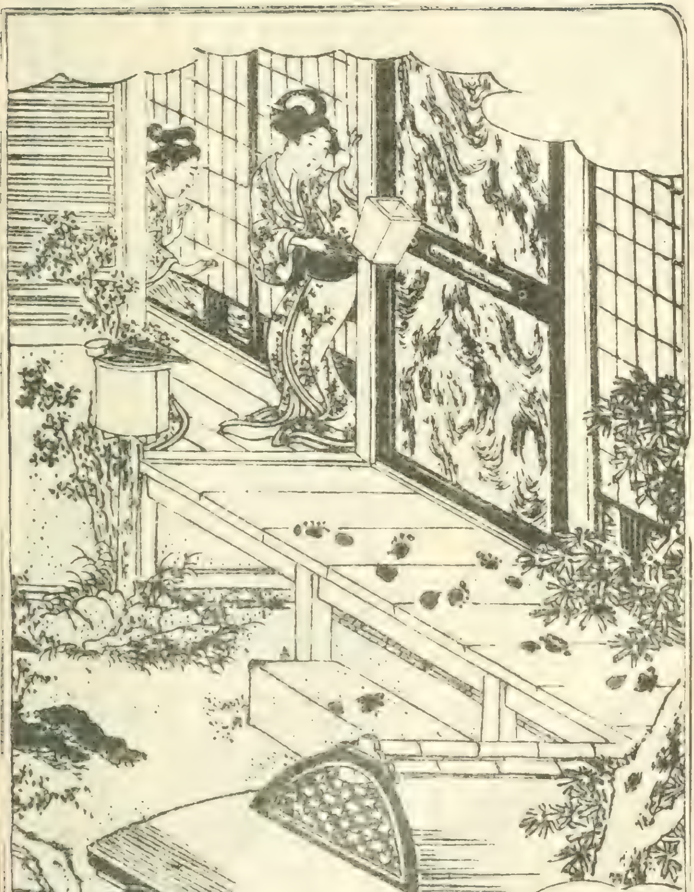
て、夜ハ契も遠ざかり、いなの篠原そよとだに音信なければ、翠帳はむなしく垂れ、紅閨はいたづらに閉ぢて、枕の塵をはらふべき心だになく、平日秋の思ひして、つれ／＼をうち侘ぶるのみなり。下々の口さがなきは昔も今もかはる事なく、一時侍女どもこぞりて、野分の方に申しけるは「君はいまだしろしめさずや、相公にはさいつころ、都より玉琴とやらん一人の美女を召下し給ひて、篠村八郎が家にすゑおき給ひ、日夜かしこにおはして、酒宴、糸竹にのみあかしくらし給ふ。下館に籠居させ給ひ、兵書を講じさせて聞き給ふなどおほせあるは、皆そらごとにて、下館をしのび出でさせ給ひては、彼所に通ひ給ふとなり。殊御寵愛の餘り御胤を宿し、はや餘程月かさなり、しかも左ばらみとうけたまはりぬ。若し御男子など御誕生あらば、かの女必ず寵にほこり、権をうばひて人もなげにふるまひ、君の御威勢は夕日のかたぶく如くなり行きて、あるにかひなき御身とならせ給はんずらん。かく仕へまつりて、深き御恩をかうぶる我々なれば、これを聞くより、日夜に胸のほむらの消ゆる隙なく、唯くちをしさ悲しさに堪へはんべらず。そはしのびも仕らめ、相公ますます彼に溺れ給はば、且つは御家のためにあしかりなん、よき折を見給ひて、御諫言あらせ給へ」など、かはる／＼ぞ申しける。野分の方これを聞きて色を正し「我がもとに仕ふる者ともおぼえず、汝等は、志のゆがみつる者ども哉。玉琴とやらんが事は、我とくより知るといへども露ばかりも相公を恨みまつるべきいはれなし。我年久しくつれそひ参らすといへども、果報つたなくて今に一子をまうけざれば、兼て妾を召使ひ給はん事をすゝめ申して、世嗣をあらせまほしく思ひ居たる折なれば、よき幸ならずや。民百姓すら妾を召使ふはあるならひなり。まして相公は、當國の長者と敬はれ給ふ御身なれば、寵愛の女餘多ありとも、何の憚り給ふことあるべきや、畢竟遠慮深き御氣質なれば、我がおもはんずる所を憚り給ふとおぼゆ。かの女若し世嗣を産まば、一家中の悦このうへやある。腹は素より借物なれば、其子は則ち我が實子も同然なり、いかでか隔つる心あらん。我は唯安産をのみ祈るなり。又深く溺れ給はば、家の爲あしからんなどは、汝等が口よりいふべき事にあらず。恩顧の老臣餘多あれば、たとひ相公に誤ありとも、いかでか汝等が言をまたんや。汝等が申す所は、我を思ふに似て、かへりて邪道に誘ふなり。かゝるあさましき心なくて、我に仕へんと思ふべからず。かゝること若しかの女にも聞えて、我が心に嫉妬ある者など思はれんは、いとはづかしき事ならずや。此後、彼女の噂する者あらば、すみやかに罪をたゞさんずるぞ。かへす／＼も愚なる者ども哉」とつぶやきて、奥の殿に入りければ、侍女どもは恥入りて、面を紅にし

つゞ「上々の思召す所は又格別なり」よしなき事申上げて、御不興になりぬ。誠に君は賢女にておはす」と大に感じて、おのが房房に退き、此後、此事に於て一言を申す者なく、唯其賢なる志をのみ、窃に語りあひて感歎しけり。扨其頃、木曾の殘黨、平家の餘類、深山幽谷にかくれ住みて、民の災おほかりけるが、其類にや、當國にも幼女を奪ひ、かほよき人の妻をさへ盜取りて遠國につかはし、妾婢或は遊女に賣る賊あり。百姓等これが爲に苦みければ、義治安からず思ひ、捕盜の武士に命じて捕へしむるにやがて四人の賊を捕へ率て來りぬ。弓弦賣、高野法師、板金剛賣、算者などに、姿を似せたる賊どもなり。まづ身うちをあらため見るに、箇々懷中に、ちひさき蝦蟇のひからびたるを持てり。よく〳〵見れば、常の蝦蟇とは異にて、二三寸ばかりの尾あり。「こは何のためにもつぞ」と糺明するに、其ゆゑをいはず。楉答を下して拷掠するに、苦痛に堪へずや、算者に打扮ちたる賊云ふやう「これは鬼界が嶋に生ずる尾長蝦蟇と申すものにて、漢名を溪狗とか申すよし承り候。かの嶋の山中、溪澗の裏に生ずるのみ、他所にはたえてなき物にて候。我黨の仲間、餘多ありて諸國にかくれ住み、互に相たすけ人を賣買するに、盡く面を見知らざれば、此蝦蟇を證として、事を便じ候。故に、我黨が隱語に、蝦蟇つかひと申し侍り」といへば、其餘の者ども口をひとしうし「彼が申すに、少しもたがひ候はず」といひければ、まづ獄舍につかはしおきぬ。扨此四人の賊のうち、弓弦賣に打扮ちたるは、なみ〳〵の賊にあらず、名を蝦蟇丸といひ、力量すぐれ武藝に達し、なか〳〵容易く捉るべき者ならねど、此時疫癘をやみて身うち瘦せおとろへ、力ぬけて働きがたき故に、やみ〳〵と捉れぬ。後白河院の御宇、西海に海賊蜂起して、人民をなやましけるを、鷲尾太郎維賴征伐し、其軍功によりて右衛門尉に任ぜらる、これ乃ち十郎左衛門義治の曾祖父なり、彼蝦蟇丸は、其海賊の張本、木冠者利元が子なり。されば鷲尾の家は父の仇なれば、當主義治を打ちて恨をはらさんと、かの婦女を奪ふ盜人のうちにまじりて、當家をうかゞひけるが、天命盡きて捕れたり。蝦蟇丸獄舍にありて思ひけるは「我病によりて身體自由ならず、かくやみ〳〵と而も仇家に捉れたるくちをしさよ、誠に運のつたなき故なるべし。然しいかにもして此度の一命をのがれ、他日仇を報いん」とさま〴〵思量しけるが、日數へて、やうやく力つきたるを覺えければ、まづ心中に喜び、折をうかゞひ居たるに、一夜風雨はげしく、守の者も怠りてちかづかざるを幸ひ、三人の賊を盡くしめ殺し、獄舍を破りて逃失せたり。翌朝これを知りて大に驚き、四方に追人を走しけれども、つひに行方知れずなりぬ。よつてせん術なく、三人の賊を生けるがごとく罪に行ひて衆に

示しけり。これより國中、賊の愁を忘れて、百姓等喜びあへり。かくて此年もくれ、建久二年春の半になりぬ。野分の方、つれ〴〵を慰むるため庭をつくりかへさして、常見る前栽も一しほ趣あれば、一日、折戸ちかく出でながめ居たるに、松の梢に烏ありて、何やらん地上におとしたるを見れば、蛙やうの虫なり。賤のくさぐきにやと、香箸をとりて庭にをりたち、かの物をはさみてよく見れば、長き尾のある蝦蟇にて、尋常の物にあらず。野分の方思ふは「去年、蝦蟇つかひとやらん、いふ盗人を捉へられたるが、箇々、懐中に尾ある蝦蟇を持ちしと、侍女どもが伽ばなしにしつるを聞きぬ。これは必ず其物ならん、後園に埋めたるよし聞きしが、頃日の庭造りにかしこの土を掘りかへし、此物のあらはれたるを、烏のとり来つるに疑なし。はからず此物我手にいりしは、密計をおこなふべき時のいたれるなり」と、心にうなづきけるが、折しもかたはらに人なきを幸ひ、いそがはしく香箱のうちにいれて、深くかくしおきぬ。野分の方の胸中、いかなる計かある、下回を讀得て知るべし。

第三　野分の方嫉妬玉琴を害す

義治の家士のうちに、兵藤太といふ者あり。生得非義を好み貪欲深く、財寳を見ること蠅の血を見るがごとく、一命を失ふ事をすら、貧の爲には顧ざるほどの悪性の者なりしが、野分の方、兼て心中にたくみ思ふことあれば、彼が性質をよくためしおきぬ。然るに頃日、義治朝廷に貢を奉るため、京都に上りて留守なるを幸ひ、野分の方、かの兵藤太を奥深き座敷に召出し、袂をひそめて云ひけるは「我汝が膽太き性を見ぬきて、密に申しつくることあるが、何にまれ、速にうけがひて、人にもらすまじや。爲すましたるうへは、常座の賞として金子一百兩を與へ、なほ相公の前をとりなして、後日立身をいたさすべし。尤も此事極密の大事なれば、汝が誓言を聞かざれば、語りがたし」と云ふ。兵藤太一百兩の賞金と聞き、まづ心中に喜び、やがて立ちて、外方におきたる刀の笄をとり来りて、いひけるは「密事とのたまふは、何事かは存ぜされども、身不肖の拙者に、大事をうちあけ命ぜられんとは、まづ身にとりて本望の至りに候。たとひ水火の裏にいり、いかやうの苦痛をうくる事なりとも、いかでか辭み侍らん、心おき給はず、御物語り候へかし。素より他にもらすなど申す事は、たとひ死すとも候まじ。武士の金打、これ見給へ」とて、笄を取りて、ちやう〳〵と打合せければ、野分の方喜び「其一言を聞くうへは、疑ふべきにあらず。委しく語り聞すべし」とて膝をすりよせ「汝かの玉琴が事を知りつらん、我彼を斬取りてすべき様あり、汝





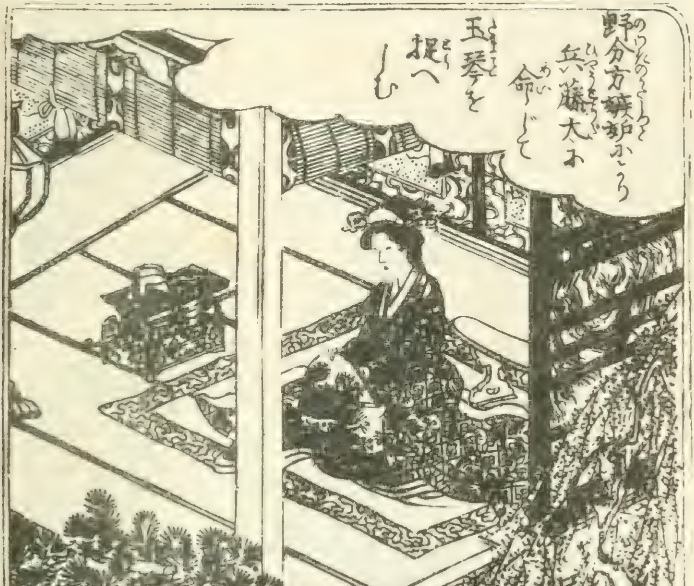
鷲尾の家士
兵藤太篠村
八郎が家に
忍入て玉琴
さ
うかひ
とれ

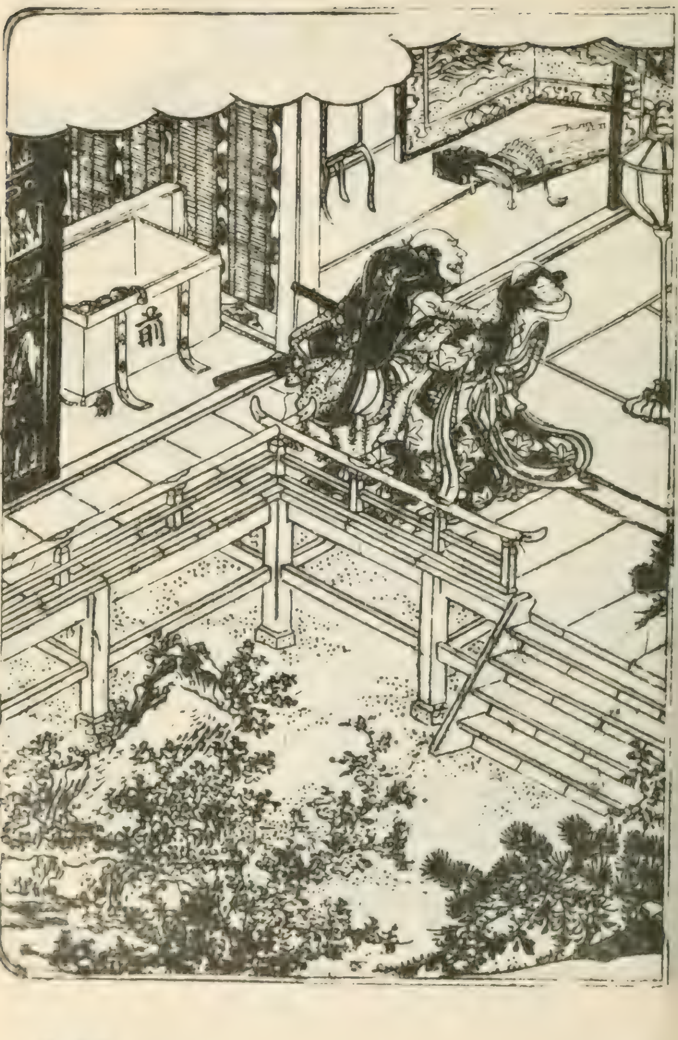
あすの夜、篠村八郎が屋敷にしのび入り、しかぐ\計ひて彼を盗み來るべし。我は此座敷にありて相待つべし」と、こまやかに命じければ、兵藤太はじめて野分の方の本心を聞き、うち驚くといへども、前後を顧さる者なれば、速にうけがひ「そはいとも安き事にて候。必ずしすまし候べし。御氣づかひあるべからず」と、事もなげに諾ひければ、野分の方懐より香箱をとり出し、かの蝦蟇をとりて、兵藤太に渡していはく「此物は、去年、婦女を奪ふ盗人等、證の爲とて持ちし物なるが、はからず我手に入りしは、天のあたへなり。汝かの女をうばひたらば其あとに此物を落し置きて立去るべし。これかの盗人等が種類の仕業とおもはせ、後の疑をうけまじき計なり。すべて此事は汝一人にて行ふべし、必ずしも別に人をくはふべからず。篠村八郎は老人といへども勇氣たくましき者なり、悴次郎公光も幼年なれども、武藝に達せりと聞く。かろく見て、事を過つべからず、よく心を用ふべし」と示しければ、兵藤太「いちく\承り候」と答へて、庭づたひに出去りければ、野分の方は寢殿にかへりて、唯あすの夜を待侘びけり。かくてあすの夜になりけるが、春の時にも似ず、折しも雨猛くそゝぎ、風すさまじく吹きて、常ならぬ夜のさまなれば、兵藤太よき幸ひと悦び、笠の下に覆面頭巾を著て面をかくし、鎧櫃を負ひ道を急ぎて篠村が屋敷に到り、前後の門をうかゞふに、嚴しく鎖してしのび入るべき便なければ、後門のかたはらなる大樹の下に身をかくして、しばし便宜をうかゞひける。時しも一人の老翁、一擔の荷をかたげ、蓑笠に雨をしのぎ「濁醪めさずや、召せく\」と呼びてうちとほる。門番の下部、ちひさき窓より頭を出して「酒をかはん」と呼びかくるに、老翁聞きつけずしてゆき過ぎぬ。なほ聲高くよべども聞きつけざれば、門番氣をいらち「愚鈍なる物賣めかな、聾にやあらん」と口小言いひつゝ、門のくゞり戸をあけて出で「おいく\」とよばはりて追ひかけゆく。兵藤太物蔭よりこれを見て天の與へと喜び、其あとへまはりて、門内にしのび入る。門番はこれを知らず、酒を買ひをはりて、再び門をとざしけり。扨兵藤太は、庭づたひに奥深くしのび入り、まづ逃道の便を見おきて、樣子をうかゞふに、むかひの座敷に灯火のかげうつりて、人語のひゞきあり。彼所こそ玉琴が居間ならめと心にうなづき、なほ身をかくして夜のふくるをぞ待ち居たる。春の夜の短きならひ、ほどなく遠寺の鐘聲ひゞきて、はや子の刻なれば、時分よしとぬき足しつゝ、かの座敷に近づきてうかゞふに、家内熟睡せしとおぼえて、唯風雨の音のみなれば、やをら縁の上に登り、妻戸引きあけてうち通るに、香氣馥郁として室にみち、燈火しろく立ててあきらかなり。屏風の裏をさしのぞき見れば、一個の美女、錦の衾

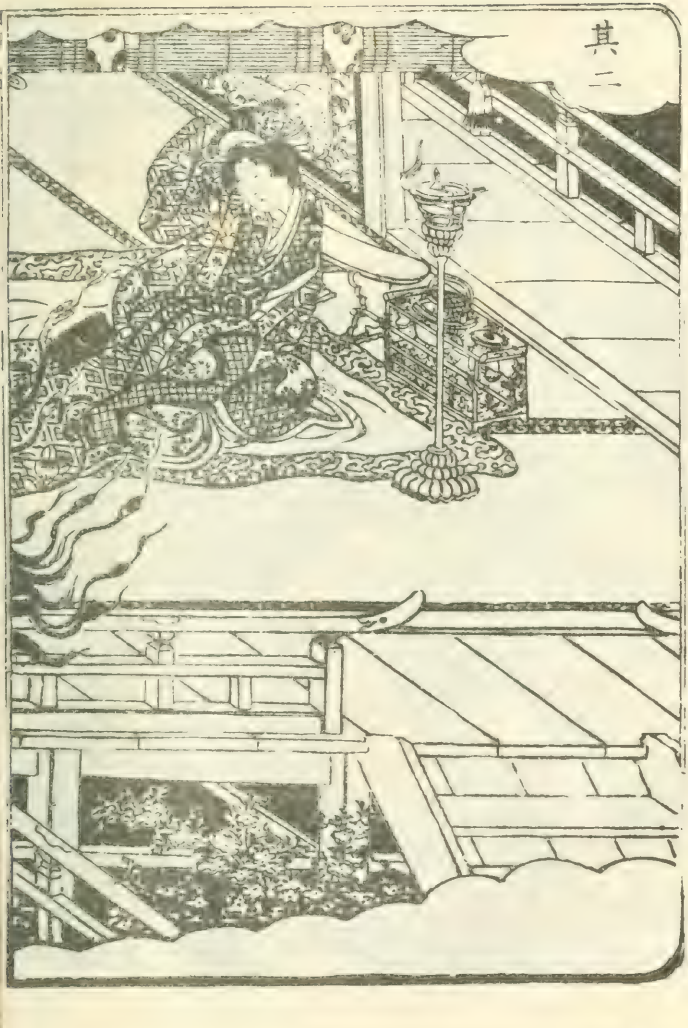
に臥居たり。かねて面を見知らずといへども、かゝる美人の、ふたりとこゝにあるべきいはれなければ、紛ふべうもあらずと、餓ゑたる鷹の雀を見つけたるこゝちして、夜着の上よりかいつかみ、手ばやく口に手巾をはませて聲たてさせず、鎧櫃の裏におし入れてしかと負ひ、走り出でんとせしが、大事を忘れたりと心づき、懐中よりかの蝦蟇をとり出してすておき、奥庭の方へゆかんと、隔に植ゑなみたる竹やぶの裏にくぐり入りけるが、宿鳥のおどろきて鳴きさわぐに肝をひやし道をかへて行くに、侍女どもにやあらん、寢びれたる聲して「庭のかたに人の足音すなり、人々、目を醒し候へ」と叫ぶ聲に、胸とゞろきぬ。これ日來の大膽も、事をとげんと思ふより、心臆しつるにやあらん、暗さはくらし、唯夢路をたどる思して辛うじて前に見おきたる逃道にいたり、樹木をつたひて築地の上にのぼり、鎧櫃をくゞり下して、おのれも飛下り、吻とため息をつくまもなく、窓を走りて逃去りけり。さて野分の方は、此夜侍女どもに酒を與へて醉はしめ、常よりも早く暇とらせて休ましめ、おのれも寢間にいり、臥したる體にもてなしけるが、程なく八ツの時計ひゞければ、はや相圖の時刻いたれりと、手づから手燭をとり、寢所をぬけ出でて、いく間を隔てたる奥深き座敷にいたり、燈火をうつし、蔀なかば上げて待つに、やゝありて兵藤太、鎧櫃をおひ、汗もしとゞに息もつきあへず、庭づたひに來り、相圖の嗽を立てておとなひければ、野分の方も金の鈴をふりならして、相圖を合す。兵藤太座敷に上り「首尾よく仕おほせ候」と申して、櫃をおろしければ、野分の方喜び「汝よくでかしぬ、疾くこれへ引出せ」といふにぞ、兵藤太、櫃をひらきて玉琴をひき出し、口にはませたる物をときてつき放しければ、玉琴は絶入りて人ごこちもなかりけるが、しばしして目をひらき、夢に夢見るこゝちして前後を顧るに、いづれの所なるを知らず、金地の繪障子、朱欄干、眼を射るばかりに輝き、珠簾の半捲きたるうちに、容顔美麗なる上﨟ひとり在すを、おそる〳〵見れば、氷なす練貫の襲着て拱立つ許りなる紅の袴衣し、袿衣の縫は目もあやにて、さだかならねど、緣箔の光のみ灯火にてりそひて燦きぬ。扨野分の方はしばし言葉もなく、只ながし目に見やり居たるが、良ありていはく「いかに玉琴とやらん、いまだ對面をせざれば見知るまじ、野分といふは妾なり」といふに、玉琴おどろき、さては、此所は本館なるかと、はじめて知りぬ。野分の方玉琴がけはひを見て、さてはさぞ訝しく思ひつらんが、少しも氣づかふ事にあらず、心おかず近うよりね」といとやはらかなる詞に、たゞ不審はれず、唯としうつむきて口の裏に答へ、進みかねてありけるが、兵藤太うしろより指を以て背中をつき「疾く〳〵よりね」と云ふも、なほ

苦しければ、とかく後へのみすさりぬ。野分の方氣をいらち、簾のうちより、雪のごとき腕をさしのべて玉琴が手をとらへ、膝のもとへ引きよせて、顔をつれ〲とうちまもり、「さて〱、美麗しき生れかな。聞きしにまさる顏容なり。そちは諸々の遊藝に長じ、わきて琴に妙なるよし、ほのかに聞きぬ。今宵召しよせたるも、唯は一曲を望まん爲なり。何にまれ、一手しらべて聞かせてんや。いざ〱」とて、琴を前にさしつけて望みければ、玉琴は、水責、火責にあふよりもなほ苦しく、胸もとゞろく折なるに、いかでか琴を調ぶべき、さりとてこれをいなまば、いかなる憂目にあはんもはかられず。畢竟、賊虜ゆゑに我を捕へてつらき目見せ給ふと思へば、何事も彼方の心にそむかず、憐をうけて、この場を遁れるにしかじと心をさだめ、涙をおとしつゝ云ひけるは「拙き爪音を聞せ参らせんは、いとはづかしけれど、命おもければいなみ侍らんもおそれあり、手業の幼きはゆるさせ給へかし」と云ひながら、琴を引きよせてかきならし、唐の世の名妓翠翹がつくりたる「妾薄命」といふ曲を日本詞に和げて、いともあはれに唱ふ、手頭もふるへ聲も泣聲なれど、さすが妙手のしらべなれば、かへりて常よりもまさり、其聲凄風楚雨のごとく、聞くにあはれを催すといへども、野分の方はなほ嫉の心いやましぬ。按彈じをはつてければ、野分の方いへらく「實に奇妙の上手なり。姿といひ業といひ、また類あるべからず。相公の深く愛でさせ給ふも、宜ぞかし。わらは、相公と年ひさしく添ひまゐらせて、鸞鳳の鏡に影をならべ、鴛鴦の衾に枕をよせてむつび深かりけるが、汝を召下し給ひしより、俄にすさめられて、近日はたえて對面だにし給はず、皆是汝が所爲ならずや。汝閨中のさゞめごとにも、さぞな妾をあしくいひなし、笑種にしつらんな。彼といひ是といひ、ねたしにくしと思ふ心には、宇治の川浪たゝぬ間もなく貴船の釘も我胸に打つ思して、胸にたく火の顔に出で、引提の水もいく度か玉ちるばかり湧きかへるを、人に知らせまじと堪忍びて、これまでつゝみかくせし心の苦しさ、いかばかりと思ふぞや。此恨をはらさんには汝が胸をさき、肝をくらふとも飽きたらじ。あなにくや、腹たちや」とて眉をたて眼をつりあげ、いきまきあらく罵りて、はたとにらみたる瞋恚の面色、おそろしなどもおろかなり。玉琴は膽魂も身につかず、只うちわなゝきつゝ云ひけるは「君の宣ふ事をうけたまはるに、露ばかりも妾が思ひかけざる事どもなり。いかでか君の御うへをあし様にとりなすべき、そは皆妾をにくむ人の讒言やきこえつらん」と、云ひも果てざるに、いな〱汝はもと白拍子にて、おほくの人をまどはし、いつはりをいひたれば、其舌の劍にて、我を害せんと計りしに疑なし。相公も亦その毒舌にこそ

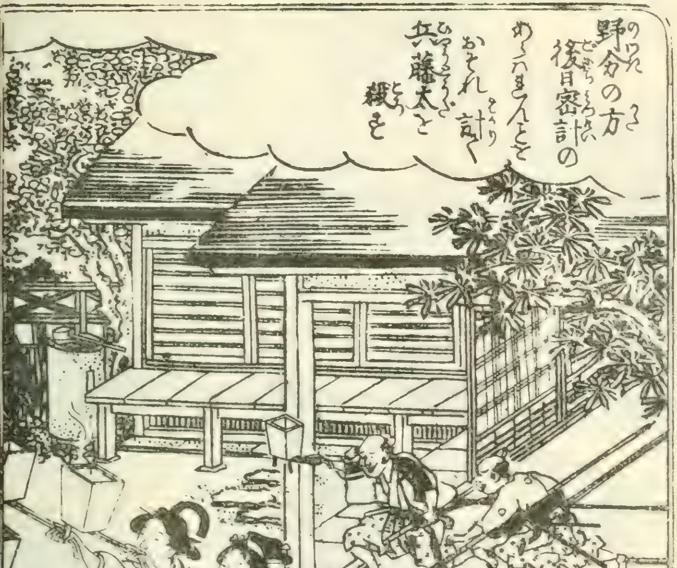
まどひ給ひつれ。報ほど思ひ知らせんずるぞ」とて、緑の黒髪をかいつかみ引倒して、額さきを疊にすり付け／＼しつれば、額の皮やぶれて血をながしぬ。猶兵藤太にむかひ「此女なぶり殺にして、苦痛をうけしめよ」とて突きはなしければ、兵藤太やがて氷なす刀をぬいて斬りかけたり。玉琴ひらりと身をかはし、危き劍の下をくゞりて遁れんとするを、兵藤太髻つかみて引きもどし「おろかや汝、網の魚籠の鳥、いかでかのがるる道あらん。我君の恨の刃思ひしれ」と、刀を目さきにさしつけて追ひめぐれば玉琴は身をちゞめ「現在妾が胎内には君公の御胤を宿し、はや八月にみちぬれば、五輪とやらんもとゝのひつらん。妾が命は惜しからねど、腹なる御子を暗きよりくらき道に迷はせ申し、賽の河原とやらんにて、苦患をうけさせ申さん事のいたはしさよ。いかなる宿世の悪縁にて、妾が腹には宿來させ給ひしぞ」とくどきたてて、涙を瀧のごとく流し「せめて産みおとし申すまで、一命をたすけてたべ、慈悲ぞ情ぞ、やよなう」と云ひつゝ逃ひまはされ、身を痛み／＼とひしめくたび／＼、衣にとめたる蘭麝のかをり身をおそひて、恰も爛漫たる芙蓉花の風にもまるるに似たりけり。かくて情なくも肩尖二三寸きりこめば、呀と一聲さけびつゝうつぶしに倒れ、しばし絶入りけるが頭をあげ「あな苦しや、堪へがたや、此館に慈悲ある人のおはすならば、妾が命をすくひてたべ」と聲高くよばはれど、草木も眠る丑三ツの頃といひ、いく間を隔てし深殿なれば、誰こたふる者もなく、折しもつよき夜嵐の、庭木をならすのみなりけり。無慙や玉琴は手を負ひて、總身は朱に染りながらはひ廻り、一度は野分の方にむかひ、一度は兵藤太にむかひ、掌を合して「しばしの命をのべ給はれ」と願へど、野分の方は答もせず、只うち笑ひてこゝろよげに見やりけるが「今しばらく苦痛をさせよ」と目を以てしらするにぞ、兵藤太その意をさとり、玉琴がえりくび摑みて刀をとりなほし、胸の上にひや／＼と押しあつれば、玉琴は苦しき息をつき「さは、いかにかいふとも殺し給ふか、殺さばとく／＼殺せかし、胸の報はあるものかなきものか、生きかはり死にかはり、六道四生に怨をなし、おもひしらさでおくべきか」とて、聲もたゆげにをめきければ、野分の方「あなかしまし、もはや殺せ」と命ずるにぞ、兵藤太ふたゝび刀をとりなほして、玉琴が吭にぐさと突きとほしければ、血しほ、さとほとばしり、手足をもがき牙をかむ斷末魔の苦しみ、目もあてられぬありさまなり。時に怪しや、今までほのくらかりし灯火にはかにあかくなり、玉琴がたけなる黒髪さや／＼と鳴りて、そらさまに登ると見えしが、忽ち蛇と化し、野分の方に向ひ、かまくびをもたげて蠢きけり。兵藤太も野分の方もこれを見て、身うちぞつと冷えとほり、しばし夢のこゝ


兵藤太に命じて
玉琴を捉へしむ


前


其二


玉琴最期の
頭髪蛇と化し


野分の方
後日密計の
兵藤太を



ちしけるが、良ありて心つき眼をひら[illegible]、[illegible]、これ[illegible]見えざりけり。嗚呼哀しい哉、嗚呼痛はしい哉、玉琴は十七歳を一期として、黄泉の鬼となり果てぬ。扨野分の方命じけるは、「此女の事、後日の僉議嚴しかるべし。屍を土中に埋めなどせば、萬一あらはるゝ事もあるべければ、大江山に負行き、赤裸となし、面の皮をむきて、谷川深き所にしづめにかけよ。衣服には目じるしあり、鎧櫃には血つきたり、皆彼所にて焼失ふべし。事を全くなしをはらば、再び來りて告げよ我なほ安心すべきぞ。夜のあけぬ間にとく〳〵せよ。兼て約したる賞金は、こゝにあるぞ」とて、一袋の金を出して見せければ、貪欲深き兵藤太すゞろに喜び、手ばやく屍を櫃におし入れて負ひ、後門より出でて、大江山へと急ぎ行きぬ。野分の方は緣さきに立ちて後見送り、何やらん心にうなづきけるが、此時已に雨やみ、風しづまり、手

[illegible]しく、物凄なきと[illegible]みしも、首たりと[illegible]ちて、心おちつきたるさま、なみ〳〵の人にあらず、誠に是、大膽不敵の女子なりけり。かくて兵藤太は月の光に乘じ、空を走るがごとくゆきて彼山につき、玉琴が屍を出して、衣服をはぎ、面の皮をむき、おもしの石をくゝりつけて谷川にしづめ、衣服も櫃も焼きすてて跡かたなくなし終り、ただちに又馳歸りて彼深殿にいたれば、野分の方は、もとのごとく待居たり。兵藤太頭をさげ、おほせ付けられ候とほり、いち〳〵念入れてはからひ候と申す。野分の方喜び「でかしたり、早かりしぞ。いで約せしとほり、當座の賞金をとらすべし」とて、錦の袋にいれたる一百兩の金子を與へければ、兵藤太おし戴き、わづかの功を以て、莫大の恩賞を給はる事、ありがたく忝なきまでにお[illegible]とて、満面にゑみを含

[illegible]ければ、野分の[illegible]一夜が大丈夫の[illegible]には[illegible]る大事は申しつけたり。もはや夜明に間もあらじ、とく〳〵歸りて休息せよ」とて、暇とらしければ、兵藤太は恭しく禮をなし、膝行でて緣を下らんとしたる所に思ひがけざる背後より、野分の方長刀をおつとりのべ、兵藤太が右の脇の下をしたゝかにかけたれば、呀と一聲叫びながらうつぶしに伏すをすかさず、長刀をくきみじかに取りなほし、飛びかゝりてはたときれば、首は前にぞ落ちたりける。野分の方なほくり手に鮮血したゝる首を提げ長刀小脇にかいはさみて座にをりたち、寢衣をつたひて寢殿に近づき「やよ〳〵、盗人いりたるぞ。宿直の者どもとく來れ」と、聲たかやかに呼りければ、いぎたなき侍女等もおひ〳〵に目を醒し、大に騒動し、てんでに手燭をてらしはせ集りければ、野分の方いたく、な騒ぎそ、盗人は我打ちとりつ。灯火これ

へといふに、侍女等手燭をさし出せば、野分の方斬首をてらし見て、いと驚きたる體をなし「我は、他より忍入りたる賊なりと思ひしに、これはこれ、兵藤太にはあらずや。わがひが目か、汝等よく見よ」といふに、侍女等こはぐさし覗見て「いかにも、兵藤太に紛れなく候」と申す。此時侍宿の武士等、おくればせに馳せあつまりぬ。野分の方紛れる體をなし「家の鼠にてあらんとは、思はざりき。此者當家の祿をはみ、露ばかりも不足はあるまじきに、何ゆゑに盗をするや。我に嚴しくおはれて奥座敷にかくれ入りたるを、彼所にて打ちとりぬ。汝等彼所に行きて、骸をあらため見よ」と命じければ、侍宿の武士等彼所にゆきて、兵藤太が懐中の金袋を見つけ出し、持來りて奉れば、野分の方これを見て「これは我手まはりの用金なり。ちかごろは相公別館にのみおはすゆゑ、上館の用心おのづから怠あらんと侮りて、忍入りたるに疑なし、不忠不義の奴ずかな」とつぶやき、俄に湯をひき、衣服を着かへて、しばしとて寝間にいりぬ。扨ほどなく夜あけければ、兵藤太が屍をとりすて、皆々評議していひけるは「君にはかねて劍術を學び給ひぬれども、事に臨みて、かばかりの御手なみあらんとは思はざりき。羅綺にたへざる御姿にて、此度の如きはたらきし給ふは、誠に奇しき婦人なり。女中の丈夫とや申すべき」と感じて、其陰惡を知る者は、一人もあらざりけり。思ふに、漢の呂皇后戚夫人を苦しめたるにも、遙にまされる姦惡なり。彼婦人に似ず、巧に密謀をほどこし、人はこれを知らずといへども、湛々たる青天、欺くべからず、末にいたりてつひに天罰をかうぶり、身體微塵にくだけて、死しをはんぬ。誠に是、婦人たるものゝ慎むべきは、嫉妬の心なり。豈おそれざらんや、慎まざらんや。

（暁草紙巻之一終）

櫻姫全傳曙草紙巻之二

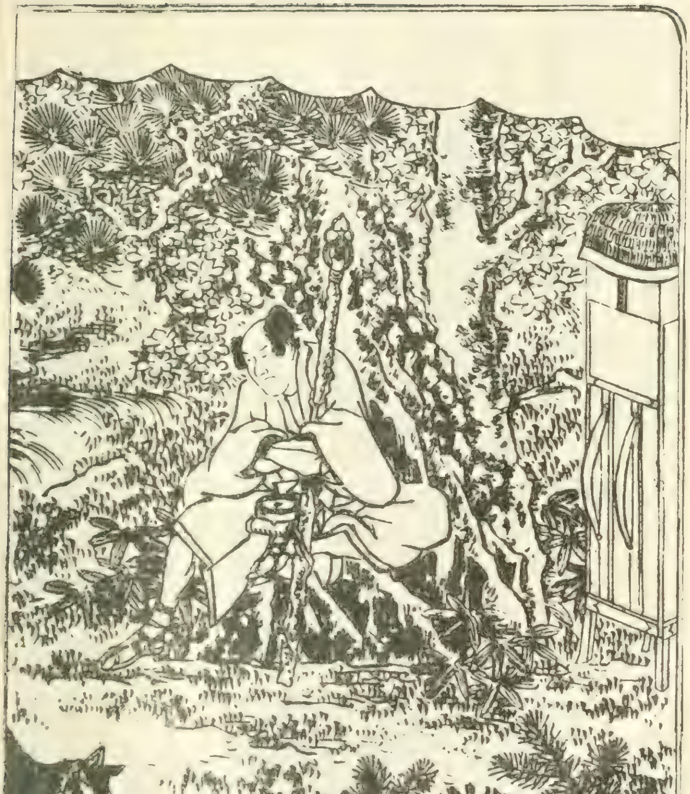
第四　玉琴の魂魄胎子に還著す

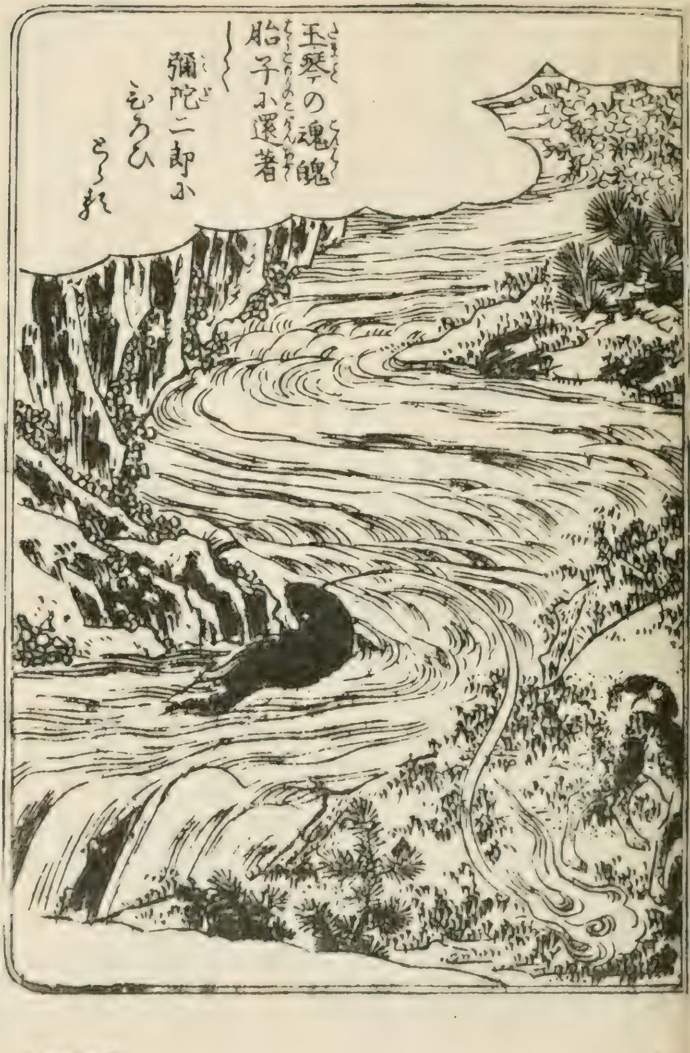
さてもかの彌陀二郎は佛堂建立のため、笈を負ひ錫杖をつき、廻國修行者に打扮ちて、山陰、山陽の國々をめぐり、旅中に於て年をかさね、已に建久二年の春の半にいたり、歸路にのぞみて丹後の國につきぬ。これより故郷丹波にちかけれども、罪せられて國をおはれたる身なれば、足をいれんことははゞかりあり。されど今は心をあらためて先非を悔い、のち〳〵は一功を立て舊惡を償ひ露ばかりも洪恩を報ぜんものと思ふ心あれば、いとど故郷なつかしく、せめて土をふまんも心やりなり。かつは主君の安否も、よそながら問ひたく思ひ、人目をはゞかり、笠ふかぐ〳〵とかづき、大江山を越えて、穴穗の觀音堂に通夜し、翌日未明に立ちて、谷川の流にのぞみしばしやすらひける。折しも小笹のしげりたる裏に、赤子の泣く聲頻にきこゆ。二郎いぶかり、立ちよりて見てければ、一隻の犬、赤子のゑりくびをくはへて、ほと〳〵くらひ殺さんず勢なり。不便の事に思ひ、いそがはしく錫杖をとりて犬を追ひやり、赤子をとりあげて見るに、玉のやうなる男子なり。いまだ胞衣もはなれず、總身血に染りて、生れたる儘と見ゆ。ゑりくびに犬の齒がたつきて、命を保つべうもおぼえねど、聲は高く泣きぬ。いかなる者の捨子にや、憐れむべしと思ひつゝ、なほ其邊を顧るに、谷川の岩の間に、なま〳〵しき屍よこたはりぬ。眼をとゞめてよく見れば、たけなる黒髪を亂し、女の屍とは見ゆれど、面の皮をむきて、目、口、鼻のあとおそろしく、目もあてられぬ光景なり。しかのみならず、腹破れて、五臟六腑亂れ出でぬ。二郎おもへらく、扨は彼犬、此屍の腹を喰破りて、腹籠りの子をくはへ出したるならん。面の皮をむきたる上に、吭に刀をつらぬきたる痕あり。衣服をはぎて、赤裸となしたるを思へば、山賊の所爲にや。あな無慙のことや。せめて此子をたすけばやと懷に抱き、肌につけて暖むるに、はや氷のごとく冷えたりければ、益〻哀を催しける。時しも一陣の冷風さと吹きおろし、梢をならし、川水をうごかし、怪しい哉、かの屍の疵口より、炎々たる一塊の心火飛出でて、二郎が懷に入り、身うちにぞつと冷えとほると覺えしが、忽ち赤子蘇生りて、ふたゝび泣出しぬ。二郎熟想ふに、かの女吭をつかれたれば、さだめて苦痛し、心神も惱亂しつらん。しかのみならず水中にありて、胎内冷えたらん、その腹籠りの子、

かく一命を保つべき道理なし。今の不思議を見るといひ、かれといひ、これといひ、全くかの女死苦のうちにも、胎内の子をおもふ一念深く、魂魄此子に迎著して、一命を保たしむるに疑なし。我此子を養育せば、此うへの善根はあるべからず、何方の人、いかなる者かは知らざれども、偶我目にかかりしは、宿世の深き緣ならめ。かく劍に身を屠られ、犬に屍をくはるるなど、此世からなる地獄なり。憐むべし／＼」といひつゝ、そのあたりの土を穿ちて屍を埋め、一塊の石をおきて假の印となし、鉦打ちならし「南無新靈頓證佛果菩提阿彌陀佛／＼」と唱へ、しばし回向して、此所を立去り、情ありげなる人家にいたりて、小兒に湯をかけ、乳を乞ひてのましめなどしければ、やゝ勢づきて、命たすかるべう見ゆ。二郎喜ぶことかぎりなく、これを始として、小兒ある家と見れば門に立ち、乳を乞ひて養ひけり。旅中といひ、男子の身にてかく養育する心づかひ、いかばかりならん推量るべし。彼屍は乃ち是、玉琴がなきがらなり。大江山の谷川に沈めたるが、くゝり繩とけて、此所に流れつきたるもの歟、何にまれ、奇怪のことにあらずや。

第五　輸裏書を遺して公連寧を償ふ

扨又彼玉琴を奪はれたる夜、篠村が屋敷の仔細を尋ぬるに、其頃しも篠村八郎公連は、重き病に臥して行歩かなはず、一子二郎公光とて、今年十五歳になりける丁角の若者は、父の病の祈禱のため、出雲明神に通夜して家にあらず、折も折、時も時あらんに、此夜にかぎりて玉琴を奪れたるは、げに運命盡るかぎりにやあらん。父子のうち一人出で會はば、いかでかやみ／＼とうばはるべき。おもふに、野分の方奸智深き婦人なれば、兼て其空虚をうかゞひて、家はせたるなるべし。其夜侍女等「盜人入りたるぞ、人々よ起合はせ給へ」と呼はる聲を聞きつけて、篠村八郎勇氣たくましき老人なれば行歩かなはぬながら太刀おつ取りて、よろめきつゝ新室にはせゆきて見るに、はや賊者は玉琴をうばひて、逃失せたるあとなり。八郎大に驚き「くちをしや殘念や」我重病にあらずば」と云ひさして、牙をかみ、拳をにぎりて憤りけるが、病に氣力弱りたるうへなれば、忽ち絕入して倒れたり。侍女等あわてふためき、打ちよりて藥などあたへ介抱し、やう／＼蘇生りければ、病床に扶けゆきて臥さしめたり。二郎公光はかくとは知らず、夜明にいたりて家に歸りけるが、此事を聞きて膽魂を失ひ、みづから家僕等をしたがへ、四方に奔走して、其日暮れなんずるまで賊の行方をたづね、ほと／＼身體疲れて、一旦家に歸りける途中にて、同家中の壯士田島[illegible]と云ふ者




玉琴の魂魄胎子に還着〳〵
弥陀二郎に
ひろひとられ

女乗物を守護し来るに行きあひぬ。時に造酒丞、二郎公光と見るより、近づきていふやう、「よき所にて、和殿にあひぬ。今日主君義治公、京都より御帰館あり、小人を召して、命ぜられたる一儀は、玉琴殿、御胤を宿して、はや臨月に近きよし。いつ／＼までつゝみおき給ふべきにあらずとて、近日あらためて、野分のたをはじめ一家中の者どもへも御披露あらんとなり。これに付きては、玉琴殿を、宮脇村の下館に引取り申すべしとて、小人に命じ給ふによりて、和殿の宅にまかりて、かやうに玉琴殿をむかひ取り、今彼所に送り去くなり。御親父八郎殿申されしは、小人重病にて、行歩かなはざれば、兒子公光を代として、送り申させんと思へど、折あしく他出いたしぬ。若し途中にてあひ給はば、具し給はるべしと申されし」と語る。公光これを聞きて、大にいぶかり、「何人ぞ、玉琴殿を取りかへしたるにかと思へど、父の詞に何といひなしつるや知らされば、うかと問もしがたく、心ならずも、打連れ立ちてゆきけり。程ほどなく下館にいたり、造酒丞下知して、乗物を座敷にかきのぼし、戸を開きければ、こはいかに、玉琴にはあらずして、八郎公連朱に染みて、うつぶしに伏居たり。造酒丞立ちより、抱き出して見れば、腹十文字にかき破り、はや息絶えて死しをはんぬ。(時に享年六十一歳也)口の裏に、手帕やうの物をふくみたるは、苦痛の息外へもれざるやうにとのかまへなるべし。實にあさましく悲しかりける事がらなり。皆此體を見て大に驚きこは何ゆゑの自殺ぞと、更に不審は晴れざりけり。二郎公光は途中より、とかく心安からざりしが「事によらば、おのれ一個の越度といひなし、腹きりて父の難儀を救はんもの」と覺悟を極めて、つきそひ来しが、思ひがけざる此體を見て、目もくれ心もきえて悲しけれど、多くの面前を恥ぢて一言をいはず、只さしうつぶきて哭居たり。時に十郎左衛門義治、此日下館にありしが、此事を聞きて奥の間より立出で、二郎公光に仔細を問はんとしたる所に、造酒丞八郎が懐中より、一紙の書を見つけ出して、義治に呈す。義治ひらき見るに、かねて用意やしけん、自筆を以て記したり。かたはらに命じて讀ましむるに、其文言の旨趣は、

相公、小臣を心がけよき者と思しけるにや、多くの人のうちよりえり出し給ひ、玉琴殿にあづけ給ふうへに、かの婦人は御胤を宿して大切の身なれば、晝夜心をもちひて守護したるに、はからず昨夜、玉琴殿を奪ひとられはんべりぬ。小臣重病に臥す折とはいひながら、油斷のいたり、露ばかりも申し分くべき言なければ、かく自殺し侍りぬ。君の罰し給ふをまたず、私に死するは臣たる者の道にあらずといへども、君御仁心深ければ、おそらくは自殺をゆるし給ふまじ。しかる時は、

一家中の諸士に對して、顔なしと存じ、是非なく命を待たずしてかくなりはて候。これ罪をかさぬる理なれど、こひねがはくばゆるし給はれかし。兒子二郎公光事は、小臣が病を祈禱のため、出雲明神に通夜して家にあらず。其夜の事實に存ぜざれば、何とぞ彼には御慈悲をたれ給はれかし。

などこまやかに記し、最期の急に臨みても、子を思ふ親心の思ひやられて、殊に哀深かりけり「なほ奥の方に、盜人の取りおとしたる物を、拾ひおき侍り、これを證に御尋ねあるべし」と書きて、相添へたる疊紙をひらき見ればおのが尾長の蝦蟇なり。義治をはじめ皆これを聞きて大に驚き、なほ二郎公光に仔細を尋ぬるにぞ、公光つぶさに物語りければ、扨は去年捕へたる、かの婦女を奪ふ蝦蟇つかひの賊どもの餘類の所爲に、疑なしと評議しけり。義治その始終を聞きて、しばし詞もなく、只さしうつぶきて、いたく物思ひたるけはひなり。公光これを見て、身うちの骨々を碎かる思ひして、やがて差添を拔きて、腹につき立てんとす。義治聲かけ「それ、とどめよ」といひければ、道酒丞やう〳〵その刀をもぎとりぬ。時に義治、面を正しうしていへらく「八郎わが命をまたず、私に自殺したるすら誤とおもふに、汝も亦我がゆるしをうけず、自殺せんとするは、何の道理ぞ。玉琴賊に奪はれしといへども、未だ生死をきはめず。汝さばかり思はゞ、しばしの暇を乞ひ、かの賊を尋出し、玉琴をとりかへして、父が罪をも償ひ、我が愁をもやすめざる。若年とはいひながら、愚なる奴かな。活きて功を立てんや、死して我に背かんや、いな〳〵」と聲勵まして責めければ、公光は一言の返答なく、只叫苦一聲して、恐れいりてぞ、伏居たる。義治表には怒の色を現すといへども、裏には情の意をかくし、不幸にして一個の良臣を失ひたるを、深く惜みおもひて、ひそかに涙さしぐみければ、公光は主君の仁心を感じて、頻に落涙し「小臣思慮淺く、そこに心づき侍らざりき。願くは、しばしの御暇を給はれかし。かの賊、たとひ天に路ありて上り、地に門ありて入るも、さらずは深淵の底猛火の裏にかくるるとも、念力の誠を以て尋出し、玉琴殿を奪ひかへして、御心を安んずべし」といひて願ふにぞ、義治、いかにも暇をとらすべき間、心をもちひて尋ぬべし。父がなきがらは、此儘すぐに菩提所へ送りゆけ」といひて、打ちしをれつゝ奥の間に入りければ、公光は其背後を伏拜みて、感涙袖をしぼりけり。道酒丞いひけるは「小人先刻玉琴殿をむかひのため、和殿の宅にゆきつる時、御親父なそかに申さるるは、實は昨夜、玉琴殿を盗人にうばはれぬ、小臣直に相公にたけきて、罪を賠び申すべし。御むかひの乘物に小人を乘せ、玉琴殿の體にもてなして、歸り給はれかし。此事は兒子にも、必ず知らせ給


篠村八郎



はるなと云はれしゆゑ、自殺とは察したれど、とても生きながらふべき心底とは見えず、若しうけひかずんば、其儘死ぬべき面色なり。義氣一徹の老人なれば、とゞむるとも止まるまじ、せめては心に任すべしと、望のごとく計らひしが、果してかくなり給ひぬ。和殿の愁傷、さぞと思ひやらる。此うへは、はやく玉琴殿を奪ひかへして、目出度く歸參いたさるゝが、亡靈へのよき供養ぞ」といひて、涙ながらに慰むれば、公光は悲しさやるかたなく「今日をかぎりと思ひせば、いかでかそばを離るべき。最期の日にもあはずして、空しきからを送る事、いかなる宿世の報ぞや」と、女々しきくり言云ひつゝ、むせかへりて倒れければ、造酒丞「其歎はうべなれど、時うつりては主君へのおそれあり、小人も送るべし。いざ〳〵」とこしらへて、乘物をかき出さしめ、つひに野邊に送りゆき、夕の霞にまがへて、むなしく煙となしはてぬ。哀れはかなき身のはてなり。

第六　野分の方季春櫻姫を誕ず

去程に、義治は世嗣をまうけて、宿願をとげしと喜びしに、はからずも玉琴をうばはれ、野分の方の隱惡とは夢にも知らず、一向、愁ひて居たりけるが、野分の方は、計をしすましたりと心中に喜び、玉琴が懷妊の樣子、且奪はれたること、公連が自殺のことまで、はじめて聞きたる體にもてなし、ともに驚き悲しむさまをなし、かへらぬ事どもくどきたてて、假哭などしければ、義治其體を見て「さばかり誠ある御身に、是までかくしおきたるは我が誤なり。はやく打明して、館のうちに据ゑおかば、かゝる凶事はあるまじきものを」と、悔いきこえけり。これより後野分の方、よろづに心をもちひて慰めければ、おのづから夫婦の中、前のごとくに睦み深くなり、つひに身おもくなりければ、義治をはじめ、一家中の喜なのめならず、神佛に安産を祈り、臨月遅しと待佗びけるが、夢のごとくに其年もくれ、建久三年壬子の三月十日といふに、玉のごとき女子を安産しけり。義治の喜いふべからず。扨この女子の名を、何と名づくべきやと商議しけるが、三月十日、花咲く盛に生れあひ、殊に櫻町中納言成範卿の孫なれば、櫻を以て名とすべし、と心一決して櫻姫とぞ名づけける。

抑々櫻町中納言成範卿と申すは、武智麿十二代の孫、少納言入道信西の三男なり。長門本平家物語を案ずるに、彼卿を櫻町と申しける事は、櫻を殊に愛し給ひて、姉小路室町の宿所に、總門の見入より、西東の町をかけて、並木の櫻を植通されたりければ、春の朝、をちこち人、異名に此町をば櫻町と申しけるよし。(盛衰記に吉野の櫻を移し植ゑしと云ふ)又一向花に心を移し、花の陰にて守り明されけ

れば、櫻本中納言とも申す。過ぎゆく春を悲み、來れる春を悦び、櫻を待ちし人なれば、櫻待中納言と詔には下されけるとかや。源平盛衰記に云く、「成範卿、殊に執し思はれける櫻あり、七日に咲散ることを歎きて、春毎に花の命を惜みて、泰山府君を祭られけるうへ、天照大神に祈り申させ給ひければ、三七日の齢を延べたりけり。さればかくぞ思ひつゞけ給ひける。

千早振る現人神のかみたれば花も齢はのびにけるかな

君も御感ありて、花のもとには、此人をぞすべきとて、勅書櫻町の中納言とぞ仰せける云々。」かく櫻を愛で給ひし人の孫姫なれば櫻姫となづけしも宜なりけり。

今年建久三年、鎌倉において、頼朝公征夷大將軍の宣下あり、天下悉く賀詞をたてまつる。これより四海大に靜寧にして、萬民安堵の思をなせり。建久九年つゞきて、八十三代土御門院の御宇となり、正治と改元あり。正治二年にして、建仁と改む。建仁三年にして元久と改む。元久二年にして、建永と改む。建永一年にして、承元と改む。年々馳するが如くして、しばらくもとゞまらず、なほ流水の海に歸するが如し。建久三年より建永元年まで十五年が間、鷲尾の家無爲にして、物語るべく記すべき事なし。

第七　清水の清玄櫻姫を恋慕す

[illegible]十六年を過ぎて、今年承元元年にいたり、櫻姫成長して、已に十六歳になりけるが、其容貌は、唐土の美人楊氏、虞氏、王氏のたぐひは見ねば知らず、又も一乾坤にあるべしとも覺えず。嬋娟たる両鬢は秋の蟬の翼に似て、宛轉たる双蛾は遠山の色にまがふ。秋の夜の月を待ち、わづかに山を出づる清光を見るが如く、夏の日の蓮をおもひ、初めて水を穿ちて、紅艷を見るよりもいさぎよし。誠に人間界の有にあらず、月宮の嫦娥下界に降り、貝闕の龍女凡地に出でたるにかと疑ふのみ。深窓の裏に扶けられて人となりければ、軒端の梅の匂いとかうばしく、谷の戸出づる鶯の聲うるはしきに似たり。都より數個の侍女を召抱へて傅かせ、もろ／＼の遊藝を學ばせけるが、心ばへやさしくかしこければ、和歌の道、絲竹の業は更なり、十種香、貝合せ、ゑかき、花むすびのたぐひまで、曉らずと云ふことなし。されば養治夫婦なのめならず喜び、日夜寵愛して、掌中の名珠よりもなほし勝れりとして、しばしも人の垣間見をゆるさず。しかりといへども其容貌の美麗なることは、あまねく近國にきこえて、公家、武家をいはず、婚姻をのぞむ者おほく、又、かれは、一人の女なれば他家へ婚娶らんこと、思ひもよるべからずと、心づく者は婿とならんことを願ひぬ。こゝに同國に、信田半太夫勝岡といふ者あり、其先祖を尋ぬるに、百濟國の人百年の孫、信太の首と[illegible]


櫻姫
清水に詣
地主の櫻を
賞し〳〵
和哥を詠を
清玄櫻ひめを
眷恋と



ふ人の後胤なり。(姓氏錄) 往昔は當國出雲の社邊、すべて知行せしほどの大家なりしが、當代平太夫が時にいたりて、家漸ゝ衰廢してげり。しかりといへども、いまだ遺財盡きず、田庄をおほく持ち、家人もあまたありて、猶尾にをさ〳〵劣らぬ富家なりけり。されば徒然草に、「丹波に出雲といふ所は、信田何某が知る所なり」とあり。はるか後兼好が時代までも、此所に信太の一族殘り住みけるにや。此平太夫容貌はなはだ醜惡にて、性質きはめて奸佞なり。しかのみならず驕奢に長じ酒色に耽り、不仁を好み禮儀を知らず、田夫野人にひとしき輩なり。かれ、いつのひまに櫻姫を見初めしやらん、深く執愛して轉想に逼り、心ききたる者を媒にたのみて「こなたへ娶ることあたはずんば、婿とならん」と望みけるが、義治日來平太夫が爲人をにくみ居たれば、さらに諾はず。かへりて彼が行ひのあしきを數へて、さま〴〵誹謗しけるにぞ、媒人は口を閉ぢ面目を失ひて立ち歸り、ありのまゝに語りければ、平太夫大に憤り深く義治をにくみ、遺恨の原とぞなりにける。これ乃ち、櫻姫の一旦零落すべき端なりけり。扨櫻姫は祖父成範卿の性をうけつぎたるにや、もろ〳〵の花を好むうちにもわけて櫻を愛し、庭も狹に櫻を植並みて、春毎にながめ飽かざりけるが、都には花の名所おほしと聞き、上京したきよし願ひければ、義治これを許し、家人田鳥造酒丞美長並に山吹といふ女兩人に、旅中の守護を申しつけ、旅のよそほひをとゝのへしむ。此山吹といふは、家人佐伯平彌二といふ者の女にて、いまだ年若けれど志正しく、かしこき女なれば、かねて櫻姫が守り女となして、傅かせけるなりけり。其餘、侍女、女童、下部など、あまた具さしめ、三月上旬に發駕せさしけり。かくて櫻姫は旅めづらしく、殊に晴和の天氣に催されて、諸山の花發き、春草靑々たる野外の好景に、目さむるこゝちし、氣もはれ心もうきたちて、行程のうさを忘れ、急ぐとしもなけれど程なく都につきて、旅舍に逗留し、此彼の名所舊蹟を見めぐりて、名花をたづねけるが、一日名におへる地主の櫻見んとて、まづ嵯峨、仁和寺、北野あたりを逍遙し、つひに淸水寺に詣でける。櫻ひめ此日の粧扮いかんとなれば、黃金、銀に玉を加へてつくりたる花の釵をなのめにさし、黎の髮嵐流につかねなして、蟬の羽を重ねたらんが如し。白綾の下かさねに雪の肌をあらそひ、纐纈の上著して、今樣色の裲衣に、縫匠の手を盡さして吉野山の春の景色を繡し、袖口に五色の紐をくゝりたれて、いと淸らにからばしきを著たりけり。數箇の侍女、女童を左右にしたがへ、銀地のさゝやかなる扇を額にくはへて、日のかげを遮りつゝ、蓮歩かろく移せば、靑柳の風になびくに異ならず、初花の雨に笑めるかとあやまたる。田鳥造酒丞、山吹の兩人は前後を守り、轎

子、行厨など後に持しめて、なみ／＼ならぬ上﨟とは、いはずとしるき行粧なり。貴賤群集の都人、美女を見あきたる目にすらこれを見て、よも凡人にはあらじとぞ云ひあひける。櫻姫まづ本堂にいたりて觀音を拜し、扨山中の花を見るに、聞きしにまさる名花なり。再び瀧のもとにくだりて見ればこゝなるは殊にまさり、咲きも殘さず散もはじめぬまさかりの時といひ、三條の瀧に花のかげのうつりたるさま、えもいはれねば、深く興じて一首の和歌を詠じ、乗物のうちより硯とり出さして短冊にかきつけ、花の枝に結びつけさしけり。其比當山の住侶、敬月阿闍梨ときこえしは、承久一亂の時にいたり、官軍にくははりて宇治の合戰に敗し、東士に捕れたるに、「勅なれば身をばすててき武士の八十宇治川の瀨にはたゝねど」と詠みて、死をまぬかれたる殊勝の法師なりしが、（以上東鑑）其徒弟に淸玄といふ僧ありけり。年いまだ若けれども性質聰明にして學業に眼をさらし、朝には歌の中山の嵐に讀經の聲を勵し、夕には三の瀧の淸きに心水の月をみがきて、三密のつとめこまやかに、八正の道たゞしく、妄想をはなれ世塵をはらひ、道力堅固に行ひすましてぞ暮しける。曾て傀儡の綺語雜劇の院本等につくりて勸懲の意をしめし、普く兒女の耳にふれたる淸水の淸玄法師といふは、乃ち是なり。轟坊に住みたるゆゑ、轟坊の淸玄ともいひけるとぞ。

案ずるに、説文に「淸淨之處。曰、西淸又淸淸玄洒一也。玄洒明水也云々。」淸玄の法號、これを據とする歟。玄は水也、淸玄の文字に、おのづから淸水の義あるも、又不可思議ならずや。

しかるに此時、淸玄香水を供ぜんと、みづから閼伽桶を提げて瀧の水をくみ、何の心もなく石段の半を上りけるが、偶顧て櫻姫と顔見合し、櫻姫おもはゆげにうち笑みける。時しも一陣の冷風さと吹きおろして梢の花をちらし、淸玄が皮肉にぞつと冷えとほると覺えしが、心神醉へる如くなりて「世にはかゝる美人もありけるよ」と他見めもせず、惘然として閼伽桶をとり落しければ、はつしと箍きれて、桶くだけ水ちりぬ。千代能が歌のたくみし桶にはことかはりて、忽ち悟心の明月煩惱の雲にかくれ、膽魂空に飛びうせて、しばし見とれて站みけるが、やゝ心を轉じ「あさまし／＼、佛戒に、女人に近づくを以て、身を火燒に投げうつに譬へしものを」と思ひきりて、二脚三脚あゆめど、とかく櫻姫の容儀に心ひきもどされ、又站みて去りかねけるが、諸人の見とがめんことのはづかしく、依々戀々として、轟坊にぞ歸りける。櫻姫は一向花を賞じて餘念なかりけるが、春の日の長きもやゝ時移り、花よりひとく、入相の鐘とともに、諸人の散りゆくを見て、山吹下知して歸路をうながしける。折しも目せき笠深くかづき、袴のくゝり高くひきあげ



田島造酒丞泰長
清閑寺村に
四士とあらそひ
勇をふるふ




三木之助
伴宗雄と
宇治川に
船遊して
桜姫の
恙病を
とくふ



て、長き刀をおびたる武士兩人、肩を鼻平太にかざしたるが、いたく醉ひたるさまにて「月にはつらき小倉山、その名はかくれざりけり」と、聲もしどろにうたひつれて、浪々蹌々と歩来しが、やがてつとよりて、一人は拳を打ちふりて侍女下部を打倒し、一人は櫻姫を捕へて小脇にかいはさみ、兩人相共に合ひて飛ぶがごとくに逃去りけるにぞ、山吹大に驚き、あとをしたひて追行きぬ。田島造酒丞は此時布施物をさめんため本堂に行きしが、舞臺の上より此體を見て大におどろき、韋駄天の如くはしりてともにあとを追行きけり。しかるに山吹は清閑寺村のあたりにて追ひつき、姫をとりかへさんと爭ひければ、そこに居合したる早麥こなす賤女等、農具をすててにげさりぬ。かくてほと〳〵危き所へ、造酒丞やう〳〵走りつき、兩人の癖者を蹴倒して、櫻姫をとりかへし、山吹にめくはしして姫を落しやりける所に、竹林のうちより、同じさまに打扮ちたる武士兩人あらはれ出て、姫のあとを追はんとす。造酒丞飛びかかり、兩人が頸つかみて引きかへしけるひまに、前に倒れたる二人の武士起上り、都て四人一度に編笠をかなぐりすて、箇々刀を抜いて斬りかけたり。造酒丞は曾て劍法を熟練し、殊に早業の達人なれば、是等は物の數ならず。此頃はいまだ世にまれなる颺扇といふ農具の傍にありけるをとりて、四人の劍をはつしとうけとめ、手ばやく腰刀を抜いて、水車のめぐるが如くふりまはしければ、晃々たる光は雲をつらぬく稻妻のごとく、颼々たる音は梢をならす暴風に似て、近づくべうもあらねど、此方の四人も、さすが膽ふとき輩と見えて、ひるむ色なく、陰にかこみ陽にひらき、火花をちらして闘ひけり。造酒丞かく急しきたゝかひのうちにも一計を生じ、かの颺扇を以て楯とし、波上にひるがへる燕のごとく身をなして、前にあらはれて丁ときり、後にかくれて身を避くれば　すこしもこれを見とむること能はず、すきまもなくひらめき來る四人の刀、皆いたづらになりて、只颺扇に數個所の疵をおはしぬ。かくありて片時ばかり闘ひけるが、造酒丞は勢ます〳〵猛くして、武藝の秘術を盡す。四人の者はほと〳〵戰疲れてやゝ劍法みだれ、一人刀を打ちおとされて、せん術なく杷をとり、暫に打ちかけ引倒さんとするを、造酒丞手ばやく、これを斬折りぬ。又槌をとりて打ちかかるを、身をひねりて打ちおとす。尙こりずまに、殼竿をつかみて目つぶしに打ち、或は杵をとりて打ちつけなどす。三人の者其虚に乘じて、すき間もなく斬りこみけるが、造酒丞が身のかろく敏きこと、恰も風に玉屑を颺し、雪の瓊花を撒すがごとくにて、阿吽の呼吸につれて、忽ち一人を左袈裟に斬りおとし、かへす刀を横にはらひて、一人を腰車にぞ斬りたりける。殘る兩人は此勢におそれ、あまた手を負ひながら、深

田に闖入りて氣失せたり、湯酒水は素より戰を好むにあらず、只姫の身のうへのみ氣づかはしければ、暫しも休息ひがたく、田の水に刀をそゝぎて鞘にをさめ、いそがはしく姫のあとを慕ひゆきけり。彼四人の者は何人ぞなれば、則ちこれ、信田平太夫が家人等なり。主人の命により、櫻姫の旅行をうかゞひ、奪ひとらんとして事を仕損ぜしなりけり。平太夫は家人を打たれて、ます／＼憤りけるとぞ。扨櫻姫は山吹に扶けられて逃れゆき、此地の案内を知らざれば、路に迷ひて宇治川の邊までたどり來つるが、思ひがけざる危難にあひて心を惑かしめたるうへに、歩みなれざる玉鉾の道の小石に足をそこなひ、ほと／＼身體疲れて、そのまゝ路に倒伏し、いと苦しげにうめき、息もたゆげになりぬ。山吹は周章てふためき抱起げて、藥をまゐらせんとすれど、身うちにたくはへず、湯水をとおもへど、近きあたりに人家もなければ、こは何とすべきと心地まどひて、誠にせんかたなき折しも、川そひ柳のかげに櫓の音ひゞきて、一艘の小船を漕出し、船中のあるじ言ひけるは「それなる女中にもの申さん、よしありげなる上﨟の、俄に胸病み給ふと見うけたり。さぞなわびしくおぼされん。此船に乘せまゐらして、介抱し給へ」といふ。山吹これを聞きて、背後を顧み「こは情深きおほせかな。見給ふがごと、危急の難儀に逼り候へば、苦しからずば、暫しそこ借りはべらん」と云へば、「いざ給へ」とて、船を岸につけぬ。山吹うれしく、姫を抱きて船に移しけるに、船中のあるじ、印籠より藥をとり出して與へ、湯などのましめ、ともに介抱りける。そのかひありて、櫻姫やや胸のくるしさを忘れ、人ごゝちつきぬれば、山吹はため息吻とつきて、安堵の思してげり。姫はやう／＼頭をあげて、船のあるじを見るに、年のころは二十ばかりと見えて、又たぐひなき美男なり。烏帽子商人の大太郎やためけん今様の烏帽子に、紺搔の紺五郎などが染めたらん褐色の袴著て、きら／＼しく飾りたる小鞘卷をおび、衣紋のたゝり六波羅樣に著なして、いと風流に粧ひぬ。〈大太郎紺五郎共に盛衰記に出づ〉たゞ船中のさまを見るに、唐花を織出したる毛席をしき、提盒、樏子やうのもの、偏提などとりちらしつ、芹川の根芹、桂川の若鮎、此ながれの氷魚なども肴には調じたらん。纔のかたにはかしこげなる男の童、野風爐の火をあふぎ居つ。よしある人の櫻狩などに、しのびて出立ちしとは思はれけり。櫻姫所せき船のうちに、かゝる美男子のそば近くむかひ居れば、耳ほてり顏赤らみ、何といふべき言の葉もなく、唯さしうつむき、腮を衿におし埋みてはぢらひけるが、胸のうちのおもひの波は溢るゝばかりにて、かゝる風流士は又類あらじと、のち／＼の思ひ種を植ゑそめけり。若人もおなじおもひに、胸をこがしぬ。かくて時うつり日もく、れ


清玄自懺悔して正覚に
皈さんことを祈ると
不動忿怒の
容櫻ひめの艶麗
凡情出離



はてゝ、夕月夜のおぼろげなるも、また思をなやましむる媒なり。こゝなん橘の小島に近きあたりなれば、兵部卿の宮四阿家をゐて、船に乗り給ふ俤ありてゝ、八千とせもふべき此流の契の深さをば、たがひの思にくらべつべき風情なり。山吹は志たゞしき女なれば、かゝる若人のかたはらに、姫の長居せんこと悪しかるべしと心づき、あつく此場の恩を謝し、姫を催して罷りなんとしたる時に、折よく田島造酒丞たづね来り、侍女、下部等も追々にはせあつまり、衆皆姫の恙なきを喜び、歸路をうながして轎子に扶けのぼしければ、姫ひたすらかの若人を顧みてわかれを惜む。若人は姫を見おくり、心を残して船をいだし、たがひの偸眼におもひを通はし、ものいはぬ山吹の瀬をへだてゝ別去きけり。かの若人を何人と尋ぬるに、播州宍粟の郡土佐希雄の息男、一木之助佐宗雄といふ者なり。頃日上京し、此日宇治川に遊びて、おもひかけず櫻姫を見こめけるなり。さて造酒丞山吹は櫻ひめを守護して旅舍に歸り、此日の事をかたりあひて、かの四人の者等は、たしかに信田平太夫が家人なり。油断すべからず。はやく歸国にしくまじとて、翌日俄に發足しけるとぞ。

第八　清水を退去して清玄落魄す

さても清玄は櫻姫を粉戀し、せめての心やりと、花につけたる短冊をとりて見つ。歌の意のやさしく手跡の見事なるに、いとゞおもひまさりけるが、こはあさましく悲しき心かなと、自おもひをひるがへし、一室のうちに引籠り、觀法定坐せしが、胸の佛のいづくに隠れましけん、かの俤のみ幻に立ちて眼にさへぎり、少しまどろめば、夢にはひたすら添臥しするこゝちして、忘れんとする心から忘られぬ容を引出し、よしなしと捨つるおもひにいよいよおもひ出して、しばしも離れずたちのかねば、貪愛欲の水に智恵の火をけされ、執着の雲に佛性の月隠れて、あるにもあられず、我ながら我ならで、かの短冊をいたゞきて病の床に臥し、食すゝますものいはず、唯うつらうつらとして、凡そ百日ばかりなやみ、ほとほと命もあやふく見えけるが、師の房敬月阿闍梨しばしば教化し給ふにより、すこし胸ひらけて、おのづから病もおこたり、熟思ひけるは、我が道力のたゆみたる時を天魔のうかゞひて、煩悩魔のきざしけるよと口惜しく悲しく、若し断妄の利劍をもちひずんば、他生の悪縁をひき、永劫悪趣に沈むべし。はやく佛に懺悔して、妄念を拂ふべしとみづから志を勵し、やみつかれて身體自由ならざるを堪へしのびて、三の瀧に垢離をとり、一室の内に不動明王の木像を安置し護摩壇をかまへ、法衣をあらためて壇上にのぼり、金鈴をふりならし、最多角なお

しもみて、明王慈救の神咒を誦し、一心不亂に祈りければ、護摩の烟は一すぢにのぼりきて、雷電の音はたゞるがごとく、仏前の聲は堂外にひゞきわたりて、幡蓋のとゞろくに異なる聲して、いかなる惡魔も、障礙をなさじとぞ見えたりける。かく丹誠をつくし、身うち汗になりて祈禱の法を修し、[illegible]の頼勤上人は御息所の歌を以て正覺に歸し、清閑寺の眞濟僧都は化人の歌によりて、愛心を斷じたるためしもあるものを」と、かの短冊をとりて火中に投じ、自ら心を試し見んと、觀念深く眼を閉づれは、不動の尊像ありありとあらはれ給ふ。こはありがたし嬉しと眼を開けば、さらすさまじき明王の御姿の容、忽ち櫻子の嬋娟たる姿と見えて、あけぼのの如く目前にあり、あなあさましと、再び眼をとづれば又明王の容となり、ひらけば又櫻子の姿と見え、とづれば明王の容と見え、くりかへす念珠の數、百八の煩惱さらに消えやらず、妄念ますます出離せざれば、はらはらと落涙し「我かくまで道心をこらすといへども、凡情をまぬかれざるは、よくよくあしき宿世の報ならん。此うへはよしや佛の冥罰うけばうけよ、[illegible]、かの姫の住所姓名ただしりとも尋ね出し、おもひを遂げでおくべからねども、我執着の一念にて、いづくにあき[illegible]、眉をさかだて眼血ばしり、いと苦しげにつく息は焰のごとく、念珠をふつとひききりて火中になげいれ、口來誦したる經卷も盡くひきさきて投火すれば、猛火盛んに燃えあがり、いづれを明王の火炎とわかちがたく、[illegible]の光景眼前にあるがごとし。清玄[illegible]にあれて、獨鈷、三鈷、羯摩、花皿蹴散して、すくと立ちたる形勢、三井の[illegible]に化すべき勢も、かくありつらんと思はれて、物したんど云ふべからず。此時しも同宿二人はしり出で、押ししづめんととりすがるを、左右へ合破とつきたふし「たとひ奈落におつるとも、かの華ゆゑならばいとはじ。華よ[illegible]」と呼はりて、狂人のごとく[illegible]きつゝ走り出でて、いづくともなく逃失せけり。

曙草紙巻之二終

櫻姫全傳曙草紙巻之三

第九　蝦蟇を咥へて小蛇兩士を會せしむ

彌陀二郎は去ぬる建久元年より今歳承元元年まで十八年が間、日本六十餘州を回國して、靈場寶地いたらざる所もなく、それがしの國かれがしの郷に寓居して、諸人を勸化し、この頃は陸奥にありしが、一旦古郷にかへり都のありさまをも見ばやと、頻に思ひて歸路にのぞみ、相州足柄を越え、竹の下道を過ぐる時、俄に時雨そゝぎければ、傍の辻堂に入りて雨やどりす。そのあとより竹篋を負ひたる雲水の僧、おなじく辻堂に入りてやすらひ、二郎が携へたる錫杖と鉦をつれ／＼見やり、いぶかしき顔して「おん身の持ちたる鉦の裏に常照といふ文字はなきや」といふにぞ二郎「いかにもしかり」と答ふ。旅僧再ねて「おん身、其二つの物はいかにして持給ふや、必定いはれあらん」と云ふ。二郎此僧をよく／＼見るに、前の年額に火印したる僧によく似たれば大にあやしみ、恭しくいひけるは「此二品につきては、有難く尊き物語あり。語りてきかせ申さん」とて、おのれ元來惡性なりし事を始として、淀の一口にて頭陀の沙門の額に火印したるが、粟生野の光明寺の釋迦佛の額に火瘡の痕ありしこと、佛の告により淀の神の木にて靈佛を感得し、惡二郎といふ名を更へて彌陀二郎と呼びたるいはれ、廻國修行に出でたるまで細かに語り「御坊の容貌其時の沙門によく似たり」とて語りければ、旅僧聞きをはり「果して佛の御告にたがはざりき、我が方にも又いみじくたふとき物語あり、聞き候へ」とて語りけるは「抑愚僧は黒谷上人の徒弟にして、專修念佛の行者なり。去ぬる建久の頃は、山城の國にあり、毎日淀の邊を勸化しけるが、一夜の夢に容貌端麗の僧枕がみにたちて宣はく、汝此後淀の邊にゆくことなかれ、若しゆかば必ず災あらん。汝が鉦と錫杖を我に得させよ、我一人の惡漢を濟度すべきため用ふる所あり、と宣ふとおぼえて夢醒めけるが、傍におきたる二品已に失せたり。愚僧が法號を常照といふゆゑに、鉦の裏にその文字を鏤りつけおきぬ。今おん身の携へたる二品は、我所持の物にまぎれなし。其後淀の邊にゆかず打過ぎしが、さては夢中の聖僧は光明寺の釋迦佛にて、愚僧が所持の二品をとり給ひ、我が姿に現じ、おん身を濟度し給ひしか、勿體なや、たふとや」とて感涙をながし重ねていひけるは「其後我阿彌陀の眞身を拜すべしと發願し、八幡の神宮に祈りて志念撓まざりしが、一時

太神告げ給はく、阿彌陀佛の眞容を拜まんと思はば、淀の彌陀二郎といふ者に會ふべし、かれ眞身の彌陀をもり奉れり、とのたまふ。(山州名跡志と同説) これによりておん身の在所を尋ぬるに、同國修業に出でて年久しく、故郷に歸らぬよしを聞きて、我常に宿願をとげざるを愁ひ居たるに、今日はからず出會のうれしさよ。今語られし水中出現の御佛は、眞身の彌陀佛に疑なし。とくとく拜ましめ給へ」といひければ、二郎も奇異の思をなし「さては光明寺の尊像、上人にかはり給ひて、我を濟度し給ひしか、ありがたやかたじけなや。其靈佛は、則ちこれなり」とて、笈をひらきて拜ませければ、常照阿闍梨殊勝の思、心骨に徹し感涙雨をなしにけり。さて二郎いひけるは「小子かねて一宇の佛堂を建立し、此御佛を安置し奉るべき大願あり、ゆゑに年久しく諸國をめぐり諸人を勸化し、旅中なれば其布施物は身におぶる事あたはず、その最寄より粟生野の光明寺につかはしおきて、已に半とゝのひたりといへども、未だ開山とすべき有徳の人を得ず。幸ひ上人は此御佛に因縁深ければ、希くは、ともに力をそへ給ひて、開基の主となり給はれかし。小子かねて剃髮染衣の望ありといへども、主君のため一功をたて、舊惡の罪を償ひて後にあらざれば、姿をかへがたき仔細あり。凡俗の身にて、かゝる靈佛をもり奉らんことおそれあれば、志をとぐるまで上人にあづけ申すべし」と云ひければ、常照阿闍梨、かれが惡を去りて善に歸したる志念の誠を聞きて、尋常の人にあらずと感嘆し「佛堂建立の事は、愚僧も力を盡すべし」とて、御佛をうけとりておのれが笈にをさめ、光明寺にて再會すべしと互に約し、やうやく雨やみければ、阿闍梨は別を告げて出去きけり。二郎あとを見おくりて立ちたる折しも、野寺の鐘入相を告げて、日も暮れなんとすれば、寧ろ此堂に一宿すべしとおもひ、鉦打ちならし念佛まうして居たるに、忽ち一陣の冷風さと吹きて木の葉をちらし、二郎が身うちに冷えとほると覺えしが、何方ともなく一條の蛇いで來り、石の地藏の背後に入り、やがて疊紙の樣なる物を咥へて再びいできたり、紙をくひ破り裏より蝦蟇の干からびたるを出して、くらはんずる樣子なり。二郎怪み、蛇を追ひやりかの蝦蟇をとりて見るに、長き尾ある蝦蟇にて、尋常の物にあらねばますますあやしみ、石佛のうしろをうかゞひ見るに、若き旅侍假睡の體なり。二郎錫杖をとりて床の板をつきならしければ、かの侍眠を醒し、欠し伸しつゝ二郎を見やり「汝何等の奴なれば、我がねぶりを妨げつるぞ。修行者に打扮ちで盜する奴ならめ。いで、拳を與ふべし」とて打ちかゝりければ、二郎其腕をしかととらへ「汝こそ賊なれ。これを見よ、今一つの小蛇出來りて、此物を咥出したるは、汝が懷中に疑なし。世に稀なる此尾蝦蟇を




弥陀
二郎
辻堂に時雨
と遯て常照
阿闍梨に
遇小蛇尾
長蜈蚣を
嘔て両土試
會せしむ

持つからは、傳へ聞く、蝦蟇つかひの賊にまぎれなし、捕へて糺明すべき事あり、疾くいましめを受けよ」とて、腕をかへして捻倒さんとせしか、此侍もたゞ者ならぬと見えてこともせず、忽ち一脚を飛して二郎を蹈倒さんとす。二郎素より早業の達人なれば、ひらりと身を閃し、背後より組みつくを、かの侍總身の力を肱にあつめ、呀と一聲叫びて肱おとしに落しければ、二郎堪へずして手を放しぬ。かくてあるひは組みつ、あるひはほぐれつあらそひ、はてには髻をつかみあひ、汗水になりて捻合ひぬ。時に山の端を上る夕月夜の光に乗じ、かの侍二郎が顔をつれ〴〵と見て「權しまたれよ、おん身は眞野の水二郎殿にてはなきか」といふ。二郎原の名を叫ばれて、いぶかりながら手をはなしければ、かの侍かさねて云く「小人丁角の時なれば、見忘れ給ひつらん。篠村八郎公連が一子、公光にて候」といふ。二郎驚き「うべしこそ、見おぼえし所残りぬ」とて、互に思ひがけざる出會を喜ぶこと限りなし。公光いはく「おん身いかにして、此蝦蟇のいはれを知り給ふや。」二郎いはく「小子今に到りて先非を悔い、主君のため一功を立てて、舊悪を償はんとおもひし折から、前年、主君の愛妾玉琴を、蝦蟇つかひの賊奪ひ去りしと聞き、彼者は原白拍子にてありし時、小人見知りたる女なるゆゑに、諸國修行のついで、かの賊徒を尋ね玉琴の生死を糺明して一功にせんと心懸けしが、今蝦蟇を見つけて、おん身とは夢にもしらず、かの賊徒ならんとおもひて無禮の事におよびつ。おん身は又何のために此物を持ち給ふぞ」といふ。公光「これには長々しき物語あり」とて、玉琴を奪れて、父八郎公連自殺したること、主君の仁心にて暇をたまはり、玉琴の行方をたづねんため十七年が間、諸州各府に寓居し、憂き年月を過したる事を物語りければ、彌陀二郎はじめて其仔細を知り、おのれも亦靈佛感得のことなどとりまぜて物語り、夜もすがら互の艱難を語りあひて夜をあかし、つひに再會を約して別去きけり。

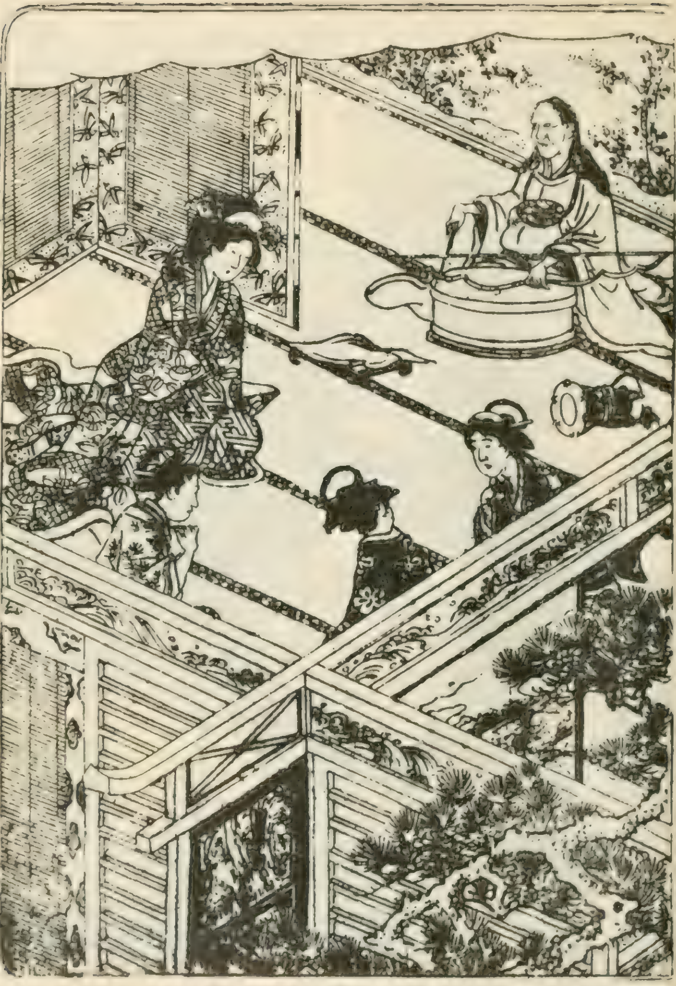
第十　櫻姫宗雄を慕ひてひとたび病に臥す

さても櫻姫は三木之助伴宗雄を見そめてより、國に歸りてもとかく忘れがたく、一向おもひにせまりけれども、何方の人いかなる者と其姓名をだに知らず、物やおもふととふ人もなく、語りて慰むかたもなければ忍び〳〵てつひに病となり、つや〳〵物もくはず、面痩せ身ほそりければ、漢の李夫人昭陽殿の病床に臥したりけんもかくやとぞ人申しける。義治夫婦大に驚き、名醫をむかへ良藥を與へ、種々療養を加ふるといへども、ふつに驗なし。野分の方は子を憐れむこと世の人に越えて厚く、強悪の志

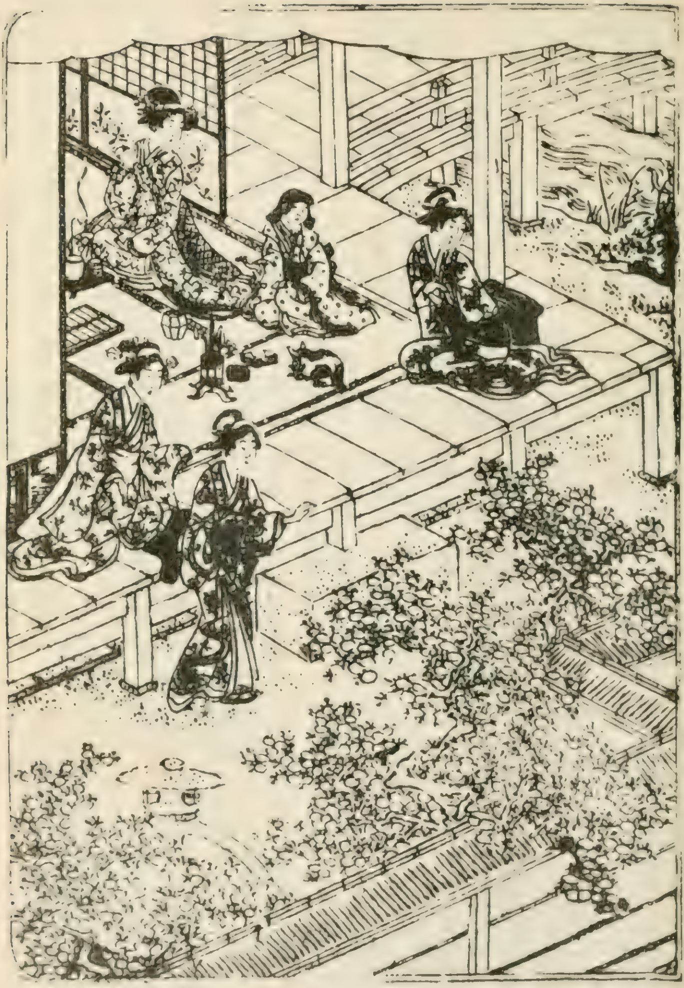
には露ばかりも似ざれば、姫の病を深く悲しみ、終日終夜、枕方にそひ、心を盡して看病りけるが、其かひもなければ、聰明伶俐の胸も子故の闇にくらみ、大膽不敵の志も子をおもふ情に弱り、高僧修驗の加持祈禱は更なり、堀川の盲入道の占、照日の神子の梓にまで問へど、其病根だにさだかならず、いつ愈り果つべうも見えざりけり。かくて其年もくれ、承元二年の春になり、櫻姫の病少しくこゝろよきかたに赴きければ、双親の喜なのめならず、保養のため富脇村の下館に移らし、侍女女童あまたそへて、歌合、繪合、糸竹のしらべなどに心を慰ませけるが、頃しも三月の天にて、百花あらそひ開き、鳥雀巣をいとなみ、佳氣人心を催す時いたり、庭上の櫻今を盛なれど、姫は日ごろ好める花を見るすら心憂く、かへりて去年の京上りの時を思ひいだして、宗雄がことのみ胸に絶えず、とかく思をなやましけり。一日侍女等打寄り、何がな慰種にとて、爛漫たる花の下の小軒子に姫をうつし、十種香、貝合など、さま／＼の遊して居たる折しも、手飼の猫、櫻の枝に蝶の飛ぶを見つけ、築牆にかけのぼりて蝶にくるひけるが、頸にむすびたるくけ紐とけて花の枝にかゝり、猫はもとの所に飛返りぬ。

爰に又三木之助伴宗雄は、父の召仕ふ惡奕の讒言によりて、其身露ばかりも罪なしといへども、父希雄の勘當をうけ、播磨を去りて當國に流沈へけるが、此四五日前當所にうつり、此下館の築牆一重をへだてたる室屋をもとめて住みぬ。彼生得閑雅にして、常に書を讀むことを好み、詩歌を吟じ琴を撫して樂とす。さて一日外の方にいでて鬱悶をなぐさめけるに、築牆を越えて此方へさしいでたる花の枝に物あり、風につれて令々とひゞきぬ。宗雄竹の竿をとり、打落して見るに、金銀の鈴をつけたる錦のくけ紐なり。「こは必ず隣屋敷の飼猫の頸綵ならめ」と、ひとりごちたるがもれ聞えけん、かへ塀越に「そはこなたの物にはんべり、かへしたはまれ」といふ。宗雄これを聞き、梯をとりて塀にのぼり、かの紐を投げつかはしけるが、今ものいひたるは櫻姫の侍女なり。此時宗雄と櫻姫顏見合し、あまりに思ひかけざる事なれば、互にこは夢かうつゝかと、胸とゞろかすばかりなり。姫は嬉しさとはづかしさに顏さと赤くなりて、何といふべき言の葉もなし。宗雄は、かれは宇治川にてまみえたる上臈に疑なし、さては鷲尾の息女にてありしかと、はじめて知れど卒爾にものもいひがたく、梯を下りて裏にいりぬ。姫は遊び業も手につかず、渾心もなげにて、さながら酔へる人のごとし。思ふに、宗雄おもひかけず隣に家をもとめしは、全く宿緣の深きにて、緣あれば千里をへだつるとも逢ひ易く、緣なければ面を對するとも見ゆること難し、といふ常言の類なるべし。かくて櫻姫はおもひのあま


攝州伴宗雄がちやくし
病に臥義治夫婦これが
為名医をむかへ
良薬を用ひ或ハ加持祈祷
或ハ卜筮拌辛の法さまざま
心を尽くすといへども
快験なし




櫻姫病を保養のため
下館に移る伴宗雄父の
勘氣をうけて丹波に
さまよへの館の隣家に
住く やまひうけど
櫻姫に遇



り、恥かしさをしのび、侍女等に心のうちを語りければ、侍女ども一計を生じ、姫に文かゝせ紙鳶にゆひつけて空にのぼし、糸をたちて放ちければ、風につれて宗雄が書を讀む窓のもとにおちぬ。宗雄これを拾ひとりて、文をひらきて見るに、紅梅檀紙を引重ねて、日來のやるかたなき思を、こまやかに述べたる筆のはこびも拙からず。宗雄もおなじおもひに、あくがれ居たる折なれば、いそがはしく返書をかきて、又紙鳶にゆひつけ、風のかはるを待ちて空にのぼしければ、隣には侍女等疾くこれを見つけ、翠簾の鈎をなげて紙鳶の糸にからみ、返書をとりて姫にわたせば、とる手おそしとひらき見るに、其情我と露ばかりも違はねば嬉しさにたへず、これより病の氣もいづくへかゆき、度々かよはせ文をとりかはして、逢見んをりをはかりぬ。さて一時、宗雄が文の結末に、一篇の詩あり。

　翩々雙蛺蝶　時入苑中花
　相見撫琴坐　西隣是卓家

櫻姫も文のおくに、一首の歌を書きてつかはしけり。

　あかず見る梢の花し中垣のそなたに散す風もふかなむ

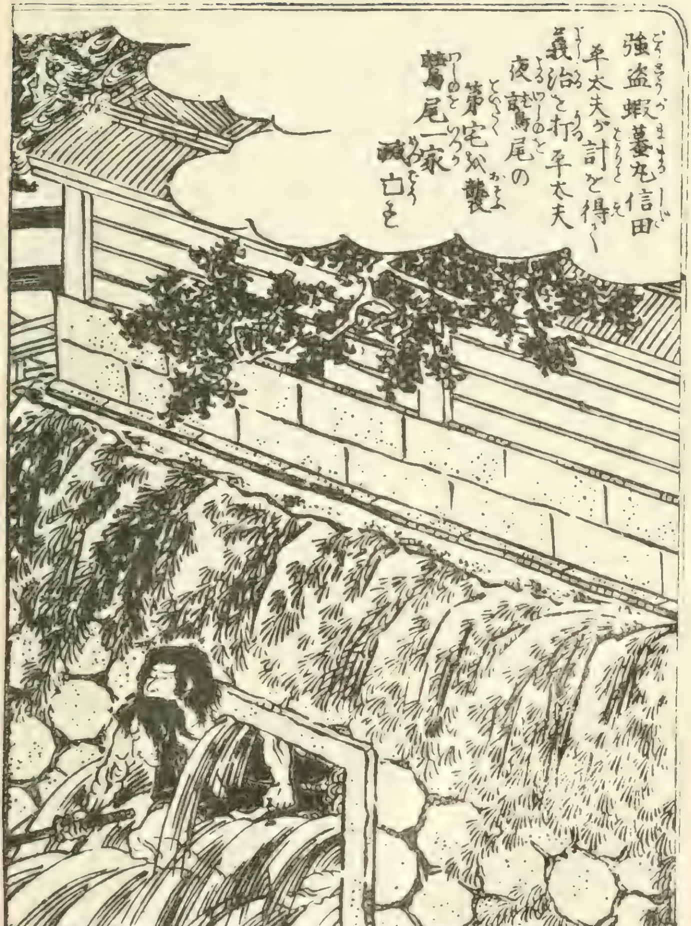
さて侍女どもと計りて、一夜宗雄をしのばせけり。宗雄庭づたひに來り、月暎に乘じて四方を顧みるに、庭もせに植並みたる櫻花は錦の帷をひきたる如く、木の間〳〵の躑躅は紅の氈をきたるに似たり。松にかゝる藤波は風にそよぎて、瑠璃の瓔珞を垂れたるにひとしく、池にのぞむ荼蘼は露にたわみて琥珀の連珠を貫きたるに異ならず、假山のたゝずまひ、やり水の面目、一つとして雅ならざるはなし。閨房の光景を見るに、軒端に玉をかざりたる鸚の籠をかけ、窓の下に書案をまうけ、紫の唐の錦をしきて、鑄かけ地に蒔きたる硯箱をおき、手ずさみに書きたる反故どもにや、さゝやかにおし卷きたるをあまた取りちらしつ。傍に螺鈿の厨子あり、これは櫛の箱、打亂の箱香具の箱など、諸の調度を、收むる所なるべし。椸架には、色々の繡、纐纈、今樣色の類の小袖どもを取具してかけたり。文車には、世に希なる草紙どもをつみぬ。壁には定家、家隆をはじめて、當時名高き歌人の色紙をおしたり。そのもとに、琵琶、和琴、笛のたぐひを並べぬ。すべての物、みな艶に微妙なり。黑方侍從の類にや、たきもの香みちて、ひとへに人間のうちとは思はれず、仙窟にいりけるかと疑はれぬれば、げに〳〵富貴の光景かなと、且づ心中におどろきけり。櫻姫立出でて宗雄を几帳のもとにいざなひければ、侍女等美酒嘉殽をさゝげてもてなしぬ。姫はおもひにせまりて、病に臥したる日來の幽情を語りて、うれし涙に袖をぬらせば、宗雄は父の勘當をうけて當國にさすらひ、おもひかけず隣家に移りたることを語りて、奇遇のほどを喜びけり。姫いはく「此程のかよはせ文にて試み

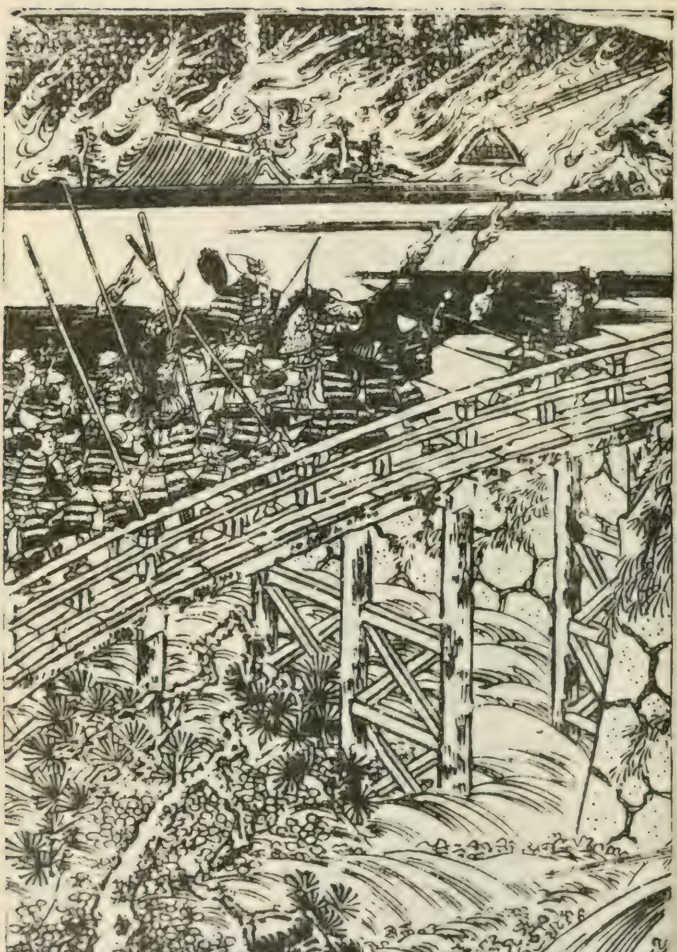
はべるに、君は風雅詩詠をよくし、手跡も古人にはおとり給はず。妾も亦愚ながら、歌よみ、繪かくことを好みぬ。このごろ都よりもとめたる物語繪、見せまゐらせん」とて、取出して見せしむ。宗雄これを見るに、小野小町が一期盛衰の事を圖したる繪にて、神彩生動、眞に絶筆なり。詞書をよみていひけるは「小町、家は巨萬の富をなし、容は三千の美にまさるといへども、若うして双親兄弟を失ひ、老いて子孫親戚なし。紅顔も垢面と變じ、玉膚も痩身とかはり、つひに乞丐となりて路頭に臥す。おもふに古より世にすぐれたる佳人、よく終身の榮華を保つ者まれなり。昭君色三千を奪へども、塞外の塵を免るることあたはず。楊妃寵一國に隆けれども、馬嵬の死を逃れがたし。造物の滿つるを忌む、都て皆かくのごとし。彩雲は散じやすく、美器は碎けやすき理、いかんともすべからず」と、云ひて歎息しければ、櫻姫これを聞き「宜ふごとく、人の盛衰は、いつ誰が身にかゝらんも知るべからず。妾がごときも、翌のことははかられ申さず、思へばあぢきなき世の中なり」とて、涙さしぐみけり。侍女等は、兩人がよしなき物語に時を移すをもどかしく思ひ、姫の耳に當ててさゝやきければ、姫ははぢらひながら宗雄が手をたづさへて、鴛鴦の衾にいりぬ。さて兩人は希なる契に、春の夜のあけやすきをうらみけるが、程なく曉を告ぐる雞の聲に夢をやぶり、蔀をもるあかりに打驚きて宗雄起上り、又のあふせを契りて罷りいでんとす。櫻姫袂をひかへ「今更におもひをましぬ。あはぬ昔ぞましならめ」と、云ひて袖をしぼりければ、宗雄もうちしほれつゝ出でゆきけり。これを始めとして、折々しのびあふこと、凡そ三月ばかりに及びぬれど、侍女等の外、知る人さらになかりけり。

東鑑を案ずるに、實朝公、度々繪合せの儀あり。奥州十二年合戰の繪、小野小町が一期盛衰の圖、吾が朝四大師の傳の繪など、[illegible]愛で給ひしよし、これ承元中のことにて、本文の時と同代なり。此頃はすべて、物合せのおこなはれたる世とおぼし。又案ずるに、[illegible]保職人歌合の繪も、實朝公などの好ませ給ひたるものか。

第十一　夜第を襲ひて勝岡義治を亡す

かくて一日播州より、伴の家人猶野丹作といふ者轎子をつらせて、宗雄が住家を尋ね來り「此度君の御勘氣ゆり候により、御むかひのためまかり越しぬ。とく〳〵御歸國あるべし」とて、父希雄が自筆の免狀を與ふ。宗雄おしいたゞきてこれを[illegible]讒言によりて、汝[illegible]の罪を得たる事分[illegible]たるにより、[illegible]を[illegible]し汝を[illegible]實否をたゞさずして勘當せしは、我[illegible]とく歸鄕いたすべし」と書きたり。宗雄讀


強盗蝦蟇丸信田
平太夫が計を得て
義治を打 平太夫
夜討鷲尾の
第宅を襲
鷲尾一家
滅亡を

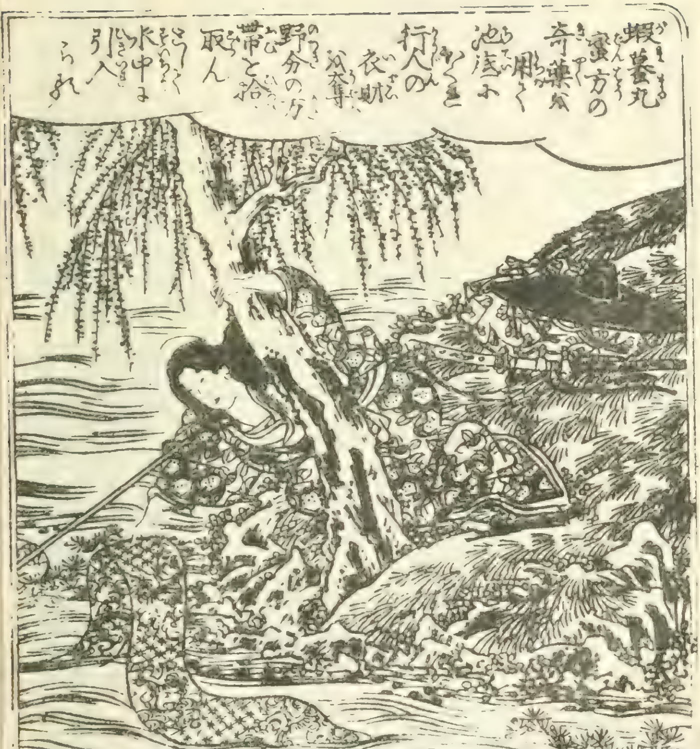



野分の方敵中を
きりぬけ行く
曾我部
和五八
落



みをはり、一頭には勘氣のゆりたるを喜ぶといへども、一頭には櫻ひめに別れんことを悲しみ、かくとしりせば、其心支度もすべきものをと、權し思案にくれたりけるが、「私の愛情にひかれて、遅滞せんは不孝のいたりなり」と、心を轉じて奥の間に入り、一封の文をしたゝめ、文鎭にくゝりつけて塀越に隣の庭中に投入れ、家財を四五箇の擔子につくらし、旅衣を著かへて用意の乗物に乗移りければ、丹作下部に下知し、これを守護して急ぎ去きけり。さて其日の夕つかた、姫の侍女かの文を見つけて、姫に見せしめければ、姫はつねのかよはせ文と思ひつゝひらき見るに、俄に歸國のよしを記したれば、半を讀むより胸つぶれて、悲しさに堪へず、文を顔におしあててぞ泣きふしける。これより上館に歸りて、又病の床に臥しければ、義治夫婦再び驚き、日夜心をいためけり。爰に又姫の守り女山吹は、過ぎつる頃父佐伯平彌二身まかりけるにより、私宅におり居て喪にこもりけるが、忌明して館に上り、姫の枕方にそひて看病りけるが、病のさまを訝り、ひそかに侍女等を責めて問ひけるに、しか〳〵の事ありしと語りければ、果して我が推量にたがはずと、野分の方にそのよしを告ぐる。野分の方義治に語り「彼が望をとげさせ給はば、病もおのづから愈るべし。何事も命にはかへがたし」など申すにぞ、義治も其意にしたがひ、人をして宗雄が家系及び爲人を問はしめけるに、其先祖は人皇五十五代文徳天皇の御宇、卑賤より出でて高官にのぼりたる伴大納言善雄（宇治拾遺）（伴善雄紀名虎相撲ノ事、文德實錄ヲ始正史ニ見エズ。）の末孫にして、父は播州宍粟の郡士伴希雄とて、頗る權勢あり。宗雄は美貌秀才相兼て、武藝文學に通じ、詩歌、管絃のたぐひみやびたる業までもよくこれを曉りぬ、と語りければ義治大に悦び「我が婿とするに不足なし」とて、急ぎ媒人をたのみて播磨につかはし、その事をいひいれけるに、幸ひ宗雄は次男なり、殊に鷲尾は當時ならびなき長者なれば、希雄速にうけひきて、已に事とゝのひ、双方喜ぶ事限なし。姫の病もやゝ愈りければ、ちかきに吉日をえらびて、宗雄をむかへ取るべきにきはめけり。爰に又信田平太夫勝岡は、過ぎつる年義治に告げて、婿にならんことを望みけるに、諾はざるうへに誹謗せられ、其後櫻姫を奪はんとしてかへりて田鳥造酒丞に家人を打たれ、遺恨を重ねて無念骨髓に徹し、義治を亡して山林田庄を奪ひ、櫻姫を盗取りて妻にせばやと、密におもひ立つといへども、鷲尾の家中にはあまたの勇士あれば、容易に手を出しがたく空しく月日を過しけるに、前年鷲尾の獄舎を越えて逃去りたる强盗蝦蟇丸、愛宕の山奥にかくれ住み、義治を討たんとつけ狙ふよしを聞き、密に召寄せて計を與へ、折を窺ひける所に、櫻姫宗雄と縁さだまりたる事を聞きて、殊更にくちをしく、しか

るうへは火急に事を起さんと、其支度をぞなしにける。さて蝦蟇丸はしのびの達人たるにより、一夜鷲尾の館にしのびいり、蘇治が寝所の床の下にかくれて熟睡の時を窺ひ、床の下より刺殺し首をとり、焼草に火箸をつゝみて床の下に投入れける時、侍宿の武士等出合ひければ、急にのぞみて池の中に飛入り、水門をくゞりて逃去りけり。ほどなく火燃上り、折しも風烈しき夜なれば、忽ち館中一面の炎となる。これさへ驚つぶるる事なるに、忽然として貝、鐘、太鼓の音響きければ、唯あきれに呆れたるばかりなり。時に信田平太夫勝關、身におごそかによろひ、あまたの郎等を具して馬をすすめ、關を哄とつくりて亂入しければ、館中の男女あわてふためき、こは如何なる事ぞやとをめき叫ぶ聲、修羅道に異ならず。しかりといへども、此館中にはあまたの勇士あれば、面々得物をとりて向會ひ、命をきはに、猛勢をふるひて戦ひけり。平太夫かねて野武士、山賊のたぐひをかたらひ、郎等のうちに加へければ、人數尤もおほし。鷲尾の郎等は主君を打たれ、不意を襲はれ、殊に素肌の戦なれば、心はやたけに思ふといへども防ぎがたし。義にのみはやる者は、主君を打たれて生きながらへ、何の顔あらんと、思ふさまに戦ひて討死するもあり。遺深き者は、權一命を保ち、後日仇を報ゆべしと、一方を斬りぬけておち行くもあり。信田方の者等も、過半うたれにけり。野分の方はかねて男まさりの婦人なれば、家系の一卷を懐にし、一の谷合戦の刻、九郎判官殿義治の父經春に賜りたる金作の太刀を、家の寶器として納めおきたるを、取出して腰におび、馬に打乗り、長刀を打ちふりて一方を斬りぬけ、からうじて逃出でけるが、身うちにあまた矢をうけて深手に堪へず、馬上より手綱かいくりつゝ「櫻姫はいづくにある。姫よ〳〵」と叫りけるが、又敵兵追來り、とりかこむを四面八方に斬りはらひ、馬も矢疵に堪へず嘷と倒れければ、歩行立になり、長刀杖につき、よろめく足をふみしめつゝ、なほ櫻姫を尋ぬるに、矢疵やゝいたみて忍びがたく、炎頭上にふりかゝり、身うちに燃えつき、遂に逃れがたき折しも、義治が乳母子の宗我部和五八といふ者、遠に見つけて馳來り、危きなかをすくひ出しておち行きけり。櫻姫は父打たれしと聞き、我が身のみ生きのこりて何のかひあらん、一つ閣路をたどらんと、已に猛火の裏に飛びいらんとしたるを、山吹あわてゝ抱きとめ「ひとまづ落ちて、母君の御行方をも尋ね給へ」とこしらへて、伴ひ出でけるが、敵兵見つけて馳來り、[illegible]とらんとす。山吹刀をまはしていどみ戦ふといへども、女の力に及ばず、ほと〳〵危かりける所に、田島帯刀[illegible]來り、焼けかゝりたる欄檻をとりて、[illegible]火花さと散りて、時にもあらで螢火の飛ぶを見る如し。敵兵此


蝦蟇丸
蛮方の
奇薬を
用ひ
池底に
かくれ
行人の
衣財を
奪ふ
野分の方
帯を拾ひ
取らん
として
水中へ
引入
られ



勢におそれて逃去りければ、造酒丞山吹にむかひ「疾く〳〵姫君を扶けておちゆきね。我は野分の方の御身氣づかはしければ、今一度敵中にいりて尋ぬべし」とて、両人を落しやり、その身はあとにもどりけり。されば野分の方は和五八にすくはれておち行き、櫻姫は山吹に扶けられて走り、互にそのゆくさきを知らざりけり。

第十二　蝦蟇丸の傳、帯取の池の記

さても野分の方は、生野の里和五八が親族の家に深くかくれ居て、矢疵を療治し、およそ三月ばかりに平癒しけるが、平太夫勝岡、櫻姫の行方を尋ぬれども知れず、野分の方は手を負ひたれば必定遠くは走るまじ、捕へて人質とし、櫻姫を手にいれんとて尋ぬるよしを聞き、かの家にも居りがたく、播磨にゆきて宗雄を頼まんにも、かゝる身になりては面目なし。とやせまし、かくやすべきと、思案に暮れたりけるが、和五八いひけるは「いづれの道にも、此所に長居し給はんは氣づかはしければ、小人京都へ伴ひまゐらして良計をなし、御心を安んじ奉らん」といふに心をさだめ、家系の一巻を杷欄につゝみて携へ、寳刀を腰におび、和五八を具し、夜に紛れてしのび出で、道をいそぎけるが、龜山越の山路にさしかかりける時、信田の郎等追來りて、ほと〳〵捕へんとす。野分の方、刀をぬいて向會ひければ和五八「あやまちし給ふな。こゝは小人にまかして、疾く〳〵走り給へ」と、諫めておとしやり、秘術を盡して戰ひけるが、敵は多勢なり、双拳四手に敵しがたく、つひにうたれにけり。野分の方はたゞ走りにはしりて、北嵯峨のあたりまで逃來り、咽をうるほさんと邊の池水を掬し、池の面を見れば、色よき帯一條水上にうきぬ。玉簾錦茵のうちにあかしくらせし身も、俄に零落して心まで卑しくなりけるにや、心中おもひけるは「敵多勢なれば和五八も必定討たれつらん。少しのたくはへも彼が身につけさしたれば、飢をしのがんてだてさへなき折に、この物を見つけたるは天の與なり。ひろひ取りて路用にかゆべし」と、包をかたはらにおき、腕をのべてかの帯を取らんとしたるに、忽ち水中より鐵搭を出して、水底深く引きいれぬ。これ乃ち蝦蟇丸が仕業なり。爰に蝦蟇丸が仔細を尋ぬるに、過ぎつる年鷲尾の獄舎を越えて逃出でしより、權陸奥にありしが、其後當國に來り、愛宕の山奥なる農家の、夫をうしなひたる女の容貌美麗なるに心迷ひ、しいて後の夫となりぬ。其妻の名は小萩といひ、近ごろ眼病をわづらひて盲目となりぬれば、蝦蟇丸一向これをうとみぬ。前の夫の女兒二人あり、姉は十三歳にて名を松虫といふ、妹は十歳にて名を鈴虫といふ、二人ともにみめかたち世にすぐれぬ。蝦蟇丸は元來海賊

（木冠者回元）の手にて、父より傳はりたる南蠻の奇業の方あり。其事を耳目鼻口にぬれば、水中にありて見聞言語をなすに、陸にある人の如し、誠に奇方といふべし。しかるに蝦蟇丸、妻には京の町へ通ひて物賣るといひなし、北嵯峨廣澤のほとりの池の蘆間にかくれ居て、池の面に色よき帶をうかめおき、往來の旅人これを拾取らんとする者あれば、忽ち水をくゞりて水底に引きこみ、縊殺して衣服、金銀を奪取ること年ごろなり。かの奇業を用ゆるがゆゑに、水中のはたらき素より自由なり。妻小萩は志正しき者なれども、此事を露ばかりも知らず。郷人は池の主帶に化して人をとるといひ、恐れてちかづく者なし。後世に帶取の池といふは、是なりとぞ。（山州名跡志の説と異同）かくありけるに、信田小太夫にたのまれて義治を殺害し、宿志をとげたる上に、あまた賞金を得て悦び、家にも歸らず妻子をすてて、其場よりたゞちに故郷日向へ赴くとて、播州室の津より船に乗じけるが、牛窓の海上にて船くつがへり、水練の達人なれば一命は恙なしといへども、かの賞金を失ひ、故郷へゆかんもかひなく、身の薄命を歎きてすご／＼家に立ちもどり、又かの悪業をなしにけり。さるほどに蝦蟇丸野分の方を水中に引きいれ、已に縊殺さんとしてよく見れば、年は少しく盛を過ぎたりといへども、誠に絶世の美人なれば、俄に心を轉じ、いそがはしく茂林のうちにたすけあげ、水を吐かしめなどして介抱しければ、やう／＼人ごこちつき、蝦蟇丸を見て怪しみけるが、蝦蟇丸いひけるは「おん身あやまりて池におちいり給ふを、小人幸ひにすくひ侍りぬ。御姿を見申せば、なみ／＼のおん方とも覺えざるに、從者などもなくひとり此邊をたどり給ふは、必定いはれあらん。小人が住家はこれより遠からず、伴ひまゐらせて、しばしつかれをやすませ申さん。いざたまへ」といふ。野分の方は心ならずといへども膽太き婦人なれば、且つ彼が詞にしたがひて、こゝろみばや」と、胸をさだめて包をとり、つひに誘はれて、蝦蟇丸が隱れ家にゆきぬ。（稲妻表紙巻之三終）

櫻姫全傳曙草紙巻之四

第十三　盲女小萩雪中に倒死す

握も野分の方に蝦蟇丸に誘引れて、愛宕の山奥にいたる道すがら、便宜よき所にふみとゞまりて、かの賓刀を拔きから竹割と斬りつけたるに、蝦蟇丸身をかはして飛びすさり「婦人はやまり候な。しばし手をとゞめて我がいふことを聞き候へ」と云ふ。野分の方呵々と打笑ひ「たゞみ〳〵の女と侮りて僞るとも、いかでか計られんや。汝池の裏より執拾を出して、我を水中に引入れ、今又かゝる山中に連來りしは、我を害し物を奪はんと計るに疑なし。我こゝまで來りしは、汝を試ん爲なり。覺悟せよ」とて、又振上ぐる劍の下に、蝦蟇丸山刀を拔出し、「婦人、しか思ひ候は理なり。權其刀をあづけ申す。敵する心なきを察し、我がいふことを聞き候へ。婦人の眼力のごとく、我實は盜人なり。然りといへども、婦人を害する心なし、其故語るべし。權かしこへ」とて、傍の古社を指さしければ野分の方いぶかりつゝ、太刀を鞘にをさめ、前後に心をくばりて古社のうちにいりぬ。さて蝦蟇丸いひけるは「我かの池の邊にかくれて水上に帶をうかめ、往來の旅人これを拾取らんとする時、水中に引入れてしめ殺し、衣服、金銀をうばふことを業とす。今日しも已に婦人を引入れて、しめ殺さんとしつるが、婦人の容貌美麗なるに心迷ひて、一命をたすけ、これまで伴ひ來れり。我が愛情の深きを察し、今より心を傾けて我が意にしたがはば、妻となして生涯を安んずべし。婦人の今の手段を見るに、尋常の女子にあらず、頗る武藝の妙所あり。然りといへども、我が術には敵する事あたふべからず。婦人の衣服の襟を見るべし」といふにぞ、野分の方襟を探り見れば、いつの間にか打ちけん、手裏劍を三本まで縫ひつけおきぬ。蝦蟇丸莞々と打笑ひ「それ若し、我がことばを承引かずば、急所に一命を失ふべし。いかに〳〵」といふ。野分の方彼が手練を感じ、且つ志の切なるを聞きてすこしく心を折り、つれ〴〵蝦蟇丸が容貌を見るに、年紀は二十七八歳とおぼしく、眉目秀麗、渾身素雪のごとく、身材は六尺にちかくして、世に稀なる美男子なり。これまでは只彼を怪しむのみにて、容貌のよきにも目を止めざりしが、あだめく心いできて、よく見ればかゝる美男子なれば、元來の婬婦、俄に心動き、殊更彼が武藝に達したるを見て、尋常の者ならず、よしある者の零落れて、かゝる身にくだりしたらんと察し、

とても心ざして歩くべきあてなき身なり、路頭に倒れて餓死なんより、一旦彼に身をまかせて一命を保ち、後日良計をなすにしかじ、と心をさだめ「おん身妾をおもふ心實に深くば、妾も亦おん身を慕ふ心淺からじ、落花心あれば流水も亦情あり。ともかくも、よきに計ひ給はれかし」と打笑みければ、蝦蟇丸大に喜び「我今妻あれども、盲目となりてものの用にたゝねば、日來うとみ居つれど、これまでは忍びて養ひおきぬ。彼を追出すまでは、しか〴〵いひて欺くべし、婦人これを心得べし」と云ひをしへ、つひに伴ひてかくれ家に歸り、妻小萩に語りけるは「今日しも京の町に出で、物賣りて歸るさ、池に落ちたる婦人をたすけあげしに、よしある御方のさすらひて、迷ひありき給ふなるよし。あまりの痛はしさにこれまで伴ひ申しぬ。汝心をつけていたはり參らせよ」といふ。小萩は元來慈悲ある女なれば、夫のことばを信じ、情深くいふにぞ、野分の方よきほどに答へて、これより此家にとゞまりけり。さて小萩と兄弟の娘をば庖厨におきて、炊ぎ水くむ業をさせ、野分の方は一間をへだちたる所におきて養ひ、妻の盲目を幸ひ、互に密話を文字にかきて語りあひぬ。一時蝦蟇丸「おん身は、何人のなれる果にや」と尋ねけるに、野分の方いつはりていふ。「妾は元福原の皇居に仕へし官女なるが、平家滅亡の刻、親族盡く失せて頼む方もなく、乳母の家に養はれて、憂き年月を過しつるが、頃日乳母身まかり、乳母子の何某情なき者にて妾を追出し、餓に憂き目を見せつるなり。おん身も亦、無下に卑賤の人とは見えず、何等の人ぞ」といふ。蝦蟇丸も僞りていふ。「某は伊賀の國山田郡の住人、平田平四郎貞繼法師の子なり。今源氏の代となり、世間もつつましければ、かく人しらぬ山中にかくれ住み、生業とすべき便なきまゝに、心にもあらで賊となりぬ。語りて見ればおん身も我も、ともに平家の重恩をうけたる身なれば、夫婦となるもよき縁ならずや」と語りあひて、漸々に愛情深くなりて、しばらく月日を送りけり。かくて梢の蝉の聲もよわり、風の音に驚くかとすれば、殘る松さへ峯にさみしき冬の時と變りぬ。いとどいぶせき谷陰のあばら家に、肌寒き夜風をしのぎ、耳に滿つるもの樵歌牧笛の聲、眼に遮るもの竹烟松霧の色のみなり。なみ〳〵の者の住み得べき所にはあらねど、野分の方は愛情に心ひかれ、わびしき暮は苦にならで、只年の盛を過ぎて、色香の失せんことを悲しみ、一向姿を粧ふことにのみ心を盡し、貴族の端とはいひながら、幼時は賤家に育ちし身なれば、かゝる住居もならはぬこゝちはせざりけり。しかるに又、蝎婦の惡念起り「小萩親子三人を、いつまでいたづらに養ひおき候や。とく〳〵追出し候へ」と、しば〳〵蝦蟇丸をもよほす。かの丸いひけるは「兄弟の娘はみめ容もよければ、



野分の方蝦蟇
丸が妻とあり
前妻小萩と
戦中ふ追
出し松虫
鈴虫が弟
の幼女と
おた
む



今しばらく養ひたてて、船泊の妓女などに賣りつかはさば、よき價を得べし。小萩は不日に追出すべし」といひて、折を見合せけるに、一時に小萩蝦蟇丸がそば近く探りよりていひけるは「妾頃日推量するに、かの上臈といひなして連來り給ひし婦人は、おん身のかくし妻に疑なし。よし然るとも、妾はかく盲となりし身なれば、露ばかりも恨むべき心はなきに、などて明には語り給はさるぞ」といふ。蝦蟇丸いはく「汝何事をいふぞ。かの上臈の身の上を聞きしに、福原の皇居に仕へたる官女のよしなり。我が父は平家の重恩をうけたる人なれば、平家一門と聞きて見捨てがたくかくまひおくなるを、汝追出さんと思ひて、しかは云ふならめ。汝盲となりてものの用にたゝざるを、夫婦の情を思ひて、これまで養ひおきつる其恩も顧ず、さばかり惡念をたくはふるは、何の道理ぞや。夫婦の緣はこれまでなり。とく〳〵此家を出去くべし」といへば、小萩泣聲になりて「このごろおん身等兩人、妾を追出さんと計ること、とくよりこれを推量しつ。此家は前の夫の家なり。おん身は後の夫にてありながら、妾を追出さんとし給ふは道に違はずや。さばかり妾をうとみ給はば、おん身等こゝを出去き給へ。妾はみじろきもせじ」といへば蝦蟇丸眼をいからし、あらゝかなる聲し、「口功者なる女め哉。去くまじとて、追ひやらでおかんや。とく〳〵出去け」とて、緣より下に撲地と蹴おとしければ、小萩はくちをしさ悲しさに、齒をくひ牙をならし、「いかにの給ふとも、此家は動くまじ」と云ひつゝ、此處彼處をさぐりて、緣の上にはひ上りぬ。此折しも背後に嗽の聲す。蝦蟇丸これを顧れば、野分の方一間の破れ障子を少しひきあけて、此方をうかゞひ目を以てをしゆるにぞ、蝦蟇丸うなづきて、小萩をとらへ「惡き盲め、憂き目見せずば去くまじ」とて、まくり手に黑髮をからみて引倒し、麪杖をとりてつゞけ打に打ちければ、忽ち皮肉破れ、鮮血湧きたがれて總身朱に染り「あな苦しや」とをめきければ、松虫(十三歲)、鈴虫(十歲)兄弟の娘、蝦蟇丸が左右の手にすがりつき〳〵「我々を打ちて、母さまを許してよ」と、いひて泣きさけぶを、蝦蟇丸耳にも聞入れず、兩人をつきたふし又振りあぐれば、姉の松虫起上り、母のうへに重なりて「これ、妾をかはりに打ち給ひ、母さまを許してよ」と云ひつゝ、兩手をあげてさゝゆれど、妹の鈴虫姉をへだて中にいり「いや〳〵、妾をかはりに打ちてよ」と兄弟たがひに身をおし出して、母をかばふ孝心のけなげさに、小萩は身もうせ心もきゆる思にて、くるしげに息をつき「此上はせんすべなし。兄弟の子どもを具して出でゆかめ。妾今は親族もみな失せて立ちよるべき所もなければ、今こゝを出づれば、今よりすぐに乞食なれど、たとひ餓死ぬとも、親子三人手をとりあひて餓死ぬべ

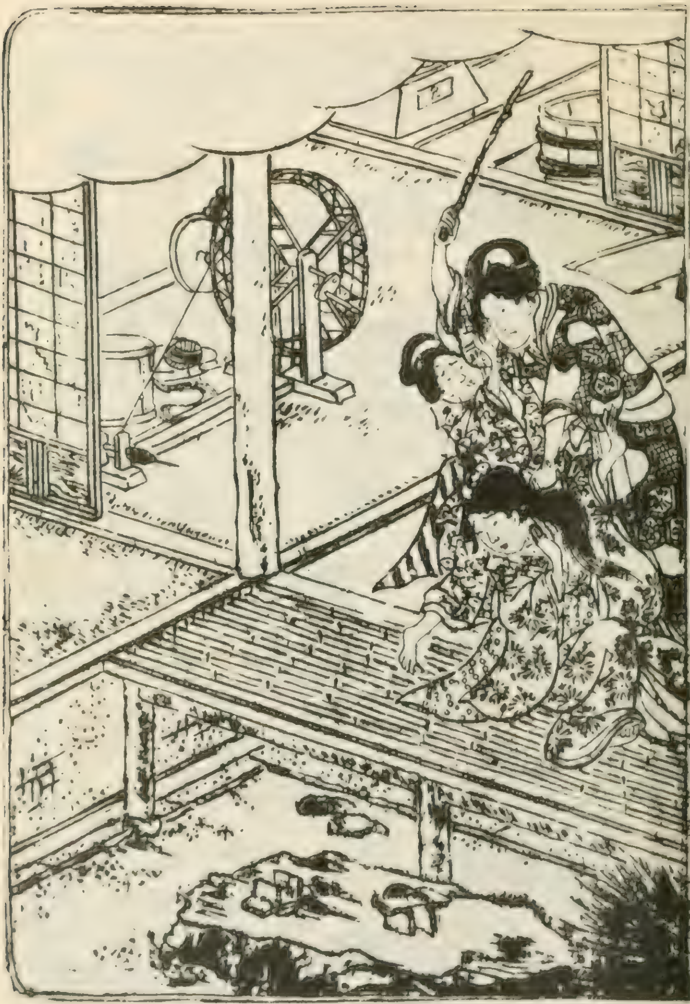
し。果報つたなき母ゆゑに、憂目を見する不便さよ」とて、二人の子どもにひし〳〵と取りつきて哭きけるが、やう〳〵涙をはらひ「いざ来れ」とて、手をとり出去かんとするを蝦蟇丸おしへだて「彼等は血をわけし子ならねども、我が養ひたてたる娘なれば、汝につけては遣りがたし。汝一人出でゆけ」とて、えりくび捕へて切戸の外につき出し「離別の證は此枝と破れ笠、これ持ちてゆけ」とて投げやりつ、扉をかためて裏にいれば、兄弟の娘は哭叫び「そは情なし、我等も共にやりてよ」とて、走りいづるを引きとゞめ、薪をくゝる繩をとりて、二人を左右の柱にしばりつけぬ。實に屠兒が家に羊をつなぎし如くにて、情なしなども愚なり。比しも厳冬の時節にて、雪つよく降りけるが、小萩は雪中に倒伏し、身にまとふもの襤褸のとき衣ひとへなれば、寒氣瘡口に冷えとほりて痛たへがたく、息もたゆげにうめきけり。時に野分の方一間をいでて、蝦蟇丸がねば近く居ならび「さても寒き日ぞ、おん身薄着して冷え給ふな」とて、背後よりもの打ちきせ、爐火のうちに柴をたき、酒を暖めてくみ交しつゝ、むかひの峯を遥に見やり「時にもあらで、花の散るを見ることよ。げに雲のあなたは春にやと疑ひしも宜なり。木々のけはひ、山山の景色、えも云はれず」とひとりごちて、小萩親子が哀なるさまには目もやらで打笑ひける心は鬼とも云ひつべし。小萩はやう〳〵編戸にとりつきて起上り、「やよなう蝦蟇丸殿、妾を追ひやり給ふはせん術なけれど、兩人の子どもをとゞめ給ふは情なし。妾宿世の報にや、かく盲となり、よろづ不自由なるなかに、いくばくの苦労して育てあげ、明暮になで撫りしいとし子を、いかでか殘してゆかるべき。共にゆかしめ給はれかし、これ聞入れてよ、慈悲ぞ情ぞ」と、說きたてては吹雪に打たれて撲地倒れ、たふれては起上りてくどきたて、身をもだえて歎き、涙と血と相和して瀧のごとくに流れけり。かゝる悲しきなかに、雪はつよく降頻れ、谷の氷筍はかたくとがりて、劍の山も目前なり。梢吹く風は肌をさきて、氷の地獄の苦しみあり。身は紅色となりて、紅蓮、大紅蓮の衆生の如し。見る〳〵鬢に氷柱さがりて、鈴をかけたるやうに各々となり、生しき身も凍りすくみて、白き枯木のごとくなりぬ。兄弟の娘はくゝられながら蝦蟇丸にむかひ「情とおぼして、母人と共にゆかせてよ」と云ひつゝ、のび上りては母を見やりて歎きけり。小萩はなほも離れえず「盲目の見えざるうへに、千里の[illegible]えて、とても去くこと叶ひがたし。[illegible]の情にけふ一夜は此家におかせてよ」と云ひてかき說くにぞ、あくまで邪見の蝦蟇丸も、少し心たゆみける[illegible]の色を悟り、蝦蟇丸[illegible]しすれば、蝦蟇丸うちうなづき[illegible]ましき女めかな。いかにいふ[illegible]

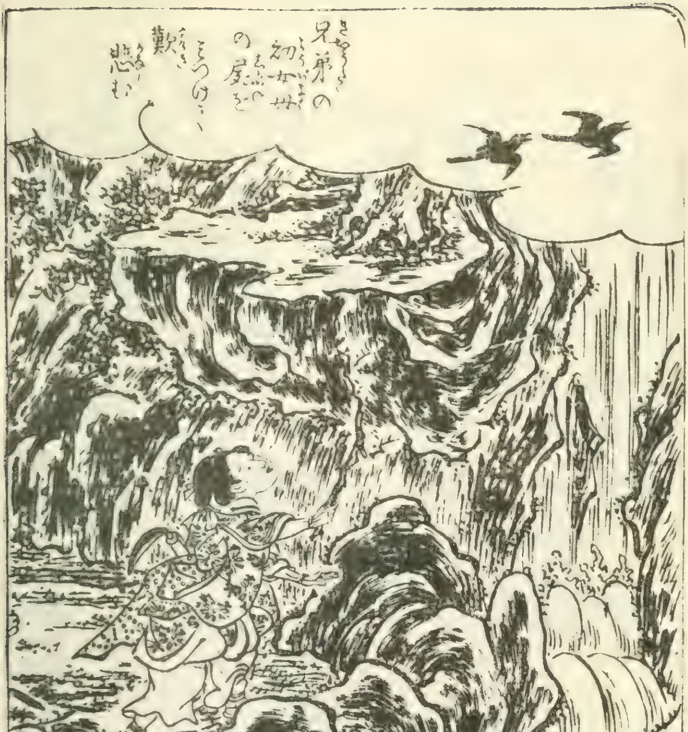
や、然らば此子ども等を、目の前にて打殺すべし」とて、麪棒をとりて連打ちに打ちければ、兩人は苦痛にたへず「あなや」と叫びて倒れけり。小萩は子どもが苦しむ聲を聞きて、五臟六腑もさけさくる思ひして、「やよ〳〵、しばし待ちてよ。とても叶はぬことならば、思ひきりて責ゆかめ。必ず彼等を打ち給ふな」と云ひて、よろめく足をふみしめつゝ起上り、破簦をいたゞき杖つきて、二あし三あし歩みしが「母さま〳〵、母御なう、我等もともに、連れ行き給へ」と、よばはる聲に心ひかれて立ちもどる、もどればがま丸、兄弟をなほ打ちて苦しむる。ゆけば兩人が呼びもどす、もどれば蝦蟇丸打と打つ。歩きつ戻りつたゆたひて、恩愛の絆につながれ、四手にわかるる[illegible]の鳥にもまさる思ひにて、雪のうちに合破と伏し、むせかへりてぞなげきける。野分の方がま丸をすゝめて、又も兩人を打たすれば、小萩は彼等が苦しむ聲を聞くにたへず、胸さへくらむ盲目の、子ゆゑの闇の雪の中を、こけつ轉びつ出去きけり。目には目もくれ果てければ、野分の方蝦蟇丸が手を携へて一間のうちに入り、又酒を酌みかへてくみ交し、樂しき時をうつしけるが、野分の方打笑ひ、「彼を追出してやう〳〵胸は晴れしかど、彼盲目の身にて、かゝる雪中をたどるなれば、よも遠くは去得まじ。若し此あたりにて凍死などし、人の目にかゝらば悪しかりなん。しか〳〵計ひ給へ」と、耳にあててさゝやきければ、がま丸いかにもさりと思ひ、もすそかゝげて裏口より走り出で、跡をしたひて追行きけり。扨痛はしきは、兄弟の娘なり。左右の柱にゆひつけられ、強く打たれて簀子のうへに倒伏し、さらに正氣もなかりけるが、姉の鈴虫やう〳〵頭をあげ「鈴虫〳〵」と、しのび聲によべば妹も頭をあげ「姉うへ、さぞな身うち痛み給はん。妾も堪へがたく候」といふ。松虫いはく「我等が苦痛は忍びもせめ、唯痛はしきは母人なり。寒氣はげしき雪の夜をたどりゆき給ひつれば、今ごろは途中にて凍死やし給ひつらん。ともに跡をしたはんと思へども、かく括られてはせん術なし。父さまはつらくとも、一旦父うへと頼みつれば、恨むべき道理なし。只情なきは、かの上臈なり」とて、さめ〴〵となきければ、鈴虫も聲を忍びてむせびいり、世界の哀を兩人が身に、よせあつめたる思ひなり。折しも峯越の雪吹風、さとおろして兩人を吹と吹倒し、又も正氣を失ひけり。しかるに蝦蟇丸は、雪中の足あとを心あてに、[illegible]下を蹈ちらして、小萩があとを慕ひけるが、果してかの古寺の軒下に倒れふし、既になん〳〵として、只糸のやうなる息のみ通ひけるが、情なく引起して、是が肩に引きかけ、人の通はぬ山奥にゆきて、深き谷底に投げすててぞ歸りける。誠に是、例すくなき悪業なり。

第十四　二人比丘尼發心の記

かくて次日にいたり蝦蟇丸、兄弟の娘にむかひて詞をやはらげ「汝は心あしきゆゑ、懲しめのために追出しつれば、必ず恨ふことなかれ。汝等我にそむかず、此家にとゞまりをらば、深く憐をくはへて養育し、今少しおひたたば、賑しき所につかはし、面には紅粉をいろどり、身には綾羅をまとひ、旦夕酒宴、糸竹にあかしくらして、樂みおほき身となすべし。そのうち小秋志もなほりなば、再びよび戻して、親子一所にをらしむべし。若し又汝等、我が意にそむき、此を走り出でなどせば、忽ち追捕へて、母子三人、共に命をとるべし。必ずあしき心をいだすべからず」と、嚇しつすかしつ云ひて、縛めをとき、物くはせなどしけるが、兩人はとかく母の身を案じ、慕ひゆかんと思ふ心頻なれども、當に下る道すらさだかに知らず、若し追捕はれなば、母もともに命をとらるべしと、思へばせんすべなく、虎の穴に住むこゝちし、もの陰にいりては哭かぬ日もなく、襦袢の袖をほしあへず明かしくらしぬ。然るに蝦蟇丸野分の方にいひけるは「我かの池にて賊をなすこと、知る者はあるまじと思ひつるに、ひそかに聞けば、檢非違使の下司ども、我を捕へんと計るよしなれば、もはや彼所にて生業をする事あたはず、とても京ちかきあたりにては、はかばかしきはたらきはなしがたければ、他國に移りゆかんと思ふ心あり。日向の國に我が手下の賊どもあれば、我まづかの國に到り、手下の者どもとはかりて住家をもとめ、歸りておん身を連れゆかん。留守のうち兄弟の子ども等に心をつけて、走らしむべからず。彼等は搖錢樹なり」といひふくめ、俄に發足し、日向をさして急ぎゆきぬ。かくて野分の方は留守を守り、子ども等に賤の業をさせ、おのれは只いたづらに坐してくらひ、姿を粧ふ事にのみかゝりて過しぬ。憐むべし兄弟は幼身にて、朝夕の煮焼につかはれ、そのひまひまには糸をくり苧をうみ、未明に起き夜深に臥し、いさゝかも怠る時はいたく打つゆゑに、つねづね身うちになま疵たえず。少しも意に背く時は食をとゞむるゆゑに、身體日々に痩せほそり、かずかずの苦しみをたへ忍びてぞ暮しける。野分の方なほ彼等をつかひたらずや、一時命じけるは「今日を始として、毎日朝夕の煮焼のひまに山にゆき、姉は七把の柴、妹は五把の柴をかれよ。代なして日々の費にたすべし。一把にても不足せば、くゝしあげて痛く打つべし。必ず怠るべからず。とくとくゆけ」とて追ひやりけり。彼等は山家に生ひたつといへども、母の懐にて、これまでさる業を仕なれねば、山路の案内すらさだかに知らず。峨々として高き山、鬱々として繁き森、道もなき木の下を









をわけのぼり、白くうつくしき足は荊棘のために紅をしぼり、黒みどりなる髪は蜘蛛の絲にまとはりて柴を刈るにぞ、身うちしびれ手足なへぎ、息もたゆく堪へがたし。されど定の數を刈らずば、憂目にあふべしと思へば、身をいとはず刈りけるに、姉は辛うじて七把の柴を刈りけれども、妹はわづかに十歳の幼女なれば、やう／＼三把をかり、日は已にかたぶきぬれば、姉にむかひて云ひけるは「妾が柴、さだめの數に二把たらねば、此儘家に歸りなば、必ず痛く打たるべし。さはいへ日ははや暮れんとすれば、あとを刈らん便もなし。こはいかにせん／＼」といひて哭きければ、松虫妹が背を撫でつゝ「さばかり嘆きそ。妾が刈りし此柴のうちを二把わけて、そなたの柴の數を合せて歸るべし。氣づかひすな」と云ひければ、鈴虫云ひけるは「さありては、姉うへの柴の數不足して、おん身打たれ給ひなん。」松虫いふ「妾はよきに云ひときて、難儀をのがるべし。はや夕飯調ずる比なれば、かくいふうちにも、歸の時うつりなば尙かの人の怒にあふべし。とく歸りなん。必ず泣顔を見せな」といひつゝ、鈴虫がおくれの髪をかきあげ、著物の塵打拂ひてとらせ、兩人ともに柴を負ひ、腰もたゝぬばかり重をたへしのびて、家にかへりぬ。野分の方兩人が柴をあらため見て、忽ち眼尾ひきあげ、松虫をにらみていひけるは「惡き奴、妹さへさだめの數を刈りつるに、汝年かさにてありながら、二把まで不足せしは、畢竟物に怠るゆゑなり。後日の懲しめに、いで／＼憂目を見すべし」とて、われ木をとりて打ちければ、鈴虫泣聲になり、「姉うへの柴のたらざるは、原妾が罪なり。妾を打ちて姉うへを許してよ」といひて、野分の方の袖にすがるを松虫おしのけ「そなたしか假りて、妾をすくはんと思ふとも、いかでか實とし給ふべき。ものいふ事なかれ。すさりて居よ」と、しかりつゝ覺悟の體を見るに、なほ鈴虫が胸の苦しさ、いふべくもあらず。野分の方松虫をとらへて、柴小屋につれ行き、つゞれをはぎて赤裸となし、高手小手にくゝりて捨置き、鈴虫にむかひ「汝も我が意に背かば、姉のごとくはからふべし。よく見ておけ」と、いひてにらみければ、鈴虫は身の毛いよだちておそろしく、只しのび泣きに泣居たり。かくて時うつり、野分の方は臥戸に入りてねぶりにつき、小夜もやう／＼更けぬれば、巴峽の猿の一叫、情騷しき颶も、哀を催す種となり、寒月皎々と光りて壁のやぶれをもり、飯篠群竹吹きならす朔風松虫が肌に冷えとほり、身うち氷のごとくなりて、今も絶入るべきこゝちす。かゝる折しも鈴虫は、拔足しつゝ柴小屋に來り、袂にかくせし一塊の飯をとりて松虫にくはしめ、おのれが著物をぬぎて打ちきせ「姉うへ、さぞな飢ゑ給ひつらん。身うちの痛はいかにぞや。妾ゆゑに、かく苦しめ申すことの勿體なさよ」

と云ひてとりすがり、堪へず聲をたてて哭きければ、松虫めくはしして、とゞめ「若し彼人聞きなば、そなたも亦憂目見るべし。とく／＼ゆきて寝よ。妾にかまふことなかれ」とて、鶏を胸にあきらめて、ことばには出さねども、母に別れて我のみを力に思ふ心には、さぞな悲しく思ふらめと、推量れて胸もさくる思にて、しのび涙にむせびけり。かくてあくる朝にいたり、鈴虫野分の方に、姉のことをなく／＼詫びければ、やう／＼聞入れて、柴小屋にいたり、「これより後は、日に十把づつの柴をかるべし。それ得心ならば許しつかはすべし」といふ。松虫「何にまれ、仰そむき侍るまじ」といふにぞ、しぶ／＼いましめを解きてゆるしけり。野分の方、おのれは人に越えて子を憐み、櫻姫の行方いかがと片時も忘れず愁ひけるが、それにひきかへて、かく人の子を憎むことの甚しきはいかにぞや。誠に是、たぐひ稀なる悪婦なり。さる程に兄弟の子どもは、毎日山にいたりて柴を刈り、人もかよはぬ山奥までわけ入りけるが、一日、松虫岩のはなに尻かけて休息ひ、偶あたりを顧るに、谷底のむらきえなる雪のうちに、一つの屍よこたはりぬ。頻に心動し、若し母人にはあらぬかと恐さをしのび、兄弟手をとりあひて岩のはなを段にふみ、辛うじて谷に下り見てければ、果して母の屍なり。此ごろつゞく雪天に、餓ゑがちなる山烏屍のうへに群れば、「あな悲しや」と走りより、彼方をおへば此方より群集るにせん術なく、木の枝をとりてやう／＼追ひやり、兄弟屍にとりつき「母人よ、何ゆゑかゝる山奥へ來て、死し給ひしぞ。道にふみ迷ひて凍死やし給ふ。みづから縊などやし給ふ。かくとは知らず今日までも、再びあひ見んをたのしみに、邪見の呵責を堪忍びて暮せしに、かひなの有様や、情なの御姿や。やよなう母人よ」といひつゝ屍をゆり動かして、かはる／＼にくどきたて、天をあふぎて歎き、地に伏して悲み、身をもだへ息をきり、聲ふるゝばかりに叫びて、狂人のごとく狂ひける光景、哀ともいふも愚なり。これより後七日々々といふに、兄弟こゝに來り、花を供じ水を手向け、念佛唱へてとぶらひけり。母人の屍の腐爛れて日々に變ずること、九相の詩に賦し無常の賦につらねて、今更いふべくもあらねど、あら／＼記して、見る人勸の一端とす。さても兄弟の子どもも七日めにゆきて見れば、もと見し面影おとろへ／＼、古の人ともおぼえず、髪は蓬の如く亂れ、面體は青く腫爛れ、目の玉は烏のために拔いだされ、腸は腐りおちて骨をあらはし、おそろしげなる光景、見るに涙もとゞまらず、二七日にゆきて見れば、容貌／＼は皆方に臭氣をおくり、あたりは蟲に腐れて、ところ／＼の肉もきれ腹もやぶれ、五臟六腑あたりに亂れて、目もあてられぬ光景なり。兄弟の額は涙をぬぐふひまもなく、


兄弟の幼女母の死の
九相の変ぶるを観く
無常の世を悟し
濱水ふ身を投と
せるを常照阿闍梨
これをとどめ教化
して法然上人の
徒弟となし
二人比丘尼と
是なり



蕭疎曼
草緑縄
骨散彼
捨斯求難
得爪髮分
離盈野外
頭顱腐敗在
巖端西陵雨
夕年々朽東
岱風時處々殘
忽作龍門原上
土枯榮不識昔
誰棺

成等正覺とのみ思ひいりてぞ弔ひける。三七日にゆきて見れば、容もつゞかず、肉も腐りながれて白き蛆となり、青蠅集りてあたりにみち、臭氣盛んに人を穢し、古のおもかげはいづちゆきけん、あさましき樣なり。兄弟はなく〳〵頓證菩提と回向してぞ歸りける。四七日にゆきて見れば、はや臭氣もうすくなりて、骨に殘る肉もかわき、白き蛆もこゝかしこにはひ散りて、青蠅も今はなし。みだれ髮は風にちりて、ところ〴〵の草の根にまとはり、いづれの人のはてとも見えわかず。無常の風に「百味を食ひて艶麗たる膚體も、徒に犬烏の屎尿と穢る」と、賦したるも理なり。扨夢と過ぎて、はや五七日にもなりぬ。兄弟ゆきて見るに、枯草のうち野笹のもとに殘れる骨も、つゞきたる所はなし。男女のさかひもなく、雨にそゝぎ日にさらして臭氣も更になし。只一頂の笠むなしく破れ、とゞまりて枕にあり。一重の襤褸わづかにかゝりて、化して塵となりぬ。兄弟の子どもは、屍の腐爛るることにも心つかず、のこり惜しさのあまりに、土にかくすべき心もなかりしか、七日々々に如此く變化するありさまを見て、幼心にも泡沫無常の世を悟り、松虫いひけるは「いかに妹、こちは何と思ふぞや、うか〳〵此世にながらへ居て、鬼のやうなるかの上臈におひつかはれ、活地獄の呵責をうけんよりは、母うへの跡をしたひて、草葉のかげとやらんにゆき、親子ひとつに暮す心はなきか」といへば、鈴虫いふ「母うへのおはす所へさへゆくならば、たとひいかばかりの苦しみを受くるとも、いかでかいとひ侍らん。姉うへ、早く母うへのおはす所へ伴ひてよ」といふにぞ、松虫さめ〴〵となき「かしこき者、よく云ひしぞ。しか思はば、かなたに向ひて念佛申せ」とて、西の方へおしむけければ、鈴虫ちひさき掌をあはせて「阿彌陀佛〳〵」ととなふ。松虫も西にむかひ「母うへとおなじ蓮に導き給へ」と念じ、小石を拾ひて袂にいれ、兄弟抱合ひて、谷川の深きに身を投げんとしたる折しも、背後の木蔭より「やよ〳〵兩人はやまるべからず。しばし〳〵」と聲かけ、一人の沙門走り出でておしとゞめければ、兄弟は思ひかけざる事なれば驚きながら「覺悟きはめて死する者ぞ、はなして死なせ給はれかし」といへば、沙門いはく、「身を失はんと思ひつめたる程なれば、定めて止みがたきいはれあらん。その仔細つゝまず語るべし」といふ。松虫心をしづめ「死にのぞみて御出家にあひしは幸なり。かゝる際になりて何をかつゝみ候べき。仔細を語り申すべきほどに、願はくば引導して來世をたすけ給はれかし。妾は松虫と申し、これなるは妹にて鈴虫と申すなり。父は下野の國の住人に、須田彌兵衞と申して、木曾の一門に仕へし者なるが、去る壽永のはじめ、木曾殿亡び給ひて、御一門ちり〴〵となり給ひ、父も此山中にか

くれて僮丸となり、我兄弟を儲けつるが、二年さきに身まかりぬ。母は小萩と申せしが、前の月雪中に死し、これなるはその遺骨にて候」と語り、蝦蟇丸がこと、野分の方の邪見なること、母の屍の七日々々にかはるを見て、世の無常を悟り死なんと思ひつめたる心までを、細にかたり哭きければ、かの沙門もいと哀に思ひて、墨染の袖をしぼり、やゝありていふ「我は法然上人の徒弟に、常照坊といふ者なり。今朝上人我を召給ひて命せけるは、昨夜の夢に佛のたまはく、愛宕の山奥に、兄弟にて孝心深き幼女あり、今已に宿世の悪報消滅して菩提の道に入るべき時いたれり。早くゆきて教化し徒弟となすべし、と告げ給ひぬ。ゆゑに、我彼所にいたりて尋ねばやと思へど、去年配所より歸洛して後（上人行狀繪詞を案ずるに建永二年三月讃岐に左遷同年十二月歸洛）行歩もかなはざれば、汝我にかはりて彼處にいたり尋ねよ。佛の告に違ふべからず、と命じ給ふにより、今日此山中を尋ねしに、果して汝等にあひぬ。幼しといへども我が說くをきけ。それ女人は高臺の閣にもへだてられて、梵衆梵輔の雲を望むことなく、帝釋柔軟の床にも下されて、三十三天の花をもてあそぶことなし。六天魔王の位、四種輪王の跡、望ながく絶えて影をさゝず。生死有漏の果報生滅の拙き身とだにもならず、煩惱の山たかくして、五障の雲はるゝ時なく、愚痴の海深くして、三從の波たたぬ間もなし。いかに況んや天壽をちゞめて非命に死なんこと、罪深き業ならずや。三途八難に赴き六趣四生にかたちを受けて、母もろとも深き苦をうけんより、上人の徒弟となり剃髮染衣に姿をかへて、專修專念の行者となり龍女が速成をたつとび、如說の往生をしたひ、永く母の菩提をとひておなじ蓮をねがはずや。檀林皇后は九相を觀念して素懷をとげ、法如禪尼（中將姫）は繼母の憎しみをうけて、正覺に歸したる例もあるものを」と、こまぐ\と教化しければ、兄弟の娘幼心にも大に得道して隨喜の涙をながし、剃髮受戒を願ひければ、常照阿闍梨はなのめならず喜びけり。扨松虫母の骨を拾集めて、髭籠の器をいるゝ袋にをさめて頸にかけ、「いざ伴ひ給はれ」といふにぞ、阿闍梨兩人が手をたづさへ山を下り、大谷の庵室にいたりければ、上人やがて兩人を剃髮せしめ、法衣を與へて憐み給ひぬ。しかるに上人歸依の大旦那月輪の禪閤、この事をきこしめして、いと哀におぼし、兩人の幼女に扶持を與へて養ひ給ひぬ。建曆二年正月二十五日、上人遷化のきはまでも、此幼女等、病床をはなれず看病りけるとぞ。

○此兩尼成長にしたがひ、容貌美麗にして玉の如くなりければ「觀音勢至の化身か」と、人人いひあひけり。六時禮讃とて、上人の徒弟安樂といひける僧、經文をあつめて作りたるに、太秦の善觀房ふしはかせを定めて聲明になせるを（徒然草）、かの兩尼よく唱へ、鉦打

ちならして洛中洛外を勸化しけるが、哀歎悲喜の音曲めづらしくたふとかりければ、聽衆耳をそばだてて結緣するもの多く、その聲の妙なるを感じ、松虫、鈴虫とよぶも宜なりとて、其名たかく聞えけるとぞ。(案ずるに今、音のほそき鉦を松虫といふは、此尼より起りたる名歟。

○難波名所記を案ずるに「今宮の邊に松虫塚といふあり、鈴虫の行方はいかがありけん、松虫この所に來りて身まかりぬるゆゑ、印にをこしおける所とて、松虫塚といふ云々」又案ずるに、松虫鈴虫は後鳥羽院の宮女といふ說あり。いづれか是ならん。(後伏見帝の勅によりて、正安の比作したる上人行狀繪詞に、松虫鈴虫の事をのせず。ゆゑに其傳を詳に知る者まれなり。)

○又かの兩尼を、二人比丘尼といひけるよし。案ずるに、寬永年間、石平道人の著せる二人比丘尼といふ草紙は、これにもとづきて作りたるもの歟。

○又、兩尼似の骨をくびにかけて勸化しけるゆゑに、髑髏の尼ともいひけるよし。これは邪衡の北の方に比して、時の人の稱したる異名なるべし。

第十五　櫻姬薄命を悲みて、ふたゝび病に臥す

爰に又、櫻ひめは山吹と共に館をのがれ出で、龜山の邊までおち行きけるが、母野分の方の身のうへを氣づかひ、行方を尋ねてともにゆかめと云ひて、遠く離れかねけるにぞ、山吹いひけるは「しかおぼすは理なれど、此邊にまよひ居給ひて、若し信田が追人に捕はれ給はば、再びまぬかれ給ふべからず。一旦都の方へ落行き給ひ、隱れ家をもとめて後、人をして尋ねしめ給ふにしかじ。母君は男子にもまさりて、猛き心ある御方なれば、やみ〳〵捕はれ給ふなどはあるべからず。いざ給へ」といひて、都の方へ足をむけたる折しも、果して信田の郞等あとをおひ來り、姬をとりかこみて捕へんとす。山吹けゞしくかゝへ帶ひきあげ、刀を拔きて斬拂ひ、おひつかへしつ戰ひけるが、追人いやが上にかさなり、兩人を生捕り高手小手にくゝりて、茂林の裏に引きするたり。櫻姬は頻に落淚して薄命を悲しみ、山吹は齒をかみ牙をならして後悔すれども更にかひなし。追人の者どもは兩人を中にすゑ、車座に居ならびて權休息しけるが、一人いひけるは「我さきに見つけたれば、賞金を給はらば、我その半をわかち取るべし」といふ。一人がいふ「汝さきに見つけたるのみにて、かの女に斬立てられ、いちあし出して逃げたるにあらずや。我こそかの女を捕へて、第一の功なれ」といふ。又一人が「畢竟、櫻姬を捕へたる者こそ大功なれ、賞金をおほく取るべきは我なり」といひて進みいづれば、殘る者等口をひとしうし「此に居る者、いづれか此事に勞せざる、賞金の配分は平等にすべし」などいひて互に爭ひ、はて〳〵は同士打して、大に騷

動しけるこそ卑しけれ。かゝる折しも背後の大樹の蔭より、一箇の美男子、明晃々たる刀を打ちふりてをどり出で、追手等を散に斬立てければ、其猛き勢におそれ、秋の木の葉の散るごとく、東西に逃去りけり。かの美男子やがて兩人のいましめを斬りとき、地に伏して恭しくいひけるは「姫君は小子を見しり給ふまじ、小子は御家士篠村八郎公連が一子、二郎公光と申す者にて候。十七年以前、殿の御勘氣をかうぶり、浪々の身となりたるいはれは、一席に盡しがたければ、ゆる〳〵語り申すべし。小子御館にいたり、これまで苦辛仕りし仔細をきこえあげて、御勘氣の御赦免をねがはんと存じ立出でたる途中にて、相公、信田平太夫が刺客の爲に打たれ給ひ、御家滅亡のよしを聞き、膽魂を失ひて立ちもどる道、此林の裏のさわがしきを怪しみ、ものかげより窺ひけるに、かの者ども姫の御名を申せしゆゑ、御顔は見しり侍らずといへども、それと悟り驚きてすくひ奉りぬ」とのべければ、櫻姫「さては聞きおよびし公光にてあるか。かゝる危急の折、汝にあひしは誠に神佛のたすけなり」といひて喜びぬ。山吹公光がそば近くより「おん身、顏を見忘れ給ふか。妾は幼かりける時、おん身といひなづけありし佐伯平彌二が娘、山吹にて候」といふ。公光顏をつれ〴〵と打ちまもり「いかにもしかり、一昔を過してかたちもかはりたれば、見あやまりぬ」とて、互にしばし物語し、山吹、野分の方の行方しれざる事をかたりて愁ひければ、公光「然るうへは、まづ姫の御身をやすむべき計をなし、母君の御ゆくへを尋ね、信田平太夫を打ちて亡君に手向け、御家を再興すべし。此事大望なれば、急には事をとげがたし。小子今山州小野の里に住むが、身貧しくして姫を安んずべき便なし。これのみさしあたりたる難儀たり」といひて愁ひける時しも、一羽の鳩飛來りて公光が懐にいりぬ。公光これを捕へ、「汝野鷹におはれしか、鷙鳥懐にいるときは、狩人もこれをとらずと云へり。我々もおなじ思の窮鳥なり、とく〳〵飛去け」とて放ちやりけるに、又飛びかへりて懐に入る。かくする事三度に及びければ、いぶかりてよく〳〵見れば、頭金色に總身瑠璃の色して尋常の鳩にあらず。公光いはく「此鳥三度まで、我が懐にいりけるこそ不思議なれ。ちかごろ大内に鳩合を好ませ給ふにより、公卿殿上人きそひてこれを愛で給ひ、鳩の價のたつとき事、古に例なし。此鳩を代なさば、あまたの價を得べし。これ正しくわが氏神、篠村八幡の授け給ふものならめ」とて、大に喜び鳩を懐にし、山吹もろとも姫を守護して、おのが住家へ急ぎ歸りぬ。（案ずるに、承元のころ、後鳥羽院鳩を好み給ひし事、[illegible]に見ゆ。鳩合の事、明月記に見ゆ。）かくて公光家にかへりて、鳩を賣りけるに、果してあまたの金を得て大に喜び、少しも私用につかはず、すべて姫の事にのみもちひぬ。此家は公光ちかご


篠村二郎、山吹女と
小野の里の荒屋に
櫻姫を養ふ



る移り住み、もとは人の住みあらしたる茅屋なれば、軒端かたぶき壁くづれ、今もたふれんと思ふばかりの舊家にて、窓には蘿葛はひまとひ、庭には葎生茂り、床じきも朽ち簀子も破れて、椽の下より草生ひいで、怪しくいぶせき住居なれば、さながらはぬ心地に物おそろしく、心ぼそくおぼさるゝと思へど、こゝは人里に遠く、かくれ家には屈竟の地なれば、他所にうつりて信田方に、もれ聞えんにはましならめと思ひ、かの金子もあれば、家を造りかへても安けれど、それも人目立つをいとひ、一間の塵を拂ひ屏風をもてかこひ、せめて姫の身のほとりの調度は、清らなるを用ゆべしと、ひそかにもとめ来り、錦繝縁の疊に唐綾の褥おしき、几帳、衣架、几、火桶、燈臺の類、たぐひ皆新しきを用ゐ、朝夕まゐらする飲器のたぐひも、螺鈿などの飾あるを用ひければ、かゝる荒屋には似もつかず。香爐に香氣たえざれば、かをり一室にみち、天津乙女の、賤が伏屋に天降りたるかと疑ふ風情なり。かくの如く一心の誠を盡し、公光は日毎に出でて野分の方の行方を尋ね、山吹は傍をはなれずして仕へければ、櫻姫その志を感じて、袖をしぼらぬ日もなし。かくて過しけるが、父を打たれ家亡びたるうへに、母のゆくへは知れず宗雄には遠く別れ、憂きことの數をかさねつれば、片時も心を慰むる事なく、晝は終日に思ひくらし、夜は八聲の鳥と鳴明し、何と成るべき我が身やらんと歎きけるこそあはれなれ。公光は姫の愁ふるさまを見るにしのびず、「播磨に送り去きて、宗雄のぬしにあはせ申さば、少しは憂さをも忘れ給はん」と、山吹とかたりあひて、その心支度しつるうち、櫻姫心地例ならず、惱み煩ひければ、兩人は大に驚き、枕方後方にそひ、良藥を用ゐ佛神に祈り、心を盡して看病りけるが、漸漸によわり、日々につかれてたのみすけなくなりゆき、つひに終焉期と見えければ、山吹、姫の額を撫で「おほせおかるゝ事あらば宣へかし」と泣く〳〵いへば、櫻姫「此度はとても快氣あるまじとかねて覺悟しつれば、いひ殘すべき事、記しおきつる文あり、なからん後に見よ。館を逃出でたる時も、肌をはなさぬ觀音の小像は母人へ、香の包は宗雄殿へおくりてよ。護刀は公光へ、ひた鹿子の小袖はそちに與ふべし。のちの形見とも見よかし。汝が此黒髪は曉に夜に養ひて、寶とすること玉の如し。なからん後も飾をおろさず、彩衣をきせて儀を失ふ事なかれ。これまで汝等が心盡しの數々は、草葉のかげにて賞すべし」といひをはり、苦しき息の下に念佛申すも、やゝ唇のうごくのみなり。纔に十七歳を一期として南柯の夢と醒めはてぬ。嗚呼哀しい哉、嗚呼痛はしい哉。この日はこれいづれの日ぞや、承元二年八月某の日なり。山吹は水もて姫の脣をしめしつゝ、噎せかへりて歎きけるが、やゝありて申しけるは「此姫を手

馴れ奉りしより後、一日片時もはなれ參らする事なし。我が身の年のつもる事は思はず、とく生長給へかしと、明暮思ひて育みまゐらせ、月日のごとくに仰ぎつるに、只今かゝる目を見る事の心憂さよ。うたゝ寢のねざめにも、山吹々々と呼給ひしおん聲の耳の底にとゞまり、只今の御姿幻にかげろへば、更に忘るべしとも覺えず。是より命生きたらばとて、千年萬年を經べきや。死出の山三途の川をば誰かは渡し奉るべき。恐しく思召されんに附けては、まづ妾をこそ尋ね給はめ。生きて思ふも苦しきに旅の御供仕らん」といひも果てず、氷なす刀を拔きはなちて、咽につき立てんとするを公光おしとゞめ「汝なげきのあまりに狂氣しつるか。野分の方の御ゆくへを尋ね、信田小太夫を打ちて御家を再興するまでは、汝も我も大切の命なり。今死して何のかひやある」とさま〴〵理を盡しければ、山吹ややう〳〵死をとゞまり、公光もろとも野邊送りの支度しけり。「せめては、御遺言のごとく計ふべし」とて、山吹かひ〴〵しく姫の屍を抱きあげて、湯をひかせ、生ける時のごとく髮をとりあげ、櫛、笄をさしかざし面に紅粉をいろどり、白綾の下がさね纐纈の繡の上著、唐織の袿衣を著せければ、生ける時にも變らず麗たり。扨棺をもとめて屍ををさめ、藤六とて年老いたる譜代の家僕忠義の者にて、此かくれ家を尋ね來りて仕へ居たるを樵人に、公光みづから棺をかゝげ、世をはゞかる身なれば日のくるるを待ちて、あたり近き寺に送行き、引導の語を授け、それより鳥部野の荼毘所にかき行きて藤六をかへらしめ、狼犬の遺骸を損じ、盜賊の遺財を窺ふを恐れ、公光みづから棺をまもり、權下火の時を待ちけるに、しばしして藤六あわたゞしく馳來り、告げていはく「信田の家人等、棺を奪ひとらんと亂入し、館をおとし申せしならんと騷ぎて、山吹樣をくゝり、糺明するとて引立て歩き候。僕とゞめんと爭ひけれども、敵しがたくて引きかへしぬ。早く追行きてすくひ給へ」と、息もつきあへず云ひければ、公光驚き「そは思ひかけざる事よ。汝下火の時まで、此棺をまもり居よ」といひおきて飛ぶがごとくに馳去りぬ。

第十六　櫻姫甦生す、清玄枉死す

「鳥部野といふは、むなしき跡は數そひて、見し故郷の人ぞ稀なる」と詠みしにたがはず、無常遷流して送らざる日もなければ、末の露もとの雫、おくれさきだつ煙常に絶えず、かず〳〵の印の石もおほくは苔に埋れて、掃ふ人ありとも見えぬなり。「幽魂夜月に飛び、愚魄秋風に嘯く」と書したるも、かゝる所をやいひけん。たま〳〵あるものは死人の骸、草深うして露滋く、極めていぶせき荒野にて、いと哀なる所なり。


櫻姫死して鳥部野の茶毘所に送らる
清玄零落して墓守となり
姫の屍を



藤六は棺を守りて居けるが、はや下火の時いたり、しらせの半鐘をならしければ、墓守の僧に棺を渡し、主人の身の上を氣づかひて、いそがはしく馳歸りぬ。此墓守の僧は別人にあらず、これ乃ち、清水の清玄がなれる果なり。清玄清水寺を退去して、所々たゞよひありきけるが、漸本心に立ちかへり、此野の墓守となりて荒れたる庵に住み、日毎に送り來る亡者の下火の時いたれば、經をよみ十念を授けて回向する事常なり。しかるに此時、櫻姫の棺とはしらず受取りて、已に煙となすべく、例のごとく經よみて回向し、十念をさづけつるに、何處ともなくかすかに十念をうくる聲す、清玄あやしみ、「此墓に人もなきに、何人か答へけるぞ」と、草むらにすだく虫の音か、と疑ひつゝ、また阿彌陀佛と唱ふれば、阿彌陀佛とこたふる聲、正しくかの棺の裏なり。清玄益あやしみ、立ちよりて棺の蓋をひらきおほへる衣をかゝげ、月の光によく／＼見れば、こはいかに、日數經ぬる棺に疑なし。病に月日をかさねぬるにや、肉脱骨瘦の體ながら、顔色變せず、唇なほ紅にして玉貌ねぶるが如くなれば、見違ふべくもあらず。夢うつゝともわきまへず、且つ驚き且つ悲しみ動情しのびかねて棺より出し、懷に抱きていひけるは、我月頃のあこがれしは、此姫のはやくかく成果てんとは思はず、愛情の念深く、年來の修業を廢しゝこそ悲しけれ、思ふに九相の詩に『男女の淫樂は、互に臭骸を抱く』といひしも宜なり。人は皮をのみ愛して、唯いつはりの姿なる事をしらず、いづれの人かこれにあらざらん、業障類も、おほきに、わが住む此野に送られ、眼前新死の相を見せて、我が執着の妄念を斷たしむる事、よく／＼深き因縁なり。いよ／＼凡情をすてて、正覺に歸すべし。されどかゝる花の姿をむなしく灰となさんこと、惜しむべく悲しむべし」と、ひとり歎きひとり嘆き、雨のごとく落つる涙、姫の顔にはらはらとかゝりて口に入りけるが、忽ち一息を出しければ、急ぎまどひて庵室のうちに抱入れ、身うちを按摩り、藥を口に入れて水をそゝぎ、身をちかつけて肌をあたゝめたとするに、暫しありて甦生る事を得たり。清玄一向夢のこゝちし「姫、心地はいかに／＼」と問へば、櫻姫目をひらき、あたりの尋常ならざるを見て偶然とまよひ、香爐にふすぼりたる御佛にむかひ「こゝははや冥途にて候か。女は五つの障とかや申して深き罪あるものゝよし、慈悲をたれ給はれかし」と云ひてさめ／＼と哭くさま、春の花の雨になやみ、秋の草の露に霑へる風情なるを、清玄つれ／＼と打ちまもり居けるが、俄に一陣の冷風さと吹き、清玄が身うちに冷えとほると等しく、忽ち心中恍惚として再び愛着の念を生じ、姫の手をとらへて云ひけるは「めづらしや櫻姫、おん身は我を見知るまじ、我は清水寺に住みし清玄といふ者なるが、姫いつぞや清水にまう

でし折、我ふと見そめておもひのあまり病に臥し、旦夕の露命危かりしを、やう〳〵命たすかりて彼所を迷ひ出で、あてもなく櫻の在所を尋ねて月日を過せしが、丹波の國桑田の長者鷲尾の息女にて櫻姫といふよし、ある人の語るを聞きて、うれしさにたへず、たゞちに丹波に赴きて尋ねけるに、鷲尾の家亡び、姫のゆくへ知れずと聞きて、ほとんど力おち、とてもわが思をとげざる約束ならめとあきらめて、前の月此庵室に移り、墓守の賤しき身となりつるが、とかく病がちにてかく姿もおとろへぬ。この所は則ち鳥部野の荼毘所なり。おん身死して此あら野に送られ、我が介抱にあひて甦生する事、宿緣の深きにあらずや。此兩年戀迷ひて、身は蟬のぬけがらの如くなり。命は草葉の露のやうに消えなんとす、戀には人の死なぬものかは、情かけてよ櫻姫、思をはらさせ給はれかし」といひつゝ、掌を合せて拜みければ、櫻姫猶ひすさり、顏をおほへる袖のはしより、おそる〳〵彼がありさまを見るに、目はくぼ〳〵と落ちいりて、頭は栗の毛毬のごとく、身の垢もつもりて顏の正體もなく、頸ほそうして腹大に、墨染のもすそは水松のやうに破れて、恰も餓鬼道の衆生のごとし。殊更此庵は墓原の草深きうちにたち、極めていぶせき住居なれば、物毎にあやしからずといふ事なし。折しも荼毘の煙片々とたちのぼり、臭氣鼻をおそひて無常をしめす。空にのぼる香煙は、惡鬼の息を吐くかといぶかり、風になびく尾花は、亡者の人を招くかと怪しみ、只こはさ恐しさにたへず、打ちわなゝかれてまたも死ぬべきこゝちなり。清玄なほ姫に取りすがりてかきくどけば、櫻姫聲ふるひ「その志はうれしけれど、妾には夫もあれば御心にはしたがひがたし。殊におん身御佛の容を學びながら、さる穢はしき志をもち給ふあさましさよ、何とぞこの事思ひきりてたべ」と云ひてつきのくれば、清玄は病後の足の力なく、尻居に摚と倒れたり。姫は此ひまに、外のかたへ走り出でんとするを、清玄倒れながら裾をしかと捉へ「我日來、戀慕ひし一念とゞきし今日唯今、いかでか空しく歸すべき。たとひ此行に依り阿鼻地獄に墮するとも、姫ゆゑならばいとはじ。師の坊の怒をうけ、世間に面をむけがたき身となりしも、皆これ姫を思ひし故なり。つらきは人のためならず、必ず身に報ふぞや。やさしきことばを聞かせてたべ」といひつゝ、起上りてすがりつくを、姫はたよわき腕にも身をのがれんとおもふより、力をきはめてつき倒せば、仰向に倒れながら、解けかゝりたる姫の帶を身にまとひて起上り、たぐりよせたる帶の端、打てどもさらぬ煩惱の犬、畜生道も目前たり。清玄あつき息をつきていひけるは「女人にちかづくを以て、身を火坑になげこむに譬へたるに、それ知りながら、あくまで執着すること我ながらあさましく、[illegible]


櫻姫甦生を
清玄再
凡情を起こし
姫を悩ますを
弥陀二郎
姫をとふ




弥陀二郎誤て
清玄を殺し
姫を扶て逃
ゆかんとして
清玄の亡霊
後髪を
ひかれ
りどを



生の因果ぞや。今は活きても死しても苦しからず、いざ〳〵わが執念をはらさせよ」と云ひつゝつけて廻りければ、姫はこはさに身をちゞめ、鷲にあひたる小鳥のごとく、逃れがたなく見えにけり。この折しも、狐などに追はれたるにや、雉子の雌ひとつ庵室のうちに飛入りけるを、清玄おひとらへ、「日來修したる戒行を破るしるし、これ見よ」とて、鳥の生血をすゝりければ、口のまはり朱にそみて顔色變り、眉をたて目をつりあげ、はたとにらまへたる光景、身の毛そばだつばかりなり。「あな恐し」とて又にげいづる姫の振袖をひきとゞめ「逃ぐるとて逃すべきか。汝いよ〳〵わが心にしたがはずば、此鳥のごとく食殺して、死出三途を伴はん。ともに冥途の道しるべ、手をたづさへて劍の山、炎のうちに引きたてゆかん、覺悟せよ」といひつゝ、黒髮をつかみて引倒せば、姫は苦しき聲をたて「此あたりに人あらば、扶けてよ救ひてよ」と叫べども、物すさまじく更くる夜の、空吹く風になきわたる、雁の聲のみして誰答ふる人もなく、ほと〳〵危く見えにけり。こゝに又、彌陀二郎はこのごろ當國にかへり、粟生野の光明寺に寄宿しけるが、主君義治信田平太夫に打たれ、家亡びしと聞きて大に悲み、何とぞ平太夫を打ち、家を再興すべしと思ひ、五三昧をめぐる修行者となり、こゝかしこに隱れて、時の到るを待つ同志の義士等をかたらひけるが、此夜この三昧にきたり、此庵のうちに女のさけぶ聲するを怪しみ、垣の外にたゝずみて樣子を窺ひけるが、櫻姫とよぶ聲を聞きて、面を見知らずといへども主君の姫君なる事を知り、大に驚きてうちに走り入り、清玄をひきのけて姫をかこひ、聲あらゝかにいはく「汝法師の身として憎きふるまひかな。かりにも佛體を學ぶ身なれば、此儘に免しおくぞ」とて、姫を伴ひいでんとするを、清玄おしへだて「いな〳〵、姫をばえこそ返すまじ。三世の諸佛にくまれて、天魔の見いれし我なれば、今は何をかいとふべき、たとひ此身の生皮を剝がれ骰子に切まるるとも、かくまで思ひこみたる一念變ずべきかは、とても奈落に沈む身なり、姫をもともに連れゆかん」といひて、荒れにあれて飛びかゝりければ、彌陀二郎せんすべなく、杖にしこみし戒刀を拔きて、鉦打に打ちけるが、手さきまはりて肩尖ふかく斬りこみければ、一聲阿と叫びて倒伏す。彌陀二郎これを見て「こは誤りしか、思はぬ殺生不便さよ。さもあれ姫の御身にはかへがたし」と、口裏に念佛申しながら、姫の手をとり馳出でけるが、清玄朱にそみながら、むくと起上りてむかうに廻り「あなうらめしや、腹だちや。目前修羅の苦を見るは誰ゆゑぞ。姫ゆゑに生きながら地獄に墮するこの恨、生きかはり死にかはり、思ひ知らさでおくべきか」と云ひつゝ、姫をめがけてかけ寄れば、二郎今は止むことを得ず、飛びか

かりて斬りつくる。きられて倒るゝ其ひまに、姫を伴ひゆく先へ、又立上りてかけふさがり、はたとにらみたる眼の光、おそろしなども愚なり。「扨々法師にも似ぬ執念のふかき奴めかな」とて又斬りつくれば、合破とたふる。姫は袖も裙もくひさかれ、夢路をたどる心地して歩みかねたるところに一天俄にかき曇り、大雨車軸をながし、暴風林を倒すが如く、すさまじき光景なり。風雨益烈しくして、髪も裙もはら〳〵と吹戻され、走るにもはしられず、背後の方を顧れば、一團の心火炎々と燃えあがる。こは怪しやとおどろく所に、清玄が姿柳の梢にあらはれて、尚もやらじとうしろ髪を引戻す。二郎は怒りをなし、刀をあげて切拂ひ〳〵、姫を背負ひて、やう〳〵こゝを逃れゆきぬ。誠に危き事なりけり。

（曙草紙卷之四終）

發販
書行

京都 河内屋藤四郎
同 大文字屋仙藏
大阪 河内屋太助
同 河内屋直助
同 河内屋茂兵衛
江戸大傳馬町二丁目 丁子屋平兵衛板

櫻姫全傳曙草紙巻之五

第十七　鷲尾の家士故君の仇を復す

かくて彌陀二郎、姫を負ひ逃去きける途中にて、篠村二郎山吹を取りかへして歸り來るに恰好出會ひ、互に事のあらましを語り、四人相連れて公光が家に到り、彌陀二郎篠村兩人、相州竹の下道の一別以來の事を語りあひ、彌陀二郎、清玄が執着の惡念深く姫をなやましたる事、彼を殺して姫を救ひたる事の始終をかたれば、櫻姫は甦生して彼に苦しめられたる仔細を語りて、一同に喜びけり。扨彌陀二郎篠村と心を合せ、田島造酒丞を始として、こゝかしこに隱れ住みて、仇家をうかゞふ同志の義士等をかたらひ、平太夫を打ちて亡君に手向けばやと相議しける所に、三木之助伴宗雄も舅の仇をむくひ、家を再興すべき企ありと聞き、

宗雄を仇打の主とし、篠村公光、彌陀二郎、造酒丞を始として、荒部三郎、前山四郎、栗栖善太、雀部強助、志麻勇平、船井橘二、和久九郎八郎、横作恵六、船城十郎、その餘宗雄が家士三人、篠村が妻山吹、同じく家僕藤六等都合十八人、信田が家に亂入してつひに平太夫を打取り、首を義治の靈前に手向けて追善を修し、夜を日につぎて舊地に館をつくり、櫻姫をうつらしめ「此うへは、野分の方のゆくへ、草をわかちて尋ぬべし。殊更九郎判官の賜りたる太刀と、家系の一巻を持ちて立ちのかれし事なれば、これなくては家相續なしがたし。誰をか此事に用ふべき」と、宗雄衆人にむかひて議しけるに、造酒丞すゝみ出で「某に命ぜられ

下さるべし。如何にもして御ゆくへを尋ね出しまゐらせん」と申すにぞ、宗雄喜び則ち彼に命じければ、造酒丞いそぎ旅のよそほひを調へ、いづくをあてともなく立出でけり。それは扨おき爰に又、蝦蟇丸は日向の國に赴きて住居をもとめ、たゞちに歸り來りければ、野分の方歸國の喜をのべてのち、松虫鈴虫兄弟の娘出奔したるよしを語りければ、蝦蟇丸これを聞き「とく賣るべきものを、惜しき寶を失ひつる事よ」といひて悔みつゝ、重ねていひけるは「彼國に住居をもとめおきつれば、ちかぐに此家を取收め、汝を連れて彼所に去き、心安く居らしむべし」といふ。野分の方「そはよろこばしき事なり」と答へつゝ、蝦蟇丸が携へ來つる旅の具を、取りをさむるとて行李をひらき、うちに尾長の蝦蟇數あるを見つけて、心中にいぶかりけるが、何氣なき體をなし、其夜にいたりて蝦蟇丸にとひけるは「おん身前の年、丹波の國鷲尾の家に捕はれ、獄

舍を破りて逃出で給ひし事はあらずや」といふ。蝦蟇丸これを聞きて、心中に驚くといへども、さらぬ體をなし、いつはりて云ひけるに「我さるおぼえ曾てなし。汝、何ゆゑにさはいふぞ」野分の方いはく「おん身行李のうちに携へたる蝦蟇は、尋常あるべき物にあらず。蝦蟇つかひといふ賊徒の證に持つもののよし聞きぬ。ゆゑにおん身若し彼輩の中間にて、前年鷲尾の家に捕はれ給ひし人にはなきやと思ひて、問侍るなり」といふ。蝦蟇丸いはく「いかにも我は蝦蟇つかひの首なり。かの蝦蟇は、新に手下のいできたる時、與ふる爲に携へ來りぬ。されど鷲尾の家に捕はれたる覺なし。そは我が手下の者にやありつらん」と僞り「さるにても汝、何故にかの蝦蟇を見しるや」とていぶかりければ、野分の方此答にゆきつまり「妾ゆゑありて知りぬ、其故はゆる／＼語り申すべし。旅のつかれもあらんに、まづ酒一つのみてやすらひ給へ」などいひて、此場をすませけるが、これより互に心底を疑ふ心いできにけり。蝦蟇丸かねて、野分の方の携へ來りし太刀のよのつねならず、殊に錦の袋に入れたる守やうの物を、肌はなさず持てるを訝りければ、かれと云ひこれと云ひ、容易に實をあかしがたしと思ひ、次ぐる夜に酒をすゝめていたく醉はしめ、熟睡時をうかゞひ、かの袋をとりて開き見るに鷲尾の家系なれば大に驚き「さてこそ鷲尾の內室に疑なし。かれ男子にまされる手段あるうへに、膽太き女なれば、我養治を打ちしと知らば、寢首をかゝんも計りがたし。早くあざむき殺して、後日の災をはぶくにしかじ」と心をさだめ、その夜はともに臥しにけり。扨つぐる日にいたり、野分の方何の心もなく鏡にむかひて、髪をとりあげ居たる油斷の折をうかゞひ、蝦蟇丸つとよりて押伏せ、高手小手にくゝりければ、野分の方驚き「おん身は狂氣ばしし給ふか、妾に何の罪ありてかくはいましめ給ふぞ」と云ふ。がま丸答へもせず、門口の柱にくゝりつけて云ひけるは「汝、緇原の皇居に仕へたる官女(野分といふ名をかくし、こゝには、名を秋雨と云ふ。)なりと云ひしはいつはりにて、實は鷲尾十郎左衛門養治が妻なるべし。昨夜、汝が所持なす家系の一卷を見て我これを曉しぬ。とても生けおくべき者にあらねば、仔細を語り聞すぞかし。我平田四郎が子なりと云ひしはいつはり、實は海賊の首長、木苛者利元の子なり。養治が先祖鷲尾太郎衛門がために、父利元を打たれて、無念骨髓に徹し、せめて其子孫たる養治を打ちて恨をはるけばやと、前年手下の小賊どもを具して丹波にいたり、敵のひまを窺ひけるに、折あしく重病に力よわりて捕へられけるを、辛うじて逃去り、時のいたるを待ちけるに、幸ひ信田平太夫に荷擔して寨中に忍入り、養治を打ちて日來の宿志をとげぬ。しかるゆゑに今汝を殺して、後の災をはぶくなり、觀念せよ」といひければ、野分の方齒をか

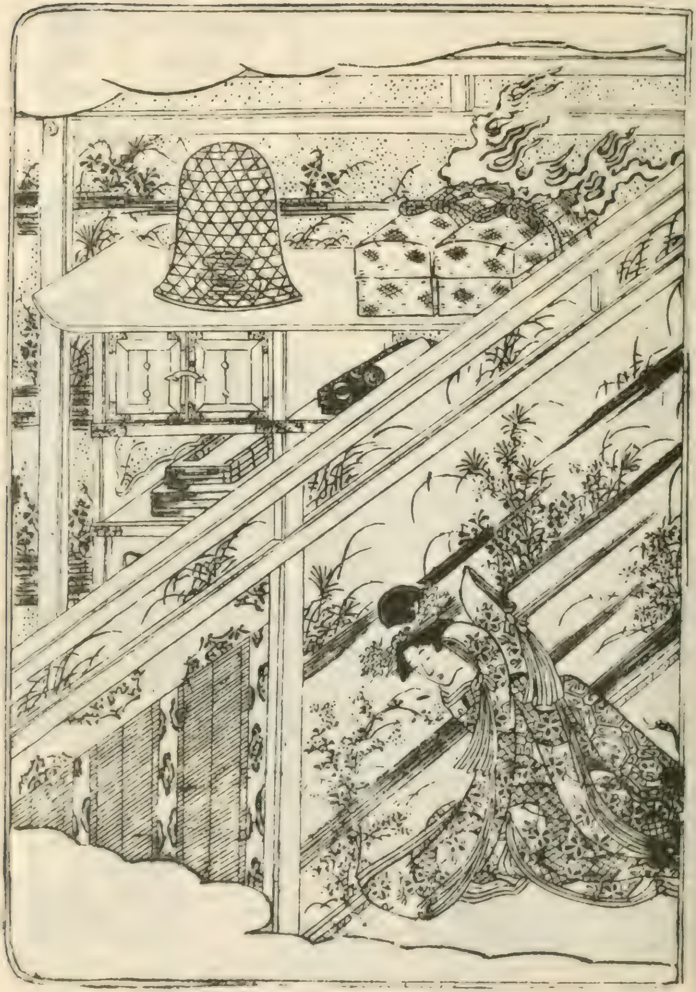
み牙をならしていはく「扨は義治殿を打ちたる信田の刺客は汝にてありしか。我一旦汝が愛情の切なるに心迷ひて、かゝる荒家に月日を送るといへども、汝我を日向の國に連れゆかんと云ひしゆゑ、遠國にいたりては日來戀しと思ふ娘にあひがたく、殊に一昨夜、汝が答へたることばのはしのあやしければ、まづ汝にいさなはれゆき、途中に於て汝を害し、逃去りて娘櫻姫のゆくへを尋ねばやと、暗に胸をさだめおきつるに、汝に前を越えられたる口惜しさよ。汝も一人の男子にてありながら、女の手段をおそれ、かくくゝりおきて殺さんずるは、卑怯至極の仕業なり、とく〳〵縄をとき立合ひて勝負を決すべし」と云ふ。がま丸打笑ひ、「卑怯ともいはばいへ、籠を開いて鳥を失はんより、圏のうちの獸を屠るにしかじ。早く冥途に赴け」と云ひつゝ、氷なす刀を抜きて唯一打とふりあぐる。時しも俄に一陣の冷風吹來り、空中より一つの小蛇あらはれ出で、がま丸に飛びつき、右の腕にまとひつきけるが、忽ち腕しびれて打つことあたはず。しばし惘然として心たゆみぬ。さすが强氣の者なれば自己志をはげませ、小蛇をとりすてて又刀をふりあぐる所に、前なる茂林の裏に弦音漂と鳴りひゞきて、一すぢの箭飛來り、がま丸がむなさかを、箆深にぐさと射とほしたり。一箭なりといへども屈强の矢坪なれば、何かはもつてたもつべき、忽ち倒れて死してけり。然るに茂林のうちより、旅裝束したる一人の武士、二所籐の弓を小脇にかいはさみてあらはれ出で、悠々と歩み來りて野分の方のいましめをとき、上座にすゑて恭しく禮をおこなふ。野分の方此人を見るに、乃ちこれ田鳥造酒丞なりければ、喜ぶこと限なし。造酒丞頭をさげていひけるは「君の御ゆくへを求めんと心を碎き、やう〳〵此山中にかくれ住み給ふよしを聞出して、こゝかしこを尋ねはべりつるに、折よく危急を救ひ奉りしは、誠に御運の强き所なり」といひて、宗雄を主として信田平太夫を打取り館を新造して櫻姫を移らしめたる始終を語りければ、野分の方ます〳〵喜び「此がま丸といふ者こそ、信田の刺客となり、相公を打ちたる者ぞ」と告げければ、造酒丞はからず亡君の仇をむくいたるを喜び、野分の方この家にありしゆゑを問ひけるに、野分の方、がま丸が妻となりたる事はつゝみて云はず、唯彼にあざむかれて捕はれつるが、幸ひに身をはづかしめずと僞り、寶刀家系も失はずとて二品を渡しければ、造酒丞おしいたゞきて取りをさめ、外の方に出で、扇をあげて麾くとひとしく、茂林のうちより十四五人の從者、梨地に高蒔繪して光をはなつやうなる乘物をかきて出來り、一かさねの衣服をとりて奉る。野分の方襤褸の衣をぬぎすてて、これを著更へければ、物の色手にうつるばかりに輝きにけり。造酒丞「いざ、御歸國あるべし」と云ふにぞ、野分の方うな

づきつゝ、しづかに乗物にのりければ、逕して前後の列を正し、旗をさしていそぎ下酒丞がま丸が首打落して携へ、從者に下知りぬ。

第十八　櫻姫妖氣に魘はれて三たび病に臥す

去程に遣酒丞野分の方を守護し、蝦蟇丸が首をたづさへて歸りければ、宗雄櫻姫は更なり、一家中の喜なのめならず、がま丸が首を義治の墓前に手向け、吉日をえらみて宗雄櫻姫と婚姻をとゝのへ、鷲尾の家を續ぎぬ。此時篠村二郎公光も改めて山吹と婚姻をなしにけり。然るに彌陀二郎、宗雄に申しけるは「某若年の時、身持よろしからざるにより、亡君の御勘氣をかうぶり、御在世に御免をうけざること心にかゝり侍れば、乞ひねがはくば相公、亡君に代り給ひて御免し給はれかし」と願ひければ、宗雄うけがひ、義治の靈前に於て勘氣をゆるしぬ。此時篠村二郎が勘氣をもともに免しけるとかや。抑彌陀二郎再び願ひけるは「某かねて剃髪の望ありといへども、亡君の仇を報いて後と存じ、これまでは過ぎぬ、何とぞ改めて御暇を賜はれかし」と思ひこみて願ひ、とてももとゞまるまじき體なれば、是非なく暇をとらせけり。彌陀二郎喜び、常照阿闍梨をたのみて法然上人の徒弟となり、姿をかへて、粟生野の光明寺の境内に庵をむすびて住み、佛堂建立の志願もつばらなり。かくて鷲尾の家再び榮えけるが、爰に又、一つの凶事こそ出できたれ。櫻姫誕生して後、とかく日のめを見るをきらひて常に暗所をこのみ、鬱々として樂まず病あるものの如くなりけるが、一夜野分の方姫を慰めんとて酒宴を催し、酔に乘じて云ひけるは「久しくそなたの爪音を聞かず。何にまれ、一手調べて聞かせなんや」といふ。櫻姫答へて「此年月愁ふることのかさなりはべるに、琴とても手にだにふれねば、學び得たる手業もみな忘れにけり。御前に候へばなまくも彈くべけれど、さし當りてはかき合す計も覺束なくてなん」といふ。野分の方打笑ひ「別に聞く人もなきに何か苦しかるべき」と云ひてすゝむるに、せん術なく「いと幼かるべし」といひながら、琴ひきよせて搔きならし、老鼠といふ今様を聲ほそやかに唱ふ。曲なかばにして、櫻姫すゞろに物かなしくなり、おぼえず涙はらくと琴の上に落ちかゝりて糸をぬらし、おのづから響零丁として濁を生じ、聲も泣聲に唱ひけるが、さすが妙手の調なればかへりて常よりも堪能にて、聞くに哀を催し、野分の方は目をとぢ頭をたれて聞入る。姫はなほ彈きすましける折しも、俄に燈火くらくなり、灯臺のかげに怪しき人かげ現れければ、姫これを見てあなやと叫ぶ。野分の方其聲に驚き、眼をひらきて怪物を見つけ、枕刀を拔いてはたと斬るに、忽ち一團


鷲尾の家再興れ後
さまざまの怪異あり




櫻姫妖氣に
おそられて病に
臥を夢中
數百の蛇
身上にまとひ
つきて
苦しむ



の青虻となりて消失せ、只雲などを斬りたらんやうにて刀に力あまり、姫のひきさしたる琴を眞二つにきり割りぬれば、琴柱はッしと飛散りて切れたる糸の先悉く蛇と化し、鎌首をたてて姫の方に向ひければ、姫はこれを一目見るより忽ち倒れて絶入りぬ。膽大き野分の方も惘然として刀をとりおとし、尻居に噇とたふれけるが、姫のありさまを見て驚き、いそがはしく侍女等を呼び、氣つけ藥をもちゐ湯などあたへて介抱しけるにぞ、しばしありて漸々生きかへりぬ。これより姫また病の床に臥しければ、野分の方宗雄をはじめ、一同に愁ふる事限なし。姫の病只うつら／＼と夢のごとくになりて本性を失ひ、ものも進まず、良醫をまねきて靈藥をもちゐ、さま／＼療養を加へけれども露ばかりも驗見えず。野分の方は世の人に勝りて、子をいつくしむ性なれば殊更に悲しみ、晝夜かたはらを離れず、心を盡してぞ看病りける。しかるにある夜丑三ツばかりに、櫻姫心氣つかれけるにやすや／＼と眠り、野分の方も看病につかれて少しくまどろみける折しも、廊下の方に人の足音ひゞき、障子をさとあくる音す。野分の方ねぶりを醒して顧れば、舘のうちに見なれぬ美しき切禿二人、錣唐櫃をかゝげて出來り、帽額の簾の下におろして蓋をあくると見えしが、裏より數百の蛇うごめき出で、簾の裾をくゞりてはひ入り、櫻姫に飛びつき、首すぢ、手くび、腹などに纏ひつきければ、櫻姫「あなや／＼」と叫びつつ、身をもだえてぞ苦みける。野分の方おどろき、姫をたすけんと思ひつゝ立ちあがらんとするに、身體しびれて腰たたねば大に氣をいらちける時、颯然として眠醒めぬ。さては夢にてありけるよと邊を見れば、櫻姫のけさまに倒れて、口より血の泡をふき手足をふるひて苦む。夢かと思へば、こは又うつゝなり。これより毎夜震動家鳴し、床の下に人の悲しむ聲きこえ、家の棟に高笑するなどさま／＼の怪異あり。後には晝夜のわかちもなく異類異形のものあらはれて、或は舞ひうたひ、或はをめき叫びなどし、戸障子に烈火燃えつき、壁蔀に大石を打ちつくるやうなる音などして驚かしむ。侍女等これを見聞くたびに絶入し、堪忍びかねて病といひなし、暇を乞ふもの多かりけり。田島、篠村、山吹等病床を守護し「こは正しく、清玄が怨靈の所爲なるべし」とて、鳴弦蟇目の法を修し、加持祈禱をなすといへども、妖怪ます／＼止まざりけり。扨また一夜、野分の方をはじめみな／＼看病して居けるに、頻にねぶけつきて皆おぼえず眠りけるが、姫一聲呀と叫ぶにおどろき、眠を醒して見るに絶入りてありければ、急ぎまどひて叫びいかすに、忽ち起上りて、すくと立つを見ればこはいかに、姫の姿二人となり、ふり亂せる黒髮を左右の手に握り「あな恨めしや、腹立ちや」と云ひつゝ足ふみならし、はたとにらみたる面色のお

おそろしさ、身の毛そばだつばかりなり。是より一體二形となり、ものいふ聲さま身のはたらきまで、露ばかりも違はず、いづれを實の櫻姫と分ちがたければ、皆あきれに呆れて「こはいかなる怪異ぞ、世に離魂病と云ふものゝ類にや」と云ひあひけり。かくて二人の櫻姫晝夜をわかずもだえ苦み、其ひま〱には起上り、邊をにらみて怒れるさまをなすに、大膽强氣の野分の方も、愛子の苦痛をまのあたり見るに忍びず、其身も心氣つかれ痩衰へて、ともになやみ苦みけり。

案ずるに、唐の陣玄祐が離魂記に「天授三年、淸河の張鎰、衡州に家あり。その女倩娘、いひなづけの夫王宙京師に赴くをしたひ、離魂して一體二形となり、一形は王宙が跡をおひ去きて蜀にいたり、連れそふこと五年、兩子を生む。一形は家にありて病に臥す。後王宙倩娘をつれて、鎰が家にきたる。病にふしたる倩娘よろこび起きて出でむかひ、翕然として二人の倩娘合して一體となる」よしを記せり。此こと唐土に、あまねく語りつたへたる物語と見えて、正燈録、無門關、剪燈新話、艶異編等の諸書にのせて、少しく異同あるのみ。又離魂病のことは、夏子益が奇疾方および萬病回春奇病門に出せり。病によりて離魂し、一體二形となる事なきにあらず。尤もこれを治するの方あり。俗に「かげのわづらひ」といふはこれなり。本文にいふ櫻姫のごときは、もと怨靈の所爲なれば、此類とひとしからず。

第十九　櫻姫離魂化して骸骨となる

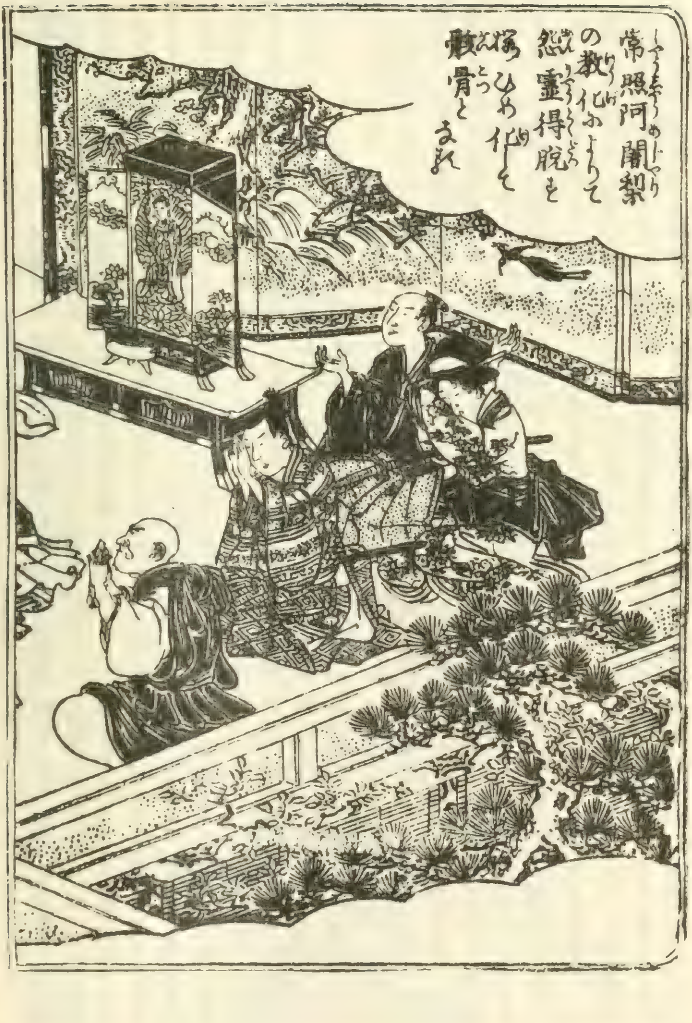
然るに一日彌陀二郎道心、常照阿闍梨をともなひ、淀川にて感得したる靈佛をもり奉りて鷲尾の館に來り、宗雄にまみえて申しけるは「姫君物の氣の爲めになやみ給ふよしうけたまはり、その病苦をすくひ參らせんと存じ、法然上人に怨靈得脫の敎化をねがひけるに、上人のたまひけるは、我老衰して歩行しがたく、遠く去くことあたはざれば、常照坊をわがかはりとして遣すべし。これを以て敎化すべしとて、これなる常照阿闍梨に、上人常につまぐり給ふ珠數をさづけ給はりぬ。又此靈佛は、前の年某淀川に於て、感得し奉りし紫磨黃金の靈佛にて、八幡の神宮の告ありて、眞身の阿彌陀佛なること疑なし。これにおはすは、すなはち常照阿闍梨と申して、上人の高弟にておはし候」と云ひて引合せければ、宗雄うや〱しく禮をなし、初對面の挨拶をはりて云ひけるは「上人の念珠といひ、眞身の御佛あるうへに、阿闍梨の德を施し給ひて敎化あらば、いかなる怨靈も得脫すべき事うたがひなし。願はくは片時もはやく、病苦を救ひ給はれかし」と云ふ。阿闍梨のたまはく「二郎道心が物語を承るに、さぞあさましくおぼすらめ、拙僧修行たらず驗あるべくおぼえねど、師の房の命といひ、二郎道心のたのみ默しかたく、これまではまうで來つ。力のおよばんたけは念じ見るべし」と宣


怨霊の所為によりて桜ひめ
離魂病をわづらひ
一体二形となる



ふにぞ、宗雄野分の方にかくと聞えつげば、野分の方喜び出でむかひて、姫の病床にみちびきけり。かくて阿闍梨二郎道心を具して彼方にいたれば、野分の方宗雄病床の左右になる、田鳥、篠村、山吹等、下の方に並居たり。阿闍梨まづ笈佛の扉をひらき、香を拈して權念じ、扨「病人に對面すべし」と宣ひければ、山吹立寄りて屏風をひきあけぬ。阿闍梨つら／＼見るに、錦の褥をかさねたるうへに、二人の姫黒髪をみだし、脇息によりかゝりてすや／＼と眠居たり。いかさま病疲れたると見えて、肉脱羸痩の體ながら、自然の美麗、梨花に雨をふくみ、白玉に香をそへたる風情なり。二人ともに同じさまにて、いづれを眞の姿、いづれを假の姿とわかちがたし。阿闍梨珠數を袖くくみに持ち、袈裟をひきあげつゝ近くすすみて宣ひけるは「いかに清玄とやらんが魂魄、我がいふ道理をよく聞けよ。汝かりにも佛體を學びし身をもちて、戀慕の凡情に戒行をやぶり、罪なき姫を苦めて障碍なすは、何の理ぞ。すみやかに執惑の惡念を滅して、成佛得脱を欲せよかし。清玄、眠を醒せよ／＼」と聲たかく宣ひければ、二人の櫻姫やう／＼目をひらき、瞼たゆげに阿闍梨を見やりて頭を打ちふり「成佛の望さら／＼なし。唯此姫につきそひて苦痛をさすこそこゝちよけれ。無益の詞を費し候な」と云ひさして又ねぶりぬ。阿闍梨膝を立てなほし、衣の袖をまきあげ、詞をはげませて宣ひけるは「あさましや、汝執著の念深く、中有の迷衆となり、更に流轉の穢土を離るるの心なし。然るに我、偶師の房の命をうけ、遙に來りて汝を度せんとす。極重惡人無他方便、本願の利益なからんや。清玄、いかに／＼」と責めたまひければ、二人の櫻姫再び眼を醒して居なほり、座を正しうしていひけるは「いかやうの事ありとも、仔細を語るまじと思ひけれども、阿闍梨の慈心を感じて、深き恨のいはれを語り侍るぞかし。これを聞きてわが理を察し教化をやめ給へよ。人々も聞きてたべ。元來これは清玄が靈にあらず、玉琴が怨魂にてあるぞかし。妾はもと都の白拍子にて候ひしが、故君義治公に購れて妾となり、名を玉琴とたまはり、篠村八郎公連どのにあづけられ、寵愛淺からず、つひに相公の胤をやどして已に八月にみちぬるに、野分の方の嫉妬ふかく、蝦蟇つかひの所持したる、尾長蝦蟇といふものを以て奸計を施し、兵藤太に命じて妾を盜みとらしめ、目の前にてなぶり殺しにさせられ、しかのみならず面の皮をはぎ赤裸になして、大江山の谷川にしづめにかけさせ、後日事のもれんを恐れて、その夜たゞちに兵藤太を手打にし、盜賊の罪にもてなして衆人を欺きぬ。痛はしや、公連殿は、妾を奪はれたるによりて云ひわけなく、切腹して果てられき。然るに妾が死骸のおもしのくゝり繩とけて、川下に流れつき、犬に腹をくひ破られてすでに胎

胎の子をくひ殺されんとせしを、彌陀二郎どのの情によりて拾取られつるが、やがて死にけり。其時妾が魂魄、我子の胸間に還著して生きかへらせ、彌陀二郎どのの介抱に育りけるが、つひに旅中にて、清水寺の敬月阿闍梨に乞ひとられ、成長して徒弟となり、法名を清玄と給はりぬ。されば則ち清玄は故君義治公の御胤にて、櫻姫どのとは別腹の兄弟ぞかし。妾が魂魄清玄がかげ身につきそひ、せめては惡趣をまぬかれんため、學問讀經おこたらしめず、道力堅固に行はせけるが、一年、櫻姫どの地主の花見にまうで來る折から、いみじく美麗なる行粧を見てねたましく、わが子清玄は正しく姫の兄なり。妾恙なく產みおとしなば、あの如く大切にかしづかれ、桑田の長者の若君と尊敬せられ、妾も共に世の樂をきはめんものを、野分の方の嫉妬によりて、非命に死するのみか若君をもかくの如く、名もなき出家となしおく事の口惜しやと思ひつゝ、姫の美々しき粧と、清玄のみすぼらしげなる光景とくらべ見るに、なほ怨恨いやまさり、とても地獄に堕すからは、永く祟をなして仇をむくひ恨をはるけばやと、再び清玄が胸間につけ入り、現在わが子に凡情を起させ、戒行をやぶらしめて姫をなやましたるも、姫に恨はなしといへども人にすぐれて子を思ふ野分の方の性質なれば、まづ目の前にて姫に苦痛をうけしめて、野分の方に歎をさせ、其後野分の方をもとり殺さんと思ふゆゑなり。されば妾と清玄と母子兩人にわかれども、原魂魄は一つなり。櫻姫どの小野の里におき、定業によりて死せしを、鳥部野にて甦生させ今まで一命を保たしめたるも、妾がなせし業にて實の甦生にあらず、只野分の方に永く憂目を見せんがためなり。罪なき姫を苦むる事のいたはしく、一度は心たゆみけるが、前の夜姫箏をしらべ、其曲の妙なるにひかれて再び出來り、妾が殺されたる時の苦しさを思ひ出して、又仇をなす心になりぬ。又野分の方、蝦蟇丸がために殺さるべかりしを、妾が靈小蛇となりてとゞめしも、生かしおきて憂目を見せたるうへにて、とり殺さんためなり。又相州竹の下道にて、妾が靈小蛇となり、彌陀二郎どのを導きて篠村どのに會せしも、彌陀二郎どのはわが屍をかくし、我が子を拾取り給はりし恩人なり。篠村どのは妾ゆゑに父公連どの切腹ありしのみならず、其身も浪々の身となり給ひし痛はしさに、兩士を會しめて互に力を合させ、義治公の仇をもむくはしむべき妾が寸志なり。此仔細をしらしめず永く姫をなやませて、野分の方を苦めんと思ひしが、阿闍梨の慈心默しがたく語り聞せ申すなり。かへすがへすも、成佛の望なし、はやく御歸りあるべし」といひをはり、野分の方にむかひて「汝妾をなぶり殺しにさせたる時、妾が苦痛いかばかりならんと思ふぞや。生きかはり死にかはり、六道四生に怨をなすべしといひしこ


常照阿闍梨の教化によりて
怨霊得脱を



とわすれしか。かく仔細を語るうへは、永く此土にとゞまりがたし。見よ〳〵近きに汝をとり殺し、ともに奈落に牽てゆかん、思ひしるべし」といひつゝ、柳眉をさかだて星眼をいからして、はたとにらみたる光景、おそろしなどもおろかなり。かくものいふも身のはたらきも、二人の櫻姫同じさまにて、いづれを眞と知りがたし。たれ〳〵もみた清玄の死靈とのみ思ひて、玉琴が怨魂なることに心つかねば、これを聞きて驚きあひぬ。時に阿闍梨、病床近くよりて宣ひけるは「汝が物語を聞けば、遺恨の深きも理なれど、怨魂の惡鬼となりて永劫惡趣にくるしまんより、わが教化を聞きわけて、早く成佛得脱せよ」とて、四誓の偈を數遍誦し、心經三遍くり給ひ、隨求陀羅尼、光明眞言、顯密甚深の神呪陀羅尼を誦し給ひけるが、不思議や笈佛の白毫より、光明赫奕と發して病床をてらしければ、忽ち二人の櫻姫、ひれ伏してこれを拜し、感涙を流しつゝ「あなありがたや、たふとや、今は恨もはるけつ。こひねがはくは安養淨土に引導したまはれかし」と云ひて、やゝ得道の體なれば阿闍梨、喜び十念をさづけ給ひて後、身をおこして二人の姫のうしろに立ち、聲をはげまして宣はく、

「殼を出でて殼に入る。旅舍に宿するが如し。地水火風一たび散ず、螃蠏の湯に落つるが如し。汝從來是一か是二か」

といひながら珠數をもつて、まづ左の方の櫻姫の頭を打給ふに、忽ち姿きえうせて一つの小蛇となり、頭より光をはなちて飛失せぬ。又右の方の櫻姫を打給へば、今まで嬋娟たる花の姿、忽ち氷の朝日にとくるが如く消失せて、身にまとひたる小袖と一具の骸骨のみぞ褥の上に殘りける。櫻姫絶世の美人なりといへども、骨と化しては常の人にかはらず。思ふに醜美は只臭皮一重にあるのみ、好色の輩、こゝに於て悟すべし。扨みな〳〵此體を見て且つ驚き且つ悲み、しばし默して居たりけるが、彌陀二郎道心すゝみ出でていはく「小子、十八年以前回國修行に出で、丹波の國大江山の麓にて、女の屍より犬の咥へ出したる胎子を拾取りつるが、旅中にて養育心の如くならざりけるに、一人の旅僧、小子が修業者の身にて赤子を携ふるをいぶかり、仔細を問はれけるゆゑ、しか〴〵のよしを語りければ、いと哀に思はれ「小兒を我に與へよ、我養育して成長の後徒弟となし、其母が菩提をもとはしむべし」と申されしゆゑ、幸の事と思ひ小兒を旅僧に與へ、其後はいかになりゆきしや知らざりしが、思ひきや彼屍は玉琴どの、小兒は相公の御胤、旅僧は清水の徹月阿闍梨、清玄法師はかの小兒にて、櫻君と腹がはりの御兄弟にてあらんとは。それと夢にだも知らば、すべきかたもありつらんに、誤りしとはいひながら清玄法師を我が手にかけたる後悔さよ」といひつゝ、拳をにぎりて歎きければ、阿闍梨のたまは

く「いたくな歎きそ。清玄が一生を思ふに、汝がために生じて汝がために滅す。これ因果のしからしむる所にして、汝がなせし業にあらず。此うへは只、かの人々の菩提をよく弔ふにしかじ」とて珠數つまぐり念佛唱へてぞおはしける。野分の方は此始終ものいはず、只さしうつむき死せる人の如く、身じろきもせずして居たりけるが、十八年が間人の知らざりし隱惡、一時に露顯して、さすが大膽强氣の心にも面目なくや、おのが居間にいたりて自害せんと思ひけるにや守刀をとり、つと立ちて庭づたひに馳せゆきける。折しも靑天俄にかきくもり、大雨車軸をながし、雷光暉々と閃き雷聲大に鳴りはためき、野分の方の頭のうへに、炎のまろかせ落ちかゝると見えしが、軀を宙にひきあげられ、二つにさつと裂けて、大地に噇とぞ落ちたりける。皆人この光景を見て身の毛そばだちけるが、見る〳〵もとの晴天となりぬ。時に阿闍梨示してのたまはく「後漢の趙紹が妻、夫死して其愛妾五人を殺し、髡頭面に墨して其形をかゆ。于寳が母、夫亡びるに及び寵愛の侍婢を、生きながら夫の墓中に埋む。此たぐひの妬婦ありといへども、野分の方の隱惡の如きはいまだ聞かず、誠にこれ極重惡人といひつべし。天刑をかうぶりて雷死せしも理ぞかし。和漢の古を考ふるに、隱惡を犯せし者、雷死せしためしすくなからず。常言に人をば瞞くべし、天をば瞞くべからずと云へり。明なる所には王法あり、暗き所には神靈あり、隱惡を犯して、豈能く罰をまぬかれんや。野分の方の雷死のごときは、世人のよき敎戒なり。せめては冥途の苦患を救ひつかはすべし」とて庭にをりたち、燒けただれたる屍に向ひて、しばらく經をよみ給ひ、扨宗雄につけて棺をつくらしめ、野分の方の屍と櫻姬の遺骨を納めしめ、二つの棺を並べすゑて、引導の語をさづけ給ひぬれば、一家中の男女、次の間に居ながれて歎き悲む聲、しばらくは止まざりけり。かくて兩人の送葬をおこなひ、追善の佛事をいとなみ終るまで、阿闍梨は彌陀二郎道心とともに此館に逗留し給ひぬ。然るに宗雄、田鳥造酒丞、篠村八郎の兩人を近く呼びていひけるは「舅義治相公存生の時、某を櫻姬にめあはさんと定め給ひしは、畢竟血すぢを絕やすまじきためなるに、櫻姬うせたるうへ、某此家を續ぐ時は、たとひ後妻をむかへて一子をまうくるとも、當家の血すぢは絕ゆる道理なり。兼て聞く、義治どのの甥なる少年を、吉備津の神主細田何某とやらんが養子につかはされたるが、彼處にも今は實子をまうけたるよし。幸の事なればかの少年を乞取り、汝等兩人補佐して當家を續がしめよ。これ血筋をたやさざるよき計にあらずや。我は今より菩提の道にいり、剃髮染衣に姿をかへて、國々姬兄弟、玉琴等が菩提をとはんと心をこためぬ。萬事、汝等兩人に賴みおく、こ　ま



琴の怨霊つくるに
よりて野分の方十八
年前の隠悪あら
れ雷にうたれ身体
さけて死を天刑
遁がれがたしといへ
ども
むくひあり
べし



す〳〵忠節を盡すべし」といひをはりて小鞘巻を抜き、髻ふつときり拂ひて阿闍梨にむかひ「某曾て法然上人の活佛なるを聞きて、渇仰の思深し、こひねがはくは上人の徒弟となし給はれかし」と思ひこみてぞきこえける。阿闍梨これを聞きて殊勝に思はれ、すみやかにうけがひ給ひければ、つひに宗雄、彌陀二郎道心を具して館を出でんとす。田島、篠村これをとゞむるに詞なく、涙とともに送りけり。

第二十　櫻塚揚貴妃櫻の來由

かくて宗雄法然上人に謁し、受戒剃髪して法名を隨蓮房源宗と給はりぬ。抑上人の法名を源空と申せしは兩師にておはしける持寶坊源光の源の字と、慈眼坊叡空の空の字とをとりて、源空と稱じ給ひしなりけり。よりてその例をひき、源空の源の字をたまはり、宗雄の宗の字はその儘に源宗と名づけ給ひしとかや。さて源宗法師のぞみをとげて喜び、都にとゞまりけるが、閑寂の地を好みて北岩倉に庵をむすび、九品の行業不退なり。日西山に沒る時は遙に十萬億刹の土を思ひ、風嶺松を吹折れば、近く常樂我淨の觀を凝す、六時の禮讃聲澄みて朝暮の念佛いと貴く、誠に殊勝の體なりけり。然るに田島、篠村の兩人は、片時も主君なくてはあるべからずと、宗雄が命のごとく、義治の甥十五歳になる少年を乞取りて家督とし、鷲尾四郎義基と名告らせ、やゝ安堵の思をなしけるが、兩人申合せて源宗法師の庵に來り、しか〴〵の由をかたりて喜ばしめ、さて庵中のありさまを見て申しけるは「かゝる草の庵に住み給ふ御身にあらず。餘りとやかろ〴〵しき御事なり。ひろき家を造立し、從者などをも召仕ひ給へかし、我々よく計ひまゐらすべし」と云ふ。源宗打笑ひ「汝等が志は過分なれど、我遁世の身となるうへは、かゝる住居こそ好ましけれ。いかでか美麗の室をもとめんや。世に望と云ふは唯一つあるのみ。これ別事にあらず、彌陀二郎年來一宇を建立して、盛徳の靈佛を安置すべき宿願ありといへども、いまだ遂げざるよし、われ此大旦那となるべき望あり。義治相公夫婦、清玄法師、櫻姫、玉琴等が菩提のため、いみじき功德なるべし。汝等この事をよく計ひて得させよ」と云ふにぞ、兩人聞きて「そはいと安き御事なり。速にはからふべし」とて國にかへり、あまたの金銀を出して彌陀二郎に與へければ、二郎道心大に喜び、則ち宇治郡五箇の庄に一宇を建立し、かの靈佛を安置して常照阿闍梨を開基の主とし、不斷念佛の道場とぞなしにける。西方寺といふは乃ち是なりとぞ。

山州名跡志を案ずるに、彌陀二郎道心、常照阿闍梨ともにかの寺に住み、人皇八十五代後堀河院の御宇、貞應元年七月十一日、二人ひ

としく本尊の示現を得て、同日同時に安祥として大往生をとげぬ。二人の木像今にありと記せり。

かくて源宗法師、彌陀二郎が宿願をとげしゐて斜ならず喜びけるに、一夜櫻姫の亡靈枕上に立ち、いとうれしげなる顔にて告げていはく「おん身菩提の道に入り給ふうへに、我等がために佛堂建立ありし大功德によりて、わが輩親子兄弟五人惡趣の苦患をまぬかれ、安養淨土に生るる事を得たり。其證見せ申さん」といひて、佛壇に供じおきたる櫻の枝をとつりつゝ云ひけるは「これを庭上にさしおき給へ。必ず根を生じて花咲きなん。これ乃ちわが輩が成佛得脱の證なり」とて與へ又いはく「兄淸玄法師の遺骨、鳥部野の草むらに殘りぬ。何とぞ拾取りて埋葬し、印の石を建てて給はれかし。いつまでも名殘は盡き侍らねど、佛國をうけし上は舊土の往來しがたく、これぞ長き別れぞかし。再會は極樂淨土なるべし」と云ひて煙のごとく消ゆると見えしが、忽ち軒端の風鈴當的ひゞきて南柯の夢は醒めにけり。源宗名殘をしげにあたりを見るに、枕上に櫻の一枝、依然として殘りぬれば奇異の思をなし、かの枝をとりて庭上にさし、淸玄の遺骨を尋ねもとめ、煩惱卽菩提の意をもつて、おのれがもとに送りたる櫻姫の艶書をとり出し、そのうらに經文をかき、ともに一つの箱にをさめて、姫の終焉の地小野の里に埋めて一塊の塚となし、印の石を建てゝ、跡ねんごろに弔ひけり。櫻塚、一名文塚といふは乃ちこれなりとぞ。

案ずるに、山州名跡志に櫻塚一名、文塚、傳へて云ふ、小野の小町艶色あるを以て、四方より艶書を送ること雨の如し。仍りて懺悔の爲めに、收むる所といふ。本文の說と此說といづれか是なるを知らず。

源宗法師、庭上にさしたる櫻の枝、姫の詞にたがはず日あらずして根を生じ、一度落花したる枝再び花咲きぬれば、扨は成佛うたがひなしと、歡喜の涙袖をしぼりぬ。

つねに上人の庵室に往來して法を聞きけるが、かの松虫鈴虫の兩尼に出會し、物語のついで、兄弟愛宕の山中にありし時の仔細を語るを聞きて、「その上﨟こそ惡僧が姑にて櫻姫の母なり」とて雷死のことを語り、又藥丸義治を打ち、田鳥かれを射殺して仇をむくいたる事など、懺悔の爲に語りければ、兩尼これを聞きて因果の歴然たる理を悟し、かま丸野分の方兩人のために、一七日のあひだ別時念佛を修行しけり。これ仇を以て恩に報ずる志、いと殊勝なりと云はぬ人はなし。しかるに上人遷化ののち、源宗南都にうつり、興福寺に法緣あるにより、境内に庵室を造りて住みけるが、かの櫻の木をも携へゆきて庭中に植ゑぬ。もとより靈木なれば、益生ひのびて枝葉しげり、年も經ざるに大樹となりて、春每に花爛漫として錦を敷きしかば、源宗大にこれを愛し、花の時には朝夕樹下に坐して、終日終夜灯をかゝげてながめけるにぞ、時の人、源




其二




伴の宗雄発心して法然上人の徒弟となり剃髪して法名を源宗とよぶ
夢中に桜ひめ一枝の
桜をたまふ楊貴妃
桜の来由是なり


義春の甥を跡目
尾四郎義基と
名のらせ田島
篠村両人補
佐して家を
つがせ先代に
忠義を尽
しゝ者
ら与に賞を
たまはると



宗が愛樹なればとて、「楊貴妃櫻」とよびにけり。これ、此源宗、唐帝の玄宗と音の響相似たるを以て、しかはいひけるとぞ。かの櫻、今に猿澤の東、石垣五十二壇の上、左の方にありて枝葉さかえにけり。

案ずるに、貴妃櫻の事、うきたる說に似たりといへども、奈良晒三十三張、南都名所記、大和案內記等にのせて、普く世に云傳ふる說なり。源宗法師、人皇八十五代後堀河院、元仁元年甲申五月十四日歸寂す。時に享年四十歲とぞ。

さるほどに鷲尾四郎義基、家を相續し田鳥造酒丞美長、篠村二郎公光兩人補佐しけるに、義基若年なりといへども、聰明伶俐にして文學武藝に通じ、よく家人を撫育しければ、一家中喜ぶこと限なく、誠に賢君なりと尊敬しけり。しかるに承久一亂の刻、義基鎌倉の味方にくはゝり、宇治川の合戰にいみじき武功をあらはしければ、鎌倉の二品禪尼(平の政子)の聽に達し、軍功比類なしとて、叛逆の公卿の所領沒收の地を賞充するの下文を賜り、先祖傳來の庄園に一倍して盛家富み榮え、伴の希雄のすゑの娘、源宗法師の妹なりける楓といへるをめとり、三男二女を生み、夫婦長壽を保ち、子孫繁茂して累代巨萬の富をなし、桑田の長者とて近世までも豪農にてありしと聞きぬ。誠に是、一場の奇談ならずや。

案ずるに、宇治拾遺物語卷之四に、清水寺の上人、進命婦を眷戀して病に臥す。命婦其病床をとふに、上人忽ち迷雲晴れて云く、「年來讀經の功德を汝に授くべし。若し俗を生まば關白攝政を生まん、女を生まば女御、后を生まん、僧を生まば法務の大僧正を生まん」といひ終りて往生す。果して命婦宇治殿に思はれ、京極大殿、四條の宮、三井の覺圓座主を生みけるよしを記す。柿の本の紀僧正、染殿の后を眷戀し、紺青鬼と變じて后をなやませしと云ふ虛談を、源平盛衰記に載せたり。世に語傳ふる清玄櫻姬の事蹟は、原是等の事を附會して、作りまうけたる物語ならん乎。

(昭草紙卷之五終　大尾)

追考

山州名跡志、大枝山大福寺の條下に、本尊の緣起を引いて、人王六十六代一條院の御宇、市原野に市森長者といふ人住す。其女櫻姬、難產のために落命す。其迷魂あらはれ、慧心僧都の敎化を受けて、成佛したるよしを錄せり。案ずるに櫻姬の物語是等をも附會したるやらに思はる。何にまれ、古く云傳へたる話とおぼし。

追考

山州名跡志大枝山大福寺の條下ニ本尊の縁記を引て人王六十六代一條院御宇市原野ニ市森長者と云人住す其女櫻姫難産の為ニ落命す其迷魂のかれ慧心僧都の教化を受て成仏するよしを録せり案ニ櫻姫の物語是等をも附會するものにやあらん何ニまれ古く云傳へたる話とおぼし

東都 一陽齋歌川豐國畫

剞劂氏 小泉新八郎刀

山東先生。鳥瀬氏。本姓ハ拜田。名ハ田藏字ハ田臧。一

號ニ醒醒老人ト。舍ス東都洛橋ノ南朱提街ニ。恒ニ著テ稗説ヲ

以テ寓ス諷諧ヲ。擧テ人呼フ京傳子ト。鄙孩巷婦靡シ弗ト口スルレ之ヲ

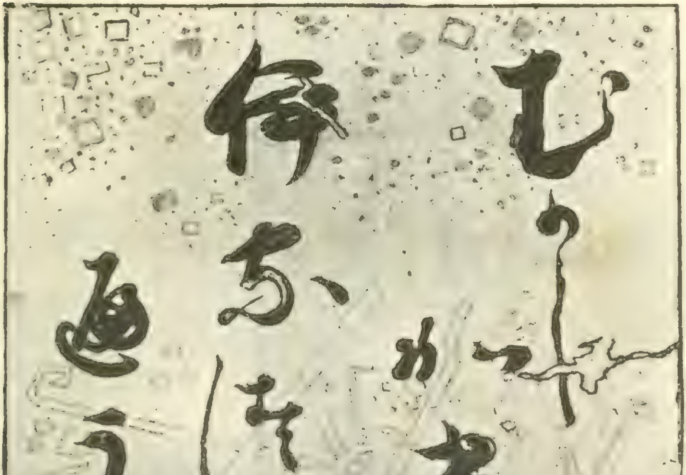
而シテ若ニ其名氏ノ。亦有ニ弗ル識セ者ハ。因テ詳ニ標シテ榜ス編尾ニ云

東都書舗　僊鶴堂小林近房謹識

文化二年乙丑冬十二月發兌

不破伴左衛門
名護屋山三

昔語稲妻表紙



東山八景

見わたす方はいつしや海乃まさるれ寿しぞや
ねぐらむいさやしに鳴くあらしまゝ山寺の晩鐘風と
うさきのちらく鴨河原おすてのまりきのゝいたい
江天乃暮雪もうく浪むれいおりしろきの
こやゝやちし鐘れさくつにきくいさし
賀茂川のあまれ乃まる鴈丹ゆく蛍遊阁
乃帰帆あさくまとつる清水寺はつものゝ色

烟寺乃晩鐘れひゞきて絶えつゝ川のながれによ
はるか乃散乱すハ平沙乃落雁ともいひつし
さゞくみてさむの月うけし洞庭乃あきの
あはれまつよるそゝろはしくさそふ海の漁村乃
夕照ハはるかにかゝれてあまたかよはふかの紙
　　香はたかし
六十一種のなか名香なるとて法隆寺東大寺道遙との
紅塵枯木なとの川法第證をかれやとらけるか

やはらし圓珠寺何をか不二の門にもつよき
行風涅槃若鷓鴣祖あ飛梅楊貴妃にし梅
おもわしし後みをはくし　月能因りみならぬ哉
斜月白梅千鳥や法華老梅やさきこつきし
花の宴はかれ雪名月賀蘭卑櫚なる數里
丹霞もれうつえ上ハかとわ須麿あよし十ある秋
隣家夕附雨をゐくうつ有明宮所しられ
なおりしつせ寔梅晦つこ紫早梅あわれ秋なるゝ



稲妻のはじまり見たり不破の關　荷翠

傘にねぐらかさめよぬれつばめ　其角



傾城の賢なるはこの柳かな　　　其角

稲さゝめきのしめやかさ絶えなみすら吹くなし
乃わわ馬ふきつく仰顔のたえぬものなどいのち乃惜しい
しらめてもいく板やくよるしめてもしめあらぬ

右由山は京者画二曲そむけし室町の花の御所を
いふをかれし頃京童はうむし小歌ようむそのうち
はうたこそ操の清高三隆達しい光婦しもうつくと
あつたかめうちかへてしようつしよわかきくて隆達よしふ
いかしそ洲西武の代時代よ国あつそとむそしさらにさそうつ

見わたせばひがしやまのはるのけしきやぎをむばやしにふくあらしは山市の晴嵐とうたがはれ河原おもてのまさごのいろは江天の暮雪もかくやらむおもしろの花のみやこやむしゆのさくらにしくはなし賀茂川のながれのするにゆくふねは遠浦の歸帆かさえわたる清水寺のかねのこゑ煙寺の晩鐘のひゞきそれしら川のうきにつばさの散亂すは平沙の落雁ともいひつべしさてれうせむの月かげは洞庭のあきのゝこれにはよもまさらじさてまた漁村の夕照はつりたわてあけまきにあそぶものを

香づくし

六十一種の名香は法隆寺東大寺逍遙みよしの紅塵枯木なか川法華縁はなたちばなやつはし園城寺似たり不二のけむりはあやめ梨若鷓鴣斑あを梅楊貴妃とぞ梅たねがしまみをつくし月龍田もみぢの賀科月白梅千鳥や法華老梅や重がさ花の宴はなの雪名月賀蘭子卓橘はな散里丹霞はながたみ上はかをり須磨あかし十五夜蘭宴夕時雨たまくら有明雲井くれなゐはつせ寒梅ふた葉早梅霜夜たなばたねざめしのゝめうすくれなゐうすぐものぼり馬とかく伽羅のけふりといのちの君はとめてもいく夜いくよとめてもとめあかぬ

右東山八景香盡二曲はむかし室町に花の御所をいとなまれし頃京童のうたひし小歌となむそのゝちはるか過て堺の僧高三隆達といふ者ふしはかせをあらためかへてうたひしよりなべて隆達ぶしといふとぞ此草紙の時代に因あるをもてこゝにしるしつ

附テイフ

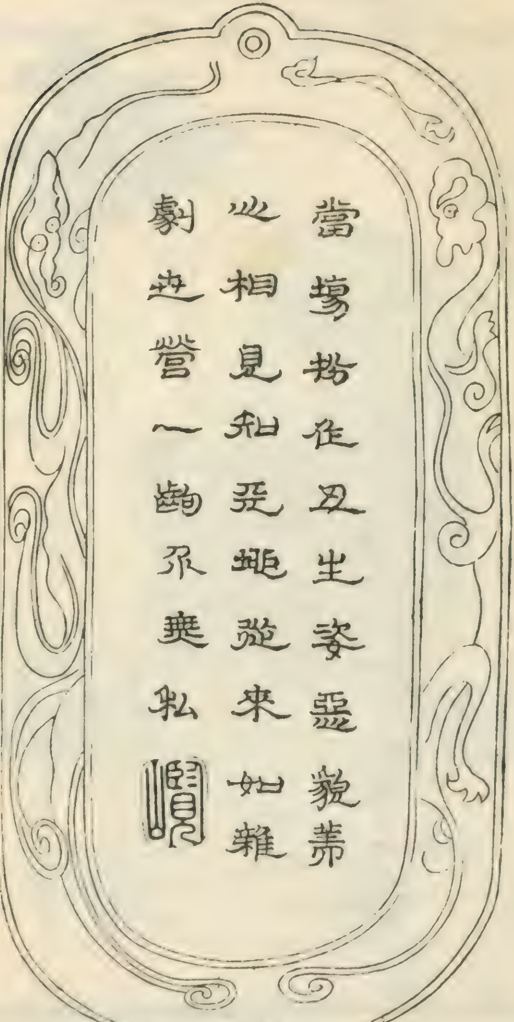
○原此稗説ハ。平安堂近松氏ノ。筆ノスサミ。返魂香ト云。院本ニモトヅキ。新ニ作リマウケタル物語ニテ。三本傘ニ身ヲ知雨ノ。哀ナル事ヲノベ。山三郎ガ山ノ井ノ。深恨ノ故ヨシヲ記ト雖。不破ノ關屋ノ板間モル稲妻ノ。跡ナキ事ノミオホカレバ。俳優ノツクリ物語。狂言綺語ノソラ言ト。看ベキ也

○聽松堂語鏡ニ。市井ノ愚夫愚婦雑劇戯本ヲ看テ忠臣孝子義夫節婦アルニ遇バ。良心ヲ觸動シ。悲傷涕泣自禁ゼザルニ至リ牽テ行ヲ敦シ。善ヲナス者アリト云。此書ノ如ソラ言モ。看人ノ心ニヨリテ。忠臣ノ薄命孝子ノ苦辛。義夫節婦ノ。道理ニセマレル趣ヲ考ミテ憐ノ想ヲ起サバ。導善除惡ノ一助𪜈。ナルベカメリ

○華嚴經ニ心ハ工畫師ノ如ク。種々五蘊ヲ造ス一切世界中。心ヨリ生ゼザルハナシト云。此書文ノ記シ得ベカラザルハ。繪ヲ施シテ其形勢ヲ示ス。善人惡漢ノ爲ニ苦ムヲ見テハ。コレヲ悲ミ。惡漢善人ノ爲ニ亡ルヲ見テハ。快シトシ。善惡邪心ヲ一面ノ業鏡ニ照シ看テ。一切世界中總テ心ヨリ生ジ。諸ノ美惡ヲ畫出スノ理ヲ曉サバ。ヲノヅカラ善ヲ勸メ惡ヲ懲スノ便𪜈ナリナンカシ

昔文化二年乙丑秋九月下浣

江戸醒醒齋主人識 印



當場指作丑生姿盈貌帯
必相見知是蛇從來如雜
劇也營一齣不爽私

倭風道骨



咲匂ふ梅津の川の花さかり　うつる鏡のかげもくもらず　爲家卿

稲妻表紙



あの聲でとかげくらふか時鳥　其角



骸骨のうへを粧ふて花見哉　鬼貫　喰物もみな水くさし魂祭　嵐雪



ゆふだちや細首ちらに大井川　宗因

畫足蛇皮



蛇くふときけばおそろし雉子の聲　芭蕉



言水　花瓜や絃をかしたる琵琶の上

夜動書藏



うぐひすや鼠ちりゆく闇のひま　其角

非風非幡



水風呂の下や粲山子の身の終　丈草



大津繪の筆のはじめは何佛　芭蕉



七月や暮露よび入て笛を聞く　其角

昔話稲妻表紙總目録

總目録終

昔話稲妻表紙巻之一

一 遺恨の草履

今は昔人皇百二代、後花園院の御宇、長祿年中、足利義政公の時代、雲州尼子の一族に、大和の國を領す、佐々木判官貞國といふ人ありけり。兄弟二人の男子をもてり。兄は桂之助國知といひて、今年二十五歳なり。弟は花形丸とて十二歳なり。兄は先妻の子、弟は後妻の蜘手の方といふに出生したる子なり。桂之助の伯父に藏人貞親といふ人あり、是則判官貞國の弟なるゆゑに一萬町の分地を與へ、同國平群に別館を造りてすゑおきけるが、一人の娘をまうけ、先だつて夫婦ともに身まかりけり、その息女容顔美麗なるが、成長の後、桂之助の内室となり、名を銀杏前といふ。夫婦中むつましく、ほどなく男子誕生あり、其名を月若といひて、今年七歳になりぬ。其比義政公京都室町に、新館を營て花の御所と號し、兼て花車風流を好み給ひ、近仕の士ゑ列侯の子息のうちより、美男を選びて召つかはれけるが、桂之助兼て美男のきこえあるにより、此選びに入て、京都にめされ、右近の馬場の旅館に住、室町の御所に通ひて勤けり。此度桂之助にしたがひて、上京したる家士は、執權不破道犬が一子、不破伴左衛門重勝、長谷部雲六、笹野蟹藏、藻屑三平、土子泥助、犬上雁八等なり。去程に桂之助、妻子は國に殘しおき、其身獨長々在京し、御所勤の氣鬱つもりけるにや、頃日は病がちになりて、折々惱みければ、一時家士等、桂之助が病に集、何がな殿の鬱結を慰る事もやと評議しけり。さて當家の重寶に、巨勢の金岡が畫たる、百蟹の圖とて、百疋の蟹をかきたる繪卷物あり、室町殿兼て古書畫を好み給ふにより、御聞に達し、御覽あるべきよし命せられければ、國元より、名古屋三郎左衛門が一子、名古屋山三郎元春、彼卷物を携へてまかり上り、すなはち當館に逗留してありけるが、兼て大殿申樂を好れけるゆゑ、山三郎武藝のいとま亂舞を學びて、居とりて名譽の者なりければ、皆々口を揃へて申しけるは、山三郎上京こそ幸ひなれ、かれに一さし舞せて御覽候へ。しかし彼が舞御國元にては度々御覽ありし事なれば、相人なくては興あるまじ。頃日時めく白拍子に、藤波と申す女あり、年は十七歳のよし、歌舞吹彈の業に達し、しかも類まされなる美女にて、古の祇王祇女佛などにもをさ〳〵おとらざる者にて候、彼

を召、山三が相手とし、亂舞俳優を催し給はゞいみじき觀物にて候はんと、作左衛門をはじめ、これをすゝめけるにぞ、杜之助大に喜び、夫きはめて興あらん、急ぎ催すべしと命じければ、皆々かしこみ候といひて退き、つぐる日彼藤波、ならびに囃方を召よせ、山三郎をくはへて、亂舞俳優をさせ、美々しく酒宴をまうけて大に興を催しけり。かくて山三郎藤波かはる〴〵、種々の舞ありて後、酒飲の亂足、西寺の鼠舞、無力蟇、無骨蚯蚓の道行ぶり、福廣聖の袈裟求、妙高尼の襁褓乞などいふ、兩人立合の俳優ありて笑ひを生じ、終にいたりて藤波、男舞といふ秘事を舞ぬ。これは昔後鳥羽院の御宇、通憲入道、讃岐の磯の前司といふ女に、傳へたる舞なり。金の立烏帽子、白水干に紅の大口はき太刀をおびて立舞さま、實是、沈魚落雁、羞月閉花の容あり。ひるがへす袖は鸞鳳の舞にひとしく、其うたふ聲は頻伽の聲がごとくなれば、皆人感にたへ、奇妙の舞妓かなと、賞嘆の聲しばらくはやまざりけり。此時より杜之助藤波を戀そめて、病はいづくへか去、只思ひ川の水胸にあふれて戀の淵となり、藤波を見るに事よせて、度々なれしよせけるが、つひに作左衛門がはからひとして、藤波を杜之助の妾にめしかゝへ、館に引とりて給仕させければ、杜之助望たりて最愛深くめしつかひ、かれが

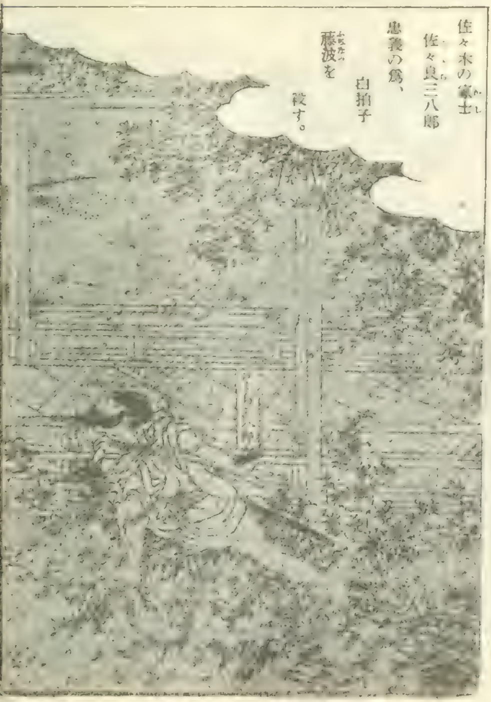


妹に辰龍とて、今年十三歳になれる少女のありけるを、これをも館にめしよせて、藤波がそばづかひにさせぬ。藤波も桂之助が美男なるにめでて、誠心を盡し、鴛鴦の契淺からざりしかば、桂之助おのづから御所の勤仕おろそかになりぬ。されども佞臣等はこれを幸とし、晝夜かたはらをはなれず、遊相人となりて、酒宴淫樂にのみあかしくらせば、旨酒珍膳、席上にみち、郢曲謳歌室中にかまびすしく、恰も妓家娼門の所行に似て、うたてかりける形勢なり。山三郎逗留の間、此爲體を見聞して、只獨胸をいため安き心はせざりけり。しかるに伴左衛門いつのほどよりか、藤波に戀慕し、千束の艶書をおくるといへども、藤波は手にもふれず、盡くこれをもどして、一言の返答だにせず。伴左衛門一向思ひとゞまらず、折をうかゞひひまを見て、おどしつすかしつかきくどく。藤波はじめは彼が恨

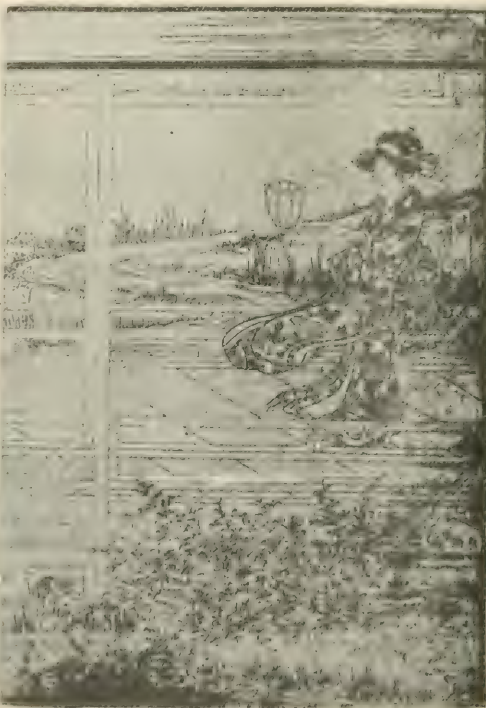


憤らん事をおそれて、心一つにをさめおきけるが、今はやむことを得ず 桂之助に艶書を見せて、彼がふるまひをつぶさに告ぬ。桂之助は短氣の生れなるうへに、心狂しくなりたる時なれば、これを聞とひとしく奮然として怒氣天にさかのぼり、急ぎ伴左衛門をめし出し、かの艶書をくりひろげていひけるは、汝藤波に不義をいひかけ、數通の艶書をおくる條、罪科甚重し、後日の見せしめに、我み

つから手をくだすなりといひもあへず、白鞘巻を抜はなしければ、次の間にひかへたる山三郎いそがはしく走出、傍にすがりて押とゞめ、詞を盡してなだめけるにぞ、やうやう刀をさめ、しかるうへは汝にめでて一命をたすけ、長く勘當すなりと、かたはらに命じて、伴左衛門か大小をもぎとらせ、庭上に引おろさしめければ、伴左衛門は一言の分説なく、只打しをれてぞ伏居たる。桂之助山三郎を顧み、汝上草履を以て、伴左衛門が面を打、辱めを與へよと命ず。山三郎頭をさげ、御憤はうべなれども、さすがに彼は、執權職を仕る道犬が兒子にて候へば、この儘御いとまつかはされくだされかしと願を、聞入ず、いな／＼彼がごとき人畜は、面に糞汁をそゝぐとも飽たらず、とく／＼打よ。たゞし我命を背かと、いきまきつゝいふ。山三郎おそれいり、おほせを背には候はねども、傍輩の因身武士の情に候へば、辱るにしのびず、押て願奉ると、いはせもはてずいな／＼何の宥免あらん、汝若打ずんばともに勘當なり、打べきや打まじきや、返答せよと、せきにせきて詞詰しければ、山三郎しかるうへは、是非に及候はず。いかでか違背仕るべきとて袴のくゝり引あげ、上草履をとりて庭におり立、庭下駄をならして、飛石をつたひ、伴左衛門が傍にちかづき、嚴命なればせんすべなし。か


佐々木の家士佐々良三八郎忠義の爲、白拍子藤波を殺す。

ならず恨給ふなと、耳ちかくいひきけて、草履をあげ、面をかけて一打うち、退んとするを、桂之助繼先に出て一見し、あな手弱や山三郎、數なく打て辱めよとおほせければ、やむことを得ず立もどり、又しと〱と連打に打けるにぞ、伴左衛門が釜沸ときれ、鬢髪亂れて見るにしのびぬ形勢なり。桂之助呵々と打笑ひ、みな〱後を見よ、こゝちよき見物にあらずや、はや引出して後門より追拂へと命ず。やがて奴僕等割竹をとりて庭づたひに出來り、いざいざとて追立ければ、伴左衛門しぶ〱立あがりて、しづかに衣服の塵を打拂ひ、山三郎を尻目ににらみていでゆきぬ。これぞ遺恨の起りとは後にぞ思ひ知られける。かくて後山三郎、しば〱諫言をもちひけれども、桂之助露ばかりも聞入ず、佞臣等は山三郎をとほざけんと計、一向あしくとりなすにより、桂之助山三郎を召出し、百濟の寳物



御覧すみなば、此方より別人を以てもどすべし。汝が役目すみたるうへは、いたづらに在京せんも親人のおぼす所いかゞなり、とくとく歸國いたすべしとあれば、山三郎心ならずといへども君命もだしがたく、假に行裝をとゝのへて國元へまかりくだりぬ。しかりしより後は、誰憚る者もなく、室町の御所へは重病と披露して出仕をやめ、日夜の酒宴絲竹の調に、春の日も暮なんことを花にをしみ、秋の

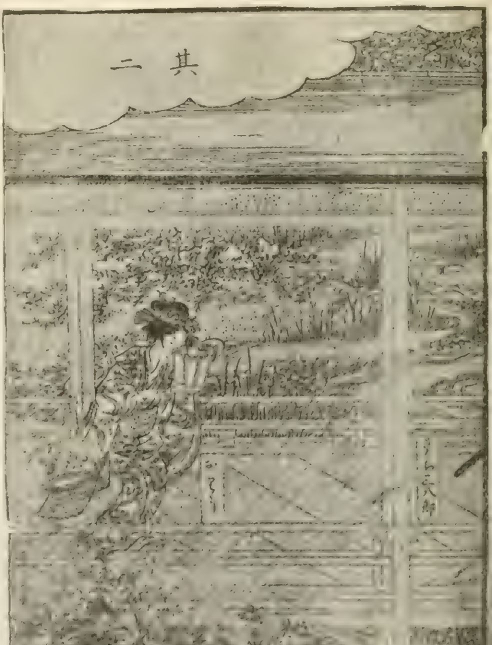
夜も短しと月にかこち、更に本性はなかりけり。

二　風前の燈火

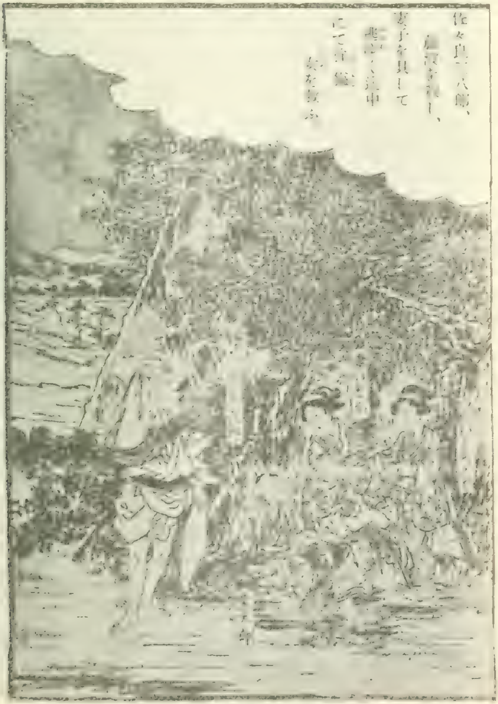
爰に又、此旅館をあづかる家士に、佐々良三八郎といふ、忠臣無二の者ありけり。兼て妻子をおびて當館中に住けるが、山三郎歸國の後は、桂之助の身持益あしく成行けるを深く悲み、主君の前に出て諫けるは、虚病をかまへ給ふのみならず、旅館に妾をめしつかひ給ふ放佚無慙の御行跡、若室町御所にきこえなば、ゆゆしき大事、御家にもかゝはることにはんべり。こひねがはくは藤波にいとまをつかはされ、御身持をあらためくださるべしと、何の憚る所もなく、おもふむねをのべて、しば〳〵諫言せしかども、桂之助耳にも聞入ず、日をおひて惡行つのりければ、三八郎熟おもひけるは、かくばかり詞を盡し理を糺して諫まをすに、御聞入なきうへはせんすべなし。これ畢竟藤波が色香に迷ひ給ふゆゑなれば、彼あらん限りはいかに諫申すとも惡行やむべからず。根をたちて葉をからすの道理なれば、折をうかゞひ藤波を殺し、おのれ腹かきやぶりて死るにしかじ。科なき女を殺は情なしといへども、御家にはかへがたし。越の范蠡西施を呉湖に放ちたる例もあるものをと、つひに心を決し、



よき折もがなと思ひ居たるに、一夜時ならぬ夜嵐の烈しきを幸ひとし、身輕に打扮で奥庭にしのび入、樹木の茂たる所にかくれて、藤波が部屋に下るを待居たり。藤波はかくとは露しらず、子すぐる比殿の前を退き、ほろ酔の機嫌にて、みづから手燭をてらし、濃紫の小袖のつまとりあげて、長き廊架を歩み來る。三八郎かくと見るより、氷なす刀を抜そばめ、今を盛に咲亂れたる、山吹躑躅、早咲の燕子花を踏ちらし、やり水の流れ、そばたちたる庭石を飛越て、廊架の手すりの下をつたひ藤波が跡をつけて、今や斬ん〱とつけねらふ。藤波は何の心もなく歩みけるが、此時一命の終るべき宿世の因果にやありけん、風雨ます〱つよく、爛漫たる庭木の櫻を吹ちらして、吹雪のごとく散かゝり、手燭を颯と吹けして忽ち眞の闇となる、嗚呼彼が命の危さも、げに風前の灯火なり。藤波進退を失ひて心たゆたひける所に、暗裏に劍の光り、電光石火と閃きければ、驚きて逃ゆかんとするを、三八郎をどりかゝりて斬つけたるが、暗中なれば目當ちがひて空を斬、これはと又斬劍の下をくゞりぬけて、猶逃去んとしけれども、餘りに驚き、身うちわなゝき足なへぎて走ることあたはず、夢路に迷ふごとくなり。三八郎は息をこらし、あたりを探りて立まはり、めつた斬にきりけるにぞ、藤波振袖の袂を斬落



され危く身は遁たれしども、目前に劍のひらめくたび〳〵胸冷、魂きえて、黒暗地獄の罪人が、劍樹にのぼるにことならず。三八郎はひまとりて、仕損ぜまじと心せかれ、衣にとめたる蘭麝の薫る方を心當に、うかゞひすまして斬つけたれば、手ごたへして呀とさけぶ。仕すましたりとたゝみかけてきるにぞ、あはれむべし藤波、たまきはる聲とともに、のけさまになりて、背後なる杉戸はづれ、おしになりて撞と倒る。時に奥深くたてたる、燈火の光りのほの洩るに乘して、その形勢を見るに、無慙やな袈裟に斬さげられ、鮮血泉のごとく涌流て、身うち朱に染り、手足をもがき、齒をかみならして苦む體、見る目もあてかねたり。三八郎せめて苦痛をさせじと思ひつゝ、乘かかりて吭にとゞめの刀をさしとほす。嗚呼悲哉嗚呼痛哉、十七歳を一期として、黄泉の鬼となりにけり。かくて三八郎袖引ちぎりて血刀にまき、肌おしくつろげ、已に腹につきたてんとせしが、俄におもひなほしけるは、いな〳〵今死すべき命にあらず、人の見とがめぬこそ幸なれ、不破道犬が爲體お家を亂すべききざしあり、これよりすぐに出奔し、權命をながらへて、よそながら主君の目代となり、彼が悪意を見あらはし、其後此藤波が所縁の者の、恨の刃にかゝりて死んこそ武士の道なるべしと、心をさ



だめて死骸にむかひ、忠義の為とはいひながら、科なきおことを無代に殺せしい不便さよ。やがて此身も及にかへり、冥途にまいて分説せんと、掌を合せ、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と、口の内に回向して、退き出んとしたる折しも、藤波が身の廻り、軒の下りのいつより運きを案に、むかひの為手燭をともして何の心もなく、此所まで来かゝり、三八郎と顔見合せ、此血しほはとおどろきて、聲たてければ、三八郎手ばやく刀の鉦打に、手燭をはつしと打落し、吻とため息つきもあへず、又庭つたひに逃出けるが、深夜といひ夜嵐ますく烈しければ、誰一人これを知者なかりけり。かくて三八郎我家にかへり、妻礒菜にしかぐの事を語り、いそがはしく身支度して、たくはへの金子を懐にし、おのれは今年十二歳になる楓といふ娘をせおひ、妻には七歳になる粟太郎といふ男子をおはせ、夫婦しのびやかに後門より逃出けるが、四方暗々く心のみ前に走り身はあとへ引るゝこゝちして東西を辨ぜず。雨はやゝつよく降し、おぼえず背後を顧れば、怪哉、心て篠をつかぬるがごとくなれども、雨衣火ばつと燃上り、藤波が姿かげろひのごをだに身につけねば、濡衣足にまとひつとくあらはれて、行をやらじと引とゞむ。きて歩みがたく、素足なれば道ぬめりて三八郎此時身うちぞつと冷とほりけるが、



刀を抜て斬拂ひ、妻の手をとりゆくむかうへ、又ぱつと炎燃て、藤波が姿すくと立、なほもやらじとさゝへたり。妻子の目には見えねども、三八郎が目前には、まぼろしのごとくつきまとはり、此にあらはれ彼處に亡、斬ど拂へど立さらず。勇氣烈しき三八郎も、身うちしびれ足なえぎて走ることあたはず。妻の礒菜もろともに、たち〳〵と引もどされ、髮も亂れもすそも破れ、身體すくみて倒れしが、やう〳〵心を勵して、百歩ばかりも逃去時、烈風颯とおろし來て、大粒の雨つぶてを打がごとく降かゝり、一團の心火あとを追て飛來り、見る〳〵空中にて二つにわかれ、一つは娘楓が懷に入、一つは栗太郎が懷にいりぬ。是乃藤波が死靈、兄弟の兒等につき恨を報る一端なり。かくて夫婦こけつまろびつ、たゞ走りに走り、辛じて遙に逃のび、先身體恙なきを喜びけり。此時にいたりてやう〳〵風雨をさまり、雲はれて朧月さし出、草の緑に影うつるを便に北山を過杉坂を上り、あまりに息たゆければ、茂林のうちにいり、夫婦背上より兩人の子をおろして、岩の上に尻かけ濡衣をしぼり、清水に咽をうるほしなどして權やすらひ居たる折しも、坂のうへより若うつくしき女ちらし髮素足にて、ぬかり道をびしよ〳〵と歩み來ぬ。よく〳〵見れば何にかあらん烟のやうにて、壁人のごとく、人の形したるもの、女の前に立、糸のやうなる手をあげてさしまねく、まねけば女足をはやめて歩む。まねかざれば女立とゞまり、頭を傾て物をおもふさまなり。女立とゞまれば、かの恠物、又手をあげてさしまねく。かくしつゝも女、舊榎の下にいたり、權たゝずみてさめざめと泣居たるが、かの恠物梢をゆびさせば、女あふぎ見てうなづき、なほさめ〴〵と泣涙、梢の雫とおちかゝる。怪物又榎の枝をゆびさし、物打かくる仕方をすれば、女うなづき前後を顧つゝ、やがて腰帯を解、木の枝に打かけたり。三八郎妻とともに、木蔭の暗所にあり。此爲體を見て暗に思ひけるは、彼恠物は世にいふ死神なるべし。首縊榎などいふものありて、前に縊死したる者の亡魂、樹下にとゞまりて、死神となり、人をいざなひて縊しむと、世の語柄には聞つれども、眼前見るはこれがはじめなり。我忠義の爲とはいひながら、罪なき藤波を殺せし事、みづから悲み愁る事深し。せめて此女をたすけて藤波が冥福をもとむる種ともなし、怨魂をなだむる便ともなしてんとおもふうち、彼女西にむかひて掌を合せ念佛數遍となへ、ほと〳〵縊死んとするを、やれまてしばしと聲かけて走り出、背後より抱きとゞむ。女はおもひかけざる事なれば打驚き、ゆゑありて死ねばならぬ者なれば、はなして死せて

よ。折角思ひきりつるものを、二度のおもひさする人よとつぶやきて又縊んとするをしかととゞめ、一命を失んと思ふほどなれば、定て迫たる事ならんが、まづ其縁故を語り候へ。若我力に及ぶ事ならば、力を盡して救たく思ふなりといふ。女情深き詞を聞、何方の御方かは知らざれども誠に慈悲深きおほせなり。さりながら其故を語るとも、とても生ながらへがたき身なれば、此儘に見捨て御通くだされかしといふ。三八郎かさねていひけるは、見ず知ずの者なれば、卒爾に語給はぬはうべなれど、世の常言に膝とも談合せよといふ事あり。何にもあれつゝまず語り候へかしと、誠心面にあらはれければ、女權思案し、左ばかり深き御心を無下にせんもいかゞなれば、一通語りはべらん。妾は此邊に住武士の浪人の妻なるが、家貧きにより、さきだつて先祖傳來の物を、金二十兩に質入したるを、夫の妹なるもの聞およびてこれを愁ひ、二十兩の金子を合力しくれつるゆゑ、今宵妾に彼質物を受もどしまゐれと、夫いひつけ侍るにより、金子を懷にして出たるが、途中にて盜人に出あひ殘らず奪ひとられ侍り、合力したる妹の手前といひ、夫に對して分說なく、面を合せがたければ縊死んと覺悟をきはめ候なりと、愁の色を面にあらはして語りければ、三八郎始終を聞、それなれば死るにおよばず。幸ひ某少々の路銀を携へたれば、其金の數ほど合力いたすべし。これにて質物を受もどし候へとて、金子二十兩出して與へけるが、女これをうけず。誠に御慈悲の深きは骨身にとほりておぼゆれども、所緣もなき御方より、金子をまをしうけしと夫に語ば、かへりて快存じ候まじ。さりとて語らざれば夫を欺に似て、女の道たちはべらず。いづれの道にも死ねばならぬ身の因果、今宵に迫り候といひて、おつる涙瀧のごとし。三八郎其詞を感じて、もつともと點頭、懷中の金子を財布ながら取出し、かの金をひとつに入て地上におとし、某誤て此金をこゝにとりおとしつるを、おん身はからず拾たり。凡道におちたるを拾ひ、其主の出たるとき其物をわかち與ふるはなき例にあらねば、おん身二十兩の金子をうくるとも耻ならず、某又與ふるとも恩ならずと、理を盡して與へけるにぞ、女感涙とゞまらず、おん身のごとき大慈悲の人は、世に又とあるべからず。よも凡人にては候まじ。觀音菩薩權に身を現じて、妾を救給ふならめといひ、掌を合て再三拜み、しかるうへは權此金を借用いたし、後日此身を售てなりとも返しまゐらせん。そも御身はいづくの御方にて、御姓名は何とまをし候ぞ。妾が夫の姓名はと、いはんとせしを三八郎、いそがはしくとゞめ、いな〳〵其姓名あかし給ふ

な。某が姓名もいふまじ。素返濟をうくるこゝろにあらず。おん身の夫の名を問。我名を語れば、おのづから恩を著、恩に著するの理にて某が意にあらず。深夜といひ旅人の身、殊に足弱を、伴道をいそげばひまどりがたし。御縁もあらばかさねて相見ゆべしといひすてゝ、もとの木陰に走り入ば、女は涙を流しつゝ、金を押いたゞきてとりをさめ、しばらく跡を伏拜み、もと來し道へ急ぎ去ぬ。

三　胸中の機關

さても右近の馬場の舘においては、其夜藤波が妹於龍、姉の死骸を見つけて大に驚き、聲たてゝよばはりければ、侍宿の武士等馳集り、大に騒動し、いそがはしく主君の前に出て、しかじかと告きこえければ、桂之助あわてまどひて現場に到り、藤波が死骸を點檢して、且驚き且悲み、何者の所爲なるやと疑ひ、先於龍をめして事の様を問けるに、佐々良三八郎が殺したるよしを告る折しも、笹野靈嶽いそがはしく馳來り、百蟹の卷物紛失いたし候と申す。桂之助益驚き、舘中をこまやかに穿鑿あるに、三八郎家財は捨おき、妻子を携て逐電、長谷部雲六も出奔の體なりと申しければ、さては彼等兩人いひ合せて、百蟹の寶物を盗取たるを、藤波に見とがめられ、せんかたなく害し去たるにうたがひなし。足弱をともなひたればよも遠くはゆくまじ。追人をつかはしはやく捕へしむべしと命じけるに、四方に手分して追行けるが、いて早朝にいたり、追人等立歸り、いづくへ逃去候やらん、影だに見えずと告ければ、桂之助只あきれたるばかりなり。これさへ不慮の騒動なるに、家老の侍士まかりいで、御國元より、執權不破道犬自身にのぼられ、只今著到いたされ候と告る。桂之助眉をしはめ先だつて何の沙汰もなきに、道犬みづから上京せしは、いとも心得ざる事なり。何事やらんと心安からず、待居たるに程なく不破道犬旅装束の儘にてうち通る。そのさまいかにとなれば、總髪の頭に素雪をいたゞき、しわみたる額に老の波をたゝへ、高年といへども身輕すくよかにして、奸佞の面野狐のごとく、貪欲の眼鷲鷹に類し、相貌きはめて兇惡なり。笹野靈嶽、藻屑三平、土子泥助、犬上雁八等、四人の者も、跡につきてまかり出ぬ。桂之助道犬に對面し、先時事をいはず彼の上京何事ならん御使でありしとおほせければ、道犬頭の毒顔にいひけるは、火急の上京別義に候はず、ちかごろ君御身持あしく、旅舘におはしながら白拍子を召抱て妾となし給ひ、しかのみならず虚病をかまへ、佚遊宴樂に日を費し、御所の勤仕をおこたり給ふよし、官領職、濱名入道殿の御聞

に達し、擯斥すべきよし御内意あり。若しからずんば、御家にもかゝはり其罪大殿の御身にもおひ給ふべきよしなれば、せんすべなく、御勘當との御事なり。大殿御自筆の罪状御覧あるべしといひて懐中より一通の状をとり出してさしおけば、桂之助とりあげて讀もをはらず、胸ひしとつぶれて大に後悔し、只さしうつぶきて言なし。道犬かさねていひけるは、碓野盤藏、藻屑三平、土子泥助、犬上雁八等四人の者、君の御傍にありながら、御諫もせずかへりて放埒をすゝめ申たる條其罪輕からず、切腹をもおほせつけらるべきはずなれども、大殿の御慈悲を以て、後門より追拂へとの嚴命なりと云渡しければ、四人の者はなげ首してぞよわりける。道犬又いはく、只今御次にてうけたまはれば、佐々良三八郎、長谷部雲六といひ合せ、昨夜百蟹の巻物を盗み、御妾藤波とやらんを殺し逃去たるよし、さあ

る内亂の起るも、總是君の御行跡よろしからざるがゆゑなり。かの巻物は御家の重寶といひ、いまだ室町御所の御覧も濟ざるよし、若是等のこと此うへおん聞に達しなば、いかなる御咎あらんもはかりがたし。御痛はしくは候へども、とくとく御立退候へかし。後日某身にかへても、御歸参あるやう取はからひ申すべし。只恙なくおはしまして時のいたるを待給へ。かの女の死骸は縁者を召呼て引渡し候べしといひて、先おのれが家來に命じて四人の者を追拂せければ、桂之助もせんかたなく、打しをれつゝ出去ける。心のうちおもひやられて哀なり。かくて道犬藤波が縁者をよび、死骸ならびに妹於龍を引渡し、館の財寶雜具をとりをさめ、おのれが家來をとゞめて守らせ、たゞちに歸國をいそぎけり。

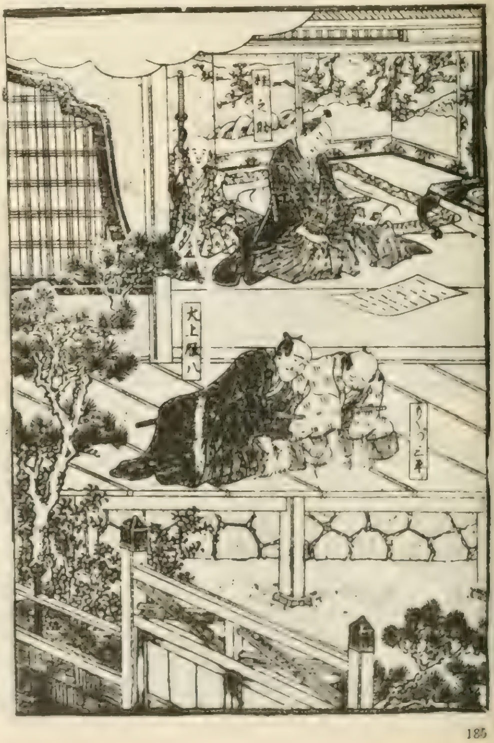
後々此時の子細を聞に、是皆道犬が奸計より出たる事なり。近曾由理之助勝基、濱名入道兩官領確執となり、入道勝基を打亡さんと結構專なりけるが、兼て不破道犬濱名入道に内通して媚諂、官領の權威をかりて、奸計を施し、佐々木の家を奪ひ、濱名の味方につかんと約し、兒子伴左衛門其餘盤藏等にいひふくめて、桂之助に放埒をすゝめ、密々濱名に告、内意をいはせて勘當をうけしめ、わざと盤藏等四人の者を追拂て、一家中の心をゆるさせ、伴左衛門とともに他所にかくまひおき、何不足なく扶助して、おのれが目代とし、内外より事を計んたくみなり。只おのれ等が一つ心よりいでたるは、伴左衛門藤波に戀慕したると、雲六が巻物を盗て逃去たると、此二つのみなりとぞ。

四　荒屋の奇計

山城國葛野郡松尾の近きに、梅津の里梅津川といふあり。ともに古歌に詠じたる所なり。そのかみ元亨の頃此里に梅津豐前左衞門清景といふ人ありけり。此所の領主にて、家富榮たる武士なりけるが、其頃月林大幢國師、洛北岩藏の庵室におはすを深く尊信し法名を是球と稱し、領所のうちを附與して禪刹とす。今の大梅山長福寺といふは乃是なり。清景の墓今に此寺にあり。扨此清景の子孫に梅津嘉門といふ者あり。累代此里に住けるが漸々に零落し今嘉門が時にいたりて益困窮す。嘉門年いまだ初老にいたらず、聰明衆秀膽力人に過、世に希有の英雄なり。曾て六韜三略に眼をさらして、軍略の妙所をきはめ、弓馬鎗刀のたぐひ、武藝の奥儀を曉し、天文地理神機妙算進退懸引の道、其理を得ざるといふことなし。そのゆゑに英名かくれなく、高祿を與へてめし抱んと、懇望の諸侯おほかりけるが、名利に屈するをきらひて仕官をのぞまず、常に松尾山にのぼり、採藥して藥店にひさぎ、細烟をたて清貧をまもりて、いさゝかも奢の心なく、一人の老母に孝行を盡し、妻も斬髪にやつし、いとまには先祖清景大幢國師より傳來の禪味をあまんじ、世に諂らはぬ暮し、實に一世の



賢士とは知られぬ。母も又賢女にて、今の世やうやく治平といへども、仕へさすべき明君なしと心を決し、嘉門が名利に屈せざるを喜び、てづから布を織て日々の費にかへ、いさゝか貧苦を愁ず暮しぬ。しかるに頃日彗星あらはるゝにより、諸人心安からず吉凶を辨ずる者なかりけるが、一夜嘉門縁先に立出、かの星をあふぎ見、母をまねきていひけるは、抑我朝に彗星あらはれたる事、皇極天皇の御宇、蘇我の入鹿叛亂の時、始て此星あらはれしより、今にいたるまで一度も祥瑞なることなし。凡彗に五つあり。其色蒼ときは王侯破れて天子兵革に苦み、赤ときは兇賊起りて國人安からず。黄なるときは女色害をなす。白ときは將軍叛て兵亂大に起る、黒きは水の精にて、洪水河に溢て五穀登ず。あれ見給へ此度の彗星、其色蒼に黄をおびたり。まさしく是牝雞晨して婦女權を奪、天子兵革に苦み給



ふ前兆にて候はん。母人はいかゞおもひ給ふやらんといへば、老母點頭、我もとくにその心つきぬ。花の都狐狼の伏土とならんこと遠からじ。はやく此所を去り山林にかくれて、兵亂を避るにしくべからずといひけるが、此後果して應仁の大亂起りぬ。母子兩人の先見誠に是あきらかなりといふべし。此頃由理之助勝基、濱名入道兩官領なりしが、勝基は濱名が甥にてしたしきうへ子なきゆゑ、濱名が

子を養けるが、勝基實子出來ければ、其養子を僧とす。これより兩家確執となり、濱名勝基を打亡し、おのれひとり權威をほしいまゝにせんと謀し、密々野伏浪人どもを召抱けるが、嘉門が軍略に達したる事を聞および、召抱んと使者を以ていひ入けり。嘉門は兼て入道が行跡をにくみ居たるうへに、使者ののぶる所、專官領職の權威をふるひ、無禮の詞おほかりければ、嘉門心中に憤、招に應せざるのみか、かへりて入道が日來の不道をかぞへてさみし辱め、きびしくいひはなちけるにぞ、使者面目を失ひはう／＼の體にて立歸り、入道に嘉門がいひつる樣を、ありのまゝに告きこゆ。入道聞もあへず大に憤發し、やをれにくき腐儒者めかな。憂目を見せて後悔させんと、家來岩坂猪之八といふ荒男に、大力の組子二十餘人を撰與へ、彼奴も智謀武術に秀たる者なれば、若手にあまらば首にして持かへれと命す。血氣にはやる猪之八かしこみ候と答へ、小具足に身をかため、彼奴たとへ楠が智をたくはへ、義經の早業を得たりとも、痩浪人の分際何程の事かあらん。黄土小屋を踏つぶし首すぢつかみゐてかへらんと廣言せば、思慮もなき組子等、いさみすゝみて相したがひ梅津の里へ急ゆく。嗚呼嘉門が身のうへ危かりける次第なり。此時宵闇の夜なりけるが、猪之八等嘉門が家に近づく比、月影



唐津嘉門天文を見て治亂興亡を論じ、奇計を施して捕人を皆殺にす。

あかりて明なり。嘉門は燈下に書を讀壁人、あかり障子にうつりてたしかに見ゆ。して打砧の音するは、老母の手業とおぼし。猪之八等は竹林のうちに身をひそめ、權便宜をうかゞひ居たるに、嘉門宿鳥の鳴さわぐを聞つけ、あな笑止や我推量にたがはず、命しらずの愚人ども、我家を襲とおぼえたり。いで皆殺しにしてくれんずと、灯火ふきけして其後音もなし。猪之八これを聞、にくき奴めがいひごとかな。はやく搦捕て手柄にせよ者どもと下知しつゝ、先にすゝみて門外より聲高、これは官領職の嚴命をかうぶり、嘉門をめし捕ため岩坂猪之八むかうたり。いそぎ門をひらき、尋常に繩にかゝれとよばはれば、障子のうちに呵々と笑聲し、汝等がごとき鼠輩はおろか、たとへ濱名入道みづから數百騎を以て攻るとも更におそるゝ所なし。嘉門が居宅は鐵壁石門要害堅固の城郭も同然なり、



命をしくば頭をおさへてはやく逃かへれとあざけりいふ。猪之八等大に怒、門をひらかんとするに堅とざしたり。しやもの〲しと力をきはめてぐつと押に、ほぞゆるまりてくつろぐを、えいやつと踏破り、大勢一度にこみ入て、緣の上に飛上り、障子をさつとひらけば、一間をへたてゝ、梅津嘉門、萌黄匂の腹卷のうへに、金紗の道服を着し、金作の圓鞘の太刀をはき、手に文曲武曲の二星を畫たる軍扇

をとりて床机にかゝりたる形勢、志氣堂々威風凛々として、いかにも一個の英雄と見えたりけり。老母はふるびたれども、摺箔の昔模様の袿衣を壺折て著し、雪をあざむく白髪をたれ、玉だすきかけてかひぐ〳〵しく打扮、銀の蛭巻したる長刀を小脇にかいはさみて、傍にひかへたる姿、老木の梅にいにしへの薫殘りて奥ゆかし。左の方に千金弩と稱じて、一發數十の箭を飛す兵器をすゑ、右には近頃蠻國より渡り、燧石をもて打碎く火術の具、五六挺筒先をそろへてならべたり。勢こみたる組子等飛道具に心おくれ、すゝみかねたるを見て猪之八聲を勵し、腑甲斐なき者どもかな。わづかに嘉門一人の外はかよわき老女なり。たとへ三面六臂ありとも、いかでか數々の箭玉をはなつことあたはんや。見せかけばかりの兵具おそるゝにたらず。はやくよりて搦捕。若とり逃さば我々が越度なりと下知するにぞ、組子等げにもさなりと思ひ、我先とあらそひ飛かゝらんとしたる所に、嘉門軍扇をあげて一あふぎあふげば、兼て用意の焔硝繩に燈火うつり、綱火となりて五六挺の火術の具、一度に發し、其ひゞき大雷のごとく、數の鐵丸飛出て、前にすゝみたる組子十餘人打倒され、煙のうちにのたり伏す。老母は長刀の鐏を以て弩を一つきつけば、數十の箭雨のごとくとびかゝりて、組子を殘らず射伏たり。猪之八は手ばやく疊を盾にして箭玉をのがれ、逃出んとしたるに忽板敷磊落とひるがへり、深き落し穴のうちに墮とおちいり、底にうゑたる劍に身をつらぬかれ、朱に染りて死してげり。嘉門かねて是等のかまへをなしおきたるゆゑいかなれば、これまで近國他國の諸侯の請待に應せざれば、若おのれが器量をねたみ、不意を襲ふ者あらんをふせがん爲なるが、果して此度不慮の難儀をまぬがれたり。

さて嘉門老母にむかひ、今宵のことを聞ば濱名入道益怒、多勢を以てとりかこまばのがるゝてだてなかるべし。幸母人兼て山林に身を避て、生涯無事を計給はん御心あれば、今宵中に此所をのがれ去にしかじ。母人はいかゞおぼすやらんといふ。老母その意に同じ、母子兩人いそがはしく身支度して、雜具は其儘すておき、先祖傳來の兵家の秘書、大幢國師の法語一卷のみを嘉門が懷にし、老母を背負て、いづくともなくおちゆきけり。

昔話稲妻表紙巻之二

五　厄神の報恩

扨も佐々良三八郎は、妻子を具して丹波の國にいたり、大江山の麓穴太の里にかくれ住けるが、少々のたくはへも、日々の費につかひすて、別になりはひの便もなければ、みづから山畑をたがやし、仕馴ぬ業の辛苦にたへず、妻礒菜は當國の名産なる蘭莚を編、市にひさぎてわづかの價をとり、夫婦ともかせぎにして、兩人の兒等を育、權月日をおくりぬ。しかるに三八郎おもへらく、忠義の爲とはいひながら、罪なき藤波を殺せし事、かへすがへすも不便なり。後に聞ば、若殿御勘當をうけられ、御行方なくなり給ひつるよし、我心づくしも藤波が非業の死もみな水の泡、かひなき事となれり。せめては彼が冥福を得る種にもと、農業の片手にも、念珠をはなさず、たえず念佛をとなへければ、里人異名をつけて、六字南無右衛門とよびけるを、みづからも世を忍ぶにはよき名なりとおもひて、つひに實名としたりけり。さて又後々聞ば、藤波を殺したる夜、金岡の筆百蟹の圖の繪卷物紛失し、長谷部の雲六と計りて、盗取たりと沙汰ありつるよし、盗人の立田の山に入て、おなじかざしの穢たる名を得ること、豈耻ざらんや。渇すれども盗泉の水を飲ず、熱すれども惡木の陰に息ずとこそ聞ものを、いかにもしてかの卷物をたづね出し、汚名をすゝがばやと兼ておもひ、一つには奸臣不破道犬が惡意を見あらはして、お家の禍の根をたち、藤波が縁者に出會して、恨の刄にかゝり、死後の名を淸くすべしと思ひさだめ、折々面をかくして大和の國にいたり、或は京都にいたりて便宜をうかゞひぬ。かくてある日、大和より京に赴とて、木津川の渡船に乘けるに、船中乘合のうちに、一人の老女あり。紅裏の昔模様のふるびたる小袖に、松皮菱の紋つけたるを着し、さゝやかなる包を三輪くみたる腰につけ、細き竹杖にすがりたるが、頭は佐野の白苧を亂せるがごとく、身うち枯木のやうに瘦がれたれど、人品はさまで賤しからず、紫の小袖着たる女の船中にあるを、深くいみきらふさまにて、袖をおもてにおほひて、片すみにひそまり居たり。ほどなく船向の岸につき、南無右衛門衆人と共に岸にのぼり、かの老女と後におくれ前にすゝみて行けるに、此時紅日西に落て、天色已に晩なんとす。なむ右衛門草鞋のひもをむすぶひまに、かの老女は

道に行過たるが、樹木おほひかゝりてほの暗き所を過る時、四五疋の犬出來りてとりまき、頻に吠てほど〳〵くらひつかんとす。老女杖をあげて打ども去ず、なほも飛かゝらん形勢なり。かゝる難義を見かねて、なむ右衛門走りつき、犬どもを打ちらして老女を見るに、深くおそれたるにや、地にたふれ伏て息もたゆげなれば、介抱してさま〴〵いたはりけるに、やゝ正氣になり、いづくのおん方かはしらざれども、かゝる難義を救ひ給はるかたじけなさよ。此御恩かさねて報はでらんと、あつく禮をのぶれば、南無右衛門打聞て、さばかり厚き謝をうくるにゆゑなし。とても事に京の町まで送り行まゐらすべしとて、相伴ひ、三條の四ッ辻にて、東西に別去ぬ　さて南無右衛門は、一月ばかり京都にとゞまり、百蟹の寃鳴を尋ねけるが、その留主の間、一子栗太郎此時年八歳なりしが、疱瘡をやみ、


六字南無右衛門、木津川の渡しにて、老女の危難をすくふ

母礒菜が辛勞おほかたならず。疱瘡の神い棚をまうけ、赤幣束、猿俵、張子の達磨木兎すら、起臥に心をつけ、晝の頭巾すら針とることを忌て、隣家の手をかり、紅火燭の朱をうばふ、紫の色は更なり、詞の禁忌火のよしあし、食物のさし合まで、よろづに心をもちひ湯尾峠の孫杓子、鮓荅の呪など、よきといふことは皆仕つくして、看病けるが、いとおもき疱瘡にて、熱氣つよく目をひきつけて、今

もたえいるかとおもふこと度々なり。ほどなく出痘にいたり、面上總身すきまもなく發痘しければ、かくては命も危し。時も時折も折とて、夫の留主なるぞ便なき。こはいかにせんと當惑し、けふやあすやと歸りを待侘、娘楓を日にいく度か、村口につかはし、うかゞはすれど、歸かげだに見えずといへば、益愁嘆、疱瘡神の機嫌あしきにや栗太郎足ずりしてなきさけび、小豆枕をなげうち、人形の腕ひきぬきなどしてあれ出し、さまざまにこしらへなぐさむれど泣止ず。殆もてあましたる折しも、なむ右衛門一月ぶりにて家にかへる。礒菜喜び出むかへて、まづ栗太郎が事を語るにぞ、なむ右衛門氣づかひ、いそがはしくやぶれ屏風をひきあけて、様子を見るに、今までなきさけびて、もてあましたる栗太郎、なむ右衛門を見て禮正しく座をつくり、手をつきていひけるは、こはおもひかけざる事かな。此家はおん身の宅にて此小兒はおらく京都にありて、疱瘡をやましめたるん身の子息にて候か。これは前の月木津が、四五日さき當國にうつり、おん身の川の渡場にて、危難を救たまはりし老女家ともしらず、こゝに宿し、此小兒ににてはべり。我實は疱瘡の神なるが、我きて疱瘡をやましめぬ。元來此兒難症に黒犬をおそるゝ事人に過たり。我しばて、今一兩日を過れば落命すべき所なる



に、危急の節おん身歸宅したまひしは、畢竟此兒の命つよき處なり。前の日の厚意を報るは此時なり。我とみに立去べし。我去れば疱瘡速にかせおちて平癒すべきなり。此すゑとてもおん身の族の家には立よらすまじ。しるしなくては此度のごとく誤ことあるべし。おん身の姓名はいかにと問にぞ、なむ右衛門その實名を告れば、しからば鮑貝のうちに、さゝら三八宿とかきつけて簷にかけおき給へ。その目じるしある家には、我は勿論ともがらの者をも立よらすまじ。はやいとま申すなりといひをはり、栗太郎悶絶してたふるゝと見えしが、老女の姿けぶりのごとくあらはれ、外のかたへ走り出てきえ失ぬ。礒菜栗太郎を抱き起せば、不思議や疱瘡俄にかせおちてあとだになく、氣力常のごとくなりけるにぞ、夫婦奇異の思ひをなし、とみに笹湯をかけ、赤飯を調じて、神おくりし、なのめならず喜びけり。抑疱瘡の日數は、三日發熱、三日出痘、三日起脹、三日貫膿、三日收靨、これ常數なるに、栗太郎が疱瘡かく俄にかせおちたるは、全くかの神のたすけにて、南無右衛門が好意深かりしむくいなりと、此事を傳へ聞人みな感じあへりとぞ。さて栗太郎がもがさ平癒して喜ぶ間もなく、再又一つい災ぞいできにける。礒菜ある夜灯をたて鏡にむかひて髪をとりあげつるに、鏡



のうちに藤波が顔あり〲とうつりて、おそろしきさまなれば、あなやといひて背後をかへり見れば、毬のごとき心火窓をこえて飛さり家のむねのあたりにて、からから〲と笑ふ聲す。儀榮はたまらずのけさまにたふれて、且儘絶入ぬ。南無右衛門あわてふためき抱き起して、醒藥など與へけるにぞ、やう〲いきかへりけるが、これより心氣日々によわりて、ものおすゝます、色あをざめて痩おとろへ、日に異におもりていつ息りはつべうも見えず。なむ右衛門まづしき中にも、良藥をもとめて與ふるといへども、とかく藤波がいかれる顔、目さきにさへぎり、その度〲にもだえ苦しみ、ほど〲命もあやふく見えぬ。此時娘楓は十三歳、栗太郎は八歳なれども、兄弟ともに年に似ず、すぐれてかしこき生れにて、殊更世間にまれなる孝子なれば、母の病をふかく悲み、兄弟枕方あとべにつきそひて、しばしも病床をはなれず、かはる〲もみさすりなどし、心を盡してぞ看病ける。かゝる病人ありながら、一日もなりはひをせざれば、畑を立かぬる身なれば、せんすべなく、なむ右衛門は病人を兄弟の子どもにあづけおき、其身はたがやしに出て、わづかに日雇のあたひを得て、其日をおくる心の苦しさ、いかばかりならん量想べし。夜にいたればなむ右衛門家にありて看病すれば、兄弟の子ど



も等、このうへは佛神の力をたのみ奉るより外なしといひあはせ、ふたり手をひきあひ、毎夜穴太寺の觀音にはだしまゐりして、南無大悲觀音菩薩、我々が一命をとり給ひ、何とぞ母の病苦を救給へと祈念し、三七日が間まうでけるに、佛も孝子の誠心を感じ給ひけるにや、滿願の夜より、母の病やうやくおこたり、一月ばかりのうちに全快し、氣力かへりて前よりもなほ盛になりぬ。誠に是孝行の功德大なるゆゑなりかし。

○孝子の物語のついでに記して、世の童子にしめすことあり。明心寶鑑といふ書に、我親に孝行なれば、子も又我に孝行をなすものなり。おのれ既に不孝なれば、子も又なんぞ孝行ならん。われ孝順なれば、又孝順の子を持なり。此事疑しく思はゞ、簷より點々滴々と落る雨しづくを見よ。とく〳〵と落るつぼをたがへずといへり。されば我父母も老後を安穩ならしめば、我も又老後安穩なること疑なし。

○又世範といふ書に、およそ人の子としては、身ををはるまですこしも父母の心にそむかず、孝道をつくすべきなり。父母身まかりてのちも、其靈に對して、存生にいひおかれたることをそむくべからず。いかほど孝道をつくすとも、おのれが幼少の時、父母の愛念撫育の恩をば報ることなりがたし。世間の孝道をつくすことあたはざるもの、他人の小兒を育あぐるその情愛の厚きを見て、父母の苦勞を思はゞ自悟るべしといへり。古より孝を盡して天のめぐみをかうぶり、あるひは立身出世して高祿の人となり、或は運をひらき千金を得富貴の身となりたる例、あげてかぞふべからず。又不孝にして天の罰をかうむり、或は若死をし、惡獸毒蟲に害せられ、雷にうたれなどして、非命に死したる例も又すくなからず。されば幼ときより、孝道は人倫第一の道にて決定の役儀といふ。道理をよく〳〵わきまへて少しも父母のおほせをそむかず、朝夕恭敬おこたらず、一生安穩ならしむるやうに心がくべき事ぞかし

六　因果の小蛇

かくて後は南無右衛門が家内、無事に打過けるが、一日なむ右衛門たがやしに出けるに、草むらの裏より、丈三尺ばかりの蛇いでて蟇をくはへ、ほと〳〵のまんとす。なむ右衛門これを見て、蟇をたすけまほしく、いかに蛇よ、汝我爲にその蟇をゆるせかし。さあらば我娘を汝に與ふべきぞといひけるに、蛇此ことばを聞

入たる體にて、蟇を放さらしめ、もとの草深き所にかくれ入ぬ。さて農業をはりて家に歸けるに、其日の夜半の比、娘楓俄に發熱して苦しみ、聲たかくうめきければ、兩親おどろきて目をさまし、いそがはしく抱起して見れば、怪哉小蛇楓が腹にまきつき、かま首をたて、舌を吐てうごめくさま、おそろしなどもおろかなり。礒菜これを見て身の毛いよだち、泣聲になりて早く取捨やりてよといふ。なむ右衛門いはく、我昔ほど蛇蟇を呑を見てたすけまほしく、若蟇を放やらば我娘を與ふべしといひけるが、此蛇我戲を實として來れるに疑なし。戲言はすまじきことなり。凡蛇は婬心ふかきものと聞しが、眼前にかゝる奇怪を見る不思議さよと、いひつゝ蛇をひきはなち、藁いうちに入て携へ去、大江山の谷底に捨てかへりけるに、其つぐる夜、ふたたび楓發熱して苦しみ、いつの間にかまた蛇來りて、腹に卷つく事前のごとし。なむ右衛門益怪み、此うへは殺しすつべしと思ひ、蛇は首に魂あり。よく首を碎かざれば生かへるものと兼て聞ければ、かの蛇をとりはなちて、平みたる石の上におき、斧の脊をもつて首を微塵に打くだきけるが、血しほさつと飛散て、傍に居たる栗太郎が、面上にかゝるとひとしく、呀とさけびて倒れたり。なむ右衛門蛇を捨て抱き起せば、栗太郎が兩眼に、蛇の血しみとほりたる樣子にて、痛堪がたしとてをめきさけびぬ。礒菜もいそぎまどひて介抱するに、しばしありてやうつら泣止けるが、兩眼ひらく事あたはず、見る〳〵瞼たかくはれあがりぬ。なむ右衛門は死したる蛇を携へゆき、遠所に捨てかへりけるが、いまだかへらざるさきに蛇又來りて卷つくこともとの如し。なむ右衛門氣をいらち此度は燒殺さばやと、火中に投じけるが、しばしありて火中を飛出、また卷つきぬ。かくさま〳〵にして取捨んとすれども、蛇の執念いと深くして、しばしもはなれず、後にはせんかた盡て、其儘になしおきけるが、唯腹に卷つきたるのみにて、別に害をなす事なく、楓もはじめのほどは、我身ながらおそろしくおもひけるが、後々は蛇に馴したしみて、前生の因果とあきらめ、かへつて愛念深くなり、朝夕我食物をわかち與へ養ひけり。蛇もよくなれて、食事の時にいたれば、懷よりかま首を出してものうちくひぬ。扨栗太郎は蛇血の毒氣兩眼に入て眼疾となり、さま〳〵療するといへども治しがたく、つひに生れもつかぬ盲目となりにける。礒菜左りに楓をすゑ、右に栗太郎をすゑ、二人をつら〳〵顧つゝいふやう、便なき子どもが形勢や、情なの神佛や、楓は世にたぐひなく、姿美麗に生れつき、たとひ女御更衣にたつるとも、はづかしからぬ容儀なる

に、妖蛇に見こまれて、人の交りならぬ身となり、栗太郎は生つきもきように、心ばえもすぐれてかしこくありながら、おもひもよらず、盲目となるうたてさよ。殊更兄弟ともに孝道ふかきものなるに、などてかく薄命にはありけるぞや。いかなる宿世の因果にや、かゝる災のかさなる事ぞとて、悲歎の涙にむせびければ、兄弟の子どももあわてふためき、左右よりとりつきて、脊を撫さすり、共に涙をおとしつゝ介抱するに、いとゞ悲しさまさりけり。なむ右衛門目をしばたゝき、我つらつらおもふに、藤波が怨念子ども等をなやますこと、我等夫婦におもひをさせて、宿恨を報るにうたがひなし。かれ一點の罪なくして殺されたれば、深く恨も理なり。三代相恩の主君のためにせしことなれば、たとひ子ども等をとり殺さるゝとも悔べきにあらず。礒菜歎くな。我は少しも悲しからずと、歎きを胸におしかくしていへば、兄弟の子ども等目をそろへ、父うへの[illegible]たまふ所[illegible]なり。忠義の爲にしたまひし其報ときけば、たゞ[illegible]身はいかほどの憂目を見るとも、露ばかりもいとふべきにあらず。母人よ、深くなげきたまひて、父も病をうさいだ[illegible]給はるなと、年に似合ぬ理發の詞、孝心ふかきけなげさに、大丈夫のなむ右衛門も、胸へ[illegible]とおしふさがり、おぼえずこぼるゝ涙を拳をもつておしぬぐ



ひ、歎を見せぬ武士形氣の心のうち、おもひやられてなほ哀なり。かくて又しばらく月日をおくりけるが、粟太郎盲目のことなれば、一生を過す世わたりの種には、琵琶を學ばせ、琵琶法師となさば、のちのちは高官にもすゝみ、貴人のそば近くめさるゝ事もあるまじきにあらず。せめては生涯安穩の計をなしつかはすべしと思ひつき、頭を剃しめて名を文彌とかへ、礒菜をつけて京にのぼせ、其比音曲を以て名高く聞えし、澤角撿校のもとに、つてをもとめて母子ともに奉公させ專琵琶を學せけり。

七　呪咀の毒鼠

扨も大和の國佐々木の館におきては、判官貞國、子息桂之助を勘當して後、銀杏の前月若母子を、平群の下館に移せ、名古屋三郎左衛門、同山三郎父子を守役として付おかれぬ。扨桂之助の繼母蜘手の方といふは、志毒惡にして、かねて桂之助夫婦をにくみ、いかにもして桂之助を失ひ、實子花形丸を家督にせまほしと思ひ居けるが、思ひよらず桂之助勘當の身となりたれば、心中ひそかに喜び、もし又月君家督にならんこともやとおもへば、何とぞしてかれ等母子を失んとたくみぬ。しかりといへどもかれ等には、忠臣名古屋父子つきそひ居て、片時もむ



をゆるさねば、いかにともせんかたなく打過けるが、不破道犬奸智ふかければ、蜘手の方の心底悪意あることを見ぬき、これ我大望をとぐるよき使なりとおもひ、一時蜘手の方に近づき、奸意深き體にいひなして探りこゝろ見るに、果して月若母子を失ひ、花形丸を家督にしたき望みなれば、道犬しかるうへは何事も某にまかせ給へ。よきにはからひまゐらせんといふければ、蜘手のかたなのめならず喜びぬ。かくて道犬蜘手の方と密談し、先月若を呪咀すべきにきはめ、其比よし呪咀の法を學得たる、頼豪院といふ修驗者をひそかにまねき、謝物をおほく與へてたのみけるに、貪欲深きものなれば、速にうけがひ、密室にとぢこもりて修法にぞかゝりける。さるほどに小群の下館には、銀杏前月若母子兩人移住、名古屋父子これを守護してありけるが、月若はことし已に十一歳になりける

いかにして月若備前守を打殺、寝食安からず、次第に衰へて、良薬をえ、薬を與ふるといへども、更にしるしなく、たゞ／＼眠ればおそはれおびゆることも度々なり。殊更怪しきは、深夜にいたれば疫病の男女おぼえずねぶりを生じ、鼠おほく出て寝床を飛めぐる。後には昼も出て人をもおそれず、しだい／＼に充満し、月若の髪の毛をくらひ、肉をくひやぶり、頭に奇瘡を發して堪難が



たく、心氣日をおひておとろへけり。母銀杏前は甚これをなげきて、神社佛閣に立願し、名僧知識の加持祈禱をなすといへども、妖鼠しりぞかず、益怪きことのみおほかりけり。名古屋父子は晝夜病床をはなれず看病けるが、三郎左衛門山三郎にむかひていひけるは、我曽て酉陽雑俎を見るに、人夜臥にゆゑなうして髻を失ふ者鼠の妖なり。又鼠人および牛馬に着ことあり。晝夜避ず、いかんともすることなしといへり。若君の御容體をうかゞふに、彼書に記す所の、尋常の妖鼠とおなじからず。うたがふらくは呪咀する者ありて障礙をなすとおぼゆるなり。汝心をつけて、変異の出所を見あらはすべしといひければ、山三郎某も左こそ思ひ候なれとて、これより別して心をもちひ、晝夜四方に眼をくばりて守護しけり。さて一夜丑三つのころ、銀杏の前をはじめ、腰元侍女、乳母侍女等も



おぼえずねぶりを生じたるに、不思議や丈抜群の大鼠、行廊の方より歩み來る。形は常の鼠にかはらずといへども、其おほきさは犬のごとく、すさまじき形勢なり。あなあやしやと山三郎、刀を携へつらづゑつき、瞬もせず見ゐたるに、かの鼠いきほひこみて、若君の病床近く進み來る。山三郎いそがはしく立上り刀を抜、まちまうけて丁と切に、妖鼠はやく身をおどらして劔を避、あかり障子を蹴やぶり

りて、庭上に走り出築墻のうへに飛のぼる。山三郎追かけいで、手ばやく小柄を抜とりて、はつしと打ばあやまたず、鼠の額にずばとたち、鮮血たら〳〵と流れけるが、忽一道の烟のごとき妖氣立のぼり、頼豪院が姿髣髴とあらはれたり。山三郎さてこそ恠き曲者と思ひつゝ、をどり上りて横額二つに斬つくる、頼豪院閃と身を避、平形金珠をおしもみて、呪文をとなふれば、忽暴風ふきおこり、庭の樹木の葉をちらし、池水を卷あげ、寢殿大に震動し、瓦落々と鳴とよみて、今も崩るかとおもはれけり。時に若君の聲として、あなや〳〵とをめき給へば、大勢の聲として泣悲しみてかまびすし。聞にたへざる山三郎、那裡も氣づかひ、這裡も去れず、ふたゝび刀を打ふりてきらんとせしが、頼豪院口より數十の鼠を吐、その鼠山三郎に飛かゝり、五體すくみてはたらかれず。あな口をし殘念といひつゝ、只きりつくれば忽に頼豪院が形きえうせて、唯黒雲のごとくふきからたるごとくにて、あやめもわかぬ庭上に、只ひとり山三郎、拳をにぎり歯をかみならし、虚空をにらみて立たりけり。頼豪院はあやうく身をまぬかれたりといへども、山三郎が忠義一圖に精神をこめたる手裏劍の徳治せずして、呪咀の法忽ちに破れければ、おのづから若君の病日を追て怠り危命をたもちけり。



八　暗夜の駿馬

扨も蜘手のかたには、顧豪院の修法破れ、月若快氣のよしを聞て、大に力をおとし、此うへはいかなる計をもつてか、彼等を失ふべきと、道犬をめして密談ありけるに、奸智おほき道犬、少しも屈せず、再又一計を生じ、蜘手の方の耳につきてさゝやけば、蜘手の方とくと聞、これきはめて妙計なりと喜び、いつはりて重病の體をなし、ものくるはしきさまをなしければ、判官貢圓大におどろき、道犬をめして醫療のことを相談あるに、道犬申しけるは、奥方の御容體をうかゞふに、たゞごとならず。まさしく邪祟の所爲とおぼえ候へば、たとひ耆婆扁鵲が神方なりとも、藥の力をもつてすくひ申すことはかなふべからず。近頃京都より下りし、顧豪院といふ修驗者、安部の晴明が金烏玉兎の神書を家傳して、卜筮に妙を得たるものに候へば、かれをめしてうらなはせ、おん聞あれかし。幸只今某宅に參り居候と申す。貢圓これを聞、それいそぎてめしよべとおほせければ、道犬かしこみ候とて、やがて私宅にいひつかはしけり。顧豪院は願の叶ふうれしさ、再道犬が奸計にくみしけるが、召に應じて、貢圓の目どほりにまかりいでぬ。身のたたかく眼中光り、斬髪ちゞれてらほつの



ごとく、兜巾篠懸に、紅紗の衣を着し、最多角の念珠を袖くゝみに持、中啓の扇を把、あたりもまばゆき金張付の廣座敷に、おめずおくせず坐したる體、誠にいかなる惡魔をも降伏すべき骨柄なり。貞國まづ初見の挨拶をはり、奥方の病體を告て卜筮を乞れけるに、頼豪院恭く卦を敷下し、考を施していはく、奥方の御病氣、全く呪咀する者ありて、苦しめ申すに疑なし。今四五日を過なば、御命危かるべし。若し疑しくおぼし給はゞ、御寢所の庭中、艮の隅の土中三尺をほらせ見たまはゞ、分明なるべしといふ。貞國半信半疑ながら、近仕の士に命じ給へば、近仕の士かしこにいたり、土中をほらしむるに、果して一合の白木の箱を得て携へ來り、貞國にたてまつる。貞國これをひらき見るに、内に大小二つの藁人形ありて、すき間もなく釘を打たり。貞國大に驚きて、頼豪院が詞を



修驗者頼豪院、不破の大にたのまれ、妖術を施して鼠と化し、月若をとり殺んと近づきたるが、名古屋山三郎が手裏劍に額を打れて、眞の姿をあらはし、修法破る

奇なりとし、これ呪咀にうたがひなければ、別に一物もなければ、何人の所爲なるや、分別しがたしといはれけるに、頼豪院膝をすゝめ、凡呪咀の法には願書なくては、叶ひがたし、其箱これへといひて箱を取よせ、つら／＼見て、やがて扇の尻をもつて、箱の底をつきぬきけるに、かさね底にして其うちより一通の願書出たり。

貞國これをとりひらき見れ[illegible]、蜘手の方[illegible]、[illegible]呪咀するの願文にて、銀杏前月若　兩人願主の名あり。しかも銀杏[illegible]自筆をもつてかきたれば、うた[illegible]うもあらず。貞國忽怒氣心頭におこり、面色變じて、しばらくものもいはざりけるが、先賴豪院に、呪咀をはらひのぞく修法を賴けるにより、蜘手の方の病床に壇をかざりて、[illegible]の法を修し、かの藁人形は釘をぬき、護摩の火中に投じて、燒すてたり。かくて蜘手の方、やう／＼快氣の體をなし、貞國にむかひていひけるは妾ことかねて銀杏前母子を、質の娘賀の孫といつくしみ、何とぞ椎之助の勘當をゆるしたまふか、さらずば、月若を家督にしたまふやうにと、それの[illegible]、[illegible]りて[illegible]妾を[illegible]いみきらひ、若花形丸家督にならば[illegible]、[illegible]親子を呪咀殺さんとは計略ならん。美麗顔[illegible]心は[illegible]はおそろしく候。こ[illegible]は、妾親子にはやくいとまをたまはり、尼法師ともなし給はれかし。我々かくてあらば、つひにはかれらが生靈にとり殺され候はめ。などてさばかり妾親子を忌きらふぞ、情なき銀杏前やといひて、涙を瀧のごとく流しぬ。此時花形丸は年已に十六歳、いまだ丁角にてありけるが、母の惡性には露ほども似ず、[illegible]正しき生れなり。素母の非望をしらず、此日の子細を聞て大に歎息し、かかる凶事のいでくること、皆これ某が謬なり。檀弓篇に、昆弟の子は猶己が子の如しといへり。某月若に對して、鄧伯道がごとき志なきゆゑなりとて深く悲みけり。判官貞國蜘手の方の[illegible]、花形丸が[illegible]詞を聞て、銀杏前母子を[illegible]、親を呪咀する大[illegible]人、片時も[illegible]、黑星眼平といふ[illegible]出し、銀杏前月若兩人の首打て來れと命じければ、[illegible]方[illegible]、と顏見合、しすましたりとおもひながら、これをとゞめけれども、貞國聞入ず。花形丸は殊更に、[illegible]をつくしてとゞむれども、火性短氣の貞國、少しも宥免なかりければ、もとより道犬一味の黑星眼平、迷惑顏にて其座を退き、君命といへども、母子の首うたんといはば、名古屋父子たやすくは渡すまじ。しかる時はかれ等ともに打とらんとおもひつゝ、四五十人の荒男等を引具して、平群の館へいそぎゆく。嗚呼銀杏前親子の身のうへ、危かりける次第なり。此事はやく下館に聞えければ、名古屋父子大に驚き、三郞左衞門山三郞にむかひ、これ正しく不破道犬が奸計にて、[illegible]にぬれ衣をおはせ、御母子を失はんとはかりしに疑なし。打手のむかはぬさき、[illegible]下館にいたり、一命にかへても申しひらきして、御命を救まゐらせんとて、いそがはしく衣服を着

かへ、緣先に馬をひかせてひらりと打乘、供人のそろふひまもおそしと心せき、鹿藏といふ下部に提燈もたせ、走出んとしたるに、三郎左衞門が刀鞘ばしりければ、山三郎氣にかゝり、轡づらにとりつきつゝ、親人御如在はあるまじきが、道犬は奸智おほき者なれば、かならず彼が計におち、ともに罪を得給ふな、一言の詞も心をつけてのたまへといへば、三郎左衞門打うなづき、それ合點なり。かならず氣づかふ事なかれ、かゝる內亂のときは、御側近き者等にも油斷ならねば、唯御二方をよく守護すべしといひ捨て、一鞭あてゝ、飛がごとくに走りゆく。山三郎身をそばだてゝ、かげ見ゆるまで見おくりけるが、折しもねぐらにもどる夕烏、いと悲しげに鳴を聞、かく烏なきのあしきは、御二方の御身のうへか、親人の身のうへか、いづれにもあれ、あな氣づかはしと吐息して、胸をいたむるばかりなり。これぞ一世の別とは、後にぞ思ひしられける。爰に又不破伴左衞門重勝は、先年君命とはいひながら、名古屋山三郎に草履をもつて面を打れしを、ふかく遺恨に思ひ、雀野蟹藏、藻屑三平、土手泥助、大上澗八等四人の者をかたらひ、夜々平群の館の近邊を徘徊して、山三郎をつけねらひけるが、此夜も此邊に忍び來りてうかゞひぬ。此夜は宵闇といひ空かきくもりて星も見えず、あやめもわかぬ暗夜に



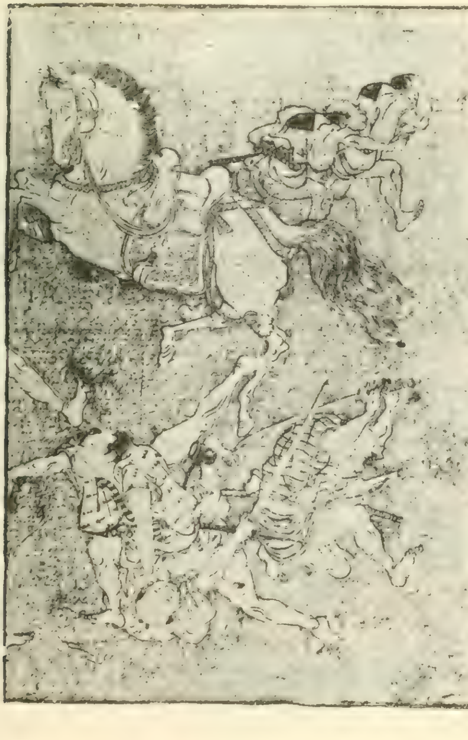
不破伴左、
胸丁の方と計り、
銀杏の前月若
母子を殺す

にありけるが、三郎左衛門鹿藏に提灯持たせ、馬を馳せて急ぎ來るを、作左衛門等五人の者、三本傘の紋つきたる提灯を見て、山三郎にうたがひなしと思ひ、物陰より一同にをどり出、まづ提灯をはつしときり落せば、鹿藏飛すさり、一腰に手をかけて、何者なるやとすかし見る。三郎左衛門は馬をとゞめ、こは辻斬の曲者か、盗賊の所爲かと、ひつゝ、肩衣はねのけ、一刀を拔ながら馬より飛くだるひまもあらせず、作左衛門が斬つくる白刃の稲妻目前に閃ければ、老功熟智の三郎左衛門、馬のかげに身を避るにぞ、作左衛門が刀いたづらに鐙にはつしときりつけて、火花ぱつと飛散たり、暗夜といひ木立しげき所なれば、一寸さきも見わからず、藻屑三平土手泥助、馬の脚音を心あてに、前後よりきりつくるに、目あてちがひ、思はず兩人同士打に丁と打合す劍の下を、くゞりぬけて三郎左衛門、



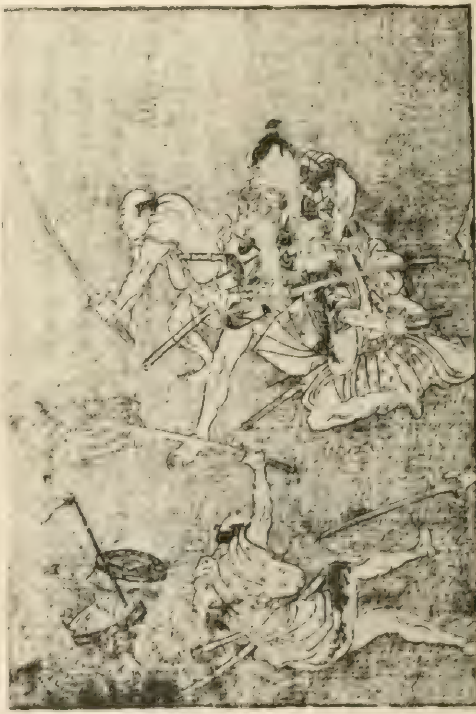
はらひきりにきる刀、犬上雁八が鼻のさきに光りければ、雁八やりとしてのけぞりけり。作左衛門心中に、此時を過さばいつか恨をはらさんと思ひつゝ、息をこらしてうかゞへば、三平泥助雁八等も、あたりを探りて立まはり、或は互に同士打して、深手をおひ、或は木立にきりつけて氣をいらつ　三郎左衛門は、今宵せまる大事をかゝへたる身なれば、好て戦心なく、早く此場をのがればやと氣

はいへども、四人の者にかこまれ、せんすべなく、うかゞひすましてきりつくるが、三平が片耳をそぎ、二の太刀に雁八か小指をきり落しければ、兩人心臆してはたらくことあたはず。さて泥助がさぐりよつたる刀のきつさき、三郎左衛門が刀に丁ど打合、たがひにこゝぞと思ひつつ、丁々はつしと打合たり。伴左衛門その太刀音を心あてに、拔足して背後より、勢こみて切つくる刀、あやまたず、三郎左衛門が肩尖、七八寸切こみぬ。痛手に屈せぬ強氣といへども、さすが老人なればたぢ〳〵とよろめく所を、伴左衛門たゝみかけて左りの脇腹を深く切こみければ、三郎左衛門こらへず一聲呀とさけびて、尻居に撞とたふれたり。伴左衛門探りより、髻つかみてねぢふせ、これは伴左衛門重勝なり。いかに山三郎、汝君命とはいひながら、先年我を辱めたる恨、骨髓にとほりて忘れがたし。今



其仇を報んとて懐中より物に包し草履のかたしを取出し、これはこれ先年汝我を辱めたる上草履なり。膽玉にこたへよといひつゝ、連打に打けるにぞ、三郎左衛門苦しげに息をつき、汝等は辻切か盗賊かと思ひつるに、さては伴左衛門にてありけるか、我はこれ三郎左衛門なるはといふ聲聞て、扨は人たがへせしかと、伴左衛門等一同におどろきけり。三郎左衛門刀にすがりて立上り、兒子に仇をむ

くふにもせよ、だまし打とは比興な奴。我年こそ老たれ、名乗合の勝負ならば、汝等ごときの鼠輩ども、数十人来るとも物の数とはおもはねども、暗打にせらるゝとは、武運につきたる身のはてよ、死る命はをしからねど、唯心残りは、御二方の安否を聞で相果るかなしさよといひつゝ、よろばひまはるを伴左衛門すかし見て、合破と蹴倒し、山三郎と思ひの外、運の盡たるおいぼれめ、山三にあらぬは残念なれど、汝を打しも又此方に、幸とすることあり。間話いはずとく死ねかしとにくさげに罵つゝ、めつた切にきりければ、三平、泥助、雁八等も、三郎左衛門が苦痛の聲をしるべに立よりて、寸々に斬つけ、簾のやうになしたりける。折しも寺々の鐘打交て、諸行無常と告渡り、小田の畦に鳴かはづ、いとゞ哀をそへにけり。僕鹿蔵は先程より、笹野三蔵と渡り合、深田の中に踏こみ〳〵、たかへに平政の思を心お一に戦、雙方薄手をぞ負ひけるが、鹿蔵三郎左衛門と伴左衛門がいひあふ詞を遙に聞つけ、扨は彼奴還慎により、人たがへして、はや御主人を手にかけしかと伴大し、無念に思て、



主人の聲する方へ探りゆかんとするを、三平雁八さはさせじと立ふさがり、両人ひとしく切かけたり。鹿蔵これを丁とうけとめ、又もゆかんとしたる時、雨雲にれて一輪の明月皎々とかゞやき出、木の

間をもりて光りあきらかなりければ、鹿藏五人の顔を見るに、伴左衛門をはじめ四人の者、皆見しりたるものどもなり。五人の者も鹿藏は、かねて見しりの下部なれば、生おきては後日のさまたげなりと、一同にとりまきて、きつさき揃て切つくる。勢猛鹿藏も雙拳四手に敵しがたく、ほど／＼危く見えたる所に、三郎左衛門が乘馬、一聲いばえて荒出し、五人の者を蹈たふし蹋たふしければ、五人の者は大に狼狽、はたらきかねてぞ見えたりける。鹿藏大わらはになり、命を限りに刀をまはし、四面八方をきりたつる。五人の者一方は荒馬に蹋ちらされ、一方は鹿藏が死物狂にきりたてられ、つひに敵することあたはず、いちあし出して逃いだせば、鹿藏主人の敵のがさじやらじとよばはりつゝ、韋駄天走りに追行けり。かゝる折しもむかうの方より、黒星眼平、四五十人の荒男どもを引具し、高提燈を前にたてゝ、行列をつられ、あたりを拂ひて足ばやにすゝみ来る、鹿藏これを屹と見て、正是上館の打手ならん、立歸りて注進すべきか、彼等を追て仇を報んかと、心は二つ身は一つ、ゆきては思案し、もどりては躊躇し、おなじ所をいく度か、ゆきつもどりつひまどりぬ。黒星眼平は時刻をうつさず、平群の下館にはせむかひ、これは大殿の嚴命をかうぶり、銀杏前どの月若どの、親子の御首をたまはらん爲むかうたり。名古屋父子はいづくにあるぞ、はやく御二方をわたすべしと、聲たからかによばはりければ、すは一大事と第中大に騒動し、名古屋山三郎走出、其儀先刻當館に告る者あるにより、父三郎左衛門御助命を願んため、先刻上館へまかり越し候へば、父が歸り候までしばらく、猶豫くださるべしといはせも果ず、いな／＼嚴命なれば片時も待こと相ならず。若違背におよばば、某奥へ踏込て御首打べし、返答いかにといふ。山三郎しかるうへは是非におよばす。某命あらんかぎりは、御二方を渡すこと、まかりならずといひつゝ、はや身支度して、すはといはゞ斬死すべき勢なり。眼平あざみ笑ひ、大殿のおほせを背く不忠者、先彼を打取と下知すれば、大勢一度に亂入し、山三郎をとりかこみ、火花をちらして戰けり。こなたは多勢、山三郎はたゞ一人といへども、忠義するどき太刀さきに斬まくられ、しどろにくづれて大庭までさつとひく。其ひまに山三郎奥の殿にはせまゐり、姫君若君にむかひ、父が吉左右うけたまはるまでは、一旦館を御たちのきあれかしといふにぞ、月若の乳母柏木といふ者、女ながらもかひ／＼しきものにて、妾は若君をあづかりておちゆくべし。山三どのは姫君を守護して、御たちのきあれかしとて、いそがはしく身支度し若君をせお

ひ、長刀を小脇にかいこみて、後門より落行ぬ。山三郎は姫君をおひまゐらせ、つゞいてのがれ出んとしたるが、はや後門にも打手のつはもの立まはりてさゝへたれば、山三郎しやもの／＼しとよばはりつゝ、多勢のうちをきりひらきて、生駒山のかたへぞおちゆきける。

道犬が奸計の子細をたづぬるに、偽筆の達人をたのみ、銀杏前の手跡を見せて、偽願書をかゝしめ、一味のものをして、かねて庭中に埋めおきけるときゝつ。

山三郎姫をせおひておち行、生駒山の麓の辻堂において、危難にあふこと、つぎの巻を読得てしるべし。

昔話稲妻表紙巻之三

九　辻堂の危難

かくて山三郎は、銀杏の前をせおひ、生駒山を越て、河内の國におちゆかんと、東の麓、竹林寺ちかきあたりまで、逃來りけるに、追人ども明松をふりてらして、近々とおひつきければ、姫君にあやまちあらんことをおそれ、傍の辻堂のうちにおろしおきて引返し、追人の大勢に向合て、極戰けるが、追人ども山三郎が猛勢におそれ、秋の木の葉の散ごとく、四方に亂れて逃去りぬ。山三郎今は心安しと、辻堂にかへりて見れば、こはいかに銀杏の前はおはさず。月の光りによく見れば、堂上の塵のなかに、足のあとあり。扨は追人どもの計にて、我戰ひまに、姫君を奪去つるに疑なし。姫君を奪れて、なに面目にながらふべきと心を決し、刀をとりなほして、ほと／＼腹につきたてんとしたる折しも、僕の鹿藏、總身朱に染りながら走來り、此體を見ていそがはしくおしとゞめ、大息つきて、不破伴左衛門、笹野蟹藏、藻屑三平、土子泥助、犬上雁八等四人の者をかたらひ、草履打の宿根により、人たがへにて、三郎左衛門を打たる子細を、涙ながらに物語ければ、山三郎大に驚、且怒り且悲み、涙瀧のごとくはふりおちて、しばし詞もいでざりけり。良ありていひけるは、今日はいかなる惡日ぞ、おん館の騒動といひ、姫君を奪とられ、しかのみならず、伴左衛門某を打んとて、誤りて親人を打たる事、思へば某が手を下して、親人を打たるも同然なり。死も死なれぬ今夜の仕儀也。一つには姫君をとりもどして奸臣等を亡し、若君をもり立て御家督とし、二つには伴左衛門等五人の者を打とりて、父の靈前に手向、冥途の恨をはらさせ申さでは、忠孝の道全からず。今は二つも三つもほしき命なるぞや。さるにても親人の亡骸をもとめ、せめてかりの葬りせん。彼所へ案内せよ鹿藏とて、すでに立出んとしたる所に、此邊の百姓等とおぼしく、明松を前にたて、戸板のうへに屍をのせ、簑打かけてかゝげつつ、みればよしありげなる武士方と見ゆるが、むごたらしう殺されたる事よ。衣服大小懐中物提物など、その儘にあれば、盗人の仕業ともおぼえず。片時もはやく郡司に申しきこえて、我々があやまりにならぬ樣、いそげ／＼と口々にいひて來りぬ。山三郎立より、此方に思ひあたる事あれば、その死骸見せくれよと

いひつゝ、簔をとりて見れば、むざんや三郎左衛門、身體寸々にきざまれ、脇腹より五臓六腑みだれ出て、鮮血戸板にながれけり。山三郎ひと目見るより、悲歎の涙にむせかへり、地上に撞とたふれ伏す。鹿藏百姓等にむかひ、此屍は當國佐佐木殿の御内に、三郎左衛門といふ人なり、これなるは則その子息なれば、此死骸は此方へ渡すべし、少も汝等が越度になる事にあらずといひければ、百姓ども死骸の衣服の紋所と、山三郎が衣服の紋所と、おなじ三本傘なるをみて、さては相違あるまじと安心し、郡司の前に持出んより、こゝにて事をすまさんは、我々が仕合なりと納得し、死骸を渡してたちかへりぬ。かくて山三郎、なげきてかへらぬことなれば、鹿藏にあたりの流水を汲とらせて屍骸を清め、後日改葬するまでは、權くこゝにかくすべしとて、辻堂の板敷をとりのけ、床の下を深く掘、屍を埋てもとの如くなしおき、香爐の灰をすてゝ水を手向、本尊の石佛にむかひ、南無寶珠地藏菩薩、惡趣の苦患を救給へと念じつゝ、なほも涙はとゞまらず。此時三郎左衛門がおびたる刀は、重代の左文字の刀、二千五百貫の折紙つきたる名作なりしが、せめてのかたみと取をさめ、懐中物提物ともに、鹿藏に持しめければ、鹿藏いひけるは、弟猿二郎事、仕を辭て後、河内の國に住候へば、一旦彼地にお



人様ちもてしよい上庭へ、三郎左衛門か乗馬いつこれに駆来り、山三郎が前に頭をたれし、涙を流しけれバ、山三郎そ□物備を見て胸ふさがり、汝親人の秘蔵はとあり、我居所をしたひ来て、悲傷の體、人にもまさりしふるまひなりとて、髪をかき撫つゝいひけるは、昔呉の孫堅董卓と戦て利を失ひ、馬より落て草中に臥衆軍分散してその在所をしらず。然るか馬營中にかへり、軍人をみちびき、草中にいたりて、孫堅を扶しよしと聞。汝はそれにもまさりしぞといひければ、奥岩も落涙し、畜類すら主人の恩を思ひて、かくのごとく慈悲に、人と生れていかで洪恩を思はざらんや。伴左衛門等、たとへ天に道ありて弊り、地に門ありて人とも、某が一念の誠を以て寺出し、御本懐をとげさせ申べしとて、かの馬の平頸をなでさはし、人と畜類のへだてはあれども、我も汝も傍輩にて、主君の恩



をかうふりしは同然なるに、我は汝にはおとりしぞ。飢はせぬか、飢たらんとてあたりの草をとりて與へ、水かひなどしていたはりけり。山三郎幸の父が片身の此馬、これに乗じて、落ゆかんといひて、ひらりとのれば、鹿藏あたりの枯枝をひろひとり、火打袋をとり出し、火を點じて明松とし、前に立て生駒山にさしかゝり、名におへる暗々峠の難所も、かねて案内をしりたれば、口綱をとり馬を

みちびきて、河内の國へいそぎゆきぬ。

十　夢幻の落葉

それはさておき爰にまた、六字南無右衛門は、佐々木の館の事氣づかはしく、旅商人に身を扮し、一荷い荷物をかたげ、人目をはゞかり、笠ふかぶかと面をおはひて、大和の國にいたりけるが、宿をもとめおくれて夜に入額田部村をすぎて、柏木の森の邊をうち通りけるに、木蔭に人のうめく聲、いと苦しげにきこえければ、いぶかりつゝ立より、提燈をさしつけて見るに、よしありげなる女の、むら鹿子の小袖の裾をたかくかゝげ、たすきひきゆひ、けやけしく打扮たるが、黒髪をふり亂し、數所痛手をおひ、鮮血したたりながれて、總身朱に染り、うつぶしに伏て、息もたえだえ也。傍にある長刀を見れば、銀の蛭卷して、梨地に、倚懸目結の紋をちらしに蒔ぬ。これ佐々木家の紋なれば、猶いぶかり、女を抱き起して顔を見ればこはいかに、月若の乳母柏木なり。なむ右衛門大に驚きたくはへの氣つけ薬など與へて、さまざまに介抱けれぱ、やうやう目をひらき、おん身は佐々良三八郎どのにはあらずやといふ。なむ右衛門いはく、おん身いかなる事にて、かく箱子をおひ、此所にはたふれ居給ふぞ、そのゆゑくはしく語り候へ、と



いふ。柏木苦しき息をつぎ、今宵おん館の騒動しかじか\の事にて、姫君若君の[illegible]ん命危きによつて、姫君は名古屋山三郎守護しておち行、妾は若君を[illegible]申して立のきつるに、途中にて追人の大勢にとりかこまれ、ほど/\若君を奪はれん[illegible]しつるゆゑ、命かぎりに戦ひ、やう/\追人を斬散して、若君の御身恙なく、此までは落のびつれど、心は彌猛にはやれども、あまたの深手に歩行かなはず、ここに倒れて夢中になり、おん身の介抱にあづかりしもしらず。おん身先年蕤波を殺して、立のかれし事、實は若殿放埒の根をたゝんと、忠義の為にせられしよし、おん内方稲菜どの[illegible]よりの消息にて、始てしり、かねて姫君若君にも、おん身の[illegible]手にては、とてもかなはぬ命なれば、何いづくにおはすぞと、問れて柏木あたり誠心をきこえあげて、折もあらば歸參[illegible]とぞおん身若君をかくまひ申し、再世を見まはし、月若のおはさぬをみて仰天と思ひしかど[illegible]、此度の大變に[illegible]にいだしまゐらせ給はれかしと、涙ながらし、がつくりとおち入て、所の名さへ柏[illegible]、こゝにておん身にあひたるは、のがたるうちも、いと苦しげ也。なお台木の、森の雫ときえうせぬ。かゝる折し[illegible]不肖で十分に[illegible]、して若君はも、茂林のうちより、追手の人數、若君



の口に猿轡をかけ、小脇にかいはさみて走り出、やよ〳〵佐々良三八郎、汝長谷部雲六といひ合せ、百蟹の巻物を奪、藤波を害して逃去たる大罪人、こゝにて見つけたるは天の與へなり。若君を奪ひたるうへに、汝を捕れば、兩の手に美食を握るが如し。とく〳〵手をつかねて、いましめをうけよ。若手むかひなどせば、忽若君をさし殺すぞ、返答いかにとよばはれば、なむ右衛門いそがはしく、地上にひざまづき、此所にておん身等の目にかゝりしは、某が運命の盡なり。いかでか手むかひいたすべき。いざとく縄をかけられよといひつゝ、手をつかぬれば、追人の人數くち〳〵に、さすがの三八郎、覺悟の體味勝なりとて、已に縄をかけんとしたる油斷を見すまし、なむ右衛門つと立上りて一人を蹴倒し、若君を奪かへして背後にかこひ、仁王だちに立たるは、こゝちよき形勢なり。追人の人數これを見て、欺かれたる口をしさよ、それ打とれと呼はりつつ、刀尖そろへて斬かけたり。なむ右衛門手ばやく息杖に仕こみたる、刀を拔て相むかひ、すきまもなく斬たつれば、追人の大勢敵しがたく、春雨に打るゝ胡蝶のごとく、身をすぼめてぞ逃去ぬ。なむ右衛門今は心安しと、若君の前にひざまづき、人目をいとひ候へば、此邊を立のく間、しばしのほど、おん氣づまりにはおはさんが、此うちにおん身をしのびくださるべしとて、月若を荷物のうちに抱き入、柏木が屍は、あたり近き流れに沈めて水葬し、又も追人の來ぬ間にと、足をはやめて走り去、丹波を斥てかへりぬ。

十一　斷絃の琵琶

さても六字南無右衛門は、若君を救て我家に歸り、一間のうちにしのばせおき、娘楓とともに、朝夕心をもちひてかしづき、權月日をおくりけるが、一日若君にしばし氣ばらしさせ申んと、楓に申しつけていざなはすれば、傾しや月若は、世にうつくしき生れなるに、妖鼠の爲に髮の毛をくひ盡され、剃髮の姿となり、頭に似合ぬ振袖の、綾の小袖の模樣さへ、ゆたのたゆたの捨小舟、薄縹の奴袴も、涙の痕のしみとなり、身すぼらしげに出給ふ。なむ右衛門楓に命じて、柴の折戸をかためさせ、若君を上座にすゑて申しけるは、狹き一間のおん隱家、さぞおん氣づまりとは存ながら、人目をはゞかるおん身なればせんすべなし。御先祖をたづぬれは、人王五十九代の帝、宇多天皇の御末にて、佐々木成賴公の末孫と生れさせ給ひ、あまたの人にかしづかれて、金殿玉樓のうちに生立給ひ、錦の茵玉の床、なに一點の不足なく、あらき風にすらあたり給はぬおん身なるに、奸臣佞者

の爲に世をせばめられ、かゝる貧家にしのばせ給ひ、粟の假橡の粥、わづかにおん命をつなぐのみ。蕨のおどろ紙ぶすま、夜の物さへ、菰莚に、さし漏る月の螢火にくらきおん身となり給ふ、いたはしさよといひければ、若君のたまひけるは、汝が忠志過分なり。我身はいかになるともいとはざれども、唯氣づかはしきは父母のおん身なり。父上は御勘當の身となり給ひて後、いづくいかなる所におはすやらん、母上はなごや山三郎に扶られて落給ひしが、これも御在所知れざるよし、追人に捕れ給ひしも知るべからず。あな戀しの父上や、なつかしの母人やとて、しのび涙にむせび給へば、なむ右衞門楓も、おん心根を推量して、ともに袂をしぼりけり。かゝる折しも外の方に、人の足音ひゞきければ、なむ右衞門楓に目ぐはしして、若君を一間にかくし、さあらぬ躰にて居たりけり。人の親のこゝろは闇にあらねども、盲目となりし我子ゆゑ、道に迷へる杖小笠、旅にやつれし女房の、琵琶を背上によこたへし、盲兒の手を引て、四年ぶりにて我家の、軒の垣衣の露ふかき、草踏分て柴折戸をほとほとと打たゝけば、たそとがめて、なむ右衞門戸をひらき見てければ、妻の藏棠子の文彌、京よりかへりし躰なれば、こは思ひかけずよとて、まづともなひてうちに入る。楓ははやく母の聲を聞つけて、いそがはしく走り出、夫婦兄弟四人の者、ひさしぶりの對面に、たがひの喜びいふべからず。楓は盥に湯をたゝへ、母の裳脚草鞋をとき、足をそゝぎなどすれば、今にかはらぬ孝行やと、うれしさに堪ざりけり。さて藏棠夫にむかひ、いふこと聞こともあまたにて、何から語りはべらんや。且申すべきは文彌事、幼年なれども藝道に心をゆだね、片時もおこたらざりしかば、おのづから妙を得て、師匠澤角檢校どのも、たぐひまれなる器用者と、賞美し給ひ、紫檀の甲の琵琶一面に、秘曲の免狀をそへて給はりぬれば、一つには彼が一曲をきかせまほしく、二つには楓が顏も見まほしく、すゞろに古郷がなつかしく、文彌もまた、おん身や姉を戀しがり候ゆゑ、俄に思ひ立、師匠にしばしのいとまを乞、まかり下り候ひぬと、ものがたれば、なむ右衞門ひたすら喜ひ、ひさしぶりの對面、無事の顏見て安堵なり。藝道も上達せしとや。しばし見ぬうち、さても能生立しな。見たがふばかりに丈高うなりけるぞとて、餘念なく文彌が頭を撫つゝいへば、文彌は恭しく兩手をつき、父上御安體の樣子をうかがひ、喜びに堪はべらずと、おとなしやかに相のぶる。楓はことし十六歳、姿ます〳〵美麗にて、手織木綿の振袖も、綾羅にまがふ風情なるが、母のそばにちかく寄り、長々の御在京、さぞ御苦勞をな

されんと、あけくれ氣づかひくらせしが、恙なき體を見て、やう／＼心やすまりしといひければ、いな／＼我苦勞よりおことが事、妖蛇も今に去らぬよし、其身を以て父上に、孝行盡す辛勞を、さぞかしと推量し、わかれて居ても片時も、わするゝ事はなかりしぞや。縫物髮もよく仕おぼえつるよし、父上の消息にてとく聞ぬとて、うしろむかせ、髮のかゝりをつら／＼見まはし、さてもうつくしうよくできしぞ。此きるものも、おことが縫しか、あつぱれの手ぎはぞ。廣き都のうちにすら、おことが如き娘はまれと、思へばいとゞ妖蛇の事、おもひいだして不便なりと、何につけても子をおもふ、親の心ぞやるせなき。良ありてなむ右衛門、佐々木の館の騒動、柏木が忠死の仔細、若君をかくまひおく事の、始末を語りきかせければ、礒菜おどろき、不慮の御難儀、いたはしさよとて泣ければ、なむ右衛門、いかほどいうてもかへらぬ事、それも文殊ゝ、久しぶりにて若君に、おん目見えつかまつれとて、楓をつけて奥の一間にいざなはせ、くろ木の念珠つまぐりて、例の念佛をとなへつゝ、はるかに時刻をうつしけり。日あしも漸々かたぶく比、京下りの古書畫の商人、いそがはしげにはしり來て、前の日見せまをしつる、金岡が百畳の繪卷物、外に望人いできしゆゑ、唯今價をお渡しなければ、望



の方はやらねばならず、いかゞおぼすやらんといふ。なむ右衛門打聞て、それはあまり火急なり。せめて三日また給はれかしといへば、商人頭を打ふり、某も旅がけの事なれば、三日などはまたれ申さず。しからば今夜三更の時まで待申さん。その期がすぐれば、たゞちにかの方へ貫つかはし候ぞとて、詞をつがひて立歸る。ほどなく外の方に人聲して、足音ひゞきければ、何事ならめといぶかる間もなく、村長に案内させて、捕手の叢組子ども、どや／＼と入來る。組子の頭黒星眼平といふ者、首桶を小脇にたづさへ、聲あらゝかにいひけるは、汝佐々良三八郎今の名は六字南無右衛門とやらんいふよし、月若どのをかくまひおく事注進の者ありて、大殿のおん耳にいり、首打てまゐれとの嚴命なり。汝自打て渡すべきや、某直に打べきや。返答いかにとよばはりぬ。なむ右衛門胸とゞろくと



いへども、さあらぬ體をなし、若君をかくまひ申せしなんどとは、何者が申しけるや、夢にもしらざる事なりと、そらうそぶきていひければ、眼平から／＼と打笑、汝かくまひおく事明白なり。しひてあらがはゞ、此あばら家を踏破りて、家さがしせん。もし又尋常に首打て渡さば、その功により、汝が舊惡はゆるすべし。返答により、汝もともにからめとりて、軍波を殺し、寄物を奪たる、舊惡をたゞ

すべしと、ほだしをかけて、せめければ、さすがのなむ右衛門も、ほと〲當惑の躰なりしが、魂するていひけるは、さばかり事の、あらはるゝうへはせんすべなし。いたはしながら若君の、おん首打て渡し申さん。さりながら、せめて御最期の念佛をすゝめ申すその間、しばしの御猶豫くだされかしといへば、眼平うなづき、得心のうへは、しばしの間はまちくれん。しからば今宵三更の、時打鐘を號として、首うけとりにむかはんずれば、かならず詞たがふべからず。且それまでは、村長かたにまちをらん。首桶それへうけとるべしとて、相濟し、人數を引具しかへりけり。跡にはひとりなむ右衛門、手をこまぬき頭をたれて しばし思案にくれけるが、良ありていひけるは、在物、價百両といふ大金なれば、とても調ふべき手段はなけれど、一寸のびればひろのびるといふ、常言もあれば、もしよき思案もあらんかと、今日翌といひのべしが、それよりもなほ危急なるは、若君の御身なり。今宵にせまる二つの難義、臥龍備氏の智謀ありとも、のがるゝ道、調すべはあるべからず。藤波が所縁の者に打れんと、かねて思ひし命なれども、かかるきはには是非もなし。若君を負まゐらせ、のがるゝだけはのがれ見て、若かなはざるその時は、御腹をすゝめ申し、斬死するより外はなしと、ひとりごち、心のうちにうなづきて、葛籠のうちより、一腰を取出し、行灯提て、奥の一間に立いらんと、破れ紙門をさとあくれば、盲兒の文彌、財布のうちより、あまたの小判を取いだして、手探りにかぞへ居たるが、紙門のあく音におどろき、手ばやく背後にかくしたり。なむ右衛門目ばやく見つけて、いぶかりつゝいひけるは、いかに文彌、見れば餘程の金を持たるが、いかなるゆゑにてその金持しぞ。こゝへ出して見せよといふ。文彌いはく、これは師匠よりあづかりたる金なれば、親人なりとも見せがたしといふにぞ、なむ右衛門、師匠なりとも、幼年の汝に、大金あづけおくべきいはれなし。いかなるゆゑにてあづかりしと、問れて文彌口ごもり、いやこれは途中にて拾ひし金なり。あづかりしにはあらずと、詞のあとさきそろはねば、なむ右衛門ます〲あやしみ、途中にてひろひしものを、かくしおくは道にあらず。いづくにて拾ひつるぞ。實正いへととひつめられてせんすべなく、まことは此金あづかりも拾ひもせず。道中の旅店に、とまり合せし旅人の金を、盗とりつるにて候と、聞てなむ右衛門あきれはて、えりくびつかみて引たふし、なにといふぞ。そはまことか眞實か。元來なんぢ孝子にて、さある非道をおこなふべき性質にあらずと、今のいままで思ひしが、在京のわづかの間に、さばかり

心のかはるものか。これよくきけよ。あきらかなる所には王法あり。くらき所には神靈あり。五戒のうち、もつとも偸盗をおもしとす。たとへ塵一すぢにても、盗をなして、豈よく罰をまぬかれんや。けがらはしき心底や、あさましき所存やとて、左の手にえり首を持かへ、右のこぶしをふりあげて、頭をのぞみ、つゞけ打に打たふし、且怒且悲み、あつき涙をおとしつゝ、かやうにきびしくいましめなば、もしくは心もなほらんかと、親の慈悲こそせつなけれ。文彌はやがて起上り、あざみ笑ひていひけるは、貧乏者の子とうまれ、正直にかまへては、とても出世はなりがたし。此金にて官をとれば、一生は安樂なり。さばかり呵給ひそと、きけばきくほどにくければ、歯をかみならして聲をあらゝげ、大膽不敵の今のことば、さら〳〵子とはおもはれず。天魔波旬の所行なり。親子の恩愛これまでなり。七生までの勘當ぞ。とくいづかたへもいでゆけとて、足をあげて蹴とばせば、文彌は財布を懷中し、勘當うくれば、親でなし子にあらねば、長居は無益とつぶやきつゝ、あたりを探りていでんとす。なむ右衛門怒にしのびず、走りよりて、又蹴たふせば、おきあがりて、又惡口す。惡口すればなほ蹴たふし蹴たふせば、益惡口やます。なむ右衛門いよ〳〵怒、頭肚の用捨なく、踏つけ〳〵ふみたふせば、文彌は片息になりながら、なほも惡口とゞまらざれば、なむ右衛門怒氣天にさかのぼり、刀をすらりと拔手も見せず、肩尖四五寸きりこめば、呀と一聲たまぎりて、うつぶしにたふれたり。たゝみかけてきらんとせしが、恩愛千すぢの葛籠の緒、足にまとひて背後のかたへ、ひきもどさるゝこゝちするを、思ひきりて又ふりあぐる劍の下に、妻いそ菜はしり出、やれしばしまち給へ。いふことありとゞむれば、なむ右衛門いやとどむるな。なか〳〵に生おきて、罪つくらせんよりは、一思ひに手にかくるが、親の慈悲ぞといひつゝ、いそ菜をおしのけつきのけて、なほきりつけんと立まはる。いそ菜は夫の手にすがり、その身をしづにひきもどし。息をつく〳〵あの金は、盗物には候はず。まことは娘楓が身の代にて候といへども、なむ右衛門合點せず。妖蛇に見こまれ片輪な娘を、何ゆゑに大金出してかゝゆべき。なんぢもともにいつはるかとて、にらみつくれば、いそ菜奥の方へ打むかひ、やよ〳〵娘ここへ來て、父上におことが心底ものがたれ。はやく〳〵とよばはれば、娘楓一聲答てかけいでしが、文彌がきられし體を見て、むせかへりてぞたふれける。いそ菜文彌を抱かゝへ、くるしうあらんが父上に、本心をかたるうち、こらへてくれよといたはりつゝ、楓にむかひ、かな

しきはうべなれども、委細のわけを父上に、とく〳〵告よと、いはれてやう〳〵顔をあげ、なむ右衛門にうちむかひ、御不審は理なり。前の日父上おんものかたりに、かねてたづぬる百蟹の巻物、思ひかけず京くだりの商人持参せしが、その商人を捕へ、出所をたゞさば、盗人の在所もしれ、巻物も手に入道理と思へども、かなしさは日蔭の身、あらはに事をたゞしがたし。さりとて價は百両といふ大金なれば、とても我手にいりがたし。我手にいらねば、末代盗賊の汚名をすゝぐ事あたはず。金づくにてこれまでみがきし武士道をすて、先祖の名までをけがすこと、思へば〳〵無念なり。口をしさよとて、男なきになき給ひしが、骨身にしみていたはしく、何とぞ金とゝのへてあげ申んと、思へど外に仕かたもなし。幸京都五條坂の傾城屋、篠村八幡の門前に、旅宿して居と聞、ひそかにまゐりて、此身を百両に買くれよとたのみしかば、すみやかにうけがひしが、妖蛇のいはれを、聞とその儘破談におよぶ。金がほしいと思ふ心一圖に、我身の片輪に心つかざりし事よと、みづからはぢ思ひつつ、すご〳〵かへらんとしつるに、捨る神あればたすくる神もありといふ、常言のごとく、今ひとりの年かさなる傾城屋が申すには、これまで蛇つかひの女さまざまありしが、實の因果にてさることあ



るはめづらしく、殊更生れつきもよければ、紀川原にて見せものにせば、あそびにするより、かへりて利得おほからん。もし見せものになる心あらば、五年をかぎり百両にかゝふべしと申すにより、見せものはおろか、たとへ牛皮をはがれ、生贄をとらるゝとも、百両の金をとゝのへ、父上の汚名をきへすゝげば、露ばかりもいとふべからず。ことさら面はさらすとも、うき川竹のながれをくみ、身をけがすにはましならめ。諸人にはぢをさらしなば、かへりて罪障の、きえうせなんよすがともならんかと、心を決し、それにきはめてあとどりしが、父上にはいひだしかねて居つるに、今日思はずも母さまの、おんかへりを幸ひとし、妾が心底をうちあけ、さきほど裏口よりともなひいでゝ、かしこにゆき、母さまの手形をすゑて證書を渡し、百両の金をうけとり、今夜のうちに都へ旅立はずに約して、



かへりし折から、捕手の騒動若君の御急　一つの不審ははれたれども、それを文彌難、母さまとものかげにて、唯あきれて　が口づから、啻しとはなどいひしと、血をり候。　不審はなさせ給ひそとよ。文　刀をなげすて、とびかくえ　いま学かは彌が持しかの金は、妾が身の代にちがひ　りていひけるは、若君の御急難をきゝ…なく候と、泣々かたるにぞ、なむ右衛門　ひとしく、文彌をおん身がはりと思ひつゝ

きしが、忠義に凝たるおん身なれども、さすが親子の愛着にて、もし心もおくれ給はんかと、文彌にいひふくめ、父上の氣質塵ばかりも、ゆがめる事をきらひ給へば、此金を盗しといひ惡口せば、怒りに乘じて恩愛の絆をたち、手打し給はんは必定也。しか〳〵はからふべしと、心づよくもいひきけたれば、すみやかに聞とゞけ、某宿世の因果にて、盲目となりつれば、すは主君の御大事といふとも、戰場のはたらきなりかたく、武士の子とうまれたるかひなしと、日來くちをしく思ひつるに、若君のおん身がはりとなるは、戰場の打死も同然、ねがうてもなき幸也。さりながらたとへ計にもあれ、親にむかひて惡口し、盗せしなどは勿躰なくて申しがたし。こればかりはゆるし給へといひけるゆゑ、そは尤のことなれども、さなくては父うへの、愛念を絶ことあたはず、何事もみな忠義の爲ぞとて、やう〳〵得心させつるに、けなげにもよくはからひしぞ。ほめつかはされくださるべし。さきほどものかげにて、おん身の樣子をうかゞひしに、若君をともなひてのがれ出、かなはぬ時はきり死と、覺悟の體に見えたれども、村の口々山道まで、捕手の人數かため居るよし聞はべれば、とてものがるる道はなし。きり首となり瞼をふさがば、盲目目あきの差別もあらじ。たとへ眼平若君のおん顏を見知とも、忠義の一心を以てあざむかば、やはか仕損じ候まじ。大丈夫のおん身をさへ、恩愛にひかされて、おぼつかなしと思ふものを、愚痴な女の心といひ、朝夕はなれず手しほにかけて、これまでに育あげたるいとし子を、すゝめて殺さす胸のうち、御推量くだされかし。しかのみならず、娘楓。しばしのわかれといひながら、世の中の親の情は、我子の片輪をどこまでも、かくしてやるが常なるに、諸人に顏をさらさせて、丹波の國の因果[illegible]、[illegible]ら〳〵までもはぢを曝さす不[illegible]には[illegible]が身せめて十年とし若くば、此身を賣ても、娘にうき目は見せまじものをと、くどきたて〳〵、兄弟ふたりの手をとりつゝ、夫におくれをとらせじと、たへしのびつるため涙、瞼の堤をおしきりて、あふれおつるぞことわりなる。なむ右衞門始終を聞、うたがひはるれば百倍かなしく、鐵石のごとき心にも、肝にやきがねさゝるゝ思ひ、五臟六腑惱亂し、しばし詞もいでざりしが、やゝありていひけるは、文彌事若君と同年といひ、剃髮の姿といひ、顏かたちも似たるゆゑ、おん身がはりと思ひつきては見しかども、何いふも盲目にて用にたゝずと、一圖に思ひて、死首のまぶたをふさぎ、盲目めあきのへだてなき所には、つゆばかりも心つかざりし。楓も容はすぐれたれども、片輪なれば身うりもならず。嗚呼

ふたりの子どもは持ながら、親の因果が子に報ひ、忠義の用にたゝざる事よと、残念に思ひしが、おことをはじめ兄弟の子どもら、たぐひまれなる心底かな。持べきものは子なるぞやといひて、涙と血と相和して、瀧のごとくに流しけり。文彌は母の介抱にて、やう／＼と起なほり、おとなしやかに手をつきていひけるは、渇しても盗泉の水を飲ずとやらんきくものを、母うへのおほせとはいひながら、盗ぬ金を盗しと、親をいつはる詞の罪、おんゆるしくだされかし。果報つたなくて、生れもつかぬ盲目となりぬれば、せめて藝道をはげみ、父母老後の心を安め、片輪な奴に御不便をくはへ給ひ、御養育くだされし、大恩をむくはんものと、それたのしみに四年このかた、精神をこらせしが、此度若君に一命をたてまつり、姉うへも身を貢給へば、此末はさぞ心ぼそくおぼされん。生わかれ死わかれと兄弟二道にわかれども、死は一旦にしてなし安く、生て諸人に面をさらし、父の汚名をすゝがんとおぼしめす、姉うへの心底は、又なしがたき孝行也。此年來學び得し、琵琶の一手を父うへに、聞せ申さで死るのは、心殘りに候へば、かく手を負ておぼつかなくははべれども、一曲つかうまつり候べし。冥途の旅のおき土產、ながきかたみとおぼされて、おん聞くだされかし。母人さまその琵琶こゝへといふにぞ、いそ菜泣々琵琶とりいだしてあたふれば、わづかに年は十一歳の盲兒が、縹木綿の肩あげに、血しほしたゝる疵口の、いたさをこらへて琵琶かきならし、いと苦しげに聲たてゝ、平家をぞかたりける。

さるほどに、一の谷の軍やぶれしかば、武藏の國の住人熊谷の次郎直實、平家の公達たすけ船にのらんとて、みぎはのかたへおちゆき給ふらん。あつぱれよき大將軍にくまばやと思ひ、ほそ道にかゝつて、みぎはのかたへあゆまする所に、こゝにねりぬきに鶴ぬうたる直垂に萌黃匂の鎧着て、鍬形打たる甲の緒をしめ、黃金作の太刀をはき、二十四さいたるきりふの矢おひ、重籐弓もち、連錢驄なる馬に、金覆輪の鞍おいてのつたりける者一騎、沖なる船を目にかけ、海へさつと打入、五六たんばかりぞおよがせける。

とうたふ唱歌も聲くもり、ひくてもふるへてたしかならねど、さすが日來の手練といひ、此世のなごりと思ふから、苦しき息をはげませつゝ、三重の甲をあげ、初重の乙に收て、うたひすましたりければ、大絃は嘈々として急雨のごとく、小絃は切々として私語のごとく、昭君馬上にしらべ、樂天客舟に聞つるにも、はるかにまさりて哀なり。なむ右衛門耳をそ

ばだて丶聞居たるが、恩愛切なる歎のうへに、か丶るかなしき調をきけば、皮肉もはなる丶こ丶ちして、こらへかねてぞ泣伏ける。礒菜楓も もろともに、涙にむせぶばかりなり。文彌はなほも聲ふりたて

とうたふ聲さへ、しだいによわり、ほとほとたえん琵琶の緒に、か丶る血しほの疵口より、さとながるれば、あな苦しや、おはやうたふことかなひがたし。これまでぞとて、琵琶をおき、此世からさへ一條の、杖をたよりの暗穴道、死出の旅路は殊更に、黒闇地獄に迷行、無目の餓鬼と生れ出て、呵責をうけんは必定なり。それを不便とおぼすなら、末期の水をさかじまに、逆縁ながらお手づから、香花

熊谷なみだをはら〳〵とながいて、あれ御覧候へ。いかにもしてたすけまゐらせんとは存候へども、味方の軍兵うんかのごとくみち〳〵て、よものがしまゐらせ候はじ。あはれおなじうは直實が手にかけ奉りて、後の御孝養をもつかまつり候はんと申ければ、只何様にもとう〳〵首をとれとぞのたまひける。くまがえあまりにいとほしくて、いづくに刀を立べしともおぼえず。目もくれ心もきえはて丶、前後ふかくにおぼえけれども、さてしもあるべきことならねば、なく〳〵首をぞかいてげる。



を手向たまはれかし。我身のための功徳には、他人の千僧供養より、はるかにまさり候べし。さらぬだに、親子は一世のちぎりときくに、盲目のかなしさは、父上母うへ、千萬年のお齢すぎて、冥途へおはす事ありとも、お顔を見る事かなはじと、思へばこれが三世のわかれ、又あふことはあらじと思へば、いとゞかなしくなごりをし。父うへはどこにおはすぞと、いひつゝはひよりて、なむ右衛門にとりすがり、身うちを探りつ、撫まはしつ、御苦労をなさるゝゆゑか、いかうやつれが見えはべる。かならずわづらひ給ふなよ。とかくおん身恙なく、壽長くおはしませと、今般のきはまで孝心の、ふかき詞をきくになほ、なむ右衛門胸ふさがり、主君の御先途見とゞけて後は、蒔波が縁者をたづね、恨みの刃にかゝりて死すべき、かねての覚悟なれば、思へば蜉蝣の一期にて、翌をもしらぬこの身なるに、夫とはすこしもしらずして、長生せよとは、いとほしのいひごとよと、心には思ひながら、口にはえいはず、過去の修因今生の現果、つたなかりける我かなとのみいひて、とかく涙にむせびけり。蘇秦惣両人は、文彌が左右にとりつきて、これが三世のわかれかと、聲もをしまず泣ければ、文彌はふたりが身うちをさぐり、せめての事にたゞ一目、おん顔を見て死たきことぞ。盲目となりし



は何の因果と、又今更にかきくどきて、血を吐ばかり流けるが、折しも空に時鳥、一聲なきて過るにぞ、死出のたをさの道しるべ、ながく苦痛をせんよりは、少もはやく父うへの、おん手にかゝるにしくなしと、西にむかひて合掌し、しばらく念佛をとなへつゝ、いざ〳〵と催促し、首さしのべて、まちければ、なむ右衛門子にはげまされて身を起し、刀を拔そばめ、やがてうしろに立まはりけるが、前に斬しは怒の刀、今の刀は恩愛の、切なる思ひの刃なれば、手も慄き脚も軟ぎて、いづくに劍を打べしともおぼえず。今聞つる琵琶の唱歌、熊谷の次郎は敵でさへ、敦盛を打かねつるものを、現在我子を斬おもひ、いかでかたへ忍べきと、前後不覺の體なりしが、時刻うつりて仕損じなば、かれが忠死も水の泡と、おもひきり〳〵、よろめく足をふみしめつゝ、若我成佛十方南無阿彌陀佛世界、念佛衆生攝取不捨、と、聲もろともに、はつしときれば、むざんやな、首は前にまろびおち、軀はうしろにたふれたり。礒菜楓は、太刀音と、共にさけびて打ふしぬ。折しも遠寺の鐘の聲、はや三更の時なれば、猶豫ならずと立よりて、かの金をとりをさめ、手ばやく軀を葛籠にかくし、流伏妻を引おこし、流て居る處にあらず。此金持て裏道より、かの卷物を買取來れ。娘は今宵生別、しばしもなごりをゝしむべしとて、鮮血したゝる首たづさへ、兩人をひきたてつゝ、へだての紙門をたてきりて、その後音もなかりけり。約束の時刻ぞと、黒星眼平手の者をゐて來り、やよ〳〵なむ右衛門、若君の首打しか、いかに〳〵とよばはれば、一間のうちよりなむ右衛門、首桶をたづさへて、打しをれつゝあゆみ出、嚴命もだしがたく、いたはしながらおん首打候ひぬ。いざ御點檢とさしいだせば、眼平いはく、某月若どのをよく見知りたる事は、かねて知たるなんぢなれば、よも假首はわたすまじ。もし又すこしもいつはらば、忽なんぢが身うへなりと、にらみつゝ、首桶を引よせて、已に蓋をとらんとす。なむ右衛門は若假首と見あらはさば、きり死すべき覺悟にて、袖の下に刀を拔かけ、かたづをのみてひかへしは、げに危くぞ見えたりけり。眼平蓋をとりのけて、これはとおどろく體なりしが、文彌が首の口中より、陰氣を吐と、なむ右衛門が目にのみ見えしが、眼平忽眼くらみ、いかにも月若どのゝおん首に相違なし。よく打つるぞと賞美して、首桶をとりをさめ、從者をちかづけ、とほまきの人數を、とくとくひかすべしと下知をなし、ふたゝびなむ右衛門にむかひ、若君の首打たるうへは、汝においてかまひなし。舊惡の罪あれども、此度の功により、大殿の御前よきにとりなしつかはすべしと、いひ捨

て、人數を引つれ立かへる。なむ右衛門ため息を吻とつきて、とほざきの人數を引ば、もはや氣づかふ事なし。若君をおとしまゐらす、支度せばやと思ひつゝ、立上る折しも、妻いそ菜息もつきあへずはせ歸り、樣子はいかにとたづぬれば、文彌が一念頭にとゞまり、陰氣を吐て、眼平が眼をくらませ、十分に欺ぎしときて、いそ菜は心おちつき、かの卷物をとり出してわたせば、なむ右衛門ひらきみて、お家の重寶に、まぎれなしとて卷をさめ、これさへあればそれがしが、汚たる名をそゝぎ、末代までもきよかるべし。これといふも楓が孝心ふかきゆゑぞ。娘はもはや旅立しか。あな不便や、さぞかなしからん。今思へば、かれを楓となづけしも、かへでは蝦手の略訓にて、小蛇のたゝる前表ならん。文彌が初名を栗太郎と名づけしも、丹波の國の爺打栗、爺に打るゝ因縁か。只此うへは文彌めが、菩提をとふが肝要なり。眼平一度假着をとりゆきしが、今にそれとあらはれて、ふたたびこゝによせ來らんは必定なり。片時もはやく若君を、おとし申すにしかじといひて奥に入、月若の手をたづさへて立いづれば、若君は目を泣はらし、夫婦の忠節過分なり。便なき文彌が身のはてやと、なげきのたまふ一言が、世にあるときの千石より、夫婦が身にはありがたく、なむ右衛門卷物を懷中し、軀をいれたる葛籠をせおひ、若君のおん手をとれば、妻のいそ菜は琵琶をいだき、地水火風の四つの緒の、きれし我子のかたみぞと、轉手撥面半月の、月の光りをたよりにて、播磨のかたへぞおちゆきける。

○かくて、なむ右衛門夫婦、若君を扶て、播磨より河内にいたり、所縁の寺にたよりて、文彌が軀を烟となし、かたみの琵琶を施物として、佛事をいとなみ、若君にいそ菜をつけて、かの寺に忍ばせおき、その身はかの卷物をたづさへ、桂之助與作の前へ、ゆくへをたづねに、いでけるとぞ。

昔話稲妻表紙巻之四

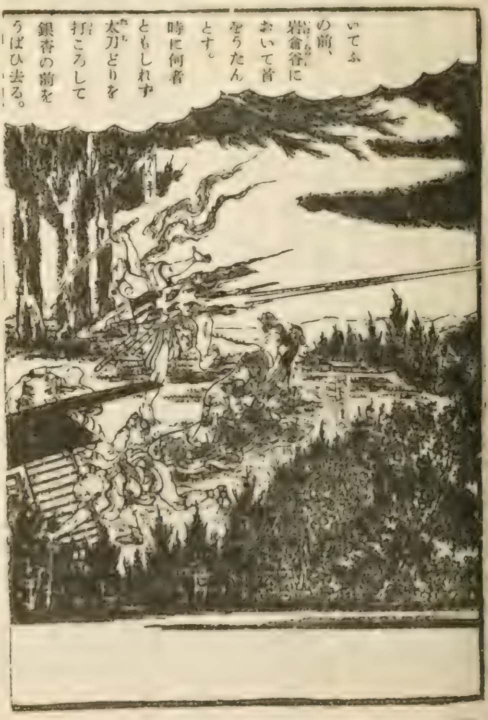
十二　修羅の太鼓

さても銀杏の前は、山三郎に扶られて、生駒山の麓までおちのびしが、辻堂にて追手の者に捕へられ、不破道犬が手にわたりて、蜘手方の深殿、おくまりたる一間のうちに押籠られて、日のかげだに見ることあたはず、月若の身のうへ苦になるうへに、朝夕の食事だにろく／＼に與へざれば、心氣日々におとろへ、身躰夜々にやせほそりて、命も危く見え給ふ。しかのみならず、道犬蜘手の方と密談して、大殿判官の命といつはり、いてふの前を引いだして、兩人かはる／＼晝夜たえまなく、寤現責にして、月若のゆくへ白狀せよと責にけり。むざんやないてふの前は、三日三夜のうつゝせめにつかれはて、おぼえずねぶれば、道犬耳のはたに太鼓をならして、ねぶりをさまさせ、しばしのうちもねぶらさず、夢幻の世の中に、夢も見せぬぞ哀なる。道犬眼をいからし、いかにいてふの前どの、月若どのゝゆくへ、しらぬ事はよもあらじ。とく／＼白狀しめされよ。大殿の嚴命なれば、とてものがれぬ處ぞと責とへば、いてふの前瞼おもげに、目をひらきて、苦しげに息をつき、かくやすみなき責にあひ、夜とも晝ともおもほえず、夢か現か寢てか醒てか、わかたざるこゝちすれば、いかばかりいとほしと思ふ我子にても、ありかさへしるならば、うつゝのうちにいはでやは、いかでかつゝみかくさるべき、推量してよ道犬と、のたまひつゝも又ねぶれば、又太鼓を打て目をさまさす。ねぶれば打うてば醒、水責火責にあふよりも、はるかにまさる責苦なり。傍より蜘手方、小膝をすゝめてちかくより、いまだわづかに三日三夜の責なれば、まことと現にはならぬとおぼし、ながき責をうけんより、つひ一言白狀せよ。此うへにもいはずば、骨をひしぎ肉をさきても、いはさでやはあるべき。いでいへいで答へよとて、角なき夜叉のさまなして、くらひつくべき形勢なり。いてふの前顔をあげ、いかほどにのたまふとも、しらぬ事はせんすべなし。只此うへは、片時もはやく、殺し給ふが情ぞとて、さめ／＼と泣給ふ。紺青の髪すぢも、こぼるゝまゝにとりあげず、顔さしいるゝ襟もとに、つたふ涙の白玉は、夷の國の胸裝を、目前見るこゝちして、哀などいふもおろか也。蜘手の方聲あらゝげ、あなしぶとき女めかな。とても本性にては白狀せまじ。いつまでも下

をゆるめず、責つからして現のうちにいはすべし、道犬太鼓打々と下知するにぞ、道犬かしこみ候とて、耳のはたにさしつけて、鼕々と打ならせば、いてふの前の身にとりては、修羅の太鼓にことならず。一百三十六地獄、品かはりたる呵責にも、たぐひまれなる責苦なり。かゝる折しも、とり次の者はせまゐり、黒星眼平只今歸國つかまつりおん次にひかへ、おんめしをまち候ときこゆれば、道犬打聞、それいそぎこれへよべといふにぞ、かしこみ候とて退きぬ。ほどなく眼平まかりいで、縁側に頭をさげていひけるは、月若どのゝゆくへをたづね、おん首打てまゐれとのおほせにより、所々方々をたづねもとめ候うち、注進の者ありて、丹波の國穴太の里に住、六字南無右衛門と申す者、かくまひおくよし聞いだし候ゆゑ、いそぎゆきむかひ候所に、彼者いかゞしてか打手のむかふ事を知、若君をつれてのがれ去り、ゆくへしれずなり候なむ右衛門と申すは別人ならず、佐々良三八郎がことに候と、假首をうけとりし、おのが越度はおしかくし、まことしやかに相のぶる。蜘手の方これを聞、そは殘念なり。しかるうへは、いてふの前をせむるも無益なり。かれはとくに殺すべきはずなれども、畢竟月若のありかをいはさんばかりに、今日までもいけおきぬ。もし大艱の心かはりて、助命などあらば、後



目のさまたげなり。とく〳〵かれを殺すべし。月若三八郎がゆくへは、なほきびしくたづぬべし。道犬そちはいかゞ思ふやらんとのたまへば、道犬うなづき、それがしも左こそ存候へ。さるからは片時も猶豫はよろしからず。幸ひ日もくれなんとすれば、今宵のうちに御首打候べし。いかに眼平、なんぢいてふの前どのを乗物にのせ、夜にまぎれて岩倉谷にかきゆき、ひそかにおん首打て來るべしと命じければ、眼平腹心のしもべをよびつぎ、庭さきに乗物をかきいれさせ、夢現にて打伏たる、いてふの前を、情なくもあらなはにて高手小手にくゝしあげて、乗物におし入、しもべにかゝせつきそひて、庭づたひにいで岩倉谷にいそぎゆきぬ。いてふの前はこのごろのつかれにて、乗物のうちに熟睡し、身のあやうさも露しらず。居所のあゆみのほどもなく、岩倉谷にゆきつき、眼平下知して、とある處に


いてふの前、岩倉谷において首をうたんとす。時に何者ともしれず太刀どりを打ころして銀杏の前をうばひ去る。

乗物をすゑさせ、戸をあけていてふの前をひきいだす。いてふの前は此時にいたりて、やう〳〵すこしねぶりさめ、目をひらきて、先我身をかへりみれば、いましめの縄目あり。四方をあふぎて見わたせば、月の光りはあきらかなれども、いづくいかなる所をしらず。松吹風は梢をならし、谷の水音耳にひゞきて、ものすさまじくきこゆれば、こはまだ夢のうちなるかと、更にうたがひはれざりけり。

眼平むかひ合ていひけるは、いかにいてふの前どの、此所は名におへる岩倉谷といふ所也。大殿の嚴命によりて、唯今おん首を打なり、念佛まをしたくおぼさば、とく〳〵申されよと、情なげにぞ申しける。いてふの前これを聞、さては我身も今かぎりなるか。捕へられたるその時より、覺悟のうへの命なれば、おどろくべきにあらざれども、今般のきはに唯一目、月若を見ざるのみ、此世の心のこりぞかしとて、さめ〴〵とぞなげかるる。たとへ鐵もて鑄なしたる人、土もてつくりたる的なりとも、すこしは哀れをもよほすべきに、物のあはれをわきまへざる、夷ごころの眼平なれば、なげきを耳にも聞入ず、氷なす刀を拔、左りの方よりふみこみて、已にかうよと見えたる處に、はるかむかうの茂林のうちより、噇的一聲ひびきわたりて、たちまち鐵丸飛來り、眼平が胸板を打ぬきければ、血を吐ながらさかしまにひるがへり、ふすぼりかへりて死てげり。しもべらは魂天外に飛去つゝ、かうべをおさへて逃去ぬ。しばしありて林のうちより、忍頭巾に面をつゝみ、黑き裝束をしたる者、手に火衛の具をたづさへて、悠々とあゆみいで、驚き臥たるいてふの前を引おこし、小脇にはさみて、いづくともなく走ゆきけり。是善人か惡人か、はた敵か味方か、何人といふことをしらず。此者の姓名をしらんと要せば、卷之五の下冊第十九回を、讀得て知べし。

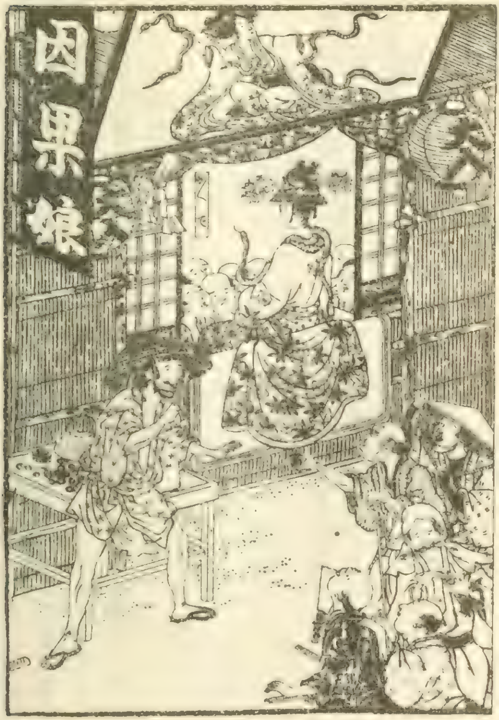
十三　靈場の熱鬧

その比近江の國、石山寺の觀音菩薩、結緣のため開帳ありけるが、名におへる靈場なれば、これにまうで來る人、上女老少群集し、綿々絡繹としてゆきゝしばらくもたえず。誠に是行川のながれのとどまらざるに似たり。商人どもかゝるにぎはひに乘じて、過分の利を得んと、假に假屋をつくり、草津鞭、守山繖、高宮布、長濱糸、大津針、高島硯、武佐墨、水口笠、辻村の鍋のたぐひ、玄惠法印が庭の訓にもらせるものまで、おのがさま〴〵持はこびて、山のごとくつみあぐれば、買人は雲のごとくにあつまりぬ。あるひは酒賣家あり、餅菓賣軒あり、憩所をつくりて、茶をひさぐ者あり。小弓の射場まうけて、いとなみとする者あり。あるひは長劍を撫して藥をうり、今様をうたひて錢を乞、聞もつたへぬ片輪者、見もおよばぬ鳥獸など、奇とあやしきものを見する所、幻戲、籠脫、刀玉、緣竿のたぐひ奇妙の術を施す所など、所せきまで立ならび、笛吹音、鼓打聲、四方にひゞきてかまびすく、諸人の耳目をおどろかしむ。此大路のうちに、薦すだれかけ、かり家つくりて、紙もてはれる招牌

に、辻談義齋の五郎右衛門と申すものこゝろに
かきつけて、戸口にかけたるあり。かれ
がいふこと聞とて人あまたつどひ居た
り。講師たかき床のうへにのぼり、書案
のうへに拆木のかたしをおき、まづし
はぶきを前にたて、、[illegible]聞衆にむかひ、
夫つらつら阿彌陀佛を案ずるに、如來は五
劫の間思惟し給ひ、上は一人より下は婆
婆嫁々にいたるまで、殘りなくすくひと
らめとの御誓願は、おのおのや我等まで、
ありがたくたふとき事にあらずや。かる
がゆゑに彌陀如來は、寢給ふことはさて
おきて、あぐみ居給ふことだになく、十
萬里かなたの西方より、こなたの方に伸
あがり給ひて、衆生の地獄をつくるを
見給ひては、あなやあなやとかなしみおぼ
さるゝよし。それよりは持國多聞などい
へる一騎當千の四天王に命ぜられ、衆生
當前の地獄をつくらす御分別はなきかと、
聲をかしううちあげていひつゝ、かの拆
木をとりて書案を續地打ならしければ、
芝居一度に鳴動し、且笑且感ずる聲しば
らくはやまざりけり。そのとなりもおな
じすぢなる小屋つくりて、外の方にうつ
くしき少女の身うちに、蛇のまとひつき
たるさまを繪にかきたる、招牌をかゝげ
いだしたるあり。かたぬぎたる男戸口に
立、扇をひらきて往來の人をさしまねき
つゝ、聲たかやかによばひいへるは、こ
れ此まじるしを見給へ、そも此女子こそ、
丹波の國なる奥山に住獵師の子なれ。殺
生の罪科親の因果の子にむくいはべりて、
かく蛇に見こまれ身うちにまつはりて
はなれさらず。容は世にすぐれてうつく
しう生れつきながら、人がましき交りな
らぬ身とはなりにたり。十が一つ罪障消
滅の便ともなれかしとて、あまねく人々
に見せ奉るなり。都におきては四條の
川原、浪華津にては道頓堀、伊勢の國に
ゐてゆきては、白子なる觀音堂のほとり
にて見せ奉りぬ。ものゝむくいのおそろ
しさはかくぞあなる。前代未聞又たぐひ
あらじ。いへづとによき話柄ぞ、招牌に
つゆばかりもいつはりあらば錢とり候ま
じ。見給ひてのちおこし給へと、聲かる
るばかりのゝしれば、見物の諸人蟻のご
とくに集蜂のごとくに群りて、かりやの
うちにいり、こちおしあちおし、ひしめ
きあひてこれを見る。此をなごはすなは
ちこれ、六字南無右衛門の娘なり。
憐むべし楓は、こゝろにもあらで、眉を
ゑがき脣をそめ、頭に花簪をさしか
ざし、色元結をむすび、髪の[illegible]
今樣にとりあげて、阿舎比めきたる容に
つくり、床机めきたるものゝうへに、紅
の毛氈しきて尻かけたる姿、嬋娟たる牡
丹花の咲いでたるごとくにて、あたりも
かゝやくばかりうつくしけれど、腹、手
首、喉くびなどに、蛇どもいくつとなくま
とひつき、かまくびをおしたて赤き針の

やうなる舌を吐いだし、目をぼち〳〵としてうごめくさま、見るにさへ身の毛そばだつばかりなり。見物の諸人何の遠慮もなく、かれが顔をちか〳〵とうちまもり、世にまれなる娘なるに、かく妖蛇に見こまれしはをしむべき事にあらずや。かゝるあさましき身とだになりにたるを、はれがましう人集て見することよ。かの女いかにわびしとや思ふらん。あな不便のことやといへば、傍の人のいへるは、いな〳〵かれが親めは、さだめて非義非道をおこなひつる悪人ならめ。そのゆゑに親の因果の子にむくいて、かうあさましき身とはなりつらめ。さるあしき者のうみつけつる子なれば、かれも又姿こそうつくしけれ、志はさぞゆがみつらめ、世の人のよき戒めぞ。かう人々に面さらさしむるは、かへりてかれらが罪科のきえうするよすがなり。憐むべきにあらず。人々よく見てやりねなど、口々にいふを聞つゝ、人々に顔まもらるゝ娘が苦しさ、いかばかりならんはかり思ふべし。

抑石山寺は石光山と號し、天平勝寶六年の草創なり。聖武天皇の朝、僧正良辨、如意輪觀自在丈六の尊像を安置す。一千有餘年を經たる靈場なり。後は蓮峯巍々として、岩間、笠取、醍醐につらなり、前は勢田川のながれ森々として、湖水につゞく。げに此地の月を賞じて、近江八景の一勝とせるもうべなり。抑此御寺の



門前に、ひとりの浪人、深編笠に面をかくし、小鼓を打つゝ、月にはつらき小倉山その名はかくれざりけりと、くせ舞々のうたひをうたひ物を乞さまなり。（くせ舞々といふもふるく文明の職人盡に見えたり）往來あまたの人のうちより、年のころほひ十六七とおぼしく、容貌すぐれて美しき娘、田舎娘とは見ゆれど、紅のこぞめの梅の小枝に、春霞立田の山の、鶯といふ文字を、繡にそめいだしたる木綿の振袖着て、ものすそかゝげ、禪衣かけ、手覆脚絆草鞋を穿、菅の小笠をたづさへて、巡禮の道者と見えたる女、かの浪人の傍にちかづき、扨もしをらしき鼓の音ぞと、いひつゝしばしたゝずみぬ。かの浪人編笠ごしに、此女をつらく\見て、さてもいぶかしさよ。おことはをさなき時、出雲の國大社の社家に、養子につかはしたる八重垣にはあらずやといふ。かの女これを聞、打おどろきたるさまにて、しばし答もせず、只打まもりて居る。浪人ふたたびいひけるは、かく零落してむかしにかはる姿なれば、いぶかるも理なりとて、聲をひそめ、それがしはおことが兄長谷部雲六なるはといふにぞ、女は益々おどろきたる躰なりけり。かくて雲六女をもの陰にいざなひ、笠ぬぎていひけるは、世を忍身なれば、人目おほき所にては面をあらはしがたし。おことは何ゆゑかかる姿となり、具せる人もなく若き女の



身にて、たゞひとり此邊には來りしぞととはれて女、さては兄うへにておはしけるものをとて、涙さしぐみ、さきほどかしこの算おきにうらなうてもらひしに、けふたづぬる人にあはめといひしは、まことに見通しのうらなひなり。さて妾が薄命を聞てたべ。養家の父母此春わづか月の間に、つゞきて身まかり給ひ、妾ひとりあとにのこりしが、養父の弟にて妾がためには伯父なる人、養父の遺財を奪とらんたくみにて、情なくも妾をおひ出しぬれば、せんすべなく、此うへは兄うへにあひて、身のうへをたのみ申すより外なしと思ひ、かく巡禮に姿を扮して物乞つゝ、辛うじて大和の國にいたりけるが、おん身在京の節、かしこにて俄に浪々の身となり給ひ、ゆくへしれずとききつるゆゑ、ほとんど力おち、縊てや死ん、淵川に身をしづめやすべきと、とざまかうざまに思ひめぐらしけるが、せめて諸國の靈場をめぐりて、養父母の菩提の爲、我身來世をたすかるよすがにもせばやと思ひつき、武家に育て佛につかふるは心たがへるやうにはあれど、神佛も同躰ときけば、くるしからじと心を決し、そちこちを巡拜して、けふしも此御寺にまうでしが、思ひかけず兄うへにあひ奉りしは、全く菩薩のみちびき給ふに疑なし。おん身は又何ゆゑ俄に浪人し給ひ、かばかり零落はし給ひつるぞと、



辻談義露の五郎兵衛、實は名古屋山三がしもべ猿二郎、佐々木桂之助の危難をすくふ。

とらかへせど、嘉六こたへて、我身のう
への事は一命に[illegible]れず、此度こそは
見つ、[illegible]ともいひ、泣[illegible]なれば、[illegible]
はしき事を[illegible]をわたし、[illegible]へ[illegible]
なふべしとて、いそがはしく立しきもの
な[illegible]とをきれ、女をつれて家にかへ
ぬ。嘉六が心[illegible]を[illegible]
[illegible]西山[illegible]れど、
者[illegible]の人見をはや[illegible]
[illegible]、既に[illegible]たる所[illegible]、一
[illegible]無[illegible]尺八の[illegible]、[illegible]しを
吹すまして[illegible]にあゆみ来る。その後に
つきて[illegible]に[illegible]つけたる捕手の人
數、[illegible]見しつつ[illegible]
ひけん、前後左右をとりかこみ、一言の
[illegible]、まにくく十手を打ふりて、[illegible]
[illegible]、[illegible]無[illegible]尺八を
見て[illegible]、[illegible]所に、[illegible]
[illegible]背後の[illegible]
[illegible]、[illegible]



なごとも言は許すて、いとをかしげなる男、手代し、上に物をすりつけて、[illegible]しくいな
一頭の[illegible]をとりてをとり出、捕手の人數ひけるは、[illegible]
をのつて打に打たよしけるにぞ、[illegible]の[illegible]之[illegible]
[illegible]事あたはず、[illegible]になりて[illegible]せおんあやしき[illegible]の[illegible]
[illegible]時にかの男[illegible]無[illegible]打上り、[illegible]

[illegible]

聞ものかな。某は一所不住の修行者にて、もとより卑賤の者なり。かならずしも人たがへし給ふなといふ。かの者かさねていはく、世をしのぶおん身なれば、容易に實をおかし給はぬも理なり。先やつがれが身のうへを前に告きこえ奉らん。そもやつがれは、おん家士名古屋山三郎が僕鹿藏と申す者の弟猿二郎と申す者にて候。もとは兄とともに山三郎につかへはべりしが、やつがれはゆゑありて仕へを辭し、古郷河内の國にかへりてくらせしうち、なごや三郎左衛門は不破伴左衛門が爲に闇打にあひ、山三郎は平群の館の騒動につきて、やつがれが住家におち來り、一つには君のおんゆくへをたづねて安否をとひ奉り、二つには伴左衛門をたづね出して父の仇をむくはんと、我々に命じて所々方々をたづねしめ、このごろは山三郎鹿藏を具して西國に旅立はべりぬ。やつがれは舊の五郎兵衛と名を更、辻談義にことよせて、京大坂は申すにおよばず、所々人立おほき處にいたりて、專尋ねはべりぬ。しかるに唯今君にめぐりあひ奉るは、我々主從が一念とゞきし所なり。世にあるおん時ならば、某等がごとき賤き身はおん姿を拜み奉ることだもあたふまじきに、面前拜謁つかまつる勿體なさよといひて、實心面にあらはれければ、虛無僧打うなづき、さる誠心を聞うへは何をかつゝむべき。汝が推量にたがはず我は桂之助也。汝が面は見しらずといへども、山三郎がしもべに、鹿藏猿二郎とて兩人ありとは、かねてより聞およびぬとのたまひければ、猿二郎こは冥加なるおん詞、ありがたきまでにおぼえはんべり。不破道犬が惡意、奥方若君のおん身のうへにつきては、さま〴〵申あぐべき事あれども途中にてはきこえがたし。かの捕手の奴原、人數をましてふたゝびこゝにきたらんは必定なれば、とく〳〵おん身をかくし給ふべしもしかの奴原來り候はゞ、しか〴〵はからひ候べしとて、耳につけてさゝめきぬ。さてはるかむかひの方に家あり。あかり障子に一子相傳名方赤膏藥と、筆ぶとにかきつけたるを門口にたて、外のかたにあまたの藥名をしるしたる招牌をかけならべ、もろ〳〵の奇病のさま解體の圖などをかき、これらをもかゝげいだしたるは、外療の藥をひさぐ家なりけり。猿二郎指さして、かしこはやつがれが旅宿にて候。幸あるじは京上りして家にをらず、只聾の老僕あるのみ。たれはゞかる者も候はずとて、桂之助をいざなひてかの家にいたり、裏に入りてあかり障子をもとのごとく引たて、聲をなさずして居たりけり。此時已に日はくれ果て、夕月夜の光りあきらかなりけるが、果して捕手の者ども人數をまし來りて、此家をとりかこみ、聲たかやかによばはりいひける

は、さきほど此家にかくれたる虚無僧は、佐々木桂之助國知にうたがひなし。いかに國知なんぢ官領職濱名殿の内意により、勘當うけたる事を遺恨に思ひ、ひそかに野伏浪人どもをかたらひ、濱名どのに敵せんとはかるよし、注進の者ありてきこしめされ、からめとりてきたるべしと嚴命をかうぶりて、我儕はせむかひつるなり。のがれぬ所ぞ、とくこゝに出きたりていましめをうけよ。さきほど手むかひせし奴めも、なんぢに一味の者ならん。かの奴めもとく〳〵こゝへいだせ、首ひきぬきて思ひしらせんずるぞと、口には猛くのゝしれども、猿二郎がさきほどの手なみにおそれて、内にすゝみいらんずる者は獨もなく、只さわがしきのみなりけり。時におかり障子に人影うつり、桂之助の聲として、いかになんぢらしづまりて我いふ事を聞。我耻をしのびて今日までいきながらへ、一所不住にさまよひつるが、とても武運に盡たる身なれば、此所におきていさぎよく、腹かきやぶりて相果るぞかし。いざ首をとりて高名にせよ者どもとよばはりけるが、やがて障子のすきまより、鮮血こゞりてながれいでぬ。捕手の者われさきに首とりて賞銀にあづからんと、遲速をあらそひ、障子を打たふして内を見れば、こはいかに桂之助にはあらずして、正面の胡床のうへに、人の長ほどにつくり、五臟六腑をいろどりたる、神農の胴人形、右に茶匙を持、左りに藥草をとりたるをすゑおきぬ。障子のひまより血わたと見えしは、赤齋藥にぞありける。かの者どももこれを見て、只あきれて酒に醉たるこゝちしけるが、さては欺かれたるか口をしさよ。さるにても今の聲は桂之助にまぎれなし。かしこにかくれたるにうたがひなしとて、奥の一間を目がけて走りいらんとひしめき、誤りて傍にありける擂鉢をふみたふしけるが、たちまち數多の蛇のたり出て、かれらが手脚にまとひつきけるにぞ、打驚きてさわぎたち、又誤りて齋藥鍋をふみかへしければ、齋藥足のうらにねばりつきてはなれず。蛇の手かせ、齋藥の足かせ、これをのぞかんとすれば、かれにまつはれ、ほど〳〵進退を失ひて、只騷動するのみなりけり。時分よしと猿二郎たすきひきゆひ、もすそかゝげて身がるに打扮、明晃々たる大太刀を拔もちて、一間のうちよりをどり出、めつた斬にきりたつれば、みな〳〵大に狼狽し、一人として敵する者はなかりけり。かの大太刀は、もと居合の及引太刀なれば、きりつけられたる痕、蚯蚓のごとくはれあがるのみにて、一命に恙はなしといへども、しば〳〵魂を奪れて、こゝろます〳〵臆したる者どもなれば、黐に黏たる蠅のごとく、たふれしまゝに起も得ず、手をすり足をすりてくち〴〵に、ゆるし給へ

と打わびつゝ、からうじて起上りけるが、疵持足の膏藥に、引もどさるゝこゝちして、こけつまろびつ逃ゆきけり。猿二郎は太刀をすてゝ、打笑ひ、さても臆病なる奴原かな。因果娘の蛇どもが、思ひもかけず用立しは、禍の三年めともいひつべしと、ひとりごちて、蛇どもをもとの笊籬にうちいれ、一間のうちより桂之助をともなひ出、かれらを殺し候ては、かへりて後日のさまたげに候へば、わざと刄引太刀をもちひておどし候。つら〳〵思ひはかるに、不破道犬君を失ひ奉らんとはかりて、官領の命といつはり、君のおん心におぼえなき事を申したてゝ、捕手をむけたるに疑なし。大切のおん身なれば、かならずしもかろ〳〵しく出あるき給ふべからず。かれら一度見おぼえたる此家に忍ばせ申すは危ければ、今宵のうち別所に御座をうつし奉らん。いざさせ給へと催して、つひに兩人いでゆきけり

○徒然草に、めなもみといふ草、蛇にさゝれたるによきよしを記すといへども、いまだこゝろみず。蛇にかまれたるには、串柿の肉を粘飯のごとくねりてつくるにしくものなし。度々こゝろみつるに、一度もしるしなき事なし。よくきざみ煎じてのみもすべし、蛇毒を解す也。本文蛇の話につきて、偶思ひいだせるまゝ、筆のついでに記しおきつ。

十四　仇家の恩人

爰に又渇淺又平といふは、戸佐正見といふ名畫人の弟子にて、その身も書道に秀たりといへども、ゆゑありて師の勘當をうけ、そののち正見が小栗と筆のあらそひによりて、勅勘の身となりぬ。又平は漸々に零落しければ、妹藤波白拍子となりて、兄をみつぎけるが、これも不慮に殺害され、ます〳〵困窮しければ、せんすべなく夫婦もろとも、もとのすみかをさりて、近江の國にうつり、大津走井のほとりに住、繪をかきて往來の旅人にこれをひさぐ。妹が菩提の爲めにもと思ふこゝろより、多分佛像を畫きぬ。十三佛地藏菩薩のたぐひなり。そのころは民百姓の家に木佛はまれにて、おほくは此又平が佛繪をもとめて、持佛の本尊にしけるとかや。佛繪のみにあらず、浮世の人物さま〴〵のざれ繪をもかきけるゆゑ、浮世又平大津又平ともいへり。かれ又生つきて吃謇にてありければ、吃謇の又平ともいへり。その繪を大津繪とも追分繪ともいひて、時の人童などのめづる事おほかりしとぞ。又平が妻の名を小枝といひ、藤波が次の妹阿龍も、今は兄又平に養れ、こゝにありてひとつに住ぬ。藤波は前つ年佐々良三八郎が爲に罪なく

して殺されたれば、又平何とぞ三八郎を一太刀恨みて、妹が修羅の宿恨をはらしつかはさんと、日來こゝろかくるといへども、三八郎出奔ののち、弗にゆくへしれざれば、むなしく月日をおくりぬ。扨ある年の春藤波が祥月命日にあたれる日、妻小枝妹阿龍等がすゝめにより、縣神子をやとひ、藤波が口をよせて、冥途のおとづれをきゝぬ。さて降巫上坐に居なほりて、目うへの人にや目下にや、生口か死口かとたづぬれば、小枝すゝみいで、目下の者にて死口なりとこたへつゝ、樒の葉にて水むけすれば、巫はさゝやかなる弓をとりいだし、弦を打ならして、且神保をぞとなへける

夫つゝしみ敬てまをし奉る。上は梵天帝釋四大天王、下は閻魔法王、五道冥官、天の神、地の神、家の内には井の神、竈の神、伊勢の國には、天照皇太神宮、外宮には四十末社、内宮には八十末社、雨の宮風の宮、月讀日讀の御神、當國の靈社には、坂本山王大權現、膽吹神社、多賀明神、竹生島辨財天、筑摩明神、田村の社、日本六十餘州、すべての神の政所、出雲の國の大社、神の數は九萬八千七社の御神、佛の數は一萬三千四箇の靈場、冥道をおどろかし此に降し奉る。おそれありや、此時によろづのことを殘りなく、をしへてたべや梓の神、うからやからの諸精靈、弓と箭のつがひの親、一郎どのより三郎どの、人もかはれ水もかはれ、かはらぬものは五尺の弓、一打うてば寺々の、佛壇にひゞくめり。

梓の弓にひかれ／＼て、藤波がなきたまこゝまでまうで來つるぞや。なつかしやよく水手向て給はりしぞ。主君とは申しながら、おそれおほくも心には、枕ぞひとも思ひしから、烏帽子寶を産はべりて、居の鏡とかしづかれ、おん身等にも安堵させ、たのしきくらしをさせ申さんと、思ひし事も左り繩、ゆひがひもなき妾が身のうへ、露ばかりも罪なくて、邪見の刄に身をほふられ、つきぬ恨の惡念が、此身を焦す炎となり、はれぬ思ひの冥道に、今に迷うて居候と、いとも哀にいひければ、小枝泣聲にて、うかまぬもことわりぞ、冥途の苦患さぞかしと、思ひはかればはかるほど、胸ふさがり、心も消る思ひぞかしといひて打なげけば、阿龍はうしろに打伏て、涙にむせぶばかり也。巫かさねていひけるは、地獄のうちのおそろしさを聞てたべ。妾がごとく刄にかかりて死したる者は、刀山地獄とて、垂氷をさかしまに植たるごとき劍の山を、牛頭馬頭の鬼どもが、くろがねの笞をあげて追たつるに、罪人はせんすべなく、なきさけびつゝはせのぼり、はせくだりて苦しむ也。妾も日々にその苦をうくるぞ

かし。あるは火の車にのせられて、黒闇道をゆく時もあり、あるは血の池にひたりて、火の雨に身を焦す時もあり。紅蓮大紅蓮の氷にとぢられ、叫喚大叫喚の炎にやかれ、品かはりたる地獄のさま、なか〳〵詞にのべがたし。さる責の苦しきうちにも、唯忘れがたきは殿のおん事、なつかしく思ひはべるは、おん身ら御夫婦妹ぞかしといひければ、又平は目をすりあかめ、さけば聞ほど不便なり。まづしき我を見つぐとて、千辛萬苦のそのうちに、たま〳〵少しの福を得て、思ひあうたる殿にめでられ、その身の出世と喜ぶ間もなく、不慮の枉死をなしたれば、心の殘るも理也。せめて敵をたづねいだし、仇をむくいて修羅の宿恨をはらさすべければ、とく〳〵佛果を得て惡趣をまぬかれよとて、念珠すりならし、南無阿彌陀佛あみだ佛と、となふる聲も吃蹇ば、いとゞ哀れぞまさりける。巫

又いひけるは、そのおほせこそ我身には、讀經にまさる功徳なれ。此うへのお情には、仇をむくいてたび給へ。情なきはこれまで手向たまはりし飯菜も、みさき烏にさまたげられ、妾がもとにとどかねば、

飢にたへざる餓鬼の飯、炎となりて消失ぬ。ねがはくはみさき烏をよけてたべ、くれ〳〵たのみはべるぞかし。あな名殘をし語りたきこといひたきこと、數なくありて盡ねども、黄泉の使しげければ、



藤波ならびにうからやからの亡魂、梓の弓にひかれ来る。

はやいとま申すぞと、いひをはりて巫は目をひらき珠を撫て居たりけり。又平米錢をとりて與へ、その勞を謝しければ、巫はこれをうけをさめ、わかれを告てまかりいでぬ。扨小枝は、今宵の佛に供せんと高木へ餅買に立出れば、阿龍はなみだをおしぬぐひ、このひまに香を燎て、手向ばやと奥にいり、又平獨こゝにのこり、手をこまぬきてぞ居たりける。頃しも彌生のはじめにて、堅田におつる雁金も、こしぢに歸る時なるに、比良の高嶺の雪おろし、餘寒をまして肌さむく、瀬田にかたぶく日のかげも、西方淨土と思ふから、辛崎の松風も、常樂我淨ときこゆめり。粟津の嵐を世の中の、生者必滅と觀ずれば、矢早瀬の船も人の身の、會者定離とぞ思はるゝ。石山の月三井の鐘、生死長夜の夢の世を、悟れる人か外の方に、鉦の音念佛の聲、いとも殊勝にきこえけり。又平これを聞つけて、庭におり立折しも、軒端に通ふ松の風柴の折戸をひらきければ、外の方を見やるに、笈をせおひ錫杖をつきて、廻國の修行者とおぼしきが、まどほにかこふ竹垣の杯のうちにたゝずみぬ。又平ちかづきていはく、けふしも同胞の亡霊をまつるべき志のあるに、修行者のおはせしこそ幸なれ。かゝる荒屋にははべれども、今宵は我家に一宿し、終夜回向して給はれかし。味なくはおぼされんが、所がらの志賀大根



蜩大豆、麁抹の齋を供養せん、おながちにとゞめ申すといひければ、修行者打聞て、そはかたじけなし。いまだ時も八ツに過ずとおぼゆれば、石部の報謝宿までもと思ひつるが、朝の雲夕の露一所不住の身のうへなれば、いそぐべき旅にもあらず。殊に亡人の志とあればもだしがたし。しからば御報謝にあづからんといふにぞ、又平いざ〳〵とてむかひいれ、苔井の水に足そゝがせ、八幡圓座をしきまうけて、何くれともてなせば、修行者喜び、憂世をはなれし閑居の體、おくゆかしく候といへば、又平は圍爐裏に不灰木うちたきつゝ、尾羽打からせし浪人の侘住居、お宿申すもはづかしさよといひて、信樂燒の天目に、茶の香もうすき手煎じを、心ばかりのもてなしにて、四方山の話さま〴〵にかはりて、立山の地獄ばなし、熊野詣の幽靈のさかしまにあゆむことなど、ものがたるを聞つゝ、時をうつしけるが、やゝありて又平佛壇にみあかしたて、麁抹の齋を調ずるあひだ、こゝにて御回向くだされかしといひておくにいりぬ。修行者は佛壇にむかひて鉦打ならし、南無幽靈頓證佛果菩提南無あみだ佛〳〵と、一心不亂にとなへけるが、偶佛壇のうちを見れば、白木の位牌に刄譽妙劍信女長祿二年戊寅三月五日とししるしあり。修行者これを見て思ひけるは、かの法名のうちに刄劍の二字あるを見れば、これも刄にかゝりて亡し女ならめ。それがし六年以前藤波を殺せしも、同年同月同日なり。廣き世界といひながらよく似たることもあるものかな。いかなれば長祿二年の今月今日は、女の刄にかゝる日ぞ。此女子もいかなる因果にて、劍難に死せしぞと、藤波が事思ひ合せて涙をおとしつゝ、しばらく回向して居たりけるに、又平が妹阿龍朽木塗盃に日野椀すゑて持いで、麁抹の齋をめし給へといひつゝ、修行者の顔をつら〳〵打まもり、そなたは佐々良三八郎にあらずやといひて、おぼえず手に持たる物を、地上にはたと取おとす。修行者いぶかり、さいふそなたは何人ぞ、見忘れたりといへば、阿龍泣聲にて、見忘れしとはよくもいはるゝ事よ。妾はそなたに殺されたる、藤波が妹龍といふものなり。その時妾は十三歳京都佐々木の旅館、お寢間に通ふ廊架にて、手燭の光りに顔見合せ、たしかに見とゞけたる三八郎、刀の鋩打に手燭をはしと打おとして、逃去たるはおぼえあらん。折しも風雨はげしくて、庭木の花も風前の、燈火ときえたる姉の敵、覺悟せよとよばはれば、さきほどより屏風のかげに、樣子をうかゞふ浮世又平、刀を拔てをどり出、ものをもいはず斬つくれば、修行者手ばやく、あたりにありあふ机をとりて丁とうくれば、皿にときたる青黄赤白の繪の具、四方にさつと飛散

て、秋の花野に異ならず。又きりつくるをうけとめて、いかにも某が實の姓名は佐々良三八郎、今の名は六字南無右衛門と申す。藤波といふ女を殺せし事おぼえあり。さりながら委細のゆゑをかたるうち、しばらく待給はれといふを、又平耳にも聞入ず、頭をふりつゝ勢こみてぞきりつけぬ。なむ右衛門錫杖をとりて、うけつながしつ立まはり、仔細をいはぬば、せき給ふもことわりなり。しばし〳〵とゞめけり。又平は吃審なるうへに、心せけば、ものいふことあたはず、唯口に指さして氣をいらつを、傍より阿龍見かねて、丹をときたる皿と筆をとりて與ふれば、又平これをとり、机の上にものかくを、なむ右衛門讀くだせば、なんぢ六年以前、長谷部雲六とやらんいふ者といひ合せ、佐々木の家寶百蟹の繪卷物を奪取、しかのみならず、藤波を害して逃去たる大罪人、いかでかのがるゝ道あらん。それがしは則ち是れ藤波が兄、湯淺又平といふ者なり。汝を打て妹が冥途の宿根をはらしやらんと、日來心がけたれども、弟に行方しれざれば、むなしく月日をおくりつるに、今月今日妹が祥月命日にめぐりあひしは、因果のめぐる車の輪、妹がみちびく所なるべし。猶豫せよとは卑怯なり、覿面の惡報妹の敵、のがれぬ所ぞ、はやく勝負を決せよと書をはり。ふたゝび刀をとりなほして、只一打ときりつくれば、なむ右衛門しかおぼすはうべなれども、それがしがものがたる仔細を一通りきゝてよとて、なほうけつながしつあしらひけり。かゝる折しも又平が妻小枝、餅をもとめて立かへり、何事やらんとしばらく門にたゝずみて、内の樣子をうかがひけるが、又平どのはやまり給ふなと、いそがはしく聲かけて、走り入、夫の手にすがりておしとゞめ、かねておん身にものがたり、いつぞはめぐりあひて大恩をむくはんと、日來心に忘れざる恩人は、則ち此おんかたにて、おはすなりといふにぞ、又平大におどろき、扨はしかとさあるかとて、手をとゞめてぞ坐し居たる。なむ右衛門いぶかしく、小枝がかほをつら〳〵見れば、いかさま見おぼえある女なり。小枝はなむ右衛門が前に恭しく手をつき、さても思ひがけずふたゝびおん目にかゝるうしれさよ。妾ことは六年以前、思へばしかも今月今夜、京北山の杉坂にて、首縊て死なんとせしを、金二十兩たまはり、危き一命をすくひくだされしその女にて、則ちこれなる又平が妻小枝と申すものにて候。その時の大恩、骨に鏤心に銘じて、片時もわすれず、ひとへに命の父母と存、何とぞ再びおん目にかゝり、露ばかりも洪恩を報じはべらんと思へども、その時は只おん顔を見おぼえたるのみにて、姓名をあかし給はざれば、いかなるおん方とも

しらず、たづね申すべきよすがもなければ、むなしくこれまで打過候といへば、なむ右衛門さてはその時の婦人にて候か。思ひかけざる再會に、恙なき體を見て、喜びにたへずといふ。又平は此時やう〳〵心おちつきぬれば、ものいふ事も常のごとく、なむ右衛門にむかひ、詞をあらためていひけるは、某かねて妻に金子をたまはり、危き一命をすくひくだされし恩人を慕つるに、おん身にてあらんとは夢にもおもはざりき。某そのかみ都北山に住しころ、殊外困窮し、過去し母親を養育の爲せんすべなく、先祖より傳來の、巨勢の金岡が畫たる、陸奥武隈の松の繪を質入せしが、妹藤波そゝ事を聞て氣の毒に思ひ、うけもどせとて、金二十兩合力しくれけるゆゑ、その夜妻に命じて繪をうけもどしにつかはしける途中にて、盗人に金子を奪とられ、妹の手前面目なしとて、杉坂にて縊死んとせしを、おん身詞を盡し理をのべて、二十兩の金をめぐみたまはり、一命を救ひくだされ、殊に後日に恩をきまじとて、姓名を告給はず、此方の名をも聞給はざるよし、その夜妻たゞちにかの繪をうけもどし、家に歸りて、つぶさにものがたり候ゆゑ、世にはさばかり慈悲深き人もあるものかと感歎し、今にいたるまで、夫婦折ふしその事をかたりいだして、感じ思ふ事たへはべらず。おん身さばかり慈悲深き



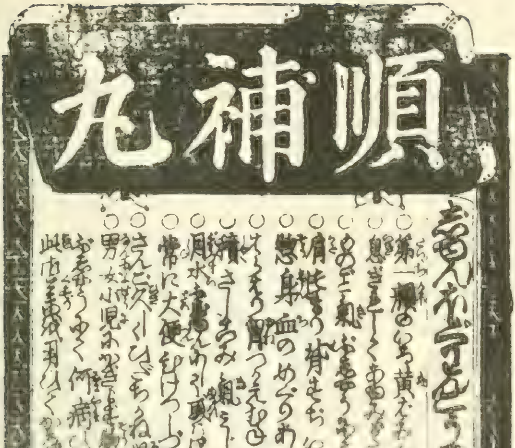
人にてありながら、何とて妹藤波を殺し、百蠶の寶物を奪とるたぐひの、非道をおこなひ給ひしや。こゝに於て思へば、おん身の心底善か惡か、分明ならず。妹が仇を報んとすれば、恩をしらざる者となり、恩を思ひて打ざれば、妹が冥途の恨はれず。かの恩と此仇といづれかおもくいづれかかろき、とくと思案つかまつり、恩を以て仇にかゆるか、仇を以て恩にむくふか、心を決し候べしと、吃聲つゝいひて、刀を鞘にをさむれば、なむ右衛門いひけるは、しかおぼすは理なり。某藤波どのを殺せしは、全く非義非道にあらず。くはしき物語を聞てたべよ。若殿桂之助どの在京の刻、藤波どのゝ艶色に迷ひ、不破伴左衛門がたぐひの佞臣等にすゝめられて、放佚無慚の不行跡漸々につのり、名古屋山三郎と某、しば〳〵諫をたてまつるといへども、露ばかりももちひ給はず。若室町御所の御耳にいれば、



おん家にもかゝはる事なれば、せんすべなく、越の范蠡西施を呉湖にはなちたる例にならひ、科なきを殺すは不便とは思ひしかど、お家にはかへがたしと思ひなほして、藤波どのを殺し、すでにその場にて腹きらんと、刀に手はかけたれども、執權不破道犬が心底、いぶかしき處あれば、權一命をたもち、かれが惡意を見あらはせしうへにて、藤波どのゝ緣者をたづね、恨の刃にかゝりて相果んと、妻

子を具して、その夜館を立退けるが、杉坂にて、ふと此婦人の首縊んとせられしを見つけ、いづくいかなる人かはしらざれども、せめて此婦人をすくひ、藤波どの〻冥福の便ともなしてんと、あながちに死をと〻めぬ。藤波どの〻兄なるおん身の妻女とは、いかでか思ひ候べき、誠に不思議の出會なりとて、そののち丹波の國にうつり住、六字南無右衛門と改名したるいはれ、百蟹の巻物を奪たるは、長谷部雲六一人の所爲なる事、藤波の怨靈兄弟の子どもにつき、姉楓は蛇に見こまれ、弟栗太郎は盲目となり、文彌と改名したる事、文彌忠孝全くして、若君の身がはりとなりし事、楓孝心深く、父の汚名をすゝがんと、見せ物芝居に身を賣て、金をとゝのへ、かの巻物を買とりたる事、月若に妻儀菜をつけて、河内の國某の寺にしのばせおき、おのれは廻國の修行者に身を扮して、かの巻物をたづさへ、桂之助いてふの前二方のゆくへをたづねに出て、けふしも不思議にこゝにやどり、さき程位牌の法名を見て、似たる事と思ひしまで、こまやかに語りけるにぞ、又平夫婦お龍も、はじめて其實を知り、たぐひまれなる忠臣やと、轉感嘆にたへざりけり。なむ右衛門かさねていはく、おん身等に出會し、恨の刄にか〻りて死し、冥途にいたりて藤波どのにいひわけせんことは、かねて望む所なれども、主君御夫婦御親子の先途を見とどけ、再世に出しまゐらすまでは、死にゝき命なれば、しばしの間某が命を、某にあづけおきたまはれかし。かの宿願をはたせしうへは、首さしのべておん身等に打るべし。常言にも大丈夫の一言は、駟馬も走らずといへり。若し此の詞に露ばかりもいつはりあらば、立地に天地神明の御罰をかうぶるべし。恩は恩仇は仇なり。少しの恩を以て覺悟の命をたすかるべき所存なしと、詞すゞしくいひければ、又平返答の詞はなく、つと立て刀をすらりと拔はなち、なむ右衛門がたづさへたる編笠をずばと斬て、佛壇に手向、いかに藤波汝が敵佐々良三八郎が首を、かくのごとくなしたれば、速に恨をはらして佛果を得よ。南無阿彌陀佛あみだ佛ととなへ、扨南無右衛門にかむひ、晉の豫讓が例にならひ、今已に妹が仇をむくいたれば、もはや恨は少しもなし。此うへは妻小枝が命を救給はりし、大恩を報ずるのみなり。その恩を報ずべき仕方はかくと、へだての紙門を押ひらけば、一間のうちに聲ありて、某さきほどよりこゝにありて、委細のゆゑを聞つるぞといひつゝ、立出る人は、乃是別人にあらず、佐々木桂之助國知なり。なむ右衛門縁のはしまで退きて、平伏すれば、桂之助いひけるは、我佞者の爲にすゝめられて行を亂し、汝等が諫言をもちひず、今

思へば藤波が非業の死は、畢竟我手をくだして殺せしも同然なり。我眼ありながら、誠の忠臣を見ることあたはず、百蟹の巻物を奪ひしも、汝が仕業と思ひしは、大なる誤りなり。今汝がものがたりをきけば、楓が孝行により、巻物をもとめ出し、文彌が忠義によりて、月若も恙なきとや、たぐひまれなる者どもが、不便なる身の果と、思へば悲歎にせまるぞかし。我不行跡によりて、父の勘氣をかうぶり、かく漂泊の身となりて、今後悔すといへども、更にかひなし。いきながらへて恥をのこさんより、自殺せめと思ひしことは、たび／＼なれども、道犬が謀計館の騒動をほのかにきけば、父うへのおん身のうへ氣づかはしく、時節をまち、御勘氣のゆるしをうけてたちかへり、家ををさめんと思ふから、をちこちをしのびて、むなしく月日をおくりつるが、此家のあるじ又平、藤波ゆゑに零落せしを憐み、深くいたはりてかくまひおきぬ。などや山三郎不破伴左衛門がために父を打れたる事も、かれが僕猿二郎といふ者にあひて、くはしくきゝぬといひければ、なむ右衛門頭をさげ、おん氣づかひあそばされな。某命あらんかぎりは道犬が悪意を糺し、再世にいだしまゐらすべしと申すにぞ、桂之助すゑたのもしくぞ思ひける。かゝる折しも空中より、一羽の雁片田に落る雁ならで縁さきに撲地おち、なむ右衛門が膝に上り、再飛んと羽たゝきすれども、飛ことあたはず。よく／＼見れば、足に財布をゆひつけたるが、足かしとなりて飛ことならざるなり。なむ右衛門いぶかりつゝ財布をときて見れば、うちにおよそ百両ばかりの小判金あり。扨は此金のおもさにたへずしておちたるか、朱賓が雁は臆に金銭を貫ぬき、蘇武か雁は脚に帛書を繋たる、ためしはあれども、かかる大金を雁の足にゆひつけたるは、何のゆゑぞと、一同にいぶかり思ひぬ。此金の出所をしらんと要せば、旦下回を讀得て知べし。


順補丸

昔話稲妻表紙巻之五上冊

十五　孤雁の禍福

當時、なむ右衛門又平等一同に、かの金の出所いかゞと、いぶかり思ひける所に、一人の男、汗もしとゝに息もつきあへず、飛がごとくにはせ來り、案内もこはず内にいり、たしかに爰におちたるがといひつゝ、あたりを見まはし、なむ右衛門が手に持たる財布を見つけ、そは我失うたる金なり、此方へかへすべしといひつゝ、財布に手をかくるを、なむ右衛門かへり見て、汝は長谷部雲六ならずやといへば、此男仰天しよく／＼見れば、佐々良三八郎にて、かしこに若殿桂之助もおはしければ、ますます驚、財布もとらで迯いだすを、なむ右衛門猿臂を伸、えりくびつかみてひきもどし、膝の下におししきていひけるは、汝六年以前しかも今月今夜、百蟹の巻物を盗、迯去たる事おぼえあるべし。我その夜若殿御放埓の根をたたんと、藤波を殺し、思ふむねありて、一旦館をたちのきしが、同夜の事なれば、某にもおん疑かゝり、汝といひ合せてかの巻物を盗しならんと、共に盗賊の汚名をかうぶりぬ。そののちかの巻物を賣んといふ者あるゆゑ、これをもとめて汚名をすゝがばやと思ひけれども、價百兩といふ大金なれば力およばず。しかるに娘楓此事を聞て深く悲み、みづから身を見せ物芝居に賣て、百兩の金をとゝのへ、かの巻物を買もどし、諸人に面をさらし、丹波の國の蛇娘と、世に耻をあらはす變身のうへとなりぬ。これみな汝がなせし業にあらずや。唯今はからず出會せしは天の與へ、我宿根をはらすべき時のいたれるなり。たとへ生皮を剝臙子にきざむとも、飽べからずといひつゝ、簀子の上に鼻の尖をすりつけ／＼して、さいなみければ、雲六は一言だに返答すべき詞なく、只ゆるし給へ／＼とうちわびけり。時に又平が妻小枝さきほどより、雲六が顏をつれ／＼とまもりつめて居つるが、大におどろき、先年杉坂にて、妾が懐中の金二十兩を奪取、迯去たる盗人は、すなはち此者にて、たしかに見おぼえありといへば、又平きゝて、扨はしかありけるか。悪人と仇人と、しかも同月同日に、はからず出會せしは、正是天のみちびき給ふ處にして、善悪つひに顯ある事を示し給ふ所ならん。いかに雲六とやらんよくきけとて、小枝金をうばはれいひわけなく、首縊て死んとせしを、三八郎が情にて、金子を合力され、危き

一命をたすかりたる事の始終を、つぶさにかたりければ、雲六頭をたれてきゝ居たるが、やがて一刀を拔て腹にぐさとつきたて、いと苦しげに息をつきていひけるは、あなおそろしや勿體なや、今やうやう天の賞罰あきらかなる事をしり、積惡の報の覿面にめぐり來ることを曉しぬ。某が懺悔物語を、一同おん聞くだされかし。そのかみ某在京のうち、五條坂の曲中に通ひて、過分の金銀をつひやし、身分たちがたきにより、偶惡念おこりて、百箇の卷物を盜取、おん館を出奔して、北山をすぎ、杉坂にいたりけるに、折しも風雨つよかりければ、しばし木蔭に晴間を待居たるに、それなる婦人來かゝり給ひ、懷中おもげに見えけるゆゑ、又惡念おこり、婦人を地上に蹴倒して、二十兩の金をうばひ、仕合よしと欣びて、その所を迯去り、そのゝちかの卷物を、金五十兩に賣けるが、一所不住に迷ありく間に、かの金を殘なくつかひ盡し、つひに零落して、かゝる身となりぬ。某は金を奪て死にいたらしめんとし、三八郎どのは金を與へて、死を救給ひつるよし、今思へば、善惡のたがひ誠に壤霄をへだつるがごとし、豈賞罰の報なからんや。扨某ちかごろ當國にいたりて、草津の驛に住家をもとめ、幸ひ石山寺の觀音開帳ありてにぎはしければ、かの門前に出、鼓を打くせ舞々の謠をうたひて物を乞けるに、前の日思ひかけず、幼年の時わかれたる、八重垣といふ妹にあひ、住家にともなひかへりて、何くれと過去し事どもを語りけるに、妹某がかく浪人したるいはれをとひけるゆゑ、又惡念おこり、いつはりていひけるは、我前の年在京の刻、偶五條坂に通ひ、過分の金銀をつひやし、そのおひめをつくのはん爲、若殿よりあづかりたる、繪卷物を質入しつるが、つひにその事あらはれていとまたまはり、かく浪々の身となりぬ、格別の科にもあらねば、今にもかの卷物をうけもどしてさし上れば、歸參のかなふは必定なれども、本金に利金をくはへて、かれこれ百兩ばかりの金なれば、なか／＼ととのひがたく、今先非を悔るといへどもかひなしといひて、そら泣して見せければ、妹これを實とし、しからば妾が身を賣て金をとゝのへ、その卷物をうけもどして、歸參を願給へといふにぞ、某心に計なりしと歡び、うまくいつはりて情なくも、妹を當所の伏柴の里にゐてゆき、百兩に身を賣て、今日しもその身の代をうけとり、天へものぼるこゝちして、かへる路の傍に、一羽の雁首をなげて落居たり。飛けはひはなく見ゆれども、拔足しつゝ拾取て見るに、箭の瘢痕のあとらなし。扨はこしぢにかへる雁金の、行倒かと推量し、何にまれ福のいたり時、晩の寢酒の肴とし、ひさ／＼飢たる

痩腹を肥さんものと、心のうちに歓び、はや榮耀心いでて、提てゆくもわづらはしと、金財布の紐のあまりを、雁の足にゆひつけ、肩の尖にふりかたげて、懐手して歸りしが、何とかしけん、かの雁途中にて蘇生、くゝりつけたる財布とともに、虚空を斥して飛去けるあひだ、翼なき身を悲しみて、あとをしたひて此處まで追來りしが、落べき所もあるべきに、此におちて君を始め奉り、おの／＼方に出會し、某が舊惡のあらはゝるは、正是兄の爲に身を賣ほどの、實ある妹の身の代をむさぼりし、某が非道をにくみ、天罰を與へ給ふに疑なし。今にいたりてやう／＼と思ひあたり候とて、財布をとりあげ、此百兩の金は先年奪し二十兩に利をくはへて、又平どのにかへすあひだ、合力うけし三八郎どのへ此儘返し給ひて、御息女楓どのゝ身をあがなひ返し給はれかし。さもあらば我身の罪の一分を滅じ、いさゝか來世をたすかる便とも相なるべし。いはれを聞ねばよそごとにおもひしが、此度石山寺の門前にて、諸人に見する蛇娘は、楓どのに疑なし。聞とゝけてよ御兩人といひて、掌を合せて拜み、涙を流のごとくながしければ、又平かの財布をとりて、なむ右衛門が前におき、雲六慚邪懺罪して實心にひるがへりしうへは、不便にも存すれば、かれが望のごとく此金にて、息女をあがなひ候へかしといへば、なむ右衛門頭を右左にふりうごかし、いな／＼八重垣とやらん、さばかり實ある者を、うき川竹のながれにしづめ、長く辛苦をうけしめんは、しのびがたき事ならずや。娘楓はみづから覺悟のうへにて、親の爲にはづかしめをうくるなればせんすべなし。此金をかへして八重垣を、とりもどしつかはすべしといひて、うけがはざれば、雲六苦しげに息をつき、いな／＼その金にて御息女の身をあがなひ給はらば、かへりて妹が實心のかひもあるべし。殊更その金おん身の膝のあたりに落たるよし、畢竟天より忠臣孝子を賞じ給ひて、與へ給ふに疑なし。若海川にもおちいりなば、妹が志は水の泡となり候べし、ひとへにおん聞とゝけ給はれかし。若さもあらずは某死しても、こゝろよく眼をふさぎ申すまじとて、涙をながしてねがひけり。桂之助始終を聞、惡にもつよく善にもつよき彼がねがひ、末期の望なればききとゝけつかはすべしと、おもきおほせになむ右衛門、やう／＼これをうけがひけり。雲六はうれしげに打笑、今は此世にのぞみなし、死出の旅路をいそがばや、相公の御前をけがす罪は、おん免し給はれかしとて、腹十文字にかきやぶり、咽吭をかき斬て、うつふしに伏てぞ死したりける。時になむ右衛門、かの鳥をとりあげていはく、此鳥雁に似たりといへど

も、よく／＼見れば漢名蒼鴉といふ鳥なり、よく高飛雁に似て蒼白也。目相見て孕み、吐て子を生といへり。夏子益が奇疾方に、蒼鴉の肉に人血を和して、瘂を治する方ありと、ある名醫に聞たる事あり。吃蓄にも又驗あるまじきにあらず、思ひかけずかゝる奇鳥を得たるも、又一奇事なれば、こゝろみにもちひ給はずやといふにぞ、又平やがてかの鳥の肉をさきとりて火にあぶり、雲六が鮮血をそゝぎて食しけるに、頓に咽すゞやかになり、生れつきたる吃蓄、忽常の人のものいふごとくになりて、これもまた天の與へならめといふこわざまも、いとあきらかなれば、小枝於龍等こは不思議々々といひて歡びあひぬ、誠に奇異の事なりけり。かゝる折しも外の方に、人の足音ひびきければ、又平小枝於龍に目くはしして、桂之助を一間にかくし、雲六が屍を蒲團にくるみて床の下に押入、血しほをぬぐふひまもなく、見せ物芝居の主、楓を伴ひこゝぞ／＼といひつゝ裏にいり、なむ右衛門にむかひていひけるは、おん身今日しも此宿をよぎり給ひしを、僕が見つけて告しゆゑ、楓をあはせ申さんため、旅宿をたづね參しといへば、楓は父にとりすがり、かはりたる此お姿、母うへも恙なくおはすかとて、あとは涙に詞なし。なむ右衛門は折よき幸と歡び、たがひに何くれとかたりあひて後、芝居主にむかひ、ゆゑありて思ひかけず金ととのひつるが、元金百兩を以て、娘をもどしたまはらずやといへば、芝居主すみやかにうけがひ、楓事京大坂は勿論、伊勢尾張のあたりまでゐてゆき、おほくの金を德つきたれば、即座に百兩渡し給はゞ、いかにもいとまをつかはすべしといふにぞ、南無右衛門ます／＼歡び、かの金をとり出して渡しければ、芝居主歡をあらためてとりをさめ、こは思ひよらざる楓が仕合せよとて、金のうけ取、いとまのしるしを證文にかきしるし、印信をすゑて與へ、楓をわたして、又かさねてまみゆべしといひて出去ぬ。時に三井の晩鐘つげわたり、勢田のあたりに夕日のかけぞかたぶきける。

十六　名畫の奇特

扨も其時なむ右衛門、主君桂之助にねがひて娘楓にめみへをさせ、又平夫婦阿龍等にも引合せ、今日のくはしき物語をかたりきかせければ、楓打聞て、因果輪轉の理、善惡つひに報ある事を曉し、嘆息しけり。かくて又平夫婦食事を調じて、なむ右衛門父子に與へ、一間のうちにみちびきてやすませけり。なむ右衛門父子は、たえてひさしき出會なれば、さま／＼の物語に思はず時をうつし、やうやう睡につきけるに、やゝありて楓が

聲として、あなやく\とをめきさけびければ、なむ右衛門驚ねふりを醒して見れば、楓が腹に卷つきたる小蛇、懷より飛出ると見えしが、忽丈一丈ばかりの大蛇と變じ、楓が身をいくへとゐなくまとひぬ。あなかなしや、こはそもいかにすべきとあわてまどひけるに、枕上におきたる篋のうちより、あまたの蟹はひ出て、大蛇にとりつき、螯を以て肉をはさみ、血は泉のごとくながれて、暫時に大蛇を殺しをはんぬ。蟹はたゞちにもとの篋のうちにはひいると見えしは、すなはち夢なりけり。なむ右衛門夢さめて、身うちに汗をながし、楓をゆりうごかしければ、楓もねふりをさまして起上りけるにぞ、衣服をくつろげて腹を見るに、これまで片時もはなれざる妖蛇、いづくへゆきしやらん失てあとだになし。なむ右衛門さては正夢にてありしかと思ひつつ、篋のうちよりかの卷物をとり出してひらき見れば、畫中の蟹の螯に盡く鮮血つきてぞありける。此時已に四更のころなりしが、又平も楓がをめきたる聲を聞つけて起いで來り、なむ右衛門が夢中の事をきゝ、燈火をかゝげてかの卷物を熟覽し、掌を打ていひけるは、奇なるかな妙なるかな、巨勢の金岡は、淸和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕へて、官大納言に至る、曾て御府に藏給ふ金岡が畫ける馬、毎夜萩の戸のほとりに出て、萩の花をくひしと、古今著聞集に見えたり。また仁和寺の御室に金岡が畫馬あり、近田のほとりに出て、稻の苗をくひしといふ。また河内の國金田村牛頭天王の社頭の、金岡が筆の繪馬、ぬけ出しといふたぐひの說は、かねて聞傳ふるといへども、目前かゝる奇特を見る不思議さよ。抑、此百蟹の圖は金岡殊に精神をこめ、螃蟹の繪に妙を得たる、唐代の名畫、韓滉といふ者、玄宗皇帝の勅によりて畫たる、百蟹の圖にならひてかきたるとは聞つるが、見るは今がはじめなり。神彩飛動識に生るが如し、奇特あるもうべなり。某これを見て畫道の奧義をきはめたりといひつゝ歡びて卷物をおしいたゞき、再又いひけるは、これにつきて思ひいだせる物語あり。昔山城國相頁郡（元字綴喜に入）綺田村に、一個の美女あり、曾て佛道を信ず。一時里人あまたの蟹を捉へ煮てくらはんとす。かの女是を見てあはれみ、美食にかへて蟹を盡く池にはなつ。又その父一時野に出て、蛇の蝦を吞を見てあはれみ、若蝦をはなちやらば我娘を汝にあたへんといふ。蛇これをきゝ入たるさまにて蝦を吐て去しむ。その夜衣冠い若人來りて、約のごとく女を與へよといひて一室にいり、忽大蛇と變じて女の身をまとふ。時に前の日たすけられたるあまたの蟹こゝに集り、大蛇の遍身を螯殺して女をすくひ、大蟹は去小蟹はそこ

に死す。よりてその所に蟹および蛇のからをうづめ寺を建て普門山蟹滿寺と號す。或また紙幡寺ともいふよし、元亨釋書巻之廿八に見えたり。息女の事よく此事に似たり。思ふにかれは陰德陽報の理を示し、これは名畫の奇特によりて孝女をすくふ、共に是佛の慈悲衆生濟度の方便也。あれ壁におしたる我拙筆の繪を見給へ、地水火風の四つの緒の、きれてはかなき琵琶法師も、忠孝全き竹杖にて、煩惱の犬を打、畜生道をまぬかれて、天堂に生るゝかたち、子息文彌どのゝ姿繪とも見給へかし。綠青の髮すゝ粉胡の肌無常の風に塗笠も、骨のみ殘る手弱女が、肩にかたげし一枝は、紫雲たなびく藤の花これ妹藤波が成佛の姿なり。積惡の角を折、鬼なす心をひるがへして、畢の衣に鉦打さまは、是乃長谷部雲六が邪念を滅せし姿ならずや。喜怒哀樂にいろどりて、もろ〳〵のかたちをなし、善となり惡となり、正となり邪となり、恩となり仇となるも、三世因果の報と思へば、互の恨もつき弓の、矢猛心をやはらげて、唯彼等が菩提をとむらふにしかじ。某さきほどの夢に藤波姿をあらはし、敵三八郎との親子のいみじき忠孝を感ずれば、今は恨も盡はて〳〵、安養淨土に生れ候といひて、身より光明をはなちて去と見たれば、成佛得脱うたがひなし、といふ折しも、桂之助小枝於龍



藤波成佛得脱す。

と共に、ねふりをさまして一間を立出、我々三人もおなじ夢を見たりといひて、一同によろこびけり。時に楓父の前に手をつき、妾こと姿をかへて藤波どの文彌等の、菩提をとひたく候へば、剃髪をゆるして尼となし給はれかしといふ。なむ右衛門いはく、いな〳〵汝剃髪無用なり。我今より剃髪して、佐渡島坊と名告、我異名を汝にゆづり、若殿を世に出しまゐらせし後は、專修の念佛者となり、かの蟹滿寺ちかごろ破損したるよしきけば、これを修理して亡人々の冥福の種とすべし。なんぢ六字南無右衛門といふ名をつけば、道心せしも同然なり。汝又これより文彌が師とたのみたる澤角撿挍にしたがひ、近ごろ世におこなはるゝ淨瑠璃節を學び、因果の道理を唱歌につくり、糺河原に於てこれをかたり、普く諸人を勸進して、我志願の助力せよといひをはり、髻弗とおしきりて、藤波が位牌に手向けれは、みな〳〵その誠心を感じけり。六字南無右衛門といふ女太夫、淨瑠璃芝居の始祖なりといひつたふるは、此楓が事なりとぞ。なむ右衛門又桂之助にむかひて頭をさげ、これより河内の國におん越ありて、若君に御對面あれかし、奥方のおんゆくへはなほまたたづね候べし。いざ夜のあけぬ間にと〳〵ともよほせば、桂之助いそがはしく身仕度して、又平にむかひ、我時運を得て世に出なば、



楓孝道あつきにより、夢中名畫の奇特を得て、妖蛇の難義をまぬかる、

かならず報ぞすべきぞといひてわかれを
告、猟夫ふかくかたへわけて立出れば、な
む右衛門修行者の妻子の慮に、[illegible]
て相したがふ。又平夫婦阿龍もともに、
志なくおはしませといひつゝ門おくりし、
たがひに涙をそゝぎて別れ、纔に一町ば
かりゆきけるに、昨日やとひし猟師子、
[illegible]
[illegible]
びしくたづね給ふ、佐々木桂之助とやら
ん、いづくへおちゆくぞ。われ昨日又平
が家にやとはれ、家内の様子いぶかしと
思ひしはる、今度にきたりてうかゞふに、
果してあやしき者どもなり、からめとり
て貧録にあづかるぞ、とく〳〵手をつ
[illegible]
ん立のきあれかし。人のしらざる間道を
おん供つかまつらんとて、つひに四人打
つれていそぎゆきぬ。さて雲六が[illegible]
[illegible]
し、あとねんごろにとぶらひけるとぞ。

十七 雪渓の[illegible]

[illegible]
ふ、これらをとりて日々の食にかへ、み
づから薪をこり水をくみ、あけくれ老母
に孝行を盡し、いとまには書籍を友とし
[illegible]
るかにたふとくぞ見えぬ。一日老母山寺
[illegible]
る満地玉をしけるがごとく、通ひなれた
る道すがら、深く雪にかくれたれば、お
[illegible]
にしみて寒ければ、ゆきなやみて杖をと
どめ、しばしたゝずみ居たる折しも、[illegible]
に追出されたる穴熊にや、雪を蹴立て飛
来り、はや〳〵老母に飛かゝらんとした
る處に、一人の若者木蔭より走り出、さ
へだたりて熊の肩さきを一刀きりつけた
れば、熊は怒て狂ひけるが、つひに足を
ふみながして、谷底にさかしまになりて
[illegible]
者にむかひ、年老給ふおん身にて、雪中
の歩行見るにしのびがたし。いづくにも
あれ[illegible]負行まゐらせんとい
ふにぞ老母うれしげに、いづくのおん方
かはしらざれども、今の危難をすくひ給
[illegible]

て。背をおしむけて老母を負、住家の方を問つゝ走行けり。さて嘉門はひとり家にありて、母の歸りのおそきを案じ、殊更假の大雪なれば、途中さぞわびしからんと心ならず、簑笠打着ていほりを出、母の歸路を斥ていそぎけるが、むかうの方より老母、若男におはれ來り、嘉門を見て喜びければ、嘉門もやう〳〵心おちつき、おん迎の爲これ迄參候と云にぞ、老母若者の脊よりおりたち、途中にて荒熊に出會、ほど〳〵一命を失ふべきを、此おん方の情にて危急をまぬかれ、しかのみならず、これまで負給はりしとかたれば、嘉門若者にむかひ、母をいたはり給はる御芳志、謝し盡しがたしと相のぶる。時に若者雪中に身を伏て禮をおこなひ、卒爾ながらおん身は、梅津の嘉門どのにはあらずやといふ。嘉門答て、某かゝる深山に住、鹿猿と臥戸を共にする身なれば、名を知る人もあるまじきに、いかにして我姓名をしり給ふや、いぶかしさよといひければ、若者益〻かしらをさげ、たとへ泥中に尾を曳給ふとも、先生の雷名を誰かしらざる者あらんや。かしこの山寺にてこれなる御老母は、先生の母人なるよしをうけ給はり、しひてこれまで送り來しも、先生にまみえん事をこひねがふがゆゑなり。某は武士の浪人なるが、何とぞ軍略智謀の人傑にしたがひ、兵學の餘緒なりともうかゞひ知り、再家をおこさんものと思ひ立、師とたのむべき人品を聞つくろふに、此山の谷陰に世を避て住、梅津の嘉門といふ人、生得頓智聰明にして、軍學に眼をさらし、石黄採奨が奥義をきはめ、武略衆に秀給ふよし、その才名かくれなく、曾て兼好法師の草紙にならひ、武道徒然草といふ、兵法の奥義を記せし書を、編給ふよしうけたまはりて、わざ〳〵當國にうつり住、いかにもして相まみえ、兵學の御指南にあづかり、かの奥義の書をも拜見し度思ひしが、容易に人にあふ事をゆるし給はざるよし、よき門路もがなと思ひ候に、今日しも思ひかけず相まみえしは、誠是師とたのむべき時節到來、天のみちびき給ふ處なるべし。向後おん家の奴僕ともおぼされて、薪水の業を命せられ、兵術の進退軍伍の勝敗、御指南たのみはべるなりと、低頭謙讓して思ひ入たるけしきにぞ見えぬ。嘉門感歎していはく、いまだ若輩の身を以て、武道の心がけ深き殊勝さよ。いかでか疎意に存べき、何にもあれ、且某が宅におん越あれ。人はいかにいひはやすかはしらざれども、某が得たる業は林に入て薪をこり谷にくだりて水をくむのみ、他の事はさらにしらず。殊更武道つれ〳〵草とやらん書を編たるなどは、あともなき虛言なり。軍師などとはおこがましやといひて笑つゝ、三人打連て谷かげのいほりにかへりぬ。

かくて嘉門家に歸り、老母に衣服をきせかへ濡衣をあぶりかわかし、しひ柴たきてあてなどし、さま〴〵にいたはる體を、かの若者打見て、平日の孝行を思ひやりぬ。嘉門茶を煮て若者にすゝめ、四方山のものがたりして、しばらく時をうつしけるに、折しも外のかたにしはぶきの聲しければ、人跡たえたる此かくれ家に、何者の來つるやといぶかるうちに、案内をこへば、ものゝひまよりうかゞひ見るに、これ一人の武士なり。簑笠打着て、笠の下に覆面したれば、面はさだかならねども、遠國の旅人とおぼしき打扮なり。雲深くふりうづみたる柴の戸を、ほとほとと打たゝき、誰そたのみ申したし。ここあけて給はれと、いふ聲聞て老母立出、何人ぞと思ひしに、おん身は頃日兩度まで來られし侍よな。今日しも嘉門家にをらず、御用の間にはあひ申すまじ。たとへおんたのみのすぢを、嘉門に申しきかせたりとも、此方におもふ旨も候へば、とてもうけがひ申すまじ。いたづらに足をつひやし給ふな、とく〴〵おん歸り候へかし。かさねておん出無益也といひすて、戸を撲地たて、裏に入る。嘉門これを聞何者なればかくあらけなく母人はあしらひ給ふやといぶかり、再又窓のひまより窺見るに、かの武士雪中に坐をしめ、情なきぞ御老母、嘉門どの家におはさずは、此處にて歸宅を待申ん、よろ


梅津嘉門、河内国金剛山に世を避て清貧をまもり、生涯の無事をねがふ。

しくとりなしたのみはべるといひて、歸るけはひは見えざりけり。折しも雪はつよくふり、紛々揚々として恰も柳絮の舞がごとく、鵝毛の飛に似たり。さらぬだに寒氣きびしき谷陰なるに、朔風はげしく吹おろせば、見るく\かの侍の簑の毛に垂氷さがりて、鈴のやうにからく\となり、身はなかば雪中にうづもれて、吹雪は面につぶてを打がごとくなるを、笠にふせぎ眞袖にはらひ、歯をくひしめて寒氣をたへしのぶ爲體、誠に餘儀なく見えて、今にも凍死べき形勢なり。嘉門此體を見て益いぶかり、さても堪忍づよき人かな。覆面にて面はしかと見えざれども、いやしからざる侍の、かゝる嚴寒をいとはぬ體、いかさま何ぞ思ひつめたる事あらんと、舌を卷てぞ居たりける。湯に伊尹を得、周に太公望をもちひたるも、大將たる人、賢を尊び敬志の厚がゆゑなり、總て國家を治るの要、賢



臣にあり、賢臣を得るに禮讓をあつくせざれば出て仕へず。祿を施し金帛を以て招くとも、賢士を尊ぶ志なき人には仕ふる事なしとかや。扨その時嘉門母のそばちかくより、かの雪中の旅人は何者に候やらん、見るも氣の毒の形勢なり。おん心にかなはざる者ならば、理をのべておん歸しなされずや。某出ておひかへし申さんやといへば、いなく\そちはかまふべからず。かの侍そちが留守に

兩度まで來りて、さまざまのたのみ事、我心にかなはねば、うけがふべき樣もなく歸しつるが、又今日も來りてそちにおひたき望なれども、仕官さする心なければ、とかく人にあはさぬにしくべからずと、かねて思ひて他行といつはりかへさんとするに、しからば歸宅を待んとて、あのごとく寒氣に苦しむたはけ者、此方の心も察せず長居するうつけ人、いよいよそちをあはすべきにあらず。かの若者に命じて追歸すにしかじといひて、若者をちかづけ、俄に詞をかへていひけるは、汝さきほど奴僕ともおもへといひつる詞によりて、申しつくる事あり。かの雪中の侍を汝が辯舌を以ておひかへせ、いかにいふとも嘉門は他出せしといひて、是非ともかへせといひつくれば、若者うけ給はり、某御奉公の手柄はじめに、おん手にあまる馬鹿者を、おひかへして見せ申さんといひて、外のかたに立いで、やよ〳〵旅人おん身いつまで待る丶とも、あるじ嘉門の歸宅のほど、何の時とはかられねば、若日もくれなば難儀のうへの難儀ならん。とくかへられよ、いざ〳〵といひつ丶手をとりて、ひきたてんとせしが、顔を見て仰天し、貴君は由理之助勝基公にはあらずや、此おん姿は何ゆゑぞと打驚きつ丶、恭しく禮を行ひ、官領職のおん身を以て、一人の從者をも召具せられず、かろ〳〵しき御容體、いぶかしさよと相のぶる。勝基はこの人を、桂之助國知とは見つれども、一言の答なく、唯拳を握り齒をかみしめて、寒氣にたへざる樣子なり。桂之助こ丶ろづき、某おん館(義政公をさしていふ。)の御氣色を損じ、濱名入道殿の御內意によりて、父の勘氣をうけし身なれば、おん詞をたまはらぬも理なり。か丶る大雪をいとひ給はず、自此家にいたり給ふを察し思ふに、嘉門を軍師に召抱給はん結構と存するなり。某今日しも此山中にいたり、心を盡して嘉門に近づき候も、別意にあらず。曾ておん館嘉門が編たる、武道徒然草といふ書を、御懸望ありといへども、かれふかく秘して他見をゆるさず。若嚴命を以て召上らる丶時は、かの書を燒て、身をかくさんこと必定なりとて、これまでそのおん沙汰もあらざりき。某偶此事を思ひいだし、なにとぞ嘉門に誠心を見せ、かの書を得ておん館にたてまつり、それを微功となして、父の勘氣赦免の御內意を願ひ奉らん爲なりとかたれば、勝基尻目にかけ、その身放佚無慙にして、おん館の御不興をかうぶり、父の勘氣をうけたる者に、かはすべき詞なしとのたまふにぞ、桂之助げに理とその身の科を後悔し、此うへは嘉門親子に、勝基どのと打あけいひて味方につけ、せめての功になすべしと、心のうちに思ひつ丶、打しほれて內に入、おづ〳〵老母の前にひざま

づく。老母見るより、かの馬鹿者はいまだかへらずや。理いうてなどかへさぬぞ、汝は案外なる不調法ものかな。さばかりいひがひなくて、此家に足をとゞめ、嘉門を師とたのみ、兵法の道すぢをわきまへんこと、いかでかかなふべきぞ。およそ奴僕を召仕ふには、そのはじめによく戒ざれば、不奉公するものぞといひて、一つの服紗包をとりて、さん〴〵に打擲すといへども、桂之助露ばかりも怒るいろなく、某が宿願成就するまでは、いかなる憂目にあふとも、此家をいづる心にあらず、お氣にかなはぬ事ありて、たとへ打殺さるゝともせんすべなし。此うへのお情には、かの雪中の侍に、嘉門どのをおん引合せくだされ、事の仔細をおん聞給はれかしと、簀子のうへに額をつけ、涙ながらにねがふ形勢、誠に哀の姿にて、思ひ入てぞ見えたりける。かかる折しも納戸のへだてをさとひらきて立出る骨柄、白糸縅に銀の鋲綴したる腹巻の上に、萌黄錦の陣羽織を着し、青鈍の大口はき、黄金作の丸鞘の太刀をはき、文曲武曲の二星を畫たる、軍扇を把て立出たる為體、志氣堂々威風凜々として、誠に一個の英雄と見えたり。桂之助仰天し、何人ぞと顧に、是乃別人にあらず、梅津嘉門景春なり。こは嘵々敷打扮ぞといぶかりけるに、嘉門門外に出、勝基をいざなひいれて上座にすゑ。桂之助の手をとりてその次にをらしめ、老母もろともはるかにくだり平伏して、恭禮をおこなひ、まづ勝基にむかひていひけるは、某がごとき不肖の身を、かばかり御懇望給はる事、冥加にあまる仕合也。頃日某が他行のあとに、兩度までおん駕を枉られ候よし、母の物語にうけたまはれども、勝基公とは思ひもよりはんべらず。某いさゝか虚名をしられ、これまで諸國の諸侯より、召抱んと使者の來往しげしといへども、その大將の心、いづれも皆高祿さへあたふれば、奉公するとのみ思はれて、軍師をもちゆる禮義をしらず、只權威を以て招くゆゑ、返答もわづらはしく、當代諸侯おほしといへども、主君とたのむ人なしと、世をせまく見くだして居たりしに、驚入たる公のおんふるまひ、官領職のおもきおん身を以て、唯一人の從者をも具せられず、かゝる雪中の寒氣をしのび、露ほども權威のいろなく、某一人をおん招きあらんとて、さばかりおん心をくだき給はる事、無勿體なども申すべからず。此うへはおん招きにしたがひ、麾下に屬するそのしるしに、兵具を帶しておん目見え仕ると、敬ふかく相のべけり。勝基大に喜び給ひ、我蜀の劉備におよばずといへども、三度艸廬をかへり見るは、軍師をもとむる禮なれば、いかでか苦辛をいとふべき。先もつて早速の許容、よろこびに

たへずとのたまへば、老母つゝしみていひけるは、妾は始より勝基公と察し奉れども、いく度もおん心をためし見て、短慮疎忽の大將か、又寛仁大度の大將か、はゝかりながら御心底をうかゞひしうへ、かねては主どりさせざる心なりしが、我子ながら一方の大將にして、不足なき嘉門を、一生深山の埋木、谷の巣守と朽果させんより、母がすゝめて御奉公いたさせんと存つき、度々心にもあらぬ不禮のことを申せしに、よくも御堪忍あそばせしぞ、心のうちにはいかばかりか勿體なく、只感涙をおしかくして、居候ひぬといひて、老の涙ぞまことなる。老母又桂之助にむかひ、さきほど途中にておん目にかゝりし時より、唯人ならずと思ひしに、さきほど勝基公におん物語りを、ものかげにてうけたまはれば、果して君にておはしけり。いまだ一度もおん目見えいたさねば、妾をおん見知あるまじく、妾も又おん顔を見しらねども、今は何をかつゝみ候べき。君は元來妾腹にて、その御實母は妾が娘、嘉門が爲には姉にて、君を産奉りてすぐに身まかり候ひぬ。先奥方は賢女にておはせしゆゑ、少しも嫉のいろなく、奥方の御正腹と御披露ありしが、平人の身にて申さば君は妾が爲には孫なれども、腹はすなはちかりものなれば、妾が爲にも正しく主君なるを、かりそめにも奴僕とよび、打擲せしは大罪なれども、これにはすこしく縁故あり、此包を御覧くだされかしとさし出す。桂之助は始て實母の母なる事を知りて打驚、頓に包をひらき見れば、短冊入に一ひらの短冊あり。とりあげ見れば、

咲匂ふ梅津の川の花ざかりうつる鏡のかげもくもらず

といふ歌をしるせり。桂之助眉をしはめて、此手蹟は見おぼえありといへば、老母小膝をすゝめ、そは爲家卿の詠歌にして、夫木集に入たる歌なるが、そのかみ祖父君、佐々木盛貞公御在京の折から、妾が夫梅津兵衞北野の社人にてありし時、御連歌のついでに、おん筆をそめてたまはりし短冊なり。その短冊の箱を以て打擲仕りしは、すなはち祖父君のおん拳をくだされ、君がこれまでの御不行跡を戒給ふ同然也。しかるに君おん怒のけはひも見え給はず、妾が打擲をたへしのび給ふ爲體、深く先非を悔給ひ、武道つれ〴〵草を得て、御勘氣おんわびの種となし給はん御心底、あらはれておんいとほしく、胸さくるばかり悲きを見せ申すまじと、涙をかくせし老が心を、御推量くだされかし。子よりも孫のかはゆきは、世の人の心ぞかし。平人のおん身ならば、祖母よ孫よと名告あひ、娘がかたみといつくしみ、片時も傍をはなすまじきに、君臣とへだたれば、いひたきことのかずなきも、心に思ふのみぞかしと

いひて、悲歎に袖をひたしけり。良ありて涙をぬぐひ、いかに嘉門此うへはかの秘書を、惜ます君にたてまつれといふにぞ、嘉門こゝろえ候とて、かの書を取出して桂之助に與へけり。老母又勝基にむかひ、御覽のごとく桂之助どの今はむかしの志をあらため給ふなれば、おん館の御前しかるべう、とりなしひとへに願奉るといへば、桂之助は秘書を勝基に渡し、稽首俯伏してともにこれを願けり。勝基打開給ひ、かねておん館御懇望の此秘書を奉るは、國知どのゝ大功なれば、御前をよきにとりなして、やがて歸國をとり持べしとのたまへば、三人ひとしく喜ぶこと限りなし。扨嘉門勝基にむかひ、先年彗星あらはれしたる刻、星のいろ蒼に黄をおびたるを見て、牝鷄晨して婦女權を奪ひ大亂の起るべききざしと考たる事を語ければ、勝基掌を打てその先見を感じ、義政公の北の臺香樹院殿は、若君を濱名入道に相托して世にたてんとし、今出川殿は勝基を執權として、武將たらんことをはかられ、天下二つにわかれて、已に大亂の起べき時節なる事をものがたりければ、嘉門又先年濱名が招きに應せずして、岩坂猪之八等數人を打とり、たゞちに此山にあとをかくしたる事をかたりて、互に權兵學の事を論じ、嘉門當山に住、常に千早の城趾を見て、楠氏の奥妙を感る事などを物語けるが、嘉門かさねていひけるは、さりながら官領職のおん身にて、此山中に唯ひとり往來し給ひ、若濱名方の者ども聞知り、多勢を以てとりかこまば、いかゞし給ふやらん。君子は危きにちかよらずといへり。軍慮のほどうけたまはり度候と、詰問ば、勝基莞爾と打笑、さる時の備ここにありといひつゝ、懷を探り、號笛をとり出して吹立給へば、忽鎧腹卷に籠手臑楯をきびしくかためて、簑笠をうち着たる荒武者ども、こゝの木蔭かしこの岩かげよりあらはれ出て、數十人馳集り、枚をふくませたる馬を引出して、御歸館とよばはれば、嘉門をどりあがりて感嘆し、これいにしへ韓信がもちひたる、虛無の謀計伏兵ならずして其理すみやかなりと稱美の折しも、以前の手負熊、いかりくるひて此處へ走り來るを、荒武者どもかけへだて、手槍をとりて已につき殺さんとしつるを、勝基見給ひ、やれまてしばしと聲かけてとゞめ給ひ、夫六韜を考るに、文王太公望を得たる時、卜して非熊といへり。我今已に當世の呂尙を得て、いかにぞ熊を欲せんや、無益の殺生好むべからず、とく〱放やれとおほせければ、荒武者ども呀とこたへて放ちけり。勝基桂之助にむかひ、和殿は今しばし世をしのび、歸國の時節をまたれよかし。老母はしばらく此家にあれ、かさねてむかひの乘物を以てよびとるべし。嘉門は

今すぐにともなひゆかん。幸雪もふりやみぬとのたまひて、馬ひきよせて乗給へば、嘉門は馬の左りにしたがひ、大勢の荒武者ども、列をたゞして前後をかこみ、つもれる雪を踏分つゝ、麓を斥ていそぎゆく。老母は嘉門がいさましき門出を見おくりて、すゞろに喜ぶといへども、桂之助のみすぼらしげなる姿を見れば胸ふさがり、喜び悲み打まぜて、しばしは詞もなかりけるが、桂之助にむかひ、ひそかに君にあはせまゐらするおん方あり。いざこなたへとて、奥深くはなれたる一間のうちにいざなひけり。これ何人にあはするやしらず、のち／＼の巻を讀得てしらん。

○雍州府志曰、梅津清景の塔梅津邑にあり。清景は藤原惟隆十八世の孫也。代々院の北面たり。禪法に歸し、剃髮して是心と號す云々。案るに一説是球いづれか是なるをしらず。此考は巻之一第四回の下に記すべきを、誤てもらしぬれば、此に記せり。彼處とてらし見るべし。

夫はさておき爰に又、名護屋山三郎元春は、一つには桂之助いてふの前、月若等三人のゆくへをたづねて、その安否をとひ、二つには父の仇不破伴左衛門をたづねて宿意をとげばやと、心は二つ身は一つ、ちゞに心をくだきつゝ、僕鹿蔵を具して、處々方々を尋ありき、しばらく旅中に月日をおくりけるが、一夜旅店のうちに不思議の夢を見たり。その夢いかにとなれば、頃しも盂蘭盆の時にて、父の亡靈をまつらばやと、香華灯燭をもとめん爲、街に出けるに、民家一等に靈棚をまうけ、庭火をたきて亡靈を迎る、念佛の聲念珠の音街にみち、あまたの亡者どもつどひ來て、おのがさま／＼かなたこなたの家々に入る爲體、誠に哀のありさまなり。亡者のすがたさま／＼にて、額に波をたゝへたる翁もあれば、腰に弓を張たる姥もあり、若き男の幼子の手をひくもあり。若き女の乳ぶさはなれぬ嬰子を、懐にしたるもあり。雨露にされたる骨のみつゞき、男とも女ともわかちかねたるか、影もひときは薄見えて、浪々蹌々とあゆみ來るは、いく年ふりし亡者にや、頬髭生しげりていとあら／＼しき男のいまだ肉脱もせず、なまなましく見ゆるは、きのふけふの亡者ならん。白髮を亂せる姥の亡者、庭火のかげにはらばひたるをさな子の顔をさしのぞき見て、さめ／＼となくは、孫に心の殘りつるか、鼻ひちみ口ゆがみていと醜き男の亡者、むかひ火たく女をつれ／＼とかへりみて、うらめしげに立たるは、後の夫をむかへたる恨とおぼし。かくさま／＼の亡者、蜂のごとくに群り、蟻のごとくに集來れども、家々の男女の目には、少しも見えざる樣子なれば、山三郎おのれも命をは

りて、亡者の數に入けるかと、一度はおどろき、浮蝣の一期朝露の命、泡沫無常老少不定の世のならひ、皆かくのごとしと、一度は歎きてたゝずみける所に、背後の方に、山三郎々々々とよぶ聲、虫のなく音に異ならず。山三郎身をひるがへしてこれを見れば、正しく亡父三郎左衛門なれば、うちおどろきつゝ平伏して禮をなし、世を去給ふ親人に、又あふ事の不思議さよといへば、三郎左衛門いひけるは、汝我仇をむくはんと身を苦しめ、思ひを盡すを、苔の下にて不便に思ひ、これまでかたちをあらはせしぞ。汝伴左衛門をもとめんとならば、他をもとむるは無益なり。はやく京都に立越、なんぢが幼年の時いひなづけしつる女をたづねて相まみえなば、おのづから伴左衛門にめぐりあふべし。此事を告ん爲にまうで來つるぞ、親子は一世のちぎりなれば、再びまみゆる事を得がたしといひすてゝ、さらんとする袖にすがり、せめて今しばしまち給はれかしといふかとおもへば夢さめて、旅店の寢所に只獨、惘然として居たりけるが、五更の鐘におどろきて、やう／＼夢なることを曉し、悲歎に袖をしぼりけり。かくて山三郎父の告にまかせ、いそぎ京都に立越て、小幡の里にあやしげなる家をもとめ、鹿藏もろとも住けるが、ひさしく旅中にありて、少々のたくはへも、皆もちひ盡し、素もなりはひなき身なれば、持合せたる衣服のたぐひも、おほかたに賣盡して、日々のつひえにかへなし、至極貧しきくらしなれども、鹿藏忠義の心ふかき者なれば、毎日煎じ物を賣に出て、身體の疲はそるをもいとはず、やう／＼かそけき煙をぞ立ける。

○案るに煎じ物賣、古事にや、文明の比の職人盡のうちに見ゆ。又能狂言にせんじ物賣といふあり。藥を煎じてになひ賣する者とぞ。

十八　花柳の鞘當

其頃都五條坂に妓樓あり。原此所は、平家の侍大將惡七兵衛景清が妾阿古屋が住し處とぞ。そのなごりにや、あまたの阿曾比ありて、秦樓の柳絮常に浪子の心を牽、楚館の舜華、能富翁の產を蕩す。されば賢となく愚となく、貴となく賤となく、此妖境に迷來る者ひきもきらず、恰も蝦蟇の井におちいるがごとく、飛蛾の灯に集るに似たり。あまたの人のつどへるうちに、一きは目だちたる打扮の侍あり。春雨に燕子の飛かふさまを摺て、三本傘の鹿子紋つけたる小袖を着し、白柄の大小を攔差にさしこらし、洲の與三などや製しけん、手をこめたる蒔繪の一つ印籠をおび、深編笠をまぶかにきて、絡かけずの緒をつけたる、板金剛

をはきならしつゝ、（板金剛は今草履下駄といふものの類なり、職人盡に圖あり）東をのぞみてすゝみゆく。又西の方より羽織小袖も一様に、村だつ雲に稲妻の、閃々たる形をすらせたるに、針線入たる袖べりかけて、一つまへに着なし、はつぱの鮫鞘の大小を關の木におび、目せき笠の下に懐紙の覆面かけ、肩を首より高くさしはりて、六方かゝりに手を打ふりつゝ大路せましと歩み來る侍あり。已に兩人ゆきちがひける時、三本傘の紋つけたるこなたの侍、あやまりてかなたの侍の刀の鞘に鞘をはつしと打あてけるが、雲に稲妻の侍、こなたの璫をしかとにぎり、臂をおしはりて怒れる體なり。こなたはその手を拂ひのけてゆかんとすれば、かなたはまた猿臂を伸して引とゞむ。たがひに口には一言をいはずといへども、つひに刀を抜はなして、丁々しとゝ打あひければ、群集の諸人これを見て、すは諠譁よとさわぎ立、東西に散亂して、ひろき大路に只兩人、うけつながしつ、斬むすぶといへども、兩人の猛き勢におそれて、誰ひとりこれをとゞむる者なかりけり。時に此曲中第一の名妓とよばれて、その名世にかくれなき、神林道順がもとの、葛城といふあそび女、籬のうちより此體を見て、いそがはしく裾かいとりて出來り、いとあやうげなる劍の下をくゞりて、兩人のへだてとなり、鶯の



京五條坂の曲中において、鞘當諠譁の圖。

囃出たるがごとき聲していひけるは、おん二方ともによしありげなるおん方と見えはべるに、所をもきらひ給はず、刄傷におよび給ふは、おぼしめしたがひにやあらん。いかなる宿根のあるかはしらざれども、此諠譁は妾に給はりて、雙方ともにおん刀をさめたびなんやと、笑顔つくりてとゞめけり。兩人は葛城が理ある詞にや恥けん、思ふ旨やありけん、ひとしく打うなづきつゝ、刀を鞘にをさめて、衣服の塵を打拂ひ、雲に稻妻の侍は出口の方へわかれゆく。三本傘の侍も退かんとしたるを、葛城袖をとりてしばしとゞめ、かしこの編笠茶屋にゐてゆきて、あるじの女にしばしこゝかしてよといへば、所がらとて物馴たる女なれば、ゆる〳〵物語し給へといひて出ゆきぬ。あとにて別に人もなければ、葛城かの侍にむかひ、卒爾なりといへども、とひ申し度事のはんべり。妾は葛城と申すあそびなるが、おん身三本傘の紋つけ給ふからは、若名古屋山三郎どのにはあらずやといふ。かの侍打聞て、さては聞およびたる葛城どのなるか。おことは山三郎に何の所縁ありてたづぬるや。



推量のごとく某は山三郎なりとて編笠をとれば、葛城顔をつれ〳〵と打まもり、幼時わかれたれども面はしかと見おぼえぬ。姓名はおなじおん方なれども、おん身は妾がたづぬる人にはあらず、疏忽

のだんはおゆるしあれ、妾は大和の國佐々木の家臣、名古屋三郎左衞門どの丶子息山三郎どのとて、をさなき時いひなづけの殿なるゆゑ、たづねはんべるなりとて、ほいなげに見えければ、かの侍眉をしはめ、しかのたまふおん身は、和州子守町の浪人、高間久米右衞門どの丶息女にて、幼名を岩橋とはいはずやといへば、葛城おどろき、いかにしておん身は、さばかり妾が出身をよくしり給ふやといぶかるにぞ、かの侍掌をはたと打、誠に不思議の出會なり。今は何をかつゝみ候べき。某はおん身のたづね給ふ、佐々木の家臣、名古屋山三郎左衞門正春どの丶僕、鹿藏と申す者なり。かねて山三郎どの幼年の時、いひなづけの女子ありしと聞しは、おん身にてありけるか。某か丶る打扮にて、今日しも此曲中へ來りしは、大にいはれある事なり。先年主君三郎左衞門殿、佐々木のおん家の執權、不破道犬が爲に闇打にあひ給ひ、その夜おん館の騷動によりて、山三郎どの浪々の身となり給ひ、敵伴左衞門がゆくへを尋んため、所々方々をめぐり、旅路に月日をおくり給ひしが、近ごろ當國小幡の里にかくれ住給ひ、某もその所に仕へ申す也、しかるに頃日人の噂を聞ば、伴左衞門雲に稻妻の模樣つけたる衣服を着して、此曲中へ往來するよし、かれ敵とねらはる丶身を以て、人



山城國小幡の里、山三郎貧家の光景

の見知りたる衣服を着て、しかも人立おほき所を徘徊するはこゝろえず。うたがふらくは假人にて、山三郎どのをつり出して、かへり打にすべき謀計と思ひしゆゑ、某持傳へたる一腰を代なし、主人の紋付人の見知りたる衣服をこしらへて、かくたはれ男のさまに打扮、山三郎どのと見せて、けふしも此處へ來りけるに、折よくかの侍にゆきあひ、わざと鞘當して諠譁を仕かけこゝろみつるに、かれ始終ものいはず、深編笠にて面はしかと見えざれども、身のはたらき恰好果して伴左衞門にあらず。小指の無を見れば、伴左衞門が腹心の傍輩、犬上雁八といふ者に疑なしとかたれば、葛城は涙をながし、山三郎どのは妾七歳の時、おやおやのゆるしをうけて、いひなづけしつる夫なれば、うき川竹の身となりても、片時も忘るゝひまはなく、せめては一目相見んことをねがひけれども、祿にかはる



る島の身なれば、せんすべなく、むなし神佛に祈て、あけくれ只その事のみをねく月日をおくりけるが、そのゝち聞ば父がひぬ。けふしもはからずおん身にあひうへを打れ給ひて、その身もゆくへしれしは、いまだ縁の盡ざる所なりといひて、ずなり給ひしと聞しゆゑ、殊更かなしく、或はかなしみ或は喜び、その身親の責苦何とぞ一度めぐりあふよすがもがなと、を見るに忍びず、みづから此曲中に身を

賣たる、はじめ終をこまかにかたり、かかる賤身となりて、顔合するもおもてぶせなれども、妾が心の實をよく〳〵告きこえて、せめて一目あひ見る事をかなへて給はれかしと、涙ながらにかきくどきければ、鹿藏もその志の實を感じて、共に袖をしぼりぬ。葛城又いひけるは、かたきは伴左衛門といふ事、聞は今がはじめなり。さきほどの侍のごとき、深編笠に顔かくし、雲に稻妻の衣服着たる侍五人、一樣に打扮て、頃日かはるがはる此曲中に往來す。そのうち一人はまことの伴左衛門なるべしといへば、鹿藏これを聞、五人の者一人は伴左衛門にて、殘る四人は、藻屑三平、笹野蟹藏、土子泥助、犬上雁八といふ者に疑なし。皆助太刀して三郎左衛門どのを打たる者ども也。正是天の與へなりと喜び、壁に耳あり垣にぬひめありといへば、此所にて長物語はあしからん。かさねて又相まみえ申さんといひて立上れば、葛城袖にすがり、今いひしことくれ〴〵たのむとありければ、鹿藏うなづき、又編笠に顔かくして出ゆけば葛城は、神林が家にかへりぬ。

昔話稲妻表紙巻之五下冊

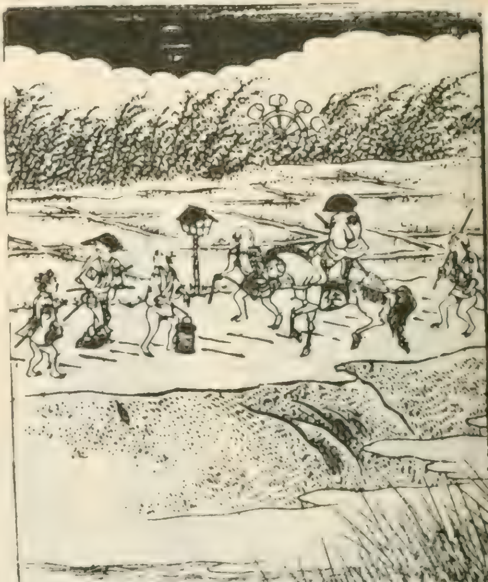
十九　刀剣の稲妻

その時鹿蔵は、たゞちに小幡の里にかへりて、山三郎にその日の仔細をつぶさにかたり、葛城が誠心を告。あまりにいとをしく存ずれば、せめて一度はかの地におん越ありて、御對面あるべしとすゝめければ、山三郎いひけるは、五條坂に葛城といふ名妓ありとは、かねてほのかに聞つるが、その者高間粂右衛門の娘岩橋にてあらんとは、夢にだも思はざりき。かの者は親々の得心にて、某といひなづけの女なりといへども、今花街におちくだり、ながれの身となりたる女に對面せんは、武士の名をけがすに似たり。かれが志は不便なりといへども、對面はかなふべからずといへば、鹿蔵いひけるは、はばかりながらそはたがへり。葛城どのの物がたりをきけば、頃日雲に稲妻の衣裳を着たる侍五人、かはる／＼かの地に往來するよし、そのうち一人はかならず伴左衛門にて、外は藻屑の三平等四人の者にうたがひなし。これはかねて御推量のごとく、和公をつり出してかへり打にせん謀計にきはまれり。先だちて御父君夢中に告給ひしは、此事にて候はん。殊更葛城どのゝ誠心うたがふ所なければ、一度かの地におんこしありて葛城どのをたのみ給ひ、かれらが計のうらをかき、内外より相圖をさだめ五人一等に打取給はん良計こそあらまほしけれ。君父の讐には共に天を戴ずと申せば、眼前の敵を見て時を失ひ給はんこと、ゆめ／＼あるべからず。復讐の爲花街にいたり給ふこと、いかでか恥給はんやといさめければ、山三郎げにもさなりと思ひ、その夜鹿蔵を具し、しのびやかにして五條坂にいたり、神林がもとをたづねて葛城に對面しければ、葛城が喜びいふべうもあらず。山三郎は露ばかりもあだめきたる詞はなく、終夜只復讐の計を談じて、朝まだきにわかれかへりぬ。これより後葛城がもとより、金銀衣服をおくりて山三郎をみつぎ、心の誠をはこびければ、山三郎はたぐひまれなる女かなと感歎にたへざりけり。葛城は伴左衛門が面を見知らず、いづれをいづれとわかたねば、山三郎毎夜鹿蔵をかの地につかはして、五人の者を打取べき便宜をぞ待ける。鹿蔵は深き笠に顔かくし袈裟衣を着し物乞の道心坊に打扮て、しのびゆきけるとぞ。しかりといへども五人の者かはる／＼往來して、五人一同に來ることなく、もとよ

りその跡をつけゆくといへども、いつも市路をちがへてかへれば住所もさだかならず、只心せかるゝばかりなり。それはさておきこゝにまた、不破伴左衛門重勝は、浪々の身といへども、密々父道犬かたより扶助しければ一點の不足なく、笹野蟹藏、藻屑の三平、土子泥助、犬上雁八等四人の者をかくまひおきて、父が大望をとぐる時節を待、紀伊の國藤白山の奥に大なる居宅を造り、野伏浪人どもをあまた召抱て、すはといはゞ、父と共に濱名入道に味方すべき結構専なり。しかりといへども名古屋山三郎世におるうちは寐覺安からず。元來かれに草履打の遺恨あればこそ、かれが親をも誤りて打たれ。いかにもしてかれをかへり打にせばやと思ひけれども、そのゆくへ弗にしれざれば、せんすべなく打過けるが、頃日京都に居住するよし偶聞出して、かの四人の者をしたがへて俄に上京し、伏見の里に寓居して、人の見知りたる一様の装束して、五條坂に往來し、山三郎をつけ出してかへり打にせばや、とはかりけるが、前の日犬上雁八かの地にて、三本傘の紋つけたる侍に出あひ、喧嘩に事よせてこゝろみつるに、まさしくかれが僕鹿藏と見つれば、山三郎當國のうちに居住し、果して我等が計におちて、我々をつけねらふにうたがひなし。つひにはつりよせてかへり打にせばやと商議して、い



よく〱曲中に入こみけるが、彼等元來好色の輩なれば、伴左衛門は茨木がもとの遊山といふ阿曾比になれそめ、その餘の者等もそれ〱になじみを得て、のちには山三郎を打ん計はわきになり、一向遊興にのみひまをつひやしぬ。誠是愚なるふるまひなり。扨山三郎は專かれらを打べき便宜をまちけるに、一日鹿藏かの地よりあわたゞしく歸り來りて、葛城が書をさし出しければ、山三郎いそがはしくこれを讀に、今夜伴左衛門等五人の者一等に茨木がもとに來るよし聞出しぬ。朝は未明にかへるよし聞ぬれば、堤にかへりを待うけて討取給へ、かならず此時を過し給ふべからずと、ことみじかにしるしたり。山三郎これを讀をはり、天地を拜しをどりあがりて喜びけるが、鹿藏もいさみたち、何とぞ主君の敵なれば、助太刀をおんゆるしくだされかしとねがへば、もつともなる望なれども、



敵大勢なるに臆して助太刀をもちひしなんど、世の人口にかゝらんも口をしければ、汝をともなはんことかなふべからずといへば、鹿藏涙をながし、しかるうへはせめてかの所まで御供をゆるし給はれかし。おん息つぎの水にてもまゐらせ度候といへば、それは勝手次第なるべしといふにぞ、鹿藏喜び、食事を調じてすゝめなどし、何くれと支度して時刻のいたるをまつ。山三郎はわざと曲中に通ふた

はれ男の體に打扮、父のかたみの左文字の刀をおび、その夜の二更の頃より五條坂の長堤にいたり、朧月夜を幸に、鹿藏もろとも麥畠のうちに身をかくして、時のいたるを待にけり。此時は是いづれの時ぞや、寛正五年三月下旬とかや。折しも春雨の晴間にて道あしけれども、常から往來しげき堤なれば、しばらくも人たえず、おくりむかひの提灯星のごとくにつらなり、駕籠はしらするかけ聲は歸雁の音かとあやまたる。さて夜のふくるにしたがひて、人のゆきゝも漸々にたえ、辻行灯のともし火もかすかにて、鮓めせ按摩とらせ給はずやとよばふ聲も已にたえ、小田の蛙の聲のみたかくきこえて、寺々の鐘五更の時を告わたり、月は山の端におちかゝりければ、すは時刻いたれりと、山三郎目釘をしめし鍔元をくつろげ、まくり手して待けるに、ほどなくかの雲に稲妻の衣裳を着たる侍一人、編笠の下に覆面して、板金剛を踏ならしつゝ、あゆみ來る。まちまうけたる山三郎、堤のうへに飛のぼり、めづらしや不破伴左衛門、かくいふは名古屋山三郎なり。父のかたき覚悟せよとよばはりつゝ、氷なす刀を抜はなせば、かの侍高々とあざみ笑て編笠をぬぎすて、此方よりたづねもとむる山三郎、こゝであひしは天の與へ、かへり打なるぞ観念せよといひて抜合せ、二太刀三太刀戦けるが、山三郎が

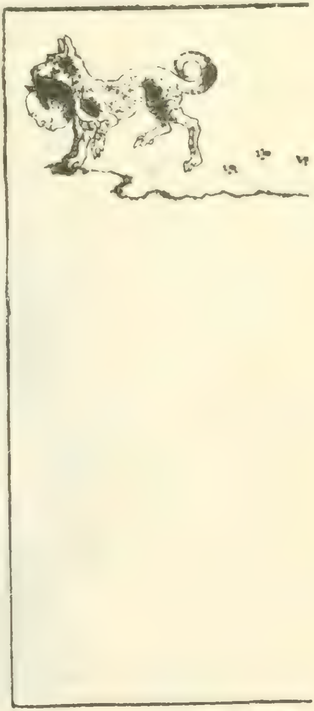


五條坂の堤において名護屋山三郎復讐五人斬の圖

するどき太刀をうけ損じ、左り袈裟に斬さげられて、地上に撲地たふれたり。山三郎鹿藏をかへりみて、彼奴が面をよく見よといふにぞ、鹿藏立より髻をつかみてひきおこし、月かげにすかしみて、此者は土子泥助にて候といふ。山三郎うなづく間もなく、又おなじごとくに打扮たる侍一人のさばりかへりてあゆみ來る。山三郎むかふに立ふさがり、汝は不破伴左衛門なるべし。これは山三郎父の仇を報なりといひつゝきりつくれば、此侍も笠とりすてゝ刀を拔、うけつながしつ七八合戰けるが、泥にすべりてよろめく所を、山三郎飛かゝりて胴ぎりに、陸離ずんど斬はなし、腮を以て下知すれば、鹿藏いそがはしく走りより、月の光りに面を見て、此者は犬上雁八にて候といふ。ほどなくおなじ打扮の侍一人すすみ來る。山三郎ちか／＼と立むかひいかに伴左衛門これは山三郎なるぞ。父を



打れし恨の刄、思ひしれといひつゝ斬つくれば、編笠をかなぐりすて、刀を拔てきりむすび、丁々しとたゝかひけるが、運の盡にや堤の端に足をふみながし、うつ伏にたふるゝ所を、山三郎一聲さけびて斬けるが、たちまち首堤の下にまろびおちぬ。鹿藏つゞきてとびくだり、かの首をとりあげ見て、此首片耳なければ藻屑の三平に疑なく候といふ。山三郎その者もまた伴左衛門にてはなかりしかと、ほいなげにいひつゝ、刀の血しほをぬぐひ、一息つくいとまもなく、又來かゝる侍もおなじ如くの打扮なり。身村恰好此度は正しく伴左衛門と思ひつ、前のごとくに名告かくれば、かの侍こころえたりといひながら、刀の柄に手をかくる所を、山三郎をどりかゝりて腰車に斬けるが、直にたふれもせず、二三十歩あゆみゆく。鹿藏はかの者逃去とこゝろえて、あとをおうてゆきけるに、かの者前にきられし者の死骸につまづき、二つになりてぞたふれける。山三郎が刀は父のかたみの左文字の名作、斬人は劍法手練の早業、かくあるもことわりと鹿藏心に感じけるが、山三郎心せき、伴左衛門かいかに／＼ととへば、鹿藏屍をあらためみて、此者は笹野蟹藏にて候といへば、山三郎いひけるは、その者はまさしく伴左衛門と思ひしに、それも又かれにてはなかりしか。四人の者どもゝ伴左衛門をたすけて、父を打たる仇人なりといへども、本人を打ざるうちは安堵ならず。つゞきて來べきはずなるにといぶかりつつ、やゝしばらく待といへども、人影も見えざれば、胸いとさわぎ、此所一方口なれば、外にかへるべき道もなきに、こはこゝろえぬ事ならずや。我は出口までゆきて見べければ、汝はこゝにありて心をつけよといひ捨て、出口の方へはしりゆく。時にむかふの方より、一乘の駕籠



をかゝげて馳來りけるが、鐃鈸かきどゝ山三郎が刀の光のきらめくを見て仰天し、鐃鈸を地上に打捨て、飛がごとくに逃去ぬ。山三郎鐃鈸のうちうたがはしく思ひつゝ、刀のきつさきにて垂をあげてうちを見れば、實に稲妻の衣裳着たる侍、編笠をきたる儘にて鐃鈸のうちにありければ、心に喜び、いかに伴左衛門我は是山三郎なり。汝を打て亡父の宿恨をはらさんと、これまで心を盡せしかひありて、今日唯今出會する事、盲龜の浮木にあひ、優曇華の花咲時を得たるに異ならず。とく／＼出て勝負を決せよとよばはれば、伴左衛門一言をこたへず。何うろたへけん刀も拔ず、鐃鈸のうちよりよろめき出て、山三郎が胸ぐらにとりつきけるにぞ。山三郎刀をあげて腕をきりはなせば、手首は胸に殘り、呀と一聲さけびてたふるる所を、首ちうに打落し、いそがはしく首をとりあぐる折しも、曲中の方に人聲おびたゞしくきこえければ、若者を奪れてはかなふまじと、手ばやく編笠に包てたづさふる間もあらせず、曲中の者ども提灯をともしつれ、手に／＼棒をおつとりて、大勢四方をとりかこみ、狼藉者を打たふして、はやく繩をかけよとひしめきぬ。山三郎聲高く、これは狼藉者にあらず、大和の國佐々木判官の家臣、名古屋山三郎元春といふ者、父の仇を打たるなり。かならずあやしむべからずといへども、曲中者どもしかいふは此場をのがれん爲のいつはりならんといひて聞入ず、已に大勢棒を打ふりて、敵たはんとしたる所に、鹿蔵大勢をおしわけて山三郎が前にちかづき、相公は大事のおん身なれば、かれ等にかまひ給はず、とく／＼おんかへり候へかし。あとは某がよきにとりはからひ候べしとて大勢にむかひ、汝等うたがはしく思ふもことわりなれば、某人質となりてこゝにとゞまるべし。此おん方をば道をひらきてとほし申すべしといふにぞ、曲中の者どもやう／＼得心してかこみをひらきければ、山三郎夜のあけはてぬ間にと、いそぎて小幡にかへりけり。扨も山三郎は年來の宿志をとげ、いさみすゝみて小幡の里にかへりけるが、此時已に夜はあけはてぬ。さて伴左衛門が首を父の位牌に手向ばやと思ひ、汝ゆゑにいく年月又なき苦勞せしことよといひつゝ、編笠のうちより首を取出して見れば、こはいかに伴左衛門にはあらずして、葛城が首なれば、こは夢か現かといひて、只あきれたるばかりなり。さきには大勢にとりかこまれて心せはしき火急の時なれば、心づかざりしが、えりに殘りし手首を見れば、何にかあらんにぎりそへたるものあり。手くびをもぎはなして見れば、一通の書をにぎりてぞ居たりける。いそがはしくひらき見れば、是乃かきおきの文なり。その文にいはく、

妾こと此度不思議に殿にめぐりあひ、おん父の仇なる伴左衛門等を手引して、うたせ申さんとうけがひけるに、前の日伴左衛門妾がもとに來りて申さるゝは、今まではしらざりしが、頃日偶きけば、汝は和州子守町の浪人高間粂右衛門が娘幼名を岩橋といひつる者のよし、しかとさあるや。いよいよそれにたがはずば、正しく我別腹の妹にて妾腹なり。その妾ゆゑありて懐胎のうちに粂右衛門がもとに嫁しゆき、かの方にて汝を產つるよし、かねて父道犬の物語にてきゝぬ。其のちはたえておとづれも聞ざりしが、此くるわに身を賣しとは夢にだもしらざりき。此儘おきては父の恥我恥なれば、父に此事を告て金子を調じ、とみにあがなひ出しつかはすべしとてかへられ、已に昨夜そくばくの金子を以て、我身をあがなひ給はりぬ。伴左衛門の申さるゝ所、いちいち我身におぼえあれば、別腹の兄なることうたがひなし。さて伴左衛門密に申さるゝは、このごろ名古屋山三郎といふ者、をりをり汝がもとに通ひ來るよし、かれには我深き遺恨あれば、汝手引して打せくれよとのたのみなり。これを聞て胸ふさがり、兄のたのみをうけがへば、夫を殺す大罪なり。おん身につきて兄を打するも又大罪なり。かたき同士に縁つながりしは、いかなる宿世の因果ぞと、我身一つのかなしさを御推量くだされかし。



とても生ながらへがたき身のうへと覺悟をきはめ、おん身のもとへは今宵伴左衛門等を打給へと通じおき、伴左衛門どのかの四人の者と共にかへらんと申すを、用ありとて別座敷にとゞめおき、家内の者には伴左衛門どの深く醉たるよしを告て、妾が閨房まで駕籠をかき入させ、妾伴左衛門どのゝ妾に打扮て駕籠に乘出しは、おん身の手にかゝりて死ん爲ぞかし。のぞみのごとくおん手にかゝりはんべるならば、伴左衛門を打しとおぼされて、かねての恨をはらし給ひ、何とぞ兄の命をおんたすけくだされかし。これのみ今生の願なり。敵の妹と聞給はば、さぞ後悔し給はんが、せめて來世の夫婦とおぼされて、をり〳〵一遍の御回向ねがひはべるぞかし。伴左衛門どの已に妾が身の代をつくのひたれば、妾死すともあるじ道願の損とならず。おん身手にかけ給ふとも、原いひなづけの妻なれば、科となるべき事もなし。かきのこし度ことおほかれども、仕損せまじと胸とゞろきて筆もたゝず、涙に墨も散はべれば、くさ〴〵さ申殘し候と、こまやかに記しつけて、おくのかたに、



壁に生るいつまで草のいつまでもつきぬ恨を思ひ斬りてよ

といふ辭世の歌をかきつけぬ。山三郎こをはりて十分におどろき、しばし思案にくれたりけるが、良ありて葛城が首をし

りあげてつら／＼見れば、鐵漿をおとして白歯となり、みどりの髪をきりたちて、笑るがごとき顔なり。山三郎落涙して思へらく、昔袈裟御前髻をきり、夫の身にかはりて遠藤武者盛遠に殺されしは、母と夫の命をすくはん爲なり。此葛城は兄の命をたすけん爲に身代となりて我子にかゝりたる心底、袈裟御前にもをさをさおとるべからず。その志は不便なりといへども、晋の豫讓が衣を刺たるためしとは事かはれば、かれがねがひのごとく、伴左衛門をたすけおきては、我孝の道たちがたし。さりながら伴左衛門昨夜の事をきゝ、遠國に逃走んは必定也。畢竟我心せきたる儘に、名告かけて返答をまたず、打あやまりしは一生の疎忽なり。父の仇をむくうべき者の所爲にあらず。世の人にわらはれんことのくちをしきよ。父の靈魂夢中に告給ひし時、いひなづけの女はかたきの妹といふことを告くださるべき理なるに、左もなかりしはよく／＼まぬかれがたき惡縁ならん。先年生駒山の麓にて奥方をうばはれし時今においておく方の御存亡もさだかならず。父の仇も打得ざる事、不忠とやいはん不孝とやいはん、我身ながら愛想盡ぬ。死ねばならぬ一命を、これまでいきながらへしも、御主人がたのおんゆくへをたづね、父の仇をむくはん爲ばかりなるに、とても武運に盡たる身なれば、腹かきさばきて冥途にいたり、せめて親人に分說せんと心を決し、血刀をとりなほして、



ほど／＼腹につきたてんとしたる折しも、外のかたよりやれはやまるな。しばししばしと聲かけて入來る人を見るに、是別人にあらず、則是梅津嘉門景春なり。あとにしたがひしは鹿藏が弟猿二郎にぞありける。山三郎あまりに思ひかけざればいぶかりつゝ、ひとまづ刀を鞘にをさめていでむかへば、嘉門上座に打通りていはく、猿二郎が案内にて此かくれ家へまかり越しは別事にあらず。某しばらく河内の國金剛山に世を避、仕官の望をたつといへども、官領勝基公の懇望もだしがたく、去冬君臣の契約をなし、上京して今已に勝基公の館にあり。軍師をもちふる禮儀あつければ、いにしへの貧しさに引かへて、何不足なき身となりぬ。夫につけてかたるべきは、先年某が母病になやみし時、御親父三郎左衞門どの藥代の金子をめぐみて、母の命を救くだされし洪恩心に銘じ、せめて露ばかりもその報せんものと思ひしかひなく、三郎左衞門どの闇打にあひ給ひ、和殿もゆくへしれずと聞て、ほいなくも打過しが、これなる猿二郎がかたるによりて、此所にかくれ住るゝよしうけ給はり、對面して某が思ふ旨を告ばやと忍出立にてまうで來つるが、途中にて人のかたるをきけば、和殿五條坂の堤にて古傍輩四人の者を打、人たがへにて葛城とやらんいふ何曾比を手にかけられたるよし。今腹きらんとせられしは、察する所人たがひの誤りをはぢてのことゝおぼゆ。若さもあらば大なる心得たがひと思ふなり。そのゆゑいかにとなれば、およそ君父の仇をむくはんずるもの、いく度も耻を忍び、命あらんかぎりはたとへ千萬里を走りても、たづね出して仇をむくゆるが孝道のいたりなり。今自殺せんなどは疎忽のいたりならずやといへば、山三郎其理にふくし面目なき體なりけり。嘉門かさねていひけるは、桂之助どのは我爲に主すぢなり。そのいはれは一席にかたりがたし。そのゆゑにいてふの前どの、先年大和の國岩倉谷にておん首打れ給はんとしつるを、某忍姿に打扮てかしこにいたり、我家につたはる火術の具を以て太刀取を打殺し、おく方を奪取、今已に金剛山のかくれ家に母もろとも恙なくおはすなり。桂之助どのも同居し給ふ。佐々良三八郎が忠義によりて月若どのも恙なく、御夫婦御親子再會の時を待給ひぬ。くはしき事は猿二郎よくしりたれば、後にゆるゆる聞候へ。されば一分の心を安んじ、只此うへは復讐の事のみに心をゆだね候へかし。某勝基公にきこえあげて、伴左衞門たとへ萬里の外に走るともたづね出し、立合の仇打をおんゆるしあるやうにはからふべし。これ三郎左衞門どのゝ洪恩をせめて和殿にむくはん爲なりといへば、山三郎大に安堵の思ひをなして喜ぶ事か

ぎりなし。時に猿二郎おづ〳〵嘉門が前にはひ出て申しけるは、さきほど途中にてうけたまはれば、兄鹿蔵人質となりて、五條坂に捕れをるよし、氣づかはしく候。いかゞはからひしかるべうやとうかゞへば、嘉門その儀はすこしも氣づかふべからずとて、懐中硯を取出して、一通の證書をかき、花押をすゑて猿二郎にあたへ、汝此一通をかの地の郡司の宅に持ゆけよ。しかる時は復讐にまぎれなきことはあきらかならんといふにぞ、猿二郎おしいたゞきてたゞちにかしこへいそぎゆく。嘉門また山三郎にむかひ、某はからず一個の證人を捕へて、佐々木の館の騒動の根本は、執權不破道犬が逆心より出て、繼母蜘手の方に悪意を薦て、實子花形丸を家督とし、のち〳〵は母子ともにうしなひて、おのれ家をうばひとり、濱名入道に味方せんたくみなる事あきらけし。不日に某勝基公の名代としてかの館に立越、道犬を糺明して悪意をあらはし、ふたゝび桂之助どのを世に出し申さばやと思ふなりと、心底のこらずかたりければ、山三郎三拝してぞ喜びける。嘉門已に立あがり、忍の他行なればひまとりがたし。かさねてゆる〳〵まみゆべしといひつゝ、門口に出てしはぶきすれば、はるかあなたにひかへたる供まはり、忍乗物をかき来る。山三郎門おくりして禮をおこなへば、嘉門會釈して乗物に乗うつり、別を告て出ゆきぬ。かくて山三郎は嘉門が教諭によりてやう〳〵心ひら



山三郎、不破伴左衛門を打て父の仇をむくふ。

け、葛城が首をとり、水手盥の水をくゝみとり、血しほをあらひ、なく〳〵首を佛壇にすゑて、香をたき水を手向、鉦打ならして、南無幽靈頓證佛果菩提南無阿彌陀佛あみだ佛と唱て居たりけるに、思ひかけざる床の下より、明晃々たる劍のきつさき危く膝頭を擦てぞ閃きいでぬ。山三郎佗と見て、手ばやく手向の水をとりて劍にそゝぎ、刀をとり身をそばめてうかゞひ居たるに、床の下には仕すましたりとや思ひけん、板敷をめり〳〵とおしやぶりて躍出たるは何人ぞや、是則別人にあらず、不破伴左衞門重勝なり。伴左衞門聲たかく、かくあらんと思ひしゆゑ、今朝いまだ闇きを幸ひ、汝があとをつけ來りて床の下にかくれ、始終のことをくはしく聞ぬ。草履打の宿恨といひ妹のかたきかへり打なるぞ觀念せよといひつゝ、斬つくれば山三郎刀を拔て丁とうけとめ、おのれと來りて灯火に飛入夏の虫、これ天のたまものなりとよばはりて十餘合戰けるが、伴左衞門運命盡たる時にやあらん簀の子に足をふみぬきて、よろめく所を山三郎、はやく足を飛せて合破と蹴たふし、乘かゝりて刀をとりなほし、首を弗とかき斬たるは、こゝちよくぞ見えたりける。かゝる折しも猿二郎廓の事をすまして、恙なく鹿藏をともなひて立かへり、此體を見て兩人ともに天を拜し地を拜して、喜びなきに泣けるは、げにたのもしきものどもなり。

二十　積善の餘慶

抑も大和國佐々木の館には、家督さだめの事につき、官領由理之助勝基公の名代として、梅津嘉門景春今日着駕のよし、さきだちて沙汰ありければ、判官貞國みづから下知して廣座敷を掃除させ、禮服を着して相待けるに、ほどなく來駕ときこえしかば、みづから玄關に出て相むかふ。梅津嘉門、金紋紗の道服に、白精好の長袴を曳、海老鞘卷をおび、中啓の扇を把、威儀堂々として入來り、案内につきて廣座敷にうちとほり、設の席に居なほりければ、判官恭しく禮をおこなひ、長路の所御苦勞のいたりに候と相のぶれば、梅津景春一回の挨拶をはり、此度官領の名代として某まかりこしたるは別儀にあらず。先だちて次男花形丸家督の願を出されつるが、其儀につきおん疑のすぢありて、某にゆきむかひ糺明せよとの嚴命なり。先内室蜘手の方、花形丸、執權不破道犬をこれへ呼出されよといふにぞ、貞國かしこみ候とて、かくといひつがせければ、ほどなく蜘手の方禮服をつけ、花形丸もろともに出來り、はるかに下りて禮をなす。不破道犬も禮服にて、縁がはに平伏すれば、梅津景春まづ貞國にいひけるは、先だちて子息桂

之助在京の刻、放佚無慙の不行跡、おん館義政公のおん聞に達し、官領濱名入道を以て內命あり。已に勘當の身となりしが、今に至りて深く先非を悔、おん館に對し奉り、一功をたてたるにより勘當をゆるし、家をゆづりておん身は隱居あるべしとの內命なり。桂之助勘當許免のうへは、いてふの前月若をも共にゆるしてよびむかへ候べしと相のぶれば、貞國いまだ答もせざるに道犬いざり出、おそれおほくは候へども、いてふの前月若は現在母の蜘手を呪咀したる罪人に候へば、たとへ桂之助はおんゆるしあるとも、かの母子兩人をおんゆるしありては、御政道たちがたく候はん。殊更かれら兩人ゆくへしれ申さず候といひければ、蜘手の方いかにもさあり。かれら兩人妾と花形丸を呪咀したる事は、官領職にはいまだしろしめさゞるならん。貞國どのくはしくきこえあげ候へと、かたほに笑ていひければ、景春居だけだかになりて兩人をはたとにらみ、世俗の常言に盗人猛々しといふは正に汝等が事ならん。道犬蜘手に惡意をすゝめ、花形丸の代になさんと、兩人はかりて月若を呪咀し、そのうへ奸計を以ていてふの前月若を罪におとし、貞國どのゝ命といつはり、月若の首を打せんとし、いてふの前を岩倉谷へ引出して首打んとせしこと、皆汝等が仕業ならずや　桂之助放埒の根本も、汝兒子



伴左衛門にいひつけてすゝめたるにうたがひなし。たゞし分説ありやといへば、膽ふとき道犬少しもひるまずそら笑し、當時官領職の軍師と尊敬せられ給ふ景春公のおん詞ともおぼえはべらず。いてふの前母子蜘手の方を呪咀したるには、自筆の願書、たしかなる證據あり。某等が奸計と申すには何等の證據ありや。おそれながらうけたまはり度候といひければ、蜘手の方もその尾につき、妾が悪意などとは思はぬ濡衣きる事よと、つぶやきてぞ居たりける。時に景春つとたちて縁さきに出、先刻申しつけおきたる縄つきをとく〳〵これへ引いだせとよばはりければ、庭すゑに梅津が従者大勢ひかへたる背後より、名古屋山三郎禮服を着し、修驗者頼豪院を高手小手にくゝりあげ、鹿蔵猿二郎両人に縄をとらせて庭上にひきすゑたり。膽ふとき蜘手の方強悪い道犬もこれを見て仰天し、なげ首して



ぞしをれける。景春いひけるは、某ゆゑありてかの者を捕へ、悪人どもの奸計をちくいちに糺明せしが、此場に於ていはさねば證據にならず。山三郎それはからへと命じければ、山三郎立より、刀の鐺をもつて頼豪院がいましめの縄を、しめあげ〳〵、とく〳〵白状仕れといへば、頼豪院面をしかめ蜘手の方道犬がたのみによりて月若を呪咀したるより、詐筆の願書を以ていてふの前母子を罪におとし

たる本末を、こまかに白狀しければ、判官貞國はじめてこれを聞、只あきれて居たりけるが、たちまち怒氣天にさかのぼり、道犬が髻つかみてねぢたふし、我多病なるを以て家事を汝にゆだねたるに、思慮淺くして汝等にあざむかれたるくちをしさよ。肉醬になすともあきたるべからず。たとへ我をばあざむくとも、いかでか青天をあざむくべきやとて、大小をとりあげ、庭上に蹴おとしければ、山三郎飛かゝりておさへつけ、高手小手にぞくゝりける。蜘手の方此體を見て、積惡の罪のがれがたしとや思ひけん、懐劍を拔よりはやくのんどぶえにつきたてゝうつぶしにぞ伏たりける。思ふに年來の隱惡かく一時にあらはるゝも、總是皇天の罰し給ふ所也。豈おそれざらんや。時に花形丸蜘手の方の死骸にとりつき、さばかりあしきおん志あらんとは、露ばかりも思ひはべらず。親の惡意を子の身としていさめ申さぬ不孝の罪、おんゆるしくだされかし。あさましきおん身の果やとて、悲歎の涙にむせびけるが、母の惡意も畢竟は、某を世にたてんと思はれしより事おこれば、某とても同罪なり。分說はかくのとほりといひつゝ、母が自害の懐劍をひろひとり、已に腹につきたてんとしたるを、梅津景春おしとゞめ、和殿はかねて實義ある事聞およびぬ。あたら若者に武士道をすてさするはをし



むべき事なれども、悪意の母につながる縁なればせんすべなし。自殺をとゞまり剃髪染衣に姿をかへ、母の菩提をとぶらはれよ、某先祖梅津豐前左衛門清景より傳來の、大幢國師の法語一卷あり。某今は官領につかへて軍務に管る身なれば、禪法を修すべきいとまなし。かの法語を和殿に附與すべければ、今より禪學をはげみ教外別傳の妙をきはめ、直指人心の奥をさだめて、のち〱は名僧知識と名をあげて、今の汚名をすゝがれよといひければ、花形丸感佩し、やう〱自殺をとゞまりて、髻弗とおしきりぬ。花形丸剃髪して法名を胸月といひ、のちのち、一休禪師の弟子となりて、つひに大悟有徳の知識となり

西てらす月のひかりをその儘に因果がつひのすみかなりけり

といふ歌を詠じて、世に因果禪師と稱せられけりとかや。さて景春卿手の方の屍



此一圖英一蝶の畫く所の名古屋山三繪卷物之圖に模擬す。

をとりのけさせ、貞國にいひけるは、道犬が悪意の源は濱名入道にこびへつらひ、入道の權威を以ておん身を押籠、一旦花形丸の世となし、つひには父子ともにうしなひて、おのれ家をうばひ、濱名入道に一味すべき結構なる事あきらけし。今已に勝基公と濱名と確執におよび、世の中わけめの時節なれば、濱名にくみしたる道犬わたくしのはからひにしがたし。官領の館にひきて、今出川相公の命をう

けて誅戮をくはふべし。いかに山三郎先刻某同伴して、東の殿にひかへさせおきつる、桂之助夫婦を是へいざなひ來るべしといふにぞ、山三郎かしこみ候とて、行廊のかたにゆき、いざこなたへとよばはれば、かねて用意やしたりけん、佐々木桂之助國知、折烏帽子に大紋の直垂を着し、右鞘卷をおびていで來る。つゞきていてふの前、纐纈の小袖に摺箔の袿衣をかけ、とめ木のかをり馥郁として蓮歩をうつす。次に月若此時に十三歳、髮を生立て總角にむすび、小素襖を烏帽子かけて相したがふ。はるか下りて佐々良三八郎、剃髮の姿となり僧衣を着し、妻礒菜、娘楓を具していで來り、かの百蟹の卷物をうや／＼しくさゝげて貞國に呈し、おの／＼座をさだめければ、梅津嘉門景春威儀をつくろひ、いかに國知ぬし、今志をあらためられたるにより、家相續の儀を命せられて、御教書をたまはりぬ。いざうけとり候へとて相渡せば、桂之助おし頂き、館のおん慈悲官領の御仁心、世にありがたく候といひてをさむれば、判官貞國をはじめとして皆一同に喜ぶ事限りなし。さて桂之助父にむかひ、佐々良三八郎夫婦の忠義、兄弟の兒等が孝心をものがたりければ、名古屋山三郎は不破伴左衛門等五人の者を打て父の仇をむくいたる始末、ならびに鹿藏猿二郎が忠義の仔細をかたりけるにぞ、貞國打聞て轉感嘆に堪ざりけり。時に梅津景春いひけるは、惡人亡忠臣孝子あらはるれば、當家益繁昌し子孫長久うたがひなし。時刻うつれば某ははやまかりかへるべしといひて立あがり、從者に命じて道犬ならびに賴豪院を、檻車に乘てかきいださしむれば、貞國國知をはじめとして皆一同に景春をおくり出て、恭しく禮をおこなふ。景春つひにわかれを告て乘物に打のり、行列うたせてかへりけり。

さるほどに官領の館において、再又道犬を糺明あり。一味の輩を盡く捕へて賴豪院と共に誅戮し給ひ、道犬は殊に大罪の者なればおもき刑をくはへ給ふ。さて名古屋山三郎、幷に佐々良三八郎夫婦、娘、鹿藏猿二郎等までめされて、その忠義孝行貞節を御賞美あり。それ／＼にそくばくの賞金をたまはりければ、皆皆感涙をおとしてかへりぬ。さて判官貞國薙髮して桂之助に家をゆづり、平郡の別館にうつり住、名古屋山三郎を執權とし、父三郎左衛門が祿に、道犬が祿をくはへて與へければ、昔に十倍して富る身と成、鹿藏猿二郎に祿をわかちとらしめて忠義を賞しければ、兩人面目を施して喜びぬ。扨又浮世又平は、百蟹の卷物を一覽して畫道の奧妙をきはめ、師匠戸佐正見の勘氣をゆるされ、戸佐又平重起と名告、梅津嘉門の吹擧によりて、義政公の繪所となり、妹於龍は曾て兄に學びて

自然と書道の妙をきはめたれば、世におりう柳と稱じてその名高くきこえぬ。佐佐良三八郎は拔群の忠臣なれば、桂之助おもく祿をあたへんとおぼされけるが、今は桑門の身なればとて祿をうけざれば、せんすべなく唯數百金をあたへけるに、身に應ぜざるたまものなりとて再三辭しけれども、しひてたまはりければ、その金を以て長谷部雲六が妹八重垣をあがなひ出して家に養ひおきぬ。これはその誠心を感じての事とぞ。さて山三郎は葛城が志をあはれみ、神林がもとに金あまたおくりて追福をいとなませ、一生妻をめとらじとちかひけるよしを、三八郎打聞て、のちなきは不孝の第一なりとすゝめ、かの八重垣をおくりて妾となさしむ。ほどなく男子をまうけ、後にこれを名古屋小山三と稱す。此小山三出雲の神子阿國といふ舞姫を妻として、歌舞妓躍狂言といふ事を始たるゆゑよしは、後編に詳なり。發兌の時を待得て見るべし。不破云訓あるも、此稗史におきていみじき吉名護屋の文字に、自然不レ破レ名護レ屋と兆ならずや。

昔話稻妻表紙卷之五下冊終　大尾

江戸　醒醒齋山東京傳著

一陽齋歌川豐國繪

書賈　本所松坂町平林庄五郎藏梓

近世説美少年録　初編二編出板　三編卯春発板　曲亭主人著　哥川國貞画

松浦佐用媛石魂録　全部十巻　同著　一筆庵主人画

美濃舊衣八丈奇談　全部七巻　同著　葛飾北嵩画

綟手摺昔木偶　全部五巻　柳亭主人著　柳川重信画

尼子九牛七國士傳　近刻出来　為永春水著　英泉國芳画

文政十三庚寅年仲夏発兌

書　大阪心斎橋筋博労町　河内屋長兵衛
　　同所　河内屋茂兵衛
房　江戸小傳馬町三丁目　文溪堂丁子屋平兵衛

本朝醉菩提

稲妻表紙後編

摩訶狂雲玩荘奇蹟

醒醒齋京傳編

本朝醉菩提全傳

一陽齋豊國繪

醉菩提經序

活佛出生して、紫野阿蘭若中に住す。其名を摩訶狂雲といふ。これは是、阿羅漢の胎に投じて自ら觔斗を飜し、娑婆穢土に下世し、阿耨多羅三藐三菩提心に因り、許多の神通を現し、禪機活潑、遊戲周旋、情に任せ世を玩び、意を極めて佯狂す。何の因縁にして此娑婆に來れるかを知らず。狐禪闍提をして愈々益々、其蹟に驗き、其心を疑はしむ。

摩訶狂雲醉菩提經序

荏土有髮沙門竺寶蓮述

活佛出世。住紫埜阿蘭若中。其名曰摩訶狂雲。此是阿羅漢投胎自飜觔斗下世於娑婆穢土。曰阿耨多羅三藐三菩提心現許多神通。禪機活潑。遊戲周旋。任情玩世。極意佯狂。不知何因緣而來於此娑婆。俾狐禪闍提愈滋驗於其蹟。而疑於其心。極

極樂世界、清淨無垢、天樂耳に聒く醍醐口に甘し。乃至迎老を師となし、聖衆を友となす。事事如意、事々圓滿、是欽すべからずして孰れをか欽すべけんや甚しい哉、慈悲平等の佛心に於ける、寧ろ暫く且つ、彼の欽すべきを辭すとも而も衆生の耽淪を坐視するを忍びず。軀命を惜まず、濁惡に混同し、種々方便種々說法す。然るに狐禪闍提は記せず省せず、概して以て黠僧人を瞞すをいふ。

樂世界。清淨無垢。天樂聒耳。醍醐甘口。乃至迎老爲師。聖衆爲友。事事如意。事事圓滿。是不可欽。而孰可欽乎。甚矣。慈悲平等之於佛心。寧暫且辭彼可欽。而不忍坐視衆生耽淪。不惜軀命。混同濁惡。種種方便。種種說法。而狐禪闍提。不記不省。槩以謂黠僧瞞人。每每如此。況乎迷惑衆生。其孰能畧其蹟。而認其心。舍其糟。而歡其醇者

猶ほ此の如し、況んや迷惑衆生其孰れか能く其蹟を略し、其心を認め、其情を捨て、其酷なる者を　らん。是寔に憐愍すべしと爲す。聞く佛弟子、殊に後生を開提醒むる如き者、以て墮落の教と爲し、迷惑衆生をして、遂に機緣を失はしめんことを慨く。故に遺教の入易きの徑を開き、醉菩提經若干品を作る。一切衆生迷惑煩惱一旦活佛の開示を蒙り、悉皆醒悟せば、所謂煩惱は即菩提也。

是寔為可憐愍矣。聞佛弟子殊概後生聞
提如醒者、以為墮落之教、使迷惑衆生遂
失機緣。故開遺教易入之徑、作醉菩提經
若干品。一切衆生迷惑煩惱。一旦蒙活佛
開示、悉皆醒悟、所謂煩惱即菩提。不其然
乎。醒醒導師生于數百年後、特奉行活佛
之教、建立法幢、開張道場、翻譯此經、演說
勸化。固欲使衆生遍蒙活佛之鴻恵也。嗟

それ然らずや。醒々導師數百年の後に生れ、特に活佛の敎に奉行し、法幢を建立し、道場を開帳し、此經を飜譯し、演說勸化固より衆生をして遍く活佛の鴻恩を蒙らしめんと欲する也。ああ此經を受持し過を改め善に移ることを知らば乃ち活佛の慈悲は則ち導師の慈悲のみ。余隨喜にたへず、書して以て十方の道衆に告ぐといふ。

謹て序す。

文化五年戊辰

六月穀旦

弟子　勃一校字

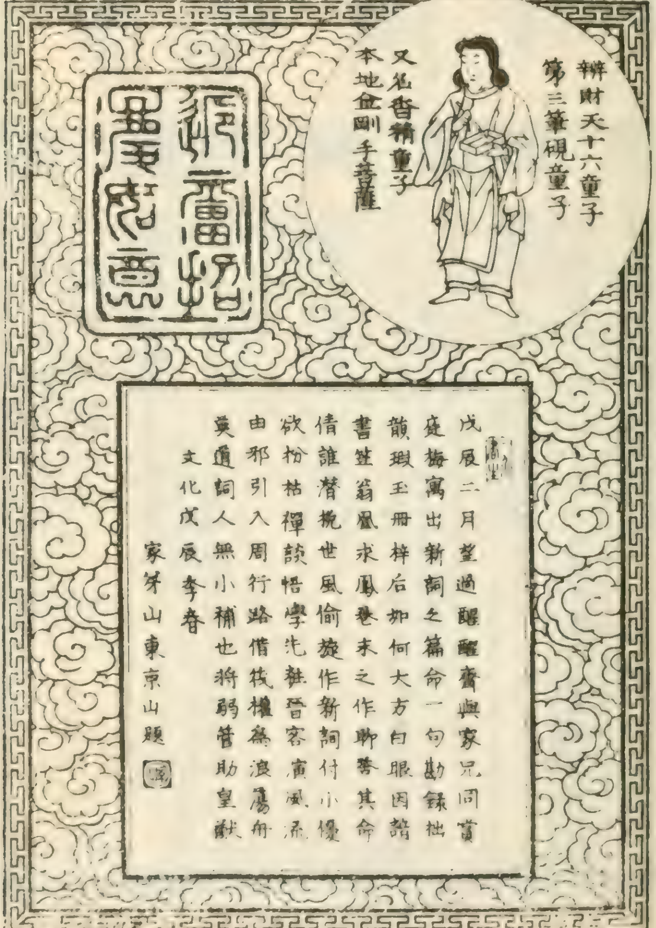
受持此經而知改過移善乃活佛之慈悲。則導師之慈悲已。余不勝隨喜書以告十方道衆云。謹序。

文化五年戊辰六月穀旦

弟子　勃寧　校字

戊辰二月望醒醒齋を過り、家兄と同じく庭梅を賞す、偶新詞の篇を出して一句を命ぜらる。勘ふに拙副を録して玉冊を暇さば梓后大方の白眼を如何、因つて譜に笠翁鳳求鳳卷末の作を書して、聊其の命に答ふ「

誰を倩うて潜に挽せん世風の偸きを、旋つて新詞を假つて小優に付せん、枯禪談情の學に扮せんと欲して、先づ晋客に梿うて風流を演ず、邪に由つて引いて入る周行路、筏を借りてかりになす浪蕩舟、道ふなかれ詞人小補なしと、また弱管をもつて皇獻を助けん。



戊辰二月望過醒醒齋與家兄同賞
庭梅寓出新詞之篇命一句勘録拙
韻瑕玉冊梓后如何大方白眼因譜
書笠翁鳳求鳳卷末之作聊答其命
倩誰潜挽世風偸旋作新詞付小優
欲扮枯禪談悟學先拙晋客演風流
由邪引入周行路借筏權爲浪蕩舟
莫道詞人無小補也將弱管助皇猷
文化戊辰季春
家芽山東京山題

○毎回假用法華之品目以為撰名ト
○通計十六品以阿羅漢之宝号ヲ為號ト
○跋羅駄闍 住在西瞿耶尼州ニ
○迦諾迦伐蹉 住在北方迦濕弥羅国ニ
○諾迦跋釐駄

卍 新刻本朝醉菩提全傳

品目釋義

善惡因果序品第一

此小説一部なるは善悪因果の理を説其発端なれゆゑに序品とす

得失譬喩品第二

金を失て児をひろひ児をすてゝ金を得る善悪つひに報ある事を説譬喩をもつてすを故以て目て品とす

醉菩薩方便品第三

一休禅師假に顛狂を發して世を度を是所謂方便なりゆゑに此品に目を

住在東勝身洲

○蘓頻陀 住在北倶盧洲

○諾矩羅 住在南贍部洲

○跋陀羅 住在耽没羅洲

○迦哩 住在僧伽荼洲

剃度功徳品第四

梅津嘉門景春の児剃髪の事を説一子出家すれば九族天に生ずといへり故に功徳品と称す

姉妹本事品第五

科註擧昔事以顯今故目之爲本事品といへり此品兄弟の女児をかくど相會事を説ゆゑに此品目を假用せり

侠客提婆達多品第六

此品に出る侠者の諢名を提婆と称すゆゑに此品目とちいへり

地獄信解品第七

弗多羅
住在鉢剌拏洲

戍博迦
住在香醉山中

半諾迦
住在忉利天

泉州沙界高須の娼婦地獄一休禪師に參禪して
信を發し解を生し疑を去て理明あるゆゑになり

古狢如來神力品第八

古狢佛菩薩に化来て仇をむくいんとを一休禪師これを
知て鴨川兵衛に射させむ禪師の神通如来の神力に
異あらざるゆゑに此品に目たり

父母安樂行品第九

孝子土器を賣て父母を養ふ父母家へ貧しといへども
心をおだやか安し これ孝子の行よりいづるゆゑにこれを
目してなり

畜生勸發品第十

羅怙羅
住在畢利颰瞿洲

那伽犀那
住在半度波山

因揭陀
住在廣脅山中

科註勧発者懲法之辞也と一休禅師狗子佛性箇無字と説て煩悩の犬を化度を故に此品とおほけて畜生勧発といふ

處女授記品第十一

科註授是與義記是記事也と此品一休禅師慈悲と與て婦女を教化する事を記を故に志ら号

災禍従地涌出品第十二

佐々木判官唯一夜に滅亡を災禍忽地より涌出さるが如き事と説故に此品目と假用せり

百蟹陀羅尼品第十三

百蟹の名画其精をあらハして妖獣の危難をさとらふ

伐那婆斯
住在可住山中

阿氏多
住在鷲峯山中

注荼半託迦
住在持軸山中

陀羅尼の大功徳に異ならざ故になりけり

生死流轉藥草喩品第十四

山に入て藥を採ミ起て一品總生死流轉の理を説示を

赤縄囑累品第十五

囑ハ付也累ハ縄也此品月老の紅糸にて結ひて聯歓

夫婦となる事を説り

髑髏化城喩品第十六

法華経化城喩品なりけり宿世の因縁を説此品を一体

活仏なりけり宿世の因縁を説髑髏となりて世の無常を

示を故に此品目を假用せり

通計一十有六品終

稲妻表紙後編本朝酔菩提全傳

例引

〇一休禅師任情遊戯を以本来の面目とを宋代の済顛大師の行状ニ相似たるものゆゑに此書を本朝酔菩提とゝ名

〇前編著述の刻後編の径路をまうけおけど今也書肆の懇望やむことをえど俄に後編を作れバ前後の編を合し閲とき人乃年齢事の時日等齟齬することおほかるべど看官これをゆるしむことあれ

〇此編の時代應仁より起れり其頃一休禅師すでに七十餘歳なり此ゆゑ三十ろ五十ばかりの年齢をを実録よりくらべ大にたがひこれも

すみやかに後編を出せるのゆゑなり

一笠翁の序に此書を禪師の遺經とするハ風流好事の所爲にて

毎巻譯の字とあるをハ其意にならふ而已其諸をいぶかることなかれ

原書醉菩提傳の編者明人桃花庵ハ醒齋と號す予が號を

醒々齋といふ暗に號を合せり此書を編するにおいて一因果あるに

あらずや

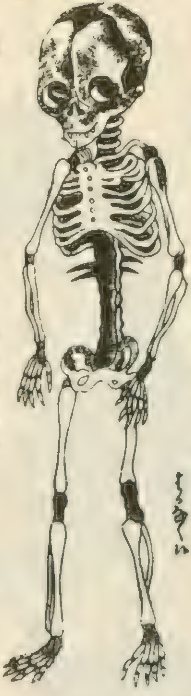
江戸 醒醒齋京傳識

文化五年戊辰夏六月

臭皮袋図

いづれの人か骸骨にあらざるべきただひとへの臭皮袋につつみてもてあつかふほどこそうつくしくも見ゆべきのべてもあれ息きえ身の皮やぶれぬれば男女の色もなくかみしもの分ちもなしただ皮の下に骸骨をつつみて持たりとさとりてひとつくだきにては

無常の風いりて息きえ身の皮やぶれぬれば男女人毎よ
かならずはなるむかしの美人骨になること
ただ皮ひとへの迷ひなるをしれ



皮にこそをとこをんなの色もあれ
骨にはかはる人かたもなし

一休

時をきらはぬ無常の風いらば二つの眼たちまちにとぢ一つの息ながく絶ぬれば紅顔むなしく変じて白骨となるとその身のうへをはかりがたしされば九相の詩の序に見えたり
骸骨の人をよそにて見るかな

鬼貫

愛網開はるなくして愛纏はず
金田種有つて金仙を種うて
禪心妄に塵中に在りて淨く
功行終に世上を須つて全し
煩惱は煩惱の際に脱し、
死生は死生の前に超出す、
火裏に枝葉を生ずる能はずんば
安んぞ花の開くを得ん火裏の蓮

這の八句の詩前明天花藏主人醉菩提の自題に係る、今特に篇首に冠し、看官をして本編の據る所を認識せしむ。

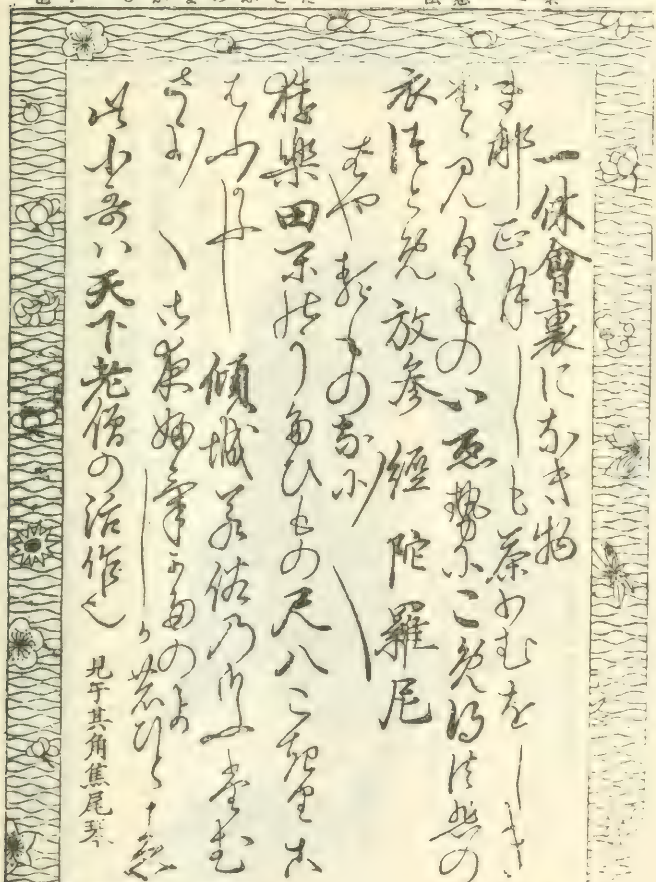
愛網無開愛不纏
金田有種〻金仙
禪心妄在塵中淨
功行終須世上全
煩惱脱於煩惱際
死生超出死生前
不能火裏生枝葉
安得花開火裏蓮

這八句詩係前明天花藏主人醉菩提自題、今特冠篇首、令看官認識本編所據云

傍若無人閑逸の心、奈何せん床下法塵の深き夢閨銀燭繡簾の月、白日青天咲うて朗唫、



一休會裏に
なき物
まな正月しも茶
わむをしきたゝ
みくものいゑ、
せにこめ得法悲
の衣、つとめ法
乘經陀羅尼
はやるもの
なに〳〵
猿樂田樂のうた
ひもの、尺八こ
きりこはふかふ
し。傾城若俗の
さふたむ、さよ
〳〵さ夜ふけか
たのよしかのひ
とこゑ。
此小哥は天下
老僧の活作也





出雲於国 歌舞妓躍之図



泉州堺高須名妓 地獄

‖甑たり三毒の一〻盞夜恒に嬉く擣錆たり百八の數、夏冬尤も繁し。




一休和尚以髑髏示無常


不破伴左衛門重勝
名古屋山三郎元春一子小山三


酒賣亦六之妻於三輪
一休和尚


天狗ハ名ありて其形を見ず古来唯能善を護て悪を罰す形を畫て世人の戒と

髮眉聳立して凛きこと烏喙に似たり、両目晶瑩光急電の如く、近肸の臉怪肉を横生し、巴蹄に嘴獠牙を露出す、鬢の内三は淡紅の鬚を結ぶ、耳後の三髻、長短の髪、粗豪の氣質凛て生鐵の圓成せるが如く、却て裸体の身材、却つて頑鋼の鑄造せるに似たり。




浪花伉俠野晒悟助
曾て荘子が髑髏の語
小町があなめの野を悟して衣服に
髑髏の形状あらく人の天を奪とと
実是髑髏日中の草を抜が如し

墮畜生道の圖



絹衣草を翻して去り紅嘴花を啄んで帰る



得失榮枯總て天に在り機關用ゐ盡してまた徒然なり、人心は足らず蛇の象を呑むに、世軍到頭蟷蟬を捕ふ。



邊の錫杖
南虎を解き
床下の鉢盂
一龍を蔵る



勢州関地蔵

勢陽雑記云文明年中尊像再興の時
往来の僧一休和尚を招じて開眼の導師とす其偈に曰
釋迦ハ過弥勒ハ未出ぬ間の浩ゝ浮世に開眼地蔵
傳へて此関地蔵再興の時一体和尚に開眼の導師を
乞ければ一体仏の頭へ立て小便しさりとも開眼ハすミたれとて
跡をも見ずして過去りぬ所の諸人ハこれをあさミて驚きて
水をそゝぎ清ければたちまち其人々に物怪つきてなやミければ
天下の老法師の戯眼をひらきたまひける所為何とて
いかりけるをとひさふるにのたまひけり人々又これに驚き彼和尚の
行跡をもとめてさまざまの事をいひて難きけるに和尚此度ハ焼香を
こらして是を地蔵の前にまとひ置よとあへる是しも勿体なくハ
おへども此めの奇特に物ぼりし散のごとくにまよひ込ぬ物怪ハ
忽ち去りぬ



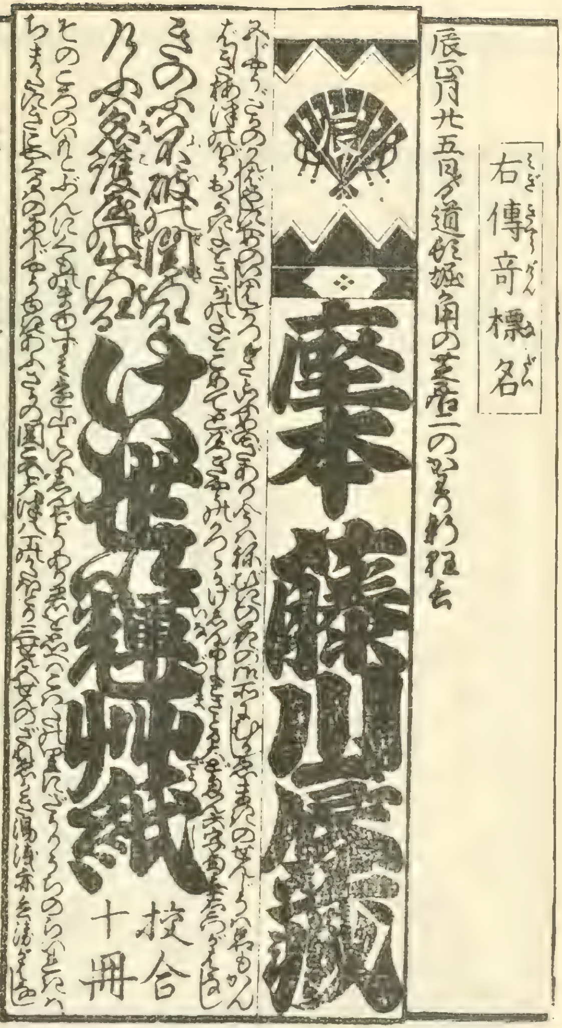


各位の主顧に告たてまつる。文化丙寅の冬。本坊発兌せる。醒々先生乃稗史。稲妻表紙前編六巻。幸に行れ。今春浪華の戯場両坐に於て。那俤の旨趣を傳奇に翻案て二艶段とし。大に看官の耳目をおどろかせしに到りつゝ後編渇望の人多し。おりしも清朝康熙二十六年の春。百花坊の雑劇に演義三国志を翻案して。千里栁塘偃月刀を作り。水滸傳を翻案して。千字文西湖柳を作りしより。那両書の世に行るゝ一段を伝せりといふ。稲妻表紙における。和漢同日の談といふべし。これによりて再又先生に乞て後編一部を得て上木せり。四方賜顧の君子。各地縁分的書舗に就て索之。一覧を賜の後。好判語を弥請寄せ。則那両坐傳奇の標号打扮の圖を翻刻して左にあらはせり

東都書肆　文亀堂主人欽白

戯伶打扮圖





此下小戯子扮名目次あり略之

右狂言作者

奈川七五三助

近松徳三

市岡和七

て戯や伶打扮づ圖



不破名古屋傳奇考

貞享二年の印本に、菱川師宣の筆の繪草紙二冊あり。名古屋山三郎繪盡と號す。詞書ありて、往古山城國小幡の里に住、名古屋山三郎といふ者、父三郎左衛門正春の仇、同國伏見の里に住、不破伴左衛門といふ者を討たる事、北野のほとりに住、梅津嘉門、並に遊君高間の島城等が事をしるせり。いとおぼろげにて實記ともおぼえず。又英一蝶の筆に、名古屋山三郎仇討の繪卷物を世につたふるといへども、詞書なければ殊に詳ならず。僕按ずるに延寶天和のころ、土佐掾が淨瑠璃節に作てかたりたるが、自然兒女の耳に疑りて、漸世に傳へしとおぼゆめり。山三郎の僕に鹿藏猿次郎といふ者ありしといへり。貞享の印本舞曲扇林といふ草紙に記せる說なり。又名古屋三郎左衛門所ㇾ赴の娼家の奴僕に、猿といふ者ありと雍州府志に記せり。延寶八年江戸市村芝居に於て、遊女論といふ狂言に、原祖、市川團十郎、始めて不破伴左衛門に扮作す。時に三十歳なり。山三郎に扮する者、村山四郎次、島城に扮する者、伊藤小太夫なり。其狂言大いにおこなはれて、其年のうちに、其狂言を同戲子に三度まで興行しけるとぞ。其時伴左衛門に扮せる衣裳に、始て雲稲妻の形を摺ぬ。是おだまきといふ俳書に載たる、稲妻のはじまり見たり不破の關といへる、荷翠の句にもとづきて、團十郎自己の物このみなるよし。しかりしより後伴左衛門に扮するには、必衣裳に雲稲妻をつくる事になりぬ。團十郎前には◇如此の紋をつけたるが、伴左衛門の狂言の後、稲妻の一つを轉じて回如此に更けるよし。然則三升の花號は回如此稲妻の形雷紋なり。一說に草履打の事は、元祿の末年花井才三郎といふ戲子と、不破某が事より起れりといふ。名古屋山三郎に扮する衣裳には、昔より定たる花紋なし。僕稲妻表紙前編著述の刻、稲妻の花紋俳諧の句にもとづきぬれば、山三郎の衣裳も俳諧の句にもとづきてこそと思よせて、傘にねぐらかさうよ濡燕といへる晋子の句意をとりて、出像の花紋に、春雨に燕の飛かふさまを畫しむ。これによりて、這春浪速の芝居兩座ともに、山三郎の衣裳に濡燕を繡しつるよし。實に稲妻雨に燕よき一對にしてしかも箝るといふ詞、小生に似合しかるべし。浪華びとぬれつばめといふ小曲をつくりてもはらうたふ。其文左に記せる如し。

いもとせの、契たがへぬつばくらは、人の軒ばにせたいをまうけ、やゝおばうんで、雨よ乘とゑばみをもとめ、さもうれしげに其日をおくる。われらふたりはいつしかに、不破のせきやの關の戸に、せきとめられていなづまや、ありとは見えてこれぞとも、あけていはれぬむねのうち、つゝむにあまるそでの雨、もんは三つの傘に、ねぐらかさうよぬれつばめ。

右傳奇標名

辰正月廿九日ゟ通り堺町中の芝居二の口ゟ新狂言

摩川京流

附言 [illegible]

稲妻表紙後の彩色

十帖源氏意の写繪

[illegible]

再註

九冊

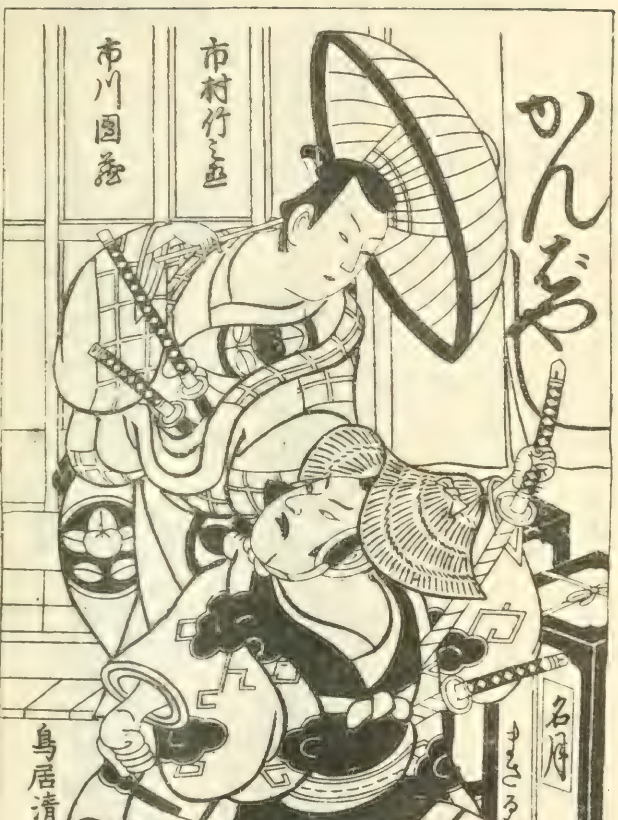
凡例 [illegible]

此下ハ戯子扮名目次あり略之

右狂言作者

並木三四助

奈河篤助



此に摹しあらはせる繪は享保のはじめ元祖市川團藏四代目市村竹之丞不破名古屋狂言の圖なり
漆繪といふは則是なり是此稗史に因緣あるによりて摹し出せり

□□おもしろき事ハ享保の初二代目團十郎不破伴左衛門狂言の繪草紙
けいせいの外題なり此時山三郎に扮せる者ハ勝山又五郎葛城に扮せる者ハ
藤村半太夫なり　繪ハ近藤助五郎清春の筆なり

第壱　芸者のおけいづ

第二　遊君のけいづ

第三　吉原ぞうりけいづ

第四　東山ハぢんけいづ

四冊合　稲妻草紙　つゞき



右繪草紙ハ稲妻表紙版元伊賀屋勘右衛門先祖の藏板なり此番ニ因縁あり
ありて此ニおもしろくあらハせり伊賀屋ハ繪草紙問屋の舊家なり

本朝醉菩提首卷終



本部有圖章字號主顧諸君須認此記為真

稻妻表紙後編本朝醉菩提卷之一

跋羅駄闍尊者善惡因果序品第一

如是我聞佛門廣大也。其一端を見て得たりとして、妄想すべからず。若如來常に住して、滅し給はざるを見ば、便憍恣を起して、厭怠を懐き、難遭の想、恭敬の心を生ずること能はざらん。此故に雙林の下にして、假に常住不滅の月の光りを隱し給ふ。又慳貪の衆生は、面前に奇妙を見るにあらざれば、道に赴くの心を起さず。かるがゆゑに佛菩薩、時々娑婆世界に垂跡して、種々法を説、或は神通を闡明して、濁世の愚庸を點醒したまふ。是亦所謂遊戯三昧なりとかや。一休禪師の遊戯のごときは、乃是衆生濟度の方便としられたり。爰に人皇百三代後花園院の御宇、寛正のころ、日本國中の靈場に、六十六部の妙典をさむる、有髪の修行者に、飾磨の竹根松といふ者ありけり。曾て劍難の相あるにより、其難をまぬかれんため、いまだ若年なれども佛道にこころざし、一所不住に諸國を廻りて、山城國愛宕郡六道といふ所にいたりけるが、日暮野遠うして留るべき宿なければ、此に野宿せばやと、木陰によりてやすらひぬ。抑此六道といふは、鳥部野の無常所にして、諸の亡者の爲に開くを以て六道といふ。桓武天皇平安城を開き給ひし時、人跡あれば死送の地なくんばあるべからずとて、此野を諸人の葬所とさだめ給ひしこと、遷都記に載たり。其掟此所にて引導諷經して、鳥部野に送りしなり。小野篁地獄に往來せしといふも此所となん。されば亡人のしるしの石、あまた立ならびて苔蒸たるもあり新もあり、無常遷流して送らざる日もなければ、末の露もとの雫おくれさきだつ煙常に絶る事なし。名留无貌松丘下、骨化爲灰草澤中とつらねたるも、かゝる所をやいひけめ。たま〳〵あるものは曝たる骨、草深うして露滋く、きはめていぶせき荒野にて、いと凄き所なり。送りて歸る人も遂には死出の山路の友なりと悲み、煙をわけていづる月影を鷲の高根の末かとうたがひしも、都て是此野の哀をいひけるなり。去程に修行者竹根松は、古き松の下の苔の露をはらひて笈をおろし、折しも盂蘭盆の時なりければ、心ばかりの靈迎ひ、冥途をてらす迎火と、木の葉を集め焚火して、草葉の露をそのまゝに、手向の水とおもひつゝ、笈佛にむかひて鉦打ならし、有緣無緣の諸精靈、成等正覺頓證菩提、南無阿彌陀佛あみだ佛

と、權且念佛して居たりけるが、月の影玲瓏としていたらぬ隈もなく、萩、桔梗、刈萓、女郎花、尾花、葛花の類の草ども、今をさかりに咲亂れて露重げなる風情なるに、いろ〳〵に鳴つくす虫の音の細やかなるが、念佛の聲鉦の音のひゞきあひていと物淋しく、すゞろに哀を催しぬ。風につれて聞ゆる野寺の鐘をかぞふるに、夜も已に更、燒火も消はてぬれば、いざ一睡せばやと油紙帳をたれて、夜露をしのぎ、雨衣を敷物とし、木の根を枕とし、身を横たへて睡につき、前後もおぼえず熟睡しけるが、やゝ時移りて睡を醒し、耳をそばだてゝ聞ば、虫の音かと疑ふばかり、いとかすかに管弦のしらべぞ聞える。修行者これを聞、あな怪かな。かかる荒野といひ夜深きに、妙なるしらべの聞ゆるはなぞや。狐狸野猫の戯るゝにかと思ひつゝ、頓て紙帳をかゝげ頭をさしいだして四邊を見るに、宵の程にかはりて夜霧深く立籠、月も暗くなりて面前さへ見えわかず、なほ管絃の音は霧の裏にありて、今は近々と聞えければ、益怪、耳をかたぶけて聞居るに、誠是、極樂國の微風、寶行樹、寶羅網（阿彌陀經）を吹うごかして、此微妙音をいだすかと疑はれ、曼陀羅華も雨來べく思はれけり。時に一陣の疾風颯と落し來て、霧を吹拂ひけるに、月も再かゞやき、結構美麗を盡したる館造、忽然とあらはれ出ぬ。其樣いかなれば、翠簾をたれ蔀をくだし、欄干、階級、杉戶、折戶、櫛形の穴、書院のかかり、すべて尋常ならず。彩色の繪障子金地屛風、月の光に照あひて耀きわたり、地より一時に涌出たるかとあやまたる。正面の上座に朽木形の几帳をたて、唐錦の褥を設けて、年のころほひ五十ばかりと思しく、執心深げなる面ざしの上﨟、丈なる黑髮を亂し、髮紐をむすびたれ、白綾の小袖に梔子の濃き腰巻したるが、脇息を傍におき琵琶を鼓居たり。左の方に、總髮の頭に素雪をいたゞき、しわみたる額に老の浪を湛へ、面野狐の如く眼皂雕に似たる老人、雲に稻妻の衣紋つけたる禮服を着して笙を吹居たり。右りの方を少し下りて、立髮つやゝかに髻茶筅にゆひ、相貌凶惡にして膽ふとげなる若者、是も雲に稻妻の衣紋つけたる禮服を着し、見事に彩たる火焔太鼓を敲居たり。すべて衣服の時にあらざるも又怪むべし。しばしありてかの上﨟琵琶をとりおき、右左をかへり見ていひけるは、いかに道犬伴左衞門笙も太鼓もやめよ〳〵。今盂蘭盆の時にあひ、たま〳〵娑婆に來りつれば、露ばかりも憂をはらさばやと、生前にもてあそびたる管絃を催すと雖も、なか〳〵にありし昔を思ひ出して、恨の種をましけるぞや。借賴豪院、笹野蟹藏、藻屑三平、土子泥助、犬上雁八等はいかにといふ。老人笙をおき手をつきて頭をさげて、

彼等も前程より御次まで參り、御召をまちて笠へ居候といふに、さあらばとくとくよびいだせといふ。茶筌髷の若者、畏み候と、いひつゝ立て行廊の方にむかひ、蜘手の方の御召なるぞ、箇々此方へ參るべしと呼はりければ、承はり候と口をひとしうして答つゝ、行廊の杉戸をさと開きて、出來る者等を見るに、先に進みたるは、面躰たゞ者と見えず、眼大にして光をはなち、身材高く肥太り、斬髮ちゞれて獅子の頭にひとしく、頰髭そらさまに反りて、鎌を逆しまにかけたる如くなるが、兜巾篠懸に紅紗衣を着し、最多角念珠を袖くゝみに持、中啓の扇を把てのさく／＼と歩來る。後に續きたる四人の者、孰れも面のかゝり惡氣なる輩にて、皆袴はきて出來り、はるか下に座をつらね、ひとしく頭をさげて禮をなす。蜘手の方是等の者を見やりていひけるは、今盂蘭盆の時を幸に、我汝等と共に、閻魔王に

權の暇を乞受て、此所に會合すること別義にあらず、我輩隱謀顯れて宿望をとげず、凡にかゝりて非業に死し、地獄に落て無量無限の苦みをうけ、片時も身を安んずることあたはず。とても苦患をまぬかるゝ時のあるべしともおもはねば、娑婆に殘れる者共に、災を下して冥途に誘ひ、共に呵責を受しめて宿恨をはらさばやと思ふなれば、存ずる所ある者ははばからず申せといふに、修驗者進み出ていはく、小人つら／＼慮かり候に、官領濱名入道由理之大夫勝基と、豫ての矛楯によりて、遠からず合戰おこるべし。又勝基の天壽已につき、病を生じて身まかるべき兆あり。小人其虛をうかゞひて、梅津嘉門景春が一命を奪ひ候はん。獬豸、三平、泥助、雁八等四人の輩は、小人につきて共に災を下し候へ。小人娑婆にありし時、妖鼠の術を行ひつれば、或は妖鼠に化して、名古屋山三郎にも災すべしと、

鼻をふきいからしつゝいふ。件左衞門これを聞、いしくも申されたり。小人は弟伴作が胸間に分入て、山三郎が妻八重垣を失ひ、或は小蛇となりて彼が一子小山三に災すべしといふ。道犬ほくそづき、いかさま其手段よかるべし。小人は嘉門に深き恨あれば、彼が妻子共を盡く亡すべし。蜘手の御方には、いかに思すやらんと伺へば、蜘手の方笑つぼに入、脇息をおしやりていひけるは、我は豫て惡しと思ふ、繼子桂之助、銀杏前、月若等に着て恨を報い、遂には館を叢となして、想をはらさばやと思ふなりといふに、いづれも口を等うして、それしかるべう候と申て、已に評議一決し、蜘手の方再びいふやうは、我娑婆にありし時は、汝等が面を見ざる日もなかりしが、今地獄中にありては、箇々在所を異にし、主從の緣盡て相見事だにあたはず。しかのみならず時々所を更て呵責せられ、修羅道にあり

ては夜三度晝三度の修羅の戰に、斬つきられつゝ身を徹し骨を碎き、ながるゝ血紅の波みなぎりて楯を流す。女はみづから戰はずと雖も、兵具おのづから來りて其身を責害をなす（往生要集）畜生道にありては、頭は人にてありながら、身は牛馬となり、盤石をおはされて火途劍山におひのぼさる。餓鬼道にありては飢渴く事常にしきりなれば、其身痩かれて衰れに力なく、矮偃として長閑なる春の風にも倒れつべし。たま／＼淸き流を臨て走り向ひ、手に掬びて吞んとすれば、忽ち火焔となりて身を焦す。いろ／＼の苦みかぞふべからず、汝等もさこそあるべけれ。たま／＼閻魔王に暇貰ひて此所に會するなれば、せめて汝等とともにものくひ酒吞て、片時の飢渴を助くべし 其用意とくせよと仰せければ、蟹藏三平承はり候といひて次の間に立、一人は長柄の銚子土器をたづさへ、一人は脚打の廣折敷に、蓮の强飯を堆く盛て捧げいで、蜘手方の目通りにすゑて、蟹藏酌にたちぬ、蜘手方土器取上て差出し給へば、膝行よりてたぶ／＼とつぎくだす。飢渴に堪ざる蜘手方とくのまばやと土器を、口のほとりに寄るとひとしく、酒靑き色の炎となりて閃々と燃上り、面を焦しけるにぞ、あなやと叫び、土器を礎と投棄て悶絶し、仰樣に倒れけり。蟹藏が持たる長柄の酒も、一時に炎となりけるにぞ、堪



被て笹包の上に取おとすに、炎轉手擬面燃つきて、半月の月の光も、三悪道の焔の雲にかくれけり。太鼓の火焔も目前に焦熱地獄を見る如く、笙の簧も披散し、抜舌地獄はこれなめりと思はる。道犬伴左衛門等おどろき、鄭子の方を扶起さばやと立寄けるに、在住の傍も烈々たる猛火となりて燃上り、南大の身を焦しけるにぞ、仰反てこれを遁る折しも、虚空に雷の如き聲轟々となりとよむ。悪者これを聞と等く面色青ざめ、すは／＼修羅の鼓の響くなり。閻王の迎ひ来るべし。又呵責にあい苦むことかといひつゝ、閻卓変と伝てかなけるに、忽一朶の黒雲覆ひかゝり、地獄変相の図にて見しりたる、（十王）倶生神、倶精鬼、紺魄鬼と六ツの鬼、鉄を把、剣を持、黒縄を手に、牛頭馬頭の阿防羅刹に、火の車をおさせて虚空より飛下り、毒蛇、悪猫、無常鳥、抜目鳥を従がへければ、悪者逃去んとするを、



獄卒等鉄の笞をあげて打倒す。毒蛇は頸筋にまとひつきて胴をしめ、悪猫は腹を食裂て臓腑をくらひ、無常鳥は血を吐、火焔となして身を焦し、抜目鳥は嘴を鳴して眼を啄む。これにより一鄭子方を始として、道犬伴左衛門其餘の者等總て、あな苦しや堪難やと、一同に喚叫、拳をにぎり足をちゞめてたゞ苦む躰、火に入夏の虫の如くにて、見る目もあてられず。管絃の妙なる調にかはりたる、罵詈



號泣の聲の恐しさ、聞に身の毛もいよだちぬ。或は鮮血に染て紅に變じ、或は燒爛て黒に變じ、算木を亂せるやうに倒れて皆死入ぬ。斯ていかにするぞと見るに、獄卒共立寄、活々と唱てよび醒し、やがて蘇息て舊の形になりたるを、情氣もなく襟首つかみて、殘らず火の車に乘、虚空をさして馳歸る。猫蛇の類も共にゆくと見えしが、再又一陣の疾風颯とおろし來て、館造を吹散し、かき消樣に失て、忽舊の野原となり、高燈籠の火さへきえて、凄涼寂寞として、唯蟲の音のみぞ殘りける。修行者曾根松なみ〲の者ならば、魂も浮れ骨髓も碎けぬる心地もすべきに、元來したゝかなる者なれば、此始終を殘らず見果し、あまりの怪さに、是皆夢中の妄想か、幻の闇の怪異なるかと、其境だにわきまへざりしが、彼人々の呼かはせし姓名を、幻に覺えたるうちに、伴左衞門といひしは、不破伴左衞門なめり。名古屋山三郎といへるも、聞傳へたる名なりと思ひつゝ四邊を見れば、千草のうちところ〲炎に焦れたる跡あり。さては現前に亡者の會するを見、呵責の有樣を見たるなり。此所を六道といふは、娑婆と冥途の境にて、亡者の往來する故といひつたふるも虚言にあらずと、獨言いひて、現化不思議を恐歎し、夜已に明ければ、紙帳雨衣をとりをさめ、笈をせおひ錫杖をつき、鐘打鳴しつゝ立去んとしつるに、草深き裏より、野臥の乞食二人あらはれ出、去先に立塞りて、物ありげなるお修行者、盆の功德に施しめせと呼はりぬ。曾根松はこれを耳にも聞いれず、道をかへて彼方にゆくに、爰にも又乞食二人現れて、同じことといひて支へたり。曾根松は左右の道を塞がれて、詮術なく立とゞまり、朝の雲夕の露、一所不住の身の上なれば、施すべき物の貯なし。とく〲道を開きて通せといふに、乞食等口々に、我輩が見こんだる其懷、豈手をむなしくとゞめんや。汝手づから施さ

ずば、手ごみにすぞと叫はりつゝ、四人ひとしく身に被ひたる鷹を手早く擲捨て、右左に立ならぶ。曾根松は事ともせず、ほくそ笑して居たりけるが、身の程



しらぬ乞食共、懷目懸てさし入る、腕首とらへて捻返し、弓手にかゝるを足下に蹈て、瞬然と打笑ひ、我釋門に志を運び、慈悲善根を旨とすれども、盗人に與ふる錢財を持す。蔣草席の新佛、經帷子だに身につけぬ、餓鬼道の衆生等、此は名にあふ鳥部山、左ばかり手の裏望なら、握拳の六道錢唯一打が南無地藏、地獄の引導授てやらんとほざきつゝ、襟上つかんで地に投つけ、早足を飛して踏倒し、なほこりもせず取つくを、弱腰とりて翻へし、續てかゝるを錫杖にて、向脛なぎて打倒し、朝露もちし諸草の花を微塵に踏散して、しばしの間挑しが、思ひかけざる働きに、こは叶はじと乞食共、鷹に追るゝ鶉の如く、叢間に高這して、何方ともなく逃失けり。偖修行者は後も見ず、しづかに鐘をならしつゝ、塒をいづる旅烏、東をさして歩行ぬ。

○修行者霧の裏に妙音を聞て、極樂國に到るかと疑ふ疾風霧を拂ひて、忽地極の變相を見、妙音は乃罵詈號泣の聲と變ず。地獄天堂わづかに霧一重をへだつるのみ。修行者は一切衆生、疾風は本來空、霧は迷悟の堺にたとふ。此一段是佛鬼一如の理にもとづきてつくれり。

それは偖おき爰に又、信濃國の主護職に、望月左衞門顯滕と聞えしは、官領由利大夫勝基の心にかなひければ、おのづから室町御所の御氣色も人に勝れてときめきぬ。其家士に詫麻彥太夫といふは、小祿を給はる者なれども、曾て茶道をたしなみ、其業に達しけるにより、顯滕の茶の湯の相手となりて、側近く仕けり。其子に彥惣と云者あり。丫角の比より召出されて、小扈從をつとめけるが、十七の年、父彥太夫病によりて身まかり、母も續き

て亡人の數にいり愁傷深かりけるが、其後元服し家祿を增給り、近仕の者にくはへられて仕へ、此年已に二十一歲にぞ到りける。此彥惣元來才賢く萬の事に辨へあり、弓箭の藝に攜はる暇、茶道を學ぶ其道をきはめ、詩歌管絃の業にまで心をよせつゝ、なべてならず優に情深く、殊更類なき美男にてありければ、娘持たる者は彼が如き婿取てこそと思ふ者多かりけり。又顯廉の夫人に仕ふる侍女に香曬といふ少女あり。此年十九歲に到りけるが、容最うつくしく、翠の山に月の出るが如く、雛の内に梅の綻たるに似て、心の色も猶深かりければ、心を通はせざるはなかりけり。然るに香曬いつの程にか彥惣を思ひそめて、密に艶書を送り、割なき志を告てさま〴〵にかきくどきけれども、彥惣は家の掟を顧みて承引す。文だに手にとらざりけるが、香曬はひたすら戀慕ひ、知俱摩の河泊の綱石、千々に砕くる思ひ寢の、寢醒の床の現にも、其面影のさへぎりて、伏屋におふるはゝきぎの、有とは見れど逢れねば、相初川は名のみにて、宿世結ぶの神もなく、浦見の山のうらみ佗て、袖の涙は園原や、木賊にみがく白露の、玉章の數も積りければ、彥惣も流石情に弱る心にや、谷の椅を蜘手にて、ちらぬ花踏棧の、危きことも忘れつつ、保屋の薄に招かれて、會地關の關しきも、間もうかゝふ諏訪湖、氷の上の通路も、度かさなりて打解ぬれば、岐蘇の麻衣あさくのみ、染てやむべきかはと思ふ心やや出來て、水もらさじとぞ契りける。かくて香曬懷胎の身となりけるにぞ、二人ともに事の顯れんを恐て、いかにすべきと心を痛めけるが、惡事千里を走るの理にて、一人知二人知て一家中の噂となり、日來彥惣を嫉む者多かりければ、陰言にいひけるは、若彥惣が如き我輩が身の上に、あしきふるまひあらば、忽罪せらるべきが、彼は相公の心にかなひ、小祿よりとりあげて、召仕給ふ愛臣なれば、よろづの事を緩がせにしおき給ふ。彼が密通をよもしろしめさゞることはあらじ。依估の事にあらずやなど、人の聞がしにいひけるにぞ、おのづから顯廉の耳にいり、やをれ彥惣め憎きやつ、日來情をかくる恩義も顧ず、家の掟を破る條、希代の不忠者哉とて、大に怒り給ひ、夫人に告て香曬が事を糺し、二人ともに罪すべく思はれけるが、夫人これを聞て、彼等を深く憐み給ひ、折よく祖父の年忌に當りけるを幸として、相公に聞えて二人の命をこひうけ給ひけるに、顯廉も一度は怒給へども、實は彼等を不便に思す心なきにあらず。罪せんとあるも畢竟掟を破るまじき爲なれば、祖父追福の爲に託し、夫人の乞給ふに應じて、一命を助け兩人ともに阿房拂ひにぞし給ひける。彥惣香曬二人の者は、今更身の誤りを悔思ひけれど

ち、歸るべき事にあらず。生まじき命生たるは、主君御夫婦の深き御情にこそと、館の方を伏拜みて、袖しぼりつゝ立去けるが、彥惣が族は皆同家中の者なれば、一夜もとゞまる事能はず。香晒は原養女にて、養親夫婦身まかりて家絶ぬれば、これも詮術なし。日來親しかりしも、弱目を救ふ者はなき習ひにて、賴む木陰も雨もりて、立寄べき所もなければ、前にわたりなく、後に途を失ひたる心地し、足なき篁の如く、走るべくも走られず。浮雲の迷ひに迷ひて、思ひ煩ひけるが、香晒いふやうは、妾が實の親大和國にあれば、權く且彼國に往給ひて、身のをさまりを計り給へといふにぞ、さあらばとて途中にて行裝を調へ、大和をこゝろざして、はるけき旅路に赴きぬ。香晒は大和の山家にて生れけれども、幼時都人の養女となりて、望月の館にみやづかへしつれば、和歌の道糸竹の業など、みやびたることにのみかゝづらひて、襲衣の重きすら身上にたへざる手弱女なる上に、懷胎の身にしあれば、殊更進退自由ならず、穿もなれざる草鞋を踏て、名におへる岐蘇の險路をたどるなれば、脚破れ血淋りて、道邊の草を紅に染、彼所に跌此所に倒れて、風に散初花にひとしく、嵐にいたむ女郎花に異ならず。彥惣此體を見て、かくてはいづれの日かこゝろざす所にいたるべき。自氣を勵せよなどいひつゝ手を携へて扶行。山駕籠やとひて乘などすれども、とかく道はかどらず、數多の日數を經て、辛じてやう／＼大和國にゆきつきぬ。香晒が實の親は山蛭の洞九郎といひて、大和國葛下郡二上嶽の麓の荒屋に住、年六十にあまれども、獵戸の業をして、とぼしき煙をたてけるが、生得貪欲深き者にて、利の爲には恩愛もしらず、情氣もなく、唯人につきて災する事多かりければ、里人惡みて、山蛭といふ評名をぞ負せける。實にや世の中にある人と住家とは、淀に浮ぶ海蘊の、且消且結て久しくとゞまる事なしといへるぞ宜なりける。香晒は十歳の時古鄕をはなれ、僅に九年を過ぬれども、今來て見れば、人も住家も變れるが多く、常に遊處とせし、山守の家もなくなりて叢となり、麻畠にてありし處は、かへりて人の家居となる。若菜摘たる野も落窪て沼となり、篁迫たる澤も水あせて岡となれり。唯昔にかはらぬは辻堂の石地藏谷川の水音のみなり。斯しも夕日傾きて、彩色雲の旅衣、水に映りて暎けば、常にいたゞく樹の梢も、淺ゆく秋の錦しぐれ、宿に迷ふ群雀も、我身の上と思はれて、妾こふ雛も戀ゆゑに身をやつすかと哀なり。香晒はおのが生れし家のあたりは流石忘れねば、此野の末の一つ家にて待りとて、彥惣と手を引合て案內し、野分の風に腫もあらはにして、路芝の露を踏分つゝ行に、雷

に裂れし松の目印あれば、こゝぞと近べきて見るに、家は軒端傾きて朽葉つもり、壁の骨あらはれて打よろぼひ、蔦葛はひまとひ葎おひしげり、荒たきまゝに荒て、昔見し形はなけれど、鹿の皮猪の皮などのなまなましきを窓のほとりに掛渡して日に曝し、獵犬をつなぎおきつれば、今に狩をし給ふにこそと思ひつゝ、下葉色づく萩垣の間より見れば、父洞九郎頭に霜をいたゞき、額に波をたゝへ、襤褸を身にまとひ、蒲壁手をかけ、嵓菅の脛巾をゆひ、節巻の弓猿の皮の鞘に鹿矢あまた指たるを傍におき、柴折くべたる爐火の許に趺踞つゝ、陶酒飲てぞ居たりける。扨もわづかのほどに年よられし事よと、すずろに悲しき心もしらで、人目まれなる山里の根笹にすだくあばれ蚊の、女の膚の珍しげに、袷越さへ面憎く、長き袂に打拂ひて、しばしたゝずみ居たりしが、且彦惣を折戸の口にまたせおきて、我ばかり裏にいり、父上なつかしやといへば、洞九郎老眼を擦摩て打まもり、いぶかしむさまにてものいはざれば、妾は香晒にて候といふに、洞九郎打驚、何娘とかといひつゝ立向、さても美麗生立けるな。あまりに姿の變りたれば、我子ながらも見忘れしぞ。率々といひつゝ筵とりて塵打拂ひ、佳文席打ひろげて此へといひてすゑおき、なほつら〳〵と打視り、其方は幼き時より淸らにて、鵄が鷹うみしと里人にもいはれつるが、かばかりうつくしう生たつべしとは思ひよらず。女は氏なうても玉の輿に乗とかいへば、末頼もしき娘ぞといひて、あからめもせず見居たりけり。香晒は四邊をかへり見つゝ、母さはいづくにぞ、恙なくおはしつるかとたづぬれば、母事は三年前身まかりぬといふを聞て打驚、日來病がちにておはしつれば、いかにおはすやらんと思ひし事は度々なれど、宮仕への身といひ遠路と云ひ、音信もせざりしぞや。しらぬこととて産の恩海山うけし母さまの、精進だにせぬ不孝さよといひてなきしをれぬ。時に洞九郎一生不通にして養女につかはしたる其方、望月の館に仕へて居とは風の便に聞つるが、思ひがけず古郷へ來しは何故ぞと問けるに、香晒は面ぶせにて、あからさまにもいひがたく、稍に顏さしいれてしばし答へもせざりしが、とても一度はいはねばならぬ事と思ひ、我誤りの概略を語り、身の置所なさに御怒りも顧ず彦惣殿を伴ひて參りしと、逃る詞も掩紅葉、顏にちらしていひければ、洞九郎打笑、若人にはなき例にもあらず。彦惣殿とやらとく〳〵こゝへ呼入よとあるに、香晒立出て彦惣を伴ひ、父に引合すれば、彦惣恥らひつゝ一回の挨拶終り、とかく我々が身の上よきに賴み候といへば、洞九郎打點頭、氣づかひしめさるな。かくなる上は婿舅の間なれば、

いかでか麁略に扱ふべき。見らるゝ通りの貧き暮し、壁の崩を繕はぬは、月を燈火にかふる爲、唯澤山なは筧の犬と借錢のみ。それいとふ心なくば、何時迄もかくまひ申さん。かく年は闌たれども、身は未だ衰へず、春夏はねらひ射、秋冬は笛待落しくゝり押上り犬山などいひて、晝夜の山稼に、鹿落し熊押などいふ惡所をはたらき、險阻の石群を駈廻ても、手足が丈夫なれば、若者等に劣たる事なく、穴熊の一番鎗、手負猪の向射なんど、我眞似する者一郷にある事なし。これ見給へとて偏袒、まだ肉合も落ぬぞやといひつゝ、黑き腕を押撫て見せ、畢竟我酒に錢を失へばこそ貧しき目を見るなれ。此弓箭さへあれば、おみら二人見事養うて見せ申さんと、ほこりがにいひけるにぞ、彥惣も香晒もいとたのもしく思ひて、權且此に身を托みぬ。洞九郎は日來香晒を一生不通にくれたる事を悔居たるに、思ひがけず古郷に歸り、娶の美麗に生立たるを見て、心中密に喜び、且二人倶にとどめおき、彥惣を追出し、能婿取かさもなくば、富家の妾阿曾比などにもして、數多の金にせばやと思ひけるが、彥惣が携へたる旅荷物重げに見えて、貯の金ある樣子なれば、　且彼金のあるうちは此におき、用盡させて後追出すとも遲からじ。娘も懷胎の樣子なれば、其內には身二つになるべしと思ひて、假に片家の蜘網を拂ひ、簀子を繕ひなどして二人を住はせ、萬の事を賴もしげにもてなしけるにぞ、二人の者はさる惡意ありとは夢にだもしらず、心ゆるしてとゞまりぬ。彥惣はいさゝか貯の金あるを以て、日々の費に換けれども、坐して食へば山も崩、居ながら飲ば海も乾の理なれば、貯へ盡なばいかにすべき。何にもあれ營をせばやと思へど、山里の住居なれば、日來學び得たるうち上りたる藝どもは、一つも用にたゝず。差當りてすべき業もなければ、筆のすさみに奈良團扇の繪をかき、人傳にやりて僅の活計とす。香晒は色ある衣も所から人目立を厭ひて、布の衣に着更、面を照に塵ばむ盆を鏡とし、髮とりあぐるに苔井の水を油として、いさゝかも粧を施さゞれども、生得たる風流の容は、いかでか紅粉を調弄にあづかるべき。娶の色香は失もせず、人の眼を奪ひけり。野を一つへだてて住賤女に岩芝といふ者あり。年は四十歲ばかりにて、遠く盛りを過ぬれども、素よりの姿いとうつくしく、山家の生立とは見えず、言語立擧動都人の果と見えて、昔ゆかしく思はれける。夫あれども旅商人にて常に旅ありきし、家に居る事は稀にて、唯此女のみ獨住のやうにして居けるが、折々洞九郎が家に往來て、彥惣香晒等ともしたしくものいひかはすやうになりぬれば、香晒は此女に賤の手業を習ひ、琴調たる

手に機織ば、梭をなぐる間も安からず、つらき月日を文車の、綱もしんくの糸車、近き山に登りては、つま木に花の草結、遠き海に通ひては、磯邊に拾ふ貝合せ、薫籠に似たる竹籠も、芝刈入るゝわびしさに、風も薫らぬ針目衣、姿も業もやつしつゝ、唯思ふ人とつれそふのみを樂みとして日を運びぬ。洞九郎は豫て心にたくみあれば、粟の代鹽の代、此費彼費など、さま〴〵の事に託し、いろ〳〵の僞りをかまへて、貯の金を貪けるにぞ、今は纔になる、此末はいかにして世を過すべうなど思ふ、萬の苦勞の積りけるにや。彦惣病の床につき、つや〳〵ものもすゝます、身上瘦衰へ日に異に重りて、いつおこたりはつべうも見えざりければ、香晒は大に愁ひ、終日終夜枕上に附添て看病し、良藥をもとめ神佛を祈り、さまざまに心をつくしぬれども、其かひもなければ、ひたすら嘆き悲みぬ。殊に藥の價加持祈禱の布施物、彼是と日々の費を多くなり、貯の金も殘りなく用ひ盡しぬれば詮術なく、僅に殘りたる着かへの小袖まで賣代なし、くれゆく秋の肌寒に、等閑たる寵愚の、寵に近き哀さも、我身の上と香晒は思ひくづほれつゝ、妾懷胎の身にて、既に八月にみち、産月も程近きに、夫の病苦未便よからず、我身はかりか孩兒も行末いかにならんぞと、かゝる貧苦を忍ぶのみか、夫にこゝろ苦せばこそ、思ひつゝ、落る涙を他人に、見せしとつゝむ袖の露、消かゝりたる燈火を、掻立やうに思へども、油盡たる肉合の、影さへ細き哀心に、風をわすれし立働す、破れ障子の骨組も、弱氣に見ゆる紙衾、裾におくれき、初霜に、野山の錦はあかく、て、窶懷させてふ蟋蟀、痩たる脛を撫さすり、あるかなきかの埋火に、暖め兼し草褥、貧し病の八重葎、しげれる宿のわびしさを、傍で見る目は病よりも、遙にまさる辛苦なり。彦惣は香晒が萬の事を苦に病上に、終日終夜睡もせず、心盡しの看病に、おのづから心氣つかれ、我よりもなほ瘦細りたる體を見て、胸ふさがりぬれば、重き頭をあげ、苦氣に息つきていひけるは、我々夫婦かゝる難義にあふことは、皆是主君の御目を掠め、親の家名を絶したる、不忠不孝の報にて、天罰の然らしむる所と思へば、先非を悔るよりほかはなし。我病斯日々に重りゆけば、快氣の程も覺束なし。其方の胎内左孕といへば、必定男子なるべきなり。親の血筋外になしつ、せめて其子を安産し、いかにもして養育し、たとへ武士にはならずとも、然るべき者となし、先祖の年忌親の命日、我亡あともとはせてくれよ。他人の千僧供養よりも、血筋の者の手向は、一遍の念佛、心ばかりの香花も、遙になさりて孝養になるぞかし。懷胎の身をもちて、晝夜の看病に心氣を損ひ、も

し胎内の子を過ち、親の血筋を絶ならば、不孝のうへの不孝なり。その腹の子出生し、成長の後々に、不義して設けし子としらば、さぞな其身の恥ならん。不忠不孝の者の子と、必ず〳〵しらせなよ。親の血脈と思ふから、只大切なは其子なり。とても本復なし難き、我を厭ひて身を破るな。ともに全きを求めんとすれば、二つながら失ふといふ事のあるぞかし。看病もよき程にし、夜も眠て身を大事にかけよ。若此言を背くならば、草葉の陰にて恨むべし。長く病苦をせんよりは、とく〳〵冥途に赴て、亡父母にめぐりあひ、身の誤を詫申さん。生者必滅の世の習ひ、死ぬといふ悲みあれば、生るゝといふ喜びもあるぞとよ。さりながら過去の修因、今生の現果、拙なかりける我哉と、いふうちにも胸の苦痛の甚しく、熱氣の往來しげくして、せきくる涙潸然と、枕の上に落かゝり、痰咳とともに哽入ければ、香晒は現心もなく、藥をあたへ抱かゝへ、やう〳〵咳を撫しづめ、不忠不孝の身とせしも、原を糺せば妾ゆゑ、思ひそめしが悪縁と、今更悔むかひなければ、天の祟あるならば、妾を罰して夫の病を本復させて給はれと、心のうちに念じつゝ、病は氣から起るといへは、心を弱く持給ふな。味なきをもつとめて聞し召し候へ。さあらばおのづから藥の驗も見えはべらん。自力を付給ひて、快氣あるやうにしてたべよ。恙なく安産をしたりとも、女の身一つにて、いかで養育なるべきぞや。たとへ手に手を取合て、乞食非人になるとても、夫婦一所に世を經なば、厭ふ心はなきぞかし。何樂みに我ばかり、後にながらへあるべきぞと、いひつゝ夫の膝に顏伏て、こぼす涙は霰ふる、雲の通路風さえて、乙女のかざし玉の緒の、切て亂るゝ如くなり。已に二更の時も過、嵐にゆるぐ荒屋も、骨は丈夫な洞九郎、夜山しまうて立歸り、獵犬を柱に繋ぎ、弓箭投やり脛巾草鞋を解棄て、苔井の水に足そゝぎ、たみたる聲して娘々とよびければ、香晒は片家より灯火とりて走りいで、方灯に移して、今宵は常よりも戻りの早く候ひしといへば、今夜は山風騒しく、鹿も猪も驚走りて獲物なく、手をむなしうして歸りしぞ。婿殿の氣分はいかに、物食しか藥意るたか。よく看病て進せよなど、たのもしげにいへど、心の裏には彥惣めとく死ねかし。小栗の餓鬼病見る如く、病つかれたればよも生はせまじ。死とも桶一つ費に及ばず。薦に包て埋ばよし。娘も程なう子を産らん。産子をば捨てしまひ、彼をこしらへ欺て、妾にやつかはすべき、遊女にや賣べき。何にもあれ、金あたたまるは遠からじと、欲に眼はくれ竹の、簀子の上に寢そべりて、娘を尻目に見やりつゝ、胸だくみして居たりけり。香晒は

さある悪意を露しらず、嘸な草臥給ひつらん。酒あたゝめて參らせんか、腰さすりはべらんかなどいひて孝心深く眞に、詞やさしうもてなしけるが、洞九郎は氣は強けれど年だけに、つかれいでてや臂枕、身をひやかす高鼾、臥猪の床に異ならず。かゝる折しも表の方に、人聲足音騒しく、柴の折戸を踏崩し、松明を打振て四五人一度に押入ぬ。犬はしきりに吠かゝる。香晒は仰天し、かゝる貧家に盗人のいるべきいはれはなし、何者ぞと物蔭より恐る〳〵見てければ、破れたる袈裟にて頭をつゝみ、腹卷の上に取かけたる法衣の袖を卷あげ、大太刀を前低にはきこらし、長刀を掻込たるもあり、堂杖をつきたるもありて、奈良法師とぞ見えたりける。身におぼえのあればにや、さすが不敵の洞九郎も、是を見るよりわなわなふるひて、逃んとせしを法師原、とつて引すゑ、聲あらゝかに罵りけるは、山蛭の洞九郎といふは汝よな。隱惡を犯せし事は、汝が心に知ぬべければ、今改めていふに及ばず。搦め去て古法の如くに行ふぞ、覺悟せよといひて高手小手に縛めければ、香晒は走りよつて父に取つき、何科あつて此樣に、繩目にはあひ給ふ。など分說はしたまはぬぞ。免かれ難き事ならば、妾を代りに遣給へと、泣聲にていひければ、法師原は情氣もなく、女の管る事にあらず、妨すなといひてつきやれば、背後にありし方灯と、ともに彼所へ合破とこけ、燈火消る此方には、法師原洞九郎を、宙につりてぞ歸りける。松の嵐もしづまりて、跡は闇夜となりけるが、彦惣は病人ながら、一腰を携て、何事やらんと膝行出、探りまはりて香晒に衝當り、こは誰ぞ香晒か。今の騷は何事ぞと、問れて香晒起上り、奈良法師とおぼしきが、父を縛め連行しと、いふに彦惣は打驚、且此方へと手をとりて、片家に戻れば、此に灯火もあきらかにて、闇と月夜を隔たる、親は罪人子は孝女、黑白違ふ人の性、難儀のなかに降かゝる、涙の種となりにけり。偖翌日村長來り、香晒にいひけるは、昨夜此處の洞九郎囚れゆきたる仔細、定めて御身等は知るまじきが、奈良の法師衆、歸路に某が許に立よられ、洞九郎が婦娘などもある由なれど、彼等には管なければ、唯洞九郎が罪の樣を告しらせよといひつけて歸られたり。其罪の仔細といふは、洞九郎此邊の山に狩するといひなし、折々奈良に立越、夜に紛れて若草山に入、春日山の落鹿をとること數多し。はじめの程は何者の仕業ともしれず、近鄕の獵夫等に疑ひかゝりしにより、獵人仲間に訴人ありて、洞九郎が仕業に極り、古法の如くに行ふとの事なり。奈良の鹿は春日の使者なれば、誤て殺してさへ土の中に埋られて、石子詰の刑に行る、といふ事は、三歲

の童もよくしれることとなり。況や數多殺してこれを賣代なせしといへば、上なき大罪にあらずや。去ながら若五十兩の金を以て其罪を贖へば、命助る古例もあれど、かゝる貧家にて其金を調ふべきいはれなければ、とても助らぬ命とあきらめ、せめて亡跡のとひ弔ひ懇にしめされ。あな氣の毒やあな不便やといひて涙押へて歸りけるが、香晒はこれを聞とひとしく、わつと叫びて倒伏正躰なくぞなりにける。彦惣も病床にこれを聞、唯呆れて居たりけるが、やう／＼膝行出て香晒を呼醒し、今村長の物語るを聞ば、五十兩の金あれば、命助る例もある由、我其金を調へて、舅の命を救んと思へば、さばかり悲む事勿れといふにぞ、香晒いひけるは、御身の貯給ひし金も、殘り少なになりたる上に、病に臥給ふより萬の費多くなり、今は殘らず用ひ盡して、少しの物にさへ事缺程の事なるに、いかにしてか數多の金を調へんと思すぞといひていぶかりければ、彦惣いふやうは、しか思ふはうべなり。其金に替る物はこれにありとて、皮籠の裏より箱に入たる一つの茶入を取出し、未だ其方に委しきことを語らざりしが、此茶入は主君秘藏の御物にて、藥のかゝりたる形月に似たる故に、更科肩衝と號給ひ、袋は望月の御家に傳はる、望月廣東といふ名物の裂にて縫せ給ひ、替袋に木蘭裂を用ひ給ふは、園原山の古歌に基き給ふとなん。されば類稀なる名器なるを、亡父に給り亡父も又、殊外秘藏せし故に、亡跡の遺留物と思ひ、信濃を立去時も身をはなさず、我死後にも子に讓り、素性正しき證しにもと思ひぬれば、いかほど貧き目を見るとも、代なすべうは思はねども、金あれば助るといふ舅の命、賓を惜みて救はざるは道にあらねば、これを賣て金調ふべしと思ふなり。幸ひ攝州天王寺村に、茶器を扱ふ商人あり。我信濃に在し時、相知れる者なれば、此茶入に我自筆の書簡を添てつかはせば、氣づかはず五十兩に買取は必定なり。我は病中なれば詮術なし。其方これを携去、金に替て來よかしとて、いそがはしく書簡を認め花押を据て渡し、彼商人にあうてしか／＼いふべしと委しくいひをしへ、且村長の許に立より、金調ふる暫しの間、父の事猶豫ある樣に願ひ給はれと賴おきて、直に天王寺村に急ぐべしといへば、香晒は夫の誠心を、うれしみはうれしみながら、我父の惡事によりて、さばかり秘藏の此茶入を、むなしく人手に渡しては、冥途におはす舅御に、分説なしと思ひつゝ、權心躊躇けるが、彦惣は其けはひを見てわざといらだち、何狼狽て隙いるぞ、纔にせまる親の命、見殺にする心か、とく／＼ゆけとしかられて、げにもと心を決しつつ、金入る物だになければ、父が山稼に

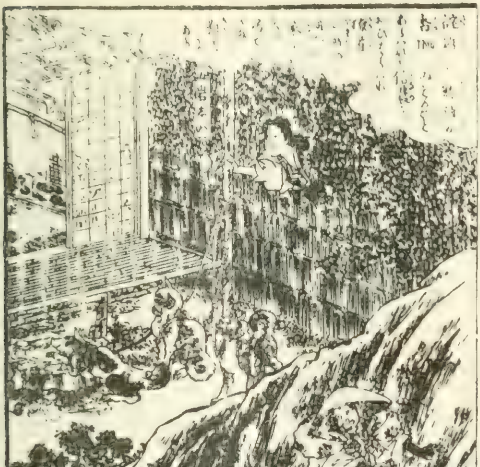
晝飯の器を入る、布袋をとり懐にし、茶入と書簡を包にして携へ、然らば妾は行程に、必ず端居して風に當り給ふな。藥も其處に温めてあれば、手づから飲候へといひおきて、裾を高くかいどりて、いそがはしく出ゆきぬ。かくて香晒は村長の家に立寄て、よく其事を頼おき、ひたすら心せかるれども、歩なれざる足といひ、臨月近き腹を抱へてゆくなれば、おのづから路はかどらず、夢路をたどる心地にて、やう〳〵天王寺村に到、彼商人の家を尋ねて茶入を出し、書簡を見せて夫の教の如くにいひけるに、果して五十兩の金調ひければ、限りなく喜び金を彼袋に入て懐に納め、歸路に臨て、平野の郷を過る時、日は全く暮にけり。時に雨雲覆ひて、夕月夜の蔭暗く、鶉鳴たつ草原の掛稻を押分て、つと顯れたる壯漢、大脇差を横たへて拔足しつゝ、後つけて來るとはしらず、香晒は蜘手にわかる畦道を、片時も早くと急けるに、彼男時分よしとや思ひけん、近付寄て香晒を撲的蹴倒し、懐の金を奪ひ空中を飛が如くに逃去ぬ。香晒は氣絶して横倒れて居たりけるが、梢の雫したゝりて口に入、やう〳〵息を吹返して起上り、懐を探り見て、こは〳〵いかにと仰天し、跡追ゆかんと思へども、何方と當もなき上に、氣も挫け足もなえぎて走る事さへかなはねば、同じ處に立つ居つ、いかなる宿世の惡報にて、八重に重なる難儀の上に、またも難儀を重ぬるぞや。義理で固めし金なるに、情なの盗人や、二つなき寶を出し、父の命を救へとて賜りし夫に對し、金を途中で奪れしと、何面目にいはるべき。とても家には歸られず、死ぬがせめての分説と、迫る心の亂れ髮、拂ふ袂に拾瀧、罪の重りの小石原、流も早き平野川、南無阿彌陀佛と合掌し、已にかうよと見えけるが、否待しばしと坐をしめて、胸に手をおきつら〳〵と、思ひ轉して見たりけるが、いや〳〵我今こゝで死ぬ時は、父の命も救はれず、夫の病を看病べき者もなく、此身一つを失ふは、四人の命を失ふなり。たとへ操は破るゝとも、此身を阿曾比屋に賣入して金を調へ、父の命を救ひ、子を產て後、阿曾比となりて其金を償ば、四人の命の助る道理、妾ばかりの命ならば、八つ裂になるとても厭ふ心はなけれどもと、獨言いひつゝ袂の石をとつて捨、死ぬさへ死れぬ因果さよと、いひては又も石を捨、思ひ思うて連添し夫にわかれ子をおきて、君傾城になり下り、肌を穢す苦みは、死ぬにもまさる思ひなれど、外にすべき樣もなしと、いひては又も石をすて、此身を賣と夫には、あからさまにはいひがたし、妾が心一つにて、はかるに如じと決定し、石を殘らず取棄て、打萎れつゝ此所を立去ぬ。偖彼岩芝が家に往ていひければ、云々の事

とにて父の命を救ふ爲、妾が身を賣て、急に五十兩と云ふ金を、調へばやと思ひはべれど、折あしく懷胎なれば、當分此身を賣人して金を借、安產して後阿伯比となり度候が、御身此媒してたびなんやといふ。岩芝是を聞、身を賣にさある自由は成難し、殊に產は女の命定と常言にもいへば、懷胎の女を質に取て金貸べき妓家のあるべきかは。若胎內の子を墮給はゞ媒して、いかにも金とゝのへてまゐらすべしといへば、香晒は力を落し、いかに父の危急を救へばとて、たまく宿せし腹の子を失はんは情なやと、又も思案に暮たりけるが、子を厭ひて親を失ふは道にあらずと覺悟を極め、然するにはいかにしてよからめと問ぬれば、岩芝いふやう、それに心を定め給はゞ、いと安き仕方あり。此二上嶽の岩穴に一種の蚺あり。四季ともに生するなり。子を孕獸孕てこれを嘗る時は立地に子を[illegible]がす。胞は愚なるものにてこれを知らずして食ふ。此邊の山に甚だ稀なるは此故なり。人もこれを煎じて飲ば十二時過て驗あり。いかほど月は滿るとも子を脫す事奇妙にて、母の身には少しも過ちなし。只これを飲て七日の間獸肉を食ふを忌のみ。若獸肉を食合すれば血を吐て死するなり。山稼する者さへこれを知らざれども、妾が前の夫は醫師にてありし故此事を委く聞、彼蚺もよく見覺えぬ。稀には手の及ぶ所にもあれば、妾明朝彼山にゆき、取來りてまゐらすべし。これを煎じて飲給ふぞならば、いかにも媒致し申さん。獸肉さへ食ねば少しも身に過ちなければ、必氣づかひ給ふことなかれ。幸神崎に妾がしたしき妓家あれば、今宵のうちに彼所へゆき、明日金持て妾がもとまで來る樣にいひきはめて來べきなり。御身の容儀にて五十兩の身の代は最安かるべしと云ふに、香晒は胸ひしくとふさがりて悲しけれど、かばかり迫りし危急なれば詮術なく、然らばよきに賴はべるなり。身代は五十兩、年季とやらんは三年に極めてたびね。證文はあとにて父に書すべし。此事を夫にしらせ候ては病の障りとなるべければ、夫には權沙汰して給はるな。何事も密にしてたべといへば、岩芝は打うなづき、心得候といひて承引けるにぞ、香晒は別れを告て立出、漸く胸を押しづめ、何氣なき顏して家に歸りける。彥惣は待佗たる體にて、いかにやいかに、金持て歸りしかと、いそがはしくたづぬれば、且安堵してたべ。いかにも事ゆゑなく金は調ひ候が、夜に入ぬれば途中のほど氣づかはしく、金は彼所に預おき、明日取にゆくべきに契約して歸りぬと云ふ。彥惣これをきき、そはよく心づきしぞ。いかさま女の身にて、往來まれなる夜道を、金携て歸るは覺束なし。明日はとくゆき

て取歸り、片時も早く舅の命をすくふべし。夫聞ては我も今夜は安堵して睡りなん。其方はさぞな草臥つらん、とく〳〵休み候へといひて枕につき、ほどなくすや〳〵睡入けり。香晒は胸の裏所せきまで思ひつゞけて睡られず、唯灯火に向合て居たりけるが、小夜もやうやく更渡り、四更の鐘も遠里の、擣衣の音に打交る、事の仔細を書置に、涙をまぜて研墨の、音も夫に聞せじと、忍べばきしむ雁の聲、明日は宿をかゆる身と、思へば秋の長き夜も、短き管の筆の幅、われにも末に逢でやはと、思ひ歎きに沈みつゝ、筧の水のむせかへり、露の玉巻國栖紙に、裏書端書しげく薄く、亂れ書にぞしたりける。

善惡因果序品（後談）

偖も岩芝は其夜香晒が身賣の媒せんため、攝州神崎にゆくとて身支度し、門口まで出ける折しも、夫胸毛の黑平といふ者、旅より歸來ぬれば、いと嬉しみ、今宵など歸り給はんとは思ひ寄ずといひつゝ伴なひて裏に入、互につもる物語し、偖岩芝聲を噸めて仕合いかにありつるやと尋ねれば、黑平ほゝ笑、此度の仕合望外に出たり。これを見よといひて懐より金袋を取出して見すれば、岩芝これを取、掌にのせて重みを試み、こは餘程の金なり。昨夜の燈花今朝の喜鵲、福應むなしから



ざりしよといひて限りなく喜び、紙灯を挑、金を算見れば、五十兩ありけるにぞ、鼠鳴して嬉み、偶袋に目をつけ打返しつらく看て、偖はと心づきつゝ夫に對ひ、此袋は妾が見覺えある物なり。これは山蛭の洞九郎が山稼に、晝飯の器を入る袋なるに、此金はいかにして得給ふぞとたづぬれば、黑平曰く、此度の旅行は甚だ不仕合せにて、手をむなしうして歸らんとせしが、初夜の程平野鄕にて、箇樣々々の女を見つけ、懷重げに見えし故、後をつけて奪取しは此金なり。彼女洞九郎が袋を持しはいぶかしき事なりといへば、岩芝手を打ふりて、聲を高くし給ふな。其女は洞九郎が實の娘香晒といふ者なり。御身旅行の跡の事なるが、男を連て故鄕の當地に歸り、夫婦共に洞九郎が家に居るなり。此金は箇樣々々の事にて、洞九郎が罪を贖はん爲、所持の物を賣て求めたる金の由、これを奪れし故に、おのれ



が身を賣て再五十兩の金をとゝのへんと、先程妾に其媒を頼みぬ。彼は類まれなる美女なれば、身の代百兩を得ことはいと安ければ、彼を百兩に賣、半を彼につかはし、半を妾これを取べく思ひ、今已に神崎へゆかばやと立出づる所なり。闇紛れといへども、彼女御身を見しるまじきにあらざれば、とても此所に住ことはなるべからず。此に居らざるからは、彼が身の代百兩を殘らず中取して、夫婦

共に何方へか迯退にしかじ。僅の家具は此儘捨おき錢目ある物は今宵のうちに外へ運び給へといふ。黑平いはく、それこそよき思案なれ。我旅商人といひなし、旅に出て盗する事、ほのかに知る者ある由なれば、左なくとも此所に長居はならずといふにぞ。然らば御身は今宵のうちに物をはこび、斯樣々々の所にありて待給へ。妾は明日事をしおふせて彼所にゆき、共に何方へも迯去べしと互にしめしあはせ、岩芝は神崎をさして出行。黑平は近き家の馬を盗來り、着替の衣服の類ひ、錢目ある物をえらび荷物につくりて馬につけ、彼金袋を首にかけ、馬の口綱をとりて出行けり。偖も香晒は其夜書置を書了り、程なく夜も明ぬるにぞ、ひたすら心いそがはしく、鏡だになき貧しさに、盥の水に顔うつして、髮取上る梳に、身を賣物と思ふから、花を餝ぞ哀れなる。時に彦惣眠りを醒して起上り、香晒と呼にぞ、一聲應て彼所にゆき、藥を飲せ粥をすゝめなどして近く居より、背を摩り腰を撫、暗に思ひめぐらしけるは、此瘦では本復は覺束なし。權のうちの生別と思ふさへかくばかり悲しきに、若しこれが死別となるならば、いかにあるべきと胸逼り、心の裏の暇乞と思ひて權介抱し、覺えず時をうつしけるが、彦惣いふやうは、我に構はず片時も早く彼所にゆき、金取て來るべし。金見ぬうちはおちつかずといふにぞ、子をおろして身を賣と、知らぬ夫のいたはしやと、思ひやるほどなほ悲しく、己とひかるゝ後髮、はなれかねてぞ居たりける。彦惣氣を焦ち、とく／＼ゆけといそがせば詮方なく、恙なくおはせといふを心にいはせ、ゆくふりをして立上り、めぐる因果の糸車に、書置を結び付、愛別離苦は笔にさへ、書盡されぬ反故張の、暗き障子をたてきりて、母屋の方に出來る。折しも彼方の窓を押分て、岩芝顔をさしいだし、手招きするにぞ香晒は、それと心得立寄ば、袂より彼菌を取出して渡し、是を煎してとく飲せ給へ、やがて神崎より金持て來るべし。必ず遲なし給ふなといひて歸りけり。香晒は是を夫に知らせじと埋火を筐子の端に持出、藥鍋に苔井の水を汲入、菌を入て火の上にのせ、團扇を把て煽ぎつゝ、心の裏に思ひけるは、廣き世界に妾程、因果の惡きは又あらじ。心からとはいひながら、一人の親は獄屋にあり。偶設けし子を失ひ、命にかけて連添し、夫に別れみづからは、浮川竹に身を沈め、肌を穢す苦しさは、どのやうにあるべきぞ。親の血筋大切と、宣ひし子なれども、是非なく失ふ可愛さよ。左孕は男の子と、聞嬉しきに指折て、月のみつるを待佗て、足を屈て夜も臥、高き所へ手をあげぬも、安產をねがへばこそ。おろしてしまふ子と知らば、何毒だてのいるべきぞ。妾が着たる

振袖の、小裂集て縫立し、つぎ〳〵の産衣も響帽子にすゝことて、守縫はつけざるなり。子安地藏の鉦の緒を、借てしめたる腹帶も、迷路につなぐ繋縴となり、胞衣を納むる土器も、碎て土にかへすとは、思ひまうけぬ事ぞかし。此身獨で育るも、母と乳母の二人まへ、脊に負つゝ寢さす時、思ゐる爲にもと、覺えておきし子護歌、あの山越るは死出の旅、里に歸らぬ水子塚、鳩の車や鞉、未來の爲には調へず。襁褓ひよ〳〵紗の頭巾、小豆枕や涎掛、兼て用意のかひもなし。催生藥も先の世を、急がす爲には貯へず。産毛も剃で其儘に、死の壺を棺にて、埋むべしとは思ひきや。土に蒲團も着られず、石にそへ乳もならざれば、くろずむ乳房の一滴を手向の水と思へかし。燒野の雉子夜の鶴、子故に迷ふ世の人の、疱瘡痲疹で子をさきだて、心亂るゝ者もあれど、それはしばしも子の顏を、見ての上の歎なり。これは我子の顏も見ず、若きさの世で逢見るとも、盡未來際我子とは、知事ならぬ因果さよと、我を忘るゝ獨言、恩愛切なる悲みに、五臟六腑も惱亂して、乳綱もきるる心地せしが、深き歎の通じてや、胎内の子の頬に動きければ、自己腹を撫さすり、あな可愛や親子の緣のあればこそ、此身にやどり來しものを、月日の光りを見せもせで、暗より暗に迷はす事、情なしとも邪見とも、いふべき詞はなきぞかし。五月目から人の形となり、八月になりては五躰全と、のふ由、身を動すも理りぞ。胎内にて動子は生れて逹者な者と聞。おことも定て健かに生立べきに、不便やな、たゞ皮一重に隔られ、顏見る事のならざれば、なるべきならば此腹を、割てなりとも顏見たや。死ぬる覺悟の我身は死れず、千代萬代も活よと思ふ、おことは活すに活されず。たとへ月足ずにて育ずとも、生るゝ事はならざるか。此世のかた身に産聲を、せめて聞せてくれよかしと、いひつゝ腹を撫おろし、夫に歎きを聞せじと、袖くひしむる忍び泣、哀と云も愚なり。彦惣はかゝる歎を露しらず、聞人なしと思ふにぞ、獨言にいひけるは、香晒はもはや餘程ゆきつらん。彼が居ぬ間に父母に、一言お詫を申さばやと、よろめきつゝ立上り、窓の障子を押あけて、筧の水に手を清め、皮籠の裏より父母の位牌を出して上座にすゑ、且親人のすきの道、せめて一服茶をたてて、供養せばやと思ひつゝ、遺留物の茶箱を取出し火桶に香を薫せて、土瓶を假の阿彌陀堂、地獄の釜の蓋とりて、佛果を願ふ樂茶碗、救ひ給へと炮烙の、はひおくれても紫の、雲にたぐゆる服紗、客はむなしき位牌にて、亭主はもろき病人の、これを餘波と思ふから、手先もふるふ佗茶の湯、親子の緣の薄茶とも、しらで備る一服は、手向の水と冷ぬべし。偖恭しく手をつかへ、父母

の靈魂聞給へ。某若氣の誤にて、御主人の掟を背き、親の家名を絶せし事、不忠とも不孝とも、申上べき詞なし。父母はこれを惡しともおぼすまじきが、天罰はまぬかれ難く、かく業病に苦み、今日翌日も知れざれば、頓て草葉の蔭にて御目にかゝり、冥途に於ていさゝか御恩をおくるべし。又御秘藏の茶入を此度賣代なせし事、不孝のうへの不孝なれども、舅の命を救ふ爲、餘儀なき事に候へば、偏に御免下されかし。妻の腹に一子をまうけ候へば、某しは相果るとも、妻に遺言申置、幼き者を生立て、某になりかはらせ、御跡を弔す様に致させなん。孫の口から一遍の手向の念佛を、千萬卷の經陀羅尼とも思し召し、冥途で御受下されよ。たとへ某は不孝の罪で、狂死を致すとも、かた身に殘す腹の子は、平産を致すやう、何とぞお守くだされかしと、活人に向ひし如く、いふも苦しき息の下、父の戒名春譽夢幻居士、母の戒名秋譽泡沫信女、頓證菩提南無阿彌陀佛、あみだ佛と、息もたゆげに唱へつゝ、熱に焦たる舌の根の、こはる病の責念佛、我子の爲の枕鉦と、知ぬ回向ぞ哀なる。香晒は隔の紙門に身を寄て是を聞、我身にかへて子を思ふ、夫の心いたはしく、其いふ所すべて皆義理にせまりし事なれば、皮肉もはなれ骨も碎る心地して、親の爲とはいひながら、あれほどまでに思す子を、いかでか脱すに忍ぶべきと、心を變じて見る時は、親は忽石子詰、これも又堪難く、彼方をや救ふべき、此方をや助くべきと、親を思ひ子を思ひて、しばし心くらみけるが、いや〳〵子は再得らるべし。親はふたゝび得べからず。いかに思ひ飜しても、飲ねばならぬ此藥と、覺悟きはめし折しもあれ、折戸の外に站みし、門說經の修行者が、生死長夜にたとへたる、長柄の傘を打かたげ、佛の救經文を、俗に聞する說經の、彭の竹のササ菩薩、節も唱歌も殊勝にて、いとゞ哀を添にけり。

○歸命頂禮世の中の、定め難きは無常なり。親にさきだつ有樣に、諸事の哀れをとゞめたり。一つや二つや三つや四つ、十より內の幼子が、母の乳房をはなれては、佐比の河原に集て、晝の三時の間には、大石運びて塚につく。夜の三時の間には、小石を拾ひて塔を積。一重つんでは父の爲、二重つんでは母のため、三重つんでは西をむき、樒ほどなる掌を合せ、鄕里兄弟我ためと、あらいたはしや幼子は、泣々石を運ぶなり。手足は石にてすれたゞれ、指より出る血のしづく、身上を朱に染なして、父上戀し母戀しと、唯父母の事ばかり、いうては其儘打伏て、さも苦氣に嘆くなり。あら怖しや獄卒が、鏡照日の眼にて、幼き者を邪睨つけ、汝等

が積塔は、歪がちにて見苦しゝ。かくては功德に成難し。とく〳〵是を積直し、成佛願へと呵りつゝ、鐵の捞笞をふりあげて、塔を殘らず打ちらす。あらいたはしや幼子は、又打伏て泣叫、呵責に隙ぞなかりける。罪は我人あるなれど、殊に子供の罪科は、母の胎內十月の內、苦痛さま〴〵生れ出、三年五年七年を、纔一期にさきだちて、父母に嘆をかくる事、第一重き罪ぞかし。母の乳房にとりつきて、湩の出ざる其時は、せはりて胸を打たゝく。母はこれをも忍べども、などて報のなかるべき。胸をたゝく其音は、奈落の底に鳴響、修羅の鼓と聞ゆなり。父の涙は火の雨となりて其身に降かゝり、母の涙は氷となりて其身をとづる歟こそ、子故の闇の呵責なれ。かゝる罪科のある故に、佐比の河原に迷來て、長き苦患を受くるとよ。河原のうちにながれあり。娑婆にて嘆く、父母の、一念屆きて影うつれば、なう懐しの父母や、飢を救ひてたび給へと、　乳房慕うて這よれば、影は忽消うせて、水は炎と燃上り、其身を焦して倒つゝ、絶入事は數しれず。中に賢き小兒等は、色よき花を手折來て、地藏菩薩に奉つり、權し呵責をのがれんと、咲亂れたる大木に、のぼろとすれど情なや、幼き者の事なれば、踏流ては此彼の、荊棘の刺に身をさゝれ、すべて鮮血に染りつゝ、やう〳〵花を手折來て、佛の前に奉つる。中に這出る水子等は、胞衣を頭にかぶりつゝ、花折事もかなはねば、河原に捨たる枯花を、口にくはへていたはしや、佛の前に這行て、地藏菩薩に奉つり、錫杖衣にとりつきて、助け給へと願ふなり。生死流轉をはなれねば、六趣輪廻の苦みは、唯是のみにかぎらねど、長夜のねふり深ければ、夢の驚く事もなし。唯願くは地藏尊、まよひを導き給へかしとぞ唱へける。

香晒はしばらくこれを聞居しが、時も時折も折とて、佐比の河原の說經節、あな心なや思ひをませとの事なるか。此世に出ぬかはりには、罪も報もあるまじきとこそ思ひしに、あれ聞ては胎內の子にも罪ありとよ。邪見な母を懸慕ひ、二重つんでは母の爲と、胞衣をかぶりて這ひ廻り、小石を拾うて嘆らん。胞衣に添て埋れば、手をよく書と教られ、調へおきし筆墨も書賃の料となれば、身を投ばやと我袂に、拾ひ入たる細石も、子の積塔となるならん。金は僅に五十兩、金ゆゑ我子を殺すかと、口をすべらす獨言、牙をかみ身をもだえ、簀子に撲的倒つゝ、むせかへりてぞ泣居たる。時に村長いそがはしく走來り、唯今奈良の法師達、洞九郎を牽て某が方

に來られ、今一時を過れば、此野に於て生ながら土に埋め、石子詰の刑におこなふとの事なり。いよ〳〵罪を贖ふ心ならば、とく〳〵金を持來り候へ。今一時が生死の界、危候ぞといそがしたてゝぞ歸りける。彼方の窻を押分て、岩芝顔をさし出し、神崎より金携て我家に來り、待侘て居るぞ効し。とく〳〵それを飲給へ。早く〳〵といひおきて、もとの所に隱れけり。片家の方には彦惣が聲として、其方は未だ金とりにゆかざるか。何狼狽て隙入るぞ、とく〳〵ゆけとぞ叱りける。二方三方身一つに、煎じ詰たる菌は、我子の爲の阿鼻地獄、大焦熱の苦みを、さぞなと思ふ悲さに、軒の玉水目もとから、落てこけこむ藥鍋、涙も熱るおもひなりしが、天狗道の熱鐵も、飲ねばならぬ此時と、思ひきり〳〵、心は早鐘時うつかと、耳ふりたてて氣も半亂、藥を茶碗に移し入れ、地藏菩薩を念じつゝ、眼をふさぎ胸を撫、ほと〳〵飲んとしたりけるに、やれ待暫し此金で、難儀を救へと呼はりつゝ、金の包を垣越に、なぐれば丁と、茶碗にあたつて打落し、藥は流れ包はとけて陸離と、陸奥山にあらずして、黄金の花を咲せけり。香晒は夢現ともわきまへず、いそがはしく拾ひ集てかぞへ見れば、數も丁ど五十兩ありけるにぞ、あまりの嬉しさに、唯惘然として居たりけり。時に茶碗よりこぼれたる菌の煎汁、獵犬



（獵犬はすべて北犬をもちゆるものとぞ）の食物の器の裏に流入しが、柱につなぎし孕犬は折節此食物をくらひけるに、忽庭に倒て身を悶え血を下して、頓て子だねを脱しけるにぞ、香晒是を蛇と見て、あな奇妙の菌や。我是を飲ならば、かくの如くなるべきに、危かりし事なりと、我身の上にひきあてて、犬を不便に思ひけるが、此金を恵しは、まさしく今の門説經の修行者なり。いかなる所縁何故に、かゝる危難を救ひしぞ。跡追ゆきてとはんものと思ひつゝ、いそぎ惑ひて出んとせしが、片家より彦惣が、屏風を力に逶迤出て、やれ待香晒、かく落魄し我々に、誰か所縁の者あらん、其金は汝が孝を天帝の憐み給ふ賜ならん。もしさもなくば神佛の冥助なるべし。凡人の所為とは覺えず。跡追ゆくともいかでかまみゆることあたはん。汝が金を奪はれたる仔細、糸車に結たる此書翰にて、今はじめて知りつるぞ。



片時も早く其金持て村長の方に行、父の命を救ふべしといひて急がすれば、香晒はげにもさりと點頭つゝ、金を額に押戴き、喜び勇みてはや行ぬ。跡には獨彦惣が、猶書翰を繰返し、溜息つきて居たりけるに、さと吹来る山下風、書翰を奪取て、行方もしれずなりにけり。さて岩芝は先程より、香晒が菌の汁を飲のまゞるを見とゞけんため、竹林の裏に隠れ居たりけるが、香晒思ひがけなく金を得て、

身を賣るに及ばねば、心の計策齟齬、とても此地を逃退からは、何するとも妨なし。此上は香晒が跡を追行、彼金を奪ひとるべしと思ひつゝ、畔傳ひに近道を馳行ける所に、向うの方より、當地に見馴ぬ若者等四五人、棒を提捕繩を持ていそがはしく來り、岩芝を取圍ていふやう、汝は胸毛の黒平が妻ならん、我輩は泉州堺の者なるが、黒平事旅商人と僞り、實は旅に出て賊をする由、昨夜歸來つる事、注進の者ありて明白なるにより、大鳥の郡司の命をうけて向ひたるに、はや何方へか逃去て、家には唯神崎の娼家橋六とやらんいふ者、獨寢そべりて居たる故に、彼も怪しければ彼方に留めおきぬ。彼に問ば汝は此邊に來ぬる由、我輩此所に向ひたるは、汝を捕ゆきて夫の行方を糺明せんがためなり。とく／＼腕を廻して縛めをうけよといふ。岩芝是を聞、倍は夫の惡事はや露顯せしかと驚けども、元來膽太き女なれば、面にもあらはさず、ひたすら嘲笑、郡司の命ならば武士をこそさしむけらるべきに、汝等に命ありとは心得ざる事なり。夫の行方決してしらずといへば、若者等いひけるは、武士をさし越れては却て逃走るべしとありて、我輩に命じ給ふ。無益の言を費さず、とくいましめにあへといひつゝ、繩さばきして立かゝる。岩芝は事ともせず、傍邊の猪追小屋にありける猪追棒をおつとつて打てかゝれば、女に似合ぬ不敵者、棒すくめにせよといひて、此方も一同に棒をふってしばらく挑戰ひけるが、岩芝は風にもまるゝ胡蝶にひとしく身をなして、飛上りてははしと打、沈みては薙倒し、雪を持たる柳の枝の弱氣に見えて強きが如く、腰も裏に掙扎て益勢ひ猛かりければ、若者共は遂に敵し難く、匍々の體にて逃去けり。岩芝は口程もなき奴原哉と謔て棒を捨、一息つきて立去んとしたりけるに、先程より猪追小屋の蔭に窺ひ居たる神崎の橋六、つと走出て、背後より岩芝に撑摠つき、我折あしく大金を持て汝が家に居たる故に、不慮の疑を請たれば、汝を捕へゆきて、此身のあかりを立るなりといひつゝ、力を極めて押伏んとしたるに、岩芝はしやこしやくなりと呼りつゝ身を轉し、襟首攫て田の中へ岸波と投こみ、鳴子の繩先手繰寄て高手小手に括あげ、首にかけたる百兩の金を奪ひとり、懐にして片頬に笑、彼を失へば是を得る、是十分の幸ひなり。もはや家には歸られずと獨言たる折しも、急雨斑々と降來つれば、手早く案山子の簑笠をとりて、頭にかづき身に覆ひ、何方ともなく逃失けり。繩目におひし橋六は、身上すべて泥になり、恰も田鼠の如くにて、跡追ゆかんと身をあせれば、鳴子の音の磊落々々と、遠田の雀驚きて、むらむらぱつと飛去ぬ。かゝる所へ最前の若

者等、近村の百姓共を呼集め、人數をまして來て見れば、岩芝は逃去て、橋六獨繩目にあひて居けるにぞ、括るべき者は縛ずして、括られまじき者はくゝられぬ。是ぞ鵲の橋六よ。汝も詮議の種なれば、牽てゆくぞとて引立れば、縲絏の耻の其上に、金まで奪とらるゝとは、いかなる宿世の報ぞといひて、面をしわめて歎きつゝ、淚にまじる鼻は、湖と眞水の堺まで、捕れゆくこそ不運なれと、これを聞人いひあひけり。

○門說經の修行者何人といふことゝ、又風に吹取れたる齋扇の行方をも知んとならば、畜生勸發品第十を讀得て知べし。

○門說經といふ者、長柄の傘をさし、髭をすりて物を乞。後には三絃に合せて語る事になれり。說經者、門說經、說教太夫等の考、並に圖、予が骨董集に詳かなり。發兌の時を待得て見るべし。

○佐比河原の事、一說に云、山城國紀伊郡に佐比の里あり。三代實錄に、貞觀十三年閏八月に制有て、百姓葬送の地を定給ふ條に、下佐比上佐比をも其地と定らる。佐比寺は延喜式にも、九原送葬之靈、更留二柩於橋頭一と見えたり。世に佐比河原を、冥途にて小兒の集る所とし、且地藏尊是を化益し給ふといふは、此葬所に小石塔多く、或は石像の地藏尊ありしより、いひ出しならんといへり。

○三代實錄卷之二十二に、山城紀伊郡貞觀寺、建立の初其名定す。嘉祥寺を假て年分をなす。號して西院と稱したる由を記せり。此寺の葬所を、西院の河原といふといへる說あれども、前の說に據る多しとおぼゆ。

○地藏經に、是菩薩、得二十種福一者女人泰產云々、此誓ある故に子安の地藏腹帶の地藏など、世に呼れさせ給へり。佐比の河原にて小兒の苦患を救給ふと云も此故ならん。佐比の河原にて小兒小石を塔に積と云事、法華經方便品に、乃至童子戲、聚沙爲佛塔。如是諸人等。皆已成佛道と見えたり。之に據て然は云成べし。是等本文に用なき事なれ共、筆の序にしるせるなり。

本朝醉菩提卷之二終

稲妻表紙後編本朝酔菩提巻之二

廻向廻伐跋尊者 得失譬喩品第二

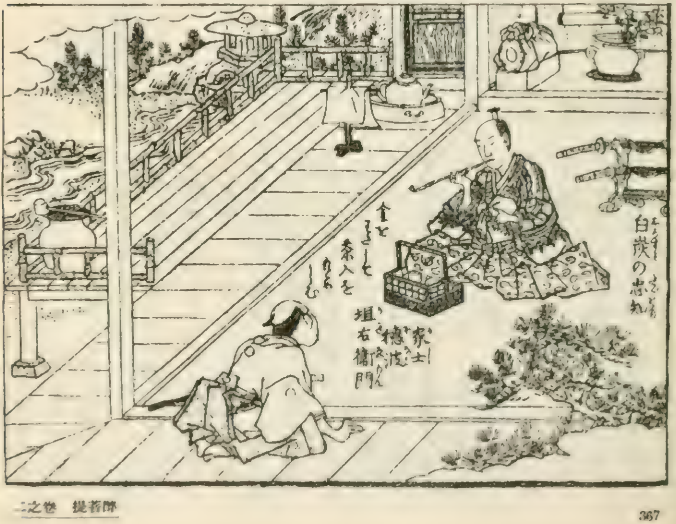
去程に香晒が孝心を天も感應ありけるにや、父洞九郎重き罪科をまぬかれて家に歸りければ、香晒限なく喜び、笄を代なし酒肴を求め來りて、祝ひの酒をすゝめけるに、彦惣も病の床を出て洞九郎に向ひ、誠に是香晒が孝行の功德によりて此喜びあり。子と雖も疎かに思ひ給ひそ。御身の罪を贖ひたる金につきては、様々の難儀色々の愁歎ありて、胸のとゞろきは今もなほやます、斯様々々の事のありしとて、其始終を細に語に、其落たる事は香晒語り加へて聞せけり。洞九郎は日來恩も情もわきまへざる者なれども、さすがに命を救はれしが嬉しさに、二人に厚く禮をのべ酒呑てぞ居たりける。時に彦惣いひけるは、御身此度の事に懲て、此後は露ばかりも悪事をし給ふ事なかれ。あきらかなる處には王法あり、暗き所には天罰あり。隱惡と雖もあらはれざるといふ事なし。今より獵人の業をもやめ、別に活業をかへ給へ。年ひさしく仕馴給ひし事とはいひながら、年老ての殺生好むべき業にあらず。少しは後世の事をも願ひ給へといへば、香晒も其詞の尾につき、彦惣殿のいはるゝ事を等閑に聞給ふな。此後は萬の事をよく愼み給へ。妾も漸々に賤の手業を仕おぼえつれば、たとへ父活業をしたまはずとも、妾安産して身輕にさへなりはべらば、いかにもして養まゐらすべし。彦惣殿も病さへ本復あらば、能思案もありぬべし。しばしのうちの貧さを忍び候へ。直道をさへ行きはべらば、おのづから神佛の惠もありなん。物食でも居べからずなどいひて諫めければ、洞九郎いかさま二人のいふごとく、此後は殺生をやめ、何にもあれ活業をかふべし。つかひなれたる體なれば、安閑と暮しては却て身うち痛て堪難しといふにぞ、香晒は打笑ひ志の歪も少しは直りしかと、心の裏に喜びつゝ、此上は夫の病本復と我身の安産を願ふのみと、少しは心を安めけり。かくて後は洞九郎活業をせず、唯家にありて寢つ起つ短日をも暮しかね、吹のみして居たりけるが、一日香晒いひけるは、父上殺生をやめ給ふからは、狩犬も用なきものなり。殊更食物も乏ければ、何方にもあれ、人家多く食乏しからざる處を見立て放ちやり給へかし。こゝにおきて飢しむるよりは不便の事に候といふにぞ、洞九郎打うなづき、いかにも然り。我なすから食べくは

ずの貧き中に、畜生どもに食を減さるゝは、無益のいたりなりといひて、四五疋飼おきたる狩犬どもの綱をひき、狩杖つきて出けるが、道すがら思ひけるは、此犬ども猛うへに、常に獸の肉を食ひ馴たれば、若人家ある所に放ちなば、人に噛付などして、遂には災を我家に及ぼすべし。我此頃活業をせざれば、ひさしく酒の匂だに嗅ず。此犬をむなしく放んよりも、殺して穢多に賣つかはさば、少しの酒代にはなるべし。禍の種を蒔んよりは、酒にかふるにしくべからずと、情氣なき日來の惡意を發し、道をかへて河原の方へ引行けるに、犬ども其心を察しけるにや、後歩して前に進まざるを、狩杖にて打擲つゝ引行て、河原にいたり一疋づつ口に小石を突籠石子詰にして五疋ともに殺しをはりけるが、あな怪かな。五疋の犬の胸もとより炎の玉一つづつ飛出て虚空に登り、合して一團となり、何方ともなく飛去ぬ。洞九郎は是を見て、怪しとは思ひけれど、さばかり心にもかけず、死したる犬どもを穢多の家に持ゆき、錢二索子にかへて、近きあたりの酒屋にゆき、酒肴を求めて、快よげに打飲、ほろ醉の機嫌にて家に歸り、香晒には富村に放ちて歸る道にて、仲間の獵人に出會、酒をふるまはれて歸りしといつはり、唯そらうそふきてぞ居たりける。おのれ石子詰の罪科をのがれ、未だ半月も過ざるに、ひさしく飼馴たる犬どもを石子詰となし、纔の酒にかふる事、誠に是性惡の愚夫なり。豈其報なからんや。此犬どもの怨念によりて、後來の祟となるべき話柄を惹出ぬ。かゝりしより後は物語るべき事もなく打過けるが、香晒は已に開胎に至り、恙なく男子を安產して、限りなく喜びぬ。洞九郎始の程は殺生をやめ、活業をかゆべくも思ひけるが、犬を殺して賣しより、兎角仕馴たる獵人の業にしくなしと思ひ、折々弓箭を隠し持出て山にゆき、獸を射て酒にかへ、彦惣香晒等には山寺に詣て說法聞といひなし、念珠を求め來りて家にあるときはこれを爪繰、そら念佛を稱へけるにぞ、彦惣香晒等は志あらたまりて、後世を願はるゝ事よと思ひて喜びけるが、これは洞九郎が謀計にて、彦惣が病漸々に快氣に赴く樣子なれば、いよ〳〵さあらば無理いひかけ、難癖つけて追出し。香晒に金多く持たるよき婿とるか、それ得心せずば遊女に賣つかはして、多くの金にせばやと思ふより、二人の者に志あらたまりしと見せて、油斷さすべきたくみなり。かゝる愚夫にも奸智は出易き者と知れぬ。爰に又都鴨川のほとりに、鴨川兵衛忠知とて、富饒なる鄕士ありけり。未だ若年なれども、聰明怜悧篤實柔和にして、文學武藝ともに通達し、わけて弓射ることに妙を得たり。曾て一休禪師と親く交て、敎外別傳の禪

味を甘んじ、茶の湯の侘を好て、其道も又奥をきはめ、常に古器を愛玩し、すべて風雅なる事人に越たり。此頃は未だ俳諧の連歌といふもの、世におこなはれざる時なりけるが、

白炭や燒ぬむかしの雪の枝

といふ句を口吟みけるより、時の人白炭の忠知と異名しけり。此人の家士に穂波垣右衛門といふ者ありけり。年は五十歳ばかりにて、生得老實なる者なりけるが、或日忠知此垣右衛門を召ていひけるは、其方に申つくることあり、別儀にあらず。我豫て懇望せる、更級肩衝の茶入、頃日賣物に出、攝州天王寺村の茶器を商何某といふ者の方にある由を告る者あり。彼茶入は信濃國望月の家の名器なるが、家士に遣はしたるを、其者浪人し、たつきにこまりて賣つる由、出所もたしかなれば、我これを求まく思ふなり。是を目巧して求來らんもの、汝ならではなき故に、此事を申つくるなり。價は小判七十兩の由、此金を持て急ぎ攝州に赴き、他へ賣つかはさぬ先に、とくもとめ歸るべしといひて、蜀紅錦の紋おきたる唐草の劑符に、小判七十兩を入て垣右衛門に渡しければ、垣右衛門はこれを受取、やがて旅支度を調へ、津の國をさして急ぎゆきぬ。夫は扨おき洞九郎が家にては、彼方は病人こなたは產婦、彦惣がせきいる聲に、赤子の聲の泣ませて、熱の匂ひの古夜着に、臭氣する濕布籠、病苦に貧苦かさねても、



肌は薄き單衣、藥土瓶に欠茶碗、破障子の建付も、歪なりなる暮しなり。洞九郎一日香晒が傍近く寄て、念珠を爪繰つゝも理げにいひけるは、婿殿の病やうやく快氣に赴容躰なるが、こゝにて看病をおろそかにすれば、病原にかへりて再快氣すべからず。思へば大事の處なり。然るに其方産後も餘程日數たてども、漸々に乳細くなりて、孩兒を養ふにたらず。貰ひ乳するも村里遠く心にまかせざれば、かくては餓死事必定なり。我いとほしと思ふ孫の、目前餓死を見ん事いかにも忍難く思ふにつきて、其方と一つの談合あり。昨日孫を懷にして東村にゆき、貰ひ乳して居たるに、攝州の人居合せていひけるは、住吉のあたりに何某とて富たる郷士あるが、其妻女頃日男子を產、殊の外喜びけるに、其子七夜もたゝざるに死亡ければ、夫婦限りなく悲み、妻女は懷さみしく、乳の張につけて、なほ更に思ひをまして夜も泣明し、せめて人の子を貰ひ失し子と思ひて、此乳を與へ、育たく思へば若しさある者あらば、とく告知せよと頼まれつるが、御身の懷なる男子の由、乳にこまつて飢させんよりは、彼所へ養子につかはす心はなきやさすれば其子の爲には大なる福にて、忽錦に包れ數多の人に傅かれ、襁にのりて育らるゝなり。其心あらば我媒灼してつかはすべしとすゝめぬ。これによりて我思ふに、孫を彼所に遣し、其方身一つになりて婿殿の看病せば、夫の病も本復し、子も飢を助かりて、二つながら全を得良計ならめと思ふなり。其方の心はいかにぞやといふに、香晒は子を懷に抱ながら、涙をばら／＼と落しつゝ、思へば思へば我身程、因果の惡きは世にあらじ。たま／＼宿し孩兒を胎内にて失んと思ひし難儀は一つ遁れながら、猶乳細くして養にたらず。飢がちにて痩細るを見るにつけても、彦惣殿原の身ならば、乳持の抱守のと、何不足もあるまじきに、あしき時に生れ合せ、不運の子やと愚痴に思ふもかひなきこと、父上の思し給ふ所極めて理りには侍れども、彦惣殿親の血筋をたやさじと、大事に思す孩兒なれば、手ばなす事は成難しといひて承引ねば、洞九郎わざと打しをれたる樣をなし、我は唯婿殿の病と孫めが飢を救はめと思ふ、一途の料簡のみ。人手に渡すを愁るは理なり。あながちにすゝめはせぬといひて頭を押へて居けるに、彦惣は病床にてこれを聞、屛風押あけ膝行出て、香晒にむかひていひけるは、我つらつら思ふに、其子胎内にて危難にあひ、出生して又飢る事、よく／＼親の手にて育難き因緣の子なるべし。舅殿の今の物語、住吉の何某とやら富富ざるにはかゝはらねど、郷士とあればこのましき處なり。思ひきりて其處へ養子にやるがよかるべ

しといひければ、香晒は兎やせまし角やすべきとたゆたひて、しばし答もせざりしが、いかに思ひても乳不足にては、とても養育成難しと思ふにぞ、やう〳〵心を定め、得心の由をいひければ、洞九郎は心の裏に笑を含み、然らば一刻もはやく孫を携へて津の國にゆき、彼人になかだちを頼むべしといひて、いそがはしく湯漬など打喰、身支度していざ〳〵といふに、香晒は思ひきりはきりながら、大難をまぬかれて產出したるいとし子を、人手に渡す悲さに、懷に抱しめて、ひたすら淚にむせかへり、四子に別るゝ桓山の、鳥もかくやと彥惣も、袖をしぼれば洞九郎も、手拭に目をすりなでて空泣し、別れかねるはうべなれど、親子不通といふではなし、いつでも逢にゆかるゝ事、いはば此子の出世の門出、行末祝うてやるこそよけれといひつゝ、香晒が懷に手をさしいれ子を抱とりて、己が懷に押入、外の方に立出、柴小屋にありける藁篭を携へて出ゆきけり。跡には香晒惆然と、あいた懷塞ぎもせず、彥惣も手をこまぬき、夫婦ものいはずして、唯こぼるるは淚なり。洞九郎は娘を金にするには、まづ足手纏の赤子を捨るにしかじと思ふより、かく二人の者を欺きて家を出、程遠き處に捨ばやと思ひ、道を急ぎ夜に入て、津國に到り、合法が辻にて往來のたえまを見合せ、赤子を藁篭にいれて閻魔堂の前に捨おき、歸ばやと十步ばかり步みけるに、何にかあらん足に纏付たれば、やがてこれを取上見るに、革の金剤符にて足に纏ひたるはしめ緒の端なり。いそがはしく開き見るに小判數多ありければ、ぞつとするほど嬉しみつゝ、まづ懷に押入て、足速に此處を立去り、步みながら懷の裏にて金をかぞふるに、其數七十兩あるにぞ益喜び、今日はいかなる吉日ぞや。邪魔になる子を捨て、かゝる大金を拾ひし事、例少き福なりと思ひつゝ、滿面に笑を含み、はや金持氣になりて突袖し、緩々と步てぞ歸りける。俳諧師其角の狂歌に、子を捨てむなしく歸る親の身の、金をひらはゞくやしからましといひしには事かはりて、洞九郎は誠に是恩愛をしらざる貪夫なりけり　彼穗波垣右衞門は、君命によりて攝州に來り、茶入を求めばやと、天王寺村へ急ぎゆく途中にて、懷中の金剤符を落しけるにぞ、大に仰天し、今來し道に立戾り、提灯を照し、凡四五町が間を、幾度となくゆきつ戾りつして尋けれどもなかりければ、さてははや往來の人に拾れしかと力を落し、殆ど身體疲て合法が辻の地上に撲地坐し、我小祿の身分なれば、七十兩といふ大金を償ふべき手段なし。こはいかにすべきと當惑し、手を拱き吐息して居たりけるに、閻魔堂のあたりにて頻に赤子の泣聲聞えけるにぞ、立上り彼所にゆきて見る

に、藁籅の内に赤子をいれて捨置ぬ。此垣右衞門が妻頃日男子を産、其子程なく死失て、愁傷やるかたなき折なれば、己が身に思ひくらべて、いと不便に思ひ、翅の下に子を隱して我身を射らるゝ狩場の雉子、親は空にて血の涙を子故にふらす善知鳥、凡いきとし生るもの、子を思はぬはなけれども、よく／＼貧苦に迫りし故、是非なく捨しものならめと、其親の心を思ひやりて、覺えず涙を落しけるが、吁我身に難儀を負ひながら、餘所の哀にかゝはるは益なき事、且こゝを立去りて、一思案して見ばやと思ひ、十歩許り歩みけるに、彼捨子又頻りに泣けるにぞ、さても不便と立戻り、提灯をさしつけて、よく／＼見れば男子にて、痩子なれども目鼻だち氣高生れつき、繻箔の古幣を集て縫たる、つぎ／＼の產衣を着置ぬれば、賤き者の子とも覺えず、おのれ難儀の時ならずは、拾ひ歸りて妻の乳にて育べきに、我身一つさへいかに成るべきやらん、計り難き折なれば、さも成難しと思ひけるに、生れて餘程日數たちたる子と見えて、捨子は垣右衞門が顏を見て、莞爾笑ひけるにぞ、いとゞ不便さ增れども詮方なく、見捨てまた十歩ばかり歩みけるに、又頻に泣けるにぞ、さても不便と又立戻れば、泣止て、莞爾とわらひかけ、行ば泣出し、戻れば笑ひ、後髮をひかるゝ如く、行つ戻つ去かねて、曩昔强盜人の家に忍入、小兒の



笑顔を愛して、覺えず隙とり、捕れしと聞つるが、いかさま小兒の笑顔程愛らしき者はなし。此夜風に冷たる肌を、せめてしばしのうちも煖めてやるべしと抱き上、懷に入て我肌にて暖むれば、さも嬉げにしがみつき乳を甞る愛らしさ、時刻移れば取出さんとするに、懷のうちにて、快げにすやすやと眠るにぞ、さてもさても可愛さよ。たとへ我金を落せし趣度にて、翌日命をめさるゝとも、かくまで我を慕ふ子を、いかでか見捨て歸べき。よくよく我に因緣のある子なるべし。もはや夜更て人の往來もたえぬれば、犬などに喰れんは必定なり。いかに思ひ返しても不便なり。此儘拾ひ立返り、我は命に及ぶとも、妻に與へて養育を致さすべしと心をさだめ、子を懷にして此所を立去、此夜は旅宿を求めて宿、貰ひ乳して飲せなどし、翌日未明に發足して京都に歸り、彼子を抱きながら打しをれつゝ、主人忠知の面前に出て頭をたれ、金を落せしより子を拾しまでの事を、あきらかに聞え上て、いかなる罪にも仰付られ下さるべしとて、平伏してぞ居たりける。忠知これを聞ていひけるは、汝は平生老實なる者なれば、しかいふ詞偽りとは思はざれども、金を落せし趣度を其儘に差置ては、後日の政道たゝざれば、永の暇を遣すなり。其子は汝に授りし者なれば、養育致し遣すべし。若後日落せし金を償ば、



歸參さすべき事もあらん、これ金を惜にあらず、政道をたゞしうせんためなりといひ渡されけるにぞ、垣右衛門は恐れ入、たとへ命を召るゝとも詮方なきに、何事なく暇給はる事、廣大の御慈悲なり。後日いかにもして金を調へ、歸參を願ひ申べしといひ、主従の別を惜み落涙して私宅に歸り、妻秋草といふに始終の事を委しく語り、いそがはしく家財を取片付、彼子を妻に抱かせ夫婦連立て、住馴たる家をはなれ、しばらく且伏見のほとりに借家して日を送りぬ。忠知は再度又別人に金を持せて、攝州天王寺村に遣しけるに、彼茶入ははや他の方へ賣渡したりとて、手をむなしうして歸ければ、いと本意なくぞ思はれける。

得失譬喩品第二（後談）

夫は扨おき洞九郎は、其夜拾ひし金を懐にして歸る道すがら思ひけるは、あまり速歸ては、二人の者の疑んこともあるべければ、しばらく途中にひまとりて、時刻を移して歸らばやと思ひ、酒賣家に立寄、小遣錢を盡して酒を飲、道をかへて二上ケ嶽の山道にさしかゝり、漸々に醉を發し、踉々蹌々と歩みゆきけるが、窟峠の古社の縁先に尻かけて休ひ、又彼劑符を取出し、月影にて幾度も金をかぞへ見て打笑、ひたすら喜びて獨言にいひけるは、足手まとひの子を捨て、手にだにふれたる事もなき大金を拾ひしは、返す返すも例なき福なり。此上に婿を追出し娘を責ば、百金はたしかなり。都合すれば百七十兩の金は我手に握しも同然なり。あな嬉しやかたじけなやといひて、天を拜し地を拜して益々喜びけるが、はや榮耀の心出來て、朽たる縁の上に臂枕して寢そべり、だみたる聲して山歌をうたひつゝ、休み居けるが、醉に乘じて睡を催し、覺えず熟睡し、鼾の聲を高くたてけるが、此時既に月は雲に掩れて仄暗くなりにけり。かゝる折しも何者にかあらん、崩たる蔀の間より手をつと差出して、洞九郎が懐の劑符を奪ひとらんとす。洞九郎は劑符の紐を首にかけたれば、彼方に引ば此方にこたへて睡を醒し、其腕首を無手と摑ば振拂ひ、蔀を押崩て覆面頭巾に面をつゝみ、大脇差を横たへたる大漢現れ出、又洞九郎が懐に手をかくれば、洞九郎身構へし、察する所汝は山賊のたぐひならん。我を尋常の者と思ふ愚さよ。年こそ老つれ、腕に覺えのある者ぞ。我懐を窺ふは猫の額にある物を、鼠の狙ふに異ならずと冷笑ば、盜人は言戰ひ無益とや思ひけん、一言の詞を出さず一腰をすらりと拔て斬つくれば、洞九郎も山刀を拔放てこれをうけとめ、丁々しとと打合て、しばしの間戰しが、双方岩角に足を踏流して、淺き谷川の

罠に陥り、北橋の杭に取つきて、又六七合打合しが、盗人は岩に取付て、もとの所にのぼりけるにぞ、洞九郎もつゞいて其所にのぼり、なほ烈く打合、双方数ヶ所手を負て、身うち朱に染りけるが、元來洞九郎は力量すぐれ膽氣まされる者なる上に、よき程に酒氣をおびて勢盛なれば、戰も面倒とや思ひけん、刀を捨て無手と組つくに、盗人も刀をすてて力をきはめ、上になり下になりして揉合しが、遂に洞九郎さしもの大男を仰様に取おさへ、刀を取あげて吭を刺通しければ、一聲叫び手足をもがきて死したりけり。此時月の雲散て再又耀ぬ。洞九郎月の光に乘じて、盗人の身うちを探見たるに、是も剤符を首にかけたり。取上て見るに、己が山稼に晝餉の器をいれて持馴たる布の袋に、眞を改め見れば、小判五十兩あるにぞ、さは思ひがけずや、娘香晰が金を奪たる盗人は、此者にてありけるか。計らず此金の我手に戻りし事、かさね〴〵の福なりと大に嬉しみ、盗人の覆面頭巾を取て面躰を見るに、これ胸毛の黒平にてありければ益々驚き、思はず娘が仇を報し事、心地よし〳〵と打うなづき、死骸を此まゝ捨おきては後日の災と思ひつゝ、土中を穿て深く埋、血にそみたる土どもを取かくして莞爾と笑、七十兩の金を拾ひて、又此五十兩我手に戻、娘を賣て百兩の金を是に加ふれば、丁ど二百二十兩、假の長者有難し忝けなし。今日はいかなる吉日ぞと限なく喜びつゝ、二つの剤符を首にかけ、谷川に下りて刀衣服の血を洗、もとの所にのぼり來て、一息吻とつきける折しも、向うの方の岨道より、手負熊と思しく、樹根岩稜を飛越て、眞一文字に走來る。時に洞九郎思ひけるは、彼熊をしとめて、膽を賣皮を販ば、これも又金になる貨物なり。天の賜物をとらずに歸るも費なりと、俺まで欲の深ければ、古社の關楗を取て岩の蔭に身をひそめ、飛來熊を待うけて、近づく所を前脚を狙ひすまして打倒んとしたりけるに、熊は忽身を躍せてこれを飛越、大に怒をなし、鼻を鳴し牙を嚙、眼を瞋し腰をひねり、たゞ一摑と飛かゝる。洞九郎はかねて熊を捉の手練を極たる者なれば、事ともせず、再又關木を振上て熊の頭をのぞみ、徹塵になれと打けるに、熊も又早く是を避、關木にしかと喰つき爪をたて、かなぐり棄んとす。洞九郎はこれをとられじと力を盡し、えい〳〵聲をたつれば、熊も勢猛くうなりて、しばし引合けるが、熊の力や増りけん、遂に關木を奪取、己が力餘りて仰様に倒れたり。洞九郎は便宜よしと思ひ、手速く山刀を拔て乘かゝり、月の輪をしたゝかに刺貫しければ、さばかりの荒熊四足をちゞめ身をふるはせ、一聲うなりて息絶たり。かゝる折しも從風烈しく吹來りて、樹木の梢ざは〳〵と鳴どよ

み、月はふたゝび暗なりけるに、怪哉炎の玉五つ、何所ともなく飛來り、空中にて一團となり、死したる熊の胸元に落て、消るとひとしく、熊は忽蘇て、再また洞九郎に飛かゝりければ、洞九郎今は身躰疲て敵し難く、逃去んとしたるに、熊は早く飛付て、洞九郎が衣服の襟をくはへ、一跳はねけるにぞ、熊も洞九郎もともに深き岩穴の裏に落入、組づほぐれつ爭しが、遂に洞九郎熊を押伏て、なほ胸さかを幾刀となく刺とほしければ、熊は全く死したりけり。彼五つの炎の玉は、洞九郎が爲に石子詰になりし、五疋の犬の怨念に疑ひなし。去程に洞九郎は、岩穴に落入て、四邊を見れば、岩壁屛風を立廻したる如くにて、登るべき便なければ大に仰天し、蔦葛に取つきては、引ちぎりて撲的おち、岩角を攀登ては、苔に辷りて撞的おち、翅なき身は詮方なく、大につかれて倒伏す。殊に身上の疵痛みて堪難く、誠に十分の難儀なり。かくて時刻移り、夜も明つるにや、岩の間より少しの明りのさしけるにぞ、四方を駈廻りて見るに、のぼるべき所なければ、いよ〳〵驚きまどひけり。さて飢にのぞみければ、山刀を以て熊の肉を割取て是を食ひ、肉の油をとりて身上の疵に塗つけたるに、やうやう其痛は去けれども、とかく登るべき便なければ、大膽强氣の者なれども、さすがに心弱りけり。さて熊の肉を食として



餓を凌ぎ、渇を助くる淸水だになければ、風の吹こむ木の葉の露を嘗て、わづかに咽をうるほし、幾日ともなく此穴の裏に居たりけるが、いかに思ひ廻しても、こを出べき手段なく、首にかけたる二つの劑符をとり、うちなる金を取出し、一つとなして唐革の劑符に納め、七十兩に五十兩、娘を賣ば又百兩、合て丁度二百二十兩といふ金は、我身に授れども、穴にありては金を持たるかひもなし。こゝさへ出れば俄の長者、唯ねがはくは此穴を、遁れ出たや翅もほしやと思ひつゝ、空を仰ぎ足摺して、泣悲むぞ愚なる。かくて明るともしらず暮るともしらず、凡四五十日もこゝにありて、已に嚴冬の時節に到ければ、穴の裏は格別に寒氣強く堪難ければ、熊の皮を剝て身に覆ひ寒をしのぎけるが、髮はおどろを亂し髭は長く生のびて、おのれも熊の如くになりぬ。今は熊の肉もすべて食ひ盡して只骨のみ殘りければ、飢を凌ぐ事能はず。此後はいかにし嬉しみ、是を取て食ひけるに、しばらくあてか命をつなぐべきと、俄に又あわてまりて五臟六腑惱亂し、裂ちぎるゝが如くどひて、何にもあれ食すべき物はなきかにおぼえ、七轉八倒して苦みけるが、遂にと、穴の裏を細かに探し索めけるに、岩多くの血を吐出し、首に劑符をかけながの間に見馴ざる菌のありけるにぞ、大にら、熊の白骨の傍に横たはりてぞ死し



たりける。彼菌は岩芝がいひしごとく、獸肉を食合すれば、忽血を吐て死すといひし詞に違はず、誠に奇妙の菌なり。五雜俎に云く、僧徳明といふ者山に遊び忽奇しき菌を得て歸り、衆人に喰しむ。毒發して死する者十餘人とあるも、かゝる類にやあらん。熟々思ふに、胸毛黑平は、香晒が金を奪ひし報によりて、洞九郎が爲に殺れ、其金洞九郎が手に戻ると雖ども、天罰洞九郎が貪欲非道を戒て、岩穴の囹圄に落し入、身に數多の金を帶ながら、世界に出る事をなさしめず。又香晒は孝の爲に、胎内の子を脱せんと、菌の汁をのまんとせしに、却て其子は恙なく、洞九郎が飢を凌ぎ、命を助からんために食ひしは、却て其毒にあたりて死したる事、善惡邪正其報こまやかにして、天の賞罰正しきこと如此、豈怖ざらんや。又世人貪欲非道の金を貯るは、たとへば洞九郎が窟中にあるが如く、あまたの金も飢渇を助くべき料にならず、僅に一滴の水におとれり。悟るべし愼べし。又洞九郎が穴のうちにありつる始末、人の知べき道理なしと雖も、都是推量を以てしるせるなり。又胸毛の黑平が古社の裏に居たる故いかにとなれば、さきだつて家財を彼社の裏に運おきて、ひそかに賣代なし、妻の岩芝とともにしばらく隱れ居たるが、彼夜岩芝は麓の村に一宿して居合せざれば、夫の殺れたる事を知ず。歸て見れば夫の行方しれざる故に、詮方なくいづくともなく落行けるとぞ。扨彦惣香晒等夫婦の者は、幾日過ても洞九郎家に歸ざるをいぶかり、人を雇て攝州住吉の郷士何某といふ者を尋させけるに、さある人はなしといふにぞ、益々いぶかり、香晒は父といひ子といひ、行方しれず生死の程も覺束なきを悲み、其出たる日を命日として、二人の菩提を弔、涙に日を送りしが、彦惣が病はやうやくおこたりて、其年の暮に全快しければ、是をのみ幸とし、夫婦相談して、泉州堺に住家をうつし、彦惣は扇の繪をかき、香晒は扇を折て、共稼にしけるにぞ、漸々に貧さを忘れけるが、これより二年過て、香晒又懐胎し、此度は女子を産、其名を小田井と號て育けり。

諸迦跋羅駄尊者 醉菩薩方便品第二

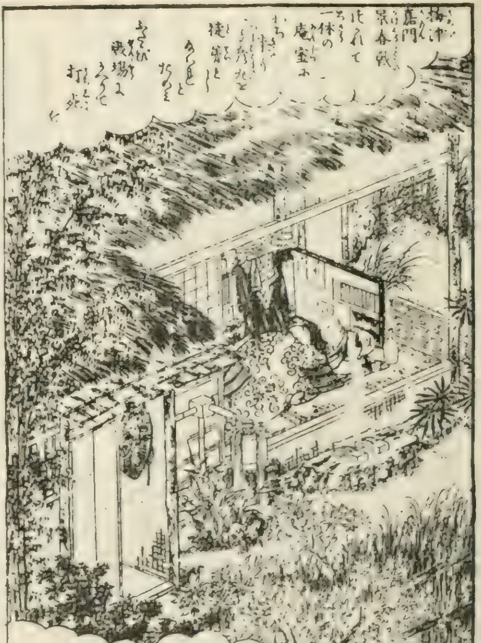
爰に又梅津嘉門景春は、去頃管領由理太夫勝基に從ひて軍師となり、京都萬里小路に宅所をいとなみ、日夜勝基の館に到りて、軍慮をめぐらし、志をはこびければ、勝基甚尊敬あり。然るに嘉門が母みまかりけるにぞ、勝基すゝめて嘉門に妻を娶しめ、其名を此花といひ、男女三人の子を産ぬ。嫡子は彦丸とて今年十一歳、次の娘は玉虫とて九歳、末の娘は三歳になりけるが、此女子右の腕に七つの黑痣

ありて、七搖光破軍星の形に似たれば、其名を乙星と呼ぶにけり。其頃一休和尚は、いまだ年若くおはして、山城國岩倉山の麓に、かすかなる草の庵を結びて住給ひ、庭前に柏樹を植て祖師西來の意を示し、窓外の桃花を愛して、志勤啓悟の跡を慕、倚遇が煙房になぞらへて、一爐の柴に寒夜をしのぐと雖も、方會が雪屋にひとし、階前雪眼藏につもりて、居るに所なく、破蒲團に坐しては恵稜が參禪の辛苦を思ひ、古肉案に對では、盤山が肉肆の發悟を快とし、安國の折箸、鹿門の破鍋、わづかに厨の用をなすのみ。庵中更に一物を貯へ給はず唯酒を好み給ひて、檀越の布施物なき時は、袈裟衣を賣りて酒にかへ給ふ。人是を譏れば、宣はく、往古思大と云ふ和尚、三世の諸佛を我一口に呑盡すといひし事あり。これを思大呑佛と云ふ。夫に比ぶれば、我袈裟衣を呑は未だしき事なりと宣ひしとかや。後小松院の二の宮にて、正しく竹園の御身なれども、自はこれに誇給はぬにや、四姓の人吾門に入ば、皆釋氏と稱ず、出家として氏族の尊卑を議するは忍ぶべからずと、狂雲集に見えたるは、實にも尊くおぼゆるなり。四大皆空なるを看破して、情を詩酒に寄給ひ、顛狂遊戯を以て、靈機を吐ことを專らとなし給ふ。素より聖者の再來にて、六神通を得給ひぬれば、現世の事は更なり、過去未來の事すべて曉し給はずと云ふ事なし。夫は扨おき爰に又、濱名金吾入道由理太夫勝基、兩管領かねての鉾楯に依て、諸國の列侯二裂に亂れ、濱名方に贔屓し、勝基方に引分、已に應仁元年二月、双方洛中の東西に分て、合戦ぞはじまりける。嘉門は益勝基をたすけて、さまざま奇計を施しければ、勝基方大に勝利を得たりけり。然るに勝基方に屬したる、赤松正乘、秋庭原明、攝州鳥井野に於て、尾道助夏廣と戰ひ、利なくして、わづかに三千餘騎にうちもらされて、都をさして敗北し、岩倉山に陣を取援兵を乞けるにぞ、勝基梅津嘉門を首將として、五千餘騎の援兵をぞ向られける。時に嘉門つらつら思ひけるは、我此程天文をかんがみ、皆星をくだし見るに、勝基殿の天壽已に盡き、遠からず病を發して逝去あらん事必定なり。然る時は活龍忽ち死蛇となり、雷霆雲をはなれて地に落るが如ならん。かゝる擾亂の時到りては、我いかほど忠烈をはげみ、精神を盡すとも、孤掌鳴ざるの道理にて、とても世間無爲の計は行はるべからず。楠判官湊河に打死せしも能く時を知れるなり。唯勝基殿の生前に、爽に打死して、日來の恩義に報いなんと思慮をきはめ、今日を名殘と思ひきりて、妻此花三人の子供等に今生の別をなしゝはれの軍と思ふにぞ、花やかに鎧て、岩倉山の陣にいたり、正乘原明兩將を助け、諸軍に指揮して奇正虚實九變の

術を盡し、種々の奇計を出して戰しめければ、夏廣をはじめ濱名方の大軍大に敗走して、死亡の者數をしらず。素より目ざましき軍して打死せばやと思ひ定たる事にしあれば、自長刀を打揮て大軍の裏に跳入、四角八面に斬て廻り、敵あまた打取、猶勢猛くぞ戰ひける。此日一休和尚は庵中におはして、陶酒の徹酔に眠を催し、肱枕してしばし眠り給ひけるに、忽螺鐘太鼓の音大にひゞき、鯢波箭叫の音すさまじく聞えければ、眠を醒して頭をあげ、寐ながら枕屏風を押除けて、岩倉山の方を見給ふに、霧の籬にいろ〳〵の旗翩翻として、紅葉をながす雲の波、山を洗が如くなり。さては岩倉山に軍はじまりけるよな。蝸牛の角の爭に、我庵室までを修羅の巷となして、睡を妨ぐる忌はしき奴原哉。あなかしましさよと口小言宜ひけるが、しばしありて少し鎭りければ、さらばまた一睡とおぼして、とろ〳〵と目睡給へば、又陣鐘太鼓を打鳴すにぞ、睡り給ふ事あたはず。益々腹立給ひ、かく騒がしくてはとても我を睡さじ。せめていま一盃を酌ばやと獨謠給ひつゝ、陶を自在にくゝりつけ、爐中に柴を折くべて、胴頭をあぶりてぞおはしける。かゝる折しも山路より、武者一騎、手綱かいくり、駒の頭を此方にむけて歩する。其裝束いかなれば、紺村濃の直垂に、白糸威の鎧の、金物重く打たるを透間もなく着下て、



青純の大口をはき、長覆輪の太刀を帶、銀の小蛭巻に目貫は螺を透したる長刀を小脇にかいこみ、鹿毛なる馬の太く逞しきに、遠雁の文を打たる鞍を置、燃立ばかりなる厚総の鞦をかけてぞ乘たりける。身上に數多矢を折かけて、枯野に殘る冬草の、風に臥したるに異ならず。全體血に染りて、白糸威も緋威と見まがふばかりなり。敵とおぼしき雜兵四人、後をつけて來りけるが、容易に手を出さず、木陰にかくれて伺ひけり。偖彼武者は一休一庵の前にて馬を下り、長刀杖に倭僂つゝ、柴の戸に立寄てほと〳〵と打敲ぬ。一休は最前より金鐵みなる鎧金物の音に交りて、轡の音の介々と鳴に耳傾けて、落武者の過るならめとおぼしけるが、程なく門を敲にぞ、何者にやとおぼしつゝ、庭下駄はきて飛石づたひに立出給ひ、柴の扉を開き見給ふに、是はかねて相知給ひける、梅津嘉門景春なれば、こは思ひ



かけざる事よ。和主も今日の軍に出立れしか。見れば痛手の樣子にて、戰疲たる體なりと宣へば、嘉門其應はせず、突然と問て曰く、

如何是勇士恁麼事、

一休聲に應じて答て曰く、

吹毛急用不如前。

嘉門此一句を聞て打點頭ば、一休則ともなひて庵中に入り給ふ。嘉門坐をさだめ一息吐てのひけるは、小子今日しも管

領由理太夫の命をうけ、援兵の首將となりて、岩倉山の戰場にむかひ、豫て思ふ旨あれば、今日を限りと思ひさだめ、討死ときはめ候が、師父にたのみ申度一條あるにより、一方を斬拔て此所まで落參り候。其事別儀に候はず。小子が先祖梅津豐前左衞門清景は、元亨の頃、當國梅津邑の領主にて、月林大幢國師を尊信し、法名を是心と稱じ、專禪法を修して正法眼藏をきはむ。其故に國師の法語一巻を家に傳へ、小子もまた禪法を慕志深く、一旦金剛山に跡を隱すと雖も、由理太夫我不肖の身を懇望あるにより、やむことを得ず仕へをなし候へば、空寂の玄妙を會得するにいとまなく、遂に其志を遂侍らず。これに依て兒子彥丸を出家となし、小子が志をつがせたく候なり。當時師父の道德天に覆ひ、慈悲普して人擧て活佛の思ひをなし候へば、師と賴み申べき人外にあるべからず。希はくは師父彥丸を御弟子となしたまはりて、微妙の法門を傳へ給はれかし。これのみ今生の望に候。陣中物のたくはへも候はねば、これを布施物となし給はれかしとて、はきたる太刀を取てまゐらすれば、一休これを受一宜はく、善哉是南泉猫を斬の利刀なり。此太刀都て血に染りて朱を塗たるが如くなれば、我これを朱太刀と號て常に身邊に置、邪禪賊僧の頭を斬の法刀となして、長く和主の遺物と見るべし。子息彥丸の事は望の如くすべければ、心安く思はれよと宜ひければ、嘉門は今生の望を遂、世にも嬉しげにて、氣色涼くぞ見えたりける。一休の畫像に椅子の傍邊に、大太刀を畫て朱太刀の像と云ひ傳ふる、いはれはかくと知れたり。かくて時刻移りぬれば、嘉門いひけるは、小子は最期を急ぎ候へば、はや御暇申すなりとて、一禮して立上り、門外に出れば、一休も門送りして出給ひ、嘉門が最期の正念を試んとや思しけん、辭世の一句聞まほしと望み給へば、嘉門やがて詞を出さんとせし折しも、最前の雜兵四人木蔭よりあらはれ出て、且二人の兵士嘉門が左右につと寄て、腰にむんずと組つきぬ。嘉門これを事ともせず、

生れぬるその曉に死ぬれば

と上の句をしづかに吟じつゝ、長刀をからりと捨て、二人が鎧の東方に左右の手をかけ、阿吽の呼吸を拍手として、大地に噇的投付たり。殘る二人はこれを見て、なほ隙もなく組つくを、腕首摑て捻かへし、此方を足下に踏つけて、

けふのゆふべは秋風ぞふく

と下の句を吟じつゝ、右を投のけ左を蹋かへし、長刀を杖につきて、はたと白眼ければ、四人の兵等は其勇氣に恐れ身をちゞめてぞ逃去ぬ。一休これを見て呵々と打笑ひ、心地よし〱、辭世の歌の殊勝といひ、はげしき今の攙といひ、天晴れ

英雄哉。とく／＼極樂城に赴て、阿彌陀將軍の軍師となり、廿五騎菩薩軍を指揮して、閻王城を攻落し、惡趣の衆生を救ひめせと宣へば、嘉門莞爾と打笑ひ、其御詞は我爲に、佛鬼一如の御引導、有難し忝けなし。くれ／＼も兒子が事賴み上候と、悟道の人も子故には、さすがに迷ふ闇の梅、色こそ見えね鹿毛の駒、銜取て引寄つゝ、馬上の失禮免したまへと一禮して、乘んとせしが痛手にて、倭偃足を踏固め、打乘ける折しも、ふたゝび又貝鐘太鼓を亂調に打立、鯢波をどつとあげて、天地も崩るゝばかりなり。嘉門馬上に長刀を小脇に引側めつゝ、山の方を佶と見て、さては味方敗軍と覺えたり。いで／＼今一軍して目に物見せん、暇申すといひ捨て、鐙を鳴して走行に、怪哉空中より一團の陰火落下りて、忽一つの鼠と化し、嘉門が馬の尾に飛付てともにゆく。これ前年惡靈等鳥部野に會合して、かひかはしたる詞をたがへず、修驗者賴豪院が怨念嘉門を亡すにうたがひなし。去程に嘉門は再又戰場に到、濱名方の大軍の眞中に驅入、長刀を額にあてて、勇誇たる大勢を八方に追散し、蜘手輪違十文字、縱横無盡に懸破り、彼に露此に隱、火花を散して戰ぬ。聚散離合のありさまは、須臾に變化して、前にある歟とすれば忽焉として後にあり。飛鳥のごとくにはたらき、在所を見さだむる事能はざれば、打るゝ者其數をしらず。嘉門思ふ儘に戰、なほ數多深手を負ぬれば、今はこれまでなりと思つゝ、如意ケ嶽に驅上り、物具脱棄岩の上に結跏趺坐し、懷中硯取出して、岩の苔を打拂ひ、筆を染、再又辭世の頌をぞ書たりける。

提二持吹毛一　截二斷虛空一。
大火聚裏。　一道清風。

といふ句を書終て、差添の小太刀を拔き腹十文字に搔破り、俯臥になりてぞ失たりける。時に一陣の疾風颯と吹來りて、樹木岩石鳴動し、又彼妖鼠あらはれ出て、嘉門が臟腑を喰ひけり。深き怨念のほどこそ恐しけれ。此しも冬の半なれば、此日夕暮より大雪降出し、暫時に高く積て、世界一面の白妙となりけるが、萬里小路の宿所には、嘉門が妻此花夫の打死を聞き、かねて思ひ儲たる事とはいひながら、無慚にも悲くもおぼえて泣沈みけるが、嘉門が詞に、我れ打死すとも共に失なんと思ふべからず。何方いかなる所にも身を忍びて、三人の子供らが行末を見屆くべしといひ殘しおきつれば、露の如くなる我身さへ消佗て、死る事さへならがたく、唯三人の子供等を身近く置並べて、口に稱名目に涙、泣より外の事ぞなき。かくて翌朝にもなりけるが、濱名方の兵士共、嘉門が妻子を搦め取て、入道殿の恩賞にあづかるべしと相議して、嘉門が宿所を取卷ければ、召仕の男女共は、此騷をよそ

れて皆散々に落行ぬ。此花はいそがはしく二歳になる乙星を懐に抱き、一袋の沙金を携へ、大幢國師の法悟の卷物を、九歳になる娘玉蟲か懐ろに入させ、我身は市女笠着て壺折姿に扮し逃れ出んとするに、早敵兵前後の門にひし〳〵と寄たりければ、逃出ん樣もなかりけるに、彦丸かひ〳〵しく馬に打乘り、長刀を打揮て、前門に寄たる敵兵を追散し、母上此隙にとく〳〵落給へといへば、此花は玉蟲が手を取て出、彦丸かならず無益の戰ひして怪我あやまちすな。速く跡より來れよといひ殘して落行ぬ。かくて四五町打延て跡を顧れば、早宿所に放火して、一片の煙と燒揚たり。昨日までは世に覺いみじく時めき榮けるに、今日は忽ち宿所をさへ燒失はれて、立寄木蔭も雨漏心地し、水鳥の陸にまどへるごとくにて、有爲轉變は世のならひといひながら、哀なりける事ざまなり。去程に此花は、玉蟲とともに近江の國に落行んと、如意山の山路にさしかゝりけるが、雪は猶強く降まさりて、滿地玉をしけるかとうたがはれ、道を埋て行方さへも別難く、山越の寒風肌を斬がごとくにて、手凍足なへ、さて、いかにともすべき樣なく、彼處に倒れ此に伏て行悩み、夢路を辿るごとくにて、やう〳〵青井が谷をすぎ、千石岩のほとりに暫時休ひて息をつき、彦丸はいかにして來る事の遅ぞや。もし敵に圍れて捕はれはせざるか、と、跡も氣づかひ先も難儀、跡に殘せる子を思ば、進もならず退くも、跡には敵の充滿て、進退ともに失へば、足なき蟹に似たりけり。雪は頻に降かゝりて、袖打拂ふ隙もなく、岩に結ぶ冰看を見れば、劍をさかしまに植並たるやうにて、刀山劍樹のごとくなり。手の指は小蝦の腰のやうに屈りて、赤く色づきたるさま、紅蓮の衆生に異ならず。六趣の六花、氷の衣の薄衣積雪、八寒地獄の苦も、これには過じと思はるゝ、雨衣だになければ、雪水に衣服を濡し、吹雪に面を打れつゝ、身うちいら〳〵と、寒氣骨に透て堪難ければ、母は二人の子をいとひ、子は亦母をいとふにぞ、玉蟲泣聲にていひけるは、母上のう我身は少しも寒からねど、母上はさぞ寒からめ。御持病はおこらずや。氣分はいかに侍ぞや、せめてこれ召して寒さを凌ぎ給へかしとて、覆ひたらぬ小さき小袖を脱、母の肩に打着て、其身はわな〳〵と振ひ、歯の根さへあはぬ有樣を見て、母は涙せきあへず、小袖を押返して玉蟲に打覆ひ、呼親なればこそ子なればこそ、其樣にしてくれる。妾が樣な因果な身に、何として其方のやうな孝行な子を儲しぞ。いとをしの我子や。昨日までも管領の軍師と人に敬れ、其妻子なる我等まで、榮花を極し身なれども、夜の間に變る此難儀、おしき時節に生合、憂目を見する不便さよと口說立て、右の袂に抱つゝ、つめた

き顔に我顔を押當て、むせかへりつゝ泣けるが、涙さへ氷となりて霰たばしる如なり。懐に抱きたる乙星も、寒さに堪ざるにや、いと苦しげに聲立て泣にぞ、泣な泣なとゆすり上、乳房を口に含すれば、乳汁さへ飲すなほ頻に泣ければ、尤ぞ〳〵、襁褓のうちより大事にかけて、荒き風にもあてぬ身を、かゝる雪風にふきさらさせ、母が肌の温氣も、冷とほりたる懐に、凍て泣もうべぞかし。いとをししや可愛やとて、抱しめ〳〵、悲む聲の哀さは、翅の下に雛鳥を、暖めかねて鳴あかす霜夜の鶴に異ならず。かくて時をぞうつしける、こゝにまた有漏路太郎無漏路五郎といふ兄弟の強盗あり。兄太郎は今歳廿歳に到り、弟五郎は十六歳にて未だ前髪あり。頃日岩倉山に軍ありときき、落人あらば、馬物の具太刀刀を奪ひ取ばやと、此山中を徘徊し、此折しも木陰に隠れ居て、此花等が樣子を窺ひ、玉蟲が美目容のうつくしきを見て、彼を奪ひ取て人商人に賣ば、よき價になるらめと思ひ、此花が懐にも物ありげなれば、いづれにもよき貨物ぞと點頭合て、つと走り出、無漏路五郎飢たる鷹の雀を爬やうに、玉蟲を捕へて猿轡をはませければ、此花は大に驚き、其子をいかにするぞといひて取付を、有漏路太郎ものをもいはず、刀を拔て此花が肩尖を、二三寸ばかり斬込ければ、あなやと叫びて仰樣になり、山守の小童等がつくりたるにや、背後の方に五六尺ばかりなる雪の達磨のあるに倒寄ば、血しほさつとほとばしりて、達磨の身にぞかかりける。時に此花が懐より、乙星を撲的落ければ、乙星は聲を立て泣叫ぶを、有漏路太郎足にかけて谷の裏へ蹴落しぬ。此花はこれを見て、こは情なや悲やといひて、肩尖の疵をおさへ痛手の苦しさも忘れて、谷を見下しつゝ歎けるを、無漏路五郎も刀を拔て一太刀斬ば、あつと叫て身を悶え、髻されて黑髮を、風に亂せし有樣は、緑も深き青柳を、時にもあらで見る如く、身上は朱に染つゝ、帷子雪に散交る、寒紅梅に異ならず。苦しき息の下よりも、彥丸はいかにせしぞ、とく來て我を救かしといひつゝ、右左に倭僵て、此子を返せといひて、玉蟲に取つけば、無漏路五郎丁と斬る。谷へ落せし幼子を取て戻せと立寄れば、有漏路太郎はたと斬る。彼方此方の弄り斬七轉八倒身をもだえ、あな苦しや堪がたや。たとへ我をば殺すとも、二人の子供は助てよ。慈悲ぞ情ぞこれのうと、叫ぶ聲さへ絶々に、虛空を摑む苦痛の體、二人の賊はせゝら笑ひ、いかほど號ても聞入る耳もたぬ。情心で我々が、活業のなるべき歟。無益事をいはずとも、鱠の料理を賞翫せよと、さもにくさげにかはる〳〵罵りつゝ、慰半分片手斬、なほ幾太刀となく斬けるにぞ、斬度に血しほはしり、雪の達磨の身にかゝりて、其半

身を紅に染なしたり、かくて有漏路太郎此花を踢倒し、足下に踏つけ、とどめの刀をぐつと刺ば、あつと叫か此世の名殘、あへなく息は絶にけり。無漏路五郎立寄て、懷を探見れば、果して一袋の沙金あれば、之を奪て死骸をば、谷の裏へ踢落しぬ。有漏路太郎は玉蟲を小脇に抱き、兩人ともに行方も知れずなりにけり。偖彦丸は敵兵に取籠られて、ほと〳〵危かりけるを、漸々駈散して、此山路に馬を進めけるが、戰ひ疲れて丫角を振亂し、身上は雪に濡通り、氷を握る如き手綱をかいくりつゝ、母上はいづくにぞ。母上のう〳〵と叫りつゝ、跡を慕て來りけり。時に麓の方を見おろせば、敵大勢飛が如くに追來る。雪は益降亂れて、雪頽の音颱々と鳴どよみ、敵の叫呼聲に合して、いとすさまじく聞えけり。已に敵近々と寄たりければ、彦丸は駒の頭を引返し、長刀を打揮て向ひ合、敵は歩立此方は馬上、踢上る白妙雪煙、玉塵を踏散して大に戰ひけるが、彦丸は年僅に十一歳なりといへども、父の武勇を承繼て、膽氣烈しく力量は殊にすぐれ、武藝も又普通ならず、小腕に希有の力業組んとちかづく兵の、鎧の揚卷かい摑で中に提げ、弓杖五丈許り投渡せば、其人飛礫に當りける武者共は、四五人連て谷底へ眞倒にぞ落たりける。此時しも雪卷風どつと吹、彦丸が馬岩に足を跌きて、小膝を折て摚的伏ける



にぞ、歩立になり、長刀を捨太刀にて戰けるが、左の臂に手を負て、血しほさつとほどばしり、これも彼雪の達磨にかゝりけり。手を負ても勢ひ益猛かりければ、勇兵は辟易し、さても奇異なる童哉。小天狗の化身にや、人間業にはよもあらじ。とても敵對かなふまじとて、皆一同に逃失たり　彦丸も今は大に疲、息切して堪ざりければ、雪を含て咽を潤し、太刀を逆につき、雪の達磨を屹と見て、あないぶかしや我血しほ、此達磨にかかるとひとしく、以前の血しほと一つに合し、全身總て赤き達磨となりたるは、心得ざる事なり。同血にあらずんば、いかでかかゝる事のあるべきや。もし母人此所にて人手にかゝり、此達磨に血をそゝぎ給ふにはあらずやと、疑ひつゝ邊を見れば、母の着たる市女笠のありけるにぞ、扨こそと思ひて胸もとゞろき、なほよく見れば雪中に、小さき足跡のあるにぞ、妹玉蟲も此所まで下つきそひ來つるに疑なしと思ひつゝ、雪に流れし血をしたひ、谷の半まで下りて見たりけるに、岩の間にとどまりて、母の死骸のありけるにぞ、こはこはいかにと仰天し、肝心もなくなりて、唯呆れて居たりけるが、良ありて石木の如くに凍縮みたる屍を抱きあげ、そも何奴の仕業にて、かく無慚なる事をばしけるぞやとて、且悲み且怒り、拳を握り切齒して泣悶けるが、二人の妹はい



かになりしぞと、これも又氣づかはしく、母の懷中の沙金の失たるを見れば、盗人の所爲なるか、今一足遅かりし口惜さよとて、悲歎の涙にむせかへりて、人心地もなかりけるが、再又敵追來るとおぼえて、麓の方に貝鐘の音鯨波、すさまじく聞えければ、いそがはしく雪掻拂ひ、土中を穿て死骸を埋、松の枝を折てしるしを立、原の所に登り來て、獨言にいひけるは、敵兵又追來ると覺えたり、我戰疲たるうへに、臂に手を負、疵口に寒氣通りて痛堪難ければ、今は敵する事かなひがたし。阿容々々と捕はれなば、花々しき討死して、武門の譽を殘し給ふ父上の恥辱なり。殊更母人は人手にかゝりて失給ひ、二人の妹が生死さへ知れざれば、我身一つ生ながらふるとも、何のかひかあるべき。爽に腹切て父母の跡を慕ひ、死出三途を伴はんにはしかじと思ひさだめつゝ、太刀をとり腹掻いだして、ほど〱突立んとしたる處に、やれはやまるなしばしばしと聲かけて、雪の達磨の背後より、簑笠を着て立出たる人を見れば、乃是一休和尚にぞおはしける。彦丸はかねて相知ければ、こはよき折節御坊に見え參らする有難さよ。今様々々の故によりて、切腹と思ひきはめ候へば、希はくは御引導を御授下されかしといへば、一休宣はく、我れ汝に見えて語るべき事あるにより、萬里小路の宿所に赴かばやと詣でしに、早敵兵放火せしと聞、引返す途中にて噂を聞ば、汝此山中に落來といふにより、跡を慕て來つるなり。昨日父嘉門我庵に來り、云々の宿志を語り、汝を我弟子となし、今生の望を遂しめよとたのみて、再戰場に引返しぬ。其證はこれなりとて、彼布施物に殘したる太刀を見せ給ひ、又宣ひけるは、父の討死母の非命に死したるも、皆是過去の宿因なれば、如何ともすべからず。死して冥路に迷はんより、生て我直示人心の法を傳へ、ながく父母の菩提を弔んにしかじ。昔達磨大士、嵩山の少林寺に寓居して、九年面壁の時、神光といふ僧、夜終雪中に腰を埋めて教を乞。達磨容易に教へず、神光我苦行をいとはざる志をあらはさん爲に、ひそかに利刀を取、自ら左の臂を斷て達磨の前に置。達磨これを見て、法の爲に形を忘るゝの所爲、法を傳べき器量あるを知り、心如墻壁の譬を以て、諸佛無上の妙道を傳ふ。二祖大師慧可といふは即此神光が事なり。汝今左の臂に手を負、此雪の達磨の前にて、我弟子とならん事、慧可大師安心得道の趣きに似て、もつとも深き因緣なり。汝が心いかにと宣へば、彦丸大に喜ひて切腹をとゞまり、徒弟とならん事を乞ければ、一休のたまはく、善哉々々。汝が先祖梅津左衞門清景の法名を是心といひける由、汝が法名を是雲となづけ與ふべし。

実の字は是我狂実の一字なりとて、彼蕉　ともなひて、庵に帰り給ひけり。これよ
門が遺物の朱太刀を抜て、彦丸が髻を　り彦丸剃髪して、一休にしたがひ同庵に
斬給ふ折しも、又貝鐘の音鯨波、谺しく　住て、坐禅念経の外他事なかりけるとか
聞えければ、挙来れしと宜ひつゝ、間道を　や。

本朝酔菩提巻之二終

再刻
繪抄
校本庭訓往来 全一冊

浪速 峰岸龍父先生校正并書
近刻 東都 栽斗先生画

庭訓往来ハ玄恵法印の文章なりとて普く世人のしる所なり。然るに余が旧板ハ絵抄庭訓往来なり。今流布の本と同じく文字脱漏ある假字違ひあり。近来三都の新板ども皆同様にて古本も稀なるのみ。因てこのたび再刻の次峰岸先生ハ古風よりして校正の未板行ならざるにより校正并筆耕のことを頼みたるに先生云 庭訓の校正ハ古写本によりて且解しがたきの多し。中にも九月十月の佛家の請状などとけて解しがたし。ここに永井政純の従解も杜撰なり。外に及ぶべき注もなければ己の謬に陥りして佛家の部をばとり改め文武家に施の古写本をもて校正清書し假字の違ひも改めて校本庭訓往来と號し余に点へられける注なるも見るに九十月の請答も解し易くして今流布の本とは格別の文字しるして其書風も本ふうなるべき也此云なり画ハ東都栽斗先生にたのみて図を新にし書字の同じきをはぶき是庭訓往来の善本といふべし。今是を新板して世に広くせんと欲るを需く四方の諸君子今流布の諸本とくらべ見競の上にて求めたまはんことを願上候以上

文政十年丁亥三月

浪華書林 岡田群玉堂主人謹誌

稻妻表紙後編本朝醉菩提卷之三

諸尼羅尊者　姉妹本事品第五

叢林に骨をうつ靈鬼、なく〳〵前生の業を根み、深夜に花を供する天人、返す〴〵も幾生の善を悦と雖も、善惡不二と悟る時は、何をか根み何をか悦ぶべけんや。抑安計呂山といふは、信濃、越中、越後三國に跨、東西は五十餘里秋田の地、幾重の谷峯、繩をわたして橋となし、北は越後越中の堺川、これも谷二つを越て凡そ十里に餘るとかや。懸河瀰々として巖巉々たり。山復山いづれの工か靑巖の形を削りなす。水復水、誰が家にか碧潭の色を染出すといへる詞に異ならず。山高して海近く、谷深して水遠く、實凌兢深山なり。かゝ恐しき所にて、月もこゝぶかき山陰に栖をもとめ、浮雲の財を集め、不義の富を望として、慳貪邪見の老女あり。其出身を尋るに、昔若かりし時は、都五條坂に住、百魔とてかくれなき遊女にて、曲舞絲竹の調は更なり、萬の藝にくらからず、數多の人に愛られし身なれども、萬能より一心とかいへる諺の如く、生得志あしきゆゑに、漸々に零落てかかる身には成けるなり。年は五十歳に近く、昔の花は散はてて、今は色香も失たれど、身躰は健にて若人にもまさりけり。はじめは此山里に住まじりて、或は山賤の樵路に通花の陰、休む重荷に肩をかし、月諸共に山を出て、少の賃錢をもらひ、或はまた織姫の五百機たつる窓に入て、枝の鶯糸くり車、紡績の宿に身を置、人にやとはれ手間仕事して、僅に命をつなぎ錢、世を空蟬のから衣、拂はぬ袖におく霜は、夜寒の月に打すさむ、碪の音もせはしくて、しづ心なき身なれども、昔忘れぬ身だしなみ、老女の化粧冬の月、げにおそろしき姿なり。年に似合ず岩疊にて、道を走り岩を跳ること、人にすぐれて早ければ、昔此山に山姥とて、飛行自在の鬼女ありける、それにも似たりとて、里人等百魔山姥とぞ呼にける。かくてありけるに、此山奥にさるやんごとなき尼公の、世を避て住給ひぬるが、此にて終焉をとり給ひ、其跡空屋となりたるを幸ひとし、其從者共を追拂ひ、其家を奪取て住ぬれば、かゝる深山にあるべしとも覺えず、鄙に目なれぬ結構の殿作なれど、爰にうつりて幾年を過ぬる月と檜皮屋根、今は茅に葺かへて、漸々に住荒しぬれば、繪障子金襖の破れたるを古反故にて補ひ、蔀雨折戸の崩れたるを荒繩にて繕ひ、帽額の翠簾の傍には、蝙蝠を垂、緞帳の風

洩ところには澁張の紙張をくだし、高麗縁の疊のたらざる所には、蕨のおどろを敷物とし、破几帳に冬籠の寒さを凌かねては、蓆屏風を立まはし、高蒔繪の御厨子に、擂槌、擂盆、缺陶、いやしき器を置ならべ、香の薫のしみこみて、昔ゆかしき經机に、獸の肉を屠など、にげなくも無慚にもおぼえたり。素より貪欲深き者なれば、金銀をむさぼる一つの惡計を思ひつきて活計とす。故ありてかねて貯の金ありけるが、人に雇れ賃仕事して、貧き中にも惜みてつかはず秘おきしを本錢となし、折々山を下り、人商人につきて、幼き女の子供を價安く買取てあまた養おき、妹と醜と賢と愚なるとを選びわけて、それ〱にさま〱の藝をしこみ生立て、或は傾城、白拍子、傀儡、蓮葉女、妾、湯女、或あんにや、浮身宿、比丘尼、辻君、伽やらうなど、醜美に因て上下をわかち、本金に十倍して價を高くし、都鄙に賣渡て非道の金を貪、これを上なき樂として過けるが、人里遠き深山なれば、これぞ知者なかりけり、類は友を集るの理りにて、彼有漏路太郎無漏路五郎兄弟の強盗、梅津嘉門が娘玉蟲を、此老女に賣與へたるが縁となり、兄弟共に今は此老女に随身して、此家に住けるが、老女は折々彼等兄弟を諸國に旅立せて、なほ幼女を買とらせ、又は奪取せもして、益々欲をむさぼりぬ。美目貌能く、太夫白拍子などにも賣めと思ふ幼女には、常に紅粉を粧はせ色よき衣を着飾立て大事に育、みめあしきには、僅に肌をかくすばかりの織布を着て、柴をからせ水をくませ、又は竈のもとに追下し切割煮焼の業をさせて、嚴重おひつかひ、いさゝか意に背くことあれば、忽ち呵詈打擲きなどして、ひたすら邪見のふるまひをなし、露ばかりも情心も持ざれば、幼者共の目には女の鬼とも見え、山姥と異名をとりしも宜なりと思ひて恐れあひぬ。

一日老女例の如く、幼者共を並べおき、盥に湯を取らせて一人々々に呼いだし、磨きしてやりながら、彼方にむかひ、これ青柳よ。そちは長門の下の關へつかはすべき約束あり。下の關は能囃が專らや。昨日教た小舞を舞て見せよ。これ緒よ。そちもこゝへ出て、鼓をうてといふにぞ、七つばかりの女の子、鼓を取て進出、ヤアハアとかんばつたかけ聲して、拍子をすゝむれば、青柳といふは十一二ばかりにて、短き振袖着たるが、扇把て立上り、

夫山といつぱ、ちりひぢよりおこつて、天雲かゝるせんぢやうの峯、海は苔の露よりしたゝりて、は、たうをたゝむはんすいたり。

と唄うて舞けるに、老女は此方の子供が、顔を洗ひさしてこれを見つゝ、いや〱さうではない。夫山といつぱといふ時さ

し扇して、大まはり小まはりをして、ちりひぢよりおこつてといふとき、かざし扇して、雨雲かゝるせんちやうの峯と、左右を一つして、かいこみざしをして、拍子を踏前へ歩み、海は昔の露よりしたゝりてはとさしまはして、後へさがるのぢや。今一度舞て見せよといふにぞ、又一さし舞けるに、老女は氣をいらち、さても／＼ふ得のわるき奴かな。かう舞といひつゝ、居ながら舞振をして見すれば、やう／＼心得て舞なほしけるに、それでよい／＼。かならず又忘るゝなと、呵つけて退かせ、此次には初花出よ。そちは美目貌すぐれてみやびたる生ゆゑ、江口の君か神崎の阿曾比女にせねばならぬ。琵琶を彈て催馬樂うたへといへば、八つばかりなるが出て斜にすわり、膝の上におきあまる琵琶を抱、おぼつかなげに爪調して、東屋といふ催馬樂をぞうたひける。

　四阿の雨下の軒の其雨灑我立沾ぬ其戸開かせ

と、いとねふげにうたひつゝ、琵琶をばとら／＼と鳴してのきければ、老女いはく、此度は浮草出よ。そちは目下に情ふしきところあれば、浪花へのぼせて瓢簞町の太夫にするつもりぢや。雛節うたへといへば、浮草は三絃把てひきならし、催馬樂の古風なるには事かはり、いとあだめきたる調子にて、

　たえてあはずとふみをばかよへ

と唄ふを聞、いや／＼さうぢやない。それでは節も三絃も違うた。そちも物覺えの惡いやつ、三弦こちへよこせとて、爪のさきにてひきならし、

　たえてあはずとふみをばかよへ。ふみはいもせのなかとなる。宵々ぬるゝ、
　我たもと。

かううたへとて、三絃を押やれば、浮草はふたゝび彈うたひして退きぬ。此度は礪波出よ。そちは都へ上せて、白拍子にするつもり、きのふ教たは、昔祇王が清盛の前でうたうた今樣ぢや。祝儀の席にはよい文句、忘れはせぬか、うたうて見よといふにぞ、礪波はすゝみ出、扇を取て拍子を打、

　蓬萊山には千歳經、萬歳千秋重れり。松の枝には鶴巣食、巖の上には龜あそぶ。

と、折返してぞうたひける。ヲ、それでよい。此次は露野が番ぢや。とく／＼出よといひければ、年は十ばかりにて、額髮を前に垂、油つきたる布子着て、身上に濕瘡をかき亂れたるが、肋の痒を掻つゝ出れば、老女はこれを外眦で睥睨、そちはわけて物おぼえの惡い奴ぢや。忘れはせぬか、身に染ぬと股をふつつりいはするぞ。文彌節の袖時雨彈て見よといへば、こはさに身ちゞ戰慄つゝ、三絃把て哀げに、子をすてる、藪に生立群烏、父よ母よと鳴からす、月もかたぶく胸の闇、娘のおくれのばち／＼／＼、子に迷ひゆく袖

しぐれ。

と、泣聲にてうたへば、何が悲うて泣をるぞ。まそつと泣と引よせて、太股をふつつりつめれば、わつと叫な青柳が、誘て彼方へ連退ぬ。其跡へは五つか六つの傷敷小比丘尼が、黒木綿の頭巾を被り、柄杓を腰にさして出れば、老女云く、そちは今少し生立て、伊勢か熊野へやらねばならぬ。比丘尼といふものは、牛王寶との文匣を脇挾み、熊野の地獄の繪說して、血の池の穢をいませ、不產女の哀を泣すが活業ぢや。いで比丘尼歌うたへといへば、アイと答て小き指に、比丘尼彫を打ならし、

梅はにほひよ、櫻は色よ、人は美目より唯心。お勸進、おやんな。

と、舌もまはらずうたひけるは、わけて哀に見えたりけり。此次には辟田出よと、云れていづるは十二三、容醜き幼女なり。老女つら／＼打視り、こちらは大なかづき物、面といへば丹波飯羅の底のやらにあら／＼しく、頤といへば槍頤、色は麥餅見る樣で、肌は鮫肌足は鰐、聲さへ堂の鳩のやうで、一つとして取得がない。せめて傀儡にも賣めと思へどおぼつかなし。そちが生在所の傀儡等が、旅人をもてなす詞をおぼえて居るげな。露野を相人にしてそれいうて聞せよといひければ、辟田は露野に寄てひつゝをかしげなる身振して、



いかになよ。旅の殿さ、草臥であるべいに、おくはびら出しめせ。はだけ申さう。扔な猛に毛臑、お笑止や〳〵。咽のひつつき申すに、水をつんのみ其ついでに、尿をつきてまゐり申さう。あゝお笑止や。蟒蛇のねまり申たる樣な、大飯かきとりて腹ほてるまゝに、夢にて夜をぶちあかしめさるべいよな。明日は又道中だんべいに、てつぺいを枕にぶつさげめされぬか。これな旅の殿さ、情ない。なんだ、蚤がおほくてつかんでほうばるべいに、疥はひつ掻べいよ。

と、このよにいうて、ちよなめきます。まだ暁がござるとて、だみたる聲して、

君がこぬ夜は臉もあはぬ涙の淵へ枕をつつばめた

と、なまりゆがみてうたひければ、さしもの老女も忍かねて、可笑き奴と笑ひけるが、此方の子供が剃磨も大方にしてとらせ、一人殘るを洗ながら、そちが此樣の黒さは何事ぢや。車牛の襟皮を、飾磨の褐に染たりとも、これほど黒くはあるまいぞ。ちと心して垢をたけなと叱つゝ、皮も剝むく計に洗ひければ、痛に堪ず、ほろ〳〵と涙をこぼすを突やりて背後を顧み、これ竈の前の小女郎共、なぜ此樣に煩しをる。日が明れぬはどうするのぢや。無益に薪を費すな。食物あつかふ傍で虱ひろふな。汚穢こと知りをらぬか。これ



伊勢平氏よ、そちは目が眇みたれば、青黛を撰ば瞼おしあけて、山蛭に氣をつけよ。鼻平太よ、そちは鼻に云分あれば、汁鍋にむかはゞ鼻汁をよく拭へ。出尻よ、そちは上り坂に勝手がよい、峯にのぼつて薪を樵。鳩胸よ、そちは下り坂に勝手がよい、谷にくだつて水を汲。猫脊よ、鼻垢まるめて何にする、汚穢事しをるな。家鴨よ、鍋の尻あらつたら干菜刻め。癋よ、手があいたら洗濯物ほしてこい。白眼よ、そちは邪眼ぢやから笊の番が相應ぢや、裏の藪に氣をつけて、猿に笊とらるゝな。小雪よ、手習精出せ居眠すな。のらかはくとあれ見よ。有磯がやうに机に載せて、茶碗の水を持すぞよ。弦藻よ、灸はいかほどすゑたぞ。そちは病身者ぢや、澤山にすゑをれ。そちが死はかまはねど、こちに損のかゝるが迷惑ぢや。野鈴よ、そちが眉のひきやうは何のざまぢや。京の地藏祭に、石の地藏の面を化粧したやうぢやは。落穂よ、疊に白粉をこぼすな、紅を唾で解な、たはけめ。岬路よ、額剃つけたか、氣疎すな。冬野よ、よく髮を梳てやれ、梳櫛の歯をかくなと、口速に囁つゝ、彼方此方を睨廻し、心をくばるやはしさは、慈悲も情も夏川に、鵜縄さばくが如くなり。あゝせわやかすやつらかなとて、欠しながら腰をのし、どりやちつとの間休まうかと、呟き呟き奥に入、年かさなる子供等を叫、蒲團の上に寢そべりて、一人には腰を打せ、一人には白髮をぬかせ、鱧の串燒を肴にして酒器の酒を飲ながら、有漏路太郎無漏路五郎兄弟が、木太刀を打合て、劍術の稽古するを見つゝ、太刀筋に非難を打て居たりけるが、氣くたびれやしたりけん、ほく／＼と睡出し頓て熟睡したりけり。兄弟の者も太刀打をやめ、次の間に出て休息しけるが、太郎弟に對ていひけるは、主の老女幼者を賣買して、貪る金さだめて多くあるべければ、奪取んと思へども、何國へ匿しおくやらん、其在所を知難しといへば、五郎云く、われもとよりしかおもひ、匿おく所を見出して奪取、おん身と我と配分して逃去んと心をつけて伺へども、今に於て知難し。さりながら、長きうちには見出さではおくべからずといへば、太郎ほくそゑみ、唯何事も密にと互にしめしあはせけり。常言に蟷螂蟬を捕ふ、黄雀の後に在事を知ずと云は、此家の老女が類なるべし。

姉妹本事品第五（後談）

爰に哀をとゞめしは、梅津が娘玉蟲に、諸事の哀れをとゞめたり。前年有漏路兄弟に奪とられ、僅に十七貫の身の代にて此老女に賣渡され、名を紅兒とつけられて、此家に在りけるが、生つき世にすぐれて美麗なれば、老女は千金になるべ

き貨物と、末頼母しく思ひ、日夜刷磨して化粧させ、さま〲の遊藝を教て生立けるが、時光過易く日月梭の如くにて、早くも五年を經て、今年は已に十三歳にぞ到りける。然るによく〱あしき宿世にや、疱瘡の勞おもくして命も危く見えけるが、素邪見の老女なれば、彼を憐む心はいさゝかもなけれ共、金にすべき貨物と思ふゆゑ、自看病して種々に心を用ひけるにぞ、命許りは助かりけるが、花の如く玉にひとしき顔忽變じて醜顔なり、前にくらぶれば別の人かと疑ふばかりになりければ、老女は唯あきれはて、今少し早く賣つかはさば、よかりしものをと後悔し、そのよな面になるならば、いつそ死るがましなるに、なか〱に生て居て、娑婆ふさげなる業人めと、やら腹立に惡口し、とても辻君にもならぬ奴、せめて本錢うめる程、責使うてやるべしとて、萬を苛く當りけるが、紅兒は我身の因果とあきらめて、朝には霜をおかして遠き峯の柴を刈ば、松吹風に身を破り、夕には夜をこめて深き谷の水を汲ば、岩漏露に袖絞る。それのみならず酒洗濯煮燒の業に到るまで、我身獨に管てこれを務、又は苧を績絲を繰、露ばかりの暇あれば、老女の足腰を撫擦りなどして、少しも身を休る事成難く、身には一重の襤褸を着て、寒夜を凌兼ぬれば、漸々に瘦細り垢つもりて、いよ〱醜姿となる。いさゝかも怠る時は打擲れ、食止をせられて、憎さげに呵まれ、活つ殺しつの辛目を見て、さま〲の折檻をうくるにぞ、浮世を恨み身を悔み、涙の乾く時もなく、袖ほす隙も無かりけり。かくて一日いつもの如く水を汲に出けるが、おぼつかなく〱も呼子鳥の、聲も淋き山中を、木の間笹原わけゆけば、足は棘にきりさかれ、流るゝ血しほ血の涙、櫛さへ取らぬ黒髮の、肩に亂れて蜘蛛の、糸に纏はれつながるる。足手は缺身は痺れ、歩みわづらふ苦しさは、何にたとへん樣も無し。一洞むなしき谷の聲、梢にひゞく山彥の、音ものすごき深谷に、心細くも只ひとり、岩に腰をうちかけて、過來し方を思つゝ、口說ごとこそ哀なれ。呀世の中に我身程、因果な者は又あらじ。世に時めきし武士の、家に生れて父母の、恩惠も深き窓の裏、御乳母に傅かれ、透間の風もいとひしに、今は寒夜の荒筵、賤の手業に身をつかひ、いやしき者に踏れたり、擲れたり、口惜とも無念とも、家名の穢父母の恥、いつそ死ぬと思へ共、もしや兄上妹の、此世のうちにながらへて、又逢こともあらんかと、思へば死も死難しと、獨言して谷川に、我身の影をうつし見るに、顏も容も變はてゝ、我目にさへ我身ともおぼえざる光景なれば、あなあさましや、梅津の嘉門景春が、娘とこれがいはれうか、はづかしき姿やと、い

ひつゝ揷的打伏て、悲むかひもあらし吹、峯に音する伐木の、丁々とのみ聞えけり。再び又いひけるは、今日は則ち亡父の命日にて、母の爲には逮夜なれど、跡とふ人もあるべからず。父上は武士の道をたて、覺悟の上とはいひながら、修羅の巷の戰場にて、討死をなされたれば、冥途の程も覺束なし。まして況や母上は、人手にかゝりて非業に終り給ひぬれば、我々兄弟三人の、兒等に心がひかされて、定めて浮みはなされまじ。痛はしや、中有にやらに迷居て、さぞ我々を戀し懷しとおぼすらめ。世が世の時にあるならば、亡御跡のとひ弔、いかにも營み申べきに、今は僅に香花を　手向る事だになりがたき、勿體なさよ悲しさよと云て、又さめぐ＼と泣けるが、善光寺の御佛は、これより西にあたると聞ば、娑婆と冥途の堺川に、西方淨土も遠からずと思ひつゝ、西の方に打向ひ、戒名だになき靈魂は　唯父母といふばかり、人目をはれて思ふ程、祭事だにならさかや、此手を合すがせめての手向と伏拜み、南無阿彌陀佛あみだ佛、亡父母を憐みて、苦患を救はせたび給へと、いと悲しげにいふ山の、鳥獸もなきそへて、聲を安計呂の山烏花をくはへて飛來り、紅兒が膝の上におきければ、一疋の猿果物の枝を折て持來り、紅兒が袖をひきつゝ差出すは、供物にせよとの心かと嬉しみて、岩の上に果物をそなへ、花を其下に挿て、なほも念佛をとなへけるに、鳥は傍近く下居てかなしげに鳴、猿も掌を合せて共に泣ければ、紅兒は鳥獸の殊勝なる心を感じて、いとゞ涙に咽返り、鳥類畜類すらかくばかり、我身の上を憐みて、情心はあるものを、主の老女が擧動は鳥獸にも劣れるなり。鬼とも蛇ともいふべからず、情なや恨めしやと、おぼえず聲を振立て、わつと叫びて倒伏、身を悶てぞ歎きける心のうちこそ哀なれ。さらぬだに暮るを急ぐ深山べの、木立しげれる谷蔭なれば、はやほの暗くなりぬるにぞ、紅兒は起上り、こはいかにせん、歎きに覺えずひまどりて時を移しぬ。恐しいあの老女、さぞ怒りて又憂目をや見せつらん。とく＼／歸らばやと思ひつゝ、いそがはしく小桶に水を汲取て頭にさゝげ、さしも險阻の山坂を、泣泣家路に歸りけり。此時老女は古き文車を切机のかはりとなし、鷄雉を料理して居たりけるが、紅兒が歸るを見るより、果して怒りをなし、汝は何故遲かりしぞ。わづか一桶の水を汲に、二時三時かゝるべき道理やあると罵りて、いらだつ眼の尖さは、ぞつと身の毛もたつばかり、唯消々となりにけり。老女は益々怒をなし、袖まくりして立上り、丈と等き黑髮を、手にくる＼／と卷つけて、簀子の上に引倒し、やをれ獄道め、一思ひに息の根とめて與んずといひつゝ、彼鳥の血のした

たる、出刃庖丁を逆手にとりて赫けるが、桶にこれを投すに、碓の槌をおつとりて、脊骨をかけて打ければ、あな痛や堪難や。もうこんどから早う歸るでござりましよ、どうぞ免して下されよ。お慈悲〳〵と泣叫を耳にもいれず、今日一日は食止なるぞ、思しれよと嚾つゝ、足を飛せて竈の前にはつしと蹴やり、これ外の子供等よ、若我に隠して彼めに物など喰すると、傍杖打が合點か。嚾人つかふは苦をつかふおや。おとましの浮世やと、呟き〳〵入にけり。可憐紅兒は、身上痛て起上るべき事だにならず、唯うめきてぞ居たりける。是等を悲き事の限りならめと思けるに、紅兒は日每々々の折檻が、つもりつもりて病となり、腰ぬけて立事だにもならざれば、老女は益憎みをまし、とても用に立ぬ奴、十七貫の身の代を、無益にせし口惜さよと腹立て、この家のかたはらに狹き別家のありけるに打こみおき、朝夕の物だに與へず、死しだいにしておきけるが、外の子供等にむかひ、誰にもあれ彼めに情をかけて、物など運び介抱などする者あらば、急度折檻をくはふべし、これをよく〳〵心得よと、嚴しくいひ渡しけるにぞ、怖あひて近づくものもなかりけり。然るにこのごろ爰に新たにうられ來る幼女、年は七つばかりにて、名を綠兒といひける者、幼き心にも紅兒を深く憐み、たとへ老女に打擲せらるゝとも、しばしのうちも病苦を助かるやうに、介抱してつかはすべしと思ひつゝ、よき隙を見合せ、彼別家にいたりてうかゞひ見たりけるに、無慚やな紅兒は、塵芥充滿て、鼠の糞堆たかく積り、壁崩床腐たる空屋の裏に、藁の束を敷物とし、古蓑を身におほひ、木の切を枕とし、缺椀を傍におきて臥たるさま、野分の風に古案山子を、吹倒したる如くなり。目さへ涙に肉爛て血を流し、髮は弦藻を亂したるにひとしく、手足は螽蟖の様に瘦細り、身上に垢深くつもりて肋の骨高く顯れ出、身をゆるがせうめく聲のすればこそ、生る人とも思はるれ。唯なましき髑骨のやうにぞ見えたりける。綠兒は此有樣を見ていとゞ哀れに思ひ、そばちかく寄て額を撫つゝ、心持はいかにあるぞと問ければ、紅兒は重き頭をあげていと苦しげに息をつき、やさしくも問てたもる嬉しさよ。兎角苦痛に堪ざるなり。とても息の通ふうちは、此苦みを遁るべしともおぼえざれば、一日もはやく死たしと思ひぬれど、未だ惡業の滅せざる故にや、死ぬる時節も來らずといふ。綠兒曰く、左樣に心弱くはかなき事をいひ候な。これを食て力をつけ候へとて、袂の八ッ口の間より握たる飯を取いだして與へければ、紅兒はさめ〳〵と泣、子供多き中にも誰一人我を憐みとひ來る者もあらざるに、年だもゆかぬ身を持て深き情のこゝ

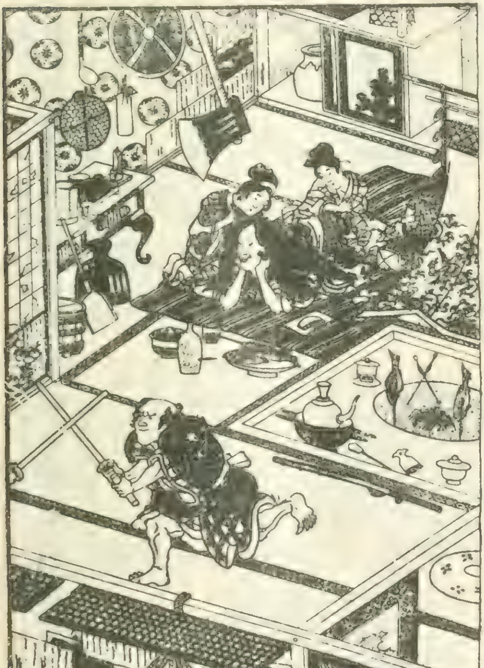
ゐざし、禮は詞につくされずといへば、緑兒曰く、多き子供のうちには情ある者もなきにはあらざれども、老女嚴しく誡て、此所にとひ來る事を許さざるゆゑ、誰もおそれて近づかず。夫ゆゑわしは今老女が峯に登りて留守なるを幸ひに、しのびて爰に來つるといふ、紅兒は是を聞て身上の痛ざをこらへつゝやう〳〵に起上り、さても〳〵老女はさばかり我を憎かや。人買人も人なるにと、いひさして泣倒れければ、緑兒は彼が身の汚穢げにて惡き香のするをもいとはず、抱き起して脊を撫、腹を捺などして勞りける、心の裏こそ優しけれ。斯る折しも一疋の猿、枝栗を持來り、紅兒が傍におきつゝ二聲三聲悲げに鳴て去にけり。程なく又一羽の山鳥小魚をくはへて窓より飛入、これも紅兒が傍に魚を置、哇々と鳴て飛去ぬ。緑兒はこれを見ていぶかりけるに、紅兒語るやうは、我身爰に初て來りし時より、なにがな善根をほどこさめと思ひつき、日に三度の食物を一度減じて、其食物を飢たる猿、又は鳥どもに與ふる事日毎なりしが、鳥獸畜類と雖も其恩を忘れざるゆゑにや、我身此別家にありて飢に堪ざるを憐み、折々今の如く食物を持來りて與ふるなり。鳥獸すらかゝる情はあるものを、酷強面な女の心、推量してたべ緑兒どのといひければ、緑兒は幼き心にも道理とおもふかなしさに、さしうつむきて泣居たるは、嵐にいたむ姫百合の、露をこぼすが如くなり。紅兒重ねていひけるは、其方とわしと生れたる故鄕はさだめて違ふべきが、同じ所に賣れ來て、一河の流に漂ふは淺からぬ緣ぞかし。其方の古鄕は何國ぞや、父母はいかに、兄弟はありけるかと懇にたづぬれば、緑兒泣々いひけるは、わしが古鄕は都にて、父母には死わかれ、兄と姉には生わかれ、心細いかなしい身でござるはいのといひければ、紅兒はこれを聞、世の中にはよう似た事もあるものぞ。都ときくさへなつかしい。我身の古鄕も都なり。其方の住家は都の何方でありしぞやと問けるに、都は萬里小路でござるといふ。して又父の姓名はいかにと問ば、それはしかとはいはれずといふ。紅兒曰く、尤も〳〵。父の名をあかされぬ程ならば、定めて由ある人ならめ。かく强ちにたづぬるも、此方に少し謂のあることぞ。もしや其方の父の名は、梅津嘉門景春殿とは云はざるやといへば、緑兒は驚きて、それを其方はいかにして知けるぞ。かくなり果ては父の名を、あかしていふも恥辱なれど、いうて問たき事もあり。いかにもわしの父といふは、梅津嘉門にて候といひければ、紅兒は飛立心をしづめつゝ、然らば其方の實の名は、乙星とは云ざるやといはれてなほも驚けば、それにちがひはあるべからず　それなれば我身は其方の姉玉蟲

がなれの果ぞといひけるに、緑兒はしばし不審顔、待給へ。私が三つの時別れたれば、顔もしかとはおぼえねど、姉上とは露思はれず。これは如何にといぶかれば、しか思ふは理ぞ。我身疱瘡の勞重く顔も變り、其上にかく衰て昔の姿は塵ばかりもあらざれば、いぶかしむも宜ぞかし。これを見て疑をはらしてよといひつゝ、肌につけたる一つの袋を取出し、かゝる事もあるらめと、愛中にも隠し持て、今まで肌身をはなたざる此一巻は、則是先祖より傳來の物にて、父上の遺物なりとて差出せば、緑兒は手に取袋をひらき裏を見れば、ちひさき卷物ありて、上包に大幢國師の法語梅津景春所藏と書たり。いそがはしく己が肌の守袋の裏より紙の包を取り出し、上書に梅津嘉門景春娘乙星臍帶と書たる手跡と合せ見るに露違はず。幼くて父の手跡も見しらざれども、自筆なる事疑なしと思ひつゝ、わしが證據は此黒痣、さだめて見覺え給ふらめと、袖まくりして腕を見すれば、七つの黒痣七曜破軍の形なれば、紅兒はこれを見て疑もなき我妹、さては姉上にておはせしかなつかしうござりしぞや。戀しくありしと寄添て、兄弟手に手を取組し形は則ち筒井筒、井づつにむかふ垂髮子の互に見かはす顔と顔、姉は變りて醜なり、妹は益美麗、死に玉を比れど、よしあし曳の山の井の、深き歎に汲流す涙は同じ涙なり。紅兒は良久ものをもいはざりしが、緑兒がおくれの髮を掻あげつゝ、顔つくづくと打視り、かはいの者やいと惜や。其方の三つの時別れたれば、顔も容も見忘たれど、今心をつけてよくよく見れば、目の裏のすゞしさは、父上に其まゝにて、襟つきの様子は母上によく似たり。其方を見るは亡父母を再び見まゐらする心地せらるゝなり。此世のうちに生ながらへてあるやあらずや覺束なく思ひしに、不思議にもまためぐり逢ぬる嬉しさは、夢現とも別難し。何人の情にて、いづれの所に生立けるぞと問ければ、緑兒曰く、わしは何事も辨へねど、後々聞ば如意山とやらいふ山の谷底に捨られし時、幸ひ雪深き所に落て身に恙なかりしを、近江の志賀の山里に住陸作といふ人、都へ炭を賣に通ふとて、其所を通りかゝり、わしをひろひて育ける由、陸作殿は貧人なれども、夫婦ともに情深く、わしに不便をくはへて、これまでには生立ぬ。物心を知やうになりて、陸作殿語り聞けるは、其方の實の親といふは、梅津嘉門景春殿と云歴々の武士なり。其方を拾ひし時、肌に守袋ありて、臍帶の書つけにてたしかにそれと知つるなり。又都人の語るを聞しに、景春殿打死せられたる砌、其方の母此花殿といふも人手にかゝり、兄と姉はゆくゑ知れざる由、兄は彦丸姉は玉蟲と其名までを聞おきぬ。

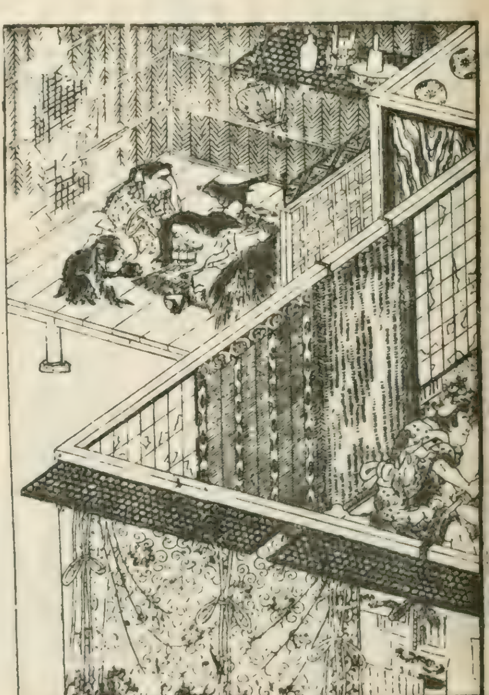
何卒兄姉のゆくゑをもとめてあはさめと、年來心にかゝれども、今に於て知れざれば詮方なし。後々まで土民の子といはするが不便さに、此ことを語りおくなり。氏も素性もあるぞかし。成長の後もし兄姉にめぐり逢ことあらば、之を證に兄弟の名告をせよとて、此守袋と臍帶の包をわしに渡されぬ。なか〳〵に兄上や姉上の、ありと聞くよりなつかしく、何處にどうしてござるやら心許なさ逢たさに、泣ぬ日とてはなかりしぞやと云ひければ、紅兒はこれを聞、なつかしく思ひしは我身とてもおなじこと、して又夫程情ある人に養れて生立ながら、爰に賣れて來しは何故ぞ。されば其事、陸作殿は去年の秋病によりてむなしくなり、養母の袖萩どのとわしと二人暮して居たりしが、陸作殿の菩提の爲に、信濃の國善光寺へ參るとて、養母とわしと二人連にて旅立しが、養母は美濃と信濃の堺熊ゲ洞といふ所にて急病起り、これもはかなくなりし故、靈現もなくおきれ迷て、おなじ道にと思ひしが、たとへ餓死するまでも、一旦善光寺に參り申して、養母の志を遂、我身の罪障を滅する使ともなし、其上にていかにも成果なんと思ひさだめ、往左來左の旅人の憐にすがり掌を合せ襲を屈め、一錢二錢の情をうけて、露命をつなぎ心細さ覺束なさの獨旅、野山に臥ばおそろしき獸の愁あり。夜嵐を凌がめと人の軒下橋の上に臥居れば、盜人よ畜生よと罵られて打擲れ、身に生疵は絶はならず。悲き事の數々は、いひつくされぬ旅ぞかし。かくてやう〳〵此山の麓、堺川といふ所迄たどり來り、野宿して居たりしが、此家の有滿路太郎兄弟に捕れて此所に來つるなり。我身の不幸不仕合を、思ひやりてよ姉上とて、紅兒が膝に顔を押當て泣ければ、紅兒はこぼるゝ涙堰あへず、聞ば聞程有滿路兄弟は我々が深き仇なり。父上は誰あらう、足利公の管領職由理太夫勝基君の軍師にて高位高官にも敬はれ、ならぶ者なき御身なりしが、世の有様を見限給ひ、恩義のために岩倉山にて打死あり。たゞちに敵兵宿所を圍みしゆゑに、母うへは其方を懷に抱き、我身の手を携て雪中をたどり、如意山まで落給ひしに、御痛はしや、彼有滿路兄弟が爲に弄り殺しになり給ひ、其方は谷底に蹴落され、我身は彼兄弟に奪取れたり。其時兄彦丸殿は十一歳にてありしが、父の勇氣を受つぎ給ひて、志烈く武藝といひ力量といひ、人に勝たまひぬれば、獨跡にとゞまりて敵と戰ひ給ひしが、其後はいかになり給ふやらん知らざるなり。我身は有滿路兄弟が手より此所に賣れ來しはや五歳を過し、今は已に十三歳になるぞかし。又其方の名を乙平とつけられしは、其腕の黑痣七曜破軍星の形に似たる故なり。是迄の我苦患といふ

は嘗へていはん方もなし。遠寺の鐘の聲、暮六を告るを聞ても亡父戀し母戀しと、思ふ心のやるせなく、空飛雁をながめては、都へ行がうらやまし。兄上や妹の行衞はいかに懷しや戀しやと、思はぬ日とてはなかりしぞや。運命つたなき憂身の上、なか／＼に存へて、生恥をさらさんより、死して此世の火宅をのがれ、草葉の陰にて父母に孝行盡すがましならめと思ひきり、或は鎌を把あげて咽にあてたる時もあり、又は小石を袂に入て水に臨みし時もあり。度々死んと思ひしが、我身失ては、母の敵有漏路太郎兄弟といふ事を、誰知る者もあるべからず。いかにもして此山を逃出、都にのぼり兄上のゆくゑをたづねて委き事を語たく、二つには其方の生死も糺したく、甲斐なき命ながらへて、つらい苦しい憂艱難、中々語り盡されず。さりながら命ながらへたればこそ其方にも逢ぬるぞや。天をさへともに戴かずといふ母の敵眼前に在りながら、女とて手出しもならず。男子ならば幼くとも、一太刀恨て孝養に手向んものを、いたづらに敵の顏をながめて月日をおくる事、口惜いとも無念ともいふべき詞はなきぞとて、病苦も忘て牙を嚙、拳を握り身を悶、怒の涙はら／＼／＼、げに武士の芳しき薫を殘す強健さは、さすが梅津が娘なり。綠兒は道理と差寄りて脊中を撫て勞りぬ。やゝ在て紅兒は目にたまる涙を拂ひ、其方に逢しは嬉しけれど、其かひもなき我業病、彼を思ひ此を思に、我々親子兄弟は、いかなる宿世の惡報にて、かく薄命にはありけるぞ。神も佛も是程に見捨給ふか恨めしや。左にはあらずや妹よといひければ、實も左樣に候ぞ姉上樣と答つゝ、互にひしと抱しめて、あたり憚るしのび泣、霜夜にもろき竈馬の聲よわりたる風情なり。程なく此日も暮果て、夕月夜の影きら／＼と窓を洩てぞさし入ぬ。かゝる折しも主の老女、左の手に弦を提て右の手に兎をさげて、背後の阪道より歸りけるが、紅兒はいかになりしぞ。食を斷ておきたれば、定めて最早死つらんと思ひつゝ、別家に立寄窓に顏をさし入て見たりけるに、紅兒と綠兒と抱合て泣居たりければ、大に怒て踊入、綠兒が襟首摑て引退つゝ目をむき出し、やをれ惡き奴が擧動哉。紅兒に情をかくるなと嚴しくいひつけおきつるに、我留主をうかゞひて爰に來り介抱する面惡さよ。後々の懲めに、いで辛目を見すべしとて、拳をあげてしたゝかに打ければ、免給へと泣叫び、打わなゝきてゐたりけり。紅兒は是を見て我體を打るゝよりも尚胸にひしときて苦ければ、いそがはしくいひけるは、これ婆々樣其子は私が賴置てしばしの內背中擦て貰ひしなり。其子の科には候はず。我身をいかにし給ひても、其子はゆるし給はれかし、

慈悲ぞ情ぞこれ申しといひつゝ、手を合せて拜けるが、老女はこれを見やりもせず綠兒に對ひ、汝さばかり彼が傍に居たく思はゞ、いつまでも爰に居て、彼めがのたれ死するを見よといひつゝ、荒繩を把て高手小手に縛あげ、柱にたかく縛つけて紅兒をにらみ、汝は未だ死ざるか。よく／＼業のあしき奴、どれ面見せよと腮に片足かけて顔を擡げ、瘦をつたな。もう是では死をるに間もあるまい。綠兒よ今夜は其儘夜をあかし、此業人めがうなり聲を聞て樂めよいざまと、鼻の先にて胡盧、いで此兎を料理して寢酒飮んと呟きつゝ母屋の方へ出行ぬ。紅兒は絶入てしばらく音もなかりけり。かくて時刻もうつりゆき、小夜もやうやく更ぬれば、月の影さへほのくらく、峯の嵐も音絶て、唯谷水のむせぶのみ。わびしげに鳴梟の聲も寂寞崩家の、飯篠群竹疎垣、いろ／＼に鳴蟲の音も弱りて細き糸薄いとゞ哀ぞまさりけり。綠兒は嚴しくくゝられて、髮は亂れ目は泣はらし身は痺、腕は高く腫上り、死むくれたる秋の蚊の飢たる儘に集來て、しきりに身上を螫けるにぞ、堪難さに身を動かせば、おのづから縛繩咽をしめ、息つまりて苦しければ、蚊を追事もなりがたく、唯うめきにぞ居たりける。時に紅兒はやう／＼正氣つきて起上り、綠兒が繩を解やらめと思ひつゝ這寄ども、柱に高くくゝられたれば蹙



の身の詮方なく、壁に取付立上りては合破と伏、のび上りては撞的倒て氣をあせりけるにぞ、身體よわり目轉きて病苦をまし、あな苦じや堪難やと叫呼、七轉八倒して今も死ぬべき苦痛の體、綠兒は是を見るに忍びず、介抱したく思へども、身動ならぬ縛縄、のういかに姉上よ、苦しうござるかせつないか。かならず死で下さるな。あゝ此縄が解てほしい。解てほしいと身を悶、我身の痛さはいとはずして、ひけどしやくれどかなはぬ縄目、玉の腕を荒縄に、摺破たる疵口より、流るゝ血しほ血の涙、身うちを朱に染なせり。かゝる折しも先程の猿再又馳來、綠兒が縄を解て去けるにぞ、綠兒は嬉しさ限なく、外の方に走出、清水を含來りていそがはしく紅兒を抱上、口にうつして勞りければ、やう〳〵人心地つきて苦き息の下よりいひけるは、我身かねて此山を逃出んと思ひしゆゑ、草刈童共に尋ね問て、一條の近道ある事を知ぬれども、かく蹇となりしゆゑ、逃出べきやうもなく打過ぬ。其方は此晩待て、此山を逃下り、當國の守護職望月左衛門殿の館をたづね行、此法語一卷を證據として、梅津が娘と名のり、老女並に有漏路兄弟が悪事を告聞申べし。さすれば兄上の行方をたづぬる便ともなり、母上の仇をも報い、我身も又迎ひとられて療治を加へなば、本復する事もありぬべし。もはや夜明に間もあら



じ。彼近道は箇樣々々といひをしへければ、綠兒は頭を打振て、たとへそれがよきにもせよ、姉上の此體を見捨て何とゆかるべき。何卒快氣し給ひて、兄弟連立逃てたべといひければ、然思ふは宜なれど、其方が爰に居たりとて、我病の治るべき道理もなし。時刻うつりて老女睡を醒しなば、其方も我身も此上に、いかなる憂目に逢んも知ず。兎角いふ間にあれ〱、夜明烏が鳴ぞかし。其方に再逢までは、死ぬ事ぢやない氣遣すな。死ずに急度待て居る。疾々ゆけとすかされて、貰いやうでもさすがは年のたらぬゆゑ此詞を實とし、然らばわしは逃下て、頓て迎によこしましよ。かならず死ずにおはせかし。とはいふもの丶しばしのうちも、名殘をしやと取つきて、今生の別とは虫が知するしやくり泣、姉が心の悲さは、五臟六腑もちぎる丶思ひ、ひし〱と抱合、別れかねてぞ居たりける。時に四五羽の烏飛來りて軒に近く舞居たり。紅兒是を佗と見て、これ妹あの烏の爲體、道を敎んと思ふ意ならめ。夜も已に明たれば早く〱と急せつ丶、彼卷物を取て守袋の臍帶の包と共に懷に入させ、裳を高く褰て遣、いざ〱とて心强も押やれば、名殘惜げに立出しが、果して彼烏どもは、前に飛道敎るに疑なし。綠兒は出は出けるが、二足行ては振返り三足ゆきてはふりかへり、心はあとに後髮引る丶やうにおぼえしが、思ひきり〱、烏の飛方を心當に走去。紅兒は戶口まで這出て後を見送り、これが此世の暇乞、今一度振返りて顏見ぜてくれよかし。死ぬといひしを實と思ひ、それを力に行たるは、さすがに年のゆかぬ故、頑是ないのが不便なり。何のこれが生られう。死別とは知ずして、行つる事の可愛やと、影見ゆるまで伸上り、あな心なの朝霧や。跡をへたて丶もう見えぬと、前を塞て魂は、もぬけの體秋の蟬、うんと一聲叫つ丶、尻居に撞的倒れしが、がつくり弱る今般の際、南无阿彌陀佛なむあみだ佛と、唱る聲も明殘る蚊の鳴聲に異ならず。諸行無常と吹風に、寂滅爲樂と一葉散、あ丶一葉散息遣、かすかにかよふ玉の緒の、きれてはかなくなりにけり。時に怪しや一陣の冷風颯と吹來り、樹木岩石鳴動して、一道の陰火閃々と燃上り、空中に大勢にて呵々と笑聲聞えけるが、形は見えず。忽音もなかりけり。これは是先年烏部野に會合して、嘉門が妻子を亡すべしと相議したる、惡靈等の所爲なるべし。此時主の老女は、別家の方に物音あるを聞つけて、睡を醒目をすり撫つ丶出來りて見たりけるに、縛の繩解捨ありて綠兒は此に居ず、紅兒は息絕て死し居たりければ、綠兒めはいづくへ去つるやといぶかりつつ地上を見れば、朝霜の裏にちいさき足跡のつきてありけるにぞ、偖は紅兒め、

緑兒が繩を解、入智慧して迯せしに疑なし。足跡の未だ消えざるは迯出て程もあらじ。殊に案内も知ぬ山中を、幼少足にていかでか遠走るべき。途中に迷居るならめと思ひつゝ、太郎よ五郎よとて、有滿路兄弟を叫起、汝等は紅兒が死骸を持出ていづくにも埋めよ。緑兒めが逃出たれば、我は跡を追行なりとて、いそがはしく縛追棒を追把て馳行ぬ。偖緑兒は夢路をたどる心地して、凡三十町ばかり落行けるに、後より老女韋駄天走に追來るにぞ、こはいかにすべきと遑迷ひけるが、老女は已に追つきて緑兒を踏倒し、やをれ汝は形に似ぬ膽の太き奴めかなとて、棒を振上て打んとしたるに、四五疋の猿馳來り、或は棒の先に飛つき、又は手足に取つきて働せざれば、老女は大に氣をいらちて、猿を打退んとするに、彼鳥どもも嘴をならし羽たたきして、老女の眼を突破らん勢なり。老女は益怒をなし、鳥を追ば猿ちかづき、猿を追ば鳥來りて妨ぐるにぞ、さしもの老女もあきれけるが、やう〳〵追退けて、緑兒をにらみ、汝は大事の賣物なり。迯るとて迯すべきか。其根生を鞴なほして、大金にせねばならぬ。連歸て後日の懲め、いかにするか、見よ〳〵といひつゝ、小脇にかき抱て行んとせし折しも、傍邊の炭燒小屋の裏より、旅裝束したる男出來り、これ〳〵、老女しばし〳〵と呼とゞめ、某は旅人なるが、昨夜道に踏迷て、詮方なく此小屋に夜をあかしぬ。今あれにて承はれば、其幼き者は賣物なる由、實に左あらば某に賣與へ給ふまじや。幸、某は阿曾比の種を買出しに、旅歩きする者なりといふ。老女これをきゝ、いかにも是は賣物なれど、見給ふ如くすぐれて美麗なる生れなれば、安金にては賣難しといふ。旅人曰く、して又いかほどの價にて賣給ふべきや。老女は曰く、小判百兩ならば賣候べしといふにぞ、そはあまりなる價なり。何いふも未だ幼少者ならずや、七十兩に賣候へといへば、老女呵々と打笑ひ、瞼おしあけてよく見給へ。鐵の履を穿てたづね歩くとも、是程の美人世にまた二人とあるべきかは。今少し生たつれば、千金にもかゆべき者なれども、かく氣のそれたる奴なれば、枉て百兩に賣べく思ふなり。眼の明ぬ人かなと嘲て、又ゆかんとするを引とゞめ、氣短なる老女かな。左あらば百兩に買べしとて、懷中より金取出して渡ければ、老女は是を受取歡をあらためて莞爾と笑、おん身は果報よき人かな。よき所へ來て搖錢樹の嫩を得たりといひて、緑兒をつきやれば、旅人は緑兒が身上の塵を打拂ひ、泣な〳〵。是からはこちの貨物なれば隨分情を加ふべし。必ず氣づかふ事なかれといへば、緑兒は只虎の穴をのがれて龍の淵に入たる心地して、泣より外の事ぞなき。かくて旅人は

銀兒を脊に負て山を下り、老女は家路に歸りけり。偖有漏路兄弟は老女が下知をうけ、紅兒が死骸を藁薦につゝみてになひ出、埋べき所を見立けるが、此家の背後に年經たる榎あり。是は往古眞の山姥が、生木の杖をさかしまにさしたるに根を生じて、今は大樹となり、これを山姥の杖榎といへり。兄弟の者は此榎のもとに埋べしと思ひ、土中を穿けるに何にかあらん、鍬の先にあたる物あるにぞ、不審て掘出し見るに、一つの壺にて裏にあまたの金あり。兄弟顔を見合せて莞爾と笑ひ、これは疑ひもなき老女が貯の金なり。はからず此所を掘あてしは天の與へなり。老女折々此木のもとに徘徊せし故、かねて不審に思ひしに、果せるかなとよろこびつゝ、兄弟金をわかち取て懐にし、紅兒が死骸は其穴に打込、東の路をのぞみて迯去けり。かゝる折しも老女は彼百兩の金を懐中して立歸り、榎のもとに目をつけて、近付見れば、壺を掘出し、金は殘らずなかりければ、さては兄弟の者、こゝに死骸を埋とて、此壺を掘出し金を奪て迯たるならん、惡き奴原が擧動哉と大に怒り、定めて東の道をゆきつらん、追かけて捕べしと、いそがはしく嗜の一腰を取出し、飛が如くに馳行ぬ。かくて廿町ばかり追行し所に、茂林のうちより腹巻に籠手、臑楯、顔巻、手襷おごそかに打扮て、捕手の人數とおぼしき者、大勢現れ出、前後に立塞りて老女を中に取かこめば、老女は前後を顧て、こは何するぞとよばはりぬ。捕手の者等聲はげしく云ひけるは、何すとは愚なり。我等は當國の主護職望月左衛門殿の命を受け、汝を捕へに向うたり。はからず途中にて出會しは、汝が運の盡たる所なり。疾々腕をまはせといふ。老女呵々と打笑、妾は縄目に逢べき覺なし。そは人違にこそあらめ。笑止なる人々や、速に道を開



きて通らしめ候へといへば、捕手の人數の背後より、一人の男出來り、いかに老女、よも我を見忘はすべからず。我は先年大和國にて、懐中の金百兩を、汝が為に奪れたる神崎の娼家橋六なり。汝此山に隱れ住、あまたの幼女を養立て人商人を業となすこと、我故ありて知つるゆゑ、望月の館に申し告たるは、一つには先達て疑ひのかゝりし我身のあかりを立、二つには金を奪れたる遺恨をはらさん為めなりと、恐る〳〵いひて、頓て捕手の後へ逃てみしは、臆病者と知られたり。捕手の人數は同音に、かく明白なる上は逃るゝ道はあるべからず。疾々縛めをうけよといへば、さしもの老女も今は爭ふべき詞なく、外眥を逆立牙を噛、拳を握りて怒をなし、谿谺にひゞく大音にて、あな口惜や、殘念や。我此山中に隱住、人は知じと思ひしに、事露顯の上は運命もこれまでなり。今は何をかつゝむべき。我若かりし時は都五條坂に住て百魔といひ、後に胸毛の黒平が妻となりて岩芝といひしが、今は此安計呂山に住故に、百魔山姥と異名せり。我かねて習ひ覺えし、昔磯の前司が傳へたる男舞、扇の手も劍の手も、其妙に至ては差別なし。いで〳〵我劍の舞の手練のほどを見すべしと呼りつゝ、帯ゆり上て立向ひ、

春は梢に咲かと待し花をたづねて山めぐり

と謠つゝ、近付捕手の襟首つかみ右の小脇に引寄て、かいこみざしの扇の手、ひらき扇のひらき身に、はつしと投るも呼吸の拍子、又組つくをさし上て、かざし扇のかざし投、

秋はさやけき影をたづねて月見るかたにと山めぐり

とうたひつゝ、刀をすらりと拔放し、左右にふるも手練の手ぎは、扇の太刀風颯々と、峯の嵐に異ならず。此に追つめ彼所



に追つめ、縱横無盡に斬ちらす、瀧は鼓の調らべあり。松風ともに吹笛の、聲澄わたる谷川に、のぞむ嶮岨の岩群を、飛鳥の如くに駈廻り、どつこいやらぬとさへたる、捕手の目先へひら／＼／＼つき出す刀のさし扇、はたらく目づかひさそくの歩み、白髪混りの亂髪を、風に吹せて追行ば、捕手はうしろへたぢ／＼と、將戯だふしに倒たり。なほ追かへし追まはり、

冬はさえゆく時雨の雲の雪をさそひて山めぐり

と歌ひつゝ、めぐり／＼て立舞ひまに、足を飛せて小石をはつしと蹴おとせば、谷の山氣を誘ひて、晴天たちまちかき曇り、大雨車軸を流すがごとく、大風樹木を吹倒し、ひらめく電光霹靂、ぐわら／＼ぴつしやり頭轉倒、躓つ轉つ捕手の人數、おそれ戰慄辟易して、云ひがひなくぞ見えたりける。老女は益勢あり。山姥が手段のほどを見よや／＼と峰に駈り谷に響て、今まで爰にあるよと見えしが、ひらりと飛だる岨路の、間道さして走りゆき、山また山に山めぐり、山また山に山めぐりして、行方もしれずなりにけり。

○斯て捕方の輩は、老女を取逃して口惜く思ひけるが、詮方なく彼隱家に到り、幼女どもを連て山をくだり、主君に此由をきこえあげ、幼女どもの古鄉を尋問て、それ／＼に送りかへしぬ。又縁兒が貰たる百兩の金、老女たゝかひし時、懐よりとり落したるを、捕手の輩ひろひとりて橋六にあたへ、先年老女にうばはれし金のかはりとなさしめければ、橋六はよろこびて攝州にかへりぬ。思ふに老女が不義の財、悉く有漏路兄弟に奪はれ、あまつさへ百兩の金までとりおとして、橋六が手にもどり、おのれは只身一つをのがれゆきしこと、すべて是惡の報のこまやかにいたれるなり。有漏路兄弟がゆくすゑも、いかでか無事をたもつべけんや。緑兒を買ゆきたる旅人は、いづれの所の人といふ事をしらず。すゑにいたりてしるべきなり。

○和漢三才圖會に曰、安計呂山は越中越後堺川の奥山なり。古木の榎あり。是乃ち所レ携杖なりといへり。京傳案に、山姥の能に、杖の生木の枝をつくる事、かの榎の古事に據にや。

○此一段はすべて是、謠曲山姥に據てつくれり。山姥の謠は一休つくりたまふといひつたふ。

迦哩尊者　俠客提婆達多品第六

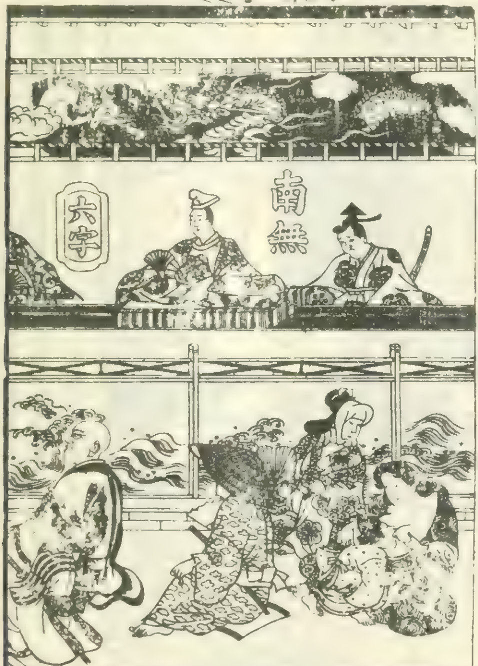
夫は偖おきこゝに又、梅津嘉門の一子彦丸は、前の年一休の弟子となりて剃髪し、法名を是雲といひて一休の庵室に在。は

じめの程は坐禪念經の外他事を顧ず、よく務けるが、爲人に從ひ志あら〳〵しくなりて、出家の行をきらひ、山野に獵して鳥獸をとり、腕だてを好て人に疵を負などして、放逸無慙の行跡をなしけるにぞ、一休もてあつかひ給ひて、止ことを得ず勘當し、庵室を追出給ひぬれば、是雲は身をよすべき所だになかりけるが、浪花の千日寺のほとりに、葬具を賣て世を經營。棺内といふ者、かねて一休の檀越にてありしゆゑ、是雲これを力に浪花に到、棺内に見え、委細を語りて打歎きければ、棺内不便に思ひ、しからば我家に同居して、いかにも身のうへをはかり候へとて養おきけるが、是雲は還俗して名を悟助と更て、葬具を造ことを覺えて、大に棺内が營業のたすけとなりけるにぞ、益不便をくはへ、我子の如くに思ひて養ひ置ける内に、棺内は病によりて亡人の數に入ぬ。素より妻子なき者にて、跡をつぐべき親類さへなかりければ、是非なく悟助此家の主となり、自己葬具を造り、これを賣て月日を送りぬ。かくて時光流水の如く、金烏玉兎の足疾く走り、一瞬の間に幾年を經て、悟助已に廿歳餘になりけるが、熟思ひけるは、我身不肖にして出家をとげずと雖も、尋常の人にてあらんも口惜きことなれば、たとひ形は俗體なりとも、毎月上十五日は出家のおこなひをなすべし。又出家の人を救も



俗の人を救ひ、其救ふところに於ては差別あるべからざれば、下十五日は侠者となり、人に災ひする惡漢共を取拉て、諸人を救ふべしと思ひつき、毎月上十五日は俗體に袈裟をかけ、精進潔齋にて朝夕香を燒經を讀み萬をつゝしみて、いかほと忍び難き事ありても、怒をなさず爭ふことをせず、柔和忍辱を專とし、下十五日は侠者の打扮して、所々方々の人立多き所を徘徊し、剛をくじき柔をたすけ、人の難儀を見ては救はずといふことなかりし故に、人皆大に喜びぬ。人の災を省くこと髑髏目中の草を拔が如くすべしといふ意にて、野曝の白骨を地紋につけたる衣服を着たる故に、野曝悟助と異名して、尊敬せざるはなかりけり。爰に又かの詫麻彦惣は、前の年泉州堺に居をうつし、甲斐町中濱といふ所に扇店をひらき、名を塵右衞門と更、自己扇の繪をかき、妻香晒は扇を折習ひて、夫婦共稼ぎにしけるにぞ、漸々に仕合よくなりて、今は何不足なき身代となり、塵右衞門は已に三十八歳に到、香晒は三十六歳に到、娘小田井も健かに生立て今年十五歳に到けるが、美目貌美麗、梨花に雨をそゝぎ白玉に香をとゞめたるにひとしき容なれば一度これを見る者心を動かさゞるはなかりけり。かくて一日香晒小田井を伴て浪花に赴き、女太夫六字南無右衞門か淨瑠璃芝居を見物しけるが、すでに芝居は

女太夫六字南無右衞門淨瑠璃芝居之圖



て〻傍邊の茶店に休居たる折しも、前面の方より、

えい〳〵入江のナア〳〵、難波入江に名も高き、腕におぼえの波羅門組と、けんくわかはう〳〵黒鼠組よ。無理が通らばのうけのけ 茶筌立髮みご草履、大道せまき張臂や、髭を自慢のきりぎりす、さいたり〳〵長刀、六波羅樣の出立ばえ

とうたひ連て來りしは、舍利弗鬼平次、幻蝶藏といふ男達の惡者なり。大に醉狂して喚つゝ來り、事がな笛と思ふ時しも、小田井が美麗姿を見て此茶店に立寄り、さま〳〵戯たる事をいひのゝしり、彼所の酒屋に連ゆきて酒の相人さすべし。いざ〳〵來れと云つゝ、兩人小田井が手をとり引立出けるにぞ、香晒は周章逃て引とゞめ、詞をつくして詫けれども、兩人は女ばかりと侮て合點せず、大に難儀におよびけり。時に野晒悟助折



よく此所に來かゝり、香晒親子が難儀の　にむかひ、一ゝ構はすと疾々ゆき候へと躰を見るにしのびず、舍利弗幻の兩人　いへば、香晒は腰をかゞめよき所へおはにむかし、見れば女ばかりの連と見えた　して、我々が難儀を救ひ給はる忝なさより。無益なる戯して迷惑さすな。放ちて　と、禮をのべ、鰐の口をのがれたる心地歸らしめよといひつゝ押へだて、香晒等　し、娘の手を携て急去ぬ。舍利弗幻

兩人は、かねて野曝が人に尊敬せらるゝを惱み居たる折節なれば、よき幸と詰よせて、いかに野曝、汝は出過たる奴めかな。誰もたのまざるに女原の贔屓して迯しやり、我々が興を妨ぐる奇怪さよ。此上は汝を相手に腹いせすべしと詈て、右にかゝるを野曝は、しやこしやくなりと呼はりつゝ、身を閃て撞的踢飛し、後に組を雌手をのばして腰車、弓手をはかせて幻が首筋にかんて人車、起あがつて又向ひ來る舎利弗が、前がはつかんで首筋つかせど、ひるまぬ武者幻も又起上り飛かゝつて、兩方より腕がらみに取つくを、どつこいさせぬと身をしづめ、くる〳〵まはす腕車、或は臂當小手返し、後矢筈にしめあぐるを、心得腕首刎返し、エイと一聲眞逆さま、なほ舎利弗が取付をそつ首とらへて頭轉倒、起る所を踢返て、泥下駄にて兩人を踏付々々踏飛し、手ばたきをして立たるは、實に冷眼掙扎なり。兩人の者はやう〳〵起上けるが、とても敵すべき事あたはじとや思ひけん、面をしわめ口をおさへて迯去ぬ。此兩人日來此邊に來りし屢々狂破ける故、是を見物して居たる者共、心中に快とおもひ、野曝が本事を讃ざるはなかりけり。猪野曝は尺八の歌口をしめして、流落れんばを吹鳴し、しづ〳〵我家に歸りけり。此喧嘩の仕返いかにありけるやらん、次の巻を讀て知るべし。

日本繪 菱川師宣畫
（菱川）
右畫御繪館所藏

本朝醉菩提巻之三終

稲妻表紙後編本朝醉菩提巻之四

侠客提婆達多品（後談）

其比攝州の裏奈良街道深江といふ所に、提婆仁三郎といふ武士の浪人ありけり。甞武藝に達し、劍術柔術の指南して浪々の營業とし、獨身にて暮せしが、無頼兇惡の輩なれば、類は友を集むる習ひにて、伉侠の惡棍等あまた弟子となりて武藝を學びければ、おのづから侠客の首長となり、平日數多の侠者等を誘ひて人立多き所を徘徊し、拔折羅狠藉を事とし、人に爭する事多かりければ、皆人これを憎むといへども、後日の仇とならん事を怖て敵對せず、街にゆきあふ者も除て通しけるにぞ、益勢を得て、我に敵する者なしとぞ誇ける。偖彼舍利弗鬼平次幻蝶癡等も、此提婆が弟子にてありけるが、野曝がために恥辱をうけ大に憤り、其日たゞちに提婆が家にゆき、斯樣々々と委く語、我々其仕返しをせまほしく思ひ候へ共、我等ばかりにてはとても敵し難く候へば、何卒後見して恥辱をすゝがせ給はれかしと頼みければ、提婆これを聞てほくそゑみ、我とくより其野曝とやらんが腕立するよし聞つるが、畢竟童の辻諍にひとしきこと、相手になるもおとなげなしと聞流して、只傍痛く思ひ居たるが、門弟の汝等を打擲されては、其まゝに捨おき難し。よし〳〵我一白眼に白眼すくめて思ふまゝに仕返しさすべし。氣づかひすなと廣言を吐ちらし、いで〳〵汝等とともにゆくべしとて、素肌に黒羽二重の小袖唯一重を着し、朱鞘の大小を横たへ、三人ともに日和下駄を踏鳴し、野曝が方へと急ゆきぬ。此時はこれ二月晦日の夜の事にて、野曝は家にあり、尺八を吹すさみて居たりけるが、夜半の鐘ひゞきけるにぞ、九ツの時過れば明日の部なり。上十五日の初出家の所作を行ふ時到れりと思ひつゝ、袈裟をかけて持佛に向ひ、香を燒經を讀て居たりけるに、表の戸をあわたゞしく打たゝきけるにぞ、何人ぞ、用あらば明日來り候へと聲かくれば、〳〵な是は物買者なり。こゝあけて棺を賣下されよと云へば、商のことならば止ことを得難しと呟つゝ身起、扉を開き戸を引あくれば、提婆仁三郎、舍利弗鬼平次、幻蝶癡等三人、裾をかゝくりあげ、泥下駄をはきながら打通り、提婆はありあふ早桶の上に尻かけて片足を組、腮を以て下知すれば、舍利弗幻蝶両人野曝を中に挾、我々は聟の仕返に來つるなり。同道せしは我々が劍術の師匠提婆仁三郎

といふ人なり。勝負を見屆けに參られたり。いざ〳〵勝負を決せよといひて、刀に反を打てつつよせたり。野曝はいそがはしく兩人をとゞめて曰く、仕返に來られしは極て道理なる事なれば、速に勝負を致し度存すれども、某兼て心に誓ひ上十五日の間は刀劍の勝負は更なり、わづかの詞爭もすまじき心願にて、已に今宵も子の刻過、明日の部になりぬれば、今は相手になりがたし。何卒來月の下旬まで待くれられよ。其節に到らば、何時なりとも勝負致し候べしどいへば、仁三郎胡盧ひ、そばえたる云ひ事かな。これなる兩人を人中にて打擲したるには時をきらはず、今汝が勝手につき時をのばすは何の道理ぞ。殊に心願などとは卑怯の一言、臆病至極の振舞なり。とく〳〵勝負を決すべしといふに、舍利弗、幻其詞の尾につきて曰く、汝今に至りて尻ごみするは、察する所師匠提婆殿が來られし故に、怖をなしての事ならん。さにあらずはいざ立合をせり立ぬ。野曝曰く、たとへ臆病卑怯といはるゝとも、心の誓は破られす。見らるゝ通り俗躰に袈裟を掛け、出家にひとしき我姿、此所を聞分得心して歸ておくりやれ。これ手をさげて頼申すと恥をいとはず詫けるが、兩人は其弱みにつけこみて、益々勢強くなり、此場に臨みて何の得心、いざ立合。これでも汝立合ぬかといひつゝ毛脛を引捲つて、



泥下駄を肩尖に踏かくれば、幻は立寄て野曝が面上にしたゝか唾を吐かけたり。野曝は双手を組、心の怒を忍びつゝ、たとへいかやうにしたまふとも手向は仕らぬ。もう堪忍して戻つておくりやれ。これ手を合すお二人と、頭を下げ身を伏でさま〴〵に詫ければ、仁三郎肩をゆすつて胡盧、近比此難波にて腕立すると聞し故、少しは覚えもあるらめと思ひしに、案外なる儒弱者、これ両人の者、勝負をせずは、存分にして遺恨をはらせ、とく〳〵といひければ、心得たりと両人は、ありあふ卒塔婆をおつとつて連打に打ければ、野曝は鬢髪亂れ衣服破れて見苦しき躰となる。かくまで打擲せられても手向せぬかと罵つゝ、此方へ寄ば彼方へ蹴倒し、彼方へ寄ばこなたへ蹴飛し、提婆がかたへ倒ければ、仁三郎泥下駄にて面上を踏つけ〳〵蹴飛す。あまりの事に野曝は嚮を破り、彼奴原を微塵になさん

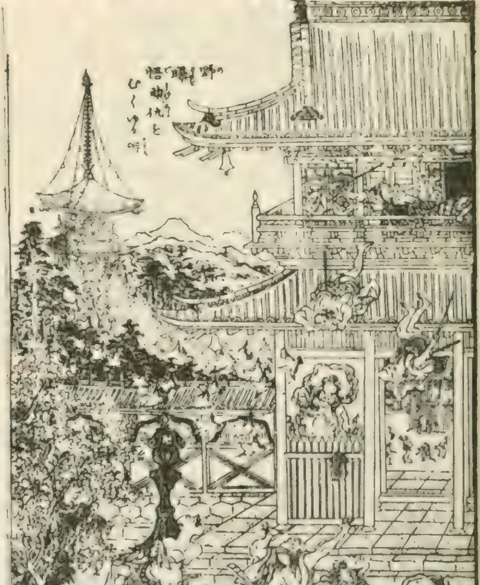


と思ひしが、襟にかけたる袈裟を見てじつと堪る辛抱に、拳を握牙を噛、怒を忍びて居たりしが、仁三郎立寄て、いかに汝男をたつると日來いひ誇ると聞つるが、口程にも無き此有様、何とて今日は男を立ぬぞ。少しも無念と思ふなら手向せよ。男魂持ざるや、いかに〳〵と恥しむれど、一言の答もせず、唯低首てぞ居たりける。舎利弗幻両人は勝に乗、胸ぐら取てねぢ倒し、悪口存分賍存分、虎の威をかる

意趣ばらし、野暮は只自由になり、踏れても抑れても口を閉たる無言の行、難行とこそ見えにけれ。舍利弗、幻雨人は、店にならべし葬具の賣物、編笠、天蓋、龍頭灯、棺、早桶、瓶の類を微塵の如くに打砕ば、仁三郎これを見て呵々と打笑、快々。さりながら汝等が存分に仕返ししたる證なくては、うけたる恥辱すゝげまじ。それ〳〵と下知すれば、舍利弗これを心得て又野暮に立向、下駄を取てはつしと打ば、忽ち額に疵つきて、鮮血したたり流ければ、辛抱強き野暮も、もはや堪忍なりがたしと思ひしが、待暫し今誓を破りては百日に刈たる茅を、一日にほろぼす同然、出家の行のかひもなしと、怒の猛火を忍辱の法水に打消て、唯うつむきて不言。千金の弩は鼷鼠の為に放さゝるは、これぞ眞の大丈夫、却て強く見えにけり。底意を知ぬ三人は、飽まで詈る悪口雑言、あな張合のなき腰抜めと、大口あいて打笑ひ、したり顔にて歸りけり。かくて野暮は下十五日の刋を待詫けるが、程なく下旬になりければ、前日の返報して彼等を懲しめ諸人の災を除べしと、日毎に出て三人を付け狙ひけるが折あしくして出合す。素より家には居ざりけり。比しも彌生の終なれば、天王寺の櫻今を盛に爛漫たれば、花見の諸人群集をなし、木の間〳〵に幕打まはし、酒酌かはして遊ぶもあり、絲竹の調に興を添るもあり。



圍物にて賑ひけるに、提婆仁三郎、舍利弗、幻を前とし、石佛の吾九郎、卒塔婆の露助、枕飯の犬平太、手向の水右衞門、骨桶の白平、などいへる侠者共を、十四五人從へて、天王寺の境内を狂破歩行、此の幕に踏こみては酒肴を所望し、彼處の席に到ては惡言をいひちらし、遊興の妨をなして弱を侮る無法者、いさゝかも意にかなはさる事あれば、喧嘩口論をしいだし、杯盤を踏碎、狼藉をする故に、人皆避て構はざれば、いと興ある事に思ひ、益狂破歩きけり。時に野曝悟助此事を聞、よき折なりと思ひつゝ、彼野曝の衣服を着し、鮫鞘の大脇差を差こらし、尺八を腰にさし、手巾を襟に結び、日和下駄を穿て天王寺に來り、石の舞臺のほとりにつつ立て待けるに、提婆組の侠客共は醉に乘じ、聲高々と小歌をうたひ連てぞ來りける。野曝それと見てければ、こはよき所にて出會せり。いかに舍利弗、幻よ。前日汝等が勝負を望し時は、我つゝしみのうちなれば、下旬までのばしくれよといひつるに、提婆を恐れて立合す、卑怯なりと言しが、見れば今日は提婆を首として、十四五人の方人あり。今爰にて勝負をせば、我卑怯にあらざる事明白ならん。いざ總がかりにして勝負せよと、多勢を少しも恐れざる大膽不敵の一言に、さしもの提婆も氣を呑れて臆しけるが、弱身を見せじと胡盧、汝自來つて勝負をねがふ



は、石を抱て淵にのぞみ、薪を負て火に入に異ず。危事を望すとも、命を大事にとく／＼歸れと罵ければ、野曝曰く、否戦無益なり。いざ／＼勝負と身支度す。提婆は衆人に下知をなし、若汝等敵し難き時は我出て助太刀せん。彼奴たとへ鬼神にもせよ、双拳四手に敵し難く、多勢に不勢物數ならずといひて、傍邊の石の水盤に尻かけて見物す。其餘の者は下駄脱捨て尻引からげ、目釘をしめして立向へば、野曝は袖まくりして大手をひろげ、石の舞臺の眞中に仁王立に立たる有様、勢猛くぞ見えたりける。花見の諸人はこれを見て、すは喧嘩よと立騒、遠く退て見物するもあり、老人女の足弱共は、四方に亂れて逃去ぬ。かくて惡黨等抜ハれて、隙間も無く斬かくるに、野曝は一腰には手もかけず、上を拂へば身を沈め、下を拂へば飛上り、右に開き左に避、斬こむところをかいくゞり、或は蹴倒踏飛し、手當次第の人飛礫、陸雛々々と投ちらし、閃々電光波上の燕子、額まれなる早業なれば、大勢の斬こむ刀はいたづらに、只空を斬ばかりにて、或は襟首をつかまれて蓮池に投込れ、鼈の如くになりて浮つ沈つするもあり。又は片手に差上られて、敷石にうちつけられ、平蜘の如くになりてもがくもあり。遂に敵することあたはず、十四五人のうち過半逃失ければ、今は提婆も見かねつゝ身を起し、舎利弗、幻と共に斬てかゝれば、野曝も一刀を拔放し、三人をはじめ逃殘たる者共を相手に、追つかへしつ戦ぬ。元來野曝が刀は人をあやめまじといふ誓にて、刃引なれども氷の如くにきらめきければ、敵は皆眞劍と思ひけり。折しも颯と夕風に、樹々の梢を吹散す、花の吹雪を身に浴て、双方しばらく戦しが、野曝は益勢猛かりければ、とても敵することあたはじとや思けん、提婆をはじめ逃出し、途に迷て山門の上に跳上ければ、野曝もつゞきて追上り、山門の樓上にて又しばらく戦しが、足場悪ければ提婆方の者は殊更敵し難く、投落されて氣絶する者數多あり。殘れる敵は隙間を見て逃下ければ、野曝も跡を追て下りけるに、提婆は遂に逃去ぬ。これに因て舎利弗、幻兩人を捕へ、前日の返報うけをれと叫りつゝ、兩人の額を打破つて突飛せば、兩人は鮮血流るゝ額を押へ、命から／＼逃去ぬ。野曝は心地よしと思ひつゝ、呵々と打笑、衣服の塵を打拂ひ緩々として歸りけり。

偖家に歸てしばらく休息するうちに、黄昏の比となりければ、灯火をともし、戸を下しなどして居たりけるに、六十歳ばかりの貧げなる老人、針目がちなる布子を着て杖にすがり、打萎れつゝ來りて裏に入、これ御亭主、五つになる兒をいれる早桶を貰ひましよといひければ、野曝はこれを聞、幼き人の不幸ござるか。死

別はいづれ悲きものながら、とりわけ小兒なくしては、さぞ愁傷でござりましよと、いへば老人涙を流し、未お若いによういうて下さりました。有樣はわしが孫娘でござるが、生つきも相應ゆゑ、鳶が鷹を產をつたと喜んで育ましたに、惡疱瘡に取つかれ、ひい／＼いうて苦むゆゑ、貧しい中で物をします、醫療を盡して見たれども、綾かひもなき紅紙燭、赤き頭巾をきた儘で、遂にころりとなりました。起上るべき達磨さへ、倒れたまゝの死姿、愁事闇木兎を、誘ひに來たる死神の、まはす無常の風車、今は遺物となりしゆゑ、あまりの事のくやしさに、疱瘡神の祭棚を打砕、赤い紙の幣帛まで引破て捨ました。兒子めは男だけ、氣強う堪へて居ますが、媳婦は愚痴なる女氣に、あきらめかねて亡骸を抱あげ、乳房をふくめ子守歌をうたうて、どうやら氣違ひの體なるを、やう／＼と賺て、せめて來世は美麗に佛に生てくれかしと、冷い顏に今紅白粉を粧うて居ます。かはゆい事をしましたと、泣聲にて物語、はたと落せし耳の念珠、涙と玉をあらそへり。實に理と思ひつゝ、野暇は立上り、五ッになる小兒なら、此位にてよからめと、小さき桶を差出せば、懷より錢を出し、佯恍き事なれど、此錢も付紐のある孫めが着物を、今質にしてこれに替て來ましたと、泣々價を償ひて、緊長生はすまじきものと、いひつゝ桶をうちかたげ、心は闇にあら佛、迷夜道をとぼ／＼と、孫葬に歸りけり。其跡へ中年の男等二人連にて腰をかけ、これ御亭主、十六になる娘の棺、角棒の四方花、價には構はぬ程に、念の入たをたのむれといへば、野暇は棚にならべし棺を下し、これかあれかと直をさだめ、棒をしらげる清鉋、おほひの釘を打あひだ、しばし待給へといひつゝ仕事に取かゝれば、隨分丈夫に賴みますと、待間に、二人が物語、これなんと思やるぞ、美麗あの娘子、野邊に送つて烟にするとは惜い事ではあるまいか。さればよあの娘子の帶解の祝の時、わしが肩にのせて神參したるが、今棺に入て又肩にのせ、無常所におくらうとは、更に思ひもよらぬ事、よい所へ緣がきはまり、結納も受納、双親のことない喜びで、大方支度もとゝのひしとの噂、鶴龜繡た色小袖を幡にして、香の烟でふすべるとは、さりとはいとしい事ぢやぞい。兎角美麗娘には、氣のかたの出るものぢや。もちつとはやう緣づけたら、此よな事もあるまに、といひさして、話にまぎれて忘れて居た。これ編笠が七蓋、樒土器も入ますぞやといひければ、心得ましたと野暇は、棺を仕立て渡しけり。二人の者は受取て、價を償ひ歸り去。あとには野暇唯一人、手をこまぬき、嘆息として居たりしが、獨言にいひけるは、此商賣をするからに、愁を

聞は常なれど、熟浮世を觀ずるに、もとの雫末の露、後れ先立世のならひ、殊更光陰の早き事江漢の流るゝ如く、春去秋來り花開け葉落て、燕子鴻雁時を同じうせず。然といへども人情のならひにて、是を常とする故に、これに對して驚かず。朝夕唯奔走し、其營業とする所と、樂むる所とは異なれども、都是名利の二つを出ることゝなし。されば人無常迅速の理をしらば、其果報は各高下ありとも、あながちに他を貪諂心なく、只一生を安らかに、あらまほしき事なりといひて歎息しける折しも、盥盤の水にあやしき人影うつりければ、さてはと推量しつれども、さあらぬ躰にもてなして、今日は彌生の晦日なれば、子の刻過れば又出家、いで一睡と奥に入り、夜着引被て臥にけり。偕舍利弗幻は、晝の仇を報んと思ひけるが、立合の勝負はとてもかなはじと思ひつ寝首を打んとしめし合せ、兩人ともに手巾にて面をつゝみ、門口の柳をつたひて引窓より忍入、拔足して奥に入、野曝が寢息をうかゞひ、刀を拔て唯一打と振上しが、野曝はそら鼾を立て熟睡の躰をなし、足音を考へて居たりければ、忽むく〳〵と起上り、左右に兩人をかいつかみて、聲烈くいひけるは、尋常に名告かけて勝負はせず、寢たる所を打んとは、卑怯至極の奴原かな。我一棒を背にうけて、以來心を更よと叫はりつゝ、棺の棒をおつとりて、兩人を連打に打けるが、力者に打れて兩人はうんとのつけに反返り、其まゝ息は絶果ぬ。野曝は大に驚き、殺す心にあらざるに、思はずはづみてあやまりし後悔さよと双手を組、我出家の行を始しより、殺生戒をたもち、人に更なり鳥獸魚蟲の類迄、ものゝ命をとるまじと禁しに、思はず彼等を殺せしは、佛緣薄く志をとげがたき因縁にこそあらめ。人を殺して生存べき道理なし。縄目の耻をうけんより、爽に腹切るべしと覺悟を極、鮫函の一腰を取出して拔かけしが、否これは刄引にて自殺の用には立ざるものを、我ながら狼狽しと思ひつゝ、舍利弗が刀をとつて見たりけるが、かゝる惡黨の刀を用んは穢なりと投捨て、何がな刄物と四邊を見廻し、葬具を造る道具どもを顧れども、鋸、鉋、鑿、釿の類にて、一つとして腹を切べき刄物ならねば、詮方なく兩人の刀のうちをえづびとり、ほど〳〵腹突立んとしたる折しも、やれまて悟助はやまるなと聲かけて、屏風の蔭より突然と出給ふは、是乃一休なり。野曝は打驚、師の坊には候はずや。いつの間に御越ありて我家には在しけるぞと、ふかれば、一休宣はく、不審は宜なり。我今は當國住吉に住なり。我前に越後の山中にて、天狗に學得たる隱形の術を以て、宵より爰に隱れ居たり。過年如意山にて汝が切腹をとゞめ、今又切腹をとゞ

むること、是一つの因縁なり。此兩人の舍は元來寒川由藏にて、舍利弗鬼平次は兄にて有漏路太郎といひ、幻蝶藏は弟にて無漏路五郎といひし者なり。如意山の雪中にて、汝が母此化を殺せしは此兄弟の者共なり。我道術を以てかねて是を知れるなり。汝を勘當せしは行体を憎みしのみにあらず、一つには俗躰に返して如此母の仇を報はしめんが爲、二つには宿因を呼醒んが爲なり。我宵より此にありて汝が獨言を聞つるに、無常迅速の理を究めしは、眞の悟道に到れるなり。今は勘當はゆるすぞと宣へば、野曝はつゝしみてこれを聞、さては此兩人は母の仇にて候ひしか、思はず仇を報しも、師の恩惠深故なりとて喜べば、一休再び宣はく、我友白炭の忠知、幸近比此地の縣主となり、今は當國に移りて平野郷に住居せり。我明日忠知に對面して、此者共の惡事をくはしく物語り、汝の殺せしは仇打なる事を告おくべしと宣ふ折しも、夜半の鐘蕭然とひゞきければ、一休宣はく、あれあの鐘は早九ツ、翌日は則四月朔日、汝出家の行をなすべき時到れり。形は俗にて仇を報、心は僧にて情を施し、此兩人の死骸を葬て得さすべしとのたまひつゝ、袈裟をとりて野曝が襟に打かけたまひ、我は庵に歸るぞとて立出給へば、野曝は重ねておもき師の御恩、いつの世にかは報ずべきとて禮拜し、門送りして立戻り、商賣物の桶を出し、二人の死骸をとりをさめ、庵の棒にて一荷にになひ、千日寺に葬ぬ。かくて翌日住吉の庵に行、再剃髮を願ひけるに、一休のたまはく、汝悟道を究めしうへは、僧形俗躰の差別なし。其儘にて我太刀持となりて仕ふべし。かねて汝に語し如く、我太刀は汝が父嘉門が最期の遺物なれば、我太刀持となるは父につかふるも同然なりとのたまへば、野曝は大に喜び、立歸りて家則をとりをさめ、是より一休の庵に住て、まめやかに仕へけり。一休に太刀持ありしといひ傳るは、此悟助が事なりとぞ。僧白炭の忠知は、一休の物語といひ、兼て役惡漢どもを捕へて、追揃たく思はれ居たる時なれば、急ぎ公差を召て其旨を命じけるに、提婆仁三郎をはじめとして、其餘の者ども速く此事を聞つけて、一夜のうちに出奔し、行方もしれずなりにけり。

跋陀羅尊者 地獄信解品第七

一休和尚始山城國岩倉山の麓に住しけるが、其後攝州住吉に移て住給ふに一つのいはれあり。山城國に住給ひし時、一年津の國に到り、住吉の社に通夜し給ひしに、八旬許の老僧、香染の袈裟をかけておはしけるが、一休に問て宣はく、和僧は何國の人なるぞ。一休答へて曰、都方の者なり。僧又宣はく、都の人ならば定

て歌を讀給ふらん、一休曰、吾も桑門なれど我國の俗なれば、今夜しも神明の手向にもやなり侍らんと思ひて、愚ながらも一首を幣にかへ奉り侍る。

來て見ればこゝも火宅の宿なるをなに住吉と人のいふらん

老僧是を聞給ひ、歌の意尤殊勝には思ひ候へど、此僧はさも不存とて、

來て見ればこゝも火宅の宿なれど心をとめてすめば住よし

一休これを聞、愕然として其奇異を歎じ給ふに、程なく夜も朧々と明渡りけるに、彼老僧何地ともなく行方しれずなりけるにぞ、一休さればこそ是は明神の化現なるらんと、世に有難くおぼされ、是より岩倉山の麓を去て住吉に移、草庵を營てこれを牀菜庵と號て、住給ひけるとかや。其比泉州堺北莊高須の花街に、地獄といふ名高き遊君ありけり。一休此事を聞給ひ、さても心にくき名をつけたる阿曾比哉。我試にゆきて見るべしとて、一日醉に乘じて獨庵を出給ひ、踉々蹌々として彼花街に到り給ふ。抑此曲中は、實是欲界の別境にて、絃歌の聲舞曲の音常に絶す、花の曙には遠山の眉艶しく、月の夕には蘭麝の薫濃にして、一笑千金の媚、鐵心を鎔の機深し。されば賢愚をわかたず、貴賤をへだてず、歸る編笠來る頭巾、往來紛々として喧く、淫聲邪色に迷ひ來る人は圈套に身を墮が如く、



花言巧語にはだされて、費す金は湯鑵に雪を潑に似たり。雛々にうたふ聲、琴の爪音なまめきければ、哀情未練の狂夫等、浮れそめて我身をはまり、身命をなげうつ輩多きも宜なりと、凡欲無垢の御身ながらも、世の中のありさまを思惟しまし〳〵、彼方此方と歩行給ひ、彼地獄は珠名の長といふがもとの遊びなりと聞て、其家をたづねて門首に立給ひ、我は地獄をやとひ、一盃を酌んと思ひて來つる者なり。とく〳〵導きて彼に逢しめよと宣ひけるが、中居下男等いそがはしげに走まはりて、容だにせされば、一休氣をいらちて、同じ事を屢よばはり給ふに、一箇の奴僕立ながら一休を顧みつるに、墨染の麻の破たる衣に、鈍色の垢つきたる袈裟をかけ、頭は銅の貧に似て、面は瓦鍋かと疑ひ、容貌顦顇して乞食僧の如くなれば、一休とはつゆ知らず、心中に見下賤て、何といふぞ、地獄の君にあはんとや。そは非分なる云事なり。たとへ千金を擲富翁なりとも、前方に約束なくては容易に見え給ふ花魁にあらず。汝が見れば汝乞食にひとしき出家なり。汝がき貧僧には、側にだも寄給ふべからず。殊更いくばくの光明を放されば、結縁を求むる事なり難し。汝が一生の念珠の實を携へ來るとも、一夜の揚錢にも未だ足べからずといひてあざみ笑ひければ、一休大に怒給ひ、阿付比といふ者は原實



物なれば、其價さへわくのはて、いかなる者にもあふべき理にあらずや。我妾は貧けれども、定の價を償ふべく思へばこそ尋ね來つれ。とく〳〵あはしめよと宣へば、中居下男共寄集り、これは乞食の狂僧ならめと評議して、さま〴〵嘲弄しけるにぞ、一休酒氣をさび給ひぬれば、益怒に堪給はず、汝等不禮の事をいはば、我拳の一棒を以て、汝等が頭を微塵になすべきぞと、一越聲をあげ、一喝して罵り給へば、彼狂人にはあらねど、物ねだりの曲者なるべし。後日の懲めに打擲せよと罵りければ、此騒ぎを聞き、隣家の下男共さへ集加はりて、一休の襟首をつかみて大道に引出し、大勢棒を取て取圍けるが、さすがに出家の形なれば打てとはせず、唯口々に罵りてぞ居たりける。かゝる折しも彼方より、一個の花魁蓮歩をゆるくうつし、柳腰たよ〳〵として練來る。其扮飾何ぞなれば、綠の黒髪を今めかしく束て、瑇瑁の櫛笄をさしかざし、身には白綾の小袖を幾つもかさね着重て、上に紅ひた鹿子の上着を着し、地獄變相の圖を五色の糸に手をこめて、縫したる裲衣を打掛、丹地の錦の帯を結べり。蹴出褄の間よりほのかに見ゆる脛の素さは、八寒地獄の雪をつかねたるかといぶかり、紅の唇のひらめく〳〵は、焦熱地獄の炎を含むかと疑れ、上は天の蓋覆棚として、交加八の魂を奪ひ、年はまだうら若く十七八歳にて、國色の美艶、容は柳の糸のたをやかに、肌に玉の匂ある風情にて、此世の人とは思はれず、天津少女が天降りて人間に遊ぶにや、龍の宮の乙姫の海底より出て遊むにやと疑るゝばかりなり。うつくしく清げなる女の長暖に、人頭幢三面眼同く畳二手を繼したる衣服を着て左右に從ひ、白手巾を頭にまきたる老女に、五輪の塔手にも、風水火空といふ四字を書たる長柄の日傘を差翳させたるさま、實に異風の打扮なり。是ぞ此頃地獄の君にぞありける。偖地獄此方へ騒動する體を見て、何事ぞりやと問ければ、老女答へて、あれは乞食の僧、君に見えんといひて狂亂し候ゆゑ、追やらんとて罰し候なりといふ。地獄これを聞き、たとへ狂人にもせよ、妾に見えんといふは必いはれあることならめ。妾みづから對面して、其故を問はめといひて、歩を早めければ、大勢の男共、地獄の君の來り給ふぞといひて、左右にわかれて通らしめければ、地獄一休の側に近々と立寄、鶯の囀るが如き聲して、地獄と申は妾が事に候。何ゆゑ見えんとは宣ふぞといふ。此時一休は甫に堪ず、眼口にて地上に跡踏居られしが、酔眼を開き、地獄が姿をつら〳〵と見給ふに、花を欺き月を羞る貌なれば、さても聞しになる美人かなと思しつゝ、他の言はなくて、

聞しより見ておそろしき地獄哉

とあそばしけるに、地獄よりまた一首、
出家も人もおなじことかは
としたりければ、一休果して是常人にあらずと、いよ／＼心に思ひ給ひ、我は行雲流水草庵の一休なり。我如き出家をも汝落すべきやと宣ひければ、地獄打笑、たとへ活佛にもせよ活達磨にもせよ、妾が巧計の奈落に落し申さでやあるべき。いざ此方へおはし候へといひつゝ、ひた寄来、纖々たる素手を、一休の衣の袖に差入、手を携ていざなひければ、大勢の男等は地獄が心の裏をしらず、唯あきれてぞ退ける。地獄が住間房は、池にのぞみて造出したる亭にて、床違棚二階の厨子の飾付、緯障子屏風の好、風流清雅にして且美麗なること、いひ盡すべうもあらず。一休は此座敷の上座に踞跨居給ひて、早く酒を持來れと急ぎ給へば、地獄中居等に命じて、美酒と淨饌を出さしめけるに、一休これを見て、かゝる葷物は味なし。我十三歳にて師の身後寺和尚に事へし頃、活鯉に引導を授けて食せしことあり、然後鯉の美味なることを覺えて忘れ難し。とく／＼鯉の羹を持來れと宣ひければ、地獄又中居共に命じ、鯉を調じて出さしめけるに、一休これでこそとて大に喜び給ひ、鯉をひたもの食給ひて、數盃を傾け、味ひ美なりと讃給ひぬ。時に地獄心の裏に想けるは、一休は活佛なりとて、人の尊敬する由を聞つるが、出家の身として魚肉を食はあるまじきことなり。もしは禪機に託して人を欺く賣僧にはあらずやと疑心をおこし、猶彼が本性を試むべしと思ひ、中居女の耳につきてしか／＼せよと囁けるが、程なくあまたの舞妓歌妓、匂蘭を凝し粧紅粉を盡て出來り、笛を吹鼓を打、迦陵頻伽の囀が如くにうたひ、舞妓は長き袂をひるがへして、鸞鳳の如くに舞ければ、一休益興じ給ひ、大盃にあらためて又數盃を傾け、十分に醉を發し、我も歡喜を顯て見すべしと宣ひつゝ、偏袒右肩の片肌脱、扇を開て立上り、

釋迦殿が、日なしどのになり得て、天地萬法をすゝめらる。悉く日なしなりと説給ふ。草木さへも佛になれば、まして況人間の、などか佛にならざらん。釋迦も彌陀殿も皆佛ぢやと、いうたも道理虚つきよ。日なしの事を人々に知さん爲と、あれこれに物に擬てしやべられた。凡夫は心をしらざれば、義理ばかりにて一言も日無殿にいひあてず。大なうそよ、赤うそよ。虚をつかずは佛にやせまい。そりや又なぜに、方便虚は皆實、喰や飲や一寸先は闇の夜、歌ふも舞も法の聲、水の面みな日無をあらはせば、歌ふも舞も法の聲、來世も過去もあらばこそ、三世不可得人心、おこらぬ所が極樂にて、おこりし心が現世なり。さらりとないが過去

といふ。梯がなうても天へのぼろ。瞿曇の錘は賴みやせぬ。善も惡も咎むれば、皆惡にこそなるべけれ。いたづら者が世に出て、多くの人を迷はする。心とはいかなる物をいふやらん　さらさらさつと一筆に、書たはなんぞ松風の音、二ッなき物一もなし。墨繪の風のさつても〳〵涼やな。體が熱かろ不動殿、惡魔降伏おいてもらを。かならずよいと思ふなよ。氣ざす所が惡魔なり。かたみの五輪茶臼にせい、だまされなりんのみせよ。悟は何の悟りぞや、悟ぬ先が悟なり。「後に出雲のお國此歌を倶論の舞となづけて歌舞伎をどりにしたる事蹟編にくはしく記せり」と聲高やかにうたひつゝ、足拍子を踏ならし、彼方に傒僜、此方に歪、すぢりもぢりて舞給ふ。地獄は最前より外の方に出て樣子を窺居けるが、あかり障子にあまたの骸骨の影うつりければ、こは怪やと打驚き、障子を細めにあけて裏を見けるに、舞妓も歌妓も、殘らず骸骨の姿に見え、唯一休のみ依然として其うちに交て舞給ひければ、地獄は忽疑をはらし、誠に是凡人の所爲ならずと奇異の思ひをなし、障子をひらきて裏に入れば、妓婦等も皆原の姿と見えにけり。已に一休は醉つぶれて其儘倒臥給ひければ、地獄は妓婦等を退かせ、女童を呼て、酒肴の卓子を收拾しめ、みづから一休を

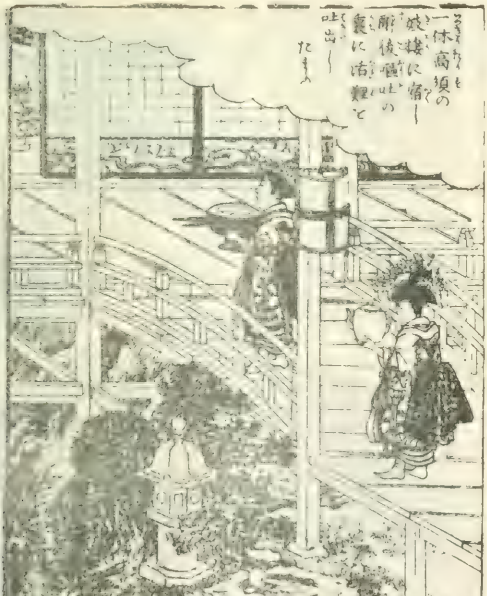


抱起し、娼妓と共に昇上て深閨に入、幾重をかさねたる紅の褥の上に臥しめけるに、前後も知らず熟睡し給ひて、鼻息は車のとゞろくが如く、雷のひゞくに異ならず。地獄思ひけるは、此師の禪機甚だ深密とおぼゆれば、輕々しく本相をあらはし給ふまじ。さりながらかく來臨を惠給ふこそ幸なれ。いかにもして敎化にあづかるべしと思ひ、かく大醉し給ひては、かならず夜中に吐給ふらめ。よろしく其用意をすべしと思ひ、女童に命じ一土瓶の湯を取寄せて、火爐の上に放、水注子角盥等を身近くにおき、灯火をあきらかに挑、一休の枕上に坐して目も放さずまもりゐたり。良ありて一休纔に目を醒し、酒氣の熱するに堪ざるにや、自己袈裟衣を脫すて、犢鼻褌のみになり、大の字形に横はりて、又しばらく睡られけるが、惡心さほす躰にて、仰向に寐たる儘にて、口より嘔吐をなし給ひ、腌臢的



胸の上に流れければ、臭氣鼻を襲て堪難しと雖も、地獄は少しもこれをいとはず、手帊を以て拭清め、しづかに搖醒て湯をまゐらせけるに、これを飲て再び睡り給ふことしばらくなり。かくて夜半の鐘をひときけるに、一休又睡を醒して身を起し、大酒に倦疲たる躰にて、屏風の外に逍出給ひ、欄干にとりつき池に臨て、醉龍の水を吐が如く、ぐわら〳〵と嘔吐をなし給ひけるに、不思議なる哉其腌臢的、

池の上に落るとひとしく、小鯉と化しいくつとなく水中に躍り入、活潑とはねまはりて水底に隠れけり。地獄此有様を見て大に驚き、世の人こぞりてこの師を活佛なりと尊敬するも、實宜なりし信心いやまさり、脊を撫て介抱し、角盥水注子を取り、口をそゝがせ手を洗はせなどして、湯をまゐらせければ、一休こゝちよげにこれを飲、只夢幻をもわから給はぬ躰にて、又間中に入、前後も知ず睡られけるが、已に天明に及びて全睡を醒し給ひ、四邊を顧て地獄に對し、儞は那個なるぞと問給へば、妾は地獄と申す遊女にて候と答 一休宣はく、爰は儞が閨なるか。我は唯庵中にねぶりしと思ひぬ。昨夜の酔中の事を想いだせば、いかさま妓樓に來つるものをと宣ひつゝ、いそがはしく袈裟衣を整て出去んとし給ひけるに、地獄其袖をひかへ、妾問申したき事のはべれば、しばらくとゞまり給はれ



かしといへば一休、何等の問ごとありや、とく／＼いへと宣ひて坐し給ふ。時に地獄蘭麝の薫馥郁たる袿衣をかゝげて、一休にひしと抱きつき、笑を含つゝ、正恁麼時如何と問。一休委々として、文殊與女子無緣無目佛無目佛と答給ふ。地獄其意を解せず、再いひけるは、平相國に仕へたる白拍子に佛といふあり。道長公と歌を讀かはしたる江口の阿曾比に小觀音といふあり。さる名をつぎしも、菩提をも

しめ佛果をねがふの意ならん。姿が如く浮川竹の流を汲、心にもあらで眉を畵き唇を染め、ひたすら妖狐の態を學ぶあさましき身となるは、前世の戒行つたなきゆゑと思ひ侍れば、未來も地獄にゆ落候べき。せめて懺悔の爲にもと名を地獄とつき、裲衣にも地獄の圖を繍しめて、身にまとひ候は、呵責の罪を今世にて滅し、後の世は極樂世界に生、美麗佛とならん事を願ひ候故なり。地獄といふはいかなるは何成所に候やらん、御示し下されかしといへば、一休折節衣桁に懸ありし、彼地獄の繍の裲衣を指さして宣はく、かの汝が衣裳に繍しごとく、地獄に種々の變相あり。八大地獄といふは、一に等活、二に黒繩、三に衆合、四に叫喚、五に大叫喚、六に焦熱、七に大焦熱、八に阿鼻なり。此八つの大地獄に、各十六所の小地獄あり。根本八に百二十八を加へて、一百三十六地獄となる。其地獄遠にあらず、近は汝が此一室の裏、こと〴〵く地獄なり。夫焦熱地獄にあらずして火車あり。畜生道にあらずして牛あり。晝睡りて夜ねぶる事能はざるは黒闇地獄の呵責なり。飽て飲飢て食ことあたはざるは餓鬼道の苦患なり。冥途の鳥の別都頓宜壽、血を吐紅の唇は、萬客の甞ものとなり、劍の山の指きりに、消もしらぬ雪の腕は、千人の枕となる。夕の夢の移香を嗅鼻あれば、人目の關に見る目あり。





高雄阿曽比（たかをのあそび）地獄之裲衣（ぢごくのうちき）地獄変相図（ぢごくへんさうのづ）


火の車
死出の山
傳云画工六郎が地獄遊行が繪を臨して縄潜にせしとぞ共禽性のたえをおのれへし遊行ハ永仁乃ころの人なり本朝画史に出せり



地獄没後に此袿衣と卓圍にかくて丹後国成相の
觀音堂にとさむと浅井了意が見ぬ世の友といへる
草紙に見ゆ

八大地獄と云ハ一ニ等活
二ニ黒縄三ニ衆合四ニ叫喚五ニ大叫喚
六ニ焦熱七ニ大焦熱八ニ阿鼻之八大地獄ニ各十六の
小地獄あり根本八ニ百廿八を加へ百卅六地獄となる



慈の字符[illegible]て作る罪の秤量幢の罪重く、[illegible]見は、是浄頗梨の鏡なり。[illegible]の猛火には、提子の水も沸かへり、地獄の釘の劍樹には、生爪も放[illegible]闘[illegible]月水の血盆あれば、小刀針の刀山あり。衣桁は乃衣領樹なり。債をはたるは奪衣婆なり。牛王の烏鐵の嘴を鳴して、色をふくめる眼を啄み、見し蛇は炎の舌を吐て、執念深き膽を食ふ。[illegible]をのむ死天山、絶ぬ流の葬頭河、更に浮む期あるべからずと示し給へば、地獄あに、極樂の中は西方十萬億土に在と承はる、實にしかるや否と問。一休彼地獄の圖の裲衣を衣桁より取おろさせ給ひ、硯匣を乞筆を染て、其裲衣の裏に、水の上に圓形を畫て宣はく、頃日或人我庵に來り、土佐何某とかやがかけるとて、かくの如き繪に讃を求む。我これに書して曰く、

水中に物あり。其一物を問へば、かきし畫工もしらず、持主もしらず、讃する我はなほしらず。

かくしるして遣しぬ。極樂も又是に等、釋迦も知ず、達磨もしらず、問はるゝ我はなほしらず。唯かやうに、地獄の裏にあるものと思へかしと宣ひけるが、地獄は未だ其意を十分に解ざりけり。一休傍の水注子をとりて、角盥に水をつぎ入給ひ、偏此の水に面をうつし見よ。是心の鬼の角盥、我といふ器あれば心といふ水あり。心といふ水あれば、もろ〳〵の煩惱森羅萬象の影をうつす。是れ影の來りてうつるにあらず、心といふ水のもとめてうつすなり。又如此水をすて器を去ときは、則物の影うつる事なし。水を捨よ、器を去よ、無我になれ、無心になれと示し給ふ。世に一休水鏡の法語といふは是なりとぞ。地獄かさねて問けるは、昨夜の踊歌のうちにも目なしと宣ひ、今又妾が抱きまゐらせし時も目なし佛と宣ふ。其意如何ぞや。一休宣はく、目なしとは人々具足の自性なり。楞嚴經に、阿那律陀は無目而見と說り。昔ある所に、一人の老婆あり。禪法を深く歸依し、草庵を造て一個の禪僧を供養し、平日に法を聞て二十年ばかり此僧を尊敬し、二八ばかりの美女を附おきて、飯を送り給侍せしめ、萬の事をせさせけり。つれ〴〵の雨の黄昏、物さびしきを幸に、老僧の心をひき見ばやと、主の老婆彼女にいひふくめ、かう〳〵せよとて遣しけり。女庵にゆきて老僧にむかひ、獨居の御つれ〴〵、かうせし時はいかなる御意にやとて、老僧に抱きつきけるに、僧答て、枯木依寒岩三冬無暖氣と いへり。かくいひたる意は、たとへ美人に抱れても、我心は枯木の寒き岩に依たる如く、冬の時に暖かなる氣の少もなきが如く、心を動すことなしとなり。此女此語をよくおぼえて歸り、老婆に語

れば、老婆大に怒り、今まで道を悟たる僧とおもひ、二十年此方かゝる俗人ごとき者を養ひおきたる事の口惜さよとて、即時に僧を追出し、其草庵を焼捨たり。此僧毫の活機をしらず、老婆はよく活機をしれり。我此意を偈につくりて曰く、

老婆心為賊過梯。
清浄沙門与女妻。
今夜美人若約我。
枯楊春老更生稊。

此偈の意は、昔の婆がこゝろは、盗人の為に梯をかけ、通路をこしらへてやるに同じ。夜に清浄なる沙門に艶なる女を与へ、今にも美人来りて若我に約束せば、枯たる楊なりとも、春の末に稊を出如く、心を若やげ、たしかに雌想乱るべし彼老僧が枯木の暖なき気にはあらじとの意味なり。されば彼の老僧も不可なり、婆も不可なり。我は可もなく不可もなく、向境界をうけて着せざる所、遍照僧正の、かさねばうとしいざふたりねんとの意も、是に推て知べきなり。無門関然といへども今我汝に心動ざるは、女子出定の話の如く、文殊女子と縁なきが如し。目あれば可も不可もあり、無目而見ときは汝が如き美人も、唯臭皮袋につつみたる一具の骸骨なり。男女の淫楽は臭骸を抱とは是なり。いづれの時か夢の裏にあらざる。いづれの人か骸骨にあらざる。臭皮につゝみて持あつかふほどこそ、男女の別もあれ、息絶身の皮破れぬれば其別もなし。美醜をもへだてず、唯今かしづきもて遊ぶ皮の下に、箇々骸骨をつゝみて持なり。臭皮一重に迷ふは愚ならずやと示し給ふ。世に一体骸骨の法語といふはこれなりとぞ。地獄是等の示を聞て、涙をはら／＼と落し、我人息の通うちは人の尻を餘所に見て、我身にはなき事のやうに思ひて、翌日をもしらぬ果敢なき命とは思はざりし。妾が如き愚昧なる者も、悟りをひらきて仏ことにあたふべき事に候やらん。妾をも替て佛につかへ候はゞ、おのづから得道もあるべけれど、何いふも心にまかせざる身にし侍ればといひて、益落涙す。一休頭を打ふりて宣はく、何ぞ其営業と其風形とにかゝはるべきぞ。心にもあらぬ虚言をいひて人に親しむも、紅白粉を調へて客を媚も、皆儞が本来の営業なり、いかでか姿をかへて営業に背べきや。江口の遊女さまをかへし歌に、

髪おろし衣のいろは染ぬるになほつれなきは心なりけり　撰集抄

と読しは自然の情なり。儞が業は五尺の軀を売て、一切衆生の煩悩を安んず。法を売て衆生をまどはす邪[illegible]賊僧には、はるかにまされり。骨と形とにかゝはるべからず。唯自然の情をまもりて別に道をもとむべからず。

極楽も地獄もしらぬ思ひでに生れぬ
さきの者となるべし


遊君地獄坐禪圖
也不立也不眠腰直於後膝屈於前
壁堅正中不崩兩邊下其眉而垂其
手交其手而握其拳神清而寂
心静情安口中之氣入而
不出鼻内之息斷而又連
一塵不染
萬念尽捐
休生怠惰
傾倚掐
恕下
背此義
為之坐禪

此歌の意をよく／＼工夫せば、かならず、心眼開闢の時あらん。これは昨夜の歌鏡に替て、汝につかはすと携へ給ひし拂子を投與へて、突然として歸給ひぬ。かくて地獄は一休の示をうけ、探題椅とて、うつくしく色どりたる椅子をつくらしめ、客をむかふるいとま、一室にこもりて椅子に座し、一休の給はりし拂子をとり、眼をとぢて坐禪しけるに、初のほどは歌妓のうたふなげ節の聲、醉客の器を打ならして喚音、火中の[illegible]大聲、女童の返事の長々しきなど、耳にいりて惱亂、少も心靜ならざりけるが、日を經て心を練けるにぞ、漸物の聲きこえずなりて、一塵不染萬念盡忘、心清情安ことを覺えけり。今の世までも書傳へて、女達磨といふは此地獄が坐禪の姿なりとぞ。

一休地獄と連歌問答の事、衣笠一閑宗葛が現鏡に見ゆ。

元亨釋書、菅原寺行基傳云、基嘗行化返ニ故里一里人捕レ魚而宴ニ池邊一。基過ニ其地一。年少戯以レ膾薦レ基。基喫レ之。須臾臨レ池吐出。皆爲ニ小魚一游泳去。見者驚伏。云々。（本文に記す一休の所爲行基菩薩に似たり）

〇狂雲集に、脱レ鱗鯉魚庖中得レ活といふ詩あり。其詩に曰く、

活潑々時池水清。
怪哉端的死中生。
飛潜天地釈僧眼。
雲暗龍門點額情。

これ一休の作なり。一休幼き時、活たる鯉に引導の語を授て、食給ひしといひ傳ふるは、是等よりいひ出せる說にや。（本文一休鯉を吐給ふ事、此詩にもとづきてつくりなせり）

〇因にしるす。稲津祇空更て敬雨と稱じ、洛北紫野に住し比の句、

女達磨讃、
九年何苦界十年花ころも。　敬雨句集　竹簀集に見ゆ

〇越前三國の遊女長谷川女達磨の讃、

玉琴のひくてあまたのうかれ女に、まことありと思ふ人こそ、をかしくも哀れなれ。世に男ほど淺々しきものはあらじと、我のみ思ふかも知らす。さればいにしへの佛たちも、靜なんといへるもやぼらしく、唯あそばゝあそべ。西へ東へ／＼。

あちこちと尻おちつかぬ柳かな

本朝醉菩提巻之四終

阿古義物語後編　全伝六本出来　本町庵三馬遺意
狂訓亭主人倣綴

前編世にひろまりて既に年のやゝへだゝりぬれどもその局が結ぶのみいかならむ行末を婦女子の書林をはやく嗣編をと乞ふ事をねがへど三馬先生筆紙を労く著作はそのまゝにて猶更看官は遺憾催促阿古義法の庵を訪ばバ門人三鶯をもつて折このみ口授せられしといふ條文をもとくこの後編を綴りしは式亭の作をあらざる只文章の拙きは予が罪ぞやさらば前編の氷解はさてのものにもあらず楚の染葉女千綺が岩屋へ合て捕へられしといふ粧姫が三助狐の神通の仇を打乃一條亦来世女生肝をとりてある段弁才天女法灵感神徳忠孝節儀をつくしたるまたあるのいと多きの路にて草紙ならず

三鶯改　楚満人書

稲妻表紙後編本朝醉菩提巻之五

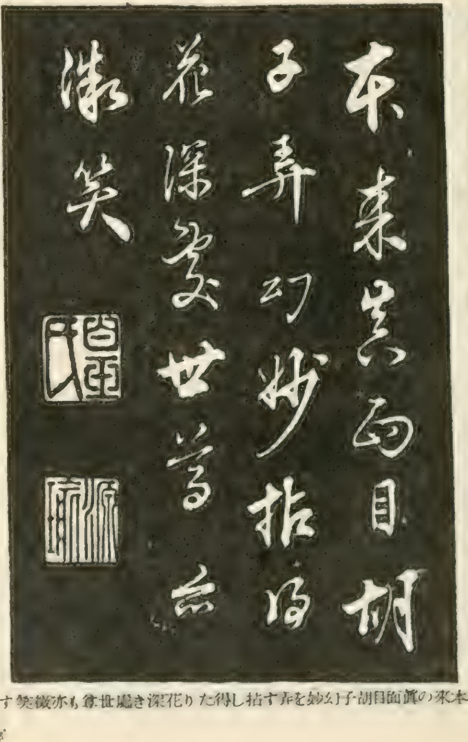
地獄信解品第七（後談）

一日地獄例の如く一室に籠、坐禪して居たりけるに、一休和尚突然と入來給ひ、一言をものたまはず、花器に插たる花をとり、これを拈て見せたまへば、地獄はしづかに目をひらき、これを見て微笑、やがて椅子をくだりて居睡居たる女童等を搖醒し、耳につきてさゝやきけるに、女童等うち頷點て身を起去、しばらくありて美酒嘉肴をさゝげ來りて一休の前におく。一休喜び給ふけはひにて、大盃をとりあげ、女童に酌をとらせて數盃をかたふけ、舌をならしてのたまはく、あな美酒なる哉、世尊五十餘年の運留も、此花を拈て此美酒を得のみ。汝は是我爲の迦葉なり。吾正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の機關を、汝が爲に悟れたり。もはや坐禪におよばず。是非の門を絶却して、情をほしいまゝにせよとのたまひて立上り、鐵如意を以て、さしも美麗に彩色たる椅子を、微塵のごとくに打碎、別をも告給はず飄々として歸りたまひぬ。かくて地獄は拈華微笑の問答に、禪法の奥密を大悟し、胸中豁然として夜のはじめて明たるが如く、これより後は任情遊戯を言とし、意をほしいまゝにして心中更に一物をとゞめず、四大皆空なることを看破し、地水火風の色小袖、空即是色の紅粉も、わづか一重の臭皮袋、をしむかひなき身と悟、唯活氣を以て本來の面目とし、前よりもなほまさりて姿を美麗に粧ひ、名香をたきしめたる綾羅錦繡を身にまとひ、姿の御手道具の結構に、金玉をちりばめ、糸竹のしらべ酒宴のそなへに、清雅を盡して、あまたの嫖客に身をまかせければ、富翁豪客戀したひて千金を塊とし、通來る者數しれず。廓中三千に餘れる遊女等、彼一人の爲に色を失ひ、其名一時に高かりけり。人に物ををしまざれば、あたらしき衣服をとゝのふれば、舊衣服は妹女郎火車などに與へ、金ある時は中居下男等、出入貧者等にとらせければ、家内の男女出入者等、尊敬すること大方ならず、人愛日々にまされり。金なき時は衣服手道具の類を盡く質して用にあて、常には金銀をたくはふることなし。情を和歌によせて日夜大酒を飲、都て爽に快ことを好み、情の色も淺からず、よく嫖客の心をとり、一度あふ者日々忘るゝ事なからしむ。其おこなふ所一つとして活潑禪機にあらざる事なし。時の人女達磨といひしも宜なり。かくて

月日をおくりけるに、地獄偶病に臥、やう〳〵ものもすゝまず、痩衰ければ、主珠名長大に驚、夫婦ともに枕邊をはなれず看病し、良醫をむかへ百藥を盡しぬれども、露計も驗なく、さして苦痛の體はあらざれども、日に異におもくなりまさりぬ。一日地獄あるじ夫婦に對していひけるは、妾が病とても癒まじく思ひはべれば、もはや藥は用候まじ。死ぬる命はをしからねど、幼少の時より御夫婦の情深き養育にあづかり、いまだ十九歳にてさだめの年季もみてず身まかりて、損をかけまゐらすこと、妾が愁る所に候といへば、あるじ夫婦は涙をおとしつゝ、口をひとしうしていはく、汝其事に於ては少しも心をつひやす事なかれ。我汝が功に困て、これまで幾千金の大利を得たれば、たとへ今より勤をやめさすとも、いさゝか愁とせざれども、唯かなしきは我々夫婦汝を子の如く思ひ、七歳の時より手しほにかけて育あげ、のち〳〵は養女にもなしてんと樂み居しに、莟の花を散すこと、不便ともかはゆしともいふべき詞はなきぞかし。さやうに心弱ことをいはず、藥を用ひて本復をせよかしといひて、益落涙すれば、地獄頭を揺、いな〳〵とても本復かなひがたし。およそ生あるもの一度滅するは世のならひにて候へば、かならず〳〵御歎あおまじく候と云いて、此後は藥を用ひず、唯美酒を乞、冷酒にて飲のみなり。かくて四五日過けるが、又あるじ夫婦を近づけ、今日



の未の下刻は已に妾が臨終の時なり。ねがはくは住吉に使して一休禪師を請待し給はれかしといふにぞ、あるじ夫婦は今更のやうに打驚き、使を住吉に遣はしけるに、使の者途中にて一休にゆきあふ。此時一休は野曝悟助を具し給ひ、珠名が家僕を見給ひて、汝何處に去ぞとのたまへば、使の者いそがはしく腰を屈、禪師を迎奉らんために參る所に候といへば、一休のたまはく、そは地獄が臨終の故なるべし。我今其事によりて汝が家にゆかめと思ひまうで來つるなりとて乃同道して珠名が家に到給ひ、野曝は次の間に居しめ、自は地獄が閨房に入給ひて、病床にちかづき、汝已に終焉の時いたるにより、見おくらん爲に來れりとのたまへば、地獄はいと喜べるさまなり。一休又のたまはく、我とくより汝が素性を知る。汝はまさしく梅津嘉門景春が娘、幼名を乙星といひしものなるべしとのたまへば、地獄驚き、いかにして其事を知り給ふや。妾かゝる身になりて素性をあらはさんは、父母の名を汚に似たれば、人にも語らざる事なるにといひていぶかるに、一休のたまはく、前の日汝我を抱きし時、右の腕に七ツの黒痣あるを見つけてこれを知なり。汝にあはす者ありとて、次の間より野曝を呼いだし、これこそ汝が兄彦丸なれ。一旦我徒弟となり出家しつれども、ゆゑありて還俗し今は異名を野曝といひ、俗稱を悟助といふ。形は俗に還といへども、我禪法の妙道をきはめしなりと宣へ



本來の眞面目胡子幻妙を弄す拈し得たり花深き處世尊も亦微笑す

ば、地獄父驚、扨は兄上にて候ひけるか。浪花に野曝といふ俠者ありとはかねて聞つるが、兄うへにてあらんとは露思はざりきといふ。野曝いはく、我もかねて汝が名を聞及びぬれども、姉にてあらんとは夢にもしらざる所なり。親人打死の時は我は十一歳、汝は三歳なりしゆゑ、たとへ面を合すとも、名告ざれば知がたし、今汝が末期に再會するは、兄弟の縁の盡ざる所なりといへば、地獄は如意山の雪中にて、炭賣陸作にひろはれたる事を始とし、有漏路兄弟に捕れて安計呂山に到り、姉玉虫にあひしこと、玉虫がいへる詞、有漏路兄弟は母の敵といふ事、山姥が爲に難儀の折から、此家の主に買とられて此家に爲人、阿會比となりしまでの事を委しく語ければ、野曝もこれまで我身の上にありし事をつぶさに語り、有漏路兄弟を思はず殺て、母の仇を報し事をば、且前に語ければ、地獄は是を聞、姉の志をとげたる事を喜び、手匣の裏より大幢國師の法語を取出し、座禪法を歸依しそめしは、此一卷を得し故なりといひて、野曝に渡しければ、野曝これを受とりていはく、此一卷は先年親人、佐々木の若君花形丸どのに附與せられし物なるが、花形丸どの我師の弟子となり、剃髮して胸月と法名し、諸國遍參に出られし刻、親人に預けおかれたる物なれば、後日胸月どのに出會せば、再返し申すべしとて、懷に納めけり。此兄弟よのつねの者ならば、愚痴なる事をいひならべて悲歎すべきなれど、ともに發悟せる者どもなれば、一滴の涙もおとさず、唯輪回の一轉を感ずるのみなり。時に地獄いひけるは、はや妾が歸去の時到りはべれば、其支度をいたし候べしとて、雛妓小鬟に扶られ、浴室に至りてゆあみし、髮をすかせて平日の如くはでやかに結しめ、面に紅粉をいろどり、簪梳枝を挿飾、白綾の小袖袿衣を着かさねて、水色のしごき帶をむすび、名香をたき、紅の重褥に坐して錦の夜着に身を凭たるさま、日來に十倍してうつくしく、梨花の雨にいためる風情、芙蓉の水をいでたる容貌、今をはるべき人とは更に見えざりけり。これぞ此世のなごりなりと、あるじ夫婦をはじめとして、朋輩の女郎、引船、禿、火車、中居、下男常に出入する男女、按摩とる坐頭、おろせの老婆にいたるまで、あまたの人集來て、日來めぐみを受しことどもを心のうちに思ひて、嘆悲ざるはなく、鼻うちかむ音此彼にきこえ、下飼の矮狗までも別をかなしむにや、うづくまりて涙をおとす。誠に是世尊涅槃の時にあひ、天人大會五十二類、沙羅雙樹の下に集ひて、悲しもかくぞあらめと思はれける。さて地獄これを見て、さて／＼いづれも妾がなごりを惜み給はる事、かたじけなきまでに覺ゆるなり。病疲て覺

束なけれど、此世のかたみに一曲を聞せ申さんといひて、二人の雛妓に三絃をひかせ、鼓弓をすらせ、みづからは琴をしらべて三曲を合奏し、かねて我作りたる歌をうたふ。彈手もたゆげなれど、さすがに妙手のしらべなれば、かへりて趣あり。聲はいと細く、秋深き夜寒の霜に、鈴虫の鳴よわりたる風情にて、いとゞ哀ぞまさりける。其歌にいはく、

有漏路より、むろにやしなふ早咲の、かりなる色のはかなさは、まどろまで見る夢なれや。ならべてねやの木枕を、碎て見れば花もなし。花をば春の空にもつ、雪や氷の下紐も、とくれば同じ谷川の、水に迷の月の影、有無の二つをはなれては、心にかゝる雲もなく、きたらすさらぬきぬ〱は、あかぬ別の鳥鐘を、うらむることもなか空に、何か殘りて罪となる。文字にかゝれぬむつごとは、敎の外の傳へにて、墨繪にかきし松風の音。

と唄をはりて、瑤琴の上に打伏、暝然として絕けるにぞ、とり圍みたるあまたの男女、あつと叫て泣悲聲しばらくもやまず。妹女郎禿どもは空しき骸に取付て、聲をあげて泣さけぶ。一休宣はく、彼が終れるさま凡人の所爲にあらず。功を積る高僧と雖も、豈此境界に及んや。常人の終れる如く、歎べきにあらずと制し給ひぬ。主夫婦はわけて悲むこと深く、我家幾千金の大利を得たるは皆彼が功なり。殊に其名四方に聞えたる者なれば、せめて葬送を美々しく營みつかはすべしなど評議す。一休是を聞給ひ、葬儀をおもくせんこと彼が意にかなふべからず。唯經帷子一重を著せ、棺桶に納めてかゝげゆき、埋る事もせず、野に棄さすべしと宣ふ。主夫婦、そはあまり情なき仕業なりと、心のうちには思ひけるが、さすが一休ののたまふことなれば、且其詞にしたがふ體をなし居たるに、一休野晒に對しかう〱せよと命じ給へば、野晒立上りて地獄が亡骸を抱あげ、屏風の裏にとりかたづけつるに、枕の下より一張の短册出たり。彼が自筆にて一首の歌をかく。野晒其歌をよみあぐるに、

我死ば燒な埋な野にすてゝ痩たる犬の腹をこやせよ

一休これを聞給ひ、我思ひし所果して然り。彼は檀林皇后遺命して、其屍を西郊に棄しめたるを意とす。必しも葬儀をもちひて彼が意に背ことなかれと宣へば、夫婦は一休の宣ふ所少しも違ざるを感嘆して、其詞に從ふ。さて一休は白布の帷子をとりよせ、經文を書てあたへ、野晒をば此に殘しおきて、獨歸庵し給ふ。かくて其夜に到り、地獄がむなしき骸を裸となし、經帷子一重を着せて桶にをさめ、野晒を交へてわづかに四五人にてこれを擔行けるに、一休途中に出むかひて

前に立、經を讀給ふかと思へばさはなくて、繰出あゆみとりおきて、生れた儘のさらば垣、短き夜半に見し夢は、長い刀に長脇差をぼつこんで、おせさ、よいさ。と、都のぬめり節を唄給ひて、踊狂つゝ、つきそひゆき給ひ、つひに八木郷久米田寺の三昧にいたり、桶より屍を出し、藪の裏に捨おきてぞ皈ける。然るにさしも美麗なりし地獄が姿、七日々々に變じつつ、蘭麝を燒こめたる綠の黒髪は、蓬の如くに亂れ、錦繍をおほひたる素肌は、青く膗上り、白粉をほどこしたる花の顔は、腐て臭氣を出し、燕脂をいろどりし朱の唇は、爛て血を流す。瘦たる犬は麗玉を垂たる乳を喰破、餓たる鳥は秋波をよせたる眼をついばみて、おそろしき姿となる。平日にしらべし爪音も、唯松風と虫の音に殘れるのみなり。ところ〴〵の肉もきれ、腹も破れて、五臟六腑あたりに亂る。又後は肋の骨をあらはし、肉も腐流て白蛆となり、青蠅集てあたりにみち、臭氣盛に人を穢す。日を經て臭氣も薄くなり、骨に殘る肉も乾き、蛆もこゝかしこに這散て、蠅も飛失、亂たる髪は風に散てところ〴〵の草の根にまつはりぬ。程なく四十九日も近くなるに、男女のさかひもなく、雨にそゝぎ日にさらして、今は臭香もなく、たゞ殘れる物は一重の帷子のみ、つひに一具の白骨と



なりて、叢によこたはりぬ。あさましなどもいふべからず。かねて彼を戀慕ひたる少年等、せめて香華を手向て、其靈をまつらばやと爰に來り、此光景を見て驚き悟、執着の心を飜し、色欲の念を斷者多かりけり。四十九日に當れる日、一休和尚、野曝悟助、ならびに珠名の長夫婦を具して、此所に來り給ひ、地獄が白骨を引起して見せ給ふに、骨々のつがひ鎖の如くにつゞきて、全き一具の骸骨なり。皆これを見て奇異の思ひをなすに、一休宣はく、これを鎖子骨となづく。是凡人にあらざるの證なり。彼は乃北方女宿 婺女星の化する所なり。權に人間に降て美女に生れ、色を賣てあまたの人にしたしみ、死して爛穢の姿を見せ、九相の變する理を示す。是色欲に耽る者をして、驚悟させんが爲なり。已に彼が爛穢の姿を見て、婬樂のはかなき事を悟、行跡を改めし者あまたありと聞。なほ此事



を後世に傳へなばよき誡ならん。もはや用なき此遺骨、原の天上にかへすべしとて、野曝に命じ柴を集て茶毘させ給ふに、煙のうちより七つの星あらはれ、光明赫奕として空天に飛去けり。偖其灰を埋て一つの塚となしぬ。今八木郷久米田寺の境内にある女郎塚といふは是なりとぞ。此地獄が事、觀音救世の悲願に、金砂灘頭の鎖子骨となりし遊女の昔語によく似たり。（太平廣記）

戌博迦尊者　父母安樂行品第八

孝は百行の始とて、一切の善行のうちに孝行より前にたつものばなし。孝天にいたるときは風雨ともにしたがひ、孝地にいたるときは萬物化盛す。孝人にいたるときは衆福臻るとて、孝の德によりては五日の風枝を鳴さず。十日の雨塊を動さず。草木よく花咲實のり、五穀豐饒にして家富國昌ことあきらけし。凡孝の一字は百日千夜にもなか〳〵說盡す事能はざるべし。爰に泉州堺に程近き湊村といふところに、箕内といふ武士の浪人ありけり。頭にきえぬ霜をいたゞき、額に皺の波をたゝへ、弓箭はとくに捨たれど、腰は弓程屈りて七十に近く老ぬれども、二君に仕へぬ貧家の住居、妻は六十歳のとも白髮、夫婦揃ひし正直に、神の惠や深かりけん、世間にまれなる孝子を持、其名を任助といひ、すぐれたる美男にて、年は未だ十八歳、若年なれども萬に賢く、朝夕父母につかへて孝を盡す事、當世の曾參ともいひつべし。父母はこれを喜び、我家貧しけれども孝子を持り。此上のたのしき事あるべからずと、平日に自慢しけるとかや。住居たる茅の軒、垣もまばらな篁蔭に、[illegible]傳行齋傳方御藥杉齒木といふ看板を掛、夫婦齒木をけづりて細き煙を立、任助は土器の荷ひ賣して、薄き本錢の活業も、清き心は照月か、赤土器に破もなく、まどかに世をぞ經たりける。茲に又堺甲斐町中濱の居屋塵右衛門が娘小田井は、眉目容兒美麗年も十五の初花なれば、人毎に戀したひ、嫁にとらめと望もあり、婿にならめと望もあり。門に絕ざる媒妁の杖は、立ながら朽る錦木に等しけれど、塵右衛門夫婦娘を寵愛のあまり、婿選して承引ざれば、いまだ定まる緣しもなく打過けるが、一日彼任助土器の擔をかたげて、此邊を賣步き、塵右衛門が家に呼入られて土器を賣けるが、此時小田井扇を折て店に居合せ、偶任助をかへりみけるに、挑賣する者には似氣もなき風流士なれば、世にはかゝる美男もありけるよと、あからめもせず見とれつゝ、忽心迷ひ、魂身をあくがれ出て、しばし前後も覺えざりけり。此日より戀の重擔をおひそめて、胸を焦しけれど、彼が住家もしらず、誰媒妁に賴みていひよるべき便もなく、唯心一つに惱みけり。かねて此家に斑毛の飼犬あり、小田井によく馴てゆくさき〳〵の跡を慕ひ、萬のことを心に從ひければ、小田井も深く憐けり。一日小田井緣先に出て空を眺め、任助が事を思ひつゞけて居たる折しも、彼犬庭にありて尾を搖を、小田井見やりて汝は我心を知まじ。我は頃日物思ひありて暫しも忘るゝ事能はず。汝若心あらば、我切なる志を戀人に通はせくれかしと、

人にものいふ如くいひけるに、犬近くすすみて尾を搖聲をなして、其詞を聞入たるさまなれば、小田井又いはく、かねて父上の物語に聞つるに、唐土の書に陸機とかいふ人の飼ける黄耳といふ犬、書簡を古郷に届けたる例もありける由、其犬程にはあらずとも、汝我書を戀人に届けくれべきやといひけるに、犬又聲をなして應が如し。これによりて小田井硯箱を取出し、心のたけを書に記し、これを竹筒に入て犬の頸に結つけ、疾返書を取來よといふに、犬は身ぶるひして頓に走去ければ、さては聞届けつるよと嬉しみつつ、其歸るを待居たり。偖犬はただちに任助が家をのぞみて馳行けるに、折しも任助は土器の擂をかたげて歸り、門首にて此犬に會ぬ。犬は任助が裾を咥へてひき、聲をなしけるにぞ、何するやらんと審かりつつ、よくよく視れば、頸に竹筒を結つけたり。何の心もなく、取て見るに、裏に書簡やらの物ありければ、これ容易に見べき物ならずと、舊の如くにして裏にいらんとせしに、犬又袿をくはへて引とどむ。怪むべきは此犬任助を止むるとひとしく、任助かの書を見んと思ふ心起り、再筒をとりあげて書を披き見るに、其文に、妾は甲斐町の扇折の娘小田井と申すものに候。君いつぞや物賣におはせしを見初て、かく惱みはべるなど、切なる心の丈をこまごまと書て、奥の方に、

あしさまにとりおとしつるかはらけの
　われてくだけてものおもふかな

と書たる筆も拙なからず。さては彼者我におくれる艶書なり。なかなかに開封したる口惜さよ。父母のゆるさぬ不義いたづら、書見しばかりも道ならずと、かねて行ただしき者なれば、大にこれを恥思ひて、手早く筒にをさめ、犬の頸に結付て追やりけるに、犬は本意なげにて歸けり。小田井は待侘て居たる所に、犬歸り來にければ、いかにやいかに返書取て來つるかと、筒を取て見るに、我書なれば大に愁ひ、此書開封してあるを見れば、彼人の見給ひしには疑なし。返しだに給はらぬは心強き人哉と、或は恨み或は悲み、これより思ひ益深くなりて、此夜も泣あかし、次る日にいたりてつらつら思ひけるは、此うへは外に詮術もなし。打つけに心のたけを彼人のもとにゆき、告聞えて、若得心なき時はいかにもなり果てしと、懐心の筋に思ひ詰て、又彼犬にむかひ、汝我を不便と思はゞ、戀人のもとに導きゆけかしといへば、犬は尾を掉て前に出んとす。折ふし父庫右衛門は家にあらず、母の目を忍びてひそかに身支度し、庭口より出て犬に導かれつつ、任助が家にいたりける。此時任助が父母は番魚寺にまうでて家にあらず。任助獨留主を守りて居たるに、小田井は已に此に來りて任助にあひ、恥しさもよそ

にしてさま〲に掻口說けるが、任助はこれをうけひかず、かへつて異見をくはへけるにぞ、押返していふべき言葉もなく、唯涙を落しつゝ、女子の口よりかゝる恥かしき事をいひいではべるは、始より覺悟の上に候といひつゝ、懷より剃刀を取出して、ほど〲危く見えけるにぞ、任助はこは短氣なる擧動かなといひつゝ、あわて迷ひて押とゞめけるが、庭に蹲踞居たる彼犬二聲三聲なくと等しく、怪かな任助は惘然として現心もなくなり、日來正き行も亂れ、鐵石の心忽鑠て、愛憐の情しきりに起り、今の擧動にて切なる心は見えつ、我身とても木石にはあらず。さばかり厚き志をなどて空うなすべきぞ。此方へあはせといひつゝ手をとれば、小田井は甦生たる心地して、嬉しさかぎりなく、今更顏に紅葉を散しつゝ、心頭突々と跳り、一間のうちにいざなはれてゆかんとしたる折しも、黒染の破たる衣を着たる貧しげなる僧、門首にたゝずみ、頭を掻てひたすら裏の方をうかゞふと見えしが、やがて端近くおきつる土器の擔を奪んとす。任助はこれを見て小田井が手を放し、やをれ賊僧、それは我命をつなぐ賣物なり。形に似合ぬ膽太き奴哉と呼はるうちに、はやかの僧これを奪て走去ば、任助はありあふ棒を取、盗人よ賊僧よと呼はりつゝ追ゆきけり。小田井は獨跡に殘り、門首に出つ入つして



氣づかひ居けるに、父塵右衛門他所より歸りがけに、此家の前を過りて小田井を見つけ、汝は何故爰に來しぞといへば、小田井は驚き、何と答ふべき詞さへなくて差俯伏ぬ。塵右衛門は審しみ、若き女の獨出歩くはよからぬ事なり。此後かゝる事なせそと呵つゝ、具して歸るに、犬も後につきて歸りぬ。任助は遂に賊僧に追付ずむなしく家に歸り、先程小田井に答たる詞を夢の裏の樣に覺え、危く不義に及ばんとせし事を深く恥思ひけるに、此時父母も歸りければ、土器を奪れし事を語り、薄き本錢を打入たる商物を失ひ、翌日よりはいかにして活計すべきと、親子三人頭をあつめて愁けり。偖小田井が母香晒は、小田井が忍出し跡にて、かの書を拾ひて披き見つるに艶書なれば、こはうたてき事よと思ひ居たるところに、塵右衛門小田井を具して參り、妻を傍に招き、云々の所に居たるを連て歸りしといへば、妻は彼書を見せて、斯樣々々とさゝやくにぞ、塵右衛門、さては彼土器賣を戀に疑なし。彼は挑賣する貧者なれば、似合しき緣ならず。兎角これを制すべしと夫婦語あひて、此後は日もはなさざれば、小田井は書を通はする事だにならず、信太の森の楠の、千枝に別るゝ物思ひ、涙に交るちぬの海に、濡る袖だに干あへず。つひに病をひきいだして、始は只苟且のやうに臥けるが、漸病



まさりて、さま〳〵醫療を盡しけれど其驗も見えざれば、父母の歎きいふべうもあらず。香晒ひそかに塵右衞門に向ひていはく、娘が戀病になやむも妾若かりし時、戀ゆゑに主人の目をかすめたる其報と、おそろしう思ひはべるぞかし。いと愛と思ふ兒の命には替難ければ、たとへ貧者にもせよ彼を婿にし、娘の命を救給はれかしといふ。塵右衞門これを聞、月老の紅絲を結給ふ上は詮術なし、とて心を決し媒人を頼みければ、媒人任助が許にゆきて其事を談じけるに、任助いはく、僕が如き貧人を富家の婿になし給はんとは、上なく喜ばしき事に候へども、老たる双親を養ひ候身にしあれば、他家を續候事は心にまかせ難し。孝心深き者なれば、我身の幸を好まず、父母の事をのみ思ひて承引ざれば、媒人は理に伏して孝心を感じ、あながちにいはず立歸て、塵右衞門夫婦にかやう〳〵と語りけるに、塵右衞門これをきゝ、そは殊勝なる心ざしなり。孝子と聞て殊更に好しくおもひ候。しからは彼が兩親は此方より一生安樂に養て隱居させおき、彼等二人が中に出生の子あらば、實家の名跡をつがすべき證文を遣すべし。これにて得心いたすやうに今一度御懸合下されかしといふにぞ、媒人は再任助が許にゆき、かやう〳〵と談じけるが、兎角任助はうけひかず、父箕内傍に出て任助に向ひて云く、かねて爾に語る如く、我宿望あれどもとげずしてかく老朽ぬれば、とても原の武士に還るべき時はあるべからず。殊に塵右衞門殿、さばかり厚き志をはこび給ふを、無足にせんも如何なれば、此度の緣を定むるにしかじといふに、母もこれをすゝめぬ。任助是を聞兩親の意にかなひ然るべき事と思し候はゞ、否むべきにあらずとて、得心の由を聞えければ、媒人立歸て塵屋に行、仕濟し來れり、かやう〳〵といふにぞ、塵右衞門夫婦斜ならず喜び、急ぎ此事を小田井にいひ聞せ、病中ながら婚姻の盃許りもさせなば、おのづから病本服のよすがともなるべしと思ひ、しるしを取交し吉日を選びて、婿入の日をさだめぬ。

半諾迦尊者 畜生勸發品第九

此時しも九月のはじめなり。此頃は後の雛とて九月九日にも祭る事流例なりければ、小田井が病床の傍邊に氣を慰めの雛祭、雛の道具を裝備に、嫁の支度とざゞめきて、巳に婿入の日にもなりければ、母香晒は病床に到、病人にむかひ小田井が鬘をとりあげて、櫛笄を差餝せ、肌に祝儀の白無垢も、とく〳〵病おこたりて、痩たる顏の色なほし、めでたう床揚せよかしと、親の心に祝酒、肴はかやう吸物とかく、獻立書付て、所に名ある肴

の魚、味もよし野の櫻鯛、紅葉豆腐を取交て、座右衛門庖厨の者に命じければ、召仕の男女等剉刻して、家内おのづから勇みけり。さらぬだに忙はしき黄昏時、一人の山伏柿の衣に笈を掛、頭襟眉半に着て、太刀を前低にはきこらし、金剛杖をつきならして門に立、聲を高かに揚て、是は熊野三重の瀧に七日うたれ、那智に百日籠て、三十三所の巡禮の爲に罷り通る修驗者なり。掌の裏の施しあれといひて螺を吹鳴す。座右衛門は袴着に足打に長鮑昆布を盛ながらこれを見て、あな心なき御房や、家内に取込あるにとく／＼通られよとあらゝかにいふ。山伏はこれを耳にも入ず、頭を搔てひたすら家の裏をさしのぞく。座右衛門いぶかしみ、いまだ去ずやといへば、山伏色を變て、我此家をうかゞふは、家を相せんが爲なり。此家には必病人あるならん。家内に妖氣みちて物怪の祟あり。今四五日過なば病人の命かならず終るべし。我一祈せば立地に癒べけれど、信心うすきには施しがたし、憐べき事なりと、嘆息してゆかんとす。座右衛門これを聞て走出、袖をとりて引とゞめ、恭しく禮をなしていはく、さばかり尊き御房と知ず、不禮申せしはひとへに許し給へ。今宣ひしに違はず、我家に病人あり。即ち娘にて候。これを救べき術の侍らば、哀祈てたばせ給はらんやといふ。山伏曰く、人を救は我輩の好む處なれば、信心さへ深くば救とらすべしとて、草鞋をぬぎて打通れば、座右衛門妻香晒にも此事を語て、山伏を病床に導きけるに、山伏しばらく小田井が面を相していはく、果て是常の病にあらず、物怪の祟なり。今は俗にいふ、王莽時にて陽極りて陰起るの時なれば、修法にあしき時なり。今一時を過して祈禱にかゝるべし。見れば家内取込の樣子なり。夫まで靜かなる一間に案内せられよといふにぞ、内倉のかたはらなる小座敷にともなひ、茶を運ばせ菓子をすゝめなどすれば、山伏は端坐し、必心をつひやし候な。もし用あらば呼べしといふにぞ、座右衛門然らば許し給はれといひて退出、又婚姻のまうけにとりかゝりけるに、此時日は全く暮にけり。稍暫時ありて前走りの者、婿がねの來り給ふと知すれば、座右衛門夫婦あわてまどひ、これは約束の刻限より二時ばかりも早き事よと思ひつゝ出迎ひ、程なく婿の來るを見るに、片木の覆ひしたる白張の高提灯を、二張ともして前に持せ、無常駕籠と覺しく、こゝかしこ兀破、塵ばみてきたなげなる駕籠に乘、輿添の者四五人下袴をはき、白張の手提灯をともして付添來る。座右衛門夫婦此體を見て、こは狂じたる出立哉。病人の嫁に對して忌しきふるまひなりと氣にかくるに、已に乘物を店先に昇上させ、戸を押あけて出る者を

見れば、婿化助にはあらず、麻裃にひきかへて、麻衣に鈍色の袈裟を掛たる痩法師なれば、壓右衛門夫婦は、こはそもいかにと唯あきれてしばし詞もなし。やゝありて壓右衛門、袖まくりしてかの法師をはつたと白眼、汝かくいまはしき葬禮の出立をなし、婿といつはりて來れるは、必定今宵の婚姻を妨んためなるべし。婿に遺恨ある者か、但又我に恨ある者に頼まれて來つるか、あきらかに其故をいへ。我今こそ町人なれ、原は兩刀も帶たる者なるぞ。事によりては汝は勿論、從ひ來つる者までも生ては歸さじと、臂を押張て白眼廻しつゝ詈ければ、彼法師呵々と打笑ひ、汝は此葬禮の出立を忌はしといへども、今宵の婚姻とゝこはりなくとゝのへば、娘はもとより婿までも、三日をまたず一命を失ひ、かくのごとき無常駕籠に乘て、野邊に送るは眼前なり。故に未だ婿入なく、婚姻の盃をせざるうちに、其因果を說聞せ、娘の病を救つかはさん爲に來つるなり。我を誰とか思ふ。我は是住吉牀菜庵の一休なりと宣へば、壓右衛門夫婦は大に驚き、頭を疊につけて敬ひ、壓右衛門、某眼ありながら活佛の來迎を知す、不禮申せし事はひとへに免し給はれかしといひて詫にけり。時に一休輿添の者等に對て宣はく、墓守の霜四郞、衣屋の針兵衛、繪佛師の箔七、抹香賣の香助、石塔屋の石六、いづれも大儀



至極なり。もはや用なし歸られよ。その駕籠は損料の借物なれば、損ねぬやうに舁げゆき、我庵室に入おきくれられよと宣へば、此者等は暇申して歸けり。偖座石衛門に向ひ、娘の病床へ案内せよと宣へば、香晒いはく、先刻熊野參の山伏おはして、今祈禱にかゝらるゝ處なれば、しばらく御待下されかしといふ。一休これを聞給ひ、其山伏もいぶかしき奴なり。何にもあれ疾案内せよと宣ふにぞ、詮方なく病床に導き申して、夫婦は其傍に居たりけり。此時かの山伏は祈禱を始んとして、病人に對居たりけるが、一休を覷て、汝は何の爲に來るやといふ。一休宣はく、我は此病人を祈なほさん爲に來れり。山伏嘲笑て曰く、見れば乞食にひとしき僧なるが、汝いかばかりの奇特ありて此妖病をなほすべきや。かたはら痛き事なりといふ。一休宣はく、然らば汝と我と法力をくらぶべし。山伏いはく、そは面白き事なり。いで／＼且我効驗を見すべしとて、衣の袖を卷上、大最多角の赤木の念珠をさらり／＼と押揉て、一に矜羯羅二に制吒迦をはじめて、揉に採てしばらく祈けれども、唯己が身に汗水の流るゝのみにて少しの験もなし。一休これを見給ひ、汝が修法はそれのみなるか。いで我法力の奇特を見すべし、このけと宣ひつゝ、袖の裏より一摶の燒飯を取出し給ひ、これを病人の目前に出



して、ころ／＼ころ／＼と宣ひければ、小田井はむくと起なほり、燒飯を見てくん／＼といひで犬の身振をなし、身より煙いで、あな熱や堪難やと叫びて苦みけり。一休香晒に命じて、小田井が上着の兩肌を脫しめ給ふに、怪哉、肌着の白無垢熱氣に焦て、ところ／＼黑く色づき、恰も斑文犬の毛色の如し。一休折敷の上にかの燒飯をおきて與へ給ふに、つやつや物も食ざる小田井是を見て嬉しげに口をつけて食體、餓たる犬に異なる事なく、食終りて又もとの如くに臥て、こゝろよげにすや／＼と睡けり。一休山伏に向ひ、いかに我法力を見つるか。汝知すや我は是一休なりと宣ひければ、山伏は一休といふ名を聞とひとしく、大に驚たる躰にて、物をもいはずいそがはしく走出て、裏口より逃去けり。塵右衛門は一休の奇特を感じ、さていはく、彼山伏深く恥けにや、あわてて変に笈を忘去候。呼戻してこれをば返し遣すべしといひつゝ立上るを、一休暫しと止め給ひ、笈を返すに及ばず。彼は原大盗人なり。故に彼が今の祈、すべて修驗の法にかなはず。此家に病人ある事をしり、つくり山伏となりて賊せん爲に來つるなり。其笈を開き見よと宣ふにぞ、塵右衛門笈を開きけるに、裏より一つの金箱出たり。これは我たくはへの金なり。さては前程小座敷にをらしめし間に盗出せしならめといひて、内倉に走ゆきて見るに、金戸を打開きて、貯の金なかりければ、立歸て益／＼一休の神通を感じけり。一休山伏と法力をくらべて、犬の吠を止給ひしと世に云傳ふるは此事とぞ。かくて一休小田井を引起し給ひ、汝等此娘を惱いはれをすみやかにいへ。さもあらば惡趣の苦患を救ひて、成佛せさすべしと宣ひけるに、小田井は足手を縮て戰き、五體に汗を流しつつ口走りていひけるは、活佛の御たづねにあづかり、何をかつゝみ候べき。これは此娘の祖父山蛭の洞九郎がために殺されたる、五疋の犬の怨念にて候。我々洞九郎が狩犬となり、彼が活業を助け候に、恩を以て仇とし、河原に於て石小詰となし、酷く殺し候により、其恨を報ん爲、二上嶽の山中にて、手負熊に乘移り、彼を岩穴に落し入て餓死させ、畜生道にいざなひて、今已に我儕とひとしく苦患を受しめ候へども、なほ未だ恨はれず、子孫に祟てともに畜生道に落さんと思ひ候へ共、彼が娘これなる香晒は、孝心深き者故に取付ことあたはず。此孫娘の辨なきに取付、同腹の兄なる任助を戀したはせて不義をなさしめ、此世から畜生の擧動をなさしむべしと、分身して手飼の犬となり、不義の媒して任助が心をまどはさんと致し候へ共、彼も又孝子なる故、容易に承引ざるを兎角して、やう／＼今宵婚姻の盃を致さす迄に仕おふせ、夫婦

かための盃すみなば三日を過さず兩人共に取殺し、畜生道に落さばやと思ひ候といふ。一休袈裟をゆりあげつゝ近く進みて宜はく、汝等洞九郎を恨は宜ともいふべけれど、科なき此娘にたゝるは理にあらず。さすがは畜生の愚痴なる心なり。狗子佛性の有無を滅却して本來空にいたらば、仇も恨もあるべからずと宣ひ、又一越聲をあげて、

驀レ狗又驀二香卓一。狗有情即去。香卓無レ情自住。情與二無情一如何。作麼生如何。

有無ぞしる何おもふべき趙州もなかりしさきの犬の一聲（四元會）

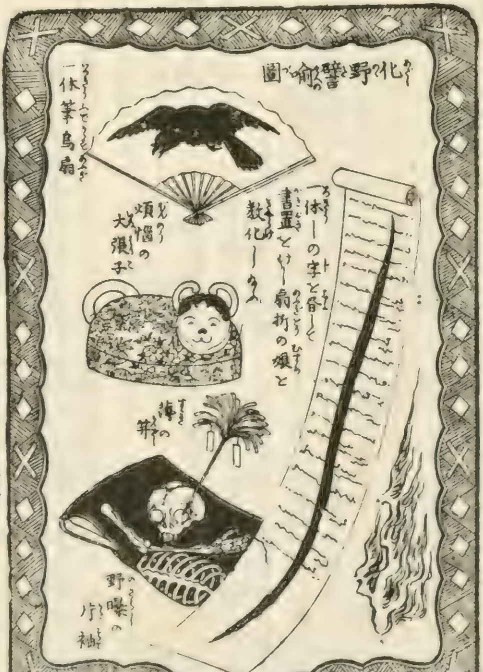
と宣ひて一喝し給ひければ、小田井踊上り、あな尊や拔苦の道を得たり。今は此娘の胸間を出去べしといひをはりて倒伏けるが、しばらくありて又起上り、惘然として夢の醒たる如く、一陣の凉風雲霧を吹掃ひ、一輪の明月輝いでたる心地して、病たちまち平愈し、常の如くになりければ、塵右衛門夫婦小田井もともに、一休を拜して喜ぶことかぎりなし。

羅怙羅尊者　處女授記品第十

其折しも又むこがねのおはしつると告る、程なく任助麻袴を着し、父箕内夫婦も禮服を着て相ともなひ、婿入舅入を一度に略して入來り、座敷に通りけるが、任助一休をつら〳〵見て、汝は前の日我士器をぬすみし賊僧にあらずやといひて、氣色をかへければ、塵右衛門これを聞、踈忽なる事をいふな、不禮すべからず。是は一休禪師にて在すぞといふに、任助はなほ不審氣にて、一休の顏をひたすら打視りぬ。時に塵右衛門、小田井が口走つる始終をくはしく語り、一休の教化によりて怨魂立去、小田井が病頓に平癒したる由を語ければ、任助親子これを聞て、且驚き且喜び、一休の道德を感謝す。一休衆人に對て宜はく、我儕等が因緣を詳に説聞すべければよく〳〵聞べしとて、衣の袖をかき合せて宣はく、塵右衛門十八年以前詫麻彦惣といひ、大和國二上嶽の麓に住し時、舅洞九郎が急難を救ん爲に、妻香晒に命じて、更級肩衝の茶入を賣につかはし、香晒其價の金を途中にて奪はる。其盜人は胸毛黑平といふ者なり。これによりて香晒、其身を賣て父を救んと思ひ、已に胎内の兒を墮せんとしたる折節、金は僅に五十兩、金ゆゑ我子を殺かと獨言しつるを聞て不便に思ひ、持合せたる五十兩の金を與へて救ひし、門說經の修行者は則此一休なり。我其比は山城國岩倉山の麓にあり、檀越の布施物多き時は、貧人を救ん爲に金を懐にし、門說經に姿を扮して近國他鄉を徘徊せり。其時一陣の風一通の書を吹落て我前にあり。拾取て見しに是香晒か書置に

て、其孝心深きことはくはしく知、かゝる孝婦をよくも救しよと我自喜びぬ。其後香晒安産しつるに、洞九郎が惡計にて、其孩兒を攝州合法が辻に捨たり。又箕内が原の名は穗波垣右衛門といひつらん。汝白炭の忠知に仕へし時、主人の命をうけて七十兩の金をたづさへ、更級の茶入を買とらんため攝州にいたり、あやまりて其金を合法が辻に落し、捨子を拾ひて歸りつらん。其子は則此任助にて、塵右衛門夫婦の中に出生の子なり。されば小田井が爲には同腹の兄なり。洞九郎は孫を捨て歸る時、垣右衛門が落したる七十兩の金をひろひ、家に歸る途中二上獄の窟峠にて、胸毛黑平に出逢、黑平を殺して五十兩の金をとり、手負熊にあふ。其熊に犬の怨魂のりうつりて、洞九郎を岩穴におとし入、洞九郎百二十兩の金を首にかけながら、餓て穴の裏に狂死をなしたり。見よ〳〵洞九郎は金を拾ふといへども、孫を捨たる不仁貪欲の惡報によりて、生ながら餓鬼道の苦みをうけて死し、垣右衛門は金を失といへども、子を拾ひし慈悲、日來忠義老實の善報により、貧けれども其子孝心深くして、老後の樂しさ富人にも遙にまされり。天に私なく善惡の報こまやかなること此如と詳に示給へば、各是を聞、すべて身におぼえある事なれば、さては〳〵といひて互に打驚き、一休は聖者の再來にて、六神通を得給ふとかねて聞及びしに違はずと、感嘆膊やまざりけり。わけて塵右衛門夫婦任助は、親子不思議の再會を喜び、一休の大恩を謝し、垣右衛門夫婦の養育の恩を謝しにけり。小田井は任助は實の兄なりと聞、なほ迷路の雲はれて、心神ほがらかになりにけり。此時しも野晒悟助彼朱太刀を打擔げ、案内を乞ひて此に來り、一休の前に手をつきていはく、仰によりて大和國二上獄に立越、山人をやとひ、拙者畚に乘候て、かの穴のうちに繰下され、明松を照して見候に、洞九郎が遺骨とおぼしく、ここかしこに亂散、朽葉埋れたる裏に革劑符ありて、百二十兩の金一兩も不足をせず候故、洞九郎が遺骨はかの山中に埋め、劑符は即携歸候とて、懷より取出てまゐらす。一休これをとり、垣右衛門に見せ給ふに、疑もなき蜀江錦の紋をおきたる唐革の劑符なり。十八年濕地に埋れありしと雖も、依然として朽ざるは、狡兎革の奇特としられたり。香晒は悟助が顔をつくづく視りて、御身はいつぞや浪花にて、我我親子の難義を救ひ給はりし御人にはあらずやといへば、悟助は掌をはたと打、さては此家の御親子にて候ひしかと、たがひにはからざる再會を嬉しみけり。一休は劑符の金を取出し、此うち五十兩は茶入の價汝が手に戻るべき因緣の金なりとて、塵右衛門に渡し給ひ、殘る七十兩

は垣右衛門汝が失ひし主人の金なれば、剤符と共に汝が手に歸すなりとて與へ給ひ、白地の扇をとりよせ筆硯を乞とり、扇の面に烏の形をゑがきて、任助に向ひ給ひ、前の日汝小田井とほど／＼不義に及ばんとしたる時、我汝が土器を奪しゆゑ、時を失ひて不義に及ばず。これ畜生道の擧動をさせまじき我方便なり。此扇は汝養親に對して反哺の烏の孝行を賞じ、かの土器の價として遣はすなりとて與へ給ふ。一休の烏扇とて、今に其形を傳るは是なり。又宣はく、更級肩衝の茶入は、今當津日口町鹿野屋何某といふ者の所藏となりて、千金にもかへがたき寶とす。さりながら七十兩の元金を償此扇を證として我傳言を通じなば、彼すみやかに茶入を與ふべし。汝等が主人忠知は、今家を攝州に移して平野の里にあり。幸我親友なれば、歸參を取持つかはすべしと宣へば、任助親子の喜びいふべうもあらず。一休又香晒に向ひ給ひ、汝が書置我手に入しとき、持歸で何の心もなく、因果經の間にはさみおきしに、十八年過て偶今朝見付出せしも、我かく汝等に因果を説べき因縁ならめとて、懐よりかの書置を取出し給ひ、これも今は



用なき物なればとて、ふとき筆に墨をふくませて、かの書を廣げ、横樣に假名のしの字を長くひきて消給ひ、別に汝等に示す事あり。喩を以て示すべしとて、悟助が野曝の衣服の片袖を引ちぎり、小田井が頭に挿たる薄の笄をとりて、袖の

衣紋の髑髏の眼中にさし、雛棚に飾れる犬張子をとらしめて、其傍におき、かの烏の扇を差翳し給ひ、汝等これを見よ。是乃化野のありさまなり。美人のほまれ高かりし小町が顔色、今いづくにかある。白骨となりて朽ぬれば、かゝる髑髏のあなめ〳〵、小野とはいはじ薄生、野邊の屍を食破る、煩惱の犬張子、唯殘れるは肉をあらそふ烏扇の骨のみなり。いかにいかにと宣へば、わけて小田井は無常を觀じて涙をおとし、尼にならん事を願ひければ、一休頭をふり給ひ、汝年若して剃髪せんは不可なり。其儘にて子孫をまうくるこそ孝行なれ。宿世の業を果さんとならば、汝自百日の間往來の人に煎茶を施にしかじとてとゞめ給ひ、かの小田井が薄の笄を香匣が書置に包て、犬張子の裏に納め、如是畜生發菩提心と宣ひつゝ、如意を以て犬張子をはたと打給へば、庭に蹲踞ゐたる飼犬、一聲なきて身をふるふと見えしが、かきけすやうに失て、五ッの心火空天に飛去けり。皆々これを見て益奇異の思ひをなすに、一休宣く、此犬張子は此まゝ埋みて塚となし、彼犬どもの菩提を弔べしと敎給ふ。塵右衞門夫婦口を等うしていひけるは、我々夫婦父洞九郎が菩提の爲、娘にかはりて剃髪致度候と願へば、一休其儀は望にまかすべしとて、剃刀を把て塵右衞門が頭髪を剃落し、香匣が髪を斷て斬髪となし給ひ、塵右衞門が法名を休阿彌と給はり、香匣が法名を休市と給はりけり。是扇折剃髪して阿彌號をつぎ、其妻斬髪して市の字をつく始なりとぞ。さて一休は別を告て出給へば、皆々拜禮して門おくりをするに、一休何やらん悟助に耳打し給へば、悟助うちうなづき、緣戸をくゞりて且先にいでけるに、前程の山伏軒下の闇裏よりつと出て、悟助が襟に掛たる袈裟を探りて打うなづき、腰刀をすらりと抜て只一打と斬つくる。悟助は早く身をかはし、かの朱太刀を拔放してはつしと受止、丁々しとゝ斬結ぶ。そのひまに一休店先に殘しありける白張の提灯に、火を點して外の方に出、山伏の面先に提灯を差付給へば、悟助は山伏の顔を見て、汝は提婆仁三郎にあらずやといへは、さては一休にてはなく、野曝にてありしかと打驚き、大膽不敵の仁三郎も、いつぞやの本事に懲、敵し難くや思ひけん、逸足出して逃去。悟助は跡を追んとせしが、一休これを止め給ひ、彼も又おのづから誅戮にあふ時あり。打捨ていざ來よと宣ひつゝ、悟助に提灯持せて前に立、住吉をさして歸り給ひぬ。かくて任助は一休の敎の如く、鹿野屋にゆき、七十兩の金を償、かの扇を證として茶入を乞とりて歸りければ、箕内は大に喜び、父子ともに主君忠知のもとにゆき、茶入を奉りて歸參を願ひけるに、忠知はとく

一休の物語にて、彼等が忠孝の全き事をくはしく聞居たれば、頓に歸參をゆるし、本知に加增し與へけるにぞ、箕内は舊の如く穗波垣右衞門と名告、父子ともに益益忠勤をはげみけり。忠知思ひけるは、彼茶入十八年を過て、かく不思議に手に入しは、全く佗助が孝行の德なりとて、これよりかの茶入を佗助肩衝と名づけて、上なき寶とし、深く愛玩せしとかや。後に利久の秘藏となり、捨子の茶入といふ名物となりしはこれなりとぞ。塵右衞門は和州郡山の寺院に所緣あるにより、かの犬張子を其寺の境内に埋みて塚とす。郡山の犬塚とて今にあり。小田井は戎島に假家をたてて、百日の間茶を施しける。今於網茶屋といふは其舊跡なりとぞ、これより垣右衞門塵右衞門一家の緣をむすび、佗助は妻を娶、小田井は婿取して共におほくの子をまうけ、兩家富昌けるとなり。一休和尚扇屋へ婿入し給ひしと云傳ふるは非なり。實は如此と彼地の人の口碑に殘りぬ。

本朝醉菩提卷之五終

○此末は殘る六回を三冊にあらはして後帙とし
當十月下旬無相違賣出し申候あひだ
本屋にて御求御覽下さるべく
文亀堂

○明本醉菩提傳　○一休年譜

○狂雲集　○一休品物語

○佛鬼軍（一休自畫自作繪卷物）　○一休不審雙紙

○科註法華經　○鬼貫句選

○九相詩　○其角焦尾琴

○山州名跡志　○阿彌陀經

○往生要集　○十王經

○方丈記　○三代實錄

○地藏經　○五雜俎

○後太平記　○傳燈錄

○達磨禪經　○源平盛衰記

○和漢三才圖會　○梁塵愚按抄

○泉州志　○堺鑑

○血盆經　○五燈會元

○人天眼目　○人天寶鑑

○圓語心要　○無門關

○禪林類聚　○撰集抄

○元亨釋書　○敬雨朽葉集

○傳法正宗記　○三教指歸

○見ぬ世の友　○本朝畫史

○七十一番職人歌合

○太平廣記　○述異記

○無門語錄　○僧寶傳

○其角五元集　○因果經

通計四十七部爲編本朝醉菩提傳於

于翠竹深處之醒醒齋仲抄讀之

文化六年己巳秋九月發行

開版所

江戸本石町十軒店
西村宗七

同　小舩町二町目
伊賀屋勘右衛門

東都

醒醒齋京傳編

一陽齋豊國畫

備寫　橋本徳兵衛

刷人　小泉新八郎

腹筋逢夢石（はらすぢおうむせき）　繪入讀本全一冊　山東京傳作　歌川豊國画

鳥けだものうをむし魚いの首尾
いろゝ実をもちゐてつくりなる戯け
作之出来ぐあひ出刊也　文魚堂梓

京傳店物之商口上

〇きれ地紙たばこ入るい当年は別てめづらしき新形風流の雅品おほく仕入
申候〇京傳自画讃扇并ニ自詠の色紙たんざくもとめまゐらせ繪品て

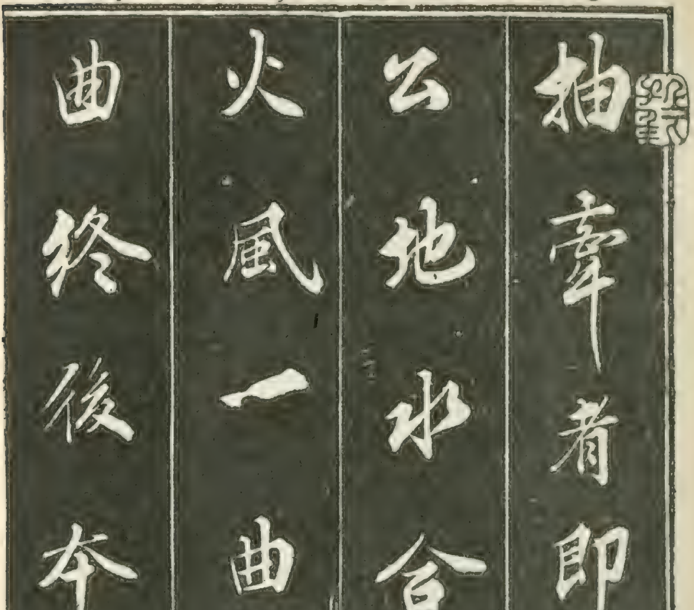
讀書丸　一包壱匁五分〇第一きこんをつよくしものおぼえをよくし心腎のきよを大に補ふ
老若男女常に身をつかふてものを学ぶ人用てよし

加味奇應丸　大極上々の
薬品を用ゐのりを不入蜜のみを以て丸とす

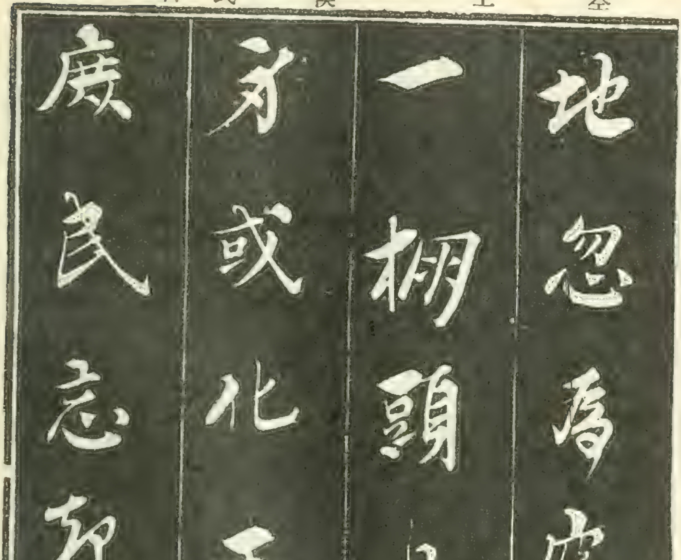
京山篆刻　一字　五匁　古文近来好事ニ随ひて
印材ハ蠟石　印にて　別ニ

提善部

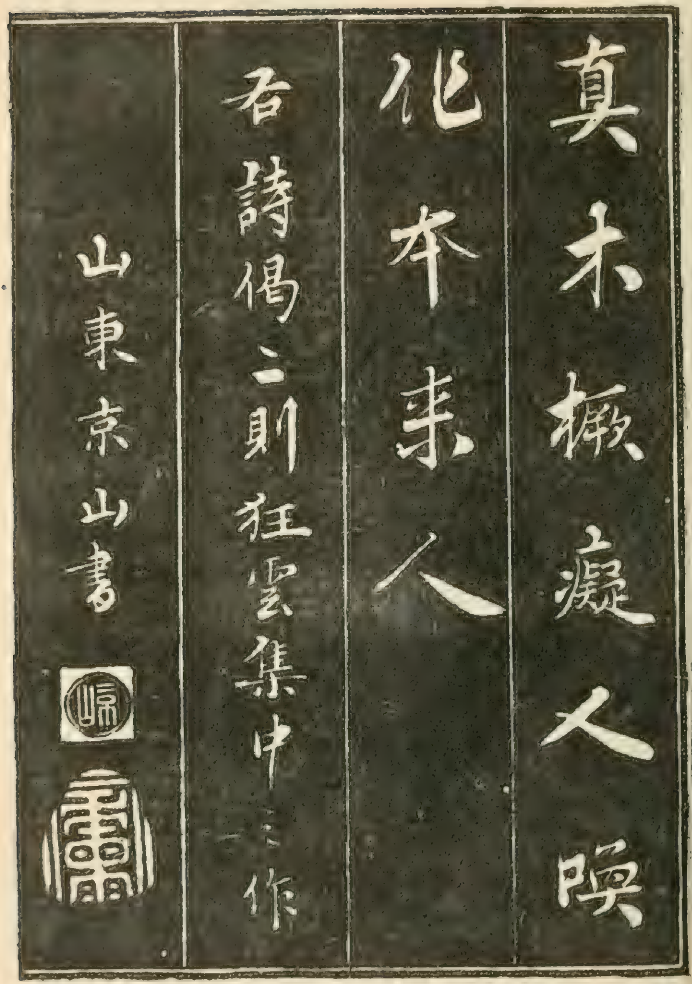
抽牽する者は即ち主人公池水合成して火風に隨ふ一曲の勾欄曲終つて後本然の大



地忽空(たちまち)
となる
一棚頭上
全身を
現し(あらは)
或は王侯
と化し
或は庶民
忘却す目
前の



眞木癡
癡人喚ん
で本來人
となす



夫單傳直示の妙道ハ意味深長にして凡慮のおよぶ所にあらず碩德賢才の祖師もしろ積雪に腰を埋利刀に臂を断のよくひ種々の苦行をもして方纔其道を得るに况や我ヶ如き凡俗无智の輩焉有無乃両字を離て畫松の音を聞てしる得べきんや唯狂雲活仏の禅機に託し善悪應報生死流轉の理を示し児女勸懲の一端とするを而巳

江戸　醒醒齋京傳識

此稗史の始六冊を前帙として前年に賣出し置たり此後帙四冊と合せ見ば一部の趣意を知りがたくゝ前に賣出せしおのれは前帙と合せ全部十冊として一覧をたまふべし

書肆　文亀堂主人謹白

達磨真性頌



撫方氏墨譜之圖

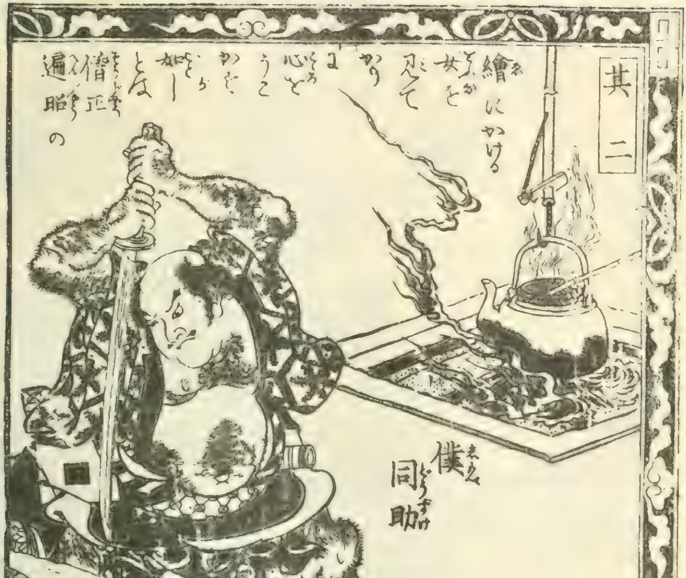
達磨西來。不立文字。直指人心。見性成佛。獨有真性一頌。雖二十字。回環讀之。成四十首。計八百字。每首用韻。四至俱通。以表真性無有窮盡也。


醒醒齋


不破伴左衛門重勝
京五条坂の遊君




北岩倉の宗玄



其二
繪にかける女を見ていたづらに心をうごかすが如しとは僧正遍昭の
僕同助
宗玄


歌と詠しける
貫之のことばあり
晋顧愷之が隣家の
女と懸想し壁に
其姿を画きて心に
釘うちしも无声の
詩のおよばざると
恨しかるめ
六百番歌合
寄絵恋　顕昭
いつはれて
む形をかきね ゑとも
人のうへみど
かはうつしかねつる
折琴姫

本朝醉菩提後帙總目録

以上目録終

稲妻表紙後編本朝酔菩提後帙上冊

那伽屋
那倶者災禍従地涌出品第十一

かくて其年も過てあくる年になりぬ。爰に白炭兵衛忠知は、前に摂州の縣司となり、京鴨河より摂州平野郷に移住けるが、毎年五月二十八日は、住吉神田の神事ありて、堺乳守の遊女五人、薄衣の衣裳を着て花笠をかづき、神前に出て祭式をつとむ。これを住吉御田の植女といふ。此日忠知神事供奉の役目によりて堺に立越、神事をはりてかへる道、北の庄皇子が上といふ所を過ける時、急雨ふりきにければ、急ずばぬれまじものをといへる歌の意を思ひいでて、森の小かげに馬をよせ、従者ども、爰にをらしめけるに、已に日はくれて雨はしきりにふりまさり、供びとども、長柄の傘を忠知にさしかくれど、横しぶきのつよきをふせぐ事あたはざれば、忠知いはく、此雨急にはやむべからず。人家ある方にゆきて、明松を取来れと命じけるにぞ、一人の従者かしこみ候とて、ゆかんとせし折しも、在叢傍の辻堂に安じたる地蔵聲を發し、明松の火のぞみならば、我かしあたふべしといひつゝ、立出て両眼より炎を放ち、忽一丈あまりの大地蔵となり、忠知を目がけて、飛かゝらんず勢ひなり。供人どもはこれを見て、皆氣を失ひて倒たり。忠知はこれをはたとにらみ、汝は何等の妖怪なるぞ。速に正體をあらはせと罵ければ、地蔵から〳〵と打笑ひ、我頃日毎夜此往來に出て、人を取ことを汝しらずや。今宵はいまだ食をもとめず、飢にしのびざれば、汝を食にあてんと思ふなりとよばはりつゝ、大口あいて眼をいからし、大手をひろげて近づきよれば、忠知は馬上に長刀をおつとりのべて、はつしと斬に、地蔵は一聲さけびて地に倒れ、何にかあらん、黒きもの飛去と見えしが、やがて雨はやみにけり。供人どもは、やう〳〵人ごこちいできて起上りければ、忠知彼等に命じて、明松を取来らせ、たふれたる地蔵を見るに、これ木佛にて、首ぎはに長刀の斬瘢あり。長刀を見れば、鮮血したゝりけり。忠知いはく、察る所これは妖怪の物、此地蔵につきて、人に災せしならめ。妖怪の本體を打とめざるこそ殘念なれとて、彼地蔵をもとの如く堂中にすゑおかしめ、家路をさして歸けり。堺皇子が上の首斬地蔵といふは則これなり。長刀の斬瘢今にありとぞ。○夫は扨おき爰に又、大和國佐々木判官貞國は、前編に記如く、先だちて子息桂之助

國知に家をゆづり、其身は薙髮して、平郡の別館に隱居しけるが、十年ばかり前に身まかり、夫より續て、桂之助銀杏前夫婦も身まかりぬ。かく打續て、親子夫婦三人まで身まかりしは、全く是先の年、鳥部野に會合せし、蜘手の方以下の惡靈どもの所爲なること疑なし。又月若丸は、佐々木多門之助照滿と名告、父桂之助歿後に家を續、妻をむかへ、今は年已に三十餘歳にいたりけり。妻女の名を折琴姫といひ、年はいまだ十九歳、其容貌美艶、唐土の楊氏、虞氏、王氏の類はしらず、一乾坤に又あるべしともおぼえず。臉は三月の花に嬌、眉は初春の嫩柳を拂ひ、肌は瑤臺の月を妬み、髮は楚岫の雲を簒、誠是たぐひまれなる美人なり。此比伊勢國に、雉子川大領國貫といふ人あり。かねて佐々木の家を亡し、其領地をうばはんと思ふくはだてありけれども、執權名古屋山三郎、多門之助を補佐して、よく家ををさめ、武備嚴重なれば、容易に手を出しがたく、唯時節を待て居たりけるが、國貫の一子金藤太國景といふ者、春日まうでの折から、かの折琴姫を見そめ、戀慕の闇に迷ひて、朝夕の飲食をさへ咽を通さず、明ても暮ても目の前に、姫の姿まぼろしの如くに見えて、執念深く思ひこみしが、つら／＼思ひけるは、かれは多門之助といふ主ある身なれば、たとへ人づてをもとめ、我切なる心をい



ひおくるとも、うけひかざるは必定なり。昔高階師直塩冶が妻を奪戀せし想の苦さも、かくこそありつらめ。かくて戀死はくちをしきことなり。父大領兼て佐々木の家を亡すべきくはだてあるこそ幸なれ。折をうかゞひ、かの娘を奪取、父をすゝめて多門之助を打亡し、姫を我妻にすべしと、元來慮の淺き者なれば、はや手に取しごとくに思ひ、よき折もがなと待居たり。比しも二月の半なれど、今年は暖氣にして、吉野山の櫻例よりもはやく咲て、今を盛なるよしきこえければ、折琴姫多門之助に向ひ、妾當家に嫁してはや四年あまり、當國に住ながら、いまだ吉野山の名花を見ざること殘念に候とて、花見にまうでたきよしをねがひけるに、多門之助是を許して、俄に其支度をなさしめ、前司太郎一存といふ忠臣無二の若者を守役に從しむ。其外侍女女童、婢女奴僕などあまた召連、今日をはれと粧ひざゝめき立てまうでけるが、清和の天氣に催されて、春草蒼々として野外の景もたゞならねば、行路の憂を忘れ、氣もうき立心もいさみて、程なく吉野山につきぬ。名におへる山の櫻、今を盛に咲みちて、風も通さぬ風情、えもいはれず。左右の山々前後の谷々、唯雲の裏をのぼり雲の裏をくだるが如し。麓ははやく奥はおそし。開落山の淺深によれども、いづれか花の



盛ならざる所もなし。折琴姫は乗物を出、歩行にてのぼりけるが、歩なれざる玉ぼこの、道も所々の好景に目醒こゝちして、あゆみもかろげなり。前司太郎は前に立て、名所古跡の案内しつゝ慰めまゐらす。太郎指さしていはく、此川なん慈鎮和尚の、花に香すると詠し吉野川にて、紀の國紀の川につゞき候。此あたりを秋津野と申いはれは、昔雄略天皇、此野に御狩の時一ツの虻飛來りて天皇の臂を吮。時に蜻蛉飛來りて虻を噛殺して去。天皇歌を詠じて、蜻蛉を稱美し給ふ。ゆゑに此所を秋津野と名づけ、或は蜻蛉の小野と申すなり。されば爲家卿も、しられしを霞にこめてかげろふの、小野の若草下もゆるともとよみ給へるなり。かなたに見ゆるは三船山、こなたに流るゝは菜摘川、吉野の川のよしや世の中と詠し妹脊山は、かしこなる宮瀧の西に見ゆる山にて候。淸見原の天皇は、國栖人の船にかくしまゐらせ、後醍醐帝は吉水院を皇居に定給ふ。こゝは村上彦四郎が痛腹の所に候。かしこは佐藤忠信が空腹の地にて候。勝手の寶藏には、靜が舞の裝束ををさめ、子守の拜殿の歌仙は、定家卿の眞跡に候なんどいひて、西行法師の苔淸水のあたりまで其いはれを物語つゝみちびきければ、折琴姫をはじめ、つきしたがふ侍女女童にいたるまで、山路の草臥を忘れて、轎輿に入、いゆきめぐりて七曲の坂を過、千本櫻の木の間に幕打まはし、毛氈緋席を敷つらねて、姫を錦の褥にをらしめ、樏子提盒偏提などとりならべて、酒宴を催し、淺く酌强てすゝめ、侍女等の琴三絃、盲目法師の一節截、女童の小舞、碁盤人形の海道下りなどに興をそへて、姫を慰めまゐらすれば、幕の外に野風爐をあふぐ僕、榾を枕の奴どもまで、現心もなく、酒機嫌の腕押に、力乞の不動を祈、とく／＼の淸水をむすびて醉を醒し、涎とともにつくり髭を流しぬ。

かゝる入輿の折しも、深編笠の下に懷紙の覆面して、袴のくゝりを高引あげ、角鍔の長き刀を關木にはきこらし、紙緒の蘭金剛を穿たる武士一人、扇をひらきて胸にあて、此幕の裏をうかがふと見えしが、やがて從者と見えし侍三人、みな高股立なるが幕を引破りて飛入、樏子、提盒、琴、三絃のたぐひを踏碎ければ、こは狼藉よ曲者よと立騒、みな／＼姫を圍て守護しけるに、かの深編笠の武士背後より飛入て、侍女どもを踏倒し、姫を小脇にかいはさみて、いつさんにはせゆきぬ。此時前司太郎は姫の布施物をおくる使して、吉水院に去けるが、はるかに此體を見て大に驚、岩の陰道踏ならして、韋駄天走りにはせ來り、彼曲者の腕くびをとらへ、且姫をとりかへして背後にかこひ、汝何等の奴なれば、かゝる大膽のふるまひをなすぞと罵所へ、侍女ども

跡をしたひて追來ければ、前司太郎姫を渡し、とく／＼守護して御歸館を急べしといふにぞ、侍女どもこゝろえ候とて、乘物も間にあはねば、姫の手を取てたすけまゐらせ、こけつまろびつ逃去ぬ。曲者は跡をおはんとかけいだすを、前司太郎立ふさがりて追戻せば、曲者は怒をなし、編笠をかなぐり捨て、刀をすらりと拔放し、類額二ツと斬つけたり。前司太郎も拔合せて、丁々しとゝ切むすぶ。此曲者は乃是金藤太國景なり。前司太郎はこれを見しらざれば、何者といふ事をしらざりけり。かゝる所へかの從者と見えし三人の侍はせ來り、箇々刀を拔つれて、前司太郎に切つくる。太郎は曾て劍術の達人にて、しかも早業なれば、四人を相手にすこしもひるます、勢猛ぞ戰ける。かゝる折しも、疾風颯と吹て、木々の梢の花を散し、この下風は寒からで、空にしられぬ雪卷風、落花の波を蹋立つつ、飛鳥の如くにはたらきて、陰にかこめば陽にひらき、益勢猛かりければ、三人の從者は、數ヶ所手を負、敵しがたくや思ひけん、いちあし出して逃ゆきぬ。金藤太も手を負ぬれども、原來猪武者なれば、おのれ一人踏とゞまりて、命限に戰けるが、前司太郎がいらつて切こむ刀のひかり、電光石火と閃々つゝ、血煙ぱつと飛散て、地上に撲的倒れたり。前司太郎は、姫のゆくさき氣づかはしく、急とゞめの刀をさして、死骸を蹋こむ細谷川、姫のゆくあとしたひつゝ、飛が如くにはせ行ぬ。○爰に又此書の前帙第一回に出たる回國の修行者、飾磨の曾根松は、其後剃髮して、法名を宗玄といひ、山城國北岩倉に、寂寞の庵を結て住、道心堅固に行けるが、鐘建立の志願を起し、洛中洛外をはじめ近國を勸化し、頃日は當國に來り、此日吉野山にのぼり、歩つかれて、中院谷の辻堂の柱によりて眠居たるに、細谷川に蹋落されたる金藤太が死骸、此ほとりまで流來り、怪哉其死骸の胸のあたりより、炎々たる一塊の心火飛出て、かの宗玄が懷に入と見えてきえ失ぬ。ときに折琴姫は、侍女等に扶られて、此所まで逃來りけるに、金藤太が魂魄の乘うつりたる宗玄忽睡を醒し、姫と見るより跳寄て抱とゞめ、いとくもりたる聲音にて、あなうらめしや折琴姫、我は御身を戀しより、非業の刄にかけられて、今は此世になき人なり。生前の望はかなはずとも、ともに冥途へ連ゆきて、修羅の妄執をはらすべし。來れや來れとよばはりつゝ、支とゞむる侍女等をつきのけて、姫の襟くびかい摑、すくと立たる面色は、身の毛もよだつばかりなり。かゝる折しも、前司太郎は姫を氣づかひて、此ところまで走きたり、此體を見るより、こは物乞の狂人よな。狠藉なさば唯一打と罵つゝ、さゝ寃とら

へて引のくれば、又もとりつく横腹を、一あてあてれば宗玄は、うんとさけびて倒れけり。前司太郎はいそがはしく、姫を脊中に負まゐらせ、侍女等をひきつれて、麓の方へはせゆきぬ。宗玄はしばらくありて起上りけるが、足腰痛て追ゆくこともなりがたく、殘りおほげに跡を見おくり、惘然として現心もなかりしが、やゝありて地上を見れば、一つの香包おちあるにぞ、取上てひらき見れば、朱船とかきつけたる一木あり。此香包は、彼姫がとりおとせしにうたがひなし。これぞせめての生がた身と、懷にをさむる折しも、日ははや西に入相の、鐘蕭然とひびきつゝ、花は霏々散かゝる。我身にかかる罪科を、しらでぞ狂ふ痩法師、よろめく足に踏迷ふ、戀の山路をたどりゆきぬ。

○此時金藤太が魂魄、宗玄が胸間に分入、此後かの柴船の名香をしるしにして、折琴姫にめぐり合、姫をなやます事、朱雀の宗玄火のいはれ等は、續編にくはしく記せり。他日發行の時を俟て見給ふべし。

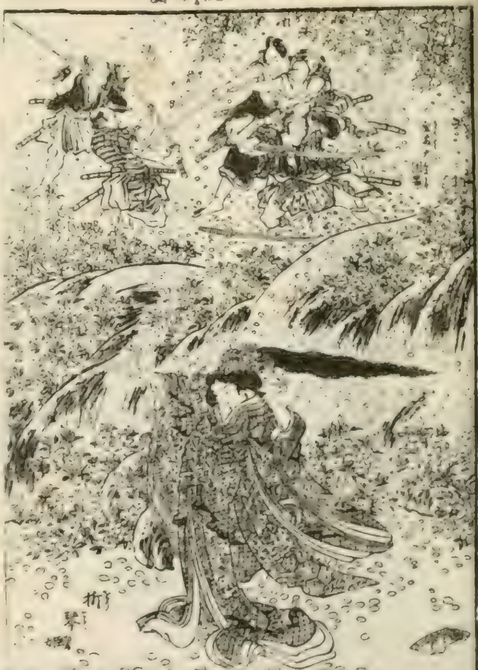


災禍從地涌出品第十一（後談）

かくて折琴姫は恙なく館に歸り、前司太郎がはたらきを多門之助にくはしくきこ

えければ、多門之助太郎を召、其功勞を賞じて、あまた褒美を給はりぬ。さて稲川大領國貫は、吉野山の事をきゝ、兒子金藤太が死をかなしみ、家の耻辱なれば此事沙汰すべからずと家士等に口どめし、ひそかに其屍をもとめて葬をなしぬ。かの三人の従者どもは、主人打れしと聞て、其場より逐電し、ゆくへしれずなりけるとぞ。去程に國貫は、金藤太を打れて無念骨髄にとほり、其原は折琴姫の事より起と聞、我かねて佐々木を亡さんと思ふ企ありといへども、時節をまちて打過たれど、此うへは片時も猶豫すべからず。不日に兵馬を起、多門之助を打亡し、折琴姫を生捕て、生ながらに金藤太が墳につき籠、前司太郎が首を取てこれを手向、兒子が修羅の妄執をはらさすべしとて、拳を握り歯がみをなして憤り、家士郎等をめしあつめて評議をなし、伊勢大和の堺なる國見山に取籠て軍のそなへをなし、

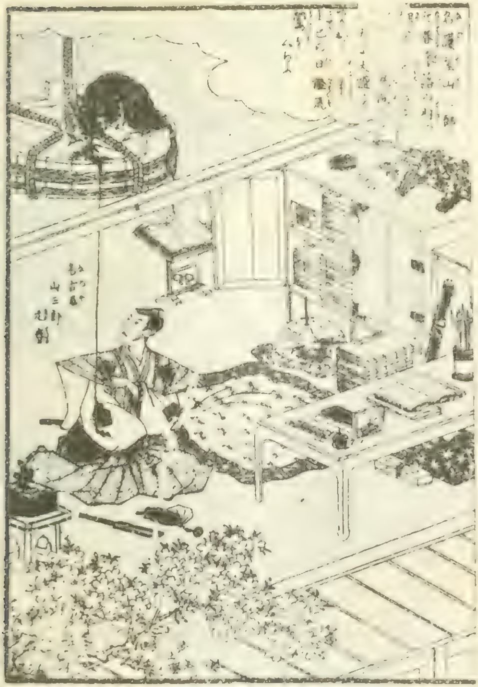
和州吉野山中院谷圖



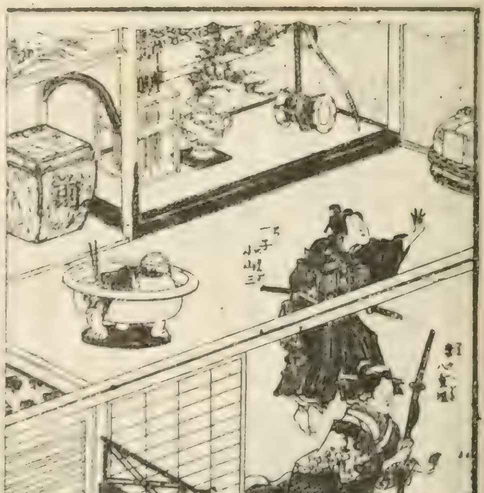
夜打にせんと議したりけり。爰に又、名古屋山三郎原春は、前に父の仇なる不破伴左衛門重勝を打取て後、佐々木の執権職となり、高禄をたまはりて何不足なくくらせしが、哀八重垣男子を産けるにより、今は本妻となし、其男子を小山三と名づけて今年十七歳に至り、いまだ丫角なり。又鹿蔵が弟猿次郎は前に身まかり、鹿蔵は仕へを辞して古郷に帰り、兒子同助といふ若者を残しおきければ、山三郎

山三郎伴作衛門をうちたる事、鹿蔵猿次郎の二人、大盥をつりおきしこと、すべて南総稗史長鼠にあり、照し見るべし

同助を家僕となし、不便をくはへてめしつかひぬ。そのかみ山三郎流浪の時、雨漏を避るために、住家の梁に大盥をつりおきたる事あり。今も居間の天井に、其盥をつりおきぬ。或人これを見て、見苦き事し給ふかな、こは何の為ぞと問けるに、山三郎云、是は我昔の艱難を忘れざる為、二つには兒子小山三に對し、驕を戒る為なりと答ければ、或人其志を感じけり。さて今年三月三日のことなりしが、山三郎上巳の祝詞をきこえんため、館へ出仕するとて禮服を著かへ、妻八重垣は刀脇差印籠など持來り、身支度とゝのひて且桃の酒をいはひける折しも、兒子小山三飼おきける鶯に餌を與ふるとて、あやまちて籠を放ちければ、鶯は座敷の裏を飛めぐり、行方に迷ひて、かのつりおきたる盥の上に翅を低め、居たりけるに、怪哉鼠狼ほどなる大鼠いづくともなく飛來り、盥のうへにて鶯をとり食けるにぞ、血しほたら〳〵と流れて、山三郎が小袖の紋の三本傘のうへにかゝりぬ。さて鼠はかきけして失にけり。八重垣は此躰を見て大にあやしみ、當日は上巳の祓とて、不祥を破除日なるに、禮服の紋を血しほに穢こと、不祥の甚しきに候はずやといひて、ひたすら氣にかけつるに、小山三もここに來りて、ともに見



を怪みけり、山三郎いはく、妖は徳にかたずといへり、怪を見て怪まざれば、怪事なしともいへり、何をさばかり氣にかくる事やはあるべき。とく〳〵別の衣服を持來れといふにぞ、八重垣は立ゆきて別服を持來りければ、山三郎いそがはしくこれを着かへけるが折しも、僕同助あわたゞしく來りて、縁端に手をつかへ、郎秘藏の馬、何の病氣も見えざりしに、唯今俄に斃候といふ。八重垣はこれを聞、かれといひこれといひ、さすがに心ならざる不祥かなと、從氣にかけて嘆息すれば、山三郎も心中には怪異なる事と思ひながら、態と八重垣を呵し、同助にむかひていはく、彼馬は亡父生前、秘藏したまひし名馬にて、闇打にあひ給ひし時も、我在所を知せ、生駒山の辻堂にたつねきたり、愁傷の躰をなせし、主を思ふ事人にもまさりし馬なれば、老馬にて今は不用のものなれども、父の遺留物と思ひて養おきぬ



さるいはれある馬なれば、菩提所におくりゆき、ねんごろに葬つかはすべしといへば、同助はかしこみ候といひてしりぞきぬ。さて山三郎何か心に思案の躰、八重垣もとかく心のすまぬ顔、たがひに顔を見合せけるが、山三郎、供揃はよきやといひ、突然玄關に立いづれば、供人は槍、挾箱、持草履、列を正して館へいそぎぬ。○それはさておき國貫は、かねて夜打ときはめたれば、國見山にて軍の支度

をとゝのへけるに。已に日も暮けるにぞ、郎等のうちに、しのびの術を得たる者あるをえらみいだし、佐々木の館にしのびいり、放火の號をせよと命じければ、これをうけたまはりて走りゆき、飛鳥の如く築墻を越こしのび入、館の動靜をうかがひけるに、此時は乃是、三月三日の夜なりければ、祝儀の酒宴最中にて、さゝめき立て入興の體なれば、折よしとおもひつゝ、床の下にかくれ入て、時刻のうつるを待居たり。國貫は身上おごそかによろひ、馬をすゝめて山をくだり、半途に打出て號を待に、程なく放火をあげたりければ、國貫これを仡と見て、すはや者ども、すゝめ／＼と呼はりつゝ、あまたの兵を引連、貝鐘太鼓を一度にならして、佐々木の館におしよせ、鯨波を咄とつくり、前門を打破て亂入しければ、館中の男女あわてふためき、こはそもいかなる事ぞやとさけぶ聲、修羅道に異ならず。しかりといへども此館には、あまたの勇士ありければ、箇々得物を取てむかひ合、命をかぎりに戰けり。國貫は兵を二手に分、一手は多門之助が寢所を取かこませ、一手は館中の諸士と戰せ、別に又心きゝたる兵等に下知して、折琴姫を生虜べし、前司太郎をえらみ打にすべしと命じけり。されば一手の兵等は、多門之助の寢所にこみいりて、鯨波を咄とあげけるにぞ、多門之助寢巻の儘に起上り、手槍を取てをどり出、むかうにすゝむ奴ばらを、やにはに四五人つき伏けるが、なほ大勢亂入し、矢ぶすまをつくりて取巻ければ、なか／＼に生捕れじとや思はれけん。もとの寢所へ走りかへりて、腹十文字にかき切て、北枕にぞ伏たりける。次の一間に侍宿せし武士等も、手痛く戰ひけるが、主君生害ありと聞、これまでなりと思ひつゝ、或はさしちがへ、或は胸切てぞ死したりける。此時名古屋山三郎は、宿所にありけるが、此騷動を聞て大に驚き、火急なれば素肌の儘に槍ひつ提て館にかけつけ、群る敵を四角八面につき伏つき伏かけまはり、樣子を聞ば、敵は大領國貫なりといひ、主君ははや生害ありしといへば、しなしたり殘念やと、齒を切、牙を喰ならして、或は怒或は悲み、國貫を打取て、主君の仇を報んと、こゝかしこを尋けるが、いづくにあるやしれざれば、此うへは折琴姫を守護し、一旦おちゆきて良計をなすべしと、奧の殿にゆきて姫をたづねけるに、侍女等泣まどひ居て、今敵兵姫を生虜て後門よりはせさりしといへば、益驚き跡追ゆきて取かへさんと、後門の方へかけ行けるに、兒子小山三貝取海士ならで、息もつきあへずはせ來るにゆきあひ、よき所にて汝におひぬ。汝ははやく寶藏に籠ある百盤の巻物を取いだし、八重垣諸とも迯のくべし。我は敵兵を追かけ、姫を取かへし

ておちゆくべし。とく〳〵といひ捨て走りゆく。其餘の諸士等も、おの〳〵勇をふるつてこゝかしこに戰ひけるが、不意を襲れて皆素肌の戰なれば、心は矢猛にはやるといへども、はか〴〵しく防がたく、義にのみはやる者は、主君を失ひて何かせんと、おもふさまに戰て打死するもあり。思慮のあるものは、しばらく一命をたもちて、他日仇を報ひ、御家を再興すべしと思ひ、一方を斬拔ておちゆくもあり。いひがひなき老人女童は、おのがさま〴〵逃のきぬ。國貫方の兵もあまた打れにけり。小山三は寶藏に走入、百蟹の卷物を取出て懷中し、宿所にかへりて、母八重垣に身仕度させ、連のかんとしたる所に、敵兵あまたこみ入ければ、母を前におとしやり、おのれ一人とゞまりて、多勢を相手に戰ひけるが、素劍法に達し力量すぐれたる者なれば、敵を四方に追散し、逃出んとしたるに、館の餘火出べき方に盛なれば、こはいかにすべきと、あわてまどひけるが、偶心づき長押にかけたる長刀をおつとりて、彼大蟹をきりおとし、築墻の上より外堀の水上に投おとし、見越の松をつたひ、蟹のうへにとびくだり、蟹を船とし長刀を棹として、からうじて川を越、むかうの岸にのぼりけるに、母八重垣は前に逃出、此ほとりをゆきつもどりつして、小山三が身のうへを氣づかひ居たるに折よく出會、ともに走のかんとせしが、姫はいかに、父はいかにと跡に心のひかされて、遠くも走らず、北便宜を闚めと待合せてぞ居たりける。さて山三郎は折琴姫を取かへさんと、あちこちに走りてたづねけれども、空に雨雲しきみちて、墨を塗たるやうなれば、闇さはくらし、いづれの方へ奪去しやしれがたく、ほとんど身體つかれける折しも、敵兵前後よりはせ集り、をめきさけびて斬てかゝりければ、山三郎初は槍にて戰けるが、つひに穗先を打折ければ、地上にからりと投すて、刀をすらりと拔はなし、蜘手輪違十文字、縱横無盡にかけめぐりて、かしこにあらはれこゝにかくれ、火花を散して戰ければ、行袈裟左袈裟に斬るゝもあり、空竹破に斬れて雨段となるもあり、腰車を斬放さるゝもあり、頭を立破にわらるゝもあり。暫時におほく打れて、死人の山をなし、鮮血の川をなせり。殘る敵兵も過半手を負ぬれば、戰事あたはず、秋の木の葉の暴風にふきちらされ、春の花の猛雨に打破るゝがごとく、四方に亂と逃去ぬ。山三郎も數个所深手を負て身上朱に染り、後に撲的倒しが、數百の敵兵鬨歌を唱とあぐる聲、百連の雷の、一度に落る如くに聞えければ、刀を杖に立上り、遂遁足を踏しめて、館の方を佗と見るに、黑烟たちのぼり、猛火天を焦し、げにすさまじき光景なり。さてははや館を敵に

奪はれ、諸士も皆うち死とおぼえたり。我もかく深手を負ぬれば、とても生ながらへがたし。敵に生捕れて生耻をさらさんより、腹かきやぶりて主君のおん跡をしたひ、死出三途の御供すべしと心を決し、差添を拔て腹にぐさとつき立る折しも、電光閃々とひらめき、春雷隱々とたりひゞきて、大雨しきりに降くだり、目ちかき一村の黒雲の裏に、蜘手方をはじめとして、不破道犬、不破伴左衛門、頼豪院、笹野蟹藏、骨蛸三平、土子泥助、犬上雁八等が亡靈、髣髴とあらはれ出、あなこゝちよやといひて、同音に呵々と打笑ひ、かきけすやうに失て、雷雨も空がてやみにけり。思ふにかく佐々木の家をほろぼし、忠臣山三郎を自滅さするは、都て是蜘手方以下の惡靈、前に鳥部野に會合して、相議したる詞のたがはざる所なり。彼鶩を食ひし大鼠も、頼豪院が所爲（前帙第一卷圖果品をてらし見るべし）なる事うたがひなし、かゝる所へ小山三は、母八重垣もろともに、此所に來り、山三郎が切腹の體を見るより、兩人左右にとりつきて、介抱しつゝ、歎悲こといふべうもあらず。山三郎は苦き息をつき、兒子白猿の衣物は、いかにせしぞとたづぬれば、小山三いはく、おふせのごとく寳藏より取出し、こゝにはべりとて、懐中より出して見せければ、山三郎これを見て、まづ其事は安堵なり。唯我最期の



心ざはりといふは、姫のおんゆくへなりといふ折しも、僕同助折琴姫を脊負て、此處にかけつけ、山三郎が備を見て驚歎ば、姫も悲給ふ事かぎりなし。山三郎は姫の恙なきを見て大に喜び、汝いかにして救まゐらせしやとたづぬれば、同助いはく、拙者御主人のおん身きづかはしく、こゝかしこをたづねめぐりしに、敵兵等姫を奪て走去を見つけ候ゆゑ、命を限にはたらきて、取かへし候といへば、山三郎いはく、汝が忠義抜群なり。やよ小山三、姫は御懐胎にて左孕とうけたまはれば、御男子にうたがひなし。我はかく深手を負、とても生ながらふることあたはざれば、生害におよびしなり。汝は跡に殘り、八重垣同助もろともに、姫をいづくにもかくしまゐらせ、安産をさせまして、御誕生の御兒をもり立、時節を待て國賊を打亡し、再おん家をおこすべし。いひのこすことこれのみなり。父も敵兵の寄ざるうちに、とく／＼おちよといひて、腹十文字にかき切て、うつ伏にふしたれば、皆一同に泣さけぶ折しも、又敵兵あまた明松をふりてらし、をめきさけびて馳來り、姫をうばひ小山三母子をからめとらんと閙きければ、おちゆくさきを、語あふべきいとまだになく、同助は姫を脊負て、大勢を相手に戰々おちてゆく。小山三も長刀にて斬散し、母をたすけておちてゆく。かくて双方東西に



わかれ、たがひに其ゆくさきをしらざりけり。爰に又前司太郎は、敵と戰てあまた打取、其身も數ケ所手を負けるが、主君は已に生害あり、折琴姫は生死しれず、山三郎は打死と聞、今は何かせんと思ひて、腹を切んとせしが、何思ひ轉けん自殺をとゞまりて、ゆくへもしれず落行ぬ。去程に國貫は、多門之助に腹きらせ、佐々木の家を亡して、喜ぶといへども、折琴姫、前司太郎、小山三母子のゆくへしれざれば、四方に手分して、其跡を追しめ、これより後佐々木の領地を奪取て我物とし、勢和南國に威をふるひけるが、此時は是應仁大亂の後にて、とかく世間無爲に屬せず、小を呑大を拒、衆を亡しおのれたゝんことを思ひ、互に隣境をあらそひ、國貫が如く法令を亂し、非道を行ふ者おほかりけるが、誰一人これを糺明して、罪するものなかりしとぞ。

○さて其時小山三母子は、亂軍の裏にて同助を見失ひ、姫のおん身を氣づかひ、其跡をたづねばやと思ひけれども、背後をかへりみれば、敵兵あまた明松をふり照してみち〳〵たれば、あとにもどる事もなりがたく、心ならずも母子兩人、一旦河内へ立のかんと、金剛山の山越にさしかゝりぬ。同助は姫を脊負て、伊賀の方へおちゆきけり。

本朝醉菩提後帙上冊終

稲妻表紙後編本朝酔菩提後帙中冊

因揭陀尊者　百蟹陀羅尼品第十二

當時小山三母子は、河内國へ落ゆかんと、金剛山の山越にさしかゝり、小山三山住の人家をたづねて明松をもとめ、母の手をとり霞をおして、さしも嶮岨の山坂を、心ぼそくもたどりゆく。世が世の時の旅ならば、あまたの從者を伴具して、馬駕籠にも乘べきに、あわてゝ出し落人なれば、手ぢかくにありし一袋の金を懐にせしのみにて、脚巾草鞋の用意だになく、唯當りきゝの履子やれ、きのふにけふを比ぶれば、夢かと思ふばかりにて、かはる笨情は常を、のくふすよりもはやければ、母は子、看すは母の、顔を見おひて[illegible]きへゝ、[illegible]手にわかるゝ山路の、草葉の露を分迷ひ、泣々ゆきて金剛山と篠峰との間なる、水越峠といふ所まで來つるに、山越の夜嵐に明松をふきけされ、闇夜に進退を失ひて、いかにともせん方なかりける折しも、遙向の山間に、明松の光り閃々て、漸々にこなたへちかづくを見れば、十四五人の荒男、或は弓箭或槍を持たりければ、敵方の追人ども、さきにまはりて道をさへぎるにやとうたがひ、母子ともに木蔭に身をよせてよく／＼見れば、すべて狩人の體なれば、やう／＼心を安じ立出て、火をかしたまはれといふに、狩人どもは兩人を見ていぶかしみ、おん身等深夜に此山越し給ふは、大膽なる人たちかな。近頃此山に狒々といふ惡獸出て、人をとり食ことをしり給はぬかといふ。小山三是を聞、我々は山のあなたの者なるが、急用ありて夜通しに、河内へ越ゆくなり。此山にさる惡獸のいづる事は、少しも知ざるなりといふ。狩人等いはく、さこそあるべけれ。かの獸にあはず、恙なくこれまで來り給ふは仕合せなる事なり。かの惡獸は狀人の如く、總身に黑毛あり。人面長臂にして髮をかぶり、走る事はなはだ迅し。人を攫ば先笑て後にこれを食。ゆゑに笑獸といひ、又梟羊、野人、人熊などもいふよし、いづくよりかうつり來けん、近頃此山邊に住、夜にいたれば、おちこちの山々をありきて人を引裂食。ゆゑに山かせぎする者もこれをおそれて夜は山にのぼらず、旅人も夜は往來せず。時としては人里にも出て人をそこなふゆゑ、當地の縣司より、我等に是を仕とめよときびしく命あるにより、かく毎夜此邊の山々をありきて仕とめんとすれども、たま／＼出あひても人の如くにたちありきて勢猛

千鈞を負べき力あるうへに、身輕して飛鳥のごとくにかけめぐり、岩を碎て飛礫を打などして、なか／＼近づくことあたはざれば、今夜はかく人を增、若出あはば、遠箭に射殺さんと思ひ候なりと、みな／＼岩に尻かけてやすらひつゝ物語ければ、小山三母子はこれを聞て大に驚き、さる惡獸に出あはざるこそ幸なれとて、火をかりて明松にうつし、麓に下る道をくはしく聞て別去、からうじて山を下り、河内領茶屋村といふ所につきける時、夜はほの／＼と明にけり。小山三は勇氣烈き若者なれば、すこしもなやまざれど、八重垣は弱々しき女の身といひ、殊更十分の愁あるうへに、險岨の山を越ぬれば、身體大に疲て今は一歩もすゝまざれば、此村の旅舍に就、飢にもたへざりければ先食をもとめ、人目をしのぶ身なれば、おくまりたる小座敷をかりて、少し間眠給へとて母を臥しめけるが、八重垣はよろづの愁に目もあはず、主君の爲夫のためと、口に念佛をとなふるのみなり。小山三も唯打しをれてぞ居たりける。偖此日より春雨降いだして、時ならぬ連日の大雨となりければ、小山三母子は立出がたく、此旅舍に逗留して居たるうちに、大和川千早川を始、此邊の川々の水まさりて往來なりがたければ、前後に道を失ひたる旅人等、皆此村の旅舍にとゞまりて、いづれの家も所せきまで籠あひぬ小山三等が逗留せし家にも、旅人あまた宿り、皆長き日の徒然を佗て、碁、象棊、雙陸にかゝるもあり、曲舞小歌をうたふもあり、今井鯖の鮓を肴に、僅に價の高くなりし酒飲て、居角力腕押に興ずるもあり、越中立山の地獄咄、熊野まゐりの幽靈の、さかしまにありく物語などして、耳かしましきいふべうもあらず。小山三母子は敵方の追人をおそれて、人目を忍ぶ身なれば、なほ片隅の小闇き所に、破れ屛風を立まはして身をひそめ、背をもなさずして居たりけり。かくて五日めに雨やみ、川々の水もやうやく落しと聞えければ、退屈に倦疲たる旅人等、大に嬉しみ、翌日はとく出立すべしと、此夜は皆々、初夜より打臥て物しづかなれば、小山三母子も睡につきけるに、良ありてあまたの人の叫聲聞えければ、八重垣も小山三も睡を醒し、何事にやと思ふ所に、猪々出たりかれ見よ、追來はといひて、戰叫で迸來る。かの惡獸家毎に飛入、人を蹴散し踏倒しなどしければ、あなおそろしやといひて、旅荷物一つに二三人とりつきて、我がよ人のよと引過つゝ逃もあり、俱倒で兒をさかしまに背負て走るもあり、旅刀を鞘ばしらせて、おのれと手足に疵つくるもあり、湧せる茶の湯を踏轉して、自身上を燒もあり。此村に宿たる旅人、爰に住男女等も、皆一同に我先とあらそひて、蜘の子を散す

が如くに逃出ければ、足弱の老人女童などは、踏倒れて氣絶し或は泣さけぶを、かへりみる人だになく、金剛山の方へ逃ゆく。此時小山三も母八重垣が手をとりて逃出けるが、いやがうへに人かさなりて、あちおしこちおしして揉立ければ、小山三と母と引合たる手を放たれ、八重垣はつひに小山三を見失ひ、心ならずも獨走りぬ。原此金剛山の山口に、東西二條の道あり。逃去者等三分の二は、西の道に馳上りけるが、狒々は人の如くに立、大手をひろげて西の道に追上りぬ。此狒々は是實の狒々にあらず、是乃提婆仁三郎なり。前に泉州境を立退し後、此邊にかくれ住、山賊となりて、あまたの手下を養て、專往來の旅人をおそひけるが、近比此邊の山に狒々住て、折々人里にもいづるといふ事を聞、熊の皮をつゞり合せて身にまとひ、おそろしき面をかけて赤熊をかぶり、狒々の形に打扮て、あまたの人を劫、山中におびきいだして、賊をなさん謀計なり。前に浪花を逃去し男達の惡漢、石佛の苔九郎、卒塔婆の塚助、枕飯の犬平太、手向の水右衛門、骨桶の白平等が輩も、今は提婆が手下の賊となり、此夜提婆が下知をうけ、此山中の足場よき所に待うけ、逃來る旅人を害して衣服路銀を奪取、其屍はすべて谷川に蹴おとしぬ。されば此道に逃上りし者は皆害せられけり。偖提婆は狒々の打扮の儘にて此所に來り、手下の者等にむかひていはく、もはや此に來る者もあらじ。汝等は先此奪たる物をかくれ家に運、再かの村にゆき、逃出たる者の空家に入て財物をうばふべし。我は今しばらく此におりて、若おくれて來る者あらば剝取べしといふにぞ、手下の者等は奪たる物をたづさへて、山越にかくれ家に歸りぬ。提婆は岩に尻かけて、休ひて居たりける。爰に又此河内國讃良郡中野村といふ所に、酒顛亦六といふ貧者の父に、獵師の亦介といふ者あり。年は六十歳にあまれる老人なりけり。彼一つの感ずる事ありて一念發起し、殺生の業をやめ、回國に出、諸國靈場を巡拜し、三年ばかり旅にありけるが、一旦古郷に歸らめと此夜此村に宿し、これも狒々をおそれ、笈の皮籠を小脇に抱て逃出、老人の足弱なれば、人におくれながら、狒々は後より追來るとのみこゝろえて、此西の道に馳のぼりけるが、思ひもかけずゆくさきに、提婆仁三郎狒々の打扮にて、すくと立居たりければ、亦助一目これを見るより膽をけし、あなかなしやたすけてよとさけびつゝ、地上に合破と倒たり。提婆は立寄て亦助をしめ殺し、衣服を剝んと、上弦の月かげによく／＼見れば、垢づきたる古衣服なれば、やくなき骨折しとつぶやきつゝ、笈の皮籠を取て見れば、身[illegible]方[illegible]本[illegible]、[illegible]國[illegible]住人獵師亦助と

言つけたり。これも据ければ、此裏にも物はあるまじと思ひて投捨ける折しも、捕人大勢明松をふり照して馳来り、提婆を眞の獅々と思ひ、箭尻をそろへて取囲けるにぞ、さしもの提婆も前へすゝまに敵しがたく、後の茂林の裏へ逃籠ければ、狩人等は跡をしたうて追ゆきけり。かゝりければ、西の道に逃たる者はおほく害せられて、まぬかれたる者はわづかなり。東の道に逃たる者は一人も恙なし。八重垣も小山三を見失ひて、獨東の道に逃のぼりけるが、足たゆみ身疲て古社の前に倒伏、息もたゆげにて、唯小山三が事を氣づかひて居たる折しも、むかうの山間に、明松の光りひらめきて、捕人とおぼしき武士大勢出来り、八重垣を見つけて立とゞまり、明松をさしつけて、其容體を見ていひけるは、いかに女汝 三本傘の紋つけたる衣服を着たるは、名古屋山三郎が妻にうたがひなし。我儕は雉川大領の郎等なり。汝等母子[illegible]屋村に宿居よし、注進の者ありて、汝等を捕へんために行道なり、此所にて出會しは、汝が運の盡なりとて、繩を取出して高手小手にくゝりあげ、さるにても、汝夜中此所に来りしは、我々がむかふ事を知て迯ゆかんためか。小山三めはいづくにをるぞ。ともにからめて牽てゆかん。ありかをいへとぞ責たりける。八重垣はしばしいらへもせざりしが、かくいましめられたる



うへは、いつはるともゆるすまじ。たとへ我身はいかになり果るとも、せめて小山三が身をのがして、夫の遺言を遂しむべしと心を決、推量の如く妾は山三郎が妻なり。今夜森屋村に捕々出て騒動し、此所迄逃來しが、兒子小山三は妾よりさきに出たれば、ゆくへを知ずといふにぞ、捕人の者どもこれを聞、小山三汝を捨おきて、前に走るべきいはれなし。實事をいへ、いでいへといひて連打に打ければ、憐べし八重垣は氣を失ひて倒たり。かかる所に松林の裏に、大に笑聲きこゆると等しく、飛礫をばら／＼と打出し、樹木簌々となりどよみ、暴風颯と吹て、實の捕々あらはれいで、捕人等を目がけ、猛勢をなして飛かゝりたるにぞ、捕人の者等は膽をけし、八重垣を捨おきて、もと來し方へ迯ゆきぬ。捕々はなほ其跡を追ゆきけり。八重垣はしば／＼驚き、生たることゝちもせざりしが、やう／＼人ごこちつきて起あがり、自己くゝり縄を松の木に磨つけ、からうじて摩断つゝ、とゞろく胸をなでおろして、此ひまに後の方へ迯帰らばやと思ひける所に、背後の古社の扉をさとひらきて、浪人とおぼしき丁角の若者、両刀を帯てしづ／＼と歩出、月にきらめく氷の刀を、すらり[illegible]抜て背後より、八重垣が肩尖を四五寸ばかり斬こめば、おなやとさけ[illegible]て[illegible]けさまに倒れたり。か[illegible]者は、古[illegible]



さきに腰をかけて、八重垣が苦む體を尻目にかけ、笑をふくみし面たましひ、たゞ者とは見えざりけり。八重垣はやうやうと起上りけるが、身上は鮮血の朱に染り、元結きれて亂れ髮、風の柳に異ならず。迯んとすれど足たゝねば、おなじ所を這まはり、苦き息を吻とつきて、そちはさだめて山賊ならめ。物ほしく思はゞ、我身におほふ著物は殘らずそちにとらすべし。命ばかりはたすけてよ。男兒はいづくへゆきけるぞ。我を尋て迷居か、せめて一目あひたやと、麓の方にのび上りては倒伏、迚も助ぬ命なら、男兒に一目あふ間、しばしの時をのばしてよ。慈悲ぞなさけぞ、これのうと、掌を合てはこなたに向ひ、七轉八倒苦痛の體、こゑをかぎりに泣さけぶ。谷の水音松の風、いとゞ哀をそへにけり。曲者は血刀提て立むかひ、八重垣を足下にふまへて踏にじり、目をむきいだして聲あらく、あな耳かしましきよまひごと、山賊などとは奇怪なり。とても殺奴なれば、冥途の土産に語聞さん。我は是不破伴左衞門が弟、番作といふ者なり。社の裏にて今聞ば、汝は名古屋山三郎が妻なるよし、兄伴左衞門、山三郎が爲に草履にて打擲され、其遺恨もはらさずして、結句彼が爲に打れたれば、遺恨に遺恨をかさねたる山三郎、一太刀恨で兄が修羅の妄執をはらさせんと思ひし所、前の日雉川大領が爲に、打死せしと聞て本意なく思ひ、せめて汝等母子を手にかけて、いさゝか恨をはらさんと、汝等がゆくへをたづね、此山中にてゆき暮たれば、かしこの社に宿せし所、思ひかけず汝にあひしは、これ天の與へなり。さだめて小山三めも、此邊に居ならん。彼奴めもたづね出して我手にかけ、あとから地獄に追やらん。汝は前に此世を去、三途の川に待合て、刀山火途の死出の旅、親子たがひに手をひきて、ゆきたき方へゆけかしと、惡口雜言詈りつゝ、とゞめをさゝんとしたる折しも、再又暴風颯と地をすりて、かの惡獸捕人の武士を左りに提て、腕を引抜食つゝ、鮮血流るゝ口をひらき、谺にひゞく大聲に、呵々と笑てこなたに歸來るにぞ、番作は膽をけし、とゞめもさゝず周章まどひて迯去ぬ。かの獸は傍の松林の裏に入けり。偖小山三は、母のゆくへいかゞと案わづらひつゝ、彼方此方と尋迷て、つひに此所に來り、地上に流るゝ血を見つけて、いぶかりつゝあたりを見れば、母の八重垣倒居たれば、大に驚き抱起すに、深手を負し體なれば、こは／＼いかにと仰天し、耳のほとりに口をよせ、小山三に候ぞ、母人さまとよびければ、八重垣は息吹かへして目をひらき、何小山三なるか死目に一目あひたいと思ひし念がとゞきしぞや。我汝を見失ひ、心ならずも此道に迯來しに、國貫が追手の者、

我を捕へてくゝりあげ、引立行んとしたる折しも、かの悪獣いで来りて、追手の者を追ゆきしほど、其間に逃去んとしたる所に、かしこの古樹の蔭より、不破伴左衛門が弟、番作といふ者あらはれ出、我にかく深手を負せて逃去しなり。追手といひ狒々と云、汝此所に長居しては災あり。我はとてもたすからぬ命なれば、とく／＼こゝを立去て、父の遺言をよくまもるべしといふを此世の名殘にて、折しも聞ゆる山寺の、鐘に無常を告渡り、黄泉にさそふ夜嵐に、末期の水もとりあへず、盃にもろき草の露、卯の時鳥血を吐て、なく力さへ若鳥の、母にとりつく甲斐、枝にかゝる花実に入鳥も哀を催へて、親子一世の別霜、きえてはかなくなりにけり。小山三はむなしき骸にとりつきて、父といひ母といひ、わづかの間に打續て、かゝる非命に死し給ふは、いかなる宿世の悪報ぞし、悲嘆の涙にむせかへり、ともにきえなんこゝちしけるが、嗟と思ひけるは、番作め遠くはゆかじ追つきて母の仇を報はめと思ひつゝ、いそがはしく傍邊の地を穿、かりに死骸を葬て天地を拜し、敵の行方しめし給へと念じ終て、刀を抜地上に立て、倒し方は河内領、扨は彼方と刀を鞘にをさめつゝ、踏はせをりてゆかんとしたる折しもあれ、松林の奥より飛礫をばら／＼と打出しけるが、其飛礫小山三が額にあたりて目くるめき、忽氣絶して尻居に撲地倒たり。時に狒々あらはれ出、小山三を一摑にせん勢にて飛かゝりたるが、不思議なるかな、小山三が懐中より光明發し、狒々は後にたぢ／＼となりて、すゝみかねてぞ居たりける。小山三は正氣になりて起上るに、狒々又むかひ来りければ、刀をすらりと抜放し、力をきはめて斬つけたり。狒々はしたゝかにきられて、鼻をならし牙を嚙、大に怒なほ飛かゝりけるが、小山三が懐中よります／＼光を發し、狒々はつひに身體すくみて、のけさまに盤石を倒すがごとく、地ひゞきして倒ければ、小山三は狒々に乗かゝりて、胸さきをいく刀となく刺通しけるに、狒々はすさまじき聲をなし、大にさけびて死しをはんぬ。小山三が懐より光を發たるは、百鬼の巻物を懐中せしゆゑなるべし。小山三は不思議に此悪獣を殺し、諸人の災をのぞきし事、今にはじめぬ名畫の奇特と感嘆し、母を埋みし所を拜して念佛をとなへ、河内領の方にむかひて走りゆきぬ

○そも／＼此百鬼の巻物といふは、巨勢金岡、唐代の名畫、韓滉といふもの玄宗皇帝の勅によりて畫たる、百鬼の圖にならひてかきたる一軸なり。此繪に奇特ありし事、前編[illegible]にくはしく記せり。

○彼不破番作といふは、いまだ丫角の若年なり、不破道犬が臣隷の見しが、

原濱名入道に仕へしが、心ざまあしきゆゑに、いとまを給はりて浪人し、一所不住に漂泊せしとぞ。

○森屋村の者等、いつはりの辨々に欺たる事を、當地の縣司に告聞えければ、其賊のありかをきびしくたづね、提婆が手下石佛の晉九郎以下五人の者をば、殘ず捕へて誅戮しけるが、提婆は迯て行方知ずなりけるとぞ。

弗多羅尊者　瓜前隨喜功德品第十二

夫は扨おき爰に又、白炭兵衛忠知の妻は、前に女子を産しは、なく〳〵身まかり、其娘生長して今年十七歳に到、名を夕露といひけるが、容貌美く、萬事にかしこくして、心ばえもやさしかりければ、一人の孫とて祖母の寵愛淺からず、掌の上の珠の如くに思ひけるに、偶風のこゝちとて打臥、漸々におもき病となりて、つひにはかなくなりにけり。常なき世のさがなれば、蜉蝣の夕をまたぬならひはのがるべきにあらねど、わづかに十七歳を一期として、花の姿を吹ちらす、無常の風ぞあはれなる。祖母は天を仰ぎ地を歎きて哭悲み、ともにもと物狂はしき體なるに、忠知も愛子をうしなひ、歎はおなじ心なれど、さすが母の老たるみにさはらん事をいとひ、さま〴〵にいひなぐさめて、七日々々の佛事を營み、菩提の事懇に弔けるが、とかくして日數もやゝ過にけり。此頃京都には義政公、一子義尙君に代をゆづりて、東山に閑居し給ひ、古器古書を弄び、茶器を聚て樂み給ふ。これより東山殿と稱しけり。銀閣を造て、北山の金閣に准へ給ふ。しかるに忠知が茶道に達したる事を聞およひ給ひ、召て其器量を見まくおぼし給ひて、内使を給はりければ、忠知は風雅をたしむの面目と、世にありがたく思ひ、召に應じて都に上りぬ。祖母はとにかく、孫娘の世にありし時の事どもを思ひいだして、露忘れがたく、彼がめでたりし小袖手道具のたぐひ、今は遺物となりしを身に近くおきならべて、其面影と見るも、心を慰ためにはならで、かへりて涙のたねとなる。折々墓參りして、香花を手向るをせめての心放にするのみなり。扨一日例の如く侍女若黨奴僕など召具して、塚のもとに詣て見れば、小草はやくもしげりあひ、かたぶく日陰に寒蟬の鳴音もすゞろにものかなしく、しばし念佛をとなへて時をうつしけるが、暮六ツのかね耳ちかくひびくに驚て、家に歸らばやと思ひける折しも、三昧の森の裏より、髮搦を着たる若き女、巡禮歌をうたひつゝ、出來り、お墓詣の御功德に、おん手の内を施し給はれかし、といひつゝ破たる扇をさしいだしたるさま、美目容いやしからざる生れなり。老母は立とゞまりて、夕月夜の光

に此女を見るに、うせぬる孫娘の夕霧によく似たれば、世にはかく似たる者もありけるよと、あからめもせず打まもり、見れば見る程其儘の生うつしにて、孫娘の二度生れいでたるにかとうたがふばかりなれば、ひたすら憐の心おこりていふやう、見ればいやしからざる容儀なるが、年若き女の身一つにて、巡礼するは何故ぞと問ければ、女いはく、情深き御たづねに、何をかつゝみまうすべき。妾はみちのく信夫の里の浪人の娘なるが、父身まかりて後、盲目たる母もろとも西国巡礼に出はべるに、母も当地にて身まかり、我身一つ取残れて、旅路に迷ひ候へども、古郷に帰る路銭もなく、せんかたなさに、夜は此寺に野宿して、昼は往来の人の袖にすがり、一銭二銭のなさけをうけて、露命をつなぐかなしき身にて候といひさして、泪をも流ければ、老母は猶不便に思ひ、名は何といふぞ、年はいくつと問けるに、名は文字摺と申し、年は十七になり候と答れば、年も又うせぬる孫と同年なり。よく似たる事かなと思ひつゝ、若我心の迷の僻目かと侍女等にむかひ、此女夕霧によく似たりと思ふが、汝等が目にはいかに見ゆるぞといへば、侍女等口を等して、さきほどより我々もさこそ存じ候なれ。誠に生うつしにて候といへば、母は我僻目にもあらずとおもひて女にむかひ、我は当地の縣を司る者の母なり。今の物語にてはさぞ難儀なるべければ、我宿所に連ゆきて、しばしの程養ひおき、古郷へおくりつかはすべしといへば、女は世にもうれしげにて、双掌を合て拝つつ、ありがた涙にむせびけり。かくて老母はかの女を連かへり、侍女等におほせて、浴をさせ、髪とりあげさせ、新衣を著かへなどして見るに、美目容はさらなり、ものごし立ふるまひことざまにいたるまで、亡人に露ばかりもたがはざれば、再孫娘を見るこゝちして睦ちかく召仕に、よろづにかしこくまめやかにて、よく老母の心を察し、痒所に手のとどくがごとくなれば、ますますいつくしみ、忠知都より帰らば相議して、かれが古郷に人をつかはし、あらためて侍女に召かゝゆべしと思ひ、忠知のかへるを待佗ぬ。かくて又一月ばかり過けるに、老母こゝちあしきとてかりそめに臥、漸々に病まさりて悩ければ、老臣穂波右衛門を始として、家内の者大に驚、良医をえらみむかへて療治をくはへけれども、露ほども其験見えざれば、老年の大病こゝろもとなく思ひ、穂波伝助を飛脚として都にのぼせ、此事を忠知に告たりけり。かの文字摺は、昼夜病床をはなれず懇に看病し、外の侍女らは、深夜にいたれば疲て睡がちなれども、文字摺は少しも寐ず介抱に心を尽しぬ。偖忠知は東山殿のおぼしめしにかなひ、都にしばらく逗留し

てゐたりけるに、佐助早馬にてかけつけ、老母大病のよしを告たりければ、忠知はかねて孝心深き人なれば、大に驚き、義政公に其ことをきこえあげていとまをたまはり、早籠にて宿所に歸り、旅装束の儘、母の病床に近づき、容體をつらつら見るに、いかさまよからず見えければ、愁る事限なく、衣服を着かへて別間に出、垣右衛門を召て容體の事を談じ居たるに、取次の者まかりいで、母君の御病氣の御見舞として、蘆屋里の何某方よりさし上たる、折櫃の蓬餠、煎餠、淡漉の雪燒の箱のもとよりさし上たる、魚一折、海苔一臺、水無瀨の下司よりさし上たる、養生酒一陶、白砂糖一壺、御覽あるべしと披露して、目通りにならぶれば、忠知いち〳〵にこれを見てかたはらに運おかしめ、垣右衛門にむかひ、母のかたはらにありて看病する女は何者ぞとたづぬれば、垣右衛門、かやう〳〵に候と、其子細を物語る。忠知これを聞、我彼女に逢べし、爰に連來れといふにぞ、垣右衛門、かしこまり候とて、役所にゆき、文字摺をつれて出來りけるに、文字摺はうや〳〵しく手をつかへてぞ居たりける。忠知かれをつら〳〵見て、いかさま亡ぬる娘によく似たりといひて、いぶかしみつゝ見居たりける折しも、佐助まかりいで、母公御病氣のおん見舞とて、一休和尚御出に候といへば、文字摺はこれを聞とひとし



く色をうしなひ、ものをもいはず次の間へ逃行んとするを、忠知手ばやく文字摺が襟首つかみて引もどす。かゝる所へ一休和尚野曝悟助を具して入來り給ひ、文字摺を睨と御覽じて、汝畜生の身にて、何とて人に変るぞと喝し給へば、文字摺は髮ふり亂してすくとたち、あなくちをしや殘念や。此家の老母を誑惑かし、夜な〳〵邪氣をはきかけて病人となし、つひには一命をとりて、忠知に仇を報んとはかりしに、事なかばにして見あらはされたる無念さよしよばはり、面色變て血がみをなし、忽明障子を蹴破て、虚空をさして飛上る。一休忠知にむかひ、はやく彼を射候へとのたまへば、忠知はかねて射術の達人なれば、こゝろえ候といひもあへず、書院におきつる弓をとり、箭をつがへて縁さきにをどりいで、虚空にむかひて漂と放つ、其矢あやまたず變化のもの丶胸さかを、箆深にゝさと射通ければ、やがて地上に撲地と落たり。一休野曝に下知し給へば、悟助庭に飛下てこれを押へたるに、これ大なる古狐にて、矢につらぬかれて死したりけり。垣右衛門任助親子を始、家内の男女これを見て、唯あきれたるばかりなり。時に忠知いひけるは、某過し比泉州堺皇子がうへの化地藏を斬たることあり。察する所此古狐はかの地藏につきて、往來の人を惱せたるに疑なし 某に斬れたる仇を報んとて、



娘に似たる女と化し、母を誑惑かして病人となしたるならん。身うちにかならず疵あるべしといふにぞ、[illegible]狐の身上をあらため見るに、果して首のきはに疵の痕たるあとありけり。一休打うなづき、さこそあるべけれとのたまひつゝ、彼方にすゑならべたる進物のしなぐ\を見やり給ひ、其物をこれへとことりよせていちく\に見給ひ、これ一ツとして正真の物にあらず。且此折の裏をひらき見よ。打見にはときならぬ蓬餅と見ゆれども、これをば庭の泉水に捨て見るべしとおほせければ、忙助立てかの折を取泉水に打あけしに、件の草餅は肉汁となり、水中に沈入ぬ。これはと皆々膽をつぶせば、一休のたまはく、いやそれのみにあらず此しなぐ\いづれも皆さのごとくなるべし。此煎餅の折をひらきて見よとおほせけるに、ひらけば秋の風に散柳の葉の黄色なるに、桐の朽葉をまじへたり。灘浦の海苔一包をひらけば、これもおなじく落葉の塵を吹とぢし土蜘の巣なりけり。魚と見えしは朽木の根にて、一陶の酒は種とる糸瓜に、いつぞの雨の降たまりしくさり殘しものなりけり。一壺の白砂糖と見えしは、芥川の流の細石真白なる砂なり。人々怪み驚けば、一休のたまはく、是みな妖狐のしわざなり。此狐は泉州横尾山の奥、七層峠の岩窟に年ひさしく住、おのれが年數を經にしたがひ妖魔の通力を得て、これまであまたの人を害せり。忠知どのゝ弓勢にあらずば、いかでか射おとすことあたふべき。諸人の災をのぞきしこと大なる功徳なり。老母の病もやがて快氣あるべしとのたまへば、忠知いはく、今更申すも愚なることながら、人情の變化を察し給ふのみならず、妖魔の氣までを、かく先だちて知せ給ふありがたさよ。禪師の御陰によらずんば、妖狐に母の一命をとらるべし。危かりしことなりといへば、垣右衛門忙助親子は、さすがく\一休の神通を感じけり。かくて老母の病は日々におこたり、つひに全快いたりければ、忠知を始家内一同に喜ぶことかぎりなし。偖程なく百箇日の時になり、亡し夕露が亡霊を[illegible]ければと、老母のねがひにて、一休を請待しけるに、一休來りたまひ、靈前にそなへたる、牛馬の形に造たる瓜茄子をとりて、手向の水鉢に打入給ひ、机にすゑて默し給へば、いかなる經をか讀給ふと、みなく\音をやめ耳をそばたて、聞居たるに、一休拂子を打ふりてのたまはく、

山城の瓜や茄子をそのまゝに、
手向にするや加茂川の水

とあそばし、これにて回向はおはりて、他の詞はなく、早々として歸給ひぬ。忠知の本意は、山城の鴨河なれば、かくはあそばしけるにやなん。此歌の意を知る者は忠知一人なれば、亡し娘佛果を得んこ

しうたがひなしと思ひつゝ、ひたすら喜びけるとかや。

伐那婆斯國獵者　生死流轉藥草喩品第十四

これは前の獅々の所の物語よりは三年前い事なりけり、河内の國二比郡中野村といふ所に、酒賣亦六といふ者あり。世にすぐれて美男にて、年はいまだ若かりけり。父は獵師にて亦助といひ、老年にいたるまで殺生を業としけるが、一年雌雄ならび居たる雁を射て、其雄鳥の頭を射きりたるに、取て見れば頭なし。次の年おなじ所にて、又雁の雄鳥を射てこれを見るに、翅の下に鳥の頭を抱て地上に落ぬ。おそらくは是去年失ひし雁の頭を、其妻鳥の放しかねてかくありつらん。それさへ射殺せしは無慙なることなりと、しきりに恩愛の情を感じて、忽一念發起し、年來殺生せし罪を滅せんため、諸國の靈場を拝めぐらばやとて旅立けり。兒子亦六は、いまだ定る妻もなく、獨留守主してくらしけるが、かねて小酒を商、をり〳〵はみづから酒桶を荷て、近き村々を賣ありきければ、里人等酒賣亦六とぞよびなしける。比しも冬の半なりしが、一日例の如く荷をかたげて、交野の邊まで酒賣にゆきしに、途中にて鹿笛の七といふ狩人にゆきあひ、亦六云けるはよき所にてあひぬ、和主にかしたる酒の價五貫の錢を度々催促すれど今にすまさず。とても償心なくば、縣司に申し告てとるべきなり。いざ我とともに司のもとへゆくべしと、きびしくいへば狩人いはく、それは極て理なれど、此ほどは雪しば〳〵降て、野山のはたらきも自由ならず。よき獲物もなきゆゑに、心の外におそなはりぬ。今四五日過れば、此方に錢を得る心あてもあれば、今すこし待くれられよといへば、亦六は頭をふり、いな〳〵其いつはりも聞あきぬ。もはや片時も待がたし。司のもとへいざ〳〵といひつゝ、手をとらへて引立ゆかんとしたりければ、狩人は迷惑し、しからば斯様にすべきなり。これは我生業の道具にて、しばしもなくてかなはざる物なれども、當分の質として、此鐵砲に小道具をそへてあづけおくべし。四五日のうちには、借錢を償うけもどすべければ、これにて了簡たのむなりといへば、亦六は夫はおぼつかなき約束ぞといひて、なほうけとらざれば、狩人いはく、四五日のうちによき錢を得る心あてといふは、別の事にもあらず。當月廿七日は春日の御神事にて、贄の雉千二百五十六羽を年々此近國よりすゝむる事なるが、今年は當國其役にあたり、國のかみより仰あるは、何者にもあれ雉一羽をさし上なば、鳥目五百文づつたまはるべしとの事なり。彼禁野には雉おほくすむといへども、おん身も知ごとく、

殺生禁斷の所にて、常はこれをとることあたはず。春日の調進にばかりはとることをゆるしたまふ。ゆゑに我々が仲間の者いひあはせて、近日かの野の雉を追いだし、一網に打かけて、あまたの錢をたまはるべしと思へば、五貫は更なり十貫にてもつくのひかねず。いかにこれをもおぼつかなく思ひ候かといへば、亦六うなづき、さやうに聞ばたしかなり。しからばそれまでの質物に、此鐵炮をあづかりおくべしとて立別、家路をさして歸道、かの禁野を過ゆきぬ。そもそも此禁野といふは、往古惟喬親王此野に狩し給ひて、金色三足の雉を獲給ふ。しかりしよりのち、尋常の殺生を停給ふゆゑに禁野といふとかや。亦六は此野の半を過けるに、遙むかうの枯草の裏に、雉四五羽あつまり居たれば、偶思ひけるは、いま鹿笛が語るを聞ば、春日に調進の雉子をさし上る者には、一羽に五百文づつ給はるべしと云事なるよし、もとより佛門へすゝむるにも、此野の殺生をゆるし給ふ。これ天の與へたり。これをつゞけ打にして、いく錢の恩賞にあづかるべしとうなづきつゝ、彼獵師の子にて、鐵炮の心得もありければ、かのあづかりし鐵炮に、二ツ玉をこめ、火打道具を取出し、火を打出して火繩に點じ、かの雉をねらひすまして、火蓋をきれば忽に、流丸飛て撲的ひびき、ぱつとたつ烟のうちに、あなやとさけぶ聲高く聞えければ、こはいぶかしと思ひつゝ、走りゆきて見てけるに、雉にはあらで人なれば、こはこはいかにと仰天し、抱き上れどかひもなく、脊骨を打れて息たえたり。亦六は益驚き、此人の體をつらつら見るに、黄色に青赤をまじへたる小裂をあつめてつゞりたる衣服を着て、うつぶしになりて居たれば、遠目には四五羽の雉と見えしなり。これ醫師の體にて、片目盲たる老人、いと貧しげなる姿なり。採藥に來つるとおぼえて、袂に種々の藥草を摘入たり。亦六思ふやう、これはからざる事とはいひながら、親人殺生をやめて、回國に出られし意にたがひ、わづかの欲に雉を獲とて、大なるあやまちを仕いだしたる條、我もとめてせしも同然なりと、千度百度後悔し、若此人の妻子ありてこれを聞ば、さぞ嘆悲て仇を報と思ふらめ。我父もし人に殺れ給はゞ、たとへあやまちなりともゆるすべからず。我も人も其心はおなじかるべし。所詮此死骸を里に持ゆき、其妻子をたづね、首をのべて打るべし。我命も今日までの約束ならめと覺悟を極、已に死骸をかきあげしが、まてしばしと思案して、又思ひけるは、さりながら親人回國に出られたる跡にて、我今人に打るゝときは、歸給ふ家を失ひ、路頭に迷はせ申すべし。しばしの命をながらへて歸國を待、今一度御目に懸、餘所ながら

親子一世の別れをなし、其後名告出て敵に打るべしと心を決、此人の姓名住所の知る書物にてもあるやと、懐を探り見れども、一物もなければせんかたなく、死骸にむかひていひけるは、靈魂いまだ去おはさゝたまへ。御身不運にして我に殺され給ふ、さぞな無念におぼすらめ。我おん身の妻子をたづね、名告て仇を報るべし。さりながら我父の歸國するまでまちしたまへ。此事天地に誓ていつはるべからずと、活人にむかふが如くにいひ終、成等正覺頓證菩提、南無阿彌陀佛〳〵と回向して、傍の土を穿、死骸を深く埋て、心おぼえのしるしを立、荷桶をかたげて歸けるが、此鐵炮なくばかゝるあやまちも仕出すまじ。これぞ我身の仇なりと思ひて、かの狩人にかへしつかはし、これより毎日家を出て近郷をありき、餘所ながら其住家をたづねけれども、ふつにしれざれは、いづくいかなる所の人なるぞ遠き郷の人ともおぼえずと思ひつゝ、なほ心をつくしてたづねわびぬ。かくて廿日ばかりも過けるに、一日例のごとく酒を賣ながら、志貴郡の村々をありきてたづねけれどもしれずして、此日もむなしく歸ける途中にて、霙まじりの雨降いだしければ、予婦此堤の木陰に立寄て、晴間を待けるに、木々の梢は冬枯て、雨にまじりて木の葉散、翅しをれて飛烏の、ねぐらにかへる夕間ぐれ、遠寺の鐘の音もさえて、いとゞ淋き長堤の霜の劍を踏分て、年若き女いと物思ひあるさまにて、顔ふところにおし埋つゝ、こなたへ歩み來りしが、堤のもとの流にのぞみて立とどまり、唯浮々と泣居たり。亦六いぶかしみつゝ、此女をつら〳〵見るに、髮も亂れ衣服もはり目がちにて、いと貧さまなれど、生つきたる美目容はうつくしく、人品もまた賤からざる女なり。なほうかがひをるに、女はひたすら泣けるが、やややありてあたりの小石をひろひて袂にいれ、念珠を取出してすりならしつゝ、西にむかひて念佛をとなへ、ほど〳〵身を沈むべき樣子なれば、亦六はいそがはしく走出て抱とゞめ、何ゆゑかゝるふるまひはし給ふぞといふに、女は最はぢらひつゝ、いふやう、とゞめ給はるおん志はうれしけれど、とても死ねばならぬ身にて候へば、見のがして御通くだされかしといふ。亦六いはく、また若き身を失はんと覺悟をきはめ給ふほどなれば、よく〳〵の事なるべけれど、若我力にかなふ事ならば、救まゐらせたく思ひ候といへば、女いはく、いづくのおん方かはしらざれども、情深きおほせなり。さばかりのおん志をむなしうせんもいかゞなれば、一通り語りはべらん。妾は此堤の東村に住者の娘にて候が、老年の父、十日ばかり前に偶家を出、いく日過ても歸り候はねば、人を雇て近郷をあまねくさがし候へ

ともいふべし、いへしまはくらず貧きう
に老ぬれば、かねて父の詞に、かく長
生して貧窮にくるしまんよりは、縊てな
りと死にしかじと、度々申し候ひしが、
もし貧苦にせまり身をかくして、縊死
やはせざるかと、悲さやる方なき折な
るに、家をかしおく主、情なき者にて、
少の家賃を滞し家代に取あげ、
身をば、因る所なくば、時ぶせりの乞食
にもなれかしと申して追出し候へば、親
類もなく立よる陰もなき身なればせん
すべなく、なか〳〵に生恥をさらさんよ
りは、水の泡と消え果んにはしかじと覺
悟なさしめ候と、思ひわかりつゝ、語りけ
れば、弥六は心の内に思ふに、いよゝかゝり、此
女の父二十日許前に家を出しといふは、
若かの人にはあらざるかと、とゞろく胸
を押しずめ、左ある身にては、死んとお
ぼすも理なり。さりながら、親人の生死
いまだたしかならざるに、はやまり給ふ



は不可ならん。生ながらへて心長く生死
をたゞし給ふにはしかじ。小人は見給ふ
如く、になひ賣する者なれば、此近郷を
ありく事はつねなり。日じるしあらばと
もにたづねてしんずべし。家を出られし
ときの衣服はいかにとたづぬれば、女い
はく、其時の衣服は黄色に青赤をまじへ
たる小紋をあつめてつゞりたる小袖にて
候。姓名は木枯竹斎と申醫師にて、年は
六十九歳なり。外にたしかなしるしと申

は、生つきたる備目にて候といひも果ぬに、亦六は大におどろき、さては彼人なり。我おやまりより娘まで、かゝる身にはなしけるよと、臓腑もちぎるゝ思ひにて、身うちに熱汗を流し、其敵は我なりとあきらかにいひきかせて、打れんと思ひしが、父亦助の歸國を待で打るゝは、不孝のうへに不孝なりと、苦き胸をすゑなほし、此女を養おきて、後日に名告打るべしと心をさだめ、さあらぬ體にていひけるは、小人は讃岐國中野村に住、酒賣の亦六といふ者にて、小商して其けれど、おのれ身躬を養はゞはいかにともすべければ、我家にありて心長く親人のゆくへをたづね國へかし。御身の名は何といふやらんといひければ、女は偏にもうれしげにて、我は名を三輪と申し、年は二十になり候。誠に不思儀の御縁にて、さばかりふかく情をかけて給はることよ、命の親とも申べし、いつの世にかはむくはゐとて、掌を合て拜つゝ泣ければ、亦六も落涙し、我を敵としらずして命の親とは何事ぞと、いとゞ不便さまさりつつ、何いはんも更に途中、いざ〳〵我家へおはせかしと、荷桶をかたげともなひて、家路をさして歸けり。これより亦六於三輪を我家に養ひおき、なほ〳〵はしき事を聞けるに、於三輪いはく、前にも申せしごとく、父は木枯竹齋とて、原は都に住名譽のきこえ高かりしが、ゆゑあり



て零落し、近頃當國にうつり住候。妾が母は前に都にて亡候とかたりぬ。扨亦六は、お三輪にかくし、ほどちかき寺に佈施をおくりて、竹齋が菩提をとむらひ、やがて打るゝ身と思へば、夜臥にも於三輪とは一間へだてし所に臥て、禮儀をみださずあしらひぬ。於三輪はさある心もしらず、命の親と思ふにぞ、せめてすこしの恩報じと、まめやかにはたらきて、洒洗濯針仕事、煮燒の業の片手には商ひ手つだひし、物書こともたくみなりければ、日々の帳合算用まで、男まさりに用をたし、女にまれなる器用者、且ひまには布を織糸を繰て、なりはひのたすけとし、かしこさも又すぐれければ、亦六心に思ひけるは、彼に夫なく我に妻なし。彼と我と若敵同士にあらずんば、よき頃あひの夫婦なるにと思ひて竊に歎息し、親人歸國し給へば、やがて打るゝ我身なるに、あまり恩をきせなば、打かねる事もやあらんと、よき程にあしらひおきぬ。かくて程なく此年も暮て、明年の春の半にいたりしが、一日亦六お三輪にむかひ、我父亦助どの去年の今月今日、旧國に旅立給ひし時、百日ばかり過なば歸來てんとのたまひ出られしが、已に丸一年過ぬれども、今におゐて歸給はず、音信だになきは氣づかはしき事なり。今日は則發足の日なれば、旅さきをいはうて陰膳すゑたく思ふなりといへば、於三輪はこゝろえ候とて、かひがひしく厨をはたらき、陰膳を調じたてゝ、さゝげ出ければ、亦六は父の著なれし簑笠を壁にかけて形代とし、これに膳をそなへて禮をなし、恙なく歸國し給へかしといひければ、於三輪いはく、無事でおかへりあるやうに、御身もともに祝酒きこしめせとて、商物の酒をあたゝめ、尾頭つきし肴をそへてすすめければ、亦六は愁を掃ふ玉帚と、數盃をかたふけ、お三輪にもさしつさゝれつ酌かはしぬ。時に於三輪、軒のつまに燕子のゆきかへりして、巣の内に子を育つるを指ざしていひけるは、あれ見たまへ、鳥類すら夫婦ありて子を養ふ。おん身いまだ年若しとはいひながら、親一人子一人の御身なれば、妻を娶て親人に、安堵さするが孝ならめ。妾不思議の御緣にて、情によりて生ながらへ、此身にうけし大恩は、山より高く海よりもなほ深かるべし。あまたの日數過ぬれども、父竹齋の行方今においてしれざるは、死別にうたがひあらじとあきらめをり候へば、なほ便なき我身なり。御身も妾も若身にて、所せき此家に唯二人住をれば、世間の人の思はんする所もいかゞなり。愚なる身をきらひ給ふ心もなくば、此上の御情に、妻となし給はれかし。さもあらば一生連そひ、長く御恩を報ずべし。親人の形代の此簑笠の前にて、夫婦の緣をさだめなば、たとへ翌日歸り給ふとも、

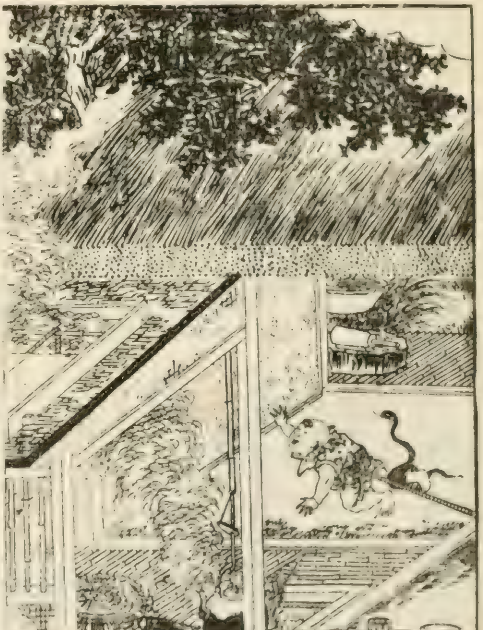
よも惜しとはおぼすまじと、はづかしさをも餘所にして、思ひこみてぞきこえける。亦六はこれを聞、やゝしばらく答もせず、手をこまぬきて默し居けるが、日來養をはげむ者なれども、いかなる過去の宿縁にや、竹齋が死骸に對し天地に探し詞に背き、敵同士の惡縁と、しりつゝ、結ぶ煩惱の、絆の端ぞあさましき。されば亦六は、於三輪が切なる志に、鐵石の心を轉し、其詞をうけひきて、傲に村する老夫婦をたのみてかりの媒とし、此夜あらためて婚姻の盃をとりかはし、父亦助が形代も、時にとりては蓬萊の、國の寶の簑笠と、いはひをさめて夫婦となり、なほむつましく折過けるが、於三輪ほどなく懷胎して恙なく男子を産、其子を杉太郎と名づけて、夫婦の寵愛深かりけり。さるほどに金烏玉兎の足はやく、光陰の過る事、流水の如くにて、夢と明現と暮て、又二年の春秋をぞ過しける。

此書にいたりく、前の巻々の國の物語と同年なり。亦六は父旅立てよりはや三年過ぬれどもいまだ歸らざれば、老年の上の旅なれば、もし旅中にて果られしかと限りなく愁けるが、一日一人の男門首に案内を乞、酒賣亦六どのと申すはこゝにやといふ。亦六答ていかにもこれなりといへば、彼男内に入、拙者は金剛山の麓森屋村の者なるが、これに見おぼえ候かといひつゝ、皮籠の笈をいだしければ、亦六これを取て見るに、これ父亦助が笈にて、札に書つけたる文字はおのれが自筆なれば、見たがふべうもあらず。これはいかにとおどろくに、彼男いはく、見おぼえあらばくはしき事を語るべし。かやう／＼に候と、かの強盗いつはりの狒々となりて森屋村を騷がせ、金剛山の山中にて亦助をしめ殺し、傍邊に此笈のすてありしことをつぶさに語り、此札に河内國の住人獵師亦助とのみしるしありて、郡の名も村の名もしるしなければ、急にたづねることあたはず。死骸は其所に埋、日を經てやう／＼こゝにたづねあたり候。悔てもかへらぬこと、跡ねんごろにとひ給へと、いひおきてぞ歸りける。亦六は笈を抱て、悲嘆の涙にむせかへる。於三輪もともに悲みて、おかへりあらばお側に居て、お足を擦介抱し、孫の笑顔もお目に懸、老後の樂をさせ申さんと、待しかひなき死別、お顏も見ざる嫁舅、よく／＼薄き御縁ぞと、嘆に時をうつしけるが、とても涙はとゞまらねば、笈をかたみとすゑおきて、香花を手向つゝ、あと懇に弔ぬ。かくて此年も又冬の半となりけるが、一日亦六酒桶を荷て商に出、生駒山の麓なる平岡明神の社の前を過けるに、丫角の若侍、旅人と見えたるが、行疲たる體にて拜殿の欄に身をよせ睡居たるに、あやしい哉、空中より黑き斑の鱗生て尋常ならざる小蛇ひらめき出、赤き舌をいだしてかの旅人

にむかひ毒氣を吐ん樣子なるに、忽旅人の懷中より光明を發し、あまたの蟹あらはれ出て、かの小蛇を追と見えしが、小蛇はつひに退きて、空中にきえうせ、蟹はもとの懷にかくれけり。亦六は此ありさまを見て奇異の思ひをなしけるに、かの旅人は睡を醒し驚たる樣子にて、ため息つきて居たる時しも、惡漢等四五人走來りて旅人を取圍、今朝から跡をつけ來しに生駒山にて見失ひ、本意なくおもひて、なほゆくへをたづねしぞ。汝が懷中に、何やらん金目の見ゆる一物あり。とく〳〵渡せとよばはりて、二人の惡漢双方よりむずと組つき懷に手をさしいるゝを、旅人は腰を捻てふりほどき、二人が腕をねぢあげて莞爾と笑ひ、我を若年とあなどりて盜せんとは惡なり。手なみを見よと言て、左右を一度に投つくれば、のこる者ども割木をとりて、微塵にせんとふり上る。しやこしやくなるやつばらと、猿臂をのばしてかいつかみ、あたるを幸ひ人飛礫、拍毬の如くにあしらへば、皆辟易して居たる所に、又四五人の惡漢ども、面々棒をひつ提て走來りければ、さきほどより物陰に樣子をうかゞふ亦六が、これを見かねて走出、拄杖をおつとりて立ふさがり、素力量すぐれたれば、脊骨、腰骨、向脛、起あたりて打なやませば、双方の惡漢等、二人の力者に激しがたく、折しも吹くる風の、木の葉とと



もにばら〳〵と、四方に亂て逃失ぬ。亦六は旅人をつら〳〵見るに、衣服に三本傘の紋をつけたれば、もしやそれかとちかづきて、只今のおんはたらき、驚入たる御手練と、悲いひければ、旅人は會釋して、おもひかけざる足下の助に難儀をのがれ、過分のいたりと相のぶれば、亦六いはく、卒爾ながら三本傘の紋をつけ給ふは、若名古屋小山三君には候はずやとたづぬれば、旅人は驚て、いかにも我は小山三なるが、さいふ足下は何人ぞといふに、亦六地にひざまづき、おん見しりはなき筈なり。拙者は君に乳を上し乳母伏屋が兒子亦六と申者に候といへば、小山三はうれしげにて、幸哉々々、乳母兒の亦六といふ者當地に住よし聞つるゆゑ、力にせばやとたづねにこれまで來つるなり。これ此明神のおん引合なるべしといひてよろこべば、亦六はさきほど見たる小蛇と蟹のあやしみをもの語れば、小山



三いはく、そは我懐中に所持したる百蟹の繪の奇特なり。此百蟹の圖妖蛇をしりぞけしこと前編剪燈夜話に詳なり 毒蛇をさけしは今にはじめぬ名畫の徳と感嘆し、巻物を取いだして押いたゞけば、亦六は希奇異の思ひをなし、いざ且我住家へとて案内してぞ歸りける。此日お三輪は、家にをりて布を織けるが、今年は巳に二歳になる杉太郎を守する者もあらざれば、腰にひもをつけ環にゆひつけて、おのが御側

して逍まはるまゝにあそばせおき、伽を緒事に心を寄て居たりけるに、杉太郎頻に泣さけびければ、ふりかへり見しに、一ツの小蛇かれが足にまとひつき居けるにぞ、いそがはしく筬を投すてゝ立上るをりしも、いづくともなく一羽の雉子飛來りてかの小蛇をくはへけるに、小蛇は雉の身にまとふを、雉やがて斬齧しければ、小蛇は寸々に斷て死したりけり。於三輪はこれを見て安堵なし、杉太郎を抱上て乳ぶさをふくませ居けるに、彼雉は逃も去ず、お三輪が膝にのぼりて杉太郎にちかづき、馴したしみたるさまなれば、さては人に飼れたる鳥にやと、いとゞ[illegible]ひ、餌など與へけるにうれしげに啄み食てありて家の傍なる竹林の奥にかくれゐぬ。此時亦六は小山三を連て我家へ歸り、お三輪にも引合せ、さて物語におよびけるが、小山三は雉川國貫がために、佐々木の家滅亡し、名門之助自殺あり

事、父山三郎打死の事、同助拆琴劔を守逃し行方しれざる事、母八重垣金剛山にて不破番作に打れたる事、百[illegible]奇特によりて思はず狒々を殺せし事、夫より番作をたづねんため、近國をめぐりて月日を過し、今又當地に到るまでの事をつぶさに語りければ、亦六は是を聞、さある凶事のありしことを露ばかりも存せずとて大に驚き、父亦助も金剛山にて殺されたることを語りければ、さては彼村を騒しは、いつはりの狒々にて、實の狒々は我に殺されしか、汝が父も同夜に非業に死せしかと、語りあふも皆たがひの涙の種なりけり。お三輪は食事をとゝのへなどもして小山三をもてなし、亦六にむかひて、かの小蛇と雉の事を語りけるにぞ、亦六小蛇の断はなれたるを見るに、黒斑の鱗ありて前程見たるとたがはざ

れば、益怪みて取捨たり。これ此小蛇は、前の年鳥部野に會合せし惡靈のうらに、不破伴左衛門小蛇となりて小山三に災すべしといひし詞に符合すれば、これ伴左衛門が怨魂の化したるものにて、小山三が所縁の家にまで災せんとしつるならん是より小山三にしばらく此家に逗留しけるが、亦六夫婦は御主人の落胤なればと、萬事に心をつけていとたのもしくもてなしければ、小山三は大に力を得て喜ぶこと限なし。さて又かの雉は家のめぐりの竹林をはなれず、放し飼のやうになりければ、お三輪はなほ憐みて朝夕餌をあたへけるが、呼ばいつにても出來り、杉太郎によく馴親しみ、平日の翫弄となりにけり。不思議なるは此雉偏目なり。これにも必いはれあるべし。次の巻を讀得てしるべし。

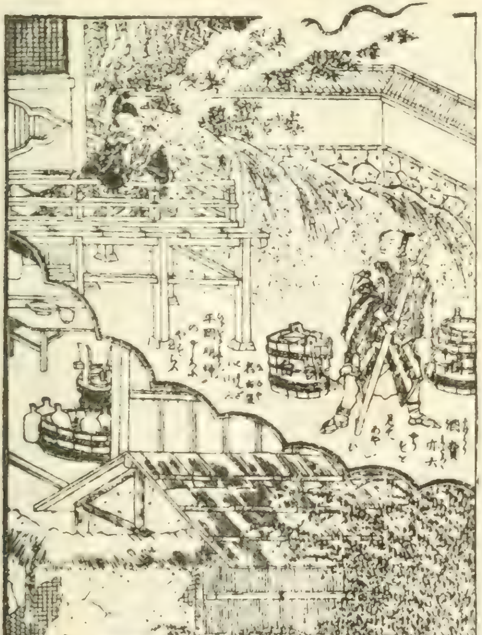
本朝醉菩提後帙中冊終

稲妻表紙後編本朝酔菩提後帙下冊

同氏家　寫者　赤鍋陶器品第十五

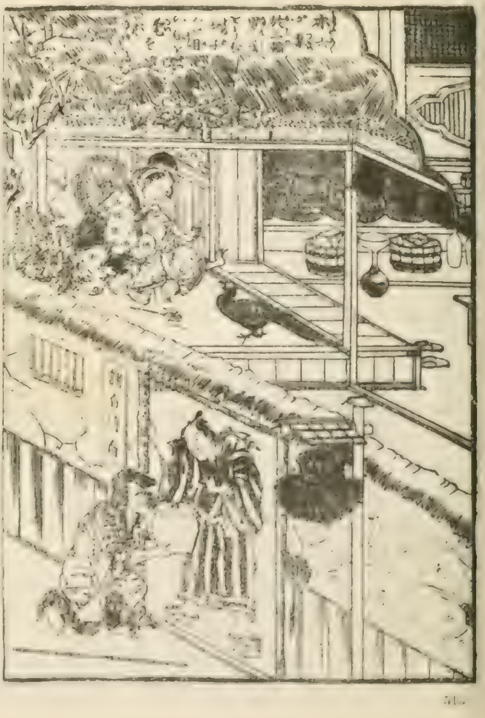
主従に小山三は、僕亦六が家に逗留し、あくる春にもいたらば、折琴姫のおんゆくへ、猶作が二人を尋、高野へ旅立にと思ひ居たるに、前の年金剛山にて猟師に礫を打つけられたる額の痛み、つよき寒気に再發し、頭痛の病となり、頭をあげ得ず打臥ければ、亦六夫婦は活計をやめて、側をはなれず看病し、百薬を盡すといへども、露ばかりも験なく、漸々におもき病とぞなりにける。亦六於三輪にいひけるは、母公の代打佐々木の家の御再興、一身を二ツにも分てほしくおぼしめす大切のおん身なれば、我々が命にかへても本復をさせ申さねばなりがたしと、病人よりも看病に疲る夫婦ぞたのもしき。しかるに或人いひけるは、頭痛を治るに奇妙の事あり。戦場にて打死したるたぐひ、又は自死せしたぐひ、跡を弔者もなき無縁の人の首をもとめ、七日が間香花を手向てその霊を祭よく葬て得さすれば、其亡魂歓喜の功徳によりて、いかほど強頭痛にても、忽平癒疑なしと物語を、亦六聞て於三輪に對ひ、かやうかやうの事あれども、これを得ることはあらざる事なればせんかたなしと、本意なげに語あひて居たりしが、亦此村すゑに、草の庵を結て獨住、貧くくらしい老女あり。かしらには白髪の雪をいただき、額には皺の波をたゝへ、寒夜にさへ一重の襤褸を着て、わづかに肌をかくすのみ、人に雇れ賃仕事してやう／＼露命をつなぎけるが、此時亦六が門を過、夫婦の物語を、老に似合ず耳はやく聞つけて裏に入、今うけたまはれば、頭痛の病の事をのたまひしが、幸頃日藤府川のほとりにて、何者ともしれず、自害をかき切て亡たる者の候へば、若此事な五索子ばかりの錢を給はらば、其首をひろひ取て参らすべしといふにぞ、亦六は大に喜び、いかにも五索子の錢をつかはすべければ、それをひろひ來りてくれよ。とく／＼せよといそがせば、婆々はこゝろえ候とて、いそがはしく出ゆきしが、かくて此日の夕暮に、かの雇婆々、瓦の壺に首を入もち來りて與へければ、亦六は貧なかにとゝのへし、錢五索子をつかはしければ、婆々はいとうれしみつゝ、思ひがけなく、此錢でよい年をとりますとて、うけをさめて歸けり。偖亦六はの首を取いだして机にすゑ、香花を手向て打むかひ、いづくいかなる人かはしら

されども、主君の頭痛平愈させたまはらば、今日を乃命日とさだめ、後々までも年忌佛事を營て、跡懇にとむらふべし。南無阿彌陀佛なむあみだぶつと囘向して、七日が間まつりけり。夫は俗おき父に又、一休和尚は播越のすゝめにより、箱藏主といふ弟子と野島悟助を具し給ひ、攝州住吉の庵を出、河内國にいたり給ひ、生駒山のふもとに庵室を造て、暫こゝに住給ふ。かの箱藏主といふは、前の年一休堺の扇屋権右衛門がもとへおはせしとき、たのまれ參らせて、奥深くかくし、暫佛師の箱七が事なり。其後一休の御弟子となり、剃髪して法名を箱藏主とたまはりぬ。さても光陰はやく流れて、年月いよいよまぬ水には、せきとむる柵もなく、已に此年も暦の軸に巻よせて、往來のひとの脊皆も胸敵、節季候の拍子とともにいそがはしくなりて、早佛も實やみ、煤掃行の節もつまりて大晦日となりにけり。此日



は世間のかけ乞ども、朝まだきに起て、舍利奪たるやうに迯まどふも理なり。年ものいふたびに口より煙のいづる比より、中につもり〳〵し物入が、冬と春との峠霜をおろし氷を踏破て飛いだし、韋駄天となり、借錢の山高うして、昔人の越か走りにはせまはり、血眼になりて譴ありぬるは、此一日の難所ぞかし。一休は金けば、借錢負たる者は速疾鬼とかやが佛を山に捨、玉を淵になぐべくもあらんお

ん氣質なれば、檀越の布施物おほき時は、貧者に施し給ひ、常は一鉢のまうけよりほか、ものをたくはへ給ふことなし。偖大晦日の夕方に、かけ乞ども十四五人連立て、一休の庵室に来りければ、野隈悟助立出て、これは〳〵いづれも揃てようこそおいでといひけるに、かけ乞どもは吾子のうへにつゝし上り、これの一休さまは、近頃當地へわせたゆゑ、まだお顔さへ見しらねど、名僧と聞たゆゑ、よもや不沙汰はあるまいと、心をゆるして貸ましたに、噂とちがうた狂惑者、前の月から幾度も、催促すれども今にすまさぬ、どうするのぢや〳〵とぞわめきける。悟助はこれを押なだめ、不沙汰をする氣はござらねど、此ごろは檀越の布施物もなきゆゑに、心の外に遅滞しました。折あしく今夜は庵主も他行なれば、来春の松過まで、待て〳〵といはせも果ず、いやいやさうはならぬ〳〵。大晦日に留守つかふは、どうして見ても狂惑者、此庵室には朱太刀とやらいふ大太刀があるげな。百貫のかたに笠一蓋ぢやが、當分の腹いせに、それでも取てかへるべし。いざ〳〵皆の衆奥へふんごみ、彼太刀をと片肌をぬぎ、鉢巻して、皆一同に立上り、奥を目がけてゆかんとすれば、強氣の悟助こちらへかね、不禮至極のふるまひやと、いひすて箒をふりあげて、打んとせしに一休は、此騒動を聞かねて、一間の



口を立出たまい、惜助を呼かけて［illegible］なだめ給へば、やう［illegible］間に一休かけ乞どもにむかひ給ひ、他行と云たは惜助めが安詰［illegible］り、まことは與に［illegible］の方に逢ははじめて、現世は［illegible］浄土未来を、一目に見渡す六神通、地獄［illegible］鬼羅刹でも、何とも思はぬ我なれど、一物もなき達磨宗、借錢といふ魔王には、拂子を投てあやまります［illegible］今夜は了簡して、もどつてくりやれ［illegible］ば、かけ乞どもはくちぐへ、活佛でも、達磨でも、かりた物をかへさぬといふ法はあるまい、とらぬうちはいつまでも居催促なや。お邪魔ながらとおちついて、提灯の火を吹消、十四五人が居ならびて、歸るけしきはなかりけり一休一言とのたまはす、作麼生如何の法問より、借錢乞の問答は、あなむつかしやとのたまひて、陶器の酒を飲給ひ、そらうそふきて［illegible］おはもけな。かけ乞どもは相手なき［illegible］ば、仲間同士の物語に、米商人の日八が、これ古手屋の破九郎、［illegible］鎌刈の［illegible］見ゆ［illegible］一本で十文も出したであろ［illegible］わしは熨斗松を一本で三文［illegible］古釘で門口へ打つけておき［illegible］それでも威儀はすむ事じや、和［illegible］の鎌刈から見れば、こちには大まいの五八文［illegible］あるといへば、酒屋の棚門戸、今年は餝海老がきれもので高いの［illegible］わしは一つ二文する年に二ツ買て、今年［illegible］分の費用をおはすくもおもや な［illegible］といふ歳徳の神は、ござら［illegible］閻魔［illegible］紙おふりつ、といへば、新屋の紫六が、これを慮していひけるは、いかさま隣から打釘のさゝへ、こちの摺小木をかける程に、氣をつけねば錢金はもたれぬと、語る背後に荷物屋の茶左衛門、何をてんがうするか、見れば、閻魔吏に焼たしの［illegible］を投、［illegible］子になひては［illegible］一日をたゝく者どもより、［illegible］油断はなかりけり。一休はかけ乞どもが欲にみちたる物語を、をかしくやおぼしけん、打わらひつゝのたまひけるは、いづれもの居催促、さぞ退屈におぼえければ、ねふけ醒におもしろい、講義を説てきかせまし、いかにくとのたまへば、かけ乞どもいひけるは、こちらが口をきく事なら、腹の減氣でかひもあれど、どうでおいてあて耳を持たがふしようおや、お布施のいらぬ談義なら、聞てしんぜ申さんと、思ひましくいひければ、一休は惜助におほせて、其支度をさせ給ふ。惜助はこゝろえ［illegible］長持を引出し、佛卓圍を打かけて、かりの高座になしければ、一休は小夜着を着ながら高座に上り給ひけり。かけ乞どもは頬杖つくやら［illegible］やら、寝そべるやら、行儀のわるき聞人なり。一休は

且咳を前にたてゝのたまはく、いづれも今夜は一年のきはめ時、大晦日とござつて居催促の御登詣、さりとは奇特なことでござる。我教外別傳の法は耳とはきゆゑ、耳ちかい譬喩の談義を説申さん且前座には活潑禪機のいさましい悟り事を説、後座には生者必滅の道理、しつぽりとした爲になることを説ましやう。是乃おいへがた、かけ乞講中逆修現當安樂の爲、二つにはねふけ醒しにつとむる所の説法講談でござれば、信心を決定して聴聞あるべき事が肝要でござるぞやとのたまひつゝ、酒飲茶碗を利生のかはりとなし、火箸のさきでちん／＼と打ならし給ひ、偖のたまはく、夫佛也一如の道理といつは、西方極樂世界に於て、阿彌陀如來一時名佛菩薩を集給ひて[illegible]けるは、我つら／＼おもんみるに、一切衆生自[illegible]功[illegible]

れば、我此度慈悲本願の軍を起して、衆生の自ら造なす地獄城を攻亡し、閻魔に抹香をねぶらせて、呵責にくるしむ亡者等を救とり、盡く佛にしてつかはさんと思ふが、かた／＼も我にしたがひ、一軍して見る氣はなきかと仰出されたと思はつしやれ。そこで諸佛菩薩のたまふには、これは至極よいおぼしめしでござります。誰かは違背つかまつらんと、おうけ申されたれば、巳に此評議一決して、且肅隊をぞなされける。九品蓮臺の精兵菩薩軍にはたれ／＼ぞ。等覺山の觀音太衛門、蓮花野の勢至太郎、横笛の藥王兵衛、笙笛の藥上武者、[illegible]の里の普賢殿、琴上手の自在五郎、三賢山の獅子吼十郎、同じく陀羅尼三郎、[illegible]者、獄[illegible]雷[illegible]

大箭の月光王、小箭の日照王、慓悍の定自在、一番かくる三昧王、ひたやぶりの大自在王、一人當千の白象王、打物の大威徳、はや走りの無邊身、都て二十五菩薩の二十五騎、九品淨土にむねとのめん／＼、九億萬、恒河沙の、郎等を引率し、紫雲に乘、蓮臺に鞭打、或は獅子大象に乘[illegible]、[illegible]ごとくに集しは、すさまじかりける光景なりとのたまひて、拍木のかたしにて、高座をばつしと打給へば、かけこひどもは、居睡したるも目を醒し、寐そべりたるも起上りて、こはおもしろき事かなと、耳をそばだて聞居たり。一休又のたまはく、此時極樂の總大將、阿彌陀佛の出立には、[illegible]色赤光、白色白光の[illegible]莊厳の曚手をさし、忍辱のおん鎧に、大慈大悲の[illegible]物打たる[illegible]八[illegible]

頻藤の弓に、妙觀察智の幡をさし、青蓮のおん外皆を、一度めぐらしたまふときは、光明遍照十方世界とぞかゞやきける、誠にたふときおん事なり。去程に諸佛菩薩の大軍、日をえらみて極樂國を出陣あり。功德莊嚴の旗捺物を、摩訶菩提の山下風に翩翻と吹なびかせ　十萬億土を一とびに、葬頭河の此方なる、六道の辻まで押寄給ひ、笙篳篥を吹ならして、讀經の聲を一度に咄とあげたまへば、千部供養の如くにて、ありがたかりける次第なり。寵耳に水の地獄城には、三角眼向な鼻いはや打、御註進々々なと叫はつて、かやう〳〵とうつたふれば、閻魔大王あわてこゑどひ、十大王衆、獄司俟官、司命令神、司錄記神、五道冥官、俱生神、奪衣婆、懸衣翁、阿防羅刹、五色の鬼、無量の異類、無數の鬼神をしたがへて、跋提河の邊修羅道に押出し、鐵の楯をつき、淨頗梨鏡をすゑ、焦熱地獄より大釜をとりよせて鐵を湯に涌し、敵近よらば熱湯をあびせかけんとかまへつゝ、大地を掘て猛火を寵、坎穽をまうけたり。寂滅爲樂の紙幡を、無常の風にひるがへし、銅鑼鐃鈸を修羅の鼓に打ませて、罵詈號泣の鯢波を一度に咄と合せしは、百千の葬禮を一度にするが如くにて、すさまじかりける光景なり、と又、柝木にて高座をはつしと打給ひ、時に地獄の陣中より、眞黑に血眼なる武者一騎、血盆にて染なしたる、赤地の錦の鎧直垂に、阿鼻叫喚の火威の鎧を草摺長にゆりくだし、鐵の箙に時鳥の羽を以てはぎたる矢を二十四差たるを、頭高に負なし、不産女地獄に生たる竹を七もぢりにもぢりたる、塗籠の弓をとり、劍山よりえらみ取たる鉾を持、畜生道の牧を出たる斑駒の太逞きに、餓鬼の持たる飯椀に燃立ばかりなる紅の厚總の鞦を懸て乘たりけるが、二河白道の河原面にすゝみ出、鞍坪につつ立上り

抑これは一百三十六地獄の總大將　閻魔大王の臣下、九王の裏に股肱耳目とよばれたる、五道官の轉輪王とは我事なり。吾と思はん佛菩薩は名乘てこれへ出候へ。花やかなる打物して、諸見物の眼をさまし候はんと、廣言を吐いだし、勢援てひかへたり。かゝる所に淨土方の陣中より、小箭の日照太郎と名乘て、日光菩薩の鎧に瓔珞華鬘の捺物をさし、青蓮華に打乘てすゝみいで、無盡功德の利劍を拔て轉てかゝれば、轉輪王もヤこしやくなる小冠者哉とあさわらひ、黄泉思業因果の鉾を、車輪の如くにふりまはし、炎を蹴立て戰しが、日照太郎が迷暗照破のするどき刄に敵しがたく、始の廣言には似もやらで、身をちゞめてぞ逃たりける。これを戰の始として、佛鬼兩軍入亂れ、地獄方には鐵火をふらせ、極樂方には蓮華を雨せ、勢猛く戰ぬ。火花を散といふ事は、此時はじまりける

とかや。かゝる所に思ひもよらぬ生死の海より、弘誓の船を乗いだして、三途の川に漕いれたり。地獄方の者等これを見て、すは伏勢よと騒所に、副將軍観音左衛門、あまたの聖衆化佛をしたがへ、大光明を發して船櫓にあらはれ給ひ、妙なる聲にてのたまはく、とほからん者は昔にも聞、近は目にも見しりつらん。衆生をすくひつくさずは、正覺をとらじと思ひきりたる彌陀佛の副將軍、念彼観音の手なみのほどを見よ〳〵やつとよばはり給ひ、千の御手毎に、大悲の弓には智恵の矢をはめて、一度はなせば千の箭さき、雨霰と降かゝつて、鬼神の上に亂れおつれば、大將閻魔をはじめとして、大に狼狽敗北し、鐵門のうちへぞ迯こみけり。これより七日七夜が間、合戦ありといへども、つひに地獄勝利を得ず、閻魔大王冠を脱で降参しければ、阿防羅刹の悪鬼をはじめ、地獄中の罪人どもをこしらへすかし、心をあらためさせて新生の佛になされ、閻魔王を始として、冥官冥衆の妻を其儘に、曼陀羅の聖衆に引上て、等流法身と地獄に佛國をうつして、唯心の浄土となし給ひければ、劒の峯と見えしはたちまち妙覺の山となり、鐵の湯と思ひしはやがて功徳の水となりぬ。佛鬼一如の道理以此悟るべし。衆生の心心にて、地獄とも極樂ともなるぞかし。されば正法念經に、閻羅獄卒は實有の情にあらず。衆生妄業の力をもつてこれを見ると説給へり。又法相に、於縄起蛇覺といふことあり。縄を蛇と思へばおそろしく思へども、縄と見さだむればおそろしき事なし。地獄をおそろしと思ふは、迷の前の事なり。菩提なりけりと悟ぬれば苦からず。いとし可愛の愛欲をうすんじ、をしいほしいの貪欲をすてゝ正路をあゆみ、おのれ〳〵が心に佛菩薩の名號勇士をたくはへて、おそろしき地獄城を攻破り、心の鬼を退治して、唯心の浄土となす時は、たちまち活た佛となり、此世から安樂なりとのたまひて、かけ乞どもを尻目にかけて又のたまはく、いかつがましく片肌ぬいだるありさまは、修羅の喧嘩に異ならず。額にむすぶ鉢巻は、邪見の角と見ゆるぞかし。あゝ唯心の浄土もは、たがひに目と目を見あはせて、脱だる肌をいれるもあり、むすんだ儘に鉢巻をそつととつてかくすもあり、はじめにかはりて行儀よく一同にいひけるは、コレ申し一休さま、我々がやうな無智な者には耳ちかいよいお談義、どうぞ其あとを今すこし、お聞せなされてくだされませと、ねがへば一休のたまはく、いづれも信心をしてきく心さへあるならば、どうで説かけた此談義、これから後座には必滅の理のしつぼりとした事を説申さう。且息つぎにとのたまひつゝ、陶器の

湯を飲給ひて、又茶碗の利牟をちん〳〵しおき、かねておのれが蓄つておいた地は、我を忘れて一同に、なんまみ〳〵ととなへ給ひ、夫大乘論に曰、無常に三獄をさして只獨、迷行こそ悲しけれ。なんとなへけり。一休又のたまはく、あはれ種あり。一には念々壞滅の無常、二には人の命といふものは、はかないものでなるかな女房は、看病疲に瘦細り、乳の和合離散の無常、三には畢竟如是の無常はござらぬか。罪障消滅なんまみ、往生み子を肌につけ、惣領の子を側におき、なれど、事むづかしく說たれど、つまる極樂なんまみとのたまへば、かけ乞どもむなしき骸に取つきて、末期の水に涙を所は、月に村雲花に嵐、いつ死なうやらしれぬ事なり。そこで此無常といふやつがいやなやつぢやて、老朽た身はいふにおよばず、鬼ともくまうといふやうな、力自慢の若いしゆでも、この無常といふおろが、案内なしにむかひにござると、今まで借錢はなるためにねめまはしたるおとハ、一腰をぬかすやら、財布にかくれ[illegible]〳〵の催促に、赤めた顏も青くなり、四大といふ[illegible]借うけた、地水火風の損料を[illegible]骸骨の上にいふつた欲の皮を、[illegible]無常殿にひつぱがれ、ひづらをはつて儲ためた錢かねも、いと[illegible]と思ふ妻や子ら、[illegible]此世に殘



そへ、惣領の子にむかひ、これ太郎よ。これが此世のい[illegible]ぢや、親[illegible]顔よく見覺ておほきうなつても忘れるな。今頃かやうにならしやらうと知たなら、意見い[illegible]、[illegible]火[illegible]、損料[illegible]に[illegible]、[illegible]生[illegible]き[illegible]、[illegible]しい事[illegible]はしやと、つめたい額をおし撫て、なげけどかひは新佛、枕念佛を隣にて、只やかましといふばかり、一度此世を去たもの、再歸た例なしと、いとあはれげにのたまへば、かけこ[illegible]は一回に、[illegible]、涙をこぼ[illegible]、[illegible]御經法、聞て一身[illegible]こはい[illegible]にしたや。もちつと其さきたのみますと、いへば一体うなづき給ひ、なほも哀なおん離にて、俗欲てもかなしみてもかへらねば、葬問[illegible]、棺桶を[illegible]、のへて、金がほしいの欲垢に、けがれた著物をぬがせつゝ、經帷子を著かへて桶にをさめ、綿薄なかけ無垢を打おほひ、高盛の枕飯、線香や抹香の、匂ひいとゞ哀にて、あらいたはしや惣領の、七ツばかりの男の子、五つの祝袴著に、著たる野馬の染小袖で、肩のせまい上下の、[illegible]さな形に大編笠、餘所の見る目も涙なり。罪障消滅なんまみ、往生極樂なんまみと、すゝめ給へば臼八が、こらへずわつと泣出し、わしも丁ど七つになる男の子を持て居ます。身につまされてかなしいと、



涙の露の玉銀に、財布のはしをしぼりけり。時に一休柝木にて、高座をはつしと打ならし、おん聲高くはりあげ給ひ、蜉蝣の一期槿花の榮、夢幻の身を持て、利欲に迷ひうか〳〵と、むなしくおくる光陰の、矢立の筆の命毛の、ちゞまる所に氣もつかず、畜生道の革財布、罪の科の目をあらそひ、閻魔の帳をくりひろげ、算盤の玉ははぢけども、念珠を持たる事もなく、かよわき骨の提灯に、晦日の下水は飛越ても、冥途の闇はいかにせん。物の報ははやいもの。箇々が此一休をはたるやうに、冥途から無常どのが提灯をともして來て、どうぢや〳〵と居催促、おの〳〵がたの命をはたつてゆくである。ヲ、いや〳〵の〳〵とのたまへば、かけ乞どもは泣聲にて、それはマア氣がかりな。無常めが來をらぬやうに、どうぞしかたはござりませぬかと、いへば一休うなづき給ひ、あるとも〳〵、經文にも懺悔に罪を滅すとあれば、心に欲の懺悔をなし、お布施に包む豆板で、無常の鬼を追いださば、福は内へと舞こみて、壽命長久うたがひなしとのたまへば、野暻悟助はこゝろえて、大柄杓を持て出、滅罪懺悔の冥加錢と、いひつゝ柄杓をさしいだせば、かけ乞どもは我さきとあらそひて、財布の口をおしひらき、取ためたる錢金を、をしげもなくかい掴み、ばらり〳〵と投こんだり。一休又のたまはく、ア、まだ氣の毒な事があるて、いづれもの中にたゞ一人、三日をまたず無常の風につれてゆかるゝ人がある。是は常業是非もなしと、頭を撫つゝのたまへば、かけ乞どもは青くなり、まうし一休さま、それはマア此中で、誰が無常に連られます。いうて聞せてくだされませと、ふるへ聲にていひければ、一休頭をふり給ひ、イヤ〳〵それをいうては、片時もこたへられるものではない。松かざるやら餅つくやら、めでたい春をむかふようと、知ずに居るでもつたものぢや。いはぬ〳〵とのたまへば、かけ乞どもはぐにやりとなり、たがひに顔を見合せて、これ酒屋の糟内、和主は大ぶん色がわるい。おほかた和主であらうぞやと、いへば糟内腹を立、此古手屋のたはけめが、いまはしい事をぬかしをる。さいふ汝が影のうすいに氣がつかぬか。短命さうなは汝ぢやと、諍を仕いだしければ、一休しばしとゞめ給ひ、さばかり死がいやならば、命をのぶる修法もあれど、日來の貪欲を取捨て、正路に赴心なければ、たとへ我道術を行ふとも、驗なしとのたまへば、皆くちぐちに、これ一休さま誰にもせよ、どうぞ御慈悲に命をのべてくだされませ。畢竟欲をかわきますも、女房子どもがかはゆきゆゑ、其かはゆい妻子に別れ、かせぎためた錢金も、其儘此世に殘しおき、急死をいたすと知ならば、なし〳〵の誓

爰で、無益な欲をかわきましよ。お慈悲〳〵といひければ、一休なほも頭をふり、イヤ〳〵今は死とむなさに、誓文などといはるゝが、此座を立ば又かわく。命の安買ならぬ〳〵とのたまへば、酒屋の精内目をすり赤めてすゝみ出、これ一休さま、外の者はいざしらず、拙者は欲を捨たる證據、御目にかけんと懐中より、ちひさき帳を取いだし、矢立の筆に墨をつけ、これよく御覧なさるべし。おまへに上た酒の代、九貫八百六十四文、思ひきつてまづこの如く、爰で帳を消ますと、いひつゝ棒を引ければ、破九郎精内を押のけて、やをれ此古手屋も酒屋ごときに負べきか。これ見よやつとよばはつて、手ばやく帳をとりいだし、おなじく棒をぞひいたりける。其外の人々には、米屋の門八、樽屋の柴六、鹽焼の分正次、豆腐屋の豆右衛門、青物屋の茄左衛門、傘張の皆兵衛、紺掻の茶褐助、布屋、油屋、味噌屋のめん〳〵、十二三人居ならびて、われおくれじと帳を出し、思ひ〳〵に筆をとり、棒十文字に引消て、かつぱと伏て願しは、實目ざましき消やうなり。一休莞爾と笑せ給ひ、善哉々々善男子、愚にも強くはたらるれば、善にも強く消れたり。愚僧疑はれしぞや。いで〳〵道術をおこなふべしとて、目をとぢて印をむすび、小聲に何やらとなへ給ひ、サアサアこれでいづれもの壽命百年づつに請合ちや。其上はいく年でも、勝手次第に活さつしやれとのたまへば、歡喜踊躍のかけ乞ども、蘇生たるこゝちして、やれやれうれしやありがたや。コレ悟助どの、一休さまが御酒をあがろとおつしやらば、代にはおよばぬ遠慮なしに、いつでもとりにござりませと、酒屋がいへば古手屋も、一休さまがおさむくば、夜着なりと蒲團なりと、損料なしにかしましよと、かけはとらいでかけとりども、機嫌とりてぞ歸りける。あと見おくりて一休は、長持より飛くだり、悟助と耳語笑ひける。かゝる折しも園藏より、實の一休立出給ひ、いかに箔藏主、汝が談義を奥にて聞、いと殊勝に覺しとのたまへば、箔藏主頭をさげ、御呵をもかへりみず、彼等師の房をも愚僧をも見しらざるを幸に、一休といふ御名を僞、此箔藏主が狂言にて、多疑強欲の野狐どもを追やりて候といへば、一休のたまはく、汝が談義戯に似て、佛智にかなへり。愚痴無智の輩が心の地獄を滅却させ、無常迅速の理を示して、貪欲非望を戒るには、あつぱれの談義なり。我僭越の布施を得てこゝにありといへども、彼等が貪欲を戒るにはよき時節と思ひ、わざとこれを與へざりき。彼等無常を悟り角を折て歸しは、實に汝が大功なり。明日は元旦なれば、彼等に借たる價は勿論、心ざしとて與へゆきたる金銀も、此布施物を以て、殘らず償かへす

べしとのたまひて、恰助に一袋の金を渡し給ひ、又のたまはく、往古は大晦日にも靈祭をせし事にて、報恩經には、亡者娑婆に往來する事六度あり。七月は素より、十二月晦日午時來、正月朔日卯時歸とあり。和泉式部が歌に、なき人の來る夜と聞ど君もなし我住宿や玉なしの里などもいへり。ゆづり葉を師走の卅日、なき人の食物にしくといふ事を、枕の草紙にもかきぬ。兼好の時代には、はやせぬ事になりしにや大晦日のさまをかきたる條に、なき人の來る夜とて魂祭る業は、此ごろの都にはなきを、東方にはなほする事とてありけんこそ哀れなりしと、徒然草にしるしたり。後の世ほど、事繁くなりて、人は亡者を祭らねども、亡者は娑婆に詣來て、路頭にまよふが不便なれば、我は此曉まで經を讀て弔ひつかはすべし。汝らはしばらく休とのたまひて、袈裟衣を着て立出給ひ、讀經をあそばしながら、村々を歩行給ひけるが、果て途中に迷ふあまたの亡者ども、一休のおん袖やもすそにとりつきて、浮べてたべ〱とねがひけるとぞ。世の人こぞりて、活佛と尊敬せしもうべなりけり。

注茶半託迦尊者 髑髏化城喩品第十六

夫はさておき亦六は、貧きうへにはさしく活計をやめて、小山三が頭痛のわづらひに心を盡し、醫師の謝物加持祈禱の物入など、萬のつひえおほくなりて、物たらぬがちなるを、病人に聞せじと、夫婦暗に氣をいため、わづかに貯へし[illegible]器を代なして彼是の雜費にあて、いとゞ貧苦にせまりけり。亦六お三輪にむかひていはく、そちはいかに思ふやらん、今日はすでに大晦日なれど、人並に門松立、注連はかざりながら春の用意とて餅一つ乾鰯一疋貯ず、年木一束もとむべき便だになきは、侘しき事にあらずや。此村にも有德人は魚懸に鰤一本、鹽鯛五枚、錫六本、かん箸塗箸漆の匂ふ紀の國五器、鍋蓋まであたらしく、年をむかふる人もあり、世にある人にくらべては、あさましきことならずやと嘆息すれば、お三輪は古扇にて藥煮火をあふぎ居しが、これを聞ていひけるは、さばかり愁ひ給ふな。いかほど貧く暮ても、幼者の病氣もなく生立は、此上もなき喜びなり。小山三さまも日あらず御快氣ありぬべし。あまり氣をやみ給ふなと、力をつくる膝元に、親を[illegible]杉太郎が、雞來よ〱とよびければ、家のかたへの竹林より、やがてかの雛とり出て餌を啄み、杉太郎に抱れて、鳩車[illegible]翫物となり居たり。かくて此日も暮ければ、雞もねぐらに歸りつゝ、於三輪は行燈取しだして火をともし、小山三さまにも藥をあげ、今とろ〱とおやすみなれば、此

ひまにいそがはしさの亂髪、つひとりあげてと梳に、けづる命の痩世帶、辛苦に老る面影は、むかふ鏡に知れたり。時に亦六いひけるは、中岡明神は、當所の鎭守の神といひ、來年の惠方はかの神の方にあたれば、惠方棚をまうけて、十二の燈臺はすゑおけど、家内に彼首を祭るうちは、さすがに燈明もさゝげがたし。今日は已に彼を祭るも七日目の滿願にて、あくれば則元旦なれば、今夜九ツを限に葬てつかはすべく思ふなり。且一回向せばやとて、彼首の祭所をかこひたる、小屏風を引あけて、灯をかゝげ香を捻り、水を手向て念佛をとなへ、あらあらしき若者の、鉦を打念珠をつまぐる爲體、結句殊勝に見えにけり。かゝて暫時をうつして、此方にいづれば、於三輪いはく、御身も此年ついでに髭を剃らせ給はずやといへば、亦六髭をおし撫つゝ、いかさまあすは元日なるに、せめて髭なとあたらしう、剃て年をむかへなん。しからばたのむといひければ、於三輪は手纏かひ〲しく、盥に湯を汲持來りて、毛うけに持す古扇、ひらく櫛匣の合砥に、剃刀研て亦六が背後に立、髭を剃て居たる折しも、竹林のあたりにて雉二三聲鳴とひとしく、少の地震ゆら〱とふるひけるが、於三輪はかねて地動をきらひければ、あなやと驚きあやまちて、亦六が吭のあたりへ、剃刀をきりつけたれば、たちまち鮮血淋々と、むかふ盥に流けり。於三輪はなほ驚て、こは大なるあやまちをしつるかな。ゆるし給へとあわてまどひ、血どめの藥は何よからめと、立騒ぐ心もしらで、背寢まどひの杉太郎、かゝまねふたい寢さしてと、いひつゝ社にとりすがる。亦六は血をおしのごひ、すこしの疵なり、さわぐべからず。そちは杉太郎を寢さすべし。いつもの寢るころやゝ過たれば、さぞねむからん、とくゆけといひければ、是非なく太郎を抱あげしが、さしうつむきし夫の顏、灯火に盥の水鏡、うつるを見れば思ひありげな顏なれば、心がかりと思ひつゝ、心殘して奥へゆく〱。亦六は手をこまぬき、しばし思案の體なりしに、良ありてあたりを見まはし、獨言にいひけるは、あなおそろしき天罰や。我前年禁野にて、木枯竹齋を雉と見たがへあやまりて、鐵砲にて打しとき、たゞちに名告出んと思ひしが、親人の歸國までと事をのばし、竹齋の死骸にむかひ、後日妻子をたづねて打れんと、天地に誓し言にそむき、於三輪が切なる志にほだされて、敵同士と知ながら夫婦となり、二人が中に子までをまうけ、いよ〱恩愛にひかされて、かの誓言を忘却し、三年が間つれそへども、口にだもいださゞる事、我義を失ふのみならず、お三輪にまで孝道を失はせつる、後悔さよ。人を殺して生ながら[illegible]

ゑのみならず、天地をいつはる我あやまち、冥罰あるはことわりなり　時もあらんに、髪を剃時にのぞみて、お三輪がさらふ地震、かれが手をもつて我吭に切つけたること、我あやまりて竹齋を打、お三輪あやまりて我に疵つく。これみな天罰我あやまりを責たまひ、はやく名告て打れよと、示し給ふにうたがひなし。さりながら今更敵と名告とも、子までなしたる中なれば、恩愛にひかされて、打得ざるは必定なり。委細の事を書しるし、小山三君の御身のうへをたのみおく事までも、書そへて殘しおき、自殺して死ぬるにしかじと覺悟をきはめ、消かゝりたる行燈の、火をかきたてゝかたはらの、硯箱を取出し、墨摺ならす音さへも、彼方此方をしのぶにぞ、夫婦の縁も薄墨に、筆を持手もわなゝきて、帳の白紙に書殘す、文字も心も亂れ書、涙ににじむばかりにて、夜風に颯と吹鳴す、門に立たる松竹も、つひの薪と身にしみて、齒朶楪の注連も、愛別離苦の悲しさに、絆をつなぐ思ひなり。かくて書おきを書をはり、小山三が臥たる一間をうかゞへば、熟睡の樣子なり。奥の方にも音なければ、折よしと思ひつゝ、釣佛壇の父亦助が位牌にむかひ、親人御出くだされかし。金剛山にて害したる敵をたづねて仇を報い、修羅をやすめまゐらせんと、日來思ひし宿志もとげず、今かゝる義にせまりて、



相果る不孝のいたり、ひとへにゆるし給はれかしといひをはり、又小山三が臥たる方にうちむかひ、御主人の御先途をも見とゞけ申さず、身まかる事の不忠さを、ゆるさせたまへと、彼方にむかひ此方にむかひ、奥の方をもかへりみて、忠孝と恩愛に心殘すは理なり。かくて親のかた身の山刀を取いだし、南無阿彌陀佛ととなふる聲も、あたりはゞかる口の裏、刀をすらりと拔放て、手拭の布をおしまき、腹かきいだして巳につきたてんとしたる折しも、杉太郎が寢かねて泣ば、そへ乳の母は脊をたゝき、かしこい者ぢやだまつて寐や。一夜明ればお正月、惠方まゐりに詣さまが、手習の開帥さまへ必連てゆかしやらう。歸には破魔弓、毬打、振鼓、よい物買てもらへかし。ねゝが子守はどこへいた。あの山越て里へかと、すかして寐さす子もりうた、太郎はなほも泣やます、もてあましたる様子なり。



亦六はこれを聞、あゝあれが妻子の聲の聞をさめ、あとで敵としるゝとも、三年が間連そひて、最愛せし者なれば、さぞや歎んかはゆさよ。今を限の我命、惠方參りにひきかへて、冥途へ年をとりにゆく、今生の名殘とも、しらざる事の不便やと、妻を思ひ子を憐み、あつき淚をおとしつゝ、悲歎に時をうつしけるが、あの我ながらおくれたり、未練不孝と思ひきり、又刀をとりなほして、つきたてん

たる所へ、[illegible]聲[illegible][illegible]をとゞめ、今よびかけしは、聞なれざる[illegible]し考ふれど、夜はしん／＼と更わたり、谷吹風の音のみして、人音もなかりければ、[illegible]我心[illegible]ひ、思[illegible]阿彌陀佛の聲もろとも、腹かき切んとし[illegible]、父[illegible]亦六しばしとゞめたりし亦六はいそがはし[illegible]かの首をまつりたる所の小屏風のうちより、青[illegible]火[illegible]燃上りければ、大に驚き立上りて屏風を引あけ、消殘たる燈明の光に見れば、あやしや、香花を手向て祭おきたるかの生首、眼を見ひらき口をうごかし、活るが如きありさまなれば、さしもの強氣の亦六も、思はずぞつと身の毛立、後の方へ飛すさり、唯あきれたるばかりなり。ときにかの首又聲を發していひけるは、誅給ふは理なり。御身[illegible]自殺[illegible]我身[illegible]懺悔[illegible]一通り聞てたべ。某はこれ醫師[illegible]一子にて、幼名を鷲丸といひしもの。幼より[illegible]十五歳の時父の勘當をうけて、所々方々をさまよひありき、或劍術者にしたがひ、或修驗の弟子となり、世渡種をもとめんとしけれども、元來[illegible]不所存ゆゑ、つひに一つも事をしとげず、一年浪花に[illegible]して[illegible]の首長となり、[illegible]と名告しが、[illegible]ありて[illegible]を出奔し、つひに山賊となりけるが、今年三月いつはりの親々となりて旅人をおどし、金剛山にておん身の父亦助どのを害せしは我なり。今おん身の獨言を聞つるに、禁野にて雉と見ちがへ我父[illegible]を打れしよし、あひ敵とはいひながら、おん身はもとあやまちにてせられしこと、某は賊をなさんために、もとめてしつる惡事なれば、其罪は懸隔のたがひあり。[illegible]自殺[illegible]、妹と[illegible]つれそひて、亡人々の跡を弔くだされよ。我一旦金剛山を逃去といへども、天[illegible]のがれがたく、當國藥師川のほとりにて、自身首をかききりて亡しが、人もおほく[illegible]御身の手にわたり、此家に來りて、亦助どのゝ位牌にむかふ面目なさよ。我若生て此家に來るならば、仇敵とて打るべき、おん身の爲に祭れて、回向をうくる苦さは、地獄の呵責にまされるなり。小山三どのの頭痛のなやみは、我[illegible]に本意あらしむべし。自殺の事はあながちにとゞむるなり。おん身の義氣を見るにつけ、我生前の非義非道を、後悔すれどもかへらぬ事、死してやう／＼善にいたれど、永劫惡趣の苦みを、のがるる事はあたふまじ。我此物語を世の人にも傳へ給ひて、勸懲の一助ともなし給はれかしといひて、有[illegible]

[illegible]、身[illegible]、今[illegible]
[illegible]亡者[illegible]に
来る日なれば、我も[illegible]に詣して委細
[illegible]
[illegible]ならもとより給へと、いひをはり一目
をふさぎぬ　幸六はこれを聞て落涙し、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
術べきと思ひつゝ、[illegible]をとりあげしに、
それまち給へしばし／＼と声かけて、[illegible]
三輪[illegible]
[illegible]
きたつてんとしたりければ、幸六はあわて
まどひて手をとゞめ[illegible]、こは何ゆゑ[illegible]
ぞとゝひかけれは、お三輪いはく、[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
す。[illegible]更妾が危き命をすくひ給はりてこ
れまでの[illegible]恩、いかでか報ひ[illegible]
あれなるは妾が兄[illegible]の首にて、男どの
の[illegible]なることよし、さあれば妾はおん身の為
に現在[illegible]の妹なれば、いかでかつれそ
ひをりるべき。又夫をたすけ父の仇を報
はざるも不孝者とて、[illegible]もはかられねば、
[illegible]
[illegible]
迄にておん目にかゝり、くはしき事を語
[illegible]
[illegible]
[illegible]
おしきの[illegible]とはいひながら、兄うへのあ
[illegible]、あさましき身の果をと、いひさし
てむせかへり、かた手に刀はかた手には
彩太郎が手をとりて、夫の膝におしそれ

ば、[illegible]
計がのみたいと、すがる我手に[illegible]
し、[illegible]のひまに幸六は、刀をもぎとり
[illegible]
[illegible]
一さいこゝつこいこゝ[illegible]せと、夫婦たがひに
[illegible]
太郎は側にはさまれて、[illegible]
[illegible]
[illegible]
をたづさへ最前より、竹林の[illegible]
[illegible]
[illegible]
ざとり、手ばやく[illegible]につきたて
ければ、鮮血さつとほとばしりて、身を
[illegible]
は村末の老女なりける。こは狂気ばしし
つるかと、いだきつゝ介抱なしければ、老
女いはく、いや狂気にあらず。[illegible]
[illegible]

聞、今といふ今因果應報の理を悟て、年來の惡心をひるがへし、善にいたりし物語、くはしく語り申すべしとて、苦げにしばらく息をつき居たり。か丶る折しも、一休和尚たからかに經を讀給ひつ丶、東村の方よりしづかに歩來たまひしが、其後にもろ〳〵の亡者どもつきそひて、うかべてたべ〳〵といひつつ、おん衣の袖やもすそにとりつきければ、しばらく途中にた丶ずみ給ひ、何にかあらん偈一言を授給へば、亡者どもはあなありがたやといひて、霞すかき消て失にけり。かくて彌六が門首に立給ひ、内の樣子をうかがひ給ふ。さて老女は聲苦げにいひけるは、我は原都五條坂に住し白鷹といへる白拍子にてありけるが、大和國佐々木の家臣、不破道犬といふ人にあがなひいだされて妾となり、懷胎のうちに、ゆゑありていとまをうけ、ほどなく木枯竹齋の方へ緣づきて、産おとせしは男の子、これ道犬が胤なれども、竹齋が子となして育けるが、我元來志あしく夫にうとまれしゆゑ、とても長く連そふ事あたふまじと思ひ、かの男子三歳の時、其子は殘しおき、我身獨出奔し、其後胸毛の黑平といふ者に再緣して名を岩芝といひ、大和國二上が嶽の邊に住しが、ゆゑありてかの地を逃去、越後越中の堺安計呂山にかくれ住、異名を山姥とよばれ、人商人を業となし、非道の金を貯しが、有漏路太郎同じ五兄弟の者に、[illegible]金を殘す[illegible]、やう〳〵身一つを[illegible]がれ去て、其後當國に來り、此村す[illegible]住[illegible]後を聞ば[illegible]三[illegible]竹齋[illegible]に殘しおきたる男子、勘當うけて行方しれずとなりけるよし、其男子の幼名は鷲丸、成長して提婆仁三郎といひしことは、今夜はじめて聞しなり。三歳の時別しゆゑ、我子とは露しらず、親のてづから子の首を、五祟子の錢にかへ、賣與へたるあさましさ。これ年來の惡報と、はじめて悟る物語、又これなるお三輪殿は、後妻の腹に出生の女子なれば、ゆきあひの兄弟といふのみにて、提婆とは胤ち腹ちかはりて、敵につながる緣なければ、自害をとゞまり、ゆく末ながうつれそはれよ。懺悔の爲に我々くわし罪科を、殘す語て聞すべし。我人に雇れ賃仕事はしつれども、日々の費に乏きゆゑ、夜な〳〵隣國[illegible]の燈の油をぬすみ、[illegible]にかへて榮耀飲、今思へばかしこしともおそろしともいふべき詞はなきぞかし。又今夜[illegible]に來りて、此竹林に隱居し給、此家にかくまひおく丁角の若人は、不破道犬が爲に[illegible]ある、名古屋山三郎が一子小山三なりと聞しゆゑ、しのび入て寢首をとり、[illegible]川大[illegible]の館へ持參し、賞美の金をたまはるべしと思ひ、これ此通り首をたづさへ來つるなり。然に内の樣子をうかゞひ、始終の事を聞、提婆仁三郎

自殺して善に歸し、みづから後悔の物語に、はしめて我子といふ事をしり、六十年來しこみたる惡念を、只一時にひるがへして、善になりたる此自害、懺悔に罪を滅すといへど、天罰神罰佛罰を、深くうけたる我身なれば、無間地獄に落て無量億劫、呵責の苦をまぬかるゝ事あたふべからず。いざ／＼亦六どの此斧にて、我子にかはる老が身を、段々に斬くだきて、父の仇を報たまへ。はやく／＼といひをはり、斧を取て投いだし、合掌して口に念佛をとなへけり。亦六夫婦はこれを聞、さては／＼とあきれつゝ、手負をいたはり居たりけるに、小山三病床を立出て夫婦にむかひ、始終をくはしくあれにて聞ぬ。不思議なるは我頭痛、今俄に平愈して、常のごとしといひければ、亦六いはく、さては左樣に候か。提婆が詞果してたがはず候とて、夫婦ともに愛のなかの喜びなり。前程より門首にたゝずみたまひし一休和尚、此時突然閫に入て上坐に通給ひ、我は是近頃當國に飛錫の沙門一休なりとのたまへば、亦六夫婦小山三も頭をさげ、こは思ひよらざる御入來と敬へば、手負の老女はこれを聞、さてはうけたまはりおよびたる一休禪師にて候か、よき折におはしつるありがたさよ。妾は罪深き者にて候。ねがはくは來世の苦患をおんすくひくだされかしといひければ、一休のたまはく、我汝等が輪廻の一轉を先知して、濟度の爲に來つるなり。汝若かりしときは百魔とて、隱なき白拍子にてありけるよし、汝がおぼえし曲舞を此世の名殘に舞て見せよ。我ワキ僧の意にて、助聲してつかはすべし。なにはの事か法ならぬ、とく／＼とのたまへば、此うへはとかく辭しなばおそろしや。來世の爲やあしかりなんと、手もとにありあふ扇を取て立上り、倭僧足を踏しめて、たちまふふりもよわ／＼と、髮にはおどろの雪をいたゞき、眼は泪の雨雲に、星をかくせるふぜいにて、額は血しほに赭丹塗の、流て襟につた葛、襤褸の腰の破たるは、木の葉衣に異ならず。折しも里の夜神樂に、禰宜の鼓や吹笛の、時の調子も違わたる、聲を安計呂の山姥が、息の下なるうたひ聲。

「遠近のたつきもしらぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥の、聲すごき折折に、伐木丁々として、山さらに幽なり。法性峯そびえては、上求菩提を顯し、無明谷深きよそほひは、下化衆生を表して、金輪際に及べり。

とうたひつゝ、舞ければ、一休助聲し給ひて、

「抑山姥は、生所もしらず宿もなし。唯雲水を便にて、いたらぬ山の奧もなし。

老女又うたふ。

「然ば人間にあらずとて、隔る雲の

身をかへ、かりに自性を變化して、一念化生の鬼女となつて、目前に來れども、

一休又助聲し給ふ

「邪正一如と見るときは、色即是空其儘に、佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生あり。衆生あれば山姥もあり。柳はみどり花は紅のいろ〳〵。

老女又うたふ。

「よしあし曳の山姥が、山廻りするぞ苦き。足曳の山廻り、樹の陰一河の流、皆是他生の縁ぞかし。ましてや我名を夕月の、浮世をめぐる一節も、狂言綺語の道すぐに。

一休又助聲。

「讃佛乘の因ぞかし。

老女又うたふ。

「あらおん名殘をしや。いとま申て歸る山の。



とうたひさして合破と倒れ、やがて息絶けふに是平岡明神の油を盗みし罪科を、死るが、胸もとより一塊の心火とび出、神してあがなふ心ならん。魂魄は成佛する棚のほとりを飛めぐると見えしが、神にといへども、後人を戒るためにや、業そなへし十二の灯盞に、一度にぱつと火火は此世にとゞまりて、後の世までも河うつりし、家内かゞやきわたりけり。思内國の姥が火と、其名は高聞えけり。亦

六夫婦小山三も、老女が自害を憐て、一休にむかひ口を揃しいはく、乞ねがはくは、此老女彼提婆仁三郎人に、引導の語を御授けかはされくだされかしと願ければ、一休うなづき給ひ、そは安き事なれども、我寒夜に道を歩み、身上冷て堪がたければ、酒肴物にかへて一盃の酒を與へよ。我一分の酒氣有は、十分の禪機あるはといたまへば、亦六いはく、小人貧くはべれども、商物に候へば、酒の貯はとぼしからず候。とく〳〵すゝめ申せといひてお三輪に命ずれば、お三輪は立て一陶器に酒を持來り、此酒あたゝめてまゐらせ度思ひはべれど、年木の用意さへなければといとはおもひつゝいふ、一休四辺を見まはし給ひ、かしこにこそ薪ありとのたまひつゝ、釣佛壇に安したる木佛をとり下し、老女が携へ來りし斧を以て、木佛を二つ三つにさつと打砕き、圍爐裏に投入たまひければ、亦六夫婦小山



三等は唯あきれてぞ居たりける。時に一休微笑してのたまはく、汝等我ふるまひを訝はうべなり。昔丹霞といふ和尚大悟し、寒天に恵林寺の木佛を燒たる事あり。我今百魔山姥、提婆仁三郎といふ二體の眞の佛をつくらんと思へば、いかでかゝる木佛をおしまんや、佛も下駄もおなじ木のきれにあらずや、とく〳〵燗をよいそがし給へば、やむことを得ず、お三輪自在竹に陶器をくゝりつけ、かの木佛

を薪となしけるに、一休は木佛の燃るを見給ひ、掌を打て大に笑給ひけり。時に彼雉竹林の裏より飛出來りて、一休の御衣の袖にまつはり、谷口呱といひて、かた目に涙を流ければ、一休手をもつて雉の背をかきなで給ひ、汝も二體の佛をうらやみ、成佛をねがふかとのたまひて、またお三輪にむかひてのたまはく、此雉は乃是汝が父竹齋が再生なり。眄盲たるは其證ぞかし。亦六が爲に雉と見たがへられて、非業に死せし因果によりて雉に生れ、孫杉太郎が小蛇の難をすくひ、此家のめぐりをはなれず、汝等母子に馴したしむ事、子や孫をかはいと思ふ深き迷のゆゑなるはとのたまへば、お三輪はかなしさかぎりなく、此世におはして初孫の生立顔を見給はゞ、さぞな喜び給ふべきに、思へば／＼痛はしやと、いひつゝ雉を抱しめて、前後不覺に泣倒ければ、亦六は膽をさかるゝ思ひにてともに落涙したりけり。一休またのたまはく、沙石集といふ書にもさる例あり。皆是前生の宿因なれば、いかんともすべからずとのたまふうちに、酒の燗いできければ、大盃にうけて數盃をかたふけ給ひ、舌打しつゝあな快々とのたまひて、十分の酒氣をおびたまひ、亦六が髭を剃たる剃刀のありけるを取上て、老女の死骸にむかひたまひ、我汝を弟子となすしるしに、剃度の剃刀を與ふべしとて、白髮の髻を



根よりふつと斷たまひ、扇のはしに結つけて、假の拂子となし給ひ、これを持て浪々蹌々として、提婆が首に立むかひて默し給へば、三人の者等は、引導の語はいかなる事をか授給ふと、耳をそばだて聞居たるに、しばししてかの拂子を打ふり給ひ、

極樂をいづくのほどと思ひしに杉葉
立たる亦六が門

とたからかにのたまひ、喝と一聲さけび給ひ、拂子をもつてかの首を打たまへば、不思議なるかな首の皮肉、朝霜の消る如くに解流て、忽一つの髑髏となり、かの魂は身より光明をはなち、虚空をさして飛去ぬ。かゝるをりしも鷄は東天光と數鳴て、鳥は空を鳴わたる、聲にあくれば元旦の、東にのぼるはつ日の出、十方世界にかゞやきて、彌陀三尊の來迎を、目前に見るこゝちすれば、提婆が惡も觀音の、慈悲に解脱やなしぬらん。一休かさねてのたまはく、我は此髑髏をもつて、世の人に無常迅速の理を示し、かれら母子が罪障消滅の便とすべし。老女が亡骸はよきに葬得させよとのたまひつゝ、かの髑髏を杖の頭にかけ給ひ、これ見よや人々、一夜あくれば元旦とて、又晦日の來べき心もなく、玉椿の八千代を祝て目出たしとことぶけども、朝顏の日陰まつ間も定なき身とは思はず、萬の事を急おそれ、蝸牛の角に名をあらそひ、蠅子の



頭の利をむさぼり、身を秋風の心は露ばかりもなき愚さよ。此ごとく目出て穴の[illegible]凌しをこそ、目出たしとはいふなれ

門松は冥途の旅の一里塚、めでたくいはふ人のおろかさ。

御用心御用心

とのたまひつゝ、飄々として亦六が家を立出給ふに、明ゆく空のけしきは、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへてめでたしこゝかしこ、大路のさま松立わたして、花やかにうれしげなる人の交加、扇々とよび、福神雙六寶船をめさずやといひて[illegible]ありき、千町萬町の鳥追が參りよりうたへば、千秋萬歳徳若と打囃い、傀儡師、猿曳をまひ、萬歳、よばわりてにぎやかなる行來の中を、一休はかの髑髏を[illegible]さゝへて、今は御用心[illegible]ひつゝ、庵をさしてかへりたまひぬ。皆人これをいましとて門さしこめて居けるより、今に正月三日の間門戸をとざす

といひ傳ふ。かくて後かの雉一休の庵の前に落て死ければ、一休これをとり給ひ、提婆か髑髏とともに埋て一つの塚となし、杉立る門といへる歌の意を以て、三株の杉を植て塚印となし給ふ。當國交野郡のうち、甲斐田と片鉾村の間にある、三本杉雉子塚といふは是にや。偖亦六は老女の死骸を山城河内の界洞嶺に葬る。後に此所を姥が懐といふ。又彼亦助が宴を野外に埋て、卒都婆を建し。これ一つには亦



助が菩提のため、二ツにはかの雌雄の雁の為なることし、中野村の雁卒都婆といふは是にや。

○扨此稗史はつくり物語なれば、そら言のみおほし。一休和尚の道徳神妙の、眞面目を知んとならば、實記に載所を探見るべし。實是あふぎたふとむべき活師なり

此後小山三、赤六を具して旅立、折琴姫ならびに不破番作が行方をたづぬる事、僕同助折琴姫を守護して古郷にかへる。姫男子を産。北岩倉の宗玄葉船の名香をしるしとして、折琴姫に再會し、姫をなやます事、附たり朱雀の宗玄火のいはれ、前司太郎筑紫に赴、呼子浦の獵師荷太夫が婿となりて、光作と名をあらため、荷太夫が娘澪標を妻にする事。雉川國貫折琴姫を捕んとす。同助姫を守りて筑紫に落行、姫を前司太郎にあづけおく事、澪標嫉妬の事。附たり筑紫の不知火のいはれ、小山三出雲の於園を妻にする事、赤六が一子杉太郎成長して新竹齋と名告、奇妙の働をなし、狂歌に堪能の事、附白臑之助といふ奴僕の事、小山三番作を打て、母の仇を報事、小山三、前司太郎、同助、赤六等、於園とはかり歌舞妓踊に出して、國貫の館に入こみ、國貫を打とり、幼君を代にたて、佐々木の家を再興する事、附於園歌舞妓の由來、蜘手の方門下の靈驗等、一休和尚の濟度によりて成佛する事のたぐひ、六卷につゞりて續編とし、他日發兌すべきなり。

本朝醉菩提後帙下冊終

江戸

醒醒齋山東京傳編

一陽齋歌川豊國畫

備書　橋本徳瓶

剞劂　小泉新八

稲妻表紙續編　出雲於國物語　全部六冊

山東京傳著

一名折琴姫全傳

歌川豊國畫

来午冬出版

○山東京傳著述讀本　各所書坊近刻目録

腹筋逢夢石後編　歌川豊國畫　中本三冊

鳥獸魚虫草木器物類身ぶりこわいろをかしき本なり

夕霧物語　歌川豊國畫　全部六冊

道成寺物語　歌川豊國畫　全部六冊

女豫讓襤褸物語　歌川豊廣畫　全部六冊

骨董集初編　大本五冊

此書ハ珍書奇書古製乃衣服雑器の類を諸名家の秘蔵所蔵数部乃珍書を引証の考を加て是を記し物と図し并る漫録好古の書に重追々めづらしき古書画古器の類好事家の鑑定を経たる物集り外向近日出板仕候　此五冊ハ古代のありさまを目前に見るが如き珍書なり

京傳店商物口上　○きせる地紙たばこ入きせる類当年ハ別して珍しき風流の雅品を仕入申候○京傳自画賛扇たんざくそうまぜ色紙々

読書丸　一包壹匁五分　○第一気根をつよくし物おぼえをよくし心腎のくすりなればあそびきようへ老若男女常に身をつかふ心を労する人用ひてよし

大極上品奇應丸　せんじに熊胆の薬をもちひて其外私方ハ家伝の薬種成ハえ人参まのゐや数々の薬あんじをろんせど正ぎんをえらひをえて極品の薬種をわけて調合をいたしにせもんの薬とハ一切格別なり

小児無病丸　小児万病の大妙薬なり

京山篆刻　水晶印古体近体ハ好にまかせて刻をいたし名は印文字一字ト價を定めて印料安くいたし候そいらいてん迄ありつ仕候

敵南村娘

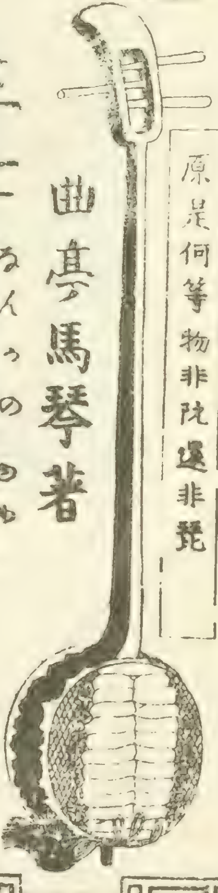
三勝赤根半七
郎様全伝

第一ノ巻

編新曲字並地

新町解子

簑屋赤根一期物語



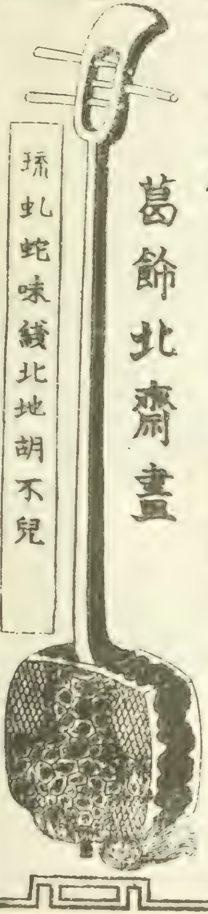
原是何等物非阮還非琵

曲亭馬琴著

三七全傳南柯夢（なんかのゆめ）

葛飾北齋畫

琉虬蛇味綫北地胡不兒



全七冊

淳于棼廣陵に家す。宅南に古槐有り。生其下に豪飲す。醉に因りて疾を致す。二友生を扶けて歸る。一玄衣の使者を夢む。曰く槐安國王奉邀す。生二使に隨ひて車に上る。古槐を指して一穴中に入る。大城朱門、題して大槐安國と曰ふ。一騎有り、傳呼して曰く駙馬遠降すと。生を引きて廣殿に升る。一人の素練を衣朱華冠を服するを見る。生王を拜さしむ。王曰く前賢の尊命、許して女瑤芳を奉事せしむ。僊姫數十有り、樂を奉じ燭を執りて引導す。金翠の歩障、珍瓏斷ず。一門に至る、金儀宮と號す。一女子金枝公主と號す。儀として神僊

復古情

淳于棼家廣陵。宅南有古槐。生豪飲其下。因醉致疾、二友扶生歸、夢一玄衣使者。曰。槐安國王奉邀。生隨二使上車、指古槐入一穴中、大城朱門、題曰大槐安國。有一騎。傳呼曰駙馬遠降、引生升廣殿。見一人衣素練服朱華冠。令生拜王、王曰、前賢尊命。許令女瑤芳奉事君子、有僊姬數十。奉樂執、燭引導。金翠步障。珍瓏不斷至一門。號金儀宮。一女子號金枝公主、儀若神僊、交驩成禮。情禮日洽。王曰、吾南柯郡、政事不理。屈

郷內守部曲司出金巨鄰綺。儀姿車馬。旗列寶
臨時公主行。夫人戒子曰。淳于郎性剛好酒。爲
婦之道。貴在柔順。爾善事之。生累日至郡。有官
吏僧道音樂來迎。下車省風俗。療疾苦。郡中大
理。凡二十載。百姓立生祠。王賜爵錫邑。位居台
鉉。生五男二女。榮盛莫比。公主遘疾而薨。生請
護喪赴國。王與夫人素服慟哭於郊。備儀羽葆。
鼓吹。葬公主於盤龍岡。生以貴戚。威福日盛。有人
上表云。玄象謫見。國有大恐。都邑遷徙。宗廟崩
壞。事生蕭牆。時議以生侈僭之應。王因命生曰。

[illegible]

卿可暫歸本里、一見親族、諸孫無以爲念、復令二使者送出一穴、遂驚見家僮擁篲于庭、二客濯足于榻、斜日未隱西垣、餘尊尚湛東牖、因與二客尋古槐下穴、洞然明朗、可容一榻、上土壤爲城郭臺殿之狀、有蟻數斛、二大蟻素翼朱首、乃槐安國王、又窮一穴、直上南枝、群蟻亦處其中、即南柯郡也、又一穴盤屈若龍蛇狀、有小墳高尺餘、即盤龍山岡也、生追想感歎、遂遣掩塞、是夕風雨暴發、旦視其穴、遂失群蟻、莫知所之、國記有大恐都邑遷徙、此其驗矣、

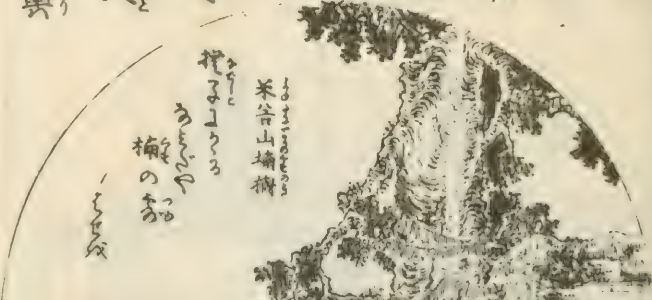
右陳翰槐宮記

蟻素翼朱首。乃槐安國王なり。又一穴を窮む、直に南枝に上る、群蟻亦其中に處る、卽南柯郡也。又一穴盤屈して龍蛇の狀の若し。小墳有り高さ尺餘、卽盤龍岡也、生追想感歎す。遂に遺して掩塞す。是の夕風雨暴發し、旦に其穴を覩れば遂に失ふ、群蟻之く所を知ることなし。國記大恐有り、都邑遷徙す。此れ其驗なり。

槐宮記ハ淳于棼ガ故事ナリ。陳翰當棼ガ夢ニ嫁シテ。榮枯得喪ノ理ヲ推ユト。沈既濟ガ枕中記ニ一般。皆是寓言トイヘドモ。蒙昧ヲ醒スニ足レリ。予モ亦取コトアツテ。三勝半七ガ奇縁ノ迹名ケテ三七全傳南柯夢ト謂事ハ。米谷山ノ楠南柯ニ起ニ千日寺ノ南无仏ニ畢ル。文辞荒唐ニシテ。君子ノ一噱ヲ惹ニ似タリ。然ドモ艶曲淫奔ノ脚色ヲ借ラズシテ。勧懲ノ微意毎巻ニ存ス。閲者ノ利害彼ト此ト如何因テ数行ヲ巻端ニ題スト云

文化四年丁卯夏孟　飯台　簑笠隠居

總目録



巻の三

臥房の胡越

華洛の僑居

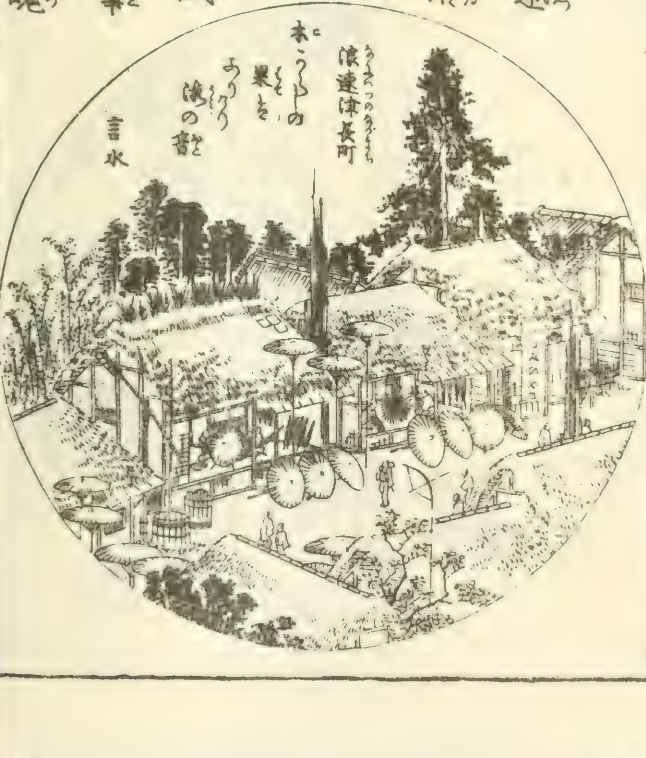
夜轎の驟雨

巻の四

真葛が朝風

百度の願事

夜半の月魄



巻の五

霹靂の宿の上

霹靂の宿の下

生玉花園の花

巻の六

橋下の歌舩

長町の丸味

千日寺の柾




笠屋三勝


赤根半七


赤根半六
あかねはんろく


笠松平三





姓氏

世家

續井順昭　續井吉種

列傳

厚倉友春　蟻松典膳　今市金八郎

布総蝶九郎　赤根羊六　赤根羊七郎

丹波市　笠松平三　蟻松曾右郎

笠屋三勝　輪篠　數良

園花　阿通

姓氏果

三七全傳南柯夢巻之一

深山路の楠

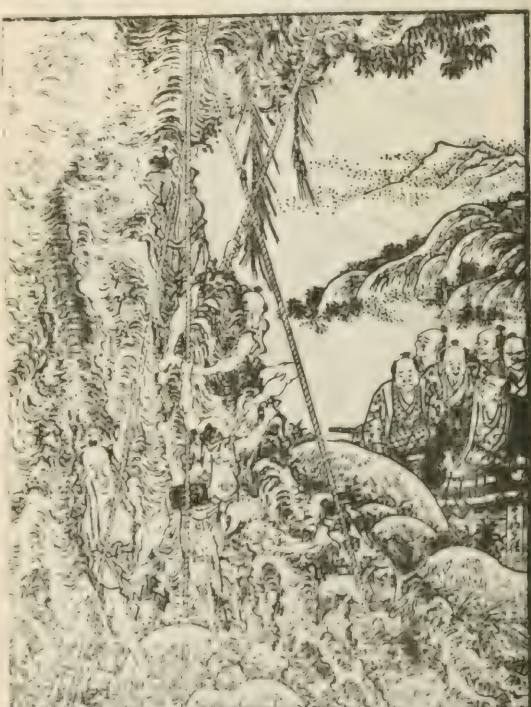
永正年中の事かとよ。奈良の都に、纐井顯昭なんいへる、やんごとなき人いまそかりけり。その先祖を尋れば、佛門より出て武家に突舉、法名清泉の五戒を棄て、兵家鬪戰の六具を事とし、建武の擾亂に、軍功拔群なりしかば、忽地に家を興し、大和半國を領してより、累世武威をうしなはず、文を崇ひ武を備たる家祿ども多かり。顯昭が家富昌て、昔には桂を拌、米は玉を粒り、身に錦繡を纏ひ、口美味に飽て、只管閑雅の遊興に耽り、このころ世に弄ぶ茶法を好して、京師の北山なる金閣に傚ひ、新に茶亭を造らんとて、名たゝる番匠等を召つどへ、龍門の瀧、岩下の水、蓮池、鏡湖池、九山八海石、春日の社、夕佳亭、すべて寸分も違はず繪圖に寫さし、既に吉日を撰らみ、作事を興さんと議せられたり。抑金閣と聞えしは、應永年中の建立にして、鹿苑院義滿公の別莊なり。閣は三重にして、七間の寶殿に、三尺八寸の鳳凰を戴かし、第一重を究竟頂と名づけて、廣さ三間四尺八寸、第二重は潮音洞と稱て、東西七間、南北五間半、岩窟に觀世音と、四大王を安置し、第三重は、法水院と呼て、廣さ第二重に等しく、こゝにも又觀音勢至を安置せり。これらを模して、作り出さん事、なしがたきにあらねど、潮音洞の天井は、楠の一枚板をもて造られたれば、唯この良材にのみ事缺て、思はずも日を經る程に、顯昭頻に焦燥て、ある日老黨を集會、さても此度茶亭の天井に用ゆなる楠は、得がたきに似たれども、當國は連山、波濤のごとく聳累りて、樹木森然たり。されば往昔より、樵木濫る山兒等が、斧を入れざる日はなけれど、山のあらはになりぬとも見えず。人もかよはぬ谷陰などに、生たちたらん楠の、わが求るほどなるも、究てなしとはいひがたし。翌より夥の樵夫をもて、殘る隈なく索させよかしと仰けり。そのとき蟻松典膳豐度と呼る、老臣、列を出てまうすやう、當國添上郡、米谷の山間に、伊賀より通ふ順路なるが、彼山の半腹より、街道を南のかたへ木垂たる、楠の大木あり。その枝東南へさし出たること、大約八九十丈に餘り、樹の下常に闇して、旅客貴も路に惑へり。もしこの楠を伐て給はゞ、四面五七間なる板となすべしとまうすにぞ、顯昭ふかく歡びて、篁葉陽が陸奥の果などにありといはゞ、思ふに任せぬ事もあらんに、かゝる良材の、わが

知る山より出ることは、はからざる幸なり。などて襲には聞えざりし、とく〳〵その楠を伐すべしと仰するに、乳母子なりける、厚倉二郎太夫友春、すゝみ出て諫けるは、怒特祠の梓樹を伐、陸亭の古木を倒して、怪異に遇へりしことは、唐山の書籍に記して、君もよくしりてぞ坐べき。千載を經る樹には、かならず木精あり。これを伐もの祟をうけし事は、枚擧に遑あらず。是併、樹の人に禍するにはあらで、天その驕奢を惡み給ふかとおぼし。彼舟谷なる楠も、山兒等が斧を逃れ、既に千載の大木となりて、その木下闇、旅客の煩となるを、枝だに伐透さざるは深き故ありぬべし。かゝる事は、いく度も思ひかへし給はゞ、後の患なからん歟と、いはせもあへず順昭忽地氣色變り、やをれ友春、かばかりの事を汝にいはるべきか。物の祟などとて怕れまどふは、婦女子のうへにあるべし。わが采地に生とし活るもの、おのれおのれが世を經るは、みな是誰が庇ぞや。既にその澤を蒙り、その恩をしることあらば、物の用にたゝまくこそ思ふらめ。まいて草木は非情なり。汝由なき事をまうして、衆人をなまどはしそ。翌はつとめて彼山に赴き、みづから下知して楠を伐すべければ、與勝は樵夫等に令しらして、用意せよとい

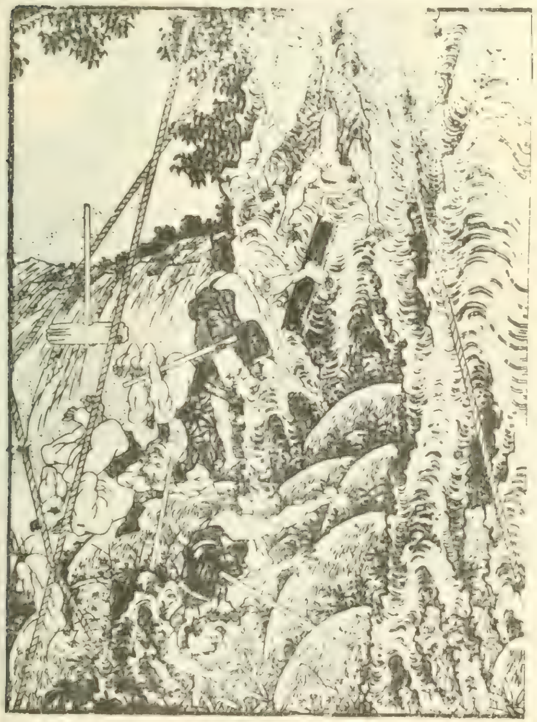


楠を斫らんとして順昭樵夫們を傷ふ

そがしつゝ、衝と座を立て奥に入れば、厚倉ふたゝび諫ることを得ず、みな諸ともに退出けり。かくて順昭は、次の日の早旦に厚倉二郎太夫以下譽の從者を將て、米谷山に到るに、蟻松典膳は先だちて、樵夫等を集合て伺候せり。その時順昭馬より下りて、床几に尻をかけ、件の楠を向上れば、枝葉參差と入りちがひて半天を覆ひ、幹の太さは十步にして、なほ窺り果べうもあらざれば、莞爾として左右を見かへり、物は求るによつて集るといへど、得ると得ざるとは、その人の德にあり。われ又今茶亭を造らんとするに、天この良材を與ふ、これわが德なり。時をうつさず伐せよと下知するに、いと老憊たる樵夫二三人、おそる〳〵領主のほとり近う出てまうすやう、畏けれど、面あたり聞え奉るべきことあり。殿の御威德をもて、この樹を伐れと宣するを、固辭奉るにはあらねど、この楠は、昔より神とし崇めて、杣木樵る男も立よらず、落葉掻く童も近づかす。見そなはするごとく、周には注連を引まとひて、人の憩ことだに許さゞるを、無下に伐らし給はんには、かならず大やかなる祟あるべし。加旃、幹は石よりも堅やかに見えて、輙く斧もたち候はじ。廣き大和の山々を索んに、この樹に劣らざる楠の、なきこ



ともあるまじければ、けふより百日を限りて放給へ。わかきものどもを伴ひて、外を索倣ふしとまうすにぞ、郷の樵夫等も、三人の翁が後方につきて、もろともにかき口説ば、順昭聞もあへず、かや〳〵とうち笑ひ、汝等草鞋大王の故事を聞ずや。斷たる草鞋も崇祀ば靈驗あり。愚民これを悟らず、この樹の歲經たるを奇にして、遂に神とし崇ればこそ、鬼魅罔兩の栖とはなるなれ。汝等伐らばとく伐れ。もしわが命に從ずは、かゝるべきぞ、といきまきつゝ、刀をすらりと引拔て、注連を丁と切れば、左右へふつとわかれ飛で、幣もはらりと散亂せり。樵夫等はこの形勢を見て戰慄き、さらばまづ枝をおろし候はんとて、五七人楠の梢に攀上り、枝より枝へ長やかなる麻索を結着て、八方へ引わたし、おの〳〵斧をふり揚て、一二の枝を丁と打ば、斧は閃りと反かへり、少し剔られたる木皮の間より、鮮血さつと濆て、樵夫等が面上にふりかゝると見えし、上なる七人眼眩て、しばしもたまらず撲と墮れば、下なるものは壓に打れ、或は斧にて手足を傷られ、半死半生なるもの十餘人、墮たるものは即死せり。さすがに勇き順昭も、この爲體に舌を振ひ、思ひたゆたふ氣色なるを、二郎太夫早曉得て聲を低うし、かくゐる



べしと思ひつるをもて、きのふ申せしを用ひたまはず、罪なき樵夫を殺し給へり。過て改るに憚ることなかれとか、今は是までなり、努思ひとゞまり給ひねと諫るに、顧昭は一言の回答もなくて、只顧に歎息し、やがて馬にうち乗て、既に歸らんとしたりしが、蜷松典膳をちかく招き、樵夫等が事、その妻子の嘆も不便なり。死たるものには棺を與へ、傷きたるものには、藥をとらせよと聞えおきて、轡づらを引かへせば、從者等列を整へ、草葉の露を拂ひつゝ、奈良を望ていそぎぬ。領主さへかくのごとくなれば、樵夫等は、しばしもこゝにあらんことのおそろしくて、或はその友の屍を扛き、或は傷るを扶掖て、おのが家にぞ歸りける。

こゝに城下郡、佐保庄なる柴賣に、赤根半六といふものありけり。先祖は楠正勝譜代恩顧の家隷なりしが、明德三年二月のころ、正勝千早の城を落て、十津川に



漂流せし後は、大和なる親族をたよりて、佐保庄に住家求しより、今の半六に及びて既に五代、久しく片山里に零落し、柴を賣て活業とすれば、文學に疎き身も、朱買臣が青雲の志を楽み、いかにもして舊の武士にならばやと思ひながら、家貧しければ、發跡よすがもなく、妻を娶りしより十年にあまりて、その名を緒絲

と呼べるが、これも由緒ある武士の浪人、何がしが女兒にて、はやくより孤となり、いくその艱苦に人となりたれば、物の哀れをもよくしりて、心ざまの正しき事は、富るかたにもたち勝、夫を諫め、子に教るなど、女子にはいと稀にて、一子半七も、今玆はや丶十才になりつ。この兒母にや似たりけん、その性の怜悧はさらなり、容止端正にて、ふり亂したるうなゐ髮も、何となく匂やかに、垢つきたる針目衣もおのづからひなびず、柴賣の兒にはいとをしとて、親も疎きも、稱ざるはなかりけり。しかるに赤根半六は、この日樵夫に驅催されて、米谷山に到り、はからずも杪より落たるものに蹴仆され、株にて腨を打しかば、二三間轉びゆきて、篠竹の中に臥たるを、樵夫どもは只一足もはやく歸らんとて、慌忙し程に、半六が篠竹に、覆ひ躱されて臥たるをしらずして歸りにければ、遂に半日あまり昏絶て、物の善惡をわきまへず。日も暮れ夜も深ゆくま丶に、梢を過る山風に楠の葉末の露吹はらひ、はら／＼と降か丶れば、一滴の白露、半六が咽喉に入りて、俄頃に甦生し、こはそもこ丶はいづ地なるらんと、惑ふ心を推鎮めて、つら／＼けふの事を思へば、打れし時に昏絶たるを、樵夫等が情なく、うち捨て歸りけん、さ

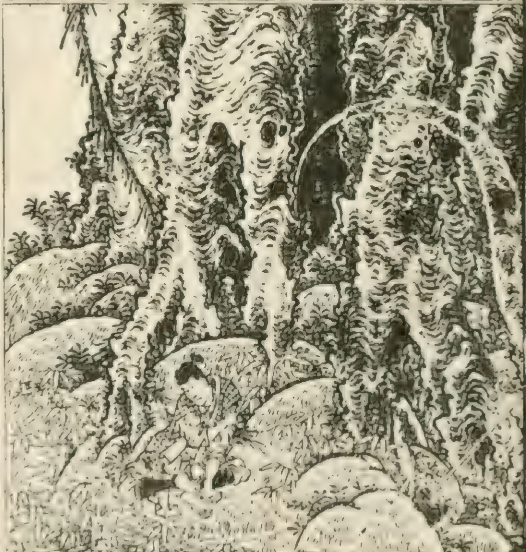
米谷山に半六木精を認る圖

按ずるに、法苑珠林卷第五十八に、白澤圖を引て云、木之精を彭侯と名く、狀黑狗の如く、尾なし。又千歲の木は、その中に虫あり、名けて賈詘といふ。狀豚の如くにして、兩耳あり。烹てこれを食へば、狗の肉の味の如し。



ても危き命拾ひぬとひとりごちて、やをら身を起せば、耳に馴たる溪水も、何となく凄く月さへ入りて路もわかねば、ます〳〵呆れて茫然たる折しも、誰とはしらず、楠の下にうち相語聲すれど、野干玉の闇なれば、咫尺の間もたえて見えず。あやしや、彼處にもわれに等しく、捨られたる人ありけんとて、既に呼びかけんとせしが、なほ疑ひて、その相語を聞くに、一人がいふやう、いかにわが神力を見たりや。縦領主、この國中の人を聚して來たるとも何程の事をしいだすべき。と、ほこりかに聞ゆれば、一人答て、いな〳〵。さはいひそ。もし知れるものありて、蓁日して足下を燃らせ、その根に鹿尾菜の煮汁を沃ぎかけ、しかして後斧を入れなば、今の廣言もかひなからんといふに、はじめの一人、いたく驚る聲音にて、やよみわそぎ、忌ことはいはぬものぞ。事のその期に及んには、天なり命なり。もし縁故をしりて、われを斫ものあらば、終には活みころしみ思ひしらせてんといふを、一人聞もあへず、呵々と冷咲ひ、しふねきことをいふものかな。みづから天命なりとしらば、怨ずとも止ねかしと回答て、その後は音もせず。半六これを聞て思ふやう、三輪山の神木に、千歳經る杉ありとは、世の人のしる所に

又上に山林あり下に川泉ある地理の間に、精を生す。名けて必方といふ。狀鳥のごとく、尾長し。これ陰陽變化の生ところなり。抱朴子に云山中の大樹、よく語る者は、樹の語にあらず、その精の名を雲陽といふ。其名を以呼ときは、則吉以上今下に述る所、みなこれらに因れり。



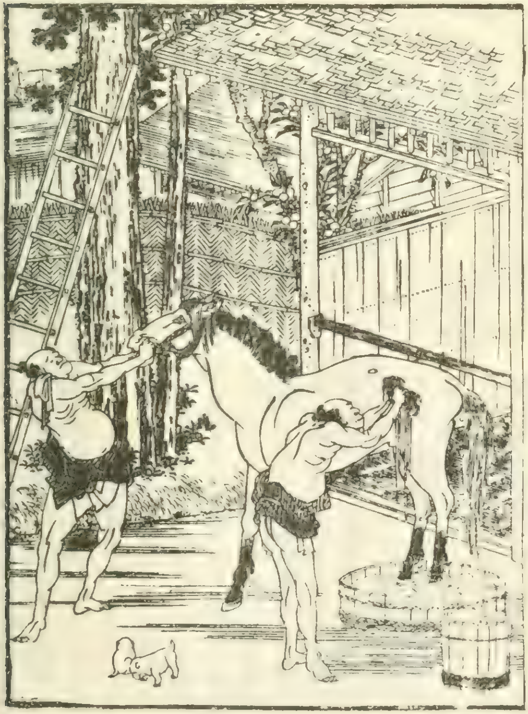
して、今みわそぎと呼かけしは、三輪の杉にて、彼處の木精、この楠が殃せらるゝを訪るなるべし。こはよき事聞ぬと歡び、その夜の明るをまちて山を下るに、思ひの外健にて、足の運びも常にかはらねば、只管に路をいそぎて、佐保の庄へ歸りけるとぞ。

木精の怪異

半六が妻籬篠は、米谷山にて、人夥死たりと傳聞て、安き心もあらざるに、日は暮るゝに夫は立もかへらざれば、いよゝあやしみて、一子半七を走らし、彼此と問すれども、定かにしれるものもなし。あまりに思ひかねて、通宵門方に立望つつ、明ゆくころより、里人を郷導とし、彼處に索ゆくべしとて、飯も常よりははやく炊ぎ、その准備してありけるに、半六恙なく歸りしかば、嵐の後に花をながめ、雨夜に月を見る心持して、やゝ痞を撫おろし、半七とともに、夜べよりの心づくしを語り出て、歡ぶこと限りなく、いづ地にか宿りたまひたる。歸らじとならば、人に言傳ても聞え給ふべきに、寢よというても半七が、共に目睡であかし侍り。安堵て後はなか〳〵に、恨むも心やりなるを、あしうな聞給ひそといふ。半六は只莞然とうち咲つゝ、草鞋脱すてて地炉の邊に坐を占、きのふ直に歸らざりしは、如此々々の故なりとて、墮たる人に蹴仆され、息絶てありし事、一五一十を物がたり、さていふやう、常言に過の功名といへるがごとく、われはからずも、身を立、家を興すべき時を得たり。その故は、昨夕米谷山なる篔竹の中に臥して、楠の木精と杉の木精がうち相語を聞に、彼楠を伐らんには、蟇目をもて木精を蟄らせ、鹿尾菜の煮汁をその根に沃ぎかくるときは、斧を入るゝに容易しといへり。わが先祖は、弓馬の達人なりと聞るが、鳴弦蟇目の射法、家に傳へて今に喪はず。われ彼楠を斫て、領主の所感に遇はゞ、絕たる家をも興すべし。この事人にもらしたまふなと密語にぞ、半七は父の怪談に膝をすゝめて、顏うち瞻りたるに、籬篠しばし深念して、木精のみづから滅ぶべきよしを聞せしは、いと怪しくも侍るかな。しかはあれ、領主の威勢をもて、伐ことのかなはざるを、おぼつかなき言をたのみて、爲損じ給はゞ、世の胡慮となるのみならず、罪得がましき所爲ならずや。又爲課たまふとも、その祟あらんには、わが身はさらなり、半七がゆくすゑも不便なり。又祟なきにもせよ、先祖は楠どのに仕て、譜代相傳の家隷なりしと、日來いひ出たまひながら、心きたなく榮利を計りて、さすがに古主の名にし負ふ、楠を伐たまはんは、名詮自性の理とやらん、末榮ふべくもおもはれず。智惠才學にも及がたきは、世の

人の貧福なりと思ひたえ、時を待たまはんこそ、遙に心安からめ。まげて思ひとどまりたまへと、いと貴くも聞ゆるを、半六聞も果ず頭をうち掉、物を思ひ過すは、婦女子の生平なり。いにしへの人も、天の與るを取ざれば、却禍を受とこそいへ。尋常にして彼樹を伐らば、祟を禀ることもあらん。法をもてするときは、怕るゝに足らず。又楠は古主の名氏なれば、伐らじといふこといと愚なり。世に久米氏に仕る人は、主の名氏なりとて、米を食はでやはある。かくいふもわが身ひとつの爲にはあらず、御身こゝに嫁りてより、既に夥の春秋は經れど、身には襤褸、口には糠、それを惱しと思ふ、氣色も見せ給はねど、わが子ながら人なみに勝たる半七を、世にもしられぬ深山木となし果ん事、いとをしからずや。婦恰悧て、牛賣そこなふとぞいふなる。かゝらん筋は、御身がしるべきにあらず、何事も打まかせ給へと回答て、聽納べうは見えざりし。實や信言美ならず、美言信ならず。愚なるは良藥の苦きを惛み、才あるもの亦人の諫を阻事多し。縮篠は、日來より、思ふ事をば思ふがごとく、よくもあしくもなし果る、夫を今も諫かねて、袖に露漏る言の葉も、たらはぬこのみ、とばかりに、しひてはふたゝびいはざりけり。かゝりしかば半六は、次の日奈良に赴きて、蟻松典膳が宿所に呼門、これは佐保の庄なる、赤根半六と呼るゝものなり。密に聞え奉るべきことありて參れり。願くは對面を許させ給へといはせければ、典膳聽て呼び入れて、その故を問に、半六は膝行頓首し、領主近曾、米谷の楠を伐らせんとし給ふに、怪異ありて果し給はずと、風聲するは實なりや。僕輙く、彼楠を伐て進らすべし。この事申さん爲に、推參いたせしといふ。典膳これを聞て冷笑ひ、汝いかばかり膽の太くて、かゝる戲言をまうすぞ。彼樹を伐らんとしつるものは、立地に命を隕せり。是木精の祟なり。博士の說に、木の精を彭侯といふよし白澤の圖に見えたりとぞ。もし命に缺替あらば許すべしと回答するに、半六容をあらためて、さては僕が身の賤きをもて食言とし給ふ歟。いかで貴人に對ひて、故なき事をまうすべき。千歲經る樹には、木精ある事をしり給へども、これを伐るに法ある事をしり給はねば、勞して功なきのみならず、夥の人を傷ひ給へり。しかるにわが家、不思議に木を伐る法を相傳す。領主の御威勢は、肩を比るものもなく、百萬の强敵といへども、屑とし給はざる御身をもて、唯一株の楠を所果さず、世の胡盧となり給はんは傍痛し。僕世々この國の民として、妻子を養ふこと、みな領主の賜なりと思へばこそ、命を的にして、寸忠を竭さんとするに、用られざるは、不遇ならめ。

せひに及ばずと呟きつゝ、いと本意なげに出んとするを、典膳忙しく呼びとゞめ、もし汝がいふごとくならば、莫大の忠節なり。しかれども究てなしがたき事なれば、かるがるしくも信せざりし。いよゝ爲課すべきやと問ば、半六莞爾として坐に復り、生とし活るもの誰か命の惜からざらん。もし木精の祟を恣ば爲課すといふとも、僕立所に死すべし。又爲課せずは罪せられん。かく危きをしりつゝ申すをもて、虚實を察し給ひねと、憚る氣色なく答しかば、典膳やうやくに納得し、まづ縁由を聞えあげんとて、半六を退がし、直に出仕して、首尾を述しかば、順昭大に歡て、われも愁にして巳なん事を、朽をしくは思ひながら、眼前なる祟に怕れ、重て彼樹を斫れといふとも、衆人承引じとて默止せしが、半六とやらんか訴詔、聞くもいと潔し。まづ彼が隨意はからはして、成ならざるを試み、いよよ爲課せたらんには、一廉の賞錢をとらすべし。とく〳〵といそがせば、典膳うけ給はりて宿所に退き、ふたゝび半六を呼出して、領主の仰を説しらし、汝が一世の浮沈こゝにあり、思ひ侮りて爲損ずることなかれ、事成就せば賞錢は、望のまゝなるべしといふ。半六額つきてこれを聞、僕元來賞錢を願はず、先祖は河内の



正勝に仕て數代武夫なりしかど、楠家沒落ののちは、いと窶々しくなりて、祖父のときより柴を賣、活業といたせども、更に武士の志をうしなはず。あはれ此度の恩賞に、舊の武士となし給はゞ、先祖への孝、身の面目、これにます事候はじ。もしその期に至りなば、よきに執し給はれかしと希ば、典膳點頭て、その事は仔細なし。汝いづれの日に、かの樹を伐るべきと問ば、半六答て、明日より七日が間は、齋して法を行ひ、第八日に至らば事成るべし。しかれども、件の大木を、僕一己にて伐らば、徒に日を費さん歟、既に斧を入れて、その祟なきをしらせ進らする後は、樵夫等に仰て斫らせたまへといふに、典膳しばし僂て、さらば第九日めに、われ樵夫等を將て彼山に到るべし。かならず時日を違へなと、互に固く約束し、半六は暇給はりて、おのが家路に歸りけり。さる程に赤根半六は、



次の日より齋して、蟇目の射法を修し、第七日めに至りて、鹿尾菜の烹汁を桶に汲入れ、米谷山に擔ゆきて、楠の根に沃ぎかけ、さて詰旦、斧麻索などを用意して、ふたゝび彼樹の下に到れば、奇なるかな、さしもの大木、一夜の中に凋て、落葉堆高く散積り、株の間に、大やかなる穴出來て、蜂に等しき蟻ども、數限り

もなく、その穴を跂出て、皆悉く死してあり。半六はこの形勢を見て、且怪み且歡び、さてはこの楠の木精は蟻なりけり。楠の古木には樟腦を生じて、虫の著ことなしといへるは、虚言にてありけるなり。今は心易しとひとりごち、落葉を掻き集つゝ、用意の火繩をさし着て、死たる蟻を焼に、殊さら大なる蟻一隻、なほ死もやらでありければ、前夜、三輪杉と相語へるは這奴なるべしとて、斧もて額を打砕き、もろともに灰となせば、煙高くたち昇りて、西北を斥て空引つゝ、半天にして消失たり。正に是、蟻の思ひも天に昇りて、冤を天帝に訟ると、世の常言も故あるかな。むかし董昭之は、蟻を助て福を禀、又桓謙といふものは、蟻を殺して禍にあへるよし、並て捜神記に審なり。輪廻應報の理は、蟻といへども漏ることなし。されば半六、この樹を伐て、一旦身を立るに似たれど、終に南柯の夢と覺て、その兒半七憂苦に迫り、父よ母よと鳴蓑虫の、蓑屋が軒の木からしに、花も紅葉も難波なる、身のよしあしを謡るゝ、これその緣起なり。

丹波都が傳

そのとき半六は、只管雀躍に堪ず、翌は約束の日限なるに、われまづ一枝をおろしおきて、この奇特を示さずは、その功他人に奪れなん。しかなりしかなりとひとりごちて、さら／＼と攀上り、街道のかたへさし出たる、枝に索を着て、木の上に身を固め、腰なる斧を脱出して、丁々はつしと斫程に、思はず斧の柄を脱て、麓へ礑と落る折しも、伊賀路より大和を經て、山城へ出るにやあらん、脊に裹の袱も、小妻木綿のやゝ破れし、檜の笠に竹の杖、木立いぶせき山路を、たどる／＼來る盲人ありけり。親子と見えて只二人、年まだ七つか八つばかりなる、小女兒に手を引れ、谷より木垂し楠の下を過らんとする處に、半六がとり落せし斧、彼盲人が笠の上に閃きかゝり、頂をさつくと砍折れ、叫苦と一聲叫びもあへず俺に仆れしかば、女兒は周章つゝ、爹さまなうと呼活る、涙に聲も立つ居つ、せんすべもなく見えたりけり。浩處に籬篠は、猛き夫を諫かね、わきてこの日の覺つかなく、午飯運ぶに假托て、三里の路をはる／＼と、半七を伴ひつゝ、はしなく麓に望かゝり、吐嗟と走りよるべなき、旅客が血に塗れて、生死も定かならざるを、いかにせんとて泣叫ぶ、稚き人の心の中、思へば見れば痛しく、彼三峡の夜の猿、腸を斷ばかりにて、共に濡せる袖の隙より持る割籠をとり落せば、半七もかひ／＼しく、左右りに立繞り、濟んとするに藥はなし、心づきなく籬篠が向上る峯の樹上にて、枝をおろすは夫なり。さてはと曉ばいとゞなほ、淺まし

くも悲しくて、此首の二人は聲を揚、わが夫なう、爹々なう、とく下り立て旅客を、救ひ給へと呼びかくる、聲は谺に響あひて、手にとるごとく聞えしかば、半六ます／＼心騒ぎ、件の索にとり携りて、杪ながらに下り來たり、この爲體を見て色をうしなひ、やをら盲人を抱き起して、腰に着たる吉野釜より、用意の定心丹をとり出し、その口に含すれば、篠篠はもて來たりし、土瓶の温茶を飲せなどし、さま／＼に介抱せし程に、盲人やうやく息ふきかへせば、女兒は涙をかき拂ひ、やよ爹さま、心地はいかにおはすると、いふをしるべに擦寄せ、おさんは恙なかりしか。誰人ともわきまへねど、人里遠き山路にて、かゝる介抱を受ること、世に有がたき庇なりと、いふ言毎に息きれて、苦痛に堪す見えければ、半六はその耳に口をさし着、いかに旅客、われは佐保の庄にて、赤根半六と呼るゝものなり。しかるに領主の仰によつて、この峯なる楠の枝を、目今おろさんとするに、思はずも、斧の柄脱て、傷し事、過なれば勘解に出なし。心つよく思ひ給へ。わが宿に伴ひ歸り、療治して進らせなん。何國い人ぞ名告給へと、問も面なき風情なり。盲人苦しき息の下に、潸々と落涙し、しらぬ大和路にたどり來て、仇にもあらず恨もなき、人の手斧に命を隕も、みな前世の惡業ならめ。わが身は原鎌倉の管領家、扇谷殿に仕て、丹波太郎孝基といひしものなるが、故あつて浪人し、世わたる機のなきまゝに、夫婦倶に談合して、ふりにし跡のつぎねふの、大和物語にあらねども、難波の浦の蘆苅が、あしかる縁しと思ひたえ、女兒おさんが三歳のとき、飽ぬわかれに妻を去、富貴の家に給事、發跡る日もあらば、ふたゝび環會んとて、華洛へ上せし次の年、わが身はからず眼病を患ひ、遂に瞽者となりしかば、稚き女兒を養育に、便宜なければ髮を剃、わかかりしとき嗜たる、四すぢの絲に繋ぎとむる、命かひなき琵琶法師、丹波氏をそのまゝに、丹波都と名告て伊勢に赴き、北畠家の城下に足を駐め、佗住居すること五年あまり、六年の今に及べども、別れし妻はいかにかしけん、音耗なきも理なり。わが知己より移住て、伊勢にありともしらざるべし。しらせんと思へど彼も又、いづ地にかあるやらん。華洛といひしを心あてに、女兒おさんに手を援し、引折て短き旅衣、妻に逢んと思ひたちて、竹の都をまどひ出し、只一すぢの竹杖も、折れては死出のやまと路に、露と消なんはかなさよ。とてもかくてもこの痍にて、存命べくも思はねど、恩愛のやるかたなさ、泣かにとすれど蟋蟀の息の内より惑ひぬるは、只この女兒があればなり。八歳とはいへど年弱にて、十一月七日の出生、丹波太

郎孝基が女兒おさんと、父が手づから書つけたる、臍帶は今もなほ、女兒が項に掛さして、護身嚢の中にあり。又わが脊負し狀包は、異國傳來の樂器にて、その形阮に似たれど阮ならず、三條の線をかけて彈に、千萬無量の音を發す、鄭聲なれど味あれば、只私に三味線と名つけ、年來秘藏するといへども、世に稀なれば人もしらず。されば夫婦が別れしとき、この三味線の撥を折、再會の紀念とせし、その片割はこゝにあり。親のなき子と憐まれ、人の情に生育ば、戀しゆかしとおもひ子の、おさんが母に名告あふ、割符ともなるべければ、これは女兒にとらせたし。望がましき事ながら、この三味線はわが骸と、共に瘞て賜給へ。もし後の世にこの樂器の、行る〻日もあらば、朽ぬ名のみを呼れんと、いひ遺す言の葉は、今も大和の城下郡、三味田の里に佐保の庄、丹波市と呼ぶ三の鄕を、三條の線に象りしは、是この線故なるべし。輪條聞も痛しくて、世の形きなきもいゝ限り、われに增す事なからめと、思ひしより、げにはかなきは、人さまぐの浮世ぞかし。過とはいひながら、盲し人をあやにくに、斧もて殺すは仙人の、恭に見惚れつゝ幾世經し、故事とは逆にて、これも木精の祟かと、思へば人のう



へならず、よしやこの儘果給ふとも、女兒御は吾儕が子とも嫁とも守育て、なき父の跡世にしある、母御に環會し侍らん。窶なしけれどわが夫も、由緒ある人にて侍るなるに、一子の半七も、今茲は十歳になりぬれば、わが子の愛に人の子を、思ひくらべて痛しや。これも過世の因縁なりせば、成長後半七に、おさんどのとやらんを妻あはして、この過を償ひてん。寃を散て成佛あれと、聲も涙にかきくれて、いひ慰れば半六も、瞼をしばたゝき〳〵、觚條いしくもいひつるよ。われこのおさんを養育て、半七が妻とせずは、この身も終に刄に伏し、汚名を踏頭に遺すべしと、思ひ定めし誓言に、丹波都はいと頼もしく、思ふ心をいへばえに、岩間の石滂洞々に、溢れし鮮血はとどまれど、留めかねたるこの世の名殘、おさんはよゝと泣沈み、目も見え給はぬ爹さまの、ひとりはさこそ便なからめ。



わが身もろとも冥土とやらんへ、伴ひ給へとかき口説、聲のみ聞と今般にも、見ることかたき女兒の貌、胸苦しさを思ひやりて、引退る觚條が、勸る念佛に半七も、うら悲しさに堪かねて、親子親子が掌と、聲とを合して彌陀佛と、唱る中に聞えがごとく、丹波都は絶斷けり。げにや世路は旅に似て、ゆくも歸るも別

れては、しるもしらぬも終の友、後るゝも先たつも、夕の煙とたゝぬはなし、はかなきものは命なり。さる程に籬篠は、おさんを賺しこしらへて、半七とともに伴ひかへれば、半六は日の暮るゝを待て、密に丹波郡が屍を扛もてゆき、佐保の願成寺に葬つ、彼が遺言にまかして、三味線を其處に埋め跡叮嚀に弔けるとなん。

三七全傳南柯夢巻之一終

三七全傳南柯夢巻之二

稚兒の姻夫

蟻松典膳覺度は、曩に赤根半六が、米谷の楠を斫らんといひし事、なほおぼつかなくはあれど、既に約束の日子にもなりしかば、夥の樵夫を將て彼山に赴けば、半六は先たちて、山の半腹にこれを待うけ、慵く爲課せたるよしを聞えしらして、もろともに樹の下に到るに、さしもの大木、俄頃に凋然と落葉したるを、一二の枝を斫おとして、幹にもところ〴〵斧の刄を入れたりけり。典膳はこの形勢を見て、且怪み且歎び、半六を見かへりて、人の才あると才なきとは、貴賤をもて論じがたし。野夫にも功者ありとは其許の事なり。曩の廣言空しからずして、領主も本意遂給ふ事、吹擧せしわが身に于て、こよなき面目なりとて、只管嘆賞して已ず。半六聞て、聊も誇たる氣色なく、こはみな領主の御威福によつて、思ひし隨に成就せり。なほこのうへの庇には、はじめ願まうせし事を忘れ給はで、よろしく聞えあげ給はるべしといふに、典膳點頭て、そはこゝろ安かれ。ともかくもして、其許の夙願を果せん事、わが胸中にありと應しかば、半六ます〳〵阿諛、さて樵夫に對ひて、見らるゝごとく、己既に法をもて木精を滅却し、その枝をおろし、その幹に傷つけて、祟なきをしらしたれば、おの〳〵力を戮して挽給へかしといふ。樵夫等は面あたりに、この奇特を見し事なれば、みなもろ共にこゝろ安堵て、しばしが程は、稱讃して鳴も已ず。この日を手斧はじめとして、件の楠を挽に、七間四面の版二枚、五間四面の版四枚を得たり。その餘材、梁とし棟とすべきものは、枚擧に遑あらず。順昭縁故を聞て感悦斜ならず。只この一木をもて、茶亭を造らし、これを南柯堂となづく。その號、南柯の蟻の故事に、因るぞ不思議なる。蟻王の宮殿に額あり。南柯堂の三字を寫したるよし、搜神記に見ゆ。有在間に典膳は、頻に半六を吹擧し、彼が先祖を尋るに、楠正勝の老黨たりしとぞ。子孫凋落て五世に及ぶといへども、今に武士の志を喪ず、弓馬の奥義も、をさ〳〵家に傳へ、務の武士にならまくほしうはあれど、家貧しくて、さるよすがもなし。縱家に巨萬の財を積とも、金銀は失ひ易し。此度の恩賞には、一握の米にもあれ、領主の祿を給て、家臣の數にも入る事あらば、本望なるべしといへり。げにその面魂物の用に立かねまじう見え候に、あはれ莫大の御庇をもて、戟を執、鑣を牽し給はゞと、信

だちて申すにぞ、順昭氣色よく諾ひて、能を擧、士を薦るは、汝が職なり。功あるものをいかで賞せざらん。事の序あらば、召出すべきに、まづ當坐の賞錢をとらせよと仰ける。しかるに嫡男吉稚丸、今玆十歳になりたまへば、鎧の袯初あるべしとて、もつぱらその用意をせらるゝに、年果の上旬に及びて、茶亭も成就したりしかば、順昭是彼慶賀の折をもて、赤根半六を召出し、五十貫の新地を賜りて、郡山の北方なる、五條の村主を命せらる。かくて半六は年來の宿志を遂て領主に拜謁し、丹波郡が女兒おさんを、妻の姪なりと稱へ、籬篠半七とともに將て、五條の宿所に移り住み、手馴し斧を刀に換て、一郷の成敗を管り、秣の運送など點檢するを身の務とし、日毎に奈良へ出仕する程に、いと下ざまなる司なれど、その郷にしては威勢あり。この爲體に、佐保の郷人等はさらなり、親も疎も、こよなき立身なりとて羨ぬ。夫渴するもの水を求るに、水を得て飽ときは、更に湯を求め、湯を得て飽ときは酒をおもふ。是人慾の愼がたき所なれば、半六既に望足りて、領主の家臣となるといへども、その職役の卑を厭ひ、いかにもして近臣の列に入り、なほ時を得て、政事に與る事もやとて、暇ある日は親しく典膳が家



に交加、彼人の爲に志を運て、冬は障子の隙を張更て、寒夜に爐の火を吹、夏は屋裏なる蜘網を掻拂て、炎天に井を曬し、奴僕のごとく奔走して、その寵に媚たりければ、典膳ふかく歡びて、二なき人にぞ思ひける。この典膳が妻の名を敷浪と呼て、家子曾太郎は九歳、女兒園花四歳にぞなりぬ。凡人子をもつときは、その愛他の子にも及すが、人情の常なれば、典膳夫婦も、半六が兒子半七が蘭闌て心ざまいと怜悧を傳聞て、折々それが安否を問に、半六は既に便宜を得たりと歡び、信たちて答けるは、しらせ給ふごとく、某原艱苦の中に養育たれば、子を敎る事も心に任せず、今の身になりては、子どもによき事を見も習し、君の爲自の爲に、文學武藝も、その心がけなくてはと思ひながら、師を擇ことの容易からねば、なほおのがまゝに生育ば、久後とてもおぼつかなし。男の童は、走まはりも健輕にて、召仕給ふには、老たるかたに勝ることもあるべし。折ふしは半七を呼し給ひて、茶のかよひなどつかまつらせ給ひなば、彼が爲には大なる僥倖なりと、只管媚ていひこしらへ、次の日半七を將て、典膳が第に到るに、曾太郎はよき陪侍得たりとうれしみて、そのほとりを離さねば、典膳夫婦も、又惜からずもてなしつ、



食事なども、曾太郎ともろともにさして、わが子のごとく慈みぬ。しかるに箍篠は、その志夫に似ず、半七がしば〳〵奈良へ行て、典膳が家に止宿するを、傍痛く思ひて、ある日夫にいへりけるは、わが身幼かりしとき、父がわかき人に、もの教給ひしを聞侍りたるに、君に仕るもの、公事にあらざれば、執權の門に到らずとなん。しかるに蟻松ぬしは、一の老臣にておはするを、日來親しく交加給ふすら、心あるものはなめげ也とて爪彈し、僻る人は猬しとぞ思ふめる。何事も新參にておはすれば、木にも附ず草にも附ず、只信やゝにその職分を守りてこそ在すべきに、年齒ゆかざる半七さへ、彼處へ立入らし給ふはいかにぞや。稚きものは心つきなくて、人の怨を惹出す事も多かり。かゝる筋は、御佛に對て經を說がごとく、わらはが申すまでにはあらねど、おぼつかなさに聞ゆなる、恐惶みづからこゝろし給ひねといふ。そのいふところ理あれば、半六は少しはちらひたるおもゝちにて、その後は半七を奈良へ將てゆかず。典膳夫婦はかゝる事をしらで、彼方より迎の人を遣しなどすれば、箍篠はよきに回答て、けふは灸し侍れば參がたし。翌よりは、手習らひ讀書の入門さし侍ればと、いひこしらへて奈良へ遣らず。又おさんにも、半七とともに手習ひさせ、わが子人の子の分別なく、慈愛むほどに、おさんは半六夫婦を主のごとく親のごとくに敬ひ仕て、孝順更に比なし。箍篠は、この擧止を見てふかく歡び、言の叙あるときは、半七おさんにいふやう、御身二人、かくひとつに生育こと、過世よりの緣しにやあらん。日來いひ聞しつるごとく、久後はかならず夫婦とすべし。しからば半七は彼が孤なるを憐み、おさんは又わが夫なりとおもひて侮らず、互に睦しうし給へといひ諭すに、二人の童はよくそのこゝろを得て、あらそひ逆ふことなく、出居も諸共にして、外の童とは遊ばず、只一つの果を得ても、擘て二つにせざればたうべず。こゝをもて近隣の人も、その故をしりて、げに容姿の端正なると、心ざまの怜悧と、いづれ劣も勝もせず、こはよき一對の夫婦なりと稱る毎に、二人は顏を赧して、物の蔭に躱れけり。かくてその次の年の秋のころ、箍篠が左右の腕、俄頃に腫て苦痛に堪ず、病てより七日が間湯も水も咽喉に下らず、心持死ぬべくおぼえしかば、枕方後方にありける、夫と二人の童を見かへり、さて半六にいへりけるは、わが身此度の病着は、癒べうもおぼえ侍らず。つら〳〵來しかたを思ひつゞくるに、病つきたりしは去年の秋、御身が米谷の楠を伐らんとて、蟇目の法を修しはじめ給ひたる日にて侍り。これやこの身に報いけん、左右の腕の疼めるは、一二の枝を斫おとせし、祟をわが身一つに稟て、夫

兄のうへに恙なくば、是にます僥倖なし。しかはあれ、なからん後の心がかりは、半七おさんが事ぞかし。願くば篶篠が生の内に、妹脊の縁しを結して、儀式は整すと、面あたり盃さしてたびねといふ。半六聞てうち點頭、楠の鼎ならんと思へるは、究て御身が惑ひなれど、半七におさんを妻あはする事は仔細なし。しかれども、おさんはまだ十歳にだも足らず、半七もやゝ十一歳の童なれば、ゆくすゑ遙けき事なれど、御身が心やりともならば、そはともかくもすべし。折しもあれ今日は黄道吉日なり。目今彼等に、盃させなば、おさんが父の亡魂も、よろこばしうこそ思ふらめ。しからば御身が命を延る功德、是にまさる事なしと應て、俄頃に半七に衿着せ、おさんに衣被更さして、篶篠が枕方の左右に對ひ坐らし、焚婢に土器の用意さし、煖鍋に銚子とりそへて二人が間にすゑたり。そのとき篶篠は、やゝ身を起して、わが子とおさんをと見かう見、涙を潸然と落したるが、又莞爾とうち笑て、寔に似つかはしき夫婦なり。玉椿の八千代までも、睨みかたらひて、子孫夥く儲給ふべし。言あらためていふにしもあらねど、過にもせよいぬる秋、丹波都どのはわが夫の、斧をもて命を隕さしたれば、おさんが爲には寃家なれど、その過を償んとて、貧きときより養ひとり、今半七に妻あはすれば、半六どのは丈翁なり、將養育の恩、高きを省て等閑にな思ひ給ひそ。半七は亦義理ある妻といふを忘れず、久後いかなる事ありとも、生涯おさんを見捨給ふな。かくいひしらするとも、成長て、思ひ忘るゝ事もありなん、互に忘れ忘られざる、證ともなるべければ、今おさんが護身嚢と、半七がとを交易て、膚離さずば妹と夫の、誠を神も憐み給はめ。殊におさんは半七が、年歳とその名に象りし、十一月七日の誕生と、爺々の手づから寫し給へる、臍帶もその裹にあり。半七は又おさんが、名にし負たる三月の、しかも三日の誕生にて、わが書つけたる臍帶は、護身嚢に納てあり。時にとりては是も又、奇くも故ありげなり。女の妬てゝろなきは、百の拙きをかくすとぞ。貞女義男の故事は、賢き人の記しおける書見てもしり給へ。他し人に心を移して、母が遺言に悖るものは、不孝の子不義の婦なり。よく臍帶の臍をかためて思ひ愆給ふべからず。是は是夫婦がうへの誡ぞかし。おさんは又三歳のときに、別し母御ありと聞ば、神佛に祈念して、ひかれよるべは三味線の、撥を割符に環會、親子の名告し給へよ。半七も力を竭して華洛へ上る序あらば、外ながらかの人の、往方をより〳〵道はいふもさらなり、聞ゆべきは只是の閑定め、その夙願を果さし給へ。忠孝のみ。命長くて諸共に、五十年忌の季まで

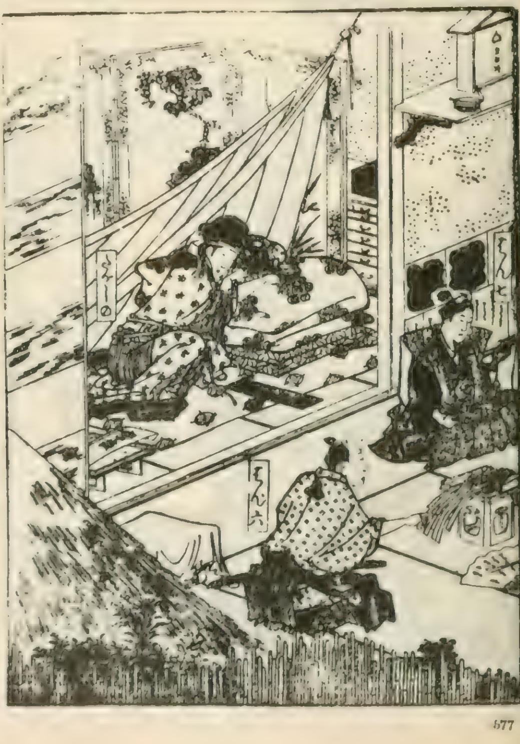
もわがなき後を弔給はゞ、草の原にていかばかり、うれしからめと思ふにも、名殘をしやとばかりに、掩ふに餘る恩愛の、涙に袖はそぼぬれて、項に掛たる子どもらが、護身嚢をとりかへさし、夫のかたへ會釋すれば、半六やがて土器を、おさんがほとりにさしつくる、三々九度の勸杯も、今ぞ戴く親の恩、半七も諸ともに、母の教訓身に入て、涙に濁す味酒の三輪の苧環くりかへす、婚姻の式果にけり。かくて後篇篠は、一言ものいふことなく、みづから臨終を待たるが、その黄昏に、彌陀の寶號十扁ばかり唱つゝ、卒然として綷斷ぬ。思ひ設し事ながら、今更に淺ましくて、半六が愁傷はさらなり、半七おさんは、天に叫び地に倒れて哀悼み、紅涙空しく枕を浸せり。さてもあるべきにあらざれば、半六は次の夜に、妻の送葬形のごとく營に、丹波都が一周忌もこの日に當るをもて、共に經誦して、追薦の佛事を執行ひ、よろづ寂寥ぞ日をおくりぬ。



なら坂の佞人

待とはなしに半六は、妻の忌果しかば、舊のごとく出仕して、典膳が宿所に変加する事、はじめより親しかりけり。しかれども半七は、往に籍篠が阻て後は、奈

良へゆくことなかりし程に、ある日典膳夫婦、半六にいふやう、何事の意に稱ざるやらん、久しく半七を見ず。わが子どもらも徒然がちなるに、曾太郎閑花と諸共に、南圓堂へ參らして、遊山させばやと思ふなり。母のなき子は、衣服何くれの事も便なからめ。登はかならず半七を將て來給へ。五七日こゝに留るとも、何か苦しかるべきといふ。半六聞て、今にはじめず、かく懇切に聞え給ふ事、親子が僥倖なり。亡妻はその性遠慮あるものなりければ、稚きもの丶親く參る事、罪得がましき所行なりとて、呼し給ふを固辭さふらひし。實ふよしを聞えしらせんには、半七もさこそ歡び候はめ。近きに將て參り候べしとて、五條へ歸るとやがて、半七に緣由を物がたりて、奈良へゆけといふ。半七は母の遺言を守りて、出るにも入るにも、おさんともろ共にせんと契りしかば、ひとり奈良へ行ことを歎



ばず。おさんも又彼を放て遣ることを喜ばず。いたくいひ懲せば、潸然と泣しをれて、立もあがらざりける程に、半六ほとく〳〵もてあまし、半七を曾太郎が武藝の師に入門さして、日每に奈良へかよはし、それを假托に、典膳がかたへ遣しけり。かくてぞおさんも留ることを得ず、半七も推辭がたくて、つとめて奈良へ赴

き、稽古果て後、會太郎に伴れ、典膳が家に日を暮す事も多かり。元來怜悧き童なれば、あるじの夫婦その動止を見て、只顧に稱讃し、ある日典膳は妻の敷波にいふやう、女兒園花は僅に五歳なれど、女の童は大人めくも早ければ、孫はまづ彼よりぞ見るべき。しからば今より壻を擇て、生涯を安らかに過させんは、親の慈悲なり。われ日來半七が擧止を見るに、その才の長たる事、廣き奈良の藩中に、二人とあるべうも覺ず。彼が父半六は、新參にて、五條一村の吏なれば、わが女兒を遺嫁すべきものならねど、かゝる筋は、期に及びて、ともかくもなりなん。人は得がたくて喪ひ易ければ、まづ半六に情由をしらせて、彼が回答を聞ばやとおもふなり。御身がこゝろいかにぞやと問に、敷浪しばし尋思して、半七が事は、わが身もさおもはざるにあらねど、近屬人のいふを聞侍るに、半六が妻世にありし時、それが姉の女兒とやらんを養育、久後はわが子に妻あはせんとて、假に婚姻の盃さへ、事濟したりとぞ。もしこの言實にて侍るならば、相語給ふともかひなからん。よしや彼人、御身が祿高くて、威權あるを羨み、異議なく承引事ありとも、幼きよりいひ名づけし、妹脊の中を引裂て、園花を遺嫁んは、讒を惹の媒な



らめ。よく〳〵思めぐらし給ひねと回答すれば、典膳聞て冷哭ひ、半七はなほ総角にてあるに、婚姻をとり結べるといふ事その謂なし。こはともあれかくあれ、面あたり半六に問てこそといふ折しも、若黨何がし、外面より、障子を細やかに押開きて、赤根氏の詣來給へりと告るにぞ、典膳聞もあへず、それこなたへといへば、若黨は障子を旧のごとくにして退出、敷浪も次の間に入りぬ。浩處に咳二つ四つして、半六は書院の縁頬傳ひに入り來りて、その安否を訊問、さていふやう、このごろは、木の葉落しとやらんまうして、師走よりも却て寒けし。これをめさるべくは、菜毛を引て進らすべしといひかけて、携來れる袱包をうち開きつゝ、さし出すものを見れば、鶫一番を青き目籠に入れたり。典膳はその志の淺からざるを歡び聞え、ちかく爐のほとりに招きて、四方八方の話の序に、半七が怜悧を



稱ていふやう、われ久後は女兒園花を半七に妻あはせんと思ふ、心がまへありといへども、其許の内室世にありしとき、姪女とやらんにいひ名づけて、半七が妻と定おきたるよし、風聞あるをもて、ふかく望を失へり、その事實否なりやと問。半六はこれを聞て、滿面に笑を含み、こは思ひもかけぬ事をうけ給はるものかな。

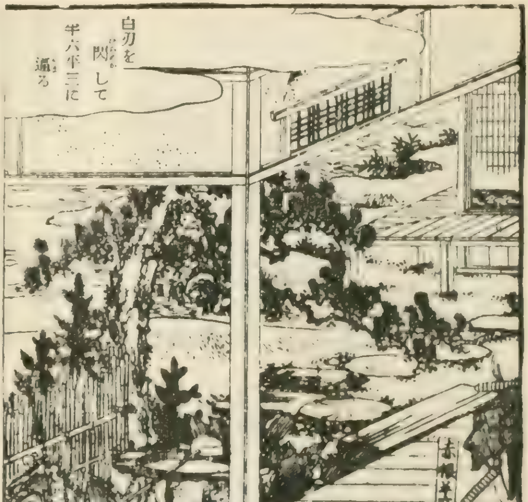
新參の半六が兒子に、一の老臣の息女を、妻あはし給はんと宣するは、それこそ實言とも聞え候はねど、亡妻が姉の子の、孤なるを養育事、これは人となる後に、壻を招て、その家を繼すべきものなれば、半七が妻にはしがたし。しかるを彼等が年紀も似つかはしくて、もろ共に生育を見て、さる風聞をするものありとも、みな推量の說なれば、論ずるに足らずとて、誠しやかに陳ずれば、典膳忽地膝をすゝめ、しかるときはこの婚緣整ふべし。さはいへこの事、今は人にしらしがたし。半七も齡二十を超、園花が二八の春を迎るまでは、なほ遙けし。そのころには、其許も一等をすゝみ、半七も新に仕て、秩祿父に勝せんとも、又親子もろともに、舊の柴貢になさんとも、わが心一つにあれば、よも僞りは宣はじ。いよ〳〵其許に異儀なくは、けふは事のはじめなり、めでたく一獻酌べしといふに、半六ふかく歡て、もしこの婚緣を破ることあらば、意の隨に罪なはし給へ、たえて恨なしといふ。そのとき敷浪は、屛風の後より出て半六に挨拶し、女兒が婚緣とゝのひて、歡しきよしを聞え、やがて彼鴨を烹さし、なほ種々の殽を添て、賓主二人酒もり遊び、終日相語樂みけり。かゝりければ半六は、はからずも立身の便宜を得て、はや老臣にも昇進たることゝちしつ、遂に籬篠が遺言を用ひず。慾には義をも誓をも打忘れて、ます〳〵典膳夫婦に佞ひ、只願わが兒の成長を待わびて、引も伸さまほしきにつけても、つら〳〵と深念するに、よしなき義理に絆されて、籬篠が臨終に、おさんを半七が妻と定めおきたれば、彼等童ごころにも、母の遺言なりとて、いと睦しくものすなるに、年闌ては、いよゝ引離に便なからん。そのときこの故障によりて、蟻松氏の婚緣、いたづら事となることあらば、わが親子いかなるからきめ見んも量がたし。しからば今もして、密におさんを追ひ失ひ、後の患を絕にはしかじと、心一つに思ひ定めてしが、事は漏るゝに易しとて、かる〳〵しく手を動かさず、もつぱらその便宜を窺ぬ。こゝに亦、近曾奈良の大佛のほとりに、笠松平三といふ藥商人ありけり。この平三は原浪速人にて、旅芝居の俳優を興行し、伊勢の古市、泉州堺、尾張の年魚知、美濃の稻葉山はさらなり、周防の山口、長門の下關、すべて都會繁花の地は、到らざる曲もなかりしが、去年の十月、五七人の俳優を將て、西國へ赴く折しも、難風にその船を覆され、俳優等はみな大魚の腹に葬られたるに、その身は辛じて、筑紫船に助乘られ、奇しくも活殘れども、遺らぬものは行李路銀にて、忽地生活の本錢をうしなひ、いかにともせんすべなさに、とかくして奈良まで立歸り、川上の南にかすけき旅宿を

もとめ、日毎に大佛のはとりに出て、あら筵布まはし、鈹靈藏の膏藥を鬻ぐ。その打扮いかにとなれば、前には首尾具足したる熊の皮を着て、熊膏藥といふ三個の文字を、筆黑に寫したる、紙の幟をおし立、柿染の頭巾を戴て、丹田山木綿の古布子に、でんちうの袖なしをはおり、あるは貝に入れ、或は紙に押舒たる膏藥を虚せきまでにならべおき、鳥獸の聲音を似せて、往來の老弱を集合しかば、人みな彼を口順て、熊の平三郎とぞ稱ける。折しもあれ赤根平六は、高天神のほとりに所用ありて、大佛の門前を過るに、件の平三いと暖氣なる日南方に座を卜、彼此人に對ひて、高やかにいふやう、世に鈹戦の藥は夥あれど、僕が製するところは、見たまふごとく熊の脂に、家傳の藥種を煉あはしたれば、衣服に附ず又痒爛せず。一たび用ゐし人は、一切腫物の根を斷こと、その功神のごとし。是則、周の文王の夢に見給ひたるその熊の脂を用て、三國の名醫、華陀が製しはじめしを、羿といふ人の妻、嫦娥が盜で月の中に走るとき、宋人が川に出て、布を洗ふに通をうしなひ、彼人に傳授せしを、呉客がその法を百金に買とつて、軍に勝たる妙藥なり。僕弱かりしとき獵夫なりしが、ある日山中にて異人より、この藥方を授りしかば、世の助ともなれかしとて、此度人の薦にまかし、南都に出て賣弘るものなり。この膏藥一貝を買給ふ人あれば、鳥獸の聲をつかひわけて聞しまゐらすべし。往昔より鹿笛鶯笛などとて、笛をもてその音を似するはめづらかならず。凡鳥獸は、引音曲音、急促音の三つありて、不止半濁の音なれば、かならずしも人間とおなじからず。彼笛をもて似するごとき、譬ば、犬のわんと鳴、鼠のちうと鳴、熊のはんと鳴、鹿のひいと鳴、又烏のかあ〱、家鴨のぎやつぎやつ、すべて急促ところに隱々と響ある、眞の鳥獸に比れば、笛の及べきにあらず。よくその妙を得たるもの、唐山にては、孟嘗君が鷄鳴の客、日本にては、かくいふ平三只一人のみ。もしこの中に、犬の叔母さま、家鴨の姉御などゝも在さば、僕が申すところ、虚なりや實なりや、よくしりておはすべしといふに、立こみたる老弱咄と笑ひて、膏藥を買もあり買ざるもありて、おのがさま〲にわかれ去りぬ。赤根平六は、襟より人の後方に立在て、竊に平三に睛を着、忽地に謀を生して、人の別れ散を待、竊て平三を物蔭に招きて聲を低うし、言卒衞にはあれど、われは領主の御内にて、赤根何がしと呼るゝものなり。今彼處にて、汝が面影を見るに、世を逝給ひしわが兄に、よく似たるのみならず、その聲音さへつゆ違はねば、不覺になき人のなつかしきぞかし。その膏藥は、殘りなく買ふべき

に、汝われに伴れて、一盃を酌んやといひかけて、懷中の紙入より、金一兩をとり出で與しかば、平三大に歡びて、こははからざる僥倖なり。孔子の陽虎に似、阿遲志貴の天稚日子に似、壹岐直眞根子か、武内宿禰に似たる故事は、俳優にもすることあれど、みな愛たき祥にしもあらぬに、おのれかしこくもよき人に似て、立地に賣藥を賣盡し、剩酒を給はらんと宣はするを、爭か推辭候べき。誘給へと應しかば、半六歡びて直に布ちらしたる筵を卷をさめさせ、もろ共に酒店に到り、奧まりたる座敷に入りて對ひ居りぬ。且くありて、女の童二人、銚子に盃とりそへて、殺よき程にもて來たり。そのとき半六は、女の童に對ひ、けふは高天神の會日なるに、客も夥なれば、汝等酒も添あへざるよ。ものはしくば掌を鳴らすべきに、とく行かしといふに、女の童はふかくも推辭ず、こゝろつきなきは、けふの事なれば恕し給ひねといひて、外のかたへ退出ぬ。かくて半六は、平三と酒酌かはし、やゝ半酣に及べるとき、後方を見かへりつゝ密語けるは、獨に汝を、わが兄に似たりといひしは詐にて、實は見るところありて、一大事を賴み聞えん爲に、こゝへ誘ひ來れるなり。まづこれを受納給へとて、ふたたび懷中より五兩



の金をとり出し、盃に添てとらするを、はしなくもとらず、一大事と宣すれば、問ずとも猜したり。佚賤しき活業はすなれども、四十に至るまで惡に與せず人を傷らず、五兩の金は得がたけれど、命に換て何かはせん、まづ緣出をしらし給へ。御行ふべき筋ならば、承引事もわらん歟と、いはせもあへず眼を瞬り、小膝立なほして、柄に手をかけ、やをれ平三、男子と見ていひかけたるを、聞て後に應んとは、武士を武士とも思はぬ一言、弓矢八幡堪忍ならず、かく女々しき汝とはしらず、可惜脣を動して、こころ見られしこそ安からね。觀念せよと罵りつゝ、刄を閃して砍んとするを、銚子をもつて拄れば、酒はこぼれて散亂し、わが身に係る一生懸命、かい潜り〱、刀尖丁と受とめて、呵々と冷咲ひ、命惜ければこそ轍も與せね。助かるまじき命ならば、後の禍も患るに足らず、楚と賴れ候べし。



白刃を閃して半六平三に逼る

忿を刀ともろ共に、をさめ給へと反かへし、騷ぬ男だましひに、半六やをら刀を引、天晴手練、わが睛は違はず、まづその金を納て後、事審に相語べし。とく〱といそがせば、平三金をとつて廓中に擲、財に絆されて與するものは、事の破るゝに及びて物の用にたちがたし。さる徒と思ひ給ふか。縱金は給はらずと、

見もしらぬ人に東道されて、半日の醉を竭せしから、その報をせでは稱ふまじ。何にまれ心くまなく聞え給へと諾しかば、半六ます〳〵感激し、みづから金を拾ひ集め、赤銅納子に銀もて、柏葉に大の字の紋つけたる割掃枝を、鍔の間より抜出し、扇を開きて、金とゝもにそのうへに載せ、われ全く財をもて、其許を誘ふにあらず、この二品は、當座に寸志を表するのみ、まげてこれ納め給へ。事成就せば、別に報いをすべしとて、叮嚀にすゝむるにぞ、半三しぶ〳〵金と掃枝をとつて懐に挾しかば、半六やゝこゝろ安堵て、額を合し耳をとりかはしつゝ、閑談數刻に及び、遂に女の童を呼て、酒を篩殺を添さし、更に四五杯をかたぶけて、酒店を走り出、やがて東西に別れけり。この日は夥の客、立かはり入かはりせし程に、女の童もいそがしきに紛れて、彼二人が密談を、聞ことたえてなかりしとぞ。

大柏の權輿

しかるにその次の日は、鑰篠が百箇日の逮夜にてありしかば、赤根半六は、法師に經を誦し、又親しき友どちを招きて、物食せなどするに、日もくれ客も歸りにければ、半六は、半七とおさんにいふやう、佐保までは、四里にあまる路なるに、汝たちまだ稚ければ、一度も母の墓參をさせざりし。翌は卒哭忌にて、佛事結願の日なるに、みなうち揃ひて、願成寺（今地の字とす。）へ詣べし。つとめて起給へといへば、半七もおさんも、いとほいある氣色にて、その夜は持佛堂に香もりそへて、もろ共に回向しつ、常よりは遲く臥たれど、まだ曉やらぬころに起出て、浴し髮を結せ、用意既に整ひしかば、半六は一挺の轎に二人の童を乘して、奴隷等に舁し、みづから轎に引そうて、願成寺へぞ詣ける。いそぐとすれど、冬の日の短きに、彼處に到りても、是彼に時をうつし、歸る比及には日も西山に傾にぞ、半六は轎夫どもが、杖する隙も待わびしとて、途より半七おさんを歩せ、右よ左よとていそがせば、二人の童はなか〳〵に、歩より歸るが氣もはえけしとて、岩屋谷の東なる、豐田の山本を過るに、天さへ結陰て、今に暮もしつべきやうなれば、足の運びも殊さらにすゝみて、九折なる山路を、喘々たどる折しも、一叢繁き枯尾花の、さら〳〵と戰ぐと見えし。その形犢の大さしたる荒熊、忽然と跳り出、矢庭におさんを引銜、路を横ぎり驀直に、雄手の山へ走てゆく。奴隷等はいふもさらなり、半六大に驚きて刀の柄に手はかけたれど、左右なくは追留ず、あれよ〳〵といふ間に、熊も人も見えずなりしかば、半七奮然と笠を擲り、續て山に登らんとするを、半六忙しく引留

め、やゝ孩兒、氣色を變て何地へゆくぞと、問れて父を借と見かへり、そは宜ふまでもなし。看々おさんを猛獸に銜去られ、何の面目ありて、五條へ歸り候べき。かなはぬまでも追蒐て、讐を刺留んとするの外他事なし。其所放給へと回答もあへず、ふり斷て追んとするを、半六は留たる袖を放さず。汝稚けれども、流石にわが兒なり。武士の家に生育ものは、誰もかくこそあるべけれ。しかれどもその身の力を量らすして、匹夫の勇に健るものを、世に野猪武者とて笑ふぞかし。よしや心は勇くとも、十一歳の小腕にて、彼荒熊に蒐向んは、薪を負て火に近づき、石を抱きて淵に臨む、それよりもなほ危し。おさんが事は惜めどもかへらず、汝もろともに命を隕さば、父が哀傷はいかばかりとや思ふ。われさへかくてあるものを、何事も命運の係るところと思ひ諦め、けふはこのまゝに立歸り、さて獵夫等に狩獵さして、おさんが讐を復すべし。あしかれとて留んやは。親の諫を用ざるは、大なる不孝なり。とくとく歸り給へといふ、理に迫られて、半七は眼中に涙を含み、山を向上げて嘆息し、せひなく思ひとゞまりけり。かくて赤根半六は、わが子を將て五條へ立歸り、その夜の中に令しらして、郷の獵夫を催し、次の日より、豐田岩屋谷の山々を狩獵さするに、元來この處は、高峯にもあらねば、熊などの出あるく事、絶て聞も及すとて、獵夫等は不審みながら、七日あまり獵くらしたれど、終に本意遂ずして已ぬ。半七は又おさんが爲に熊を殺して、怨を雪ざる事を、いと遺憾思ひて、只管彼が不孝を悼み、その日を亡日と定めて、母の位牌とゝもに、旦夕香花を手向るを、身の務とせし程に、父の半六大に諫て、稚きものには似げなくも、忌々しき念佛三昧かな。よしやいかに悼とも、死したるものゝ歸るにあらず、努思ひたえ給へといふ。半七は父の仰に悖らん事をおそれて、その後は只しのび／＼に看經し、樂しからすぞ日をおくりぬ。是はさておき、おさんはかの日、豐田なる山本にて、荒熊に銜去られ、山に入る事十町あまり、更に活たる心持はせねど、今はかうと思ひしかば、なか／＼に泣も叫ばす、心の中に神佛を念じつゝ、彼がまにまに引れゆけば、熊は山ふかく入りて、おさんをやをら扛おろしたるが、直に啖んともせず、忽地人のごとく立て、まづ後方を見かへるにぞ、おさんはいよゝ驚さ怪みながら、迯とも脱さじと思ひて、わろびれもせずうち瞻り居るに、彼熊人の語るがごとく、いかに小女さぞな怕しかりけんといひかけて、みづから胸のあたりより、その皮を引めくりて、くるくると衣を見れば、年の齢四十あまりなる大男が熊の打扮したるなりけり。尋常の

女の童なりせば、男々しき擧止は得すまじきに、おさんはこの形勢を見て打も驚す、さては熊かと思ひつるに、獸にも劣りたる、盗賊にてありつるよ。汝わらはを奪ひ去りしは、花街などへ賣らん爲か、縦元を喪るゝとも、穢れたる隊に入るべきかは、殺さばはやく殺せといふ、その氣色從容として、死をだもおそれぬ健氣さに、彼男は舌を卷て不覺に感嘆し、世に怜悧女子はあれど、いまだ御身がごときを見ず。われは偸兒杜騙にもあらす、人にたのまれて、又人肉經紀にもあらず、人にたのまれて、かくは圖つるなりといふ。おさん聞て、こはこゝろも得ぬ、汝わが衣を引剝せす、又花街へ賣んともせずは、伴ふともその かひなからん。そも何人にたのまれたる、その名をしらせよといへば、大男うち點頭つゝ、短刀に着たる割掃枝をとり出し、小女これを認れりやと問に、おさんなほ不審みながら、手にとりて熟視れば、赤銅鋤子に銀もて、柏の葉に大の字の紋あらでなぞやといへば、いなその掃枝のぬるは、まがふべくもあらぬ、養父半六とし密に御身を殺せとて、われを相語、嚮の丶掃枝なり。汝いかにしてこれを持る。のごとくはからはしたり。かくのみにてさればわらはが猜せしに違はず、盗賊なはなほ疑ひ思ふべし、その故は如此々々



なり、箇様々々なりとて、奈良にて半六に酒を强られ、金と笄を得たる事、またおさんを家に養育ては、半六親子が仇となるべき情由あれば、密に殺せとて、たのまれし事、首尾を説しらし、わが身は笠松平三と呼れて、賤き活業はすれど、不義の黄金にこゝち惑ひて、人を殺すものならず。しかはあれ、承引ずは、その座を去らせじと責む。實に思ひ定めたる氣色なれば、已事を得ず領掌し、一旦しか計るといへども、いかにもしてその小女子を、助けんものを、と深念しつ、事こゝに至りしが、今御身の擧止を見るに、壯士も及びがたし。よりてますく彼人の奸惡を推量り、更に御身のいとをしくて、情なくも棄るに忍びず、もし一身をうち任んとならば、直に華洛へ將て上り、ともかくもして養育べし、御身がこゝろいかにぞやといふ。おさんは緣故を聞て、はじめてよゝと聲を立、淚あやなき袖の間より、はふり落るをかき拭ひ、その人も身まかりて、今は一人の養父の、わが身いかなれば、迴世の惡業ふかくし老ゆき給ふ後までも、反哺の孝を盡さんて、母には三歳の年に別れ、父は非命にと、思ふかひなく思ひきや、殺んとまで世を去り給ひ、生の母ともたのみてしに悩るゝ、何過のあら熊に、たばかり

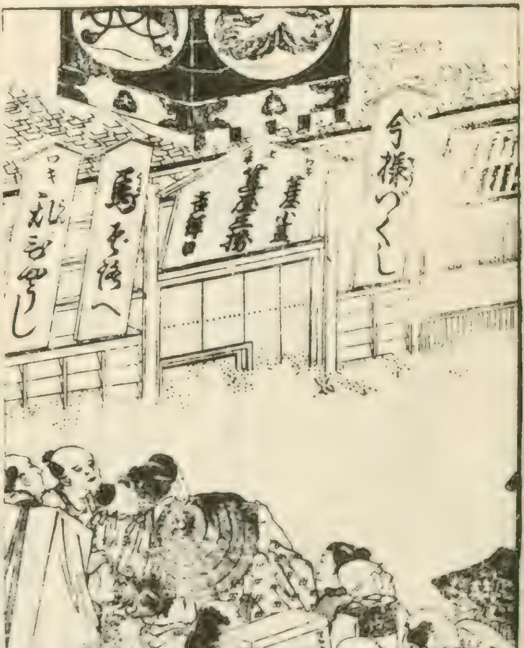


とらし給はんとは。よしや御身のこゝろもて、命は助らるゝとも、わが身ありては養父のみか、半七どのゝ爲ならずと、聞ては五條へ歸りがたし。よるべなき身を憐て、養ひとりて給はらば、千辛萬苦の世を經るとも、親とし仕て再生の恩は化に思ひ侍らじ。また九歳の女の童が、ませたりと聞給はんが、わが身にも又情愿ありて、齢さかりになるとても、遊女妾はいふもさらなり、人の妻とはなりがたし。こはふかき故ありて、命の惜きもその爲なれば、くはしうは後に申さめ。この一條だに承引給はゞ、賤き活業に世を渡るとも、推辭侍らじと回答しかば、平三ます〳〵嗟嘆して、われ色をしも好ねば、年は四十にあまれども、妻を娶らす同胞も、なきにつけては折ふしの、病わづらひに老後の事、思へば心ほそかりしに、天この小女を給はる事、はからざる幸福なり。心安かれ、富貴の家より、緣し結んといはするとも、御身が情愿は破るまじ。日もはや暮るゝに、とく〳〵とて、やをらおさんを脊負ひつゝ、夜に紛れて山を走下り、直に華洛へ上りて、



半六が與たる、五六両の金を本錢とし、此の活業に年月をおくりぬ。こゝに予て、おさんは、父丹波郡が事、母の事、半六篙篠が事、又如此〻〻の故によつて、い

とはやくより平七と妹脊の縁しを締し事、審に物がたれば、平三はその至孝と、貞操の凡ならざるを感激し、且その薄命を憐み、いかにもして彼が母に環會せんとて、をり／＼その往方を索しとぞ。このころ華洛に、笠屋夏といふ舞妓ありけり。原是白拍子の流にて、世に舞々と稱ふ。はじめ越前の幸稚が子弟、華洛に上りて俳優をなせしより、今の夏に至てもつぱら行はる。彼幸稚は桃井直常の子孫なりといふ。舞の詞は、戰場の故事、世々の景迹、戀慕の癡情を述て、その音曲三十番あり。こゝをもて管領執事といへども、酒宴の席にはかならず彼夏を招き給ひし程に、その家おのづから衣食に富ぬ。又平三は、年來旅芝居を挊了たれば、夏が家に疎からず。さるによつて、おさんを彼が弟子として舞々を習するに、わづか四五年にして、その技を極たるが、顔色の艶妖なるを猜ては、月も忽地雲に隠れ、容姿の匂やかなるにけおされては、花も羞らふ風情なれば、人みな類に稱讃して、その舞さへ、却夏にも勝りといふ。さる程に平三は、おさんが二八の春のころより、彼を舞々にしたて、、夏が家號を冒らし、世に勝るゝといふ心にて、笠屋三勝と名づけ、洛東祇園の社頭に於て、女樂を興行したりしか



ば、見物の老弱、雲のごとく集、霧のごとく立こめて、その繁昌、昔貞和五年の六月に、足利尊氏卿、四條河原に棧敷を構て、田樂を見そなはせしも、かくやとおぼえて夥し。こゝをもて、三勝が舞の手に、都鄙の人を招きよして、その名高く聞え、牛打童も口順て、これを見ざらんものは、人も蔑り、我も耻かはしく思ひけるとぞ。三勝は世の人に面を見らるゝ事、いと淺ましくはあれど、父丹波都が臨終に、しふねくも聞えおきし、彼三味線の因果にて、今舞々となるならば、割符の撥もいたづらならで、母にあふべきよすがとも、なりもやせんと見物の老女には晴を著れど、それかと思ふ人もなく、加旃大和にて、一とたび夫と定てし、半七が事なつかしく、華洛へ上り給ふとも、互に年長稚貌うせ、見忘れやし給はん。もし名告あふしるべにもと、半七が家の紋なる、柏の葉に大の字を、舞の衣裳に縫せしかば、世の人更に渾名して、大柏と呼びしより、後世舞々の名目となりて、幸稚大柏の二流に分る。大柏の事雍州府志に見ゆ。今大頭と稱るは大柏の訛ならんか。この大柏の打扮は、頭に天冠を戴て、身に狩衣を被、腰には一振の太刀を佩て大口袴を穿、大小の鼓にあはして舞踏せり。凡俳優に、傀儡、田樂、刀玉、雲舞、連飛、輪脱、縮小桶、比丘彦等、種類多しといへども、今の歌舞伎は舞々より出て、歌舞伎の名は却ふるし。文献通考假婦技に作。かくてぞ平三は、昔には立まさりて、世を安らかに渡るほどに、只、三勝をわが家の瑤錢樹と鍾愛して、みづから舞の衣裳を脊負ひ、その履をとつて、主君のごとくに管待を、三勝はわりなくとゞめて、こは物體なくも侍るかな。かゝる所爲をして、わが身を笑はし給ひそと、しば／＼諫れどもなほ聽ず、ます／＼他事なく冊きけり。

三七全傳南柯夢卷之二終

三七全傳南柯夢巻之三

臥房の胡越

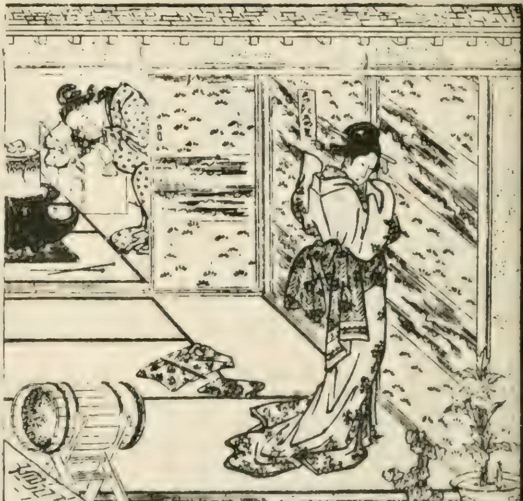
光陰矢のごとく、又梭のごとく、秋去春来たつて、蟻松典膳が女児園花は、既に十五歳にぞなれりける。父の典膳は、豫より赤根半六が一子半七を、女婿にすべき准備あるをもて、主君績井順昭へ、をり〳〵彼親子が事を吹擧し、ある日又まうすやう、半六五條の村主を承つてより、多年露ばかりも私なし。加之兒子半七は、文武の才藝人に超たり。僕日來その擧動を見るに、近習に召使れて、しかるべきもの歟。夫俊徳を明にして、能を擧、不能を矜給ふは君のこゝろにあり。しかれども長流船横つて、渡すものなくば、夜光も又燕石に劣りなん。賢を薦るは愚臣が微忠なり。用ると用ひ給はざるとは、尊慮にまかさるべうもやと、言語を竭して聞えあげしかば、順昭これを諾なひて、すなはち半六に五條の縣守を兼さし、新に半七を召出して、嫡子吉稚丸の近習にぞ召使はれける。典膳贔屓の沙汰をもつて、彼親子を汲引すといへども、半七が心ざま怜悧て、忠孝拔群なる事は違はず。その爲體を見て、老臣もこれが爲に羞、主君もこれに對して容を改ること多かり。さるによつて半七は、いく程もなく近臣の上にすゝみて、職祿忽地父に超たり。績井の家隷多かる中に、文武の道に心を委ね忠信無二なるものは、厚倉二郎太夫友春と赤根半七とのみ、たえて肩を比る人なし。しかるに半七は、今玆やうやく二十歳なり。その年紀をもて論するときは、厚倉にも勝れりとて、心あるもの、これを稱讃ざるはなかりしとぞ。かくてその年の終に、蟻松赤根の兩臣、その子の婚縁を、主君へ願ひ奉り、明春園花を嫁らして、秦晋の好を締んとて、假に媒妁の男をこしらへ、迭にその用意をなんいたしける。そのとき半六は、わが子をちかく招きていふやう、蟻松氏はわが親子には恩人なり。既にその蔭を蒙ること久し。倘彼人の吹擧によらずば、われも御身も山兒にて朽果なん。それさへ忝きに、此度最愛の女兒をもて、御身に妻せんと宣はするなり。今日は殊さらに吉日なれば、双方の願書を上るにこそ、このよしを聞えしらせんとて呼びぬ。歡び給へかしといふ。半七聞て、しばし父の顔をうち瞻り、仰には候へども、某むかし母の遺言によつて、おさんと婚縁を結びしかど、彼不幸にして猛獸に銜去らる。しかりといへども、今に活るや死せりやしらず、萬に一つも彼女

子、恙なくて世にあらば、母の遺言に悖るのみならず、彼に對して不義なり不信なり。男子三十にして室ありといへば、妻を娶る事いまだ遲からず、よく〳〵思ひめぐらして後に回答し奉るべきに社と、いひも果ざるに、半六忽地氣色變てみえたるが、また思ひかへしけん、呵々とうち笑ひ、御身がいふ所理あるに似たれど、そは甚迂遠し。今に于て、おさんがこゝにあるをさしおきて、この婚縁を結ばゝ不義なり、いかにせん、彼荒熊にとられ、その屍を索得ずといへども、はや八九年音耗なし。枯たる朶に花は開とも、それが存命て歸り來ん日は、ありともおぼえず。さるを假初の義理に繋がれ、一女子の爲に子孫の後栄をおもはざるは惑なり。且上世には、人究て命長し。このゆゑに三十にして娶るとも遲からず、降れる世はしからず。人生五十年、七十は稀なり、はやくより子を生せざれば、父母衰老して、その子を敎るに心ゆかず、御身學問したれば、和漢の故實はしりぬべし。しかれどもそは杓子定規なり。わが子あしかれとて、かくいはんや、おさん悩しとて、この婚縁を結ばせんや。みづから思慮して、惑ひをとり給ひそといふに、半七はなほ頭を低、袴の間に手をさし入れ、默然として居たりしが、且し



情を含て園花半七に傅

ていふやう、御慈のふかき事は、わきまへて候へど、信義の係るところ、いかにともすべなし。公事にあらずして、權家に入るは、士たるものゝ恥なり。況て一の宿老の婿となりて、肩を聳さんは嗚呼がまし。人の貧富は天なり命なり、よしや生涯薪を樵て世をわたるとも、心清くば、朱買臣にも耻べからず。死灰の人に愛せられんは、愛られざるにしかず、銅臭を羨て好を締は、禍の端なり。まげて今しばし待せ給へといふを、半六聞もあへず、大に赤て聲をふり立、やをれ半七、汝賢だちて、しば〳〵わが旨に悖る、母の遺言のみを重じて、父を否し、さゝやかなる義理に羈れて、親に愛を失へとは、何の書に記してかある。われ一旦蟻松氏に約諾して、この婚縁を定たるに、今忽地にこれを破らば、彼人豈たゞに止んや。それこそ大なる禍の端なれ。所詮彼人に憎れては、わが親子は活がたし、是非に及ばず、といきまきて、面色赧なり又蒼くなり、猛に刀を引提つゝ、外面へ走り出んとするを、半七忙しく臂を伸して、袴の裾を引とゞめ、おん憤の



甚しきも、家の爲をおぼすとあれば、あしう聞奉るにあらず、三たび諫て聴ざれば、號哭して従へといふ本文あり。此うへは御意の随にてありなん、固辭候

はじ。固辭候はじとまをすにぞ、半六やうやく氣色を和げ、聞わきたらば仔細に及ばず、わが家の幸福これにます事なし。汝日來の怜悧に似ず、かばかりの事に思ひ惑ひしは、年の弱き故にこそ、いよいよ婚姻整ひなば、夫婦睦じく、舅姑に愛せられ、立身の階梯を踏み放そといふに、半七は畏みて、仰うけ給はり候ひぬ。御心やすかるべしと應しかば、父は大に歡でやがてこの日、願書をもつて、半七が婚緣の事を聞えあげし程に、その年の終りに、双方故なく主君の許を稟、婚姻は正月の中旬と定めて、まづ聘禮をとりかはしぬ。さるからに半六は、屋棟を葺更さし壁を塗らし、席薦の面を新にさし、紙窓を貼かへなどするに、いとゞ短き冬の日を、心いそしく暮しけり。又蟻松が家には、園花が衣服調度の儲に黃金を費し、すべて美を盡さすといふことなし。是彼に冬も果て、あら玉の年のはじめになりにければ、典膳夫婦はわが子の爲に黃道吉日を卜して、既に婚姻の日にもなりぬ。園花やゝ大橋に渡らんとするとき、敷浪は女兒にいふやう、婦は三界に家なし、百年の苦も又樂も、みな他人にまかする身なれば、只柔順にして妬なきを、恒のこゝろとせよとは、物の本見てもしり給ひつらん。されば幼なきときは父母に従ひ、成長ては夫に従ひ、老ては子に従ふなる、この三従はいふもさらなり、五つの障もありといへば、ひとりの女兒と愛やかせし、親の權威を笠に被て、夫に倦れ給ふなよ。一とたび夫の家を出ては覆水盆にかへりがたし。他し心を愼て、誠を竭して齊眉給へ。やよやよと敎諭せば、園花はしば〳〵應て、さていふやう、稚きより汝が夫ぞと、聞えしらし給ひしが、ふりわき髮も肩過て、かくまゐり齊眉ものを、なでう等閑に侍るべき。よしや身の愚なるより疎るゝとも、生きて彼處を出でんとは、思ひ侍らずといふに、敷浪はさもこそと、うち點頭つゝ目送りけり。かくて園花五條に赴き、婚姻障ることもなく整ひつ、洞房花燭の景迹は、くだ〳〵しさに、こゝには省きていはず。園花は稚きより、見もし見られもして、生ごころつきしより、この人ならではと、こゝろに誓し頰夫なるに、年紀は二八の春にして、容止いと艷妖に、心ざまいと怜悧かりき。又半七は今茲廿一歲にして、顏色の端麗なる事は、梨花の雪をも欺くべく、文武に宏才なる事は、竹林の隊にも入るべし。往古より佳人は才子に困がたく、駿馬は伯樂に遇がたし、かゝる夫婦は、實に天緣なめりとて、或は羨み、或は妬しと思ふものも多かり。赤根が家には、歸寧舅入の吉席に日數經て、夫婦ますます睦し、見えしかば、典膳も敷浪も、よき壻を擇得たりとて、歡ぶこと限りなく、敷浪はをり

をり五條へゆくを、身のたのしみといたしける。世の中の親ごころ、なべてかくこそあらめ。しかるに半七は、父の命に悖がたくて、此度婚姻はなしたれど、おさんが生死を聞定ずは、縦縁の年は經るとも、他し女子には志を移さじと、思ひてし事なれば、園花を娶りても、たえて一夕もひとつに睡らず。さればとて又强面氣色は見せずして、晝は殊さらに他事なく相語ひ、坐するときは席を隔てず、食するときは打布をならべ、いと睦しく見ゆるほどに、半六はこの形勢におちゐて、潛に歡び、わが子はじめの言語には似ず、園花と昵みかたらふ事、かくのごとくなれば、わが家の幸福このうへあらじとて、いよ／＼嬢松に佞媚、わが子の新婦を管待すこと、只賓客のごとくせり。されば園花が兄曾太郎も、をり／＼奈良より來たりて、半七と交發こと、ますます厚かりしかば、藩中の諸士、赤根親子を偸るものなく、却阿諛ふにぞ、半七はいと心うき事に思ひける。さる程に園花は、こゝろに足らざる所あれば、靴を隔て痒きを掻くがごとく、又啞子の苦を舐るがごとく、思ひ迫れどいひもしらさず。夜はいたづらに山雞の尾上の月と在明て、對なき枕を恨つゝ、春もやゝ暮ゆきて、四月にもなりにけり。このころは、日の長き限なれば、ある日敷浪は、奴婢を將て、歩より五條に到つ、赤根が家に音なはするに、半六は奈良へ出仕して、半七は園花とともに、小坐敷に居るよしを、婢がまうせしかば、敷浪は從者を出居のかたに待し、案内もさせず、只ひとり、半開はなちたる亮隔を、二隔ばかり越てゆくに、女兒も壻もこれをばしらで、半七は紙窓の下に、物の本を閲して見かへりもせず。園花はそのほとりに侍りて、何やらんものいひたげなれば、わかき夫婦のさし對ひ居るを、うち驚さんは、心つたなき所爲なりと思ひて、立も入らず、なほ亮隔の蔭に立在て、扉を半押ひらき、胸のあたりをうちあふぎ、をり／＼彼處を闚窺たり。園花は半七に、ものいふよすがやなかりけん、たてゝ出す茶の茶杓にも、水漏らすまじと思へども、心おかるゝ夫に對ひ、世の人は物に登り、遊山して日をくらす頃なるに、物の本のみ見給はゞ、御身の爲におしかりなん。わらはがをさなき手まへなれど、これきこしめされずや、少しは心はるけくもなり給はめといひかけて、さし出す茶碗を、半七は、やをら手に承て喫をはり、けふは終日の休暇なれば、心ゆりかられて、不圖見かへりたる草紙の捨がたくて、日の闌るをしらざりし。われよりは御身こそ、うち守り居て倦もし給はめ、と回答するに、園花は、なほいはんとしていひも出ず、膝のあたりに手習て、すみつきながらまだしらぬ、閨の留

奇南の移香を、とめてはしさのわが袖へ、赧らむ顔を押あて丶、芽出し楓のはづかはしさを、やうやくに思ひ堪へ、何事の御こ丶ろに、稱はぬとも得わきまへぬ、身の愚さに人をうらむかと、おぼさんはなほ鈍ましけれど、わが身こ丶に參りて春も過、はや百日になり侍れど、眞の情を見せ給はず、さりとては又一とすぢに、強顔も聞え給はで、活み殺しみし給ふは、罵打る丶より苦しく侍り。夫婦の緣しは出雲にて、神の結ばせ給ふとぞ、心がらにてあふみなる、筑摩の鍋のかず〳〵に、結びも果ぬ緣しはありとも、吉備の中山なか〳〵に、あぢ潟の海の鯛ならで、浮たる戀はいざしらず、貞女兩夫に見えずと、稚きよりいひ諭され、亦稚きより親と親とが、こ丶ろに許せし娘夫とは、人さへしりてはべるなる、心つきなき事あらば、打も懲しもし給はゞ、かくまで物は思ひ侍らじ、推辭がたくて娶給へど、豫てながむるます花の、栞に道をかへじとて、出てゆけがしの人めのみ、愛々しげに見せたまふ歟、妬しと思へど恨みわぶ、よすがもひとり泣ばかり、目睡もせぬ枕には、涙のか丶らぬ夜間もなし。思ひほそりて化野の露と消ぬとも一言の、怨みはいはじとたしなみても、女子ごころの淺はかにも、深き歎きのやるかたなさを、憐とは見給はずや。心づよしとばかりに、一聲よ丶と泣沈めば、半七聞て歎息し、緣故を聞えねば、恨み給ふも理なり。われ婚姻のその夜より、枕席を共にせざるは、御身いとほしと思へばなり、さら〳〵忌嫌ふにあらず。その事とくにもしらせまほしく思ひしかど、明白に告るときは、親の非を擧るに似たり。とせんかくせんと、躊躇て默止たる、心苦しさは御身より、この半七こそ勝るべけれ、今は匿に匿がたし。思ふ程を聞ゆとも、かならずしも洩らし給ふな。抑われ稚きときに、結髮の女子あり。母の末期に娘と夫の盃さへさし給ひにき。それより先、わが父の愆にて、彼に親を失はしぬ。このとき孤を養育て、成長のち半七に娶し、身の罪を購んと、誓ひ給ひし事もあり。はじめをいへば如此々々なり、終を語れば箇樣々々と、その條の事は、すべて審に說しらし、さていふやう、この故に、われ此度の婚緣を、ふた丶び三たび推辭しかど、父は又、蟻松氏の庇に絆され、更に豫ての約束を、遂じとて逼り給へば、父の命にも叛がたく、又彼女子が恩義棄がたし。件の女子は九歲のとき、荒熊に銜去られて、存亡定かならずとも、ここに至て年來の志を轉さんは不義なり。所詮こ丶ろよく、御身を娶りて、父の心を安くし、夫婦の名のみにて、枕席をともにせずば、御身かならず父母に告て奈良へ歸り給ふべし。一旦わが妻となるとも、なほ原の未通女なるときは、御身に

損なし。瑕なき珠に疵を著ず、かへさんものと思ふをもて、さて強顔はありけるなり。浮世の義理の絆には、終に結びも更がたき、縁しと思ひ諦て、われから奈良へ歸りてたべ。一日こゝにあらせては、わが心一日安からず、飽もあかれもせぬ人を、離別さするが信ぞかし。一生添うと思はずば、人の妻とはなり給はじ。誑られきと思はれんも、いと面なき所行なれど、聞わき給はゞ恨も散なん。聞わき給へといふ聲も、外へ洩さじ聞せじと、近う寄ほど園花は、背向に退て輾轉、縁故をしらし給ふに、いかでかあしう聞侍らん。宣ふ事は毎事に、理ならぬよしもなし。わが身ありては御こゝろの安からぬと宣はすれば、秋にもあはで憂き鹿の奈良へ歸らんと思へども、死ずば夫の家を出じと、母にいひつる言の葉の露もまだ乾ぬその間に、われから飽て歸りしと、いはれうものかいひもせじ。われより先に結髪し、人の生死をしるまでは、他し妻は娶るとも、ひとつ枕には睡らじと、誓ひ給ひしその信を、半わが身に稟るならば、妾側室で果るとも、さぞな喜しく侍りなん。そをうら山しと思ふ程、おき所なきはこの身なり。情ぞかし、慈悲ぞかし。衾の裾、蚊帳の外、せめて後方に夜をあかさし、人めばかりは妻と呼び、夫といはせて給はれかし。心はけふより尼法師、そるべきものを梓弓、そるまで宿の案山子ぞと、鑒し給ひねと、いひかけて泣女兒より、泣じと袖を嚙縮る、亮隔越に敷浪が、苦しき義理と恩愛に、埒と女兒が誠心を、聞て忍ぶに忍ばれず、一聲洩らす咳に、けはひする人ありと見て、半七も園花も、猛に形を改れど、落る涙と泣顔を、紛らすすべはなかりけり。

華洛の僑居

浩處に、あるじ半六、奈良より退き來て、出居の方なる伊豫簾を掲、こは園花が母君、いつの程にか訪せ給ひし。半七はなどて、出も迎ざるといふに、敷浪は氣色を見せじと含笑て、いな、わが身も只今まゐりしかば、埒も女兒もいまだしらず。わらはが參るは常の事なり。うち捨おきて休足し給へといふ。是彼の聲を洩聞て、夫婦はいそしく走り來つ、わりなく奥に誘引にぞ、みなもろとも一室に入りて、賓主の坐をわかち、寒暖を述安否を問に、婢茶をもて來て敷浪にすゝめ、又主に進らせたり。そのとき半六は、わが子に對ひ、今日猛の仰事あり、汝をも召さるべけれど、頓のことなれば、おのれにいへ、と宣はせしをもて、走り歸りぬ。豫てしれるごとく、郎君吉稚丸は、質弱る病にましますなれば、はや十八九歲になり給へども、童だちにておはするなるべし。しかるに近曾、癆症めきたる氣色にて、且暮籠りがちに坐すなるに、醫療も

いまだ験を見せず。よりて老臣談合し、かゝる煩ひには、繁花の地に出し進らせて、こゝろの隨に物見遊山さし進らせなば、その功、鍼灸藥餌に勝るべし、と聞えあげしかば、大殿諾なひ給ひて、さらば潜やかに洛へ上せよとて、猛にその用意あり。しかれども從者夥召倶し給はゞ、人にしらるゝ事もやとて、これらをばいと寠し、近臣只三人と定られ、その徒には、今市全八郎、布施蝶九郎と、今一人は半七なり。老たるかたには心をおかれんかとて、物馴たる壯佼のみを擇れたれば、よろづにこゝろを用ひ守傅き奉れとの仰なるぞと、聞えしらすれば、半七は頭を低、唯々として命を稟。半六又敷浪に對て、聞せ給ふがごとくなれば、はやくとも半七は、この秋の季までは洛にあるべし。姑さへなきわが家に、弱き女子を、ひとり在せんはいと心ぐるし、母御のこゝに來ませしこそ幸なれ。けふよりは園花を奈良へ伴ひて、半七が歸るまで、預りてたびてんやといふ。敷浪は今ほのかに聞たる事もあれば、こは便なしと思へども、女兒をこゝにあらせては、いよゝ心もとなければ、すなはち應していふやう、宣ふところ、わらはがおもふにおなじ。されどけふ將て歸らんは、なほ早し。半七が鹿島立を目送らして、奈

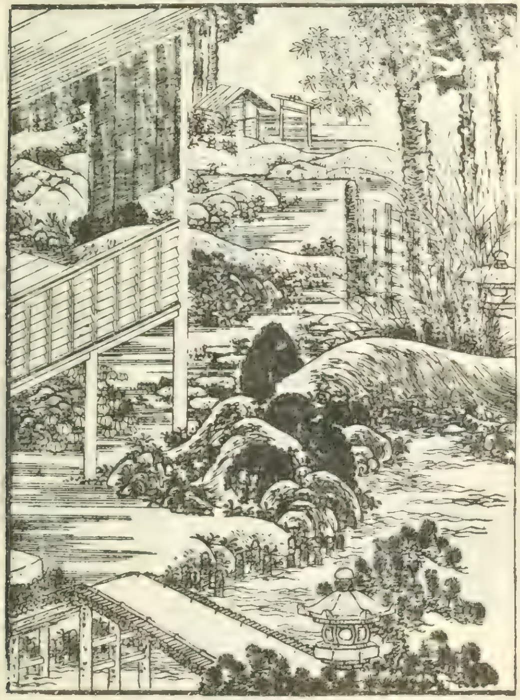


吉稚潜で洛へ上る

良へ伴ふべし。園花、さは思はぬか、といひかけて見かへれば、女兒はとかうの應もせず、いよゝ憹き氣色なり。かくて四五日ののち、吉稚華洛へ啓行給へば、半七は園花に別を告、父と舅姑に身の暇をまうしつ、同僚布施今市等もろともに、主君の轎に引そうて、若葉かきわき立出たり。時は四月の中旬にて、星まばらなる黎明に、雲間を過る杜鵑、歸るにしかじと鳴といへば、園花が身に思ひあはして、名殘をしさと本意なさに、血を吐ばかり歎きせり　さる程に敷浪は、緣由を典膳に告、女兒を奈良へ迎とりしが、いぬる日爲聞して、半七が義を守る緣故、夫婦が問答を審にしりて、歎き憂、一とたびはその志の移らざるに感激し、又一とたびは、半六がかゝる事をばふかく匿みて、年來さまざまにいひこしらへ、これが爲に、わが女兒の一生を誤てりと思ふに、腹たゝしさもいやませしが、威勢もて迫るとも、心ゆかぬものは男女の柴の、しばしば嘆息したりける。かゝり中なるに、愁にいひいでて、女兒が久後し程に園花は、形をなしとも、いへばえあしかりぬべきかとて、夫にも聞えしらに、いはでぞいとゞ身を焦す、澤の螢もせず、園花にも問で、おなじ歎きにふしすがれゆく、六月のころより心持あしと

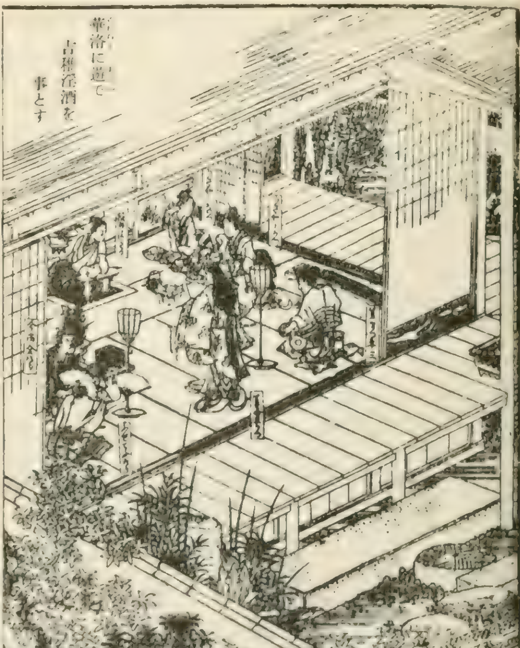


て打臥たり。さればとて終日臥にもあらず。父母はこれが爲に、藥何くれの事、さま〴〵心を竭せども、想より病わづらへば、醫師もせんすべなく、後には常の事となりて、一日は起、一日は臥、顏のほそりも日にそひぬ。是はさておき半七は、郞君を守傅て、洛に上り、洛東祇園の社頭なる、人の別業を購得て、こゝに僑居さし進らせ、筒井家の郞君なる事はさらなり、近臣の名さへ隱して、何某彼某と稱へしかば、日來大和へ交加する商人すら、これをしるものなかりけり。かくて吉稚は三人の近臣を將て、下郞に轎を扛らし、割籠をもたし、洛中洛外の神社佛閣、名所古蹟を遊覧し、心はれやかに日をおくる程に、病おこたり果、心持涓消しくなりて、生平よりも健なり。又奈良よりは、日に日に飛脚到來して、起居を尋問す。そのたび〴〵に園花は、病を推て書翰かい寫め、菓子乾鮎やうのものを、半七に贈り、又敷浪も、女兒が書翰に卷そへて消息し、衣服何くれの事、爹にまうさすと、直にこなたへ聞え來し給へ、洛は隣の國なれど、旅としなれば、



自在ならざる事おほかるべし。何頃か歸り給はん。女兒は日數のみ僂つゝ、そなたの空を瞻望くらし侍るなど、いと叮嚀にいはせしかば、半七も西陣の織物、城

殿の局などを贈り遣して、これが報とす。是より先、厚倉二郎太夫と、典膳が児子蛾松倉太郎と、互代に洛に上りて、吉稚の安否を問、又所用を承りて帰りしが、吉稚病愈ての後は、よろづを半七にうち任して、詣來ることも稀なるに、半七は七月の中旬に至りて、猛に寒熱し、假初に病臥たるが、遂に瘧疾となりて、日を經れども起得ず。いく間もあらぬ僑居に、主君のほとり近く病臥してあらんは、畏しとおもひて、今市布施に相語ひ、吉稚に聞えあげて、別に五條わたりなる、小家を借て、その身は一人の奴隷を倶し、其處に引移りて保養す。そのとき今市布施等、吉稚に密語まうすやう、半七が病煩ふよしを、奈良へ告しらせなば、老臣等心もとなしとて、別人をもて、彼に代するなるべし。その人もし君の御こゝろに稱ぬものどもにてあらば、この風景を殺し候はんか。瘧病は、大かた三七日を限りに愈るといへば、且くこの事を、奈良へしらせ給はでも、某等二人かくてあれば、何の障か候べきと、信だちてまうすにぞ、吉稚聞て、しかなりとし、終にその事を奈良へいはせず、半七にもこのよし、こゝろを得さするに、これも又、いく日もあらで愈べきに、告ずして、父にも妻子にも、物を思はせぬにしかじと



華洛に遊て吉稚淫酒を事とす

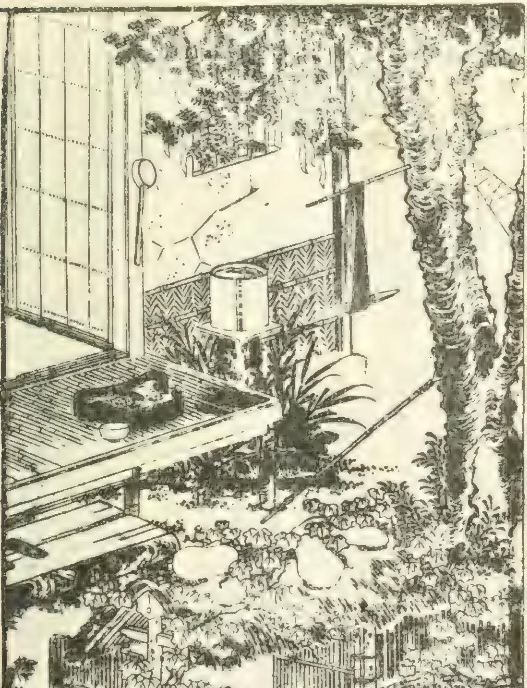
て、等閑にしていひもやらず。是ぞ奎八蝶九郎がさま〴〵の計較して、主君に淫酒をすゝめたる、張本となりにけり。そも彼今市奎八郎、布施蝶九郎の兩人は、綾井譜代の郎黨なれども、その心ざま半七には無下に劣りて、實に奈良坂の兒手柏、いと憎べき佞人なり。彼等は上に父母なく、下に妻子さへなく、只言を巧にして君を欺き、他まで媚て、傍難を思ふことなし。夫信言は美ならず、美言は信ならず。宜なり佞言は、甘くして蜜のごとし。吉稚丸なほ年少軟弱の公子なれば、これを慮らず、彼兩人を寵みて、二なきものとせり。因て此度の從者にも擇み出し、却て半七をいぶせく思ふ氣色なるに、半七猛にわづらひて、五條の旅宿に退きしかば、奎八蝶九郎はその隙を得て、吉稚に遊興をすゝめ、半はおのれらが身の樂にいたし、剩このころ、洛に名たゝる舞々、笠屋夏が女兒の小夏、弟子の三勝なんど、彩よび集合て、晝夜酒宴に侍らするに、わきて三勝は、花の中なる花にして、一とたび笑ば、城を傾るの美人なり。されば立舞ふ形容は、いにしへの祇王佛にも勝るべく、愁を含てうたふときは、雨の海棠に、春の鳥の鳴がごとく、亦是故郷を慕ふ池田の熊野、父を案かねたりし、鎌倉の微妙といふとも、これには不及と見えしかば、吉稚潛に眷戀して、思ひ惑へる氣色なるを、奎八蝶九郎はやく猜して、言の叙に、主君に私語まうし、おのれら媒つかまつるべしとて、軈て三勝に、そのよしをいひしらし、さま〴〵に賺し誘へども、三勝は舞々こそすれ、結髮たる夫に逢ずは、寡婦にて果なんと、思ひ定めし事なれば、財多き人にも靡かず、又風流士も見かへりせず、すべて金錢をもて挑み威勢に乘して逼る人の席へは、ふたゝび來たる事なかりし程に、今佞人等が、主君の爲に情を述るを聞て、うち腹たて、一言の應にも及ばず、その席の果るをまたで、心持煩しとて歸りしが、その後は呼べども絶て來たらず。奎八蝶九郎は、おもふに違ひてせんすべなけれど、彼にも問はで、主君には、翌の夜あはしまゐらすべしと、まうしつる言の已がたくて、二人密やかに談合し、このうへは勝に金をもて、三勝が身を贖ふより外なしとて、猛に與膳が方へ書簡をおくり、用金の事をいひ遣しぬ。適に半七が五條に退きてより、吉稚の遊興に費せし金、少々の事にあらず。或は五十金、或は百金、是彼の事にいひこしらへ、しば〳〵奈良より取よするに、半七が名を書加るといへども、その人は絶てこれをしらず。また吉稚は、今僑居して、よろづ褻々しといへども、元來朱門の公子なれば、金錢を手にだにとらず、多くは二人の近臣に、掠られぬるこそ鈍しけれ。かゝりし程に、奎八蝶九郎は窮

に奈良へ金の事はいひつかはしつ。まづ三勝が親を呼びて、縁由をしらせんとて、平三が家へ人をつかはしにけれど來たらねば、二人は大に焦燥、うち連だちて、二條河原なる笠松が家に到り、全八郎まづ呼門て裡に入り、蝶九郎は外面に立在て、事の容子を張ひ、時宜によつて、共に平三を說伏んとす。そのとき全八郎は、あるじに對ひていふやう、洛は世に憚ある旅なれば、主君の名はしらせがたけれど、三勝を愛おぼすのあまり、身を贖て、傍妻にせんと宣するをもて、この事を相語ん爲に來れり。身價は乞ふがまゝにとらすべし。舞々の身にしては、こよなき僥倖なれば、領承仔細あるべからずといふ。平三聞て冷咲ひ、某女兒に舞々はいたさすれど、汚穢ところを賣て、身の安樂をおもふものにあらず。よしやこの事を三勝にいひしらするとも、彼には結髮の夫ありて、志 金石より堅し。かゝればいふとも益なし。是までいくたびか、媒をもておなじすぢなる事を、いはせし人あれども、女兒も承引ず、われも聽ずして、回答はみな斯の如し。この外にいふべき事、聞べき事なし。とく〳〵歸り給へといひかけて、つと奥に入りしかば、全八郎呆果、立しはもなく外面に出て、蝶九郎にしか〳〵のよしを告るに、蝶九郎は頭を搔つゝもろともに物蔭に到り、さていかにせんといふに、全八聲を低し、彼平三とやらんが、憎さげに回答せしは、わが主君を綱井の郎君としらざる故に、思ひ侮るなるべし。さればとて主の名を明白にはしらせがたし。所詮わりなく三勝を奪ひとり、さて媒をもて、身價をおくらんに、彼は元來俳優家なり。一とたび錢を見ば、いかでか點頭ざらん。さはあらぬかといへば、蝶九郎つく〳〵と聞て、しかりといへども人のこゝろは量がたし。彼もし承引ず、又うけ引といふとも、その望數千金ならば、毛を吹疵を求るにあらずやといふを、全八聞もあへず、御邊いまだわが肚裏を猜せず、わが頻りに三勝をすゝめしは、郎君に假托て、本意を遂んと思へばなり。かくいふは面なき所行なれど、おのれ三勝には、命も惜とせず。今彼を身贖して、郎君に進らする共、世の聞えを憚れば大和へは將て行がたし。その用なき時にようし給はり、わが妻とせん事は、今しばしが程なり。御邊又われを助て、この件の事成就せば、昨日奈良へいひつかはしたる用金は、すべてその懷へ挾給へ。故いかにとなれば、途中などに埋伏して、彼女子を奪ひとらんに、誰かわが們の所爲としらん。しらざれば身價をとらするに及す。よしや平三これを曉得て、女兒をとり復さんと鬭とも、這奴を誆引出して、鏖殺さんはいと易しと、信だちて密語にぞ、蝶九郎大に歡びて、一議にも及す。かゝればわれ

は黃金を得、御遊は又美人を得ん、いづれも劣り勝りなし。この謀究て妙なりといふ。浩所に走卒めきたる男、忙しく走り來て、平三が家に呼門、おのれは管領晴元朝臣のおん使なり。今夜猛に、賓の來ませるあり、よりて三勝を召せと宣はするとぞ、黃昏過る頃、迎の轎を來すべければ、その準備して待候へといひ果て、又忙しく走り去るを、奎八は蝶九郎に密語て、物陰より飛で出、矢庭に彼男が頂髮を搖摑で引かへせば、走卒は大に驚き、是はと一聲いはせもあへず、吭をいたく締るに、手足を悶搔き睛をそらざまにし、忽地に息絶たり。そのとき蝶九郎も走り出て、彼男が衣服袴を剝とり、二人とかくして、屍をほとり近き、叢の中に投入れて、ふかく隱し、後をも見ずして逃去ぬ。このとき平三は、管領家より召るゝことをいはんとて、三勝が子舍にあり。往來の人さへ迹絶たる折なれば、かくとしるものなかりしとぞ。

夜轎の驟雨

さても赤根平七は、五條の旅宿にありて、病こと三十日にあまり、頃日奎八蝶九郎が、郎君に遊興をすゝめ奉り、夥の舞子を呼び集合るよしを傳聞て、大に驚き、これを諫んとするに、氣力おとろへて、



起居も思ふにまかせず、頻に心のみ焦燥つゝ、いたづらに日を過せしが、八月の中旬に至りて、やゝおこたり果ぬ。翌はつとめて髮を梳し、祇園の御旅館に參りて、事の爲體を見ばやとて、その準備をいたし、久しく大和へ音耗をせざればとて、この旦奴隷を奈良へつかはせしが、いとゞしく言葉敵もなき宿の、ひとり徒然に堪ず、ゆく末來しかたを思ひつゞけて、不圖柱に懸たる護身嚢を見かへり、ひとり言していふやう、これはおさんが護身符なるを、むかし母の遺言にて、わが護身嚢と迭代にしつる事、おもへばこれも夢に似たり。そのとき母の宣ひし、汝が成長の後、洛へ上る事あらば、おさんが母を索よと、聞え給ひし言の葉は、なほ耳底に殘れども、わが母御さへ世に在さず、われのみ近屬洛にあれど、問よしもなきその人の、是もこの世にありやなしや、紀念こそ今は仇なれ是なくば、



忘るゝ隙もありなんものを、こは誰がうへを守り給ふ、護身嚢と世をはかなみ、かいとつて項に懸る、折しもあれ外面に、咳して、來る人ありけり。金の鍔には庭のむら菊もけおされ、野袴の裾には、夕露の玉を轉し、諸折戸を押ひらきつゝ、笠を脱捨るを見れば、これ別人にあらず、厚倉二郎大夫友矛なりしかば、半七は端

ちかう出迎へ、こは厚倉氏、何事のおりて訪給ふやらん。まづこなたへとて、上坐に請ずれば、厚倉對ひ坐していふやう、其許の病着は、仄に聞しが、思ひしより顏色もよし、今ははや平癒し給ふならんといふに、半七答て、某いぬる月より、瘧病にて、起居も自在ならず、君のほとりちかく、うち臥てあらんは、無禮なりと思ひて、この所に退き、翌は癒ん、あさてはおこたり果んかとて、宿老へも聞えあげず父にも告ずして、思ひの外に日を過せしが、何人に聞給ひたる、いと不審事なりといふ。そのとき厚倉聲を低うし、友春がその事を、しりたるには故あり。近曾吉稚君用金の事、近臣三人の連署をもつて、しば／＼申來さるゝを、大殿ふかく怪み給ひて某を召れ、汝密に洛に到りて、事の爲體を見て參れと仰せしかば、いぬる月の下旬より、この地に來たつて、をり／＼逗留し、至八蝶九郎がすゝめによつて、郎君のおん行迹よからず、毎日に夥の舞々を呼し、三勝とやらんが身を贖ひ、これを妾にせんとて、それとはなしに、きのふ又夥の金を進らすべきよし、例の連署大和へ到來せり。匿とすれどおぼろけならず、われより先に、大殿へ聞えあげたるものやありけん。おん憤ふかくして、昨夜猛に二郎大夫を召され、頃日汝に、吉稚が事を搜り問せつるに、等閑なるはこゝろ得がたし。既に彼ものが淫樂放蕩、世にかくれなし。事審に說しらするに及ばず。この事もし室町家より制度あらば、家門の滅亡踵をめぐらすべからず。汝いそぎ洛に走ゆきて、吉稚主從を將て參れ。われ手づから首を刎ならべて、後の禍を攘ふべしと宣ひし、御氣色おどろ／＼しく、思ひかへし給ふべうもあらねば、畏て、この曉に奈良をたち出、目今こゝに來れるなり。さるによつて、御邊が病臥したるをも、いかでかしらざる事あらんやといふ。半七は聞事毎に、且驚き且憂ひ、頭を低、手を叉き、しばし沈吟ていふやう、郎君のおん行跡、よろしからざるよしは傳聞ながら、この身病に犯されて、諫奉ることを得ず、心ぐるしく候ひしが、用金の事に于ては、某絶てこれをしらず。さては今市布施の佞人、君に淫酒をすゝめ奉りしのみならず、われをさへ連係して、不忠の隊に入たる歟。彼惜し朽をしとて、齒を切て憤れば、厚倉かさねて、其許の姓名を載するといへども、件の連署一枚も、御邊の自筆なりと見えねば、いひとくに據あるべし。只いひときがたきは、郎君のおん愆なり。これを救ひまゐらせんには、忠臣その越度にかはつて、苦肉の計をなさでは事ならず。惜かな、せんすべはありながら、その人を得ずといふに、半七聞もあへず膝をすゝめ、そはいかなる謀にて候ぞ。某身を

殺して代り來るべし、はやく說しらし給へといそがせば、厚倉莞爾とうち笑て、御邊は志父に勝りて、忠心無二なる事は、われよくしるが故に實はわが胸中の苦計を告て、その事を行せん爲に來れり。 さはいへ、その身不忠不義の汚名を厭ひては、この謀を行ひがたし。かくてもなほわがいふ所に從ひ給ふべきかと問に、半七答て、いかなる謀かはしらねども、おん愼をわが身に負て、君を救ひ奉らば、不義ともいへ不忠ともいへ、厭ふは却て忠ならずと、義に勇む日本だましひに、厚倉頻に嘆賞し、しからば今宵いかにもして、三勝とやらんを奪ひ去り、いづ地へなりとも立退給へ。われは又た夜の中に、郎君のおん供して、奈良へ歸り、さて大阪に申さんには、是役藤故を糺問して候へば、吉齋君のしろし召せし事ならず、すべて半七が私情より起りて、三勝といふ舞々に惑溺し、事みな稚君に假托んと詭計しが、既にその伎倆發覺て、いひとくに言語なく、猛に件の舞々を將て逐電せり。かく證據分明なれば、一旦のおん憤を散され、御父子和順し給はゞ、公私の幸甚しからんとまうさん。しかるときは、巷談街說、忽地その趣を更て、郎君のおん惡名を雪むべく、郎君是より行迹を愼み給ひて、君家泰山のやすきに至らん事、みな御邊の孤忠にあり。今こそあれ年を經て、その便宜を見あはし、御邊の忠義は二郎太夫が命にかへて聞えあげ、めでたく歸參さしまうさん。こゝろ得給へと說示せば、半七ふかく感激し、この謀行ひ易し。只うけがたきは、彼舞々を奪ひ去り、一日なりともひとつに住まば、眞の不義に似て潔よからず、是丈夫のせざる所歟。不便ながらさし殺し、われ又道にその地を去て、自殺せば後の患もあらず。皆是忠義の爲にはあれど、罪なき女子を殺したる、半七が命を捐なば、彼女子の親族も、恨るよすがなかるべしと、いひも果ぬに厚倉は、頭を左右にうち掉て、赤根氏の言違へり。彼も又人の子なり。なでうむじんに殺すべき。せめてはそれに添臥さし、不便をくはへて貧しくとももろともに世を渡り、この事には、顧しらぬ、三勝親子を引放、憂を見する障を、顧んこそ義士の所爲なれ。われ又方便をめぐらして、彼が身價を外ながら、半七よやらんにとらすべし。血氣に乘して人を殺し、身を失ひ給ふなと、理を述てといむれども、半七是をうけ引ず、いはじとは思ひしが事こゝに至て已ことを得ず、心ぐるしき昔がたりを、聞てさこそと察し給へ。某稚かりし時、結縁したる女子あり。その名をばおさんと呼びて、わが父には再生の恩あるものなり。不幸にして九歲の冬ゆくへしれずとなりしより、今に存亡定かならず、されば近習圖書を

娶りし事、元來わが情愿にあらず。しば〳〵父に逼られて、その命に悖がたく、彼園花を娶るといへども、いまだ枕席を共にせず。是おさんが恩義をおもふにあり。しかるに今舞々の三勝とやらんを伴はゞ、所謂五十歩、百歩のみ。さはこの條の事によつて、多年の志を轉すべきにあらず。只之を一生の物いひをさめとおぼされて、老てはいとゞ便なき、父半六が久後を、よきに頼み奉ると、手を膝に置忠孝を、神も佛も憐て、端なく奪ひ去らせ給ふ、三勝は結號せし、おさんなりとは思ひもかけず、殺んといふもあはれなり。厚倉は縁故を聞ては、諫んやうもなく、比稀なる壯士に、濡衣を被せ命さへ、隕さするかとばかりに、渧うちかみていふことなし。秋の晷の短くて、鷄も塒に入相の祇園精舍の鐘の聲、常より耳もあらたまり、既に時刻になりぬるとて厚倉やをら坐を立つゝ、半七を見かへりて、われははや退るなり、まうすまでにあらねども、捷りて爲損じ給ふなと、いへば半七莞然として、心易く思ひ給へ。甲夜より彼所を徘徊し、潛よつて奪ひ去り、もし家にあらずと聞かば、歸る途中に埋伏し、いづれこの夜をいたづらに、あかしはせじと夕間暮、八月の天の定めなく、しばしは曇る雨催ひ、出べき月の



出やらねど、客と主が影二つ、磨あげたる武士のこれや鏡といひつべし。此日今市全八郎布施蝶九郎は、既に謀を定めて、管領家の走卒を縊仆し、直にその所を走り去りて、日来認りたる於呂世の轎夫、足平脚平といふ悪棍に、金を與へてこれを相語ひ、日の暮るゝをまちて、蝶九郎は剣とりし、衣服袴を被て、件の走卒に打扮、二人の悪棍に轎を釣らして、笠松が家に到り、管領家の迎なり、とく／＼参り給へといふ。このとき平三は眞島原に趣て、いまだ歸り來らねど、やんごとなきおん方より、迎の轎さへ給はりしを、いつまでか待すべき。父の歸り給ふに、程もあらじとて、三勝は夕間暮の心忙しさに、蝶九郎なりともしらず會釋して、外面に立出、門の戸鎖して、鍾をば隣れる家にもてゆき、如此々々にて參るなる、今にもあれ父のかへり給はば、舞の衣裳は、跡よりもたし給ひねと、



今市布施夜三勝を豪奪す

言告給ひてよと、誂おき、軈て轎に乗移るを、程もあらせず足平脚平、もろ肩入れて擡出し、足に信して走去れに、蝶九郎は轎より物陰に立潜たる、全八と面をあはし、俛倖よしと私語あひ、轎に引そひ走る折しも、半七はやく三勝が家を導當と見れば門は鎖したり、隣れる家に立よりて、それがゆきぬる方を問ば、

主人、東の河原を指して、尋給ふ三勝は、日今人に招れてまゐりしなり、あれ見給へ。彼所へゆく挑灯こそ、彼が乘たる轎なれと、聞もあへず、半七待と見かへりつゝ、それやつてはといひかけて、飛がごとくに追蒐たり。かゝりける處に、平三は、この日管領の走卒が歸りし後、猛に眞葛が原へゆくべき事出來て、申下尅より其處に赴き、思ひのほかに時をうつせし程に、今ははや、三勝が管領家へ參る比及ならんとて、只顧にこゝろ焦燥、昏たる道を喘き〳〵、三條河原を走り歸るに、河原を東へいそがする、轎の内より半垂たる振袖を、挑灯の火光に見れば、柏に大の字の摺箔して、紛ふべうもあらぬ三勝なり。あな不審とこゝろつきては、轎夫どもが為躰も、何とやらん怪しきに、引添たる走卒は、晝見し衣服を被たれど、その人にはあらず。今一人、手拭もて面を裹たる武士は、向に三勝が身を價んとて、わが家に來たりし人に似たれば、矢庭に轎の棒端瞰て、二歩三歩押戻し、こはわが女兒を何地へか將てゆくぞ、と問れて四人もろともに、驚とせしが、少しもさわがず、そは問までもなし、管領家へ召さるゝを、無禮せそと叱り退、走り去らんとするを、平三はなほ立ふたがりて、一歩も運せず、管領へ召さるゝな



らば、かくては路こそ違ふたれ。いで郷導いたすべしといひもあへず、取たる棒端引めぐらせば、蝶九郎等大に怒て、こは過言なり狼藉なり。這奴息の根とめよと閧にぞ、轎夫どもは轎扛居、打てかかる息杖を、平三閃りとかい潜り、右と左へ打ちがはし、つとつけ入りて足平が、息杖を奪ひとり、諸膝薙に雄手なる、小溝へ撲地と打倒し、起あがらんとするところを、疊かけて打杖に、眉間四五寸打割れ、泥に塗れて死にけり。續てかゝる脚平は、胸さかいたく突破られ、阿呀と叫て仆れ殞す。今市心騒ぎながら、聲をもかけず拔打に、切らんとする刄の光に、平三はやゝ身をくねり、息杖をもて受とゞめ、追つかへしつ砍むすぶ、折しも降來る驟雨に、蹴揚の泥の飛花落葉、いとも烈き太刀風なり。蝶九郎は其隙に、橋の筵戸搔揚て、三勝を引出し、手拭を口にはませて、肩に引かけ逃んとするに、半七もまた三勝をこの處に追蒐來たりしが、岸の柳の木がくれて、事の容子はよくしりつ、吐嗟と忽地跳り出、ゆくべき前に立たりける。蝶九郎は思ひもかけず、半七に遮留られ、こゝろの中大に驚て、遮とも脱さじと思ひしかば、巳ことを得ず三勝をうち捨て、打てかゝる刄の下へ、半七が揚閃し拳を丁と衝出せば、われ



から腊をいたく打し、眼瞑みて刀を捨尻居に撻と倒るゝを、半七は見向もせず、驚きまどふ三勝を、腋下に楚と扛抱き河原に添て走去けり。平三も全八もこの景迹に勢ひ脱、迭に呆れて打もあはず、双方一度に引わかれ、かへせ戻せと呼とむる聲は只いたづらに、蝶九郎が耳に入りけん、身ぶるひして起あがり、仇ら身方も玉鋒の路さへいとゞ暗ければ、彼此を索めぐれども、はやその人は見えずなりぬ。

二七全傳南柯夢巻之三終

三七全傳南柯夢巻之四

眞葛が朝風

今市歪八郎、布施蝶九郎は、その夜さり三勝を誘きて奪去、やゝ三條河原まで來つるとき、笠松平三に撞見、相語つる罪根、脚平足平は、これが爲に打殺され、剰三勝は、赤根半七が引攫て、往方もしらずなりしかば、犬の追立し鶉を、鷹に捉られたる心持しつゝ、平三をうち捨て、これを追蒐、泥に塗れつゝ、索めぐりしが、終にあはず、眞葛が原のほとりにて、夜はしら〳〵と明にけり。甲夜の鬪諍より引つゞき、しばしも立休らはねば、殆疲勞て腰うち伸し、互に面を見あはして、呆れて立在折しもあれ、捕手の夥士ばら〳〵と走り來て、直とり圍、矢庭に捕んとて閧くにぞ、歪八蝶九郎は大に駭き、こは何ゆゑに狼藉すと、いはせもあへず、野袴の裾結揚、兩刀を斜にしたる壯佼、徐やかにすゝみ出、やをれ佞人ばら、殿の仰なるぞと呼かけられ、布施今市はます〳〵慌て、眼を定めてその人を見れば、これ別人にあらず、典膳が兒子蟻松曾太郎なり。緣故さへ推量られ、猛き光根なれど、胸うちさわぎて、とかうの返答に及ばず、只呆れてぞ立たりける。そのとき曾太郎は、歪八蝶九郎を佶とらまへていふやう、覬覦の盜臣、吉稚丸に淫酒をすゝめ進らせ、夥の用金を私し、剰舞々三勝を奪ひ去りて三條河原を鬧し、管領家の走卒を縊し事、既に發覺たれば、迯とも何地までか脱すべき、とく縛をうけよとて、いきまきたかく罵れば、件の兩人冷笑ひ、吾儕嘗郎君に淫酒をすゝめ、用金を私にしたる事なし。況て三勝とやらんを奪ひ去て、管領の走卒を縊りしなんど、そは跡かたもなき事なり。思ひ惧て、後悔なせそと、いはせもあへず、曾太郎呵々とうち笑ひ、盜人悍々しとて、いへばいはるゝものかな。きのふ笠松平三とやらんが門方にて、管領家の走卒を殺し、その衣服を剝とりて、三勝を誘り出せし事、證據分明なり。頭陀平とく來給へと呼たつれば、をつと應て小松の蔭より、年の齡四十あまりなる男、赤裸にて走り來つ。いかに歪八、蝶九郎とやらん、われを見しりやと問ば、二人は驚として、汝は昨の走卒なる歟。蘇生してはかなはじとて、迯んとするに、夥兵ども立塞たれば、迯出る道もなし。こは忌々しと呟ば、曾太郎かさねて、近曾吉稚丸の御行跡、よろしからざるよし、南都に聞え、大殿のおん憤りふかく、密に厚倉二郎太夫に仰て、御旅館の爲體を

窺し給ふに、世の風聞に違はず、みな是汝等が、君を欺きて、私欲に耽る事、既に露顕す。さるによつて、二郎太夫、間者をもつて、毎日に汝等が出居に意を着る程に、きのふこの頭陀平が縊殺されたるとき、間者ゆきかゝりて訝み、そのほとりに遺たる扇を見るに、豫て認れる全八が扇なれば、いよ〳〵怪み、軈て仆れたる人を呼び活るに、幸にして甦生れり。且く勦りて名氏を問に、管領家の走卒に、頭陀平と呼るゝものなり。只今舞舞三勝が家へ、殿の仰を傳て立かへる折しも、如此々々の男、後より走り來て、わが咽喉をいたく縊るとおぼえしが、その後をしらずといふ。これ疑ふべくもあらぬ、全八が所爲なめりと猜して、直に頭陀平を將て、御旅館へ參る途中、われも又きのふの曛昏に、奈良より來たりて、二郎太夫と示しあはし、汝等を搦捕らんとせし程に、はしなく間者に行あひ、審に一五一十を聞て、頭陀平を伴ひ、通宵汝等が往方を索めぐりて、こゝに至れり。しかるに頭陀平、はや〳〵も蝶九郎が衣服袴を見て、あれこそわが物なれといふ。かゝれば頭陀平を縊りしは全八蝶九郎が所爲なる事、問ずして分明なり。これによつて、思ひあはすれば、汝等頭陀平が衣服を剝とりて着用し、管領家の迎人な



りと偽り、三勝を誑引出せし事疑ふ可らず。もししからずば、三條河原にて、平三とやらんが、なぞうこれを阻むべき。且汝等が相語つる、足平脚平といふものは、隠なき悪棍なるよし、昨夜街の風聞にてしりぬ。さるからに、二郎太夫は夜の中に吉稚丸の御供して、奈良へ帰り、われをとどめおきて、汝等を搦捕するものなり。かくてもなほ陳するやと責問ば、圣八等ますく\周章、恨しげに蝶九郎が衣服袴を見かへるにぞ、蝶九郎はいとどなほ、裳脱かねたる秋蝉の、燕に捉らるゝ心持せり。且して圣八蝶九郎がいふやう、しかりといへども、吾儕のみあしきにはあらず、赤根半七、久しく病と称して、五條の旅宿に引こもり、吉稚丸の懸想し給ふ三勝を奪ひ去れり。しかるを半七は縛られず、こは遺恨にこそと呟ば、曾太郎冷笑ひて、人の非を挙、おのが罪を脱れんとするは、そのこゝろいよゝ穢し。



あれ縛よといふよりはやく、うけ給はりぬと夥兵ども、散動きたちて、まづ蝶九郎が衣服袴を剥とり、圣八とゝもに犇々と括あぐるに、二人の悪棍は、掻退掻遣て、こゝろのみ悍れども、手をとり足をとりて、いやがうへにをり縛りしかば、遂に逃ることを得ず、閑容々々と縛られつ。そのとき曾太郎は、頭陀巾に衣

服を返してこれを被せ、さていふやう、布施今市が奸惡惜むに堪たりといへども、この事管領家へ聞えては、這奴等はとまれかくもあれ、主君順昭の越度とならん。しかるときは夥の人の歎きなり。通宵いひつるごとく、這奴等は大和へ將てゆきて、罪を家則にまかすべし。其許の一命に恙なきうへは、憤を散して、世に漏し給ふなとて、叮嚀に勸解しかば、頭陀平點頭て、そはいはるゝまでもなし。おのれ下郎なりとも、管領家の祿を汚すものなるに、人に縊られ、衣服を剝れたりとまうさば、却いかなる罪をか得ん。二條わたりには、相識れる醫師もあれば、これを賴てきのふ中途にて、暴に病發、三勝が家まではえゆかず、醫師何がしが家に立寄て保養し、思ひの外に一夜明せしとまうさん。かゝれば、わがみにも恙なく、續井家の越度にもならじと、信だちて密語ば、曾太郎大に歡びて、なほ言語を卑して、その口を鉗るに頭陀平いよゝ意を得て、至八蝶九郎に對ひ、汝等われを誰とか思ふ、もしこの壯佼の面を覩にあらずば、わが身を捨ても引摺歸り、立地に怨を雪むべきに、かくは思ひしりつらんと罵りて、さて曾太郎に目禮し、驪て別去にければ、曾太郎は布施今市を引立さし、大和を斥ていそぎけり。かくて頭陀平は、彼醫師が家にゆきて、緣由を物がたり、其所より送られて管領の館に歸り、形のごとくいひこしらへけり。是より先管領の近臣は、その夕ぐれに及べども、頭陀平が應を申さゞるを怪み、日暮て別に三勝が家に迎の人を遣し且その應を聞するに、その人いたづらに立かへりて、三勝が門は鎖して、人ありとも見えずといふ。そは不審き事なりとて心苦しく思ひながら、明白に主君に聞えがたければ、三勝はいたはる事ありとて、叅らずとまうしこしらへ、その夜をすませしが詰旦、頭陀平やうやくに歸り來つ、僕きのふ途にて猛に病起り、遂に三勝が家に到ことを得ざりしといふ。近臣聞て、さては彼舞々が他へゆきたるも咎がたしとて、再び問こともなかりけり。

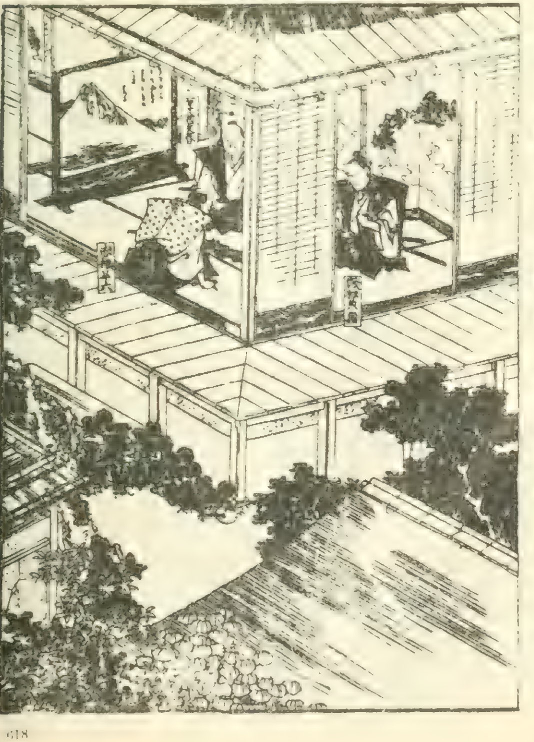
ここに又笠松平三は、その夜さり三條河原にて、三勝が轎にかき乘せられてゆくを怪み、これを遮り留て、四人の癖者と挑み鬪しが、又一人の武士、樹陰より跳出かば、至八蝶九郎等をうち捨て、これを追留んとしつれども、宵闇なるに風雨烈しかりければ、終に及ず、雨歇て後、又舊の河原へ立歸るに、脚平足平が打殺されたりとて、彼此人立集ひ、市の正の下主來たつて、その屍を展檢し、ほとり近くは寄もつかれず。こゝに至て平三は、且驚き、且愁ておもへらく、われ一時の怒に乘て、二人の轎夫をうち殺したれば、自の罪は脫がたし。三勝を奪ひ去たる癖

者どもは、わが推量に違ざめれど、これを明白に訴出て穿鑿すべくもあらず。わが命は惜むに足らねど、三勝が往方もしらず、又この寃をも雪ずして自から罪に當らんはいと朽をし。彼擲者どもは、けふわが家に詣來て、三勝が身償せんといひつる旅客にて、曩にわが女兒、何がしどのとやらんの旅館に召されしとき、われも假初に面をあはしたる、その人の郎黨に似たり。よしや三勝彼等が毒手に陷たりとも、よも阿容々々とは伴れじ。元來その心ざま貞しく、結髪の夫の爲に節操を守ること、世の人に勝たれば、思ひかねて死もやせん。しばし洛を脱去て、しのび〳〵に三勝がゆくへを索、彼を救ひ出して後は、ともかうもならめと深念し、家にも歸らず夜の中に、宇治のかたへ奔りて、平等院の片ほとりにふかく躱れ、潛に洛の爲体を聞くに、件の足平脚平は、隱なき惡棍にて、死後に舊惡露顯せり。こゝをもて、彼等を殺せしもの、往方を、尋索る事等閑なりと風聲す。平三はこれを聞しより、少しはこゝろおちゐたれど、猛に洛を立退しかば、些の貯もなく、とやせまし、かくやならまし、と思ひくしけるが、昔もかく零落たりしとき、奈良にて膏藥を賣たるに、彼所は世をわたるに、便宜の地なれば、今度も南都へ赴くべしとて、やがて宇治の旅宿を立出、直に彼地に到しが、昔相識れる人も、おほくは世を去りて、頼むべき陰もなし。しばしが程は、衣服を賣などして旅籠に宛たれど、これも竭ていよゝすべなく、ふりたる笠を戴き、さゝやかなる柄杓をもちて、觀音の靈場を順禮する行者に打扮、毎日に南都の街衢を徘徊し、往來の人の袖に附、あるは商人の店前に立在て乞食し、やうやくその日の露命を繋ぎぬ。

百度の願事

厚倉二郎太夫友春は、密に赤根半七と謀しあはし、彼に三勝を奪ひ去らし、相伴ひつる蟻松骨太郎は、親に立まさりて、忠義の壯佼なれば、これには謀を授て、金八蝶九郎を搦取り、後より來給へと聞えおき、その身は半七が五條の旅宿より、直に祇園の旅館に參り、吉稚丸に、嚴君の怒甚しき趣を告、今市作庵が奸惡、半七が孤忠、すべて審やかに演說し、とく〳〵轎に乘れ候へ、南都へおん供つかまつるべしとまうすに、吉稚丸は、是彼の事を聞て、ふかく後悔し、且父の怒を畏み、金八蝶九郎が奸佞を憎み、さるにても半七に不忠不義の濡れ衣を被せて、わが慢を繕んは、罪いよよふかし。只明白に辯解奉りて、もし許されずは、潔く自殺せんと回答つゝ、思ひ定たる氣色なるを、二郎太夫は頻に感激して歎り

ちかみ、さすがは綴井家の郎君にてましますなり。しかはあれど、君は一國一城の世子にて坐するに、いかでか小節にかかづらひて、身を塵芥のごとくなし給ふべき。今ごろははや、半七が彼舞々を奪去たるにてあらんずらん。もし御悞を明白にまうさし給はゞ、彼が忠義はいたづらなり。彼を不忠の罪人となし給ふとも、大殿のおん憤解て後は、召かへし給はん事、君の御こゝろにあり。しかれば何事もしばしが程なり。二郎太夫がまうすにまかして、とく〳〵歸館あるべしと、理を盡して諫こしらへ、假頃に南都に誘引まゐらし、さて主君頼昭にまうすやう、僕頃日、間者をもて、吉稚君のおん言行、近臣が出居を窺せしに、稚君のおん悞は露ばかりもなく、みな是近臣等がなせし僻事なり。その故は當様々なりとて、奎八蝶九郎が爲躰審にこれを告、又まうすやう、赤根半七出頭して吉稚丸の傅をうけ給はりながら、病着ありと僞りて、ひとり五條の旅宿に引籠、舞々三勝といふ淫婦と密通し、人口を憚り、後難を怕れて、奎八蝶九郎を相語ひ、彼舞々を吉稚君にすゝめ進らせ、酒宴に侍らせんと計較しが、事發覺て罪脱れがたくや思けん、三勝を伴ひて、何地ともなく逐電せり。奎八蝶九郎等は、



後れて脱れ去らんとせしを、蝶松曾太郎、搦捕て引來れり。かくの如く證跡分明に候へば、日來のおん憤りを散され、御父子の對面あらまほし。稚君は何事も思ひかけ給はぬに、御怒の甚しきよしを聞食て、うち驚き給ひ、直に洛を發駕ありて、今朝かへり入らせ給へども、ふかく畏りて、老臣等にもあひ給はず。いといと痛しく見え給ふにこそと、言語を竭して聞えあぐれば、順昭つく〴〵と聞て、近臣等がうちも揃て、非法の擧止しつるをしらで、父に愛を失れんとしつる事、吉稚が越度なれど、彼は年なほ二十にも滿す、いはゞ乳臭の孩兒なり。かばかりの過は免すべき歟、近臣等が亂行はその罪を宥がたし。就中赤根半七は、物の用にたつべく思ひて、老たるかたにも立騁らし、日來重く用ひたるに、恩を棄て恩をしらざる白徒なり。彼が往方は草を刈拂ひても索よ。汝典膳ともろともに、

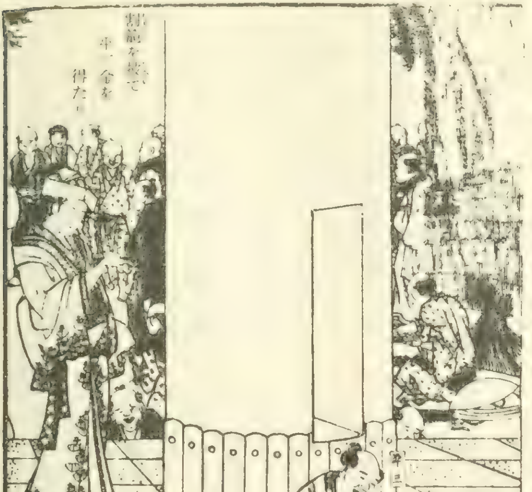


全八蝶九郎を鞠問せば、半七がゆくへも、などかしれざらんとて、小膝を敲て仰すれば、二郎太夫謹でこれをうけ給はり、又まうすやう、かゝるうへは、吉稚君に對面まし〳〵て、老臣等が心をも安からしめ給へかしとまうせしかば、順昭、さらば誘引來れといふ。そのとき二郎太夫は、吉稚丸の子舍にいゆきて、一五一十を告。

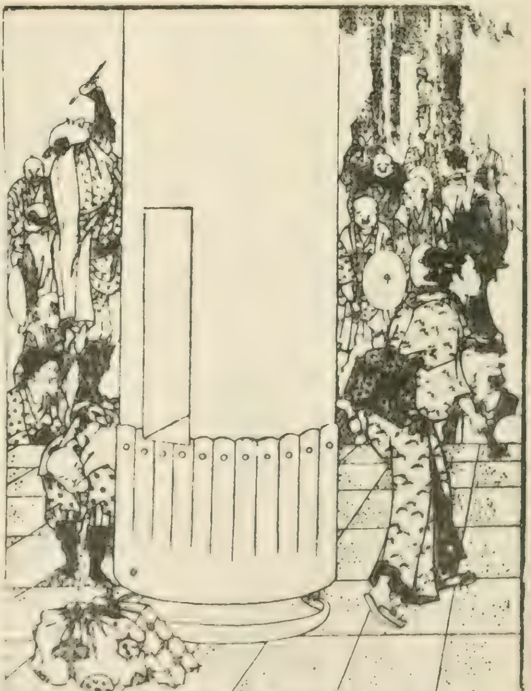
倚て舊の所へ參れば、順昭ちかく吉稚を侍らし、此度の事につきて近臣等が非法の擧止は、主の愆なれど、御身いまだ弱官なれば、ふかくも咎ず、以後を愼候へと教訓す。吉稚は始終頭を低、恭きよしをまうして退出けり。さる程に蟻松典膳は、君命を稟て、二郞太夫とゝもに、八蝶九郞を責問に、彼等は身の罪を輕せん爲に、半七をあしざまにいひなし、吾儕愚にして、半七に誑れ、三勝を誘引出すといへども三條河原より後の事は、何地へゆきけんともしらず。すべて此度の奸計は、半七がこころひとつより出たるに、却彼ものは脫れ去、吾儕のみ、かくからきめを見る事、是非に及すとのみ回答て、嚴しく責問ども、その外の事をいはず。さるによつて典膳は、いよゝ半七を憎み、這奴柴賣の孩兒なりしに、わが蔭を蒙りて近臣の上に列り、剩千々の寶にも換じと思ふ、女兒園花を妻あはせしは、その才に愛ればなり。しかるを彼犬自もの、近習出頭して、朋輩にも敬るゝを、おのが才學とや思ふ、忽地にこころ驕りて、君を欺き、朋輩を相語ひ、舞々と密通して、われにさへ面目を失する事、言語道斷の癖者なり。半七が事は、とかく論ずるに足らず、その罪は父といへども脫れがたし。まづ半六に皺腹を切らせずば、この憤のやるかたなしといきまきて、彼父子を罵ること、面あたりに居るがごとし。園花は又、父の怒の烈きを、見るにつけ聞くにつけて、妬しと思ふ氣色はなし。只半七が往方おぼつかなく、いかなる樹の蔭、草舍の簷下に立あかし給ひけん、衣手うすき秋風に、又や病着の發はせざる歟、久しく病て坐せしともしらざりければ、音耗も等閑に過たるを、心つきなしと恨み給ひけめ。男子と生れたるかひには、婢妾もあるものを、況て旅寐の徒然に、他し女子と假初の契りを結び給ふとも、命とらるゝ罪にはあらじ。しかるを腹のたつまゝに、緣故もしりたまはぬ、その爹々さへ殺さんとは、理ともおぼえ侍らず。それこそわが身の妬にて、舅を殺したりなんどといはれんは、生る日の物思ひ、死て後の迷ひなり。何事も折のあしくて、彼人の在さねばあしざまにのみいふならん。さるをよく問も考ず、むじんなる事し給はゞ、わが身まづ、自害してうせ侍らめ。人しれぬ歎して、待かひもなき夫の、心の底は解ずとも、顏見てくらさば慰る、よすがもあらんにこれは又、あはでの森となりまさる、けふやこの身のをはりかと父を諫め母にかこち、聲を惜ず泣沈めば、敷浪も半七を、けにくゝは思へども、女兒が貞操のよのつねならぬに羞て、やうやくに思ひかへし、夫を諫め寬るにぞ、典膳もかく園花に泣かこたれて、勇きこころもよわりつゝ、終に半六が死刑を放

べて、彼是の罪狀を定め、二郎太夫とゝちに、主君に聞えあげて、まづ全八蝶九郎を追放、半六はその子の罪によつて、ながく出仕をとゞめらる。かゝりしかば、半六は、わが子の爲體を聞しより、且驚き且怒り、只薄氷を踏こゝちして、憂苦の中に日を過せしが、終に出仕を止られ、直籠いたすべきよし、典膳二郎太夫これを傳へ、僅に命を繋ぐばかりなる、月俸を給はりければ、いとゞしく遺恨に堪ず、さればこそ半七が、日來博士ぶりて、親の諫を用ひず、この禍を惹出せり。這奴憎しとは思へども、さすがに恩愛の悲しさは、その往方も心もとなく、あるときは怒り罵り、又あるときはうち歎き、天日明なりといへども、わが家のみはいと暗く、絶て訪人あらされば、憂を慰むよすがもなし。げに榮枯得喪は、四時の代謝がごとく、もえ出る梢の花、後るるも先だつも、いづれか秋にあはざるべき。彭祖が命長かりしも、子孫には傳がたく、石崇が富貴なりしも、生涯を過すに足らず。德なうして貴からんと願へば危く、富て驕ものは亡とかや。禍福吉凶を、龜の卜部に問んより、尾を泥中に曳にはしかず。半六はこのときに、米谷の楠を伐たる事を後悔し、鷹篠が諫さへ、思ひ出られて朽をしけれど、今はそのかひなかりけり。さる程に園花はますます半七が事を思ひほそりて、病はじめに彌増つゝ、ふたゝびうち臥してより、絶て首を擡ず。元來想思病の事なれば、醫師も眉根をよせ、速には平愈しがたからんといふに、典膳は安き心もなく、敷浪は日毎に奈良の大佛に參詣し、百度參といふ事をして、女兒が病着、頓に本復あらせ給へと禱の外、更に他事なかりけり。是はさておき、笠松平三は、奈良の巷を徘徊して、歌祭文を唱ひ、乞食して日を過すに、頃しも九月の二十五日になりぬ。けふは高天神の會日なればとて、彼社頭に立在、參詣の老弱に袖乞す。浩所に、領主の代參かとおぼしくて、從者五七人を將たる武士、門前の茶店に憩ひ、馬をば店前に繫がし、その身はおくまりたる所に入りて、主從割籠を披くにぞ、平三これを見て、やがてそのほとりにいゆき、從者に對ひて、飢たる順禮の行者に、ものたべといふ、その聲や漏聞えけん、主なりける武士、若黨を呼て、しばし何事をかいひしらすれば、件の若黨こころを得て、平三を呼び入れ、飽までに飯を食し、さていふやう、汝今飽たればとて、翌まではよも有たじ。こゝになほわが主の食殘し給へるあり。割籠とともにもてゆきて、夕餐にせよと宣するなりとて、やがて索もて眞中をしかと括り、これ提てゆけといふに、平三は數回押戴き、割籠を引提つゝ、又社頭に至りて、錢を乞、やゝ申の下刻に及びて、いつも

の寐所を繕んとて、大佛堂へ赴きしが、又物ほしくなりしかば、高天神にて得たりける、割籠をひらくに、思ひもかけず、飯の中に一包の金ありて、三勝が身價と書つけたり。こはいかにと驚き怪み、つく〴〵と尋思して、縁故を推量るに、三勝を奪ひとらしたるは、こゝの領主などい、世の聞えを憚り、わりなく奪ひ去らして後に、かくはからはしたるにや。又三勝が舊の養父は、五條の村主にて、結髪の夫も、彼所にありと聞けばそれらが所爲か、二つに一つは違べからず。遮莫われも許さず、彼も承引ざるものを、心穢く計策ながら、今更この金をもて、わが心を蕩さんとするこそ、いよ〳〵はらだたしけれ。高天神の茶店にて問はゞ、彼武士の名氏もしれやせんとて、俄にその茶店に走り行、けふ割籠を拵給ひたる如此々の殿は、領主の御内にや、何と名告給ふぞ、常にこゝに憩給はゞ、しりてぞおはすらん。しらし給へといふに、主人答て、彼人はけふはじめて憩ひ給ひたれば、われもしらずといふにすべなくて、次の日五條に赴き、赤根半六が事を問に、里人等がいふやう、半六ぬしは、近曾閉籠られておはするなり。縁故は子息半七といふ壯佼、郎君のおん供して京に赴き、三勝といふ舞々と密通し、逐電したる罪



によつてなりといふ。平三これを聞て、はじめて曉得、さては三條河原にて、三勝を奪ひ去たる壯佼こそ、結髮の夫、赤根半七なりけれ。おもふに彼もの、父の志に悖がたかりしに、主の供して洛にあれば、その便宜を得て、密に名告あひ、夫婦もろともに奔けん。かゝらばなどて一言は、われにも如此と聞えざる。ともしらずして方人せし徒と挑み闘ひ、人を殺すの罪を得たり。寔に親のこゝろ子しらずといふ、世の常言ぞよしありける。もし眞の女兒なりせば、かくまでにあるべからず。今は思ひたえたり、この身價も何せんと、うち恨みつゝ又思ふやう、さるにても不審はこの金なり。彼等さる盜賊にて奔たらば、この身價を贈らんや、これにはふかき故こそあらめとて、とにかくこの地おぼつかなければ、彼割籠を與たる人にめぐりあはまほしくて、領主の藩中を徘徊するに、乞食なれば内へは入られず。ますく\餓に臨めども、件の金をば一枚もうしなはず、元來翌をもしらぬ罪人の身なれば、憖に人なみなる、世を渡らんとも思はず、なほ奈良の街衢を徘徊して、しのびく\に三勝が在所を索、おもひの外に月日を過して、四年あまりを經たりける。

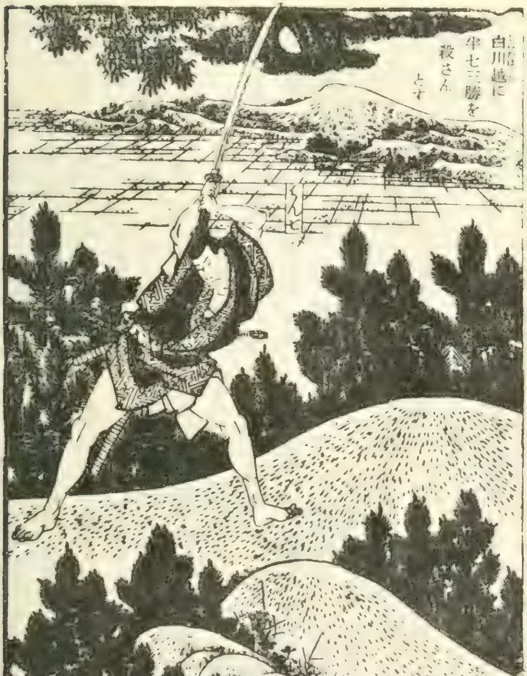


夜半の月魄

さても赤根半七は、その夕三勝を追蒐、三條河原にて、全八蝶九郎等が、平三と挑み戰ふときに追著、矢庭に蝶九郎を突仆して、三勝を小腋に扛抱つゝ、闇に紛れて走り去、河原傳ひに北を斥て、吉田の森をうち過ぎ、白河山の麓に至る比及に、雨も歇て更闌たり。月は出ながら、天はなほ結陰て路くらく、往來も旣に迹絕しかば、やをら三勝を扛おろし、さていふやう、緣由を告ずして理なくも將て來つれば、さこそ懼しとも思ひけめ。はじめそなたを誆引出せしものども、わが朋輩にはあれど、彼等と謀しあはして、かく計策たるにはあらず。彼は彼がしゝもて、私慾の爲にし、われはわがしゝもて、忠義の爲にす。審にいはんはながながし、まづその概略を聞えしらすべし。いぬる頃そなたを祇園の旅館に召さし給ひたる郎君は、すなはちわが主君にて、やんごとなき人に在するなり。潜て洛に遊び給ふから、近臣に至るまで、明白には名を呼ず、淫酒に耽り給ふ事は、佞人ばらがすゝめによれど、世に聞えなば、すべて郎君の越度となりて、いかなる禍の出來なんも量がたし。さるによつて、大殿ふかく憤おぼし、速に召かへして、愛子を手づから失はんといきまき給へば、家隷等、みな手に汗を握りて、周章大かたならず。ともしらざれば佞人ばら、ひたものすゝめて、郎君を淫酒に誘ひ、なほふかき伎倆あるにや、そなたを欺きて、奪去らんとせり。しかりといへどもわが身久しく病によつて、旅宿を異にし、且出居も自在ならざれば、これを諫奉ることを得ざりしに、やゝ病着もおこたり果なんとす、折しもあれ、けふ同志の忠臣潜やかに、わが旅宿に詣來て、心中の機密を告、そなたを奪去れといふ。これ他なし、われとそなたと密通し、その非を掩ん爲に、郎君に假托、身贖の事を計較、その事發覺て奔りたりと風聲せば、郎君のおん惡名を雪べく、主家に禍なかるべしと、相語れしより親を捨、身を捨妻子を顧ず、みづから不義の濡衣を、被たる雨夜の暗紛れ、西施を投る范蠡が、志はいたせども、それとは遙に質かはり、緣も好もなき人を、虐て忠よ義よと、ものものしくいふをうたてくも、鈍ましくも思はんが、かくせざればわが主家危く、家隷老黨はさらなり、その妻子に至るまで、悉く離散せば、いくその人の歎ならん。身を殺して夥の人を、助くるなればと思ひ諦め、潔く撃れてたべ。鬼々しとは思へども、忠義に換る慈悲はなし、しかりとて、そなたひとりを殺すにはあらず。われも又、所をかへて腹かき切、仇も怨もなき人を、殺せし罪は贖ふべし。又そなたの親何がしには、それとしらせ

ず折をもて、この報をなすべきよし、同志の忠臣に聞えおきたれば、後の事は心易かれ、線故はかくの如し。不便ながら、盛の花を、散らす忠義の大刀風を、彌陀の利劍と觀念し、佛果を得よといひもあへず、閃りと引抜く刃の電、薄がくれに三勝は、吐嗟とばかり飛退を、聞わきなしと半七が、又突かくるをかい潜り、裳蹴かへす夜あらしに、山川の音凄じく、あれや／＼と呼ぶ聲も、妻戀鹿の友音のみ、應て助くる人もなし。三勝は稚きより、舞に手馴て身も輕く、半七は又はじめより、こゝろ得さして殺さんと、思へば左右なく打もかけず、追まはし逃迷ふ。是や叫喚大叫喚、氷の地獄焦熱の玉なす汗に身も冷て、脱れかたなの下にたつ、三勝今はかうと見て、やよ待給へ只管に、身を脱んとにもあらず、忠義の爲と宣はする、事をわきたえ壯士の、逝とて脱し給はんや。命とらるゝ迎とも、いざしら河の山に來て、紅葉とゝもに散果る、身の秋をいかにせん。みな前世の惡業なりせば、人を恨るよしなけれど、故ありてこの年來、生死もしらぬ母を慕ひ、浮世の義理に絆されて、思ふのみにてえもあはぬ、人に一言遺たし、なからん後にその人に、傳へてたべといふ聲も、涙にいとゞ曇る夜の、顏は定かに見えねども、思ひかねたる風情なり。半七も瞼しばたたき、鳥の死んとするとき、その鳴こと悲しく、人の死んとするときに、そのいふ事よしといへり。思ふ程は、何にまれ聞でやは、聞え給へ。さらばとて三勝は、いはんとするに胸ふさがり、しばし涙を押拭ひ、耻はしき事には侍れど、わが父笠松半三は、實骨肉の親ならず。過世あしくて三歲のとき、垂乳母には生別れ、父は又わが七歲の秋、斧に撃れて非命に世を去、仇ある人に思を稟、養れては恨を捐、よし孝行は盡さずとも、不孝をせじと身を省み、出居の障子あけくれに、隔ず仕し養母さへ、世を早うして後は、いかなる故にか養父に疎れ、九歲の冬人しれず、殺されんとしたりしが、かたらはれし人の情にて命助り、その人を父とたのみて養育れ、身丈伸ては反哺の孝に、舞々とはなり侍れど、とき稚きに結婚し、夫に一たび環會、母の生死もしらまほしく、耻を捨てたる世渡も、朗詠催馬樂、早歌に、人の心は慰れど、わが燗さは慰るよすがも絕て泣顏を、なほす樂屋の十寸鏡、くもらぬ操を狩衣の、露ばかりもわが夫に、しらせまほしとは思へども、烏帽子のかけ緒うちとけて、音耗すればその父親に、捨られたるを恨むに似たり。しからば夫もいかばかり、心ぐるしくおぼすらん。逢ずにあくがれ死ねばとて、阿翁の隱匿を世にしらし、夫に羞は見せじとて、こゝと彼所にありながら、達障居る誠心は、とゞかで今宵、見もし

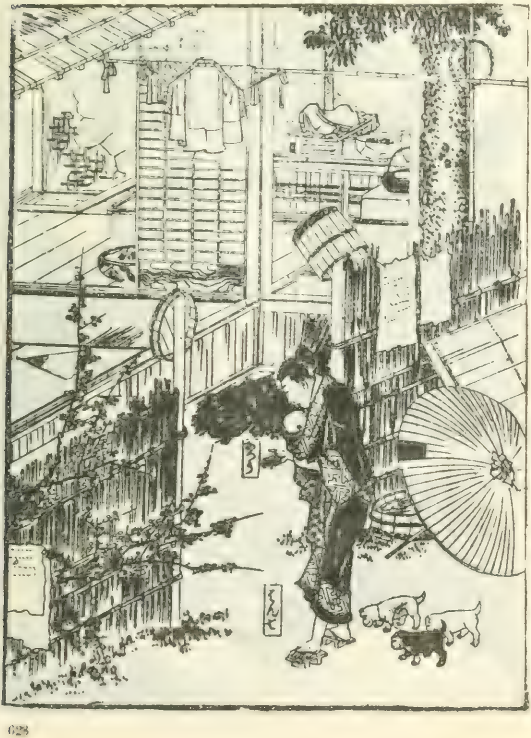
らぬ、人に忠義をたてさして、今の親には孝ならず、色情ゆゑ逃も走りしかと、なき名を人に謳る丶は、いかばかり悲しけれど、身の悪業は歎ども及ばず、護身嚢は夫の紀念、内なる撥は母にあふ、割符にせよとて亡父の、遺せしも侍るなり。涙の雨は絶ず降る、笠屋三勝が身の果を、なからん後に傳へてたべ。その夫の名は、とばかりに、咳りあげつ丶掩ふ袖に、言の終は口隱りぬ。半七は聞毎に、思ひあたる事のみなれば、眼上にふりあげたる、刃も耳も側て、數回嘆賞し、雛子に稀なる孝心苦節、ふかく心に羞ることあり。もしそなたの乳名を、おさんとはいはざるやと、問ば三勝驚き怪み、そをいかにしてしり給へる。もしその人かと、思はず、よらまくせしが眼前、晃めく刀に油斷せず、又走り退く闇の方に、鳴つ丶渡る雁が音も、女夫か友かと疑ひの、天より晴る丶雲の間に顯れ出る月影にて、はじめて面をおはしつ丶、と見かう見れば稚顔と、衣服に染たる大伯の、紋は互におぼえあり。こはわが夫にておはしけり。げにおさんにてありつるよ。こはこはいかにともろともに、呆れまどふぞ理なる。そのとき半七は、刃をさめて、三勝を勦り扶け、小草刈布もろともについゐて、さていふやう、われ近曾、吉稚丸



のおん供して、洛にありといへども、病着にとぢこめられたれば、絶て一たびもそなたに逢ず。元來主從、その名をふかく措たれば、鑽井家の郎君なりとは、思ひかけずやありけん、殊にも雨夜なるに、心いそしき折なれば、聲は聞つゝわれも又、吾妹子なりとはしらざりき。稚きときに別れしかば、面がはりはしつれども、青闇ならずはかくまでにはあらじ。もしはやりて刺も殺しなば、さぞな悔しくあらんずらん。嗚呼危かな危かりし。さるにても、そなたは豐田の山本にて、荒熊に銜去られしより、絶て生死もしれず、大かたは世になき人と歎き思ひたるに、今の物語にてやうやく曉得ぬ。みな是わが父の、ふかき望あるをもて、人しれず失んとはし給ひけめ。さるを露ばかりも恨ることなく、なほわが父の非をあらはさじとて、家にも歸り給はざる、その孝その貞、感激に堪へず。われは却いひがひなくも、父の命悖りがたくて、近曾蟻松典膳の女兒園花を娶たれども、前の誓は破らじと、終に一たびも、彼と衾を共にせず、この年來朝な夕なに、そなたは死せりや世にありや、しらし給へとて神佛に、祈願せし驗ありて、今日今宵危窮に迫りて、かく環會こと、これも夫婦の惡縁ならん。さて形なやゝと世をはかな



み、園花が事はさらなり、吉稚丸病氣保養の爲、洛に遊び給ひし事、今市全八郎、布施蝶九郎が奸惡、厚倉が誠忠、曾太郎が質行、すべて京奈良の爲體、一五一十を說しらし、又いふやう、父のよしあしをまうさんは、いと畏くも悲しけれど、昔丹波都とのに誓ひ給ひたる事も、榮利の爲に忘却し、嵯松氏と緣し結ん下ごころにて、そなたを失はんとし給ひし事、われさへ面目なきに、それとしらずとも、又やそなたを殺さんとせしは、麁忽の擧止に似たれども、もし一夜なりとも伴はば、身を潔くしがたしと、思ひ定めし誠心は、誰が爲と思ひ給ふ。もしかゝらずば名告あふ、よすがも絕てあるべからず、庭に不思議の對面なりとて、首尾を物がたれば、三勝淚を堰かねて、爹々はとまれわが爲に、他し妻をばかさねじと、色にも愛す情にも、引れぬ人の忠義ゆゑに、うきたる色情の名にし負ふ、世にも



勝れし志を、聞ては何か恨み侍らん。わかれて後はいひしらす、言の葉守の神は在ねど、柏の紋を舞の名に、呼るゝまでに思ひわぶ、君はまざ〳〵大和路に、ありとしりつゝ妹と夫の、山のかひなく隔られ、心にかゝる朝なく〳〵、さくらも雲のたゝずまひ、そなたの空のみ瞻ては、月も日もわが爲に、照らし給はぬかとか

こゝ侍りしが、やゝ名告あうて年來の志はいたしたり。かくは命も惜からず、今の養父は平三と呼れて、卑き世わたりはすなれど、心ざまは立勝りて、財寶の爲に惑され、信義を失ふ人にあらず。恩愛もいとふかきに、思ふ程は孝行もえつくさず、又母の生死も問定めずして、墓なくなり侍る事、いと悲くはあれど、緣故もしり給はぬ、園花どのとやらんに、妬れんは罪なほふかし。御身の忠義になるならば、殺してたべとかき口說、芝生に座を占、掌を合し、白く妙なる頂を伸、一花咲る姫百合の、散すを遲しとまつ程に、半七ますく\嗟嘆して、われそのはじめ、殺さんと思ひ定めしは、身を潔くせんとてなるに、既に吾妹子なりとしりて、これを殺すは義に違へり。さればとて夫婦もろともに存命ては事を忠義に假托て、泄ち躱れもしたりなんど、いはれんは影護、厚倉ぬしへ面ぶせなり。さればとてそなたを殺しては、丹波郡どのへ誓給ひし、父母の言語もいたづらなり。そなたはとにかく存命て、程經なば、平三どのに尋あひ、孝行を盡し給へ。義を



守れば不孝なり、只死べきはわが身ぞと、いひつゝ刀を拔かくれば、三勝慌て攜り留、こは淺ましき事なし給ひそ。忠孝に身を殺し給はゞ、など三勝もろともに、

死ねとはいはで生殘り、物思へとは、情ある、言の葉に似て情なし。よしや人は何ともいへ、親と親とが誓つゝ、許せし御身の妻ならずや。もろともに世を去ては、影護しとおぼしなば、わが身こそ死べけれ。いと理なしと恨ごち、携添たる刀の鞆に、落る涙はしら鮫の、玉も數ます鮫人の歎きもかくや哀れなり。半七は三勝に諫られ、つく〴〵と思ひかへして刀ををさめ、げにわれながら悞てり。そなたも殺さじ、われも死なじ。潛にこの地を立退て、一日なりとも妻と呼び、夫と呼れて年來の、節操に報はゞ、亡母の、庭の訓も忠も義も、まもり袋ぞ絆なる。今もこゝにとかき分る、胸の鏡もあひ見ては、樂昌公主の故事も、慢に思ひ出られつ、誘給へとて身を起せば、わが身もこゝにと、三勝が頂より外す掛紐も、是やふたゝびむすぶの神、迯身代の形見さへ、全聚も惡因縁、よしそれとても郎君のおん惡名だに雪なば、夫婦がうへは數ならず。とはいへ父はわれゆゑに、罪得給はんかと思ひやる、大和にあらぬ山の狹を、ふりさけ瞻れば月魄も、やゝ傾て木の間漏る、遠寺の鐘も音づれて、草葉に集だく虫の聲、いとゞ哀れを十寸穗の薄、かきわけて夫婦後になり、先にたちてゆく程に、白河山をうち踰て、湖水を見れば漣や、わがしがかくす陰もなく、天はほの〴〵と明にけり。かくて半七三勝は、させる由緣はなけれども、近江國多賀莊は、佐々木の一族在城して、洛へも遠からず、世わたるに便宜の地なるよし、豫て聞ることもあれば、竊て彼所に赴きて僑居す。しかるに此ころ三味線といふ樂器世に行れて、これを嗜むもの多かり。これなん三勝が父、丹波郡が彈初たるものなれば、いとゞ昔を忍ばれて、三勝は洛にありける日、よく倣ひ得たりしかば、彼此の女の童に、彼三味線を敎し、半七は男の童に、手跡の指南をして、艱難の中に月日を過すに、その年の十月より、三勝有身て女子出生す。親の手づから守養育子は、恩愛もひとしほふかければ、夫婦は只掌の中の玉と慈み、その名を阿通と呼びつ、面影は父母に肖て、いと美麗なり。さる程に光陰矢のごとく、又梭のごとく、お通ははや五歲になりにけるが、母三勝が、毎日に彼此の女の童に敎るを聞なれて、まはらぬ舌に、梛節唄ふも可愛し。かゝりけれど、家は究て貧しくて、只ひとり子を養ふだに、物足ぬ事のみなれば、夫婦をり〳〵談合し、この所、世をしのぶには究竟の地なれど、山ふところなれば、絕て大和の音づれを聞よすがもなく、洛の景迹をしるによしなし。鎌倉は洛にも劣らぬ都會の地にて、諸國の人の集合ところなれば、外ながら、大和なる父の事も、又三勝が養父、平三が事を傳聞くよすがもあ

らんかとて、家財を沽却して路費とし、親子三人多賀の荘を首途して、中先道を下りけるに、時は九月のはじめにて、住つかぬ旅寢も寒し。ゆき〳〵て、水篶苅信濃なる、沓掛の驛に宿かりし夜、半七俄頃に發熱して、こゝち死べくおぼえしが、終に風濕となりて腰たゝず。藻鹽草かきあつめて、齎したる路銀も、こゝに至て用ひ盡し、進退究りて、いかにともすべなけれど、三勝はいとかひ〳〵しく看病し、しばしが程は、衣服を賣て、旅籠を償ひ、藥の價にしたれども、いく程なくそれも盡たり。しかれどもしらぬ里に來ては、物借べき友もあらず。かゝりせば今しばし、多賀にあれかしと悔思へど、思ふのみにてそれもかひなし。一夜々々に寒けくなれど、親子が膚はなは夏のまゝにて、又やお通さへ病もせんかとて、父母はいとゞ心ぐるしく、お通は友もなき旅の徒然に堪ず、この廣き宿よりも跡の狭き家が住よし、翌は多賀へ歸らし給へとて泣にけり。彼を見我を思ふにも、半七はいよゝ肥だちかねて、轍魚の泥に吻くに異ならず。されば三勝が心ぼそさはいかならん、寔に是苦中の苦、この秋は只わが身ひとつの秋かとて、かこつなるべし。

三七全傳南柯夢巻之四終

浪花 好華堂主人著編

大伴金道忠孝圖會

全部十冊近刻

此書ハ天智天皇の御宇に百済國へ援の兵を遣されし事を首として涯大臣が燈臺鬼と成りし謂大伴眞鳥兄弟に討て家國を押領せし奸悪大友白王子浄見原天皇と御合戦の次第金道の生立白虫大泉の忠義雅明が義心眞鳥の奢侈金道万苦を凌て父の仇を復し本領に安堵せし迄の奇事を詳に記せし実録にて勿論夫々に繪を加へ勧善懲悪を便とし最も面白き新本也

同上

扶桑皇統記圖會

全部十冊近刻

此書ハ人皇四十代天武天皇の御世より六十代醍醐天皇の御宇迄の公事の根元宮社寺院の草創代々の人物の行条を紀して所謂役行者安部仲丸吉備大臣衣通姫光明皇后良弁僧正弓削道鏡恵見押勝中将姫傳教大師弘法大師田村丸浦嶋が子小野篁在原行平業平小野小町僧正遍照菅丞相其外古人の実傳を探り精しく輯録し悉く圖画を加へ重宝の書なり

三七全傳南柯夢巻之五

羇旅の宿の上

半七が宿かりし香掛の客店は、驛稍盡處にて、いと大きやかなる家なれど、昔しの人の住茂る、埋れ井の車と〻も、身上久しくまはりかね、網代天井は中孕て、雨漏に煤を彩色、壁の腰張悉く剝て、長押より月をも引べく、高麗縁の席薦ところ〴〵切れて、藁を褥とせし故事も思ひ出られ、竹椽は斜に朽て、絲斷し琴にも似たり。さればこゝに一夜を明すもの、或は廻國の修行者、或は伊勢參宮の男の童、賣晋物よねの乞兒なんど、みな米はそなたより出しこ炊し、枕一つを借りて、燈火だに置ず。牛は牛づれの一隊、鼻より脫る訛聲にて、小曲子囂しく謠ふあれば、欠の跡の念佛を聞咎て、物あらがひする題目宗あり。聲の高きは山里の老翁、眼の光るは浦曲の家々にや、朝だちすとて、草鞋穿かへられなと罵り、菅笠踏潰されて、同行の面汚せりとて、いきまくもをかし。衆皆出去たる後は、大風の俄頃に凪たるごとく、搔おとせし虱の外には、とり遺たるものなし。坐敷いく間もあるかひには、三勝は一間を借て、病たる夫を臥さし、破襖もて、出居のかたを塞たれば、かゝる徒とものいふ事もあらねど、毎夜にかはる彼此人のうち語ふ聲を聞て、慰る日もあり、又わがうへに思ひくらべて、世を觀ずる夕も多かり。かくて半七は、こゝに病臥してより、思ひの外に日を過し、物みな沽竭して、いよ〳〵すべなし。常言に、坐して食へば山も空しといへり。よしやいかなる恥を忍ぶとも、夫を濟ひ、女兒をも饑はさせじとて、三勝はます〳〵志を勵し、お通がもてあそびの三味線は、彼がいと惜むものなれば、近江を出るときも、行李の中に包入れて、もて來つるが、皮も破れたれば是のみいまだ賣らず。三勝はこれこそ究竟のものなれと思ひて、夜每に笠をふかくし、しのび〳〵に彼三味線を抱て、街を徘徊し、人の門に佇立つゝ、こゝろにあらぬ娜節後投節といふ。故あり略しつを謠て、錢を乞ふを得て、その日〳〵を過せしが、お通をばよく睡らして出るほどに、絕てかくとはしらざりけり。半七は又三勝に、かく淺ましき所行をさすること、みなこれわが身ゆゑなりと思ふにも、いよ〳〵世の中を形なくおぼえて、顏色もやゝ焦悴、ある夜三勝が出ゆくを目送りつゝ嘆息し、うたてやな、われも一たびは、績井家の近從に召れ、君父の蔭とはいひながら、人なみ〳〵の世を經しものを、忠義の爲に

不忠といはれ、不孝の子となりしより、年豐なれども、日を算て食ひ、世は暖なれども、わが眼には春色なく、千辛萬苦にあふみ路なる、多賀に住わびて出たるが、又や旅寢に病鴈の、妻子に憂を見するこそ、わが病着より苦しけれ。さるを三勝が信々しく、晝は終日看病し、夜は恥を忍び門に立、親子三人が玉の緒を、三すぢの糸に繋ぎとむる、その三味線の手の内を、受る扇は名も高き、舞の太夫のなす事歟。しげれ松山筑波山、降りて今の雛節も、こゝらの人には馬耳東風、かゝる時にも藝は身を助くるほどの薄命、大和にありて三勝を、妻としお通を産しならば、乳母に抱し傳て、假初の出居にも、商人等には會せもせじ。それ悔しとは思はねど、われゆゑに三勝には、いくその物を思はせて、舞子に劣る乞食を、さしつゝ見つゝ存命ては、たえて世にあるかひもなし。白河にて死すべかりしに、彼が心操を、いたづらにはなしがたさに、よしなや六年生延て、いとゞ歎をまさしたり。貧の病に身の病、片輪車の足腰たたで、いつまで思ひ沈むべき。身あればこそ、彼等は人に寄がたけれ。われなくば人も憐み、よろしき方に給事て、立まさる事もあらん。親はなくとも子は育、歎くは愚癡歟、子を思ふ程には



親をおもはなくに、父はいかにかなり給ふ。園花も今ごろは他し縁しや結びけん、もししからずば恨むらん。とてもかくても活がたき、わが身を捐なば妻や子の、又浮む瀬もありぬべしと、こゝろひとつに覺期して、さて翌の夜を待にけり。ともしらずして三勝は、その夜五六合の米と、二三十の錢を得て、二更の比及に立かへり、まづ夫の安否を問、お通が睡轉たるに枕さし、曉の炊を誂へなどしつ、小夜更るまで、半七が腰を搔擦り、行末來しかたを語り慰るに、半七は今宵限りの名殘ぞと思ひしかば、こゝろよげにうち聒譚つ。且して三勝は、夫の睡れるを見て、潜やかに手を休めつゝ物を引被け、お通を搔抱て、夫のほとりに臥し、詰朝とく起て火を乞、粥を煮さして、夫と女兒に食し、われは餘れるを啜りて終日看病す。その苦辛艱難は、比んにものなかるべし。かくて三勝は、この日又宵の間に街に

良人を看病す



出て、物を乞んとするに、お通は晝寐したればにや、常にかはりていまだ睡らす。半七が顏色も、きのふよりあしう見ゆるに出かねて、とかくする程に、初更の比及にも向とす。あまりに思ひかねて、夫にいふやう、この夜をいたづらに明しては、翌の炊をいかにせん。しかはあれ、今朝よりわきて食もすゝみ給はず、お通

さへ睡らぬに、迹を慕はゞ便なかるべし。今宵は出ずもありなんかといふに、半七答て、いなわが身食のすゝまざるは、起居自在ならで、内の透ぬ故なれば、患とするに足らず。お通をば、ともかくも、賺こしらへて睡らすべし。夜毎の事なれば、邂逅は出ずもがなと思へども、翌の炊に物缺ては、いよゝ便なし。更ぬ間にとくゆきて、とく帰り給へといふ。三勝聞て、さらばしかいたすべし。枕方なる火桶に火も活て、土瓶に湯もぬるましく侍り。厠へ登んとて、強て身を起し給ふな。お通に指燭を秉し、坐行つゝゆき給へよ。彼處の竹線は、半朽て侍り。おなじくはわらはが帰るを待て物とゝのへ給へとて、叮嚀に聞えおき　さて三味線を袖に抱きて出んとするに、お通ははやくこれを見て、母御何地へか行給ふ、など伴はし給はざる。その三味線はわが身のに侍り、返給へと携着。聲高しとは思へども、ことわりなれば、打も叱らず。そなたを将てゆくべうは思へども、西の街には、おどろ〳〵しき豺出て、人を噛といふを聞ずや。大人しやかに留主致して、爹さまの陪従をせば、小麦の團子を買て得させん。又この三味線は、皮も破れ、海老尾も缺てあり。皮張更て得させんに、しばし母に貸てたべと、賺されてうち點頭、しからば皮を張かへさし、とくもて來て給はれや。應、もて來ざらんや、もて來べし。よく留主せよといひかけて、夫のかたへ注目し、尻切（草履の名）穿て足ばやに、暗の方へと走去ぬ。折しもあれ、この夜は合宿の旅客もなく、物たべの翁、只一人こゝに歇りて、半七等が次の間にあり。夕餐も既にたうべ果て、痀僂のかたをさし覗き、この夜の長きに、宵寝せんはいとをし、そこらわたりを一搊、すべきこそといひしらすれば、あるじの男見かへりて、さても慾にはふけぬ間に、帰り給へと應して、うち笑へば、うち笑ひ外面へ立出けり。かくて三勝は、こゝろは夫子に引れつゝ、彈かでかなはぬ糸竹の、節さへ音さへたちかぬれど、その身はこゝの門に立、彼處の簷下に立在ば、われに等しき物たべの目鼻のあたり切抜し、紙の假面もあやしげに、撥もつ臂を曲物の檜の胴に竹を棹、三條の糸をかけ聲も、くりかへしくりかへし、おなじ唱歌を一口に、「〽とぞ申ける」と唄つゝ、ひとつ街を徘徊す。（按ずるに、この後寶永年間、武江にも又「とぞ申ける」といふ乞食ありしにや。ちかごろある人の所藏、おでゝこ双六といふものを見しに又この圖あり。）折しも九月十八日の月出て、外より寒き山里は、虫の音絶て遠碪の槌いそがしくなりまさる、世のいとなみぞ哀れなる。さる程に半七は、病臥て旅の宿を、立ことかたき蹇の、こし路に隣る信濃國、脊掛にくづをれて、われから急ぐ冥土の旅、せめて一筆遺さばやと、墨斗に筆は染ながら、手さへふるひてそれも及ず。と

せんかくせんと思ひくしたるが、お通は日來記憶よく、も賀莊にて女の童に、母が小曲を敎しとき、よく聞とりて謳ひしかば、これに敎てなき後に、いはせんものをとひとり點頭、やよお通、久しく御身が謳歌を聞かす、母の歸り來るまでは、いと徒然におぼゆるに、謳て聞し給ひてよと、いふは今宵の遺言を、いひ習せん下心、とはしらねども稚ごころに、物あらたまりては恥しく、謳ふことは唄ふべけれど、三味線なくてはいな〳〵と、頭を掉をことわりとも、いひがたければ父はなほ、胸苦しさを紛かし、微笑て是はさて、三味線なくとも唄る丶、近ごろ流行赤もの丶しな〳〵、唄ひ給へといそがされ、それも久しく唄ぬ間、うち忘れたるところもあらば、敎給へと愛々しく、小膝なほせば半七は、これで〳〵と母親が、忘れてゆきし破扇を、遞與ばお通は拍子をとり、聲はりあげて唄ひける。

左の唱歌は慶安二年の印本尤草紙、上の卷、第二十九段に見えたり。編者の自註に、是はひととせじゆらくの城の時分、京童の小歌なりといへり。

赤き物のしな〳〵

へまうそ〳〵、赤い事申そ。むらさきの丶きもんかくに、妙覺寺の二王門、百萬遍の御影堂、天滿のかねのを、赤つらの明王、天火、いなづま、朱すりばう、いなり殿の狐火、祇園殿の犬子、山王の鳥居、猿がしりは眞赤な、早川主馬のふんどし、すはうか、紅梅か、ひさや、ひじゆす、ひぢりめんにひどんす、比古どの丶ひつしき、綿鍋殿のきんちやく、たんしやうどの丶もちやり、小野木殿のかはらばな、あい殿の御門、ゆふけいのこしざし、朱ざや、朱具足、からのかしら、猩々緋、高雄のもみぢに、だんの山の岩つ丶じ、けしの花にけいとうけ、御所柿にざくろのみ、ぼりの木のきりかぶ、鹽引のきり口、鯛のさしみ、いりえび、赤がひ、赤がに、赤にしにかざみのあしをかきにもり、佛じやうぼうのくちびる、口宗永のほ丶さき、朱屋のか丶の口べに、茶屋のか丶のまへだれ、よしやすのつきん、とうきのまくら、べにさら、朱わん、朱をしき、ちやつか、づすか、朱つぼ、朱からかさ、王のはなか、しゆせんじ、さてはそ丶のまん中、えいやまん中。

と唄ひをはれば、半七は、思はずもうち笑て、長き事を忘れもせず、さてよくぞ唄ぬる。それにましてなほをかしき、昔おきのことといふ謳歌もあり。今父が敎んに、よく記て母が歸らば、唄ひて聽られ給へかし。褒美の餅得つべきぞと、賺されて稚子は、いとゞ興ある風情にて、褒美に餅給はらば、何にまれ記侍らん、敎給へといそがしく、小膝すゝめつ今宵死ぬ、父の遺言ともしらで餘念なきその貌見せは、唱歌も口へ出ばこそ。こゝろ

の調うち亂れ、涙見せじとやうやくに、胸撫おろし聲細く、長く引節、急る曲、只漫にくりかへし、繰かへして教れば、お通ははやく習ひ得て、母さま歸り給へかし。三味線彈して、唄ふべきになどて歸り給はざる。彼三味線の張出來ぬ歟、もし豺にや噛給ふ、いと〳〵遲しと待わぶる、欠びに睡を催せば、父は女兒を引寄つゝ、よく記しか忘るなよ。唄はゝ母がいかばかり、譽もせん歎きもせん、常には暮るゝと寐よといふに、今宵は二更に程もあらじ、尿して來よと手をとれど、立ことかたき蹇の膝を枕に睡顛、呼び覺しても應せぬ、わが子の顏をつく〴〵と、見ればおもへば壯士の勇きこゝろも恩愛に、やるかたなきは涙なり。且して涕うちかみ、噎われながらいひがひなし。忠義の爲に捨し命を、妻や子に絆されて、けふまで活たる悔しさよ。死せりと聞かば大和なる、園花が恨も散、父の怒も解ぬべし。とは思へども三勝が、夫の爲に乞食して、媢とせぬ心操は、比稀なる貞女のかゞみ、家を失ひ今宵又、われにさへ捨らるゝ、夫婦一世の別とも、しらで出、しらで慕し女兒は母より父がこの、面影を見忘れなば、年長物の哀れをも、しる程悲しくおらんずらん。怖氣もなくて大きうなり、母に孝行盡せかし。五歳の侲子が三つの緒に、あはして唄ふ歌も今、親の末期の役にたつ、是も過世の業因ならめ。かへす〴〵も敎たる、唱歌をな忘れそと、寢顏を覗く暇乞、驚せじと膝を引、親子餓ても渴ても、昔忘れぬ兩刀は、父の像見の亂燒、亂れぬ武士の魂と、押戴きて拔はなち、襟くつろげて中刀を、腹へ突立んとする折しも、間近く聞ゆる足音に、すは三勝が歸りしかと、刄をかくせばそれにはあらで、次の間の障子さと開て、こは暗かな〳〵とぞ申ける、とひとりごち、呵々と笑ふ聲を聞ば、甲夜に歇りし旅客なり。彼にもしらせじ、三勝が歸らぬ隙にと心いそしく、又とりなほす刄の光に、不圖目を覺す稚兒が、泣出す聲に引れてや、三勝は喘々、走り歸りつゝ屹と見て、吐嗟と内に飛で入り、夫の拳に携著、とゞむる袂も翻り、はら〳〵と落る錢と米、搗て雜たる周章なり。半七聲を勵して、怪我なせそ、其處放せと、叱り退れど三勝は、なほ引留る一生懸命、緣故を聞までは、放はせじと携手も、涙に洗ふ氷の刄、反退んとすれど半七は、病疲れて思ふにまかせず、こゝろ頻に焦燥て、緣故を聞んとならば、お通こそよくしりてあれ、わがなき後に問給へ。留るは却恨なりといきまけば、三勝はその意を得ず、お通が何をかしり侍らん、こは物にや狂ひ給ふと、いふを半七は聞もあへず、やよお通、甲夜の唱歌を忘れなと、いはれて女兒は目を押拭ひ、母さまわらはは爹さまに、書おきといふ謳歌

を習うて、よく記得りぬる。三味線を彈て給はれと、はこりかなるも鈍ましく、さては爹々の遺言を、なき後に傳へよとて、女兒に教たまへる歟。夫の今般に三味線を、彈てその子に遺言を、聞く母親はよもあらじ。理なき事をいはずとも、爹爹に聞たる事あらば、しらし給へといそがせば、お通は頭をうち掉て、三味線なくてはをかしからず、皮張かへんと宣ひたるに、などてこのまゝもて來給ひし。聞まほしくば彈給へ。わらはも褒美に餅を給はらんにと回答して、死んとする父、とゞむる母の心もしらぬ哀れさを、洩聞こや次の間なる、旅客が探撈、これも三すぢのいとけなき、女兒も耳を側れば、三勝は堪しかねて、やよお通、あれを聞ずや、母はこの手を放されず、外ながら彼撥音に、おはして爹々の遺言を、聞し給へといふ顏を、さし覗きつゝうち點頭、母さまは泣給ふか、泣給ふ程聞まほしくば、唄ひ侍らん聞給へと、座を占て手を膝におき、稚き聲をはりあげて、彼三味線におはしつゝ、謠ふを聞ば、正是、

みすゞかる、しなのゝ國に旅寢して、木曾の梯わたりかね、世を姨捨の名にしおふ、病て伏屋の里遠み、何かうらみの山鳥、いたくな啼そ更級の、田毎の月の影ならで、うつればかはる千隈川、濡さば袖とつまなしの、神も縮ぬえにしとて、契り淺間が嶽ならば、翌は烟とたちのぼる、心をさぞと久米路の橋、諏訪の湖氷るとも、只都井に歸りなば、東間の御湯の束の間も、寢覺の床の寢覺にも、そのはらなりしをさな子は、はゝき木とこそ忍ふらめ。かゝる歎きにおふちの關も、こえて御坂にさかえよと、思ふばかりぞ慈に、子をもち月の駒や食む、からき世を去る蓼科の、言の葉露とかきぞ遺せし。

とうたひ果れば三味線も、乙の撥をぞをさめける。三勝唱歌を聞ばなほ、悲しき事限りなく、病着に身を恨て、死んと思ひ定め給ふは、理に似て理ならず。跡に殘れる妻や子の、心も猜し給へかし。かからんとてか親と子に、譬し三すぢの一の緒が、斷てこゝろにかゝるから、慌忙歸りしも、夫の必死を救へとて、神の導き給ひけん、殺しはせじとかき口説、諫ても喩しても、半七たえて思ひかへさず、わが心の中を唱歌にて、しりつゝとむるは聞わきなし。其處退給へよ焦燥つ、退じと爭ふ二親の、異なる氣色を稚子は、何事とも思ひわきまへねど、うら悲しさによゝと泣、彼方此方に捕削て、親子三人煩惱の、覊に狂ふ意馬心猿、繋かねたる玉の緒も、今や斷んと見えたりける。浩處に次の間より、燕寢を押開き、やよ待給へ婿どのと呼かけつゝ、三味線引提て立出る。三勝これを見かへるに、甲夜に敗りし旅客は、笠松平三なりしかば、

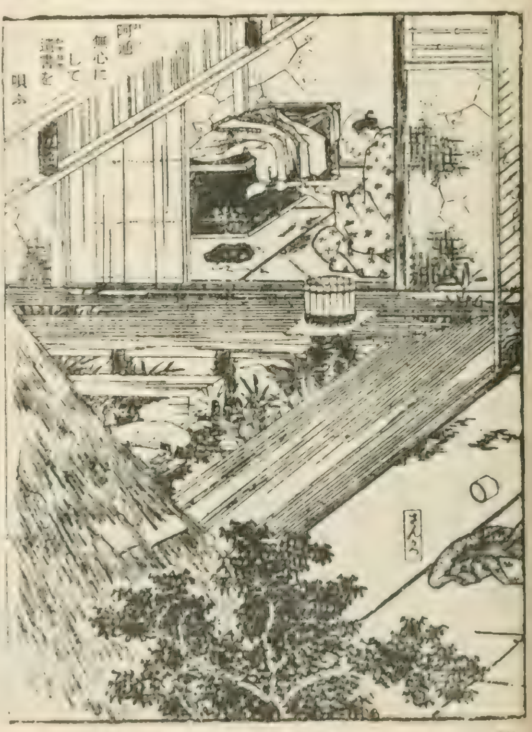
こは思ひかけず、とばかりに、恥しさと嬉しさに、しばし言語はなかりけり。

覊旅の宿の下

そのとき平三は半七に對ひ、かく忽卒に呼かけたるを、不審もおぼさんが、豫て女兒が物がたりにて、聞も及び給ふらめ、おのれは笠松平三なり。しかるに今宵、こゝの驛路にて、われに等しく絃歌を賣、彼此の門に立在女子あり。笠もて面をかくしたれど、その聲を聞くに、わが女兒に似たり。それかと思ひながらはしなくは問ず、こゝに立かへりて窺ふに、果してそれなり。飛たつごとくにありしかど、まづ御身が遺言の趣を聞ん爲に、名告もあはず、この三味線めきたるものを、しかつめらしく操将ど、五十に及ぶ老が手にて、稚き孫が謳に合し、彈れうものか愛らしき、聲を聞さへ涙の種、忍びかねたる緬柱に、撥の當度も定らず。あとへと戻る糸巻に、音締も濕る憂思ひ、恩愛の枷かけて、御身が自害をひき留る、調子ちがひの不骨者、かく淺ましき旅をして、東の果まで呻吟も、三勝が往方をしらまほしさ、はからずも歇りあはして、いかでか婿を殺すべきと、いひも果ずつと寄て、矢庭に刄を奪ひとり、やがて鞘にをさめて、三勝に遞與しつゝ、いふやう、



便れば六年のむかし、三條河原にて、御身を人に奪ひ去られしとき、われも脚平足平を殺したる罪、脱がたく思ひて、その夜洛を逃去り、四年あまりを奈良にて過し、高天神の茶店にて、領主の代參かとおぼしき武士に割籠を忘れ、大佛のほとりに到てこれを披けば、思ひもかけず飯の中に、一包の金を埋て、三勝が身價と寫したり。事の爲體いと怪しければ、緣故をしるよすがもやとて、豫て三勝に由緣ありと聞く、五條にいゆきて、赤根半六ぬしの事を問に、里人答て、彼人は、その兒半七といふもの洛にありて、三勝とか呼る丶娼を誘引逐電したる罪によつて、永く出仕を止られ、直蟄し給ふなりといへり。こ丶に至てわれおもへらく、三勝を奪い去たるは、結髮の夫半七にてありし。ともしらざれば方人せし徒と挑み爭ひ、人を殺す大罪を、犯せしこそ悔しけれ。か丶りせば、などて一言われにはしらさゞりけると、恨みながら疑ひはなほ解ず、彼金を投りしもの、彼か是かと思ひ迷ひ、その細しきをしらん爲に、南部に乞食して、年月を過せしが、終に御身



の往方もしれず。今はとて彼地を立はなれ、それより諸國の靈場を順禮して、此秋善光寺へ詣、なほ彼此を彷徨へども、はじめより件の金は一枚も喪はず、年にあ

恥ぬ小曲子を唄ひ、路すがら人の門方に立、形なき世に存命たるかひありて、多年の志は致したり。面をあはせし事はなけれど、彼は夫婦が中に儲たる女兒、これは大和にありと聞し、半七どのなりけりとは、襖を隔て三勝が夫よわが子と呼ぶにてしりぬ。見れば又思ひしよりは、夫婦が稚樹の花もうつろひ、われもかくこそ老にけれ。さるにても彼身價は、何ものか贈りたる。半七どの丶なせし事歟、六年以來の疑を、はらさし給へと信やかに、問ど恨は露ばかりも、えいはぬ男だましひに、半七はいよ丶恥てや、さし俯て回答せず。三勝いたくうち泣て、養育の恩を仇にして、罪を得さし、物を思はし、淺ましき世をわたらし侍る、不孝は勸解る言語もなけれど、浮たる情由にて奔れるにはあらず、みな是夫が忠義ゆゑに、不意に再會しつるなり。はじめをいへば箇樣々々、終をいへば如此々々なりとて、園花が事、吉稚丸の事、二郎太夫、曾太郎が事、全八、蝶九郎が奸惡に至るまで、一五一十を物がたり、且白河にての爲體、多賀の莊を住わびて、近ごろ鎌倉へとて旅だちたるに、半七が暴に病て、進退究り、物みな沽竭して、すべなき事、これ彼審に聞えしらすれば、平三は聞く毎に嘆賞して已ず。そのとき半七は、やうやくに頭を擧、緣故は目今三勝がまうせし如し。おのれ白河にて死すべかりしを、三勝に諫られ、か丶る形容にて、舅どのに名告あふこそいと面なけれ。示さる丶三勝が身價の事は、和州續井家の老臣、厚倉二郎太夫友春が、しのびやかに贈りしなり。そのはじめ三勝を、結髮の妻おさんなりとは、われもしらず、彼を奪去て、郎君の御惡名を雪め、直に刺殺して、われ又自殺し、情慾の爲にせざる、身を潔せんものをと、只管思ひ定たれど、恨もなき人の女兒を虐る、その罪はいと深し。せめて三勝が身價は、その親に與へ給へ、與ふべしとて五條なる、旅宿にて厚倉氏と、後の事さへ相語おきしが、彼人、言を食ずして、件の金を投れるなり。しかるに御身は義を守りて、その金を喪ず、艱苦を厭はで三勝が、往方を索給ふ事、世にも稀なる大丈夫、半七が及ぶ所にあらず、いと頼もしく候へとて、頻に稱贊したりしかば、三勝も又嘆賞す。平三聞て、いなわれ、女兒に舞々はさしたれども、彼が粉黛の骸骨を賣て、自の老樂をはからんとまではせず。これ志氣あるもの丶常なり。只御身夫婦が孤忠心烈は、日を同して語がたし。この夫にしてこの妻あり、誠に一世の奇耦、天の結る良緣なり。加之孫女兒が伶悧なる、容止も父母に似ていと愛たし。年はいくつぞ、名は何と呼る丶ぞと問れ、お通は雄手の指をひらき、年は斯、名はお通と呼れ侍り。日來母御がそなたにも、

祖父さまの在すと、いひしらし給ひしかば、見まくほしう思ひ侍り。いつまでもこゝにおはせよ。爺さま母さま中よくして、聲られ給へと、いはけなき言の葉は父二親の、袖にも露ぞおきあまる。平三は目を押拭ひ、膝にお通を引載しつゝ、かゝる女兒をもちながら、死んとおもふ親も親、恩愛の絆には、賢愚剛臆の差別なく、猛將勇士もかはらぬものを、鬼々しきも事によれと、恨むも親戚の啣言なり。半七は平三に諫られて、終に志を果し得す、こは死るにも死れずとて、しば／＼歎息したりける。このとき夜は既に更たけて、宿のあるじが臥たる、寢房の方へ遠ければ、この件の事をしらず。平三は膝に眠れる、お通を三勝に抱とらし、胴卷の用布より奈良にて得たる、身償一包をとり出して、夫婦が間におきならべ、三勝が苦節むなしからずして、今幸に、彼が身償百金あり。これをもて、半七どのゝ醫療、心のまゝにせば、身の病着はいふもさらなり、貧の病も又愈なん。心づよく思ひ給へと、いひ諭しつゝ、これを遞與せば、半七頭を左右に掉、男の好意はさる事なれども、その金は、わが夫婦の爲に用ひがたし。故いかにとなれば、前にもいひつるごとく、三勝を半七が結髮せし、女子としらざればこそ、厚倉氏、彼が身償を投りて、その親に酬るなれ。もしはじめより、半七が舊の妻なりとしらば、この金は投もせじ、御身も又受給ふべからず。しかるを今これをもて、自を安うせんとはかるときは、はじめの忠義もいたづらならん。只金はこの儘にて、折をもて厚倉に返し遣し、又御身の一生は、夫婦がともかくもして養ふべし。しかせざれば義に違り。そは思ひもかけざる事なりといふ。平三かさねて、いはるゝ所實にしかなりといへ共、今この金を返せばとて、只一夜の中に、大和へとゞくにあらず。しばしこれを借て服藥し、病愈て後、その缺たるを調達て、舊へ返すとも遲きにあらず。何事も平三にうちまかし給へといふに、三勝も又さま／＼に言語を竭して、やうやくに納得さし、さて次の日より、醫師に見せて、價貴き藥品をも厭はず、それがいふまゝに療治せり。さるからに宿のあるじ夫婦は、平三が半七等ともろともに、逗留するに至て、はじめにも似ず、錢あるを見て諂みながら、等閑ならず欵待しけり。かくてまた二十日あまりを經て、半七が病着おこたり果、手足舊のごとく健になりしかば、三勝はいふもさらなり、平三ふかく歡びて、半七にいふやう、しらぬ鎌倉に赴んより、おなじくは浪速へゆきて、活業をし給ふべし。彼處は洛へも遠からず、われ又土地の人氣をしれり。かならず便宜を得つべきなりとて勸しかば、半七これにしたがひて、親子四人、遂に苦掛を

たち出、更に西を斥て走る事、十日あまりにして、浪速に到り、長町といふ所に借家して、みなもろともに膝を容れ、何をがな活業にせんと議するに、平三は原來俳優の事に熟て、鬘を作るにこゝろを得たり。これより思ひつきて、入髪といふものを作りはじめ、半七は毎日に彼此にもて出て、これを鬻ぐに、頭髪うすきもの、頭髻を太やかにするに、究てよしとて、買人も多かりけり。そののち三勝、又蓑鬘といふ假髮を工出して、平三とともにこれを作る程に、はじめの入髪は、頭髻のみなれど、蓑鬘は髮の薄きを掩なれば、魏宮に蟬鬢を製はじめ、綠雲擾々として、曉鬟を梳るがごとく、婦女子大に珍重し、蓑鬘を作り出したればとて、三勝半七を綽號して、長町の蓑屋となん呼びにける。さればはじめの笠屋をば、こゝらわたりの人はしらず、隱蓑屋と世をしのぶ、半七もこゝろの外に、商人



となり下り、住ば又住よしの、岸の姫松年預御達、假髮めされよ、この外にも、髻結、眉掃、玉櫛笥と、ふたとせ近く浪速津を、呼あるけども沓掛にて、數日の療治に三勝が、身價を遣ひ減らし、又こゝに來たつて、活業を致にも、本錢諸雜費、これ彼二三十金に及べるを、なほ贖ふに至らず。いかにもして、件の金を舊の數

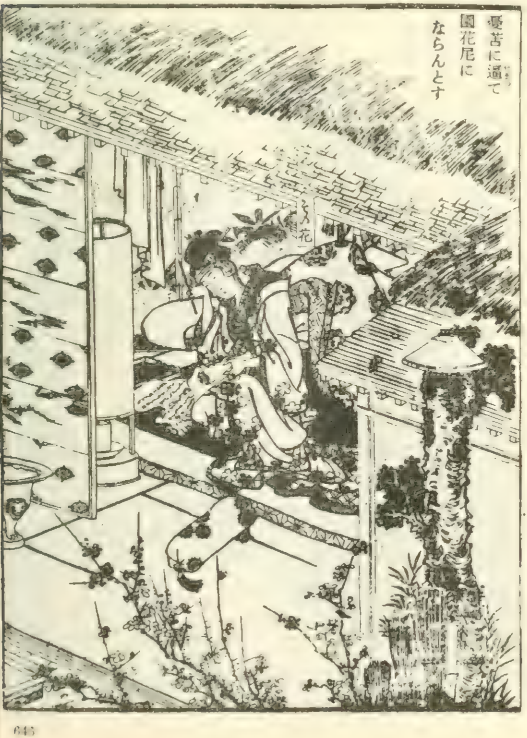
あはし、厚倉二郎太夫に遠さけらるとて、園子夫婦これが爲にいよ〳〵その心を盡し、夫は聊も活業に懈らず、妻は父節儉を宗として、飲食も薄くすれど、毛より細き痩世帯にて、二三十兩の金を、忽地に貨殖出すべうもあらず。これのみならで、半七は、父半六が安否、こゝろもとなければ、しのび〳〵に奈良と五條の爲体を探聞に、半六は今なほ閉こめられて、いといたう老くだち、園花は、一たび想思病にうち臥してより、たえて首をも擡ず、この七年が程、死もやらず活もせず。されば典膳夫婦はます〳〵半七を恨み、女婿をさま〴〵に諫こしらへて、ふたたびよろしきかたに、縁しを結せんとすれども、園花はいよ〳〵志を固して、うけ引ず。只口でも暮ても、半七が事のみに、思ひほそるを聞えしかば、半七は父もはや、一たびはよろこび、一たびは懼る齢なるに、われゆゑに罪を得て、久しくからきめ見給ふ事、いと朽をしとうち歎き、園花が心操も、不便には思ひながら、父を救ひ彼女子を慰るよしもあらず。三勝もこの事を聞て、園花が心の中を思ひやり、夫をおもふは、われも他もかはらぬものを、もしわが夫婦存命て、浪速にありと聞給はゞ、さこそ妬しと思ひ給はめ。一たび縁故を聞えしらせて後は、わが身



は尼になるべけれと、おもふ程を半七に告、夫が忠義むなしからずは、大和へ歸らし給へとて、あらふる神佛に祈けるとぞ。

主なき園の花

さても蟻松典膳が女兒園花は、往年半七が、舞々と奔りしと聞えしころ、妬しと思ふ氣色なく、只身の形なきを歎くのみ。いよ〳〵望を失ひて、つく〴〵と思ふやう、わが夫は人となりその心ざま貞しければ、舞々なんどにこゝろ惑ひ、忠孝兩ながら缺給ふやうはあらず。もし彼舞々は、豫て聞えしらし給へる、稚馴染の結髮、おさんどのとやらんにてはあらざる歟。しからば彼人存命て、洛にありけるに環會、已ことを得ずもろともに迹を闇し給ふにや。とまれかくまれこの事には、深き故こそあらめとて、遠く慮るほど、墓なきものはわが身にて、涙の雨に枕も朽、括り目解し長總の長き病着となりしより、針灸藥餌も驗なし。父母はこれが爲に、いとゞしく胸を苦しめ、さま〴〵に諭して、半七が事を思ひ絶せんとすれば、却病をますにすべなく、只典膳も敷浪も憤を忍びて、半七が事をいひも罵らず。その花は、又密に五條へ消息して、なり〳〵半六が安否を問、これは日來嗜み



憂苦に逼て園花尼にならんとす

給ふものなり。彼は堅やかならで、おん幽にあひ給はんかとて、狭もの廣ものゝ魚肉野菜、調理したるを贈遣し、又蟄居給へば、氣の結れ給はんかとて、佳酒を贈ることもあり。春のをはり冬のはじめには、衣服の洗濯にも心を著て、よろづ乏からぬやうに賄ひ遣すに、父母にはふかく匿して、こゝろ利たる奴婢、只二人にこの條の事を與らしけり。半六は、園花がかく信やかなるに感涙を拭あへず、いかなれば半七は諒すくなき舞々に思ひかへて、かゝる貞女をふり捨たる。さまで虛けきものにはあらざりしが、舞々といふ老狐に魅られ、親をも妻をも思はぬよ。九つの世に生は變るとも、半七はわが子にあらず、只園花のみ、實の女兒と思ひ進らするとて、心ぼそき限り書寫め、返事する日もありしとぞ。かくて春去春來たつて、既に七年を過せしに、このごろ誰いふとはしらず、半七は彼舞々を妻



として、浪速の片ほとり、長町といふところにあり。今は商人となりて、蓑屋と呼れ、假毛といふものを鬻て活業とし、お通といふ女子さへ産して、既に六歳になりぬ。大和へは十里に足らぬ浪速津に住ひて、世をも人をも憚からぬ、嗚呼の白物なれとて、諸中もつぱら風聲す。園花ははやくこれを傳聞て、一たびは半七

が恙なきを歡び、又一つには、父母もし聞しり給はんには、主君の威勢を借て、いかなる祟かあらし給ふずらんとて、更に安き心もなし。あるとき父思ふやう、半七ぬしに不慮の事ありては、みなわが身の妬にて、父に勸め、からきめ見するなんど、世の人はいふなるべし。よしやわが夫、輝々を伴ひて、何國の浦に在すとも、外ながらその安否をしるときは、慰むよすがともなれど、わが身の心操は、言告やらん便もあらず。とくこの風聲をいひ止かしとて、いと胸くるしく思ふ折しも、果して典膳も、半七が事をよくしりて大に怒り、密に敷浪に織田を物がたり、彼いかにして、年來の憤を散さんといひきまくを、婢竊聞して、驚て園花にかくと告にければ、園花打驚きて、さればこそわが思ふに違ね。今は只この身を殺して父母を諫、夫を救ひて年來の、誠心をもしらし侍るべし。しかなり〳〵と思ひ定めたれど、氣色にもあらはさず。頃しも年極の上旬、宵の霰も吹霽て、深ゆくまゝ氷る夜に、園花竊に起出て、そと行燈を引寄する、腕も細りて力なく、凝亂したる鬢の毛の、顔にかゝるを掻あぐれば、只あやにくにはふり落る、涙に墨を摺流す、嫁入のときの硯箱、夫の紋とわが紋を、蒔繪ちらしもいたづらに、夏毛秋毛とふる筆の、命毛も今宵限なる、ともしり給はぬ父母の、歎きもさこそと推量られ、翌はわが身を啼鳥の跡の事どへ細々と、書寫めては讀くだち、かゝる文にもめでたくは、親を祝ぎまゐらする、候と、に筆を留、卷納れんとするに思ひもかけず いつの程より闚窺けん、咳し一間風障遊り、内に入るを見れば母親なり。園花阿呀と驚きつゝ、忙しく遺書を、袂の内に引かくすを、見れども母は見ぬ顔して、ほとりちかう居ていふやう、昨今は寒さ勝さらにおぼゆるに、久しく病て坐しながら、小夜ふけて何をかし給ふ。流るゝ水にこゝろあれども、落る花にこころなしと歟。鬼々しき半七を、なほいとほしみ給ふから、母が心も安からず、大和にあらふる神佛には、願事をかけつくし、顔の細りを見る毎に、わが身の病よりなほ苦しく、咳入り給ふ夜半の聲、聞けばとにかく睡られず。しかるに今宵は常にかはりて、人をも呼ず起出給ふは、近曾頻に風聞ある、半七が事の心にかゝるなるべし。さはあらぬかと問に、園花は只涙さしぐみて、はか〴〵しくは應せず。敷浪はつく〴〵と、女兒の顔をさし覗き、痛しや、わかき人の苦勞すとて、いと面痩の見ゆるなり。このごろの風聞を傳聞給ひしかはしらねど、聞しともなきに默止せしが、半七は舞々の三勝とやらんを伴ひ、商人となりて浪速にあり。女子さへ産したりとぞ。爹々この事をよくしり給ひて、いたく腹たて撥とりて、



年來の憤をはらさんと、いきまき給ひつろを、とかくいひ寛て、けふまでは過しつ。又いひ出るは今宵はじめなれど、御身が五條へ嫁り給ひし頃、半七は嘗つるよしありとて、結髪せし女子の事を、御身に聞えしらし、離別して奈良へかへり給へといひつる事、又御身が誠心を告て、かき口説給ひしを、竊聞したる事もあれば、此彼思ひあはするに、もし彼三勝は、半七が結髪せし女子にはあらざる歟。しかれば彼人の僞のみにあらず、よくも聞苛す、權しを締し結びたる、親と親とが過なり。されぱとて御身が事は、主君に聞えあげて、御許を受、婚姻を整せし半七が正室なるに、縦彼人結髪の妻あればとて、そは私の縁しなり。とまれかくまれ半七は、大和へ歸る事かなはねど、君父に違かりても、婦は夫に從ふが常の道なれば、密にこの理を述て、御身を浪速へ送り遣すべう思ふなり。狹き女子のこゝろもて、かならずよからぬ所爲をして、歎きをなまさし給ひそ。御身が揖は焼野の雉子、母が心は夜の鶴、夫を思ふも子を慈むも、いづれか劣り、いづれか勝らん。こゝろ得たりや、こゝろ得給へ。やよ〳〵といひ諭すにぞ、園花は目を押拭ひ、おん慈愛の深きにも、なほ身の不孝は唧たれて、とかく申さんやうはなけれど、半七ぬしの事のみは、親にも身にも寶にも、かへて最惜思ひ寐の、強顔人を夢にのみ、はや七年を過せども、はじめより嫌れし、身を阿容々々と浪速まで、ゆきて恨をいはるべき歟。況て仇なる舞々の、浮世に色香ます花の、三勝どのと園花を、譬ていはゞ深山木の、身のなる果をかくとだに、聞えしらして笑れなば、耻の辱にて侍りなん。又理に責られて、只假初の捨言葉、かけらるゝとも子さへある、妹夫の中を引裂て、姤婦と世に譲れし、綾目の合ぬ擽略、閨房の屏風の立よしも、なくては連添かひもあらず。世にも人にも捨られし、冬の扇の骨ばかり、病臥てありながら、われから倦れに彼所まで、ゆけと宣ふは情なし。只願しきは彼人に、異なる事もあらずして、いく百年も世に榮へ、吉野の花の聞ころは、大和の事も折ふしは、思ひ出して給はらば、なき身の後もいかばかりしく成佛いたすべし。親に先だつ不孝の罪、ゆるし給へと合す掌に、[illegible]落る涙の瀑布、岩に堰るゝごとくにて、われても末に逢んとは、いはぬ[illegible]を母間に、[illegible]

身に思ひくらべつゝ、貞女両夫に見えずと、口にはいへど始終慥ならぬは世の中の、人ごころにてあるものを、親も及ぬ心操を、言の葉ずゑの露ばかりも、いひしらさねば彼人のしるよしもなきぞかし。母があしうは計はじ、何事もうち任し給へ。御身が兄曾太郎は、半七が竹馬の友なれば、これをこそと思ひて、けふ密やかに御身が年來の物思ひと、母がおもふ程を、審に聞えしらして相語たれば、彼みづから浪速に赴きて、半七が長町とやらんの隠家をたづね、時宜によらば對面して、縁由を述、その應を聞て、歸り來べしといひき。よしや置去に去られても、夫婦の縁しはいまだ断れず。壻が應を聞て後、ともかくもなるべき事ぞ。あまりに遠慮したもうては、いつ事の果べうも侍らず。さればとて半七を耻かしめ、爺々や母が憤を、はらさんとにはあらず。彼人もあしからず、又御身が操もとどゝやうに、なるとならぬは曾太郎が、歸りて後にしり給へ。雨降そゝぎて土潤ふといへば、又よき事もなからずやはと、さまぐ\に諫こしらゆれば、園花いよゝうち泣て、こは勿体なしわが身ゆゑ、兄上のはるぐ\と、浪速へ赴き給ふと歟。それを推辭ばおん慈に、悖る不孝をいかにせん、いかにせんとて泣沈む、六の



闇嶺に曾太郎悪棍を懲らす

花とも消かねて、今や七つの間なる十三鐘ともろともに、枕土圭も落すなり。いざ睡たまへと母親が、とる手も觸み身も冷る、涙の氷わりなくも、臥簟の内に誘引て、やうやく自殺をとゞめけり。さる程に蟻松伴太郎は、母嫩浪がしのびやかに、照諒つることあるをもて、俄頃に浪速へ赴きて、半七が隠家を尋ね、その爲体を窺て、時宜によらば面あたり、妹が心操をもしらせばやと思ふに、元來孝心ふかき壯佼なれば、わが身に事の出來たるこゝちしつ、兩三日出仕せざるよしを、同僚們にたのみ聞え、父には法隆寺へ詣るといひこしらへて、次の日俄頃に行裝を整るに、冬の日の短くて、はや申下刻になりにけれど、心忙しければ、從者只一人を將て、漫に立出しが、路一里ばかりゆくに、日も暮なんとす。あまりに急ぎて、燈袋をとり忘れつ、闇なるにいと便なしとて、從者を其所より走り



歸らし、尼が辻に到つてこれを待に、既に初更の比及なれど、そのもの歸り來ざりしかば、あまりに待わび、遂に他轎を傭うて、闇嶺を越てけり。そのとき二人の轎夫は、麓なる樹の下に轎を扛おろしつゝ、もろともにいふやう、いと難儀なる嶺を越たるに、身重尋常に勝れ給へば、筋骨を痛められ、彼も我も脚氣發り

て、今は一足も運動がたし。定めの建場までは、今しばしが程なり、こゝより暇を給はるべしといふ。曾太郎これを聞て、頭巾うち戴たるまゝ、やをら轎より出、病痾とあればせんすべなし。定の所までは、なほ遙なれど、足は數のごとくとらするなりと、謂えしらしつゝ、腰なる打違の財布を解て、錢三緡を遣與さんとするに、轎夫は手にもとらで冷笑ひ、こはいかに思ひたがへ給ふ。かばかりの駄賃を給はらんとて、こゝまでは乘せず。定の外なる酒賃はさらなり、かく脚氣さへ發らし給ふに、藥の價を給はるべし。いと心づきなしと呟にぞ、曾太郎、又一緡の錢を倍てさし出すを、一人の轎夫搔取はやく、礙と投かへして、眼を瞬、聲をふり立、百二百の半錢にて、人の命を買るゝものかは。こは我を欺くにこそといきまけば、殘る一人もすゝみ寄、とかういはんは迂遠し、路銀も衣服も脱て渡與せ、とらしてゆけと罵もあへず、左右より引挾み、いと蠻しく競ひ蒐れば、曾太郎忽地大に怒り、さては汝等賊なるよ。孤客と思ひ蔑り、可惜首をな喪ひそと、あざみ笑て立たる目前へ、閃めかす息杖を、左と右へ入錯し、直に撲地と打落せば、こは朽惜とこゝろともに、摑著を拂除、頂髮提ヽ雄手雌手へ、擲と投れば岸破と起、俊俉ながら前後より、組んとするを寄せも著ず、足を蹴して丁と蹴倒し、手首背へ捽胡し、轎いはとりへ押著つゝ、結下たる挑灯の火光にて、はじめてその面を見れば、此轎夫は、別人にあらず、往に南部を追放れたる、今市全八郎、布施蝶九郎なりしかば、曾太郎ますく怪みて、羞をしらざる愚物ども、蟻松曾太郎を見忘れたりやと、いひつゝ頭巾を搔脱れば、全八、蝶九郎も、やゝその人なるを認て、大に驚き、思ひかけずと慌忙、逃んとするを起しも立ず、すらりと引拔く刀の脊打、肩腰の嫌ひなく、打すゑて信とにらまへ、無賴の兇賊、かゝる景迹にてありながら、なほ不忠不義の天罰をはしらず、却て惡心增長して、旅客を引剝せんといたす、その罪許しがたしといへども、諸の旅なれば、奈良へ領てゆくことをせず、しばし首を繼するなり。かくても羞ずや、なほ悔しからずやといひ懲らし、又數回打ほどに、全八、蝶九郎苦痛に堪ず、只ゆるし給へ、許し給へと叫びけり。そのとき曾太郎は、刀をおさめ、腰に著たる小挑灯をとり出して、轎なる挑灯の灯をうつし、遂に浪速をさしていそぎ去しが、ゆくりなく更闌たれば、その夜は平岡に宿かりて、彼從者を待に、次の日從者は深江にて追著けるとぞ。さる程に、全八、蝶九郎はやうやくに身を起して、まづ自脈を診、打れたるところ／＼に、唾を塗て揃捺などし、直と呆れて、目を見あはしつゝ、蝶九郎

がいふやう、今夜稀なる孤客を乗したれば、よき鳥にこそと思ひつるに、幸なきときには眼も眩み、心まで鈍くなりけん、いかに闇なればとて、尼が辻にて見を定るとき、汝も吾も、曾太郎なりとは思ひがけず、可惜肩を費し、剰からきめを見たる、忌々しさと呟ば、金八も面を皺め、七轉八起といへば、よき事もあり、あしき事もなくてやはといふ。蝶九郎かさねて、よき事といへば、けふよき事を聞つ。汝もわれも恨ある、赤根半七は、彼三勝を基として、浪速の長町にありとぞ。この事もし實ならば、密に過奴を結果三勝を奪ひ去、遠く東の果などへ賣遣さば、今夜の損は補ふべし、さはあらぬかといふを、金八聞もあへず大に歓び、そは又金の蔓に掘當たり。しかはあれ半七は曾太郎にも劣らず、柔術劍法人なみに勝れたれば、佻々しくは計がたし。とせんかくせよと示あはし、夜の山下は、聞く人もあらねば、なか〳〵に憚る氣色もなく、聲高やかに唔譚つゝ、遂に空轎を扛起し、これも平岡のかたへとてゆきぬ。

抑件の金八蝶九郎は、七年以前に、奈良を追放れてより、攝津河内の間を徘徊し、到るところ惡友とのみ交參、よからぬ所爲を事とせし程に、里人等に憎れ、いよ〳〵便なくなりしかば、二人もろともに旅轎を舁て、生活にすなれど、恥をしらざれば羞ることなく、動れば旅客を劫して、非法の錢を貪とらんと計較ぬ。固に是、惜てもなほ惜むべき癖者なり。

三七全傳南柯夢巻之五終

書林

京都寺町通佛光寺　河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　貳丁目　山城屋佐兵衛
同　貳丁目　須原屋新兵衛
同　四日市　山城屋政吉
同　本石町十軒店　英大助
同　下谷御成道　英文藏
同　大傳馬町貳丁目　丁子屋平兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
江州　八日市　小杉文右衛門
大阪心齋橋筋博勞町角　河内屋茂兵衛

三七全傳南柯夢巻之六

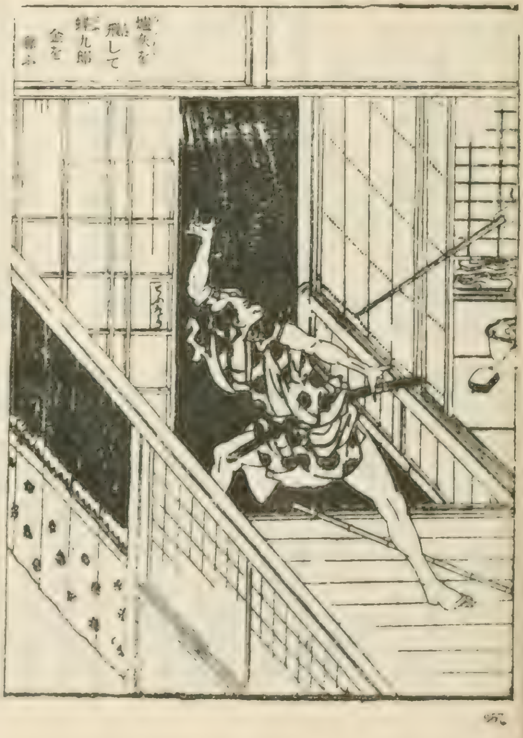
橋下の歡船

赤根半七は、こゝろにもあらぬ世わたりして、憂に馴れたる浪速津を、假毛々々と呼びあるけど、利を射て妻子を安らかに、養んとにはあらず。三勝が身價を蓄の數にあはして、厚倉二郎太夫へ返さばやと思へども、細本手なる商ひにては、頓にその金調はず、胸くるしくも是年も暮て、はや師走六日になりつ。この日も又常のごとく、假毛の箱を脊負て、大和橋のほとりを過るに、客店の二階より、障子を細やかに押ひらき、こなたを指さしつゝ、あれ呼べといふ聲するを、わがことかとて立在ば、旅客の從者めきたる男、慌しく走り出て、半七を呼び入れ、近曾この津に名たゝる、假毛蓑囊とかいふものを鬻ぐは、汝なりやと問に、半七答て、おのれすなはちその商人なり。假毛をめさるべうもやと、信だちていふ。奴隷點頭て、わが主は西國にて人にもしられ給ふ豪家なるが、家務につきて、久しくこの津に逗留し給ひつ、春は松の過る頃及に、歸國し給ふとなり。よりて家裏に、假毛を夥買もてゆかんと宣はするぞ。汝が今齎したるは、いかばかりの價物にや、ひとつ二つ見せよといふ。半七聞て、やをら擔箱を負卸し、括たる袱の四隅を打拔きて、一疊の假毛をとり出し、これは入髮と稱て、男の假毛なり。それは蓑囊と名づけたる、女の假毛なり。こゝにありあはするものは、凡五六貫の價物なるべしといふ。奴隷かさねて、わが主は親族も多く、又毎日に交加する友どち、いく人といふ事をしらず。かゝれば家裏も、又多分なるに、さばかりの價物にては、事足るべうもあらねど、まづまうして見んといひかけて、件の假毛を携、又忙しく二階に走り登り、しばしありて、一握の金をもて出て、半七にいふやう、この金は三十兩あり。今これをとらすなれば、數のごとく假毛を進らせよ設家に結たてたる價物なくば、日數三十日を限りてもて來よ。價は目今、殘なくとらするなりと宣ひき。しかれば後の證據に手形書寫めてよといふ。半七はこれを聞て、大に呆れ、世に假毛を買人はあれど、三十金の花主は、思ひがけざる僥倖なり。天わが夫婦の誠心を憐み、今はからずして厚倉ぬしへ返すべき金を、得さし給ふなるべしと、心のうちに深く歡び、墨斗より、つかみじかき毫を拔出して、手形をさら〳〵と書をはり、宛名は何とつかまつるべうもやと問を、奴隷き

て覗きて、殿の名は毀し、可介とせよ。わが名にてよかんなんと、いふにこゝろ得果て、その手形を可介に遞與し、宣ふごとく家にも三十兩の價物はなけれど、この大晦日までには、結立て進らすべし。價は只今、半給はりてもあるべきに、殘りなく惠まし給ふぞ忝きと、慇つゝ、金を取て押戴き、算果て懷に挾め、假毛を悉箱より出して、これをも可介に遞與し、やがて空擔を脊負て歸りける。半七が心の中、いかに喜しかりけん、氣色にさへ見えて哀れなり。しかるにこの日、今市至八郎布施蝶九郎は、半七が長町なる家を窺ひ、折よくば彼を打殺して、三勝を奪ひ去り、宿恨を消さんとて、二人うちつれ立て、長町へゆく折しも、大和橋なる客店より、半七が夥の金を得て出るを閲窺、潜にその迹を跟て、人なき處に到らば、打仆して金を奪ひとらんと計較たるが、黄昏なれど年の終なれば、人の往來も繁くて、その隙を得ず、只いたづらに、門方まで跟來たり、生垣の蔭にかくろひて、裡の容子を覗ひけり。ともしらずして半七は、暮かゝる日の心いそしく、乾菜干つく諸折戸を、明んとするに、三勝は夫の足音をよくしりて、答さま歸り給ひぬと、いへばお通は走り出、入間渥しと携着、恩愛の絆には、活業の



臂労も厭ず、擔荷を縁頬に扛おろして、わが子の手を取り、さてもこの冷たさよ、霜瘡は痛ないか、此こゝに居て煖めよと、引寄する地爐より、三勝が汲で出す、茶さへ妹脊の水入らず、けふは常より遲かりしと、いふ間に平三は、引散らしたる撰毛片よして、貧には痩る小火鉢の炭團掻起してほとりちからもて出、半七どの寒風にては、思ふ程の商ひもなかりけん、家に居てさへ堪がたきに、さぞな全身も氷つらめ。やよ三勝、茶粥なりとも温に、炊てはや〻進らせよと、いふに半七小膝をなほし、いな、物ほしうも候はず、何事もうちおきて、まづ申すべき事あり、三勝も歡び給へ。當に大和橋のあなたなる、客店へ呼び入られ、よろしき旅客の家童に、價三十金の假毛を買んとて、金をば直に殘りなく遞與し、三十日を限りて、斂のごとくもて來よと誂られたり。か〻る花主は世に稀なり。去年より已ことを得ず、是彼に遣ひ減らしたる、彼身の價も三十兩なり。今これをもて、その缺たるを補ひ、厚倉ぬしへ返しなば、心少しは安かるべし。これ見給へといひかけて、金を懐よりとり出せば、平三はいふもさらなり、三勝大に歎びて、そはなからざる僥倖なり。是も御身の忠孝を、哀佛のあはれみて、かくは惠し給ひけん、



かゝらん端とて昨の夜延の、燈花も愁の眉を開く祥にて侍るめり。まづ神棚へ御燈を、掲て悦愿をまうさんと、いひつつとり出す燈箱、火ともし比の昏紛れ、潜入たる布施今市、縁頬よりさし覗、點頭あふともしらずして、平三は腰に着たる鍵を捞り、押入の戸棚を押開きて、厚倉が贈たる、金を殘りなくとり出し、これを半七に遞與していふやう、貧き家に不相應なる、預ものと思ふから、夜もうちとけては睡られず。翌は朝まだきに、われその金を奈良へもてゆき、潜に御身が志を聞えしらして、厚倉ぬしへ返すべし。いよ／＼舊の數に合りや、よく見給へといふに、三勝は、今灯をうつす行燈を、夫のかたへさし向れば、半七はまづ三十兩の金を置ならべ、又平三が遞與せし金を、財布よりとり出して、と見かう見つゝ眉を顰、こは不審。けふ假毛の價にとて得たる金にも、續井家の刻印ありて、はじめの七十金に露違はず。さては大和橋なる旅客は、厚倉二郎太夫にてありけん。彼人わが們の苦心を知て、假毛を買といひこしらへ、ふたゝびこれを贈れるなるべし。もししからずば、見もしらぬ痩商人に、その價物を後にして、この夥なる金をとらせんや。あなうたてしと呆れ惑ひ、掻よする金は茶靡の、花ものいはねば面あたり、ぬしや誰とも問よしなく、共に呆るゝ三勝は、平三と面をあはし、思ひ惑へる油斷を見て、縁頬を踏鳴らし、七年以前三條河原にて、脚平足平を殺したる、笠松平三、市の正の仰を稟、搦捕らん爲に向へり。覺期せよと、罵もあへず、蝶九郎つと走り入り、火鉢をとつて投つくれば、行燈滅て發と立、灰に咽て翁も婿も、意ならず周章し、驚きおそれて泣お通を、抱き寄する三勝も、たえてせんすべなかりける。その隙に蝶九郎は、金を殘りなく掻抛て、外面へ逃出るを、半七やうやくに見て大に怒り、後姿は認ある惡棍の蝶九郎、こゝに來たつて賊をなす、遁奴脱さじといきまきて、中刀掻とり追蒐れば、平三も後れじと、壁に掛たる六尺棒を挾み、喘々追ゆくにぞ、三勝は聲をふり立て、物とり復さば追捨給へ。夜の道なるに謀られて、惧なし給ひそと、呼べどはやくも見えずなる、ゆく先いかにとおぼつかなく、灰はやう／＼おちつけど、猶落つかぬ胸を撫、お通を賺こしらへつゝ、碎たる炭團の烬を、忙しく爐の中に掃入れて、行燈を引起し、とかくして又灯をともす、後方に忽地人ありて、物をもいはず抱き留るを、阿呀とうち驚きて、身を返り、掻退んとするに、その人引とゞめたる袖を放さず、呵々と笑ていふやう、別れてより六年あまり、既に七年を經たれば、面忘れやしたりけん、おそるゝものにはあらず。はじめ半七が同僚なりし今市丕

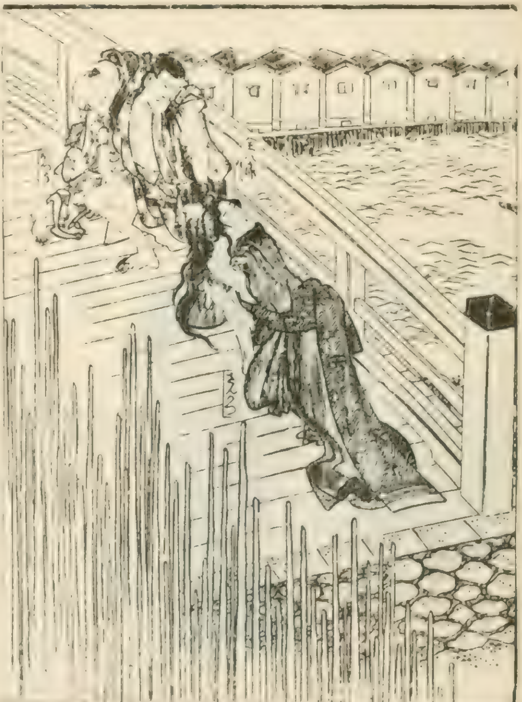
八なり。曩にそなたを伴ひ出たるとき、三條河原にて、平三に遮留られ、剰へ半七によき事を致されて、果は南部を追放れ、牛馬にも劣りたる辛き世をわたる事、みな是君ゆゑなりとおもへば、聞ゆべき恨もあれどそれはいはず。否といふとも、應といふとも、直に東のかたへ將てゆきなん、誘給へと引寄するを、三勝はふり拂ひ、搔遣りて走り退、腹たゝしさに聲ふり勵し、さては夫の物がたりにて細しくしる、惡根の全八なるよ。汝蝶九郎と謀し合し、又や半七どのに寇せんとて、一人は金を奪去り、一人は殘り居て、わが身に迫る橫道もの、物いふも穢はし、とく／＼歸れ、歸らずやと、勇くは罵れど身ひとつの、人を呼んも隣は遠し、さすがに怖さ朽をしさ、はやく夫のかへれかしと、思ふ氣色を見て全八は、又呵々と冷咲ひ、さいへばなほおもしろし。よしや一日、酒は飲ずもあれ、忘るゝ隙もなき君が、往方を其首か是首かとて、この年來心を竭し、索あてたる寶の山、手を空く歸らんや。かくてもなほ半七が事を、思ひ棄ずばいかにせん、この女の童なりとも將てゆきて、伽やらうに賣て遣り、酒貨にせねば持にならず、いざ來よといひも果ず、頂髮無手と引摑み、あれや／＼と叫ぶお通に、手拭銜して小腕に抱き、走り出んとすれば三勝は、遣らじと留るを突倒し、臥つゝ縋るを丁と蹴かへし、欲くば彼首の橋詰まで、些許出てたべと戯れて、闇のかたへと走り去る。三勝はやゝ身を起して齒を切り、惜しと思へど人質をとられていとゞせんすべなく、わが身擒となるよりも猶心苦しくて、聲をかぎりにやよと呼び、子に引れ行夜の鶴、見うしなはじと追蒐たり。かくてその夜も初更の太鼓、うち出見れば夕月夜六日の影のほのくらき、往來迹絕し相合橋に、霜おきはえて風寒み、千鳥鳴なる枯蘆の、穗がくれて橋梁に、釣船一艘繫りける。さるほどに三勝は、ふり亂す黑髮の長町より喘々、裳踏かへして追蒐れば、全八はお通を引抱て、橋の眞中に立留り、欄干に身を倚かけ、且くこれを待程に、三勝やがて走り來つ、諸手をかけて稚兒を、とらんとするを全八は、背向になりて寄せも著ず、脅の劍術を、ばり／＼と搔ながら、見かへりていふやう、やをれ三勝、などてかく、物の憐をばしらざる、もろともにといへば承引ず、しからばこの童なりとももとて將て來れば、いづ所までもとて蠶線はいかにぞや。半七が事を弗と思ひ絕て、全八に從はゞ、こゝが妹脊の相合橋、又從じとならば、童が爲には三途の川、半七を思ひ棄るとも、この童を殺すとも、二つに一つは絕體絕命、心を定めて應せよ。いかにやいかにと逼られて、三勝は柳眉を逆だて、疾見る睛に涙を含み、穢きかな全八郎、

稚ものを苦めて挑むとも、わらはが心は石より重し、いかで轉すことを得ん。よしなき事をいはんより、お通をかへせといきまきつゝ、又携つくを、撻と踏倒して、眼を瞪らし、面に似なくしふねき衒妻、せひなく殺生せねばならず、是見よかしと欄干の、上にさし出す稚兒より、母は目も瞻神消、やゝ待給へいふ事あり。「しかとゝむるは從ふ意歟。「いな、いかでこの身を汚さるべき。「しからば只今手を放ぞ。「そはあまりに情なし。「情なしとは君が事、泣たうても猿轡、さすが命の惜ければこそ、この兒はいたう戰慄なれ。かくても節操は破られずやと、活み死しみ理なき呵責に、何と回答ん言の葉も、只泣沈む折しもあれ、丁々はつしと打あふ太刀音、奸賊布施蝶九郎、逃さとて何所まで脱すべき、遂し返せと呼び留る、半七が勇き太刀風に、靡きたつ蝶九郎は、且戰ひ且走り、相合橋の欄干へ手をかけて、をどり入らんとする所を、半七刄を閃して、背を一と太刀丁と狀れば、阿呀と叫びて彼此遠き、闇はあやなし危きそなたに、泥犂に佛とあふこゝちし、三勝はこれを見て、やよわが夫、お通を救うて給はれと、叫ぶ折しも誰とはしらず、後方よりつと來たりて、お通を抱きて走り行。全八は目今力を戮して、



相合橋に今市
三勝を挑む

蝶九郎を助んとせしが、あまりに事急にして、終に及ず。半七が鑿てかゝる太刀の下をかい潜り、拄縁る三勝を丁と蹴たふし、朴刀引抜て、逆戰んとするに、半七蓄然として、獅子の怒をなし、わが子の仇人、其所な退そと聲ふり立、踏こみて撃ほどに、歪八忽地辟易して、胴より乳の下まで、ばらりずんど砍下られ、さと濆る鮮血とゝもに、撞と倒るゝを乘懸りて數回胸前を刺とほし、刀の血を押拭うて、鞘にしかと納れど、をさまりかねたる今宵の殃危、身にもかへじと慈愛る、わが子と金を失ひて、夫婦迯に慰かね、橋より下をさし覗けば、欹りし船も艪かへり、跡なくなりし蝶九郎は、水に溺てや死たりけん、又浪を潜ぎてや脱れけん、お通が往方いと惜とて、夜は黑みし河水を、つくづくと見て、茫然たるそのとき、三勝は歪八がお通を攫て走るを追留んと、こゝに來れる一五一十を、



半七に聞えしらし、なほかき口説ていへりけるは、お通が危窮の時に臨で、御身も蝶九郎を追蒐て、こゝに來給ふかひもなく、とりも留めぬわが子の魂の緒、六歳の年極の初の六日に、命終るも前世の業因にや侍りけん、あな胸痛やとばかりに、轉輾てよゝと泣ば、半七聲を呑んで、お通が事は歎くとも及ばず、今蝶九郎を尋

漏らして、既に金を失ひぬれば、厚倉二郎太夫に對して、わが志を述がたし。とてもかくても半七が、忠義は今宵この川の水の泡となりたるなり。さればとていたづらに歸るべきにあらず。まづ河原にそうて蝶九郎が生死を見定め、お通が往方を索ばやと思へば、御身はこゝより長町に立かへりて、平三どのに緣由を告給へ、とく／＼と急したつれば、三勝は、もろともにともいひかねて、目を拭ひつつ夫に對ひ、宜ふごとく、二人に一人は立歸り、荃々に告ずは便なかるべし。よしや蝶九郎が生死しれずして、金をとり復すよしなくとも、翌は早天立かへり、荃々にも談合し給はゞ、又よき事もなからずやは。かならずしも思ひ逼りて、悲しき事をな聞し給ひそと、叮嚀にいひ諭せば、半七聞てうち點頭、われもさこそ思ふなれ。深ぬ間にといそがされ、妻のこゝろは跡へのみ、殘る影なく入る月の、暗きに迷ふ愛惜の、やるかたなさは理なれど、歎くは愚癡と諫られ、「わらはは泣ねど御身こそ。「いなそなたがと面をあはし、ふたたび絞る相合の橋の袂も子ゆゑの闇、立別れんとする折しも、後方に張ふ夜行翁、すは人殺しと呼りて、打鳴らさんとする太鼓の撥を、はすにすつぱと半七が、刀尖餘りて切落す、挑灯滅



て野干玉の夜の浪音水鳥の、對に離れて三勝は、長町を斥て歸りけるとぞ。

長町の五味上

笠松平三は、この夜さり蝶九郎を追蒐たゝ、老の足なれば終に後れて、半七にさへ得あはず。初更の比及にいたづらに立かへりて見れば、半七はさらなり、三勝おつうも何地ゆきけん、燈火細して、裡には人ひとり居ず。さては半七がいまだかへらざるを心もとなく思ひて、女兒は孫を伴ひて、出たるよ。月も入るべきに、居つゝ待かしと呟て、しばしこそありけれ、やゝ更ゆけど、壻も女兒も歸り來ざれば、落もつきがたくて、挑灯に火をうつし、引提て出ながら、門の戶を鎖んとする折しも、三勝は髮をふり亂し沆足にて只ひとり歸り來つ、そは爰々におはさすやと、いふ聲も常にかはりて、瞼さへ泣腫したり。平三見かへりて、いかに半七には逢ざりしか、お通はなどて伴ざるやらんと、問に三勝忽地よゝと泣て轉臥にぞ、平三はます〳〵訝みて、慌しく扶起し、引てもろともに裡に入りて、なほしば〳〵問ふ程に、三勝ははふり落る涙の間に、相合橋にての爲體、仝八が事、蝶九郎が事、お通を水中に投られたらんとて物がたれは、平三は聞も



あへず大に驚き、噫悲さかな、孫は悪棍に殺されたるよ。されど半七が、當の敵乏八を擊留たるのみ、少しは心やりなりかし。しからばわれも半七に力を戮し、蝶九郎が生死を見定めて、彼金をとり復し、お通が事も聞定めて來べし。よしや翌まで歸らずとも、おちゐて家にまち給へ。かゝる時にはわきて心を放しがたし。よく鎖して睡給へと聞えおきて、ふたたび挑灯に火をうつし、又六尺棒を突たてて、裳を引折走去けり。かくてその夜も明はなれ、冬の晷は短きに、長き別れの悲しくて、三勝は只ひとり、わが子の爲に装る香も煙となりし夢の跡、家廟の障子引開て、しばし念じて、又舊の地院のほとりに坐を占て、形なき世に消殘る、身は埋火とさし對ひ、胸の鏡もうち曇り、とぎなき宿の物思ひ、この廣き浪速津に今をはるべとこの花も、昨夜のまゝに歸り來ぬ、夫と父はいかにぞと、いと長町に待わびて、心おちゐぬ冬ごもり、いささむら竹吹く風も、夕ぐれちかくなりにけり。浩處に武士の、妻とし見えて裲の、前かいとりて括帶、練の帽子の白雪を、頭には載けど、齢はいまだ四十あまり、盛過にき山茶花の、花田の油單挾箱、薦包の行轎を、奴隷に扛して門方なる、柿染の暖簾をうち眺、みの屋とあればこゝならん、案内よといふにこゝろを得て、一人の從者が暖簾を、つと搔揚てさし覗き、假毛とやらん、蓑鬘とやらんを驚く、蓑屋とはこゝなりや。物申さんと呼門を、三勝聞ども出も迎ず、蓑屋はすなはちこゝなれど、幸なき事の侍るによつて、父も夫も家にあらず、もし假毛を見給はんとならば、翌又來ませ、とばかりに、憂に迫れば生業も、誰が爲にせんとひとりごつ。門なる女房は、これを聞て、轎をかきおろさし、從者等を其處に待しおき、「ゆるし給へといひかけて、つと裡に入りしかば、三勝は、思ひがけねば顔うち暗り、「まづこなたへ、と請ずるを、固辭もせで上坐に、居かはるも訝しく、「何處より何事の、おはしまして訪せ給ふやらん。門聞たがへ給はずや、といへば莞然とうち笑て、「さおもはるゝも理りなり。半七は家に居給はずと聞、そなたは豫て聞及ぶ、舊は洛の大柏、笠屋三勝どのなりや、と問るゝも恥しく、「宜ふごとく、舞々の三勝はわらはに侍



り、と答れば膝をすゝめ、「聞しに勝る縹緻よし、物いひざまにて怜悧さも、思ひやられ侍るかし。とばかりにては、なほ不審思ひ給はん、わが身は彼、そなた故に不忠不孝の人と呼るゝ、赤根半七が舅、大和國櫛井家の一の老臣、蟻松典膳が妻に侍り、と聞もあへず三勝は、顔赧やかに何となく、竦く胸を押下て、さては夫の物がたりにて聞及ふ、園花さまの母御にてましますか。浪花の蘆も枯果る、年の終りにはるばると、訪したまふは故こそあらめと、半いはさず、「喃三勝どの、大家の老臣を笠に被て、不義淫奔を責罵り恥かゝせんとて來もせしかと、推量り給ふかもしらねど、絶てさる筋にはあらず。色情は思案の外とやらん、引手數多のその中にて、盛を見する窗藤も、度かさなりてはたつ名も隱す、かく世をとげて居給ふと、大和へも仄聞え、うち腹たつかと思ひの外、なほこりすまに園花が、夫の無事を歎て、近勝は顔の色も、此は見なはす母が恋しさ、わが子を見るにはあられど、妬ごころは露ばかりも、なければこそこの七年、掟法に去れながら、親の睦も意納す、長き病著を幸にして、ふたたび嫁らぬその節操を、せめて半七に聞えしらし、しのびしのびに折ふしの、音耗もきこしたきに、事の爲體を見定めてよとて、園花が兄なる曽太郎を、一昨この地へ來したれど、とかく女子は女子どち、半七はとまれかくまれ、三勝どのゝ思ふ程を、聞ずば事も果じと深念し、夫典膳へは、園花が病苦平癒の立願に、天滿の天神へ詣るといひこしらへ、今朝旦まだきに奈良を出て、うちつけに訪ひ侍り。聞けば女兒さへ擧給ひぬるとやらん、なに事も世過身過、縦商人になり下りても、半七は恙なく、御身も無事におはするを、見れば恨もなに淡淘、あしかれとてはあぬものを、と思ふにも似ず親子の、信々しさに三勝は、聞るゝより胸くるしく、さし俯て居たりしが、やうやくに頭を擡、緣故をしり給ねば、いかばかり恨給ふとも、理ならずとは聞侍らず。しかるを却て信やかに、宜はすればいとゞなほ、御心の中推量られ、影護も面なきの、身のいひわけに似たれども、わらはは故ありて稚きより、半七ぬしと結髮し、緣故をいふときは、阿翁のよしあしを、あげつらふ悲しさに、いはずとすれば事ゆかず。元來血氣の惑ひにて、色に愛、慾られし、妹背ならねばわが夫の、浴にて逆を嘔せしも、ふかき忠義の爲なれど、是も父あらはにはいひがたし。とてもかくても世の中に、賴む蔭なき三勝が、たえて根もなき人に、恨みられなん罪障は、重きがうへの小夜衣、浮き婦といはるゝ、とも、ふたゝび夫が世に出ば、尼ともなり奈良へ歸參の事、神や佛へ合す掌も、只これのみに侍りしと、いひ果てよゝと泣沈

ば、敷浪聞て渧うちかみ、さてはそなたは半七と、結髪せしその人なる歟。縁由を審にはせねど、五條にて半七が園花に物がたるを、不圖聞てはじめてしりぬ。しかりとも、理もていふときは、わが女兒は主君の御許を受て、結びたる縁しなり。又そなたは稚きときに、親と親とが結號たりとも、私の縁しなれば、いひとくに後ぐらし。さればとて、子まである人を、むじんに去らして、心持よしとする、鬼々しきわが女兒には侍らず。よりてそなたを舊のごとく、半七に齊眉て、これをば側室とし、又園花は、奈良と浪花と隔つとも、契りはかはらじと、半七が只一筆、消息して給はらば、耆婆遍鵲の藥劑にも、まして女兒は本復せん。これは是母がこゝろなり。又夫典膳が志はさにあらず。半六に欺れ、可惜女兒を、虛氣き半七に妻あはして、面目を失ふのみならず、多くもあらぬ愛子をば、見殺しにすることよ。既に半七が在處しれたれば、搦捕て年來の、憤を散さでやはといきまきつ。こは親の心にては、いと理なれど、それも又園花が、病着をます一つなり。思ふ事かなはねばこそうき世なれ。いひがたき事なれど、夫の爲と思ひ諦め、われから飽れて半七と、離別して給はらば、夫典膳が憤も忽地に散、



長町に敷浪三勝を訪ふ

半六どの、蟄居も免、差によりては半七が、歸參の願ひも稱なん。半七を罪なはし、半六どのに日の光も見せぬも、又見するも、そなたのこゝろにあるべきなり。痛しや半六どのは、老のくり言世をはかなみ、贔屓の老狐に妖られたる愚者よ。わが子憎しと罵るは人前ばかり、この七年が程閉籠られて、いとゞしく老饒ひ、慾に惑ひし自の悞を、泣くらし給ふとぞ。思ひ死する園花や、子ゆゑに惑ふ半六どのを、助るうへに半七も、發跡て忠孝の、道にしも立かへらば、孰かそなたを譽ざるべき。退れぬ契りを思ひたえて、別るる苦節は今の世に、稀なる女子といはれ給はば、三方四方[illegible]身の修り、そなた親子が朝夕は、わらはと女兒が身に飾る、四時の衣服を薄くしても、よきに調ぎて進らすべし。私ならぬ私は、女兒が可愛きのみには侍らず、聞わき給へ、うけ引て、給はれかしとかき口說ば、三勝は堰



かねがね、涙の泉むすび果ぬ、妹脊の中處を死どころと、われとわが身に暇乞、も胸の中も、裂はど苦しき浮世の義理に、亂る、髮を掻あげて、事をわきてかくま何とゆふべの相合橋も、あはれぬわが子でに、聞え給ふこそ喜しけれ。わが身ひと夫にさへ、別の櫛も膝に落、せめて彼とつを退侍りて、半七ぬしを世に出し、

阿翁の直義も、許され給ふようすがともなるならば、これにます僥倖は侍らずといふ顔を、つくぐ\とうち眺め、一そなたなり、園花なり、揃ひも揃ひし心操、容止のみ歟こゝろまで、美し過て痛しさも一人、日來怜悧女子にても、かゝるときには恐にかへり、理も非も聴ぬ習俗なるに、かくてこそはるぐ\と、浪速へ來つるかひはあれ。よしや半七と縁は離るゝとも、けふよりは女兒とも思ひ侍り、向にもいひつるごとく、とまれかくまれ朝夕の、煙は細くもたてさし侍らん。さていふ事のみいひならべて、なほ問殘せし事こそあれ。半七が洛にて、跡を暗せしは、忠義の爲と聞え給ふこそこゝろを得ね。よし歸參のようすがともなるべき筋には侍らずや。明白にいひがたき事なりとも、いと惜と思ふ壻がうへを、いかでか人に漏すべき、しらし給へ、と詰問にぞ、三勝終に推辭ことを得ず、七年以前に半七が、二郎太夫と謀し合し、吉稚丸淫樂の惡名を雪ん爲に、結髪せし女子なりとはしらずして、三勝を奪ひ去、直に殺さんとしつるはじめより、白河山にての爲体、多賀の僑居、信濃路の艱難はさらなり、平二が義に勇む、鋭志に至るまで、涙とともに物がたれば、敷浪驚てますぐ\咏嘆し、思ひきや半七は、比稀なる忠臣にて、そなたは又薄命の貞婦ならんとは。その忠臣も不忠といはれ、操貞しきも淫婦と罵れ給ふから、腹たゝしくもあるべけれど、前世の惡業にて、善人も發跡ず、才あるも用ひられず、一生思ひ屈りて、墓なくなるも多かめれ、世は形なきものに侍り。とはしりつゝも妹と夫の中をむじんに引離るは、いぶせくも腹くろき、老女とのみな思ひ給ひそ。子をもつものは又人の子の、親のこゝろもしらでやは。半七が女兒も、今茲ははや六歳になると歟、彼人大和にあるならば、園花も今ごろは、子ども二人も產べきに、わらはに血筋はあらずとも、婿が冢子なりせば見まくほし。なぞやかく腹きたなく、匿して逢し給はざる。その子が何をしるものぞと怨ずれば、三勝は思ひ忘れぬわが子の事、そのお通はといひかけて、いく度か目を押拭ひ、隔て逢しまゐらせずと、恨給ふも理なれど、お通ははかなくなり侍と、聞もあへずうち驚き、一そは何の頃より病侍りし、俄頃に蚘のとりつめしか、と問るゝ程なほ胸くるしく、一病て且く介抱し、膝の上に一死ならば、おなじ歎きもかくまでに、悔しくはおもほえじ。故ありて身にもかへがたき金とともに、疇昔惡棍の全八、蝶九郎に奪ひ去れ、相合橋の夜の霜と消侍り。さるによつて、父半三も半七も、出てよりいまだ歸らず。子に後れ夫に別るゝ、便なさを察し給へ、と、回答つゝ又も袂を絞りける。

三七全傳南柯夢卷之六下

長町の五味 下

敷浪嘆息し、痛き哉、只ひとり子を失ひ、又や今この哀別離苦、心ぼそさも思ひやる、その嫩さを慰る、陪従の童を進らすべしといひかけて、緣頰に立出、外面をさし招ば、豫てこゝろや得たりけん、一人の奴隷、轎の戸を細やかに引開て、かき抱き來る稚兒を、三勝は遙に見て、且不審み、且歡び忙しく走りより、喃お通、喜しや恙なかりしかと、思はず莞爾とうち笑て抱きとれば小躍し、「やよ母御これ見給へ。しらぬ叔さま阿婆さまか、この赤い衣三つも四つも、縫刺て俄頃に被せ、かゝる木偶さへ給はりしと、弄貴間に敷浪は、傍の處に坐して又三勝に對ひ、憂を慰るそなたの陪従にはその女の童にますものあらじ。寔にこの子の命づよさ。わが子曾太郎は、きのふよりこの長町を徘徊し、潜に半七が今の爲体を窺ながら、いひ寄るよすがを得ざりしかば、例なくはこれを訪ず。されば旅寢の徒然なるまゝに、昨夕堀江に赴く折しも、相合川のほとりにて鬪諍起り、打あふ太刀の光りにてこれを見れば、半七と丕八なり。三勝と稚き女兒が周章見るに痛しく、潜にお通をかき抱き、河原傳ひに走り退しが、はからずも蝶九郎が手疵を負て、脱れ來たるに出あひしかば、矢庭にこれを生拘て傍の宿に將て歸りつ、はじめよりこのお通を半七が子としるから、一夜さ旅宿にとゞめて、さま〳〵にいひ慰めたりとぞ。しかるに、わが身もさきに曾太郎が旅宿に到着して、縁由を聞、遂に轎にかき乗して、將て來たりぬ。これやこの稚兒をもて、その父に換、御身が憂苦を慰る心ばかりの贈もの、納給はゞいかばかりか、歡しく侍らめと、事審に說示せば、三勝つく〳〵と聞て、抱きたるお通を、敷浪がほとりに押遣り、おん好意は喜しく侍れど、いづれなりとも優寵に、譲るゝその子の薄命、大和へ伴ひおん身が孫とも、見そなはし給はらば、貧しき母が養育には、まして久後たのもしからん。縦夫は何ともいへ、思ひ絶にき妹背の契、形代の護身嚢を、この爐の中へ投入れて、願事復す産靈の、庭燎とも見給へかしと誓ひをはり、白やかなる項に掛たる、護身嚢の紐かい外せば、はらりと落る三味線の、撥の片割かたへより、敷浪これを見て大に怪み、やよ待給へと押とゞめ、不審や、この撥の片割はわが身從來認あり、いかにしてか所持し給ふ。もしそなたの乳名を、お

さんとはいはざりしか。護身嚢に納たる、臍帶のありもやする、しらし給へといそがせば、三勝はと見かう見て、さ宜へば好々と、思ひ當る像見の二種、わらはが乳名はおさんと呼れ、丹波太郎といひつる人の、女兒にて侍るなり。さてはおん身はこの年來、神に祈願をかけ竭し、思ひ慕ひ奉りし、母御にてましますか。「うべわれこそは實の母なれ。「こはこはいかこと縋る手に、お涕も中へ引寄して、果は涙の川の字に、親子二人が袖の雨、淵瀬とかはる歎きなり。且して三勝は、胸前を掵下し、三歳の年に別れ奉りて、面影は認らねど、名告あふ時、撥を割符と爹々の遺言、けふまで存命給ひなば、さこそ歡び給はめとかき口說ば、敷浪はいとゞ面なき風情にて、しらぬ事とて外がましく、いひつる事の悔しさよと、しばし痞を押放る、懷よりとり出す、撥の片割をひとつに合し、思ひ出るもいく年ぞや。前夫の浪々の、便なきまゝに、三歳のそなたに乳房を放し、夫婦倦ぬ別して、わが身は洛へ上り、しかして後は夫や子の、往方何國としらざりき。さては爹々はなき人の、數にさへ入り給ひしか。そは何比ぞと問母も、問るる女兒ももろともに、胸ふたがりて頓にも應ず。「さればとよわが父は、盲目となりて髮を剃、いとさりげなき琵琶法師、名も丹波都と更めて、伊勢に四年の僑居、其處にさへ住みわびつ、御身の在處を訪んとて、わらはを將て首途し、はるゞ洛へ上り給ふ。是なん死出のやまと路にて、山兒の斧に擊れ、非命に世を去給ひたる、首尾は箇樣々々と、半六が事、篇篠が事、奈良と洛の一五一十を、物語れば敷浪は、わが子に羞る身の幸福、綾や錦に裝たてゝも、こころの襤褸は窶々しき、そなたには遙に劣りて、鈍くも缺たる婦の道、夫に別れしその年に、洛へは上りぬれど、給事せんよすがもなく、大和なる續井家の老臣、蜷松典膳といふ人の內室、世を早うし、跡に遺れる稚兒に、乳母を索ると聞て、なほ乳汁の涸ざるを幸に、大和へ赴き、聽てその家に奉公して、守育たるは倉太郎なり。かくて故鄕へ消息し、わが身南都にあるよしを、夫の家へ告遣りしが、夫は近曾女兒を携、旅だちてより往方しれずとて、終に屆ぬ東路より、ふたゝび戻る文卷川の、さそふ水まつとにはあらねど、典膳どのに不圖思はれ、一夜ふた夜の添臥に、はやくも有身て產りし子は、半七へ妻あはせたる園花なり。さればにや世の人に、馬子船長とならべいはるゝお乳の人も、猛に老臣の後妻に引あげられ、安らかに年月を送るにつけても、忘れがたきはそなたの事、心のたのみは三味線の撥はふたゝび合ながら、稚きよりわが女兒を、育さしたる恩ある人、平三どのとやらん

に一言の、禮謝いはれぬ惡因緣、姉の夫を妹に、對せんとする羞しらず、蓬き母がこゝろに似よとて、園花にも操を破り、半七が事を思ひ絕よと、いく度かすゝめても承引ざればせんすべなく、又阿容阿容と爰へ來て、道理めかしてわり口說、忠臣烈女の中を塞、おもへばわれは徒婦、愛に溺れて又愛を、失ふ因果は忽地に、親子三すぢのいと迫て、天道の縛は、割符を合す罰と撥、面目なやと身を投臥し、聲を惜す泣母の、脊搦捺る三勝は、そを理ともいひかねて、名告あへば園花どのは、妹なれども異父兄弟、義理あるかたに夫を配偶し、これを菩提の種にして、浮世の外の山ごもりは、なかなか安く侍りなん。わらは思ひ諦たり。いたくな歎き給ひそと、諫ればうち點頭、女兒としつては半七と、いよゝ緣を離さねば、今の夫と半六どのに、母子はじめより馴合て、迯も奔らしたりなんどと、疑るゝともいひときがたし。よしなやはる〲尋來て、孝と貞とは人なみに、勝れし女兒に嘆きをまさし、われも久いかばかり、憂をましらの猿智惠が、仇となりぬる悔しさよ。せめてお通を將て歸い養育ば丹波都どのと、そなたへの罪滅し、園花が爲には姪、わがなき後も疎には思はじ。けふまでしらぬ祖母と叔母に、養育るゝこの子の幸なさ、春にもならばしのび〲に、逢しに來すであるべきぞと聞えしらして潸然と、涙ぐみ居るお通を引よし、實の孫ともしらざりしが、この愛々しさに絆されて、他の子のこゝちはせざりし。思がましく將て來つる、鬼婆々とな思ひ給ひそ。わが身はそなたの實の祖母さま、翌は大和へ伴ひかへり、欲といふものは何にまれ、得さすべきぞ歔びたまへ。嗚呼胸苦しと立あがり、孫を引く手もちからなく、いひ賺されて稚兒は、又木偶を貰うて來ん。母御よ翌は爹々さまを、迎に來してたまはれと、いはけなき言の葉の露は袂におきあまり、目送り見かへる親と子が、果敢なき別れを告わたる、諸行無常の鐘の聲、この入相はつねよりも、こゝろ細さぞいやましぬ。かくて敷浪は三勝に別を告、やゝ外面へ立出て、お通を乘する轎の内にも、よゝと泣聲をもれ聞て三勝は、もし園花にはあらぬかと、思ふものから走り出、呼とむる間に奴隷ども、はや擡出す轎に、少し後れて敷浪は、小首傾け泣顏を、見せじと後に引添たり。折しもあれ編笠深くしたる武士二人、右手左手に引わかれて、前より生垣の陰に窺聞し、目今敷浪が歸るを見て、或は歎息し、或はひとりうち點頭、みち引ちがへて立わかれつ、往方もしれずなりにけり。三勝それには心もとめず、遥に彼方を見送れば、姿朧に黄昏て、師走七日のけふはからずも、あふを別の母親の、後影もわが子の貌も

見つるはこれをかぎりかと、思へば胸ふ板庇を、漏夕月を心あてに、ふたゝび裡へ這に入る、庖厨の障子をさし開くを、誰ぞと見れば半七なり。そのとき半七は、三勝に對ていふやう、われ窗に背門より歸り入て、一五一十を審に聞けり。みな是過世の讐敵が、今親子となり、同胞となり、夫婦となりて、この煩惱をなすにこそ。父の蟄居を許され給はんは本意なれど、義を捨て舅に佞眉、豈阿容阿容と南部へ歸らんや。加之相合橋にて金八を殺せし事、夜行翁が訴によりて、はや市の正より討手を向らるゝと風聲す。しかりといへども、蝶九郎をとり脱したれば、這奴等を賊なりといはんにも證据なし。且已ことを得ずといへども、厚倉氏にいひつることを食て、この七年が程、御身ともろ共に世の營を致し、剰身價を返さずば、われは是亂離の人なり、何をもて忠義といはれん。とてもかくても半七が、死べきは今宵なり。されば上て、こゝにて自害せば、平三どのを係累せん歟。彼青山の酒ならで、無明の酢を十日寺の草の原にて酔にしかず。已なん已なんといひも果す、走り去らんとする夫の裳を、三勝は慌忙て引留め、手を束て紋刎られ、主親の面を汚んより、自殺せんと思ひ定めたまふを、理ならず



とは思ひ侍らねど、もろ共にとは聞え給はで、などてかくまで三勝をいぶせきものにはし給ひつる。今宵に迫る身の憂は、彼處にて聞給はずや。わらはまづこの處にて刃に伏し、君が年來の情に答侍りてんと、いひも終らず夫の刀に手を掛れば、半七急に押とゞめ、げに思ひ惧ぬ。溜ぬ先こそ露をも厭へ、夫婦が上も厭うてかひなし。今こそ御身もわが手にかけて、志を致さすべし。只悔しきは、白河にて待死すして、平三どのゝ誠心を、他にするのみ面目なきと、身を恨こそ理なれ。三勝いたくうち泣て、有身の親、養親と、親は夥もちながら、何れをいづれともわきがたき、恩を仇なる身の終、せめて一筆遺さんとて、かけ硯の蓋反かへし、墨は曲れど直なる管の、筆をこゝろと硯に浸し、出居の障子にかくばかり、

[illegible]

きかまほし身のうき時のかくれ里な
にかは山の奥もゆかしき



と書寫せば半七も、もろともに筆をとりて、

[illegible]

かくれみのうき名を隠すかたもなし
心に鬼をつくる身なれば

と、書とゞめ、筆をすつれば外面より、群り來たる捕手の兵士、相合傍にて人を

殺せし半七を、搦捕らん爲に向うたり、縛受よといきまきて、跳かゝるを引被ぎ、雄手雌手へ撲地と投るを、飛蹈て又組著を、ふり拂ひては打倒し、ばらりばらりと投退て、誘給へとて半七は、妻の手を引走り出る、月には暗き諸打戸、わが門近く歸り來る、平三直とゆきちがひ、見かへりて、そは三勝歟、壻どのにはあらずやと問隙も、荒男の兵士等が驀直に、半七遣らじと追蒐出、先にすゝむを平三が足を飛して丁と蹴倒し、續て懸るをとつて引布、こゝかまはずにとゆふまぐれ、應もやらず掌を合し、ふし拜みつつ妹と夫が、又手をとりて死にゆく、今宵一夜を千日の墓なきものは命なり。

千日寺の柾

さても半七三勝は、往來絕るを待ほどに、彼此にて夜を深し、涙の雨にはさして行、かひこそなけれ夜の傘、しばし人前をし

のべども、骨は誰にかひらはれん、竹田追れて西をたのむかな。師走七日を亡日とは、きのふまでもしらざりし。跡に殘伏見も外に見て、只後髮ひけそりの町をせし稚兒の父よ母よと嘷ならば、春いか雄手に販敵迫、田毎に星の影氷る、身はならん浪花津の、梅が笠屋と蓑虫の親の捨果てなきものと、おもへど寒き北風に、



心は鬼ならで、黄金も玉も何かせん、子にます寶なきものを、それさへ今は思ひ絶て、喜怒哀樂もみな夢の、浮世としれど未だ消ぬ、間酒煮賣夜商人、わが爲ならねど寒念佛の、鉦の音さへ何となく、耳あらたまる霜の聲、無常迅速束の間に、千日墓に着にけり。時に永祿某の年冬十二月七日なり。かくて半七三勝は、立ならべたる卵塔の間なる、枯柳の下に坐を占、なか／＼に覺期を究たれば、夫婦物いふべうもあらで、三勝が十遍ばかり唱る念佛の聲を心あてに、半七やがて闇に見く、腰の刀を拔はなせば、墳の後に又二人、苦痛の稱名今般とおぼし、夫婦はこれを聞て大に怪み、われに等しく又こゝにて、自殺する人やある。やゝ後れじとて半七が、ふたゝび刃をふり揚れば、やよしばし待給へと、呼とゞめつゝ、厚倉二郎太夫友春は、蟻松曾太郎とともに、蟬九郎に索をかけて、これを可介等に引



し、飛が如くに走り來る。跡に續て平三半六は、間五七尺を隔て自害し、半七等は、お通を脊負ひ、園花を扶掖、喘々追蒐來て、手に／＼さし出す挑灯の、火光に照らす墳の後に、思ひもかけず敷浪とを見て忽地に斬切たり。人みなこの擧動を見て大に驚き、夫婦兄弟幼き、お通も共によゝと泣、或は悲み或は呆れ、こ

はそもいかにとして、慌忙つゝ走り寄、抱き起してさまぐ\に勦れども、今ははや救ふべくもあらず。と見れば傍なる石塔に、二枚の遺書を貼おきたり。そのとき二郎太夫すゝみ對て、半七等にいふやう、各の哀傷いと理なれど、つらぐ\この遺書の趣を見るに、赤根半六は、昔榮利を謀りて、木精の祟を屑とせず、遂に米谷たる、老楠樹を伐りしかば、忽地悞て丹波部を殺し、更に約にそむきて三勝を失ひ、蟻松氏と婚縁を締したる事は、みづから作る孽なりとは謂ながら近曾半七は、三勝を將て長町に活業すと、傳へ聞、いよ\憤に堪ずして、その虚實をしらん爲に、昨夕潜に五條の家を潜び出、嚮に敷浪と三勝と、親子の名告せし始終を竊聞して、はじめて夫婦の忠孝心烈をしつて、慚愧後悔し、こゝに來つて自殺するものなり。願くは三條河原にて二人の悪根を殺し、又昨夜相合橋にて、全八を殺せしものは半六なりと市の正へ訴へ、恩人笠松平三と、わが子半七を救ひ給はるべしとあり。又敷浪の遺書には二人の女兒が心操の比なきにふかく羞、且三勝が死を究たる氣色を猜し、わが身これに先立て自害す。願はわが子共等必死を思ひとゞまり、厚倉ぬし、わが夫を諫て、是彼の身のをさまりを、よきに計はし給へかし。かへすぐ\も孫のお通が事不便なり。與膳どのゝ年來の恩愛は、こゝろに耻る事多くて、こゝには申遺さずとあり。かゝれば親と親と、いひあはさねど、その身を殺して子を救ふ慈悲は符節を合したるが如し。かならずも死すべからず、又いたく悔歎くべからず。時なるかな、君侯近曾二郎太夫を召さして宣ふことあり。赤根半七は、わが家第一番の忠臣なり、彼吉稚丸に從ひて、洛にありける日、主の淫樂を諫て、遠離らるゝといへども、ふかくこれを匿し、その身病ありと稱して、五條の旅宿に引退き、絶て口外へ漏さゞりしとぞ。われその比、仄にこの一條を聞り。よりて彼もの舞々を將て逐電しつる事、亦是主の爲にすとは猜したれど、家の法度は私に更改がたければ、且く忠臣を遠離たる事いと不便なり。今ははや數の年月を經たれば、罪を宥べき時到れり。汝潜に半七が在家を索、わが志を告て、伴ひ來れと仰せしかば、しのびて浪花に赴き、まづ間人をもて窺するに、御邉三勝が身價をわれに返さんとするに、その金三十兩を遣ひへらして、いたく苦心するよしを聞、假毛を買に假托て、件の金を贈りしは、わが寸志なるを、憎べし、全八蝶九郎是を奪ひ去れりとぞ。しかるに蟻松曾太郎、はからずも相合橋に轉落つゝ、脱去らんとする蝶九郎を生拘、這奴が盜ところの金は舊のごとくにて、わが手に返れり。かくて蝶九郎か自狀によつて、全八が隱慝いよゝ發覺たれば、證迹として、

この猿九郎を市の正へ進らせ、御邊の罪狀を贖べきよし、會太郎に相語、只今役處へ引せんとす。寔に天の彰々たる事、曇らざる鏡のごとし。罪人終に亡びて、忠臣ふたゝび天日を見る、誰か快とせざらんやと、事審に說示ば、會太郎も又いふやう、某浪速へ來たりし事は、半七どのに、妹が心操をしらせんとてなるに、わが母猶心もとなく思ひて、わりなく園花を轎に乘して、この地に來たり、不思議に年來の本意を遂て、離別の女兒三勝どのに再會すといへども、却てその心烈に羞けん、旅宿へは歸らず、中途より往方しれざるよし後に聞ゆ。園花も母に伴れて長町に赴き、轎の中にありしかど、わが母拒で、三勝どのにあはせず。彼いたづらにお通を將て旅宿に立かへり、緣故を巢に物がたる折しも、母の從者等走りかへりて、如此々々なりと告。よりてわが兄弟ふかく怪み、園花は病苦を忍び、お通を將て彼此を索る折しも、はからずして笠松平三に名告あひ、御邊も又三勝どのと、二首の古歌を書遺し、自殺せんとて出給ひぬるよしを聞て、ます〳〵周章し、やがてもろ共にこゝに索來れりといふに、平三も又說こと一遍、理を竭して、自害をとゞめしかば、三勝、園花はさらなり、半七は、親の慈愛のかくまでなるに、君恩また默止がたくて、紅淚袖を絞あへず、死後れたる悔しさよとてかき口說ぬ。浩所に、編笠ふかくしたる武士一人、白楊の蔭よりすゝみ出て、笠を脫捨るを見れば、蟻松與膳なり。このとき與膳は、衆人に對ていふやう、すべてこの件の亂を釀せし事、半六一個の過のみならず、われも又其初、君に申しすゝめて、楠を伐らしたる祟を惹るにや、愛に溺れて、よろづ私したる罪あり。しかるに今朝、敷浪が園花を將て、天滿の天神へ詣るよしをいふに、疑しき所あれば、われも又潜に奈良を出、妻乃達を跟て、そのゆく所を窺ひ、竊に三勝と敷浪が始終の物がたりを竊聞して、年來の憤も消、五十餘年の非をしりぬ。さてはそのときわれに等しく、理の容子を窺ひたるものは、半六にてありける歟。彼も是も、皆わが爲の善智識なり。棄恩入無爲報恩者といへり。願くは友春どの、與膳が致仕の事を、よきに執し給はるべしと述をはり、刀を拔て直に髻を切捨、みづから夢幻齋と名告らんといふ。二郎太夫聞てふかく哢嘆し、淳于棼が蟻宮の榮花も、思へば赤根が南柯夢、蟻に傚ふ蟻松氏の發心悟道殊勝なり。しからばこのふ、わが買たる[illegible]を、三勝が頭髮とし、久假毛を半七が髷に換、父と母との塚に築籠、嵐雪信女、月照信士と法號し、赤根半七といふ商人、美濃屋三勝といふ舞々と、情死せしと世に傳なば、郎君のおん過に代たる、はじめの忠義もいたづら

ならず、親の枉死に從ざる、孝子の道も斷べからず。再世の夫婦、君父の命に從ひ、奈良へ歸參して家を興し、忠孝を全せば、吾黨の一大快事ならんと應けり。時に輿膳、又平三に對ひ、其許は舊、梨園雜劇中の人なりと聞しが、心ざまは武士も及ざる所多し。わが女兒園花、久しく夫に還去せられて、歸ところなし。御邊今より、彼を養て女兒とし給はらば、われ又三勝を養ひ、曾太郎が姉として、更に半七に妻あはすべし。しかるときは、三勝は半七が正室なり。園花又半七が側室となるとも、姉妹にして姉妹にあらず、孰かこれを識るべき。この事承引給へかしといへば、平三歡で、一議にも及ばず、辞既に團圓にをさまりぬ。さる程に半七、曾太郎、三勝、園花は、兄弟親族の名對面して、歡の中の歡を述、父母の亡骸を千日寺に葬りて、追善の佛事叮嚀に修行し、しかして後皆うちつれだちて南都へ立歸りぬ。又曾太郎は、市の正へ縁故を審に訴、蝶九郎を進らせしかば、積悪脱がたくて、蝶九郎は首を刎られ、又曾松平三は曩に脚平足平を殺したれども、彼等二人は隠なき悪棍なるによつて、死をもてその罪を贖ふに及ばず、永く放免を蒙り、やがて續井家に召れて、祿五十貫を給はり赤松半六に代りて、五條の村主をうけ給はり、



半七は蟻松與膳に代りて、家老職をうけ給はり、職祿ともに肩を比るものなし。これによりて、三勝を妻とし、園花を側室とし、厚倉と共に、一國の成敗をとり行ふに、聊も私なかりしかば、君家ます／＼繁昌して、四民すべて父母の思ひをなさずといふ事なし。是より先、積井順昭父子は、半七、三勝等が忠孝を、ふかく嘆賞して、懇切にこれを勞ひ、厚倉以下の家臣を呼び集ていふやう、抑この件の緣故を考るに、われ過て驕奢に耽り、怪有の良材を索て、米谷の楠を伐らし、無益の茶亭を造りて、樂を民とともにせず、こゝをもて嫡男吉稚、質弱多病なりき。且彼が養生の爲に、洛に遊ぶに至て、忽地家の難出來なんとしつる事、みな木精の祟なりけん。設半七二郎太夫なかりせば、父子安然として、今日の歡會を、いたすことありがたかるべしと頻に慚愧し、假に彼茶亭を毀て、長く節儉をこととせし



かば、上下安堵の思ひをなしつ。こゝに至て、半七が洛にて、吉稚丸に苦諫せしとき、却て仝八蝶九郎等に讒言せられ、久しく君邊を遠ざけらるゝといへども、なほ郎君の悞を世にしらせじとて、病によつて、五條に退、保養すといひ拵へ、後終に三勝申三等にも實を告ず、たえて一たびも口外せざりし事や、聞え、この一條に

て、その忠心思ひやらるゝとて、時の人稱讃せざるはなし。されば半二はお通を養ひ、後これに壻を招て家を嗣し、半七又子ども夥を儲て、世々續井家に仕けるとぞ。馬琴按ずるに、本草綱目卷三十四、木類下に、楠樟を並出すといへども別種なり。わが邦には、楠樟ともにくすと訓す。これを一種とするがごとし。又按ずるに、捜神記に、呉の時敬叔、大樟樹を伐るに、血出て物あり。人の面狗の身なり。敬叔がいふ、これを彭侯と名づくと。乃烹てこれを食ふに味狗の如しといへり。是則樟樹に木精ありし一證とすべし。楠も樟も究て大木多し。俳諧師其角が、楠の天井に題する發句あり。作得てよし。

八疊の楠の板間を漏るしぐれ

又半七三勝が事、世にはさまざまにいふめり。或はいふ笠屋三勝は、足利家の時の女伎なり。又千日寺にて情死せし三勝は、遙に後の事にて、美濃屋何がしが女兒、おさんと呼れたる淫婦なり。今なほおさん半七が遺書といふものあり。好事のもの往々傳寫す。おもふに予が話說する、續井家臣赤根半七と、大和五條の商人半七が事とよく似たり。しかれども時代相距こと遙にして、同名異人なりとしるべし。玄峯集を按ずるに、俳諧師嵐雪、ある年の秋、浪速に遊びて、みの屋茜が夢の跡を訪ふに、嵐雪月照と、石の塔婆に彫入たり。あるまじき事ならねど、思ひがけざりければ、

夢によく似たる夢かな墓參り

と口號たるよし見ゆ。惜らくは何の所といふ事を記さず。今法善寺難波新地にあり。土俗のいふ千日寺これなり。に遺るところの、半七おさんが古墳といふもの、金毘羅堂のこなた、向て左側にあれど、六字の名號のみを彫著たり。彼ものゝ事を傀儡棚の戯曲に作りたるもの、予が眼を過る所すべて四本あり。又彼等が遺書、當初人口に膾炙せしにや、昵竹といふものに、三勝半七が紀念おくり、かき置等の曲子あり。無益の辯なれど、只その概略をいふのみ。

作者馬琴この書を稿じをはるの夕、燈を掲案を拊し、ひとり嘆じて云、むかし信濃前司行長入道の平家物語は、原謡せんとて作りたるを、後の人はよくも見ざれば、只尋常の軍記とのみ思ふめり。今わが南柯夢は、讀せんとて作りたれど、閲者その戯曲めきたるを笑ふもあるべし。才の長短と物の巧拙は且くいはず。所爲に雅俗あり、又流行あり。夫流行は人にある歟、將我にある歟、われいまだこれをしらず。嗟夫。

三七全傳南柯夢巻六終

客予に問ふこと有りて曰く、曲亭先生何に據りてか之を曲亭と號す。予之に應へて曰く、漢書陳湯傳に云く、巴陵曲亭の陽に樂すと、是なり。亦問ふ馬琴は何ぞや、曰く、十訓鈔野相公の句に、才馬脚に非れば琴を彈くこと未だ能くせず、身鳳史に異にして筆を吹くこと猶拙しといふを取つて以て戲號と爲す也。先生嘗て司馬相如が才を景慕す。是を以て解と名のり瑣吉と字す。解は蟹也。郭璞が江の賦に云く瑣蛣は蟹を腹とし水母は蝦を目とす其名を蟹に象る也王吉が之を夢みし所、亦是長卿が故事也。客欣然として喜びて曰く、善

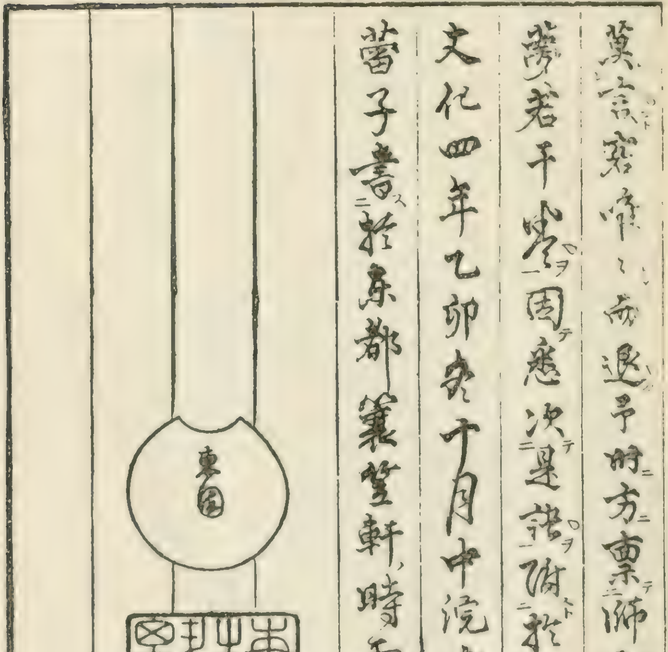
客有問於予曰。曲亭先生。何據號之曲亭
予應之曰。漢書陳湯傳云。樂巴陵曲亭之陽
是也。亦問馬琴何也。曰取十訓鈔野公
句。才非馬脚彈琴未能。身異鳳史吹簫猶
拙。以為戲號也。先生嘗慕司馬相如才
是以名解。字瑣吉。解蟹也。郭璞江賦云
瑣蛣腹蟹。水母目蝦。象其名於蟹也。王吉之
所夢。亦是長卿故事也。客欣然而喜曰善

い哉君と一夜の話似十年の學に勝れり。愚間常におもへらく、馬琴の熟字絶えて考據無しと。而して今諸を子に間へば則ち豁然として其淵源を得たり。顧ふ昔者司馬長卿、藺相如が人となりを慕ひてまた相如と名づく。今や曲亭子司馬相如が才を慕ひて解と名のり馬琴と稱す、ゆゑある哉。和漢今昔其趣を異にすと雖も、宜しく年を同うして之を談ずべし。先生之を聞いて咲つて曰く、二子は盍ぞ彼の玉と石とを知らざる。而して談玆に暨ぶや、差夫似て非なる者は齊魯の付參か。我二子の爲に深く

哉。與君一夜話。勝似十年學矣。愚間常以為馬琴熟字絶而無考據。而今問諸子則豁然得其淵源。顧昔者司馬長卿慕藺相如為人、復名相如。今也曲亭子慕司馬相如才而名解、稱馬琴。有以哉。雖和漢今昔異其趣、宜同年而談之。先生聞之咲曰、二子盍知彼玉與石。而談暨于玆也、差夫似而非之者齊魯付參乎。我為二子深蓋之讓

之を莅づ、また言ふことなかれ。客唯々として退く。予時に方に師命を稟けて南柯の夢若干卷を校す。因つて悉く是の譜を次いで篇後に附すと云ふ。

文化四年乙卯冬十月中浣弟子東園の魁蕾子東都簑笠軒の時雨窗に書す。



作者　曲亭馬琴

画工　葛飾北斎

剞劂　高橋待人

俊寛僧都嶋物語　全六冊

桂華秋波新語

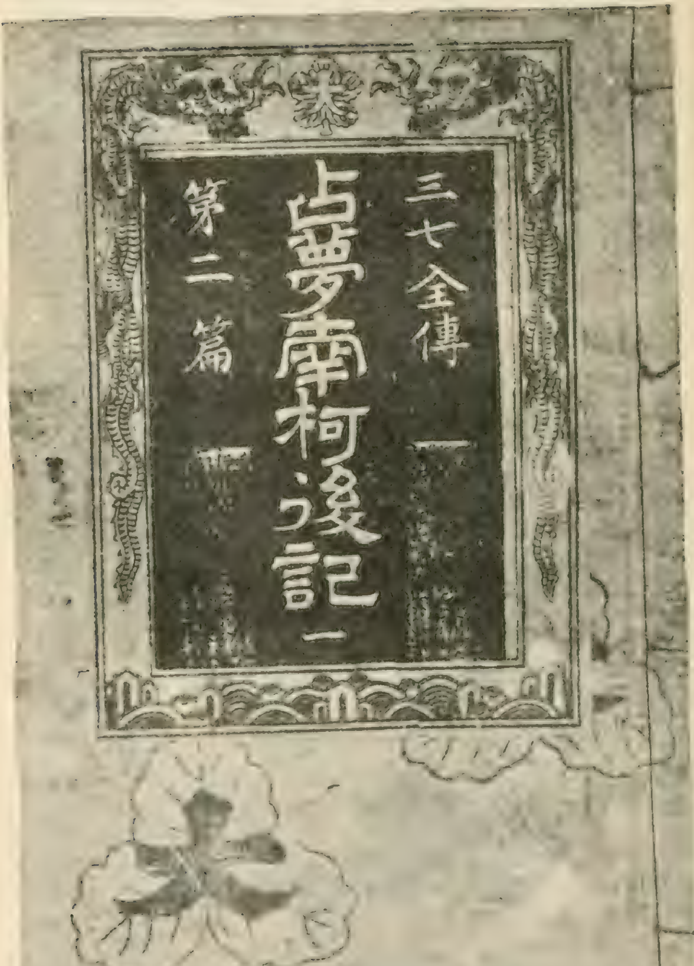
梅川忠兵衛大和紀行

阿染久松傳秋七種　全五冊

瀧口横笛想夫憐

糸櫻赤縄奇編

右曲亭先生近日著編ノ題目以レ今所レ聞録ス十カ之二三ヲ門人誌


三七全傳
占夢南柯後記 一
第二篇

占夢南柯後記序

開元七年道士呂翁なる者神仙の術を得て邯鄲に行く。道中邸舎に息ひ嚢を隱して坐す。俄に少年盧生を見る。短褐を衣て青駒に乘る亦邸中に止り翁と言笑す。盧生其衣裝の褻なるを顧て乃ち歎じて曰く大丈夫世に生る、諧はざれば困是の如し子の談諧方に適す。而して其困を歎ずるは何ぞや。生曰く吾常に學に志し自ら惟ふに青紫拾ふべしと今已に壯を過ぎ猶畎畝に勤む、困に非ずして何ぞや。言訖りて目昏く、寐らんことを思ふ。時に主人方に黍を蒸す。翁乃ち嚢中の枕を探りて以て之に授けて曰く子吾枕を枕とせよ、當に子をして榮適志の如くならしめん。其枕青磁にして其兩端に竅す。生首を俛して之に就く。其竅

邯鄲

開元七年。道上呂翁者、得神仙術、行邯鄲道中、息邸舎、隱嚢而坐。俄見少年盧生。衣短褐、乗青駒。亦止邸中。與翁言笑。盧生顧其衣装褻、乃歎曰。大丈夫生世、不諧困如是也。翁曰、子談諧方適、而歎其困何也。生曰、吾常志于學、自惟青紫可拾。今已過壯、猶勤畎畝、非困而何。言訖而目昏思寐。時主人方蒸黍。翁乃探嚢中枕、以授之曰。子枕吾枕。當令子榮適如志。其枕青磁。而竅

の漸く大明なるを見る乃ち身を擧げて入り遂に其家に至る。數月淸河崔氏の女を娶る。女容甚だ麗し、生貲愈厚し、明年進士に擧られて登第す褐を釋き謂南尉に轉ず。俄に監察御史に遷り起居舍人に轉ず。知制誥三載、出でて同州に典し陝牧に遷り、汴州領河南道採訪史に移節し、徵されて京兆尹と爲る。是歲神武皇帝方に戎狄を事とす。御史中丞河西道節度に除せられ大に戎虜を破る。歸朝册勳、恩禮極めて盛なり。吏部侍郎に轉じ戶部尙書兼御史大夫と遷る。時の宰の爲に忌まれ、飛語を以て之に中り、端州刺史に貶せられ、三年徵めて常侍と爲る。未だ幾ならずして同中書門下平章事同列復邊將と交結して不軌を圖るを誣ら

同州一本作同到

其兩端。生俛首就之。見其竅漸大明。乃擧身而入。遂至其家。數月娶淸河崔氏女。女容甚麗。生貲愈厚。明年擧進士登第。釋褐轉渭南尉。俄遷監察御史。轉起居舍人。知制誥三載。出典同州。遷陝牧。移節汴州。領河南道採訪使。徵爲京兆尹。是歲神武皇帝方事戎狄。除御史中丞河西道節度。大破戎虜。歸朝册勳。恩禮極盛。轉吏部侍郎。遷戶部尙書。兼御史大夫。爲時宰所忌。以飛語中之。貶端州刺史。三年徵爲常侍。未幾同

れ制獄に下る、中官爲に之を保んず。死を減して驩州に投ず。數年帝寃を知る。復進めて中書令と爲し燕國公に封ず。五子を生む。孫十餘人有り。後年八十を逾ゆるを以て病薨す。盧生欠伸して寤む。其身方に邸舍に偃するを見る。呂翁其傍に坐す。主人蒸黍未だ熟せず、生蹶然として興て曰く、豈それ夢寐なるか。翁生に謂つて曰く、人生の適亦是の如し。生憮然としてやゝ久しくして曰く、夫寵辱の道、窮の運、得喪の理、死生の情、盡く之を知る。此れ先生以て吾欲を窒ぐ所なり、敢て敎を受けざらん、稽首再拜して去る。右沈既濟枕中記。

（減恐滅字僞）

中書門下平章事。同列復誣與邊將交結圖不軌。下制獄中官爲保之。減死投驩州。數年帝知寃。復進爲中書令。封燕國公。生五子。有孫十餘人。後以年逾八十病薨。盧生欠伸而寤。見其身方偃於邸舍。呂翁坐其傍。主人蒸黍未熟。生蹶然而興曰。豈其夢寐也耶。翁謂生曰。人世之適亦如是矣。生憮然良久謝曰。夫寵辱之道。窮達之運。得喪之理。死生之情。盡知之矣。此先生所以窒吾欲也。敢不受教。稽首再拜而去。右沈既濟枕中記

蕉窓月を引て景壁を射れば、秋蛩膝下に鳴て吾衣のうすきを歎く、林に悲而迫れども塵を拂はず、机上書を積ども披くこと稀なり、この時も客の紫川を敲ことなく、酒の爐邊に燠る氣し睡らんとするに、寢られず、机に隱て坐し天を仰ぎ嘘吹などの禍を衰ざるが故に、形枯木の如く、心死灰に似たれどいまだ聊吾生を樂むに足ず、僅見浮雲月に

頻して孤燈の明なるを挑げ円え檣馬擒擒、
夜のいたく深うなれば是馬猿を静座に
繋て聲色の欲なしやまいへども、いまだ智を忘て
と能ハ汝鵬鯤を逍遥に伴ふて小大乃利を寡
すゆらいへども、いまだ名を捨ること能ハ汝硯に呵し
筆を弄し意を費し識を醸し汝羅貫三世
乃猶紫女堕獄乃悔豈身後の談るらんや生涯
風流文墨乃奴となる因果歴々たり是作書を
綴るをもつて終日不言たゞ遊惰に似るまわれぬや

鬼話を演輪回を説是墮獄の悔あらしめん為也。父母吾を生む。これ豈如此にして身を終るを欲んや。もし可ならざるも執己ことを得ざるの書賈木蘭堂常南柯夢の続編を版せんと請しかれども彼篇は既に全く局を結て絶して一物を遺さゞる所を続とも労して功なし。夫流竭て一飲をもとむるとは是薪に井を穿に喩る所、月没て明を求るの更に燭を点するに喩る所。不如ことは推辞じと聴所顧に彼木蘭堂書賈は是最に南柯の下に坐して偶

兎を獲まくほりせしものゝ宜なりし株を守るといふ漢人の
守株の癡なるまねしつゝ術ハ遂その株を作者きなりけり
遂に編を嗣纂を戯してもその欲に先題して
南柯後記といふ亦是再寝の夢物語にして鄭の
薪者が鹿に擬しつゝ若耶鄭の客人あるまじきを閲
夢殿の先生もこれを取らで書賈ハ兎を捨て
亦いちまちの鹿を獲つべかりし

文化辛未立秋の日　　曲亭主人識

占夢南柯後記總目録

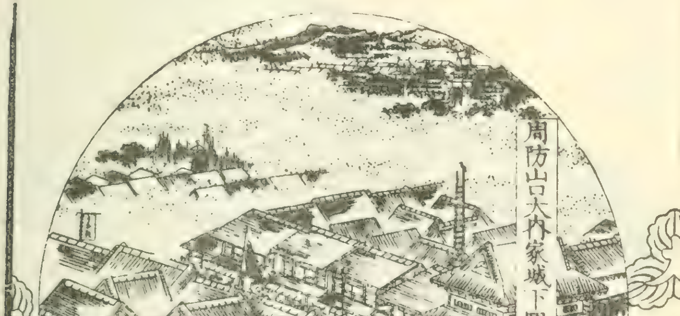
前帙四冊

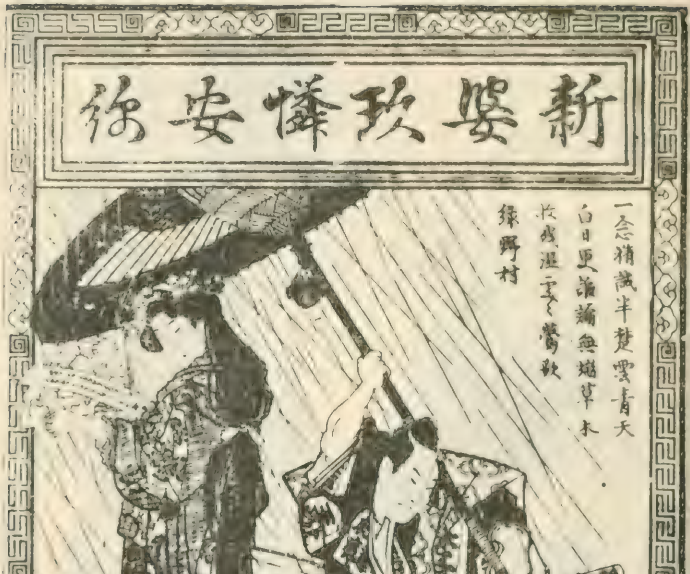


池の中嶋 上
池の中嶋 下
浮名の嬬丈
後帙四冊
秋雨の笠松
轉旅の新関
昼の夏花 上
昼の夏花 下
天神川の淙



過去の菴主
槐樹の手斧
夜川の野航
合歓の花擩
紫構の雨笠
統計八巻此
間又鷟秋雨
笠松為二上下一
題目二十一
今鶱帙為二上
下一各四巻
全部目次果




新粧玫憐安録
一念猜疑半楚雲青天
白日更誰論無端草木
枝成遲ゝ雪ゝ驚歎
緑野村


久旱逢甘雨
他郷遇故知
洞房花燭夜
金榜掛名時
宋人四喜句
全次
刀や同樹
お花
刀やま七



年紀

【永正元年】績井順昭米谷山の老楠樹を伐しむ。丹波都杠死す。この時半七は十歳おさん八歳也。【永正二年】赤根半六が妻籥篠病死す、時に半七が年十一おさんが年九ッ假に婚姻の禮を擬す。是年の冬おさん故ありて笠松平三に養はれ、その後舞妓となりて名を三勝と改む。【永正三年】園花七歳、その父典膳婚縁を半六と議す。【永正十二年】半七二十二歳園花十六歳春婚姻の禮あり、夏に至て績井吉稚近臣赤根半七今市金八布施蝶九郎等を將て潜に洛に遊ぶ。時に吉稚廿一歳、園花が兒曾太郎と同庚也。この秋笠松平三脚平足平を殺して奈良へ走る。半七三勝白河山に再會して共に亡命す。この時三勝十九歳也。【永正十三年】三勝二十歳近江の多賀の莊に女兒お通を產む。【永正十七年】半七廿六歳旅店に信濃の沓掛に病む。時に三勝廿四歳女兒お通五歳（同十八年享祿と改元、前へんに永祿とせしは備書のあやまり也。）【享祿九年】今茲十二月上旬厚倉二郎太夫暗に金を半七に與ふ。おなじき月七日の夜半六敷浪等おの／＼子に代りて浪花の千日墓に自殺し、蟻松典膳致仕入道す、時に半七廿七歳三勝廿五歳曾太郎廿六歳園花廿二歳お通六歳なり。以上前篇【享祿三年】三勝廿七歳男子を大和に產む。この時父の半七半之進と改名してその子を半七と名づく。【享祿四年】園花廿五歳はじめて男子を出產してこれを平作と名づ

く。天文元年　三勝亦男子を産む、陶五郎隆春これ也。天文七年　十一月七日典膳入道病て家に死す。今茲の冬、曾太郎亦その妻厚倉氏を喪ふ。これ二郎太夫が女兒也。天文八年　蟻松曾太郎が女兒初花八歳にして玉枕御前の侍童に參りつかふ。初花が妹夏山、時に七歳叔母園花に養はる。天文十四年　續井順勝の息女　槐姫十四歳上洛して入道黄門一忍軒の養女となる。半之進が長女お通この年廿三歳、槐姫に從つて洛へ赴く。天文十六年　槐姫十六歳、今茲大内家と婚縁整て周防山口へ赴く。厚倉二郎大夫父子お通隆春仙野炊粟等これに從ふ。天文十七年　赤根隆春、陶晴賢の養子となりて陶五郎と稱す。是年笠松平三外孫平作を養て家を嗣せ、曾太郎が二女夏山を平作が妻とす。十月六日に至りて平三病死す。同月十一日厚倉二郎太夫周防の山口に病死す。その子隼人友善出奔して往方をしらず。天文十八年　笠松平作が妻十七歳、今茲男子を出產してこれを平太郎と名づく。天文十九年　赤根蟻松の兩家志を同くして、半六敷浪等が廿三回の法筵を開ん爲にこの年の冬、親族ひとしく浪花の法善寺へ參詣す。時に半之進五十歳曾太郎四十九歳三勝四十八歳園花四十四歳お通二十八歳後の半七二十一歳笠松平作二十歳陶五郎十九歳曾太郎が長女初花十九歳平介が妻夏山十八歳平作が一子平太郎二歳也。この段は後記の發端也。餘は詳に篇の中に見えたり。

南柯後記列傳姓氏略目

續井順勝はじめ吉雅と稱す　玉枕御前　槐姫　蟻松曾太郎

赤根半之進はじめの名は半七　刀冶半七　笠松平作　陶五郎隆春

厚倉隼人友善　賣敗鐵者全介　刀冶同樹　炊栗邯太郎

仙野呂東二　私卒丹三　三勝　園花

阿通　阿花　夏山　晩稻

員外姓氏

持明院入道一忍軒　大內義隆　大內義基

陶權頭晴賢

略目畢

三七全傳第二編 南柯夢後記卷之一

南柯の接木

什時享祿元年、（前編に永祿とす。蓋傳寫の手に誤る、當に享祿に作るべし。）冬十二月はじめの七日、半七が父赤根半六、三勝が母敷浪等は、おの／＼子に羞、子に代りて、千日墓の霜と消しより、俛仰の間二十三年を經たり。されば大和の續井家には、順昭既に世を逝給ひて、嫡男吉稱丸、父祖の箕裘を承繼て、伊賀介順勝（順勝或は順正に作る。）と稱す。順勝に息女ありて、槐姫と呼れ給ふ。正に是錦の上に花を折添、掌の中に玉を琢なすの容止なるのみにあらで、才かしこく、心操風流給へば、華洛の由縁に就て、持明院前中納言の入道忍軒に養れ、年歳二八の春の比、防長豐筑四箇國の守護、從二位兵部卿兼太宰大貳、大内義隆の嫡男、三位中將義基の北の臺にそなはり給ひて、大内家の居城たる、周防國山口の郷、鴻の嶺なる花の御所へ、入輿し給ひしより、既に四年の春秋を經て、今茲ははや、十九歲にぞなり給ふ。これによりて、續井の執權、厚倉二郎太夫友春は、槐姫に冊きて、周防國へ赴しが、近ごろなき人の數に入りにければ、西國にても、大和にてもこれを惜ぬものはなし。しかるに厚倉が子に、隼人友善といふもの、父とともに大内家に仕る程に、あやまてる事ありて、忽地山口を逐電し、三年以來往方しれず、その子は父に似ざりけりとて、彼を識るもの亦おほかり。さて亦赤根半七が女兒お通は、稚少きより召れて、槐姫の陪童に參り仕るに、自然と手をかき、歌をよみならひて秀歌をさ／＼少からねば、小式部の内侍の童だちなりしも、かくやありけんとて、奇しきものにぞ人はいひける。かくてお通は槐姫に冊きて、暫華洛にありしころ、持明院殿に學び奉て、歌道の奥義を究つゝ、弟陶五郎もろともに、媵侍に俱しまゐらせ、周防國へ赴きて、大内家に扈從せり。これより先三勝は、更に男兒二人を生み、園花が腹にも、男兒一人を舉たり。さるからに半七は、半之進と改名し、三勝が腹なりし長男を半七と名告らするに、今茲ははや二十一歲になりつ。次男には笠松平三が家を嗣せて平作と呼びたるが、後の半七には、年只一つのおとゝにて、二十なり。第三男は、槐姫に冊きて、西國へ赴きしが、はからずも、大内家第一の執權、陶權頭晴賢が養子となりて、陶五郎隆春と名告るもの、十九歲にぞなりぬ。されば お通と後の半七と、陶五郎が母は三勝にて、笠松平作が母は園花なり。彼等

は異母兄弟なれども、心ざまの怜悧ことは、劣らず勝らず、これやこの、忠臣孝子の雛なりとて、衆人に愛うらやまれ、めでたき祥のみうち續くものから、盈れば虧る浮世には、園花が父、蟻松典膳人道夢幻齋は、いぬる天文七年十一月七日に、頓に病て往生の素懐を遂、笠松平三はおなじき十七年の十月六日に、老病身に逼りながら、苦惱をおぼえず、睡るが如く身まかりけり。されば三勝は、曩に典膳が養女となりて、半之進が正妻たり。又園花は、平三を父として、赤根が側室になりにければ、莫逆異父の姉妹なれば、迭に妬ず妬れず、娥皇女英の賢なるも、かくやと人は欝の〻めき、貞女の本にも引なるべし。かくは平三世に在しとき、外孫のお通を養ひとりて、これが爲に女壻を擇み、家を嗣せんと思ふ程に、才を慕ひ色に愛、媒妁もて婚縁を、いひよるもの少からねど、お通は才學世に勝れて、見識男子にもたち勝れば、他人と苦樂を共にせん事をねがはず、給事して身を終らんとて、遠く西國へ赴きしかば、平三忽地望を失ひ、半之進が二男平作は、園花が腹にいできたれば、わが家を嗣するに便ありとて、これを半之進に乞うけ、主君に聞えあげて免許を受、母の園花もろともに、彼平作を迎とりて、わが家の家督と定め、赤蟻松曾太郎が次の女兒夏山は、園花が爲には姪にて、平作とは從母昆弟なり。年の紀も似つかはしき夫婦なるべしとて、豫て曾太郎に相謀て、平作は十八歳、夏山が十六歳といふ年の春、終に婚姻を整し、はじめて安堵の思ひをなせしが、是年の冬、平三は身まかりぬ。かくて平作夏山は、慈母園花に孝心厚く、妹夫の契りも薄からで、男兒をさへ擧しかば、これを平太郎と名づけつ〻、いと健やかに生た〻し、立習ふ程にもなりにければ、赤根蟻松等が歡びいへばさらなり、園花が爲に初孫なれば、唯是掌中の珠、挿頭の花と慈愛み、塵さへすへず養育けり。さる程に蟻松曾太郎は、父の典膳人道が世を逝て後は、親とも憑み思ひてし、厚倉二郎太夫は、周防の山口へ赴きて、彼處にて身まかり、その子隼人友善は逐電して、往方しれずと聞えしかば、いといたう惜みつ〻、いよ〻一己の才學をもてせず、同僚赤根半之進もろともに、かしこき人の舊規を溫、政事に私なかりしかば、直きものは擧られ、枉れるものも、その非を改め、隣國ます〳〵附屬ひて、續井の家繁昌し、室町將軍のおんおぼえ、他に異なれば、順勝の息女槐姫は、西四箇國の大諸侯、大内家と婚縁整ひ、更に續井の武威を倍すこと、皆是赤根蟻松兩執權の、善政のなすところなるべし。しかはあれど、花落て葉を生す。身のほど〳〵に憂あり。件の蟻松曾太郎は、二十年ばかりさきつ春、厚倉二郎太

夫が女兒を娶りて、子ども二人まで生せたるが、みな女子なり。剩妻は世を早うして、忘れがた見のふたりの女兒を、初花夏山と名づけたり。しかるに長女初花は、幼稚より、後の半七と、結髮はしたれども、母のなき家にして、女子を育なば、彼が爲によき事あらじ。人となるまではとて、としわづかに八の秋より、主君の內室、玉枕御前の、女童にまゐらせしかば、腰もとちかく召使ひて、手習ひ、縫刺、糸竹の技、おちもなくならはし給へば、いと艶やかに生たちて、はや十九歲になりけるにぞ、今玆は身の暇を給はりて、半七に娶せんとて、父の曾太郞は、豫てよりその准備ありながら、玉枕御前の殊さらに、不便のものにし給へば、まうしいづるによしなくて、かく思ひつゝうちも過せ、次の女兒夏山をば、幼稚より園花に養して、これをば笠松平作に娶せたれば、姉にはましていちはやく、初孫をさへ見せてげり。かくてぞ蟻松竹太郞は、家嗣すべき男子なけれど、思ふよしあれば、後妻を娶らず、侄の半七平作等は、親にもをさ〳〵劣らざる、忠孝の壯佼なれば、女壻にして不足なし。わが女兒等とし長て、子共夥もたらんには、外孫のうちいづれにまれ、養ひて家を嗣するとも、いまだ遲きにあらじとて、親族より〳〵事にふれて、後妻を薦れども、うけ引ず、今なほ五十に足らぬ身の、年來鰥夫にてぞありける。さてこの條は、前編南柯夢、第六卷のをはり、享祿元年十二月七日の夜、赤根半六敷浪等が、千日墓にて枉死せし以後、凡二十三個年の事どもを、かい摘て記すものなり。もし南柯夢を見ざる人或は見て忘たるもあらば、まづ前編を熟覽し、更にこの條をよく見ざれば、耳を塞て物かたらふ如く、說といへども言ゆかで、聞わきがたき事もあるべし。

千日の夢後

時に天文十九年、庚戌秋、九月の下浣になりつ。今玆十二月はじめの七日は、赤根半六と敷浪が二十三回忌をむかへたるに、蟻松典勝夢幻齋が十三回忌、笠松平三と、厚倉友春が、三回忌にさへ相當せり。この諸靈位は、赤根蟻松兩家の爲に、親なり、舅なり、恩人なり。就中半之進と、三勝はその昔、窓に死後れ、親と親とが倐に、命を殞し子に代り、なからん後の後までも、大和に名たゝる妹と夫のかはらぬ契を結びそへて、家の華を手向にせよと、かしこくも遺給ひし、言の葉高き父母の恩、よしやよし野の山ばなほ低し。せめては浪花へ赴きて、法善寺の千日墓に、追善の筵をひらき、衆僧の讀經に彌陀佛の、引接をねがはんとて、半之進は豫より、三勝園花竹太郞等

と、この事を相議しが、追善の法筵は、極月にしかすといへども、年極は殊さらに公務も繁く、且春の営に暇なし。加旃、親族齊一彼處へ赴んに、半七平作等は殿の近習たり、君邊に事る身の、よしや小褻時の旅にもあれ、時を嫌はで身の暇を、まうし給はらんは便なき所爲なり。おもふに十月のはじめの六日は、笠松阿翁の三回忌なれば一切の追薦供養を、この日にとりよして、執行んこそよかめれと、曾太郎がいふにまかし、やがて主君伊賀介に、事の趣を聞えあげて、おのおの行装をなせり。時に十月二日をもて、首途の日と定めしかば、園花は、その子笠松平作と、新婦の夏山、孫の平太郎等を伴ひ、蛾松曾太郎は、玉枕御前に給事する、長女初花をさへ、しばしの暇を乞まうして、これを携へ、朔日の薄暮より、是彼齊一、半之進が宅に聚ひ來て、翌もろ共に啓行せんとて、甲夜よりこゝにあり。主夫婦半七等は、曾太郎園花が歸たる、偏提に酒を酌そへて、しばしも席を立あへぬに、女隷は駄荷を造るとて、いと閙しく間あひ、上を下へとかへす折から、おもひもかけず周防より、お通と陶五郎の來ませしとて、私卒が報知にければ、衆皆こはいかにと、うち驚くまでに歡びつゝ、やがて呼び入れて對面す。四年の再會めづらかなれば、親子同胞恙なきを、迭に視し視されて、さて半之進三勝等は、お通と陶五郎に對ひて、今年は家廟の年回なれば、法筵を法善寺に開ん爲に、翌は浪花へ赴くよしを説しらし、汝達は、又いかなる故ありて、猛に故郷へ歸來つる。槐姫には恙なくや在ます、いと心もとなしとて、眉根をうちよせつゝ問程に、お通は莞やかにうち笑て、さおぼし召は理なれど、吾儕同胞が參りし事、一切あしきすぢには侍らず。猛に華洛と大和への、おん使をうけ給はりて、のぼりたるまでに侍り。その故は、年來合戰やむ時なければ、諸國の士民疲れたり。されば應仁の擾亂より、華洛も舊の華洛にあらずいといたう荒果て、鄙の住居に似たりとなん。それには遙立まさる、周防山口の熱鬧は、街衢を九條にひらかして、平安京に擬たり。されば西山東山仰ばいよゝ高倉や、姉小路と弟訓の里の由縁の花の兄、梅の宮より嵯峨太秦、千本通りを北野の松、現に十かへりの花の御所は、北枝も及ばぬ鶴の嶺、金閣銀閣建つらね、長生殿には、春秋の富小路も遠からず、不老門には日月遅き、鶏鉾町、烏丸、槌もて黄金の堀河の、水の紋なる六角通り、その水鳥の鴨河に、末なつかしき大和橋、祇園の社清水の、音羽の瀧に地主櫻、色香吉田の春の森、糸よりかけし柳の馬場、二丈三條大橋の、かゝる繁花を何ものゝ、祝してや口吟けん、大内とは、大内とは云々

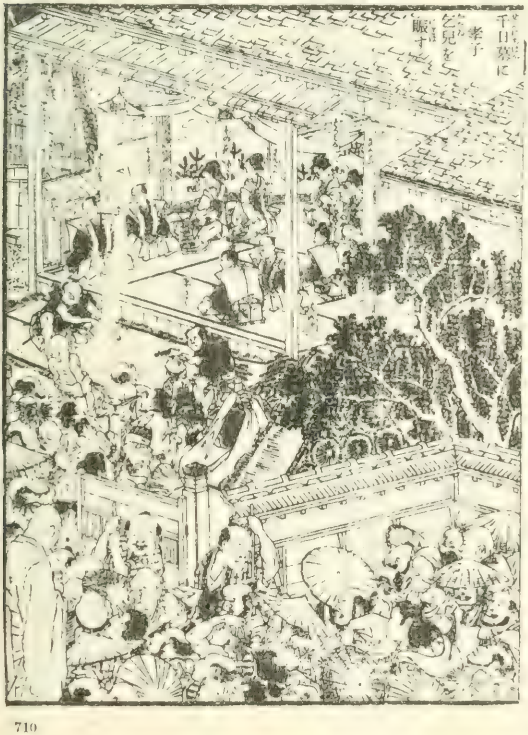
との狂歌室町殿物語に見えたり。

めでたき文字、今しれり、裏の字略せり、大内裏とは、例の人の癖なるべし。されば諸國の商賈等、聚合うへにも聚ひ來て、建つづけたる廓は、三里が程に棚を張る、衣の棚に、魚の棚、奇品唐物、琴棋書畫、交易賣買さま〴〵に、朝市夜店絶間なく、民の竈の賑ひを、語り繼聞傳へ、落ては更にのぼりかねし、華洛の人も緣を求めて、おほちの蔭を賴ん爲に、みな山口へ引移れば、西へ西へと入る町の、客店、賣家、貸座舖に、おの〴〵膝を容かね侍りかゝれば姫の御養父にておはします、入道黃門一忍軒も、華洛に在するかひもなく、いと侘しくぞおぼすらめ。汝弟陶五郎もろとも、おん迎にまゐるべし。その序に、大和へも立よりて、館の安否を問まゐらせ、緣由をもまうせとて、姫の御事うけ給はり、遙き羈旅も隔なき、道づれは弟なり。赴くさきは故郷なり。只何となくいそがれて、一昨華洛へ參着し、一忍軒のおんかたへ、姫の消息をまゐらせしかば、歡び給ふ事大かたならす、行裝何くれの事に、いそぐとすれど日子經なん、その間に汝等は、大和へゆきねと、宣はするに、とるものも取あへず、直さに來つれば案内もまうさす、ゆくりなくこそおぼさめと、一五一十を物がたれば、衆皆聞てふかく歡び、父祖の爲に菩提を弔ひ、追善の法筵を開んに、親族の中一人たりとも、缺なん事は本意ならす。さるを今招すも、水陸遙に隔たる、お通陶五郎さへ來つる事、諸靈位も、さぞ滿足におぼすらめ。亦是君の賜なり。我公田に雨ふつて、我私におよぼすとは、かゝる事をやいふべからん。願ふに。稀なる幸かなとて、いとゞ他事なく欵待ば、お通は榮あるこゝちしつ、六の歲より二十八の、けふまでも思ひ忘れぬ、公さま婆さまの年回は、豫て儲しるものから、百里にあまる西の稍壺處にをれば、雁の翅を借ずして、頓に音耗もいたしがたし。大和にあらばうちも揃うて、墓參りすべきにと、思ひ侍りしはきのふけふならねど、年極の忌日をこの月に、とりむかへ給はんとは、しらで來つるもみなおのが、幸に侍るなれと、いふを聞かけて半之進は、お通を見かへりつ、歎息し、わが子どもらは多けれども、祖父祖母を見もしらず。おん身は六歲の冬なりければ、その面影を夢ごころにも、認てやある、忘れやしつると、問父よりも問るゝ女兒の、涙にいらへかねたりし、胸くるしさを推量る、三勝は園花と、思はず面をあはしつゝ、もろきは親の涙なり。昔太郎も鼻うちかみ、音後れせし陶五郎を、つく〴〵と見て小膝をすゝめ、四年見ぬ間に隆春は、よき男になり給ひたるな。おん身幼少より、眼ざしの凡ならざる、末憑しく見えしかば、養とりてわが子に

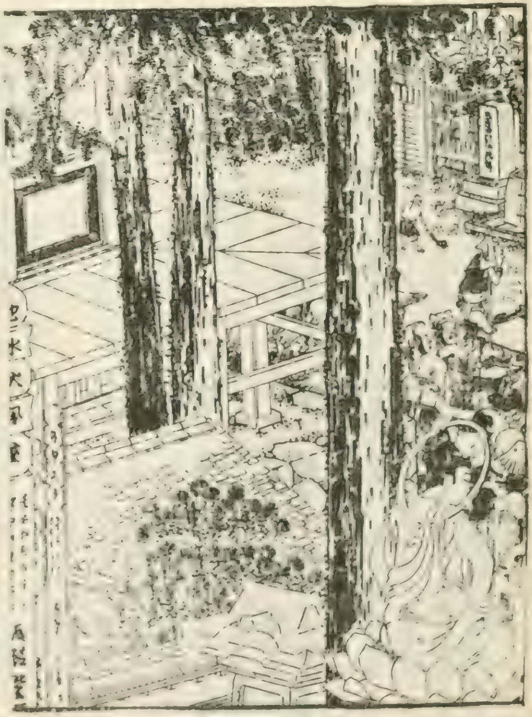
も、なさばやと思ひながら、いまだ運からじと油斷して、陶氏に先せられしは、曾太郎が不幸にして、却おん身が幸なり。彼權頭晴賢ぬしは、大内第一の執柄にて、周防富田の城主たるに、わが所帶を比れば、九牛が一毛にだもなほ足らず。貧福は天のなす所、他家を續とはいひながら、季子にして親同胞にも、立勝りしはでかされたりと、稱讃すれば陶五郎は、扇を膝にとりなほし、こは小父公の言葉とも覺候はず。義を結びて父子となるもの、戸族と德行をこそ擇め、いかでか祿の多少を論ずべき。君命默止がたくして、陶氏に養る丶こと、是全く隆春が運の究めとこそ思ひ候へ。言可惜しき申條には候へども、大内多々良の鼻祖は、百濟國王東明八代の後胤、餘璋王第三の王子、琳璋といひし人、唐の亂を避て、周防國佐波郡、鞠生の浦の多々良濱に來り留る、實にわが大日本、推古天皇の、十九年の事かとぞ聞えたる。亦新撰姓氏錄に載るところを考るに、多々良公は、御間名の國王、爾利久牟王より出たり。欽明天皇の御時、天朝に投化して、金の多々利と、金の牟居を獻る。天皇特に譽させ給ひて、多々良公の姓を給ふよし見えたり。しかれば是傳る所兩說にして、いづれが是なるをしらず。或はいふ、琳聖王子七代の後、長門守正恒が時、朝廷はじめて、彼先祖の來りとゞまる地の名によりて、多々良朝臣の姓を給はる。是より家號を、大内とは稱したり。かくて正恒十七代の後胤、左京權大夫義弘朝臣、周防國山口に居城して、長門石見豐前等の國を討したがへ、明德の亂に軍功あり、故に足利殿、義滿勸賞として、和泉紀伊の二箇國を加增て、義弘に賜ひしかば、泉州堺に居城せり。しかはあれど、義弘只管武功に誇りて、足利殿を蔑如し、終に鋒を爭ふに及びて、散々に戰ひ負、應永六年十二月二十二日、和泉路にて討死し給ひぬ。かゝれども足利殿、その先功を捨給はねば、子孫所領の地をうしなはず、義興の時に至て、又武功あるが故に、從三位に叙し給へり。就中當主義隆卿は、武略父祖にもいやまして、西數箇國を伐したがへ、剩內裏造營の、料物を獻りて、三位の侍從兼太宰大貳に補せられ、頻に進て、從二位の兵部卿になり給へり。亦わが養父、陶權頭晴賢は、主君大内殿と同祖たり。往古百濟の琳聖王子投化して、多々良濱に着船のとき、相從ひ來たりし二人の臣下あり。これ陶山口の先祖なり。主家はこゝに二十八代、わが家も又二十餘代、氏といひ祿といひ、肩を比るものもなけれど、驕るときは久しからず、明白にはいひがたき、隆春が歎き多かり。傳聞く晴賢の養父たりし、陶隆房入道道喜齋に、只ひとりの實子ありて、陶五郎隆豐といひけり。父の道喜は、富田若山

の城に隠居し、五郎隆豊は山口にあり。一日隆豊、富田にいゆき、父の安否を問ふ序に、主君義隆の賞罰非法なるよしを演て、あしざまにいひしかば、父の道喜つく〳〵と聞て思ふやう、このものいまだ年二十にも足ずして、主君を蔑にするのこゝろあり、われ死なば、必謀叛すべきものなりとて、密に家隷にこゝろ得さして、情なくも隆豊を、刺殺したりとなん。この事を傳聞くもの、或は掌を拍て驚嘆し、縦見透悪事ありとも、子を殺す事はなしがたきに、況て善とも悪とも、定かならぬ一子を、主君の為に殺したる、道喜は稀なる忠臣なりとて、只願に譽るもあり、或は眉をうち頻め、父子の道は天性なり、しかるに一言の下に是非を決して、忽地にその子を殺す、道喜が心ざま虎狼より猛し、彼その子をだも愛せずして、いかでか主君を愛すべき、こは只名を好むのみ、忠臣にはあらずとて、爪彈するものもありけり。かくて陶道喜齋は、一子をばうしなひつ朋輩の子を養て、家を續せたりけるが、その身はいく程もなくて、身まかりしとなん。かの養れて陶氏の、家督となりたるものは、わが養父晴賢これなり。かゝれば五郎と稱する事、わが家にしては、不祥の名なるに、養父晴賢、某を、亦陶五郎と呼し給へば、これさへ心に快らず、つら〳〵陶の一族の、驕れる形勢を見候に、黨を樹て私の恩を施し、比周して民の心を得たり。されば大内の諸老臣、杉隼人佐、石田將監、鷲津、杉原、宮、三吉等に至るまで、媚を求めて家人にひとし。權威をさ〳〵大内殿に、ますともいかで劣るべき。されど厚倉友春世を逝ては、安危を論するものもなし。主君とまうし、養父といひ、富貴職祿その身にあまれど、なほ天命をおそれ給はず。壯なるものは必老ふ、隆春をもてこれをいへば、危きこと累卵のごとし。某はじめよりこの事を思ふ故に、彼養子となる事を願はず。しかれども、夥の近習扈從の中より擇せ給ひし、主君のおん媒妁なれば、脱るゝに道なく、親族には遠離、人にしらせぬ身の憂苦は、外飾ばかりの幸にて、不幸最甚し。さればとて陶氏と、既に親子の義を結べば、榮とも枯るとも、安危を父と共にせんと、思ふより外今更に、他事は候はずと、うちひそめきたる述懐に、曾太郎ふかく感嘆し、微妙もいはるゝものかな。われおん身のうへをもて、幸多しといひつるは、傳聞たる事もあれば、言を設て試たり。いよ〳〵志を移さずして、をり〳〵養父を諷諫し、姉のお通と心をあはして、君に忠義を竭し給へ。さはおぼさずや赤根ぬしと、會釋すれども牟之進は、只うち聞て點頭のみ、よしなき事をいひ出て、母御にな物思はしそと、いはまほしさをえもいは

で、傍痛きお通より、聞ては心安からぬ、三勝園花いへばさらなり、初花も夏山も、思ひ過せど理りというべきよしもなまじひに、半七と平作は、父の心を汲かねて、いひ慰んやうもなく、その席もやゝしらけたり。さる程に宗族母黨圍坐して、庭の落葉とふり積る、四年來し方の物がたりに、冬の夜なれど長くもおぼえず、鶏鳴暁を告にければ、お通陶五郎は、浴して衣服を整へ、伊賀介玉枕御前のをはします、筒井の館に祗候し、入道黄門一忍軒の御迎として、上洛したるよしをまうして、三位中將と、槐姫の消息を進らすれば、伊賀介夫婦、彼消息をひらかしつゝ、西國の事、姫君のうへを問せ給ひて、酒飯を給はり、華洛の序に參りなば、心いそぎせられなん、ゆゑにこなたよりは留ぬなり、逗留はこゝろ任せたるべしとて、軈て返書を賜りしかば、法善寺詣の事をさへまうして退出つ。この時日ははや、西に傾きにけれど、半之進曾太郎は、彼等を待つけて、足弱をば轎に乗し、一族主從五十餘人、直さまに大和を起行て、この日は三四里が程に宿を求め、次の日浪花へ赴きて、旅館を定め、衆皆法善寺へ詣しかば、寺僧出迎て、客殿へ誘引、法會の事、豫の消息によつて、心得候ひぬ。施行の假屋は、金毘羅



堂の、右手のかたに修理したり。まづ長途の疲勞を勞り給へと借たちて、叮嚀に欵待けり。當下半之進は懷より、二枚あまりつぎあはしたる帋に、法號俗名年月を、書記せしをとり出て、押開きつゝ寺僧に指示し、こは悉す諸靈位なり。俗名小根半六、蟻松典膳が妻敷浪と寫したるは、某が實父と姑にて、今玆十二月の七日は、二十三回忌に相當れり。又夢幻居士と寫せしは、これなる付太郎園花等が父典膳これなり。これは今玆の十一月七日を、十三回忌の稱月とす。又俗名笠松平三と寫せしは、三勝園花等が義父なるが、この月六日は三回忌の稱月なり。又俗名厚倉二郎太夫友春と寫せしは、わが爲には恩人、蟻松氏の爲には則なるが、これもこの月十一日は、三回忌の稱月なり。又俗名丹波都と寫せしは、三勝が實父、俗名篇條と寫せしは、某が實母なり。この中半六と敷浪の墓は、當寺にあり、



これを法會の正位とす。この條多くは大をこの法會にとりよして、共に回向し給和にて歿し、厚倉は周防の山口にて病死はるべしと、縡詳に演說り、施物の目せり。但丹波都は歿してより四十一年、錄にとり添てさし出せば、付太郎は私卒篇條は四十年にあたり候へども、五十回忌兩三人に布施物をとり進らし、嵐せ

まで安排れば、寺僧等手に〳〵受とりて、方丈に運び納るほどに、住持の上人立出て、追薦の志の篤を唱賛し、長途の疲労を問慰め給ふ。これより後の欵待はくたく〳〵しくて書もつくさず。この日は十月三日なり。さて法會は翌日より、三箇日と定め、清僧三十員を延請して、經巻の紐を解しむ。かくて赤根蟻松の一族は、旅館に立かへり、この夜より精進潔齋して、衣服を整へ、毎日に法善寺の法筵に列坐して、讀經を聽聞す。既に結願の日になりにければ、講師法座に着て、佛法の不可思議を説、施主檀越の功德を演給へば、衆僧これを和讃して、樂童管絃を奏したり。事の爲體善盡して、天衆もこゝに影向し、幽靈得脱疑ひなしとぞ見えし。かくて法會果にければ、施主の男女打つれたちて、施行の假屋に入りしかば、走卒奴隷前後に警固し、堆高く積累たる、四十六俵の白米は、十三回と、二十三回の數にあはし、六十貫文の青銅は、三周七回五十年の、忌日の數を表したり。彼此より聚合來て、今か今かと、待わびたる乞兒ども、蠅の如くに群たちて、或は嬰兒を肌に著、老たるを扶引、婆々よ家家よと呼子鳥、只喈々と餌に求食、覆車の前の村雀、貰啼する片羽烏、燕口の敗袋、はかりこまれし一升に、彌陀の光も鐵鎚の、手足隙なき福德の、三歳鯉に袖ごひに、犬もまじりて如是畜生、諸鳥、跂虫、江河の魚鼈、悉皆成佛、平等利益と、異口同音に唱へつゝ、歸る乞兒を三勝は、つく〳〵と見て思ひいづる、かの信濃なる沓懸の、旅の宿に病臥せし、夫にひかれて彈く三絃の、三すぢのいとど苦しくも、人の門邊にたち劍、さやけき月のいぶせきまでに、われも乞食をしたりしと、昔忘れぬ身の幸は、忍ぶにあまる袖の雨、笠屋簑屋と呼れつゝ、貧しくもありし浪花潟、何かは人のうへならんと、いはねどもそれと思ひやる、赤根も共に嗟嘆せり。さる程に、施行も既に果しかば、衆皆假屋を立出つゝ、冬枯けらし草の原、なき名苔むす墓參り、覺ずや今も夢によく、似たる夢かな夢の迹、二十三年千日の、はてしなげきぞいやませる、半之進は傍なる、石塔婆を指して、三勝これを見給はずや、享祿元年十二月七日、嵐雪月照信士、月雲妙霜信女、一蓮託生、俗名和州五條新町、赤根半七、美濃屋三勝と、彫著しは、われとおん身とその夜さり、この處にて死ぬべかりしを、厚倉ぬしに諫められ、像見がはりの簑髻と、假髪を瘞し標石に、遺す夫婦が名は憂と、かき口説く夫より、袂のしぐれをやみなき、三勝は園花とかずかず多き卵塔を、こと見かう見つゝ歎息し、いひあはさねどその夜さり、親と親とが子を思ふ、心の闇に案せし、ふところ紙の遺書は、こゝらに貼ておき給ひし、悔て

かへらぬ水草の、逆弔今日の手向草　枯にしときの面影は、今見るこゝちに侍るかし。父をば異にする同胞が、親の非業の死は異ならで、いづれも過世あし引の、山路に響く斧の柄に、朽れて楠の露と消、或は浪花津の、蘆の葉枯るゝ霜の夜の、月の劔につらぬかれ、かくは終をとり給ひし、親を思へばわかき時の憂かりしことは數ならず、物足らぬとも思はぬ今は、貧き昔が戀しとて、かへらぬ事をくりかへす、涙はいとも誠なる。お通も瞼押拭ひ、定かにおぼえ侍らねど、わらははその夜外翁さまに、負れて跡を慕ひ來つ、この折戸より入りにきと、思ひぞいづる目標の、柳もいたく老にけり。かくやありけん、とばかりに、彼首是首を見かへれば、そをいかにとも問かねて、冬の鶯隠口の、はつ花ともろともに、つく／＼と立夏山も、憂にはもれぬ薬末の點滴を、半七、平作、陶五郎も、身のほど／＼にうけて開く、生れぬ前の哀別離苦を、今さらこゝに思ひやる、覺にし夢の往方かな。さめずも遺す親の名は、標石ともろ共に、いつまでも世におきつちの、命長かれと祈るものを、いたくな歎き給ひそと、諫れば曾太郎も、うち咳きて聲を激し、女ばらはとまれかくまれ、赤根生にはいと似げなし。われも親をば慕へども、女々しくもうち歎くを、なき人の爲とせんや、とく／＼回向し給へと、手向の香草を折そゆれば、この一言に諫られ、おの／＼形を改めて、佛の萱と七本の、率都婆に沃ぐ阿闍灑頂、衆皆ひとしく額て法號俗名唱つゝ、往生得脱正覺位、拔苦與樂と念じ果、やうやく墓所を立出て、更に寺僧に別を告、從者等を呼聚へ、歩より去ば轎子を、後方に擡しうちつれたちて、やがて旅宿へ歸りけるとぞ。

詭僞の葬送

赤根蟻松の窯は、法會滯ることなく、志を遂にければ、次の日衆皆、大和へとかへり去に、お通陶五郎等は、既に積井殿の返書給はりて、彼地をば退出つ。私の旅ならねば、直さに華洛へ赴きて、一忍軒のおん首途をまち、奉るべしとて、名殘は竭ぬ袂をわかち、從者を引供しつつ、伏見街道を投ていそがしけり。この下に話なし。こゝに又、下の難波村の猾邊處に、敗鐵、古衣、紙屑なんど、すべて穢汚たる物をのみ、買もし賣もして生活とする、至介といふ瘦商人ありけり。藻汐草かき集てもまだ足らぬ、親子ふたりが旦夕の、煙の價はありがひち、ながきは母の病苦を、子の手ひとつに看病つつ、孝行庸常あら海の、音しづまりてけふも又、融々とさし入るゝ、夕陽は結句白屋に、襤衣一つの寒さも、小春日和と鶯の、細々鳴く門は寂寥し。諸處にこれも又、おなじ世わたる苦しさの、一

荷にあまる古道具を、肩も撓げに擔ひ來て、遙に裡面を見入れつゝ、全介は宿に在すか、よき物夥買たるに、直ぶみさせんと門口へ、重擔を撲地と扛おろす。聲聞しれば病臥せし、あるじの母は頭を擡、碗に虎子に藥鍋、おきならべたる枕邊は、人に見せんも憚の、咳逆嗽々と咳きて、裏より半面推開く、二枚屛風ともろ共に、骨のみ高く病羸ひ、床槫痛むわが腰を、われと捺りて起直り、四五六のぬし來ませし歟、全介は宿にあらねど、尻うちかけて憩ひ給へ、今はや歸るところなりと、呼び入られて搔撈る、擔籠の內の煙包、さらば一吹いぶさめと、上り框に膝くみよせ、やよ阿婆御、いつ來て見ても、藥の驗もまはりかねてや、その儘に頭坐もあがらず、些は飯の食もやする、欲うなくともたうべ給へ。近曾洛下のえせ連歌にも、人の身に藥とおぼしめしと汁、食うて肥だたぬものはなし。我から心を鬼にして、食著給へと信やかに、慰めながら腕を、伸す地炕の埋火に、和泉新田つきかぬる、煙草も物をおもはせたり。

さらぬだに、伽もぞほしき留守の宿に、人の言葉の誠あるを、憙しと思ふは世間の、なべての老のつねなれば、束し髮ともろ共に、白く剝たる齒をあらはして、思はずも莞爾と笑み、商賈夥計はすくなからねど、全介とは心をしり、心しられし四五六ぬしに、身のしがかくすべうも侍らず。この春より吾儕が病著、貧の病を搗ませて、藥劑も所帶もまはらねど、あしき耳をば聞せじとて、憂貌もせぬ奇特もの、わが子を譽るにあらねども、ここらに稀なる孝行に、愛では小坂大坂の、商人たちもこゝろよく、物貸て給はるゆゑに、けふまではかくてもあれ、憖母が絆となりて、活業には得も出ず、物の入り夕と借錢は、只月毎に增ばかり、五七年以前より、婦むかへせよと薦ても、妻を娶りてはおのづから、母の養ひ疎になりなん。殊さら翌の貯祿なき、寒家を擇このみて、婚緣結ぶものやはある、母だに在せばわれにおいて、物足らずとは思はぬとて、それなりけりにうけも引ず、とかくする程に吾儕の大病、買賣止て半年あまり、親子坐食の胸苦しさを、猜し給へといひかけて、堪ぬばかりに咳入れば、四五六も嘆息し、これは又えらい咳逆かな。一口咽喉を潤し給へ。湯藥やあると草鞋の、紐とき捨ていそがはしく、土瓶のぬる湯汲て出す、片手に捺る觸骨、衰見えて痛しく、さま〴〵に勦れば、ようち捨ておかし給へ。はやおちつきぬといひつゝも、枕を杖に身を起せば、喃その儘に平臥給へと、物うち被るをかいやりて、うち臥てのみ侍る身は、しばしの程も身を起して、うち譚ふが保養に侍り。とはいへよしない所へ來て、せでもの介抱困じ給はめ。わかきに似げなき親

切を、今にもあれ全介が、歸らば見もし聞しもして、歡し侍らんに、などてかくまで遲きやと、心に待ばとにかくに、又いひ出るわが子の事、さこそと思へば今さらに、うち捨ても歸られず。これも浮世と四五六は、枕邊にひらき居つ、いな阿婆御、浪速三界賦巡りても、頃日の日の短さでは、果敢々々しき錢にもならず、けふも又素手ふつて、歸る事歟と思ひの外、一擔にあまる敗器を買て、さて肩は滅込めど、傳夫買ては場尺にあはず。見かけておろせし肩やすめ、詞敵にならずとも、緩やかにかたらふべし。喃阿婆御、人には笊の、見たふしのと、賤れても拆ふしは、攫るも又この商賣、喃阿婆御聞給へ。けふも朝から買々と、呼あるけども容易は、幡を捏ぬ大黒町、玉手松本せりくたびれ、西へ傾く日吉橋の、小家の窓から呼とめられ、財布かぎりにつけし直の、相談出來て六七百は、たしかに利のある破產物、買て兜の緒稱賣、分捕高名かくの僥倖、これ見給へと門戸口へ、走りをりつゝ引よして、ひとつひとつに取出す、佛器高杯供饗膳、袷服紗の卓圍も、箔の剝たる古木幢、白木の位牌ぬしや誰、なき身の後も子を思ふ、夜の鶴なる蠟燭臺に、嘴はふまれて三曲の、かうの煙に煤びたる、乾津の花筒銅磬、脚の脫たる經机、茶釜の尻も墨染に、けさまで炊し羹の鍋、地獄の釜の二升ばり、これらはひとつにうち累ゝ、内へ入子の米櫃は、箍のゆるびし伊丹樽、底には殘る摑米の、菩薩の行を勤かねし、生道心がなま／＼しき、衰脫の殼としられたり。あるじの母は是彼を、つく／＼と見て嘆息し、神社佛閣へ詣ては、賽錢とんかぬものはなきに、佛の箔を剝すとやらん、活業とはいひながら、尊き物をも利の爲には、盤索破て物ともせず、後の世さへに思ひやれば、さてもうたてし物體なし、南無阿彌陀佛と念ずれば、四五六呵々と打笑ひ、やよ阿婆御、涙もろい事宜ふな。古借の分散、女房蛋去、單居の頓死頓滅、闕宅の敗器引からげて、賣ものゝ損、買ものゝ得、出船入船は時の估甫、それを不便の、痛しいのと、思うては、問屋の貨物が減うとて、興販せぬとおなじ事、とばかりいへば凡夫の私意、おなじ活業すればとて、病者の枕方へ、心ない佛の五器、位牌なんどは忌しからん、しからば閉帳いたさめと、とりかたよすればうちほう笑み、いかで心にかけ侍らん、七難八苦も救せ給ふ、佛の利益いと尊し、況て翌ともたのまれぬ、老の病著は一向に、西方彌陀の引接を、待奉るのみにこそ。さばれ病の苦しきより、なほ苦しきは負債の呵責、去の晦日をいひくろめて、けふまでは延たれど、今宵は是非に逃れがたし。このゆゑに全介は、心あてのかたへ、金借りにゆきたれど、何處もおな

じ霜枯時、思ふ半も調ぬ畝、日は暮るるに歸りも來ず、貧の病は御佛も、救ふよしなくおはせばこそ、坊賈の手に售わたされ、火宅の恥を見給ふらめ。數ならぬ身を世にあり貌に、歎ば後世の罪をやまさん。墓なく物を思はじと、思へど憂をやるせなく、苦しきまゝの老の僻言、聞ながし給ひてよと、いと面なげにかき口説ば、いな、さにあらず、さはあらず常言にいふ膝とも談合、今宵脱れぬ負債とは、問でもしれたる米家に薪家に、莊役どのへの未進ならん、それならば吾儕にまかして、心強思ひ給へ。貧乏する一得には、かゝる寄手を引うけて、臨機應變の軍略あり。友だちがひに全介に、なりも代りて討債兒を、追かへしてまゐらせん。おん身は物の陰に躱れて、何事なりともいはゞいへ、咳一つし給ふな。しられては便なしと、ほこりかに說諭せど、こゝろをも得ず頭を掉、人の所帶をいふにはあらねど、おん身に餘の貯蓄ありて、救給はするにはあらじ。正なき事をしいだして全介に祟あらせなば、毛を吹疵を求るなり。何かは人に躱るべき。かゝらん所爲はうけ引がたしと、いはせもあへず打笑ひ、文明うまれの人は只、もの頑に心得て、今の世にはあひがたし。おん身のみ居て躱れなば、後くらしともいふべきが、事みな吾儕が引うくるに、全介あしかれとてしかせんや、とかくしてはや黃昏たり、まづ行燈をと引おろす。棚の隅なる燧筥いとかひ〳〵しく打つくる發燭の硫黃に噫々と、嚔る鼻をうち掩ひ、燭は點せどもいと暗き、痩燈心を搔おこし、さて是からは飾附、細工は有流落成が緊要、阿婆御よ、あしく思ひ過しで、必音なたて給ひそ。こゝへこゝへと、後方より、理なく腰を抱き起して、障子の內へ潛る、折しもあれさや〳〵と、革金剛の鐵の音、門口ちかく聞ゆれば、渠はや來たりと、四五六は、こゝろ慌て門を鎖し、却何がなと彼此を、見かへり見かへる飯米桶の、內には鍋釜いと重し。これ究竟と遽しく、蓋かい載せて卓圍と、共にかけたる纜索の、端いと長き十文字、楚と結びて引捨る程もあらせず、門の戶を、開よ〳〵と三四人、破るゝばかりに敲ども、をいと應て頓には入れず、件の桶を正面に、押居る經机の、片脚もたせる煙盤、上には位牌銅磬、香爐花筩、按排れば、ます〳〵焦燥討債ども、暮るや暮ぬに門鎖ても、今夜はいかで脫すべき。開ずやあけよと、詈れども、四五六騷ぐ氣色もなく、しばしは見せじと、臂ちかなる二枚屛風を逆さまに、桶のほとりへ立めぐらし、ひとり笑つゝうち咳き、戶口をさらりと引あくれば、待や遲しと米家の杵介、一番乘と名告かけ、挑燈揮て走り入る。二番は薪屋の樵夫右衞門、三番に藪井啓菴、物

體つけて引さがる、莊役の親平が、襞積も消たる番袴の、塵埃皺つ殿がほに、おの〳〵苦虫喰潰し、踏ば陷る敗床の、野郎席鷹のその中へ、変る坊主も脊を張て、左右りへ頭を廻らし、金とゝのへて待もすべきに、圭介は出も迎へず、お懐さへ人なみに、影を隠せしとてかくさすべきや、人の物を遣うて果は、留守をつかふは大膽なり。是まで物はいはねども、面をば認りたる、八丁寺町の敗鐵どの、和主留守を預るから、この件の事は合點なるべし。七月九月と兩節まへ、豆板一顆藥代とらすに、毎日三貼の方劑は缺さず、別煎煉藥人參まで、悉進達でも、蛙の面へ水加減、煎じやうは常の如き、五貼七貼の風藥でも、三分增は世上なみ、況て歷々の醫者達が、匙を投たる大病人を、けふまでとりも留めしは、誰が蔭と思ひ給ふ。世にある人をかくまでに、療治するものならば、白銀卷物乾鯛箱、二疊の玄關に置あまる、熨斗目麻上下の使者を受んに、腰の床掛は臙だとも、潰れたとも挨拶せず。長袖の身にしあれば、嘗出しも配がたく、討債にもいなれずと、思ひ蔑る歟、さもなくは、藥の效で生延たる、命が今更惜うないか、活す事こそ不得手なれ、をしくもあらぬ命ならば、もりころすは吾儕が本事、人參を吞過しても、首縊るには及ばぬと、腹のたつ隨人體を、膝から崩す片胡坐、理窟ならべて揉に來る、按摩あがりは鄙俗たり。療治ちがひの口舌には、痛くなき腹探るゝ、四五六は笑ひを忍び、俺までいはせて頭を掻き、宣ふ所みな有理、推量のごとく、圭介は宿にあらず。さて老母はと、いはせも果ず、杵介權夫右衛門左右より、帳面披て眼を睜り、こや留守に居る敗鐵どの、古物買ふが活業でも、擇も好で圭介が、古借錢は買れもせじ、さりとも喧嘩を買んとならば、おん身なりとて免しがたし。これ開給へ、この春より進達たる、飯米は藪どのゝ、方劑にもます親と子が、露命を繫ぐ膳の綱、とやらかうやら朝夕の、烟を立さしたる薪の恩德、一百何十何夕は、涙もろきの慈悲を仇、晦日にはかならずと、思ひの外にいひ延され、この月もはや六日たつ、圭介を出し給へ、いふことというて取らねば去ぬと、嚏く間へ親平は、膝すり寄るゝ侍の袴を、つまみ出してうち咳き、左右方ともに静り給へ。いはるゝ所道理至極、久しい馴染の圭介親子、莊役がひに承負て、埒あけて進らすべしと、いはまほしくは思へども、各位はさておきて、十月にあまる房錢の、未進積てやまひとなりし、母御は可愛ことなれど、まづ吾儕から取る錢ありと、いうてあるじもなき宿に、長僉議は無益なり。や、察る所圭介は、苦しさまゝに母を負て、逐電せしに疑ひなし。しかれども吾們が、追留ん事を怕害て、これな

るをとこを殘し置、時を移すと覺るぞ、遠くはゆかじ、誘たまへ、追蒐て引戻さん。いかにやいかにと小膝を敲て、左右を估と見かへれば、心得たりと應もあへず、衆皆一齊挑燈を、引提て立あがれば、やよ待給へと四五六が、慌忙き禁れども、競ひかゝりし癖なれば、心つよく揮拂ふ、彼首此首にとり著を、縋りもよせず衝倒されて、忽地翻と輾轉、響に倒るる屛風の裡に、無常を示す早桶は、魂魄こゝにあら佛、地獄の制度も金による、欲をはなれぬ討債等も、これはと呆れてとり落す、挑燈ともろともに、忽地紋む怒の弓弦、思ふ的さへ射外せし、祖ゆり入れて居ならべば、四五六は鼻うちかみ、各位是を見給へかし、おのれ活業のもどり道、全介許來て見れば、老母の臨終痛しく、かゝる時にこそちからにも、ならずは友たるかひもなければ、全介を諫め激し、後の事などものするに、椰を買ふべき錢なしとて、うち歎く人の子の、爲には胸のみいたみ樽、内には物もなき龕を、をさめて今宵の葬送を、告まうさんとて全介は、香花院へまゐりしかば、留守に居る身の氣味わるさ、牆に障子のさら〳〵と、鳴つる事も候ひしと、いへば衆皆目を注し、われにもあらで行燈の、ほとりちかく集合にぞ、聞くもなか〳〵



傍痛き。あるじの母は忍びかねて、這出んとしたりしかば、四五六早くも見かへりて、嗟夫出給ふな、出給ふなと、いへば梟答こゝろを得ず、やよ敗鐵どの、出なとは何ものが、何處より出るやと、問つゝ共に武者ぶるひして、肩と肩とをすりあはし、思ひかねてや親平は、行燈の火を掻たつれば、四五六も小膝をよせ、されば出なといひつるは、寃鬼の事ぞかし、おのが心の惑ひにや、桶の内にてめり／＼と、物の響のしたるなり。もし寃鬼に出られなば、人はともあれ某は、いかなる辛きめをや見ん、跡吁嘮に弔べきに、出てからきめ見せ給ふなと、奥へしらすて謎に、いひくろむれば、今更に、あるじの母は出かねて、いよゝ心は安からず、とも知ざれば、討債児等は、項下寒くおはぬ歯を、噛しめて阿彌陀佛、彌陀佛々々々々々と、且く念じて息を吻き、現籍なきは人の命、長病とはいひ



ながら、きのふけふとはしらざりし、餘はさらこそと、笑顔かくしてうち點頭、病や發りし、危症にて、とりや詰しと信いはるゝ如く頃日は、薄紙を剥に等しく、やかに、はじめの勢ひ引かへて、問慰る顔の色も見なほせしに、聞ばきのふ忤介世間の、人のこゝろに鬼ぞなき。四五六ぬしが、この後は貸ぬとて、しぶり／＼

二三升、おかし給ひし米の中に、鼠の糞の澤山ありてや、全介親子はその飯を食ふと、忽地、食傷して、伸つ反つ苦みしが、辛じてすこし愈たり、されど彼飯粒が、老母の齲の虚に入て、とかくする程出がたし、薪の龜牙を養歯にして、なほ出さんとしたりしかば、齦忽地腫あがりて、疼痛こと甚し。口嗽んとて緣頰へ、やうやくに這ひ出れば、庇裏の椽落て、脊を撃れ苦と叫び、息絶なんとする程に、全介賺て啓菴老の、加減の湯藥を只一口、飲したれば直さに往生、察する所飯に中られ、薪の龜牙に齦を破られ、親父ぬしのほこりがに、こゝは吾儕の家なりとて、苛く未進をば責給へど、雨の漏るにはしらぬ貌して、庇裏を腐して、椽を落して、脊を撃し、藪井氏の湯藥にて、終にとゞめをさゝれたれば、件の四人はわが母の、讐敵なりとて全介が、恨の涙もろともに、くりかへしたる物語り、いと理とは思へども、彼もこれも定業ならんに、しうねく人を恨なと、さま〴〵に寛賺して、香花院へ走らしたり。金銭は原涌物、人の命には換がたし、人殺しの罪を得て、おの〳〵獄屋に繫れなば、何の身をもて全介が負債をば債給はん、あな苦々しと威されて、みなもろともに頭を搔き、世に食毒といふことはあれど、飯に中りしといふものを聞かず。薪の龜牙にて齦を腫らし、椽に脊を撃せしは、薪家と屋主の罪にはあらず。詮ずる所啓菴老の方匕ちがひにもやあらんと、いはせもあへず眼を瞬き、いな〳〵それは僻言なり、米に鼠の糞を交て、升目を偸むは米屋の罪、惡木を薪にして、齦を腫したるは薪屋の罪、椽の朽たるを造かへず、人に傷たるは、屋主の越度ともいふべし。しかるに彼臨終に、長く苦悩をさせずして、忽地息を引とらせしは、これわが匙に妙ある所、醫師にたえて愆なし、いなそれは僻言なり。いな疑ひは三人にあり。醫師は絶てしる事ならず。いなおん身こそと罵しく、角くむ蘆の水かけ論、果は打あひ摑あふ、四人が中へ四五六は、諸肩袒て推隔、これはそも何事ぞ、證據もなき事爭うて、同士撃をしたればとて、うけたる疑やはとけん。自餘人はとまれかくまれ、莊役どのにはいと似げなし。些は年に恥給へと、いひ懲されて額を搾、いはるれば一句もなし、とてもかくても全介に、疑れては面々の、身にふりかゝる禍なるに、いづれを是と定んや、徒なき同士撃われながら、愆をかさねたり。所詮おの〳〵和睦して、誠を盡さば全介も、いかで憎しと思ふべき、所存いかにと親父が、扇を笏にとりなほして、こゝろ得がほに説示せば、三人ひとしくうち點頭、莊役どのゝ宣ふごとく、ともかくもして全介を、寛ることこそ肝要ならめと、いうて今更すべもなし。かくまで損

するなりければ、是までも一罪をなき物にして、鰥寡をさらりと消し、主人が寺より歸らぬさきに、帰を担もて還りゆかば、傭工賃さぬ當座の合力、これにます善根あらじ、これではいかゞあるべきと、いへば四五六小膝を拍、いしくもはからひ給ふものかな、主人が心はしらねども、果が肩をたすかる、思ふにましたる善根なれ。されぱとて荘役どのに、早桶をば舁されし、挑灯引提て先に立、郷道をし給ひね、藥師どのは天窓役、寺より迎の所化代に、宗旨の經文こゝろ得給へと、いはれて頻に頭を撫、よしや天窓は聞くもあれ、醫者に佛經誦するは、茶坊主に引導をわたせといふより難題なり。況僕この年來、療治に暇絶てなし、さるによつて、大成論、十四經の假名附なりとも、一行も諳には得讀ず、この事のみはゆるし給へと、逡巡するを聞かばこそ、衆皆聞なく早桶に、ほとゝり近く提掲て引居、かくいふ作介樵介右衛門は、對にて亡者を担もてゆくに、おん身ひとり捨手ふらして、いたづらにやは遣るべき、經をしらずは念佛なりとも、題目なりとも唱給へ。とく／＼といそがれ、脱れがたくや思ひけん、懐なる手拭を、額へ當て汗を拭、これはいかなる呵責ぞや、經をばしらぬ身なりとも、題目念佛はあまりにをさなし、法華經の第三に、藥草喩品ありと聞けば、日毎に朓へかけて知る、藥種の目にて闇を合せん、えへん／＼と、こら咳き、机のうへなる鈴かいとつて、二つ三つ四つうも鳴らし、おんだィばく、とん、ぷくれうはんげイ、きいしんかんきやう、につけいしやく／＼、こうぼく、おイわう、だいわうせうまア、まアわう、かんざう、かんとうにんじい、唱る程に、四五六は佛器花筒机さへ、おのが敗器をかい集めて、桶の上に括り著、これは亡者のこの年來、いとをしめる物なれば、香花所へ進むする　ちはすなはち八丁目寺町にかくれなき、宮居山四五六寺、七堂伽藍具の靈場なり。とく／＼擔出し給へと、おのが枋をおしとほせば、いざと、作介樵介右衛門、諸肩入れて舁あげたる。手ゆゑの闇にあらねばや、門燈は焼ぬ袖本が、挑燈に引そうて、皆もろともに立出れば、あるじの母は、闇にも得果す、歸予の内より半行出、何れも事による、よしなやこれは何事ぞ、物借しかへさぬみ歟、思ふもんを敷許らば、後の祟をいかにせん。引留たる四五六如し、これ喃々と呼かへせど、啓菴が高やかに、かふしもつかう、たうきイせんきう、わうれんわうごん、ちよウれいたくしや、ちんひイばうふう、せんこつもつやく、たいそうわうばく、くわんたんたう、せうきやうにん、たんぼう〜じよう、外目もふらず、隣の棺はけなしれて、老の誠のこゝろすれど、まれ

身を招魂ひ、遠離ゆく、挑燈の、火の見ゆるまで手を抗て、なほ喃々と呼かへせば、母御よ魘れ給ふらん、全介日今歸りにき。やよ覺給へ〳〵と、搖起されてうち驚き、原來夢歟、とばかりに、われにもあらで茫然たり。

占夢南柯後記卷之一終

三七全伝第二編 占夢南柯後記巻之二

冬田の晩稲

苦しきは、やどれるきりの立こめて、寝るともしらずぬる玉の、夢はうつゝにまさりきと、形なき身をうち歎く、全介が母刀自は、やうやくに躬を起すを、子はかひ〴〵しく勦り扶て、母御よいかなる夢を見給ひし、いたく魘れ給ひたる、心持は何とおはすると、問慰ればうち點頭、貧しきうへに吾儕の病著、毎月にます負債を、勦解つゝいひも延たれど、末おぼつかなく思へばや、たま〳〵目睡む夢にだに、討債兒に債られしたり。おん身は出ていまだ歸らず、寺町の四五六ぬしが、例のわざをぎごころもて、吾儕はけふなん死たりとて、討債兒們を欺詐て、棺を舁もて出さするを、さはせぬものぞと、呼かへせど、胸苦しくて叫は得たゝず、なほ喃々と喚ぶ聲のみ、現にてありけるかな。是は正しくわが魂の、はや出たるにぞあらんずらん、世に在かひもなき人の、數に翌より入もせば、おん身が肩も休るべし。願ふは西方彌陀如來、迎とらせて給はせと、うらさみしくも霜に傷む、柞の落葉かき口說、夢物がたりを全介は、聞もあへずうち笑ひ、心よわきこと宣ふな、夢は祝ふ人による、さればにや、夢に泣ものは覺て後、人の慶應にあふことありと、世にはいひもて傳たり。これは正しくわが母の、病ひおこたり果給ふ、めでたき夢に侍るめり。よしや身に餘る負債ありとも、天道は人を殺さず、こゝろ誠に稱ひなば、神も守り佛も護りて、發跡時なからずやは、返さるゝ日に返さんと、思へば負債も苦にならず。只穩やかに保養して、花さく春にもあひ給へ、極樂淨土は往よくとも、見て來たるものなければ、いそぎて赴く旅ならずと、諫れば目を拭ひ、現も吾儕の愚癡なりし。世をば捨ねど、世に捨られ、貧苦に得堪ず死を急ぐ歟と、思はれんはこゝろにす。人なみならぬ孝行を、つくしてたまはするかひはなく、物ひとつ讓りも與へず、親の貧きを受つがして、生さき祝ふ朋伎に、はやく〳〵勤勞をさするよと、父母の慈悲を、意に拜みて、莞然と笑み、さのみ思ひな屈し給ひそ。翌の新水の價借んとて、友だち許ゆきたれば、翌の物こそちから及ばね、まづこれをもてゆきねとて、耳搦もせぬ錢五百に、舍利のやうなる米五升、悋氣もなくとらしたり。是だにあれば十日あまりは、腹鼓うつて過すべし。これ見給へといひかけて、袂の隅引ほどき、母のほとりへさし寄すれば、

それはこよなき僥倖なり。浪速の浦による潮の、からきは浮世の人ごころ、然るをかくまで信なる友は、抑何人にて侍るやらん、四五六どの歟、暮侶市歟と、問つゝ米に埋たる、五緡の銭引起し、下に布たる紙牌を、とみかうみつゝ眉を顰め、施行す青緡五百錢、白米五升、大和國箱井の家臣、赤根半之進、蟻松竹太郎と、寫せしはこゝろ得ず、丕介おん身はこの輩を、よく識りておはする歟と、問れてそれは、とばかりに、回答かねつゝわれからに、褒めどもるゝ法施米、氣色見せじとうちも騒がず、いな赤根とやらん蟻松とやらん、見もし聞もし侍らぬなり欲し破透より、漏る米を留よとて、友だちがとらしたる、反故なればそのぬしを、しるべきよしは候はずと、いひくろむれば頭を掉、いなくそれは僞ならん。襄に門邊を乞兒等が、ものがたりつゝゆくを聞しに、けふは千日墓に施行ありて、物影まき給ふ、施主は大和の箱井家にて、第一の執柄なりとぞ。今の世にはいと稀なる、大檀那におはすると、いひしを思ひあはすれば、これは施行の米なるべし。日開の煙たてかねて、乞食さするも住にかひなき、母が病著のゑなれば、見おとして叱るにあらねど、臥房の障子紙破れて、隔なきは親なり子なるに、なぞやうちあけて如此々々なりと、いひしらしては給はらぬ。首はかくせど尾を隠さず、施行の牌の一字一文得讀ぬ無筆に生育しは、貧しき故といひながら、本是親の失なり。幼稚ときはいといたう、病もちにおはせしかば、こゝろの隨に育んと、思うて教の道を缺き、筆もつすべもしらぬまでに、子をば捨ても親に似ず、自然とよろづに賢くて、孝行にして給はする、斯らんうへに手習し、物讀さする事もあらば、世にも人にも用ひられ、身を立るよすがとも、なるべきものを今更に、悔てかへらぬ年月を、僂るのみすべなしとかき口説母の憾を、丕介は身にしめて、いとゞ面目なかりけり。且して母親は、やうやくに臥房を出て、丕介が手を携つつ、上座に撒居れば、丕介ますく迷惑して、こは何事をし給ふにか、物體なしと忙しく、舊の處にをらんとするを、理なくとゞめて恭しく、膝におく手に涙を濺ぎ、襁褓の中より養ひとりて、氏も姓も告まうさず、吾儕を實の母なりと、思はせ侍るは世にも又、罪いと深きことにはあれど、いひがたき筋ある故に、けふまでも告ざりしが、施行の二字を讀も得解ず、施主を誰ともしらずして、親には匿す袖乞の、墓なき物を戴き捧て、耻る色なくもて來給ふ、御こゝろのするゑ痛しさに、言あらためてかくはいへ、ふかく怪み給ふべからず。吾儕は實の母にあらず、乳母晩稲と呼れしものなり。おん身が爺公は大和半國、伊賀半國を踏しめ給ふ、

積川殿の譜代の家隷、今市丞八郎といひし人なり。尙壯の年なりしかば、色と酒とに身をもち崩して、武士の行ひざまならず。しかるに當主伊賀介殿、吉稚丸たりしとき、潛て京師を遊覽し給ふ、供には今市、赤根、布施、この三人ぞ侍りける。吉稚弱少なるをもて、丞八ぬしは同氣求る、布施蝶九郎と相語て、主君を淫酒に儀を進らせ、剩主の要金を、擄横領したりしかば、事終に發覺て、布施もろともに禁獄せられ、背く命を助りて、大和を追放せられしと、聞えたるのみ徃方もしらず。程經てぞしる丞八ぬしは、恥をも身をも省ず、馬を牽、轎を舁き、浮雲介となりさがりて、よからぬ所行を事としつゝ、彼蝶九郎もろ共に、浪速わたりにながれ來て、故朋輩なる赤根生の、黄金を奪ひその妻を、奪ひ去らんとせし程に、忽地赤根に追迫られ、時は享祿元年、季冬六日の事なりし。河風寒き霜の夜の、氷の刃に斃れ、赤根が爲に世を去給ふ、當時の風聞は、この津にかくれなかりける。因果はめぐりあひ合橋の、下ゆく水はかへらねど、數ればけふははや、二十年あまり三かへりの、逮夜に當り給ふにこそ、これは是齋公のうへなれ、又母御前は丞八主と、結び定めし妻にはおはさず、華洛六條なる刀研、同樹といふ人のむすめ、名をば增穗とまうせしが、幼稚より歌舞音曲を、笠屋夏に習ひつゝ、その伎をよくし給へば、舞踏の異名を小夏と呼れ、師匠夏に伴れて、貴人の酒宴の席へ、まゐり給ふことありしに、いかなる過世の宿縁なりけん、吉稚丸の旅館にて、舞踏の袖ふりあはしたる、樂屋ぞめきの捨言葉もて、丞八どのに蕩され、露の情を結ぶ夢に、僅兩夕の假枕して、忽地に有身つ、いくその物をおもひ給へど、郎は更に主とも名告らず、浮命ごころの冷るにはやくて、その後は見もかへらず、又三勝に乘かへんとて、犯せる科にゆくへしれず。遺る條兒は次の年、憂を增穗の名にしおひし、木瓜の薄いとせめて、うみおとし給へるに、男兒なれど恥がましく、世にしらすべき事ならねど、同樹どのは繼父にて、いと腹きたなき性におはせば、人さけがしに寄り給ふを、母御前は面なしとて、心病しく乳も出ず、祖母さまのさま〳〵に、同樹どのにいひこしらへ、乳母して嬰兒を、養育せんと聞えしかば、この時當件は刀屋へ、おん身の乳母に參りにき。かくて母御前は、身を慙ることにおもひ侘りて、産後よりかく肥だち給はず、そのとしの秋八月、契りし月もなかぞらにて、冥土の旅に趣き給ふ。わろき折にはわろきことの、うちも續く物なりかし、僅に間一年ありて、おん身が三歲の秋の比、同樹どのは晴井家より、風流十寫の女とか銘おかれし、陰陽二口の大刀を、研て進せよと、仰下



されしことあらはれしかば、家職の面目こよなしとて、頓て大和へ赴きて、作の太刀を研給ふに、誤て風流士の刃をいたく毀たり。これは輕からざる科なれば、禁獄せらるべかりしに、この條の事を承たる、縫井の執權蟻松どの、聊由緣あるをもて、殿のおん憤をまうし寛めて、苛き沙汰に及れねば、同樹どのは恙なく華洛へ歸り給ひにけれど、このまゝに活業せば、後の祟もおそろしく、又幸にして祟なくとも、此度のことを世にしられなば、京家の武士に誰か亦、刀を研するものゝあるべき。この處のみ日の照ものかは、他處にて活業するにしかじと尋思して、奴婢には身の暇をとらし、職を止、宅を捨、遽しく華洛を去て、筑紫の方へと赴き給ふ。そのときおん身の祖母さまの、潸然と涙つゝ、さて吾儕に宣ふやう、汝がしるごとく只ひとり子の・壻穗を襲ひたる哀みの、袖だにいまだ乾かぬに、かゝる家の難あり、今この孫をいかにせん。什麼たえ京に在るだに、同樹どのゝいと媚く、罵り虐給ふものを、往方定めぬ旅の空へ、これをしも作はゞ、途にて餓死するにやあらん、隱すとすれど人にもしられし、これが父は、今市全八と呼れたる、縫井の家隷なりしとぞ。流浪の後は往方をしらねど、名告あひなば、親なり子なり、むごくはいかで物すべき。今憖にはなちがたさに、乳もなき祖母に伴れ、鬼々しき同樹どのに、看死に殺されんより、世の憐に人とならば、却孫が幸ひならん。さばれ今この火急には憑て遣す方もなし、情はかゝる折にこそ。汝が子とも見て故郷へ、將てゆきて養育てよ、いと罪ふかきことながら女兒が爲孫が爲に、同樹どのにはふかく隱して、年々竊にかきとりたる、銀六百匁あまりあり、行末の事賄ふに、物足るべくもあらねども、千世もと祝ふ孫が爲には、松の葉におく志寸と思うて、これもてゆきねと叮嚀に、憑み聞え給ひしかば、最上の川にあらねども、いなといはれぬ稻舟の、綱手を失ふ主の零落に、おのが



涙の水ましで、ふかき歎きに首鼠をわかねど、心腸あれしけ引つゝ、東も西もまだわかぬ、稚児を負ひ、故郷の、この浪速津へかへりし後は、絶て故主の在所をしらず、元來吾儕に夫あり、たま〳〵巣し一子は、襁褓の中に夭りて、世わたる才さへまはらねば、吾儕は京の刀屋へ、乳母に參りて三年の後、夫婦ひとつに住ねれど、又子を乗る幸もなし。主にはあれどゆくりなく、この稚兒を得たりしこそ、天より賜ふ子寶ならめと、思へばいとゞ可愛さの、八しほにまして養育しが、いく程もなく脾疳にて、骨と皮のみ痩衰へ、鍼灸藥餌に手を竭す、全三年の醫師三昧、剰良人は時疫にて、果なくも世を去りしかば、後六百匁の養育銀も、殘るは身空の吾儕と稚兒、さりとも人の手にはかけじと、糸繰縫りで細き世を、渡る寡婦が手ひとつにて、やうやくに人となせし、和子は反哺の孝心深く、かくまでに世をふる鐵の、金介と呼るゝこと、京よりの名にはあらず、同樹どのゝいと惜げに、頭なし子とて名をもつけず、作りし人の定かならねば、胆奴をば無銘の鈍刀丸と、呼することそよかめれと、常に喚み給ひしか、この浪速へ將て來てより、實父丞八どのゝ名の一字と、わが良人介四郎の、名頭をとりあはして、丞介と名づけたり。身の行ひはいふに足らねど、おん身の實父も穢井の退糧人、はじめ彼赤根蠟松と、肩を比し同僚なりしに、しらぬ事とはいひながら、その子と生れしかひもなく、親ならぬ親のために、仇兒の中に泣まどり、彼黨が施行を受るは、常言にいふ氏より育ち、これはおん身が失ならず賤き吾儕に孚れし、不幸を歎くにあまりあり。さはいへおん身が心ざまは、實父に逐たちまさりて末たのもしく見ゆるものから、けふの擧動似げなしと、見おとしてその素性を告、親の惡事を面り、恥かゝやかすと思ひ給ふな。今こそかくてあればあれ、今宵の中も知れぬ、身の病着に息絶なば、終におん身は實の親を、しるよしのなかるべし。けふや告ん、翌はしらせ

んと、胸には絶ねど折もなく、うちも過せし昔がたり、きこえ給ふらめ。苦しきものは恩愛の、絆にこそと禁めあへぬ、涙に胸のいた庇、しのぶに余る玉水や、もろしぐれする至介は、怒れる眼裏凄じく、肩揺おろす息を吻き、形なやけふまでも、實の親をしらずして、仇人の施物をうけもの、神ならぬ身こそ悔しけれ。われは野合の孤なりとも、父の行ひよからずとて、復讐の志なくば、鳥獣にも劣りなん。父の仇たる赤根が黨、この地へ寄も集合こと、ふたゝび得がたき天の賜、千日墓をいまだ出じ、者奴等が歸るを埋伏て、怨を復すは今宵にあり。さはとて蹴開く敗戸柵なる、故鐵買賣の錆刀、縦刃は鈍くとも、志鋭き健夫が、恨の寢刃は石をも砍る、やは脱さじと、腰に跨み、走り出んとする程に、晩稲は呆れ迷ひつゝ、追ざまに轉輾しが、攣て裳に携著、やよ和子よ、こゝろを鎮めて今刀自がいふことを聞給へ。おん身が爺公至八ぬしの、赤根に害れ給ひしは、原是脱れぬ天罰ならんに、仇人といふは鳴呼ならずや。加旃祖母さまは、續井家の老なりし、蟻松典膳殿の前妻と、從弟どちなりしとぞ。この由縁ある同樹ぬし、寶刀の刃を毀給ひしと、沙汰にも及ばずかへされしは蟻松殿の助によれり。典膳今は世に在さずとも、施物の刺に曾太郎と寫せしはその子なるべし。赤根蟻松は續井の執柄、兩臣縁しに縁しをかさねて、同胞に異ならずと、豫て聞たる事も侍り。おん身が祖父母に由縁あり、愛たる恩もあり松の、妻黨赤根を撃ときは、亡父の惡事をあらはすなり、善人を撃惡人となりて、本意をば遂るとも、人を殺せば又殺さるゝ、國の法度は脱れがたし、親とも名告らで身を躱せし、至八どのはとまれかくまれ、三歳の秋まで慈愛み、生育後の後までもと、分つ袂に涙を沃ぎて、華の洛をちりぢりに立去給ひし祖母さまの、世にありやいざしらぬ火の、筑紫の稍盡處までたづね索て、名告あはんとはおぼさずや。さがなきおのが口ゆゑに、實の親の枉死を告て、物をも思ひ思はする、これも過世の惡報歟、禍神の身に憑たる歟、かばかりの理りを思ひ謬和子にはあらず、よく聞わきてとゞまり給へ、こや喃々とかき口説、敲く席薦にたつ塵埃さへ、咽噎る涙ぞやるせなき。至介は張つめし、心の檀弓弛ねど、いる日を仰て歎息し、昔は主從今は親子、實の母よりいと高き、養育の恩を忘れ、名を求るとな思ひ給ひそ。さらぬだに、老ての後の病著を、右病るものはわが外に、又あるべうも思はねば、今の命の惜けれど、父の仇あるよしを聞て、共に天を戴かば、人にして人にあらず、彼蟻松はわが祖父母に、恩と緣しのあればとて、いかで赤根を放すべき、二十九ヶ年親みを、

かされし養母の大病に、かはらんと祈り
しも、今は仇なれ實父の爲に、この方寸
くに亂れたり。時の敎は何にまれ、等閑に
せぬ忿介が、いくたび思ひかへしても、
かへらぬ首途に冥途の先鋒、おん身が先
驅、われ先驅、志だに果したらば、冥途
の河には橋となり、死出の山には車となり、
先じての後に養育の、恩をばかへし進す
べし。これ今生の辭別、許し給へと回答
もあへず、又立あがるを引とむる、老の
拳のちからなく、榑つ懷つ畚綠嚢を、揮
拂ふ子はいと猛く、走り出んとすれば外
面より、忙しく來る人ありて、思はず額
を打合し、こは忿介歟、四五六歟、あな
痛わろしと呟きつゝ、摑すり撥ても出が
たき、入口狹き門柱、われから關を塞ら
れて、心頼に焦燥のみ、舊の處へ座を占
れば、四五六は此彼を、見かへりて眉根
をよせ、常にはあらぬ忿介が、顔の色の
いとわろさ、お懷は又何事ぞ、病懶たる
人の斯、端ちかくうち臥して、頭だに擡
ぬに、などて枕を進らせざる。ありなし
のこといひ募りて、親子口說をしたりけ
ん、見れば淚も讒もあるに、なでふ氣を
煩事やはあると、問慰れば忿介は、怪れ
じと額を撫、けふはいかなる風の吹てや、
十日あまり訪れざりし、四五六の來にけ
れど、未だにぬるくて得も飲せず、酒一
瓢買て來んと、いひつゝ立を推禁め、僕
思の物を脚虫とやら、和主が酒を嗜るゝ
を歟、無病で身ひとつ掙了でも、鬼に角
に攫られ、到頭却根閉し。田舍を競ら
ば思ひの外に、[illegible]を射ることもあらんか
と、俄頃に思ひたつよしありて、翌は大
和へ起行ば、辭別もせまほしく、又去年
の春より、夥計の敗錢等が、二百よせの
本錢講、和主は時節の大病にて、この春
より半年あまり、鐚錢一文かけはせねど、
この月は物主なり。未進は後に續せんと、
夥計見にこゝろを得さして、永樂錢三貫
[illegible]の主
に[illegible]これは和主が孝行を、
聘傳に憐み、かゝる[illegible]と思へ
ば、[illegible]集り果るをまたず、半晌も扶翼
申して、[illegible]、物はと
にかく時節をまたねば、[illegible]成就
せず、[illegible]功をなさず[illegible]、これ
は和主がよくしる所、いはでもの事いう
てゐて、可惜日を暮さんより、彼所もて
來てとらせんに、門戶鎖て俟給へ。誘い
て來んと裳折引て、足ばやに走去ぬ。當
下晩稻は頭を擡て、四五六が背に目送り、
忿介何とか聞給ひし、[illegible]功をなさず
となん。四五六ぬしは件の事を、しりて
如此いひつる歟、しらざる歟はしらねど
も、和子の爲に[illegible]、實中に傳る
かし。けふ[illegible]ねば[illegible]ぬ仇かは、彼等[illegible]
[illegible]
の菩提を弔ふ爲に、この[illegible]來たるもの
ならば、從者と[illegible]、[illegible]和



子の單身にて、志のみ猛くとも、鶏卵をもて石に擲、蟷螂の臂を揚て、轍を駐るに異ならず。よしとは思はぬ事ながら、一すぢにこゝろざすを、なかなかに禁めはせねど、月をかさね年を累ぬとも、伺ふ隙に乗得てこそ、眞に撃とはいふべけれ、吾儕が餘命はいく日もあらじ、短慮は功をなさずといふ、金言を胸に斂めて、且くおもひとゞまり給へ、やよ思ひとゞまり給へ」かくまで事をわけていふに、聴給はねばせんすべなし、憖に生殘されて、身の憂かずをまさんより、刃に伏てわれ死なん。南無阿彌陀佛と念しつゝ、金介が後方なる、刀をとつて五六寸、拔放さんとしたりしかば、金介叫喚と攙拌め、これは物に狂ひ給ふ歟、縱令、志を遂るとも、母を死なして何かはせん、まづ此刃を納めたまへ。しからば思ひとゞまり給ふか、それは又情なし、情なしとは和子にこそ。只この儘に殺してたべと、哭を窕たる孀母に、爭ひかねて金介は、天うち仰ぎ嘆息し、時はふたゝび得がたけれども、親の歎に思ひかへて、且く仇人に頸を續せん、こゝろ易く思ひ給へと、いひつゝ刃を奪ひとれば、晩稻は胸を撫おろし、それ聞て安心たり。命を捨て東め侍らば、事みな和子の爲ならねば、わがくなん人を恨み給ひそ。今鳴鐘ははや入相、混迷に街走り巡りて、物ほしくおはさんに、茶粥を炊ぎてたうべ給へ、と、いはれて見かへる鉢行の米に、いとゞ恨も增ら雖が、褓包引よして、眼を閉らし、拳を握り、君子は嗟來の食を受ず、孔子は盗泉の水を掬ずと、物識人は常にもいふを、何ごととも悉解ざりしに、今ここに思ひおはしたれ。よしや豫讓が衣は貫とも、仇人の施物を、やは受ん。日今に刃怨の刃尖、思ひしるやとひとりごち、刀を拔て赤根が名符を、二たび三たび刺つらぬき、かへす刀に壁錢の、緡いくすぢにか斷離たる、褓の間かいとつて、門辺へ撲地と投捨れば、庭に降布く初雪に、交る落葉に彷彿たり。これぞ小食時宜り、雀色時ふく風に、いささかこゝろ消し

て、群たち来つる乞児ども、こゝ獣〳〵と全介が、門口蒐り乱れ入り、悲田院計のおもゝちして、千日堂の施米をものせし、主人が面目をたり、與次が丁鷹か、張甲が靴、さもなき奴に物とられには、悲田知下の一分たゝず、とても是をば洗せぬ、乞食の見を引掴みきて、我屋人を酒買せんに、とく〳〵連歩と聞て、面に進みし二三人、全介が前後より、膊腿て引たつる、拳をやがて揮はなき、左右へ攫ミ投著れば、両斗を打て休むゝを、跳躍へ、さかへし〳〵と、競び兢る乞兒等を、右へ見左に當り、或は踏倒し流にしれども、大勢なれば物ともせず、晩稻に見るも逆らひ、人を喰ふ家は退し、数によしなきとの身は、畏さへ瘤て立も得ず、全介は尚〳〵権にや撃れんと、思へば進退自在ならず、敵たる害籠の縁に躓き、間に倒れゝを得たりや顧みなし兒等は、各の山邊に生出る早薇よりなほ緊き、拳を挙て撃んとす、常處に四五六は、三貫の錢引提て、喘々走り来つ、この形迹に叱咜とばかり、倒る乞児をかなはしより、隻手庵に引つけて、ばらりすんと投退れば、晩稲はさらたり全介も、怒地これにちからを得て、見踏ならし立あがれば、四五六に引提たる、長縄の錢とりなほして、全介が肩に被、このみな早りそ乞児に懸棒、一旦の怒に乗して、もし這奴等をうち殺さば、なか〳〵に事むづかしく、恥のうへなる恥ならずや。短慮は功をなしがたし、これその錢を路費にして、旦この地を立退、身をも庇をも隠せかし、こゝろ得たりやと友だちの、信を見する尚縦に、猛きこゝろを繋れし、全介は今更に、感涙坐に禁あへず、なほ躊躇にぞ四五六は、晩稲をやをら抱き起して、そのまゝ背に負すれば、全介今はせんすべなく、走り去らんとしたりしが、又四五六を見かへりて、數回歎息



し、竹馬の友にもあらざるに、おもふにはまず御逢が親切、こゝろに着ること多かり 命あらば他日に、この恩恵をばかへすべし。怒われを救んとて、連累にな

せられ給ひそ。出てゆきての跡のこと、そはいはるゝまでもなし。吾儕にまかして疾ゆきねと、いそがす程に乞兒等は、みなやうやくに身を起し、倭偉ながら全介を、組留んとする處を、四五六やがてかけ隔、向脇拂て二三人、地爐の裏へほり押れば、皆爸轉びて發とたつ、灰に[illegible]をかすませて、出てゆく子に負れたる、母もしば〳〵四五六を、見かへりてふし拜む、目には涙のみつの里、住捨る家は措からで、名殘は更にをし照るや、難波の浦のよしあしに、たえぬ歎きの浪風は、たつも物憂首途なるべし。

遠山の夕霞

却說敗鐵全介は、みづから醸せし殃危も、塞翁がこゝちして、結句この地を立去らば、仇を撃よすがともなりなんものをと思ひしかば、四五六がいふにまかして、家を捐母を負ひ、その夜浪速を逐電し、大和路投てゆく程に、添上郡今市の郷は、實父全八が苗字の地にして、筒井の城下へ遠からず。この處に足を駐めば、怨を窺ふに便宜ならんと、肚の裏にて深念しつ、驀て今市の郷にいゆきて、旅宿をもとめ、とかくしてさゝやかなる、藏屋を賭得て、親子わづかに膝を容れ、彼永樂錢三貫文を本錢として生業するに、この處にはさるえせ商人も稀なる故にや、浪速には立まさりて、世わたる便多かり。かゝりし程に年も暮れ、春のいとなみに懲られてや、晩稲が長き病著もおのづからおこたりて、臥房かき掃ふまでになりにければ、全介はふかく歡こび、活業に假托つゝ、日に〳〵平城へ交加て、窃に赤根半之進を窺ふといへども、晩稲にはふかく隱して、氣色にもこれをしらせず。さはれ彼老媼は、その性怜悧ものなれば、大和へ來つるはじめより、全介がこゝろを猜して、しのび〳〵にうち歎けど、如此見定たる事のなければ、禁るよしもあらざりけり。時に天文二十年、春二月の頃かとよ、平城なりける筒井の館には、大和介順勝ぬし、一日赤根半之進蟻松曾太郎等を召つどへて、士庶の賞罰を定らる、事の序に宣ふやう、汝達豫てしれるごとく、近日米谷山に、夜な〳〵妖光あり。その氣地中より起りて、中天に立のぼり、山鳴り谷震て、草木これが爲に枯凋るよし、管林等が訴訟、頻にこゝろにかゝるものから、われ昨夕、みづから城樓に登りて、遥に米谷の方を瞻望れば、現も一道の赤氣天に冲て、煙の如く霞に似たり。しかれば是管林等が告ところ、妄誕にあらず。倩物を案ずるに、これは此、往時享祿二年の春先考昭順彼山なる、木精の祟を鎭んとて、楠の根かたに瘞給ひし、わが家の寶劍たる、風流士の爲ところにあらずや。和漢の史傳に考れば、千早振神の代に、山田大蛇が尾頭より出たる劍

は、常に雲を起せしかば、天叢雲と名づけられしを、人の代となりて、日本武尊、草薙と呼びかへて、樹枝へかけ給ひたるに、劔より火を云出て、忽地この樹を燒しかば、熱田の神と祀れたり。又異朝には昔時、斗牛の間に忽然と雲氣の立升ること有けり。時の大臣張華といふもの、ふかくこれを怪みつゝ、博士雷煥といふものに問しかば、雷煥答て、これは寶劔の氣にて侍り。もし最上の劔、久しく土中に埋まることあるときは、その氣の天に冲ことあり、疑ひ給ふことかはといひしかば、張華有理とはじめて曉りて、即て雷煥を豐城の令として、件の處へ遣せしに、雷煥獄舍の基を掘て、一の石函を得たり、潜に開きてこれを見るに、內に二口の寶劔あり。銘を刻みて龍泉といひ太阿と命く、この夕、斗牛の間に立たりし、紫氣、復見えず。かくて雷煥は、南昌西山の土をして、即これを拭するに、上もなき寶劔なれば、京師へ使を遣して、その一口を張華に與へ、一口をば潜にとどめて、おのれこれを帶たりとぞ。龍泉太阿の二口は、干將莫邪の劔これなり。文の道には疎からぬ半之進が爲に說は、釋迦の御まへの說經に似たれど、かゝる和漢の例をおもふに、いともかしこき事ながら、先考閑田師の言葉を信して、家寶の大刀をあへなくも、深山に瘞給ひしより、今に至て二十餘年、遂に人間に歸ることとなし。されば彼大刀に靈ありて、主を慕ひ光を顯し、われをして曉らしむ兆をしも疑はゞ、却その祟あらん。半之進は翌つとめて、米谷山へ赴き、彼木精塚を掘發し、風流士の大刀をとり來れ、しからば件の妖火も、おのづから滅つべし。努々辭ることなかれと、大伯叔、宣ふにぞ赤根親子面をあはし、且く回答もせざりしが、伴太郎は半之進に會釋して、小膝をすゝめ、[illegible]、[illegible]の宣はす[illegible]、告し奉ることは候はねど、當初先君、風流士の寶刀を瘞めて、米谷山なる木精の祟を、壓給ひたるよしは、君弱少のおんときにおはしませしかば、わすれ給ふこともあらんすらん。いと據ある申し條には候へども、むかし永正のはじめ、先君崇[illegible]んとて、良材を求めさし、彼米谷なる大楠樹を、伐とらし給ひしかば、その事を聞り行ひたる、赤根親子がうへはさらなり、君のうへにも祟ありて、御父子の間快らず、既に事あらんとせし程に、これなる赤根半之進、及厚倉二郎太夫が忠義によつて、やうやく無異にをさまり、後に祟なし。さるによつて、先君忽地、猛き御こゝろを和らげ、彼閑田師がまうすに從ひ、まづ二口の寶刀、風流士の名を拭はんとて、都六條なる刀鍛、同國といふものを召よし給ひしに、同樹生て砥石にうち中、那の大刀たる風流士の刃尖を些毀たり。これ輕ざる越度なれ

ど、格別の恩免を加られ、同樹をそがまま追かへされしに、彼ものいたく羞てや、京にも足を駐得ず、妻子を將て逐電せしよし、その頃風聞候ひき。豫ては風流士風流女を、二口ながら瘞んと、定められたる事にはあれど、先君いと惜み給ふのあまり風流女の大刀を留め、この代としてなほ外に、瘞むべきものやあると、寶庫を索さし給へど、それにましたるものもなし。思ひ難て陰陽師に、如此々々のよしを告、兩口の大刀を殘りなく、瘞んことはこゝろにす。陽のかたは刀尖も毀れたれば、この一口を瘞んと思ふなり、吉凶いかにと問せ給ふに、彼陰陽師答てまうさく、陽の大刀の刃の斷たるも、物の怪の所爲で候なる。しかるになほ各にして、陰の大刀を留め給はゞ、壓勝の術もかひなく候はん歟、大刀は眼前ありて、後の祟はいまだ來らず、故に狐疑し給ふにや。用ひられねば、是非に及ばず、枉て一刀を留めんとならば、塚のほとりに二基の禿倉を建立し、嚴島の辨財天と、志貴の毘沙門を勸請し給へ。しからば後の殃厄を、他方にうつすよすがとなりなん。則これ辨財天は、風流女の大刀に代、毘沙門天は風流士の、刃の毀てるを補ふのみ。只恐らくは、愛惜のやるかたなさに、陰の大刀を留給へば、その餘波なる子に祟て、御子孫の患をなすべし、努愼給へかしと、直言憚る色もなく、指がごとくに勘たり。抑件の陰陽師は、博士の聞えおはしましたる、南朝の大臣、北畠殿の庶流にして、村上親實と呼れ、數世清貧を樂て、南都に賣卜し、僅に口を餬ふといへども、卜筮說相に妙なる事、我朝にては泰親晴明、漢土にては京房郭璞なんどいふとも、これに加ぺうは思はさりしが、惜むべし親實は、身まかりてはや、十年にあまり候ひなん。さはれ先君、件の勘文を半は信じ半は疑ひ、遂に風流女の大刀を留て、風流士の大刀をのみ、米谷に瘞さし、木精塚の東西に、二基の禿倉を建立して、嚴島の辨財天女と、志貴の毘沙門天を勸請し給ひけり。この故にや、君臣和順しつゝ、赤根は忠孝の名さへ揚て、更にその家を起し、館には禧のみうちつゞきて、槐姫は思ひもかけず、大内殿へ入輿し給ふころ、義隆豫て當家の重寶、風流士、風流女の兩刀あるよしを聞召及ばれ、婚緣の叙をもて、只顧懇望し給へば、先君これを推辭がたく、すなはち風流女の寶刀をば、女壻引出として大内殿へ、贈り給はし候ひき。しかるに近曾故ありて、件の寶刀をば執權陶晴賢が、主君大内殿にまうし賜りて、秘藏すと傳へ聞けり。こゝにかさねて親實がいひつることを、此彼と思ひあはし候へば、先君惜みて留給ひし、風流女の一刀も、遂に當家に留らず、遠く大内家の有となること、所以あることにて候べし。彼嚴

島の辨天は、大内殿の所領にあり。加屬彼實刀の刃を毀たる刀屋同樹は、僅に都を逐電して、今は周防山口のほとりに在し讀、告たるもの、候ひし。これも又故あるげなり。石崎など思ひあはする事のみ候に、物の怪異にも、おそれ給はず、先住の御志にも悖り給ひて、件の木精塚を發し、實刀をとりよし給はんこと、日來の賢き御こゝろに、齟齬し給ひて物體なし。國家將に興らんとするときは、必禎祥あり、國家將に亡んとするときは必妖孽あり、蓍龜に見れ四體に動く、齊王三の善言をもて、熒惑退く事三度といへり。發塚の事は、努思ひとゞまり給ひて、米谷の雨社へ幣帛を進らし、又興願寺の大衆を延請して、禍胎を禳し給はんこと、願しく候と、言葉を竭し道理を推、面を犯して諫けり。諸侯に爭臣五人あれば、亡道の君といへども、その國を失はずと、聖語もこゝに思ひあはする、蜂松が誠忠の親には遙たちまさり、高き操は顯れたり。顯勝元來大度にして、諫を容るゝこと蒼海の如く、是非を判斷し給ふこと、流を決する如くなりしが、この時先代の餘殃、ふたたび萌べき因果にやありけん、忽地に氣色變り、童扈從に參したる、刀を取て反うちかへし、やをれ曾太郎、汝が賢氣なる、婦女子をば說べけれど、男だましひもたらんもの、誰かはそれに與すべき。夫妖は德に勝ず、草木元來非情なり。彼米谷の老楠は、既に伐られて盤根は朽たり。いかで祟をなすことあらん。よしや鬼魅罔兩といふものありて、彼木に托て奇怪をなすとも、われは是領主たり。且武を以國を治む、この武德にはえも勝せじ。されば劍は身を衛り、人を征し威德を倍す、神器の一種なるに、陰陽師に說惑され、家寶の大刀を女々しくも、土中に埋給ひしは、恐あることながら、これ全く先考の、おん悞とこそ思ふなれ。故いかにとなれば、漫に大刀を埋んと、思ひ給ひし怠より、風流士の刃は毀たり。されば彼同樹とやらんは、能あるものと聞たるに、悞て刃を毀せし事、寶刀の咎にあらで何ぞや。加屬年を經て、大内が所望に任し、風流女の大刀をさへ、彼處へ贈り給ひしかば、父の武德忽地衰へ、その次の年卒給ひつ。亦是件の大刀どもを、失ひ給ひし故にあらずや。かくて又われにも、祚のよからねば、玉枕を娶りてより、夥の年を經にけれど、まだ男子といふものを得ず。剰昨夜臺に登りて、米谷山に在升る、妖氣を眺望せしときに、腰に帶たる小刀の、忽然と脫落て、左の股を劈たり。しかるになほ怪しきは、その疵はさゝやかなれども、刀尖に著たる鮮血を、いくたびか拭去るに、絕て拭ひもとれずして、燒著たるに異ならず。これも久、彼風流士をとり復さずはわが武德ますま

す衰へ、戦場に身を殺す、前途にやあらんずらん。かくてもなほ諫る歟、狗死すべくば諫めもせよ、いかにやいかにと軟圍て、刀尖をつき著つゝ、今一言かへしまうさば、曾太郎は忽地に比干が胸をも裂るべく、伍子胥が鴟夷にも盛らるべく、いとも危く見えたるに、蟻松は些も騒がず、肩衣の腋引のばし、袴の稜を押ひろめて、刃の下に身を摒よし、なほ諫んとしたりしかば、赤根は吐嗟と、推隔て、その身を盾に順勝の、握りもち給ひたる、刀の鍔際楚と取り、凝著たりし刀尖の、鮮血を佶とうち視つゝ、左手を衝て頭を低、君且く御こゝろを鎮給ひて、まうす所を聞召れよ。曾太郎が諫言、理あるに似たれども、君を凌ぎ上を犯すは、是眞の忠臣ならず。半之進におきては、左も右も、君命に従ひ奉りて、米谷山へ馳向ひ、木精塚をうちひらきて、寳刀を復し進らせなん。こゝに一箇の願ひあり。いかに許させ給ふべきやといへば、順勝面を和らげ、汝も曾太郎もろ共に、いたく諫もしつべき歟と思ひたるに、さはなくて、予を敬する言語應答、心底見えて執著せり。さて願はしきは何事ぞと仰れば、頭を擧、世に禍を醸ふとき、形代を用てすることあり。これ天兄の餘波にして、重九上巳の流し雛、又雷鳴月の河社、今



ゝ女子の戯れならず。思按をめぐらし候に、今昔の威徳もて、米谷の塚を發し、寶刀をとり復し給はんに、なでふことの候べき。しかはあれど、この御佩刀を鮮血に汚され、その血の拭ひとれざるは、これ又心に快からず。よりてこのおん佩刀を、半之進に給はらば、則風流士の形代として、發る塚にこれを理め、この刀をもて彼寶刀に、換れば物の障碍もなく、禍を攘、福を殖るよすがとなりもやせん。さはおぼさずやとあらそはぬ、風の柳のふか縁、いとも愛たき君臣に、とき賜されて順勝は、握らせたる刀を放ち、微妙もまうしたり。しからばその刀を、乞にまかして汝にとらせん、ともかくも計ふべし。米谷へは程遠きに、長僉議にかゝづらひて、けふははや日も闌たり。翌は早旦て彼處に赴き、麓の樵夫、管林等を召集合、塚を發き大刀を取ること、第三日を過すべからず。こゝろ得たりや



と言へば、半之進莞爾とうち笑み、青海原の底ならば、探り獲がたきこともありなん。壽永の亂れに失たりし、日の御座の御劍はしらず、埋たる寶刀を取るは、嚢の物を取るより易し。かくまでに御こころを労し給ふ事かはと、應まうして賜りし、刀を鞘に納れば、順勝歡喜面にあらはれ、さらば吉左右待べきなり。退り

て休ひ候へとて、身の暇さへ給はりて、驚て褥を立給へば、曾太郎は遑しく、主の袂を引留るを、無禮なせそと振拂ひ、見かへりもせず後堂へ、席を蹴立て入り給へば、後方に侍りし小扈從の男童等兩三人いと苦々しげに身を起し、兩執權に默禮して、おの〳〵主に引そうたり。曾太郎は今さらに、諫んよしも憖に、赤根がこゝろ汲かねて、彼みちならぬみちのくの、ちかの鹽竈我からに、胸に煙の物思ひ、いふこともなくさし對ひ、しばしば嘆息したりしかば、半之進は襟かき繕ひ、いざ給へ蟻松ぬし、退出なんといひかけて、立あがらんとするを推禁め、且く候へ赤根生、日來の行ひざまに似げなく、諂りて君の非を倍、御邊の底意量りがたし。抑米谷山の木精の祟は、一朝一夕の事ならんや。事の濫觴は御邊の親たる半六郎、竊に一己の榮利を謀り、彼楠を伐りしより、千日葉の夢と覺し、その祟にはわが家さへ、連累せられて養母を喪ひ、父典膳が遁世も、みなこれゆゑと思ふにも、一とたびはおそれ一とたびは、うらめど更に及びがたき、昔を今にくり返す、彼處の妖氣は誰うへならんと、安きこゝろもなきものを、棟梁の臣として、大祿を食ながら、御邊は一言も諫まうさず、塚を發き寶刀を取る、おん使をうけ給はり、嬉し貌なるはこゝろ得ず。君とまうし御邊といひ、心神忽地入かはつて、物を推道理に背く、これも木精の祟にて、餘怨主從が皮膚にわけ入り、かくまでに狂はする歟、われにはまして才高く、忠孝の名を揚たる、御邊なればさはあらじ。君にとりては同僚なり、わが私には内兄弟なり、潜に思ふ旨ありとも、われには匿るべうもあらず、實に米谷へ赴きて、塚を發き寶刀を取て、歸り參らんと思ひ給ふ歟、いかに〳〵と小膝をすゝめ、睨つめたる忠臣の、歯に衣着せぬ言の葉は、いとゞ涼しく聞ゆれど、よくもえきかず冷笑ひ、物々しや蟻松生、米谷に氣のたつこと、木精の祟歟、寶刀の祟歟、神ならずはしるよしなからん。しかれば楚と思ひ定ぬ、祟をおそれて眼前、君の命を背くときは、忽地に罪かうむり、この身は市に棄られて、妻子は路頭に飢つべし。父半六は米谷の、楠を伐て家を興せば、わが爲にも彼脅根を搖錢樹と思ふのみ、なでふその祟を懼ん。只恐るべきは主命を、否する祟に候はずや。米谷へのおん使仔細なしと回答もあへず、ふたゝび立を立しも果ず、刀の瑠衝かけて、袴の裾を撲地と押留、漢の王莽は主にくだり、齊の田氏は比周して、是彼國家を奪ふに至る。忠臣と思ひの外、奸佞梟雄の半之進ともしらずしてこの年來、はかられたることそ朽をしけれ。君の爲には塔をも殺す、通家の好は私事、この佞人を撃とつて、禍の根を斷ん。そこな退そと敦閉あ

らく、身をひらかして扱かくる、刃には
やく頭を回し、扇を以て推とゞめ、早り
給ふないふことあり。この期に及びて何
をか聞ん。脱れぬ所ぞ刃をうけよと、右
手の臂を延まして、勢ひ猛く又扱かくる、
鐺を摑で捻かへす、身を突著て礑と坐し、
手對ひもせず、命も惜ず、とにもかくに
も、君の爲に捨べき命をいたづらに、御
遑しわれと同士擊せば、其を忠臣といふ
べきや。日來は物に堪忍ぶ温和の稱を得
し蟻松ぬし、一旦の憤に、事の虚實を
問も定めず、それがしを擊んとせらるゝ、
これも木精の祟にこそ。まづその刃を納
め給へと、騷ず怯ぬ大丈夫、取たる鐺を
かいやり放せば、曾太郎はなほ心放さず、
刀を衝たて膝くみなほし、しかいふは衷
實に似たり。君の爲には家を忘れ、命も
總て惜からずと、思はゞなどて一言の諫
言はまうさゞりし。日來は物に忍ぶとも、
今これをしも忍ぶべくは、何事をか忍ざ

らん。主家の安危、この擧にあり。もし
いふ所理あらば、僕に命を助くべしと、
いはせもあへず、半之進は扇をあげて、
聲いと高しと推禁め、心おかるゝ後方な
る、紙門をやをら引立、やよ蟻松ぬし、
事成就するまでは、妻にも子にもしらせ
じと、思ひ定めて候へど、御邊の恨やる
かたなく、この方寸をうちあけん。是を
末期の一句とも、聞とりて給ひね、とい
へば曾太郎眉根をよせ、如此聞ては心も
となし。そのよしいかにと思はずも、額
に額をさし寄すれば、半之進聲をひそま
し、悔てかへらぬ事ながら、米谷山なる
楠を、伐とりしより祿を得たりし、父が
幸ひは幸ひならず、親子沈淪浮浪して、
三勝さへに飢渇に苦しみ、當主も一旦佞
人等に、讒されて沈果て給ひ、御父子の
間快からず、剰父と姉の枉死も物の祟
なるに、われのみ不測に存命て、長臣の
列に加られ、半白の齢に至るも、君と父

との賜なれば、こゝのつの世はかゆると
も、爭不忠を存ずべき。しかるにその比、
村上判官が勘文の旨に任せられ、先君遂
に風流士の寶刀をもつて、木精塚に築籠
給ひしかば、彼祟鎭りて、君臣無異を
得たれども、寶刀二口を埋んこと、いと
惜ませ給ふ故に、枉て風流女の大刀を留
め、これをば後に大内家へ、壻引出に進ら
し給ひつ、是より先に親寶が潛に人にい
へることあり。織井殿の慈に、陰陽の大
刀をわかちて、その一刀を埋給へば、物
の怪全く鎭らず、男女の間に不幸あるべ
し。加旃殘し留られたる、風流女の大
刀も又、その主に禍して子孫斷絕する
に至らん、虎を畫て猫に類す、織井殿の
吝嗇は、祟を後にしることありなん。あな
苦々しと呟きしと、彼親寶身まかりて、
程經てわれに告たる人あり。此彼思ひあ
はするに、彼風流女は大内殿、長臣晴賢へ
給はりて、今は陶が家にあり。彼寶刀を

得つる年より、晴賢が驕吝日來にまして、威勢主君を凌に至る、國の滅亡旦夕におらん。未然を察せし親賢は、現下窮通の理ならずや。思へば是すら物憂に、近曾米谷に妖氣立升り、其を樹んとして、わが君はおもはずも、薄穢を負ひ給ひ、その血刀尖に凝著たる、ことみなよからぬ祥なれば、誰かはこれを阽ざらん。諫るよしはありながら、日來は言を容給ふ、わが君俄頃に暴々しく、宿老の臣たる御邊を、一刀に斬も棄つべき、御氣色を察せし故に、命をしむとにはあらねども、君臣不順も木精の祟と、ふかくおそれて諫まうさず、血に染たるおん佩刀を、まうし給はりて候ひしは、君にあるべき禍を、半之進が身に負ひて、米谷山なる木精塚を枕にし、このおん佩刀をもて腹かき切らば、はじめ彼楠を、伐たる父が非を贖ひ、これよりしてわが君も、おもひかへさせ給はんには、木精の餘怨消滅し、主家忽地泰山のやすきにこそ至るべけれ。かくは思ひ定めながら、はやくも洩れてわが君の、知召るゝ事もやと、一點ばかりも思ひ隔ぬ、御邊にさへうちあけず、しばしは物を思はしたり。このことうけ給はりしはじめより、凡此度の天變地妖を、只某が一身に、負し給へと只願に、年來信じ奉る、和瀬の里なる八幡宮又米谷に鵜鳴ありし、辨財天女、毘沙門天を、祈る外他事なかりしと、ひそめき告る忠臣の、涙は胸に溢だり、曾太郎は今さらに、いひつることの耻はしく、かくあるべきことながら、人の邪正に常なければ、思ひ足らずも疑うて、佞者人よ不正人よと、罵りたるが面目なし、君の爲にはわれも又、惜む命にあらざるを、才淺ければこゝろにず、御邊に先を蹴れたり、天その孤忠を憐て、國の難を禳はし給はゞ、彼周公の金縢の書、ふたゝび御邊が爲に披ん。とはいへ今古有がたき、績井の家の柱石を、米谷山の楠と、共に折かば翌よりは、誰とともにか君を佐ん、無用の櫟財は匠石も、見かへらずしことはに、[illegible]しとは曾太郎が、うへにぞ人もいふべけれ。思ひおくことあらんには、心くまなくしらし給へ、うけ給はらんと慰つ、勸解れば赤根はうち點頭、忠臣は終に臨て、言必しも私門に及ばず。わが妻孥は、御邊の姉と妹なり、わが子どもらは、御邊の外任なり、何をかおもひ遺すべきよしなき喞言人や聞く、誘給へとていそがせば、曾太郎しば〳〵嗟嘆しつ、けふをかぎりと思ふにぞ、ゆく〳〵を別れの苔石滴、涙とともに留かねて、こゝろに送り送る、屠所の歩みの未は過て、漏刻響く申の時、枝に離るゝ梅の間より、ひらく障子のほそどのを、うち繞りつゝ後になり、先に立てぞ退出ける、正に是、かへらじとかねておもへばあづさ弓なきかずにいる名をぞとゞむると、詠るこゝろなるべ

し。かゝりし程に、赤根半之進は、曾太郎に別れつゝ、宿所へ歸り、こゝに三勝半七等に對ひ、城中の仰を示したれば、翌は未明に起行て、米谷山に赴くよしを聞えしらすれば、三勝は驚き、良人の顔をうち守り、あは／＼しき婦女子の、愚癡なるかもしらず侍れど、何とやらん顔色のあしく見えさせ給ふこそ、心もとなく侍るなれ。彼米谷の物の怪は、阿爺の時に祟をなせし、縁故は子どもらさへ、豫より傳聞て、忌憚れ侍るものを、人もこそ多かるに、このおん使を承給ふは、願しきことに侍らず。などてや推辭給はざると、眉根うち顰つゝ諫れば、半七も又父を諫て、母公の宣ふ所、理とこそおぼえ候へ、勝母の里に車をかへし、朝歌の市に杖を曳ず、名の忌をしますら侍子は思り。況わが家に祟をなせし、木精妖怪をれこと、物體なく候はずやといはせもあへず半之進は、呵々と打笑ひ、武士の家に仕ふるも、百萬騎の敵陣へも、單入らんはこれ常なり、侍の爲には水火をも踏むべし。かばかりのことを推辭なしあらんや。怪を見て怪まざれば、その怪散ずといへり。母はともあれかくもあれ、半七は父の讐を、踏べき身をもていと女々し、必人にな聞れそと、眠もあへねば神等のこ、親の底意をしるよしも、熟に着るむ半七は、母親と目を注しつゝ、默然たりかくて已ことにあらねば、三勝はまづ管松平作許人を走らして、起行於米谷の事を告、半七もろ共に、私宰炊炎なんど、そのほど／＼に分付して、主人が行路無の准備なとすなる程に、園花半作曾太郎等、こゝに詣來て後、別をなせり。そが中に曾太郎のみ、半之進の死を究し、孤忠の趣きをしりてければ、心の中淘として樂ねど、かくまで思ひ定めたるを、われから妻子にしらして、事を爽せしと思ひしかば、氣色にもあらはさず、半之進はなか／＼に、今宵かぎりの名殘と思へば、曾太郎、半作、園花等を留めて、通宵酒もち遊び、鴛鴦障を告る比に、かひがひしく打扮つゝ、備用金備の陣羽織に、勝村紋子の野袴を穿、雲紫鍛治が打たりける、二尺五寸の駿刀に照明のおん佩刀を夾副、家にひさしく仕たる、私宰丹三等、八九人の奴隷を將て、槍を持し、鎗櫃を擔し、椅子を舁しつゝ立出れば、三勝園花いへばさらなり、二人の子ども蛾松も、まつにかひなき人を送りて、これやこの世の別れとは、しるもしらぬも立つくし濡らすはおなじ袂なり。

占夢南柯後記卷之二終

釋尊御一代記圖會　全部六冊

浪華　山田意齋安榮考
江戸　前北齋老人圖画

釋迦如来の御父淨飯大王の御即位を發端として憍曇彌摩耶両夫人の御懐胎如来摩耶夫人の胎内に生を託したまふ事憍曇彌夫人摩耶を嫉て胎内乃王子の出生を妨んと道師に呪咀せしむる條如来母后の胎内に說法し十悪と說たまふ事又淨飯王藍毘尼園に花の宴を催したまふに悉達太子誕生の奇瑞悉達太子御幼稚より菩提心を發したまふ謂而提婆遺恨の始悉達太子宮中を出て檀特雪山に難行したまひ正覚成道して出山し衆生を濟度しの事又迦葉舎利弗目連及諸羅漢佛弟と成和解耶愉陀羅女の貞心提婆が十悪須達月蓋両長者の信心流離王の暴悪釋尊御入滅五十神力涅槃像の次第まで都て如来御一代の事を記し圖を加ふる雖有讀本也

三七全傳第二編 南柯夢後記巻之三

雨後の月魄

叢蘭しげらんとすれば、秋風これを破り、忠臣諫んとすれば、庸主これを拒む。さはれ忠義の狗となるとも、亂離の人となることなかれ。人生およそ五十年、三寸呼吸絶れば萬事休す。をしみ惜む、身さへ骨さへ朽はてゝ、殘るは後の名のみないすや。卻說赤根半之進は城を出、市をはなれ、米谷を投て赴くに、豫て宿願の旨あれば、道すがら神社佛閣を見る毎に、必其處へ立よりて、祈念したりしかば、左に右道も果敢どらず、昨の雨に逍さへいたくぬかりければ、奴隷が肩を助んとて、轎子はありながら、歩行よりぞゆく遲々と。春の夕ぐれ霞こめし、騎夫が籬邊の紅梅も、日景に映じて色をまし、越路へいそぐ天津雁も、歸るといへどわれは只、ゆきて歸らぬ旅にしあれど、君を思へば急るゝ。その日申の下刻には、米谷越の脇路なる、櫟木のこなたに、長き松原に來にけり。潜處に、年の齡六十あまりなる老女の、いと貧きものとおぼしくて、栲の衣の綴り刺たる、針目太なるを、只一つ着て、木の皮の如くに、よれたる帶を前に結び、髻結みじかなる白髮かき亂しつゝ、假頭に病ひ發りぬと見えて、手さへ足さへ泥に塗るゝをも厭はす、通次にうち臥たり。半之進は、ゆきかひさまにこれを見てふかく憐み、轎て私卒丹三に、この老女を扶起さし、みづからそのほとりに立よりて、名を問宿所を尋れば、老女は惱める目を開き、赤根主從を、と見かう見て、苦しげなる息を吻き、これは今市の里にて、いとかすけき活業をするものゝ母に侍り。しかるに去年は長き病着に問惱され、こゝち死ぬべう思ひ侍りたるに、過世の所業の、また滅せずや有けん、この春は大かたにおこたりて侍りしに、今朝しもわが子が、友だちと物にあらがひして、その人に拳倒されたり。わかきものゝならひにて、いたく恨み憤り、自をも忘れ親をもおもはで、矢庭に仇を打かへさんとて、長刀引さげて走去るを、引留んとて追かけ侍りしに、老の足なればかひなくて、彼此を索まどふ程に、身さへ疲勞て惣地に、痞發りて刀禰たちに、怪れ奉るは、いとゞ心苦しく侍り。見奉れば、鎧櫃に牌を打て、鑰井家臣赤根半之進と寫し給へば、豫より聞及ぶ、守の袖柄にこそ在しけれ。この桜垣は、一里が間人煙絶、昔だに寄膽の、人か追ふとか聞えたるに、こゝろして過り給へ。とてもかくても野ざらしに、なるべか

りける吾儕をば、うちおかし給はせといふも哀れにおのが子の、寃ふ仇人を救んと、おもふ情のいろ見えて、なほ外事にかき口説、とはしらねども半之進は、つく〴〵聞て歎息し、鰥寡道路に仆るゝあれば、國君の不德にして、冢宰の罪なり。われ苟も宿老の臣として、かゝる老女を救はずは、大なる不忠なれ。しかはあれど、今市へ送らんとせば、これより平城へ歸るに似たり。丹三はこの老女を、わが轎子へ扶乘して、岩屋谷の麓村なる、村長が宿所へ將てゆけ。われは宿願の旨あれば、汝達に引わかれて、和邇の八幡宮へ參詣し、且にして追著べし。とくとくといそがせば、丹三は眉うち顰め、和邇へはこゝより十五六町あり。よしや私の物詣なりとて、從者こと〴〵く倶し給はんは、便なきことにおぼすとも、某をばめさるべし。今この老女がまうせしごとく、このほとりに日を暮して、獨行んは實に危しと、いはせもあへずうち微笑み、丹三は聞おちして、はや臆したりと覺るぞ。わが腰には兩刀あり。縱幾隊の野伏山客に撞見とも、いかで害怕るゝことのあるべき。とかくする程日脚は沒りぬ、いそげ〳〵と、焦燥ば、主命脫るゝに道なくて、丹三はなほ呟きながら、老女をやをら引立て、轎子へ乘せんとする



に、老女は涙さしぐみつゝ、そがまゝには得も乘らず、今をもしらぬ露の命の、何惜かるべき物躰なや。溝鼠に異ならで、泥に塗れしをも厭せ給はず、仁田山紬の蒲團布たる、轎子にさへ扶乘て、送りやらんと宣するは、忝きまでに有がたく、なき身の後も高き恩惠を、忘れ奉るべうは思ひ侍らねど、心つよき子をもちて、人なみならぬ身さへ貧しく、いくそばくその劬勞をせんより、只この隨に死してたべと、掌を合すれば半之進は、左り右りに頭を掉、やよ老女うけ給はれ。かく汝を勸ること、わが私の情にあらず是はこれ國守、綴井殿の仁政なるを、推辭奉らんは無禮なり。それのみならず、汝その子の孤きを追うて、却こゝにて身死ときは、その子を不孝に陷る。かくて親の慈悲といはんや。丹三も又なにかたゆたふ、はやく乘せよと此彼に、說示すにぞいとゞしく、老女はふかく感佩し、綴井殿の一老職、赤根のぬしは上を敬ひ、下を憐み給ふよしは、をさ〳〵半うつ童すら、いひもし語りもつぎ侍れど、かくまでにおはさんとは、思はざりける疎さよ。人の誠の嬉しきにも、わが子のことこそ護影けれ。ゆるさせ給へとやうやくに、行轎に這入れば、丹三軈て戸を引たて、しからば仰に從ひて、岩屋村へ赴きなん、まうすまでには候はねど、歩をいそぎて追著給へ。せめて晩ての用意に、これのさるべうもやと、おのが腰にぞ著たりける、小挑燈を進すれば、半之進は、左手に杖をもちかへつゝこれを受けとり、けふは中の七日なれば、月の出るにほどもあらず。提灯を携ずもあるべけれど、汝が心をやすむる爲なり、もてゆくべしと、袂に納め、旣に右手なる畔道へ、立わかれんとして思ふやう、主君にまうし賜たる小刀は、刀尖に鮮血著たり。われ今和邇なる八幡宮へ詣るに、鮮血の穢れをいかにせん。この丹三は、年來召仕うて、その心をもしれり。小童時これを預ばやと尋思しつ、從者おのおの、主に對ひて別れを告、轎子を擔起し、槍を肩掛、行李を打擔ひつゝ、櫟本のかたを望て、別れ去らんとするときに、半之進遽しく、丹三を喚とゞめ、われ思ふよしあれば、此小刀をば、小童時汝に預くべし。これは汝もしるごとく、恩賜の一刀なれば、等閑にすることなかれといへば、丹三後方を見かへり、しからば行李に著られたる、差かへの中刀を、とり出し候はんと、眞たちていふを推禁め、行李をとかんは煩はし。只須臾の程なるに、汝が腰の刀と換なん。いざとて件のおん佩刀を、丹三に遞與にければ、丹三はまづおのが、中刀を取て主に進らし、件のおん佩刀を恭しく、うち戴きて腰に帶たり。半之進はこゝろいそしく、やよ丹三、病る老女を道すがら、心もちひて

剔れかし。悉皆ゆきねと、促したつれば、従者はみなもろともに頭を低、遂にわかれて走去けり。半之進は従者等を、木がくるゝまで目送りつ、われ今相運の八幡宮へ詣るとも、今宵二更の比及には、岩屋村へ到るべし。彼處より米谷へは遠からず、従者等が長途に勞疲れ、熟睡したらんとき出し抜て、潜に木精塚の邊に赴き、心しづかに腹かき切て、君にあるべき物の怪の、祟を負ばおのづから、積井の家は安寧ならん。この曉を臨終と、しらで家には妻や子が、待つゝあらん不便なり。現苦きは武夫の、わけ入る誠の道にこそと、ひとりごちつゝつく杖も、曲らぬ心一すぢに、畔をめぐりていそぎ去。さる程に丹三等は、轎子に病臥せる、老女に物をとらして、剔り慰め、櫟本へと松原を、十町あまりゆく程に、枝葉際なき並松の、梢より日は暮れて、行べきかたはいと暗し。さて火を鑽かけて、績松



にこれをうつし、衆皆やうやく道をもとめて、亦八九町ゆく程に、月は出てきころながら、この處は特に路陝く、老松小松左右より、彌が上に生繁りて、晝だにも暗ければ、夜はしかすがに月も漏らす、ふり照す績松をのみ郷導にして、衆皆呼つ呼かけられ、辛くしてこの樹下闇を走り過れば、日今月の昇るかとおぼしくて、

些し足もとの明くなるにこゝろ嬉しく、丹三は主の事さへ思ひやるに、かく八九人うちつれたちて、迭に人を使にしても、なほくるほしきに、背の樹間を只ひとり、たどる〳〵も来給はゞ、艱苦に得堪ず便なかるべし。はや追ひも著給へかし。間ちかくや来給ふとて、各高く聲を立呼かけては見かへれど、目ざしもしらぬ野干玉の、烏夜にはまどひ〳〵つゝ、昇らんとする月を仰ぎて、亦百歩あまり走り過るに、忽地背後に筒音高く、飛來る鐵丸丹三が、左の腨二三寸、掠傷りて、轎子の戸を砕くばかりにあなたへ礮と打抜たり。裡には苦と叫ぶ聲と、ともに淺痍の丹三も、灸所なれば踏もこたへず、響に應じて倒れけり。衆人は豫より聞おちたるに、不意今うちかけし鐵炮に、膽をひしがれ僻易し、轎夫は轎子を投居、或は鎧櫃を捨、槍を逆さまに引提、松明さへにふりおとして、そがうへに跌き轉びつゝ、いよ〳〵暗くて度を失ひ、身を脱れんとばかりに、暴風に尾羽を痛める雀の、只其鳴に迷ふが如く、株に蹴かけ、泥に辷りて、右往左往に散亂し、足に信して迯失たり。かゝりし程に揆大地と、梢を降る地響さして、身長高き一個の雄者、ふりたる手拭もて面を裹み、長き一刀を帶たるが、もてる鐵炮を戛離と投捨、



刀の琫推放つゝ、轎子の裡を目がけて、走りよらんとするところを、丹三岸破と身を起し、癖者まてと呼とむるを、應も得せず聲の下より、閃りと拔てうちかくる、刃の光に身を反り、刀をもつて受ながし、六七合戰ひしが、何とかしけん丹三が、刃忽地鍔際より、發毀と打るれば心忙て、すべなく主より領たる、おん佩刀を引拔て、癖者が髆を、刀尖さがりに丁と斫るを、拂ひ除つゝ踏籠て、打太刀風の烈しきに、丹三は矢傷の鳥、鐵砲瘡の特に痛みて、進退も自在ならず、拳やうやく衰て、脊を斫れ、胸前を劈れ、蹌くを癖者は、得たりと蹀倒し頤を、隻足に踏居て、吭かけてぐさと刺、刃を染る鮮血とともに、天にも影のさし潮や、松の杪をはなるゝ月を、うち仰ぎたる面魂、庸人ならず見えにけり。

木末の點滴

國に君なければ、四民緊らず、隊に主なければ從類全からず。されば半之進が從者等は、みな悉臆せしにはあらざれど、闇にその主にたちわかれて、人のこゝろひとつならず、しかも闇夜に跡絶たる、松原を過ることなれば、只管に歩をいそがんとおもふのみ、前後を見かへる遑なき折、ゆくりなく鐵砲を折かけられしかば、更に敵に懸むかはんとはえせず、或は一旦の虎口を避んとし、或は事の爲體を半之進に告んとて、四零八落に逃失しかば、遂に丹三を撃しけり。かゝりし程に癖者は、丹三を思ふまゝに刺殺せし、血刀引提て轎子を、勢ひ猛く佶と睨へ、怨敵赤根半之進、なほ呼吸あらばよくも聞け。往時享祿元年十二月端の六日、浪速なる相合橋にて、汝が爲に撃れたる、今市全八郎が一子全介とはわが事なり。父が撃れしそのむかしは、僅に襁褓の中にあり。されば年長たる去年の冬まで、父をしらず仇をしらず、近付養母の物がたりにて、共に天を戴ざる、汝が事をはじめてしれば、猛に大和へ住居を移し、この春よりしのび〳〵に狙撃んとしたれども、身さへ貧しく由緣もなければ、城中へ入る便を得ず、老たる養母の絆となれば、心にもあらで默止しに、宿怨を報ふべき、時至てはからずも、汝主君の仰を受、夜を日に繼て、米谷へ赴くよし、きのふはやくも傳聞、今朝より跡を蹤たれどロ、汝が從者夥なれば、かろ〴〵しく手を下さず、この松原を過るころ、日は暮なんと推量り、捷徑より走り先だち、こゝに待こと久しかりき。いでその頭を受とらんと、聲高やかに罵もあへず、轎子の戶を蹀ひらけば、月の光りの隈なくも、さし入る轎子の、裡は鮮血に塗れつゝ、臥たるものは仇人ならで、わが養母晩稲なり。是はとばかり仰ざまに、駭き倒れ立んとしては、泥に辷りて身を起

し、やゝ母御、全介にて候ぞ、何故にこの轎子に、扛乘られて坐したる。わがうへを早くもしられて、かくや仇人に謀られけん、邂逅難き時を得て、既に怨を復せしと、思ひしものをこれはさて、淺ましとも朽をしとも、いふことの葉のなかく〳〵に、愕なりとも今更に、いひときがたき天の縛、母の教に從ざりし、罰は目前、五逆の罪人、くいの八千たび百千遍、思へばこの身が恨しとて、蹉跎しつゝ聲を惜ず、草を攫で哭しが、やうやくに涙を拭ひて、臥たる母を抱き起し、喃母御、疵は淺く、おはするに、心を鬼になし給へと、勦つ又呼び活つ、やをら轎子より扶出して、おのが腰に結びたる、三尺手拭引解て、疵口を堅く結び、又高やかに呼活て、その聲はじめて耳に入りてや、細やかに眼を瞬り、和殿は仇人を擊たがへて、心さへ亂れし歟。母と呼ん、われにはあらず、勿論わどのが幼稚とき、祖母さま祖父さまもろともに、家を捨華洛を出、鎮西のかたへとて、逈けき旅に赴き給ひし、そのとき和殿の祖母さまが、吾儕に憑み聞えつゝ、汝且くこれを孚み、しかるべき人の子とも、なしてよと宣はせしが、汝が子にせよとはうけ給はらず。さるときは世につれて、母と呼れ、子と呼ぶは、假初の私言葉、只いつまでも吾儕の爲に、和殿は主なり、主の孫なり、よしや仇人と思ひたがへて、傷ることあればとて、五逆十惡といふよしあらんや、心得ぬことといはるゝよと、日來に變る言の葉の、嚴と正しきに全介は、なほ悔着る母の慈悲、玉なす釜に熱湯の、沸かへる如き涙を拂ひ、さ宣はするは全介を、無慚殘忍の人にせじとて、身を殺しても今更に、言葉を設て不孝の罪を、脫れよとの事にこそ。如此思侶仁慈の、淺からぬにも淺ましや、おん身が主の孫にもあれ、襁褓の中より養れ、かく人なみになりたれば、私ならぬ母なり子なり、乳母といふともなかく〳〵に、母といふ字は削られず。言さへぐ夷狄の國には、親を殺すもありとか聞けど、そは人にして人にあらず。人と生れて人ならぬ、人といはれて一日も、この身を容るゝ里あらんや。うたてやな今の世に、耆婆ありとも扁鵲ありとも、その深疵をいかにして、救ふと一諾れんや、只おなじくは母御前の、絕も果ざる息の下に、刃に伏て犯せる罪の、首が一つを贖ふべし、許させ給へとかき口說、刀を逆手にとりなほせば、晚稻は吐嗟と、身の苦しきを、忘るゝまでに攜禁め、こは物狂しき所爲をして、裳を損ひ、物思へとか情なしと、怨ずれば頭を搖り、左にも右にも全介を、助んとて子にあらず、母にあらずと宣ふは、理りに似て理ならず。竹鋸に身を挽れ、木の抄に骸らるべきを、わが私の心ひとつ

に、自殺せば身の罪を、重るに似たれども、いまだ絆断給はねば、傷けたるのみ殺せしにあらず。せめてはこれを心やりに、冥土の先鋒ゆるさし給へと、又とりなほす刃を禁めて、あな愚しや、聞わきなし。吾儕は和殿を養ひたる、母といはば母にもせよ、わがこの深痍は鐵砲にて、打れたる痍にはあらず。よく展撿て身の罪の、ありなしをしり給へと、いふに奎介意を得ず、そは虚言には候はめと、いはせもあへず息を繼ぎ、身の愚さに少きより、僞をいはぬものを、向死として虚事を、いふものの世にあらんや。とくとくこの痍見給へと、いそがされて奎介は、疑ひつゝも血を拭ひ、結び添たる布引ときて、肉白くはみかへる、瘡口をと見かう見れば、咽喉のあたり二寸あまり、僅に吭は外れたれども、吻く毎に血は濆て、目も眩こゝろ消るがごとき、涙の玉やかくすらん。志渡の浦曲の蜑ならで、さて乳の下に痍四五寸、いづれも灸所の痍、憑しさかな天神、地祇も捨給はず、痛手なり。奎介は月を燭に、つくぐ\とはからずも母を殺す、罪をば辛く脱れた見てふたゝび驚き、わが鐵砲の寃違ず、り。これをうれしと思ふにも、なほ悲し穪子の戸を打抜たるに、これは正しく刀さは母の絶命、おし量るに牛之進、道奴



全介が母と知で、刃引出し刺殺して、橋子一隠せしに、幸にしてまだ縡り、絶給はぬやあられずらん。さもいかにして我々を、かくまで他人にしられけん。實父養母の讐敵、累る怨は逆奴が頭を、粉に砕き醢になすとも、飽ず赤根が往方はしりつ、米谷にて勝負を決せん。さはとに小膝立なほし、握り詰たる拳の上に、たばしる涙の玉霰、倅ていとゞ物思ふ、孝子の歎ぞあはれなる。晩稲は苦しき息の下に、わが子の顔をうち瞻り、縁故をしり給はねば、その疑ひは理なれど、世に誠ある人の心を、くめのさら山さらさらに、和殿を讐ともわれを父、和殿の母とも赤根ぬしの、しるべきやうはあらざるべし。男兒の生平といひながら、道ならぬ倣に懐れ給ひし、父の怨を復んとて、この大和路へうつり住、活業に假托て、毎日に平城へ交加つゝ、彼人を窺給ふと、猶より猜したれども、流石にうちもあかし給はず、よからぬ所爲と思ひながら、捨るよしもなかりしに、昨夕より和殿の氣色殊更に怒を含、今朝未明より遽しく、刀をさへ隠しもちて、走りいで給ひしかば、いよ〳〵ますます心もとなく、うちもおかれず跡追うて、日の暮るゝまで彼此と、索めたれど見にえあはず、いたく疲勞て忽地に、痞に胸をさし塞れ、こ



の松原のあなたなる、道穴にうち臥たり。折しもあれ、旅する武士の、從者八九人を將て轎子を擡らしたるが、吾儕を見かへりてふかく憐み、叮嚀に問るゝにぞ、病に重き頭を擡て、不圖轎帳を向上れば、緒井の家臣、赤根半之進と膝を打たり迭に面は認らねど、心に恥ることのみなれば、名告をもせず、只管に推辭にければ、彼人元來上を敬ひ下を憐むこゝろ深しと、豫聞しに一點違はず、さまぐ\に勦り、眞やかに說諭し、吾儕を轎子に扶乘し、岩屋村なる長が宿所へ將てゆけとて、私卒丹三とやらんに聞えおき、ぬしは和爾なる神社へ、宿願の旨あれば立ながら參らんとて、從者倶せず彼處より、遙に別れ去給ひき かくて道すがら、かの丹三とか呼るゝ人いと叮嚀に勦り慰め、轎子の内なりける服紗物うち披て、梨子ひとつとり出し、これは殿のめしあませるなり 春の梨子はめづらかならんに、渴ばこれをたうべよとて、おのが刀に著たりける、刀子をそへてとらしたり 主といひ家隷といひ、かくまで好意ふかゝるものを、いかなる過世の惡業にや、わが子の實父は臆きたなく、かゝる仁者を誅らんとして、可惜命を隕しけん、これさへあるに全介が、父をおもへば生憎に、事の道理も聞わけず、けふこのぬしの旅すれば、途にて狙撃んとて、宿を出しに疑ひなし。あなうたてしと思ふにぞ、痞ますぐ\さし詰て、身の苦しきに堪ねども、老が命はつゆ惜す、赤根ぬしに恙なかれ、我子も無事にあれかしと、苦しきまゝに神佛へ、人しらぬ掌を合し、禱る外他事なかりしに、暮てはいとゞ樹下暗き、この松原を過がてに、打かけられたる鐵砲にて、丹三どのは矢庭に仆れ、轎子さへに打拔たれど、却吾儕は恙なし。こは全介が所爲にこそ。こゝにて望を果さねば、なほ蹤跡てそのたびは、命も終になつ虫の、火虫の我から燒るゝごとく、彼人の手に死やせん、理せめても留らぬ、わが子を慭諫んより、ここにて死ば彼人に、おのが誠もとゞくべく、全介も仇撃を、思ひとゞまることもやと、この身一つを恩愛と、義理にかへつゝ胥近なる、彼刀子を探取り、咽喉乳の下劈けども、老の拳のかひなさは、消果もせぬ月の露、野にも山にもおきまどふ、心ぐるしさ猜してたべと、いふ聲はやゝ弱れども、命つれなき柞葉の、落なん程も遠からず。全介は聞く毎に、何と應んすべしらず、絞りもあへぬ布子のそでを、しばぐ\顏へおし當てつゝ身を着つ、身を恨む、憂事はなほますら雄が、猛き心も軟り果て、碎る胸を敲き居、喃母御、宣ふ所理なり。親の敎を受ずして、却親を謀たる、おのが心の劍もて、仇をば撃で養母を喪ふ、この世の不孝は、過世の惡業、天罰にはあるべけれど、惡人

なりとも父は父、仇人を終に得誅ずとも、腹こそ借らね学び、恩は大和ゝおりとおる、山より高き母をなそ、非命に殺し給ふ。月日は誠を照さぬ歟。さるにてもわが母御は、さばかりの恩も受ぬ、半之進を厚く思ひて、命だに惜給はざりし、婦人の仁も物による。こゝろ得がたく候と、詰れば僅にうち點頭、如此問れんと思ひし事よ。いはぬはいふにまさるとかいへば、恥かゝやかしき事ながら、せめて今般の罪滅しに、わがうへ詳に告侍らん。わが父は服部氏にて、原は由緒ある武士なりしが、いかなる故にや退耀して、城下郡、佐保の庄に僑居し、細き烟を立給ふ。假初ながら十餘年、幸なきうへに幸なくて、父母もろともおなじ月に、僅に病に身まかり給ひぬ。その時吾儕は二八の秋也。只一個の姉ありて、同郷なる柴貴に、半六といふ者の、妻となりておはしたり。父母なくなり給ひし後、吾儕は姉に寄れ、こゝに二年の月日を過すに、わかき時の惑ひにて、近きほとりにひとりをる、櫨夫介四郎といふ非役と、しのぶふ夜の數かさなりぬ。元來件の私夫は、酒を嗜牌を投、身をわがまゝにたす程に、あるかなしかの粁も、着がへの布子も貨盡し、剰姉と姉夫の、衣服調度を盗出して、みな私夫がよからぬ遊びの、代とせし事發見て、面目なさに夫もろとも、佐保の庄を逐電し、二年あまり彼此を、さそらひてやうやくに、浪速津に足を駐め、こゝに十年をふる鐵貨買、身より出たる錆なれば、夫婦共稼に挊ども、鐵鈔三文得ものこらず、たま〳〵聚し一子は、坐草にてなくなりつ、世わたる概のまはらねば、なほ乳の出るを幸に、京へ上りて刀屋へ、乳母には參りつゝ、かくて和殿を育しなり。しかるに妹夫半六どのは、不慮僥倖ありて、織井殿に見參し、五條の縣主となりしよし、その北欣に傳聞しが、わが姉の縁孫どの、その次の年に身まかり給へば、身の中を節屑んにも既に便著を失ひつ、富る縁者を有ながら、身の貧しきを得も告ず、救はれもせず閼後は、居立の道は絶果にき。大和津の國遠からでも、世を憚れば故郷の、そらいと遠くなつかしと、思ふにつけて奇きは、半六どのを返引給ひしとか聞えたる、典膳ぬしの前妻に、由縁ある刀屋へ奉公し、わが外侄、前の半七とは同僚なりし、今市丞八どのゝ遺子なりける、和殿を子とし、母と呼るゝ、みなこれ脱れぬ因果と思へば、いよ〳〵ふかくわがうへを、匿ものから大和なる、赤根氏の事としいへば、耳引立て聞漏さじと物せしかば、赤根親子が浮沈の事、又丞八どののこと、外侄の刀禰のうへをさへ、おぼろげならず傳も聞ど、しらず貌してありつるに、法施米にはからずも、受し袋の口辷り、問ずがたりに彼人と、和殿の

茲々の好夕を、告たりしより忽地に、父の仇人を撃んとて、日來にはます和殿が健氣さ、とても撃れぬ仇なれば、思ひ絕よと思ふにも、恥しさに如此々々の、義理あるよしは得も告ず、憂身の末に奈良坂や、兒手柏にあらねども、親子が心裏表赤根が爲に盾となり、只彼人の矢面に立てこの身を殺んと、思ふ誠を捨給はぬ、神と佛の導きにや、年たけて歸る故鄕の、山迹は死出の劍の山、今はからずも少きときに、別れせし外姪半七に、半之進といふ代りて死ぬるは冥土に在する、姉篁篠どのと姉夫の、半六ぬしへ恩報し、わが外侄はいはけなく、七才か八歲の頃なりければ、顏も認らず外叔母ありとも、しらでやあらんしかはあれど、病ても死ば冥土にて、姉姉夫に面を背、身の罪科に阿鼻焦熱の、呵責もいとゞますべきに、惜からぬ身を今玆まで、存命たれば此宵今、こゝろよく目を瞑るかし。わが夫介四郎どの、生涯貧しく世を送り、四十あまりの中ぞらにて、身まかりしも又吾儕が、刃に伏して非命に死するも、わかきときの淫奔に、人を苦しめ身を苦しめし造惡の報いなり。この理を以推ときは、和殿が父の仇人と指もの、天下にはあらざめれど、孝心ふかさに謀ずも、仇人の外叔母を擊留たり。これらの道理を辨て、人を恨ず身を愛し、家を興して亡父の汚名を雪給へかしと、いふ聲次第に細れども、深痍に屈せぬ長ものがたりは、現も雄々しく聞えたり。されば慢て改れば、君子もおそれ、死んとして言ことは、賢者もよしとこれをいへり。現この晩稻の老女こそ、わかき時の淫奔にて、一生を慢たれ。今慢をしるときは、姉篁篠にをさ／＼劣らず、微妙その子を敎たる、男兒も羞る事多かり。荃介は額に汗し、膝に手を鑿、耳を傾け、首より尾まで、熟々と聞て嘆息し、一かたならずかくの如く、因縁のあるよしを、一點ばかりもしらし給はゞ、わが母の世に在ん程は、復讐の事思ひ絕て、心をやすらへ奉るべかりしに、理なくも禁め給ふを、婦人の仁とのみ思ひて、けふの事をさへ告ざりし、みなこれおのが慢なり。實父の怨を復すとも、更に養母を喪はゞ、孝道とこれをいはんや。特に痛手を負たる親を、草の上にかき居て、その死を待ば罪深。嫡母御、心を焦燥て長々しく、ものいひ給はゞ殊更に、おん命も危かるべく、夜風瘡口に入りて、破傷風となるときは、療養終にとゞきがたし。いざ負れ給へ醫師許、伴ひ奉るべしとて立よるを、搔遣りて頭を掉、虛氣きことをいふものかな。活んと思はゞはじめより、いかで刃に身を傷らん、思ひし事はいひ果つ。只惜るゝは親と子が、盡ぬ名殘も一世の別れ、よしこれとてもせんすべなし、只吉事をうちかさね、身のほど安く榮給へと、草葉の陰

より祈るのみ。南無阿彌陀佛と唱もあへず、わが子の血刀をかいとりはやく、咽喉に突立吭かき切り、刃を抱て倒し俯。とどむる隙もあら栲の、袖のみいとゞ朽まさる、全介はもろともに、消なん露の草の上に、臥たる母の亡骸を、抱き起して又哽咽り、更に善惡もわかざりしが、忽地儼と思ひかへして、かき亂したる鬢の毛を、掻あげて襟かき合し、やをら刃を拔とりつゝ、亡骸にうち對ひ、母の魂魄なほ去らずは、今全介がまうすことを聞給へ。わが父惡人なりといふとも、その子として仇を撃すは、これ父を否するなり。しかれども今こゝに、志を果すときは、又養母へ不孝なり。かゝれば仇を撃がたし。仇を撃ずはあるべからず。某一文一字を識らねど、幸にして聞ることあり。むかし唐山の豫讓とやらんは、知伯が爲に衣を斬て、怨を復けし例を思へば、われも今牛之進が、轎子を打くだきつ、怨を復すに擬ぶべし。さればとて阿容々と、存命んは人にあらず。速に自殺して、親の屍にふしかさなり、共にこの野の犬を肥さん。母御の神靈且く待て、冥土の旅の郷導に、めされ候へといひもあへず、諸肌ぬぎて血刀を、腹へ突立んとするに思ひもかけず、忽地背後に人影して、等よと一聲呼も果ず、無手と抱きとめしかば、全介は驚き怪み、身を反らし、頭を回らし、隈なき月に見かへれば、これ則別人ならず、去年の神無月六かの日、浪速にて別れしより、絕て音耗せざりける、敗鐵兒の四五六なれば、こはそもいかに、とばかりに、且羞ていふところをしらず。當下四五六はわりなく刃を奪取て、鞘に納めつゝ、只管に嘆息し、やよ全介友だちの交り竭せず、わが今ここに來たりしを、奇しくこそ思ふらめ。われも不思議に思ふ也。さても去年の冬、和主は母御を負て、何地ともなく逃れ去り、我もその次の日、活業の爲に啓行して、この大和路へ赴き、六田下市なんどを押了つゝ、吉野の麓に春を迎へ、睦月の下旬より、櫟本に旅宿をかへて、彼此となく賑あるけども、和主親子がこゝらわたりに、あるよしはしらず、田中の里にしる人いで來て、蕎麥食せんに、亭午より來よといはれしかば、けふは半日生業を止めて、彼處に赴き、日暮て歸るこの松原にて、和主の母御が枉死の顚末、嚮より見もし聞もしたるが、なほくはしきをしらんと思ひて、彼處の樹陰に闚覓をり、共音を忍ぶ袖の雨、たえて霽間はなかりしなり。寔に和主が母刀自は、儔稀なる老女にこそ。又和主も男兒なれ。撃に撃れぬ仇人としりて、形なき身を恨み、自害せんと思ひ定めし、潔くは聞ゆれど、こゝにて死ば狗死也。常言にいふ膝とも談合、われにひとつの計較あり。母御の志に悖らず、和主が望を果す

しかくても狗死せまほしき歟と、いへば全介容を改め、緣由をしられたれば、今更匿むべうもあらず。定におん身はわが爲の、産砂とこそ思ふなれ。浪華にては脱れがたき、恥を隱して路費を喪られ、今亦必死のわれを救うて、謀を授らる、いかで教を受ざらん。說示し給ひねと、歎びあまる目に淚、頷づく士もしめりがちなる、氣を引立んと四五六は、ほこりかに打ほゝ笑み、こゝにて事を談せんに、逆去りし亦根が從者歸り來て竊聞せば、謀は忽地洩ん、いと精しくは道すがら、密やかに示すべし。その耳貸ねとさし寄て、密語ばうち點頭、しからば今夜森本と、虛空藏越の提徑より、彼山へ走登り、人しれず彼大刀を、シヤ、音高し樹には木耳、岩も物いふ憚あり、月の光りも二更は過たり。ちかき山路を走りなば、丑三過る比及に、必彼處へ到るべし。とくくと、いそがし立れば、こゝろ得ながら全介は、母の屍をいかにせましと、踟躇間に四五六か、借と見かへる鎧櫃、これ究竟と杭引抜き、鎖ねぢ切て物とり出し、これへへと亡骸を、櫃に納て浦陀憑む、これ忍府の鎧櫃、ちからなげにぞ全介が、肩に浸痕はありながら、やをら背負ひて身を起す、所定ぬ野邊送り、思へば去年の夢物語　借錢借を欺詐の、棺もけふは實事となりて、かゝる欺きにおほ坂を、越て大和の土となる、人をよし野といひかねし、死花さかぬ身のすゑや、世は春ながらうき秋と、思ひくみつゝ四五六は、先へたちてぞいそがしゆく。

浩處に半之進は、いつの程にか歸り來けん、小松が中に身を潜して、一五一十を得しと張ひ、今全介と四五六が、走り去るを見て歩み出、丹三が屍のほとり、いくたびか索めぐりて、鮮血に染たる順胯の、



おん佩刀をかい取りつゝうち戴き、左手に挑燈高く揭、新に著たる刀尖の、血をうち返し借と見て、さてはとあやしむ聲とともに、一町ばかり走り過たる、全介ら四五六もおどろきながら見かへれば、月より明き挑燈を、引提て彼處に立人あ

り、おのが仕方をしられじと、もろともに小石を掻聚て、礫と打ばあやまたず、打おとす挑燈の、火よりも先へ滅てゆく、亡骸ながら三人づれ、足に任して走去ぬ。

米谷の鏥塚

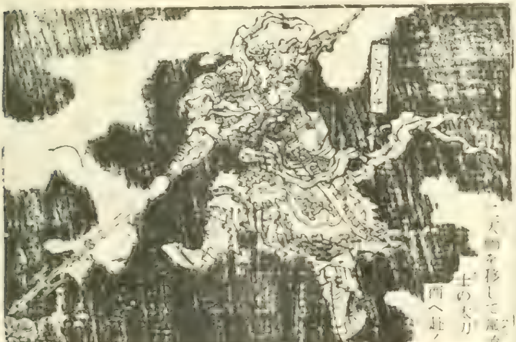
却説全介四五六は、只管に走りつゝ、岩屋谷と唐容藏（地の名）の間なる、山田のほとりに来にけり。月は甲夜より隈なくて、潜ふに便よからねど、途ははや遙に遠離れば、追人もいかでこゝまで来べき、小憩時息ん、ここぞ又しらめとて、此彼九折なる樹下に立よりつゝ、株に尻をかけ、額の汗を押拭ひなどする程に、と見れば左手のかたは墓所にて、山田の畔に、舊き石塔彫建り。當下四五六は、全介を見かへりて、いかにあれを見給へ、この頃、今はからずも、墓所のほとりに憩ふは、負たる母御の亡骸を、こゝへ葬て因縁ならめ。さる重荷を背負では、路を走るに自在ならず。とかくしては天の明なばいひづる事もかひなけれ、とく〳〵瘞給へといへば、全介は今更に、別れもこゝに惜れて、何とも回答難たりしが、数回歎息し、大和は母の本貫なれども、わが身にはなほ旅なり。されば葬の事、憑むべき寺もなし。この處へ亡骸を、蔵めまゐらせんは便宜に似たれど、引導讀經の聲も聞せず、捨るが如く瘞ん事、その子としては忍びがたし。それも火急の一大事い、思ひかへよとならば、ともせんが、鋤鍬なんどは、當坐に人に借んも更闌て、人家へはい[illegible]、いはせもあへず、いなせのことはこゝろ易し、見給へ彼處の土を穿起して、ふかく穴を掘たるあり。右手の卵塔へ倚かけたる鋤鍬は、忘れておける物と見ゆ。思ふにこれは、此ほとりなる里人の死たるを、翌の日闕に葬んとて、甲夜より傍て張甲坊に、掘せたる穿なるべし。こゝへ瘞しはじめより、われ彼穿を見たりしかば、和主が母御をこの處へ、葬べき因縁の、ありけんとはいひしなり。加旃今夜米谷へ赴くとも、木精塚を掘起て、鋤鍬なく



ては、寶の山へ入つゝ空く歸るが如し。しかるに今ゆくりなく、鋤鍬さへに獲たる事、天の賜ならで何ぞや、しぶる事かはと說諭せば、圣介有理と點頭て、遽しく钁欘を扛おろし、件の鍬をかい取て、別に穴を掘んとするを、四五六急に推とゞめ、圣介よ、噫、和主は律義なるものぞかし。こゝへ埋よといはぬばかりに、掘たるこの穴のあるを見ずや。こゝへこへと指せば、圣介はこゝろを得ず、そは簡略も物によるべし、僅に一つの窆を、掘ともいかでか時をうつさん。今もし其處へ葬らば、人の墓を竊なり。天も明ば忽地に、舊の施主に掘捨られて、終に犲の腹を肥さん。よしなきことをいふものかなと呟けば、四五六は多くもあらぬ髯搔揃、和主は僅に一を知れども、いまだその二をしらざりけり。思ふに此處は寺内にあらず、只、鄕の墓所なれば、おの／＼定る主ありて、他鄕の葬をば得も許さじ。しかるときは、その亡骸を、このほとりへ埋がたし。よしや竊に埋るとも、新に掘たる壙の蹟は、おのづからしらるべし。里人等これを見て、或は疑或は怪み、終にこれを掘起さば、却て母御の亡骸は、何處へ捨られんも又量がたし。しかるに今この窆へ葬るときは、彼施主緣故を問ず、もし鬼神なんどのせし事かと、おそれ惑ひて、なか／＼に掘もかへさで、彼新葬もろともに、叮嚀に菩提を修ん歟。さるときは、われ一錢を費さずして、親の爲に讀經さし、永く菩提を修せん事、又儔なき好事ならずや。これ鳥鼠穴を等くする、謀とはこれなめりと、ほこりかに說示せば、圣介は思はずも、掌を撲地と拍、寔におん身は吾黨の文珠なり。可惜男子に寶鐵をさする事よと唱嘆し、遂に母の亡骸を件の穴へをさめにければ、四五六はかひ／＼しく、鍬もて壤を覆ひかけ、押ならし踏着て、さて傍にとり除ある、石塔を轉しよせて上に居、大山樒の枝折とりて、墳墓の左右へ挿、とく／＼回向し給へといそがせば、圣介はふたゝび濡す袖の露を、拂ひもあへず額つきて、身のいひわきもなき親の、後の世せめて安かれと、念ずれば四五六も、彌陀佛、彌陀佛、々々とくり返したる苧環の、糸ならなくにいとゞしく、心ぼそさもいやましぬ。かくて圣介は、うち念じ、うち念じつゝ、頭を擡、彼石塔を月光に、と見かう見て眉根をよせ、この彫著たる方なる文字は、見なれたる心持ぞする。四五六おん身には讀やせん、讀くだちて聞せ給へといへば、間ちかく透し見て、文字を墨にて染たるは、夏雲獨峯信士とあり。又逆朱を入れたるは、春月淸光信女とあり。これは正しくその妻にて、頃日身まかりたりければ、親族こゝへ送葬して、同塋へ埋んとて、豫て穴をば掘せしならんと、いふを聞か

けて全介に、思はず小膝を礑と打、こは不思議なる事もありけり。わが養父介四郎どのゝ戒名を、夏雲獨楽とまうすなり。しかるにこの石塔に、おなじ戒名あるのみならず、夫婦とおぼしく逆朱を入れて、春月清光と彫著たる、その冢へわが母を、葬るはさきの世より、この山園のたとなる、因果にこそおはすらめ。さればこの戒名をとりも用てわが母を、春月清光と稱へなん。奇なり、奇なりと只管に、嗟嘆して已ざれば、四五六も、今さらに脱れぬ緣の友がきを、こゝに結びしこゝちせり。されば四五六が、思ひ量りしに一點錯ず、この冢を掘せたりしは、虚空藏、嶋村なる、大象名地の琵琶法師、木阿彌陀佛といふものなり。父の某甲は、十九箇年前に世を遁りて、母のみなりしが、六十の春の夢と覺て、病煩ふこともなく、有一夜寢死に死にければ、木阿彌陀佛哀悼に堪ず、父の冢へ、合葬んとて今宵まづ、その冢を掘らせ、さて黎明の比及に、里人ともろ共に、棺を舁もて來て見れば、掘せし穴は埋てあり。こは何ものか夜の中に、かくはしつらんと怪みて、ふたゝび壙を掘起せば、鎧櫃の內に、枉死の老女を納たるあり。年の齡は、木阿彌陀佛が、母に等しく見えたるにぞ、誰かはこれに驚ざらん。こは何ものの所爲にやと、ますます疑ひ惑ひつゝ、施主も道者も立つどひて、呆るゝもあり、おそるゝもあり、只とり捨よと罵るもありけり。當下村長且く尋思して、木阿彌陀佛等にいふやう、大和は國のはじめなれど、神武天皇以降、他の冢を奪て、おのが葬をせし事を聞かず。憶ふにこゝらの高塚には、鼻の高き刀禰達多かり。こは全く鼻高殿の所爲なるべし。さるを後の祟をも思はず、瀆たしとてとりも捨なば、却て大なる殃危にやあふべからん。只この鎧櫃なる亡骸をば、舊の如くによく瘞て、そのほとりへ母御を葬り、花を手向るときはもろともに手向、窣都婆を建る日にはもろともに建、すべて此彼一體の思ひをなして菩提を修はゞ、これにましたる、施餓鬼はあらじ。しかせんには祟もなく、この功德によつて母御はさらなり、おん身も現當二世安樂、疑ひあらじと說示せば、衆皆有理と稱賛し、竟に晩稻が亡骸を、舊のごとくに埋つゝ、その傍に穴を掘て、木阿彌陀佛が母を葬り、母の石塔をば傍に建て、おなじ戒名を彫著たり。すべて此ころの人の心ざま、素朴なるに、わきてこの邊は、山ふところの小縣にて、人みな人の言を推こず、こゝをもて木阿彌陀佛は、村長が教に悖らず件の亡骸を、何處の誰とはしらねども、わが母ともろ共に、香を燒、花を手向、月忌年回追善を、ひとつ筵にとり行ひけり。この善根を植にければにや、後に亡靈を、令

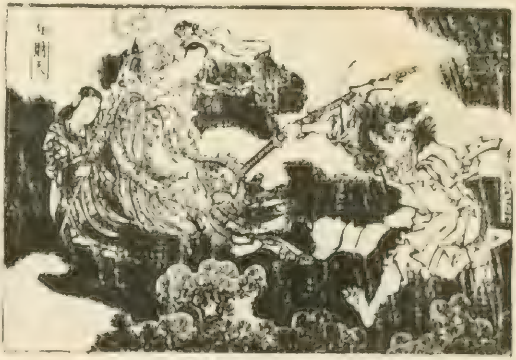
介が母なりとしるのみならず、その身に稀なる幸ひありけり。是より先近郷の田夫牧童、縁由を聞慄てふかく怪み、大象なる木阿彌陀佛が母は、葬るゝとき亡骸がふたつになりぬ。世に離魂病とて、形貌のふたつに見ゆる病ありとは聞けど、死して亡骸の、ふたつになるといふ事は、聞も及ぬ珍事なり、ゆきて見よかしとて、おなじ戒名を彫著たる石塔が、並びて有るぞとて、殊更にいひのゝしりけり。かゝりし程に、彼穸に埋たりし、主なき亡骸の主出たるころ近郷の徒、又このよしを傳へ聞、元來木阿彌陀佛が母の骸の、ふたつになりたるにはあらず。わろくも聞たるものかなとて、果は笑て已けれど、この事遂に人口に膾炙して、舊の主の出る譬には、必元の木阿彌とぞいひける。この諺の濫觴は、鹽尻の明王百殺編にも載られたれど、こゝに說ところと、その事大同小異なり。且鹽尻には順慶の時の事とす、木阿彌陀佛が事、この下に話なし。却說仝介は、母をば旣に葬りつ。今は後やすしとて、四五六ともろともに、彼鋤鍬を携つゝ、又只管に走る程に、



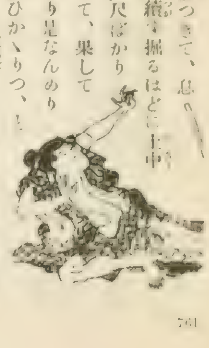
辛くして米谷なる、木精塚にはとり、來にけり。しかれども、まだ天は明ず、喘ちあへず走りにければ、四阿、暇をうちはし、さて仝介は四五六に對ひ、密禱には事の遑しくて、仝くおん身が謀を聞果ず、まづ行ふべきよしを、說し給へといへば、四五六答て、さればとよ、牛之進に先だちて、この塚を掘起し、彼風流士の大刀を奪ひ取るときは、その谷牛之進が身單にかゝりなん。しからば和主は手をも下さず、實父の怨を復すにあらずや。時は得がたく失ひ易し。とく〳〵と促せば、仝介聞てふかく歎び、おん身が謀究て妙なり。彼大刀失なば牛之進は、生て平城へは歸りがたけん。



よしや阿容々々と歸るとも、緋井殿の怒烈しくて、安穩におかし給うべからず。母の今般の言の葉に、悖らでかへす怨の刃は、彼風流士にますものなし。さはとて鍬柄掉もち、向上るかたは山深み、檜赤松生茂り、篠竹が下の水の音も、委ぬこゝろ潔き、朱の玉籬上久て、塚の左右に禿倉あり。彼首是首と見かへれば、兩社の鳥居に額を打て、辨財天女毘沙門天と、筆太に寫したる、金字は月に照そひて、貸もあれど今宵より、心に着たる蟲衣の、汚れを忌て近くも參らず。掩殘したる楠の、土より上一丈ばかり、大かた石に化たるを、やがて碑石に用ひつゝ、木精塚の三字を彫たり。これを掘發んに、よしや百人がちからを借とも、一朝一夕になすべうもあらず。四五六も全介も、思ひの外の事におぼえて、只茫然とまぼりてをり。かくて止べきにあらねば、さりとも思ひかへして、まづ試みに、



楠の株のあらはれたる間を掘るに、正に是、風流士の太刀、再び人間に返るべき時にやありけん、思ふには似ず株は朽て、柔きこと埋にひとし。南人はこれに勢ひつきて、息をも續けず掘るほどに土中五六尺ばかりにして、果して物あり見なんめりと競ひかゝりつ、



かくして引出せば、紛ふべうもあらぬ寶劍の唐櫃なり。殘雪は[illegible]して、夜の山風膚を徹し、狼の遠音谷に響き、毛骨栗然ばかりなれど、これをば屑ともせず、南人はます〳〵力を勵せ、鎖を採斷て、これを見るに、箱は三重とおぼしくて、櫃の中に又箱あり。この鎖をもやうやくにねぢ放すに、第三の箱に至りて、いかにすれども蓋開かず。かばかりの事に時を移して、山路にて夜をおかし、半之進等にしられなば、謀りし事も仇となりなん、只打砕けと、四五六が、ふり揚て打鋤は、手にひゞかして反かへる、間の拔全介が、鍬柄高く[illegible]打、丁々[illegible]石と

數回打れし箱は碎飛、風流士の大刀顯れ出たり、さればこそとて全介が、取らんとするに奇なるかな、塚の中より吹出す、魔風頻に面を打、彼風流士を中天へ、吹揚とぞ見えたりし。大刀は須臾閃きつゝ、平城のかたへ飛去らんとす。時に毘沙門堂の門扉さつと開けて、異相の天王忽然と立あらはれ、御手には長き矟を取り、面を怒らし眼を睜り、虚空遙に閃きゆく、大刀を追蒐追戻し、拿たる矟をとり伸て、打落さんとし給へば、大刀は追れて慭に、平城のかたへは得もゆかず、舊の穸へ入らんとすれば、嬋娟たる天女、辨天堂の上に立あらはれ抱る琵琶の撥をもて、徐やかに招きよし、これを取らんとし給ふ折、魔風ふたゝび吹暴れて、月さへ暗くなるまゝに、大刀は頻に光を放ち、その聲絹を裂ごとく、西を投てぞ飛去ける。正に是、天王天女の擁護によつて、順勝の身にあるべかりける、その禍を西へうつして、今茲八月下旬、大内闕が身に係る、家の亂を今こゝに、しるやしるしの塚の鬼に、魅されて全介も、四五六も手にもてる、鋤鍬拱地と擲捨て、酔るが如く醒るが如く、張つめしよりはや歛む、こゝろの弓といる月の、西を瞻仰てついゐたり。

占夢南柯後記巻之三終

三七全傳第二編 南柯夢後記巻之四

池の中島の上

因果覿面の理り、誰かはこれをおもはざらん。しかれども、一旦の利に引れ慾にまどひ、不覺に禍胎を醸するときは、長に毒を流して、子孫その餘殃を受く、又憐べし。されば赤根半六が如き、賜く領主の驕奢をたすけて、陰におのが榮利をはかり、米谷山なる靈木を伐りしより、その身猛に發跡たれども、憂苦に横死せしのみならず、一子半七も又流浪して、ぬれ衣のなき名を立られ、やうやくに天日を觀て、更に積井家の長臣となるものから、今亦罪なき罪を得て、うち歎くにはあらねども、その子、後の半七さへに、墓なくも罪をまして、百折千磨の艱苦を經たる、縁故をたづぬれば、そは親の爲

これは只、忠義の爲となす術に、倦ずやあか根半之進は、その夜さり岩屋村なる、村長が家にいゆきて、守の命を聞えしらし、翌はつとめて、農夫山樵等を召集合、木精塚を發して、風流士の寶刀をとり出すべきよしを、一村の戸毎に令さしつ、更闌人定りて後、單身潜に米谷へおもむき、肚かき切てわが君を、諫めまゐらせんと思ひしかば、豫て一封の遺書を懐にしたれども、途におくれたる從者等が、私卒丹三が死骸を舁もて來て、そのことかの事、いと囂しく罵るほどに、春の夜なれば短くて、思ひの外に天は明たり。浩處に米谷の麓なる獵夫等、半之進が旅館に來て言やう、僕ども近頃は、米谷に妖火あるをもて、夜は彼山に登る事をせざりしが、昨夕丑三も過たらんと思ふ

ころ、山風いたく吹起りて、山の振動くこと、おそろしなんどいふばかりなし。われも人も、枕安くはいも寢らず只蹐踞て、明るを待程に、絹を裂がごとき音して、屋の棟ちかく聞えたるに、こは何事やらんとて、おそる〳〵紙窓の隙よりこれを見るに、一條の妖火西を投て飛失候ひき。甲夜に村長より、令しらしたる事も候へば、明るを遲しと米谷なる、木精塚のほとりにゆきて見るに、塚は掘發れて、唐櫃やうの物打碎けたるあり。又その傍に、二挺の鋤鍬あり。鬼のせし歟、人の所爲か、縁由はしり候はねど、まづこれらの趣きを、告奉らん爲に、彼處より直に參りて候と述訖り、唐櫃の碎たると、彼鋤鍬を進らしければ、半之進大きに驚き、そはわれみづから行て見んとて、獵夫等を先に立し、村長を後方に從へ、刀を腰に挾もあへず、米谷山に走登りて、現獵夫等が塚の壊れたるやうを見るに、

いふに違す。つく〴〵と思ふやう、風流士の大刀の失たるは、吉凶いかにとも量がたけれど、昨夜櫟本の松原にてありし事といひ、今又こゝに鋤鍫を捨たれば、人ありてこの塚を、發きたるに疑ひなし。しかるに彼寶刀、おのづから靈ありて、飛去たるもの歟、是も亦しるべからず。彼妖火、西を投て飛失たりといふによりて、再て尋思するに、陰の大刀風流女は、大内殿の長臣たる、陶晴賢が家にあれば、陽の大刀たる風流士これを慕ひて　遂に周防山口へ、飛ゆきたるにはあらぬ歟、推量をもて、思ひ決がたしといへども、風流士の失たる故に、わが身に罪被りて、いかなる禍にあはゞあへ。わが君無異に在さば、元來願ふ所なり。左につけておもひ右に就て思ふに、むかし村上親實が、いひつる事こそ著明けれとて、なか〳〵にうちも騒ず、遂に村長黛夫等を將て、山を下らんとするに、忽地後方に、物の倒るゝ音、地に響して聞えしかば、衆皆うち驚きつゝ、見かへれば、彼碑石にせられたる、楠の斷株が、おのづから倒れしなり。こは〳〵不思議とわれ先に、走りかへりて熟視れば、石に化たりける斷株、只一夜に朽やしけん、老木の立枯せし如く、西のかたへ倒れつゝ、幾段にか碎たり。現未曾有の事なれば、牟之進は、左右に心やすからず、碑石の碎たるを、一つ二つとりもたして、村長が宿所に歸り、さて丹二が亡骸を、近き山寺へ葬らせ、このゝちも、米谷に怪しき事もあらば、さそく平城へ告知よと、村長に聞えおきつゝ、從者等を將て、第二日の亭午に、平城へ歸りければ、まづ蟻松曾太郎に、ありつる事を密に告、おのが宿所へは得も入らで、やがて君所へ參つ、風流士の大刀の失たる、又木精塚のおのづから、倒れて碎たるよしを聞えあげ、件の敗厝櫝と、鋤鍬と、碑石の碎たるを見せまゐらするに、伊賀介順勝、その報す所を審に聞て、一とたびは驚き、一とたびは疑ひ、忽地面に怒氣をあらはし、局景かいやりて、膝立なほし、やをれ牟之進、木精塚の碑石は、原是楠の斷株なれば、朽て倒るゝ事もあるべし。件の大刀の失たりといふは、全く汝が虛言ならん。おもふに、汝と曾太郎と同意して、予を欺んとは思ひながら、言の用ひられざらんよしをしる故に、一言も爭はず、却て曾太郎を狹し、順勝を賺して、この結構をなすにこそ、曾太郎は面り、わろしと思ふよしを憚ず、いたく諫たれば、その罪許すべし。汝は辯佞にして主を欺く、その罪決して許しがたしと、縛懸ていきまきつゝ、怒にや堪ざりけん、佩刀の柄に手をかけて、擊も棄べく罵り給ふ。當下順勝の內室玉枕御前は、殿のいたく敦圉給ふ聲の、生平ならぬが心もとなく〳〵、女童して、見て參れと遣らひ給ひける

に、やがて走りかへりつゝ、如此々々と報知にぞ、常には出させ給はぬ、遠侍のこなたまで出給ひつ、正廳の廊に身を潜しつゝ、事のやうを聞くに、半七したりけるが、目今順勝の怒に堪ずして、刀の柄に手をかけ給ふを闚見て、咄嗟とばかり走りより、檻をおし開かしつゝ、半之進を後方に圍て、右手を著、わが君しばし怒を押て、わらはがまうすよしを聞召せ。君のおん憤はさる事に侍れども、この半之進は、半七たりし當初、君のおん愆を身に負ひ、百折千磨の艱苦を經たるものに侍らずや。加旃家の家うけ給はりてより、國豐けく、民安げなる、彼が功に侍るめれ。しかるに一口の寶刀に思ひかへて、手づから殺て棄給はゞ、世の譏人の嘲り、今眼前見るが如けん、唯舊功をおぼし召出されて、枉て許させ給へかしと、言語正しく諫給へば、烈火の如き順勝も、當然理にすべなくて、只疾視て

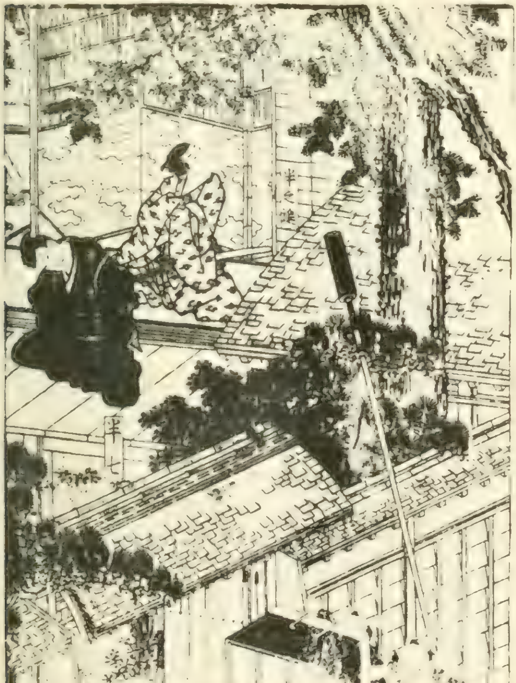
怪せしが、やうやくにして一間に復りつゝ、扇を開きて胸うち扇ぎ、人おの／＼始あり、よく終あるもの稀なり。渠奴が父半六は、編蓬の中より發跡て、五條の縣守をうけ給はり、剩渠奴は、近臣の列に入たるころ、をさ／＼名を取り、家を興さんと思ひしかば、予が愆を補ひもしつらん、今に至りては、渠奴既に家の家たれば、つゆばかりも不足なし。こゝをもて權を貪り主を蔑る、その心ざま、豈はじめの如くならんや。今度の罪は、決して免しがたしといへども、玉枕がいふ所も、又默止がたし。宿所に罷りて閉籠り、再での下知を等、罷り立ずやと、叱り給へば、半之進は唯々として、頓ておん前を退きけり。このとき蛾松曾太郎は、半之進が事心もとなく、殿の御氣色、いかにおはしますらんとて、潜に遠侍にをり、その為體を洩聞て、いよゝ胸苦しく思ふ程に、半之進は恙なく退出にければ、まづ

これを歡び聞えなどするに、傍に人もなかりしかば、半之進は頻に嗟嘆し、風流士の寶刀紛失したれば、吾儕恣に米谷にて、自殺するによしなく、阿容々々と歸りしかば、罪被らんこと、元來覺悟のうへなり。もし只今殿のおん手擊にならんには、孤忠の趣を書遺せし一封懷にあり。わが君これを樹さば、やうやくに曉給ひて、寶刀の事は立地に、思ひも絶給ふよしもあるべかりしに、玉枕御前のとゞめさせ給ふをもて、思ひし事の一度ならず、いたづらになりしなり。風流士の失たる事、吉凶定めがたけれども、わが君愛惜のおもひを絶給はざらんには、禍は禳ひがたけん、これ見給へといひかけて、懷に手をさし入れ、彼遺書をかい撈るに、何處へ遺たりけん、終に見えず。殿のおん前へ出るまでは、懷にありつと思ひし物を、もし彼處へや遺けん、今更に彼一封を見られ奉らば、實事とは、

給はで、さま〴〵にこしらへつゝ、詭欺るとのみ思召め、こは朽をしき事したりけりと、殊更に周章す。曾太郎は事の趣を聞て、且く尋思し、いな赤根ぬし、さのみ愁ひ給ふな。御邊必死を究めながら、その事稱す、徒に歸り給ふも、稀なる忠義を皇天の、憐み給ふ故なるべし。しからば今はからずして、殿のおん前へ遣たる一封は、猛き御こゝろを和るよすがとならんもしるべからず。長途の勞れも推量らる。三勝、半七、園花母子も、心苦しく待つゝあらん、退り給へと慰れば、半之進はちからなげに、刀を杖に身を起し、人間萬事塞翁が馬、吉もよしと定ねば、凶きも凶しといひがたし。けふよりわれは閉居の罪人、安危理亂を勘て、君を補佐して給はれと、いふ事毎に身を外にして、主のみ思ふ忠臣の言の葉せめてあはれなり。さる程に三勝園花、半七、平作等は、父に従ひて、米谷へ赴きたりし、私卒奴隷が物がたりにて、事のやうはよくしりつ。殿の御氣色は、いかに座すらん。わが家公の恙なく、疾退り給へかしと、君所のかたをうち瞻仰、今か今か、と待詫たるに、半之進はいたく憂る氣色もなく、罷かへりにければ、妻も子供も、そのほとりに圍居して、いかに〳〵と問にければ、思ふ程をばいひもしらせず、寶刀の失たるよしは、從者等に聞つらん。この懈によりて、勘氣を蒙り、けふより籠居て、再ての君命をまち奉るべき旨を仰られたり。平作はわが子なれども、笠松の家を續たれば、させるおん咎なし。園花もろとも立かへりて、家にある日は母に事へ、又出る日は君に事て、父が宿所へ立入るべからず。この旨こゝろ得候へと、叮嚀に說示せば、平作は、扇を笏にとりなほし、仰うけ給はり候ひぬ。但櫟本の松原にて、家尊の轎子へ鐵砲を打かけ、丹三を殺せし癖者は、元來怨を含むもの歟、これ疑ふべき最中なり。もしそのものを擒捕らば、寶刀の往方をしるよしあらんに、などてこれらの趣を聞えあげ給はざりしと、眞だちて問ば半七も、父がほとりに小膝をすゝめ、平作がまうす所、理にこそ候へ。おん身に仇をなさんもの、思ひあたらせ給はずや、といへば三勝園花も、もろともに眉を顰め、これはむかし相合橋にて、わが所夫に撃れたる、全八蝶九郎等に親族ありて、年來怨を報んとて、著覘つゝ撃損じ、なほ懲ずまに米谷なる、寶刀を奪ひて家公を、罪に陷さんと謀りしならん。さはあらずやといはせもあへず、半之進はうち咳き、こはよしなき事をいふものかな。彼全八蝶九郎等に、妻子ありし事を聞ず。よしや親族あらばあれ、渠奴等は犯せる科重き、天が下の罪人なりき。我一刀に命を斷とも、これを怨るによしあらんや。すべてかゝるときには、尾に尾を附てなき

事いふは、世間の習俗なるに、われから唱起すこと、さりとては愚なり。再ていひも出べからずと、氣色暴くいひ懲せば、衆皆有理と應ながら、なほ疑ひは解ざりけり。かくて園花は、半作を將て宿所に歸りしが、こののちは、主君に憚りて訪ひも來ず、半之進は三勝半七等、親子三人閉籠りて、日光だに見ずをる程に、妻も子どもも、いかで半之進が志をしるべき、風流士の大刀の往方をしらして、世間明くなし給へと、神に佛に祈るのみ、又せんすべもながき日を、くらし難たる身は春ならぬ、春もくれ夏闌て、五月二十一日の事なるに、續井順勝は、長臣蟻松竹太郎を仔て宣ふやう、赤根半之進を罪ある故に、嚴に推鎖おきしより、今ははや、八九十日を經たり。しかれども風流士の大刀を出さず、信とその罪を糺すべうおもへども、玉枕が理なく歎き諫るもうるさく、渠奴が舊功も默止がたければ、格外恩免の沙汰を加へ、けふより改て百日を限りて、彼大刀を出さすべし。しかれども思ひの外に、膽太き老奸なれば、却風流士をば、渠奴が宿所へ秘おきたる歟、これも又しるべからず。よりて孩兒半七を人保として、八海地の築島なる、四阿の裏に、捕置んと思ふなり。汝達豫てしるごとく、昔年先考北山なる、鹿苑院の金閣に擬て、茶亭を修造んとおぼせし比、後苑に廣く池を穿らせて、山河を沃入れ、池の中に二つの築島を造らして、一つの島には、辨天堂を建立し、又一つの島には、金閣の茶亭を修造給ひしが、いくほどもなく、閣をも亭をも壞れて、今は僅に一宇の四阿あり。且辨天堂へは、參詣の爲橋をわたしたれども、四阿はいたく荒たるのみ、彼島へは渡るべき橋なし。しかれば半七を捕おく獄舍は、この處にますかたまたあるべからず。日に只二度の飯をば、小舟にて運して與させよ。いかに膽の太き半之進なりとも、親として子を憐ざらんや。しかるとき心も子に引れて、彼大刀を出すことあらん。汝半之進が宿所にゆき向ひて、この旨を聞えしらし、半七を召捕へて、形の如くにせよ。もしつゆばかりも、私の意もて、半之進親子を憐ば、その罪渠奴と同じかるべし。かくの如くにしても、百日をいたづらに過さば、そのたびは許しがたし。半之進が班白の首刎らるべしと、信といひわたせよとて、肩と肘とを方になして、いきまき暴く仰するにぞ、竹太郎はあまりに苛き仰なりと思ひながら、諫て許さるべきにあらねば、已ことを得ず、半之進が宿所にいゆきて、主命を演說し、やがて半七を引立て、かへり去らんとする程に、三勝は、夫のうへに胸を苦しめ、夜だに安くはいもねられぬに、今又わが子半七が、囚徒となるをとゞめんと、思ふ[illegible]

る浮世を嘲のみ、蛯松ぬしも惜なし、おん身が智子の手作ならば、身にかへて勧解給はんに、血脈にあらぬ半七は、姪婿といふ名のみに、初花とまだ婚姻を、とりも結はぬを幸に、此方の凋落が疎しくて、腹きたなき事し給ふ歟と、手を黒ふ道に迷ひてや、心の闇に打碎も、八おたりなる恨のかず〳〵、濱の眞砂と盡ぬは名殘、惜み〳〵てよゝと泣。骨太郎は理りと、思へど豫て半之進が、心をしればとりもあはず、半七は今更に、母の歎きの痛しく、いと長やかに延たりし、月額の毛を廉鷹に着、母御前いたく歎き給ひそ。父囚徒となり給はゞ、いかばかりか悲しかるべきに、親に代るは子たるの道、よしや吾儕は火に燒れ、水に浸され千萬無量の、呵責に命を殞すとも、二親ながら恙なくは、不幸の中の幸ひなり。半七が事は只、思ひ捨て坐ませ。終には君の怒も解、あかき日光を見給はん日のなからずやはと思れば、三貯いよゝ担を先立て何かはせん。芝御池の中島は、かねて、はふり落る涙を拭ひ、賢くも聞近くて遠き配所なり。浪風に犯されて、え給ふ、おん身が心にさもあらぬ、竹く身を病し給ふなよ。三度の飯も人の手を、命をたすけられ、今を昔に語るとも、子待なばさぞな便なからん。おん身がひと



り禁島に、物思ふより家に居て、おもひやる母が胸苦しさを、今の別れの哀さに、ますとしりなば身を愛し、赦免のときをまち給へ、名殘をしやとかき口說、袂に縋りて泣沈めば、竹太郎も今さらに、強顏はひきはなちかねて、頻に歎息したりしかば、半之進はつと身を起し、刀の鐺突入れつゝ、二勝を推地と推退て、聲をふり立、前よりわがおし默をるをよき事にして、さまざまのくり言、聞くもうたてし。日來はさしも雄々しかりしが、子には亂るゝ女子の愚痴、蠕松ぬしのおぼさん程も、推量られて面ぶせなり。やよ半七、われ思ふ旨あれども、口外すべき事ならねば、母はさらなり、いまだ汝に告しらせねど、およそ此度の禍は、わが庶幾ところなり。汝も又父が志をくむ事あらば、親をも念とせず、主家の無異を祈るべし、こゝろ得たりや、よくこゝろ得よ、蠕松ぬし。仰つけ給はり候ひぬ。



いざ半七を召るべし。とく〳〵立と呵る子を、目に角つけて見送れど、こゝろに共に芝折たる、二十日あまりの軒菖蒲、晴れぬおもひの五月雨に、濕りがちなる黒ばえや、父かた榮え三勝が、身のうき雲を吹はらふ、風の使りも聞よりは、通ふよしぞなきわが子の配所、關は名におふ八海の、池より深き恩愛を、思ひくみ

つゝ曾太郎は、半之進に目禮し、半七を引立て、ゆくも送るも上下の、折目高たる武士の、意地はかくこそありけれと、感ずる赤根が私卒も、又蟻松が從者も、共に袂をぬらしけり。正是。

公道人情兩是非
人情公道最難爲
若依公道人情欠。
順于人情公道缺。

と賦したりける、世諺をおもふなるべし。

後記卷之四上終

池の中島の下

罪なくて、配所の月を見んといひし、大宮人は和歌の浦、船出もしらぬ、僻言ならん。不題赤根半七は、罪なき罪を家大人に、代ると思へばうしとせぬ、秣も戰ぐ秋風や、假初ながら九十餘日、八海池の中島なる、四阿に囚れて、こゝを配所となすわざも、なぐさめ難し寤寐なり。抑九山八海の池と聞えしは、當時鹿苑院の義滿公、洛北に金閣を造らし、退隱の地を占て、山水の美景を盡さる。しかるに永正のはじめに至て、順勝の父積非順昭、點茶の風流を嗜むのあまり、彼金閣に擬へて、三十餘町の後苑に、わたり五町の池を穿せ、池の中には、二つの島を築せて、これを鏡湖の池に擬へ、池中の奇石は夜泊石、亀山、赤松、畠山、九山八海石に至るまで、その面影をうつせしかば、やがて八海池と名づけたり。かく壯觀を盡すといへども、驕をませば身の仇多く、一家の難いで來たりて、順昭はじめてその非を暁り、享祿二年の春のころ、彼茶亭をば毀れたれど、東南の築島なる、辨天堂と、池の中島なる四阿のみ、そがまゝに殘されたり。順昭元來辨財天を、ふかく信じ給ひしかば、彼築島に、架たる反橋をば、今順勝の時だにも、折々修覆し給へども、北の島には橋もなく、彼四阿はおのづから、簷端傾き茅が棟も、只としぐ\に朽まさり、月より外にもるものは、袖の涙と透間より、秋風のみぞ音づるゝ。あなたの岸の松の聲、鴫の羽がき百羽がき、かき盡されぬ物思ひする、半七は只管に、父のうへ、母の歎き、わが身にしめてうら悲しく、池の波風もろともに、君の怒のやはらぎて、親の籠居ゆるさせ給へと、遙あなたの築島なる、辨財天を祈るのみ。元來遠き處なれば、岸の樹立に遮られて、中島よりは人影も見えず、只月の巳の日毎に、玉枕御前内庭傳ひに、腰の女房女の童を將て、辨天堂へ參り給ふを、外ながら見奉れど、憚りおもへば端ちかくはをらず、日に只三度の餉をば、管園より奴隷し
給するその舟すら、あなたの岸に繋ぎてあれば、浪のかよひ路度絶して、こゝより遙に念ずるのみ、おなじ御池の中ながら、辨財天へ參るによしなし。げに近くて遠きものは、鞍馬の九折とかや、清少納言が書るぞ宜なる。彼首に見ゆる小舟ならねど、身を繋る、囚徒は、近くて遠き神垣へ、運ぶ誠もとゞかぬ歟と、形なき世を喞つゝ、五月二十一日より、こ

こにあること四箇月に餘りて、いそがぬ月日もゆく〱秋も、九月朔日になりにけり。來る日の二日は限らせ給ふ、百日にはや滿ぬ。家傳は恙なくや坐すらん。寶刀の往方をしり給へる歟。母御はさぞなおもひほそりて、病著にや臥給ひけん、その音耗を聞たやと、こゝろばかりは飛鳥の、翅なければいたづらに、家居の方をうち仰ぎ、又俯沈めば水や空、空や水なる秋の雲、かはるにはやきおのが身の、往方もこゝに定めかねし、姨捨山にあらねども、照月見えぬ朔日に、何慰ん嫋竹の、小ざさが枝のうち戰ぐ、夕ぐれいとゞ心憂し。半七佶とおもふやう、至誠は神の如しといへり。誠をもて祈まうさば、いかでか納受の驗なからん。傳へ聞辨財天女を念するものは、猛利不可思議大智慧聚、不可稱量福德之報を得んと、光明經に說れたりっけふよりして三日が間に、父が越度を許されて、君臣和順ならんには、彼處の舟を夜の中に、こなたへ流して岸に著、御堂に參詣なさしめ給へと、毎夜々々、池水に浸り、垢離を執て祈るといへども、たゞ父も驗見せ給はず、はや



日になりにければ、半七ふかく望を失ひ、この日はわが父の、生死の際におはするならん。特にけふは巳の日なれど、王枕御前の辨天堂へ、參り給ふを見奉り

す。これも父半事にはあるべからず。父はお石田のさるゝ事、母御は何となり給はん。これは何とせんとばかりに、岸邊に立て躊躇し、彼舟こなたへ寄せ給へ、舟よ／＼と手を抗て、招くかひなきいにしへも、かゝるとは聞くや鬼界の島に、法勝寺の俊寛か、ひとり華洛を慕ひけん、其身はおなじ思ひなり。されば半七はこの五七日、夜も通宵ねぶらねば、腸斷れ神勞れ、岸の松が根枕にして、寐るともしらず臥たりしが、夜風のそよと身に入むに、驚されて身を起せば、日ははや暮て星光も、初更の比とおぼしきに、半七が孝心を、天女納受し給ひけん、彼首の岸に繋る舟の、おのづから纜解てや、風も吹ぬにながれ來て、いつの程にか島根にあり。半七今此舟を見て、いかでか心勇ざらん。念願成就疑ひなしと、跳り立て閃りとうち乗、其處ともしらぬ如法闇夜に、棹を操り水を掻、辛くして辨天島へ乗着て、舟を岸に繋ぎ、かい探りつゝ島に登りて、天女の御堂に詣るに、神燈はいと暗けれど、湖上の月を仰ぐがごとく、煩惱の雲忽地霽て、閻浮の塵に登るに似たり。信心肝に徹して、感涙を拭ひあへず、しばし廣前に額著て、父母の安泰を祈念するに、暗きかたに女子とおぼしく一聲よゝと泣にければ、半


半七八海地の中島に流さる

七大きに驚き怪み、其處にをるは何人ぞと、問ふ聲を聞しりてや、そは半七ぬしにおはする歟、初花に侍りと應て、にじりよりつゝ又問ん、言の葉も只泣ばかり、やうこそあらめと半七は、神燈の光に就て、左見右見れば、紛ふかたなき、云號の外從母女初花なり。思ひかけねば淺ましくて、又いふよしもなかりしが、且して形を改め、おん身玉枕御前に給事し奉る暇ありとも、夜をこめて人影なき、この築島にたゞひとり、詣りをるはこゝろ得がたし。吾儕中島に、囚徒となりしより、絕て父母の音耗聞えず、けふは實刀を進らすべき、百日の限りなり、父はいかにかなり給へる、しるよしあらばしらしてたべと、問ばやうやく頭を擡、白き手をもて黑髮の、顏にかゝるをかい遣りつ、後堂と正廳と隔れば、心にかゝる外父公のうへ、聞くによしなく侍るかし。猶憂事の數まして、過つる皐月の下院、彼首の島に囚れ給ひし、おん身が事を聞くにつけ、見るにつけては胸くるしく、夏の日ぐらし啼蟬の、こゝち裳脫て朋輩衆に、笑れたるはいくそ度、巳日々々はこの御堂へ、內廳さまの御供して、參るときのみ遠外に、覩る中島の四阿に、わが夫はひとり侘つゝあらん、鬼が島峯の果ならば、思ひやるのみかくまでに、人しらぬ歎きはせじ。處はおなじ苑の中も、島といふ名はあり礒海、ふかき緣しは幼稚より、親のゆるせし嫞夫なれど、君所隔て給事、をりふし顏をふり合す、鈴の間限の中垣も、結ぶ綱手はありながら、只三指の他人むき、それすら憂に外父公なり、舅君なる方ざまの、家の艱に夏瘦の、身はいとゞしく細りつゝ、秋とくらせば丈夫のうへ、まだ一夜さも新枕、かはら撫子女郎花、そぼつは袖の露の身の、ここに別れて消るとも、又環會後の世を、憑にかけて佛菩薩へ、朝な夕なに合す掌も、合し盡して頃日は、給仕も得せず局にのみ、夜あかし泣て侍りしが、亦この築島なる辨財天へ、理なき願ひをかけまくも、かしこの人目こゝの關、私には參られず、夜深て潛び出ばやと思へど、それも每房々々に、戶鎖あれば得もかなはず、只甲夜の間の物に紛れて、出なばなどか出ざらんと、わが夫おもへば怖さを忘れ、病の臥房を脫出て、七夜詣る天女堂、丈夫のうへをいへばさらなり、舅姑恙なく、身にたつ狹霧を吹はらはし、をさまる風も颯々の、松の齢に又千世ましまして、半七ぬしと後の世の、その後の世もそはしてたべと、背向もえせで面向の、ひのもの斷に、鹽斷に、かけてぞ祈る結願の、今宵はからずこの御堂にて、おん身にあひしは辨財天女の、借き給ふにや侍らん。そもいかにして彼處より、水を涉りて詣給ひし。おのが心の迷ひより、狐狢のわざくれにて、眞の丈夫ならぬかと、疑へば

又今更に、悔し嬉しき揚ませて、走り退きつゝ伏沈めば、半七聞て歎息し、結ぶは名のみの偽夫なれども、生涯その身をまかせんと、思ひ給へばこそかくまでに、心を砕ける物語、女子として夜を犯し、七たびこゝへ通はんこと、浮たる所為とはおもはえず、赤心はしられたり。われも又、親を思へば身を忘れ、辨財天女を信拝して、父の[illegible]、彼首[illegible]と、夜は池水に垢離を執、籠る日数は化にたちて、けふの一と日は絶體絶命、大女も[illegible]し給はぬ[illegible]、心苦[illegible]せしに、労れ[illegible]小夜時日睡程に、舟は中島に流れ来つ、原来念願空しからずと、やがて飛乗る小舟に棹し、これなる御堂へ詣れば、はからずも吾妹子に、環會の一縁由を、聞ば又われに[illegible]、昔に参る丹誠苦行、いひあはせねど合るは誠、災厄消除疑ひなし。しかはあれど、武士の家に仕る男女は、私に席を共にせず、況やわれは囚徒なり。おん身も又病ありとて、局に籠りながら、闇を越て潜出、こゝへ詣るのみならで、吾儕と憂苦を相談こと、今はしる人なしといへども、岩ものいふ世の諺、後に人もしこれをしらば、親の罪をますことあらん、とくとく下向し給へかし。われもはや退らん[illegible]いひつゝ、泣を引[illegible]、頃日の夜の[illegible]まだ闇もなき[illegible]を、誰に待るゝ身なればや、さは遽しくたち給ふぞ、會話[illegible]聞もしつ、聞し[illegible]身の憂を、思んとはおぼさずや。おん身は今茲二十一、年より弱く見え給へど、女子は殊に[illegible]易く、二十といへば[illegible]しの、森ならなくに年の浪、よるといふ字は嬉し[illegible]、なくて嬉しき君とわれ、ひとつによらば浦島が、一夜に齢老ぬとも、何かうらみ[illegible]、衷衣縫ひ縫ひ待針の、待つゝあるをしりながら、心つよしと嘲れて、夫もいはさにあらねばや、強面はえも立ず、おん身はさこそわれをおもはめ、われは又親の事を、念ずる故にけふまでも、結ざりける婚姻を、後やすく思ふなり。かくのみいはゞ人情を、[illegible]のと恨もせんが、親に代らば死をだも辭せず、今果に[illegible]は、惜む命も惜れ[illegible]、見苦き死ざま[illegible]、只身ひとつの半七は、かゝる絆の[illegible]れ、緣と時節をまち給へと、いはれてよよと泣沈み、身をつゆばかりも傷らぬを、孝行とこそ聞侍るに、よしや箇々の為なりとも、死ぬるを孝と思召は、こゝろつよさの慣ならん。[illegible]、婚姻せねば絆とならずや、いと強面と怨ずれば、半七は今更に、いひ脱るべき言の葉も、慈に立かねたり[illegible]、前面なる樹立の間より、燈燭のあかり閃々とし出つつ、前には潜行の[illegible]、左右には鞘かけたる、手燭影[illegible]、

築島の反橋を、跫然と足音高く、わたらして來給ふは、玉枕御前に在するやらん。こは時ならぬ物詣、思ひがけずと半七も、初花も周章、辟隱れんと思へども、只一條なる築島なれば、橋より外に路もなし。とやせまし、かくやせましと、胸うち騷げばさわぐほど、いとゞせんすべなかりけり。

浮名の嬬夫

浩處に前驅の女房、手燭を抗て堂内なる、男女を見て大きに驚き、且くおん先を駐め給へ。堂内に癖者の、潜り居侍るなりと呼れば、玉枕御前は鳥居のこなたに床几を立させ、曾太郎々々と召させ給へば、遙後方に候ひける、蟻松は阿と應て、袴の稜をとりながら、おん前へ參にければ、玉枕御前言語正しく、此如々々のものありと聞り。撿見よと宣へば、曾太郎應て手燭を把て、御堂の内なる癖者を、ひとり／＼に引出し、燭を抗てつら／＼見れば、こは淺まし。この癖者は、外侄半七と、女兒初花なりしかば、且驚き且怒り、恥をおもはぬ犬畜物、主を蔑剃、親の面へ泥を塗る、淫奔は何事ぞと、罵る聲のいと高く、扇を揚て打んとするを、玉枕御前聲かけて、東暫めよと垂き仰に、曾太郎は只齒を切り、握り固めし拳の上に、怒の涙ふりかゝる、身の愆に半七も、初花も地に平伏て、置ぞ迷る草の露、このまゝ消よと念するとは、玉枕はやく猜し給ひつ、はじめより彼ものどもと、しれどもしらぬおもゝちして、女の童に手燭を抗さし、それたる癖者面をあげよと宣ふになほ恥しく、大地に額著動きもえせず、そのとき玉枕は、曾太郎を見かへり給ひ、正五九月の巳の日には、缺さで詣る天女堂へ、重のほどにと思ひしに、今朝より勞る事ありて、いたづらに暮けしかば、身の罪も勿體なく、苑裏なれば甲夜の間に、參らんと思ひ立しかど、女子のみでは影護きに、曾太郎を將て來たりしは、その癖者等が運の究め、面はよしやあげずとも、稚きより召仕ふ初花なり、半七なり、今さらに見たがへんや。半七は中島に、囚徒となりしと聞るに、けふは百日に及びやすらん。月額の長うなりたる故歟、浪風に吹曝れたる故歟、思ふには倍す窶なり。又初花は、病著ありとて給事を、斷りまうせしその日より、いかに／＼と問せしに、思ひの外におこたりてや、潜びてここへ詣たるな、やよ淫奔もの、わが口親今更に、聞えしらするよしはなけれど、こは曾太郎にいふことぞ。男女の密通は、重き禁制としりつゝも、法を犯す、そはあるまじき事なれども、わかきうへには絕てなき、例にはあらぬかし。しかはあれど、半七は親たるもの、、生死存亡定かならず、その身も囚徒となりながら、潜に水を涉浪を越、こなたへかよふ

のみならず、何たのしみの亂淫密會、不義とやせん不孝とやいはん。縱一人たる所爲にあらず。初花も又しかぞかし。外父の凋落を外にして、天女の御堂へ夫を引入れ、靈場を穢し本尊を、その罪障は五百世、浮む瀬のなしとしらずや。この事君に聞えあげなば、彼等兩人がうへはさらなり、半之進は一家滅亡し、曾太郎も又無事にはあらじ。しかれば彼等が心より、道をしる親胞兄弟まで、祀られざる鬼とならん歟、悼てもなほ悼むべし。抑わらはがこの御堂へ、月毎に參るは何の爲ぞ。君はさらなり家子老黨、凡領内にあるとある、青人草の末までも、安かれとのみ祈りしものを、所も多きにこの靈園にて、稚きより召仕ふ、男女の命を斷ば、天女を恨み奉らんか、將わが身を咽んか、主の心になりても見よ。彼等も又親の子なり、淫を樂み迷ひを執り、こゝに會せしにはあらざめれど、いひ譯ありともいひ解によしなし。且初花はいとはやくより、半七に云號て、給事の年季滿なば、婚姻をとり結せんと、親どもは豫てより、準備をしつると歟、聞つることもありしかど、いまだ借の免許を得ざれば、夫婦なりとはいひがたし。とても脱れぬ罪人ならずや。初花は稚きより、わらはが使ふ女の子なれば、罪定んこと勿論なり。半七はいかにせん、彼もわらはに任せん歟。家の家たる曾太郎は、何とか思ふ聞まほし。人を憐む理非明白、かゝる婦人は世に多く、有がたきまでに忝き、仰なりとも聽かねて、身を悔うらむ、侄女兒より、親はますます面なくも、脱れ得がたき身の恥を、掩ふにあまる袖の露、胸さへいたく塞りて、畏りつゝついゐたり。且して曾太郎は、塵うち拂ひて膝に置、拳を握り肘を張らし、深務ものどもうけ給はりし歟。凡こゝに侍る女房達は、武士の女兒のみにはあらじ。或は坊賈浮浪人、或は村長農夫なんどが、女兒も採もあるにけれど、武家へ給事をれば、書義出しく、上さまの事見習ひて、物の品も學びたい、汝等は績井の譜代、家の故事を本とし、親にも絶て慚らず、主を恐れぬ大膽不敵、この年來の奉公に、何見習ひしかその首すじ、殊更に半七は、閑居久しき親の大難、その身も配所にありながら、父の生死の際なる、けふに至て配所を脱出、女子を伴ふ放蕩非法、よしやその身を八裂にし、割といなみても親の亂辱を、贖ふには得も足らず、今にもあれ半之進が、約の趣を傳へも聞かば、腸熱怒に逼り、いかになるらんこれもうたてし。親の名を穢さず名を穢す、四足南貫の白徒等に、説聞するも穢しき、埋れたる士親の、仰は重き身の慣に、半七はやゝ擧雑し頭を擡、愚なる身と親の窮嘗、わがうへさへに打忘れて、女子を伴ひ候はんや。しかりとも配所を越て、この御堂へ參りし科は、脱んとするとも脱れがたし。但

初花は病を忍び、外父の厄難消除の爲、僞にこゝへ詣る折　はからずしてこれと逢ぬ。さればその罪も、半七より輕くやあらんと、いひつゝ、傍を見かへれば、初花は目を拭ひ、半七ぬしに過はなし。爹々の趣度を許さるべくは、彼首の船を吹よせて、驗見せ給へとて、天女を祈念し給ひし、誠とゝきておのづから、舟中島へ寄りしかば、そのよろこびをまうさんとて、こゝへは詣給ひしなり。身を忘るゝも親の爲、そを猜憎しとおぼし召ば、初花を罪なはして、半七ぬしを許さし給へ。いな初花は女子の事、その愆もわれより輕し。只半七が首を刎て、助るべくはこの女子をと、いはせも果ず曾太郎は、血ばしる眼に睨も尖く、いはれざる品定め、罪輕くとも重くとも、賞罰は君の隨意、其を汝等に問給はんや。縱　密　會せずといふとも、柳下惠にあらざりせば、いかでかは聽さるべき。密夫淫婦は輕重の沙汰に及ず、覺期せよといたく罵り、肩衣の腋引延しつゝ、形を改め地に手を著、君夫人へまうし奉る。願くは罪人等を、曾太郎に給はらば、立所に首を刎、しかして後にこの趣を、殿に報知奉らん。偏に許させ給へかしと、進幾親は子どもらに、なほ生恥をかゝせじと、思ふは慈悲ぞ。玉枕御前は、思ひくみつゝ頭を掉、いなそのことは許しがたし。



最重き罪人に、その場を去らせず刑すること、積井の家風なるよしは、婦女子なれども、われよくしれり。しかりとも天女の御堂近く血に穢さば、その祟脱れがたけん。よりて思ふに、その罪人等はそがまゝに、この池水に柴漬にせん。如此するときは家法を破らず、天女の御堂も穢すに至らず。この旨聞ては彼ものどもは、半死てぞあらんずらん。人死すれば靈となる。半七初花が魂、この池水に漂んときよくうけ給はれ。汝等眞に淫奔ならで、親を思ふ誠より、則を踰たるものならば、いと憐べきことなりかし。主だにこれを憐むに皇天いかでか憐ざらん。一旦の恥辱を忍び、魂、遠く大和を離れ、親に代りて風流士の、寶刀の往方をたづね求めて進らしなば、忠孝共に全からん。そのときにこそ舊惡の、浮名を雪る池水に、魂魄再びかへれかし。親は籠居、子は囚れて、いたづらにたつ月と日を、百日千日累るとも、風流士を索出す、暇は絶てあるべからず。さるを汝等法を犯して、池水に沈られ、たましひ自在に天外を飛繞り、寶刀の在所をしる事あらば、生るにましたる幸ならずや。又半之進が事はともかくも君を諫め奉りて、翌の命はたもたすべしと、わらはが思ふことよしを、彼等が死して後の日に、一扁の回向して、得さする事の



あるならば、告もしらせよ衆婢、こゝろ得たりやと謎に、かけて釋する縛の、索よりもなほ身を縮る、恩義には今面り、斬るゝよりなほ胸にこたへる半七初花いへばさらなり、曾太郎は只練貫の、熨斗目の袖に感涙を、禁難れば列居たる、女房達に女の童、はした物さへもろ共に、坐に袂を濡しけり。且して玉枕御前は、女の童に齎したる、服紗物を開して、蛾松に對せ給ひ、やよ曾太郎、例のごとく、辨財天へ進らせんとて齎したる、白銀十枚こゝにあり。しかれども、罪人に觸れたれば、今宵の參詣を止めなん。さるときは、この白銀も穢れたり。彼等を水中へ沈んに、壓石なくてはかなふべからず。この白銀は究竟の壓石、兩人が袂へ納れさせよ。十萬億土の遙き首途、死ては冥土の路費とも、なるべきものぞと外々しく、法施の銀を曾太郎に、とらしつゝ又宣ふやう、彼等既に罪定れば、死たるものに異ならず。人は最期の念によつて、永く生を塋とかや。云號たる婿夫の緣しを、今生に結び果ずば、未來孤獨の餓鬼となりなん。死後としいへば今許す、婚姻の盃せば、三三九品の淨土に生ぜん。この池水を酒に擬へ、親も許して得させよと仰れば、曾太郎は面を背けて鼻うちかみ、這奴等はいかなる月と日の、下に生れてかくまでに、高き恩惠を受るらん。推辭奉らんは物躰なし。冥加にあまる罪人なりと、應まうせば腰婢なる、龍田吉野がこゝろ得て、天女の御まへの淨手鉢、柄杓を長柄銚柄にて、婿夫を結す水鴛、言祝せねど颯々の、松風の音に夜は深たり。玉枕これを看して、現以つかはしき夫婦なり。かくては迷はで佛果を得なん。やよ曾太郎、長僉議して更闌たり。此罪人等をもろともに、彼處の岸より沈身に被よ。こゝより見ゆる船形の、巖に打中骨を碎かば、なかくにこゝちよけん。舟の見當をたがへなと、仰するは彼舟に、乘せよとなりと曉りつゝ、立かゝる親の貌、これ見了かと初花は、うち仰ぎつゝ半七も、もろ共に合す掌は、主と親とに辭別、物いひたさをいへばえに、解棹舟の流し雛、掠上左右に搔廻む、曾太郎はあらやかに、岸より艇と衝落す、水底ならぬ船の中、白銀さへに投入れて、浪のまにく推流せば、玉枕御前はおん聲高く、罪人等が死骸浮あがらば、再び岸へよることあらん。曾太郎はこの夜の中に、水門を開かして、下硤川へ流しやれかし。いざ歸らんと徐やかに、床几を立せ給ふにぞ、銀燭畫燭續かへて、手にく抗る燈火に冊く夥の女房たち、前驅後從も嬋やかに、立ならびゆく夜の花、中に强顏蛾松は、易ぬ操に矛を棄る、浮世の藪の行植の、樅も檜も隔ねど、闇は善惡なき船の中、目道る半七初花が、火光目當にふし拜み、繫ぬ舟とゆく水の、往方は更に定めかねて、秋の夜長歎くなるべし。

占夢南柯後記巻之四終

三七全傳

占夢南柯後記 一

第三篇

洪容齋曰く、漢藝文志七略雜古（占）十八家、黃帝長柳占夢十一卷、甘德長柳占夢二十卷を以て首と爲す。其說に曰く、雜占とは百家の象を紀し善惡の證を候す。衆占は一なり、而して夢を大と爲す故に周其官有り、周禮大卜三夢之法を掌る、一に曰く致夢、二に曰く觭夢、三に曰く咸陟。鄭氏おもへらく致夢は夏后氏の作る所、觭夢は商人の作る所、咸陟は夢の得るを言ふ。周人焉を取る、而して占夢專ら一官たり日月星辰を以て六

再編占夢南柯後記序

洪容齋曰。漢藝文志七略雜古十八家。以黃帝長柳占夢十一卷。甘德長柳占夢二十卷爲首。其說曰。雜占者紀百家之象。候善惡之證。衆占者一。而夢爲大。故周有其官。周禮大卜掌三夢之法。一曰致夢。二曰觭夢。三曰咸陟。鄭氏以爲致夢夏后氏所作。觭夢商人所作。咸陟者言夢之得。周人取焉。而占夢專爲一官。以日月星辰占六

夢の吉凶を占す。其別に曰く正、曰く噩、曰く思、曰く寤、曰く喜、曰く懼。季冬王に夢を聘ふ。吉を王に獻ず。王拜して之を受く、四方に舍萌するに及んで以て惡夢を贈る。舍萌とは釋采のごとし、贈は之を送る也。詩書禮經載する所、高宗說を得ると夢み、周の文王帝九齡を與ふと夢む。武王紂を伐つて朕が卜に協ふと夢む。宜王牧を考す。牧人熊羆虺蛇の夢有り。彼の故老を召して之を訊す。占夢は左傳書する所尤も多し。孔子夢に兩楹に坐奠す。然れば則ち古の聖賢未だ嘗て夢を以て大と爲さずんばあらず。是を以て七略を見る者此の如し。魏晉方技なほ時に

夢之吉凶。其別曰正。曰噩。曰思。曰寤。曰喜。曰懼。季冬聘王夢。獻吉于王。王拜而受之。及舍萌于四方。以贈惡夢。舍萌者猶釋采也。贈者送之也。詩書禮經所載。高宗夢得說。周文王夢帝與九齡。武王伐紂。夢協朕卜。宜王考牧。牧人有熊羆虺蛇之夢。召彼故老訊之。占夢左傳所書尤多。孔子夢坐奠於兩楹。然則古之聖賢。未嘗不以夢爲大。是以見於七略者如此。魏晉方技猶時

或は之有り、今人また意を此卜に留めず、市井の妄術と雖も在る所林の如し、亦一人の占夢を以て自ら名のる者無し、其學殆と絶ゆ。又李瑩財貨銘に曰く、財貨將に至らんとす、夢穢寺ぬべし、或は穢或は虺、乃ち玉乃ち金、穢は親むべく、虺は玩ぶべしと、乃ち此銘を獻じて以て貪夫を激す、此に由て之を觀れば、夢に吉凶の應報有り、而して偶然に非ず、故に吉凶應報有りとし、而して吉凶應報を爲す者は偶然あり、匪彝に曰く、癡人の前に夢を說かずと、余が說く所豈夢寐の吉凶ならんや、人間萬事、夢に非ざる者莫し、因て是篇を命けて以て蒙昧を覺すと云ふ

辛未初冬朔　玄同陳人識

或有之今人不復留意此卜雖市井妄術所在如林亦無一人以占夢自名者其學殆絶矣。又李瑩財貨銘曰、財貨將至、夢穢可寺、或穢或虺、乃玉乃金、穢可親、微虺可玩。敗敢獻斯銘、以激貪夫。由此觀之、夢非故有吉凶應報、而爲有吉凶應報者偶然。匪彝曰、癡人前不說夢。余所說豈夢寐吉凶耶、人間萬事、莫非夢者。因命是篇以覺蒙昧云。辛未初冬朔

玄同陳人識


福在勤
あんじゆ姫
赤根半之進


小畔の尼





もろこし人の詩を賦し文を作るに、撿子を左右の壁に貼して、常住坐臥にこれを見、これを唫じて、もし一字の損益あるときは、必これを改むとなん。しかるに余が毎歳の著編は、只速に成をもて利とす。この故に絶て一とたびも藁本を更ず。はじめ五六日、まづ時代を定め、地名を卜し、人名を撰み、許多の脚色を巧出し、しかして藻を綴るに、筆は手の動に任し、文は意に出るに任して、且くも止らず。もし手爾遠波のうちかさなりたる、將懊脱あるときは、粘してこれを改るのみ。余嘗戯編に、風をなす。文は雅俗をまじふといへども、雅言を好まず、これ婦幼に通じ易からざる故なり。又唐山の俗語を切ぬきにせず、これ讀者文字目なれず、讀に隨て煩しければなり。但その趣、雜劇に似たるあり。しかれども雜劇と同じからず、又雜劇に似ざるあり、しかれども雜劇と合するが如き、件々里耳に入るをもて旨とするのみ。今年著す所、明年は皆忘る。こゝをもて年々の著編、指を僂に至るといへども、未嘗勞を覺す。所云瞽者蛇に懼ざるの類なるべし。

玄同陳人再識

第二編　占夢南柯後記巻之五

附言

およそこの物がたりは、天文十九年に起て。同二十一年に盡。前後僅に三年を經たり。蓋前帙四巻に說ところ、天文十九年冬十月六日、赤根半之進、父子夫婦、蟻松曾太郎等、浪速の法善寺に、考妣の菩提を弔ひし事、敗鐵傘介が養母晩稻が夢の事、孝子傘介千日墓に施米を獲て、はじめて父の仇人を知る事、敗鐵四五六、暗に傘介をたすくること、蟻松曾太郎面を犯して、順勝を諫る事、赤根半之進君命を受て、米谷山へ赴く事、櫟本の林原に、傘介赤根半之進を埋伏する事、晩稻自殺して、はじめて素性を物がたる事、赤根半之進更に主君の小刀を獲たる事、四五六傘介夜米谷山なる木精塚を發事、順勝怒て半之進を斬らんとする事、半之進蟄居の事、順勝曾太郎に命て半七を池の中島へ謫す事、辨天堂に半七初花にあふこと、玉枕御前陽法を正して、陰に半七初花を助る事、すべて十回、（池の中島の段な上下とせり。）前帙四巻こゝに盡。この編は笠松平作が事に起て、をさ／＼半七お花が顛末を説たり。今釐て二帙とするものは、例の書肆が所爲にこそ。

秋雨の笠松　上

半七初花が事、その曉に、曾太郎より消息して、密に半之進に告にければ、赤根が閫宅更に一層の憂苦をませし。半之進が憤はさらにもいはず、三勝はいとどしく、苦しきうへに胸を苦しめ、わが子のことをおもひやるに、玉枕御前慈悲深く、おはしませば、半七初花は密に命を助られ、池の小舟にうち乘られて、水門より脱れ出たりとか聞けば、せめてものことにおぼえて、又慰るよしあるに似たれど、さし詰るは良人のうへなり。限らせ給ふ日數もきのふにて果たり。けふはいかなる仰やあらんと、問かたもなき物思ひに、眉根をひらく隙のなければ、匿むとすれど私卒炊女なんどのはや知りて、彼處に集會こゝに團居て、主の陰事いふもうたてく、もたれ柱に身を倚かけて、痞を楚と押てをり。沿處に寢元に使はるゝ、女の子遽しく走り來て、園花さま夏山さまの、詣來給ひぬと告にければ、三勝忽地頭を擡、こはこゝろ得ぬ、やうこそあらめ。まづ客房へ誘引てよと、いそがしたつれば、應もあへず走り去程に、三勝は笄取て鬢掻揃て、帶を結びそへなどして、緣頰傳ひに客房の、障子引開つゝ裏にいれば、園花は八丈絹を京染にしたる袿衣に、白無垢の衣二つばかり下襲にして、いろ〳〵と摺箔したる襠衣に、練の帽子を戴き、夏山はおなじ絹の色異なるに、仁田山紬の緋裏衣したる袿衣に、白無垢の衣二つ三つ重襲て、しゝらの練貫に緋裏なる襠衣の下に、僅に三歲兒の平太郎が、熟睡せしを搔抱けるが、共に帽子は素かり。從者は、後門の裏に憩をるとおぼしくて、庭の築垣に、あなたより立かけたる挾箱の油單、垣より上に些し見えたり。當下三勝は、園花夏山等に對ひて、迯に秋の冷やかなる安否を訊問、恙なきを祝しつゝ、さていふやう、家公嚴に殿の勘氣を、蒙らせ給ひてより畏みをれば、親族たりとも訪ひ訪るゝ事をえせず、百日あまり中絕たるに、けふはいかなることのありて、新婦御さへ件うて、俄頃にかくは訪せ給ふ。物詣のかへさにや。いと綺羅々々しき打扮にて、來給ひけりと憂事を、憂とはいはで外々しく、詰る底意を推量る。園花は心にかゝれど、面りにはいひも咎ず。數ならねども家公の側室、平作が母に侍れば、かばかりの衣着たらんとて、驕れりとは誰かはいはん。もろ共に籠居ぬ世の務は疎しけれど、それも良人の志に悖らじとての髮化粧、心苦しさを推し給ひね。特にけふは限りある、日數も化に果たれど、寶刀の往方はしれざるにや。加旃昨夜の事、半七がこよなき愆しいだしたりと、藩中の風聞、人の口には戶も立られねど、聞るよしなき良人の閉門、こ

の、えいかなる果ぞおらんとうち歎け、嘆くのみなる女子のかひなさ、兄半七は、いはれぬ月よりの癩病にて、今に至る、實達する病者には、何商賣の暇もなし、只夏山とさし對ひ、とやらんかくやし思ひつゝ、思ひかれたる物病、かゝる時には殊更に、悪むは神徳佛力と、春日の社へ月詣、させる驗はなけれども、家に公なりおん身なり、恙なく坐する事、これも春日の擁護ならめ、業よとの使は給はられ、半七が事聞ばなほ、君所の沙汰も心もとなく、養生を幸に、夏山俗で押懸客、物思はしき折なるに、心なしとな挟し給ひそ。うち籠て坐する故か、顔の色も常ならず。半七はいかになりけん、辛く命を助りしは、玉枕御前の賜にて、良ようちの歎ひと、人もこそいへ姉御前の、髪を撫て顔を掻く、御こゝろの中推量ればいと痛しと半いはせず、三勝は眉根を顰め、嘸園花どの、半七なと名の隅の、圓くなるほど宣へど、彼も又良人の肉身、おん身が化ぬものなりしに、さのみ情げに宣ふな。勿論半七が不義不孝、こはいはでもの事ながら、その水元はおん身が姪御、初花どのゝ淫奔に引こまれたるわか氣の悪さ、智者も勇者も色には迷ふ、狐が落ればなか〱に、傍の人には得もならじ。いひ出しても給ふなと、此の事も氣にかけて、日來に似げなく角立つ、笑の刺を棚の糸に、無理な通してうち微笑み、姉さまの何宣ふやらん、吾儕はおん身の妹ならずや。しかもば在の半七を、生ぬものとて憎むべき、恨がありや、聞まほし。いな恨がある敷なきかはしらねど、妹にもせよ園花どの、おん身が兄公は二代の執柄、氏といひ隷といひ、大和に聞えし名家の末、吾儕はおん身が姉なりとも、父は盲目、この身は舞妓、賤しい母が氣を禀たる半七が淫奔を、笑ふとならば初花は、答々に似ての淫奔か、叔母御に似ての淫奔か、おん身が心に問て見給へ。異父の姉妹でも、生涯まかする夫はひとつ、哀めに栗とやらん、日來の始を傷あへず、新嫁御前侶て被佛にては、半七が事いひに來て、吾儕を夫に嫌せて、おん身が母屋へ居らんとは、憎しい妹君、かゝる時には殊更に、吾儕も心つよう侍り。有るきは只妹にこそと、うちかみ笑ひつゝむかひ水を、焼つけられし園花も、忍まにえたへず面瞋やかなる、舊衣の衣紋かきあはし、こゝろ得ぬ事宣ふかな、夫はしきの備事せば、少かりし時五六年、思ひほそりて病はせぬ。花あるときだに稀びたる、心は絶てなきものを密にいふ證文を、出し後れて四十あまり、髄も既に小動のいそお近きに聊しげなく、夫婦仲て何かはせん、良孫の見るめも着給はずや。姑なればとて理なきかす〱、妹にはいふもの憂、言いはではと、膝立なほせば、園花も與に手に、

小膝すゝむる傍いたさに、夏山は後方より、しば〳〵密と引母の袂も、只まろかれと思ふかひなく、揮放されて又縋禁、母さまこれは怪からずや、腹たゝしき事ありとも、閉籠られて坐します、母屋へ來まして聲高に、諍ひ給ふは大人氣なし。傳聞なる胞姉妹の、貫女貞婦と譽られし、松の操を今さらに、易て迯に仂なく顔に楓を見せ給はゞ、血で血を洗ふ世の譏り、影護と後に只、悔しくおぼす事もあらん。外伯母さまはいとゞしく、氣さへ心も結れ給へば、憎からぬ人を恨啣て、生常にはあらぬ物いひざまも、有べき事と聞ながし、慰てこそ邂逅に、訪せ給ひしかひもあれ。喃外伯母さま、具の胞姉妹におはせばこそ、いふまじき事をも聞え、回答まじきよしをも回答て、うち腹たゝし給ふものから、それも隔ぬ誠は齊一、世にいふ親の泣聚と、思ひかへして許させ給へと、勸解る健氣さ怜悧さを、こゝろに譽る園花と、背あはせの三勝は、見向もやらず冷笑ひ、母御ひとりではいひ負んかとて、加勢に來ませし新婦御寮、口狀はいと爽なり、吾儕も舌を卷てぞ侍る。半七と云號し、初花はおん身の姉御前、彼淫奔に似給はゞ、平作ひとりも得も守らじ、はやう子もちになり給ひて、心憂こそ在らめと、取も著れず嘲哢せられて、夏山は忽地に、貌に夕陽の映ながら、袖は涙の雨催ひ、又いふよしもなかりけり。論は無徒と園花は、副帶引縮立あがり、夏山何も宣ふな。いへばいふのみ狂女と問答、家公におはで歸る、遺憾さは限りなけれど、とても執次ものはなし、瘧病する平作に、留守さしたれば心もとなし、誘たち給へといそがせど、なは立かぬるをあらやかに、引ば忽地搖覺されて、よゝと嗄る平太郎を袖に抱縮斂つけても、泣止ぬ子にせんすべなく、ようやくに身を起す、夏山よりも園花は、こゝろ母屋に遺れども、留りかねし孫廂、緣頬の障子引開て、出んとすれば外面に、走りちがふ人音して、君所よりおん使さむらふと、呼門ば、吐嗟とばかり三人が胸に、雄と答て立止る。園花は今更に、歸るにもえかへられねば、夏山を見かへりつ、おん使ありと呼門聲を、聞てはいかで歸らるべき、今一時が家公の、生死定におはするぞ。此方へ來ませと揉より、案内しりたる夫の宿所、先へ立つゝ緣頬より、出居の杉戸露ふかき、袖うち合す胸の中、あくるもいとゞ佗しらに、納戸のかたへ身を避たり。

秋雨の笠松　下

思ひ定めしことながら、三勝はいとゞしく、心も心なゝめなる、床の懸物引なはし、物いそがはしくとり納れば、半之進は衣裳を整、障子左右へ開かして、式臺まで出迎へ、今か〳〵と待程に、庭門

陳しゝ從者等が、舁入るゝ轎子を、敷筵の半までに、擔ぎよにおし著れば、半之進夫婦禮儀正しく、轎子の戸を引あけつゝ、よく見れば使者は別人ならず、赤根が二男半作なり。今年二十一、弱稚木の二代の笠松、身長高く相貌秀、色いと白く又蒼く、病中なれば月額は、熊毛のごとく、黑ければ眼睛さへいかめしく、茶褐の肩衣長袴、轎子より先さし出す、刀を縁に、突立、擔ぎ出、彼首是首を信と見て、うち絶倒宗尊大人、外母公も甚なくや坐する。親子の恩義はこれ私、癈病にて籠居れども、君命脱るゝに所なく、おん使を承て、笠松平作發向せり。やよ從者等、汝おの〳〵退て門外に且くまて。とく〳〵といそがし立し、誘赤根ぬし、役命なれば上座を、許し給へと刀引提、床間を背になして、居長高く無手と座す。肩つかひも重くれし、殊なる氣色に三勝は、呆れ果てうち瞻り、君所よりおん使と、いかめしく呼門を、何人ならんと思ひしに、此方の二郎の笠松どの、よしや君命なればとて、親を親とも思ひなしせぬ、虚物體は癈病の、熱にや浮され給ひけんと、いふを見かへる半之進、無禮なせそと推默らせて、恭々しく頭を低、けふの御使は豫より、心まちいたすといへども、閉居の折なれば設もせず、ありの隨なる管待も、乃守へ憚る質素、仰の趣うけ給はらんと、おそる〳〵席をすゝむれば、笠松扇を膝に衝たて、赤根半之進謹で承れ。汝いぬる二月十七日、米谷なる本精塚を發、風流士の大刀を、とり出すべきよしの、おん使をまうし請ながら、太刀は失たりと僞りて、これを進せず、前後二百日に近き光陰を、いたづらに送りしは、偏に主君を侮るに似たり。それのみならず、長男半七は、配所を脱出て、淫樂を事とせり。これ人たるものゝ所行ならんや。よりて件の白徒をば、柴淺の刑に行れ訖ぬ。併その罪父子の間にあり。此彼犯すところ輕きにあらねど、格外の慈愛をもて、今日切腹せしむる條、仰の趣件のごとしと、逃もあへぬに三勝は、聞にも得堪ずはふり落る、涙にかすむ目を拭ひ、いと恨しげに平作を、つく〴〵と見て咽かへり、親の危窮を身にかへても、ふうし宥るは子たるの道、さまで孝心あらずとも、父が頸刎おん使は、推辭とも推辭るべきに、撰擇まれしを身の幅に、病を推て親の宅を、踏荒しに來る氣閙もの、現逆さまの世なるかな。妹は姉を耻しめに、新婦よ孫とを將てぞ來る。子は又親の死を促す、使に立て天をもおそれず。幼稚ときにはかくまでに、鬼々しとは思はざりしに、園花のみか、その子まで、心神天魔に奪れけん。使に立する君も君、形なき身は惜からねど、昔には似ぬ當家の盛敗、伍子胥死して呉王滅び、范増去て楚國傾く、

世の常言も今更に、思ひやられて哀しやと、世を恨み、父身を恨なみ、一聲高く泣沈めば、半作はうち仰きて、呵々と冷笑ひ、おなり説たり故事來歴、直弱が身を代んとし、親を救って名を取りしは、廼ち聖の取ざる所、遠き漢土はとまれかくまれ、近く本朝保元の、むかしをいへば左典廐義朝々臣、父爲義を誅したる、勅令なれば是非に及ばず。賞は臣の求る所、罰は君の行ふ所、豈私をもて論せんや。この故に男子たるものは、家に在ては親に事へ、出仕しては祿に死す、忠孝兩ながら全くしがたし。よしなき怨言傍痛と、俺までに挨すれば、半之進莞爾と笑み、保元の順逆は、先哲既にこれを論す。上は兄弟牆に鬩ぎ、下は親子仇をなす、三綱紊れて人道立す、わが君も又如此なり。使者の人躰こゝろえがたし。全く主君のおん僻事と、いはせもあへず眼を睜り、臣として君を挨せば、これを忠義といふべき歟。さる馬鹿もの丶主とし

いな爭仰を推辭まうさん。推辭ずは切腹らば、縛頭列れぬ前に、袖を拂てなどての、用意々々といそがせば、半之進座を去ざる。言承せぬは命を惜むや。いな爭占て、泣沈みたる女房を、佶と見やりて命を惜むべき。しからば仰を推辭るゝや。やよ三勝、豫て覺期の上なるに、とり亂



すは武士の妻に似ず、樋高の折敷肚斷刀、とく〱もてしと焦燥にぞ、是非もなみだをかき拭ひ、かき拂ひても滯かへる、引提の水の湯となれど、さむるに早き夢の世と、思へども又思ひかねて、やうやくに身を起し、國遠ければ有斯とも、お通陶五郎はいかでしるべき。せめて半七が宅にをらば、ちから草ともならましものを、たま〱後房に妹はをれど、良人の末期を外にして、面出しせぬは鬼魅蛇魅。わが腹貸さねど只ひとり、こゝらにをれども赤根どのゝ、子といふのみなる寃敵、とてもかくても吾儕のみ、薬なく物をおもへとて、出雲の神や結びけん、今にはじめぬ惡緣の、糸の紊をいかにせんと、嗇然として納戶のかたへ、去んとするを遣りも過さす、平作やつと聲をかけ、內室且く留り給へ。肚斷刀はこゝにありと、いひつゝ腰なる扇を取て、半之進に投與るを、膝へも落さず右手に受、扇を用て



刀とはと、問は平作膝すり寄せ、式作法に任する扇腹、介錯は親子の好身、平作によつて自殺を許さるゝは、眞の武士につかまつれど、亦是君の命なりと、說あるべき事、縛頸刎たるべき、罪犯なれ示せば半之進は、扇をとりなほし、冀自ども當家の家、遂一等を降されて、古例し、その罪にあらずといへども、志を

遡るときは、君の非を謗るに似たり。實に諫言容られざるをしる故に、米谷山にて肚かき切り、君に曉らせ奉らんと、思ひしことも鶍の觜、齟齬ては今こゝに、死て益なき身の薄命、これまでなりと、もろ袒ぎ、扇を取て戴ば、するりと引拔く平作が、刄の光りに三勝は、覺期しつゝも忍れず、走りよれば笠松は、妨すなと長袴の、裾蹴かへして寄つけねど、左手へ繞り、右手に携るを、半之進見るに得堪ず、妻の帶際引戻し、膝に押へて動せず。いざ介錯と合掌すれば、健氣なり觀念あれと平作は、父が脊後に刀尖を、肩より閃りと突出し、又閃して引く刄を、とり直しつゝわが肚帶の、結目のあたりを弗と斷れば、はらりと釋る帶とともに、鮮血さつと濆り、大腸小腸長やかに、はふり出れば笠松は、しばしも得堪ず刄を捨て、膂居に撻と倒るゝ音に、佶と見かへる半之進は、なか〳〵にうちも騒がず、孩兒ふかくも誤りしよ。汝ここへ來つるはじめより、血色の常ならざる、ものいふ毎に呼吸緊きは、深痍負ぬとしりながら、そのせんやうを見つるなり。父に代て死んと思ふは、子の志なるべけれど、汝には、笠松氏を冒せしかば、わが子にしてわが子にあらず。實父に孝を盡すとも、養家を斷は義にあらず。よしなきことをしてけりと、聰く察する言の葉も、今ぞ散ゆく子の爲に、恩愛の涙落かゝる、膝も放めば三勝は、慌忙き身を起し、平作を見て吐嗟とばかり、氣づよういひしも折易き、玳瑁の笄の落てこゝろも紊れ髮、長き別れになりける歟と、啜かへりつゝやうやくに、抱き起せば平作は、眼を睜て息を吻、爹々公外母御前假初ながら、心にあらぬ惡言を、さこそ憎しとおぼしけめ。なき身と豫て思へども、はじめより明白に、主君の内意はつげがたくて、親を罵り死を促せしは、實事ならねど五百生口なきものに生れやせん。平作がけふの自殺は、全く養家を斷にあらず、只是君父の爲なりと、いふ毎に流れ出る、鮮血の上へうつ俯に、仆れんとするを三勝は、背より抱き留め、やよ平作どの、焦燥給はゞ危からん。いふことあらば聞もせん、且く心を鎮め給へ。虛言なりとはしらずして、鳥獸に比へつゝ、いひ罵りたる女子の淺はか、家公の子なるもの、かばかりの志なからんや。さがなかりけるわが口の、今はなかなか耻し。姉は何處にをることぞ、夏山御前はまだしらずや。親子夫婦一生の別れともなるべきにと、いへば平作頭を擡、母にも妻にも豫より、覺期さして候に、今亦こゝに泣まつはれては、おのが黃泉の障とならん、只うち捨て置給へ。抑此度父兄の厄難、いかにもして救ひ進らせんと、千々に心を苦めても、才淺けれは謀畧なく、けふと暮し翌とあかせ

は、はや限ある日數も盡たる。その夜兄公は濡衣の、なき名を立しも親をおもふ、誠よりして皇天の、憐給へば辛くして、命に恙なしといへども、これも又父の罪をやまさん、所詮平作が命を捨て、父兄の罪を贖んと、思へどもわが君に、見參かなはぬ癃病、とさまかうさま思ひかねて、母と妻とに趣意を告、親の歎と吾妹子が、涙を硯に指流し、只ほつ〳〵と消筒に、通行筆を染たるが、八聲の鷄も亂れ啼、曉方に思ひもかけず、奉翰到來火急の召狀、病を忍びてそがまゝに、とくとく參れと、仰の趣こゝろ得がたく取るものを、取もあへず出仕せしに、君邊近く侍よせられ、汝を呼事別義ならず、是より直に、半之進が宿所にいきて、父に追腹切らせなば、曾松の家は恙なけん。否とまうさば汝も脫れず。罪の次第は此如々々と、仰うけ給はつて驚き入り、こゝにて死なば萬に一つ、父を救ふに至るべしと、思ひ決て此ことも願ず、主命には候へども、上天子より庶人まで、孝をもて國を納め、家をとゝのへ身を脩むる、親に詰腹切せよと、子に仰するはこゝろ得ず、且半之進元來罪なし。忠臣を不忠として、その子に討し給はんには、纔非家の斷絶は、更に踵をめぐらすべからず。只願くば平作が、命をめされて父と兄が、罪なき罪を許させ給へ、君のほとりを穢し奉らんは憚あれど、事急なればかへり見ず、まうさんよしは只これのみに候と、回答も果ず、懷劍を引拔て、左手の肚へ突立れば、吾君大きに驚き給ひ、早りたり壯佼、順勝が底意をしらせん、その刄を、引なまはしそと、遽しくみづから某をとゞめ給ひ、御聲を細めて宣ふやう、いぬる頃、われ米谷の妖氣を見て、武をもて是を鎭んと思ひしかば、風流士の大刀をとり出すべきよしを、老臣どもに說示せば、曾太郎はいたく諫め、半之進は諫めず、わが亂を犯せし刀を乞ひ、米谷へ赴きしは、彼もの彼處に自殺して、主を諫んと思へるより、遂に半之進が惧て、とり遺したる一封の、遺書によつてはじめて知覺し、風流士の事は思ひ絶たれども、故なくして半之進を許すときは、家法これより紊れやせん。かくいへば順勝が、身の非を飾るに似たれども、臣として君に勝を、いかで赤根が本意とせん。且くこれを推籠おきて、又せんすべもあるべきにと、思ひしか、わが底意をばしらずして、半之進は世を憤り、もし自害することもやと、思ひ過して半七を、池の中島へ捕おきしは、思慮の緩を被て、半之進が自殺を禁ん、爲なりけるに思ひきや、半七は又親を、思ふあまりに法を犯せば、罪科脫れがたしといへども、玉枕がかひ〳〵しく、彼等夫婦を延したり。しかるに限れる日數も果新に半七がぬれ衣の、なき名さへ立たれば、

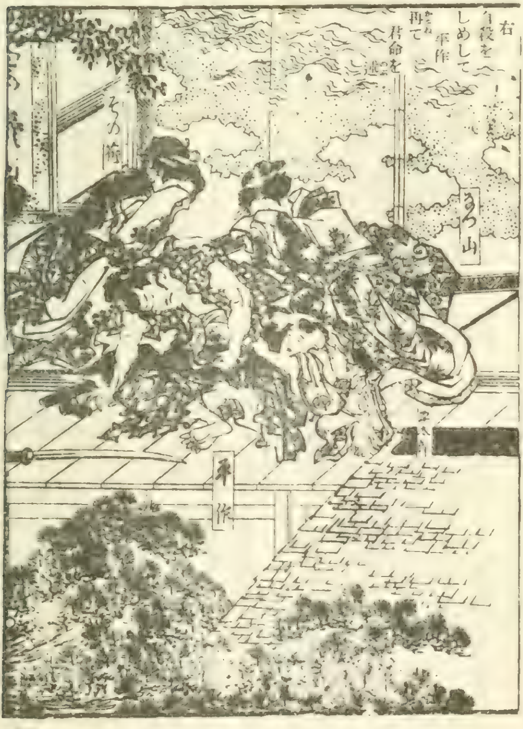
今更に半之進を免されず、されば迚もていつまでか、罪なきものを屈おくべき。病着に臥たりとは聞しかど、赤根が二男平作を竊に召て、わが思ふ旨をその父に、告させばやとて俄頃に召よせ、言を設て試たるに、親の危窮とこゝろ得て、わが面りに肚かき切る、孝心勇敢、儔少し。惜むに堪たる壯佼なれども、その深痍では助りがたけん。しかはあれど、早りて狗死すと思ふな、汝父に代て死するをもて、一旦いひつるわが意も違、半之進半七が罪免すべき道を得たり。せめてそのまゝ苦痛を忍びて、實父の宿所へすぐさに赴き、潜やかにわが意を傳へ、親子夫婦一生の辭別をもせよかしと、叮嚀に仰下されて、几帳に被られたる練を、みづから取て平作が、痍口を結せ給ひ、感涙數行に及び給へば、君恩忽地身に溢れて まうすべき言葉もなく、只伏拜み、伏拜み、涙にかきくれやうやくに、遠侍まですべり出、翌は再發、技諸し、心利たる私卒某甲を招よし、箱の事趣を、母と妻とに告させ、病中の使者なれば、轎で轎子を許れて、親の家には來にけれど、主君の恩命を他人にしらせにと、思ふが故に、明白には演も傳へず、親に對ひて法外なる、暴罵をはや曉りて、君命を重んじ給ひし、寔に父は父なりけり。往方しれざる兄半七、周防なる姉弟へ、便もあらば平作が、今果の一句傳へてたべ。とりわき惑み進らするは、母のうへ妻の事、作、一歳なる小太郎を、外母御前孫と謂して、生育後に當家の、家をつがして給はれと、いふもなしらはや秋蟬の、聲かはりゆく歎きの森に、三勝は應んと思へど胸の裂るが如く、轉つ輾つ泣叫べば、風にもよゝと聲立て、讀圖花に夏山が、抱る兒も女音して、親子三人輾び出、左に右に携れども、禁あへぬは無常の風、消なんとするわが子の顏を、見果も得せず閑花は、母も行ぬべき徂の雨、管はいげなる管松を、萬歳しまで言祝で、育て今茲に二十、初孫にやく／＼擧ても、まだ一幅の附紐も、まはり合せがわろければ、結句短き親子の緣、自殺いよしをしらせしより、新婦も吾儕も諸共に生たる心持せされども、只臨終におはいやと、思ふ心を鬼にして、孫携て來は來ても、端なく出なといひふしたれば、襖隔一重を生死の境、もの苦しげに宣ふを、聞て居る母女房は、共に腸を、斷るゝよりなほ苦しさの、やるかたいかで侍るべき。姉君には三人の子あり。吾儕過世のよからねばや、只ひとりなる男兒の、武藝文道孝心まて、人なみに勝れても、亦人なみに勝れたる、夭折しては何かはせん、その身一世の孝行を、けふ一日に盡すかと、返らぬことをかへすがへす、口說つゝ咳入れば、存捺らんと思へども、ちからだになき夏山は、母も痛

しわが身はつらし。姉さまには先だちて、はやく夫に見えてゐ、四年限りの片鶉、習は手向の草の原、露おく袖と嘲んより、共に死して給はれと、良人のほとりにおとしたる、刄をとらんとしたりしかば、三勝園花傍より、抱き禁つゝ、別退て、死んと思ふは理りなれど、乳だに離れぬ平太郎、せめて母親あらんには、成長までいかばかり、身の幅廣く思ふべし。死ぬるのみ貞女といはんや、絶なんとする夫の、臨終正念すゝめつゝ、後の世弔ふこそ貞女なれと、いひは諭せど母も外母も、涙にわかぬ歎きの數々、喃園花どの、濡にはいとも口さがなく、いひ罵りしに腹もたちけん、かくあるべしとしらぬ身の、とても脱れぬ良人の運命、しからばわらはも共に自殺して、赤根の家はけふより絶なん。妹は側室といひながら、笠松の家にをれば平作夫婦この兒まで、縁坐の咎あらせじと、思うてこれまで爭はぬ、

妹といへど義理ある人へ、無理をならべし惡言は、しばしもこゝに置ともなさ、かうなるとしるならば、よし歸らんと宣ふとも、引も留ておくべきに、夏山どのもいといたう、腹たゝしくぞありつらん。さても面なし許してよと、勸解る姉より、勸解らるゝ妹と姪はなほ面ふせ、物體なきこと宣ふな。妹に隔意のあるべき歟。はじめよりかう〳〵と、告まゐらすべきことながら、主君の内意平作が、忠孝を化にせじと、思ひしのみの買詞、心になかけ給ひそと、いひ慰つ慰られても、慰かねし哀別離苦、三歳兒も蚘がしらせてや、母の膝より這下りて、只片息なる父の顏を、さし覗ては爹と呼び、又覗ては發阿といふ。是はや親と子の顏の、あはせ了としりてかと、おの〳〵目と目注しつゝ、わつと哭ばわつと泣く、平太郞が聲に平作は、色やゝ變る眼を開き、母御はさらなり夏山も、武士の女兒に似

げなき愁傷、昨夜通宵泣あかしても、なほ泣足らずや聞くもうたてし。やゝ家僕犬八、今日より閉居開門の赦免狀、頂戴あれと刀の下緒に、結び著しを差出す。平之進はこのときまで、手を叉き眼を閉、默然として居たりしが、免狀と聞て形を改め、双の手に押戴きつゝ、うち開きて讀くだち、微臣が孤忠容しからず、主君傲慢の御こゝろをひるがへし給へば、災害消滅箭井家は、ます〳〵繁昌し給はん歟。これ併平作が、忠孝の致す所、わが子ながら竹帛にとゞめて永く功を賞せん。適奇特と押開き、あふぐ扇も言葉の要、それうけ給はつて安堵たり。これまでなりと取あぐる、刄に携る母女房、三勝も諸共に、竭る壽命は是非もなし。われから親に先だつとて、何かはいそぐ事のあるべき。喃園花どの、同胞四人遠離をれば、平七がうへはさらなり、お通陶五郞等が後に聞ば、さぞな遺憾からめ。

現宜はする事なりかし。半七はきのふ出て、いまだ遠くもゆかざめれど、召かへさんには往方しれず、周防といへば西稍盡處、百里とやらん、二百里とやらん、ありとし聞けば飛鳥の、翅借りても速の間に、ふみもかよはで思ひやる、西の天こそ戀しけれ。周防戀しや、山口へ、音耗したや、築山の、御所より人の來よかしと、とゞかぬ末も遥なる、天も歎の霧雨に、蓑笠したる大男子、折戸口より走り來つ、半之進を佶と見て、注進ござふと、呼はる聲と共に蓑笠搔擲捨れば、下には腹卷篠小手籠當、綫頰ちかく身をよせつつ、頻に喘て吻とつく、息は肩より搖出す。長途の勞れと見てければ、半之進は忙しく、淨手鉢なる柄杓を取て、温湯にしばし咽喉を澤させ、めづらしきかな、槐姬に册きて、周防山口へ赴しより、はや四五年に及べども、面會するによしなかりし、炊粱郎太郎、注進とは心もとなし、火急の大事歟。いかに〳〵と、緣より小膝すゝむれば、さん候々。言一朝には盡ずといへども、その本末を告申さん。抑陶權頭晴賢は大内の權柄なるに、その威をさ〳〵主君を凌ぐ。されば老臣、杉、石田、鷲津、坂頁目、宮、三吉、杉原、日高に至るまで、その威におそれて比周せり。しかるにいぬる二月の



すゑ、築山の御所に於て、寶劍を拾へるものあり。義隆これを檢するに、續井殿より贈られし、風流女の大刀に似たり。是なん豫て聞及ぶ、風流士の大刀にはあらぬ歟。大和より飛び來つて、わが家寶とならんには、未曾有の吉事なりとて、寵に晴賢に給はりし、風流女の一刀を、召進べしと仰するに、晴賢つや〳〵從はず。却件の寶劍をも賜るべしと乞しかば、義隆大きに怒らせ給ひて、陶を誅せんとおぼせども、冷泉治部が諫によつて、且く猶豫し給ひしが、なほ憤に堪給はず、いかにもして晴賢に、自滅させんと謀らせ給ひて、尼子退治の大將に、即陶をさし向られ、心腹の近臣たる、江良丹後を後陣として、中に挾で討とれとて、謀を授らる。しかるに江良はいひがひなく、心かはりて晴賢に、如此々々なりと告しかば、晴賢大きに驚き怒り、その義ならば立地に、思ひしらしまゐらせんとて、富田の稚山に屯しつ、軍兵を聚れば、時を移さず安穗彌五郎、大宰小貳千壽丸、赤月三角をはじめとして、同意の軍勢三千餘騎、忽地に著到せり。頃は八月廿八日、義隆かくとはしろし召さず、茸狩さして慰まんとて、瀧の法泉寺に、三日三夜御座を移され、遊山の輿を催さる。浩處に晴賢は、わが軍兵等が出立を、



義隆に見せまゐらすると披露して、廿九日の曉方に、法泉寺へ推よせて、鬨を咄とつくりつゝ、總門よりぞ亂れ入る。義隆主從五十餘人、思ひかけざることなれば、脱れぬ所と殺て出、込入る寄手の賊兵を、或は射落し、突伏薙伏、瞬間に、三十餘人を擊とれども、敵大勢なれば物ともせず、雁野彈正、鷲津入道、新手を入かへ息をも繼せず、四方より火を放て噇叫で攻入たり。されば宿直の近習には、冷泉隆豐、天野德内、三浦、戸井田、仁保、石田、命を際と鏃箭射盡、引組では刺ちがへ、おもひ／＼に討死す。その隙に義隆朝臣は、廣縁に走り出、半弓とつて敵を杜、矢種も既に盡しかば、小薙刀もてかけ散し、自身に防戰時をうつして、今はかうとおぼせしかば、客殿に走り入て、心しづかに腹かき切り、

みよや立けふりも雲もなかそらにさそひし風の跡も殘らず

（みよやたつ云々の歌は室町殿日記には冷泉隆豐が辭世とあり）

と詠じつゝ、猛火の中に飛入て、荼毘の煙となり給ひぬと、語もあへず、聞も果ず、こは／＼いかにと三勝園花、目と目を注する夏山も、平作も耳を傾け、おのおの齊く驚けば、半之進膝立直し、陶が反逆是非に及ず、義基朝臣と槐姬は、恙なくや坐す、いかにと、問れて炊粟、いと面なげに額を摘、されば中將義基朝臣は、築山の御所におはせしかば、晴賢やがて御所へ推よせ、迫腹切らせ奉る、痛しきかな姬の御養父、持明院の一忍軒も、岡阿波に擊れ給ひつ、凡防長豐筑の四箇國、みな晴賢に屬したがへば、天地反覆時節到來、しかれども槐姬は、貴殿の息女お通どのと、仙野呂東二に冊れ、後門より落給ひしと、慥に聞けど往方をしらず、主の先途にえあはぬ某、何を面目にか存命べき。單身なりとも、賊軍の中に走り入り、きり死に死ばやと、思ひしが、縱賊兵二騎三騎、擊とつて死するとも、九牛が一毛なり。大和へ注進なさばやと、思ひかへして百四十里を、僅五日に走のぼり、いふべき事はいひ果たり。身の懈まうし譯には、かくのごとしと、腰の刀を、肚へつき立て引繞らし、庭の井筒へ跳入り、やがて空しくなりしかば、半之進は今更に、これを憐み彼をおもふに、聞捨られぬ主家の大事、天うち仰ぎて歎息し、いぬる如月米谷なる、木精塚鳴動して、一條の妖火、西を投て飛去りしと、獵夫等が告訴たる、いと／＼心にかゝりしが、原來彼風流士の大刀、周防山口へ飛來て、大内家の仇となれる歟、大和にあるべき禍の、遂に彼處へ移轉りしも、時なるかな命なるかな。こゝにます／＼奇なりと嘆賞すれば、三勝塞る胸かき摘、女流ながら雄々しきお通、姬君のおん供

して、一旦城を延るとも、往さきはみな敵ならん。加旃陶五郎が、父にや属けん、主にや属けん、緯の容子を聞まほしと、いとゞ子ゆゑに苦しき胸を、園花さこそと推量り、せめて半七が彼処に在歟、しからずは厚倉ぬしの、けふまでも存命給はゞ、かゝる紛紊の緒を、釋よしも又あるべき物をと、悔ば悔しき夏山は、思ふにおもひ絶がたき、わが所天のみか時も齊しく、兄弟四人もろ共に、一世の危難生死の際、此身につみて親と親の、御こゝろおもひやらるると、卿がましき女子どち、身の程ほどに歎くにぞ、半之進突と身を起し、益なき言に時な移しそ。主君の御氣色たれば、直に君所へ出仕して、事の趣告申さん。三勝は衣服をもて來よ。物共やある、供だての用意せよと、呼はる背かに、注進ぞうと呼門て、二賊來るものはこれも又、槐姫に傅られたる、[illegible]見て、陶が反逆、義隆御父子に事あるよしは、炊業が注進によりてはや聞ぬ。槐姫のうへ心もとなしとく逃給へと、いそがせば、呂東二息を吻とつき、官爵高き鵜の家、大内殿の榮花の夢も、老臣陶が謀反に覺て、築山の御所、灰燼となりしかば、一忍軒の入道まで、はや擊れ給へども、槐姫をばお通どのと、某これを冊きまゐらせ、一方の園みを伐ひらき、辛くして、小俣の郷のあなたなる、澤川のほとり迄、延し進らせたりけるに、賊軍隙なく追蒐來て、搦捕んと競ひて懸。こゝに某かへしあはして、且く防ぎ戰ふ程に、逐に姫君の往方をしらず。こは淺ましと周章し、もし大和路をこゝろざし給ふこともやと、思ひしかば、漫におん迹を慕ひつゝ、來るともしらず一晝夜に、二三十里宛走のぼりて、今故鄉へ來にけれど、なほおん往方をしるよしなし。願ふに姫は囚れ給ふか、然なくば擊れ給ひけん。いづれの時を期せんとて、面なき浮世に存命べき。ゆるし給へと、いひも果ず、やがて刄を抜かけて、自殺せんとしたりしかば、半之進急に推禁め、彌に炊業勘太郎が、言下に命を隕たる、潔きに似たれども、眞の忠臣の所行にあらず、耻を忍び、身を保、ここより直に引かへして、播磨美作、前後備州、姫の先途を見究て、後日の忠義肝要ならんと、說論せば呂東二は、今更死ぬるにえ死なれずと、おもひかへして刄を收め、いざさらば引かへして、再て安否を告申さん。爾とばかりいひかけて、走去るを半之進は、且くと呼びとゞめ、事急なるに貴殿の腰間路費の用意心もとなし。餞別せんと、床間なる、鎧櫃の蓋うち開きて、投與たる包銀、厚志謝するに堪たりと、推戴つゝ呂東二は、背かも不見て两歩に、折戸を出てはや失たり。今果なりける事件は、緯の容子に氣を凝し、わが父出仕し給ふとも、彼陶五郎は

道臣たる、晴賢が養子なれば。わが君心をおき給はん歟、不覺に出仕は危からんと、いへば赤根はうち點頭、汝が異見その理あり。しかれども陶五郎は、養父が野心を豫ぞしりぬ。君を弑する親には與せじ。かゝる大事を人傳に、申さんは不忠なり。とく／＼出仕の供立せよと、焦燥ば、涙を禁て三勝が、背より被する肩衣も、晴れぬ思ひの晴小袖、見立る園花夏山は、痍負の爲に經帷子、父は君所へ、子は死出の旅、迷はじものを三勝は、歎いやます周防なる、女兒と季子と呼子鳥、おぼつかなくも出てゆく、主人を送る奥と門、從者ならぶ槍挾箱、奴隷がなほす中拔藁の、草履穿だに遽しく、續け／＼といふ聲を、ひく潮どきか平作が、撲地と殞る死骸の上に、身を投ふして園花と、夏山がわつと泣く。これやわが子の終焉ならんと、思へども亦見かへるに、遑なげきを背後にして、半之進は喘々、君所を投て走去ぬ。

占夢南柯後記巻之五終

三七全傳第二編
南柯夢後記巻之六

覊旅の新闘

半七初花はその夜さり、玉枕御前のおん慈みによりて、辛く命を助られ、水門より脱出たれども、親の事のみいといたう、心にはかゝるものから、主君の釆地に潜りをらんは、守を恐れ奉らざるに似たり。直に大和を立退てこそ、ともかくもせめと思ひて、城外には留らず、軈て初花を扶掖つゝ、浪速を投て、通宵走る程に、次の日の黄昏に、彼津にいゆきて旅宿をもとめ、こゝに五七日逗留して、平城の為體を聞定むるに、弟笠松平作が自殺して、父の罪を勸解まうせしかば、半之進はやうやくに、主の勘當を免されたるよし、仄には聞えにけれど、平作が今巣につけたる、主君順勝の内意をば、人のしるよしもあらねば、半七もいかで、これをば傳聞べき。されど父が閉居恩免の沙汰は一定なれば、これのみ歡ぶに堪たりといへども、只悼べきは、平作が枉死なり。彼にはいはけなき子さへあれば、母御のなげきいふもさらなり、夏山がこゝろの中いかにあるらんと思ひやるに、半七夫婦は今更に、わが身の秋は物かはと、更に歎の數そひて、堪かねしゆく末も、まだ頃日の旅ながら、故郷のそらなつかしく、夫婦額をつきあはし、この事彼事うち相譚つゝ、さて半七がいふやう、限ある路費をもて、限なき旅寢せば、終に飢渴に苦みて、市人の袖につき、縣居の門にたち、老親の名さへ汚す事もありなん。われは平作が兄ながら、志いたく劣たれば、身を殺して親の罪を、贖ふ事を得ず。さればとて、浮たる水の月に愛、仇なる宿の花は括ねど、薄命の係る所歟、われから色情の奴となりて、八海の御池に浮名をながし、阿容々々と存命るを、二親傳も聞給はゞ、憎ても憎あかず、いひがひなしと思ひ給はん。しかりとも玉枕御前の、叮嚀に諭させ給ひし事もあれば、故なくて損る命にあらず、只身を砕き骨を粉にしても、風流士の寶刀を索出し、これを主君にたてまつりて、身の愆を勸解まうさば、この世ながらに主親の、笑顏見奉る時もあるべし。われおもふに、いぬる如月米谷なる、木精塚の崩たるころ、有一夕一條の妖火、西を投て飛失たりと、風聲ありき。こは[illegible]く彼寶刀の、塚より出て西國へ飛去たるにやあらんずらん。むかし呉王の寶劍、おのづから飛去て、楚國へいゆきしとか、漢士の書には見えたり。西としいへば果もなけれど、陰の大刀風流女は、い[illegible]見に、大[illegible]

と臣、陶晴賢が家にあれば、飛去たるか一定ならば、風流士は、かならず彼地に赴きたるなるべし。きのふ街に出て賣卜に問せしに、わが思ふ所に違はず、こゝより直に周防に赴き、密々に彼寶刀を索なん、とは思へども、陶は弟が養父なり。又大内殿は主君の縁者にておはしますに、いまこのざまにて、明白には參りがたく、外には憑む樹下もなし。おん身は何と思ひ給ふと問ば、初花且く尋思して、わらはが爹々の宣はせしこと侍り。昔年風流士の寶刀を拭とて、愆て刃を毀、こよなき面目を失ひて、遂に華洛を逐電せし、刀冶同樹といふものゝ妻は、わらはが爹爹の實母の爲には、親族にて侍りしとぞ、かくて同樹は、周防の國に赴きて、何かしの郷にありと、聞たることの侍りしが、こなたよりも彼處よりも、音耗したることは侍らず。かゝれば今なほ存命て、ありやなきやはしらねども、たづね行て名告をせば、舊き好を他にして、いかで強面もてなすべき。思ひたち給へかしと、回答すれば、半七聞てふかく歡び、こは微妙も心つかせ給ふものかな。われも彼同樹が事は聞つ、彼が華洛にありし日は、われも御身も、いまだ生れざるころなるべければ、世にありなしは覺つかなけれど、當時外祖父典膳ぬしに、再生の恩を禀たるものなりときけば、よしやその子、その孫の世なり共、無下にしらすとはいふべからず。今風流士の寶刀を索んに、刀冶に身を倚なば、おのづから便宜を得なん。誘給へ、一と日もはやく彼地へ赴くべしとて、夫婦しめやかに商議つゝ、次の日浪華の客店を出て、和泉の境までゆく程に、往返人、みな足を空にして走る形勢、現事ありと見えしかば、半七初花は、道次なる、市店に立よりて、そのやうを問つ。この日はじめて、陶が弑逆の事を聞くに、義隆御父子はさらなり、持明院入道一忍軒をはじめ奉り、忠義の志あるものは、悉陶晴賢が爲に擊れ、防長豐筑の四ヶ國ははや陶が横領しつるよし、風聞かくれなかりしかば、半七夫婦大きに驚き、義隆義基擊れ給はゞ、槐姫も、いかで安泰に坐すべき。よしや婦人の事なりとて、賊手を脱れ給ふとも、路頭に沈落し給ふならん。姉御はいかになり給ひし、弟陶五郎は、養父に與して、君を弑するものなりとは思はねど、これも又心もとなし。さらば夜を日に繼ても、彼地へ走くだり、槐姫の先途を救ひ奉らずは、いづれの日にか忠義を竭さん、とく走給へとて、半七は只管に、初花を扶掖て、心ばかりは焦燥ども、途遙なる旅なれば、女子の步のかひなくて、十月の上旬、辛くして備後と安藝の封疆なる、三原の郷に來にけり。こゝよりゆく前は、みな陶が猛威に屬從とか聞えて、沼多の本郷に新關を居、貴賤をいはず、凡

男子たるもの、關が郎黨より遞おく、關防牌面なくては、山口の采地へ入ることを許されず、僅に居法師は、その沙汰を脫れ、女子の五十以上のものは、入るを許して、出るを許さず。こゝより周防の山口へ、五日路に足らねども、半七夫婦は、關のこなたに抑留せられて、いかにともせんすべなし。女子はさる木契なくとも、容易關を越らるゝといへど、三里か五里の程ならぬに、ひとり初花を先だたして、山口へ遣し、存や亡やも定かならぬ、刀治同樹を訪せがたければ、半七は心にもあらで、沼多の本鄕に旅寐をかさね、たゞ關の戶の開をのみ、今か／＼とまつ程に、今茲はこゝにむなしく暮して、天文二十一年になりつ、世は春ながら旅にしあれば、憂を慰かたもなく、こころはますます焦燥ながら、後へ立かへりても、何國へかゆくべき。さりともと思かへして、こゝにあること六ケ月に及びて、春も彌生の中旬になりつ。はじめより、よろづ費を省たればこそ、玉枕御前の賜したる、十枚の白銀をもて路費とし、けふまで一よさも露宿をせず、一日も餓たる事はなけれど、これすら殘りすくなになりぬ。今十日もかくてあらば、乞食するほかにすべあらじと思へば、心ぼそさいふばかりなし。あまりに思ひかねて、有一日半七は、初花を伴ひつゝ街頭へ出、この關いづれの日にか開べきと、人毎に問ば、この月の下旬にはひらかるべしといふもあり、或は何の日とか定むべき、今茲はかくてありなんといふ。浩處に、疱瘡の痕かとおぼしくて、その顏いたく爛れあざれたる女僧、劵緣の爲に乞食するにやあらん、背には納代の笈を負ひ、口には彌陀の御名を唱、頻に錫杖をつき鳴らしつゝ、三原のかたより來にけり。そが後方に、これもおなじさまなる女僧の、顏は前なるよりなほ醜くなりたる、いかなる過世にて、かくは疱瘡神に悩れたらんと怪くて、生憎に人も見かへる可なるが、笈の上には三歲か四歲ばかりなる稚兒をかき乘せつゝ、共に念佛して、關のかたへゆく程に、しば／＼半七夫婦を見かへりて、前なる女僧に走りつき、何事やらん私語めり。半七は今この兩人の女僧を見て、初花にいふやう、去年の秋、浪速に旅寢したるころ、法善寺なる千日墓へ詣て、祖父へ手向をもすべく、弟平作が菩提をも修んと思ひつゝ、只管に、心いそがはしき折なりしかば、やがてこゝまで來たれども、佛の道にはなはは疎かり、今はおほかた路費も竭て、物がましき好事こそえならね。彼尼達を呼びかへして、布施せばやといへば、初花答て、わらはもしかおもひ侍りとて追留め給へかしといふに、半七は遽しく、二反ばかり走り出て、こや／＼と招かへし、懷に着たる錢一緡を、件の女僧に取らし、

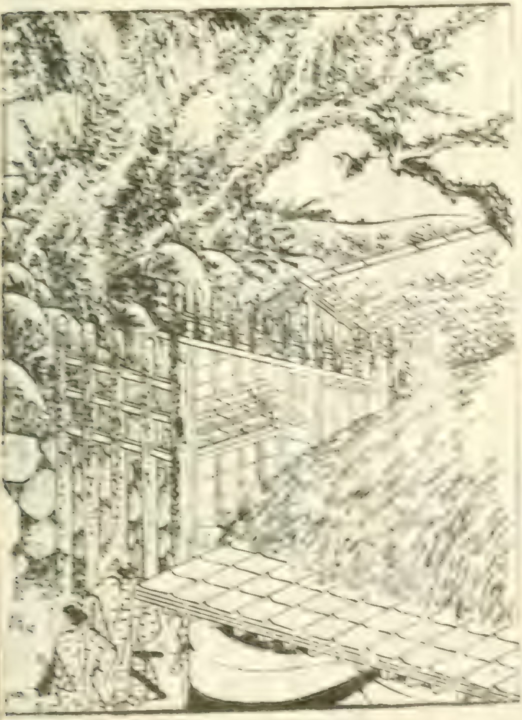
[illegible]

[illegible]

ふ文館心得て、[illegible]に[illegible]

[illegible]

にいふやう、兄事ればいとわかきに、はやく書道の道に志給ふ事、いとありがたし時代、[illegible]野臣この[illegible]するに語[illegible]聞て、晩夏する旬へ、去年の九月遠謫となり、晩頭に思ひたつことありて、周防の山口へ赴くものなるが、こゝの新関に抑留せられて、いたづらに春を迎へ、路費も今は竭んとすれども、行くべきかたへ得もゆかず。おもふに足卿府たちは、宿にこの関を通給ふなるべし。仙雨防禦面なんといふ箇上書[illegible]はず、既に此の時は[illegible]、そ[illegible]が揮き旅衣を、沽却ても買取るべし。人を[illegible]、三國者、[illegible]



申しほし侍せ給へかしと、懇やかに聞えれば、夫婦はいよ〳〵望を失ひ、又いよよしもなかりしが、斗七情ある詞を掛、宿ふ所さることながら、女子を携て、かく旅路に呻吟へば、仇なる色に跡を埋め、遠く来るものならんと、思はれんは心にもず。これなる女子はわが妻なるが、主の爲親の爲に、物を索ではる〳〵と、周防へ赴んとするに、彼地の擾乱に便なくも、百七八十日を空しく経せず、こゝにあること一日たりとも、千とせの秋を経るが如し。明白には告がたき、赤善しきを痛し給ひて、善巧方便有ならば、かなはぬまでもこの關を、うちも越さして給はれと、只管歎聞ゆれば、宅兵衛の女房聞く武時し、よすがなく在すらまし、情ら聞ばいよゝ痛し、賢さき僕輩になけれども、ことに一條の方便侍り。見られもこそすれ、この關所が貸るは間見なれば、妨碍はれども、三日にて、村長に申し点たる、



關防牌画一枚あり、うち歎き、が歎きが、り、關防牌画一枚給りね。今の伴へ、
たければ、なさなきものを其、篭の中に衣を貸させば、問の御畑、お人母に子入者
篭し入れ、ともかくもこして、自關人りも、篭の中に入り、關へふ
をば越させけれ。お人母も聞だに補給をぱ二品なり。百もなく、物もれりし

な、よくこゝろ得よと教諭して、軈て稚兒を抱きおろしつゝ、おのが笈の中へ繰し、さて頭陀嚢より一枚の牌兒を出して、これを半七に遞與し、吾儕は沼多川の東村に、かすけき草庵を結て、毎日に三原吉浦の驛へ出て、乞食し侍るものなり。沼多村の南なる、拈華庵と索給はゞ、かくれあらじといふに、半七初花は感涙を拭ひあへず、寔にけふの慈悲善根は、なき身の後もいかで忘れん、闕だに過り候はゞ、牌兒を返し進らすべけれと、夫婦篤よろこびを述、天へも升る心持して、欣悦面に見たり。先達の女僧これを見て、もろ共にうち微笑み、嚮には周防の山口へとか聞え給ひしが、山口とのみ索ては、廣き城下なるに、容易はしれがたけん、いかなる人をか訪せ給ふ、いとおぼつかなくこそと、いへば半七答て、外祖が由縁のものなれど、二十餘年中絶たれば、吾儕は只名を聞たるのみ、精き事はしるよしも候はず。舊好をこゝろ當にゆく方に、刀祢同樹といふものに候といらへすれば、女僧聞てうち點頭、件の同樹といふ人は、去年の冬遷化し給ひし、わが拈華庵の先住の爲に、舊縁ある人なれば、吾儕も粗これを聞り。それは山口には在らず、天神山のあなた、氷上の郷とたづね給へ。彼人齢七十にあまれども、なほ健なるよしは、慥に聞て侍るかし。日もはや暮なんとすれば退るべし、闕の鎖おろしたてられぬ前に、とく〱越給へといひかけて、撓げに笈を脊負あげ、同宿の女僧もろ共に、遽しく走り去しかば、半七も初花も、黄泉に佛にあへるが如く、しばし背影をふし拜み、軈て旅宿に走りかへりて、物よくとり聚め、主人に別を告て、又忙しく走り出つゝ、件の牌兒をもて、障ることもなく闕を過りしかば、はじめて吻と息をつき、直に沼多川の上下を、彼首此首と索ぬるに、拈華といふ庵は絶てなし。日も既に暮にければ、せんすべなくて思ひ絶、その夜亥中の頃及に、四日市といふ驛路までいゆきて宿を求め、夫婦彼女僧が事をうち相語つゝ、半七がいふやう、初花は幼稚より、玉枕御前に給事て、宅にある日のなかりしかば、侄の平太郎が面影は認ぬなるべし。けふの尼法師が負たる稚兒は、平太郎によく似たるなり。こはおのが心の迷ひかはしらねど、慥に誨られたる草庵を、索あてざるも不思議ならずやといへば、初花聞て、宣ふ所さもありなん。彼尼刀祢達は、顔こそいとおどろおどろしけれ、聲ざまは何とやらん、聞熟たる人の如し。思ふにこれは、日頃念じ奉る辨財天女の化現して、闕を越させ給ひけん。いと尊も有がたき、利益にこそと稱賛すれば、半七有理と忽地曉て、遂に再び女僧の庵を索す。宿をかさぬること五宵にして、周防國佐波郡山口鶴峯の城下

より、遙こなたなる、氷上の郷にいゆきつゝ、刀冶同樹が宿所を訪て、舊緣の緒を、再びこゝにとき明し、夫婦がうへを告にければ、同樹は心よく承引て、貧家に舍藏けり。

晷の夏の花の上

刀冶同樹が事は、第二の卷、冬田の晩稻と題せし條下、全介が養母晩稻が昔物がたりにて、粗その名は聞えたれども、いまだその本末を詳にせず。原この同樹といふものは、近江の觀音寺の城下なる、刀拭が家に年來つかへて、大かたその業をよくしたり。しかるに京の刀拭同樹といふもの身まかりて、いとけなき女兒ひとりありけり。同樹が後家は、年齡三十ばかりのころなりしかば、媒妁ありて、今の同樹を入夫としつ、さて刀冶の名蹟を立たれども、このころ室町家の武威やうやくに衰て、京も田舍も、年毎に荒まさり、四民おの／＼活業のたつきを失ふこと多かり。これによりて、今の同樹が時世に至りては産業衰微して、よろづ昔に似るべくもあらねど、華洛に名ある刀拭なれば、僅にその餘波とて、閑宅五七口を餬に足れり。こゝをもて女兒増穗には、白拍子の男舞なんど習して、笹屋小夏といふ、綽號さへ呼したりける、こはその母の情愿にはあらず、繼父同樹は生才さかしく、いと慾ふかきものなれば、女兒増穗に遊藝を習し、すべて花客に生育して、果は華洛の縉紳に給事さし、妾側室ともなして、おのが生涯を安樂にすぐさんと較計はどに、増穗は大和續井殿の近臣、今市全八といふ壯佼と、假初のそひ臥せしより、忽地に有身て、男兒を産にけれど、此ごろ全八は、犯せる科ありて大和を追放せられしかば、世に萎なし兒とかいふうき名を立られ、増穗はこれを憂ことに思ひほそりつゝ、竟にむなしくなりつ。されど同樹が妻小田井が爲には、骨肉の初孫なれば、いとゞしく不便のものに思ひて、浪速より乳母を召養へ、とかくして育む程に、同樹は續井殿に召れて、平城へ赴き、風流閑閒の寶刀を拭せられたるに、誤て砥に打當、閑の大刀の刃を毀にき。こは輕からざる越度なれば、重き科被るべかりしに、續井の執柄、蠎松典膳が前妻と、同樹が妻と從弟女なり。この由緣をもて、譴責の沙汰に及れず、恙なく京へ歸ることを得たれども、さるえせものなれば、年來世帶を撞撓て、脫れがたき債多かり。元來恥をしるものたらねど、夥の借錢を返すにすべなければ、平城にてこよなき面目を失ひたるに、何容々と京にて活業はしがたしとて、おのが不幸をいひふらし、孫を東妻を携、やがて華洛を逐電しつ。此ころ大内家繁昌して、山口鶴峰の城下を九條にひらかし、その熱閙、遙に京には立まされるよ

し、同樹豫て傳へ聞ば、周防の山口へ赴きにければ、させる本錢もなければ、物いとかゝやかしき、鶴峰の城下には住宅をもとめがたくやありけん、山口へ遠からぬ、氷上といふ鄕に見るよしもなき、店を修造ひ、こゝにて焦たる刄、錆たる鎔なんどを、賣もし買もして、世を渡るに、その性究て腹きたなきものなれば、利慾に走りて人を欺き、焦たる刄をよく拭こしらへて、價貴く賣ことしば／＼なれば、妻の小田井は、これを傍痛きことに思ひて、言葉を竭し諫にけれど、同樹は京にある時こそ、入夫にして、その身その家を續ば、十に二つは、妻にも物をいはしたれ、今既に、遠く周防の氷上へ來て、更に世の經營を、すなれば、よろづおのがまゝに擧動て、絕て一言も、小田井が諫を聽ず。とかくして又十年あまりを經る程に、同樹はます／＼貪婪のこゝろふかく、わろき所行のみ事とせしかば、小田井は身を形なく思ふにも、世の務に繫れて、心にもあらぬ夫をかさねたればこそ、家を失ひ孫を棄て、しらぬ里に呻吟來たれ。只ひとりなる女兒を先だて、只ひとりなる孫を棄、心つよき夫の僻事を諫かねて、歎の中に身まからば、後の世いとゞ罪ふかし。佛の道に入らんにはと、一すぢに思ひ決て、良人同樹に身の暇を乞受、忽地に女僧となりて、安藝國高宮郡、沼田川の上に、草菴を結びつゝ、十年あまり行ひすまして、去稔天文二十年、冬十一月十五日に、往生の素懷を遂たり。此ころ行脚の女僧兩人、拈華と號し、微笑と呼るゝが、小田井比丘尼の草菴に同宿してありしかば、廼菴主の遺言にまかし拈華比丘尼舊草に住持して、更に拈華菴と號し、先住の女僧の形見の遺物をば、みな悉周防の氷上へ遣して、舊夫なれば、これを同樹にとらしたり。今玆同樹は七十餘歳に及べども、筋骨逞しくして、壯年に異ならず、一身の皮をば、すべて、慾にて張つめたれば、舊妻が物故よしを聞といへども、淚一滴落さず。種々の形見を獲て、俄頃に得つきたりと、歎びつゝ、日來嗜る酒に代て、いく程もなく喫竭し、年もくれて長閑なる春にはあへど、錢のなければ、なほうち籠りてありけるに、思ひもかけず、三月廿一日の黃昏に、大和國箱井家の退糧人、赤根半七といふ壯佼、その妻を將て尋來つ。稍く彼夫婦がうへを問に、半七が妻初花は、むかし同樹がこよなき恩を受たる、蟻松與勝が孫女にて、半七も又血統にこそあらね、與勝が孫なるよし、そのいふ所紛ふべうもあらず、舊緣といひ、舊恩といひ、脫るゝに道はなけれど、同樹は元來信に伎、義に勇むものにあらねば、これらの故を懸念せねど、只初花の容止、なみ／＼に優れていと艷妖なるを見て、肚裏竊に較計事あれば、一議

にも及ばず、信やかに款待て、この日より件の夫婦を止めつゝ、慇懃に勦り慰めけり。しかれども半七等、かゝる貧家に食客となりて、なすこともなく月日を送らんは、心つきなき所爲なりとて、夫は刀を拭ことをならひ、或は同樹に代りて、村長驛正の第宅をうちめぐり、妻は火を打、水を汲み、或は人の爲にふりたる衣をしとき洗ひなどせしかば、同樹は續句身ひとつなりし時より、世を安く思ひながら、辻奴等は、わが肚裏をばしらで、松苗の棟になるまで、こゝにをらんとてや、汗水を流しつゝ、稼了こそ、究たる白徒なれ、給銀といふもの取らぬ、よき小厮と牧姿を養得たりけりと、竊にあざみ笑ふとは、半七夫婦はいかでしるべき。同樹が濁しげなるに安堵て、春と暮し、夏と送りて、雷鳴月の炎暑堪がたきを、物とせず、ますく活業に身をゆだねしかば、刀を拭ことこそ、僅四五个月の手練なれば、同樹にいたく劣りもすれ、四方の花主をうち巡りて、刀劍を匠作、このみい注文をうけ給はることは、その性怜悧壯佼なれば、同樹には勝れりとて、人みなこれを稱美して、半七々々とぞ呼びける。かゝりし程に半七は、日來は同樹が心ざまを疑ひて、こゝに來れる縁由を告ざりしが、彼がいよく信やかに款待を見て、いつまでか匿むべき、今は同樹に相語て、風流士の寳刀を索ばやとおもひて、有一日窃に同樹に對ひて、この身夫婦の來歷、風流士の大刀のこと、一五一十を物がたり、もし聞給ふこともあらば、もろ共に力を戮して、彼寳刀を索出し、某夫婦を忠孝の、人となして給はれかし。おのれふたゝび發跡日もあらば、厚く報いて生涯を、安らに過さし進らせんとて、叮嚀に相語しかば、同樹聞て、こはよきことこそあれと、こゝろにふかく歡びながら、耳を側てつゝ眉を顰め、原來和殿は忠孝の人なり。妻女は貞操の婦なり。われけふまで、浮たる情のやるかたなくて、後ぐらくももろ共に呻吟つゝ、このわたりまで迷ひ來給ひぬとのみ思ひしは、人を知らざる僻目なりき。いまだ聞給はずや、大内殿のあへなくも弑れ給ひしは、彼風流士より事起れり。去歲の冬月にやありけん、稿臉の御所侍、一口の大刀を拾ひつ。これを大内殿に獻りしに、しる人ありて、これなん績井家の重寳たる、風流士の大刀なりと、まうせしかば、義隆ふかく歡び給ひて、竟に陶殿に賜たる、風流女の大刀を返し進せよ。陰陽一對として秘藏し給はんと仰せしに、陶殿は年來の威勢をたのみてうけ引ず、その風流士をも、こなたへ賜せ、陰陽一對として秘藏つかまつらんといふ。これより主從不和になりて、大内殿滅亡し給ひ、防長豐筑四个國の中なるもの、有像無像、猫も杓子も、篁の上の野犬までも、みな陶殿

の物となれば、件の大刀など殊更に、晴賢秘藏し給ふよし、この里人等もをさをさいふめり。かゝれば彼寶刀を、いかに欲とおもふとも、七世の玄孫にあふまで、取も得がたき所行ながら、つら〳〵物を案ずるに、又よすがなきにしもあらず。故いかにとなれば、陶殿の郎君は、おん身が弟なり。今旣に親胞兄弟、東西に引わかれて、讐敵の思ひをなすとも、肉縁の情、いかでその中にこもらざらん、これ一つ。又おのれこの郷に、二十餘年の春秋を經たれば、鶴峰の御所ざまには、しる人いと多かり。これ彼の便宜につきて、まづ陶殿の御内にて、某甲其乙と聞えたる方ざまへ、和殿を立入らせ、ともかくもこしらへて試んと思ふかし。それにつきて、今の形勢にては事をなしがたし。假に同樹が養子と披露し、刀冶の家名を相續さして、さて鶴峰へ將てゆくべし。このこといかに、うけ引給はんやと、信だちて說示せば、半七夫婦は、坐に感涙を拭ひあへず、弟陶五郎は殘忍の養父に與して、浮雲の富貴を樂ふ、いとおそろしきものなれば憑しげなし。只わがうへをばふかく匿て、物よくこしらへて給ひね。何にまれ宜ふよしは、固辭候はじと應すれば、同樹は聞あへず、大きに歡び、本月十六日は、嘉祥日とて良晨なり。この日まづ養子成の披露さすべけれとて、豫てより用意しつ。さて本日になりしかば、莊役某甲を相譚て鄕導とし、半七には袴を穿せ、羽織を被せ、朝よりはやく出たゝして、鄕の戶々、殘りなくうち巡らせけり。これによりて初花も、その名あまりに物々しとて、同樹僅に初の字を除て、お花と呼ばし、これをば十五日の甲夜の間に、彼莊役が女房を鄕導として、近所合壁へ、相識の爲に遣したり。かゝりしかば、お花は本日、鎮守の神社へ參詣して、行末の事祈らんとて、午より宅を出たるに、これさへいまだ歸らざりけり。

晷の夏の花の下

かくて同樹は獨をる、宿は殊更口さみしきに、賀びをまうさんとて、詣來る近邊の甲乙を、いく度か迎へつゝ、おなじ挨拶する程に、夏の晷もやゝおとろへて、午時の炎暑はとりかへせど、困じ果たる勞は失せず、今は訪來る人あらじ。いでや持樂に氣つけして、獨樂せんとひとりごち、棚より陶器とりおろせば、忽地、芬と酒の香するに、眼を細し涎を流し、蚊やり火鉢に炭ふき起して、陶器の尻を灰に掘埋、小頸を傾け指を僂、ひとり笑して點頭折から、ふりたる貲布の袱包を、脊負たる市人が侶なる倭子の後れて來るを、いく度か見かへりつゝ、同樹が門なる障子に手を掛、瓦落々々と引開れば、同樹はいたく駭きて、倒んとする背へ手

を突、やうやくに膝立なほし、誰ならんと思ひしに、敗鐵の四五六よな。呼門もせで老たるものを、うち驚すことやはある。障子の骨をば鐵では編ぬ、開閉にこころせよ。やうやく脚色し一趣向を、障子の音で開なくされたり。忌々しき和郎にてありけりと、呟ば四五六は、負たる包ときおろして、項より流るゝ汗を拭き、けふの炎暑に門さして、おん身が物を思ふとしらば、俺やかに障子を開んや。全體こゝの敷居鴨居は、坤へゆがみくねりて、脾撓肚では開られぬと、うち笑へばうち笑ひ、四五六が亦しても、來るとやがて人の家の、荒を見出していはうでがな、銀だに貸せば造作するにと、いへばほと／＼うち點頭、正月の三つある年、足なしに借給へ。とはいへ何國の浦にても、ないものは金、あるものは借錢、去年の二月大和から、物を追うて思はずも、こゝへ來て一思案、西の都といひもてはやす、大内家の城下なれば、世わたる便著もよからんと、それなりけりに足を駐め、些馴染も出來るや、出來ずに、射つ砍つの大合戰、やうやく世間長閑くなりても、一升瓢子はいつでも一升、けふの興敗これ見給へ。五百が本錢で鉛刀光三口、まだ此ごろの後家鞘は、亭主の好なる赤鰯、夜食の菜にもなり難る、荒布に似たる敗下緒、望はなしかと袱より、ひとつ／＼にとり出せば、同樹は頭を左右へ掉、竈本より俺牙の多い敗鞘、鐵橋には劣たる、焦刃を五百穴が興敗と、いうては齒茎はたちがたし。猫に見られて竊れなと、あざみ笑へば四五六は、亦袱へ押つゝみ、しからばこれをば納めもせんが、納らぬは全介が事、吾儕が浪速に在し日より、心くまなき友だちなれば、彼も又もろともに、この地方へ來ても本錢はなくて、果敢々々しき活業はえせず。とかくする程に氷上の郷に、刀冶同樹といふ人のあるよしを傳聞、これは吾儕が外祖父にておはするなるべし。養母の遺言此彼もつて、孝順に養うて、寄年を心易く、送らし欲と彼が情願、當今の壯佼には、珍しい寄特もの、おん身も歡び給はんと、思うて纔に將て來たれば、思ひの外に强面て、爾後よせもつけられず、下物夥計で六齋の、市には春より中絶ず、面をあはする四五六が、面に愛て全介と、祖孫の名告し給ひねと、いはせもあへず頭を掉、肉緣はなけれども、むかしをいへば孫でもあらんが、彼は元來爹なし子、生れぬ前から祖父祖母に、恥をかゝせし出來損ひ、仇人の末と思ひ絶て、繼祿の中に棄たるに、今更名告をしても用なし。特に渠奴が面魂は、彼猿樂の狂言の、太郎冠者めきて何處やらが、一節驚抜て三文の、働きはありとも見えず。生涯篤實律義者とて、人に佛といはれては、この辛い世は摂らず。さるによつてこの固

樹、齢七十にあまるまで、仁義五常といふことを、算盤には絶てのせず。孫養うより狗の五器、冷飯一碗食しても、減のたつことしらずかと、煙管で敲く敗席薦、埃まじりにいぶされても、四五六騒ぐ氣色なく、その義ならば宜ふな。一體彼丕介は、生得たる奸雄者、老實に見せて油斷さし、馬市に出る日は、よく生馬の目をも拔き、又寺參りするときは、佛の箔をも容易剝す、老功の外祖さまにも、律義ものと見せたるは、廼術に妙ある所、さりとては至らぬと、いへば同樹は呆れ果、さ聞ば棄られず、今一度見なほすべし。翌伴うて來給へと、いひも果ぬに四五六は、銜と立て外面へ、走り出つゝ、さし招けば、前より門邊に立在たる丕介は、肩に被たる、手拭取て腰に夾み、禹歩に内に入て、同樹が向ひに膝折そろへ、外祖さまの見立ちがへで、けふまでよせつけ給はぬは、焼がまはりし老の僻眼、旅に在ては護摩の灰、市に出ては青蔦、盗賊にこそ得ならね、一たび足を揚るときは、踵で巾着をも切つべく、人に酒を買するときは、尻を秋こと本事なり。狗には勝る孫がひに、おん身が骨をば丕介に、拾はして給はれと、俄頃に作る悪根風俗、頬に髯をかき撫れば、同樹ほと〳〵感嘆し、臂近なる遊閑を、かい取てあふぎ立、



かくてこそわが孫なれ。さりながら、半七夫婦こゝにをれば、わが宿には留めがたし。所要あらばこなたより、折を見て招んと、いへば四五六小膝をすゝめ、いかなる由縁あるかはしらねど、現在孫のありながら、半七に刀冶を、續せ給ふはこゝろ得ずと詰れば、同樹はうちほう笑み、彼はわが故妻、小田井に遠き縁ありとて、この春たづねて來たりしかば、信しやかに欵待して、夫婦養子の披露するも、同樹が胸に物ある故なり。それを實事とすることかはと、ほこりかに説諭せば、冬介握れる拳を揉り、彼半七は籾井の家臣、わが實父の仇人たる、半之進が子なるよし、四五六がいふにてしりぬ。貴母の遺言默止がたくて、今に半之進を撃ずといへども、彼も又仇人の半體、仇人の杪は根を斷て、葉を枯さんも只この時。時は再び得んことの、かたな屋と名告るとも、祖父だに許し給はゞ、立地に怨を復さん。あな歡しと思はずも、もてる煙管を丁と折、忿怒の面色さもこそと、同樹は小膝を破と拍、仇人の子なれば半七を、撃んと思ふは現有理、その議ならばいふよしあり。四五六は同腹中、今更匿むべうもあらず。半七お花が歸りなば、われ如此々々の事ありとて、退奴等を旨く欺詐るべし。そのとき四五六冬介は、



小俣の縣正より、潜やかにお花を迎へとらし給ふと、僞りて篏輿乘物舁して來よ。しかれども半七は、おのが日來欲と思ふ、風流士の大刀を取らすは、お花を阿容々々とは、えも遞與さじ。倘彼大刀はと問ことあらば、四五六は豫て一封の證文を懐中して、これを半七に握らせ、汝今宵、小俣の鄕なる、縣正が宿所まで、その證文を持參せば、所望の大刀を給はるべしと、說賺して、やがてお花を竹輿に乘して、山口なる撞木町の、女衒が宅へ將てゆきね。われ豫お花が事を、よく相譚すましたれば、年こそ廿一といふとも、六あきにして二十兩詰、二五百金が物はあり。さて日も暮て初夜過て、われ半七を侶うて小俣の縣正が宿所へ赴き 件の大刀を受とらんといはんには、渠 必 從ふべし。里遠離る天神山、夜は麓も人跡絕て、面に川あり背に藪あり。全介こゝに埋伏して、親の仇人と名告かけ、只一刀に砍殺せよ。半七既に死するときは、縱お花を程遠からぬ、花街へ售とも後肚痛ず。四五六もこゝろ得たりや、早りて氣色に曉られなと、孔明顏に說諭す、膝にもたせし滋圖、羽扇と見せて破れたり。全介はつく／＼と、これを聞てます／＼歎び、仇人の妻を詐誘て、河竹の瀨に立するも、怨を復すこれも一つ。しからばゆくをやりも過さず、天神川の藪疊、寢刄あはして待んずと、勢猛く應たり。四五六ははじめより、只點頭のみ可とはいはず、同樹どのには金を獲させ、全介は仇人を擊、現談合は旨けれども、吾儕か肚へは絕て溜らず。辛苦錢から定價して、ともかくもすべけれど、もしその沙汰に及ずば、暇まうしてすぐさに訴、氣の毒ながら老人に、索を被てひかすべしと、いふに同樹は目鼻をよせ、こや／＼四五六、四五六どの、吾儕に如才あるべき歟。これ斯々とさし寄て、手を握りあふ袖の中、四五六莞爾とうち笑て、けふの相場は賤けれども、乘かゝつたる船なれば、お花が迎の走卒に、打扮は究竟なる、興敗物の鉛刀光三腰 まづ談合はととなうたり。祝ひ給へと直足られて、同樹は弗と心つき、遽しく火鉢より、陶器を引出し、熱々と指に耳を挾せ、あまり話說に實を入れて、缺代のなき小半合を、煎酒にしたるぞや。さはれ四五六は下戸なりし。物こそあれと身を起し、家廟の障子推ひらきて、彌陀の御まへの夏桃子三四枝、折敷に載てもをし氣なく、兩人がほとりへさし出せば、四五六は冷笑ひ、百金の前祝に、毛桃三枝とは朝三暮四、吾儕はこれをくは徂なりと、推返しつゝ項を伸して、家廟の裏をさし覗き、全介彼を見給ひね。進命婦をおもひ病せし、淸水寺の老法師が、草菴に異ならで、持佛に代たる美人の畫像、彼はいかにと指せば、全介も又呆れ果、色欲と無常の浮

世といへど、これは又めづらかなり。宗旨は何ぞと低語は、同樹煙管を笏にとり、さればとよ、この畵像には縁起あり。汝達も聞つらん、去歳の秋大内殿、俄頃に蹝れ給ひしころ、義基の北の臺、槐姫の往方定かならず、或は猛火の中に入て、死給ふとも聞え、或はお通とかいふ女房が冊きて、辛く脱れ去給ふともいふ。さるによつて陶殿安からず思食てや、姫の肖像を夥畵せて、隈田居中、殘る隈なく觸知らし、もしこの畵像に似たる女子あらば、搦捕て進らせよ。賞錢は乞によるべしとて、こゝらわたりへも戸毎に、彼畵像を給はせしは、去歳の冬のはじめなりし。しかるに彼半七夫婦がこゝへ來て、姫の畵像を見て涙を落し、主の姫君におはするとて、皺引延して表裝し、物々しく家廟へ懸て、旦夕に額を著、餅果なんどを供るを、傍痛く思へども、此方にふかき枝計あれば、そが隨にして詰りも問ず、この桃子も半七が、彼首の畵幅へ供物、全介もよう聞て、彼畵像に似たる女子を、槐姫と見るならば、引捕へて物にせよ。掙了ば損のゆかぬ世間、縁起あらまし件の如しと、說示せば全介は、四五六を見かへりて、彼もこれも金の蔓、けふより心を改めて、祖翁さまを見習はば、濡手で粟餅とる如く、よき夢をがな見もやせんと、いへば四五六うち點頭、人はわろかれわれよかれ、死でも命のあるものならば、那里か一度は寶の山、手を空して語らんより、戲房入りして半七お花が、歸りしころに再び來ん。さはとて傍の袱包の、端かいとりて脊負つゝ、全介もろ　も立あがれば、同樹は外面うち仰ぎて、門の棟に日影が落れば、申時には程もなし。われこそ市の六齋毎に、四五六と出會ども、かけちがうて半七も、お花もいまだ四五六と、全介を認らねど、わろく物して曉られな。全介もようせよと、いひつゝやうやく身を起す、裾に陶器を反倒せば、口より酒を吐ながら、滾々と轉ゆくを、慌忙き引起して、ひとり腹立眼を睜り、あなわれながら忌々しき裾の、蔽よりして間冷を、席鷹の野郎に飲したり。物躰なやと呟きて、溢れし酒を指へ染、禿たる天窓へ塗つくれば、四五六は全介と、目を注して冷笑ひ、熟柿に似たる禿天窓へ、酒を沃がば溢もや拔けん、供養の桃子は喫ずとも、翌は酬柿を賞翫せん。いざ給へとて先にたち、跨ぐ閫は三尺口、貳尺五寸の錆刀、負たるまゝに身をひねる、人喫馬も匕首や、さすが同樹が孫なれば、小じりからげて全介も、いそがはしげに歸りけり。浩處に半七は、墓なき蟬の薄羽織、土用なかばにあき人の、よき衣着るにあらねども、隣き戸々うちめぐりて、かへさは妻も一すぢ道、二すぢ立の縞裕衣、まだ町なれぬ背帶、襦子のぬめりに風はしる、夕ぐれ毎

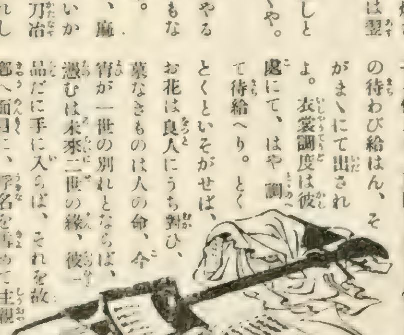
に露ふかき、お花もろ共かへり來つ、半七只今さふらふと、呼門つゝ内に入れば、同樹見かへりて靨やかにうち笑み、半七歟、はやかりし、お花も共に歸りしな。宿に居だに堪がたきに、暑もさこそと思ひやらる。半七は羽織も帷子も、脱捨て凉み給へ。お花も浴衣に脱更よと信やかに慰れば、いな、宿に居しには格別にて、途に出ては風に吹れて、思ひの外に凌ぎ易し、喃お花。實わが夫の宣ふごとく、片道は蔭もいで來て、笠も荷になる風の凉しさ、前の月より雨氣はなけれど、塵埃のたゝぬは田舎の一得、鎭守の祉の賽、天神山のこなたにて、折もよく、半七どのにゆきあうて、もろともにかへりしかば、日は沒かゝれど心づよくて、却歩は果敢ゆかず、さぞ徒然におはしけんと、いへば同樹はうちほう笑み、わかい夫婦のうちつれ立て、世の務やら保養やら、たまノ\の事なれば、歩はかゆかぬ該ぞかし。湯を沸して歸るとやがて、汗流せんと思ひしが、思ひしのみにて年老の、折屈にかひなければ、留守したるのみ猶には劣る。それのみならず歡しさと、また哀しさを搗雜て、そらうち瞻仰て待わびしと、いひつゝ眉を顰れば、半七これを聞もあへず、そは何事の候て、心苦しくおはするぞ。親と憑み奉る、老人の物思ひを、しらずがほする半七ならず。假染ながら刀治の、屋號を冒すも不思議の緣し、匿ずに只斯々と、告もしらして給ひねと、盡す信は妻もろとも、商人のうへは疎にて、物の要にはたゝずもあらんに、舊き由緣を忘れ給はで、良人の索る彼品を、とり復んとての物思ひ歟、さらずは脱れぬ負債やある。よしやいかばかりの借錢ありとも、半七どのにうち任して、さのみ劬勞なし給ひそと、夫婦右より左より、いひ慰れば嘆息し、年弱にはたちまさる、親切に絆されて、胸苦しさゝ又一倍、何か匿ん聞給へ。おん身夫婦が心を盡す、風流士の寶刀の事、いぬる日はじめて聞しより、さまノ\に尋思せしに、小俣の縣正は、陶殿に由緣ありて、不便のものにせらるれば、富田へも鶴峯へも、常に參りて心くまなく、まうし承るものなるに、われ又彼人の蔭を蒙ることおほかり。もじこの條の顛末を、縣正に密に語りて歎きなば、汲引せらるゝこともやと思ひしかば、いまだ和殿等には告ねども、をりノ\彼處へ赴きて、さまノ\にこしらへたり。しかるに陶殿は、既に四个國の主になりて不足はなけれど、内宮近ごろなくなり給ひつ、側室嬖妾多かるものから、是をと心に稱はせ給ふものもなし。汝が養子半七が妻花とやらんは、儔稀なる美人なりと聞傳ふ。もし彼お花を進らせなば、萬に一つ半七が望を逐る事もあるべし。この外には陶殿に、まうしよらんすべをしらずと、

縣正の宣はするに、あるべき事とは思はねど、いなといへば彌勒の世まで、風流士の大刀は返らず、應といへば思ひおもはれし、夫婦の中を裂では成らず。事變易んはいと易し。半七お花がこゝろはしらねど、うけ引にしくことあらじと、わが胸ひとつに思ひ決て、仰うけ給はり候ひぬ。主ある女子に候へども、これがうへには、亦二つなき僥倖なり。お花がことはともかくもして進らすべし。只彼寶刀を賜ることなく、まうし賜り候へと、應して歸りしは、一晩の日の事なりしに、霄に縣正どのより、猛に使給はりて、とく〳〵參れといそがさる。和殿夫婦は家に在らねば、留守憑むべきよしもなけれど、物うたぬ身の後易さは、門の戸鎖して彼使者に、うちつれたちて小俣へ參れば、軈て閑室に招よせられ、縣正どのゝ宣ふやう、汝が歎きまうすよしを、陶殿に聞えあげしに、件の大刀は、陰陽二口の名物にて、殊更に秘藏すなれば、いかに乞まうすとも、給はるべきものにあらねど、美人をもて換んとまうせば、これも又默止がたし。われ深窓の御逹をよろこばず。只市中風流の少女を愛す。汝がまうす所の女子は、その趣よくわが意に稱へり。しからば潜に、彼花とやらんを進らせよ。大刀は引かへて賜ふべしと仰たりき。よりて花をばわが女兒にして、御所ざまへまゐらせんに、その准備をせよ。この夕ぐれに密やかに、私卒兩人ばかりさし添て、竹輿もて迎とらすべし。このこといはん爲に汝を召つ。この旨こころ得よかしと宣はするに、ひとたびは歡び、ひとたびは哀み、言うけして立歸り、和殿夫婦を待てをり。忽卒に諾しと、叱らるゝかはしらねども、彼寶刀だにとり復さば、亦せんすべもなからずやは。寔に哀樂のやるかたなさ、一つを得ぬれば一つを失ふ、夫婦がこゝろを推量れば、只涙のみ先だつと、いひつゝ背向に伏沈み、圓なる目を揩赤て、心苦しきおもゝちすれば、半七お花は目を注し、塞る胸と開く眉、いづれをよしと決かねて、又いふこともなかりしが、お花は袖に涙を拭ひ、操を破り耻を忍び、かの方さまへ參らずば、いつかは寶刀をとりも獲ん。わらはは覺期して侍りと、いひつつも又目を拭へば、半七頻に嘆息し、よしや獲がたき寶刀を獲て、故郷へ歸る日はありとも、反逆の首領たる、陶晴賢が婢妾に、妻を賣てはおん身が釜々、曾太郎殿に塵未來、絶て面をあはせがたし。義理を辨へ恥辱をおもひ、人たる人になりてこそ、こゝろを盡すかひもあれ。このことのみはうけ引がたしと、いふをお花は喜しとも、いはれぬまでに形なき、身のゆくすゑはかくばかり、落れば落る谷水も、堰とゞめかねし袖の雨、今ぞ賣る身の迎の竹輿も、翌はこの世になき玉の

輿、死んと思ひ決めつゝ、涙を禁て莞爾とうち笑み、いひがひなきこと宣ふな。身を汚してこそ恥にもならめ。一旦彼處へ參るとも、病ひに假托ほとりへ寄らず、われから飽れて歸らんに、なでふ事の侍るべき。槐姬はけふまでも、おん往方定かならねば、世の風聞の虛言ならで、鵠峯にて猛火に燒れ、むなしくこそなり給ひけめ。しかるに獲がたき寶刀さへ、取らずは生涯埋木の、世に出る瀨にあひがたし。女々しく物を思ひがほして、後に悔とも及びがたけん。たゆたひ給ふことかはと、夫おもへば身を捨て、いとかひがひしく激せば、半七ますく嘆息し、しらぬ里へ賣りも遣らば、かくまでに物を思はじ。陶は弟が養父なるに、半七が身の貧しさに、妻を貨に換たる歟と、陶五郎に思はれんは、いと朽をしき所爲ながら、おん身だにしかいふを、われ又推辭べきにあらず。浮世は苦海八海の、池の築島の配所より、こゝに到りてけふまで活地獄、ゆるし給へといひかけて、襟に頤さし入る、、涙に隙はなかくに、も、劬勞に劬勞をかさねさし、果は仇人の側女となす、過世いかなる惡業ならん。お花はよゝと泣沈み、胸に痞を押入の、賠話よしなき身の幸なさ、みなわれ故の柱にそうて起も得ず。かくてはいかで果



べきとて、同樹はやをら頭を擡げ、哀しき
は理ながら、別といふもしばしの程、
彼貸刀だにとり復さば、ともかくもこし
らへて、身を脱るゝはいと易し。はや暮
たれば迎の竹輿を、齎して人や來ん。や
よお花、亂れし鬢をつけ給へ。これは又
痛い蚊ぞ。物いふ毎に口をわかす、蚊々
と走り込む。まづ行燈をと身を起すを、
半七やがて推とゞめ、脚もとの薄ぐらさ
に、老給へばいと浮雲し。いで吾儕がと
遑しく、發燒にうつす燈火の、花にお
花は個々と、思ひくしたる懐紙、涙も
て解白粉も、泣がほかくす薄化粧、愛と
はつげの毛筋立、今ぞ流れてゆく水櫛に、
鬢のおくれ毛かき掛ても、亂れて物を思
ふめり。折しも隣れる小屋の二階に、讀
手すさみの三絃も、外の哀れをしのびご
ま、生僧妙に唄ふを聞ば、
へすつる身を、何たしなみの娗化粧、
わかれの椥ははかなくも、通り過た
る夏の雨、くもるはかゞみの咎なら
で、胸の煙を蚊遣り草。この間おはなかひとりごつ
ことばあるべし。
見ろ人するせよ。
同樹は縁に偏袒ぎて、あふぐ火鉢の燃た
つを、敲けばやがて滅易き、人の命は翌
しらなくに、
へゆふべのまゝの黛も、薄き縁しと
この間お花がひとりごつことばあるべし。
尺長に、むすぶのかみの難面悄くや。
にくやわれからねに癖つけて、やる
かたぞなき油手を、拭ふちからもな
よ竹の、指さへ細るうき身かな。
濡處に四五六は、金介ともろ共に、扉
の防の裙高く、とり繕ひて両刀を、いか
めしく挾み、後方に竹輿を扛しつゝ、刀治
が門をさし覗き、あるじは在宿せられし
か、縣正との、仰を稟、お花女郎を迎と
る、竹輿をこゝに齎たりと、密やかに呼門
ば、同樹は縁より飛おりて、恭しく額を
著、短夜といひ、遠路のところ、各位を
勞し奉る。させる設はつかまつらねど、
まづ盃をたてまつらんと、いひつゝ立を
呼びとゞめ、頃日の夜の短さ、しかも女
子を伴ふに、更闌てはいと便なし。縣正
の待わび給はん、そ
がまゝにて出され
よ。衣裳調度は彼
處にて、はや調
て待給へり。とく
とくといそがせば、
お花は良人にうち對ひ、
薬なきものは人の命、今
宵が一世の別れとならば、
憑むは未來二世の縁、彼一
品だに手に入らば、それを故
郷へ面目に、浮名を雪めて主親
へ、見參して忠孝の、名を與家を剛給へ。
いひ遺すことはかずかずなれども、胸の
み痛くてえもいはず、小俣の人のいそが
し給ふに、參り侍らんといひかけて、解



たる帯を結びそゆれば、半七も目を拭ひ、苦しき浮世をわたるとも、夫婦もろ共に在てこそ、又慰るよすがとなれ。身を汚すとも心を汚さず、破る貞操が眞の貞操、よしや堪がたきことありとも、身を愛し命を保、再會の期を待給へ。短氣に逼て此うへに歎きをまさせ給ふなと、いひ諭せば、涙に回答て點頭のみ。やうやくに縁に出て、同樹に對ひ恭しく、叮嚀に別を告、良人のうへをいひ遺す、言葉のすゑはかき曇れど、月は阨なき夏の夜の、喞がましき虫の音に、慰かねつ半七も、端近く目迭れば、同樹はやがてお花を扶て、件の竹輿に乘せしかば、半七やがて庭に出て、四五六全介等に對ひ、疑ひ奉るには候はねど、既にこの女子をば進しつ。又某が乞まうせし、寶刀を今宵は給はらずやと、問ば全介うち點頭、そのことは心易かれ。乃縣正どのより證文を給はりぬ。彼見給へと指せば、四五六は懐中より、證文をとり出して、月光に押ひらき、一刀冶同樹、同半七等が乞まうす、風流士の大刀の事、右權頭殿より下し給はる所實也、依て某これを領り訖。この一紙を携來ば、件の大刀を遞與べき者なり。天文二十一年六月十六日、縣正小俣莊司判と、高やかに讀了て、やがて半七にとらせしかば、同樹も頭を傾つゝ、聞果てうち點頭、かゝる證據を給はれば、件の寶刀は半七が、手にあるとこれおなじ。お花も歡び給へかしと、いふ間にはや擡あぐる、竹輿にかはれし夜の鶴、子ゆゑにあらぬ夫の顏を、今ひとたびと見かへれば、おろす簾もまよひの雲、一聲啼し杜鵑、血を吐おもひと半七は、仇に折らるゝ宿の花、ちるとは見えてとゞめあへず、人のなげきをわが歡びに、しあはしよしと四五六全介、只管竹輿をいそがしつゝ、足うらかへして走去けり。

占夢南柯後記巻之六終

三七全傳　南柯夢後記巻之七

第三齣

天神川の淙

こゝも又天神山の名にし負ひて、科なき科を懐すかな。されば刀治半七は、風流士の太刀を取らんとて、その夜さり同樹と共に、忙しく宿所を出しは、戌の初更にやありけん、元來伎倆ることなれば、同樹は半七を誘引て、小俣へとて出にけれど、縣正の第宅へは得もゆかず。こゝによるべき所あり。彼處は阪の多で、老の足には術なしなんどいひこしらへて、途にて思ふまゝに時を移し、天神山の麓まで來にけり。この地方右手は高山嵯峨として、一條の谷川、その趾を繞り、左手は篁竹猗々として、百仭の蟠龍路徑を遮る、夜風袖に入て夏なきがごとく、明月峯をはなれて白晝に似たり。里遠離る小篠原、裳濡らしてわけゆく程に、半七とかくこゝろ得ねば、しば〳〵同樹を呼とどめ、是は何處へゆき給ふぞ。小俣の郷へまゐらんには、弦を捨て弓を取より。かくては路の便宜にあらず。夜もはやいたく深たるに、猶途に滯つゝ小俣へ赴き、熟睡せし人の門を、敲かば心なきに似たり。纔に宿所を出しより、何とやらん宜はする、言葉の本末おぼつかなし。もし野狐に憑れ給ふ歟。さらずばあまりにこゝろを屈して、老耄やし給ひけん。けしうはあらずさむらはゞ、吾儕に郷導さし給へといひつゝ先へ立んとするを、同樹は疾視つけて冷笑ひ、齡七十にあまれども、物ひとつ忘たることはなし。かゝる夜行は常にすなれど、鍵百脱し、狐狸に、鼻毛數るゝ同樹にはあらず。汝がゆく方へ得ゆかぬとて、親をば嘲哢するもの歟。人の齡の傾くばかり、世に朽なしき物はなし。わづかなる由縁を由縁にせられて、百日近く夫婦を養ひ、家を繼し名を繼し、さま〴〵に劬勞せし、擧句の果は嘲哢せられて、腹たゝしい事ばかり、さるおそろしい心としらば、腰もえたゝぬ借錢負ひつゝ、味噌嚥に追れはせじ。和主小俣へゆかんとならば、獨ゆきねといらへもあへず、踵を回らし今來し路へ、立歸らんとしたりしかば、半七慌忙つつ、やうやく袂を引とゞめ、よろづに心つきなくて、假初の言の葉より、腹たゝし奉る、みなこれおのが誤なり。殊さらに夜も深たるに、半七ひとり參りては、いかで寶刀を遮さるべき。わろき事をば、こゝろくまなくいひ懲らし給はるは、半七が身にとりて、歎しくこそ思ひ候へ。枉て小俣へ侶ひ給へと、詫れば同樹は頭を掉、ゆくことははじめより、ゆくとて

宅を出たれば、ゆかんとは思へども、いたく更たれば今夜はゆかれず。其處放さずやと焦燥て、振とる袂を亦引とめ、よしや今宵は深たりとも、太刀はお花と引かへの、約束に候はずや。しからば今宵は延されず、物は由斷に寸善尺魔、只いく度も半七が、わろき事あらば許し給ひて、小俣へ伴ひ給はれと、賠話るを聞かぬおもゝちして、足ふみ鳴らし臀を打。さて苛い長脚蚊かな。かゝる處に立在ば、手も足もふくれあがる。血の氣の薄い老人が、血を吸れてたまる物かは。やよ半七、よしや小俣へ參るとも、縣正より賜りし、證文をもてゆかずば、容易大刀を遞與給はじ。さて忘れたりわすれたりと呟けば、半七は、懐なる疊紙をかい探り、いな證文は某が、懐中に候といひつゝ驀てとり出せば、それを見せよと搔取はやく、披きも果ず寸々に、引裂捨れば半七は、吐嗟とばかりうち騒ぎ、正しく、大刀と引かへよとて、縣正より給はりし、證の書を引裂給ふは、醉狂歟、亂心歟、こは何とせん、とばかりに、呆れて脊居に撲地と坐し、遺恨の涙にかき暗たり。同樹はさこそと齒莖をあらはし、足拍子をとりながら、呵々とうち笑ひ、やよ白物、この證文が何になるべき。あまり念ひがおそろしさに、一件をいうて聞せん。縣正の返引をもて、お花を陶殿に進らせて、その代に風流士の大刀を賜るなんどいひしは、みな悉虛言にて、お花を花街へ沽却なし、その身價を引とつて、九十餘日食したる飯米の盤帳を、埒あくる同樹が較計、見る影もなき浮浪人の、半七か食ひ荒せし、お花を頭へ進らしたりとて、寶刀を和郎に賜らんや。よく物を思うて見よ。主の大內殿でさへ、彼大刀ゆゑに滅亡せらる。況や和主が分際で、件の大刀を取らんと思ふは、平城の大佛堂の梁を、蟻がひかんとするに似たり。かばかりしれたることわりを、しらで實事とおもひなす、是を名づけて白物とも、虛氣人ともいふなりかし。注文かくの如くなれば、反故には劣る一箇を、只今引裂捨たるは、和主に思ひ絕せん爲、彼證文の虛實、これにてはじめて讀たる歟と、わが奸邪を奸邪と、あかして罵る大膽無敵に、はかられけりと半七は、突たる膝を立なほし、拳を握り齒を切りて、向上る眼に涙を浮め、一旦交たる恩あれば、かゝる僻事し給はずとも、はじめよりうち明て、かう／＼と宣はゞ、またせんすべもあるべきものを、百日足らず半七等を、養ひ給ひしその費は、いかばかりとはしらねども、詐欺てお花を賣ては、世にいふ虎落稔帙に等しと、いはせもあへず眼を瞪らし、虎落とは誰をかいふ。老たる親をば子が養ふ、これは世の間の常なれど、われは却子を養うて、借銭の淵に沈ば、それを見るめのいふせさに、女房

賣ても親の貧苦を、救うといふべき孩、けふは女房を賣らんといふ歟、翌はいふかと、こころにまてど心つよく、しらず貌するが腹たゝしさに、風流士の大刀を闘にして、お花を賣らして半七を、孝行ものといはするは、乃これも親の慈悲、しかるをなぞや目に角立て、親を白眼ば比目魚にならん。湯出海老を見るごとく、面をあかめて疾視ばにらめ、不孝もの奴と立ながら、裳を褰て礙と蹴る、蹠を楚と斫り、身の幸なさに遠く來て、親ならぬ人を親と憑むも、風流士の大刀を引提て、一とたび故郷へ歸ん爲、この故にこそ女房お花も、仇としりつゝ給事、それさへふかく詐欺られ、恥辱に恥辱を累たる、半七が一期の薄命、お花が恨思ひやる、舊の武士にてあらんには、匹夫下郎の泥腦に、父母の遺體を汚されんや。いと嗚呼なりと衝放せば、倭僧ながら踏こたへ、原は武士でも諸侯でも、大臣攝家の嫡正でも、今見る所は素浪人、けふより同樹が子となれば、泥腦を戴するを、過分とおもうて百拜せよ。刀の柄に手をかけて、和郎は親を何とする。親を殺せば竹鋸、この頸の根を挽るゝぞと、足もて肩を搖動し、親といふ稱を嵩に著て、罵つ呀みつ、蹴つ踏つ、打惱さるゝ半七が、單の衣も破れ口、堪忍袋の緒も絶あへず、頭髻も共に弗と斷て、髮も心も亂れつゝ、ふたゝび打んとふり揚る、同樹が拳の下かい潜り、腕を取て身を起し、假にも親子の義を結べば、いふべきよしをえもいはで、思ひのまゝなる拳は受たり。且く彼處へ休ひ給へといひもあへず、捉たる腕を脊へ採向、ちからにまかして衝飛せば、十歩あまり走りつゝ、川邊に掛たる稻塚に、忽地礙と衝あたれば裏より見りと閃く刄に、同樹は肩砍著られ、苦と叫て倭僧を、倒しも果ず稻塚より、素やかなる手を伸て、右手なる川へ水入と突入れ、やがて稻塚かき披き、まづ半身をあらはして、刄の鮮血を拭ひつゝ、腰なる鞘に納る形勢、こはこゝろ得ずと、半七は月光にと見かう見れば、嬋娟たる婦人なり。ますます疑ひ惑ひつゝ、樹立の下に身を倚して、且くこれを覘へば、件の婦人は徐やかに、歩出て袖うち拂ひ、つくづくと立在にぞ、やうありけりと半七は、樹蔭を出て跡に跟、そは何人ぞと呼かくる、聲に忽地見かへる顏を、つくづくと見て亦おどろき、こは姉御前におはさずやと、問せもあへず手を抗て、あな音高しと推禁め、立ながら耳語つ、又手を抗てさし招けば、痛しきかな槐姫は、露に宿り風に梳り、途の疲勞にたどたどしく、掛桑のあなたより、歩み出給ひしかば、お通は聽て勵り扶き、幼少おはせし時より、華洛へのぼり給ひしかば、いまだ知召ざるべし。これはわらはが弟なる半七に侍りとまうせば、槐姫諾し

て、波風しくめる世のたゝずまひにをしからぬ身を存命て、不思議に面を見らるゝよと宣へば、半七はおん前に畏り、故ありてこの春より、本州にさそらへば、しのび〳〵におん往方を彼此と索奉りしかひありて、はからずも半七が、今宵の危窮を姉に救はれ、姫君の恙なき、尊顔を拜し奉るこれわが武運の竭ざる所、歡びこれにますものなし。直に宿所へ侶ひまゐらせ、憂來しかたは緩やかに、訊慰まうすべし。いざ給へとて身を起ば、お通は姫を扶掖て、主從三人月を燭に、氷上のかたへゆかんとすれば、いつの程にか左手右手、一反ばかり引はなれて、事を窺ふ四五六全介、尻うちかけたる松が根に、煙草の殼を丁とはたきて、落人やらじと四五六が、高やかに呼びかゝる、聲もひかせず半七は、腰なる刀子拔出して、はつしと打ば、身を引て、拂ひ落せし煙管の小大刀、程もあらせず後方より、實父外祖の讐敵、やは脫さじと全介は、下駄脫捨て松蔭より、走り出んとする處を、お通は咄嗟と見かへりつゝ、鉄劍に打笄を、丁と受たる桐の下駄、ひとはや落ん夜の風、秋を隣に夏の霜、隈なき月に主從は、潜んとすれど潜びあへず、いとゞ術なく見えにけり。



過去の菴主

刀治半七はその夜さり、天神川のほとりにて、おもひもかけず姉お通が、同樹を川へ砍流して、危窮をば救れたれど、目視ゝ遁しもの、縦殘忍のこゝろもて、われに飽まで難面とも、眼前に殺せし事、爾ぞ心に快からず、後日の祟も胸くるしけれど、既に槐姫に環會ぬれば、この日來の本意は遂たり。主を思へばなかなかに、身の殃危は見もかへらで、蚕介四五六が虎口を脱かれ、やがて姫と姉とを誘引つゝ、跡を埋めて間道より、氷上の郷へ立歸れば、丑三のころになりつ。此は心おちゐしかば、門の鎖を固くして、行燈の燈口を掩ひ、敷居のこなたにかゝまりゐてまうすやう、半七が今此ざまにて、遠くさそらひ候を、姉はさらなり姫君も、さこそ怪しうおぼすらめ。そは後にこそまうさめ。さては陶晴賢が逆亂によりて、義隆義基弑れ給ひ、金を積玉を敷たる、築山の御所灰燼となりにければ、姫君とても恙なく、脱れ出給はんとはおもはねど、御最期のやうをも問ばやとて、女房お花もろ共に、周防を投て旅だちしは、去年の秋にて候ひしが、沼多の新関に抑留せられて、心にもあらぬ月日を化に過し、やうやくこの春、斗藪の女僧が



同樹を斫てお通半七にあふ

好意にて、辛くも沼多の關を越、この地に年來住居する、刀冶同樹といふものは、お花が由縁あるにつきて、夫婦こゝに身をよしつゝ、商賈にさへなりさがりしも、姫君のおん往方をしらまほしく、且風流士の寶刀を索て、身の愆を贖んと思ふにかひなき夫婦が薄命、これより同樹に欺詐れて、今宵に逼る一瀨の浮沈を、祐る神の名にし負ふ、天神川のほとりにて、環會奉りし、幸これに何かはまさん。去歲より何處にか坐したる。又何の故ありて、危きを忘れ給ひて、このわたりには呻吟給ひし。心もとなく候と、身の憂よしを搗ませて、訊奉れば愧姫は、落る淚を袖もて拭ひ、定めなき世のたゝずまひ、老僕家人に國を奪れ、わが舅君養父君、所夫さへ墓なくなり給へば、存命べくは思はねど、通がわりなく禁るから、形なき世を忍びてをり。女僧にならんと思へども、これすら大和に在ます、

父母に今一とたび、見えてこそと諫られ、刄の上をわたりつゝ、住ひし方へかへり來る、心苦しさ推てもしれ。わが身ひとつの故をもて、牛七夫婦にいくばくの、艱苦を被るは不便なりと宣ひつゝ、ふたたびおん目を拭ひ給へば、牛七は只額を著、淚に面を得もあげず、お通もさこそと推量る、主と弟が歎きのかず／＼、憂にはもれぬ袖の雨、おなじ簷下に晴間まつ、心持はすれど氣を激して、弟が方を佶と見やり、やよ牛七、和殿夫婦が伶俜て、この里へ來たるよしは、故ありてはやしれども、音耗聞えんよしなくて、思ふには似ず默止たり。さても去歲の八月廿九日、館には義隆をいふ。あへなくも、大寧寺にて自殺まし／＼て、麻の如くに紊れぬる、人の心に忠なければ、逆賊等が鋒鋭く、鶴峯さへおとされて、姫君に册く者は、吾儕と仙野呂東二のみ、辛く圍を切ぬけて、澤川のほとりまで、延しまゐらしたりける折、敵透間もなく追蒐來つれば、呂東二頓て取て還して、且く敵を拄る間に、龍顋は脫れにけれど、これより主從只ふたり。晝は躱ひ夜は走り、東を投て赴く程に、うき身の秋や安藝國、沼多の本鄕に關を居られ、進退こゝに究りぬ。せんすべなさに川上なる、草菴に身を寄て、姫のうへを說しらし、ともかくもしばしが程、潜しまゐらして給はれと憑しに、菴主は老たる女僧なるが、かひ／＼しくたのまれて、やがて姫君を含藏進らし、さていふやう、白雲流水は、人間生前の逆旅にして、飛花落葉は、貴賤老幼の榮枯に齊し。かゝる亂れにあひ給はずば、いかでか女僧が柴門へ、金枝玉葉に比へたる、姫刀禰たちの來さんや。今更にわがうへを、隱匿奉るべうもあらす。老尼は昔大和にて、風流士の寶刀を拭損じて、罪被るべかりしを、蟻松ぬしに救れたる、刀冶同樹が女房、小田井

といふものに侍り。さる過しいだしたたる、夫は京に住ずなりて、いはけなき孫を棄、周防の氷上に赴きて、幽なる世をわたるものから、僻事のみいやませば、世間いよ〵形なく、とにかく夫を謗難たる、これを菩提の種にして、明白に暇を乞ひ、十年以前に離別して、些ばかり所縁につき、こゝに菴を結では、なか〳〵に身も安く、忘れて年を経たりしに、今はからずも由縁ありし、蟻松ぬしの主なりける、筒井家の姫君の、先途を敎ひまゐらするは、これぞ離別の夫に代りて、舊恩を報うにこそ。御こゝろ安く思召とて、信やかに語らひ慰め、おのが女兒の事孫の事を、涙と共に物がたれば、憑しくも又哀れにおぼえて、主従袂を濕らしたり。かゝりし程に秋も暮れ、無雷月の上旬より、菴主の女僧勞ることありて、病の床に臥したるが、老たるうへの病著なればや、一日こゝちよく見ゆれば、次の日は首もあがらず、元來彼處は街道より、東へ入り南へ繞る、浮世に遠き山ふところにて、そのほとりなるものならでは、尋わぶる草の門なれば、潜ぶに便よけれども、菴主の爲に醫師なんどを、招くべきよすがもなく、しのび〳〵に看病も、吾儕の手ひとつなる折から、面こよなう醜くなりし、行脚の女僧ふたり來て、この夜の宿を乞にけれど、こはもし怨敵の間者歟と、疑ひ思へば得も許さず、頃日菴主は如此々々にて、重き病に臥たれば、おん宿はかなはじと、いとも難顔推辭しかば、行脚の女僧つく〳〵と、聲を聞裡を見入れて、さいふものはお通ならずや、われは平作が母園花なり。わらはは夏山に侍るかしと、いゝ聲はその人なれども、面影はその人ならず。後方なる女僧が詞に、負れたる稚兒は、平太郎にやあらんずらんと、思へども思ひ難て、應もえせずまもりてをり。當下女僧は遽しく、笈をかきおろしつゝ、竹縁に尻をかけ、かく面影の變しかば、名告つゝもなほ疑るゝ、現さもあるべき事なりかし。おん身がこゝに潜びて在れば、掩姫も恙なく、おはしますとは猜したり。わがうへつばらに告んと思へど、こゝはあまりに端居なり、許し給へといひながら、後方なる女僧もろともに、網代笠をかい取て、草鞋を脱ときに、やうやくその人なりとはしりて、あな淺まし、何の故にか面を燒、頭をば剃給ひし。こは〳〵いかにとうち騒ぐ、胸苦さは父のうへ、弟のうへに事ありて、かゝる姿になり給ひし歟と、問まほしさも端近し、先こなたへと誘引て、菴主へ縁由を告、その枕方に圍居して、まづ事のよしを問に、園花の尼答て、糸谷山なる本村[illegible]の事、[illegible]士の賣刀のこと、家翁の大人閑居の本末、おん身夫婦が孝心より、[illegible]し事、弟平作が、親の爲に命を隕したる心操、

仙野以東が早打して、周防の逆乱を告た藁となることあらん。賢き人のいへるこにしあらねば、人も許さずわれも又、志る事、一五一十を洩しらしつゝ異うちかたあり、出家は只出家の後の、出家を堅の移るに易し。然容を擬すとも、只平み、只ひとりの子なる平作は、身を殺して親を救んと思ひたる、覺悟のうへの落命を、惜しとは思はねど、舍の花なる夏山が、後の歎きも痛ましく、わづかに三歳なる平太郎が、今こそあれ人とならば、父の顔だに認らぬを、遺憾思ひもせめ。彼も痛しこれも又痛しと思ひやる、わが身ひとつの秋ならねど、世ははやかうと觀ずれば、わかゝりしとき思はずも、妹夫の縁を八重縮して、姉御前を苦めたる、因果忽地廻り來て、かゝる歎きにあふにやあらん。この世だにかくの如し。罪障いまだ滅せずば、後世の艱苦をいかで脱れん、さればこの身の暇を乞て、女僧にならばやと思ふにぞ、夏山も又もろともに、菩提の道へ入らんといふ。これも又理りなれど、廿歳になるやならぬ身の、圃に逐よとなん。一旦の憂に堪ず、哀み太郎を孚むを、身の勤となし給へ。吾儕するおぼつかなき出家を遂なば、世の期おまりて世を捨るとも、老くだちぬる身は齢も傾きぬ、且平之進どのには、わが



婦こそ正嫡なれ。しかれば良人に暇を乞て、今はや出家したればとて、笑れもせじ、聟もせじ、思ひとゞまり給ひねと、叮嚀にいひ諭せしかば、夏山貌を改めて、こは母公の宣ふ事とも覺侍らず。年弱しとて捨る世の、何かは難き事の侍らん。母御前には良人あり、齢五十に近けれども、元來人にすぐれたる、縹致にてましませば、四十のうへはまだ超ぬ、女房とこそ人も見め。わらはは既に良人なし、良女兩夫に見えずと、幼稚き時に父母の、いひ教給ひたるを、今更に忘んや。しかれば母御はかくても在せ。夏山こそ出家すべきものに侍りと回答つゝ、さて嫁姑もろ共に親と良人にこれを告、身の暇を給はれと、しば／＼こひも願へ共、親も曾太郎なり良人も牛之進なり許し給はず。かくて事作が初月忌の逮夜に當りつゝ、此夕わが宿所、親族おの／＼集會たる、その席上にて夏山は、父と外父とにまうすやう、

出家の事を日來より、願ひ奉れども許し給はず。こはわらはが年わかければ、ゆく末心もとなしとて、許されぬにやあらんずらん。心は貌によるものならねど、又そのよしなきに侍らず。しかりとも、ふかくも思ひ定めしを、いたづらにやは止べき。これもて疑念をはれたまへといひもあへず、爐の火の中へさしくべたる、火取の柄をしかと取り、

花は根にかへらばかへれ生ながらつひの薪と身をばなしにき

と詠じつゝ、烈火のごとくに燒たりける、火取を顔へ推あつれば、けぶり忽地發と立て、一聲苦と叫もあへず、仰ざまに倒れたり。吾儕この形勢を見て、われも又かゝる志はありながら、夏山に先せられしは、生涯の不覺なれ。後れはせじと、火取をかいとり、

櫻木をくだけば後の花もなし死出の山かせいざふかばふけ

と詠じも果ず火取を顔へ推當て、もろともに倒れたり。さる程に親族いたく驚き騒ぎて、さま／＼に介抱せられしかば、やゝ人ごこちつきたるに、佛𦬇の冥助やありけん、夏山なり吾儕なり。顔はこよなう爛れにけれど、つゆばかりも痛みを覺ず。當下わが所天は、わが兄を見かへりて、蛾松ぬし見給へりや。彼等身を捨て出家を願ふ、勇猛堅固の志賞するにあまりあり。陶晴賢が逆亂以來三十日に及べども、槐姫の生死存亡、今にこれをしるよしなければ、わが君御夫婦いといたう、心苦しくおぼすめり。さるからに間諜者を遣して、彼地の爲躰を瞰り問するに、安藝の沼多に關を居て、周防のかたへ入るを許さず。しかれども尼法師は、その沙汰を脱れて、往還自在なりと聞り。幸なるかな開花夏山、面を燒て尼とならば、よしや敵地へ赴きて、姫の在所を索ることも、誰かはこれを認るべき。其／＼

代り子に代り、彼等大功を立ん事、この時ならで何日をか期せん。園花が出家の事、今ぞ望に任すれば、夏山が身の願も諾ひたまへといはれしかば、わが兄莞爾と打笑て、いふにや及ぶ女兒が出家を、立地に許すべし。彼等面を燒といへども、痛なきは頗奇なり。とく／＼出家を遂よとて、この夜延請したりける、老僧を導師として、戒を受髪を剃、吾儕は拈華、夏山は、微笑と法名給はりて、宿志を果すのみならず、かゝる大事のおん使を、うけたまはるこそ今更に、哀の中の歡びなれ。不幸の中なる幸かなと、われも思ひ人にもいはれて、猛に行の装を整へ、次の日は、はや道途せんとするほどに、わが姉は昨夕より只管泣ておはせしが、このときいよゝ堪がたくてや、落る涙を拭ひもあへず、恥しや姉がひに、年來夫とひとつにをれど、憂はいやますわが子のうへ、こゝにてとやらんかくやらんと、思ひやりつゝ歎く苦さ。われにはまして園花どの、はやくも塵の世を遁、身を雲水に任するこそ、羨しく侍るなれ。せめてこの平太郎を、吾儕が手親孚みてん、後やすく起行給へ。名殘をしやといひかけて、また潸然と泣給へば、わが兄も又宣ふやう、汝等縦世を捨るとも、生ある程は艱苦を奈何、熟れぬ行脚に嬰兒を、携んは便なき所行なり。そは三勝どのにうち任せよ。われ又よきに勸るべしと叮嚀に諭し給へば、夏山の尼頭を掉り、父と外母御前の淺からず、敎給ふを推辭にあらねど、凡殿の御内の黨、忠あるも忠なきも、敵地へ赴く事かなはず。しかるに吾儕幸に、彼地へいゆきて功を立、君父の勸賞給はるとも、捨果し世に何かはせん。男子は關を許されずとも、わづかに三歲なる平太郎は、ともかくもして超さば踰てん。親の爲には孝ありとも、させる忠義は聞えざりし。亡者の名代に、この子を携ゆきてこそ、草の原にこ平作どのも、さぞな喜しと思ひ給はん。枉てこれをばゆるし給へと、只管に願ひしかば、姉御前はいふもさらなり、わが兄ふかく感嘆し、わが女兒の情愿、いと理りにおぼゆるかし。三歲兒なりとも武士の胤、父に代りて母もろ共、敵地へ赴き功を立よ。心ありて面を燒、心なくして忠に背む。彼豫讓が灰を吞、身に漆をさしたるは物かはと稱賛して、いと喜しげに見たて給へば、わが所天も只管に、夏山を可として、密やかに宣ふやう、仙野呂東二取て返して、姫のおん往方を索といへども、彼關に留られなば、これも又憑みがたし。汝達いかにもして、槐姫に環會奉り、關の鎖の開くまで、ふかく潛せまゐらせよ。安藝國高宮郡、多治比の郷の地頭職、大江太郎乙就は、僅に三百貫の主なれども、彼人名家の後として、勇敢武畧當時に秀。只その身祿少く、勢

の微なる故に、晴賢に随從し、逆賊與黨の志を見すといへども、裡には大内家の舊好を忘れず、不意に起て晴賢を、滅さんものはこの人なるべし。われ又殿に聞えあげて、竊に大江家に謀じあはし、槐姫の御為に、逆賊を討滅して、大内殿の怨を復さん。このことふかく心に秘て、縁をもとめて大江家へ、便らば後に翼を得なん。ようせよと說示し、送るもゆくも袖に露、はらひもあへぬ浮世の塵に、まじる道者は親子三人、もしこと成らずばこれぞこの、一生の別れよと、思へば足もすゝまねど、志を激して只管に歩を急ぎ、いく宿りしてやうやくに、けふしも彼處の關を超、西條のかたへとて赴くに、怱地に途に惑つ、浮世に遠き柴門に、宿を乞ば思ひきや、姫の隱舍ならむとは。是は親子が誠心を、神と佛の憐みて、導き給ふものなりと、首尾を演給へば、夏山比丘尼も涙の隙に、平作が最後の光景、物がたりてはうち歎く、おなじ宿りの袖しぐれ、晴るゝよしなき一家の難、彼世この世の弟が事、外母從弟女の縫れる面影、見るにつけ聞につけ、胸のみいたく塞りて、又慰んよしぞなき。縡の趣を竊聞給ふ、槐姫は忙しく、屏風の背より走り出、園花夏山兩女僧、さても雄々しき心操、感ずればなほあまりあり。故郷を出海山凌ぎ、飛錫行脚の難行苦行も、みなわれ故と聞くときは、けふの對面いと恥し。憖に生殘りて、身を苦しめ又人を苦め、いくその罪を造んより、只速に自殺して、冥土にましますわが所天に、心操をしらし侍らん。よしこれとても大和なる、親のゆるしを得受ねば、事かなはじとて許されずは、拈華、微笑が弟子となして、けふよりぞ入る御佛の、法のみちびきしてたべと、かき口說つゝ泣給へば、園花の尼勦り慰め、御こゝろの中推量れば、痛しきこと限りなけれども、御出家の事はいまだ遅からず。女僧等がこゝへ來る途にて、人の密き語を聞くに、去歳の九月二かの日、大内殿の郎君は、築山の御所において自害まし〳〵、猛火の中へ入給ふと、世にはをさ〳〵いふめれど、竊に助け奉る人ありて、義基今に恙なく、ふかく潛て在ますといへり。この事もし實事ならば、御出家は卒爾に侍らん。陶五郎が舉動、養父晴賢が惡虐をたすくるに似たれ共、その底意はいかにあるらん、善惡いまだしるべからず。いそがい給ふことかはと、さま〴〵に慰めまゐらすれば、菴主の老尼はいと重き、病苦を忍びて身を起し、原來行脚の尼御前たちは、蟻松ぬしの息女なり、孫女にておはするよ。寔に不思議の縁ありて、去歳の秋より、槐姫主從を舍藏まゐらす、吾儕は刀治同樹が妻なり、首尾は箇樣々々と、昔を今に繰かへして、わがうへを說しらし、われも夫はありな

がら、はやくも菩提の道に入りし、事の容は似たれども、飽もあかれもせぬ夫にわかれて、子ゆゑの道に入る、尼御前たちの心操は、いと有がたく侍るかし。尼が老病身に逼れば、終焉も遠からじ。しかるときはこの菴、忽地に無住となりて、槐姫主從の身を寄給ふに便よからず。是のみ心苦しかりしに、今はからずもこの菴を守るべき人を獲たれば、世の疑ひを避るに堪たり。尼もし往生の素懷を遂なば、拈華尼は後住となりて、明白に修行し給へ。この地の人氣は如此々々なり。箇樣々々とおちもなく、信やかに説示せば、拈華比丘尼大きに歡び、さては父が前妻の從弟女なりしと聞えたる刀冶同樹の女房にて、おはせし歟、舊緣こゝに竭ずして、新尼等が師と仰ぐ、實に不思議の對面なりとて、その夜は通宵語りあかしつ。かくて二人の新尼は、同宿と稱して、笈を脊負ひ、錫を突鳴らしつゝ、日毎に三原尾道へ出て募緣し、ある時は甲立多治比のかた赴きて、大江家の虚實を探り索めなどする程に、其としの暮に及びて、菴主小田井尼遷化したり。豫の遺言に任して、拈華比丘尼後住となりて、更に拈華菴と號し、微笑比丘尼もろ共に、日に市へ出て募緣すなれば、近き里人等もこれを疑はず、よき後住を得て、小田井の道場を相續せしといひあへり。さる程に春立かへりて、彌生の中旬有一夕ふたりの新尼は、例の如く募緣して歸りつゝ、吾儕に對て、けふなん半七夫婦に逢ひぬ。彼等去歳の秋和泉の堺にて、陶が逆亂を傳へ聞、日をかぞへて途をいそぎ、周防を投て赴く程に、沼多の新關に留られて、六ケ月の宿りをかさね、路費竭て術なしといふ。しかれどもわれも夏山も、面影いたく變りければ、外母なりとも妹なりとも、名告らねばいかでしるべき。只半七のみ平太郎を訝しげにうち見たるが、彼等心中に憂ひを抱けば、これさへ佞とは思はざりけん、しらねばしらぬ隨にして、外々しくその故を問ば、如此々々のことによりて、周防の山口へ赴き、刀冶同樹といふものを尋るといへり。おもふに彼等は、槐姫の先途を見まゐらせ、又風流士の寶刀を索出して、犯せし過を免されんと願ふなるべし。しかれ共彼寶刀の事は、館既に後悔し給ひて、思ひ捨給ふものなれば、今更これを求め出すとも、勞するのみにてその功なし。名告て事の趣きを告しらせ、菴へ將て來ばやと思ひしが、彼等は元來、その罪にあらずといへども、いまだ君より赦免を得ず、加旃廣もあらぬ草菴に、わかき夫婦を引入れなば、これより里人に疑れて、槐姫のうへに、又いかなる禍のいで來なん。これも又影護し。その行かたは既に聞つ。けふは名告らで立わかれ、姫のうへに事あらんとき、半七に功を立さし

て、身の幅廣くするにはしかじと深念して、なほ外がましくこれをもてなし、わが柴門すら定かに告ず、只懷なる關防牌面をとらしたりと物がたり給ひしかば、われもはじめて、おん身夫婦が、うき旅に年を超たるよしをしるから、心もとなさいやましたれど、忠義の爲に思ひかへて、只一たびの音耗もえせず。しかるにいぬる月、沼多の關の戸開たるころ、拈華庵主ゆくりなく、仙野呂東二が、姫の往方を索まゐらするに逢ひにければ、豫て受たる計策を告しらし、大江家の形勢を見て來たまへとて、これをば多治比の郷へ遣し、彼人の歸り來ば、一聞、姫君のおん供して、大和へ赴んとて待程に、呂東二は歸來ず、何事やらん、沼多の近郷、いと悤劇なりにければ、姫君こゝに在するよしを、人にやしられたりけん、しからば呂東二の歸り來るを待がたし。備前備中までも、延しまゐらせんと思ひて、主從が形を窶し、新尼たちを前に立して、拈華菴を出たるに、ゆくこといまだいくばくならず、野伏忽地四下に起りて、新尼たちは隔られ、三原のかたへゆくことかなはず。かくてはゆくさきこゝろもとなし、却山口の方へ走らば、野伏の害を脱れ給はん。兄半七は、氷上の郷にありと聞けば、かゝる時にこそ、弟に功を立させんと、思うてやうやくに虎口を殺脫、主從ふたりたどる〳〵も、晝は人なき樹蔭に躱れ、夜のみ道を走りつゝ、天神川のほとりまで來たる折、おん身は人に拏懲さるゝことの容を竊聞に、いたくおん身を拿ものは、刀冶同樹にこそあんなれ。這奴はよからぬものなるよし、前の菴主が物がたりにてしりぬ。うたてやな半七は、風流士の寶刀を索ん爲に、彼と親子の義を結て、今この呵責を受るにこそ。槐姫を舍藏まゐらしたる、尼には舊の夫なりとも、這奴を在せば半七も、志を舒がたく、姫君のうへいと危し。今忽地に不意に出て、禍を斷にはしかじと、思ふ心を鬼にして、さてぞ同樹を砍流しぬと、一五一十を物がたれば、半七しば〳〵嘆息し、外母園花どのはさらなり、平作といひ夏山といひ、世には稀なる孝烈の、弟、弟婦を持ながら、半七はいひがひもなく、只管寶刀を索ねん爲に、刀冶同樹にはかられて、彼が子となるのみならず、女房お花を賣られたる爲體は、媿樣々々と、夫婦が薄命を告しらし、さるにても、惡棍の同樹が妻にも、又かゝる眞實の比丘尼あり。只遺憾かるは、某夫婦眼ありながら、縱面影は變るとも、外母と妹をそれともしらず、抖擻の女僧とのみ思ひて、外々しく立わかれ、後に詣を索ねたれ共、沼多川の東村には、さる柴門のなかりしかば、原來は信ずる辯財天の現化して、闕をば超さし給ひけんと、愚にも推重りて再びは尋ざりし、身

の怠こそ面目なけれ。しかれども半七が、武運いまだこゝに竭ずして、姫の先達にあひ奉り、死をもて恩に報はんこと、これ平生の願ひなりと、回答つゝ、或は歡び或は歎き、義心面に見れしかば、槐姫は今更に、憑しき心持しつ、お通諸共半七お花が、薄命を憐み給ふ。會話に夏の夜の、墓なく明て門にさす、旭は高く昇けり。當下半七は窓の扇引あけて大きに驚き、長物がたりに時を移して、思ひの外に天は明たり。わが姉同樹を殺し給ふ折、二人の擁者左右に立て、事の爲體を張たり。一旦は迹を埋て、この處へ伴奉るといへ共、這奴等かならず縣正へ訴べし。しかれば虚々と、主從こゝに在らんことは、薪の上に巣を營む燕に異ならず。天の明ぬ間にこそ、姫君の御供して、脱れ去べう思ひしに、日も出たればいと便なし。されば迚此處は久戀の家にあらず。まづ姫君に湯漬を進らし、主從物よくとゝのへて、間道より走るべし。さはとて眉に火のつく如く慌忙つつ、支度やうやくとゝのふ程に、路次の人目をしのぶ掛、お花がきのふ脱捨たる、ふるき布の單衣をお通に被せ、お通が單衣をば、槐姫に被せまゐらせ、半七は長やかなる、刀を取て脇夾み、杖よ笠よといそがす程に、外面に跫然と、人の走り來る音して、門の扉を打敲き、刀冶どのはまだ覺ずや。朝寢するには程もありなん。寢惚れずによく開給へ。これは村長より御使うけ給はつたる、十个村の歩牌場太郎也。何かはしらねど、尋給ふよしあるに、半七を將て參れと宣はすれば、とくもろともに參り給へといかめしく呼かけたり。半七はこれを聞て、すはわがうへよと思へども、なか〳〵にうちも騒ず、まづ姫君を奥へ潛し、さてお通に密語やう、絆既にこゝにおよべば、このまゝには脱れ果べうもあらず。某は歩牌とゝもに、村長許赴きてともかくもいひこしらへて、軈て歸りまゐるべきに、姉御前は門と背門をよく鎖て、半七が歸るを待給へ。暑堪がたく坐すべけれど、彼方ざまをば納戸なる、押入の上戸棚へ、潛し給へといふ間に、又門の扉をうち敲き、刀冶どのはまだ起ずや。いつまでか待し給ふぞ。村長どのゝ待わび給はん。とくとくゆきねといそがせば、半七はなほ騒ず。をいと應て壁際なる、竿にかけたる麻袴、前紐取て穿ほどに、お通が當る腰板や、胸さへいたや、生死の際、いひ脱れてもかへさずば、只殺脱て歸らんものをと、思ひ定めて脇挾の、鞘濕して門の扉を、瓦落離とあけて、背ざまに、礙と建たる半七を、先へ立する場太郎は、婆娑羅婆娑羅と、敗草履に蹴かへす塵埃をたゝしつゝ、なほいそがして將てゆきぬ。

槐樹の手斧

却說お通は住つかぬ、家におちゐぬ胤を抱、今更脱れかたなやの、劍の上をゝるより、なほ危きは姫のうへ、弟がうへも心もとなし。半七はとく歸れかし。往き還るも敵の中、廣き世界を陝布の、胸あひがたき借衾の單も、君が爲には掩ふべき、袖こそなけれしかすがに、濡るゝはおなじ袂なる、八しほにあまる物思ひ、わびつゝ待ばいと長き、夏の日影もやうやくに、西へ傾くひつじの時、居處の步み敷音もせず、只門の扉をほと〳〵と、敲くは當に半七なるべし。恙なく歸りしよ、待わびにきとひとりごち、やをら門の扉引あけて、と見れば彼は半七ならず、吐呀とばかりうち騷ぐ、氣色を見せじと思へども、跛もつ脚におのづから、膝はわな〳〵慄つゝ、何處より來ましたる、半七は宿に在らず、夜叉來ませと門の扉を、引たてんとする手を楚と捕り、さのみいぶせくし給ふな。わが宿にわが來るに、けふの翌のといふ事あらんや。抑お寶の姉に侍り。この刀冶は半七が名蹟相續せしと聞に、わが宿とはなめげなり。こん身は何ものぞと、問つゝ聽てにじりあがれば、お通は直と呆れ果て、且く顏をうちまもり、わらははあるじ半七が、嗔留守するものを女子と侮り、なき事をいひかけて、折もよくは、物を取りて走ら



んとての底意歟、出てゆきねと言葉雄々しく、弱氣を見せねどとにかくに、心にかゝる納戸なる、姫にぞ胸をいためたる。いふ事いはして冷笑ひ、半七は刀冶の名跡とならばなれ。同樹どのとは根これ他人、われは敗鐵の全介とて、刀冶の孫息子、京にて生れ浪華にて、人となりて平城西國、跨にかけたる氣剛もの、勿論養母の世にありし日は、孝行といふ事を、些ばかりは眞似ても見たれど、持歩で辛い世は渡られず。近來祖翁にしこまれて、わろい事には熟易く、律義篤實さらりと止て、濡手に泡なる攫取り、本錢容れず闘ると、いふ事ならば何時でも半口、されば馬には騎て見よ、人には添といふことあり。半七には、まだ面識にあらね共、姉御といへば錫烹たる、鍋にはいやます臭い中、表液なりとも吸してたべと、いひつゝ直と抱きつくを、衝除て走り退、あなめげなる白物かな。みだりがはしく手を出さば、辛きめを見て後悔せん、とく／＼去ねと威しても、聞かぬ態してにじり寄、いな姉御、さのみ難面宣ふな。歸れ出よと追立ても、こゝより外に宿はなし。半七が姉御ならば、面識にもなるべきものを、全體おん身は何處から、何日又こゝへは來ませしと、問れて忽地さし詰り、應かぬれば冷笑ひ、そはいはれまじいはれまじ。いはぬとて、いはさでやはと、いへば言葉に角がたつ。いはぬにはいふにますは色情、一日容しより、命にかけて大誓文、男風流は二の町なれども、第一によく挿丁で、小遣錢に事缺せず。第二には朝起して、飯炊おろして家々を起す。第三には水を汲み、洗濯衣の手傳する。夫にすれば得要向、色ある返辭を聞してたべと、又引袖も倘事の敗にやなるべきと、思へば今更もて煩ふ、胸くるしさを笑に紛らし、色は思案の外とかいへど、よく思うても見給へかし。おん身はこゝの孫の刀禰と宣ふに僞なくは、同樹どのゝ子になりし、半七はおん身が爲に、假初ながら親ならずや。その半七が姉なれば、わらはは即おん身が伯母、その伯母を犯さんとて、不義いひかゝるは是畜生、人はよろづの靈なるものと、かしこき人のいひおきし、五常の道をしらずもあれ、畜生に異ならぬ、行ひざまはあまりなりと、恥しむればうち笑ひ、さて物々しき服忌令、禁忌縁て窘ても、いひは迯さぬ互の誓言、わが夫にせん、妻にせんとて、正しく贈りし婿引出を、はや忘し歟と抱留れば、やうやくに搔遣りつ、こゝろ得ぬ事いはるゝよ。けふあうてけふはじめて、物いふ人に何をか贈らん。醉に紛れて歟、さま／＼なる根なし言聞くいとまはなしと、いひつゝも又走り退くを、遣りも過さず帶引留、正しき證據あるものを、今更に嫌れては、一分たゝぬ男子の意持、これ見てもなほ

諍ふやと、いひも果ずに遑しく、懐より
とり出す、雙足の桐の下駄の眞中、打こ
みし笄は、胸におぼえのあるよしを、い
はでも色にあはられて、それはとばかり
口隠れば、ふたゝび目前に銜著て、いか
にこれをよくも見よ。神を誓ひの天神川、
尖と砍こむ水潜せば、婿を祝ぐ昔風流、
亦逢ふ迄の像見ぞと、打かけて贈る笄を、
受たる下駄は今宵の島臺、思ひあうたる
婦夫の道を、踏たがへじとて來しものを、
難面君にてありけりと、下駄に寄たる戀
ならで、今ぞ讀たる身の仇に、お通は結句
うち騒がず。この笄の引出物、いはるゝ
如くおぼえあり。見放してだに給はらば、
婦夫の縁しを結びもせんが、木を伐もの
は斧をもてし、娶るものは媒による。迭に
浮氣の轉寐は、袷蒲團の薄情、二枕の間
より、秋風たちて末遂ず。半七が歸りて後
に、彼にも縁由を告、さて媒妁を雇うてゝ、
半いはさず頭を掉、いな半晌も延されず。

勿論夫婦の婚義には、媒妁もあるべき筈、
處を略すも世に往々あり。なくて稱ぬは
待女郎、これには奥なる槐姬、引掛出して
目に物見せんと、裳褰て立あがれば、お
通は吐嗟と携留、原來昨夕の形勢を、一
から十までよく見果て、しかへしに來た
る敗鐵全介、半七はわが實父全八どのゝ
仇人の一雙、汝は又祖父の讐、彼も是も
放されず。累る怨に眼前、槐姬が首を
刎て、陶殿へ進らする、妨すなと丁と蹉
る、足を抱きて些も放さず、さ聞ては彼
處の敷居を、一歩なりとも踰させじ。女
子にこそあれ主に刪く、赤根半之進が
長女、通が命のあらん限りは、姬君をや
は擊せじと、まつはる力も女子のかひな
さ、踏轉されて髻斷離、髮も心も亂燒な
る、懷劍晃りと引拔て、突かくれば身を
反り、戲すなと把たる下駄に、刄を戛呷
と打おとし、怯む腕を脊へ採揚、壁に掛
たる細紐を、かいとりはやく搦著て、杵

へ楚と繋ぎ留れば、お通は頻りに蹉跎し
て、柳の眉を引たてつゝ、眼を睜り齒を
切り、朽をしや、もし半七が宿に在ら
ば、かくまでには手ごめにならじ。去歲
より敵の刄の下を、いく遍か脱れ〳〵て、
けふ思はずも、殘忍無賴の惡棍に、あへ
なくも擊れ給はん姬君の、御運の杪、歎
くにもあまりあり。遮莫生ながら、靈と
なりて著まつはり、姬君を救はでやは、
この半七はなどて遲き。風まつ程なる燈
の、花よりもなほ危き、姬君のおん命を、
助る人はなき世かとかき口說つゝ身を起
し、走らんとすれば縛の、索に牽るゝ意
馬心猿、狂ふもいとゞ哀れなる。その際に
全介は、緩びし帶を結びそへて、裳を引
折り刄を引提て、ふたたびお通に立對ひ、
やよ、赤根が長女、汝は祖父同樹どの、
仇人なれば、第一に首引拔て、手向べき
奴なれども、今しばし活しおきて、槐姬
が首を見せ、飽まで物をおもはせん。い

でや姫をと、踵を廻らし、納戸へ走り入らんとする、背に開る門の扉の、音に佶と見かへりて、歸りしものは半七よなと、問せも果すこの形勢に、奮然と走り入り、われを半七としる汝は、お花が迎の私卒なりとて僞り來りし、同樹が黠計の惡棍なるよ。女子と思ひ侮りて、姉をばいたく縛るとも、われ今こゝに歸り來つれば、物とらんとする鼯鼠奴、さそな較計違ひけれとし、罵れば眼を瞪らし、盜賊とは過言也。われを誰とか思ふらん。相合橋のほとりにて、汝が父に擊れたる、今市五八郎が落胤、同苗五介なるをしらずや。親ならぬ親に孚れて、浪速にて人となりしかば、近ごろはじめてわが實父の、仇人を赤根と傳聞て、更に大和へ住宅を轉し、櫟本の松原にて、半之進を狙擊といへども、徹運にして素意を果さず、反たちにそゝのかされ、風流士の大刀を追うて、この處へ來て思はずも、亡母の繼父たる、刀冶同樹に環會、汝がこゝに在るをしれり。しかれば今の半七もわが爲には仇人の一隻、まづこれを擊とつて、聊亡父の孝養に、供んものをと思ひしかば、更闌て侯天神川の、水逆さまに流れてや、却て汝等に謀られて、おへなく祖父を擊したる、怨をこゝに復さん爲に、汝が姉に辛きめ見せ、汝等が主と仰ぐ、槐姫の首を刎て、汝が歸るを待んとせしに、招ずも寄る夏虫の、火虫に似たる青蠅ども、押並べて擊殺さん、觀念せよと勢ひ猛く罵かへせば、半七は嚇然とうち笑ひ、原來汝はその昔、不忠非義の聞えありて、わが父に擊れたる、五八が子なりし歟。天罰脫れず落命せしは、汝が親の自業自得、とは思ひかけずして、復讐なんどと人がましく、罵るは傍痛し。主と親とに寇をなす、汝をいかで放すべき。刄を受よといきまきつゝ、袴の左右を褄あげて、紐の間へ挾めば、五介ますゝゝ大きに怒り、無益の戯言吐んより、念佛まうせと跳かゝつて、砍らんとすれば半七も拔あはして丁々發矢と、烈しく打あふ鍔音は、鍛冶が鏨に異ならで、刀尖より火を出し、一上一下手煉の大刀風、あふり立、卷かへし、受つ流しつ戰へば、お通は傍に跕さの、見る目いぶせく立つ居つ、弟に力をそへんとは、思ふものから縛の索に引れて蝘蜓、又身を起して走りよるを、妨すなと五介が、足を飛して蹴と蹉る。灸所を撲れて苦と叫び、撻と倒れて起も得ず。浩處に外面より、士卒百人あまり將て、いかめしく先を追しつゝ、手親首桶かき抱き、刀冶が門ちかく、いで來るものは別人ならず、これ陶五郎隆春なり。今茲二十歲の角前髮に、身岌高く人品秀、大和錦の陣羽織に、金作の大刀を佩、正平革の身甲に、鹿皮の行縢して、十王頭の臑楯に、路踏しむる意氣揚々、凛然として門邊に立在、とく打入

れしと下知すれば、先鋒なる兵二三十人、はら〳〵と走り懸て、打おふ刄を潜て入、陶殿の嚴命なり、鎮れやつと推隔て、半七と仝介を、左右へ引わき押取卷ば、仝介は齒を切り、半七は今さらに、脛うち騒げど網裏の魚、且く息を吻てをり。當下陶丘郎は悠然として上座に、床几を立さし尻をかけ、刀冶半七うけ給はれ。汝槐姫を含藏よし、訴人あつて慥にしれり、さるによつて、曩に村長許召よして、事の容を尋さするに、言を飾て首伏せず、且汝かへせしは、その不意に出ん爲なり。身の仇なれども故主の息女、人傳には、心もとなく思ふゆゑに、隆春みづから向うたり。槐姫をとく出せといそがせば、半七は怒れる眼に涙を含、推參なり陶丘郎、おなじ父母の骨肉なれども、汝晴賢に養れてより、心ざま父兄に似ず、嫡に養父が逆謀を翼て、相傳の主君を害せば、天と人と共に容れず、誰か生ながら、その宍を食はんことを願はざらん。しかるになほ憚らず、こゝに來て槐姫を、害し奉らんと謀るとも、姫君こゝにはましまさず、とく〳〵歸れといはせも果ず、眦かへして佶とにらまへ、過言なり半七、むかしは兄弟今は怨敵、身の中の腐るゝをば、はやく鎌除ざれば、その腐除がたしと古人もいへり。君臣を見ること、塵芥の如くせられしかば、臣又君を讐となす、父子兄弟もこれにおなじ。大内殿の滅亡は、みづから招し孽なるに、わが父を逆賊と、罵るは惑ひならずや。そはともあれかくもあれ、槐姫はこゝにあらずと、陳ずればとて實事として、立歸る隆春ならず。論より正しき證人あり。厚倉隼人とく出よと呼入られて外面より、阿と應ていで來たる、敗鐵の四五六が、はじめには似ぬ勇々しき打扮、飾磨紺の四天に篠肱當さして、朱鞘の兩刀いかめしく、禹歩に歩み入るを、仝介はつく〴〵と、これを見て且呆れ、四五六えらき出世かなと、いふをば絶て見もかへらで、半七にうち對ひ、槐姫に冊きて、父と共に華洛に赴き、それより直きにこの地へ來たれば、汝はわれを見忘れけん、父二郎大夫が身まかりし後、不覺に淫酒に身をもち崩して、鵝窘を逐電し、浪華へいゆきて敗鐵の、四五六となりさがりたれども、去歳の秋、又こゝへ立歸り、今陶殿に荷擔して、むかしの武士に立歸る、厚倉隼人友善が、本公の手はじめに、槐姫の訴人せし、證據はこれぞとさし出すは、夜べ打かけたる半七が、刀に附たる小刀子なり。半七はこれを見て、拳を握齒を切り、原來汝は二郎大夫の一子隼人なりけるよ。汝が大和に在し日は、われはまだ總角のころなれば、その面影をよくも認らず、曩にはこれなる仝介と示あはして、小倶よりの使と僞り、女房お花を奪ひ去り、今亦槐姫のおん在所を、[illegible]に告し

その死を促す、揃ひに揃ひし大白物、半七が刀の目釘のつゞかん程は義死せん、そこな退そと罵て、立あがらんとすれば陶五郎、這奴打すゑよと下知するにぞ、推取巻たる兵等が、揚る筈に半七は、背肩腰亂打に、打惱されて倒れけり。厚倉隼人これを見て、呵々とうち笑ひ、案内知たる納戸のうち、いで姫君のおん頸を給はらんといひかけて、やがて奥へ走り入り、且くして聲をかけ、丁ど打つたる大刀音に、半七は只氣も半亂、お通もやうやく身を起せど、縛の索と數ヶ處の撲傷に、脚腰たゝぬ矢傷の爲、共音になくぞ理なる。かゝりし程に厚倉隼人は、鮮血下乘槐姫の、頸を引提て走り出、豫て納戸に含藏たるを、某嚢に背門より張ひ、その巣をばよくしりつ、殿いざ實檢し給へと、いとほこりかにさし出す、姫の首級を陶五郎は、と見かう見て莞爾とうち笑み、女流なれ共義基の北の臺、績井原勝の女兒なれば、生おかば後日の禍を、返し與る所也。富田の和歌山に在住胎、わが父頻に心を勞し給ひたるに、御邊の忠訴によつて、忽地に頭を獲たり。されば此度の勸賞に、父二郎大夫が奮領して、なほ忠勤を勵るべしと説示し、携たる首桶へ、姫の首級をとり納れば、厚倉隼人額をつき、なほ向後も郎君の、吹



擧を厲ひ奉ると、媚る言葉の尾につきて、全介は貌を改め、某も又願ひあり。嗚呼がましくはおぼさんが、この牛七には舊怨あり。某が實父全八郎は、二十四ヶ年前に赤根牛之進に撃れ、又祖父同樹は、昨夕お通に撃れたり。剰には養母の遺言によつて、いまだ宿志を果さずといへども、彼も又仇人の一隻なれば、まづ牛七を撃とつて、輪亡父の孝養に供んとする折から、高貴の來臨便なくて、思ひの外に抑留せらる。おはれ君、既に兄弟の義を絶給はゞ、牛七お通を某に給はれかしと、いはせも果ず陶五郎は眼を睜り聲をふり立、この白徒胡亂なり。復讐には、式作法もあるべきに、當の敵を撃ずして、その子を擧事やはある。おもふに這奴は、野伏山賊なんどなれども、四ヶ國の主改代の時を窺ひ、復讐なりなんどといひこしらへ、名を取り祿を貪んと謀る癖者にてぞあらんずらん。這奴縛よとい



きまけば、全介直と呆れつゝ、頻に隼人を見かへるにぞ、隼人は傍痛く、おそる〱小膝をすゝめて、陶五郎に對ひ、いな、郎君、彼は某浪遊にて、他事なくも交參たる、敗鐵全介といふものなり。時と物とを辨へず、かろ〲しく復讐の事を願ひ[illegible]は、ことなき[illegible]に侍たれども、[illegible]

友善が面に覿て、全介を許し給へかしと、言葉を竭して勸解しかば、隆春やうやく面を柔げ、しからばこの全介をば、隼人御邊に預くべし。いかに半七彼處に縛られたるはお通なるよ。汝等も主の相伴に、首刎べき奴なれども、肉縁の好み一旦は見放すぞ。志を改めて、わが父に降參せば、隆春よきに汲引して、世間廣くなしてとらせん。物ども續と徐やかに、首桶を抱きつゝ、床几をはなれて立かへれば、前驅後從の猛卒力士、敬ひ畏く威儀堂々、心ならずも全介は、厚倉に伴れゆくを目送る半七が、腸を斷遺惧し涙、おなじ恨みは姉お通、暴虐非道の弟隆春、虎に諂る厚倉隼人、彼此共に主の仇、何處まで遣べきぞ。いで追續て擊留んと、刀を杖に半七が、心ばかりは早れども、節々痛む魚屋の鶏、姉に網手に狂ふ猫の、花壇にあらぬ浮世の嵐、蝴蝶の夢歟幻の、身はうつゝなき同胞が、外面しばし睨つ、納戸のかたを見かへりつ、胸を打てぞ歎きける。

古夢南柯後記巻之七終

夜川の野船

看々主の頸を遁せし、半七お通が恨、喩るに物なしといへども、大厦の將に倒んとするときは、一木のよく拄べきにあらず。只臍を噬み、腸を斷のみ、又せん術もなかりけり。かくてあるべきにあらねば、半七は忙しくお通が索を釋捨て、面なげに跪き、國亂れて忠臣見れ、家貧して孝子出。半七不肖の身を以、君家の難に命を惜ず、偏に孤忠を盡さんと欲すれども、虎狼途に横りて、事既にこゝに及べり。姉御前はともかくもして大和へ赴き、君と父とに事の趣を告給へ。某は速に槐嫄に追著りて、冥土のお伴つかまつらんと、いひも果ず刄を肚へ突たてんとする處を、お通は急に推留て、潸然

死んと思ふは理に似たれど、死して忠義になるものならば、われこそ先へ死べき身なれ。死して益なきことよしは、いはでもしるき姫の怨敵、陶五郎なり隼人なり、一刀怨みてその後に、肚かき切て死ぬるこそ、眞の武士とはいふべけれ。心つきなく狼狽て、世の胡盧になり給ふなと諫れば、半七は、有理と曉りて刄を納め、姉御前の異見道理に稱へり。今堪がたき恨を堪、忍びがたき羞を忍び、灰を吞み身に漆さしても、陶と厚倉を狙撃、しかして後に匍死しても、實にこれ遲きにあらず。しかれども某こゝに留らば、寃家も又油斷すべからず、一閒隣國へ身を避て、しのび／＼に竊ふべし。姉御前は直さに大和へ赴て、これらのことを告給へ。同胞もろ共にをらん事、謀

なきに似たりといへば、お通はうち點頭、吾儕もしか思ふなり。曩に沼田の菴を出しとき、野伏等に推隔られて、拈華微笑尼に得逢ずなりぬ。かゝれば彼尼刀禰たちの、さぞな胸ぐるしく坐らめ。今宵は槐嫄の亡骸を、燒となし奉り、灰を掻き骨を收め、これを携へ沼谷へ赴き、彼尼刀禰たちに、緣由を告しらして、彼處へ葬奉らばやと思ふかし。おん身もまづ安濃國まで退きて、尼刀禰たちに對面し、又お花が往方をも索たまへ。彼剛敵を撃んこと、一朝には謀りがたし。早りて失し給ふなと、叮嚀にいひ諭せば、半七これに隨ひて、恚を激しつゝ、拔たる身の疼痛を忍びて、お通もろ共納戸より、嫄の亡骸を扛出すに、被まゐらしたる單衣の、いたく鮮血に塗れしかば、その色としも見えわかず、頭顱なければ在りし世の、ぬしとも定め難るまでに、淺ましきことい
ふべうもあらず。涙のみ只はふり落て、

何せんすべもなつの日の、暮るゝを待て亡骸を、密やかに野外に出して、遂に一片の煙となし、遺骨をば壺に納めて、これをばお通が項に懸、やがて同胞うち連だちて、安藝の沼多へとてゆく程に、その夜通宵走りしかば、福川のあなたなる、八千川のほとりまで來にけり。十七日の月もやゝ傾て、はや曉るに近かり。こゝにて夜をあかしてこそ、彼川をば渡さめとて、同胞もろ共に夏草を折布て、小憩時憩んとしたる折、途より跡を跟てや來けん、引剥賊とおぼしくて、月額の跡長く延せし、身丈高き暴雄等、二三人、樹蔭より走り出、まだ年わかき男女の、夜をこめて路を奔るは、仇なる色情に跡を闇し、鞆の便船をこゝろ當に、大阪へとてゆくにやあらん。疲勞たらば竹輿なりとも、馬なりとも貸べきに、酒價をだせと散動つゝ、前に進みし大倭子、衝と寄て半七が、胸前を無手と捉り、右の拳を懐へ、さし入れんとする處を、拂ひ退つゝ身を起し、引彼て撞と投れば、後なる兩人の悪棍ども、大きに怒て聲をもかけず、刃を拔て砍んとするを、半七得たりと身を反り、右を拄左に當り、いとも烈しく戦ふ程に、投られたる大倭子、やうやくに身を起して、三人が中に押取徒、お勢を憑に砍たつれば、お通は傍に



見るも咕く、弟に失あらせじとて、懐剣を引抜つゝ、悪棍等が後方より、一撃喰て罵りしかば、女子なれども侮りがたく、悪棍等は、既に背に敵を受て、大刀すぢ忽地亂れにければ、半七勢ひ十倍して、踏込て鎗刀に、中なる賊が胴を、三寸あまり丁と切り、かへす刃に左手なる、大倭子が右の腕を砍ておとせば、仰ざまに倒るゝを、お通はやがて取て押へ、懐剣を取なほして、胸前ぐさと刺徹せば、二人の悪棍ます〱噪て、刃を引て逃走るを、半七は脱さじと喘々ぞ追てゆく、その間に、お通は刃の血を拭て、やをら室へ納めつゝ立あがり、やよ半七、ながおひなし給ひそ、やよ半七と呼かけて、跡を慕つこれも又、まだ明やらぬ水の隅、河原に近き二枝路、おぼつかなくも追蒐たり。さる程に半七は、二人の悪棍を逐ふこと五六町にして、やうやくに撃留しかば、更に舊の處へ走り歸るに、姉お通



八千川の野船に夫婦同胞危難を脱る

は何處へかゆきけん、しば〱呼べども　て川の上に赴くに、向には岸に繋る船の、隠せず、もし悪棍が支黨の、この處に躱　二艘ありしとおもひつるに、今見れば只れ居て、姉を掠てやおけんとおもふに、　一艘あり、原來わが姉は、川を渡給ひけ心もとなさいふ可なし。あまりに索わび　んとて、遽しく水際に立て、船へ閃りと

乘飛れば、船桁にいたく縛られたる人あり。夜川の水煙にて、顔は定かに見えわかねど女子なり、猿鐶といふものを被られて、手さへ背へ繋れたる、こはわが姉にて在しけりと、思へば更に問紛るに及ばず、纏て縛の索を解捨、猿鐶を外しつつ、はじめてその顔を見れば、あな淺まし、姉にはあらで、おもひがけなき妻のお花にてありしかば、こは〳〵いかにと、ます〳〵驚き、まづこれを勦り、且その故を問に、お花はよゝとうち泣て、夫の袂を顔におし當、應だに得せざりけり。且して涙を拭ひ、主の爲夫の爲に、ひとたび捨たる身にしあれば、飽で別れてゆく水の、環りあふ瀨は憑まれずと、うち歎きたるに思ひきや、夜川の船ともろ共に、繫ぎとめたる嫣夫の縁、竭ずこゝにて逢んとは、さても一昨の黄昏に、小俣の縣正の使者なりとて來つる惡棍等、わらはを彼處へ將てゆかで、あやしき小屋へ舁入たり。その爲躰こはまたく、花街へ賣にやあらんずらんと、推量れば心もおちゐず、彼寶刀に身を代て、陶が妾となるだにも、生て歸らんとはおもはざりしに、況や遊女しならんには、恥のうへなる恥にこそ、只速に自害して、身を潔くせんものをと、なか〳〵に思ひ定めてしが、わがうへかくもなりゆけば、風流士の寶刀のことも、虛言なりとは推てしらる。われはともなれかくもなれ、良人のうへいと心もとなし。かなはぬまでも脫れ出で、これらのことを良人に告、その後に死なば死てん、しかなり〳〵と忽地に思ひかへしつ、きのふの曛昏に、物に紛れて潛び出、間道より走る程に、不覺に路に惑ひつゝ、水上の方へは得もかへらで、其處ともしらぬ山路に入りて、物問んにも人には逢ず。さて山路にて夜をあかし、又山路にて日を暮し、辛して里へ出、やゝこの處へ來たりしに、いとおどろ〳〵しき倭子ども、二三人走り出て、矢庭にわらはに猿鐶を銜つゝ、この船の中に繫ぎ置、跡よりも又一人、よき鳥のいで來るぞ、それには男の侶もあり、侮りて走らすなと、一人がいへばこゝろ得貌に、みな點頭て待てをり。かくておん身が、彼惡棍等と戰ひ給ふを、こなたより見るといへども、間遠ければ何人なるをしらず、物いはれねば呼かけて、救ひを求んよしもなく、うきを見るめの水と陸、藻に住虫のわれからと、音にのみなきて侍りしと、いひかけて又よゝと泣ば、半七頻に嘆息して、やをら背をかい捺り、別れしは一昨なれども、おん身が往方心もとなく、たづね逢まく思ふものから、又一厨の禍ありて、安藝の沼多へと夜をこめて、赴く途にてはからずも、おん身が先途を救ふこと、哀の中の歡びなり、まづ何よりか話るべき。彼件の事どもは、彼惡棍等が詐詭の 計 にてありしかば、

風流士の寶刀をとりも假さず、剰その夜、天神川のほとりまで、彼老翁に誘引出され、縡既に難儀に及びし折、思ひもかけず姉に救れ、槐姫に環會奉りて、やがて宿所へ誘引奉る程に、はや訴人ありて、あへなく姫を奪れたり。かゝれば一日たりとも、存命べき身にあらず。肚かき切て黄泉の、冥土の郷導せん物をと思ひしが、是すら姉に諫られて、更に仇人を撃ん爲に、且く彼地を退て、姉もろ共に、沼をの枯華庵へとて赴くなり。はじめをいへば偷樣々々と、お通が同樹を天神川ゝ欣流せし事、敗鐵全介がこと、陶五郎がこと、厚倉隼人が姉のおん頭を刎たること、枯華庵の両比丘尼は、外母園花と、お花が姉の夏山なりしこと、此彼おちもなく物語れば、お花はつく〲とこれを聞て、或は驚き、或は哀み、或は恨み、或は怒り、涙を洗ふ如く、在明の月きこれが爲に、更に光をとゞむるに似たり。且して半七は、忽地陸のかたを見かへり、今既にお花に環會といへども、讐に草賊等を追ふときに、姉の往方を失うたり、お花はこゝにて、彼爲體を見たるらめ、女子の川を渡すをば見ざりしやと、問ばお花はうち點頭、現宜する如く、讐におん身が惡棍等を追蒐て、西のかたへ走去給ひし時、跡に殘りたる姉女子、頻に聲をふり立て、長追なし給ひそと、しば〱呼かけて立在たるが、遂に左手に繋ぎたる、野船にうち乘つゝ、みづから棹を操りて、向の岸へのぼりにき。原來姉御前におはしけりといふを、半七聞も果ず、しかるときは心安し。われも向へ船を著て、とく姉御前に逐著んとて、遽しく纜を解捨て、船を河中へ漕出しけり。浩處に一人の癖者、稚荻の中より顯れ出、引提たる種島の、鳥銃をとりなほし、河中なる船を望て、火蓋を切て撞と發すに、半七はやく棹を抱て、舷に伏にければ、丸は頂の上を過て、ぬしは身に恙なし。癖者はこの形勢に心慌て、又遽しく丸を篭、再び狙撃んとするとき、船は忽地向へ著て、間遙に遠離れば、癖者大きに焦燥て、鳥銃を憂離と投捨、續て向へ渡さんとて、船を求て河流へ、足ばやに走りゆく、傍の蘆荻をさら〱と推わきて、顯れ出るはこれも又、癖者とおぼしくて、手拭に面を裹み、肩に受たる金瘡を、布もて峯〻項に懸、手疵に屈せぬ面魂、河原を走る癖者を、つくづくと透見て、吾介等と、呼び留る、聲もろ共に明烏、森をはなるゝ朝風に、夏いと寒き八千川の、水よりしらむかはたれ時、はや旅客のいで來る歟と、左右を見かへりつゝ、立よるをなほ招きよして、此彼しばし密語なるべし。

合歡の花桶

是より下結局に至て前帙四卷の脚色僻然として

氷のとくるが如く一段の住境に入る。凡披閲の婦幼再三意をとめて味ふべし。

天文二十一年、夏六月はつかの日、安藝國高宮郡、沼多の郷のほとりなる、彼此人、隊をなし構を結び、拈華比丘尼が草菴に、嚴島の辨財天を勧請して、三日三夜の法筵を開ことありけり。その故をたづぬれば、今玆は五月のはじめより、絕て一滴も雨ふらず、草木は枯槁、金石は流鑠、行人途を去りあへず、民の歎き大かたならねば、雨乞の祈禱をせんとて、彼此の里人等、女僧が庵に天女を祀らし、或は五色の幟を建、或は笛を吹鼓を鳴らし、けふなん三日の結願なりとて、參詣の老弱男女、咸菴室に集會程に、隊の長、構の頭等は、手織木綿の縞浴衣へ、麻上下を着たるもあり、犢鼻褌のみなる裸體へ、葛の袴穿たるもあり、嚗齋靑道心等は、白栲の單衣に、腰衣したるもありて、いと囂しく奔走し、堂崎高洲の構衆は、六疊の房へ集合給へ。よし浦三原の二隊は、客殿へ團居し給へ。西條の新構衆をば、柿の水引に隔て居らせ、備後なるかんなべ衆へは、まだ酒を飮さぬにや、布施は大人小兒をいはず、百文づつ、膳牌と卽引かへ、平皿は茄子に油揚の豆腐、雜混々々汁、猪口は葉胡蘿蔔のひたし物、香の物は、胡瓜の輪切、さて飯は食放題、僅鐚錢百文の布施物で、かくの如くの齋につき、如是の法會に逢ひ、難がたき甘雨を獲たらんには、かばかり嬉きものはなし。本道場は手陜なれば、奥は殊さらいく房もあらねど、各位行儀第一に、神妙に圍繞し給へ、百味の供物神酒なんどは、讀經果て割賦すべし。履物へ牌著て、置所を忘れ給ふな、預物はいたさぬぞ、よな、懷中物の用心し給へ、奥へ〳〵と聲ふり立て、喧けば目口へ流れ入る、汗もほと〳〵拭ひあへず、施主も道者もつれ立て、客殿陝しと籠入りけり。その日も午の貝吹て、參詣やうやく度絕しかば、紛れ入たる道俗二人、奥のかたより、潛び出、目と目を注して點頭つゝ、端ちかく寄りて緣に立在、わが爾翁、奥の爲體に、こころをつけて見給へりや、正しくこの途へ來たらんと思ひし半七が、影だになきは不審と、いへば同樹は手を抗て、やよ全介音高しと推禁て、奥を見かへり、額をあはして聲をほそめ、われもさは思へども、足弱を伴うたれば、半七は後れやしけん、道すがらもいひつる如く、いぬる十六日小夜更て、われ彼半七を、天神川のほとりへ誑引出し、さま〳〵に罵りて、飽まで這奴に瞋をたゝし、言葉質をとりて撲つ踉つ、竊に汝が來るを待しも、暗號ちがうて思ひもかけぬ、女の子に膈を砍割れて、河水に滾落しかば、山川の早瀨に推流されて、浮ぬ沈ぬ辛くして、澤川へ流れ出、彼處の里人等に助あげられたるが、そのときは死やしけん、

物ひとつおぼえねど、流石に命運竭ざれば、忽地に甦生て、氣力ははじめに異ならず、やがて醫師に瘡口を縫し、僅に一日保養して、十八日の亭午、氷上へ立歸りて、半七が事を問ば、しるものあり。這奴はその夜さり、槐姫を宿所へ伴ひたるに、事忽地に發覺て、婦をば四五六の隼人に奪れ、世を形なくや思ひけん、婦のお通もろ共に、華洛のかたへ赴くとて、この曉に起行せしといへり。さて至介はと問ひしに、彼は陶殿に疑れ、隼人に關られたりといふ。聞事毎に本意遂ず、腹のたつ事のみなれば、やがて半七が跡を追つゝ、捷徑を通宵走りて、這奴等より先へ抜出、八千川のほとりなる、鯰介、鮎太、石伏藏とか呼るゝ、三人の野ぶせりを相語て、半七お通を待ほどに、鯰介等はいひがひなく、三人齊しく、半七に擊れたれば、われも底氣味わろくなりつ、稚荻の中に躱ひて、始終面をも得出さず、這奴等が川を渡すを、岡容々と眺め居たるに、汝も又半七を追蒐來て、船へ乘銃を打かけたれど、間遠ければ當らず、かくまで闇のわろき折に、毛を吹かば疵を求ん、這奴等が往方は定かにしりつ、一旦これを走らして、追擊にしくことあらじと思ひしかば、汝をば呼び留たりき。しかるにいとこゝろ得がたきは、伴なる女子をお通とやらんなりと思ひしに、渠はわが四五六に寄せし、撞木町へ賣てゆけとて誘引出したるお花なり。彼衒妻はいかにして、脱出たりけん、汝はこれらの趣を、しらずやとひそめき問ば、至介聞て眉根をよせ、その夜さりお花が事をば、四五六に任したれば、吾儕は絕てこれをしらず、天神川のほとりにて、おん身は擊れ給ひぬと思ひしかば、次の日氷上の宿所へいゆきて、半七お通を擊取らんとしたる折、陶五郎の來ませしかば、擊べき仇人を得も擊ず、われは却陶殿に詰られて、四五六の隼人に關られ、富田の稚山へ伴るゝ、途より窃に取てかへし、半七等が華洛のかたへ、赴くよしを聞しかば、夜を日に續で這奴等を追蒐、八千川の邊にて、その背影を見たれども、水一條を隔たれば、亦彼處にても擊漏し、慥にこゝへ來つらんとおもひしに、跡蹤らるゝとはやしりて、途をかへて迯たる歟、中途にて擊べきものを、あまりに深く慮りて、追失ひしは遺恨なれと、後悔すればうち笑ひ、しか思ふは理りなれども、途をかへてもこの處へ、來るよしは西條にて、半七が里人に、溜の拈華庵は何處ぞと、問たるを、竊聞たることもあれば、十に九つはたがふべからず。彼お通奴は、いづ地へゆきけん、われは這奴が面を認らず、奥なる群集の中にや在る。至介汝はしらざる歟と、問ば額をさし合し、お通にはそ來りけん、樣に與にて見たれども、這奴にあうては半七を、

撃んずときの妨ならんと思うて、群集に紛れ入り、そののちは、奥へゆかず、只こゝろもとなきは、半七が往方にこそといひつゝ、外面眺望れば、同樹も共に伸あがりて忽地に指し示し、伺ひへ來るは半七なり。後方なるはお花なり。衣の色こそ定かに見わかね、菅笠に認ありといへば、至介雀躍して、現々彼は半七なり、此度はいかで逃すべきと、拳を擦れは同樹は騒がず、逼ては事を失ものぞ、汝はまづ彼處なる芭蕉の背に身を躱して、且く便宜を窺へかし。われは又、簀子の下に屈り居て、汝が半七を撃とき這出て、矢庭にお花を扛攫つゝ走りなん。抂るものゝあるならば、汝はこれらを殺散して、はやくお通を引攫ひ、われに續て走り去れ。よしや怨を復したりとも、玉を取らねば持にならずと、謀しあはする祖と孫、勇むはおなじ義と慾に、立わかれたる庭の隅、至介刀を引拔て、手來の竹を丁と切取り、杪筈かへす准備の竹槍、りうりうとうち揮つゝ、ひと引しごきて挾み、しからば吾儕は芭蕉の蔭に、身を避て、這奴を待なん、とく／＼潜び給へかしと、いそがせどもなほ騒がず、早りてな失せそ、八千川にて鳥銃を、放かけられたることもあれば、半七も又油斷はせじ。いふ程の事いはし果て、只彼透を狙擊、遁な／＼と、見かへり見かへり、やがて這入る床の下、鼬の糞を手に踏で、あなやと十へこすりつけ、耳にからまる蜘蛛網を、掻拂ひつゝ躱れける。かゝりし程に半七夫婦は、身をさま／＼にあへ物の、たづね當たるゐたの庵、遙に柴の戸をうち望て、こゝなりけりとおもふにぞ、日影に病るお花を見かへり、この春おん身もろ共に、いく扁かたづねたれども、其處ともしれずそが儘に、訪はで過にし草菴、今さら思へば索わぶる、庵にはあらざるに、などて往にはしれざりし。加之面影の、いかばかり變ればとて、それとは思ひかけざりき、われながら愚なり。これも夫婦が脱れ得ぬ、厄にあふべき辭なりけん。おん身はいたく疲勞たらめ、今ははや心安しといひ慰れば嘆息し、絕て久しき叔母御前と、姊にあふは喜しけれど、袖はまだ乾ぬ濡衣の、なき名を雪るよすがもなく、彼此に身をおきかねて、詣來たる歟と思はれんと思へば、面なく侍るかしといふに、夫も嘆息し、われはおん身に彌倍て、槐姬を寃家に撃れ、姊の往方を失へば、彼も此も面ぶせなり、とばかりにして止べきにあらず。外母の女僧に對面して、姊のゆくへを問定め、志を演て後に、この草の戶を死所と、覺期は豫てしたるにと、いひつゝも又嗟嘆すれば、お花は頻に酸鼻、心うきこと宣ふな、擊々るゝも亡の運、おん身が忠義は皇天の、毎日に照らし給ふなる、とはいへ思ひ定めても、定がたきは哀別離苦、

一度別れて又逢て、別れの後はいかならんと、いひかけて口隠れば、半七聲を激して、無益の歎きは女子の愚痴、はや柴門に來たりしに、泣がほなほして入り給へと、諫る夫も影護て、端なくは得も入らず、且く立在夫婦が後方に、忽地夥の人音するを、ゆくりなく見かへれば、折もこそあれ厚倉隼人、腹卷に野袴穿て、行裝いかめしき、赤銅造の兩刀を、長やかに夾ひけらし、手親花桶引提つゝ、從者を夥將て、三棹の唐櫃を扛擔し、柴門ちかく來るほどに、半七これを佶と見て、遣奴は正しく隼人なり、姉君の讐敵、わが孤忠空しからず、このところにて撃とらば、姉と外舅御へ手土產は、これにますものあるべからず、もし神明の冥助にあらずは、必竟の亡靈の、仇人を導き給ふにこそ。あな喜しと笠擡とり、且く天地を禮拜して、刀の鞘を口濕せば、お花は袂に攜著、こゝろばかりは猛くとも、彼樹せ仇人は多勢、牛角の勝負は、心もとなし。しばし潜びて便宜を窺ひ、思ふ隨に撃てこそ、眞の勝とはいふべけれと諫れば、うち點頭、おん身が異見その利あり、折戸の陰に立竊ひ、從者等が退くとき、遣過して隼人を撃ん。さはとて夫婦立わかれ、推ば忽然はら〳〵と、零餘子こぼるゝ諸折戸の、陰に隱れて窺ひけり。さる程に厚倉隼人は、庭門陝しと唐櫃を、拈華庵の緣前に扛入れさし、とく呼門といふに、私卒二人、こゝろ得て撃をふり立、庵主の比丘尼に物まうさん、けふの法會の施主として、陶殿の御内なる、厚倉隼人友喜ぬし、みづから來臨し給へり、出迎給へと呼れども、奥は響動く人の聲、門はしぐるゝ蟬の音に、紛れてしばし應もせず、しば〳〵呼れて拈華尼は、微笑を將て忙しく、緣頬まで出迎へ、こは思ひもかけぬ、里人等が私の宿願にて、辨財天を勸請し、只假初に集會たるのみに侍るに、頭の殿の御内の刀禰原、請來給ふこそ幸なれ、いざこなたへと請ずれば、厚倉隼人は悠然と、上座にうちあがり、やよ女僧たち、總甲人等が、私の祈禱におせよ、衆人心を一致にして、開く法會は殊更に、天女も感應し給ふべし。われ一昨日富田にて、この事を傳聞て、嘆賞のあまり、法會の料を助ん爲に、直さにみづから發向せり、彼を見よ、三棹の唐櫃には、白米五百袋、青緡百貫文これを布施す。又手親携たる、一桶の落花は、今を盛の合歡の花、樹樹とな見たがへそ、これを天女に獻りて、陶殿の武運長久、わがうへにも幸あらせて、富貴延滿如意吉祥と、叮嚀に祈念あれと、ほこりがに說示せば、拈華尼聞てうち微笑、宜ふ趣こゝろ得侍り。現も盛の合歡木、花を眉掃と名づけたるを、田舍人は訛りて、ねぶたの花と喚做しつ、葉の狀は槐に似たれど、花は殊更愛ら

しや、天女には眉掃の、名も似つかはしく侍るかなと、他事なく美る二人の女僧、小頭傾けながむれば、厚倉隼人うち點頭、一瓶の花より、なほ涼しきこの庵、且くこゝにて汗を納れん、従者等は外面へ罷り出、樹蔭もとめてとく涼めと、いそがしたつれば従者は、折戸を出て樹下蔭、おもひ〳〵に憩ふ程に、兩女僧は客殿へ設の席を修理んとて、やがて奥へぞ入りにけり、折こそよけれと、半七は折戸の蔭より顯れ出、刀の反をうちかへして、縁頬に走りのぼり、兵道の罪人厚倉隼人、半七を認れりや、今こそ復す姉の讐、[illegible]を受よと罵りて、刀を拔て丁と砍るを、扇を以受とゞめ、やよ待しばしいふ事ありと、いはせもあへず刃を引て、透間もなく撃て懸る、壯士の大刀風いと烈しく、あしらひかねて厚倉は、花桶取て受ながせば、内より落る女の頸、半七佶とこれを見て、こは〳〵いかにと、疑ひ惑ひて、思はず尻居に撲地と坐す。浩處に全介は、竹槍を引提て、芭蕉の蔭より突て出、一旦撃んと思ひ定めし、赤根が長男刀治半七、とても脱さぬ仇人の半隻、全介が手料理に鐵刺にしてくれんずと、競ひ懸らんとすれば折戸の蔭より、お花は吐嗟と走り出、身を盾にして全介を、遮り留れば物ともせず、見苦しき女子の助大刀、



汝も夫の相伴させんと、竹槍を一揮繁扱てお花が胸前、背へかけてぐさと刺ば、槍は忽地發幾と折れ、お花が姿は烟のごとく、滅て跡なくなりしかば、さしもに猛き全介も、茫然として前後を失ひ、われにもあらでついゐたり。半七はこの形勢に、ます／＼奇異のおもひをなし、こころ得がたし厚倉隼人が、劈たる花桶より、滾出たる女の首級は、お花が面影によく似たり。これのみならずしなねくも、半七を撃んとする、全介を遮り留めて、竹槍に縋れたる、お花が姿は消失て、全介も又放心せり。彼をおもひ此を見るに、八下川の野船にて、ゆくりなく環會、この處まで伴ひ來たる、吾妹子は世になき魂の、幻に顯れたる歟、それ歟あらぬか、怪しやと、思はず小膝たてなほし、刃を鞘に納ても、まださまらぬ胸の裏、疑念は更にはれざりけり。當下隼人は近く居寄りて、扇を笏にとりなほし、やよ赤



根生、縁故をしらせねば、さぞな隼人を憎しとも、反逆人とも思ひけめ、今こそ諦す機密の謀略、こゝろを定て聞給へ。抑某、父二郎太夫もろ共に、槐姫に附き奉り、周防山口へ赴きて、兩三年を送る程に、大内殿の驕奢、聞しにはいやまして、日を驚す事のみなるに、老臣たる陶晴賢は、黨を樹比周して、主を凌ぎ權

を賣る、謀反の萌顯れたり。わが父友春、久しからずして晴賢が、叛んことをしる故に、ひとり心を勞せしかば、持病の積聚身を逼て、鍼灸藥餌もそのかひなく、今はかうと思ひてや、某を枕方に招きよし、陶が逆謀氣色に見はる、もし不虞の事あらば、槐姫のうへ極めて危し。しかれども、陶が阿黨の佞人、内外に充滿たれば、汝孤獨の身を以、明白にこれを禦がば、却陶に殺れなん。しかれば是姫君のおん爲ならず、悲しいかな、われ死なば、大内家は亂れん歟、汝は假に淫酒に耽りて、放蕩無頼と人におもはせ、この地をはやく逐電し、京攝の間に身を潜て、時々平城と周防の爲體を聞定め、晴賢謀反せりと聞かば、一番に走着て、姫君の先途を救ひ奉り、事いよ／＼難儀に及ばゞ、密に陶五郎隆春に底意を告、彼人の力を借て、槐姫を救ひまゐらし、兼ては赤根蟻松の兩老臣と示しあはして、續井家の援兵をまうし請、且大内家の舊好を忘れざる、西國の武士を相語て、晴賢を討滅すべし。陶五郎隆春は、主命脱るゝに所なく、晴賢を父とすれども、その心ざま忠義ふかし。をさ／＼實父半之進が、弱冠のときに似たり。竊に汝と力を戮して、姫を救ひ奉らんものは、彼壯佼のみ、これらの事を胸に秘て、わが遺言を忘るゝことなかれ。もし利に惑ひ勢につき、一點ばかりも不忠の志を挾ば、未來永劫親子にあらずと、密やかに說諭しその夜空しくなりしかば、某失怙の哀に堪ずといへども、君父の爲に譏を思はず、いく程もなく淫酒の爲に、武具衣服を沽却、飽まで人に疎まして、遂に山口を逐電し、流浪して浪速へ赴き、身ひとつ捧手をふる鐵の、四五六と改名して、平城の音耗西國の、形勢をしらん爲に、一處に宿を占す、一昨年の冬浪速を去て、去年の春まで大和にあり。しかるに故主續井殿、御邊の父に命じ給ひて、米谷山なる木精塚を發し、風流士の寶刀をとり出させんとし給ふよし、われ傳聞てつら／＼思ふに、むかし陰陽師村上親實がいひつるよしは、父二郎太夫が物語にて聞たることもあるものを、いかなれば續井殿、みづから武勇に誇給ふぞ。彼寶刀を出し給はゞ、禍主從のうへにや及ん。こはいかにせんとて、頻に憂ひおもふ折から、敗鐵の全介が、櫟本の松原にて、御邊の爹々を撃んとて、却養母の自殺せしを哀る、その處へゆきあはし、遂に全介をそゝのかして、木精塚を掘崩し、風流士の寶刀を他所に埋めて、續井殿主從の、身にかゝるべき禍を、祓除んと謀りしに、彼大刀忽地空中に閃き升り、西を投て飛去りしかば、ますます心安からず、全介さへに誘引立て、やがて周防國へ赴き、しのび／＼に、風流士の寶刀の往方を索れば、彼寶刀の故に事起りて、

大内殿主従の間快からず、晴賢俄頃に謀反して、義隆自殺し給ひぬ。これも又彼寶刀の、祟にあらずは未審なる、木精の餘怨をこゝに轉じて、その禍の移りや來けん。しからば槐姫のうへいとも危し。いかにもして姫君のおん往方を索まゐらし、亡父が孤忠を空せじと、夙に思ひ夜に思へど、絕て姫君のおん在所をしらず。かゝりし程にいぬる十六日、刀冶同樹が慾心にて堊介に說示し、天神川の上にて、御邊を擊せんとしつゝ、剩御邊の妻女をば、われと堊介に詐取らし、撞木町へ賣てゆけと、いひしかば、われ又陽にはこれに與して、堊介にだも底意をしらせず、陰にお花を他所へ伴ひ、直さま天神川の上へ走りゆきつゝ、事の爲體を窺へば、御邊の姉お通刀禰、同樹を川へ推流しつゝ、御邊を救ひ、同胞こゝに再會して、槐姫を誘引まゐらし、水上へ赴んとするよしを、竊聞するに、堊介も又こゝに來たつて、矢庭に御邊を擊んとせしかば、われ又堊介を助くるおもゝちして、却これを遮留め、御邊はさらなり、槐姫を、故なく延しまゐらせたれど、この事はやくも風聞して、次の日はしるもの多かり。かかれば姫のおん命、その危事風前の燈に似たり。もしこの時に、隆春の助を得ずば、いかで姫君を救ひまゐらすべきとおもひしかば、やがて山口へ走りゆきて、竊に陶五郎隆春に對面して、心中の機密を告るに、隆春聞て眉を顰め、われもはやこの事を聞しかば、心苦しくおもふなり。しかれども槐姫は、刀冶が宿所に潜びおはするよし、人有て、向に養父晴賢に告たれば、凡常の計策にて、救ひ奉らんこと難かるべし。しかれども、年來深窻の裏に、幽かれ給ひたる、槐姫にましませば、男たるものは、わが養父といへども、面影定かにはこれを認らず。年紀背相、姫君に似たる女子をもて、おん身代りになし奉り、御邊苦肉の計を行はば爲に一つ姉君を、救ひ進らする事を得なん。彼姫君に代らする、女子はありやと問れしかば、われ忽地におもふやう、偸に同樹を欺きて、他所へ潜し居らしたる、半七が女房お花は、年紀といひ、面影といひ、かれを槐姫なりといひこしらゆるとも、誰かは疑ふべき。特に彼女子は、姉夫竹太郎の女兒にして、わが爲には外姪なり。夫半七は、元來忠孝の壯佼なり。事急なれば半七に告るに及ばず、如此々々に謀らんとて、遂に隆春に諜しあはし、走り歸りておもふよしを、お花女に告しかば、義を見て勇む郎女のなかなかにうちも騷がず、風流士の寶刀の故に、宛家の側室となるだにも、主と夫の爲には厭はず、しかるを況姫君の、先途に代り奉りて、良人の身の幅ひろくならば、これにます幸ひは侍らず、池の中島にてゆくりなく、罪蒙りしも憖に、夫

を留めしわらはが失ち、いひときがたき濡衣の、乾よしもなかりしに、物に托して玉枕御前の、おんいと惜みふかければ、助がたき命助けられし、恩に報ふはこの時なり。今一篇わが所天の、面影見まくほしけれど、憖に見つ見られば、名殘もいとゞ惜かるべし。おもへばこの世は假の宿、永き冥土に嬬夫の、契をたがへ給ふなと、言傳てたべといひかけて、後いひ殘す陰口の、はかなき別れを思ひやれば、われも涙にかきくれながら、よわるこゝろを鬼にしつ、なほ十分に謀らん爲、御邊をば村長許呼よせさし、われは竊にお花を將て、背門口より潜び入り、槐姫をば何となく、納戸より出し奉りて、姫の衣裳をお花に被せ、お花が衣を姫に被せ、まづ姫君をば、準備の竹輿に扶乘し、さてお花をば納戸なる、押入の戸棚に躱はし、密やかに人をつけて、槐姫をば他所へ延し進らしたれば、陶五郎に呼れしとき、われ外面より走り來てやがて納戸へ跳入り、外姫女お花が頭を刎て、隆春に遞したり。かくまでふかく謀りしかば、奸雄なる晴賢も、絕て友善を疑はず、又御邊同胞を追擊せず。されば幸くし槐姫の、おん命恙なかりしは、御邊の舍弟と妻女の功なり。われその誠心を感ずるのあまり、且この庵は、園花見山爾比丘尼の、草庵なるよし、槐姫の宣ふから、義女お花が首級を齎りて、有緣の道心に葬らせ、又姫君のうへを委ね、事の趣を告ん爲、法會の施主に假托て、夜を日に續て走來れば、こゝにて御邊にあふのみならず、愛惜の羅に牽れて、しばしその夫に奇緣、更に夫の厄難を救ふ、烈女お花が死後の貞操、面前に見てます〳〵感佩、嗚呼奇なるかな、奇なるかなと只管に歎賞し、一五一十を說明せば、奥に忽地よゝと泣、女子の聲は拈華微笑尼、姉のお通も恙なく、はやこゝに來給ひぬと思ふものから、半七は、夢に夢見るこゝちして或は歡び、或は哀み、原來お花は槐姫の御命に代りにけり。かくてこそ半七が汚名を雪る貞操心烈、それとはしらず八千川より、伴ひたるは世になき嬪の、まどひ出て嬬夫の、別れ惜歎不便なり。天晴候厚倉ぬし、御邊もしなかりせば、姫君いかで恙なからん。さるにても、古人二郎太夫友春ぬし、未然を察せし忠義の精、凡慮の及ぶ所にあらず。孝淺ければ思ひもかけず、御邊を嬪の仇として、擊んとしたる半七は、愆をかされたり。許し給へと額を著、淚をかくす壯夫が、見じと思へど今更に、生るがごとき妻の首に、哀傷さこそと厚倉は、件の首級をとりあげて、花桶の内にをさめ、天女を祀る法場に、髑髏の汚穢いと恐し。庵主の女僧に附屬して、法筵果て葬給へといひつゝ遞せば半七は、花桶を兩手に受、槐樹に似たる合歡の花、ねぶりて覺

ぬ亡妻の、夜毎は則手向の花桶、爰にここへ来つるとき、われを諫し言葉の端にも、定めがたきは衰別離苦、一度わかれて又あうて、わかれの後はいかならんと、心ぼそげに喞るを、女子の愚痴とのみ思ひて、いひがひなしとて叱りしを、心なしとや恨みけん、思へば不便の終焉かなと、又くりかへす苧環の、いとゞ哀はいやましつ、鼻うちかみて厚倉も、頻に嗟嘆したりけり。

柴橋の雨笠

厚倉隼人が物語を、夢のごとくに聞居たる、全介はやゝ心も覺て、悄然と身を起し、仇に似せる四五六の用人友吉、憎さばけ目にもの見よと、半七もろ共其身を受よと罵りつゝ、縁頬へ跳上りて、刀の柄へ手を掛れば、貲布の幕をさと掲て、一人の武士走り出、全介を遮り留めて、右手に引提し小刀を、抜も敢さで颯と打ば、全介綱を掻挘し、借とその顔をつら覗り、去年の春、櫟木のあなたまで、跡蹤たれば正しく認る。汝は赤根半之進、實父の仇人脱さじと、跳蒐て腰刀を、拔んとするを拔しも果ず、丁々と打居れば、全介ますく焦燥て、組んとする手を撓と取り、早り給ふな半之進が、まうし上べき密事あり。今この小刀をもて、打まゐらせしは私意ならず、乃ち父頼勝朝臣の、後事を懲らし給ふ折檻、やがてぞ思ひあたり給はん。いと似なく候と、いはれて全介こゝろを得ず、この期に及て命を惜む、わが實父は今市全八、養父は贋鐵介四郎、これより外に親はなし。勇言食すと立あがつて、勝負を決せよと敦圍ば、半之進完爾とうち笑み、君の爲には一點ばかりも、命を惜ぬ半之進、何狼狽てか、僞を申すべき。君は正しく續井の嫡男、今市なんどを實の父と思召は物體なし。いざあなたへと、恭しく上座へ推居れば、厚倉隼人も席を下り、半七もその事の、顛末はしらねども、父の後方に居かはりて、各位等しく敬すれば、全介とにかく疑ひ惑ひて、手を叉きつゝ沈吟せり。當下半之進は、膝行して席をすすめ、縁故を知召ねば、疑惑し給ふは理りなり。算れば二十年あまり一年にやはやなりぬべし。永正十二年といひし春の比、わが君頼勝朝臣、吉郷丸たりし時、鬱憂を保養の爲、華洛へ潜でのぼり給ふ。おん供には今市全八、布施蟹九郎、かくまうす半之進も候ひし。しかるに佞臣布施今市等、君に淫酒をすゝめ進らせ、華洛に名たゝる白拍子、歌妓舞姫を集合つゝ、長夜の飲その度に過たり。されば名る、舞姫の中に、笠屋小夏といふものあり彼は華洛の刀拭同樹といふものの女兒にて、實の名をば増穂といへり。笠屋夏に歌舞を習ひて、むかしの手手微妙ともいひつべき手弱女なれば、吾君不覺に御こ

ところを移されて、有一夜小夏を御旅館へ止宿さし、よばひつゝかたらひ給ふに、小夏は元來吾君を、續井の郎君なりとはしらず。その名を問ば吾君も、實の名をば告給はず。われは續井の近習の士、今市全八郎といふものなりと、詐欺て、二夜さ契りをかさね給ふよし、某に密語給ひしかば、こは物體なき御進止、あるべき事とも覺候はず。もし平城へ聞えなば、大殿の怒りつよく、おん身のうへに候はんと、面を犯して、諫めまうせしかば、是より小夏を召れざれども、君も只、某を、いぶせきものに思召、今市布施等時を得て、讒言その間なかりし程に、某はおん前を遠離られ、病と稱して下宿に籠居し、ひとり心を勞せしが、果して君のおん越度平城へ聞えて、御父子の間に、事いで來なんとしたりしかば、厚倉二郎太夫これを歎き、竊に某が旅宿を訪て、計策を謀あはし、事成某が身に負て、その夜三勝を奪ひ去りしかば、大殿のおん憤忽地解、橋梓和順なし給ひき。かくて六年の春秋たちて、某夫婦召かへされ、又いくばくの年を經れども、吾君のおん子には、槐姫のみいで來給ひて、男子は絕てましまさず。續井の血絡絕んかとて、君も物憂おぼし召ども、人力の及ぶべきにあらず。さる程に、一昨年の初冬六日、浪速なる千日墓にて、某一家、蟻松一族、施行の米を引たりしに、集合たる貧人乞丐多かる中に、年歲は廿八九なる壯佼の、いと窶々しく見えたるが、人の後方に立躱れ、施米を受て歸るを見れば、その面影何となく、吾君順勝朝臣によく似たり。こゝろ得がたく思ひつゝ、ふかく意にもとめざりしに、去年の秋、櫟本の松原にて、某が轎子へ、鳥銃をうちかけられし時、養母の自殺に愁傷する壯佼あり。某そのとき、和邇の八幡宮よりかへさ、樹の陰に立躱れて、事の容を張へば、それが養母は某が母、鷹條が妹晩稻なり。又壯佼は、刀冶岡樹が妻の孫、今市全八が實子なるよし、來しかたをかき口說を、つく〲と聞て闇窺るに、彼壯佼はいぬる年、千日墓にて施米を受たる貧人なり。見れば見るまゝ吾君の、面影によく肖たり。折しもあれ、營に周防を逐電せし、厚倉隼人いで來りて、敗鐵の四五六と名告つゝ、彼壯佼を痛り慰め、晩稻の死骸を鎧櫃に、納めつゝ立歸る、彼隼人が鶴躰、實淫酒に家を忘れて、逐電すべきものにあらず。しかるに彼人身を窶し、彼壯佼を助る事、思ふ所あるにこそと推量り、その夜刀を打折れ、某が預たる、主君恩賜の小刀を拔あはし、彼壯佼が臑を、一大刀砍著あへなく斃れし、私卒丹二が死骸のほとりに遺したる、件の小刀を取て、挑燈の火に、つく〲とこれを見れば、はじめわが君順勝朝臣、米谷山の妖氣を見んとて、樓に登りつゝ、このおん

佩刀を走らして、膝口を突傷り給ひしと
き、この刀尖に疵著し、主君の鮮血と壯
後の、鮮血とひとつに聚りしは、現爺
れぬ親子の證據、われながらこのおん佩
刀を、いしくもまうし賜りて、丹三には
頒しよな。下郎なれども丹三が、彼君に
代て、一命を隕せし故に、わが君おん
子を擧給ひつ、さるをわが叔母晩稻老女
が、襁褓の中より孚まゐらせ、健氣にも
生育せし、その功も又賞すべしと、思へ
ばいとゞ喜くも、又哀しさも限りなけれ
ど、厚倉隼人傅き居れば、郎君のうへ心
安しと、その夜はそのまゝ追ひも留ず、
木精塚を發きしも、君に禍あらせじとて、
隼人が所爲とは猜しながら、こゝろに秘
て人には告ず、閑居恩免の日を待て、こ
のおん佩刀に聚合たる、御父子の鮮血を、
吾君に見せ奉り、ありつる事どもまうし
たるに、吾君御夫婦欣然と歡びたまひ、
わかゝりし時の過失は、老ての今の幸福
となりぬ。わが齡既に五十に及ぶものか
ら、男兒なきをいといたう、心ぐるしく
おもひしに、思はず實子を獲たりしは、
汝等が丹誠によれり。晩稻丹三が後の世
を、叮嚀に弔ひ得させよ。隼人が事は後
日に賞せん。しのび〳〵にわが子の往方
を索よと、仰つゝ又このおん佩刀を預下
され候ひき。かくて大内家の擾亂によつ
て、某はやく間諜者を、多治比山口へ遣
しつゝ、陶と大江の善惡虛實を窺せ、郎
君は隼人とゝもに、氷上のほとりに在る
よしを傳聞、更に主君の仰を稟、大江家
と謀し合せて、晴賢を討ん爲、沼多の新
關の開たる比、某竊に當地に來たりて、
昨今拈華菴を旅宿としつ、雨乞の法會に
假托、後れて來ぬる軍兵を、この處へ集
會たり。君は則晴賢征伐の大將軍、全
介を改めて、けふより續井小太郎順啓と
稱し奉るべき旨、大殿の嚴命なり。疑念
を解ておん佩刀を、受收め給へかしと、
おちもなく演說し、小刀を引拔て刀尖を
見せ進らすれば、順啓は聚合たる、鮮血
をうちかへし打かへし、と見かう見つゝ、
鞘に納め、三扁戴きて腰に帶、大息吻て
形を更め、面目なや赤根父子、實にいふ
氏より育、養母晩稻の物がたりにて、わ
が實父は、續井の退職人、今市全八郎と
いふものなりと聞しかば、却てわれには
忠義ふかき、牛之進親子を擊んとせし事、
惣解にもあまりあり。隼人はわがうへし
らざりし歟、しりなばなどてや告ざりし
と、問せたまへば厚倉隼人、欣然として
すゝみ出、御不審はさる事ながら、某浪
速にありしとき、おなじ敗鐵賣し給ふ、
君の面影を見奉るに、順勝朝臣に似給へ
り。大殿いとわかくおはせし時、落洛の
歌妓舞姫なんどを召されし事は、亡父二
郎大夫か物語に、聞たる事も候へば、も
し續井家の落胤にはおはさずやと、思へ
ば他事もなく交りて、浪速にては永樂錢

三貫文を贈りて危窮を救ひ、そのゝち櫟本の松原にて、自殺をとゞめ、その父は續井の退糧人、今市丞八郎なるよしを、はじめて聞ども面影は、續井殿に似給へば、故こそあらめと假初に、復讐の助太刀すべき、勢ひは示しながら、竊に赤根が盾となりて、周防まで伴ひまゐらせ、只續井殿の落胤なる、證據を見出すこともやと、年來意をつけたりしに、いひあはさねど半之進は、いちはやくこれをしれり。寔に燈臺根闇とは、隼人が事にて候と、回答まうせば順啓は、ます〳〵感心斜ならず。かゝるべき前象なりけん、われ近ごろ、夢にあやしき人來たつて、軍法劍法弓馬を習し、讀書手蹟を敎る事、三四十夜に及しかば、年來は一文一字も、引ざりしわれなれど、學ずして忽地に、文武の道を諳じたり。いとも不思議の事ならずやと宣へば、半之進、それこそ御祖父順昭公より、當代に至るまで、數十年信仰し給ふ、志貴の毘沙門の、擁護にて候べし。現嚮に半之進を、擧んとしたまひたる擧動、皆悉法に稱へり。いと憑しく候と、稱まうせば傍より、半七扇をさと披きて、郞君これはと、さし向れば、順啓一目に見くだちて、忠臣不事二君、貞女不見兩夫と書たるな。これは齊王蠋が語にて、本是史記に出たるを、劉向說苑にも、又この語を載たりと、說示し給ふにぞ、赤根厚倉感佩し、この語は常に世人の、口遊候へども、何人の語なるよし、出處を定かにしるは稀なり。神明佛陀の守らせ給へば、龍に翼の名大將、合戰勝利疑ひなしと祝しつゝ、厚倉隼人又いふやう、布施物に托て、槐姬をば、唐櫃の中に潛し奉りて、こゝに伴ひまゐらせしが、事に紛れていまだ出しまゐらせず、暑氣に堪ずぞ坐すべき。同胞對面なし給へとて、遽しく庭へ下り、唐櫃の蓋うち開きて、槐姬のおん手を援き、母屋へ誘引奉れば、順啓は席を讓りて、威儀正しく、われには年もはるかに劣れど、その母貴くおはすれば、妹なりとも姉に等し。さても晴賢が逆謀にて、百折の艱苦を經給ふこと、痛しくこそ候へと、慰め給へば、槐姬淚を袖にうけをさめ、ゆくりなく兄公に、面を對する身の幸ひ、世に憑しく思ひ侍り。但哀れむべきは初花が、わらはに代りてあへなき橫死、とどめんよしもなか〳〵に、けふの法會の折を得て、女僧ともなりて亡夫と、なき人々の菩提を弔ひなん。この事許さし給へかしと、心ぼそげに宣へば、厚倉隼人小膝をすゝめ、姬君ふかくな歎き給ひそ。お花が橫死は彼が宿願、義基朝臣はいぬる秋、築山の御所において、刀を肚へ突立給ひ、猛火の中へ飛入らんとし給ひしを、隆春竊に助まゐらせ、心腹の郞黨して、片山里へ潛しまゐらせ、療治をさをさ術を盡しつ、既に廢人となり給へども、

おん命恙なし。遠からずして御夫婦の、再會をなし進らせんと慰めまうせば槐姫、原來わが所夫は、なほこの世にこそ在しけれ。これぞ偏に陶五郎が、稀なる誠心のなす所、喜しやと思はずも、掌を合しつつ、周防のかたを拜み給へば、厚倉隼人は懷中より、隆春が鬢の毛と、短册をとり出し、眉に戴て半之進が、ほとり近くこれを置、只痛しきは陶五郎、養父の逆心を諫かね、とくにも腹を切るべかりしに、義基朝臣を救ひ出し奉らん爲に得も死す。三たび諫めて聽されば、號哭して親に從ふ。本來子たるの道なれば、今更に是非に及ばず。君命とはいひながら、反謀人を親としたる、隆春が一世の不幸、とてもかくても身のなる果は竹鋸、木の抄に首を梟られ、大和に在す親同胞へ、恥を遺ん朽をしさよ。御邊せめて隆春が志を父母に告、なき後には一篇の、回向を憑と、鬢の毛を押切て、短册ともろ共に遞されしこの世ながらの像見なり。これ見たまへと指示ば、半之進その短册を手にとりて、

　黑髮の亂れずもがなあづさ弓そらでまづいるのりの道しば　　隆　春

と二たび三たび吟じつゝ、半七と面をあはし、わが子どもらが心ざま、いづれも劣り勝りはせねど、陶五郎のみ不幸にして、反逆人の子となりし。これも過世の業因ならめと、いひつゝ滾す一滴、おなじ恨みに半七も、弟が心おもひやり、淚を禁あへざれば、順啓も槐姫も、之が爲に嘆息し、目をしばたゝき給ふにぞ、奥にもれ聞拈華微笑尼、お通も共に忍びあへず、聲ふり立てよゝと泣ば、半之進は見かへりて、郎君の出陣に、不祥の哭聲奇怪なり。兩女僧は何處に在る。お通もろ共、わが齋したるおん被長を、順啓君に進らせよと、呼たつれば、やうやくに淚を禁め、拈華微笑が二人して、扛いづる鎧櫃、お通はやがて蓋取て、武運を開く小櫻威、五枚錣の星兜、現故鄕の名にし負ふ、大和錦の陣羽織、篠小手奴袴、大刀六具、三人手々に被まゐらすれば、順啓弓矢挾み、床几に尻をかけ給ふ。そのさま威有て猛からず、赤根厚倉左右に侍立し、唱號の笛を吹たつれば、奥に集會し參詣の、構衆は里人ならず、みな是續井の兵士ども、甲冑に身を固め、散動たつて走り出、廣庭狹しと隊伍せり。當下厚倉が從者等も、外面より走り來つ、二つの櫃をうち披き、鎧一縮する程に、軍鑑左右に押立る、旗に書たる二天の名號、嚴島辨財天女、志貴毘沙門天王と、高やかに唱つゝ、諸軍齊一拜する折から、校計ちがって出もやらず、事の趣おちちなく、聞果たる刀治同樹は、こゝにはじめて慙愧して、簀子の下より這出つゝ、いと面なげに頭を低、七十餘歳のけふまでも、欲に固めし五體一心、佛とも法と

も辨ず、造りし罪こそ悔しけれ。今思はずも忠臣孝子、義夫節婦、順孫の集て、世にも稀なる心操、說諦し給ふ清談を、聞てはわが身が疎しく、又鈍しく恥しく、後悔今更その詮なけれど、貞婦を欺詐て賣らんとし、忠臣孝子を虐たる、惡報は今面り、この竹籤につらぬかれん。南無阿彌陀佛と唱つゝ、折たる竹槍搔取て、肚へつきたてんとしたりしかば、順啓は忙しく、彼禁めよと宣へば、半七やがて走下りて、竹槍に携とゞめ、五逆十惡の罪人たりとも、懺悔にはその罪滅す、假にも親と憑し人の惡念を轉し、、善心に歸すること、歡しくこそ候へといひつゝ、槍の穗を奪て、背ざまに投捨れば順啓は半七して、同樹を近く招きよし、われは襁褓の中にして、孤となるのみならず、その父定かならざりしに、乳母して孚れしは、汝が妻の恩恵なり。又わが妹槐姬、去年よりこゝに身を寄しも、汝が妻が恩恵なり。汝が妻はわが外祖母なり。汝肉縁なしといへども、わが外祖父なり。いかでかは死すべき。提婆が惡も釋迦の方便、汝が妻の舊菴にて、汝忽地道心を發すこと、これ又汝が妻の徳なり。われ凱陣の時を得ば實母增穗、養母晩稻、祖母小田井、義女お花、孝子平作等が爲に、永年の法會を修し、拈華微笑



の雨比丘尼をば、必大和へ伴ふべし。汝は今より、この草菴に住持して、お花等が菩提を修。五町八反の頁田を、寄附して讀經の料となさせん。餘命をしづかに送れかしと叮嚀に諭し給へば、同樹は感涙灑ぐ如く、廣啓悔嫌を伏拜み、又半七等を拜みけり。當下半七は、外母括草尼、弟婦徴实等に、沼多い新關を超難たりし日、關防牌面を悪れしよろこびを述、顔のいたく變り給へば、それともしらで立別れし、いと恐にこそおぼしけんとて、身の懈を賠話る程に、お通も八下川の危難を脱れて、こゝへ來たりし事を物がたれば、良山は平太郎を呼びて、半七等に逢しなどするに、時刻もうつりぬべし、半之進天うち仰て、けふもはや申の時には遠からじ。いぬる日多治比へ遣したる、仙野呂東二はいまだ歸らず。大江家の消息いかにあるらん。心もとなく候と、いふ言葉いまだ訖らず、衝と走り來る呂東二道能、陣笠取て跪けば、半之進信と見て待わびたりし仙野呂東二、大江家の吉凶は、いかにくと、小膝をすゝめて、問ば呂東二鎰の袖を、引あはして威儀を繕ひ、されば某多治比へ趣き、再三詰しあはすれば、大江太郎乙就朝臣、密に購貿誅伐へ謀をめぐらし給へど、まの便宜を得ざりしに、時こそ來つれ闕諸



賢は、嚴島へ詣るよし、風聲をさく〳〵かくれなし。このとき大江續井の軍船、不意に起て攻討ば、晴賢を虜にしつべし。さはれ久しく雨ふらねばや、宮島の邊干潟となりて、自在に船を進めがたし。願ふ所は只雨のみ。もし終日雨ふらば、乙就が晴賢を、饗應の夫役と僞り、間道より嚴島へ押よせ給へ。彼衆にて對面し軍配をいひあはさんと宣はせし、返書はこれとさし出せば、半之進受取て、順啓に進らすれば、封皮推切て讀くだち、乙就の謀略、その圖に當れり。刀冶同樹懺悔して、善心に立かへれば、凡この件にありとあるもの、惡人は絶てなし。只憎むべきものは晴賢のみ。しかれども雨ふらずは、容易陶を討がたし。賴む所は天女の擁護、拈華微笑は讀經して、辨財天女を祈れかしと宣へば、厚倉隼人すゝみ出、いにしへの小野小町は、歌を詠じて、雨を獲たり。今のお通も幼稚より、敷島の道にかしこく、秀歌をさく〳〵多しと聞けば、雨乞の歌を詠せ、辨財天女を祝ふし給へといふに、順啓うち點頭、隼人いしくもまうしたり。天地を動すも、元來和歌の德と聞けば、通はこの旨こゝろ得て、準備せよと仰すれば、お通は再三辭しまうせど、俺姫傍より、他事もなく諭すめて、姫君の料にとて、厚倉が齎たる、五衣緋袴、手親これを賜れば、お通は推辭に言葉なく、退て衣裝を更、拈華微笑もろともに、庭に出つゝ半涸たる、曲演のほとりに立ば、軍兵等こゝろを得て、轉手に運ぶ經机、料紙硯をとりそへて、準備既に整へば、いと晴がましく見えにけり。かくて拈華微笑尼は、念珠を押揉合掌し。能與搃持大智惠衆、大辨財天、神體は是安藝國、沼多郡宮島に、宮柱太しく建て祝れ給ふ。市杵島姫の神德神感空からずば、今立地に雨ふらして、續井大江の兩義兵に、力を戮したび給へと、お通もろ共且く念じて、嚴島を遥拜し、兩女僧は恭しく、光明經の紐を解て、三遍戴き、廣宣流布乃至得聞是經當令是等恐得猛利不可思議大智慧聚不可量福德之報と、讀經の聲の澄わたり、いとも尊く聞えしかば、お通は小時うち案じて、墨摺ながし筆を染て、短冊に詠歌を書載し、筆を閣き、

日を逐つゝ民の草葉のかれゆくにめぐみの雨をいかでそゝがん

かくは三遍吟じつゝ、目上に捧れば、天女感應したまひけん、庭の遣水浪たちて、一天俄頃に結陰、風颯とおとし來つ、彼短冊を空中へ、まきのぼするとぞ見えたりし、雷雨俄頃にふりそゝぎ、草木も人も甦れば、順啓同胞赤根厚倉、天に歡び地に喜ぶ。同樹はさらなり、軍兵等は、濡るゝも厭はで、異口同音に、しばしは感じ止ざりけり。しかるにわきて不思議なりしは、この雨拈華微笑の面を打て、

降り流す程に、爛れたる火傷の跡、洗ふが如く愈消て、旧の如くになりしかば、両女僧の誠心を、天女憐み給へばこそ、ひとたび傷たる容止の、かくまでに愈たることいとありがたき冥助なれとて、衆皆信心膽に徹して、末たのもしくおもひけり。順啓は殊更に、感悦顔の氣色に見れ、拈華微笑が諳經の奇特は、能因が和歌に劣らず、お通が詠歌は小野小町が、祷雨に異ならず、かゝれば能因の二字をわかちて、両女僧が名に被け、能拈華、因微笑とやこれを呼ん。またお通をば、小町に擬して、小野小通と唱ふべし。獲がたき雨をはや獲たれば、時を移さず出陣せん、蓑笠の準備せよと宣ふ折から、人馬共に直と濡て、馳來るものあり。是則、蟻松曾太郎なり。柴門に馬乗捨て、衝と入りつゝ、順啓 槐姫を見て跪き、郎君姫君へまうし候はん。さても大殿いぬる寅の日夢の中に、毘沙門天影向して、告たまひしことあるをもて、今日この處に郎君姫君の、集合給はんよしを知召れ、曾太郎を遣さるゝ所なり。郎君當家の大將軍として、晴賢を撃給ふに、無官にて在せば、敵これを侮らん歟。よりて室町殿へまうし請て、大和介に任せらる。かつ姫君は、拈華微笑お通等を將て、一圃平城へ歸館あるべし。おん迎の為參上せりと演說すれば、順啓は、謹で父の命を承、且蟻松を勞ひたまふ。その際に赤根親子厚倉は、華やかに鎧つゝ、先陣後陣と立ならべば、微笑は涙さしぐみつゝ、平太郎が手をとりて、平七が側に推やり、おもふ程なる忠義を竭さで、むなしくなりし父の代に、足手纏ひに侍るとも、此平太郎を伴給へといひかけて、またうち泣ば、平七有理と平太郎を、鎧の上に甚と負ひ、親に代て夭折せし、弟笠松平作が、再びこゝに存命て、忠義を演る四歳兒の初陣、伯父もろ共に分捕させん。これらの事は念とせで、故郷へ歸り給ひなば、家なる母とこゝに在す、蟻松翁へお花が事を、言告てたべとばかりに、鎧の袖を密と濡す、雨はますますをやみなく、篠をみだして降ながせば、順啓麾を取りなほし、時刻移らばいひがひなく、乙就に先せられなん、はや出陣と促し給へば、馬取の雜兵が、縁頰ちかく牽居る、月毛の駒も西へ入る、佛の利益、神の加護、めでたく凱陣遊ばせと、送る郎君、女僧、お通は、修羅の巷を見捨つゝ、大和へとゆく起程、殘る同樹は八重葎、しげ藤の弓朱柄の槍の、赤根厚倉勇しく、圭を守護して立出けり。

巻之八終

飯台曲亭馬琴戯作

葛飾北斎辰政畫

傚書　嶋岡節亭
　　　鈴木武筍

剞劂　朝倉伊八
　　　木村加兵衛

三七全傳南柯夢　馬琴著　北斎画　全六冊

三七全傳第二編　占夢南柯後記　右同　前帙四冊

同後帙第三編四冊　賣出し申候

天羽衣（あまのはごろも） 上


天羽衣

漢の董永、魏の聖武皇帝の故事の類は、唐國には例多かり。我國にいはゆる羽衣のふるごとに似たり。そも天女下りて、羽衣を失へる事は、元々集に風土記を引きて、丹後國の事なりとす。又曾根好忠が歌に、「よこの海にきつゝなれけんをとめこがあまの羽衣ほしつらんやは」とよめるあり。これは近江國のことなりと顯昭が袖中抄に載せたり。又同說に、河内國天の河にもさる事ありて、今にその子孫河内にありとぞしるしたる。後拾遺集に、能因法師「うどはまに天の羽衣昔きてふりけん袖やけふのはふりこ」とあるは、伊豫守資業が任の時と聞ゆれば、伊豫國なることとしるし。今駿河國有度郡に、羽衣の松といふあるは、伊豫の有度濱の歌をおもひあやまりたるにやともいふべけれど、東遊にすなる駿河舞といふは、駿河國有度濱に神女下りて舞ひけるをうつせるものなりと、童蒙抄にしるされたれば、據なき事にはあらず。とまれかくまれ、ふりにし昔の代語なれば、その所はさだかならぬなるべし。こゝにしるせる物語は、駿河國うど濱にすめる翁の、むかしよりのつたへごととて語り出でたるを、さながら筆にうつせるなり。眞僞はしらざれど、勸懲のはしにも成りなましとおもふも、例の古代なる老婆ごゝろなるべし。

六樹園

あづまあそびの駿河舞といふもの、をさなき人は、名のみしりて、いかなる詞ともしらぬもあるべし。これは天女の下りて舞ひうたひつるを、うつせるものなりとのつたへもあれば、ことさらに抄出して、その古雅なるをしらしむるものなり。

東遊駿河舞の歌

○うど濱に。駿河なるうど濱に。うちよする波は。なゝくさのいも。ことこそよし。ことこそよし。なゝくさのいもは。ことこそよし。あへるとき。いざさばねなんや なゝくさのいも。ことこそよし。

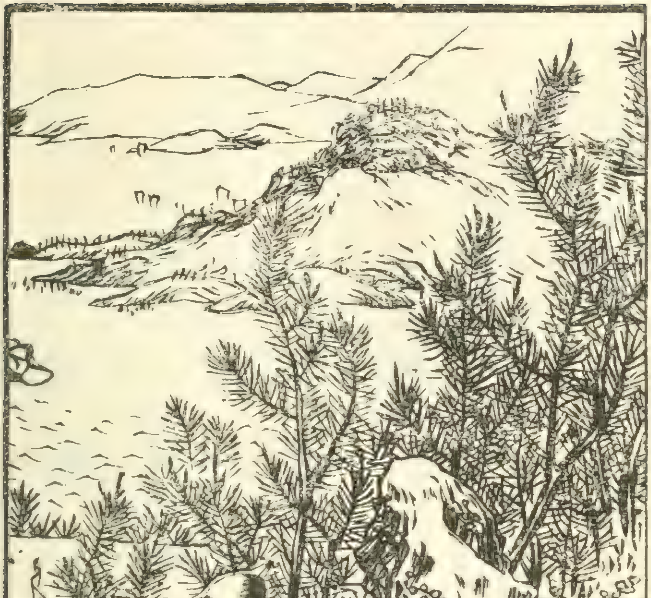
○あなやすらけ。あなやすらやすら。あなやすらけ。ねゝのをの。ころもの袖をたれて。あなやすらけ。

○ちどりゆゑに。濱に出てあそぶ。ちどりゆゑに。あやもなき小松がられに。あみなはりそや。あみなはりそ。

○いはたしたえ。かさゝすれたりや いはたしたえ。とのばらもしるくもがなや。かさまつりおかん。かさまつりおかんやしらざらん。あせがそのとのばらしらざらん。いはたなるやたへのとのは。ちかきとなりを。ちかきとなりを。

上之巻

下之巻




白良天女の舞を見るところ

天羽衣 上

○みほのうら

安閑帝の御時と申傳へたれど、その時代は知りがたし。昔駿河の國有度郡に。三保の長者といふ豪民ありけり。同じところに、磯田の長者といふ者あり。相ともに劣らざる富める家にて、田畠數多もちて、召仕ふもの多くありて、網ひかせ鹽やかせなどして、それを國々へ出だして商ひける。此磯田三保の二人の長者、かたみに親しくかたらひて、うるはしき友だちなりける。常に圍碁を好みて、晝夜をいはず、二人さしむかひて、打ち樂み興じけり。ときに十月の初め比、例のごとく碁うちてありけるに、三保の長者が妻、俄に蟲のけつきてなやみければ、家の內さわぎどよみけるうち、やすやすと男子をぞ産みける。磯田もこのさわぎに、碁を打ちさして、やがて家に歸りけるが、これもその日、夜に入りて、妻なるもの同じく男子をうみぬ。兩家とも、さばかりの豪富なりければ、産養ひの祝ごととて、出入る人ひきもきらず。賑はしき事、



いへばさらなり。さて一二日を過ぐして、長者兩人出であひて、互に出產のよろこびいひかはして、磯田いひけるは「御身と我と常に碁を打ち遊びて、睦しくかたらふ中に、一日のうちに、相共に妻の出產せること不思議といふべし。いかに此子ども、今より兄弟のむすびして、生涯親みを失はざらんやうこそ、ねがはしけれ」といへば、三保も悅びて「さては子どもの代に至りても、ますく厚く交るべし」とて、盃とりかはして、もろともに誓ひをぞなしける。磯田「名をばいかによぶべき」といへば、三保の長者しばし打案じて「時は十月なり、十月は良月なり、御身の子は夜生れ、わが子は晝生れぬれば、我子は白良とよび、御身の子は黑良とよばんはいかに」といへば、磯田打笑みて「黑白を以て晝夜になぞらへしこそおもしろし、白良はさきに生れ出でたれば、兄と定むべし」といひて、これより、いよいよむつましくぞまじはりける。さて其

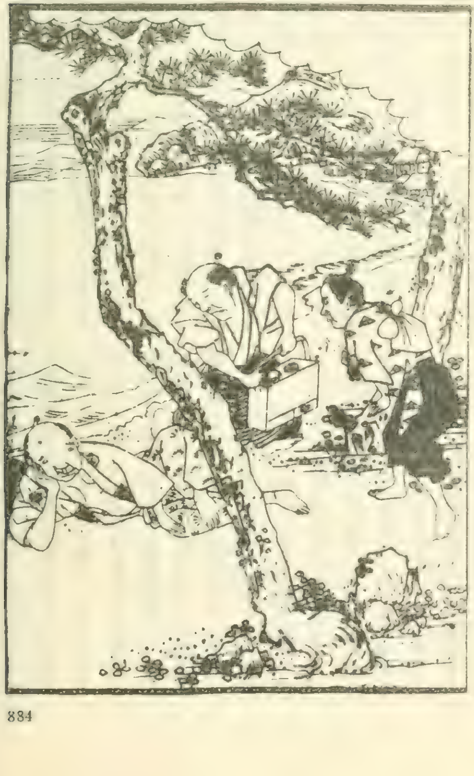


翌年に至りて、磯田の長者が妻、ふたゝび女子をうみける。これは、したしみをかさねん爲にとて、生長の後は白良が妻とすべくいひなければ、三保の長者もよろこびて、聘禮のしるしとて、金二百兩をぞつかはしける。このうまれたる女子をば、三保の長者夫我嫁なればとて、おのが氏によせて小嶋とぞよばせける。かくしたしみかはしけるほど、磯田が家、思はず三度ばかり火災にあひしう人、召使男によからぬものありて

いひ合せて金奪ひて出奔せるもあり。さて田畠なども、年ごとに不毛うちつゞきて大に勢を失ひて商をもなさず。戸をさしかためてこもり居けるを、三保の長者心ぐるしく思ひて、一日磯田を呼びむかへて、碁盤のうへに金どもうづだかく積みならべて、外に田畠の券などとり出でていひけるは「御身産業利を失ひ給へること見るに忍びず。わが家の財をわかちて参らするなり。これにて本のごとく、とりいとなみ給へ」といへば、磯田は、思ひがけぬ事なればいく度か額をつき手を合せて、「この洪恩は死して犬ともなりて報ひ奉るべし」といへば、三保云ひけるは、「黒良は白良がために弟なり。小松はわが姻なればかた〴〵餘所に見ん道理なし。恩とな思ひ給ひそ」といひけり。そののち光陰たちて、白良黒良八つといふ年になりて、疱瘡をやみけるに、黒良はいとかろく、すが〳〵と快癒えけるに、白良が疱瘡いとおもくて、命も危きさまにぞ見えける。父の長者なげき思ひて、三保の明神に参りて、「いかで白良が命救はせ給ひなん」と肝膽をくだき祈りける。そのしるしにやありけん、からうじて命ばかりは助かりけるが、さしもみめすぐれしうまれつきなりしが、見るさへうたてき顔となりて、疱のあと、ひまもなくつき、くろみ腫れてさながら鬼のごとくぞ見えける。されど命ひとつひろひけるをおもき功として、男子は顔貌をえらぶきかはといひ慰めつゝ、いよ〳〵大事として育てける。この三保の長者、慈悲ふかき人にて、めしつかふ者はさらなり、一村のまづしき者をも常に憐びて情をかけける。一年駿河遠江のわたり、大水出て田畠をおし流しければ、貧民どもは食ふべき物なく、皆飢えて死にいたらんとす。三保の長者、例の慈悲心をおこして、倉を開きて積置きたる米麦ども出して貧民にあたへ、隣國へ人を遣りて穀物あまた買ひとりて、あまねく人々にわかちつかはしければ、水難にあへる民ども此三保が恵によりて、危き命をたすかりて、ひとへに長者が徳をぞ稱しける。この長者さる田舎に生ひたちけれど、志氣ある者にて、聖經の道々しきすぢをも朝夕白良にをしへける。白良も。醜き面には似ず、こゝろ忠直にて、書の道に心を入れて習ひ學びける。時に三保の長者、とし六十に及びける。誕辰の日に當りて、近きわたりの人々を請びて、酒のませてあつ〳〵饗應して、はてに、ひとつの櫃とり出でていひけるは、「これに入れ置きたるは、年ごろ近村に住める人々へ米金貸し遣はしつる券にて候。これ借り給へる人々は、各今日をいとなみかね給へる人々なれば、返し給はんこと實に難かるべし。こたびおのれ、壽筵のいはひごとに、此券人々に返しまゐらするなり。反古となして、破り捨て給へ」とて人々にわたしければ、借りつる者ども大によろこびて、「さても忝き御心かな。とし頃、

利息をだに參らせで怠りつるを、本をだに取り給はず、繰返し給はること、ありがたやかしこや」とて額に手をあげてふしをがむ。嬉しさの身にしみけるにや、「あゝかゝる人の、いつまでも長生しておはせかし」などとりぐ〵いひはやしてぞ歸りける。さて三年ばかり過ごして、二條の長者かりそめに煩ひけるが、定業にやありけん、しばしの程にひた弱りに弱りて、終にあへなくぞなりける。白良はさらなり、母がなげき大方ならず。されどせんかたなければ、かたのごとく葬送の事とりいとなみて、むなしき煙とはなしけり。さて白良は、父に別れてより、ひき籠りてのみ暮しけるが、いつしか夢のやうに七年ばかりを過ぐしぬ。母白良が學問にのみ心をいれて、ひたすらとぢ籠りをれば、「疾にや煩ひなん」と心をつかひて、「折々は濱づらへ出でて、心をも慰めよ」とて、のどかなる日、あながちに出したてゝやりぬ。白良今年十七になりぬ。鏡に向ひても、我身ながら、うとましき面ばせなれば若き心には恥ぢおもひて、みだりに外へ出づる事もせざりき。今日は母の、しひて進め給へればとて、たゞ一人磯邊づたひにあゆみ往きける。をりから七月の比にて、暑さ堪へがたかりければ、茂りたる松のもとに筵打敷きて、携へたる釣竿取出でて、濱のまに〳〵絲さしおろして逍遙しをり、打見めぐらすに、げに海のおもては、はる〴〵と見わたされて限りもなきに、帆かけたる船のいとさゝやかに見ゆるもをかし。磯邊の松は、緑いろ濃く、むら〳〵と立ちたるに、よせかへる浪は白玉をちらすがごとし。朝こぐ舟はよしなしにと詠めりけんもげにと見わたしゐたるに、あなたなる松かげの、けちえんに光りて見ゆ。「あやし何ならん」としづかにあゆみ行きて見やりたれば、あてやかなる女の唐衣着たるが、五人ばかり舞ひかなでて遊びゐたり。其姿さながら繪にかきたる天人といふものゝごとし。「このあたりにかゝる人のあるべきやうなし。不思議なり」と目をつけてをるに、此天女たち、よく〳〵舞に心ややつしけん、白良が伺ひをるをもしらで、あまたたび袖を返して舞ふさま、おもしろき事たとふるに物なし。「これなん、天上にいふめる霓裳羽衣曲にや」とおもひて、且感じかつ驚きて、やをら松のうしろを廻りて近くよりて見れば、松が枝に五彩に光れる衣一つかけてあり。かゞやき渡れること、玉をのべたるがごとし。かしこしとは思ひながら、手をのべてかの衣をとり見るに、かうばしき事いはんかたなし。白良おもはず膝うちあげて、「あはれ妙なる衣かな」といふに驚きて、天女たちひとしく白良を見る。白良地にふして、「凡俗あやまつて、御遊をさまたげつ」といへば、天女うちゑみて、「今日相逢ふこと因縁あり。汝が家世々陰徳を積める事、はやく天宮に聞えぬ。よつてこの衣、しばし汝に預けつかはすなり。これ汝が[illegible]

きなば、さいはひことよなかるべし。今より千日が過ごしなば。裳に入りて異衣うけとるべし」といふ。白良猶いぶかりて、「そもいづくにすまはせ給へる御かたにや」と問へば、「汝しらずや、天帝に十二億の天女ありとは、寶積經にもしるしたり。但し汝宿業によりて、今しばし憂きめをや見まし。あながちに悲ふることなかれ」と云ひて、たなびく雲にのるよと見えしが、ひとしく雲居をさしてそのぼり行きける。白良は、うつゝ心もなく大空を仰ぎてゐたりけるが、あまりに奇異の事なれば、とく歸りて母に告げばやとてかの衣を袖ぐくみに挾みて、道を急ぎて歸らんとするに、おもひがけなく黒良來あひたり。これも納涼に出でけると見えて、割籠酒筒などもたせて、四五人うちつれて來り、白良を呼びとめて「珍しき見參なり、一杯をすゝめ奉らん先」とて濱邊に氈しかせて手をとれば、いなむべきにあらねば、のぼり居たるに、黒良ひたすら酒をうながして、白良にしひ飲ます。もとより白良下戸なるうへに、あまたたび強ひられてつゞけ飲みにのみほしければ、前後を忘れて打倒れぬ。黒良伴ひ來る者共に、目をくはせて、白良が持ちたる衣とりて包に入れて從者に負はせ、酔臥したる白良をば砂地にまろばし、氈疊をせて、「かやつが酒の醒めぬほどに、とく立去るべし。此衣よのつねの物にあらず、一定稀なる寶なるべし。よき所得しつ」とい



ひて、みな〳〵どよみてかへりいにける。時ばかり過ぐして、白良目さめてあたりを見れば、黒良を見ず、たづさへたりし羽衣もなければ、「さては黒良が盗みて、もち行きつるならん。これ失ひては、わが身におもき咎やおひなん」と心も心ならず、やがて足をはしらせて、磯田がもとに往きぬ。黒良が門にたち居たるに逢ひて、衣を失へることをいへば、黒良つれなし顔つくりて、「そこの酔ひふし給へば、おこしつれど、答だにし給はねば、われ〳〵そのまゝに歸り来つ。わぬしのいかなる物もちてゐ給へりしか、我がしらぬ事なり」といふ。白良がいはく、「これはおのれが物にても候はず。仔細ありて、人より預りたる物にて、失ひては誰にもしられず。いかで返し給はりなよ」といへば、黒良はらだちて、「さては我が盗みたるといふにや。おのれも磯田が子なり。何のよしありて、人の宝を奪ふべきぞ」とうち[illegible]。白良「[illegible]いかで盗みし給ふべき。戯れにとりかくし給へるなるべし」といへば、黒良が下人ども立出でて、「わが主を盗人とさしたる、案外なり」と皆めくものなどとりて立ちかゝる。白良もしひて争はんにも、かれが盗みつるといふ證據もなし、騒を見んも中々なり」と思ひ返して、顔をやはらげて云ひけるは、「さらば、しらせ給はぬにこそは、もし[illegible]らせ給へ。此時に、籠などの中に紛れて入りやしつらんと思ひて、問ひ明えつ



大　羽　衣　・

るなり。さらんには、異所を尋ねて見候はん」と云ひて歸りゆく。黑良が下人ども口口に「我主にあらぬ事をいひかけつる不當のもの。死ぬばかり打ちたゝきてこそ歸さめ」などいふを、白良聞かぬふりしてかへりけるが、道すがらおもひけるは、「とにかくに、此衣黑良が奪ひたるにたがはじ。しづかにたづねさぐるべし」と思ひて家に歸りて、母にかく〳〵と語りければ、母もあやしみ且驚きて、「まづ〳〵心をさめて、よく〳〵尋ぬべし」とぞいひける。扨月比を經ぬれど、よき手がかりもなく、いひ出づべき時もなくて、月を過しけり。

○いそだの濱

此三保が家さしもならびなき富家なりけれど、年頃人に物を施すこと過分なるうへ、さきに家財の半をわけて磯田が家へつかはし、又國中の飢饉を救ひなどしければ、十年ばかりがほどに、昔の十が一にも及ばざるやうにおとろへにけり。白良と母と、怠らず家事をいとなみけれど、風かひなひしからず、年ごとにおもふに叶はで、今はもちつたへたる田畠などを質にいれて、其しろをもて世を送りける。めしつかひける男女ども、かくおとろへ行くを見て、各さま〴〵の事にかこつけて、いとまをこひて出行きければ、今はたゞとし比めしつかひける久といふ翁一人ぞのこりゐたりける。此翁まめ〳〵しき者にて心あつく、萬に心を用ひてつかへける。磯田が家も年ごろさばかり親しかりしが、近き比となりては、黑良なども來る事なく、いと〳〵疎遠にぞなりける。磯田が家は、年ごとにゆたかに成りて、田畠なども數そひて、勢やんごとなくなりけれど、三保が家の困窮を聊たすけ遣さず。黑良もとより、父におとらぬ腹黑なる者にて、物のあはれをしらざれば、いよ〳〵つれなくぞふるまひける。妹の小松は、ことし十六になりけるが、貌こゝろばへも、なべてならず美しかりければ、磯田妻にいひあはせけるは、「娘はをさなき時、白良が妻とすべく約しつれども、かれが家年々におとろへ行くのみならず、白良がかたち醜く、さながら鬼ともいふべく見ゆ。さるものにいかで小松をめあはすべき。近國を尋ねて、人がら打ちあひたる者あらば婿と定むべし」といへば、妻も同じく心ねぢけたる女なりければ、昔の契りをば思はず、とも〴〵うなづきてぞをりける。さて白良が家は、次第に貧しくなりゆけど、磯田が方にていさゝか顧見だにせざれば、老僕なる久、大きにはらだちて、母のまへに出でて云ひけるは、「故主存在の御時、家財の半をわけて、磯田がもとへ遣されしこと我しる所なり。しかるに今一錢の助けをだにせず、ことにいひなづけし給へりし時、二百兩の聘物をつかはされしを、此比承れば、ひろく近國を聞きあはせて、婿をえらばんといたすとか。あまりにほしいまゝな

る磯田がふるまひにて候へば、おのれかしこに至りて、昔より故主のあつくめぐませ給へる事など申出でてつら恥かゝせて候ひなん」といふ。白良が母、涙を目にうけて云ひけるは、「汝がいふ所ことわりながら、我家今は[illegible]後見の人だになければ、磯田が家と争ひたりとも、いかで勝をとるべき。とにかくに云ひがひなき身とは成りにたり」となげけば、白良云ひけるは、「小松は顔ばせも人にすぐれたれば、我醜きを厭ひきらはん事さもあるべし。我もまた、強ひて昔の契りにかこちて、彼を迎へん心はあらず。たゞ磯田が家にて、父君の恩を思ひて、聊なりとも此貧しきを救ひくれなば、うれしからん」といへば、久「さばかりの事は、いかで仕らざらん。おのれ磯田がもとに至りて、口をひらきて見候はん」とて立つを、母、「かまへて口論などして、無益の事いたくなせそ」といひつけて出だしぬ。久はいそぎ磯田がもとに行きて、門に入りて、「久こそ参りて候へ」といひ入れさせて、待ちゐけるに、時ばかり過ぎぬれど、出でてあはず。久また下男をまねきて、しかじかといへば、奥さまへ入りたるまゝ、これもいらへせず。日暮に及ぶ頃ほひ、女出で來て、「こなたへ」とて久をともなひて、庭づたひつれ行きて、縁のうへにのぼせつ。扠しばしありて、障子明けさせて奥の方に茵敷きて、磯田夫婦ゐて、遙に久を見やりて、「何ごとありて來りし」といふ。久目をあげて見るに、夫婦が傍には、手代と見ゆる者七八人ならびゐて、事の體いとおごそかなれば、大きに[illegible]たりけれど、さてやむべきならねば、云ひけるは、「しらせ給ふがごとく、三保の家今は一月のたくはへも候はず。親子とも安き心もなくけふをいとなみて候。いかで昔のよしみをおぼし給ひて、今日の見ぐるしきを救はせ給ひなん。且は御兄弟のむすびし給ひ、婿君の御契りも候へば、御おもてぶせにも候ひなん」といふを聞きもあへず、磯田大聲に云ひけるは、「汝が主の家、おとろへ行きしは天運のする所なり。我しれる所にあらず。古き諺にも、頭に集る蠅はおのがじし打ちはらふといへり。いかで我家にもあらぬ他人のいとなみをしろべきか。汝が[illegible]に、兄弟のむつび、婿の約束したりなどいへる、皆あらぬことなり。さやうの契り、かりにだもしつる事なし。老いぼけてあらぬよまひごとをいふならん」とそらうそぶきていふ。時に久はらだたしくなりて、「我主人二百金の聘物を贈りて、我家の娘と定め給へること、おのれよく知りてあり。よし此縁はさき破り給ふとも、聘物の金は返し給ふべきことわりなり。又これのみならず、わが主人さきに家財の半をわかちて贈物し給へれば、かたぐ今の三保の家の貧窮を救ひ給はんこと必定の道理なり」と聲あららかにいへば、磯田ついたちて扇とりて、久がつらをしたゝかに打

ちたゝきて、「我家が主人より、露ばかり物を受けたる事なし。貧にせまりて、作りごとをかまへていふにこそ」とて、かの扇を久になげつけて、つとあなたへ入りぬ。久怒の眼に涙をうかめて、「つくりごとするは、わぬしにこそあれ。恩を知らざるは、犬に劣りたる心よ」といへば、手代ども立ちかゝりて、手をふりあげて久をしたゝかに打ちたゝく。はて〳〵は大勢にて手足とりて、表へかき出だして、大地へうち捨てて皆入りぬ。白良は宿に在りて、久が歸りくる事の遲かりければ、おぼつかなくて、くら〳〵に宿を出でて、磯田が門へ來り見るに、久大地へうち倒れてゐければ、驚きてとかく介抱して肩に引つかけて、宿へぞつれ歸りける。久家に入りて、二人に向ひて泣く〳〵事の仔細を語りければ、親子もともに口をしき事に思へど、せんかたなくただ涙をこぼすばかりなり。こゝに磯田が娘小枝は、父が久にむかひて、罵りいひける詞を一瞬の内にて聞きすまして、その衰母にも背きて、おそろしきまでに覚えて候。に向ひて云ひけるは、「今日父の言へるとさきざき三條の家より厚く我家を恵みつると、わらはよく聞きて候ひぬ。しかるにかのことは、幼き頃より我も見聞きしりて候。久がいへるところは、理明かにて、不當のしかるにその報はし給はず、かへりて久をこと一つも候はず。たゞ父の詞こそ、道理うちたゝきて、追出だし給へる事人の恩は



ん所も心ぐるし。また我身、かの家と縁をくみて、贈物とて金うけとり給ひしことは、乳母が物語にてくはしく聞きおきて候。白良どの、たとひ醜く貧しき人にもあれ、一たび夫と定め給へれば、今さらこなたより縁をたつべき道理候はず。「女は二人の夫をかさねず」と申すことは、假名草子、物語のふみにも、しるして候へば、わらはよくわきまへて候を、強ひてかしこの縁をたちて、異所へよめらせんとし給ふは、父母の慈悲には候はず、みづからを不義に陷れ給へるなり。三保の家、今貧しくなりてありとも、女の道は改むべき道理候はず」と、ことわりをつくしていひければ、母あきれたる顏色して「貧窮のうへに醜くて、世には鬼白良と呼ぶなるを、彼にしも添はんと思ふは、いかなる心にか。汝をさなければ、物の心をしらじ。たゞ父母がいふところにまかせよ」といへど、娘は頭うちふりていらへだにせざりけり。あはれ此



娘さる無慙なる親の子にして、さばかり道をたて、こゝろざしを守れること賢叟が子に舜の生れ給へるにことならず。いみじくやさしき心にぞありける。

○ま ひ た け

こゝに志太の長者といふ者あり。黑良にひとしきえせ者にて、常に酒を好み色にふけりて、いと醜たる事なりける。とし若くて、

黒良と親しく交りけるが、小松が娘のすぐれたるを聞て、妻にせばやと思ひけれど、さすがに、うちつけにいひ出づべきならねば猶豫ひてありけるに、近き所に卽佛といふ尼あり。これは磯田が家へも行きかよふ者なれば、呼びむかへて物とらせなどしてかたらひければ、尼うけひきてやがて磯田がもとへ行きてしかじかと語りぬ。志太は磯田に勝りて田畠も多くもてる者なれば、磯田親子大きによろこびて娘小松にも知らせず、事きりて、つかはすべきよしいひやりぬ。志太は此事を聞きて、限りなく喜びて、聘物とゝのへて吉日をぞ待ち居たりける。この卽佛尼は、此たびの媒の勞とて、志太磯田の兩家よりあつく財ども贈りて謝しければ、思はず德つきてほゝゑみてぞ居たりける。一日尼家にありて、佛前にて經よみ居けるに、卅ばかりの女のうるはしきが、髭籠に物いれて持ち來て、これを佛の前に置きてぬかづきて拜みをり。尼見て「いづこの御人ぞ」と問へば、女がいはく「わらはは磯田の家に、をさなき時より仕へたる雲井と申す者にて候。十年ばかりむかし、男もちて隣の國に住みて候へど、あまりに古主のなつかしくて、今日かしこへ參り候なり。」といへば、尼がいはく「おのれ此度磯田の御娘を、かしこの志田どのへ媒して候。さいはひ明日は、志田殿より聘物を送り給へば、そのこと磯田の家へ告げに參らんと思ふ所なり。いざもろともに參らばや」といふ。女さらばとて、ともなひて立出づるに、今ひとつ大きなる籠をもちゐたれば、尼「その内なるは何にて候か」と問へば、「これは山つとに取りたる蕈にて候」といふ。扨は今のほど、御佛に奉り給へるもそれにや」といへば、女「さなり」といふ。尼「さらば此佛の御おろしは、志太の家へ贈り申さん」とて、佛のまへにある髭籠をとりて持ちてゆく。尼は途にて志太が家にたちよりて、髭籠を措きて、又つれだちて磯田が家へ行きぬ。磯田夫婦尼が來るを見て、さまざまともてはやし、さて雲井を見て「などて久しく來らざりし、まづこなたへ來」とて、母誘ひて娘が部屋へつれて行きぬ。尼は磯田にむかひて「明日吉日なれば、志田殿より聘物おくりおこし給ふなり。其こゝろし給へ」といへば、磯田うなづきて、尼が勞を謝して、よろこびいひて、酒出だして尼にのます。娘小松は雲井が來しをうれしがりて、さまざまとかたらふ中に、「父母は保の家の約束を背きて、あながちに外へよめらせんと宣へり。さては我身はさらなり、父母もわろき名をや取り給ひぬべき。いかにせばよからん」といへば、雲井「おのれ參りてあれば、御心を苦め給ふまじ。此事よくはからひてん」といへば、娘はいさゝか心を慰めけり。雲井夜すがら小松がかたはら離れずつきそひゐて、とし比の物語などして夜をあかしつ。さて翌日になりて、志田の長者裝束う

ゑはしくいでたちて、従者に絹綾など臺につみたゑを數多もたせて入り來ぬ。磯田親子出でむかへて、奥の間に請じいれつ。志太がいはく「今日吉日にて候へば、いさゝか聘物奉りつ」といひて、懐より金とり出でて臺にすゑて、「これは小松殿の衣服の料にまゐらするなり。取納め給ひて券かきて給はりなん」といふ。磯田親子一禮して、「まづ」とて盃とり出でて、災の膳を志太が前にすゑて、さま〴〵の肴どもならべすゑて、長者夫婦黒良もかたはらに在りて、災を吸ひつゝ酒をのむ。家の内のもの、あるかぎり「めでたし〳〵」と祝ひて、ひとしく災を吸ひて、とり〴〵酒のみつゝのゝしる。娘はすさまじき事におもひて、物をだにいはず、樓に上りて雲井を近づけて、父と兄とのはからひを恨みてふづくみいふ。奥の間は、志太がかたはらに親子さしならびて、盃の數かさなりてにぎはゝしく[illegible]

にわたして、「聘物の金うけとりしるしの文かきて、印おして志太殿へまゐらせよ」といへば、黒良手にとりて、なほ災の椀を左の手に持ちて、うち吸ひつゝ盃とりて、又さら〳〵と飲み干しけるが、俄に眼をすゑてついたちて、扇うちひろげて大きなる聲をあげて「酒をたうべて、たゞゑうて、たんとこりんそ、まうてくる。よろぼひそまうてくる。たんな〳〵たりらゝ」と、うたひつゝ手をかきつゝ、さま〴〵に舞ひをどる。長者夫婦「こはいかに、狂氣しつるか。さなせそ」と制すれど、いかで聞くべき、心も空になりて舞ひをどる。婿の志太もしばし打守りてゐたりけるが、やゝ扇をもて拍子をとる。長者夫婦、志太が方を見れば、やゝ立ちて、これも同じく舞ひいだす。夫婦あきれてとゞむれども、手をうちはらひて、えい聲を出だして舞ひありく。常に[illegible]などいふものをも、[illegible]

る盃銚子膳のたぐひなど、こと〴〵くふみくだきて破りそこなふ。さて厨の方も表の方も、俄にさわがしければ、長者夫婦驚きて立出でて見れば、家の内にありとある男女ばら、おの〳〵鍋をかづき、すり木柄杓など手にとりて、聲をあげてたちまひてをり。長者あきれて「しやつら、もののけのつきたるにこそ」とて、かたはらなる箒とりて、かのくるひ舞ひをる男女どもを打つてまはれば、走り逃げつゝ猶舞ひてをり。磯田もあまりの事にあきれて、箒杖につきて立ちゐたりしが、家の内の者のこりなくおもしろくたちまふを見て、おのづから心うかれて、かの持ちたる箒うちさゝげて、こゝろならず、同じやうに舞ひいだす。妻はにが〳〵しとて、猶走りあるきて制してありけるが、夫が舞ひ出でつるを見て、又これもそゞろに舞ひいだす。男女[illegible]に手にあたる桶たらひ茶椀など、うちならしつゝ舞ひくるへば、さわがしき事物に似ず。

天　男　衣　1

黒良は、をれこたれ〳〵舞ひたりけるが、猶をどりながら頭にかけ入りて、櫃にかくし置きたる羽衣を取り出でて、うち着て舞ひすます。志太は、もち來れる二百兩の金を手にさゝげて、外のかたへ舞ひて出でけるが、かの金を大路にむきて、舞ひつゝ蒔きちらす。志太が下人ども、持ちきたる錦綾などをひき裂き破りて、おの〳〵肩にうちかけて主人に隨ひてをどる。この時娘は樓にありけるが、あまりに物さわがしければ、下り來て見れば、家の内のもの、父母をはじめ、しもべらまで酒に醉ひしれたるやうになりて、ひたすら舞ひてをれば、驚きて「いかなることぞ」と雲井に問へば、雲井うちわらひて「御こゝろをつかひ給ふ事なかれ。これはさるべきことわりなり」といふに、いよ〳〵不審はれず、「その仔細いかに」と問へば、雲井云ひけるは「あれは我もちきたれる茸を食ひ給へば、心ならず舞ひ給ふなり。かの茸は舞茸と申して、これを喰ひ給へば、心ほれ〴〵となりて、ほかに舞ひたるごとくおのづから舞ひまふ茸にて候。今御覧ぜよ、ひとり醒めて、もとのやうになり給ふべし。但し今日賭物をおくれて、わ君を志太が婿にせんといふを聞きて、おのれ此はかりごとを設けて、けふの盟約を破らせて候なり。扨わ君の御こころざしを遂げ給はんやうの、たばかりごとにて候」と云ふに、娘は初めて心おちゐぬ。志太と黒良は、大路に出でて舞ひをるを、一



村の者ども來て、不思議の事とて各立ちて見る。此時白良が家なる久も人の中にまじりて見ゐたりけるが、黑良が打ちかづきをる衣、よのつねの物ならず、もし我主の尋ね給へる羽衣にはあらずやと思へど、定めたる事ならねば、白良をよび來て見せましと思ひて、立てこみをる人をよけてこなたへ出づれば、雲井出で來て、呼びとゞめて「そこの主人の失ひ給へる衣は、我ただ今とりてこれにあり」とて、羽衣をとり出でて久にわたし、「とく持ち歸りて、主人にわたし給へ」といふに、久、おもひかけぬ事にて、打ちよろこびて、衣もちて足を空になして家へ歸りぬ。黑良は着たる羽衣をとられつる事をも知らず、そゞろにくるひてありけるが、日暮るゝ比になりて體つかれ果てゝ、家の内の者ども皆くた〳〵と成りて打倒れけるが、夜に入りてやうやく正氣ぞつきける。此日志太が家にても、尼がもち來たる茸をくひて、ひねもす家の内のもの、舞ひをどりて狂ひけるとぞ。世には思はずなる事もありけり。宇治大納言のしるし給へる今昔物語に、舞茸をくひたる尼どものそゞろに山を舞ひあるきし事を載せ給へり。是と同じものなるべし。其世には不思議なるきのこも有りけらし。



天羽衣上臈

天羽衣（あまのはごろも） 下

天の羽衣　下

かたみの石

三保が家は日々に貧しさ増りて、せんかたなげなり。さばかり大きなる家に、たゞ二人のみこもりをれば、家の内は大かた鼠のすみかとなりて、屋根は破れ、柱は傾き、壁は崩れて、庭には草たかく生ひしげりて、さながら秋ののらと荒れはてたり。祖先相傳のへたなき事よと、親子さしむかひて、やくとは音をのみなきをり、かゝるに、召使たる久息せきあへず走り入り「これ御覧ぜよ」とて、さし出すを見れば、さきに白良に奪はれし羽衣なれば、驚きて「いかにして持來れるぞ」と問へば、久、事のさまをくはしく語り出で、件羽衣を手に取り、おしいたゞきて云ひけるは「天人と申すは「身淨くして塵垢を受けず、身に光明ありて常に心よろこばしく、すべてにかなはざる事なしと御經にしるしあり」と、聖の御坊こそ宣ひしが、此羽衣かくわがもとにいたれるは、今より貧しきを轉じてさいはひを得べき瑞なるべし」といへば、白良も久も、とり〳〵おしいたゞきて　あたらしき布に包みて箱にをさめ、清きところにすゑ置きて、酒餅などすゑならべて拜す。けふはあまた立てたる藏どものうち、ひとつ賣るべく人にかたらひけるに、買人のかたより人あまた來て、此藏をこぼちとりて、礎などをも車に積みてもちていぬ。これにつけても悲しくて、母は涙ながらこぼちとりたる藏の跡に來て、さめ〳〵と泣きて、「父君のとばかり御心を用ひて、造りいとなませ給ひけるを、はかなく他人に賣りわたしぬる悲しさよ」といへば、白良も打見まはしつゝ、ともに涙をぞ拭ひける。此礎掘りとりたる跡に穴の大きくあきてあれば、「人陷らば危からん」とて、白良みづから鍬とりて、かたへの土をかきよせて、此穴を埋めんとしてこなたかなた掘りけるに、思はず石に掘りあてゝ鍬の先より火出でぬ。「何ならん」とて猶掘りて見るに、ひらめなる石あり。「何の料にかゝる物を、土の下に埋め置きつるにか」と思ひて土をかきよけて見れば、棊盤の形せる石なり。母近より見て「あな思はずや、これは父君の年ごろ棊にのみ御心をいれて弄び給ひけるが、唐國人の石棊盤といふをうつして、石工にいひつけて作らせ給へりし。此物死し給はざる一年ばかりさきより見えざりしが、扨は人に知らせずこゝに埋み置き給へるにこそ」といふ。白良「父の御かたみを土中におくべきにあらず」とて、久を呼びて、こ

の石菖蒲を取除て見れば、下に大きなる甕あり。其蓋の裏に文字見ゆれば、土を拂ひて讀み見れば、父の名をしるして『遺金一萬兩』としるしあり。甕の中に手をやりてさぐれば、ことごとく金なり。あまりのことにあきれて、母も白良も、しりゐに坐して目を見あはす。久、聲をあげて「これこそ父君の御遺物なれ。あはれかしこくもはからはせ給へるかな」と天を拜して悦ぶ。母も白良も、　の舞ひ足の踏所をおぼえず、此金とり出でてかはるがはる持運びて家にをさめつ。さて破れたる家を修理し、めしつかひなど再びかゝへ、昔の業をいとなみける。久ひたすら力を出して、萬かしこくふるまひければ、をさをさ昔にかはらず日ごとにいやましに榮えける。これまつたく三保の長者、あらかじめはかりて、我家施を好めばゆくすゑかならず貧しくなりゆくべしとて、妻子にだに語らで、かく金をば埋めおきけるとぞ。白良云ひけるは、「これは父の賜物ながら、かの羽衣をとりかへせし日にあたりて、此金掘出せしをおもへば、げにこそ天人の加護し給へるなり」とて、いよいよ羽衣をばたふとみて大切に納め置きけり。扨又白良が家にては、舞笄をくひて舞踊りける者ども、日くれて後はじめて正氣つきて云ひけるは、「これは雲井がもて來つる笄を食ひける故なるべし」とて、雲井を尋ねけれど、いづち行きけん影も見えず。娘の小松に問へば、「家に急ぐことあ



り、父こそとて歸りぬ」といふ。黒良はかの羽衣を取出でて舞ひけることを夢のやうに覺えたれば、こゝかしこと尋ぬれども羽衣のゆくへ見えず、大きに悔いけれど、せんすべなければ、さてやみぬ。娘小松ばかりは、聘物の行方なくなりて事とゝのはざりけるを見て、心のうちに喜びけり。志太の長者も夢見たる心地して家に歸りけるが、さてやむべきならねば又も日を撰びて、聘物おくり遣はすべしとぞかまへ居たりける。

初花手折るなかだち

さて月比を經て霜月になりぬ。此月は三保の明神の御祭とて、國のうちゆすりてその設をなす。祭の日は、ことさら參詣の人しげく行きかひて、錐を立つる所もなし。黒良この日衣服うるはしく出立ちて、御社に詣でて歸らんとする折柄、向より貴人と見えて、乘人に供人あまた付添ひて此御社をさして來れり。黒良此乘物の内を見れば、十五六と見ゆる娘の顔ばせよのつねならず美しきが、窓より顔を出して居り、思ひなしにや我を見るやうなれば、黒良臍心もうせて、「あはれ美人かな、かゝる人を得てこそ妻ともすべけれ」と思ひて佇み居けるほど、乘物は御社の方へ行過ぎぬ。遙かにひき下りて侍男の供せるあり。これは國の守の御内の者にて、黒良が知りたる男なれば呼びとめて、しばしものうち言ひて、「乘物に居給へるは何人ぞ」と問へば、かの男



答へて、「あれは北の方の御乳母の娘なれど、北の方いみじくいとほしみ給ひて、常に傍はなさず召しつかひ給へり。今日は北の方の御代りに、かの娘明神に參らるゝなり」といふ。黑良うちつけにいふべき事にしあらねば侍に向ひて、「おのれ密かに語らひ申すべき事あり、近きほどに我家に來り給ひなん」といへば、侍うなづきて別れて行きぬ。黑良は家に歸りても、かの娘のこと心にかゝりて忘れ難く、とかく思ひ煩ひて居けるに、二日ばかりを過して、かの侍來れり。此者は惡藤太とて心ねぢけたるえせ者なりけり。黑良人なき所に入れて、「かの乳母の娘、われに媒して給へ」といひて、金十兩を包みて渡しければ、惡藤太うちゑみて、「此事難からず、先づ文をやり給へ」といへば、かねて認め置きける文とり出でて「事なりなば厚く報ひ奉らん」と、いひて文を渡す。惡藤太「よき金のつるに掘りあてつ」と、ほくそゑみてさま／＼あらぬ追從をいひて別れて歸りぬ。此乳母の娘といへるは、常に北の方の傍に在りて娘のやうに、いつきかしづき給へば、惡藤太などは下ざまの者なれば、前にだに出づる事かなはず。まして國の守のおきて嚴しく、奧ざまは男などみだりに入ることを許さず。內外のへだて嚴重なれば、此文渡すべきやうもなし。黑良が方よりは、日々に人をおこして、「いかに／＼」と責むれば、惡藤太しわびて、おのが折々かよふ傾城に返事かゝせ



て、黒良がもとに持行きて見すれば、黒良手を額にあてて悪藤太を拝みて、「神無月ならぬに、出雲の神はこゝにおはしけり」と云ひて、又こゝら金絹など取り出でて渡せば、藤太、しすましぬと思ひて、ことよくいひておのが家へ帰りぬ。さて四五日過ぐれど便なければ、黒良心もとなくて悪藤太がもとへ文をやりて、「いかにかねて語ひ合せし事はたばかり給ひしにか、人見ぬほどに忍び入りてまし、とく導きて給へ、盗人にハやとがめん、その心し給へ」など書きてやりける。藤太が返事に、「よきひまあらば知らせ参らせん」とのみあれば、いよいよ心いられて日々に藤太が便をぞ待居たりける。こゝに志田が家にては、さきに聘物を贈り遣しける日、思はざることにて事とゝのはざりければ、此度は媒せる即仏尼にあつらへて、聘物の金絹銭など磯田がもとへ送りて、婚姻の日を契りて待ち居たり。この即仏尼は国の守のもとへも親しく立入りて、此の方もあつく帰依し給へることを悪藤太よく知りて居りければ、ある日尼がもとへ行きて絹二むらばかり出して「いさゝか志の布施なり」といへば、例の欲深き尼なれば目口ひろげて悦びてとり収めつ。悪藤太聲ひきくなして云ひけるは、「かの乳母の娘におのれ心をかけてあれど、相語ふべきよすがなし。御身は時々詣り給ひて、夜居のつとめなどし給へば、いかでほそ殿のかけがねをはづして、我をみちびきて娘が部



屋へ案内して給はりなん。事かなひなば金百兩を布施に奉らん」といへば、尼愈心迷ひてゐみまけて云ひけるは、「そはいと易かりなん。かの娘の部屋は持佛のかたはらなれば、おのれ一人だに心を得て物せば、忍び入り給はんに知る人あらじ」といふに、惡藤太大きに悦びて愈語ひ合せて別れて歸りぬ。扨その日となりて黒良がもとへ人をやりて、呼び寄せんと思ひけるが、例の心ひがみぬる惡藤太なれば、又思ひ返して「尼がいへるやうならば、娘が部屋へ忍び入らんに妨げする人もあらじ。さらば黒良には知らせず、われまづ忍び入りて一夜明しつべし。さて後に黒良に告げて忍ばせん事遅からじ。初花は先おのれこそ手折らめ」と、舌なめずりして日のくるゝを待ち居り、其夜子過ぐる頃、尼が寶鐸の音するを合圖と定めて、細殿をつたひぬき足して忍び入るに、常はつよくとざしつる戸もおすに隨ひてやすく明きぬ。入りて行けば、又戸をさしかためたる所あり、これもおすまゝにやがて明きぬ。寶鐸の音する方をたどりて、障子を明くれば、尼持佛にむかひて經よみてをりけるが、たち出でて聲ひきくなして隣りなる部屋を指さして教ふ。いふまゝに隣の部屋に入らんとするに、戸さしかたくて明かず。又尼が方へ來て戸の明かざるよしをいへば、尼たち來て娘が部屋の戸をほと／＼とたゝきて、「この戸あけ給へ申すべき事あり」といふ。「尼君にや、夜なかになぞ人おこし給ふ」といふ聲いとねむげなれど、娘が聲と聞きなしつ。さて立ちて戸を明くるさまなれば、尼はもとの持佛の方へ入りぬ。惡藤太戸を明くるよりとく内に入れば、ともしびきえて物のいろめも見えず、戸を明けつる娘にいだきつきて、顔おしつけて口のあたりをかいねぶれば、つきのけて「何事するぞ」といふ聲老いたる男の聲なり。藤太思ふにたがひたれば出でんとするを、兩手をさしのべて藤太が頸をおさへて、「ぬす人こそ入りたれ、をう／＼」と喚くに人々ともしびとりて走り來つ。惡藤太を捕へつるはめのとが夫にて此娘が父なり。よべ都より下りて宵より娘が部屋に泊りゐたるを尼は夢にだにしらざれば、例のごとく娘一人寐たるよと思ひて、みちびきけるなりけり。人々やがて惡藤太をからめて、守どののまへに引きすゑて糺問するに、藤太今は遁れん方なければ、尼をかたらひて忍び入りつるよしを申す。いかに思ひけん、黒良が事をばつゝみていはざりけり。尼も此やうすを聞くより、外の方へ逃げ出でけるが、くらければ道も見えず、誤つて庭の池にすべり落ちてぞ死にける。守「藤太をばまづ獄に入れてしづかに拷問すべし。尼はあるまじき媒して、人をみちびきたる事にくけれど、死しつればせんかたなし。死骸は親族のものへわたしつかはすべし」と宣ふ。尼が親族夜中にめされて、死骸を輿にいれて尼が庵へ舁き歸りける頃、夜はほの

ぼのと明けぬ。さて〳〵おもはずなる事よとて、とかくの事とりいとなみて、日暮れなば野邊に送らんとて、そのしたくをぞしたりける。

尼法師の娘の君

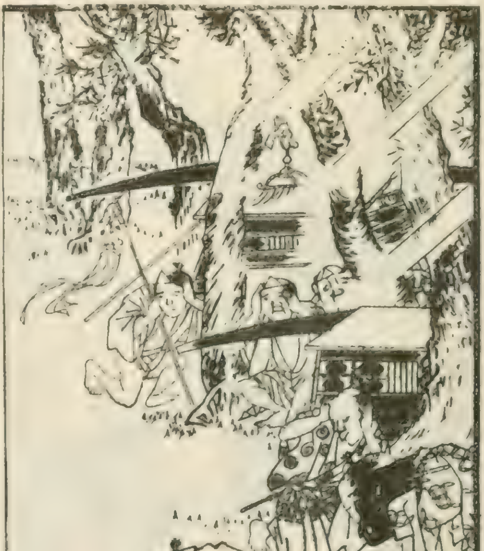
磯田が家にてはかゝる事をしらず、かねて志太とかたらひて、「今日は娘小松をおくりつかはすべし」とて、其用意したりけるが、小松がうけひかざるをしれば、母歎きて娘にいへるは、「おことは幼き時白良にやるべき約束しつれば、今さら外へやらんはおことが心にもそむき、又三保の家へも義もたちがたければ、父君を我いさめて、これまでの定をあらためて、こよひ三保の家へおことをおくりつかはすなり」といへば、娘は僞なりとはしらで、晝より用意して暮るるを待ちけり。さて酉の時過ぐる頃、小松を輿にのせて、男どもあまたつきそひて出で行く。田舍のならひにてかゝる時は、大きなる松をいくらともなくともしつらねてゆけば、晝にもおとらず道いとあかく照りわたれり。しかるに街を出でて十町ばかり行きぬと思ふ比、にはかに時雨ふり來りて、ともしつらねし松ども一時にきえぬ。雨は車軸を流すばかり降りまさりて凌ぐべうもあらねば、皆々森の中へ入りて雨のすぐるをまつ、まことにとこやみにて物のいろめも見えず。「家に歸りて火を取りて來ん」といへど、「供人にても家に歸らんはいむことぞ」といひて、森の中におしあひてをるほど、又あまたの人おとして、何物をかゝづき來て同じく森の中へ走り入りぬ。「さてさておそろしき雨かな。しばしこゝにて憩ひなん」といふ。くらければ何者なるかしれず、そのうちに一人が云ひけるは「あはれわりなきことをしつるかな。この森は昔より化物出でて人をなやますなりと、いひつたへつるを、よからぬ所へ入りたることよ」といふ。人々「さなり、されどかく人あまたあれば、化物もよも出でじ」[illegible]云ひゐたり。かゝるにたちまち[illegible]、[illegible]ごかすばかり吹き來れば、あなやといふほどに、頭の上にいかづちの落ちかゝるばかりの音して、車輪のごとき光りもの此森の中へ落ち來めり。「あなおそろし、例の化物こそ出で來たれ」とて、みな耳をおさへ目をふさぎて足を空になして逃げ行く。三町ばかり走りてふりかへりて見れば、光り物はたしかに森の中に落ちぬと見ゆ。「危きめをも見つることよ。さるにても輿の内なる人は如何になり給ひつらん、行きて見ん」といふもあり。「いや〳〵ゆきなば化物のためにくひ殺されなん。命にかふる寶はなし」といふもあり。[illegible]者もあり。その中に[illegible]たる者ありて、「あれ〳〵こよひ嫁入の輿を送り來て、輿をそのまゝに捨置きて[illegible]人に對していふべきことなし。とにかくに今一度森に入りて輿を取りて來ん」といへば、みな〳〵「ことわりなり」とて、各袴のすそ

か〻げて、よく支度して走り歸りて、おそろしけれど、森のもとに來りて伺ひ見るに、車輪の光も見えず、くらがりをたどりて、もと入りゐし所をさぐり見れば、輿はもとのまゝにてあり、戸をおしあけてさぐり見れば、娘はうつぶしに臥して居り。「さては最前のおそろしかりしにけどられて、かくなり給ひぬらん。いかにせん」といへば、「さりとて家につれ歸るべきならず、いづれにもあれ、志太の家へおくりて、かしこにて藥をも參らすべし」とて輿をかづきてもとのごとく警固して志太がもとへといそぐ。道にて志太が家の迎の者ども、松あまたともして來あひぬ。うちつれて志太が門を入れば、こゝかしこにかゞり焚きて、人あまたつどひて待ちつけゐたり。中門に輿を入るれば、志太の長者出でて輿をむかへて、奥さまへ舁せていりぬ。奥の間はともしひあまたともしつらねて、長者が父母盃を臺にするゑて、さまぐ\の肴どもならべて、

よろこばしくうちゑみゐたり。舁きいれたる輿をおろせば、女どももよりて、しづかに戸をひきあけて會釋しつゝ、「いざ、これへいらせ給へ」といへど、娘いらへもせず、輿よりも出でず。「あやし」とてともしび取りて、輿の内をてらし見れば、うつぶしに臥したる人あり。娘の君のやうには見えず。「こはいかに」と驚けば、長者あやしみて輿の内へ手をいれて引出だせば、小松にはあらず。思ひもよらぬ老いたる尼の死骸な



り。「わ」といひて、みなくく飛びのきてふるへゐたり。この死骸水に落ちたるものと見えて、はれふくれて目を開き舌を出しをるさま恐ろしさいはんかたなし。長者が父は耳しひたる翁にて、人々の立ちさわぐをさとらず。「何事ぞ、娵の君をとく出して座につかせてよ」といひさま立ちて来つ。この翁、目さへおぼくくしくてよく見えねば、たちこみをる人々をおしわけて、尼が死骸を見て、「娵の君、などさは耻ぢてうつぶし給ふぞ」といひさま、手をとりてひきたつれば、かのおそろしげなる顔の尼が死骸、ともしびにかゞやきて、立ちたるまゝ翁が肩にくらひつくべきさまに見ゆ。翁もはじめてあらぬものなりと知りて手を引きはなちて逃りにげぬ。尼が死骸よろくくとして倒れかゝりけるものか、前なる燈臺に乗りかゝりて腹を突破りてけり。水、腹のうちより迸りて、ありあふ人の目口へ飛びちりて、その臭きこと忍ぶべからず。長者こはくく近づきよりて此死骸を見れば、婚姻の媒せる卽佛尼なればいよいよこゝろえず、「いつの間に死にたるならん。いぶかし」とて送り来る者どもを呼びて大きに怒りて、「おのれら娵の君と偽り、あらぬ死人をもち来ること奇怪なり。これは磯田がはからひなりやいかに」と刀に手をかけてせためいへば、送りの者ども口々に答へけるは「家を出で候時に、御むすめをばたしかに乗物にめさせて候。しかるに途中おもはさる雨に逢



ひてしばし森の中に入りてしのぎ候ほど、あやしき光り物の落ちくるさまなれば、おそれて逃げ去りて、さて後ふたゝび森に入りこ輿を舁きてまゐりたり。さては嫁の君をば化物の見いれて取りて候ならん」といひて、色を土のごとくなしていふ。かゝるに人あまた中門に入り來て「われ〳〵は卽佛尼が親族の者どもなり、こよひ野邊送りする道にて、雨にあひてしばしこの森のうちに入りてあるに、あやしき光に驚きて逃げ去りて、ふたゝびたち歸り見てあれば、尼が死骸を入れたる乘物見えず、かたはらに人も乘らぬうるはしき輿の捨てゝあり。さてはくらがりにて、乘物をとりたがへられしとおぼえ候へば、所々さがしもとめて、これまで參りて候」といふ。この來る男どもを見れば、みな〳〵布の肩衣着て、額に三角なる紙の烏帽子をつけて、いま〳〵しきさまして、法師もうちまじりて、手ごとに鐃鈸金鼓鐸鈸など持ちて、見るだにいまはしき出立してをり。うとましければ「とく死骸舁きていね」といへば、淨衣着たる男、尼が死骸を見て聲をたてゝ「などて腹をばから突破りたる」といへば、「それはひき出だし見るとき、燈臺にあたりて斑のつきたるぞ」といへば、此男うちにらみて「かく斑つきたらん死骸はうけとりがたし。これはおもふに、この死骸の蘇生したるを、汝等怪みてつき殺しつろなるべし。我はこの尼が殃なり。生涯極樂往生をこそねがはれつ



るを、かく五體不具になり給へれば、佛となり給はん事かなひがたし。をばの尼の佛になり損ひ給へる報には、汝等に此世にて地獄を見せてん。見よ〳〵夜明けば守殿に訴へて、うきめ見せん」とはらだちいふ。家の内の者ども、此男が勢に大きにおそれて頭かきて、「いかにせん〳〵」といひてふるひをり。忠太がいはく「婚姻の席へ死人を舁きこみしだに人聞あしかるを、此うへ盥にめされて彼とあらそはば、いよ〳〵恥の上の恥なるべし。とにかくに彼を宥めて事なく死骸をもち歸るやうにせばや」とて、利口なる人をえらびてさま〴〵とわびさせて、葬送の料にとて金十兩ばかり出して與へければ、かの男やう〳〵鳴りやみて云ひけるは、「この死骸、家にてよく〳〵浴させて來つるを、かく樣なき物に汚れたれば、このまゝにて荼毘などせんには不便なり。盥に湯を給へ、浴させてもていなん」といふ。いよ〳〵いまはしく思へども、いなといはゞ、又おこりたつべくおぼえて、しぶ〳〵に盥を出して湯をいれさすれば、盥に死骸をいれてゆく〳〵とあらひて、手拭もてのごひ終りて、尼が衣を見て「これは汚れたり。新しき衣ひとつ給へ」といふに、せんかたなく娘のために設けおきつる紅の衣の袖の長きをとり出でてとらすれば、死骸にうちきせて又、「帯をもひとつ給へ」といふに、下につぶやきつゝ猶娘の帯を出してやれば、くる〳〵と死骸にゆひつ



けて、輿にかきいれながら打ちわらひて、「似も似つかぬ御おや、かたちは娵の君にて頭ばかり尼君なり。極楽へ娵入し給はゞ何佛をか聟とはし給ふ」といひて、輿を舁きあぐれば金鼓鐃など、ごほ〱どう〱と打ちならして「南無娵だぶつ〱」と大聲にさけびつゝ、門を出でていにけるとなん。

あまつをとめ

此者どもが出でていにたるを見て、志太の長者はじめて胸なでおろして、ほつと息をぞつきける。「さるにても娵の小松はいかになりにけん。親のもとへや帰りけん。おぼつかなし」とて、志田の長者めしつかひ人に磯田が下人どもをまねきつれて、家を出で走りて松うちふりつゝ、件の森に入りて見れば、むなしき輿ひとつありて小松は見えず。それより磯田がもとへ行きて見れば、磯田が家は国の守の郎黨あまた入りゐて、磯田親子を縛りて責めさいなみて居たり。

志太も驚きて、え内へ入らずためらひてやうすを聞けば、悪藤太が家に黒良がつかはしつる文ありて、その文に「御館へ忍び入らんみちびきせよ」と書きてありければ、悪藤太と云ひあはせて謀すべくたくみたらんと疑はれて、かくは郎黨の入り來るなりけり。猶かたへに隠れて伺ふほど、磯田夫婦黒良も縄にくゝられてひかれて行きぬ。おそろしければとく引返して家に帰れば、志太が父見るより、「さて〱よからぬ縁を結ばんとして、今宵の恥を見しことよ、婿の夜に死人をかづき入れたる事ためしなき凶事なり。かゝる不吉の娵わが家に迎ふべからず。あないま〱し」といひて、つまはじきすれば、志太もこよひの黒良親子がありさまをおもへば、小松が戀しきこゝ地もさめはてゝ、磯田と縁者のむすびせんはよからずと思ひきりて、これよりふたゝび小松が事はいひ出でざりけり。扨こゝに磯田が娘小松は父母に欺かれしとはしらで、輿に乗りて出でけるに、雨ふり出でて森の中に舁きすゑられける時、おそろしき音のしけるに、供人はいづち行きけん知れず、我も鬼にやくはれなん、おそろしとふるひゐけるに、思ひがけなく輿の前に女來りて、「おそれ給ふことなかれ」といふを見れば雲井なり。「あなうれし、そもいかにしてこゝには來つる」と問へば、雲井がいはく「今宵わ君を三保の家へ送らんとあるは、父母の謀りごとなり。まことは志太が家の娵にせんと計はれし事なり。おのれまゐりつれば、心やすくおぼせ、わ君の御心のごとく、三保の家におくりて參らせん。いざ給へ」とて小松を脊におひて、磯邊をさしてぞ走りゆきける。この小松が身の上はしばしおきていはず。かの三保が家は、年ごろの貧しきにひきかへて、にはかに涯分の富をなしければ、母悦びて一日白良にいひけるは、「わぬし年もおとなしくなりたるに、いまだ妻をむかへざること不便なり。

磯田が娘小松はいひなづけの契あれどもたのみがたし。まづ、しかるべき妻をかゝへて、子孫のさかえをもはかるべし」とて、かたち清げなる女を所々聞きあはせて呼びむかへけるに、此妾にならんとて来れる女、白良を一目見て、「あなおそろしや、生きたる鬼とはかゝるものをこそいふべけれ。身のかはゆければこそ、つかへ人ともなれ、此世ながらいかで鬼にそひぶしをせんや。おそろし〳〵」といひて逃げて帰りぬ。それより三人ばかり所々より妾を尋ねて呼びむかへけれど、みな白良が顔を見れば、わなゝきふるひて逃げて帰りぬ。白良もなかなか面目なくて、今はたえて妻をも妾をもむかへじ。生けらんかぎり、やもめにてあらん」とぞ心を定めていひける。ある日、白良母に向ひて云ひけるは、「天女より羽衣を預り奉りて後、一千日の日数もはや翌日となりぬ。明けなば三保の浦に至りて、天女の来降を待ちて衣を返し奉るべし」といへば、母「わが家ふたゝびもとの富にたちかへりぬるは、ひとへに此衣の御かげなれば、我もおことともろともに明日はかしこに行きて、天女を見奉りてよろこびを述べばや」と母子とも〴〵に夜の明くるを待ちて鶏とともに、家を出でて磯辺へとぞ急ぎける。いたりつきて見れば、松蔭に人かげ見ゆ。目をつけて見れば、女二人かしこにをり。いづくの蜑の子のまだきに磯にはおりたつならんとあやしめば、一人の女、白良を招きて、「おのれは雲井と申すものなり。これなる人は磯田の娘にて、わ君といひなづけありし小松女なり。ひがみたる親兄の詞に従はず、終身を三保の家によせんとの貞を守れるこゝろざしのいとほしければ、これまで具してともなひ来つ。家にともなひて夫婦の契し給へ」といへば、白良頭うちふりて、「おのれ男女のまじはりせんことは、ふつにおもひ絶えて候。小松どののこゝろざしは、やるかたなくうれしけれど、いかで我ごときかたは者に終身をまかせ給ふべき。御ためもいとほしければ、我家にはむかへ申さじ。別人に縁をもとめて夫とはし給へ」といへば、小松まろび出でて、白良が母の袖にすがりていひけるは、「雲井が申せしことのごとく、我身ひとすぢに道を守りて、けふまで父母の仰をそむきて、ひたすら昔の契にたがへじとのみ思ひさだめて候。されど今白良どののことをきりて宣ふうへは、せんかたなし。このうへは母君の御かたはらに置き給ひて、めのわらはのつらに見給ひてつかはせ給ひなん。このまゝ家に帰りては、これまでのみさをもいたづらになりて候」と涙を目にうけていへば、母は小松が手をとり顔打守りて、「さて〳〵うれしき心の人も世にありけり。世に見ぐるしき白良をいとふ心もなく、さばかり心おきて正しく一すぢに道を守りて、三保の家に身をよせんと思ひ定めたる、感ずるにあまれる心ざしにこそ。白良

たとひいかにいふとも、おことをばわれははなたじ。今よりながくつきそひゐて、つひのさまをも見とゞけてたべ」と、涙をこぼしてよろこべば、八松もともにうれし泣きにぞ泣きける。しばしありて白良母に向ひて、「天人の降臨、いかでかくおそきにか」といへば、雲井さしより「何事ぞ」と問ふ。母しか〴〵と語りて「羽衣を天宮に返し奉らんために、母子ともなひて來つ」といへば「さてはやんごとなき事なり。白良君には浴して來給へるにや」と問ふ。「けさのほどくらきより起出でて來つれば、いまださる事をせず」といへば、雲井がいはく、「天人は不淨をきらひ給ふこと經文にしるしありとききつ。いざや此濱の水にひたりて、祓除し給ひ、身上の垢を洗ひそゝぎて身を淸らかになしてむかへ給はゞ、天人の來迎近きにあらん」といふに、「げにさなり」といひて、白良衣ぬぎて濱におりたつ。雲井裳をかゝげ、裾ひきゆひて、ともに浪にひたりて、白き布とり出で丶白良が頭より手足にいたるまで、ねんごろにすり洗ふ。時に不思議や海水五色の色をなし、にほひわたりてかうばしき事たとへんに物なし。白良おもひけるは、「華厳經に『大海の中に香あり。牛頭栴檀と名づく』とあり。又、「雀頭薫陸迷迭などいへる香は海邊に生ず」と外傳の書にも見えたるはかゝるをいふにや」といひつつ、ひたすら浴してこれを飲めば、五體も肉をかへ骨を換ふる心地して、忽ち神魂あ



らたまりて、塵俗を出でぬる心地す。雲井よく／＼洗ひ終りて手をとりて岸にのぼす。母と小松とひとしく白良を見れば、あな思はずや、今まですこしも黒かりし顔かたちの雪かとばかり白く光りて、もがさの跡さへなくなりて、ちゞれ髪も漆をぬりたらんやうにかゞやきて、えならぬ匂さへくははりて世にためしなき美男子とはなりにたり。「あやし／＼」といひながらも、うれしきことは大かたならず。白良衣うち着て、人々の驚くを不審に思ひて、みづから海水に面をうつし見れば、我身とも覺えぬうつくしき人の影うつりぬ。よろこばしさいはん方なし。「あはれ「一咒を誦する人は皮肉退き落ちて別に新たなるを生ず」と經文に見えたるは、かゝる事にや。これ、ひとへに天人の御加護なり」と合掌禮拜して、をどりたちていさみをり。時に大空より紫の雲たなびきて、松が根に落ちぬと見えしに、かたはらに在りつる雲井ついたちて、かの雲にうちのれば、身うちより光明をはなち無量稀奇の相を現じ、冠釵瓔珞の粧うるはしく、微妙の聲を放ちていへらく「三保が陰德をあはれびて、禍を轉じて福となし、醜を以て美にかへつ。天神の人間を見ること報應すでにかくのごとし。小松が婦德、世の常ならねば永く偕老の契にたがはされ」と宣ふ。小松大地にうちふして、「さては下女の雲井なりと思ひしに、天女の現形し給へるなりけり。かしこくも馴れちかづき奉りしかた



じけなさよ」とて、手をあはせつゝふしまろびて泣きぬ。白良心肝に銘じて尊くおぼえて、かの羽衣を取つてさゝげ奉る。天女右の御手をのべてこれを取り給ひ、「ゆくすゑながく守護しつべし」と宣ふ聲は天樂にまぎれて、紫雲漸々に立ちのぼると見えしが、あしたか山や富士の高嶺の霞にかくれて見えずなりぬ。人々御あとあまたゝびふしをがみ、涙おとして手ひきあひつゝ宿へとぞ歸りける。これより小松母に孝養する事おろかならず、白良を敬ふことも大方ならず。常に三人大空を仰ぎて、天女の御德をいひ出でて、たえず拜しけるとなん。

ゐぬのこ

黒良親子は、獄屋のとらはれとなりてわびしき目を見て百日あまり過しけるが、つくづく思ひけるは、「我々三保が恩に背き盟約をさへ破りて、不信不義をふるまへるを、天の惡ませ給へるにやあらん」と、親子頭をよせて囁きあひける。その夜磯田が夢に見けるやうこそあやしけれ。たとはど廣き野原とおぼゆるところに、磯田たゞひとりたゝずみてありけるに、にはかに總身痒き心地すれば、肩ぬぎて掻きみれば總身一つらに毛おひてあり。不思議と思ひて見まはせば、わが身いつしか白き犬となりてはらばひゐつ。さて常のごとく立つ事かなはず、飢ゑて苦しければ、そこらあさりあるくほど、かなたに犬の聲す。走り行きて見れば、わが妻ならびに黒良も、ともに黒き犬となりて人にうたれて、かなしげなる聲して吠えてをり。さてより集りて泣きゐたるに、たふとげなる法師來りていへらく、「汝等貪慾に眼くれて、天命を恐れざりし故にかゝる身とはなりにたり。因果の道理は種をうゑて苗を生ずるがごとし」といふ。三人とも法師が袖にとりつきて、「食を給へ」といへば、法師ふところより紙につゝみたる飯をとり出して投げつ。うれしくて飛びつきてくらはんとするに、飯にはあらで、白き碁石なり。食ふべきにあらねば、頭をあげて見れば、法師笑ひて、「汝畜身ながら石の食ふべからざることをわきまへてあらん。さきに三保、汝が貧を憐み盤上に金を置きて汝にあたへし時、汝よろこびにたへず、來世犬となつて此恩に報ひぬべしといひしをおぼえたりや。盤上の金、汝が飢をたすけつるを、汝いかでその報をばせざりし。此石はその時盤のかたはらに置きたる棊子なり。汝石と金との差別を知りたりや。今黒白の犬と身をかへぬるも、盤上の恩にそむきつる罪ぞ」といふに、一身汗になりて答ふべき詞なし。法師如意を擧げて、「如是畜生、發菩提心」といひて、頭をしたゝかにうつ。いたさ忍びがたく吠えうめくとおぼえしが、夢さめて見れば、身は猶獄屋の内にあり。妻と黒良に夢にみつるさまを語れば、二人とも「同じ夢を見つ」といふ。いよ〳〵おそろしくおぼえて、年ごろの罪を悔いて、

これよりはたすら佛號を唱へて、未來の苦患をたすからんことを祈りつ。さて月をへて、公の吟味ありて惡藤太は殺さるべけれども、寬宥の政を以て罪一等を減じて遠き國へうつされぬ。黑良親子はもてる財どもを悉くとりあげ給ひ、獄を出だしてもとのごとく故郷へ歸さる。磯田親子、命ばかりはからうじてたすかりつれども、今は世わたりすべき術もなく、又夢中のさまを思ひつづくれば、世にかゝづらふ念もなくて、磯田夫婦は髪を剃りて墨染の衣に身をかへぬ。黑良はすべき方なくて、もとよひゐけるを、白良あはれがりて呼びていひけらく、「御身とわれと初生の時、親たちいひあはせて既に兄弟のむすびさせ給ひつれば、そこの落ちあふれ給へるを、おのれいかでよそに見ておらん。小松も常にそこたちのうへを愁へてなげきてあれば、いづれにつけてもおのれよきにはからひてん」といひて財をわかちあたへて、ふたゝびもとのやうにいとなみをさせつ。黑良今は白良が恩昔にこたへてうれしかりければ、これより別意なくかたらひて、よろづ白良が指揮を受けてまめやかにつかへける。磯田夫婦は白良が庭の内に、別に庵つくりしすませて他意なく養ひければ、夫婦も慙愧ながらしつつ、さてなん專修の念佛者となりて、世を過しける。久は年ごろ忠をつくせる者なりとて、今は家のあつかひをもやめさせて、うるはしき家造りすませて　わらはなどつかはせてたのしく老を養はせける。三保が家は海道第一の富家になりて、子孫安樂に榮えけるとぞ。これまさしく三保長者が陰德の報い、白良が信義の心、小松が貞操のするところながら、ひとへに天人の加護によれりと、語りつたへけるとなん。

天羽衣下終

うちよする駿河國しまつ鳥うど濱の物語は、あがうしの筆すさみになん。近き世に、かうさまのふみども、あまた見ゆめれば、いかでなどそゝのかし聞えつれど、老びとのわらはごとせんは、あぢきなしとてうけひき給はず、おのれさま〴〵にこしらへきこえて、あまたたびせため催しつるに、さらばとて筆とりたまへりけるが、四五日をすぐしてまゐりつるに、とく二巻のふみいできぬ。例のみやびたるさまはとり置きて、ひたすらさとび言をもて、かいつゞりたまへれど、さすがにきは〴〵しうをかしさはたぐひあるべうもあらず。さるをなまものの故しりがほに、此はしつかたをけがしぬること、かのやごとなき羽ごろものかたはらに、やれわゝけたるふるぎぬをしも、さしならべたらんこゝ地すめれど、うしのかゝるふみ作り給へることの、わりなうめづらしううれしければ、そのよろこびにたへずして、人わらへなるなまり聲して、あらぬことどもさへづりぬるも、もとよりさしすぎたる本性のさがなるべくや。

牛多楼
恒成
龍王

六樹園先生著

江南先生画

全部二本

文化五年戊辰正月發行

東都書肆

馬喰町二町目
西村與八

四谷内藤新宿下町
伊勢屋吉九郎 同梓

四谷塩町壹町目
佐久間屋藤四郎

新板

飛驒匠物語

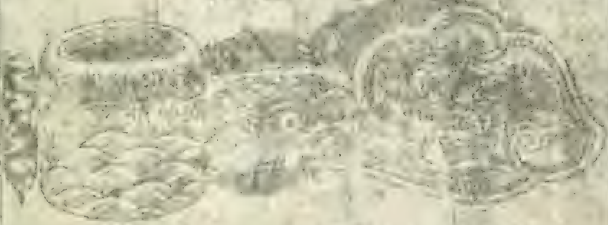
一

六樹園飯盛著

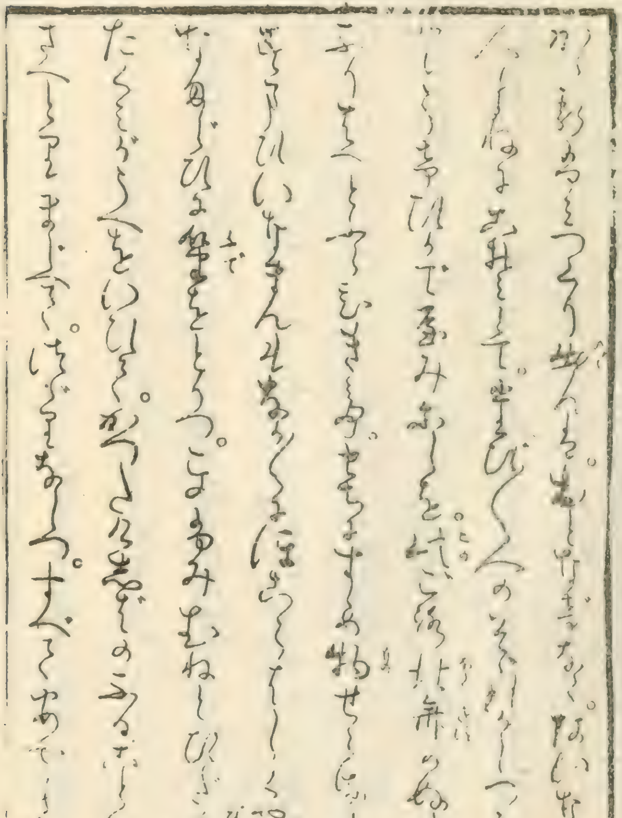
飛驒匠物語

全冊六十

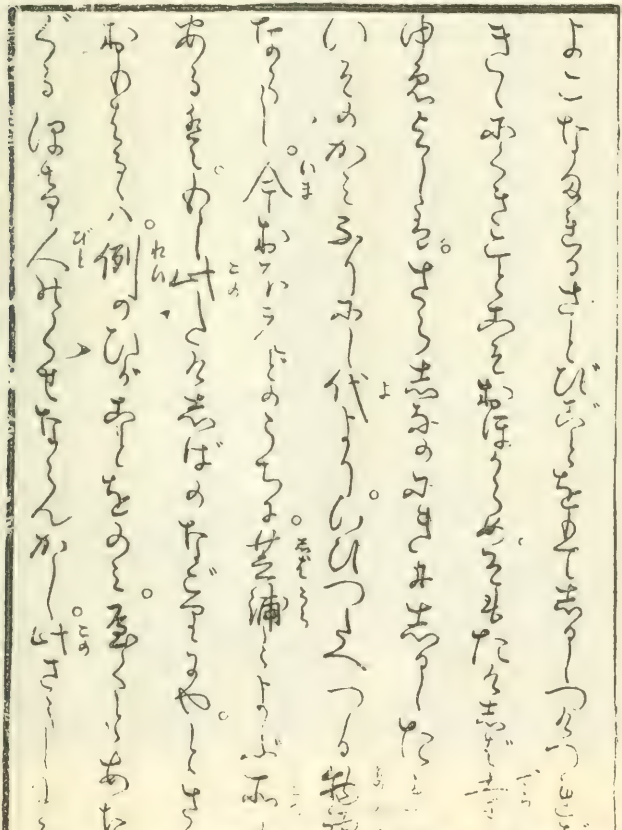
葛飾北齋畫



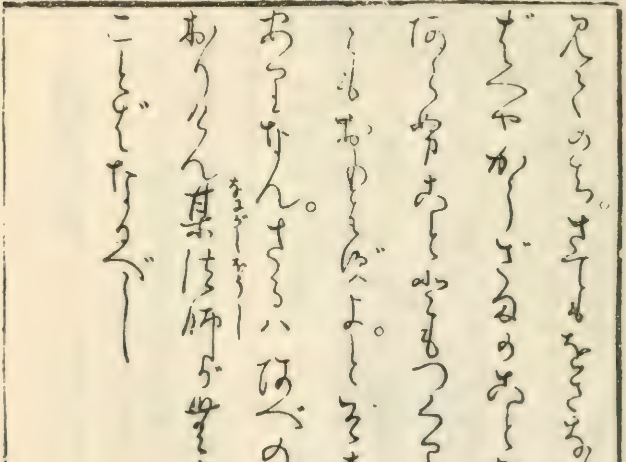
かゝる書(ふみ)つくり出でんは、おとなげなくあいなき人まねにこそとて、たび〳〵人のそゞのかしつれど、うけひかでやみにしを、此頃北斎(ほくさい)のぬしふりはへとぶらひ来て、せちにすゝめ物(もの)せらるゝに、すまひいなまんもなかく〳〵にほこらはしくやと、なまじひに筆をとりつ。此のふみむねと飛騨人(ひだびと)のたくみがうへをいひて、且(かつ)たけしばのふること



をさへとり交（まじ）へてつゞりなしつ。すべてあやしうよこなまれるさとび言（こと）をもて記（しる）しつけつれば、聞きにくき事こそおほからめ。そもたけしば寺（でら）のゆゑよしは、更科（さらしな）の日記にしるしたれば、いそのかみふりにし代（よ）よりいひ傳（つた）へつる物語（ものがたり）ならし。今おほえどの中（うち）に芝浦（しばうら）とよぶ所のあるは、もし此たけしばのなごりにやとさへ思はるるは、例（れい）の僻事（ひがごと）を



のみやくとおなぐるほけ人の辯ならんかし。此さうし讀み見てのち、さてもをさなくはしたなき心ばへや、かうざまの事にしも心をいれて、あらぬ事ども作りひがめて、かどやかしとも思はずよとそしりをこづく人もありなん。さるはあべのに隠れてむしろ織りけん某法師がむかしをも、え知らぬ人のことばなるべし。六樹園



更科日記に云く、（菅原孝標朝臣の女の筆なり、孝標は菅原道眞公五代の孫なり。）いかなる所ぞと問へば、これは古たけしばといふさかなり。國の人のありけるを、火たき屋の火たく衞士にさし奉りたりけるに、御前の庭をはくとて、「などやくるしきめを見るらん、わが國に七つ三つ造りすゑたる酒壺にさしわたしたるひたえの瓢の、南風ふけば北になびき、北風ふけば南になびき、西ふけば東になびき、東ふけば西になびくを見で、かくてあるよ」と、ひとりごちつぶやきけるを、其時の帝の御むすめ、いみじうかしづかれ給ふ、たゞ一人御簾のきはに立出で給ひて、柱によりかゝりて御覽ずるに、此をのこのかくひとりごつをいとあはれに、いかなる瓢のいかになびくならんといみじうゆかしく思されければ、御簾をうちあげて、「あのをのこ、こち寄れ」と召しければ、かしこまりて、勾欄のつらに參りたりければ、「いひつること今ひとかへり我にいひてきかせよ」と仰せられければ、酒壺のことを今ひとかへり申しければ、「われ率ていきて見せよ、さいふやうあり、」と仰せられければ、かしこくおそろしと思ひけれども、さるべきにやありけん、負ひ奉りてくだるに、論なく人追ひて來らんと思ひて、その夜勢多の橋のもとにこの宮をすゑ奉りて、勢多の橋をひとまばかりこほちて、そ

れを飛びこえて、この宮をかきおひ奉りて、七日七夜といふに武藏の國にいき著きにけり云々。いはんかたなくて、のぼりて御門に、かくなんありつると奏しければ、「いふかひなし、そのをのこをつみしても、今はこの宮をとりかへし、都にかへし奉るべきにもあらず、たけしばのをのこに、いけらん世のかぎり武藏の國をあづけとらせて、おほやけ事もなさせじ、たゞ宮にその國をあづけ奉らせ給ふ」よしの宣旨くだりにければ、この家を内裏の如くつくりて住ませ奉りける家を、宮などうせ給ひにければ、寺になしたるを竹芝寺といふなり云々。按ずるに、此たけしばの故事を記せる物管見にいまだ見及ばず、將門記に郡司武藏武芝といふ者あり、これがことならずや。

目録(もくろく)

すみなは　本文墨縄(すみなは)が匠(たくみ)の道(みち)に修練(しゆれん)せる事をあらはす。

蓬莱(ほうらい)の山(やま)　墨縄仙界(すみなはせんかい)にいたりて道の奥をきはむる事を記(しる)す。

たけしば　山人花見(やまびとはなみ)に出でて廣岡(ひろをか)が狼藉(らうぜき)にあひしより墨縄(すみなは)山人はじめて對面(たいめん)するまでを記(しる)す。

ひろをか　廣岡嫗(ひろをかうば)をとらへ置きて殺さんとするを松光(まつみつ)たすけておとしやる事。

いしずゑ　船主(ふなぬし)が娘(むすめ)山人(やまびと)をしたふ事。

うきふね　飛騨(ひだ)の匠(たくみ)がつくれる舟おのれと行く事、ふねの綱きれて山人むすめを見うしなふ事。

よめれ君(きみ)　船主(ふなぬし)山人(やまびと)を壻(むこ)にせんといひて後に出家(しゆつけ)するまでを記(しる)す。

夢のたゞち

都のぼり

びさもんてん

よゐの法師

せたおとし

から猫

なのじろ車

帝の御むすめ女一の宮ひろ君の御夢に山人におひ給ひてより戀ひおこがれさせ給ふ事を記す。

墨縄山人旅のやどりにてあるじが殺されんとするを助くる事。

墨縄百濟人と藝道を試みる事、墨縄がつくれる毘沙門天帝の御悩をいやし給へる事。

山人ふるさとの酒がめのひさごの事をいひ出でて歎き居けるを女一の宮御覧じて物語せさせ給ふ、それより山人姫宮の御許へしのび通ひてちぎり語らふまでを記す。

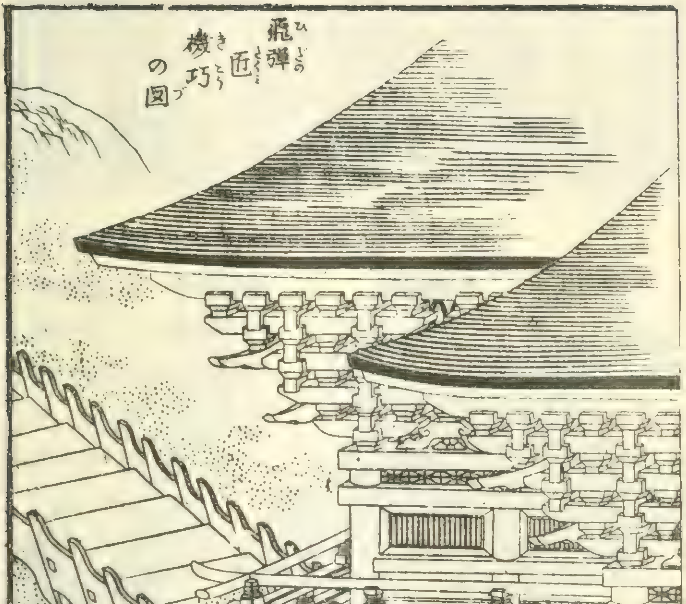
山人姫宮をぬすみ奉らんとして修行者とたゝかふ事、松光勢多の橋の板をひきはなちて逃下る事。

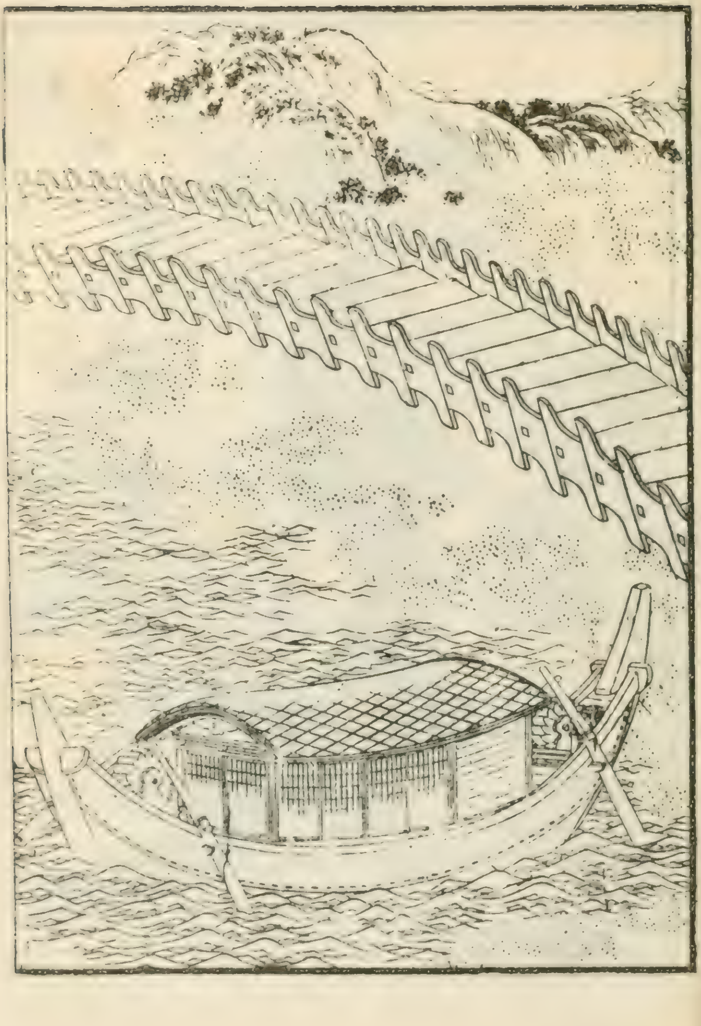
山人松光旅の宿にて盗人と疑はれて責めさいなまれけるを不思議に命たすかる事。

山人夫婦ふたゝび都にのぼり行く事、たけしば寺に船主法師おこなふ事、墨縄山人姫宮終に仙となりて去り給ふことを記す。


阿艶羅斯親
飛弾の匠


偉儺誰能陀倶
弥柯該志須弥
儺倫旨我那瞽
摯抱例柯柯護
武預梱抱羅須
弥儺儲


飛弾匠機巧の図





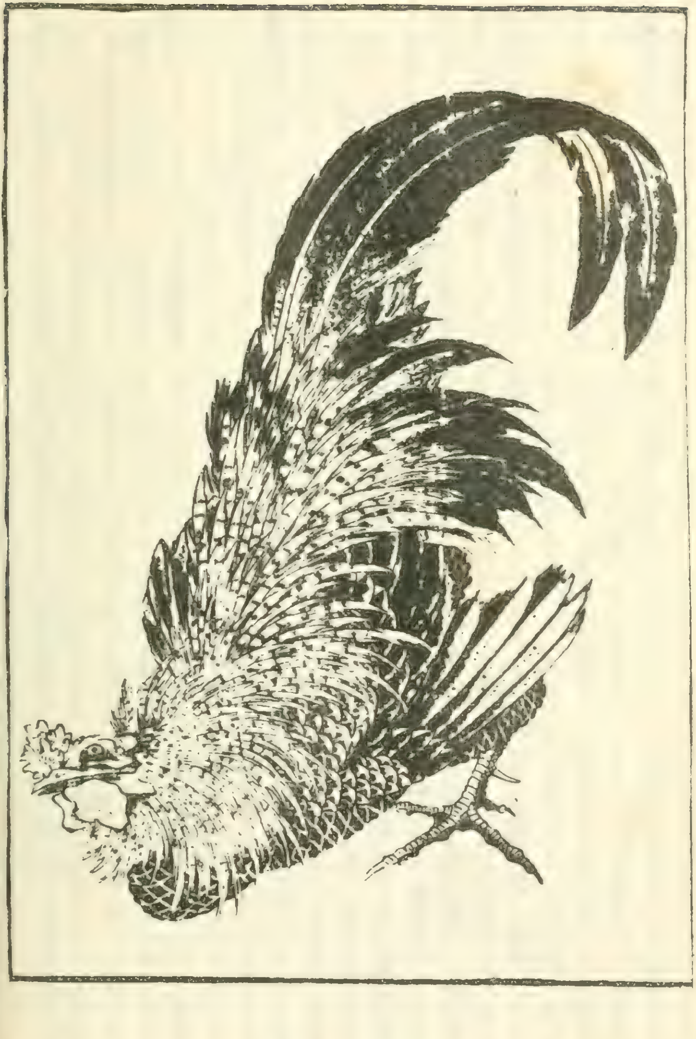


斐陀匠物語巻之一

○すみなは

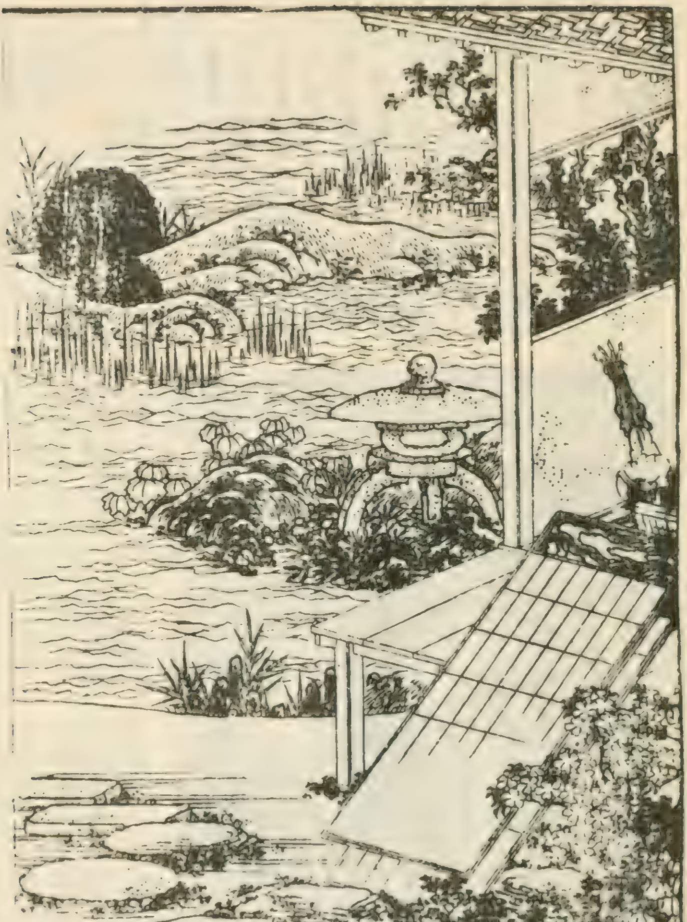
斐陀の匠とは人ひとりの名にはあらず、いにしへ飛驒國よりは庸調をたてまつらず、里ごとに匠丁十人を出して、おほやけの造營をつとめ營みしなり。貞觀の比は、一國より百人を召されて、朝堂院神泉苑などつくらせ給へる事國史に載せたり。今ここに記しつるは、あまたありし飛驒人の中に、すぐれて機巧に妙にして、其術神に通じて、天地造化の不可思議なるをうたゞ雕鑿のうへに出し、木頭を以て鳥となし、板片を以て馬をつくりて、一世の人を驚かせしかしこき匠夫が物語なり。その時代はたしかに聞きつたへず、いづれの御時にかありけん、斐陀の國に猪名部の墨繩といふ者ありけり。父母ははやくなくなりて、おのれ一人ぞ住みける。此國のならひなれば、田かへし耘るいとまには、鋸鑿をとりてひたすら工匠の業をならひけるが、人にすぐれてめでたく作りなしければ、老工の輩もことごとく感服して、眞の良工なりとほめのゝしりける。墨繩ますます精神をこらし修練しければ、今は左右なき此道の親となりぬ。あるは鶏をつくれば、まことの鶏これを見て兩翼をひろげて飛びかゝり、鼠をつくれば、猫きたつてこれを捕りなどして、さまざま妙なる事どもありければ、遠近をいはず人これを慕ひて、調度玩物の具などあつらへ物する者、門前に市をなしける。されど心まがれるもの、又權勢を以てもとむる者にはふつに答へだにせず、貧人老夫などの乞へるには、やがていふまゝに作りてぞ與へける。その比郡司にて紀の武役といふ者あり、慈悲のこゝろなく、財を貪りて常に農民をかすめあなどりて、ほしいまゝにぞふるまひける。この武役酒を好みて飲みければ、盃ひとつを墨繩にあつらへ作らせんとて、從者をもて言ひおこしける。墨繩常にかれが惡行をにくみをりければ、とみにもつくらず日を過しけるに、武役腹立ちて、「この小冠者め、郡司をもはばからず、しか侮りざまにもてなすこそ奇怪なれ」とて、從者どもにいひつけて、「とく搦めて來よ」といひつけて遣りつ。從者等墨繩が門の前にいたりて大聲にいひけるは、「郡司の召さるゝぞ、疾く出でよ」と聲聲によばはりけれど、ふつに答へざれば、鞋のまゝ床にかけのぼりて、障子ひきあけて入らんとするに、いかにつくり置きけん、障子おしあくるとそのまゝ、從者どもがふみゐたる疊床ともにさかさまに覆りて、五人の從者どもことごとく床の下に落ち入りぬ。床の下はふかく穴を掘りてあり

ければ、上るべきやうもなし。はじめの勢にも似ず、大に恐れわなゝきて、空をあふぎていひけるは、「我々無禮をいたせしは、みな郡司のいひつけにて候。いかで命たすけ給はなん」と聲々にわめく。其時最縄が聲にてから〳〵と笑ひて、階子をおろしければ、これにとりつきて上り來て、みな〳〵最縄が前に手をつきて言ひけるは、「御身郡司のもとにいたり給はずば、われ〳〵此上、にいかなるめをか見候はん。あはれ御徳にかしこにいたり給ひて、われ〳〵がうきめ見んを救はせ給へ」といへば、最縄がいはく、「われは行かじと思へど、そこ達のいふ所心ぐるしければ、さらば行きてん」とて、さきに立ちて歩めば、從者等はよろこびて、しりに立ちて行く。郡司はひりに立ちゐて、最縄を見て眼を大きくなし、額にすぢを出してにらむ。最縄しづかに座につきて、「何事の候て、かく火急には召されつるぞ」といへば、郡司いきまきて、「我あつらへやりし盃川をふれど作り出でず、汝郡司をばいかなるものと思ひて、さやうに侮りざまにはもてなすぞ。いでおのれがしやつら打ちはりて腹をいん」とて、つか〳〵と寄らんとす。最縄ふところより包みたる物とり出でて、うちさゝげて、「もとめさせ給ふ盃はこれに侍り。おのれに恥見せ給はゞ、盃は此所にて打破りすて候ひなん」といへば、郡司すこし顔をなほして、「さては盃は狭くつくれりとや。さらばそれ作れる料に、この一拳はゆるしつかはすなり」といひて、盃手にとりて、「かさねて我いひつけん事をなほざりにものせば、めに物を見せんずるぞ。今は用なし、疾くかへれ」といひて、最縄をおひ出しやりて、盃をよく〳〵見て、「あはれかしこく作りてけり」と、手もはなたず見て居たるに、折柄となりの郡の郡司の入來りけるを、出居にとほして物語して後、かの盃とり出でて、「これは今日はじめて得たる物にて候。これにて酒ひとつ參らせん」とて、やがて酒とり出してすゝむとて、先おのれ盃手にとりて、女の童につがせけるに、いかなるにか、此盃にはかにおもくなりて、ふと手をはなちて落しければ、女の童をうちしかりつゝ、又盃を手にとりて酒つがせけるに、石などを持ちたらん心地せられて、え持つにたへで、又うちかたふけてければ、酒ほとばしりて疊皆ぬれぬ。客なる郡司もおどろきて、同じく取上げて酒つがするに、盃かたむきて酒は皆こぼれぬ。左右の手に持ちて酒をつがせけれど、酒を入るれば盃おのれとさかさまにかへりぬ。力を手にいれて、いかで傾けじと構ふれど、大力の人の來てひきかなぐるやうなる心地せられて、幾度もさかさまに打ちかへりければ、あるじも客もたゞあきれにあきれてぞ居たりける。郡司大に腹をだてゝ、「かやつ我を弄して、かゝる物つくりて與へつる憎さよ。いかに郎等ども、彼とらへて來」といへば、はじめの度にこりた





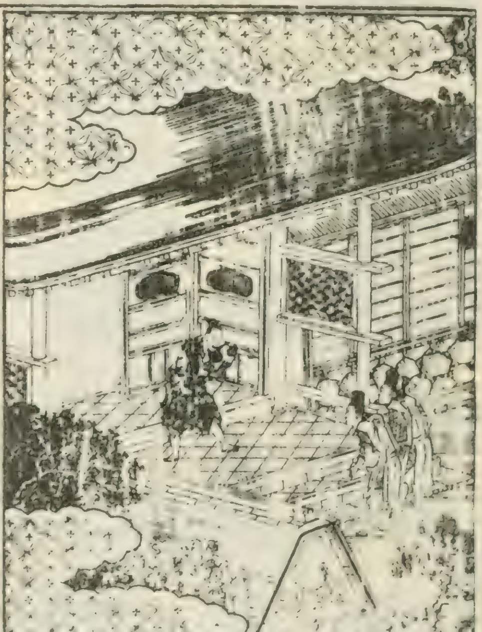

郡司が郎等
匠を捕へんと
来りて



れば、皆しりごみして行く者なし。客の郡司がいへるは、「我によきはかりごとあり。かれ機關をもてほこり居れば、こなたも又彼に敵すべきものを出して彼を試みつべし。吾郡に檜前松光といふもの候。この國にはならぶ者なき工なれば、かれを請ひて、墨縄にあはせて、其勝劣をこゝろみ給へ。墨縄負けたらんには、かれが造作の具を奪ひて、此後工の職をとゞめ給はんには、かれが驕にはかぎりなき恥に候はん」といへば、郡司よろこびて、「さらば疾く松光を誘ひて來給へ」と契りて、其日はわかれぬ。一日を過して、隣の郡司一人の男をゐて來つ。うち見れば、手斧頭にて才槌頭なり。歯は鋸に似て、鼻は鐵槌のごとし。げに天骨を得たる道の首長とは見えたり。郡司よろこびて、「いかで墨縄におくれをとらせて、恥見せて給へ」といへば、松光あざわらひて、「およそ天下に、おのれにまされる工ありとも存じ候はず。その墨縄め、早く名は聞及びて候へども、いまだ對面は仕らず候。仰なくとも、「出であひなば面恥かゝせて候ひなん」と、かねて存じて候へば、さいはひの折にて候」と、わきをかきていふ。さらば諸共にとて、連れだちて行く。墨縄がもとにいたりて見れば、賤めく軒ははなれて、別に小き家つくりて住み居り。春の事なれば、庭の樹ども花咲きて景色よし。さまで物ずきせる家居ならねど、いまめかしく作りなし



たり。案内すれば、墨縄たち出でて、一禮してともなひて入りぬ。隣の郡司墨縄にむかひていひけるは、「これなるは檜前 松光とて、我近きわたりに住める者なり。そこと業を同じうすれば、對面にいれんとてともなひ來つ」といふ。墨縄、「さては同職の人にておはしけるか」とて、懇にあへしらふ。さて盃とり出でて、「寒餉何ばかりのみさかなも候はねど、一つきこしめさばや」といへば、武俊ふところより墨縄がつくりたる盃とり出でて、「これにてはじめられよ」とて、まへに据ゑければ、墨縄みづから銚子とりて注ぐ。武俊目もはなたずまもり居るに、常ざまの盃のごとく異なる事もなし。飲みをはりて武俊にさすに、とり上ぐれば、墨縄たちて注ぐに、いさゝか酒こぼれず、常の盃にたがはず。武俊墨縄にむかひて、「この盃さきに贈られし時、酒をつけばたちまち覆りて、酒をこぼしぬ。いかなる事にか」と問へば、墨縄、「いかでさる事さふらはん」と答へて、そら知らぬかほを作れば、武俊いふことなくて止みぬ。さて人々かはる／＼ひきうけて飲むほど、松光すゝみ出でていひけるは、「工匠のわざは家つくるを以て第一とはすなり。そこには機關をもて人の目をおどろかし給ふと聞く、いよ／＼左様にや」といへば、墨縄うち笑ひて、「宣ふがごとく、機關は不抜なり、されど家をつくらん事は甚だやすし。いかなる大廈高堂なりとも、曲尺のうへを



出でざれば、未練の人もよくこれを作る。機関は小刀を以てすれども、曲尺をはなれて作りなせれば、尋常の拙工が類はなし得ること難かるべし」といふ。松光がいはく、「おのれも小刀の細工は人に負くべしともおぼえ候はず。今日こゝに参りて候は、そこと匠の道をくらべて、負けたらん方は、此後弟子となりて仕うまつるべく存じて候。いかに試みて見給はんや」といへば、墨縄がいはく、「人ときしろひ争はんは、おのれが好む所に候はず。此儀においては許し給はるべし」といふ。松光心に思ひけるは、「さてはきやつ、おのれに及ばざるをはかり知りて、謙退にかこつけて勝負をのがれんとするなり」と思ひて、又いひけるは、「且は稽古のためにも候へば、ひたすら互に手並の程をくらべたく候」といふ。二人の郡司もとも〴〵催せば、墨縄せん方なく〳〵、「さらば仰せにまかせてん、何事をなして勝負を定むべき」といへば、松光ふところより木もて作れる蟹をとり出していひけるは、「是はおのれ多年おもひを積みてこしらへ作れる物なり」といひさま、蟹の腹なる枡のごとき物をよくねぢて、畳の上におけば、此蟹足を動して走る事、さながら生きたる物のごとく、郡司等興に入りてほむれば、松光したり顔して、「此蟹にくらぶべき物作り給はゞ見せ給へ」といふ。墨縄、「われも都人の所望によりて蟹をつくりて候。見せ参らせん」とて、箱ひとつ取出し



て松光が前に置きつ。松光盃をとれば、蟹おのれと躍り出でて走る。人々目をつけて見れば、此蟹壁を這ひのぼりて、泡を吹きはさみを上げつゝ、天井をさかさまに這ひてつたひ行く。しばしありて、又壁をつたひ下りて畳の上を走る。墨縄箱を取つて蟹のまへにさしつくれば、躍りて箱のうちへ飛び入りつ。二人の郡司等あざみおどろく事大方ならず。松光まづ始のたびに負けぬれば、少し赤面したりけるが、へらぬ體にていひけるは、「機關は小児の玩具なれば、たくみなるも世に用なし。これを見給へ」とて、きぬに包みたる物をとり出でて打開けば、舞樂の蘭陵王の面なり。見るよりおそろしく身の毛よだちて、郡司等ふたゝび面をむけず。墨縄うち見て、「まことによく作られたり。おのれも戯れにさきに作り置きたる物候」とて、これもきぬに包みたる物をとり出でて、紐解きて打開けたれば、たゞいま切りたらんとおほゆる、年五十ばかりと見ゆる女の頭なり。何とやらん血くさき心地さへすれば、郡司等は見たにやらず、あなた向きてをり。松光手にとりあげ見て、「これは作れる物とは覚え候はず、まさしく女の頭に候はん、いづれより取出で給ひし。あないまくくし」といひてさし置きければ、墨縄がいはく、「もとより真の頭にては候はず。おのれが作れる所なり。内は空にて錦を入置きたれば、ふりて見給へ」と



いふに、取上げてうちぶり見れば、鈴の音ころ〳〵と鳴りければ、はじめて作れる物とは知りぬ。松光さばかり張だましひなる男なれども、此細工におどろきて、とても我此者の上に立ちがたしと思ひけり。扨いひけるは、「此家はそこ一人してつくり給へりや、ほかに助けつくれる工匠も候ひきや」と問へば、墨縄がいはく、「かばかり小き家ひとつ作らんに、人の手をかるべくも存じ候はず。但しこれは樓にて、常の家には候はず」といふを、松光いぶかりて、「これを樓なりと宣ふはいかなる事ぞ」と問ふ。墨縄つゝたちて、長押めく所にありしくさびを引抜きて、「さば御覧ぜよ」といふほどに、此家おのづから上ざまにあがりて、地をはなるゝ事一丈あまりになりければ、庭に植ゑたる梢どもも、目の下に見ゆるやうになりぬ。郡司はさらなり、松光も膽を消して、あきたる口をふさぐ者もなし。「さてもめづらしき上手の匠かな」とほめ思へり。「扨、何の料にかくはつくり置き給ひし」と問へば、墨縄がいはく、「これは火災をのがれんとの爲にて候。おのれが家貧しくて人すくなく候へば、火災あらん時、調度衣服のたぐひ持ちはこぶべき人も候はねば、もし近き所に火出でたらん時には、此家を土の中に引入るべくつくり置きて候。かく樓のやうに高やかに上り行くやうに作り候は、夏の比涼とるべき爲にまうけて候。此家夜のみつくりて、わたり近き人にも、かやうの機關設けたりし事は知らせ申さず。もし人知りなば、うるさく集ひ來りて、見る人おほかるべく存じ候て、夜のみ一人して、十日ばかりに作りたてて候ひき」といふ。「扨ち興ある事にこそ候へ。さらば搖り下げて見せ給へ」といふに、墨縄ひとり樓を下りて、何事をするにかあらん、しばしありて、「さば引下げて見せ奉らん」といふより、又此樓しづかにさがりもて行きて、土の中へ入る事一丈ばかりして止まりぬ。まことに常闇にて、いにしへの穴居といふものもかゝるにやとおぼえけり。さて又ゆり動きてあがり行くやうに見えしが、やがて常ざまの家とひとしく成りぬ。松光かしらを疊にうちつけて、「おのれ智慧あさく、君が百が一に足らざる才を以て、これまでうしろごと申してそしり申せしは、罪のがれんに所なくおぼえ候。今よりながく御弟子と成りて、道の修行仕りたく候」といふ。墨縄うち笑ひて、「おのれ人を敎ふるはかりの才覺は候はねど、しか宣ふ上は、さとり明らめたる程の事は敎へ奉りてん」といふ。郡司武俊も、はじめは惡みて來りけるが、墨縄が業の巧なるに心折れて、まことに凡人にはあらざりけりとて、舌をまきてぞ歸りける。これより後墨縄が名いよ〳〵世にひゞきて、人知らぬ者なかりけるとぞ。

○蓬萊の山

それより松光は墨縄がもとにをりて、其道

の奥ある事どもをならひて、他事なくたのみてぞ仕へける。或日墨縄良材を得んとて、松光をともなひて山に入りけるに、道にまよひて山路ふかくわけ入りけるに、切岸そばだちて、下は千仭もあらんと覺えたる谷ある所に出でぬ。むかひの岸はわづかに三間ばかり隔てたれど、わたり行くべき道もなし。しかるに、むかひの岸に年を經たる槻の木立てり。「かれを伐りとりたらんには、これにまさる良材あらじ」と松光がいへば、墨縄、「げに我もさおもへり。いで此谷に橋うちわたしてん」とて、松光に負せたるつゝみ取りてひき解けば、中に管のやうなる物いくらともなく入れおきたり。それをつぎ合せつれば、階子のやうなる形とはなりぬ。墨縄かの階子やうの物をとりて、むかひの谷へむけて端の方を投げければ、一つの橋とはなりけり。「我につゞきてわたるべし」といへば、松光しりに立ちて行くに、大方あやふき事なし。げに山路にはかゝる物こそ用をなしけれとて、松光いよ／＼墨縄が用意をぞほめける。さて打ちわたりて、かの槻のもとにいたりけるに、あまりに疲れたれば、しばし樹の根に尻うちかけて休むほど、かなたにて笛の聲すなり。かゝる深山に何者か入來りけんとて、あやしみ見れば、草刈童の十ばかりなるが、鎌を背におひて笛吹きならしつゝ來り、墨縄を見て、「そこは此國の匠と聞えたる猪名部の墨縄ぬしにおはするにや」といふ。墨縄、かゝる童のいかで我名を知りたるならんと、不思議ながら、「しかにて候」といへば、童がいはく、「此奥山に住める人あり、そこを待給ふ事ひさし。今日こゝに入來り給はんたれば、おのれに、先づ行きむかひて其由しらせ奉れと宣ひき」とて、笛のしりして、「此道より折れて行き給はば、たゞかしこに到り給ひなん。おのれは草を刈りて後跡より參らんずれば、ともなひ往きがたし」といふ。墨縄心得ざれば、「その逢見んと宣ふ人はいかなる御方にか」と問へば、童、「まづかしこに行きて、其子細を問はせ給へ」といひさして、又笛うち吹きつゝ山をこえて行きぬ。松光がいはく、「かゝる深山に人住むべき道理なし。一定僊人などいふ者なるべし」といふ。「何にもあれ、いざ行きて見ん」とて、墨縄さきに立ちて行く。所々に熊狼などゐたれど、みな耳尾を垂れてむかふ事なし。坂山をのぼり谷をこえて行くに、松柏しげりたる中に大きなる門見ゆ。ちかづきて見れば、扉は金をのべて作りて、瓦は玉を以て葺きたり。墨縄松光とともに驚き見て、「此山中にかゝる家居ありとも聞き及ばず」とて、うちながめたたるに、扉おのづから開きて、童のいたく老いたりと見ゆるが出來り、墨縄に向ひて、「あるじ和殿を待ち給へり。いざ」とて、みちびきて入る。何とやらおそろしき心地すれど、みちびくまゝに從ひて入れば、中門あり、其美麗なる事いふべうもあらず。松

光をば、「こゝにありて待つべし」といひて、墨縄ばかりをともなひて入りぬ。出居とおぼしき所に坐してをれば、奥の方より履の音して出來る人あり。頭をあげて見れば、髪髭は白銀の針をうゑたるごとく見ゆれど、かんばせは二十ばかりの人のごとし。黒き冠に朱の衣を著たり。そのさま凡人とは見えざれば、墨縄そゞろに頭をさげて拜す。あるじ墨縄がそば近く坐して、「汝おそるゝ事なかれ、此所は東海の蓬萊山なり。よのつねの人は來りいたる事あたはざれど、汝仙縁あるによりて今日こゝに迎へつ」といふ。墨縄いよ／＼おぢかしこまりてをれば、童子等酒菓物などを手ごとに携へ出でて、墨縄が前にすゑおく。あるじ壺を指さしていへるは、「これは人間にいはゆる不死不老の仙藥なり、汝一杯を飲むべし」といふに、墨縄おそろしくも嬉しくて、盃をとれば、童子壺を傾けて注ぐ。口によすれば其香氣たへにして、人間の酒にことなり。飲みをはりぬれば、心神自然とさわやかになり、體かろくなりて、さながら仙となれる心地せり。あるじいへるは、「汝眞仙とならんには、今七十年すぐるを待つべし。但し汝が匠の道にかしこきに愛でてかく呼迎へたり。今夜を過しなば汝を歸すべし。まづこなたに來れ」といひて、墨縄を誘ひて庭におりて、小き門をあけて一町ばかり行けば、かしこに一つの門ありて、斧の音鉋の聲かしましく聞ゆ。みちびくまゝ入りて見



れば、仙人あまた集りて村木をあつかひてをり。蒙縄「これは何の料に餓か」と問へば、あるじいへらく、「仙宮はは亡め作れるまゝに永世不朽にて、作りかふる事はなし。これは玄々皇帝命ありて、早に仰せて此度蓬萊宮の別殿をまうけ作らせ給ふなり。よく目をとゞめて人々の所作を見るべし」と敎ふ。蒙縄うち守り見るに、すべて人間にする所とは異にて、人力にし作らんには日頃を經べき物なを、とみに作り出せるさま、凡夫の及ぶべきにあらず。蒙縄うち見るあひだに、いよく道の奥儀をぞさとりける。すべて此あまたの仙人たち、あるじの翁の敎のまゝにおこなひて、露そむく事なく、又これを敬ふ事も甚しければ、此あるじなみ〳〵の仙人にはおはせじと思ひよりぬ。摂つれだちて、そこを出でてもとの小門を入りけるに、童子あわたゞしく走來て、あるじに向ひて、火急の召あり、とく參り給へ」といへば、あるじ巾服をあらためて出でて行かんとして、蒙縄に向ひて、「思ふに汝飢ゑたるべし。仙界人間と同じからねば、食膳を設くる事なし」とて、童子に命じて、庭なる蕊枝をとりて蒙縄にあたへ、「我歸り來る迄、こゝに在りて待つべし」といひて、のどかに歩みてぞ出行きける。蒙縄は蕊枝を喰ひ見るに、甘美なること限なし。松丸にもこれを得させてんと思ひて、中門のかへあゆみて出づるに、松丸は待ちわびたるほど倦みつかれて、童子の方によりて、眠ま



くらして眠りゐたり。墨縄背を打ちて呼醒して、「此所人間と同じからず、無禮をすべからず」といへば、松光不興げなるおもゝちして、「仙人は物をしみするものにや、爰に來りて二時あまりになりぬれど、ひとにぎりの飯をだにあたへず。此家の作りざまを見れば、財に富める家なるべきを、わづか一椀の飯をだに惜めるは、心なしの乞食にこそあれ。吾師疾く歸り給へ」といへば、墨縄制して、「みだりに物ないひそ。まづ是を喰へ」とて、荔枝を出して與ふれば、松光手にとりて、「扨も大きなる椎茸にて候。生にてくらはば腹をやそこなひなん」といひつゝ、物ほしければ、むさ／＼と喰ひをはりぬ。此荔枝咽を過ぎぬれば、今迄物のほしかりし心うせて、腹の中七八椀の飯を喰ひたらん心地となりぬ。かゝるに仙童膳をさゝげ來りて、松光が前にすゑて、「いざ疾くかき候へ」といふ。松光墨縄に向ひて、「此童かき候へと申すは、何事にて候やらん」と問へば、墨縄、「汝に物くへといふ事ぞ」といふ。松光眉をちゞめ頭うちふりて、「いかで物の喰はるべき、腹は鼓のやうになりてあり」といへば、仙童の云く、「此男凡俗なれば、人間の食をあたへよ」と主の申されて候へば、ことさらに斯くまうけ出でたるなり」といふ。松光、「さらば賜はりて、後にこそ食べ候はめ」とて、わりご取出でてかの魚と飯をうちあけつれば、仙童は膳をもちてあなたへ入りぬ。墨縄此つい



でに、このあたりの景色見んとて、松光を連れて門を出でて、道ある方を行くに、樹樹は玉をつらねたる如く、砂はこと〴〵く金銀の色なり。踏みてあゆむもかたじけなき心地す。こなたに高き築土ありて、門あきたる所あり。やをら入りて見れば、男女の泣く聲聞ゆ。いぶかしければ、垣のすき間より見れば、貴人と思しき人の威ありてたけ〴〵しきが、簾の内に立給ひ、左右に官人とおぼしき人々列を正して坐し給へり。階下に男女二人をすゑ置きて、いたく罵りておはす。耳をつけて聞けば、貴人のいへらく、「汝等ひそかに夫婦となりて仙郷の掟にそむきたり。しかしながら塵緣のつきざる所いかんともすべきにあらず。今より汝等を塵界にくだして夫婦となさしめん。業つきたらんにはふたゝび此所へむかへてん」と宣へば、男女の仙人さしうつむきて詞だにせず、泣きしづみ居るさまなり。貴縄ます〳〵不思議に思ひて此男女を見れ



は、美しくたをやかにて、愛敬こぼるゝ計なれば、誠に美人とはかかる人をこそいふべけれと、うち思ひ居るに、貴人頤をうごかして、かたはらの人に目くばせすれば、かたはらの人立ちて、二つの瓢をとり出て貴人の前に置きつ。このかたはらの人を見れば、さきに我をむかへたるあるじの翁なり。さては召ありとて出行き給ひしは、こゝに來給へるなりと思ひよりぬ。貴人又いはく、「此ふたつの瓢は汝等にひとつ〳〵

與ふるなり。凡緣つきなん時ふたゝび持歸るべし。生れ出でん所は、南瞻部州大日本國の中にて、女は貴族の家に生るべし。男は東國の賤しき民にてあらん。とくおひやれ」と宣へば、庭になみ居たる仙卒立上りて、二人の男女の手をとりて、左右にわかちて引立て行く。女をば西の嶺の方に引行くさまなり。男をば墨繩が覗きゐたる方へ引きつれて出づれば、墨繩、松光もおそろしければ、かたへの樹にそひて隱れゐぬ。仙卒とく是を見つけて、一人走り來て、「汝等いかなることにて、膽ふとく此所には入り來つるぞ」といふ。墨繩地にひれふして、「われ／＼はかしこに朱衣を著給へる老僊の家に、今ほどまゐりをる者なり。ゆるさせ給へ」といひつゝ、手を額にあてて拜めば、僊卒うちわらひて、「汝等此所に來れる事、我族く魯仙の物語にて聞きたり。汝等は制外の凡俗なれば、いづかたに入り來るとも咎むる事なし」といふ。此言を聞きて墨繩松光も大に心おちつきて、かの仙人達のしりにたちて、行きて見ばやと思ふ心出來ぬ。仙卒等は、かの美男子の左右の手をとりて、ひたすらに引き行くさま、あまりにいとほしかりければ、墨繩すゝみ出でて、「われかの若き御方を負ひ奉りて參らばや」といへば、仙卒等、「汝慈悲の心あり、殊勝なり。さらば彼に負はせよ」とて、若き人を墨繩におはせつ。其時松光、「其御瓢はおのれ持ちて參るべし」とて、手にとりて共に走る。此瓢といふは、甕のかたちして上に鎖をつなぎ置きたり。石にやあらん、其質は知りがたけれど、いとかろき物なり。松光一人の仙人に向ひて、「此瓢は何のために用ふる物にて候か」と問へば、かの仙人答へて云ひけるは、「仙界にて金丹といふ藥を鍊る事あり。これは汝等がごとき凡俗にても、此藥を飲みぬればたゞちに仙となる事なり。此藥を鍊るほど凡そ三百年ばかりを經ざれば、丹となる事あたはず。かの男女の仙人、此金丹を鍊り作るべき役を蒙りてありながら、ひそかに戒を犯して忍び會ひけるにより此穢にて金丹ほとばしりて、聊も鼎にのこる事なし。丹藥つゝがなく成就せば、この瓢にもりて蓄ふべきを、かの男女法を犯しぬれば、かく仙界を逐ひやるなり」とかたる。松光聞きて、「扨は大切の藥を入るゝ瓢にてこそ候へ。何とてかの男女に此瓢をあづけ給ふにか」と問へば、仙人、「扨々うるさく責めて問ふ男かな。此瓢はかれらが人間に胎をやどして、さて後ふたゝび此仙界へ歸り來らん時、つよがなく此瓢を持來らざれば仙となる事あたはず。もし此瓢にいさゝかの疵だにつきても、もとの位の仙人とはなりがたし」といふ。松光、「我故郷にては、かゝる瓢には炭炭團などをこそ儲へ候へ。かばかりの物をだに仙界にては大事としたまふにや」といひてあざわらひぬ。さて一里あまり行きけるに、かぎりもなき高き山にいたりぬ。こゝにて

負ひたる人をおろさせけるに、若き人はうちしほたれて物をだにいはず。いかにするにかと盡繩松光も目をはなたず守り居れば、仙卒等、かのわかき人をかけ路に率て行きて、「すは」と言ひさま谷の下へつきおとしぬ。いくちひろとも知れざる深谷なれば、微塵にくだけてや死しぬらんと、盡繩はいとほしとぞいひ居たりける。松光手に持ちたる瓢をさゝげて、「これはいかにし給ふぞ」といへば、仙人たち驚きて、「此瓢は彼に持たせつかはすべきを、不便なる事をしつるかな」と、おのおのいたく悔ちたるさまなり。盡繩がいはく、「今のほど投げおとし給はばよろしかるべし」といへば、人々あざ笑ひ、「かれ谷をはなるゝより早く人間に生やどしぬ。今はかれ凡人と成り生をかへぬれば、眞仙の道術うせぬ。此瓢投げやりたりとも、彼がもとに到る事かたし。これはわれわれ命令にそむきたる罪さり所なし」と、各額をあつめて悔みをれば、盡繩がいはく、「われわれさいはひ凡界に住み候へば、かの人の行方を尋ねて、此瓢をわたし申さんはいかに」といへば、おのおの手をうちて、「是はひとへに汝にまかせてん。われわれ神通を以て、彼がもとに到らんはやすけれど、仙界に掟ありて、ほしいまゝに人間にいたる事をいましめたれば、たやすく行きいたる事かたし。おこと慥に彼にわたして給へ」といふ。盡繩かの瓢を包につゝみ、みづから負ひて仙人にわかれ、松光を連れて山を下りて、もとの老仙の家にぞ歸りける。あるじの翁出居に待ちつけ居りて、「汝山にいたりて、瓢を受けとりて歸り來るならん」といふに、隱すべきならねば、ありのまゝに事のさまを述べければ、あるじうなづきて、「さぞあらん。汝塵界に歸らば、たがひなくかの人にわたし遣すべし。もしあやまりて天機にたがはば、大なる禍あるべし」といへば、盡繩、「いかでそむき奉らん。さて問ひ奉りたく存じ候は、今のほど上座におはせし貴き御人はいかなる御方にか」と問へば、あるじが云く、「かの貴人は、玄々皇帝太上老君にておはします。汝かたじけなくも幸に拜し奉る事を得たり」と答へぬ。さて童子に仰せて、鉋鑽鑿鋸斧鑢、すべて工匠の具どもとりそろへて、盡繩が前にならべさせて、「此度の勞に、汝に是をあたふるなり。此具をもつて物を作らんには、汝が手業今までに百倍して、其妙をつくすべし」といへば、盡繩よろこびに堪へず、遙にしさりてあまたたび額づきて拜む。さて申しけるは、「かばかりありがたき神仙に逢奉りぬる事、生涯のよろこび是に過ぎたること候はず。いかで御名を聞かせ給へ」といへば、老仙のいへらく、「汝に何をかつゝむべき。われはから國にひととなりて、姓は公輸にて、名は班といふものなり。魯國にて生れたれば、人われを呼んで魯班と稱したりき。おのれ人間にある時、工匠のわざを好みて、大なる物は

殿閣樓臺橋梁、さて小なる物は船車器皿の巧をつくるに、人其巧をほめて神と稱せざる者なかりき。後に塵世をいとひて高唐雲夢の間に隠れ、終に蓬萊に到つて居をしめたり。汝が道にかしこく且志の直なるに感じて、かく呼びむかへて、その具どもを譲りつかはすなり。汝塵世に立歸りても、仙界の事を以て、ふつに人にむかひて語るべからず、又かの男女の仙にめぐりあふとも、仙人の種根なりといふ事必ず語り告ぐべからず」といふ。墨縄こゝろに思ひけるは、「我は秘して語るまじけれども、松光もし人間にもらす事もやあらん」と、心中に思ひめぐらしけるを、魯仙はやくさとりて、「汝が召しつれたる男、口さがなきやつなれば、人にふれ知らさんは一定せり。かれは我はからふべき旨あり、汝心なつかふ事なかれ。夜も更けぬ、つかれたるべければ、疾く寢ねよ」といひて、奥ざまへ入りぬ。墨縄松光を呼びてかたはらに臥さしめ、おのれも困じけるまゝしばし眠りけるに、程もなく魯仙の聲にて、「疾く起出でて用意せよ」といふ聲す。目をひらきて見るに、魯仙ならびに童子等両三人、かたはらに立ちてあり。おどろき起立ちて、昨日もらひし物など一つにつゝみて、墨縄魯仙を拜して、「ありがたき御かへりみを蒙り候事、のべ聞ゆべき方も候はず」といふ。魯仙かされていへるは、「汝等わづかに一晝夜を過しぬれど、人間世にては十五年ばかりを過しぬ。



疾くいそげ」とて、童子に命じて案内させて、爲仙中門まで送りて、「再び七十年を過しなば、汝此處に來りて、我とともに道を修すべし」といひて、わかれをなしぬ。毛繩あまた〻びふし拜みつ〻　童子を先にたてて出でて行きけるに、昨日來れる時はさ、ばかり嶮岨なる山を越えたりしに、此たびはいさ〻か左樣のけはしき所もなく、しばしの程に坂ある所にいたりぬ。童子がいはく、「此坂を下りなば汝が家ちかきにあり。われは是より歸りいなんず」とて、もとの道へ行くぞと見えけるが、早くかたちを見失ひぬ。松光見おくりて、「仙人は五穀を斷ちて喰はずと聞きしが、誠にてありけり。米の價の高くのぼりたる比は、仙人こそうらやましけれ」とつぶやく。さて坂を下りはてて、しばしかたへの樹の根に尻かけて休む程、松光いひけるは、「昨日大きなる椎の實を喰ひてより、物ほしき心地はせざれど、今日は少々口のあたりさびしき心地し候。



昨日の物たべ候はん」といひさま、仙界にてもらひ得し魚と飯と入れたる破子とり出でて、「いかに我師もきこしめすべくや」といへば、毛繩、「我はいさ〻か物ほしき事なし、汝ほしくば喰へ」といふに、松光破子の蓋とりて、さら〳〵と喰ひつくしつと思ふ程、俄に舌おのづからちゞまり行くやうに覺ゆれば、「あ〻」と聲を立てんとすれど、物いはれず、舌はやう〳〵にちゞみ行きて、咽の中へいるやうに覺ゆれば、眼をくるめ

かせて手足をもだえて騒ぐ。墨縄も驚きて、「いかにせし」と脊をなでさすれど、たゞもがき足ずりのみして、指を口もとにあてて敎ふるのみなり。「さては物のいはれぬにや」といへば、たゞうなづくのみなり。「耳は聞ゆるにや」といへば、又うなづく。墨縄もあわてたりしが、「つく〴〵思ふに、魯仙の宣ひしは、『かれは口さがなきやつなり、すべき法あり』と宣ひし。扨は『仙界のさまを彼に語らせじ』とて、かれを啞とし給へるにや」といへば、松光うらめしげに山の方を見やりて、玉のやうなる淚をおとす。墨縄なぐさめていへるは、「汝心をあらため仙道に歸依し、みだりに人の短をいはざらば、仙人あはれみ給ひて、ふたゝび物いはれんやうにはからひ給ふべし。しばし忍びてあるべし」と、さま〴〵とすかしこしらへて引立つれば、松光かの破子を取つて山の方へうちなげて、目を大きくなしてうちにらめど、ふつに聲の出でねば、口惜しげに打見かへりつゝ、墨縄に手をひかれて、泣く〳〵道をぞいそぎける。さて墨縄はとかく松光をいたはりて行くほど、覺えある松の並樹ある所にいたりぬ。「さらば我住める里にちかし」とて、道をいそぎけるに、老いたるものども出來て、手をうちて、「墨縄ぬし歸り來ぬ」とて、あきれたる樣して、「そこはいかにして此十五年ばかりいづくに行きて住み給ひし、などて古里には文をだにおこし給はざりし。まづ村長のもとに告げばや」などいひてさわぐ。墨縄いはく、「なくなりし父母の菩提のために、國々の寺々まゐりめぐりて、さてかく年月を過しつ」といらへて、まづ我家に到りて見るに、いたく荒れたれど、家は昔のまゝに立ちてあり。庭には草生ひしげりて、秋ののらなり。とかく掃きつくろひて入居たりける。かくて日を過すべきならず、此瓢をもち行きて、かの仙人のゆくへを尋ねわたさばやと思ひて、旅の具などとりしたためて、この度は一村の者にもよくいとまごひして、松光に革籠荷はせて、東の方へぞ出立ちける。此松光をさなきより手ならひを得せず、一字をだにわきまへざりければ、啞となりてより、我思ふ事を人に知らする事かなはず、「いかでかんな文字をだに知りたらば」といひて、頭をかきつゝ悔みけるとぞ。

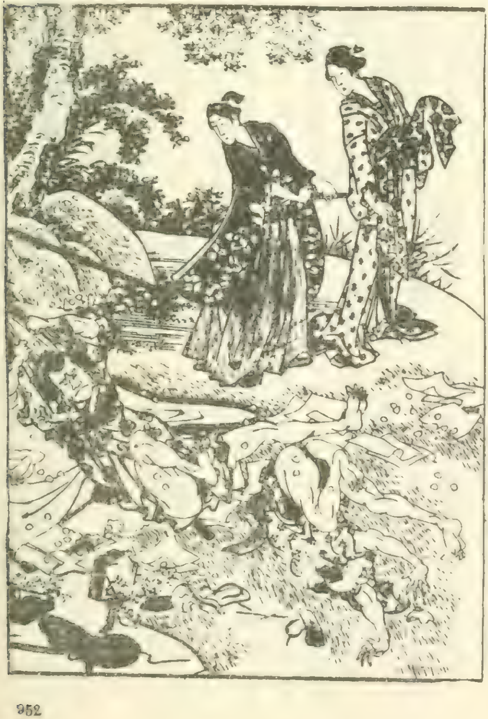
飛騨匠物語巻之一終

斐陀匠物語巻之二

○たけしば

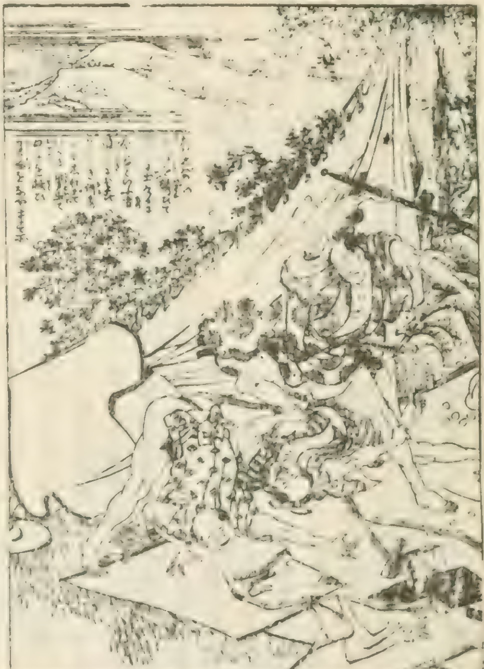
こゝに武藏國荏原郡に、竹芝の山人といふ者あり、うまれつきみやびかに、光るばかり美しかりければ、かれか姿をはむる人の、天下のかほよしとほめけるが、ならひとなりて山人とよぶ者なく おしなべて顔吉とぞ呼びたりける、年は十五歳計にてぞありける。いにしへよしある人の此あづまに下りて、こゝに家居しめて住み給ひける其人の末なりければ、山里ながら、調度なども昔のなごりとゞめて、みやびたる物どももたくはへたりける。父の頃よりやゝ貧しくなりけれど、さるやごとなきすぢなりければ、幼き時より書などをも讀ませ教へたてけるに、さとく賢くて、讀得がたき卷々をもこともなくさとりあきらめければ、師なる人もことさらに褒め物しける。すべてこの山人を見たる者は、男女をいはず、想をかけざるはなかりけり。其頃同國に廣岡の長者といふ者あり、心ひがみたる佞人にてありけるが、此山人を想ひそめて、いかで兄弟のかたらひせんと、度々文などをおくりけれど、つや／＼返りごとだにせざりければ、いかにもして我物にせんとおもひて、よきついでをぞ待ち居たりける。春の頃向が岡といへる所の花咲きぬとて、人々遠近をいはずこゝにつどひて、終日あそびくらしける中に、山人も母をいざなひて、高き岡邊に氈うち敷きてながめゐたりける折柄、廣岡の長者も此わたりに幕うちまはして、酒飲みたのしみゐけるが、山人が母をつれて宴に來れるよしを聞きて、醉に乘じて走り來て、すなはち氈の上にのぼり、山人が手をとらへて、「われ度々消息してこころざしを告げつるを、情なき少人かな」といひて、ひたすら戯れかゝりければ、母は興さめて、山人に目くばせして、疾く宴を立ち去らんとすれば、廣岡立上りて母をつきのけ、山人を脇にはさみておのが幕の中へひき連れ行かんとす。母はおきあがりて、「こは狼藉なり」といひつゝしがみつくを、足にて踏みとばす。此さわぎに、破子さゝえなどは微塵になりて飛散りぬ。母は正氣をうしなひて、うつぶしに倒れて起もあがらず、廣岡山人をとらへて引行かんとす、あやふき事いへばさらなり。かゝるに、花の樹蔭に頰かぶりせる男の立居たるが、はしり出でて廣岡がきゝ腕とりて、もんどりうたせて三間ばかり投げつけつ。山人はうれしくて、母がもとによりて介抱すれば、廣岡起上りて、かの男に飛びかゝるを、引捉へて大地になげつけ、幕串を引拔きてつゞけうちに打ちければ、強氣の廣岡もなえな

ゑとなりて倒れぬ。かの男仁王立に立居て、山人にむかひて、「母御前を負ひて、疾く爰を逃げ給へ」といふに、山人は心せかれて、とく母を背に負ひて、岡を下りて逃行きける。廣岡が下部ども六七人、かの男をやらじと取卷くを、幕串をとつて縱横に打つてまはれば、寄りつく者もさらになく、皆ちり〴〵にぞ逃げうせける。かの男廣岡が伏したるそばに寄りて「かゝるやつには恥見せんず」といひさま、帶とき衣ひきはぎて、衣をば流に打投げて、うち笑みつゝいづくとも知らず歸り行きける。廣岡は赤裸にて臥居たるを、下部等立返りさま〴〵介抱しければ、やうやくに息は出でたれども、「赤はだかなれば、此まゝにて歸り給はんは人わろし」とて、下部が衣をぬぎて打著せければ、醫寒しといへば、せん方なくて、ありあひたる毛氈をとりて頭より打著せて、帶にてくる〳〵とひき結べば、廣岡よろ〳〵と立上りて、赤裸なる下部が肩に



かゝりてあゆみ行くさま、さながら繪にかきたる達磨大師の醉ひしれたる如くなれば、これを見る者、手打叩きて笑ひけり。これよりいよ〳〵ねたき事に思ひて、此報せんとぞ思ひたちける。さて又墨縄は、松光とともに東の方へと下りけるに、相模國をも過ぎぬ。扨日暮れぬれば、やどり求めて夜をあかし居たるに、夢の中に、おびたゞしく神なりひゞきて、持來りたる瓢おのれと窓を出でて、飛行くと見たるに、驚きて枕

なあけて、かの瓢を見るにある事なし。手まどひして松光をおこしし、そこらともしびを照して見れど、おとかたもなし。此瓢うしなひては、吾身にいかなる祟あらんもはかりがたしと、家あるじをも呼起して、家のめぐりなど探しもとむれど、それと思しき物も見えず。これ盜人のもち行くべき物にあらず、まさしく夢中に此瓢おのれと飛出でたると見しは、もしくは僊人の告給ひつるにて、此瓢をわたし參らする人の此あたりに住み給ふにやあらんとて、夜の明くるを待ちて、此やどりを立出でぬ。こゝは聞及びし武藏野とかや、はてもなき大野にて、蘆荻のみたかく生ひて行くさきも見えず。「かの夢に見つる瓢の東をさして飛ぶと見つれば、武藏一國の中を尋ねなんには、大方有所知れざる事あらじ。汝は左の道を行きて尋ぬべし。吾は右の道をたどりて行くべし。石濱といへる所に、蘆屋の里とて悩る人あり、そこにて相會ふべし」といへば、松光例のうなづきて立別れ行きぬ。惠德はひとりかの蘆荻をおしわけつゝ、道ある方をたどり行きけるに、流ある所に出でぬ。此流にそひて行き見るに、柴橋うちわたしたる所に、わかき人釣して居たるあり。尾花撫子などの岸にたてるも見すてがたくて、立止りて、「岡邊を南とし萬里を急とす」と、何となく口ずさみければ、このわかき人聲が方をふりかへり見る。是風此人を見れば、十五六の美少年にて、齢の



匂たぐひなく、女にて見まほしきすがたなり。なにとやらん見たる人のやうなれば、よく思ひめぐらすに、かの仙界にて谷よりおとし入れられし人にたがはず。少人いひけるは、「御身は旅人にや、いづくをさして行かせ給ふ」といふに、墨繩さし寄りて、「おのれは飛驒の國なる匠にて候。この武藏の國へははじめて罷りたるが、いづくに宿とるべきしるべもなく候。いかで一夜を明させたびなんや」といへば、少人、「やすき事にこそ。我許へともなひ參らせん」とて、竿をあけて、いざとて先に立ちてあゆむうしろ手、かの山中にて見たる仙にいさゝか違ふ事なければ、かならず此人こそかの仙人の生れ出でたるならめと思ひて、つきそひて行く。程なく茅ふきたる門にいたれば、少人柴の戸おしひらきて入りぬ。こゝは竹芝坂といへる所にて、少年はかの顔よしと聞えたる山人なり。墨繩うち見まはせば、荒れたる家居のさまながら、ゆゑよし見えて住みなしたり。しかるに奥の方より女の童はしり出でて、あわてたる聲にて、「さても御歸りを今やと待ちつけて候ひき。母君の晝のほどより、いづくへ行かせ給ひしにか見えさせ給はず。ちかきあたりは尋ね候ひつれど、ふつに御行方知りたる人もなし。君はもし御行先を知らせ給ふにや」といふに、少年大きにおどろきて、「母人あからさまに隣の家に到り給ふにだに、われに告げ給はでは出行き給はず。ましておのれ外に出でたるに、いかで家を出で給ふべき。さるにても心ならざる事よ」とて、頭うちかたむけて立てれば、墨繩「さて／＼にが／＼しき事を承り候ものかな。見參らするに、御家に人少く見えて候。おのれ物のやくにたつべき身には候はねど、御力となりて、とも／＼母君の御ゆくへ尋ね奉るべし」といへば、少年大きによろこびて、「うれしくも宣ふ物かな」とて、墨繩に足あらはせて、簀子の上にいざなふ。墨繩打見まはせば、此家田つくる片手に、酒をもつくりて賣りひさぐと見えて、廚のあなたに大きなる桶などあまた並びてあり。又我居たるかたはらに棧敷かまへて、酒入るる瓶などあまた並べてあり。よく見れば、おのれが失へる瓢かの壺の上に吊りてあり。扨はこゝにこそと思ひけるが、まづ知らず顔つくりて、少年にむかひて、「これなる瓢は古くより傳へて持たせ給ふにや」と問へば、少年がいはく、「その事にて候。これは今朝のほど早う起出でて見候へば、この酒壺の上の庇に、鎖につなぎたる瓢のかゝりて候。いかなる事にかと存じて見て候へば、折ふし東風のふき出でて候へば、此瓢西になびきて音をたて候。其聲之もいはずおもしろく、心もおのづから澄みわたりて候ひき。しばしして北風ふけば、又南になびきて同じくおもしろき音をいだして候。かゝる物はもと我家になき物にて候ひつるを、いかなる人の殘し置きたるにかと存じ候へば、まづと

り入れて、ぬしの來らんまではと、かう酒瓶の上にそのまゝに吊り置きて候」とかたる。蜑繩かいはく、「これは人の忘れてのこし置いたる物には候はじ。わ君に天よりあたへ給へる物にこそ候らめ。大事となして秘つけて、寶となし給へ。後々御身なりのぼり、世にぬけ出で給ふべき吉瑞なるべく存じ候」といへば、少年うち笑みて、「さらばよき祥にこそ候へ」と、打語らひをるほど、隣の家あるじ走り入り來て、「これの母君は、晝の比大きなる男の背におひて、北をさして走り行きたるを、隣の村なる者の草かりゐて、たしかに見たりと、今のほど來りて語りて候」といふ。「さてはそやつ盜人なるべし。追ひかけて捕へん」とて、心狂ふばかりにせき立ちてさわぐ。時に日も暮れぬれば、松ともし連ねて、蜑繩もともども少年にひきそひて、家を出でて荻薄の中を分けて、五里あまり行きたれども、影だに見つけたる事なし。少年聲をあけて泣くことかぎりなし。携へ來たる松も燃えつくしぬれば、「今はせん方なし。まづ立歸りて、夜をあかして後さがしもとむべし。いづれにもあれ、御ゆくへ知れざる事はさふらはじ」とさま〳〵と慰めつゝ、又もとの宿へとぞ引返しける。

〇ひろをか

松光は蜑繩に別れて、一人革籠を負ひて、足にまかせて十里ばかり歩きけるが、申の時すぐる比、酒賣る家のまへに到りぬ。咽もかわきぬれば、入りて床几に尻かけてゐけるに、かたへに男一人つゝみ脊におひて、酒飮みてゐたり。松光此男が包のさまを見るに、かたちまろめにて、かのうしなへる瓢のさまに似たれば、いぶかしくて、いかで見んと思へど、物いふ事ならざれば、せんかたなくかの男のうしろにまはりて、つゝみの上よりさぐり見れば、此男ふりかへりて、「こや なでふ事をするにか。人の持ちたるつゝみに目をかくるは」といひてにらむ。松光前に來りて腰打かゞめて、「其包ひらきて見せ給へ」と、しかたにて手をうごかし見すれど、かの男心得ず。「こやつ物いはぬは唖なるべし。何事を思ふにか、聞きわきがたし」といひつゝ、かの包をおろし、これにひぢ打掛けて酒飮み居り。松光包の中しきりにゆかしくて、打守り居たるに、かの男酒に醉ひぬるにや、頭うなだれて眠るさまなれば、しづかに側に寄りて やをらかの包に手をかけて、我方へ引寄せんとするに、此男疾く目をさまして、「此かたゐめ又も此包を盜まんとするにや。此つゝみの内は、天の下にならぶ物なき器にて、天人仙人にあらざれば用ふる事なき重寶なり。汝此包に心をかくるは、一定盜人なるべし。たやすく汝等にぬすみ取らるべきやは」とえせ笑ひつゝ、又かの包を背におひて、思ふさまに罵りしかりつゝ門を出でてぞいにける。松光かれが仙人の持つべき寶なりと

いひたるを聞いて、いよ〱我尋ぬる瓢なるべしと思ひければ、しりにつきてひそかに追行く。かの男は心もつかず。小歌うたひつゝ行くを、後よりむずと首筋をとらへたれば、かの男手をふりあげて、うしろざまになぎければ、松光手をはなつ。かの男松光に飛びかゝらんとせしが、よく〱大事の物なりけん、かの包を背よりおろし、閑なる所にさし置きて、腰なる棒をとつて打つてかゝる。松光も同じく棒を以てしばし戦ひしが、互にたゝきつたゝかれつして、相共にひたよわりによわりける時、かの男聲をあげて、「しばし待たせ給へ、申すべき事あり」といへば、松光も棒をとゞめてゐたるに、かの男大きに息をつきて、「われ幼き時より、棒をとつて犬と人とをいはず打ちすゑて、手柄をなす事たび〱なれば、東國においては、吾にまさるべき棒つかひはあらじと自慢してありしに、貴殿の棒の手なみをさく〱我に劣らず。揚々天晴なる御はたらきにて候。今は御名を名のり給へ、其上にてはそれがしも名をあかし申しつべし」と、まめ〱しく聲をはなちていふ。松光心にをかしく思へど、口はたらかねばまもり居たるに、かの男、「名のり給はぬは子細こそ候はめ。御心にかけて欲しとおぼさるる一品、大切の物ながら見せ奉らん」としづ〱と立ゐて、かの包を手に取上げて、松光が前にすゑて、「いざ〱ひらきて見給へ」といふに、松光うれしく三たびば



かり打捧げ〳〵て、さてかの包のむすびめ解きて開き見るに、こはいかに、老人病者などの臥床にたくはふる、尿器と名づけし物にぞありける。松光はあきれて、大口あきてあふぎ居たり。かの男いよ〳〵はやりかにさへづりけるは、「これは都のやんごとなき人々は大壺とめされて、御厠人などの取りあつかふ物にて候。東國にては見る事まれなる品なるを、おのれが主のもとに客人の入來て候へば、「此品用ふべき事あり」と、主人申しつけて候へば、所々借もとめて持參る所に、貴殿此品に目をつけ給ふは、こゝろある御人と見受けたれば、大切の物ながらひそかに見せ奉るなり。いまだ主人に手わたしせぬうち、わたくしに他人の目にふれ候事は、貴殿の執心に感ずればなり。ゆめ見きとな宣ひそ」と、手首をうごかしつゝいふ。松光案に相違したれど、此男が殊さらに大事とおもふ様なれば、おしいただきて、包に引包みて返しわたせば、男おまた〻びおしいたゞきて、もとの如く背におひて、面をしかめつゝ、「さて〳〵思はざる棒の勝負に、腕も腰もいたみて堪へがたく候」といひつゝ、足もしどろに歩みて行く。松光ふところより、寸紙がわたしたる文とり出でてひらき見すれば、此男うち讀みて、「なに〳〵、此者おしの病にて、療治のため東國へ罷下り候。しかるべき所にては一宿仕るべく間、御とりあつかひ給はるべく」と讀みもはてで、此男いへるは、「抽



ふりあはすも他生の縁にて候。我主人の許にともなひて宿し參らせん。いざ／＼」といひて引連れ行く。さて行き／＼て、棟門大きなる家にいたりぬ。これなん廣岡の長者がすみかなりける。松光を小部屋に入れおきて、かの男は奥の方へ行きぬ。しばしありて、奥の方しきりに物さわがしければ、松光ひそかに入りて見れば、五十あまりなる嫗をとらへて　あるじ廣岡の長者怒りののしりてをり。かたへに隱れて聞けば、長者が云く、「おのれを爰許へおびきよせしは、さきにも語りたる如く、われ山人が容色にまよひ、たび／＼人をもて其由いひおくりつれど、ふつに答だにせず。これによりて、おのれをかく呼びするゑて、『山人を我にあたへよ』と、さま／＼といひきかすれど、承引せざるこそにくけれ。此上いなといはゞ、たち所に命をたつべし。いかに返答せよ」と聲をあけていへば、嫗泣きしづみたる顔をあけて、「さて／＼無慙なるをこの者かな。我子は農人の家に生れたれど、素性をいはゞ汝等が類にはあらず。しかるをあながちに横ざまなるめを見せんとするや。母が命をとらばとれ、我子は思ふまゝにはさせじ」といへば、廣岡大きにいかりて、「よしよし、さらば憂きめ見せてん。こやつもとの如く樓に打籠めおけ」といへば、下人等手をとりて、嫗をつれて階子をのぼり、腕を柱にくゝり置きて、ひとしく樓を下りぬ。樓には嫗が聲にて、泣きのゝしりて止ます。



廐岡下男を呼びていひけるは、「彼くるしみに堪へで、明日にもならば心折れて、山人をわれに得させんとやいひもせん。もしいよいよ今日の如く張りだましひに承引せずば、明日の夜は前なる川に沈めてん」といふ。松光打聞くより、さても不當のやつかな、いかにもして此姫が命助けばやと思ひけれど、せんすべなければもとの所に歸りをり。道よりともなひし男膳を持來て、松光が前にするて、かたはらの男にさゝやきいひけるは、「かの姫をすかし慰めんとて、われに「大盗をさへ用意せよ」といひつけられつれど、今宵のありさまにては大盗も不用になりぬ」といふ。松光飯したゝめ終りて、又かしこのあたりを伺ふに、あるじは寢所に入りて臥しぬ。ほどなく男女ばらも物どもとりしたゝめて、各部屋に入りて臥しぬ。松光寢もやらで一時ばかりを過しけるに、鐘の聲聞ゆるは子の時なるべし。皆人よく寢入りたるにや、家のうちもしづまりて、庭の

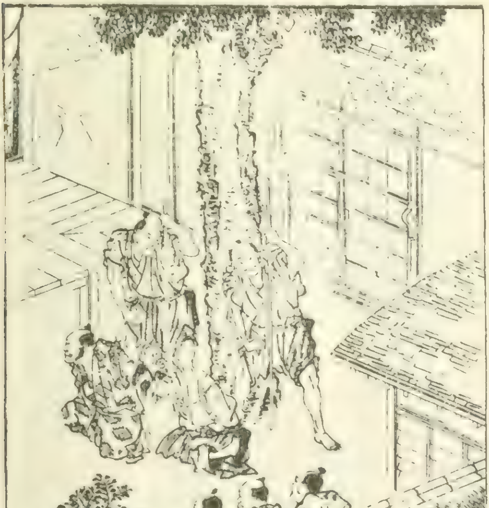


あたりに蟲の聲のみすなり。しづかに忍び出でて、厨をとほりて奥の方に行くに、男女みなよく寢ねて、いびきの聲のみす。しすましぬと階子に足をかくれば、女の聲にて、「盗人よ」といふに、松光驚きて、一ちゞみとなりて壁に伏し居れば、かの女の聲にて、「盗人にはあらず、我男にてありけり。こち寄り給へ」といひつゝ、大いなるいびきをかくにぞ、さては寢言なりとさとりて又階子にかゝりて、音せざるやう心づかひして上

り見れば、くらくて物のあやも見えず。松光窓の戸を明けつれば、寢待の月の光さし入りて、そこらあざやかに見ゆ。嫗驚きてふるひ出せば、松光背を撫でさすりて、手にくゝりたる縄を解く。嫗不審に思ひてまもり居れば、松光包より藁縄がつくれる管を出して、繼合せて綱の階子となして窓よりさしおろし、嫗が手をとりて階子のもとへやれば、扨はわれを救ふ人なりと心づきて、手をあはせて拜みつつ、かの階子を下れば、築垣の外へ出でぬ。嫗はうれしくも又おそろしくて、ひたすら松光が方をふし拜みてまり行かんとするに、あやしき男のつと出來て、物をだにいはず嫗をひきかゝへて、いづくとも知れず飛びゆきぬ。松光はこれを知らず、かの階子を引上げて、もとの管となして包に入れて しづかに階子を下りんとする折から、あるじ廣岡目さめて、嫗が泣く聲のやみしはいぶかしとて、あゆみ來て階子にかゝれば、松光おり來て目を見合せぬ。「やおれ盗人こそ」とて、諸手にひつとらへて聲を立つれば、家の内の者みな起出で來て、とよみさわぐ。廣岡、「盗人はとらへ置きつ。縄もて來よ」とて、縄をとり寄せて、松光をしたゝかに縛りあけつ。嫗が聲せぬは不審なりとて、樓へあがりて見るに嫗あらず。「さてはこやつが逃しやりつるなり」とて、いよいよ松光を強く打ちすゑつゝ、「こやつを引入れたるは何者ぞ」といふに、「昨日[illegible]を將ち來る男のつれ來るなり」といへば、いよいよ怒りて、かの男をもとらへて責めむちうつ事大方ならず。さま〴〵と責め問へども、松光もとより物いはれねば、たゞさしうつむきて居るを、「こやつかくばかり責め問へども、一言をだに答へざるはおそろしき奴なり。こやつ旅人ならんには持來りつる革籠などあるべし。ひらき見よ」といへば、男ども松光が革籠をとり出で來りて、廣岡が前に置く。これも盗みつる物なるべしとて、打開き見れば、衣二つ三つ入れたる下にたゞ今斬りたりと見えたる女の頭いれてあり。廣岡おどろきて、猶ともし火をちかづけて見れば、山人が母の頭に似たれば、大きに驚きける中にも思ひめぐらせば、われ明日の夜は嫗を殺さんと思ひたりしに、こやつが殺せしは幸なり。「さるにてもいかなる事にて殺したるぞ。軀はいづれに捨てたるぞ」といへど、松光いらへせざれば、又かの革籠をさがし見れば、一通の文あり。讀みて見れば、此者唖なりとしるしてあり。見るより廣岡又惡念きざして、にた〳〵と笑ひて、此文を引裂きすてゝ、よきはかりごとありと喜びて、「先こやつをとり逃すべからず。つよく繋ぎておけ」といひつけて、夜の明くるをぞ待ちたりける。ほどなく夜も明ければ、廣岡常にむつまじく行通ふ國の守の目代がもとに行きて、「おのれが家に凶事出來て候」といへば、目代、「何事ぞ」と問へば 廣岡がいふやう、「荏原郡に竹芝の山人と申すもの、年頃母に不幸して候ひけるに、

一昨日母をいたくむちうちて殺すべくかまへ候へば、母逃出でておのれが許に来りて候ひしを、よべ人をやとひて、おのれが家に忍ばせ置きて、母を殺させて候なり。殺しつるやつをからめ置きて候處、かの者はじめは山人のいひつけにて来りつる由を申しつれど、くゝりあげて後はふつに物をいはず、啞の如きまねして、一言のいらへだに仕らず候。此事おのれが身にあづかれる事に候はねど、かれが母の逃参りて候を殺させつる事念なく存じ候。疾くかの者ども廰に召されて問注して給はりなん」と、まことしやかに述ぶる。此日代は常に廣岡に錢を借りてしたしき男なりければ、「ゆめ愁ひ給ふ事なかれ。おのれよく計らひてん」といへば、廣岡しばし語らひあはせて、おのがやどりへ歸りぬ。しばしありて、守の廰より士卒来りて、松光をひきて連れ行きぬ。松光は夢の心地して、ひかれて廰の中に入りけるに、おのれがかたはらに美しき少年のうづくまり居たり。國の守まづ松光に向ひて事のよしを問ひ給へども、答せざれば、「こやつ聞きつるごとく啞のまねすると見えたり」といひて、又少年に向ひて、「汝は酒つくりてあきものする山人といふ者なるか」と問へば、少年、「さん候」といらふ。「汝これなる男をかたらひて、母を殺さんとせる逆罪惡むべきやつなり。疾くありのまゝにいへ」と責むる。少年涙をながして、「いかでさやうの人ならぬふるまひ仕るべき。母は昨日思ひよらず行方なくなりて候間、所々さがし求めて候を、只今宣ふを承りて候へば、扨は我母は此者の殺したるにて候か」といふ。守、「かれが殺したるは、まのあたり人々見る所なり」といへば、少年聲をあげて泣出す。守又いはく、「汝此男をかたらひて母を殺させし事つゝまず申せ」といふに、少年、「いかで左様のあさましき事仕りなん。此男はいまだ見も知らぬ者にて候」といへば、守のいへらく、「汝が知らざる男の、いかなるあだありて母を殺すべき。これは汝がいひつけたるに違はじ」と責むるに、少年猶あらがへば、守いかりて郎黨に下知して、「彼等を栲木につなぎて打て」といへば、郎黨二人を引ばりて栲木につなぎ寄せて、「疾くありのまゝにいへ。いはずばからきめ見せん」といひさま、楉をとりて打ちすゑければ、手足に血ながれて、ほとほと息も絶えなんとす。松光心に思ひけるは、おのれが命はをしむに足らず、此少年の思ひよらぬぬれ衣にて、責めさいなまるる事のいとほしさよ、廣岡が母を擒にせし事はわれこそ知りたれ、少年に告げばやとおもへど、物いはれねばせん方なし。士卒はひた打ちに打てば、少年ははや息絶えて、うしろざまに倒れぬ。「われも今は命たえぬべし、いかなれば、覺えぬかたはとなりて憂きめ見る事にか、仙人といふ者通力おはさば、我にひとたび物いはせてたべ」と、精神をこらして祈念しけるに、眞のこゝろや通

じけん、「あはれ」とはかり一聲をあげて叫びぬ。士卒、「扨こそこやつ啞のまねしつるが、くるしさに堪へで聲をあげつるなれ。猶したゝかに打ちすゑてん」といへば、松光聲をあげて、「まづ待ち給へ、物聞ゆべき事あり」といへば、守、「さらば疾く申せ」といふ。松光がいはく、「おのれ此少年ともとより知る人にて候はず。昨日思はず廣岡がもとに宿りて候ひしに、廣岡一人の嫗をとらへて、いたく責めさいなみて、『汝が兒なる山人が我心に從はざれば、汝をとりこと爲せしなりといへ』と、嫗心をさだめて承引かず。よりて『明日の夜は嫗を殺すべし』と、下人どもにいひつけて候を、ふと聞きて候へば、いとほしき事に存じ候て、夜にまぎれて樓にのぼり、嫗をばおとし遣りて候なり」といふ。守頭をふりて、「いな〳〵、汝が殺しつる嫗が頭現にこれにあり。いかであらがはすべき」といへば、松光、「その頭は、我師猪名部の墨縄と申すものの彫りつくれる物なり」といふ。守おぼ笑ひて、「これいかで作れる物ならん。汝くるしさにまが〳〵しき虚言をいふなり」といへば、松光、「其頭とり出し給ひてよく御覧あれ」といふに、守かの頭入れたる器の蓋とりてつく〴〵見て、「此頭いかで木もて作れる物ならん」といふ。少年はやうやく息出でけるが、のび上りて此頭をうち見て、「我母にこそおはすなれ」といひて、泣く事かぎりなし。松光いはく、「我師は飛騨の國にてな



らびなき匠にて、およそ此人のつくれる物はこれのみならず、人の目を驚ひし事あまた候。こころみに打割りて御覧あれ」といふに、「さらば彼がいふまゝに試みん」とて、守刀をぬきて斬りつくれば、頭は二つにわれて、中より小き錺一つころげ出でぬ。守とりあけ見れば、内は常の木なり。扨は人い頭ならずと始めてさとりて、靈魂がたくみの奇なる事をほめ感じける。「さるにても姫が行方知れざれば、汝を放ちやりがたし。汝が申すごとくにては、廣岡めも召捕りて問ひあきらむべし」といふ。少年いひけるは、「扨は和殿は靈魂ぬしの弟子にておはしけるにや。そこの師なる靈魂ぬしは、我もとに宿り給ひて、昨日今日母の行方などともく〳〵尋ねておはせし」といへば、松光ちよろこびて、「母君はおのれ助け奉りて、夜のうちにおとし參らせし」と語れば、「さては母の御命恙なくおはせしか」とて、天を拜してよろこぶ。かゝるに廣岡參りて廳



にかしこまれば、守のいはく、「汝が家にて此者が姫を殺しつる由汝うつたへ出でたれど、そはあらぬ事なるべし」といへば、廣岡、「なにがしいかで僞を申すべき。我目の前にてかの者姫が首きり候て、山人がいひつけにて殺したる由申して候ひき」といふ。守、「さらば此頭を見よ」と投げやれば、廣岡とりあけて打ちかへし見れば、木にて作れる物なれば、又いふべき詞も出でず口ごもる。守、「汝人ごろしなりといひて訴へしは、そ

らごとなる事しるし。扨は汝恨をいだきて、山人を罪におとさんと計りたるならん」といへば、廣岡面の色かはりしが、又いひけらく、「此頭はあらぬ物にて候とも、嫗を籠め置きたる樓の下にて、きやつを捕へて候時より、嫗がゆくへなくなり候へば、かれが殺したるにたがはず」といふ。松光がいはく、「我何のあだありて山人ぬしの母君を殺すべき。汝こそかの人を殺さんといひしならずや」といへば、廣岡がいへらく、「かの母われをたのみて來るを、いとほしくて養ひ置きたり。わが殺すべき道理なし」とあらがひて果てず。折から一つの鳶飛來て廳の庭を舞ひわたりて、一通の文を落してあなたざまに飛去りぬ。守此文をとらせてひらき見るより、「廣岡めをくゝり上げよ」といへば、士卒はやく廣岡を繩もてくゝりあげつ。守のいへらく、「汝いぬる春向が岡にて山人に狼藉のふるまひなし、今又母を盗みて樓につなぎ置き、今宵彼を殺さんとて下人にいひつけたりし事、嫗がうつたへ文これにあり。かの嫗汝にいたくさいなまれて病に臥し居れば、廳に出づる事なりがたしと、くはしく此文に記しおり。木偶の頭を以て廳を欺かんとせし罪かろきにあらず」とて怒り給ふ。廣岡今はつゝむともかひあらじと、奸計のほどを殘さず逐一に申しければ、惡いやつとて、やがて囚にそ入れられける。「山人松光は罪なければ家に歸るべし」と宣ふ。さるにても嫗が訴文を鳶の持來



りしこそ不思議なれ。善人の無辜におちいらんを、天のたすけ給へるにやとて、守をはじめ廳の人々も、これをいぶかしくぞ思ひける。山人松光もはじめて安堵の思ひをなして、連れだちて宿へ歸りける。宿には老母病牀に臥し居るを、墨縄とかく介抱しあつかひてゐたり。まづ恙なく家に歸り來し事をかたみによろこびて涙をながす。母いひけるは「われ松光どのに命たすけられ、墻の外へ出でたりしに、思ひよらず一人の男來りて我を負ひて走りつるに、臆心もうせてありしに、此人いかなる心にか、わらはを此村の口まで負ひ來りすて置きて、いづちとも知らず走り去りぬ。此人のかう負來らずば、又廣岡にとらへられて憂きめをや見まし。かへす〴〵有りがたき人も世におはしけり」とて泣く。山人いひけるは「母人の斷文を鳶の持來れる事、守をはじめわれ〳〵も不審はれず」と語れば、墨縄つとたちて、「其鳶これに候」とて、かたへより取



出でたるを見れば、木もて作れる物なり。墨縄がいはく「われ子細ありて異人より工匠の具どもをつたへぬ。「此具を以て物を作れば、我心の欲することに從はざる事なし」と異人のつたへて給ひたれど、いまだ然るやいなやを試みざりしに、今日母君の歸り來給へるに、わ君の廳に召されし事、かた〴〵心ぐるしかりしに、母君「廣岡がたくみの程、疾く廳にうつたへん」と宣へど、かく病にかゝり給へば、御みづから出行き給はん

事かたし。おのれ又介抱して参らせざれば、外にあつかふ人もあらず。よりて母君の文かき給ふ間に、木鳶ひとつ作り出でて、こゝろみに飛ばせやりつるに、思ひしにたがはず、かの藤に飛行きて、ふたたびこゝもとに歸り來りしは、これ我匠の奇なるにはあらず ひとへに神人の授け給ひし道具の靈なるによれり」と語れば、老母をはじめ人々も、あつと感じてふし拜みつ。墨縄、松光に向ひて、「汝が唖の病とみに癒えしこそうれしけれ」といへば、松光、拷木につながれし事を語りて、はじめ墨縄に別れしより、途中大字を見ちがへてはひ取らんとせしより、廣岡が家にやどりし事までくはしく語り出でければ、墨縄をはじめ人々も、はじめて笑をぞ催しける。母墨縄をたのもしき者に思ひていひけるは、「我子いまだ年たらはず、しかるべき親族もなくて便りなく候へば、御身かれが兄となり給ひて、今より行末をうしろ見して給へ」といへば、墨縄がいはく「かく見え参らせしも不思議の縁に候へば、今よりかたみに心あつく語らひ申すべし。しかしおのれは所を隔てて住ひ候へば、何ばかりの御力にも成りがたからん。但今四五日はとゞまりをりて、かたみとも見給ふべき一品つくり出でて参らせん。おのれあつまに下りたりしは、故ある事にて候へども、子細あれば口外に出しがたし」といへば、松光さし出でて、「我師ながく物語なし給ひそ。扨は又唖とや成り給はん」といひて危がりけり。墨縄それより一間なる所に引籠りて、何事をかすらん、鋸斧の音のみ聞えしが、三日といふ日に出來て、「物一つ作り果てつ。見給へ」といひて障子おし開けたれば、丈大きくたくましき馬の、さながら生けるがごとき様して立居たり。人々見てあざみ驚く事かぎりなし。墨縄いひけるは、「これはもろこしにて諸葛孔明の作り給へる木馬に倣ひて、いさゝかたくみを用ひて候」とて、庭におろして打跨れば、此馬四足を動かしあゆみ行くさま、生ける物といさゝか違はず。松光おもしろき事に思ひて、「おのれかはりて乗りて見ん」といへば、墨縄下りて簀子に尻かけ居れば、松光馬にまたがり手綱をとりてあゆます。墨縄聲かけて、「汝手綱をつよく引く事なかれ。つよく引きなば走る事疾かるべし」といふ。松光しづかに手綱をとりて、門の外へあゆませ出でて、「扨々興ある事かな。まことの馬より乗心よし」などほめて、一町ばかり歩ませて行きしが、つよく引きなば疾く走ると教へられしが、いかばかり走るにかこゝろみんと思ひて、思ふさまにつよく綱を引きければ、此馬まことに矢を射るが如く、一とびに飛出しつ。松光あなやと叫びけれど、せんかたなく、馬の頸にしがみつきて、「此馬とめてたべ〳〵」と叫べど、誰かは知らん馬は風の吹くやうに飛んで行けば、今は目もくれたましひも身にそはず、たゞ馬の行くにまかせて、うつぶしにしがみ附きて、やうやうをう〳〵と聲を立ててわめく。馬はたゞ中を飛んで、北を向いてぞはしり行きける。

飛彈匠物語巻之二終

斐陀匠物語巻之三

○いしばま

かくて松光は、膽心も失せぬるばかりにて、馬の走るにまかせて、しかと首をとらへていだきをりしが、道のほど何里ばかり走りたりけん、今は精神弱りて、いだきたる手をはなちければ、横ざまに倒れて落ちぬ。かゝるに向ひより大きなる男の、たゞ今湯ひきたると見えて、湯帷子著たるが走り出でて、かの飛行く馬の手綱をとらへたり。馬はたけりて走らんとするを、横ざまに手綱を引きければ、からうじて馬はしづまりて立ちぬ。此男馬を引きて、ふしたる松光がもとによりて、水など飲ませていたはれば、やうやう息出で、心地もとのやうになりて、此男をあまたたび拝して、よろこびをいふ。此男いへるは、「御身はいづこより來し人ぞ」と問ふに、松光、「おのれは旅人にて、從願郡なる某が許にとゞまりをる者なり」といへば、かの男、「かしこより此所までは三里あまりの道あり。おのれ出であはずば、此馬陸奥のあたりまで走り行くべし」とて笑ふ。松光、「かへすがへすあつき御恩を蒙り候ひぬ」といひ居たるに、墨縄は、松光がゆくへおぼつかなくて、跡を追ひて來りけるが、此男の馬を引きとゞめくれける事を聞きて、あつく謝してよろこぶ。此男、「わどの達はいづくの人々にか」と問へば、墨縄、「われわれは飛騨の國なる匠なり」といへば、この男、「飛騨の國に猪名部の墨縄といふ人あり。おのれが父の得意なりとて、常に物語し給へり。そこたちは知り給はずや」といふに、「おのれこそ仰せらるゝ墨縄なれ」といへば、此男地に頭をつけて、「扨もおもはざる對面仕りて候」といひて悦ぶ。墨縄、「われ東國にては知る人たゞ一人あり。扨は廬屋の船主殿にておはすや」といふ。此男、「さん候。船主はわが親にて、おのれは悴丸と申して、代々此石濱に住みて候。まづ我許へ入らせ給へ」といひつゝ誘ひて入る。是は家居もひろく、藏ども三四たてつゞけて、いかめしく住みなしたり。墨縄門を入れば、父もかくと聞きてや出でむかへて、「墨縄ぬしにこそ。めづらしくも下り給へるかな。おのが飛騨の國にありし時は、そこには七つばかりにておはしき。そこの父君のあつくおのれをいたはり物し給ひし事、今に忘れがたくうれしくて、常に申出でて御徳を仰ぎて居り」など、さまざまあつき志をのべて、奥に誘ひて、酒などまうけてもてなす。馬をばはひりの方なる柳の樹につなぎ置きたるを、從主見て、「馬に秣くはせよ、男ども」といへば、男ども秣を入れたる盥もて來て、馬の

もとに置きていひけるは「あやしき馬かな、物くはんともせず、動きだにせず。たゞ眼のみはたらかすは希有の畜生かな」といふを、松光をかしがりて、事の子細をかたれば、あるじ親子も驚きつゝ、墨繩が匠の凡ならざるを感じけり。奥の方には、醫師など入居て、物さわがしき樣なれば、墨繩、「いかに御家の内には病者などのおはしますにや」といへば、棹丸答へて、「おのれが妹にて候もの、春の頃より病にかゝりて打臥して居り。おのれは實は養子にて、船主が生の子にては候はず。妹は父母のうむ所にて、ひとつ子にて候へば、ことに大事となして養ひたてゝ候所、思ひかけぬ病にかかりて、親たちも大方ならず心をくだき候」と語る。墨繩仙界にてもらひ得たる茘枝のはしを懐よりとり出でて、「これ少々煎じて用ひこゝろみ給へ」といへば、棹丸よろこびて奥の方へ持行きぬ。しばしありて船主出來て、「今のほど賜はりし御藥用ひて候へば、夢のさめたるやうにさわやぎて、苦しき事もわすれ候とて、母をはじめ皆人よろこびに堪へず。抑もいかなる御藥にて、かくすみやかに効をあらはし候にか」といひて、をどり立ちてよろこぶ。棹丸も同じことをいひて悦べば、松光したり顔に、「さも候ひなん。この御藥世間の庸醫などが知る所にて候はず。おのれ我師とともに千辛萬苦して、かたじけなくも魯仙の御許にて」といひさして、急に口に手をあてて、墨繩



か方を見て、「我々我ながらさがなき口にて候。又も啞となるべき事をつい忘れて候」といへば、蓑縄もほころびて笑ひ出しぬ。あるじ親子は心もつかず、二人をさまぐ饗應して、夜に入りければ、きよらかなる被とり出でて、二人を臥さしめけり。蓑縄はさきに入りて臥しけるに、松光は例の口きゝなりければ、臥しもせで棹丸に向ひ居し、下﨟が匠の奇なる事など、ほこらはしう物語して居たりけるが、物のついでに妹の病めるさまを問ひければ、棹丸がいへらく、「聞え出でんも我さへおもなき心地して候。まことは我妹にて候者、名は撫子と申して、ことし十四になりて候。すがたかたち人におとり候はず、こころざしもやさしく候ところ、過ぎし春人々とともに向が岡の花見にまかりて候所、ふとわかき人を見そめて後、それより心地例ならぬやうになりて打臥して候なり」といふ。松光、「さらは病根はよく知れて候を、いかで妹君の志のごとく、其わかき人を郎とはなし給はざる」といへば、棹丸、「その事にて候。かの男の家と某が家とは、累世の隙ある中にて候へば、たとひ婚姻の事など申出でたりとも、かれが方にてうけひくべき道理候はず」といふ。「その若き人と申すはいかなる人にて候か」と問へは、「作原部なる竹忠が山人と申して、世の人顔吉と呼ぶ者にて候」といふ。松光手を打ちて、「われ／＼今日逢たの山人の許にとゞまり居て候ひき。かの山



人と申すは、かたちよきばかりには候はず、心も柔和にて、學才も兼ねたる人にて候へば、たとひ古くより謂ある事候とも、まけじ心をいだきて、ねたみ怨むやうなる心をつかふ人に候はねば、此婚姻とゝのひ難しとも申しがたくや」といへば、「もし山人がうけひき候はば、おのれがよろこび是に過ぎず」といふ。扨さま〴〵の物語をはりて、各別れてふしどに入りて寢ねぬ。夜明けて起出でければ、あるじの船主、墨縄にいへは、「おのれ宿願の事ありて、たのみたる御寺の御堂建立せばやと存じ立ちて候。わ君下らせ給ふこそさいはひなれ、しばしとどまり給ひて、此堂作りて給はりなんや」といふ。墨縄がいはく、「おのれ一先國に歸りて、都にのほるべく存じて候へども、さやうに宣ふ上は、とゞまりて此御堂つくりて奉らん」といふに、船主よろこびて、「しからば下總の國に我親族の候。それがよき材木どもあまた持ちて候へば、かしこに行き給ひて、木ども選りとりて給へ」とて、俄に支度とゝのへて、墨縄いざなひて、下總の國へぞ出行きける。松光は其日竹芝がもとへ行きて、しか〴〵の由を物語しけるついでに、娘が病にかゝりて戀ひしたへる由を山人にかたりて、「かれを迎へて妻となし給ひなん」といへば、山人は顔あからめて、とかくの答だにせず。松光母に逢ひて此事をかたらへば、母涙ぐみていひけるは、「かの鹽屋の家は、我夫なる人と、もと



あつく交りけるが、持ちつたへし田を論じあらそひて、國司の廰に出でて訴へける時、我たゞふるき券を失ひて、證據とすべき物なくて、彼にまけて面目をうしなはれき。それより後、かれが家と交をたちて出であふ事をせず。夫年を經ずして身まかり給ひたれば、ますく〵疎くなり行きぬ。かれは殊に家ゆたかになりて乏しき事なし。我家は夫の頃よりやうやく衰へて、今はかく侘しきすまひしてあれば、いかでかれが家と婚姻をとり結ぶべき。亡き人の思さん所もはかりがたければ、とにかくに、鷹屋が娘を我嫁とはなしがたし」と、すげもなくいへば、松井もふたたびいふべき詞もなし。「我我かしこにしばしとゞまり居て堂つくらん程、日數へぬべし」といひて、革籠など打ちかつぎて、ふたゝび鷹屋がもとに歸りけり。鷹屋が家には、娘の病よろしくなりぬとて、人々よろこび、とぶらひに來る者たえず。娘も今日は寢所を出でて、庇の障子



明けさせて、庭の方を見出してをり。松井垣のくねより覗き見るに、此頃の病に面やせたれど、あてに美しき姿なれば、山人にめあはせなば、よき一對の夫婦なるべし、此娘がおもひ入りたる心ねもいとほしければ、いかで此妹背のなからひ、おのれ結びとゝのへてんとぞ思ひける。さて娘がゐたる所に入りて、日ごろく物語し、父主人がつくれる器などとり出でて、並らべて見すれば、娘もよろこびて、おもしろき人に思

ひけり。其日人間をうかゞひて娘がそばに寄りて、「おのれ君の心よく知りぬ。山人はもとより我したしければ、語らひあはせて後々は夫婦となしまゐらせん。まづ文をやり給へ」といへば、娘は思ひかけず、わたりに舟得たる心地して、はづかしさも忘れて、手をあはせて松光を拜みて涙をこぼす。松光いよ／＼らふたく思ひて、扨いかにたばかりけん、山人がもとへ娘が文をつかはしけるに、山人も岩木ならねばにや、やがて返言をごしたりける。此うれしきに添へていよ／＼心地さわやぎにければ、「月每に淺草なる觀世音に詣でけれど、春より病みふしてければまゐり奉らず、今日かしこに參りなん」とて、母にかたらひて、竹輿に乘りて出立つ。松光その外女男ひき添ひて出でゆきける。これはあらかじめ松光がはかりごと構へて、今日山人が方へも知せつかはして、ひそかに逢はせてんとて、かく誘ひて出づるなりけり。さて淺草に行きつきけるに、此御寺は東國第一の靈場にて、參詣の男女ひきもきらず、にぎはしき事云ふも愚なり。げにこそ薩埵の御利生いみじきしるしなれと、娘も拜み入りて、御堂を下りて、こゝかしこ立ち休らひて見めぐらせど、山人を見ず。今日あひ參らせずば、いつの時にか又あひ見んと、心一つに思ひ侘びつゝ、山の紅葉をめづるにかこちて、とかく休らひ居る程、日も西にかたむきなんとす。松光も心ならず猶立ちもとほりをれど、山人が影だに見えず。供に添ひたる男女、「はや日くれに近く候へば、母君の待ちおはしますらんを、疾く歸らせ給へ」といふ。しばしこそあれ、さのみ御寺のうちに佇むべきにあらねば、あながちに竹輿に乘らんとすれば、あなたより息をきつて走り來る人あり。松光うち見るに山人なれば、さし寄りて、「などてかくおそくは來給へる。待ちつかれて今歸らんとて、かの人ははや竹輿に乘り給ひき」といふに、山人、「今朝より母人の癪になやみ給へば、とかくあつかひて、心ならず遲くなりぬ」といふ。供の男女の目をしのべば、竹輿のあたりに寄りつくべきにあらず、何となく松光と物語するふりして、竹輿の中を見やれば、娘も本意なげに山人をうちまもりをり。月頃はへだつれど、かくあたりちかく其人を見るも夢の心地のみせられて、輿より飛び出でたき心地すれど、思ひ念じて打ちまもり見るに、春見初めしには中々ちかまさりして、うつくしき男なれば、いよ／＼わりなき思ひをぞ添へける。並樹だちたる所に來ければ、このわたりは物詣の人もすくなく、やゝ物さびしげなり。時に娘いかにしたりけん、竹輿の中にて、「あ」と叫びければ、供のものどもまづ輿を地にすゑさせてあわてあつかふ。松光驚きて、「これは月頃の病のふたゝび起りたるならん」とて、輿をのぞき見て、「正氣さらにつき給はず、此あたりさるべき醫師あらん、尋ねて來よ」

といひつけやりて、又一人の女に、「かしこの家に行きて湯をわかして貰ひて來よ。たれ〳〵は、疾く家にはしり歸りて、事のよしを告けよ。我あれば此所は心やすかるべし」といひて、皆人々を走らせやりて、いかで山人を輿の内に入れて、しばしだに物語などさせんと心をくばりけるに、輿かく男二人まだ傍にあれば、松光頭かきてさまざま思ひめぐらしけれど、此上彼等を避け遠ざくべき法もなし、いかにせんといろいろ思ひて、俄に「うゝ」と言ひてそりかへりぬ。山人も輿かく男も、おどろきて介抱すれば、松光たえ〳〵なる息の下に、ほそき聲にていひけるは、「われ心をつかふ時はいつもかゝる病發しぬ。これには酒を飲めばたちまちに癒ゆるなり。疾く酒を買ひて來よ」といへば、輿かく男一人やがて酒うろ軒をさして走り行きぬ。松光かたへを見れば、今一人輿かく男あれば、かれに向ひて、「我わすれたり。「かの酒ひとたび溫めて、それをよくさまして、再びあたゝめて持て來よ」といひつけてやるべきを忘れつ。汝とく追つかけていへ。たゞ汝等もそのついでに、酒飲みて來よ」といひて、錢なげ出して遣りければ、此男も足をそらになして走り往ぬ。「さて邪魔のやつは皆神やらひにやらひぬ。山人ぬし疾く輿のもとに寄り給へ」といふに、さすが恥かしくや、ためらひて寄りも來ず。松光いらちて、「今にも湯も酒も一度にもて來らん。敵にむかはん大將軍の、さやうにおぢ憚るべきかは」といひて、手をとりて輿の戸を明けてつき入れんとす。娘ははじめより虛病つくり居たるに、松光が人を避けてはかりごとを行ふほど、笑ひをしのびてありけるが、戸を明けて山人が顏ばかりさし入れつれば、はづかしさを忘れて、しがみつかんとする時、「湯をもて參りし」と女が聲すれば、山人おどろきて疾く飛びのきつ。松光見て、「此湯猶ぬるし、今すこしあたゝめて持て來よ」といふに、女、「いかでぬるからん。たぎり湯にて候」といへど、松光頭をふりて、「ぬるしぬるし」といへば、女はふづくみつゝ、又もとの家に走りいぬ。松光、山人が手をとりて、「まづ輿の内に入り給へ」といひさま、しひて押入れんとする所へ、輿かく男走り來て、「酒もて參りつ」といふに、山人又輿のわきに飛出でたり。松光、「此酒あまりにわき過ぎたり。かしこに持行きてさまして來よ」といへば、輿の男、「さましなんには、かしこに持ち行かずとも、爰もとにてもさめ申すべく」といへば、これにつまりていふべき事なく、又頭かきて居たるに、女も湯を持て來れば、今は術計つきてせんすべなし。かゝるに、あなたより菅笠着たる人の飛ぶやうに走り來て、笠とるを見れば、娘が親の船主なり。大息つきて、「われ[illegible]ぬしと下總よりたゞ今歸り來る道にて、召しつかふ男が走り行くを見て、事のさまを聞へば、娘が今日觀音にまうでたるに、道

中にて病おこれると聞きし、そのまゝ直にかけ来りつ。いかに心地よくなりぬや」と問ふ。松光「俄に癪のおこり給ひて大きにさわぎ候へど、今は心地しづまり給ひぬ」といらふ。船主、山人が遠くのき居たるを見やりて「かれは竹芝が子にあらずや。我家とはひまある中なり、何とて此あたりにためらひてはあるぞ」といふに、松光ひきとりて「思ひよらず只今こゝにて出會ひて、物語せんと存ぜしに、湯と酒と一時に参りて、疾くと物語も仕らず」といへば、「さてはわどの彼としたしうし給へるにや。我家は子細ありて、かれが家とは交を絶ちてあり」とて、女ばらに向ひて、「かやつに物ないひそ」といひて、不興げなる面もちす。さて輿を舁上れば、娘は涙をひと目浮けて、輿より顔をさし出して、山人が方をなごり惜しげに打見やる。頭ふるへば、挿ひし玉を誇りし簪の、ゆら〳〵とうちゆらぐは、風に散りかふ花かとも思はる。さるを見すてて別るゝは、片羽となりし雁がねの、常世に帰る心地せられて、山人は遠くたゝずみ居て、のび上り見るばかりにて、物だにいふ事ならざれば、これもそゞろに涙ぐむ。輿かく男女どもは、「くら〳〵になりぬ。いそがばや」とて、ひたすら足早に道をいそぐ。山人は猶たゝずみて、しばし見送りてありしかど、いかにともせん方なし。折から撞出す暮六ツの鐘に、心ほそさも忍びがたくて、「あはれ」とばかり言ひさして、か



へり見がちに行きなやむ。娘は輿より顔さし出して、いくたびか打見やるを、父立寄りて、「風にあたらば悪しかりなん」とて、輿の簾をさへ下しつれば、うつぶしふして泣きしづみつ。かくまでたばかり設けつるを、物だにいはせで別るゝ事、かへすぐく本意なしとなげ首して、松光も山人が方を見返りつゝ南と北へ別れてぞ行きける。拙ちあぢきなき宿世なりかし。

○うきふね

墨縄は下總の國にて、さるべき榑材木など選びとりて、筏につくらせて川へ出させ、さて船主とともに立歸りけるに、かの筏もいまだこなたに至らず、むなしく日を過さんもいたづらなりとて、ひとり船主が樓にのぼりて、例の道具ども取出でて、物つくりてぞ居りける。こゝに娘むらさきは、なま中假初にあひ見てより後、いよく玉の緒も絶ゆるばかり思ひまさりて、いかで今ひとたびの逢瀬もがなと松光を責むる。松光もいかでと思へど、此家掟きびしく、みだりに女などを外に出す事なく、又家のうちも門戸のへだておごそかにて、外よりしのび入るべき隙なければ、なまなかなる媒にかゝづらひて、中々心をぞいためける。兄の梅丸も、妹が心を知りたれば、父船主によりくすゝめて、「山人の方へ妹をやり給へ」といへど、船主ふつに承引せざれば、打歎きてぞ日を過しける。或日雪[illegible]



樓より下り來て、あるじ船主にいひけるは、「おのれこゝろみに船ひとつ作り出でたり。内にいさゝか機關をまうけ置きたれば、乗りて試み給へ」とて、下人にいひつけて、かの舟をとり下させつ。人五人ばかり乗るべきさまにて、小き舟ながら例のおもしろく作りなしつ。船主常に川に出でて釣する事を好みければ、此舟つくれるを見てよろこぶ事大かたならず。「明日は宮戸川に棹さして、釣してあそばん」といふを、松光聞きて娘にさゝやきて、「かうかうなし給へ」と教へて、おのれも其用意をぞしける。翌日になりて、船主釣竿など用意して、墨縄松光を誘ひて舟に乗らんとして、舟にこころ得たるめしつかふ男をよびて、「汝棹させ」といへば、墨縄がいはく、「人して漕せん舟は、誰が手にても作りつべし。これは機關をまうけて候へば、人の手をからずして、舟はおのづから行くべし」といふに、聞く人興ある事にぞ思ひける。娘父に向ひて、「わらはをも率て行き給へ」といふ。父頭をふりて、「女など川逍遥すべきにあらず」といひて許さざれば、松光がいはく、「これはよのつねの舟とも違ひたれば、紫どのの所望道理あり。船中他人もあらざれば乗せ給ひなん」とすゝむるに、さらばとて引連れて出で立つ。此船主が家の前は名に高き隅田川なりけり。そもこの隅田川といへるは、古よりいと大きなる川にて、業平朝臣の、いざ事とはんと詠み給へりしは、人の知る所なり。又更科日記に、「下總の國と武藏の界にてあるあすだ川とぞいふ」と記されしも爰の事なり。此日記印本あまたあれど、みな誤りありて、こゝをもふとゐ川と記しつ。これのみならず、東海道の道筋などをも、まへしりへと誤まる事あり、古本を見たる人は知るべし。さてすみだ川といふは、こゝばかりならず、出羽國紀伊國にもありて、ふるくより詠歌あり。駿河にもありと註せる書もあり。かく所々に同名あれば、古歌などをも思ひたがへて誤る事多し。萬葉集に、

まつち山夕越え行きていほ崎のすみだ河原に一人かもねん

と詠めりしは、紀伊國なる角太川なるを、爰の事ぞとおもひ誤りて、末の世には、まつち山、いほ崎などいふ名をしも、あたり近き山里の名にかうふらせ呼ぶやうにはなりぬ。これは爰にようなき物語なれば、いひさしてとゞめつ。さて船主は此すみだ川の岸に墨縄が作れる船うかめて、人々とともに船にぞ乗りける。此舟小けれど、いささか屋根めく物もありてあらはならねば、女などの乗らんには便よしといふ。されど舟狭ければ、召しつかふ者などは乗せず。船主、墨縄、松光、娘と四人ばかりぞ乗りたりける。墨縄舟の艫に立ちて、いさゝか杭のごとき物をうごかしけるに、此舟おのれとうごきて、しづかに行く事、人の漕ぐよりやすし。岸に居たる棹丸をはじめ下人

皆迄、手を叩きてこれをあやふみ見る。船主釣の糸おろして、舟の行くまゝに魚を釣りてたのしむ。さゝえなどひらきて、とりどりに酒くみかはす、いと興あり。松光われも釣せんとて、竿をとりて、餌の入りたる籠をとりて、誤りたるふりして川に打落しければ、水にしたがひて流れてぞ行きける。船主釣すべき餌をうしなひて、「いかにせまし、此あたりにて蚯蚓など掘らまし」といへば、しかるべしとて、舟縄立ちて、此たびは小さき杭をまはしけるに、舟おのれと岸につきぬ。娘ばかりを舟にのこして、船主先に立ちて岡にあがりて、彼方此方とあされども、此あたり蚯蚓など見えず。松光かねてはかりたる事なれば、「かしこにこそあらめ」などいひて、遠き方へみちびきて行きぬ。此わたりは、岸邊にはたかき葭蘆生ひしげりてあれば、行くさきも見えず。娘はかねて契りてし事あれば、わが思ふ人はいかにと岸の方をうちまもりゐるに、そ

よく〳〵と葭の音すれば、目をつけて見遣りたるに、おなうれしや、戀ひしたへる山人、衣も露にぬれそぼちつゝ、葭の中より顔さし出でたり。娘は飛立つばかりうれしくて、「さこそ待ち給ひつらめ」といへば、山人、「今朝の程より此岸につきて、舟の行くをうかゞひて、葭の中をかけ参りたれば、わびしきめ見つ」といひて、白き手を出せるが、葭蘆にさゝれて疵つきて、所々血出でたり。「われ故かばかりからきめ見給へる」いとほしさよ。まづ疾く舟にのぼり給へ。父のおはさんには松光、「疾く走り来て知らすべき」よし申しつれば、疾くこゝに入り給へ」といふ。此舟岸より一間ばかり退りてあれば、乗らんにみちなし。今日はじめて下したてたれば、忘れてともづなも附けざりけり。娘ほそき帯とり出でて、舟の舳にむすびて、帯の端を山人が方へ投げやりて、「とく舟を引寄せ給へ」といふ。山人帯の端を取りて力を出して引けば、舟こ

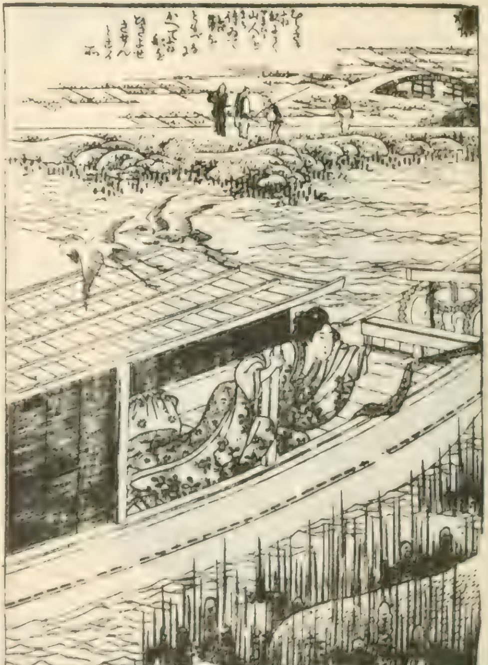
なたへ寄り来るさまなり。今や父の歸り来給はんと思へば、心も心ならざれど、又逢見ん事のかたければ、ひたすら近づきて思ふ事をもいはゞやと、互に心せかるれば、胸のみをどるぞことわりなる。山人力を入れて引く儘に、此舟岸の方へ二三尺ばかり寄り来たりと思ふに、此持ちたる帯中よりふつと切れて、山人は葭の中へあふむけに打倒れぬ。舟は此ひやうしに四五間ばかり川中へ出でたり。山人すぐに起上りて見れば、舟は水にしたがひて流れ行く。娘はわびしさ物ぐるひの如くなりて、山人が方を見てあきれゐたり。岸なる人も物ぐるはしく、葭をわけつゝ岸づたひに歩めど、舟にちかづくべきにあらねば、果て〳〵は聲をあげて、かたみに泣くばかりなり。此川上は名高き入間川にて、みなもとは遠き郡より出でて、流するどき事なるを、折から北風のはげしく吹き出でてければ、舟は矢のはしるごとく海の方へと流れゆきぬ。山人心に

思ひけるは、かゝる小き舟のたゞよひて海に出でなば、大波に打かへされて、たゞちに底の水屑とやならん、我あやまちにより契りてし人を殺さん事、罪のほどそら恐しとて、又かけ出して追行けども、葭蘆にさへられて、はや舟のゆくへも見えざれば、たゞ身をもだえて一人岸に立ちてなげき居たり。これは扨おき船主は、かしこの岡を下りて、餌になるべき蚯蚓などあまた取りて、もとの岸に立歸り見るに舟見えず。おどろきて、こゝかしこもとむれども、跡も見えねば、さてはしばしの程に、波にひかれて舟のはしりけるにこそとて、泪をながしつつ聲をあけて、「むらさき〳〵」と呼びて岸のあたりを走りありく。纍繩はすこし遲れて來りけるが、舟のゆくへ見えず、かつ船主が狂氣せるやうに立走りをるを見て、袖をひかへていひけるは、「さやうにさわがせ給ふな。此舟たとひ風のためにさそはれて、吹かれ行きぬとも苦しからじ」といへば、船主がいはく、「たゞ一人の娘を波にしづめたらんに、いかで騷がであるべき」といふ。纍繩うちわらひて、「おのれさきに馬をつくりて、松光を見失ひたるに懲りたれば、此度つくれる舟は道のかぎりを極め候て、一里の水路を走りなんには、かならず舟またこなたに向きて、歸り來らんやうに作りおきたり。しばしこゝに守りておはせ」といふに、船主すこしなぐさみて、岸に坐して待つ。松光も舟のなくなりたるに膽を



ひやしたりしが、幸藏が詞にすこし心おちゐて、川づらを目もはたたず守り居たるに筏に棹さして來るものあり、見れば下總にてあつらへ置きしおのが材木を積みて來るなれば、呼びとめて、人々此筏に乗りて見て居たるに、川下より舟人もなき舟の水にさかひてのぼり來るあり、中を見れば、娘むらさき舟底に泣きふしてをれば、人々筏を漕寄せ、舟に乗りうつりていたはる。娘は此舟のふたたび我方に歸り來るとは知らず、ひたすらに遠き方に流れゆくよと思ひて、今や身をなげんとかまへけるに、思ひよらず人々にあひて喜ぶ事かぎりなし

「不思議に娘が命たすかりぬるも、ひとへに幸藏ぬしの機關のたくみによれり」とて、いよく\尊み仰ぎて、なほざりならず奔走しけり。扨家に歸れば、母親など子細を聞きておどろき、且恙なく歸り來るを悅ぶ。娘は其まゝ部屋に入りて、頭いたしとて臥しけるが、つくぐ\思へるは、さても春より死ぬばかり煩ひて、山人君を戀ひしたひて、たまく\淺草にて待ちつけ參らせしに、あやにくなる事出來て、御顏をだによくも見參らせずして別れぬ、今日こそいかでと思ひはかりて、目のあたりちかづき奉りしに 思ひよらず綱手縄のたちまちに絶えはてて、悲しくもほいなき別をなせし事、とかくに神佛の我を見はなち給ひぬるなるべし、此後逢ひ見奉らん事もかなひ難かるべければ、生ながらへたりともかひなからん



など、さま〲と思ひめぐらしけるが、今一度父にみづからうれへ聞えて、事かなはずば其時にともかくもなり果てなんと、心をさだめて父の前に出でて、泣く〲かきくどき言ひけるは、「父母の仰を背き奉らず、みそかに男まうけんと思ひたちしは、そらおそろしき身のとがに候へども、宿世のなす所にや、思ひかへし侘びて候。いかで此おろかなる心をあはれませ給ひて、山人君の許にわらはをおくり給ひなん。かくつゝましさも忘れて、あいなき事聞え奉るも、日頃の御いつくしみにあまえたるにて、且はわりなき惑に候」とて、涙を瀧のごとくおとし、手をすりつゝ疊にうちふせば、母は悲しとや思ひけん、「さのみな歎きそ」といひて、夫に向ひて、「此事ゆるし給ひなん」といへば、父眼を大きくなし、頭右左に打ちふりて、娘をにらみていひけるは、「おのれ幼しといへども、竹芝が家、我家とひまある事はよく知りつらん。世に人もおほかるを、彼をしも戀ひそめたりとはいかなる事ぞ。ましてかれは家貧しくなりて、今日の烟をだに立て兼ねつと聞く、さやうのものに娘をやらんは、我家の大いなる恥なり。かの山人が母我をいたくそねみて、「われ横ざまに彼が田畑を所得せり」などそしり居る事、よく聞及びてあり。いかでかれに我むすめをしもおくり遣すべき。殊におのれ、親だにいまだことを打出でざるに、みづから婿を選りて、「かれを



夫とせん」などいふ事、傍若無人とやいふべき。「女のはしるは許すべからず」とは賢者の詞なり。恥を知らざる者は我も子とはせじ。疾く心をあらためずば、ながく勘當して逐ひはなつべきぞ」と、いたくうち腹立ちて、つかみかゝるべき有様なれば、母制して、娘を引立てて部屋にともなひて、様々とすかしこしらへつゝ、「われ兒とかたらひて、すべきやうこそあれ」などいさむれど、娘はたゞ泣入りて答せず。老いひがみたる父がいかり罵る聲、なほ部屋にもれ聞えて、たましひも消ゆるばかりの心地しつ。かく父のおもひ定め給へば、とても山人ぬしの妻とならん事かたし、なまなかながらへゐて憂きを見たらんより、死なんこそまさらめ、但春より病づきて、心地死ぬべくこそ覺えたりしが、不思議に病おこたりて、戀しとおもふ人に我心をも見せ奉り、ほのかながらも御顔をも見奉りぬれば、せめてこれを世の思出とすべくなど、さま〲思ひみだれつゝ、葭蘆かきわけて出でたりし面影さへ思ひ出でられて、「わが乗りし舟の行くへなくなりぬ」とて、さこそ心をもまどはし給ひけめ、つゝがなく家にや歸り給ひけん、我かく思ふとも知り給はで、今ごろは寝やし給ひぬらん、夢に見でやおはすらんなど、はかなき事のみ思ひつゞけて、音をのみ泣きて打倒れぬ。かくて夜一夜悶えこがれて、わりなく泣きしづみ居り。げに床中にたゞよふ涙には、



あたりおなじき隅田川の渡守も船寄せつべく、又かの浅草の里にありとかいふめる石の枕も浮きぬべくこそ

飛騨匠物語巻之三終

藪陰雜話卷之四

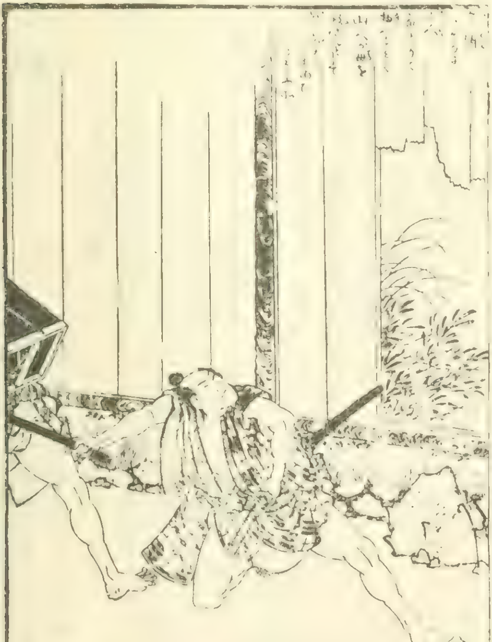
○よめの君

山人は、むらさきを船にて見うしなひて、川岸をかけ走りさまよひけれど、影をだに見ざれば、せんすべなく、心ならず家にかへりて、二三日過しければ、おとづれをだに聞く事なし。思ひなやみて、食事も咽をとほらざれば、松光が許へ人をやりて、様子をも問はばやと、ひそかに文したゝめ居たる折から、母奥より出來て、「今日は父の殿の忌日なれば、精進物とゝのへて佛前にまゐらせんとす。おこともまかなひて給へ」といへば、山人文書きさして、佛壇の塵かきはらひ御燈ともしつゝ、ふと佛の御前を見れば、小き式紙、佛の御膝の上に載せてあり。取り見れば、墨ぐろにて、「玉川にさらすてつくりさら〳〵に」と書きて、下の句はなし。不審に思ひて母に向ひて、「此式紙は常に目にふれざる物にて候。いかなる人の筆にか」と問へば、母がいはく、「それこそそこの父の御かたみなれ。其子細かたりて聞せてん。おのれはもと此家の下女にてありけるに、なくなり給ひし父の殿の、ひそかにこゝろざしを見せ給ひて、忍び忍びに語らひてけるに、本妻の聞知り給ひて、いたく腹立ち給ひければ、しばし我をば親里にかへし給ひき。其時おのれ懐姙して、ほどなく一人の男子を生みぬ。この事本妻にもれ聞えなば、いかなる事か出來なんと、薬の上より其子をば玉川なる百姓のもとに遣しつ。其時父君の筆すさみに、

玉川に晒すてつくりさら〳〵になにぞ
この子のこゝだ悲しき

と、式紙に一首を記し給ひて、半より此式紙を引裂きて、下の句は産子のまもりにをさめ、上の句の方は我にあづけて置き給ひぬ。其後本妻も死に給ひければ、憚る事なくて、われを家にむかへ給ひき。さてなんさしつぎにわぬしをも生みたりし。かの玉川の百姓も死にたえたりとて、其後おとづれ通はしつれど、跡かたもなくなりて、つかはしつる子の生死をだに知らず。もし家の内にてそだちなば、わぬしのよき力草なめるを、行方だに知らぬやうになり果てしも、あぢきなき世にぞありける」と、涙をおとしつゝ語れば、山人も父のかたみの筆のあとと聞きて　あまたゝびおし頂きて、共に涙にくれにけり。かゝるに、くり屋の方より革籠を荷ひて、庭つたひに出づる者あり。よく見れば、我家の革籠なれば、盗人ござんなれと、山人飛びおりて、革籠に手をかけて引き戻す。盗人はふりきつて行かんとするを、母行くさきを立隔てて、「白晝に人の家にいる盗賊、いかでやすく通さん」

といふ。盜人いらつて母をつきのくる。山人又寄りつきて、やらじと止むれば、盜人あたりなる棒おつとつて山人を打ちすゑつ。とりつく母をも同じく打ちすゑて、えせ笑ひつゝ頬かぶりとりて、「山人われを見知りたりや」といふを仰ぎ見れば、さきに獄屋に入りし廣岡なり。山人聲をあけて、「汝またも來つてわれに仇するにや」といへば、廣岡うなづきて、「國司の廳に引出され、汝等がために家をうしなひ、遂ひやらはれたる廣岡なれば、いかで汝等を恨みざらん。今日こゝに入りこみたるは、汝が蓄へ置ける衣類調度を奪ひとり、さて汝親子を殺さんために忍び居たり。死出の旅の用意せよ」といひさま、又ふりあげてしたゝかに打つ。母その手にとりつくを引捕へて、一間ばかり投げつけて、「疾く此世のいとまとらせん」とて、廚にかけ入りて、庖丁とつてをどり出づれば、母は表をさして逃出すを、追かけて切戸を出づるに、思ひかけず大きなる男の切戸のそとに立ち居けるが、廣岡が持ちたる庖丁もぎとり、足をあげて蹴やりたれば、あふむけに倒れけるを、乘りかかりてしたゝかに踏みつけて、「竹芝親子を害せんとする汝なれば、命たすけて置きがたし」といひさま、兩手に廣岡をかいつかみて、目より高くさしあげて、ゑいといひさま前なる川に投込みつ。廣岡は「あッ」と叫びたるまゝ、水にまかれて流れ行きしは、心地よくぞ見えたりける。かの男は老



母が手をとり、切戸を入りて、山人が打据ゑられたるをとかく介抱して、簀子の上に抱きあげて、水など飲ませてあつかふを、母はうれしきが中にもいぶかしくて、「そもいづくの御人におはして、われ〳〵を助けて給へるぞ」と、手をあはせつゝ禮をなせば、かの男母が顔をうちまもりて、ふところより疊紙とり出でて、「これ御覽おぼえおはすにや」とて出すを、おぼ〳〵しけれど取上げて開き見れば、式紙の半きりたるにて、讀み見れば、「なにぞこの子のこゝだ悲しき」と記してあり。母おどろきて、「此式紙は我つよい手跡なり。これを持ちておはすはいかなる人ぞ」と不審すれば、かの男はるかに飛びしさりて、頭をさげて言ひけるは、「おのれこそ初生の頃、玉川の百姓がもとへ遣されし、幼名はてつくり丸にて候へ」といふに、母親又おどろきて、つと側へさし寄りて、つく〴〵と顔をながめて、二十餘年はへだてぬれど、左の耳の黒痣といひ、おもざしも父君の顔に覺えたる所あり、母はわが子のてつくりかとて、抱きつきて泣き出す。山人も「思ひよらぬ兄君の御對面」と、頭をさげてよろこび泣に涙おとせば、母涙をかきはらひて、「玉川の百姓の家は跡もなく死にうせたれば、そこの行方を尋ねんに手がかりしるべもあらざれば、いかで佛神の御めぐみにて、一度はめぐり會はなんと、こがれにこがれし二十餘年、鳥の鳴かぬ日はありとも、思ひ出でぬ



時はなかりしを、などて疾く尋ねては来らざりし。今はいづこに住みてあるぞ」と聲ふるはしつゝ問へば、「さん候、おのれ五つにて候時、人のもとへもらひ取られ、かしこにて生ひそだち候ほど、かの玉川の百姓はわづらひて失せて候。かれ未だながらへたりし時、おのれに語り候は、「わどのの父は荏原郡にて酒つくりてあき物する竹芝の某殿にておはす、本妻の妬みをおそれ、我家にてそだて參らせつ、折もあらばかしこに往きて、親子の名のりし給へ」と申し置きて候所に、はからず塩屋の家の養子となり、今の名は棹丸と申して候」と語りもあへぬに、母すゝ寄りて、「其塩屋殿とはいづれの人ぞ」と問へば、「さるは我父と不和なりし、石濱なる船主にて候」といふに、母も山人も又驚きていふことなし。棹丸かさねていひけるは、「おのれ物の心を知りてより、母人をとひ參らせんとするに、養父船主どの、詞を聞けば、「竹芝の家とは仇ありて不和なり」」と承りぬ。さらば船主が子と名のりでは、母人對面し給はじ、とやせましかくやせましと、年月胸をくだきたりしに、こぞの春向ひが岡の花見の頃、廣岡が狼藉を見るより、顔をかくして其場に出でて、御兩人を助けしも、おのれなりとはよも知り給はじ。其後廣岡めにとらへられ給ひて、かれが家におはすと聞きて、いかで取返し參らせんと、廣岡が家のあたり晝夜となく伺ひしに、おもはず松光がはからひにて、塀をこえて出で給ひぬ。見るよりうれしく背におひ參らせ、此家ちかき所まで御供はいたしながら、母人とだに呼ひ奉らず、其まゝ別れ參らせしおのれが心を推察あれ」と語れば、母親、「さては兩度のうきめを救ひしはおことにてありけるか。今日のいま迄さは知らで、神佛の化現にや、有りがたき人もおはしけりと、口につけていひたりしが、神ならぬ身はおろかにも、みす〳〵おことが背におはれて、我子と知らでありけるよ。おことが孝の心とどきて、今日の危きをも遁れし上、絶えて久しき親子兄弟、對面に及びぬるは、今日の忌日の聖靈のしるべして給へるならん」と、母はさらなり山人も、持佛を拜してよろこびけり。棹丸母の前に手をつきていひけるは、「今日これへ參りしは、母人へおのれが願ふむね候。聞しめされなんや」といへば、「かく名のりあふ上からは、所存あらば何事も語らひあはせて然るべし。とく語りてあれ」といへば、棹丸涙をはら〳〵と流して、「おのれが妹にて候なるさきと申す[illegible]、山人をふかく慕ひ、春の頃より病ひつき、命も危く候ひしに、やうやく此頃病いえがたになりて候へど、戀慕の心やむことなく、しひて山人の妻とならんとせちに思ひさだめて候。あはれ母人の御慈悲に此婚姻とゝのへ給はらば、おのれが悦びはもとよりにて、妹が本望これに過ぎず。ひたすら許させ給ひなん」と、思ひ入つてねが

ふにぞ、母しばし頭かたぶけてありしが、「娘心にしかばかり我子を戀ふるこゝろざし、うけひかざるは無心に似たれど、父君の代より不和なりし鹽屋が家と縁を組みなば、なき父の御心にやそむきなん。父君ながらへおはしまさば、我もとも〴〵いさめ聞えて、此婚姻成就せんやうにあつかひ聞ゆべけれど、亡人となり給ひぬれば、せんかたもなき事ぞかし」といへば、棹丸うなづきて、「理ある仰にて候」といひつゝ、懐より封じたる一片の紙とり出し、母がまへにさし置きて、「此一品は妹が娶入のみやげの調度、目錄しるせし一通にて候。ひらいて御覧あるべし」といふに、心得ざれどひらき見れば、國司の廳にてあらそひし田畑を書きたる券なりけり。棹丸猶いひけるは、「竹芝の家と鹽屋の家爭論に及びしは、此券に記したる田畑より事おこりぬ。これを返し參らせなば、亡き父君の御魂にも、遺恨はよものこし給はじ」とく此券納め給ひ、妹がねがひを叶へて給へ」といへば、「此券我家に返しおこせるは、そこ一人の心なるべし。養父なる船主殿の、いかで是をゆるすべき」といふに、棹丸頭をふりて、「養父が心にゆるさざるを、いかでわたくしに計らふべき。とにかくに此券をさめ給へ」と、しひて老母が懐におし入れ、おもての方にむかひて、「事なりぬ。疾く〳〵」といへば、かしこに待ち居たりと見えて、石濱が下人ども、てんでに白木の臺に衣綿など載せたるを、打ちさゝげ入來て緣先にならぶれば、娶の君の輿と見えて、しづかに舁來て庭にすゑたり。母も山人も心ならず、あまりに俄の娶入にと、たゞあわてて打ちまもる。時に輿の戸をひらきて立出づる人を見れば、思ひもよらぬ鹽屋の船主なり。頭に袋の烏帽子うち着て、身には布の肩衣きて、よろぼひつゝ緣にあがれば、母も山人もおどろきて、又いかなる凶事出來ぬらんと、胸とゞろきて守り居るに、船主老母の方に向ひて、「我むすめ今日しひて婚姻の一條、棹丸をもつてさきに申入れたるに、うけひき給はりし由滿足しつ。山人にも今よりは、これまでの怨をのこさず、ながく朱陳の語らひしてたべ」といふに、老母すすみ出でて、「申さば夫婦一世のいはひ事に候を、曆だに見ず、日どりをもえらばずして、俄に女夫の盃せんはかる〴〵しく、人ももどきいひなん。こなたにてもその用意し候はんまゝ、吉日をえらび給ひてこなたへおくり給ひなん」といふを、船主聞きもあへず、「老の身は氣みじかく、若かりし時のごとくのどかに物を待つにたへず。只今これにて夫婦の盃とりかはさせ給はるべし」といひつゝ、懐より一つの位牌取出して、山人がそばに置きて、「此位牌の娶の君へ、疾く〳〵盃さしてたべ」といひさして、聲をあげて泣出す。山人いよ〳〵心も得ず、「いかに〳〵」と色をかへて問へば、棹丸かれたる聲をあげて、「妹は一昨日の夜、み

づから縊れて死につるはや」といふに、山人たましひ失するばかりになりて、何事のありて死したるぞ」と、身をふるはして棹丸が傍に寄れば、船主涙をかきのごひて、位牌を取つて打ちながめいひけるは、「十四年の此年月、春の花秋の月にもかへて、手のうちの珠と思ひていつくしみ育てつるに、はかなく見はてぬ夢とはなしつ。よく思ひめぐらせば、果報つたなき生れなりけり。心ひがみし古翁が、おしたちてのゝしりしを、うらめしげなる顔もせで、すご〳〵と部屋へ入りたりしが、胸にあまりて山人に、そはれぬ事と思ひつめて、命すてつるかはゆさよ。さばかりに思ふと知らば、まけても許すべかりしを、汝が母のわれを責めて、「娘が命生けてかへせ」と、我をのゝしるたび〳〵に、膽にこたへ骨にとほりて、五臓六腑も鮨となりぬ。げに〳〵楚山の猿の腸も、かゝるにこそと思ひ知りき。わかき娘をさきだたせ、老いさらほへるしれ者の、世にもことひて何かせん」と、位牌をつと身に添へて、いさち泣きたる血の涙は、秋の深山の紅葉ばを、時雨の染むるに異ならず。山人はたゞ打伏して、「かはゆの人の心や。互におはんと契りにし、浅からぬこゝろざしも、浅草野邊の露ばかり、言もかはさで別れにき。猶こりずまに忍びつつ、うきを宮戸の川面に、蘆分け小舟思はずも、綱手とともに玉の緒の、絶えはてしこそかなしけれ」とて、聲もそゞろに泣き



居たり。老母もともに袖をしぼりて、「さる氣あるこゝろざしを、百が一つもさとりなば、又せん方もあるべかりしに、いとほしの身の果や」とて、位牌を取つて佛壇に据ゆれば、山人立つて涙ながら、金椀に水をたゝへ、香爐にくゆらす一たきの、煙の末もなつかしと、むせかへれば、母親は、「かくみさをある聟の君に、姑よとかしづかれ、孫を生せて見ましかば、いかばかり嬉しからましを、わらはが宿世こそつたなけれ」と、又うち伏してぞ泣きにける。棹丸涙の袖をはらひて、「妹が死せるは悔いてかへらず。山人が妻となり、香花の供養受くろうへは、彼がよろこびこれに過ぎず。此上は立歸り野邊おくりして、七々の追善讀經いとなみなん」といへば、船王頭うちふり、「うき世の緻にかゝづらひ、竹芝の家と不和となれ。娘子を失ひしは、衣の裏の珠をたに、見聞の錯見たりしあやまりなりと、我はふたゝび家に歸らじ。死にうせしむすめこそ、我ための善智識なれ。今より諸國を經めぐらひ、これまでつくりし罪障消滅、且は娘が菩提のため、樹下石上を宿となし、抖擻行脚の身となりて、來世の苦患をたすからんと、疾く用意しつ。これ見てあれ」と、袋の烏帽子とり捨て、右の肩をおしぬげば、いつの間に剃りこぼちけん、まろ頭なる聖のさまにて、墨染の衣をぞ著たりける。棹丸向ひ立ちて、「理ある御發心ながら、あまり火急の御出立なり。せめて妹が七々



の法事のいとなみ過して後、旅立ち給はん事おそからじ。御供にまからんずる者の、支度用意も調はじ」といへば、「世をすて果てて出づる者の、何條供を具すべき。『家にかへりて法事修せよ』とは、理なる詞ながら、さるは親の心をしも知らぬなりけり。わかき者をさきに立てて、まめやかなる顔つくりて　いかで持佛の本尊をも見奉るべき。心の闇のたど〳〵しさは、かきくらして家路も知れねば、歸らん事は思ひもよらす。此まゝすぐ乞食して、遠き野山の露霜にそほち、雨風に身をさらして、艱難辛苦したらんは、此身の咎を娘にあがなふ爲ぞ」といひさして、涙打かむもあはれなり。かゝるに墨繩さきに立ちて、松光に物もたせ簀子にのぼりて、船主にむかひていへるは、「御發心のうへ諸國御修行と承り、御暇乞のため參りて候」といひつゝ、ふところより小き佛龕とり出して「これは拙作に候へども、降魔の像にておはしませば、途中安隱の御祈にもと奉るなり」とさし出せば、船主あまたたび頂きて取りをさめぬ。墨繩又松光に持たせし包前にすゑさせて、又いへるは、「是はおのれ殊に心をこめて作り出せし木鶴なり。長途につかれ給はん時、此鶴に乘り給はば、ただに羽うつて飛び行かんには、天竺震旦にもいたりぬべし」と包を解けば、木作りながらさながら生けるごとくにて、げに〳〵一度翼をひろげば、虛空にひいらん樣なりけり。棹丸とつて額にさゝげ、「道のつかれを忘れんは、これにますべき餞も候はじ」と、鶴をとつてさし出せば、船主墨繩に打向ひ「わ君の厚意謝すべきに詞なし。されど雲水の身には、一鉢一衣にて事足りなん。邪法幻術の外道の師なりと疑はれんも心ぐるし。しかし折角の賜物なれば、棹丸に讓りあたへて　ながき代の寶とさせてん。棹丸よく心を用ひて家ををさめて、山人と兄弟の親みうしなはざれ。我わかゝりし時にならひて、人と財をあらそひて、無益の罪をつくるべからず。いづれも堅固に世をすごされよ。さらば」とばかり言ひすてて、立出でんとする折から、表の方さわがしきを、人々おどろき見てあれば、以前の廣岡太刀拔きかざし、濡れそほちたる衣のうへに、たすき引結びはしり入りて、大音にいひけるは、「水に落ちたる報答せんと、ふたゝび爰に來て見れば、松光めも來れるよ。おのれ等日頃の我うらみ、なで斬りにしてくれん」と、太刀ふりあげて打つて入るを、棹丸得たりとかいくゞり　太刀を奪ひて廣岡が襟元をつかんで膝に引きすゑて、「こやつ、おのれが罪おのれを責むるといふ事知らぬ人非人め。生けおかば世の人のうれひとならん」といひさま、刀とり上ぐるを、墨繩しばしとおしとゞめて、「こやつ極重の惡人といへども、むらさき殿の死し給ひて、いまだ葬送も遂げられず、且父君の修行の門出といひ、この家も先人の忌日とさへ承れば、殺し給

はん事、かた〴〵につきて不便なり。されどかくのごとき者、このあたりに立ちめぐらば、いかなる仇をか仕りてん。よし〳〵我によきはかりごとあり」と、鑿取出でて廣岡をくゝりて、作れる鶴の背におはせて、縄のあまりを鶴のくび足に結ひつけて、「かゝる不當の悪人は、日本の地には置くべからず。此儘すぐに追ひはなちて、唐高麗へながし者にせん」と、木鶴の尾をはたと打てば、不思議やこの鶴翅をひろげ、一聲鳴くと見えけるが、廣岡を負ひたるまゝ、西をさしてぞ飛び行きける。雲居には廣岡が聲して、「あはれ〳〵」と呼びけるが、次第に聲も遠くなりて、霞にまぎれて見えずなりぬ。今にはじめぬ番匠が機巧のほどを、人々は「あゝ」と感ずるばかりなり。船主法師庭に下り立ちて、「我もかの鶴の如く、行くへ定めずなりぬべし」と、杖を曳きつゝ立出づる。人々も下りたちて、涙とともに門おくりして、袖をしぼりて別れけるとか。

○夢のたゝち

其頃帝の御むすめに、更衣腹にて姫宮一人おはしましける。御姿美しくたをやぎて、ありがたき御かたち人におはしければ、いにしへの衣通姫など申すはかくやありけんなど、世の人めで聞えけり。はじめ御母の更衣、里に下り給ひて御産ありけるに、古きならひにて、御屋の上に人のほりて、甑をまろばし落す事あり。女宮生れさせ給ふには北へおとし、皇子御誕生には南へ落すとか申し傳へたる。此姫宮生れさせ給ひける日、甑取りて例の如く屋の上へ人のほりける時、大空より鞠ばかりに大きに見えたる物、光りかゞやきて棟の上に落ちぬ。此人おそれて、屋の上にはらばひて、目を閉ぢてふるひ居たり。扨何事もなかりければ、目をひらきて見るに、屋の上に物あり。おづ〳〵寄りて見れば、瓢のごとき形せる物なり。いかにも故ある物なるべしとて、かの瓢をとりて屋を下りて、人々に語りてけるに、希有の事なりとて皆人おどろきぬ。其由奏聞したりければ、「よきさがにや悪しきさがにや」とて、陰陽師宿曜師はさらなり、書の博士、諸山の高僧たちに仰ありて、占ひ申すべき由敕ありけるに、「此姫宮凡人にはおはしまさず、仙佛の假にあま下りたまへるなるべし」と、諸道の勘文みな同じやうに申しければ、帝もよろこびおはしまして、末たのもしくぞ思しける。此姫宮うまれ出で給ひて、泣き給ふ事かぎりなかりければ、醫師は御藥奉り、驗者かんなぎなど、さま〴〵祈り奉りけれど、さらにしるし見えさせ給はず、ます〳〵むづかり泣き給へば、いかにせましと人々もてあつかひ聞ゆ。しかるに母御息所の宣ひけるは、「生れ出で給へる時、屋の上に落ちたる瓢こそ故あるべけれ。それを枕上にすゑて見よ」と宣ふに、とく仰のまゝに御枕上にすゑ置きてければ、さしも大きに御聲をあけてむづ

かり給ひけるが、たちまち止みて、すやすやと眠らせ給ひぬ。それより後、ねびまさり給ひても、此瓢は御かたはら放たず、常のまさぐり物にはし給ひける。此瓢と申すは、大きなるひさごを二つに切りわりたる形したる物にて、いやしき物の取りあつかふ柄杓のやうなる形せり。此姫宮たてゝ習ひ給はざれど、琴棊書畫の道々すべてくらき事なく、上手にておはしければ、「げに凡人にはおはさじ」など、人々さゝやき聞えけり。或日姫宮御手ならひしさして、机によりて打眠り給ひけるに、夢見給ひけるやう、あやしき賤の家とおぼゆる所に、日ごろ手ならし給へる瓢の庇に釣りてありければ、おどろかせ給ひて、「是は我幼き時より、かたはら放たず持ちならしつる瓢なり、いかにして此處にはあるぞ」と宣ふに、内より人出來て、「これは我家にゆゑありて持ちつたへし瓢にて候。やんごとなき御わたりには、いかでかゝる物の候はん」といふを見給へば、鄙にはめづらしくあてなる人にて、物いひたる聲もさわやかになつかしければ、しばし打ちまもりておはしけるに、かたへに匠の木どもあつかひて居たるが入來ていふやう、「御前には此あるじとふかく契おはせば、女夫になり給ひなん」とて、手を取りて奥ざまへ率て行く。此家のさま荒れて、あばらなる所も見ゆれど、さすがに調度などは故ありげにて、むくつけき田舍人の様にはあらず、心ならずそこに居給へ



れば、匠杯取出でて、かのうつくしき人を我まへにすゑて、杯くみかはしなどす。此男を見給ふに、はじめ見しよりはちかまさりして、いみじう美しかりければ、「扨もやさしき人にこそあれ、内わたりに行交ふ人人は、冠装束などこそうるはしけれ、すがたかたちは此人に似たる者もなく、われは此人の妻にてあらなん」と思す。さて打語らひておはす程、思ひかけず父御門の御聲して、「字狭くまゐれ」と宣へば、此男さわぎて走り出づ。御みづからもいたく驚き給ひけるが、汗もしとゝになりて、御目さめ給ひぬ。さるは机によりおはして、假初に見給ひし御夢にぞありける。御側にさふらひし人々、御湯など持ち參りて、「いかにおそはれさせ給ひしにか、御聲をさへあげさせ給ひき」と申す。御心のうちにも、いと思はずなる夢にこそありけれ、さるにても今ひとたびさる夢を見ばやと思して、其夜頃更に机によりて給へど、御目もあはねば、ましてて夢など見させ給ふこともなく、たゞ見しおもかけの戀しくて、そゞろなる御物思と成りて、あかし暮させ給ひけり。



）都のぼり

玉鶴は、繼主があつらへし堂作りはてて、都に上り行くべしとて、樺丸に別れて山人がかたへ来りける。山人はむらさきが死にしせしより、世中あぢきなく思ひとりて、かき籠りていみ居たりけるに、[illegible]

より、「さしたる事あり、今來よ」と呼びに來りければ、往きけるに、「そこの家、今年夫役つとむべき時にあたりぬ。疾く出立ちて京へ上るべし」といふ。是はそのかみ定れる事にて、國毎に百姓のかぎりは京にまゐりて、大内の丁となりて其職をつとむる事なり。山人いなむべきにあらねば、言うけして家に歸りけるに、墨縄、松光とく來てあれば、村長のいひつけし事を語る。母がいはく、「それはいとうれしき事なり。かかる田舍にすまひぬれば、みやびたる事は夢にだに見ず。いたづらに草樹と共に世を終らん事のなげかしくて、いつか御ことを京にのぼせやりて、やごとなき都のてぶりをも見せましと、年頃思ひわたりつるに、幸にこそあれ、まして墨縄君ものぼり給へば、道のほどもおぼつかならず。我は留守の程は棹丸がもとに行きて、御身の歸りを待つべければ、心にかけずして疾く出立ちね」といふ。墨縄、松光も共によろこびて、



とかくの用意す。其日となりて、棹丸も來りてねんごろに暇乞す。旅には例の木馬こそよけれとて、革籠など載せて、おの〲菅笠にわらぐつ履きて出立つ。棹丸は道までおくりて、母を連れて石濱へ歸りぬ。さて三人は木馬をひきて、かはる〲乗りて行きけるに、これを木作りなりとはさらに知る者なかりけり。扨夜は宿りあかつきは立ちて、行き〲て引馬野といふ所にいたりぬ。こゝは持統天皇の、「衣にほはせ旅の

しるしに」と詠ませ給ひし名所にて、いとひろき大野なり。人あまた集り居れば、たゞすみて見れば、わかき男の馬にのりて走らせ居たり。見る人々ほめ物する事かぎりなし。此男馬より下りて、ほこらはしきおももちして、人々にむかひて言ひけるは、「馬の性はよく走る物なれど、乗る人未練なれば、良馬といへどもよく走らず。世に千里を走る馬あらば、おのれが乗らば二千里を走らすべし。むかし穆王の馬は足土を踐まず、一夜の中に萬里を行きしとか。されば馬の能はたゞ走るにあり。世にいかなるあがり馬ありとも、おのれ乗りて手綱をとらんには、たゞ所に乗りすゑて見せ參らせん。すべて日本のうちに、手綱の取りやうを知りたる者なく、又馬をよく走らするものなし。見物の人々の中によく馬を走らす人あらば、こゝろみにおのれと並びて、競馬の勝負を試み給へ、おのれもし負けたらんには、此頭を參らすべし」と、うなじを叩きていふさま、いとしたり顔なり。見物の中よりわかき人出でて、かれと馬をならべて走らする物あれど、けに彼がいひしにたがはず、皆半町あまり乗りおくれて及ぶものなし。此ある人々いよ／＼感じてほめ立つれば、此男扇うち開き、臂をいからせて打あふぎつゝいひけるは、「およそ天の下に我にますべき馬のりはあらず。しかるにかゝる田舍に住める人などの、わづかに耕のいとまに痩馬に乗りたる分際にて、われと立並



てし馬を走らせんとは、嗚呼なりとやいはん、かたはらいたき事なり、いかに見物の人々、我頭はしと思さん人は、こゝに來つて走りくらべして見給はずや」といひて、高やかに笑ひて、むしろの上に丈六かきて居たり。松光にくゝ思ひて、ひそかに山人にさゝやきけるは、「此男の馬をはしらす事疾しといへども、さきにおのれ師の作りたる馬に乘りて駈けさせたるには及ぶべからす。此男あまりに人もなげにほこるが悪ければ、木馬を引出でて、かれと勝負をこゝろみんと思ふなり。されど例のごとく走り過ぎなば、もと來し道にかへりなん。とゞむべき時にとゞむべき法や候」といへは、墨繩笑ひて、「木馬の舌をとらへて前にひかは、忽ちとゞまるやうに作りてあり。されど益なきあらそひなれば無用なり」といへど、松光聞入れず、馬につけたる革籠をおろし、馬の上にまたがり、手綱とりてあゆませて、かの男にいひけるは、「宜ふがごとくならば、世に未曾有の馬のりにておはすらん。いざ勝負仕りてん」といふ。墨繩山人は笑をかくして見ゐたるに、かの男は扇をつかひやみて、松光が方を見て、「腰のすゑざま大方ならぬは、習ある人と見えて候。おのれが頭を御所望に候や」とえせ笑ひつつ、手綱とつてゆらりと打乘り、松光が馬に鼻をならべて、「いざ」といひさま駈けさせたり。松光わざと二三間おくれて駈けさせつれど、つよく綱を引きつめつれば、木馬は矢を射るよりはやく、中を飛んで走りぬ。松光馬場の埒にて木馬の舌を引きければ、案の如くとゞまりぬ。ふりかへり見れば、かの男は一町餘りおくれたり。見物の人々松光をほめとよみて、かしましきまで騷ぐ。扨馬をこなたに引向けて、のどかに歩ませて、かの男にむかひて、「不思議に勝を取りて候。さしも天下に雙なき人の、いかにしておくれ給ひし」といへば、かの男手をすりて松光ををがみて、「あはれゆゝしき道の達人にておはせるかな。おのれ七つと申す歳より馬術に心をいれて、天下に敵なしと存じ候に、君のごとき人もおはしましけり」といふ。見物のもの彼をにくがりて、「契約なれば頭をわたして給へ」といへば、かの男頭をちゞめて、「頭の一つ二つ惜しとは存ぜざれど、たゞ命の惜しく候。まして田舍人の頭なれば、都のつとには見たてなく候はん。しばしわか胴に預けて給へ。そなたにては用なき物ながら、我方にありては重寶の物にて候」と、ふるひ〳〵いふ。松光笑ひて、「今日の對面の引出物に、頭はわぬしに奉るなり」といへば、此男よろこぶ事かぎりなし。扨松光が馬をつく〴〵見て、「天晴の御馬にて候。最前よりしばしが程、いさゝか嘶きだに致さゞるは、名馬のしるしにて候。夜中敵陣を襲ひ候に、兵士枚をふくみて音を立てざる時、かやうの馬ならざれば用ひがたし。扨もかぎりなき逸物にて候」と追從するを、ある人々のゝし

り笑ふ。書綱又松光をして、木馬に革籠負はせて、そこを出でて行くとて、松光に向ひて、「かゝる戯れは無益の事ぞ」といへば、松光、「されど今日ばかりいみじく人にほめられて、面目を得て候ひき」と笑ひつゝ行く。一里ばかり行きて、山人わらぐつに足をくはれて、術なしとてなやみければ、まだ日は高けれど、此あたりに宿とらばやとて、打見つゝ行けば人の家あり。入りてしかじかといへば、妻と見えて、四十ばかりなる女の眼するどけなるが出でて、「我家人をとゞめず 外に行きて物せよ」とすげなくいふに、「足をいためたる者の候ひて、歩みなやみて候。いかで許させ給ひて、一夜明させ給ひなん」といへば、かの女大きなる聲して、「心なき旅人かな。とめじといはば疾く出でて行くべきを、あながちに何をかいふ。とく出でて行きね」といひさま、人々をつき出して戸おしたてつ。人々は、扨も情知らぬ女かなと思へど、せん方なければすご〱出でて行くに、又戸の内より聲して、「旅人まづ待ち給へ、申すべき事あり。こち入り給へ」といふに、入りて見れば、あるじと見えて、六十ばかりの翁の眼盲ひたるがはひ出でて、「足を病み給へる人のおはすとや、心ぐるしき事なり。とゞめ參らせん。疾く〱藁沓をとき給へ」といへば、女は腹立ちて翁をにらみて、「今宵は草飼どのも來んと宣ひしに、旅人をさへとどむべしやは」といふ。翁耳にも入れで、奥の方を指さして、「かしこに離れたる家あり。入りていこひ給へ」とて、童にいひつけて人々をいざなはせ、又同じ童に、ゆふげのまかなひなどさすめり。人々は一間に入りて、主がこゝろざしを喜びていひはやす。松光木馬をば庇の外に繋ぎて、革籠取りて奥に入らんとする時、表の方より人入來たり。この男は大野の草飼とて、此女の兄なり。生れつき邪なる者にて、ぬすびと心ある男なり。妹を此主に遣りて後、翁が財多く、田畑などあまた持てるを見て、我物にせばやと思ひて、かねて妹と計りけるに、妹も老いたる男を厭ひて、兄とひとつに成りて、財ども奪ひて此家を逃れ出でんの心有り。扨この草飼入來て、妹とさし並びて翁に向ひて居るを、松光目をつけて見れば、さきに引馬野にて馬を走らせあらそひたる男なりけり。驚きながら知らず顔つくりて、聞耳たてて居れば、草飼女に向ひて、「奥の客はいづくよりぞ」といへば、「見も知らぬ旅人を翁のとめられしなり」といふ。草飼眉をしかめて頭をかけば、女硯を取出でて、何事をか紙に書きて見すれば、草飼も又筆とりて書きつけなどす。互にいくたびか思ふ事を書きかはして、見つ見せつするを、翁はさらに知らず。松光この兄と妹が擧動あやしく心得ぬことよと打守り居たり。しかるに、表にかの男の乘り來る馬をつなぎ置きたるが、俄にくるひ出でていなゝきければ、草飼も女も表の方に出でて見る。此

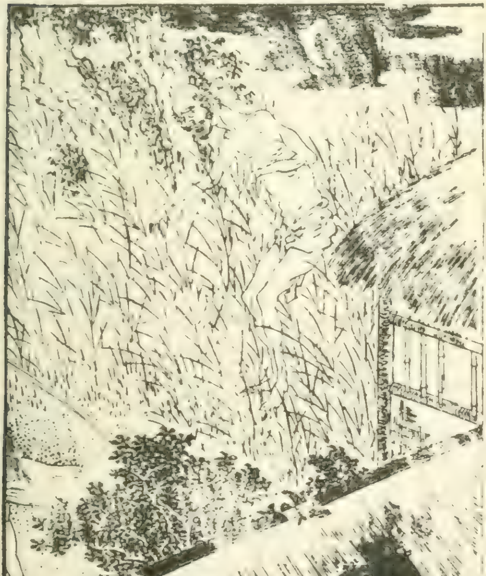
ひまに松光ひそかに出でて、主のかたはらなる文どもとり來りて、山人に、「讀みて見給へ」といふに、開き見れば、草飼が手と見えて書きつけたるは、

折あしく旅人をとめつ。兼てのはかりごと今宵は行はれじ。

と書きてあり。又女の手にて、

旅人は別屋に臥したれは、よも知る事あらじ。今宵の内にともかくも計らひ給へ。明日とならば、翁が子の旅より歸り來べし。しかばねは海に入るべければ、人知る事あらじ。

と書きてあり。墨繩もとり見て驚きて、「扨は此男女いひあはせて、翁を殺さんとするなるべし。惡きやつかな。いかで此由翁に知らせてん」などいひ居たるに、童ゆふげもて來て人々にすゝむ。翁壁をさぐりつつ奥に來て、「參らすべき物も候はず。折ふし子なるものの旅にまかりて候へば、萬たいだいしく、心にまかせ候はず」といふ。墨繩翁を片隅にまねきて、壁をひきくなして、かうかうの事ありと告ぐれば、翁驚きていひけるは、「彼はおのれが妾にて候。此事われも日頃うたがひ思ひ候へども、彼等かばかりの巧せんとは思ひ候はず」とをののけば、「まづ知らず顔つくりてゐ給へ。おのれはからふべき事あり。かうかうなし給へ」と教へければ、翁はふし拜みてあなたへ出でぬ。墨繩革篭より斧鋸など取り出でて、一時ばかりして何をか作りけん、出で



て松光にさゝやきて、「しかぐ計らへ」と教へければ、松光ひそかに出でて、草飼が馬ある所へ例の木馬を引き行きて、鞍手綱をも取替へて、草飼が馬をば裏の方へ引結ひてつなぎ置きぬ。あるじの翁は、宵より閨に入りて臥しつ。玉縄は山人にさゝやきて、「今宵は寝ねたるふりして眠るべからず」といひあはせて、互にそらいびきかきて臥し居り。夜もふけて丑にやなりぬらんと思ふ頃、草飼表の方よりおき出来て、厨に臥したる女にさゝやきて、足音を忍びて主がふしどに入り、太刀引抜きてうかゞふに、よく寝ねたると見えて息だにせざれば、しずましぬと飛つかゝりて、胸のあたりをさし通せば、手足をもがくのみにて声をだに立てず死してけり。女革葩を持来りて、死骸を入れんとして、草飼とともに死骸の腰に手をかけつれば、思ひかけず主の死骸むくくと起上りければ、「わッ」といひて女も草飼も表の方にかけ出す。此死骸手くび打振りつゝ、倘追ひて表の方へ出づれば、おそろしくて魂も身にそはぬ心地して、戸をおしあけて駈け出でぬ。女も同じく走り出づれば、草飼あわてたる中にも、ひさしの外に繋ぎたる馬ひき出し、女をもかき乗せ、我も尻に打乗りたるに、此死骸猶追来ぬる心地すれば、疾くこゝを遁げばやと、手綱をつよく引きつれば、馬は東をさしてぞかけ出しける。幽霊も追来ぬ様子なれば、馬をしづかにやらんとすれど、此馬しばし



もためらふ事なく、一文字に走る事たとふべき物なし。女は幽霊よりも此馬に魂をうしなひて、消入るばかりになりたるを、男は引きとらへつゝ馬の走るにまかせけるが、天龍川といふ川に入りける時、目もくれまどひて、二人ともに水に落ちてぞ死しける。馬は川をわたりて、猶東をさして駈け行きけるとぞ。さて墨縄山人は奥より紙燭さして表に出でて見れば、案のごとく女と草飼は見えず。庇の下なる木馬もあらねば、「扨は謀の如く、草飼めは木馬におはれて走りつるならん」といへば、山人、「かならず川に陥りて命失ひぬべし。心からかはゆき事なり」といふ。松光こなたの方よりあるじの手をとり出でて、「宵にひそかに校倉へともなひて、ともに今まで忍び居たり」といふ。翁は、「まことに不思議の命ひろひ候事　よろこび聞え奉らんに詞もなし」とふしをがむ。松光月かげに向ひなる方を見し、「かしこに人の立ちて伺ひ居るさまなり。もし草飼めが立帰りつるならずや」と、つかつかと走り行きて、後よりむずと抱きて、「汝は草飼にや」としめつくれば、此人いらへもせで手をふれば、「草飼にあらぬとならば物をいへかし」といひつゝよくよく見れば、昨日墨縄がつくりつる木偶にて、主の翁のかほを其まゝにうつし彫りたるなりけり。是は松光宵に翁を閨より引出して、かはりにこの木偶を入れおきしが、機関を用ひてこの木偶のおのれと歩み出でんとは思はざりし」とて、手をたゝきてぞ感じける。夜あけぬれば、人々立出でんとするに、翁ひたすらに留めけれど、「かぎりある旅なり、又こそ」と契りて、松光に革籠荷はせて、別れて京へぞのぼりける。此翁は榛原の某とて、昔より爰に住みて、ゆゑよしある百姓なりとか。かの木偶は、其のち此わたりの寺につたへて、飛騨の匠が幽霊の像とて什物となしけるが、後の世の兵火に跡もなくなりて、今は其寺の名だに知るものなし。惜むべき事なりかし。

飛騨匠物語巻之四終

飛騨匠物語巻之五

○ひさもんてん

猪名部の墨縄は都にのぼりつきて、山人に別れて、所々貴き所を順禮して、五畿内のあたりをも經めぐりけるに、所々に堂社の造營あれば、一日二日とゞまりて、匠等が手にあまりつる事どもを作りて、力をたすけつかはしける。常の匠どもが五十日も手間どるべき業を、一日ばかりに作りてければ、あざみ驚きてほめのゝしる者多くて、墨縄が名ます〳〵世に高くひゞきける。松とち師となしてさる人を附添ひ居りければ、今は比類なき上手の匠とぞなりける。墨縄かく所々ありきて、半年ばかりを經けるが、山人が身の上おぼつかなければ、例の供人を具して、又都へのぼりて山人を尋ねけるに、山人は大内の火焼屋の衞士となりてありけるに、行きあひて、しばし打語らひて居けるに、年老いたる衞士の出來て、山人を見て打ちにらみて、「此若者、今朝より御庭のわたり掃きよめよと言ひつけつるに、其役はなさで人と物語して居り。常に力なきにかこつけて、物をはか〴〵しう爲さず。よろづ物うげにふるまふ若者かな」といひさま、つか〳〵と寄り來て、拳をあげて打たんとするを、墨縄とゞめて、「宜ふ事ことわりなり。今日はおのれたまさかに彼をとぶらひ來れば、思はざる長物語に時をうつして候。ゆるさせ給へ」といへば、この衞士猶うちにらみて、「老いたる者をばさのみなあなどりそ」などつぶやきつゝ、あなたざまへ往ぬ。山人涙をながしていひけるは、「かれは宗彦と申す衞士にて、腹あしきやつにて候。老人だてら色をこのみ候て、おのれにもさま〴〵ふさはしからぬ事ども申して候を、うけひかざれば腹だち候て、常にかく口を絶えず罵りしかりて候」といふ。墨縄、「さる事にこそ。今しばらくの憂を忍ばば、ふる里に歸り給ふべければ、ふかく念じて日を過し給へ」などいひ居たるに、かの宗彦又出來て、「今宵御あそびあれば、とく木葉とりのけよと、小櫃の申されしを知らぬか。おこたるも時によるぞ」といふに、墨縄も心ぐるしくて、とく別れて出でて歸りぬ。歸る道にて、匠ども二三人ばかり打連れて、むかひの方より來るをよく見れば、同じ里の者どもなり。「いかにや」といへば、此匠ども悦びて、「われ〳〵百人ばかり召されて、武樂院の造營つかうまつり候所、此頃疫病にわづらひて、五十人ばかり枕をならべて打臥して候。つかさふりはかぎりある日數のさだめ候へば、定めのごとく作り出でず候はゞ、いみじき罪にや行はれんと、やすき心もなくて候。只

今も病者等が薬もとめんとて、醫師のもとへ参る道にて候」といへば、墨縄がいはく、「扨は心ぐるしき事なり。同國の人々の、さやうにくるしみ給ふをよそに見ん道理なし。おのれ力をそへてともぐ\造營つかまつらんはいかに」といへば、匠等、「さてはうれしかりなん。さらば共におはしてたすけて給へ」とて誘ひて行く。墨縄匠どもが臥し居る所に入りて見るに、病にたへでうめき居るさま目もあてられねば、先ふところより茘枝とり出でて、煎じさせて飲ます。扨内匠づかさにも其由うつたへて、翌日より墨縄、松光、造營の役所に入りゐていとなみ作る。しかるに五十人ばかりの病者ども、「茘枝を煎じて飲みけるより、精神さわやぎ病をも忘れぬ」とて、みな打つれ來て墨縄によろこびをいふ。墨縄が修練工夫は凡人の知るべきならねど、「此たびの造營、百人の匠等が集りて、一年を經とも成就こゝろもとなし」といひあへりしに、墨縄、松光が入來てより、三十日を經ずして、此造營のこりなく出來て、しかもこまやかなる彫物など、草木鳥獸のかたちまで、生けるがごとく作りなしければ、あらゆる匠どもはさらなり、匠づかささへ見驚きて、「實に凡力にあらず、神仙の下り來給へるなるべし」といひてほめ合へりけり。かくて都にすまひて、こゝかしこの寺社の造營ある所に到りて、匠等に交りて其職をすけつかはしける。其頃百濟國より繪をよくする



人來たり。此繪師、飛驒が許に神妙なりと聞きて、ねたき事に思ひて云ひけるは、「飛驒たとひ匠の道に妙なりとも、我繪には及ぶべからず。かれをおどして見ん」と云ひて、一日飛驒を呼びにやりけるに、飛驒使と共に來りて、廊のある遣戸を引明けて入らんとするに、壁に黑み脹れくさりたる男の臥し居るさまを畫きたり。扨は我をはかりて、其道にはこらんとするなりけり。かれも世に知られたる人なり、恥見せんは中中なりと思ひて、鼻に袖をあてて、「あなむづかし。たへがたし」といひて迯出でて歸りぬ。其後かの百濟人これを人にかたりて、「飛驒がたくみ、我繪には劣りぬ」とて誇りけるを、飛驒に告ぐるものありければ、飛驒笑ひて、「さらばいさゝか其報答せん」とて、百濟人のもとへ使をやりて、「あからさまにおはせ」といひやりければ、やがて來りける。使のもの小き堂のそばへ案內して、「これより入らせ給へ」といひすて



て、堂のうしろの方へ入りぬ。此堂四面の戸みな開きてあり。百濟人緣にのぼりて南の戸より入らんとすれば、其戸ははたと閉ぢぬ。おどろきめぐりて西の戸より入らんとすれば、其戸はたと閉ぢて南の戸は明きぬ。北の戸より入らんとすれば、その戸は閉ぢて西の戸は開きたり。東の戸より入らんとすれば、其戸は閉ぢて北の戸開きぬ。かくあまたたび入らんとするに 閉ぢつゝ開きつして入る事を得ず。ねたき事かぎりな

けれど、せんすべなければ、立歸らんとするに、はじめ入りたる門はとざして鎖おろしてあり。こなたに小き門のあきたるあれば、かしこよりと思ひて行くに、此小門のもとに横はりて人臥して居り。見れば　はれ腐りてきたなき男の死したるなり。匂さへ鼻をうちて堪へがたかりけり。されど、此門より外に出づべき道もなければ、裾をかゝげて、此男をまたぎて通らんとするに、此はれくさりたる男、手をあげて百濟が裾をとらへつ。振りはなさんとすれどはなさず。くさき事はじめにまさりてこらへ難く鼻をおさへつつ聲を立てければ、墨縄おくより出で來て、「何事ぞ」といふ。百濟がいはく、「此きたなき人のとらへて放ち候はず。くさき事たとふるに物なし」といへば、墨縄、「いかでさる事候はん」とて、此男を引きたてて見するを、よく見れば、木にて作れる物にて、いさゝか臭き香もせず。「扨は我心のなしにてくさしと思ひけるよ」と、初めて心づきぬ。扨迯げかへりけるが、此事のねたく口惜しかりければ、人に逢ふごとに、「墨縄邪法幻術を行ひて人の目をくらます物ぞ」といひ歩きければ、其事檢非違使の廳に聞えて、「墨縄召しとりて問注すべし」とて、廳に召されぬ　墨縄思ひよらぬ事なれば、さまぐ\あらがひけれど、此つかさ恐なる人にて、曲直をわいためず、やがて獄に入れけり。山人、松光、此事をつたへ聞きて、うれへ歎く事大方なら



ねどせんすべなし。時に帝御風の心地とてうち臥させ給ひけるが、御惱日にましておもらせ給ひ、御物怪のやうにておそはれさせ給へば、有驗の高僧貴僧など、壇をつくりて黑けぶりを立てて祈り奉れど、いさゝかおこたらせ給はざれば、雲の上天の下のなげきにてぞありける。其頃女一の宮の御母御息所の里第の中門のまへに、あやしき乞食法師物乞ひて居たるに、中間ども帝の御惱しきりなる事など物語し居たるを、此乞食法師打聞きて、「我守り奉る御佛にこそ祈り給はめ」と何となく打いひて出づるを、中間男等耳にとめて、引留めていひけるは「御法師が守り奉る佛の、帝の御病いやし奉らんとや。諸寺諸山の驗ある法師たちの祈り給へどしるしおはさぬを、いかで乞食法師の身にて、おふけなき事をばいふぞ」といへば、此法師ふりかへりて、「住む寺の大きなると袈裟衣のうるはしければ、貴き法師と思ふにや」といひすてて出でて行く。



此事傳ふる人のありければ、御息所聞かせ給ひて、「其法師召せ」とあるにぞ、侍ども五町ばかり追行きて、ひき連れて來れば、庭に入れ給ひて、簀子にのほせて御覽ずるに、色いくちきたなげなる法師なり。「わ法師が申す所床しければ召しつるぞ。帝の御病おのれいやし奉らんや」と宣へば「必すいやし奉るべし」と事もなげにいふ。「さらば内裏へ參りなん」とあれば、「いかでか參らん。乞食の身に候へば、かしこし」と

いふ。「さらば爰許にて御祈り仕まつるべくや」とあれば、「御祈り仕まつるまでも候はず」といひて、頭陀袋より小き佛龕一つ取出でて、打捧げて申しけるは、「此御佛を守り奉りて、國々の寺々に順禮して候に、道すがら病者を見れば、此本尊をひらき拜ませて候に、一人としてとみに病癒えざる者候はず、世に希有の靈佛にておはす。この御佛龕開きて、帝の御枕上にすゑさせ給はゞ、其しるし候ひなん」と申す。「いとうれしき事なり。とく此佛内に奉れ」とて、御使出でたゝす。さて、「法師をばかしこの曹司に入れて、物くはせよ」など仰せあるほど、此法師いづちいにけん、行方見えずなりぬ。人々こゝかしこもとめけれど、行方知れざりけり。扨御使は内に參りて、内侍のかみへしか〴〵と聞ゆるに、内侍此御佛龕をとりて御屛風のもとへ出づる。其時帝の御夢に、おそろしき鬼どものあまた集りてなやませ奉るを、わびしと思し入りたるに、あるかぎりの鬼ども、俄に手まどひして騷ぎふるひていひけるは、「墨繩が作り奉れる毘沙門天入り來らせ給ふ。いかにせん、とく迯出でよ」といひさま、木の葉の散るやうにはら〳〵と外の方へ迯げて出でぬと思して、御目さめて御覽あれば、只今御枕上に佛龕ひとつすゑ奉りてあり。御心地ことにさわやがせ給ひて、「此御佛いづくより參らせし」と宣ふに、「女一の宮の御息所より」と聞え奉れば、やがて手水めして、佛龕を開かせ給ひて、「扨は夢に見しにたがはず、降魔の尊像におはす」とて、あまたゝびおしいたゞかせ給ひて、「墨繩といへる者今世にありや、民部に仰せて疾く聞け」と宣ふ。其夜になりて、「猪名部の墨繩と申す者、飛驒の國の匠にて候が、今獄屋にこめて候」と申すに、帝驚かせ給ひて、「とく呼べ」と宣ふ。女一の宮も、帝の御病おこたらせ給へるを喜びて參り給ひ、かの御佛龕持來れる法師の事など聞えさせ給へば、帝御涙おとして感じ給ふ。しばしありて、つかさ人墨繩を率て階下にかしこまる。帝かの佛龕を開かせ給ひて、「これは汝が作れる御佛にや」と問はせ給ふ。墨繩、「さん候」と申せば、「さるは何者につくりて與へつる」と問はせ給ふに、墨繩答へけるは、「おのれ武藏の國に候とき、石濱なる蘆屋の船主が爲に作りてあたへ候。いかにして御門の御わたりには參りて候にか」と答へ申す。扨事の子細くはしく問はせ給ひて、「世に稀なる匠なり。まろが代にかゝる者の出來たるは、末の世のためには、まろさへおもておこしせる心地す。かゝる者を囚に籠めたるはいみじきあやまり」とて、別當を勘じ給へば、別當面目を失ひて引籠りぬ。帝御よろこびのあまり、墨繩をば直さま匠づかさに任じ給ひ、寵敬し給ふ事大方ならず。墨繩此ほどの苦に引きかへて、面目を得てまかり退きぬ。山人、松光も待ちつけ居て、よろこぶ事いへば更なり。かの百濟

人は、おもなくや思ひけん、行方なく跡をかくして逃げ行きぬとぞ。此百濟人を今昔物語に百濟川成と記せるは、つたへの異なる者なり。又飛騨の匠とのみ記して姓名を記さゞるは、いかなる故にかいぶかし。

○よゐの法師

更衣ばらの女一の宮は、年ごろ佛の道をのみしたはせ給ひて、いかで思ふごとく髮をもおろし、山寺にかきこもりなん」と、常の御口あそびにも宣へるを、父帝、「あるまじき事なり。わかき心にさやうにおもむけ給ふとも、後に悔い給ふ時あらん」と宣ひて、ゆるし給はぬを、中々うき事に思して、春風の花紅葉を御覧ずるにも、たゞ世の常なきをのみ観じ給ひて、朝夕御珠數をはなち給はず、行ひなれたる尼君のやうにて過し給ひけり。姫宮のかう思しつめておはせば、父帝もあながちに、御聟の君をもたづねさせ給はず。「御心のあらたまりて、世づきて見え給ひなば、其折にこそせめ聞えめ」とてしひても宣はざりけり。姫宮の御心には、まことは去年の晝寢の御夢に、をかしき人を見給ひてより、一筋にこひしとおもひ給へども、はかなき夢のおもかげのみにて、さだかに世にある人としも定めがたし。たとひ似たる人ありとも、所せき身にはいかで逢ひ見んよすがあらん、なまなかに生きとまりて、心につかぬ夫まうけて、あぢきなき世にあらんより、尼となりてこそあらめと、ひたすらに思ひ定めてぞおはしける。帝は飛騨を愛し給へるあまり、常に御かたはらに召して物造らせて御覧ず。あまた造れる物の中に、をかしき猫の生きたる如くはたらくを、いたくめでさせ給ひて、飛騨にもたせて、姫宮の簀子近うまゐらせ給ふ。女房達此猫をとりて、姫宮に見せ參らするに、「ざれ走るさまことの猫にたがはず」とて、いたく興じさせ給ふ。飛騨人々の笑ひ興ずる聲のさわがしければ、何となく御簾の間よりさしのぞき見奉れば、繪にかきたらんやうなる姫君の几帳に添ひておはします。御かたはらに、大きなる瓢の螺鈿の臺にすゑて載せてあり。目をつけて見れば、仙界にて見し瓢にたがはず。若きおもと人の、櫑子に菓子もりて飛騨が前にもて來るに、「あの瓢はいかにして得給へりし」と問へば、「姫宮の生れ出で給へりし時、御産屋の棟に落ちたれば、取りをさめ給ひてより、常に御傍はなたずまさぐり物にはし給ふなり」と答ふ。扨は此姫宮凡人にはおはせざりけりと思ひて、まかり出でて後、男の仙人のかたちを其儘にうつしとりて、姫宮の許に奉りぬ。姫宮此像を見給ふに、去年の夢に、ゐなかにて語らひしと見給へる男のかたちにたがふ所なければ、大きに驚かせ給ひて、飛騨を簀子に召して「これはいかなる人のかたぞ」と尋ねさせ給ふ。飛騨がいはく、「此人形は宮に住ませ給ふ御男君にて候」と申せば、姫宮そゞろ

によろこばせ給ふ中に、思ひめぐらし給へるは、讒いかで我夢を知りたるならん、思はずなる事にこそあれとて、かへすがへすいぶかしう思ひけり。扨又火たき屋に居る山人は、日々に宗彦にさいなまれて、からきめをのみぞ見ける。今日も宗彦がしりにつきて、御庭のくま〴〵帚もて掃きありきけるが、あやまちてつまづき倒れて、御階のもとなる薔薇の小枝を折りけるを、宗彦見るより立ちかゝりて衣のくびをとらへて、「心なしの乞食よ。上の殊に惜ませ給へる物を、おのれ足のさきにかけて折りさきたる、叛逆の罪人なり」といひさま、拳もてしたゝかに打つ。山人くるしければ、「これもあやまちなり。許させ給へ」といへば、「おのれ人の手足に疵つけて後、あやまちなりといはんに、人ゆるすべきかは。利口げにいひまはすこそ憎けれ」とて、落ちたる箒の柄にて又したゝかに打つ。烏帽子も落ち白丁もやぶれて、額のあたりより血はしり出でて、衣さへあけにそまりぬ。まろび倒れて臥しゐたる背中を、足をあげてしたゝかに踏みにじりて、「きみよし〳〵」といひつゝ、火たき屋の方へぞ出でて行きける。山人は一時ばかり心もつかで伏し居たるが、やう〳〵心づきけれど、強く打たれければ立つ事かなはず、息きれて苦しければ、御階のもとに雨だりの水のたまりたるを、ゐざり這に這ひ寄りて、手にむすびて呑むとて、水にうつれる我顔を見れば、眉間やぶれて顔も血にそまりてあり。おもへば口惜しとて、やぶれたる袖を顔におして、さめ〴〵と泣きゐたりけるが、思ひあまりて聲をあげて、ひとりごとに言ひけるは「などやかく苦しきめを見るらん。我國に七つ三つ作りすゑたる酒壺に、さしわたしたるひたえの瓢の、南風ふけば北になびき、北風ふけば南になびき、西ふけば東になびき、東ふけば西になびくを見ては、心もうきておもしろかりしに、いかなれば還き世界にたゞよひ來て、かくてあるよ。かの瓢はいかになりぬらん」など、ひとりごとしてつぶやきつゝ、又聲をあげてぞ泣きにける。此折から、女一の宮は御簾のもと近う御座參りて、御簾あげさせて御庭の方を見出しておはしけるに、山人は露も知らで、つぶやき〳〵泣き居たるを御覽じて、そゞろにあはれを催し給ひて、「此男の斯うひとりごつは何にかあらん。あはれにいとほしき心地ぞする。いかなる瓢のいかになびくらん、いとゆかしうこそ思はるれ。あの男こち寄れ」と召しければ、あまたの御達口々に、「御前の召させ給ふぞ。その男こち參れ」といふに、驚きてふり仰ぎて見かへれば、やごとなき女房達あまた並びてゐ給へり。其中にことにあてやかに美しく見えさせ給ふは、女一の宮にてやましますらんと見奉る。姫宮も山人と御目見あはせ給へるに、去年の夏御晝寝の夢に見給ひてより、忘るる間もなく戀しと思しゝ其人にまさしくた

がはず。まろび下りて物いはんとまで思しけれど、人々の目をはゞからせ給ひて、しばし物も宣はで、つく〴〵と打守りておはしぬ。山人もすこしゐざり寄りて見あげ奉るに、心まよふばかりになりて、しみ〴〵と御顔を見奉る。ともに代をこそへだて給ひぬれ、契ふかき謫仙にしおはすれば、自然に心にしみて、なつかしと思しかはすなるべし。人々の、「こち来よ」とあるを幸に、御階ちかう這ひ寄れば、「いひつること、今ひとかへり言ひて聞かせよ」と仰せらる。山人酒壺の事を今ひとかへり申しければ、姫宮御夢の事を思しあはせ給ひて、御かたはらなる瓢をとり給ひて、「風になびける瓢といひしは、かゝる物にや」と宣ふ。山人のひ上り見て、「これに聊たがひ候はず。但しこれよりは今すこし大きやかにて候。男女にこそ候はめ、これは女の瓢とも申すべくや」と申せば、打笑ませ給ひて、又かの人形とり出させて、「これ見てあれ」と宣ふ。山人よく見れば、我かたちをさながらうつし取りたる人形なれば、あやしと見るたるに、御かたはらの女房のいひけるは、「此人形は此衛士が顔におぼえたる所あり」といへば、女房たち山人を見て、「いかでかゝる人の衛士とはなりたらん」と、かしましくめで褒むる。山人、「此人形は飛驒の墨縄や作り候ひけん」といへば、老いたる御達の出でて、「汝墨縄を知れりや」といふ。山人、「墨縄は我兄とたのみたる者にて候」と申せば、手をうちて、「さては衛士にてあるべきならず。此由奏して、彼をば墨縄ぬしの許につかはしてん」などいふ。姫宮御さかづき賜はりて、猶ひたすらに他見もせでうち守りおはすに、物うちいひたるけはひなど、此世の人とも覚えず。ゆかしさかぎりなくて、久しく入り給はでおはすに、人々、「日くれて候ひぬ、入らせ給ひなん。御格子まゐりなん」などいふ。姫宮山人に目をくはせ給ひて、「奥山の横の板戸をとゞとして」と宣ふ時、御乳母立寄りて、あながちに御簾おろしつ。人々も立ちてそゞのかし奉れば、心にもあらで、しぶ〳〵に奥に入り給ひぬ。山人は鬼に神とられつる心地して、猶御簾の内をうかゞへど、名ごりなく入りぬと見えて人けもせず。おふな〳〵いかでと思へど、身の賤しきをかへり見れば、かたじけなくも嬉しくも、おふけなくも様々に思ひめぐらされて、たゞ涙おちぬ。思ひめぐらすに、「奥山の横の板戸」と宣ひしは、「忍びて来」と宣ふなぞ〳〵にや、なにもあれ、子細こそあらめとて、猶立去らで御階のもとにうづくまり居ぬ。亥過ぐる比にや、おもと人の聲して、「御猫の見え候はず。こゝもとに出でつるにや」といひつゝ戸を開きて、御階のもとに出でて、山人がもとに寄り来て、聲をひそめて、「そこにおはすにや。まづこれ著給へ」といひさま、たゞさへたる法師の衣うち著せ、頭巾に顔かくさせて、「もし

人とがめなば、『夜居の僧ぞ』と答へ給へ」といひて、手をとりて御階にのぼり行く。山人おそろしけれど、導くまゝに入りて行くに、人々は皆寢たるにや、屛風など立てたる所をあまた過ぎて、長押ある所にのぼせて、此おもと人はあなたざまに出でぬ。山人入りもやらでためらひてあれば、そらだきの薫いみじく匂へるは、姫宮の御座所なるべし。御顔さし出でて、「こなたに」と宣へば、おづ〳〵御衾の上に這ひのぼりぬ。山人もとより類なきみやび男ながら、今日宗彦にうたれて、雪のやうなる手足も、土にくろみてむづかしきに、あらぬ衣をさへ著たれば、我さへはしたなき心地すれば、姫宮のいかに思すらんと氣ものぼりて、ほどほど堪ふべくもあらず。姫宮は、去年の御夢がたりをはじめて、月頃の御思くづし出でて宣ひつゞくるに、こなたも思ひよらぬ瓢の家に入り來りし事など聞え出でて、「さては此世ならぬ縁なりけり」とて、打語らふ程に鷄も鳴きぬ。例のおもと人來て、又手を引きて、よべの戸よりおし出しつ。これを初として、かう忍びつゝ參りかよふ事日頃になりぬ。されど知る人もなかりけり。此夜居の僧と申すは、昔物語にもあまた記せる事にて、御持佛堂に信じ給ふ法師を入れて、夜すがら誦經させて、護身の御祈せさせ給ふ、これを御持僧とも申すなりとぞ。此頃參れる法師は横川のわたりの人にて、母御息所の御このかみの宰相とかや



申せる人の子にてぞありける。姫宮とは御族にておはせば、へだてさせ給ふ御なからひならず。かつ行ひいみじき人なればとて、此法師を外にして、年頃夜居の僧とはたのみ給ひける。しかるに此法師、おもてはいと殊勝なる顔づくりをして尊げに見ゆれど、心ひがみて、法師だてらいみじき色ごのみにてありけるが、おふけなくもいつしか此姫宮を思ひ初め奉りて、深くあくがれけれど、つや〳〵色にも出さでありける。思ひあまりけん、えつゝみおほせで、ある時法問の事聞ゆるついでに、几帳のひまより結びたる文をさし入れつ。姫宮あきれて投げかへし給ひける。かゝる事たび〳〵になりけれど、一族の筋なれば、人聞も苦しくおぼして人にも宣はぬを、此法師たのみ所に思ひて、折々御衣の裾などを引きうごかす事あまたたびなれども、姫宮は知らず顔つくりておはしぬ。或夜法師、例の御持佛堂に籠りて讀經して居けるが、しきりに



戀慕の心さかりになりて、今宵姫宮の御寝所にしのび入りて、おもふ事聞えばやと思立ちて、御佛間を出でて御階の方にさまよひたるに、例の媒のおもと人出來て、山人ぞと思ひて、手をとりて引入れつ。法師思ひかけずうれしくて、引かれて行くに、なげしの所まで連れ行きけるが、此おもと人、入口の戸を忘れてたてざりければ、又御階のもとに歸り來つ。山人は今宵も例のごとく、法師の出立ちして忍び來けるに、此お

もと人來あひて、あやしみて、「たそ」と問ふ。山人、「おのれに候」といへば、おもと人ちかよりて、顔打見てあわてて、さては今のほど引入れたる法師はあらぬ者よと、ふたゝび奥にかけ入りて見れば、さきの法師御屏風のこなたに伺ひ居たり。手をとらへて引出す。法師出でじとあらそふを、おもと人聲をたてんとするに、佗しくせんかたなくて、又手をとられひき出されて、もとの入口の戸よりおし出されつ。本意なげにふりかへり見れば、此戸にそひて法師一人立てり。それを内に入れて、此おもと人戸をさしかためつ。扨は最初にわれを引行きしは、後に來る法師と思ひたがへつるなりと思へば、ねたき事かぎりなし。いかで此まゝにおくべき、恥見せんと思ひければ、聲をあげて、「宿直の人々出であひ給へ。こゝに盗人法師入りぬ」と大聲にわめけば、人々太刀弓矢などたばさみて出來たり。「この戸口より今ほど盗人法師の入りて候。たしかに見て候」といふに、宿直人聲をあげて、「此戸あけ給へ」といへば、内に女房の聲にて、「何事ぞ」といひて戸を明けつ。「これに盗人の入りて候」といへば、「何條さる事の候はん」と答ふるを法師耳にも入れず、すなはち奥をさしてはしり入りぬ。姫宮のなげしのこなたに、山人が衣著て忍び居たるを見るより、引とらへ、小脇にいだきて御階の方へかけ來りて、「盗人いけどりて候」といひさま、膝の下



にひき敷きたり。宿居人等、「いみじくも仕られつ」といふ。折から弦打してまはる夜行の人々を呼びて、「是をひツくゝれ」といひて、御階より引下せば、やがて高手小手にくゝり上げつ。「先何者ぞ、つらを見よ」といへば、頭巾をぬがせて見るに、色白くよき男なり。「見知りたる者やある、いうくい者ななか。水くらはせて白状させよ」といふ。此騒大方ならねば、ありとある人々、馬部吉上のともがらまで、走り来てのゝしりとよむ。其中に、衛士の宗彦走り寄りて見ていひけるは、「此盗人は火燒屋の衛士、山人と申す者なり」といふ。「さは打ちすゑよ」とて、あまたの雑色しもとをふり上げ、力にまかせて打つ。あはれあたらしき一人の風流男、死して芝生の露とや消えぬらんと、心ある人は哀みもしつべし。法師はいみじき高名しつとて佛間に入り給ひけるが、夜あけぬれば、歸らんとして庭に來りて、「いかに盗人は白状しつるにや」と問ふ、雑色等がいはく、「かばかり強く打ち候へども、今に白状仕らず。しぶとき奴なり」といふ。とかくするほどに明けはなれて、鳥なども飛びちがひ鳴く。猪名部墨縄は、今宵は宿所にありて臥しけるが、山人が捕へられてうきめ見るなりと聞きて、驚きて走り來て、一目見るより、雑色等にむかひて、「これ何者が生捕りし」といへば、法師したり顔に、「おのれ生捕りて候」といふ。墨縄がいはく、「此者は盗



みすべき人にあらず。などて捕へ給ひし」といへば、法師せきたちて、「かれが物盗まんとするをおのれ見ふせて、盗人と聲かけて捕へつれば、彼わなゝきつゝ、『貧のぬすみにて候、ゆるさせ給へ』と申して候へば、盗人に相違なし」といふ。衛士の宗彦も、宵より笞うちてゐたるが、口をさし出して、「盗人にたがはず」といふ。墨縄いはく、「よも法師の妄語は宣はじ。いよいよ彼がみづから盗人なりと名のり候や」とおしかへして問へば、法師、宗彦口をそろへて、「盗人と名のりしに相違なし。念をいれて問ふ人かな」といへば、墨縄からからと笑ひて、「これはおのれが作りて姫宮に奉りたる木偶なり。木偶の物いふべき理なし。うたがはしくば、これ見よ」とて、小き鋸とり出でて、背のあたりをすこしひきて、薬しべをひとつかみ摑み出して、法師が目さきへさしつけつ。法師はあきれて口ごもれば、雜色等もあきれまどひて、「よべよりこゝら骨を折りて、『白状せよ』と鞭打ちつるに、物いはざるこそ道理なれ」と、顔見あはせて笑ひ出す。折から御階の御簾巻上げて、女房たち御乳母勾欄のもとに立ちて、「姫宮の殊に大事とし給ふ御人形、とり出しつるのみならず、御庭に引きおろし、むちうちて砕きそこなひつる者どもおひやらへ」との勅諚ぞ。疾く御所をまかり出でよ」といふに、法師はもとより、宗彦も色をかへてふるひ出す。墨縄、法師にうち向ひて、「此木偶に物いはせ給へるは、おのれが細工にまさりたる貴僧の法力に候へば、盗人はわ僧に給はりつ。寺につれ行きて、心まかせにはからはれよ」と、縄とり出でて、法師が背にかの人形をくゝりつけて、又宗彦をうち見て、「おのれ宵より此木偶をむちうちたりしは、法師が方人と見えたれば、法師が供して送り行け」とて、宗彦を縄もていましめさせ、あたりの縄を法師が腰にくゝりつけつ。衛士等あまた笞をあげて、「勅勘のものども、疾く御庭をしりぞけ」と打ちたつに、さる者の心にも恥かしとや思ひけん、顔をだにえあげず、よろめきつゝ歩みて出行きぬ。此法師、おのれ戒をやぶりながら、人を盗人に陥れんとはかりつるが、はやく身にむくい來て、中々かゝる恥見つるは、ひとへに佛菩薩の御罰なるべくや。後に聞けば、宵に法師が聲をたてつる時、おもと人心きゝたる人にて、山人をば外の戸口より逃しやりて、人形に袈裟衣を著せて、かくは欺きけるなりとぞ。

○せたのはし

其後日ごろ經て、帝姫宮の御かたにわたらせおはして、「いつ迄ひとりずみしておはすべきならず。まろよろしき人を見つけ置きつ、かれを男と定め給ひなん」など宣ふを聞くに、胸ひしげぬる心地し給ひて、その夜山人が忍び來る時、「しかじか父帝の宣

ふなり。疾くいづかたへなりとも率て行き給へ」と宣ふ。山人が心にも、此姫宮に別れ奉りては、生きてあるべしとも思はれねば、「さらばともかくも計らひ奉りてん。但此御所より忍び出で給はんは、まもる人ども多ければ、人目わづらはしかりぬべし。御息所の御里にわたらせ給ひて、かしこより忍び出で給はんには、心やすかるべし」といふ。かくしめし合せ給ひて、翌日姫宮は物にかこつけて、母御息所の里第にうつらせ給ひける。山人は松光を語らひて、いかで姫宮をぬすみ出でんと、三日ばかり御息所の築土の邊をうかゞひ歩きける。或夜よくしたゝめて、山人も松光も、黒ききぬにて覆面といふ物作りて顔をかくして、かしこの御所をさして行きぬ。宵闇にてをぐらけれど、かゝる時には月のなきこそうれしけれとて、御庭なるくね垣のへだてに添ひてうかゞひ居たるに、思ひよらず内より此くね垣めり〳〵と押破りて出づるものあり。ちかづきて見れば、編笠著たる法師の、大きなる笈を負ひて行縢はきたるが、ながき錫杖を引さげてあらはれ出でぬ。あやしと見てあれば、此修行者東をさしてあゆみ行きぬ。「あれは盜人にや、我々も彼が破りたるくね垣よりや入らん」と言ひあはせをるほど、館のうち俄にさわがしく、人走りちがひて、聲々に何事をか呼びて走りあるく。しばしためらひてあれば、中間男かの破れたる垣のもとより出でて、「これよりや出で給ひつらん」といふに、近寄りて、「何事ぞ」と問へば、中間息つきつゝ、「姫宮の今のほど見えさせ給はず、御館のさわぎ大方ならず」といひさま、又くねをくゞりて走り入りぬ。「さては今の修行者の奪ひ奉りて、笈に入れて逃げつるなるべし。さるは去ぬる月おひはらはれし横川の法師めにやあらん。引捕らへて奪返してん」と、松光もとも〳〵に、跡を追ひてぞ追ひかける。夜もやゝ更けわたりて、臥待の月高うのほりて、ひるかと思ふばかりあかくなりぬ。山人松光は息つきあへず走りけるが、からうじて追ひつきて、二人してやらじと組みつきつ。修行者二人をつきのけて、錫杖を頭にかざして打つてかゝる。こなたも刀ひき拔きて、互にしばし打合ひけり。笈の内には姫宮の御聲にて泣き給ふ事かぎりなし。たがひに力をつくしてたゝかひけるほど、覆面もいつか飛散り、修行者が笠も地に落ちぬ。折からもれ出づる雲間の月の掲焉に光り出でたるに、山人が打込む刀を、錫杖にてうけんとする程、きと顔を見あはせて、「汝は侍従の山人ならずや」といふに、こなたも熟きすかし見れば、こはいかに、思ひよらぬ行濟なる船玉法師なりければ、驚く事大かたならず。松光も刀をすてて、「さて〳〵危かりし事よ」とて、互に無事をぞよろこびける。山人先問ひけるは、「心得がたきは、何とて法師の御身にて、姫宮を奪ひて逃き給はんとはし給へる。仔細

承らん」といへば、船主篋を地におろし、戸をひらきて姫宮を出し奉る。姫宮まろび出で給ひて「まろは都より武士どもの追來るならんと思ひつるに、早くも來り給へるかな」と、山人にすがりて泣き給ふ。船主涙をはら〳〵とこぼして、「老朽ちたる此法師が、姫宮を奪ひて何にかせん。和殿のもとに誘ひ奉り 夫婦となし奉らんと、扨こそかくは計らひつれ」といふに、いよ〳〵不審はれず。「おのれ姫宮に忍びあひ奉りし事、いかで疾く知らせ給ひつる」と問へば、船主いよ〳〵涙せきあへずいひけるは、「我回國修行の身となりしは、娘が追福のためなる事は 貴殿の知る所なり。されば夜となく晝となく、鉦打鳴すたびごとに、娘むらさきが佛果菩提を唱へざる時もなく、又佛號稱する度ごとに、不便の死をさせし事よと後悔せざる折もなし。今は天堂にや生れつらん、但心の迷ひにて、地獄の苦患や受くらんと、一時片時も娘が事思ひ出でぬ時はなく、ましたべの使道知らぬ、我子は背にも負へかし、と、憶良のぬしの言の葉も、我身の闇におもひ知られぬ。げに子をしたふ焼野の雉子、情にむせぶ夜の鶴にも、身のおろかさはまさりぬべし。かくて諸國をさまよふほど、一昨日嵯峨野の辻堂に夜をあかしつるに、眠るともおぼえぬ夢の中に、娘むらさきが姿我目のまへに顯れ出て、さもよろこばしき顔色にて、佛天わらはが誠をおはれび、生をかへて



仙となし、蓬萊に生を托させ給ひぬ。女一の宮と山人君は、もとより宿世の仙縁にて、永世夫婦の契おはせば、塵縁盡きさせ給はんには、ふたゝび蓬萊に至り給ひぬべし、其時わらはも諸共に、箕帚をとりて仕へんとす　親人はやく此姫宮をみちびき奉り、山人君におくらせ給へ、此婚姻成就せば、わらはか爲には千萬の追福作善にまさりぬべし」と言ふかと思へば、夢さめぬ。それより京に出でて樣子を聞くに、姫宮は御母御息所の里第にうつり給ひぬ。おのれ幸春の頃、此御息所の御館にまゐりて、墨繩の作りたる毘沙門天の像をあづけ奉りつれば、これをよすがとなして此御館に行きたるに、尊敬し給ふ事かぎりなく、寢殿へ呼びいれ給ひて、樣々あつくあつかひ給ふ。ひまを見合せ、姫宮にはかりごとを告け奉るに、もとより左樣の御心にやおはしけん、「よきに計へ」と宣へば、宵闇をさいはひに、箱の内に忍ばせ奉り、これ迄御供しつ



る所に、わぬしたちに對面しつるは、これも佛神の加護なるべし」と、ふし拜みつゝ物語る。山人は此年頃むらさきが事を思ひ出でて、哀となげかぬ日もなかりしに、船主がことばを聞きて、胸ひらきぬる心地ぞしける。「さらば是より姫宮の御供して、東をさして下るべし」といへば、船主かいへらく、「おのれはこれより墨繩とのの許に到り、此由語りて跡より下るべし。但わぬし達は、日數をふる旅の空に姫宮の御供せば、

途中人やあやしまん、此笈に入れ奉りて、人目をつゝみて下られよ」といふ。「さらば再會の時までは、すこやかにておはせよ」と、互に別を惜みつゝ、姫宮を笈に入れ奉り、松光負ひて出立つ時、思ひもよらず松蔭より、横川の法師衛士の宗彦、刀をぬきてをどり出で、「姫宮をわたせ」とのゝしりつゝ、山人松光に打つてかゝる。船主法師錫杖をとつて、兩人が足を打なぐれば、其まゝ横にたふれ伏す。「こやつばらは、山人ぬしに意趣あるものと覺えたり。こゝは船主に打まかせて、おの／＼は疾くいそがれよ」といひさま、法師が背におひし衣とりて松光にわたし、「在俗の人の笈を負ひたらんは、人もいぶかりやせん。これ著てとく行き給へ」と、手をかきて催せば、こゝも氣づかはしと思へども、猶追來る人もぞあると、心せかれて松光もろとも、足をはやめて勢多の方へといそぎける。此橋をわたりける時、松光ふと心づきて、此橋を一間ばかり板をはなちて走り行きぬ。これはもし跡より人の追ひかけてや來んとの仕度なるべし。

飛騨匠物語巻之五終

斐陀匠物語巻之六

○から猫

かくて山人松光は、道にて旅のよそひよくしたゝめて、松光は袈裟衣打著て、法師と見せて頭巾打ちかぶりて、笈を背に負ひて行く。よのつねの旅だに佗しきがならひなるを、まして人につゝみて頓宮の御供し奉れば、苦しき事数知らずおほかり。あはれ天地の神らたすけよ草枕と、ふるき歌など打誦しなどして、山を越え川を渡りて、麻だになき埴生の小屋、あばらなる茅の宿などに夜をあかしつゝ、とかく忍びて行く程に、道もはかどらず、十日あまりを經て、からうじて遠江の國にぞ著きにける。日は西にかたむきて、海のうへ霞わたりたる中より、鷗どもはあさりして、物かづきて行く。柴負ひたる人の、おへぎつゝ山を下り来るに、入相の鐘の耳ちかく響きたるも、けに夕暮こそわびしけれ、いづこにか宿とらましとて、打ちながめつゝ行きけるに、千歳古りたる松のもとに、あたらしう作りたる家あり。あるじと思しき男の、背高くたくましきが門に立ち居て、松光が法師の出たちせるを見て、呼びて云ひけるは、「これよりさき二里ばかりのほどには、宿り給ふべき家もあらず。夜を犯して歩かせ給ふにや。むさきをいとひ給はずばとゞめ参らせん。入らせ給へ」といふに、うれしくて、よろこび言ひつゝ入れば、此頃つくりはてつと見えて、壁などもまだ乾かず見ゆ。二人が足洗ひ居るほど、あるじかの笈を奥の間にもち行くとて、みづから負ひて立上りて、「おもき笈にこそ候へ。御僧は力ある人にこそ」といひて、笈をはこびて、圍爐裏のもとにゐて、薪さしくべつゝ湯をわかす。二人は足のごひて家に入りて見るに、家はひろらかなれど、させる調度もなく、佛壇一つすゑたるのみにて、夜の物なども見えず。あるじ火をうちて佛壇にあかしともすを見れば、内にあたらしき位牌すゑてあり。あるじ二人が前に来りていひけるは、「三月ばかりさきに家を焼きて後、此家を作りいとなみ候所、父にて候ものあとの月に病みてうせ候ひぬ。よからぬ事のみ打續きて、佗しきめをのみ見て候。かく宿し参らするも、他生の縁にて候はん。御僧にはつかれ給ひつらめど、佛前にて看經して給へ」といふ。松光化をあらはさじと、殊勝げにもてなして云ひけるは、「何事も過去の約束にて候。かく一宿の御縁ありぬるも、阿彌陀佛の導かせ給ふ事に候」と、鼻うごかしつゝいへば、あるじは庭に下りて、花折りて来にそゝぎて、位牌の前なる土の瓶にさしつゝ、松光立ちて佛壇の前に寄りて、あまたゞび

拜して居り。もとより幼時より匠の道のみならひて、一字をだに知らざれば、まして經文などといふ物は夢にだに見たる事なし、たゞあるじに怪しまれじと思ひて、口のうちにて、何事とも知れぬ事をぶつ〳〵とつぶやきいふ。山人はをかしさを念じてあるじに向ひゐたり。松光をり〳〵聲をあげて、唐國人の寢言いへらんやうなる聞きわくべうもあらぬ事をいへど、あるじはことに心もつかず、立ちて食物のまうけなどす。あるじ食膳をすゑて、「いざ聞しめせ」といへば、松光看經やめてこなたに來て、ふところより金椀とり出でて、「飯を盛りて御佛に參らせん」といひて、奧にもち行きて、笈の戸をひらき姫宮に參らせ、たちかへりて膳につきて喰ふ。「御僧はいづくに住持し給へる」と問へば、松光口より出づるにまかせて、「鞍馬寺」と答ふ。「鞍馬はいづれの御坊にて候」と問へば、松光、「させる坊にて候はねば名も候はず」といふ。あるじ、「いかで名のなき御坊や候はん。戯れて宣ふにこそ」といふ。松光汗になりて居れば、「御山を鞍馬と呼び候は、故よしある事にて候や」といふ。松光、「鞍馬となづけ候は物にて候」といひて、答もしどろなれば、山人も手に汗をにぎりてをり。松光思ひめぐらして、「すべて樹立高き所にて、日の影をうけず候ゆゑ、くらまと呼び候と、我師は申されて候ひき」といひて、汗おし拭ふ。あるじ、「御寺の草創はいつの代にて



何人のひらかれて候か」といふに、松光はたとつまりて、しばし頭かたむけて抑云ひけるは、「聖徳太子守屋を亡して後御建立」給ひき。されば佛法最初の御事にて候」といへば、あるじ打笑みつゝ、「それは四天王寺の事には候はずや」といへば、松光、「四天王寺も鞍馬寺もひとつ匠がつくりて候」といふに、あるじ興さめたる顔して、「本尊は何佛にておはすか」と又問へば、松光鞍馬の本尊を知らず。きやつよく知りてありながら、我に問ふなるべし、それにおらぬ事をいはゞ悪からんと思ひて、「本尊は本尊は」といひて口ごもるを、せめて問へば、松光やうやく答へけるは、「當寺の本尊は定りたる事なし。阿彌陀をすゑ奉る時もあり、又野干にも仕り、又地蔵にも、さま〳〵時にしたがひてすゑなほす事にて候」といへば、あるじ聞きもあへず、目を大きくなして打ちにらみて、「はじめより心得ぬ石經のしざまと思ひつるに、我おしはかりにたがはず、汝はまことの法師にはあらじ」といひさま、つと立ちて、松光が頭巾引きかなぐれば髭あり。「さては一定盗人ならし。法師に似せて人を欺き、物を奪はんとするならん。今見よ」といひて、入口に釣りたる太鼓をしたゝかに打叩く。山人松光も、心あわてて歯の根もあはず、そゞろにふるひゐたるに、此一村の百姓と見えて四五十人ばかり手ごとに棒熊手など持ちて、がゝめき入り來て、「いかに盗人を捕へ給ひつるか」と、



かしましくさへづりて立並びたり。あるじ、「盗人は此両人なり。疾く／＼れ」といへば、一人すゝみ出でて、松光山人をしたゝかにくゝり上げつ。此あまたの百姓等、主をうやまふ事さながら主に仕ふる如くす。扨両人を縁より引下して、百姓等竹をもつて手々に打叩く。あるじ両人にむかひて、「我一村すべて盗人の入來る時は、家ごとにかく鼓をうちて合圖となす。かばかりの設ありとも知らで、網代に入りて命をうしなふは、逃れざる所の天命なり」といひてあざ笑ふ。山人、「われ／＼は山賊ひはぎの類には候はず。ゆるさせ給へ」といへど、いかで聞くべき、たゞひたすら打ちたゝく。あるじ、「かやつ等が持來りし筬のおもかりしこそ心得ね」といひて、奥に入りて、筬の戸をひらきて見れば、思ひよらず五衣著て緋の袴めしたる、さもけだかき上臈の立ちておはしければ、驚きてうしろざまに倒れぬ。百姓等もはしり入來て、みな肝を消して、「生きてはたらく辨財天にや」とて、おどろき合へり。あるじ起上りて、「御身はいかなる人にてまします」と問へば、姫宮いらへもし給はず、御袖を顔におしあてて泣き給ふ。「さては此両人のやつばら、勾引してつれ來たる物ならん。水くらはせて言はせよ」とて、山人松光を階子にくゝりつけて、仰向にふさせて、桶の水を口へむけて傾くるに、水目口に入りて苦しさいふべからず。姫宮かけ出で給ふを、百姓等おさへてうごかし奉らず。山人、「あまりに堪へがたければ、有のまゝにいふべし。しばしなさいなみそ」といふに、又二人を引起して、「さらばありの儘にいへ」と責むる。山人いひ出でんとせしが、まことを言はば、彼等いよ／＼盗人なりといふべしと思ひければ、とやいはんかくやいはんと思ひめぐらして、口を開かず居れば、「口ごもるは、かどはし來つるにたがはじ。猶打て」といへば、百姓等立代りて、力にまかせて打ちすゑければ、今は山人松光も息たえ／＼になりてうち倒れぬ。かゝるに、姫宮の居給へる筬の中より、から猫の飛出でて、あるじが前をはしり歩きて狂ひあそぶ。あるじ目をつけて、「我家にかゝる物を畜はず、不思議の猫の様よ」と守り居れば、猫はさまざま狂ひて、人を飛びこえて走りありきて、あるじが肩頭に飛びつきなどすれば、主大きに怒りて、「希有の猫めがふるまひかな。盗人を糺問するさまたげなり」といひて、佛壇の下より刀とり出でて、すらりと抜きて、飛ばんとする猫をはたと切れば、木をきるやうなる音して、猫は二つになりて飛去りぬ。あるじかの猫のかたわれを取上げ見れば、木にて作りたる物にて、腹の中には小き車どもいくつも作りて入れてあり。「扨はまことの猫ならず、機關を以てかくばかり働くやうに作りたるは奇といふべし」といへば、百姓等もてんでにかの猫をとり見て、「世にはかゝる奇妙の細工もありけり」

といひてめであざむ。あるじがいはく、「かくたくみに機關をつくる人外に聞及ばず。もし此猫は飛驒の國人なる猪名部の墨繩ぬしや作り給ひけん」といへば、姫宮耳にとめさせ給ひて、あるじが方を見やり給ひて、「汝墨繩を知れりや」と宣へば、あるじ、「さん候、かの人は去年わが家に宿り給ひて、我父の命救ひ給ひし恩人なれば、いかで名をしも忘るべき」といへば、松光むくと起上りて、「われは墨繩どのの弟子なり。これなるは、墨繩ぬしの弟にておはす」といふに、あるじ大きにおどろきて、「いかにやいかに」といへば、松光、「われ去年師なる人にともなひて、草飼といふものをあざむき、榛原の翁の命助けし事ありき」といへば、あるじあわてて庭に飛下り、二人がいましめ引きときて介抱す。山人もやうやく息出でけるを、あるじ抱きて上座にすゑて、湯よ藥よといひてさわぐ。百姓等は子細は知らねど、俄に主がうろたへて兩人をいたはりあつかふを見て、とも〳〵立走りて騷ぎのゝしる。姫宮、山人にすがりつき給ひて、「いかに心地はたしかになり給へるや」とて、手足とりて撫でさすり給ふ。あるじ遙に飛びしさり、頭を壁に打ちつけて云ひけるは、「さて〳〵思ひかけざる事にて、ほと〳〵御命にも及び申すべき所に、思はず猫の機關を見て、御身のうへを知り候事よ。おのれはさきに御宿を參らせたる榛原が子に、太郎遠平と申す者にて候。其折からは遠國へ罷り候所、おのれが留守をはかり候て、女めと草飼めと語らひあはせ、父を殺さんとたくみて候を、御方々の力を以て父が命を救はれて候事、生々世々わするべく候はず。父は去月の十五日身まかりて候へども、臨終の節迄も、御方々の大恩のありがたき事を申出でて候。おのれも、いかでこの大恩、身をなきになしても謝し奉るべくと、常に心にかけて候を、其報は仕らず、剰へなやまし煩はし奉り、いみじき苦痛をさせ參らせしは、極めたる大罪にて、なくなりし父へ對して不孝此上もなく候へば、位牌への申しわけ、御かた〳〵無禮の詫はかくこそ仕うまつらめ」といひさま、猫を切りたる刀とりあげ、やがて腹に突きたてんとするを、山人松光はやく取りつきてひきとゞめ、刀もぎとりて鞘にをさめて、「盗賊とうたがひ給ひつれば、さいなみ給へるも理なり。もし自害し給はんには、我々もとも〳〵生きてあるべきやうなし」と、さま〳〵といさめければ、「さらば此命のかはりには、君達の御供仕り、ともに東へ下るべし」といふ。さて百姓どもを呼寄せて何事をかさゝやけば、皆「あ」と答へて歸り去りぬ。遠平くはしく子細を聞きて、女一の宮なる事を知りて、「かゝるいやしき山がつが家に、しばしも御足をとゞめさせ給ふ事、かたじけなやかしこや」といひて、よろこぶ事かぎりなし「さるにても此猫をもたせ給へりしは、よく〳〵御心にかなひたる物なるべ

きを、あへなく打摧き候事」といへば、姫宮、「まろもながき旅路におもむけば、かゝる物もち来べしとは思ひもよらず。しかし身にもかへざる瓢一つを手にもちて出でたりしに、思はず此瓢の中に猫の入りてありたるか、今日の幸とは成りにたり。かく危きを免れぬるも、皆これ善縁かたくみの道の奇特なり」と宣へば、あるじも手打叩きし感じけり。程なく夜もほのぼのと白みゆけば、人人立出でん用意するに、表にあまたの人音すなり。何事ぞと見てあれば、昨宵に来りし百姓ども、あやしの竹輿舁きする、馬二三匹引来て、一同に地に伏して「御送の支度仕りて候」と申す。山人心得ずおもへば、あるじ遠平いひけるは「此一村の者どもは大方我一族にて、曾祖の時より田をわかちていとなませつる者どもなれば、一人もそむく者候はず。今日おのれ御供仕れば、彼等にも御送の用意させて候なり。且大山かつのあたりには車なども候はねば、かしこけれども、あなだにめさせ奉らん」と、いひさき、庭に下りて、藁沓はきて待居たり。姫宮の御よろこびは更なり、山人も力を得て立上れば、松光は勇み立ちて、姫宮の御手をとりて、竹輿に乗せ奉る。山人松光は馬に乗れば、あるじは弓矢とりて、しりへに立ちて歩む。百姓どもは、いみじくつゝしみ警衛して歩みつれたるさま、昨日には事かはりて、いさましき旅のよそほひなり。



けに故郷に歸らんには、錦著て行くといふ古事もかくやらんと、山人はそゞろ嬉しくて、衣匂はす引馬野を、いそぎて馬をぞ打せける。

(あじろ車

竹芝が母は、山人を出立たせやりて後、檜丸が許にありけるが、墓詣に路遠しとて、此頃はもとの家に歸り居て、山人が歸り來ん日を指を折りてぞ待ちくらしける。今日も例のごとく、山人がために影膳などまうけすゑて、都の事をのみ思ひつゞけ居たるに、村長しはぶきして入來りて、「さて〳〵希有にあやしき事を聞きつ。今ほどおのれ守殿に召されしに、目代の申されしは、『都にて女一の宮御行方知れずならせ給ひぬ、風のつてに聞けば、法師の連れて退きまゐらせしとも、又武藏の國なる衛士のさそひ出でたりとも、とり〴〵に申しつたへぬ、もし姫宮の當國へいらせ給はば、留め置きまゐらせ、ひそかに訴へ出でよ』と申されつ。いかなる事にて、やんごとなき御方の、玉の臺をしも捨てて迷ひ出で給ひつらん」といへば、母、「武藏の國の衛士とあるは、心がかりにこそあれ。されど我山人などは、さやうのおふけなき心はよもつかはじ」といへば、「宮も藁屋もへだてなきは、戀といふ曲物なり」など、打ちつぶやきて、村長は出でて歸りぬ。母は衛士といふ文字の胸にこたへて、思ひけるは、我子山人はみめ



すぐれし生れなれば、もし人に戀ひられて、心の外なる事やし出しけん、もとより心實法なれば、たやすく惡しきおこなひはせじ、されど村長がいひけんやうに、戀といふ曲物こそわりなき物なれば、あいなき事やし出しけんなど、さま〴〵と思ひわづらひつゝ、打歎きてぞ居たりける。扨又山人は、遠平にかしづかれて、日數經て此國に着きけるが「人あまたして家に歸らんは人目いかゞなり。人々はおくれて來り給へ、我はさきだちて家に行くべし」とて、荒蘭が崎よりたゞ一人して歸り來りける。折から兄なる棹丸も來合ひて、悦びて打連れて入れば、母は心から悦びて、「恙なく歸り來しや。心もとなかりしを」と云ひてそゞろ涙ぐむ。さてさま〴〵と語らひかはして後、山人いひけるは、「打ちつけなる申しごとながら、御聞きうけ給はるべし。よき媒の係て、今宵のうちに妻を呼びむかへんと存じて候」といへば、母驚きて、「歸り來て其まゝ



俄に妻を迎へんとは、子細ある事か。いづくいかなる人の娘ぞ」と身をすり寄せて問へば、山人さすがに頭かきつゝ、口ごもりて詞を出さず。棹丸見やりて母にむかひて、「母人の御こゝろは知り候はねど、俄の妻さだめ心得ず、たやすく承引きがたし」といへば、山人手をつきて、「此事御聞入れ給はらずば、媒へつがひし詞も反古となりて、面目を失ひ候ひなん。扨は生きても世にありがたし」といへば、母、「さばかり思ひ定

あたらんには、婚姻はゆるすべけれど、その婆と定むるは、いづこの誰が娘ぞ」と父問へば、山人顔あからめていひ出でず。桿丸聲をあげて、「汝が妻とせんといへるは、かたじけなくも帝の御いつくしみ深しと聞えたる、女一の宮にでましまさん」といへば、山人魂消ゆるばかりになりてさしうつむく。桿丸あたりなる斧取つて、したゝかに打ちすゑていひけるは、「汝知らずと思ふにや、御門の御いつき娘を、武蔵の国なる衛士が奪ひ奉り、勢多の橋をきり落し、東の方へ逃下りしとの街の風説、我よく聞きつ。汝が申す所を聞くに、かならずかの姫宮を誘ひ奉りしにたがふ事あらじ。叛逆謀反の罪は、其罪一族に及ぶと聞く。我命は惜しからねど、老いたる母人をさへ殺し奉らんとする人畜生、又二つには、かぎりなき帝王の御むすめ、いやしき山がつの身として、かしこくもちかづき馴れ奉りしだに臆ふときわざなるを、奪ひ奉りて下りしとは、言語にたえたる大悪人め」と、怒れる眼に涙をうけて、のゝしる詞のはし〴〵にも、孝養の心切なるを、さる兄にはひきかへて、我ながらあさましくけしからぬ行して、母兄にうきめを見せ、姫宮をさへあ



らぬ身にはふらかし奉りし、あはれ空おそろし、勿體なしと思へば、「此身をきだ〳〵に断り裂いても猶あきたらず」と、額を疊に打ちつけて、よゝ〳〵とばかり泣伏しにる、母も枯れたる聲の下に、「これもかれも、

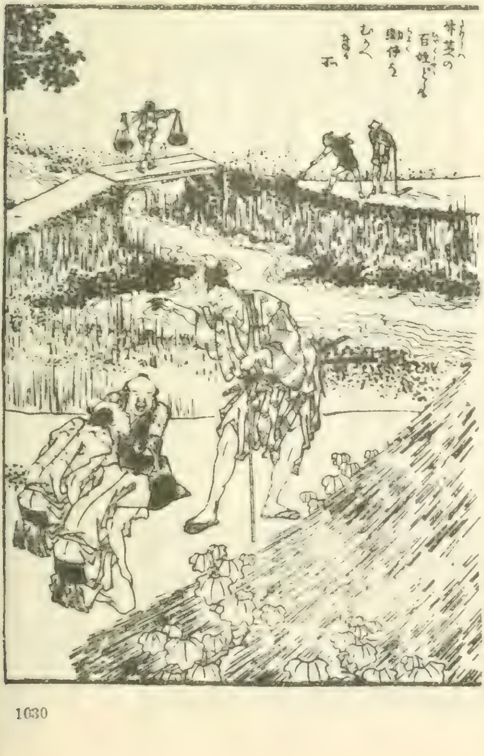
さきの世の約束事にはあるべけれど、世にためしなき罪人となりて、頸きられて死ぬる子を、見すく\いかで見てあらんや。我をさきに殺せかし」と、伏したる山人が背にとりつき、身をもだえて泣きしづむ、母の心のいとほしさ、胸にせまりて棹丸も、簾をすて地に倒れて、袖を噛みてぞ泣きにける。かゝりとだにも知らざれば、松光を先にたてて、竹輿をしづかに舁かせて、遠平つき添ひ奉り、そゞろはしくいさみ立ちし庭先に輿をおろさせ、姫宮の御手をとりて簀子にいざなひ奉る。山人はそれと見るより、汗を五體にながして壁に向ひ居り。姫宮はのどかに歩みて座につき給ふを、母も棹丸もたゞあきれて、口を開きて見居たり。姫宮は會釋し給ひても、恥しさに物も宣はず、扇かざしておはします。松光遠平は子細を知らねば、「高砂のさいさごの」と、謠ひのゝしりて騒ぐ。母つい立ちて姫宮の御手をとり、庭の切戸の外へつき出し、あらゝかに戸を押したてつ。姫宮おどろかせ給ひて、「まろは山人の妻なるを、などてはしたなきめをば見するぞ」と宣ふを、打見やりて、「たとひ御門の姫君にもあれ、佛神の再來にもあれ、我子の爲には悪魔とも鬼とも夜叉ともなぞらふべき人にはおはせず。さるをいかで我家に止め參らせん。いづくへなりと御心の儘に疾く立つて行き給へ」とすくやかにいひて、かけがね掛くるを、松光遠平見て、「思ひしには事かはりて、すさまじきけはひかな」と、爪彈して守り居り。姫宮戸を打叩かせ給ひて、「女の身にて、遙なる鄙の旅路にあくがれて、わりなう苦しき憂目見つるも、契りし人に世々をかけて、添ひとげなんの心ぞや。玉敷ける家も何かせん、蓬葎に埋もるとも、戀しき人ともろともに住ひてこそ本意ならめ。たゞこゝあけて入れよかし」と、打叩きて泣き給ふ。姥聞きて頭打振りて、「いでやそれは皆ひがごとにこそ。たかきひくきの隔こそあれ、女の道にかはりはあらじ。父母の詞をまたず、忍びて密男まうけて、あだく\しきふるまひして、聞きにくき名をとりたらんは、あそび、くゞつに劣りたるえせ女とこそいふべけれ。さやうに心あさえたる人を、山人が妻とはなしがたし、疾く\歸らせ給へ」といひさして、見かへりもせず縁に上りぬ。姫宮いとゞ御顔をあからかになし給ひて、「理はさにこそあれ、母御息所に見え奉るとも、さこそはいさめ宣はめ。まろも早くより此事幾度か思ひかへしぬれど、心にまかせぬは、あやにくなる思ひになん。惡しつらしと思しなば、つみひねり給ひても、山人ぬしのかたはらさけず、此家にあらせてたべ」と戸にすがりて泣き給ふ。松光も遠平も、姫宮の御心をおしはかり參らせて、いとほしとは思ひながら、さしあたりたる理に云出づべき詞もなく、頭かたむけてぞ居たりける。姫宮御涙をおさへて、此家をさしのぞき給ひて、「まさし

く此年頃夏貴賤の夢に入来りて[illegible]し家にたがはず。其時思ひ出[illegible]かしこに懸りてあり。いかなれば見し夢とは事たがひて、現はかくご苦しき」とて、又うちふして泣き給ひしが、「とても生きて都に帰る[illegible]き身ならねば、こゝにてとちか[illegible]見えければ、「死恥見んはうたてかりぬべし、此下つ瀬に溺やあらん、かしこにゆきて身を投げばや」と立上り給ひしが、さすがに御心や残りけん、いくたびとなく[illegible]さしつゝ、さて[illegible]をひきかけて、[illegible]下をさして走り給ひぬ。山人はとにかくに、生きてあるべき身にあらずとて、刀とりて死なんとするを、松光道平すがりついて留むれば、母あわてて、「よくこそ留めて給ひつれ。やよ山人よく聞きてよ、海をわたり山をこえて、やんごとなき御方のはかなき東に下り給ひしは、おことならではと思ひつめ給へる、ありがたき御心ざしにて、いとほしさ辱さは、此翁が身にとりては聞え奉るべき詞だになし。それをつれなく押出して、すくやかにふるまひしは、わぬしが命の助けたさぞかし。かばかり思ふ嫗が心を、十が一も思ひやらば、ながらへ居てくれよ」とて袖をしぼれば、棹丸も歯をくひしばる。松光はさらなり、道平さへ目おしのごふぞ道理なる。松光立つて切戸を明見れば、姫宮は見えさせ給はず。「いかにいづくに行き給ひけん」と見やる所へ、村長走り来りて、「思ひよらす都より[illegible]下らせ給へり。宗[illegible]介殿をはじめ皆供奉して此家へおはす。用意あれ」といひて引返しいぬ。「扨は山人が仕業なる事顕れて、からめて罪せさせ給ふなるべし。疾くこゝを逃げていね」と、母は心そゞろになりておし出す。山人はためらひて、此上に逃げかくれて人笑へなるめを見んより、都にひかれて頸切られん」といふを、嫗は聞きもいれず、ひたすらおし出さんとするを、すまひ争ひてある折から、表の方に車のきしる音して、勅使に引添ひて宗介など人数[illegible]れば、人々あわてて[illegible]を下り、地にひれふして礼をなす。勅使はのどかに座につき給ふ。山人は殊に胸とゞろきて、頭を上げず[illegible]居り。勅使人々を見わたり給ひて「おのおの恙なく下りつきたる事、よろこばしさよ」と宣ふを、仰ぎ見れば、勅使とあるは[illegible]なれば、人々おどろく事大方ならず。「いかにも子細こそあらめ」と[illegible]のおもむき拝聴せられよ。山人宮を誘ひ奉りし事、朝家の御掟にてはいみじき刑にも行はるべけれど、『仙縁のひく所、誠に宿世の契なり』と[illegible]棹人の[illegible]夢に告げ給ひしと[illegible]としければ、御感大方ならずして、『こたび[illegible]を給はりて、山人[illegible]

[illegible]

紆余曲折[illegible]

よりて當國の守に任ぜらるゝ」との綸言なり」と述べければ、親子三人は夢に夢見し心地して、御答へしどろになりて、ひたすら疊に打伏して、うれし涙せきあへず。松光遠平は、緣のもとにて小躍しつゝよろこび居り。たゞ何事も猪名部殿の一方ならぬ御厚志と、皆々手をするばかりなり。墨繩又いひけるは、「おのれ辭退し奉れど、帝の御かへりみ淳く、初に木工の頭に任ぜられ、月頃のほどに昇進して、今は三位の中將を給はりつゝ、とにかくに、能ある者をすて給はぬ聖朝の御時にしも逢ひ奉れるは、不肖の身の幸なり」といふ。時に宇介輩をそろへて、「山人ぬしは只今より勅使にそひ奉り、姫宮ともろともに都に上り給ひて、詔書の御受け申さるべし。姫宮はいづくにおはします」と、のび上りつゝ見まはせば、人々は目を見あはせて、「もし死にうせやし給ひつらん」と口にいはねど、とりぐ\に又も胸をそひやしける。墨繩すこし打ちほほ笑みて、「さきのほど、思ひよらずさやまの池に身をなげ給ひし姫宮の御なきがら、人々拜し奉られよ」と、庭に下りて、門に立てたる御車の榻とりのけて、笏もて轂をうつと見えしに、此車おのれときしりて、緣のはしに到りて止りぬ。さて車の御簾おのれとさら／＼と巻上りければ、姫宮御顔を出し給ひて、「まろがながらへたるは、みな墨繩がかず／＼の情にかゝる命ぞ」と宣ひて、御手をあはせ給ふぞかたじけなき。

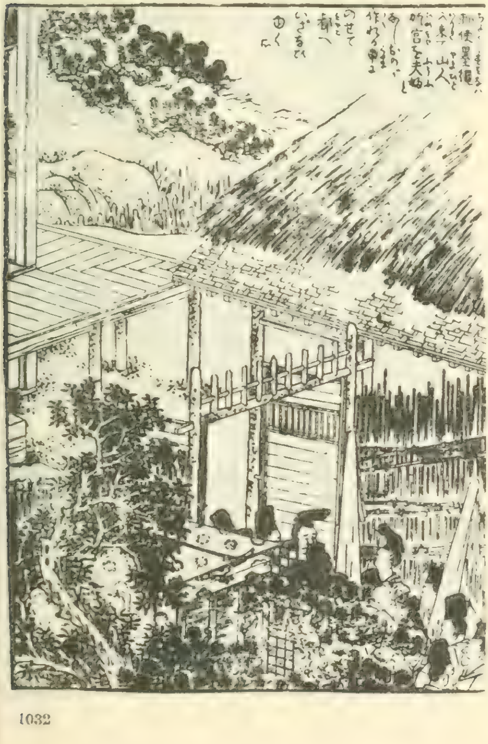


「いつの間に、いかにして姫宮をば御車に奉りし事」と不審すれば、「其由おのれ語り申さん」と、仕丁どもの中をかきわけて立出づる人あり。見れば、勢多にて別れし船主法師、右の手にひたえの瓢を携へて、簀子のもとに座をしむれば、梓丸はしり寄りて、「思ひよらぬ御人の御帰国」と、額をつきてよろこぶ。船主いひけるは、「おのれ勢多にて人々に別れて後、猪名部ぬしの許に行きて、かう〳〵と語りつれば、『姫宮の御身の上甚だおぼつかなし、わ法師疾く追ひつき奉りて、見えかくれに御守護し奉れ』と申されて候へば、其まゝやがて御あとを慕ひ、いそぎ下りて参りしに、さきのほど姫宮の東をさして走らせ給ふ心得ずと、あとめにつきて追ひつきて参りし所、さやまの池に到り給ひて、御身を沈め給ひなんとす。やがて抱きとゞめ参らせて、さま〴〵こしらへ奉る所に、勅使の通らせ給ふと聞きて、かたへに忍び候を、垂穂ぬし早く見つけ給

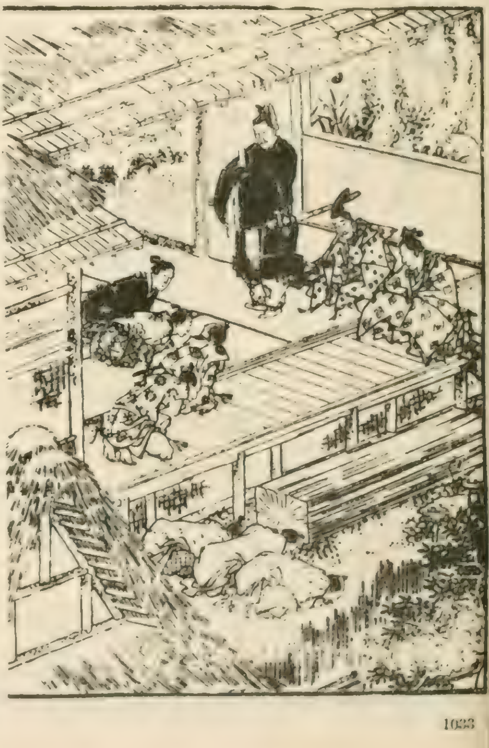


ひて、とみに御車に奉りて、これまで御供し奉りつ。さても叡慮のかたじけなさは、かゝる老法師さへ骨にしみてありがたくこそ。むすめも嘸うれしかりなん」と、空を仰ぎてはら〳〵と泪をぞこぼしける。げに世を捨てし人の上にも、恩愛の道ばかりは忘られ難きほだしなるべし。母は御車の轅にとりつきて、「おろかなる女の心に、つらきことのみ聞え奉りしは、にくい嫗よと思し給はん。ゆるさせ給へ」と聲をあげて、

頭を頰に打ちつけて、手をあはせて打泣きぬ。姫宮御車よりまろび出で給ひて、「ゆめさる事な宣ひそ。老人にしかばかり憂目を見せ參らせしは、やすからぬ罪になん」とて、手をとりて泣き給ふ。墨繩その御手を引きはなちて、「かゝるめでたき折に臨みて、言忌こそし給ふべけれ。いざや山人ぬしと諸共に、此御車にめさせ給ひなん。おのれ都を出るほど、手づから作りし網代の車は、婚姻を賀し奉る寸志ばかりのさゝげ物なり。かの隋帝の隨意車にならひて、夫婦の人を乘せ奉らば、牛をかけずして此車おのれと動きめぐりぬべし。いざ〳〵御立あるべく」と催し立つれば、國の守介もろともに手をつかへて、「御供の人數すくなくば、途中のほど覺束なくやと用意させて候。それ〳〵」と呼はれば、郎黨はじめあまたの百姓、烏帽子白丁よそほしく入り來て、内外せましと並びたり。松光遠平棹丸も、ともに御供仕らんと、御車の前後に引添ひたり。船主法師見よろこびて、「おのれはいみじき身に候へば、御送りも仕りがたし。これより此所に一宇を建て、御佛への報恩に三昧堂にこもるべし」といふ。げに此詞むなしからで、後々たふとき御寺となりて、竹芝寺と呼びけるは、此ゆゑよしと云傳へたる。扨も此車は、牛をもかけず人にも引かれで、おのづからめぐりつゝ都をさして上りけるは、不思議といふもあまりあり。されば墨繩が道に巧なりし事は、千載の末の世に



も　かたり傳へいひつたへて　飛驒の匠と稱し呼びて、宇宙第一の木工なりとは、かたおひのみどり子まで、聞き知らぬ者もなかりけり。かくて人々は都にのぼりつきて、叡慮の忝き次第を奏し聞え奉りければ、父帝はもとよりにて、御母御息所御よろこび大方ならず、姫宮に御對面ありて、つきせぬ御物語どもこゝら多かりぬべければ、かぎりある御わたりの事はえ書きとるべくもあらねば、こゝにはもらして言はず。棹丸松虎違平などゝ、とり〴〵に官爵賜はりて、その功を賞し給ひける。山人は姫宮ともろともに東に歸りつきて後、國を治めて民をあはれび、おのれを賤しくして賢をたつとび、鰥寡孤獨を扶持し、孝子の家にはみづから到りて其門に旌を立て、あるは門前に鼓を置きて、民の愁ふる所を聞き、賞を厚くし罰を輕くして、大きに仁政を行ひければ、一國の中に盗賊なく、路行く人はおちたるを拾はず、百姓は田を譲りて、國民父母のごとく親みなつきて、「有りがたき國の守よ」とめで仰ぎ稱しけり。さるはよのつねの守のごとく、任あくといふ事もなく、生ける限り爰に住みて、やん事なく榮えける。絹主法師は三昧堂に籠りて、不斷念佛怠らずつとめて、貴き往生をぞ遂げたりける。さるによりて、其わたりの坂を聖の坂とは呼びならはしけるとぞ。墨繩は都にありて、その住所は隔つれど、山人姫宮とひとしく、齢高くなりぬるまで貌おとろ

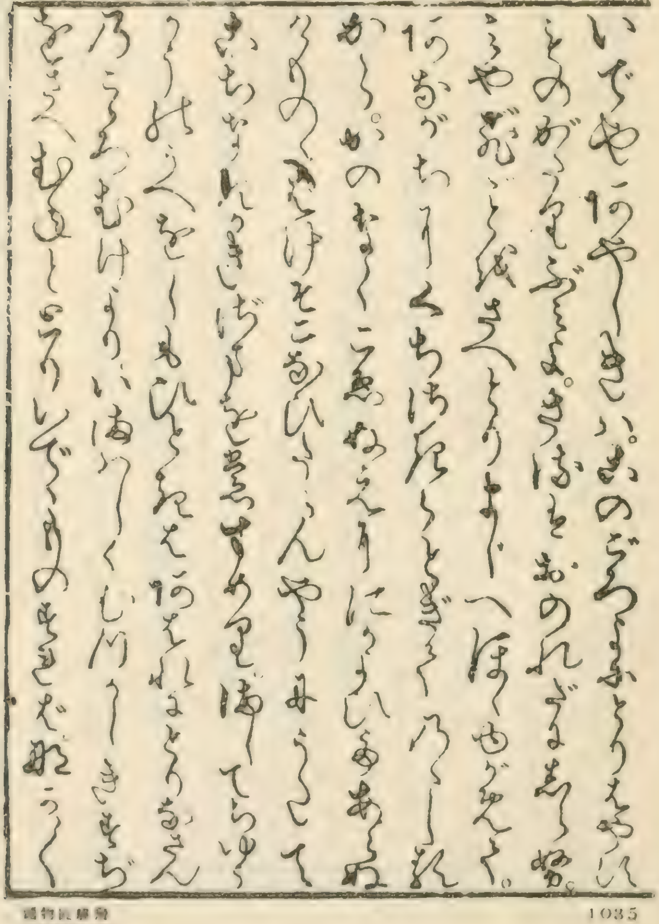


へず、壯年の時の如くにぞありける。此三人みな百歳をかく生きのびけるが、一日天晴れたる日、紫の雲墨繩が家の庭にたなびくと見えしに、蓬萊にて逢ひつる魯班仙人あらはれ出でて、「月宮造營に御いそぎなり、いざ」とて、墨繩が手をとりて、雲居高くぞ上り行きける。山人のもとにも、同日にあまた仙人おり下りて、山人姫宮を玉の輿に乘せ、又一つの輿をば玉の箱にをさめて仙樂たえやかに奏して、天上へこそ昇り行きしが、其後の事は知らじと、世には語り傳へたるとなん。

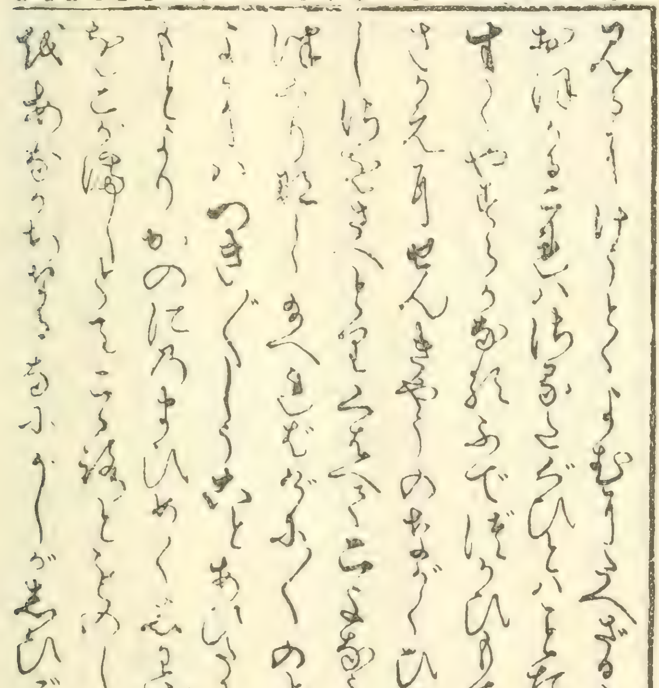
飛彈匠物語巻之六終

大尾

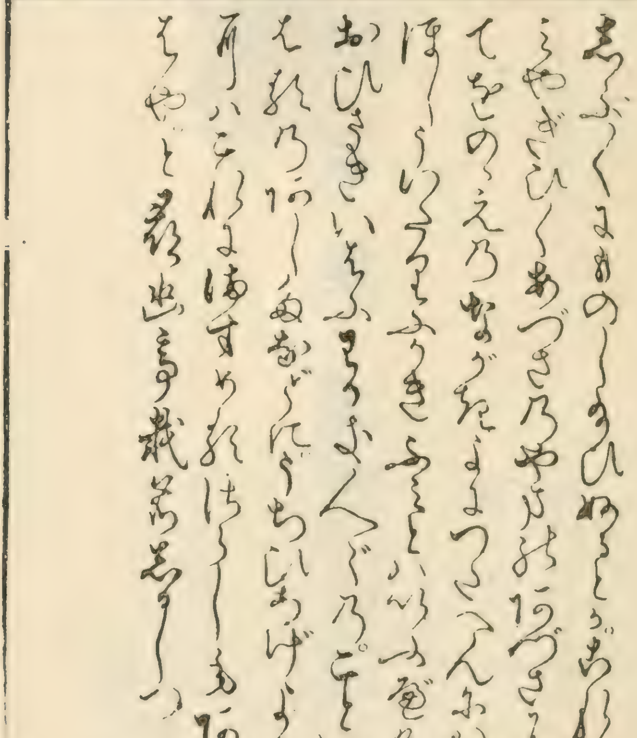
いでやあやしきは、このごろ世にとりはやす物語文よ。さるは、おのれだに知らぬみやび事をさへとりまじへ、ほゝゆがめて、あながちに口さきらときてのゝしるから、かの鳴く鸚鵡に似かよひて、あらぬ獣の化けそこなひたらんやうにうたてこちなき書きざまをもすめり。まして思事のうへをしもひときはあはれに取りなさんのこゝろむけよりいまはしくむづかしき筋をさへ



むねと取出でてものすれば、なかく〱見るにけうとく、讀むに堪へざるところどころぞ多かる。これはさる類とは事たがひて、目やすくやすらかなる筆づかひもて、現世の榮に仙境のながく久しき樂しさをへとり加へて、こよなうめでたく作りなし給へれば、げに〱のどけき時代には、つき〱しう事あひたる心地ぞする。もとよりかのにのまひめくしわざなるを、をこがま



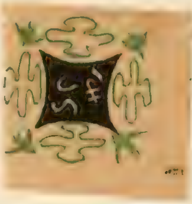
しとて、こゝろとものし給へらざりしを、あながちなる某がしひ言にまけて、しぶ／＼にものし給ひぬるとかこれらをこそ宮木ひく梓の山の梓に彫りて、斧の柄のながき世につたへんにはあらまほしらいたり深き文とはいふべけれ。まして生先いはふ若き人々の言忌する春のあしたなどに、うちひろげ讀み見んには、これにますめる草紙もあらじはやと、赤幽亭載名しるしつ



讀本集

大尾

昭和二年五月一日印刷
昭和二年五月四日發行



日本名著全集 第一期出版
江戸文藝之部 第十三卷
讀本集
（非賣品）

編輯兼發行者
印刷者
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

發行所
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番・一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿六巻及追加篇二巻 書目豫定一覽

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一巻 第二巻 西鶴名作集 上 下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懐硯 ○近代艶隱者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土産 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれ〴〵 ○一目玉鉾

第三巻 芭蕉全集

正篇 ○芭蕉翁一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句評 ○紀行 ○消息 ○遺語

外篇 ○冬の日 ○春の日 ○初懐紙 ○曠野 ○ひさご ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○續猿蓑

附錄 ○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四巻 第五巻 近松名作集 上 下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習幷新暦 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河浪鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○椀狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川

○心中天網島　○津國女夫池　○女殺油地獄　○信州川中島合戰　○心中宵庚申　○關八州繫馬

第六卷 淨瑠璃名作集 上
第七卷 淨瑠璃名作集 下

○雪女　○本海道虎石　○心中涙の玉井　○金屋金五郎浮名額　○金屋金五郎後日雛形　○梶久末松山　○お染久松袂の白しぼり　○八百屋お七　○笠屋三勝廿五年忌　○心中二つ腹帶　○傾城思升屋　○愛護若塒箱　○富仁親王嵯峨錦　○鬼鹿毛無佐志鐙　○大塔宮曦鎧　○須磨都源平躑躅　○壇浦兜軍記　○蘆屋道滿大內鑑　○苅萱桑門筑紫𨏍　○敵討襤褸錦　○御所櫻堀川夜討　○釜淵雙級巴　○ひらがな盛衰記　○鵺山姫捨松　○夏祭浪花鑑　○菅原傳授手習鑑　○義經千本櫻　○假名手本忠臣藏　○双蝶々曲輪日記　○一谷嫩軍記　○本朝廿四孝　○奥州安達原　○關取千兩幟　○近江源氏先陣館　○神靈矢口渡　○妹背山婦女庭訓　○攝州合邦辻　○新版歌祭文　○伊賀越道中雙六　○近頃河原達引　○絲櫻本町育　○繪本太閤記

第八卷 歌舞伎脚本集

○參會名護屋　○兵根元曾我　○源平雷傳記　○百夜小町　○傾城淺間嶽　○成田山分身不動　○中將姫京雛　○丹波與作手綱帶　○傾城壬生大念佛　○鳥邊山心中　○嫐髮歌仙櫻　○心中鬼門角　○伊勢頭戀寢刃　○漢人漢文手管始　○五大力戀緘　○金門五三桐　○四谷怪談　○與話情浮名横櫛

第九卷 浮世草子集

○傾城色三味線　○傾城曲三味線　○傾城歌三味線　○世間息子氣質　○浮世親仁氣質　○世間娘氣質　○咲分五人娘　○傾城禁短氣　○商人軍配團　○棠大門屋敷　○鎌倉諸藝袖日記　○日本新永代藏　○御前義經記　○好色萬金丹

第十卷 怪談名作集

○御伽婢子　○狗張子　○玉箒木　○虛實雜談集　○怪談登志男　○近世百物語　○西播怪談實記　○茅屋物語　化物判取帖　○豐年珍話集　○實物語　○怪談實錄　○英草紙　○繁々野話　○雨月物語　○垣根草　○莠句冊　○近代百物語　○怪談記野狐名玉　○怪談名香富貴玉　○清誠談　○臥遊奇談　○深山草　○怪異前席物語　○古加良志草紙

第十一卷 黃表紙廿五種

○金々先生榮花夢　○視敵打腹鼓　○長生見度記

○喫多雁取帳 ○狂言好野暮大名 ○大悲千祿本 ○江戸生艶氣樺燒 ○莫切自根金生木 ○文武二道万石通 ○孔子縞于時藍染 ○心學早染草 ○卽席耳學問 ○廬生夢魂其前日 ○馬鹿長命子氣物語 ○世上酒落見繪圖 ○桃太郎發端話說 ○十四傾城腹之内 ○金々先生造化夢 ○忠臣藏前世幕無 ○世諺口紺屋雛形 ○稗史億說年代記 ○御誂染長壽小紋 ○的中地本問屋 ○人間萬事吹矢的 ○人間萬事吹矢的（草稿）

第十二巻 洒落本集

○傾城買四十八手 ○契情買虎の卷 ○嫖客三體誌 ○娼妓絹籭 ○遊子方言 ○月花餘情 ○百花評林 ○大抵御覽 ○異素六帖 ○廓中奇譚 ○辰巳の園 ○和唐珍解 ○通言總籬 ○辰巳婦言 ○令子洞房 ○寸南破良意 ○仕懸文庫 ○猫射羅子 ○道中粹語錄 ○聖遊廓 ○錦の裏 ○三教色 ○契國策 ○讃女意題 ○甲驛夜の錦 ○田舍芝居 ○婦美車紫鹿子 ○起承轉合 ○粋町甲閨 ○古契三娼 ○游都酒美撰 ○夜半の茶漬 ○志羅川夜船 ○穴學問 ○狂訓彙軌本紀 ○娼妃地理記 ○遊僊窟烟の卷 ○女郎買糟味噌汁 ○美地の蠣殼

第十三巻 讀本集

○昔話稻妻表紙 ○本朝醉菩提 ○日本水滸傳 ○旬傳實々記 ○三七全傳南柯夢 ○飛驒匠物語 ○天羽衣

第十四巻 滑稽本集

○風流志道軒傳 ○古朽木 ○阿多福假面 ○指面草 ○人遠茶懸物 ○無彈砂子 ○小紋雅話 ○奇妙圖彙 ○浮世風呂 ○早變胸機關 ○客者評判記 ○浮世床 ○人間萬事虛誕計 ○同上後篇 ○假名手本藏意抄 ○一盃綺言 ○古今百馬鹿 ○八笑人 ○七偏人 ○柳巷訛言 ○市川評判圖會 ○室の梅 ○福來雀 ○一雅話三笑 ○青葉の花 ○鯛の味噌津

第十五巻 人情本集

○春色梅曆 ○春色辰巳園 ○春色惠之花 ○英對暖語 ○梅見船 ○閑情末摘花 ○假名文章娘節用 ○八萬鐘

第十六巻 第十七巻 第十八巻 南總里見八犬傳 上中下

第十九巻 膝栗毛其他

○東海道中膝栗毛 ○木曾街道膝栗毛 ○六阿彌陀詣

第廿巻 第廿一巻 修紫田舍源氏 上下

第廿二巻 第廿三巻 和文和歌集 上下

○貞淵歌文集 ○蘆庵六帖詠草 ○桂園一枝（景樹）

○うけらが花（千蔭）○琴後集（春海）○宗武歌集○曙覧歌集○藤簍冊子（秋成）○言道歌集○良寛歌集○女流歌文集

第廿四卷 俳文俳句集

○五元集（其角）○五元集拾遺（同）○五元集脱漏（同）○雑談集（同）○類柑子（同）○玄峰集（嵐雪）○其袋（同）○去來丈草發句集○ひとりごと（鬼貫）○鬼貫句選（鬼貫）○七車（同）○とくとくの句合（素堂）○韻塞（許六）○風俗文選（同）○葛の松野（支考）○笈日記（同）○雅文消息（許六・野坡）○蛙合（仙化）○俳諧職人盡（蓼和）○鶉衣（也有）○蕪村句集（蕪村）○蕪村文集（同）○新花摘（蕪村）○寫經社集（同）○十番左右句合（同）○明鴉（几董）○續明鴉（同）○新雑談集（同）○井華集（同）○太祇句集（太祇）○春泥句集（春泥）○三春日記（蓼太）○芙蓉文集（耳得）○白雄句集（白雄）○骨書（樗良）○俳ざんげ（大江丸）○はいかい袋（同）○曉臺句集（曉臺）○佐渡日記（同）○おらが春（一茶）○一茶句集（同）○鼠の道行（成美）○成美家集（同）○蔦眼集（道彦）○鶴芝（士朗）○斧の柄（乙二）○續絡歌仙（宜麥）○屠龍の技（抱一）

第廿五卷 狂文狂歌集

○古今夷曲集　○萬載狂歌集　○萬代狂歌集　○四方のあか　○めでた百首　○四方の留糟　○かくれ里の記　○千紫萬紅　○萬紫千紅　○（石川雅望の作では）狂文あづまなまり　○吉原十二時　○（風來山人のものでは）風來山人六々部集（前篇）○風來山人六々部集（後篇）○風流志道軒　○（手柄岡持のものでは）我おもしろ

第廿六卷 川柳雜俳集

○武玉川十八篇　○柳多留三十篇　○誹風柳多留拾遺四篇　○川傍柳五篇

追加篇 第廿七卷 歌謠音曲集

○義　太　夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段）○艶容女舞衣（下の卷・酒屋の段）○戀娘昔八丈（下の卷・鈴ヶ森の段）○桂川連理柵（下の卷・帶屋の段）○廓文章（吉田屋の段）○傾城戀飛脚（下の卷・新口村の段）○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段）○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段）○木下蔭狭間合戰（七つ目竹中陣屋の段）○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段）○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段）○八陣守護城（八の切・正清本城の段）○生寫朝顔日記（宿屋の段）○壺坂靈驗記（澤市内の段）○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段）○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切碁立の段）

○河東節

○松の内○神樂獅子○隅田川舟の内○禿萬歳○矢すゑ巌の疊夜着○酒中花○水調子○うかぶ瀬○ぬれ扇○亂髪夜編笠○助六所緣江戸櫻○常陸帶花櫛○道成寺○淨瑠璃供養○邯鄲○熊野○泰平住吉踊○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季○松づくし○泰平船づくし○高砂松の段○神樂高砂○嚴繪の島臺○萬屋助六心中○自然居士過去物語○源氏妹が宿○夕霞淺間嶽○尾上雲賤機帶○源氏十二段○賴光大江山入○鉢の木○與作小萬夢路の駒○道行三度笠○鵜飼石和川○お夏笠物狂○競牡丹○源平妹春の鷄合

○常磐津節

○老松○子寶三番叟○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）○積戀雪關屏（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○兩顔月姿繪（葱賣）○戻駕色相肩（戻駕）○帶文桂川水（お半）○倭假名色七文字（源太）○壽靱猿○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木○寄罠娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○願絲緣苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新うつぼ）○新負雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女○戻り橋○三保の松○松の島○三世相錦繡文章（おその六三）○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし島）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衛）○㐂連理橋（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○淺懺悔睦言（扇賣高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○拙筆力七以呂波（乙姫）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野○御代榮益穂富禪（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春○榮能春延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草○其小唄夢廓（權八）○絲の五月雨（小菊半兵衛）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松清元（茶筅賣）○色山附深川（待八）○大和い手向五字（子守）○色彩間苅豆（かさね）○法

花姿色同（山歸り）〇月花玆友鳥（山姥）〇傀花手向橋（吉原雀）〇復新三組盞（大山參り）〇道行浮塒鴎 〇道行旅路の嫁入（八段目・おかげ參り）〇六歌仙容彩（文屋・喜撰）〇彌生の花淺草祭（惡玉）〇おどけ俄煮珠取（玉屋）〇道行旅路の花聟（落人）〇再春菘種蒔（舌出し三番）〇初霞淺間嶽（淺間）〇〆能色相圖（神田祭）〇造鈬菊睦言（菊畑三菊）〇菊嬉聞睦言（お岩）〇倭假名色七文字（手古舞）〇重褄閨の小夜衣（白絲）〇明烏花濡衣（浦里）〇梅柳中宵月（清心）〇日月星晝夜の織分（夜這星）〇初櫓噂高島（三人三吉）〇貸浴衣汗雷（夕立）〇忍逢春雪解（三千歳）〇色增艶夕映（雁金）〇花雲助相肩（雲助）〇青海波 〇助六曲輪菊（助六）

〇新内節

〇二重衣戀占（花咲綱五郎）〇若木仇名草（蘭蝶）〇千日寺名殘鐘（三勝半七）〇眞夢血染抱柏（花蘭平三）〇歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）〇傾城音羽瀧（おとは七郎兵衛）〇膝栗毛「赤坂の段」〇膝栗毛「市子の段」〇明烏夢泡雪（浦里）〇明烏後眞夢 〇累身賣の段

〇薗八節

〇道行相合巨燵（梅川）〇桂川戀の柵（お半）〇鳥邊山 〇花街の色糸（植木屋）〇道行菜種の亂咲 〇江戸の繪姿（おひな吉三郎）〇道行緣花房（お花半七）〇口舌八景（小いな半兵衛）〇小春治兵衛巨燵の段 〇夕霧

〇江戸長唄（めりやす大薩摩を含む）

〇矢の根五郎 〇無間の鐘 〇傾城道成寺 〇風流相生獅子（相生獅子）〇二人椀久 〇英獅子亂曲（枕獅子）〇百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）〇高尾さんげの段（高尾懺悔）〇天人羽衣 〇京鹿子娘道成寺（娘道成寺）〇英執着獅子（執着獅子）〇風流妹脊の杜建（杜建）〇門出京人形（水仙丹前）〇亂菊枕慈童（菊慈童）〇鐘入解脫衣（解說）〇劒烏帽子照葉盞（劒烏帽子）〇柳繻諸鳥囀（鷺娘・うしろ面）〇初吹法樂舞（法樂舞）〇ねこのつま 〇乘掛情の夏小立（與作）〇鞭櫻宇佐幣 〇百夜車 〇姿の鏡關寺小町（關寺）〇春調娘七種（七種）〇童子戲面被（めんかぶり）〇衣かづき思破車（やれ車）〇童獅子 〇敎草吉原雀（吉原雀）〇相生獅子 〇嫐染分紅葉（うはなり）〇隈取安宅松（安宅）〇御代松子日初戀（小松曳）〇其容形七枚起請（こもそう）〇關東小六後雛形（淡島）〇其面形二人椀久 〇黑かみ 〇女夫松高砂丹前（高砂丹前）〇菊壽の草摺 〇勢五大力 〇吹雪の雛形（雛形狂亂）〇三重霞嬉敷顏鳥（三重霞傀儡師）〇舞扇蘭生梅（舞扇）〇濱松風戀歌（濱松風）〇ゆかりの月 〇美面より 〇七枚續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）〇迎櫻手爾葉七字（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲蛋）〇戀男調松風（調松風）〇再春菘種蒔（舌出し三番叟）〇戀罠奇掛合（犬神）〇四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）〇閏玆姿八景（節季候・心猿・晒女）〇正札附根元草摺（正札附）〇寄三津再十二支（小原女・乙姫・四つ竹）〇其九繪彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）〇

新獅子○三升猿曲舞（猿舞）○石橋（外記の石橋）○老松○不動○七所御摂初鐵漿（西王母・數入娘）○大和い手向五字（官女・牛若）○外記猿○復新三組盞（初冊の傾城）○廓三番叟（廓三番）○歌へす〴〵餘大津畫（藤娘・關三の座頭・關三の奴）○月雪花蒔繪の卮（月の卷）○拙筆力七以呂波（芝翫の傾城・供奴・浦島・瓢箪鯰）○八重霞賤機帶（賤機）○後の月酒宴島臺（角兵衛獅子）○御歳玉海老手遊（とんび奴）○吾妻八けい（八景）○六歌仙容彩（業平小町）○姿花後繪形（小鍛冶）○初子日○俄獅子○外記の傀儡獅○初しぐれ○巽八景○花翫暦色所八景（助六・景清・新鷺娘）○勸進帳○花兄弟十二月所作（若菜摘・鐘道・雷）○島臺○軒端松○土農工商○秋色種○雛鶴三番叟○花見車○手習子○織どの○常磐庭○鶴亀○五色の絲○今様小鍛冶○柳糸引御摂（操三番叟）○壽○鞍馬山○翁千歳三番叟○廓丹前○菖蒲ゆかた○喜三之庭○紀州道成寺○連獅子○時雨西行

○歌　澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加篇
廿八卷

謠曲三百番集

○脇能物

○高砂○弓八幡○志賀○淡路○御裳濯○代主○佐保山○松尾○養老○老松○白樂天○放生川○鵜羽○東方朔○白鬚○大社○寝覺○源太夫○道明寺○難波○鵜祭○輪藏○富士山○江島○賀茂○嵐山○氷室○逆矛○要石○和布刈○竹生島○九世戸○岩船○金札○呉服○西王母○右近○繪馬○鱗形○玉井○内外詣

○修羅物

○田村○八島○箙○忠度○俊成忠度○經政○通盛○兼平○頼政○實盛○巴○清經○朝長○敦盛○生田敦盛

○三番目物

○野宮○井筒○芭蕉○采女○東北○梅○佛原○墨染櫻○身延○半蔀○夕顏○定家○江口○揚貴妃○雪○二人靜○千手○六浦○藤○杜若○羽衣○誓願寺○小鹽○雲林院○遊行柳○西行櫻○陀羅尼落葉○源氏供養○大原御幸○吉野靜○住吉詣○松風○熊野○草紙洗小町○山姫○祇王○胡蝶○吉野天人○篁○葛城○龍田○三輪○卷絹○檜垣○關寺小町○鸚鵡小町○姨捨

○四番目物

○三井寺○櫻川○柏崎○百萬○飛鳥川

○雲雀山○隅田川○蝉丸○花筐○班女○
加茂物狂○水無月祓○籠太鼓○富士太鼓○
梅枝○玉葛○浮舟○三山○卒都婆小町○
碪（砧）○求塚○水無瀬○藍染川○竹雪○
鳥追舟○籠祇王○室君○初雪○花車○女
郎花○戀松原○善知鳥○阿漕○藤戸○松
虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○雨月
○鐵輪○葵上○道成寺○木賊○景清○弱
法師○俊寛○攝待○鉢木○土車○高野物
狂○芦刈○盛久○春榮○小督○七騎落
○仲光○切兼曾我○安宅○木曾○元服○
曾我○小袖曾我○通盛○楠露○櫻井○正
行○藤榮○放下僧○花月○自然居士○東
岸居士○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲
○枕士童○菊士童○天鼓○咸陽宮○大佛供
養○夜討曾我○橋辨慶○湛海○忠信○鵜飼
○禪師曾我○關原與市○現在巴○正尊○草
薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

○五番目物

○鵜飼○野守○鍾馗○昭君○松山鏡○壇
風○烏帽子折○熊坂○鞍馬天狗○車僧○
善界○大會○第六天○葛城天狗○殺生石
○小鍛冶○鵺○舍利○谷行○雷電○國棲
○春日龍神○大蛇○龍虎○愛宕空也○飛雲
○現在鵺○大江山○土蜘蛛○羅生門○安達
原○紅葉狩○船辨慶○山姥○項羽○碇潜
○一角仙人○張良○皇帝○融○須磨源氏
○絃上○海士（人）○當麻○來殿○松山天狗

○石橋○合浦○猩々○大瓶猩々○翁○大
典閑曲曲舞獨吟○護法○豐干○千引○常陸
帶○空蟬○鶴龍田○阿古屋松○紫式部○鷺
○松浦物狂○鵜羽○布留○丹後物狂○牽牛
花○十番切○笠卒都婆○隠岐院○明智討
○柴田○北條○吉野詣○高野詣○池贄○
鞠○恭其他

以上日本名著全集、第一期出版、「江戸文藝之部」全廿六卷及追加篇二冊は、第十一卷黄表紙廿五種を第一回配本として毎月一冊乃至二冊宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の増大に伴ふ多量製產の利得を以て、益ゝいゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別。從って一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）